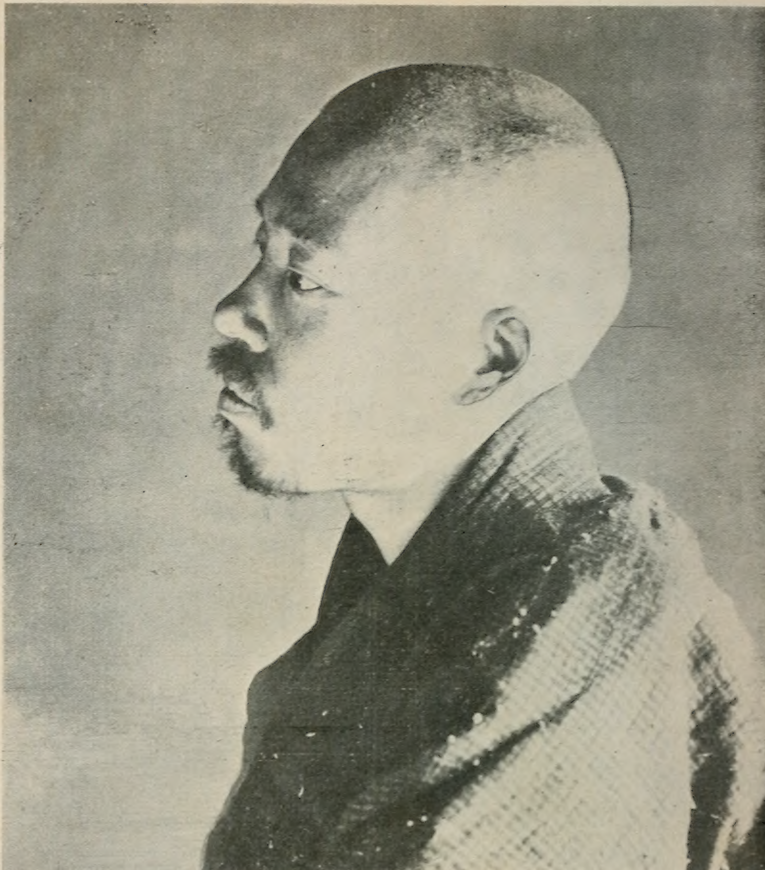
現代日本文學全集

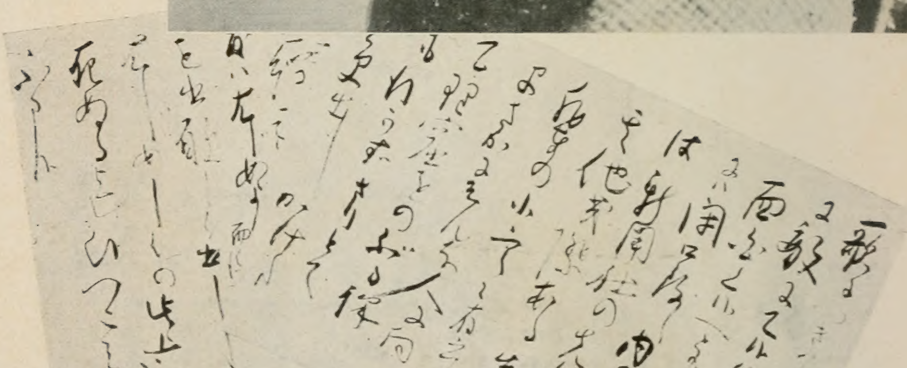


杉浦非水装幀

正岡子規集

改造社版





正岡子規とその筆蹟

[illegible]

「正岡子規集」目次

子規居士小傳

居士は伊豫松山藩久松侯の家中正岡隼太の長男として松山市に呱々の聲を擧げた。父君は早世せられたが、母君は藩儒大原觀山先生の長女で、八十二歳まで長生せられた人であつた。居士は恐らく母君の血をうけ、本來の體格は丈夫であつたやうである。文學的藝術的血液としては、母君の系統と祖父君の系統との合流によるもので、祖父君は藩の御茶坊主とし、將た連歌師として一家を成して居られたやうに居士自身が記して居られる。

五歳にして素讀を學び十一歳繪を學び、其時代既に異色のある兒童として認められて居たことは、其時代の居士の肉蹟が他の手により保存せられてゐるので知られるのである。

十六歳初めて東京へ遊學、初め漢學を次に哲學を志して遂に大學豫備門に入學、東京帝國大學では國文科に入り、二ケ年の修業で不幸二豎の爲めに退學した。居士は、大學で修める學科が、居士の志す所と沒交渉のものが多いからといふのを退學の一理由として居るけれども、勿論病氣といふことも其退學原因の重大なものであつたのだ。

退學が病氣に因る如く、居士の事業亦病氣によるものが多い。其俳句研究を初めたのは略血後明治二十一、二年頃からである。「俳句を研究せねば、足利以來の日本文學と其思想は到底闡明することが出來ない」とは其頃居士が他に語る口癖であつたが、斯く考へることも亦病身といふことが手傳つて力あるものである。

さうして二十四歳より俳句の復興革新に志し僅々五年二十九歳の頃には略ぼ其大業を成就するに近くなつてゐたのである。次に三十歳頃から和歌の革新を思ひ立ち、「紀の貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ歌集に有之候」といふ當時としては歌壇の反逆児としか思へない畏る可く驚く可き宣戰の言葉を放つて健鬪すること三年有餘、其の三十四歳の頃には既に迅くも歌壇一千年の永き惰眠を覺醒し、寫生趣味による眞實味と自然味とを和歌に注入して以て殿上文學たる和歌を地下の書生學徒の手に移したのであつた。次で文章の革新をも思ひ立ち、寫生趣味を加へた言文一致の文を發表し、眞實を自然の儘に敍寫するのでなければ、到底永遠の生命ある文章を得べからざることを稱道し、所謂寫生文なる一派の文を興すに至つたのが、明治三十二年頃から其晩年たる三十五年頃までの活動により成就せられたのであつた。漱石の猫が生れたのも亦實に子規居士の造つた搖籃に於てしたのである。

斯様な明治文學史上に最大の意義ある事業を成す傍ら、明治二十四年頃から、俳句の分類だの、俳家全集などの編著にも精力を注がれた。

二十歳喀血し、三十歳脊髓を冒されて、腰は全く立たず、カリエスは開口して漏膿し、痛苦を伴つた。三十歳の頃以後は年百年中三十七度二三分乃至三十九度位の體溫が干滿した。生れて虚弱、十二三歳より五六年僅かに小康を得、さうして盛年常に病魔に冒されて以て一生を終つた。居士は畢竟病を以て終始したものである。さうして享年僅かに三十六歳、明治三十五年九月十九日示寂せられたのである。

おとゝひの絲瓜の水も取らざりき
絲瓜咲いて痰のつまりし佛かな
痰一斗絲瓜の水も間にあはず

死前一日、即ち九月十八日此世に留められた名殘の句が、それである。

昭和三年晩春　寒川鼠骨記

松蘿玉液

○病稍ゝ閒あり、杖にすがりて手のひら程の小庭を徘徊す。日うらゝかに照して鳥空を飛ぶ。心よきことといはん方無し。二三本の小松は綠のびて凌雲の勢をあらはし、一尺許りの薔薇は莟ふくれて一點の朱脣を見る。秋草はわづかに芽を出していまだ萩とも桔梗とも知らぬに一もとの紫羅傘は已に一輪の白花を開く。雨後土未だ乾かぬ處にさゝやかなる蟲のうごめくはこれも命あればなるべし。

萩桔梗撫子なんど萌えにけり

一八の一輪白し春の暮

○上野の花　いかにあらん。春の日和を獨りふすまの中に寢てあれば只ごお／＼といふ音のみぞ聞ゆる。

寢て聞けば上野の花のさわぎかな

ある日稍ゝ心よきまゝ車に扶け載せられて上野を巡りけるに、綺羅の群衆花の陰に滿ちて鬼事に餘念なくあるは鬼事を見てうつゝなし。いかばかりかうれしからん、風船さへ浮き／＼として飛びたがる今日此頃。

新阪や向ふに見ゆる花の雲

古宮の櫻咲くなり杉の奥

黒門も摺鉢山も櫻かな

○向島の花　いかにかあらん。紅雲十里黃塵萬丈の光景眼の前にちら／＼と見えて土手沈むこと三寸三分。

此花に酒千斛とつもりけり

花ちら／＼島田の男酒を飲む

交番やこゝにも一人花の醉

○演劇脚本　ある人いふ、君は桐一葉を非難したり、さて櫻癡の作をほむるの意か。答へていふ、桐一葉を非難したるは已に重きを此著に置きたるなり、決して櫻癡が作に劣れりとにはあらず、櫻癡學海の作はじめより論評せず。

○批評欄　新聞雜誌の批評欄にある書を非難したりとて著者の腹立てたる例少からず。开は能くもの知らぬ素人の考よりしか思ふなり。批評せらるゝ書の價値は第一に批評の長短に因りて定まること多し。批評の長き者は其評語の如何に拘らず已に其書に重きを置きたるものにして、其褒詞多きと貶言多きとは其次に價値を定むべき標準なり、即ち批評の長短は第一の褒貶にして言語の褒貶は第二の褒貶なるべし。

（四月二十一日）

○詩人の棚卸し　といふ一篇出でゝ詩人仲間を動搖せしめたる由聞ゆ。此一篇で動搖するやうな蒟蒻的詩人は物の役にもたつまじくぞ覺ゆる。はたおのれにうしろ暗きこともあるらん。由來詩人などいふものは桃源の裡に立て籠りて外人には指もさゝせじと誇り居しかば、一度の空砲にすら肝を潰してはやいくさの始まりたらんが如く騷ぐこそ笑止の至りなれ。今の政治界小説壇を見よ、其罵詈讒謗のはげしきことは平壤旅順の鐵砲玉にもまさりてんを、若し詩人を此間に處らしめば砲聲を聞いたばかりにて即死の二三十人も出來るならん。さても詩人輩の内に誇りたまふに似ず外に對する氣の弱さよ。

○詩人の惡弊　多しといふ者あり。されど局外者は其事實を知らねば證據を擧ぐるに由なし。只「詩人は俗なり」「詩人程俗な者はあらず」などいふことは常に耳に入り來る語なり。蓋し吾人は常に詩人を待つに雅人を以てす。故に斯

く反對せる惡口を見るなるべし。兎に角に惡詩に雷評を呈するも弊の一なり。部門的に大臣長者を取り込むも弊の一なり。菓子の一折を謝禮の一行と交換するも弊の一なり。又書籍の取り切りも弊の一なりとぞ。書籍の取切りといふことも仔細を尋ぬるに借りた本は再び返さず、又本を貸す時は抵當として他の本を借り置くことあり。甚だしきは貸さぬといふ秘書を其人の留守に行きて細君より借り來り、終に返さぬなどといふこともありとぞ。書籍を愛するは其、宿怨すべきものあれど書籍以外にも多少類似の事を聞きたる事無きにもあらず。此風評にして無根ならば幸なれども若しあつたらばそれこそ大變なれ。

（神宮教等　非難の聲は、闇夜の「灯」といふ雜誌より起る。これ亦詩人と同じく、忽ち動搖を生じたりと聞ゆ。世人は神宮教といふ名を聞きて多少の援護を爲すより神宮教はから威張りに大威張りて中には「我神宮教は宮内省のやうなものなり」など無禮不敬の語を發する者あるに至れりとぞ。されば此際神宮司廳と神宮教との區別を明かにし、神宮教は單に一個の宗教的講社なることを世に知らしめんこと必要なりとは同雜誌の大呼する所なり。多少の神道的團體の中神宮教は比較的に高尚なる者なるからに、なかなか上中等社會を欺くこと多ければ特に同教を非難するなり。其他の蓮門天理教の如きは惡罵言ふに堪へざる者あれどこれ等は下等社會を相手にする者なれば雜誌の攻撃などは其效力無きを奈何せんと同記者は言ひしとか。諸教皆桃源の裡に住む者なれば[illegible]の御厄介にならねばならぬこともあるべし。　（四月二十二日）

（臥遊紀行　春雨のつれ／＼櫻を歎いて歌へどもまぎらすべくもあらず。靜かに思へば昔總の山河眼に浮び心に現はれて七年前の膝栗毛に水戸の旅籠屋を追ひ出されたる事など獨り笑壺に入ること多きを、折ふし此頃の時候なりければ麗かなる野道の景色、菜黄麥緑の中に川の面は見えで白帆蓆帆のつらなりたるまでさながらに昔の事とも覺えず。思ひいづるまゝに彼よ此よと空中の幻華を捉へて一句二句終に臥遊紀行とはなりぬ。其中に

足二本同行二人春の風

出女が戀持つ桃に花が咲く

水戸弘道館

烈公の冠正し梅の花

（古白一周忌）とはなりぬ。うたてや古白今頃は何處に迷ひ居るらん。あるは洋ズボンの洋服身輕く鐵銃を肩にして左の手には梅花の一枝に獲物一羽かけたるを携へ得々として死出の山路をや狩りあさるらん。あるは舊の小丘、舊の小藪、蓑笠、草鞋に人目を避けて六道の辻に地藏菩薩と問答をや試むらん。あるは極樂と地獄との境に立ちて怖るが如く迷ふが如く笑ふが如く泣くが如く呆然と口を開けて空飛ぶ雲をやながむらん。あるは孜々として晝夜を分たず昔きに書きたる數年の草稿、俳句和歌とも言はず小説戯曲とも言はず、ずた／＼に切りさき喰ひ破りたるを盡く三途の川に押し流し手を拍つて唖然と笑ひ居るにやあらん。古白何て吾を恨あり。今や白雲の中より吾を招くが如し。其追悼會にも得行かざりければ

春雨のわれまぼろしに近き身ぞ　（四月二十三日）

（春雨）は昨日もふりぬ。又今日もふりぬ。枕邊の俳書小説畫帖など彼を見、此をひろげなどするに果ては何にも飽きてそれもいや、これもいやなり。筆執りては筆をおき墨すりては墨を

投げ只ゝ惘然として天井をながむることもうらさびしく春雨の句ども思ひつゞけゝる。

　梅の雨松三寸の小苗かな

　梅雨になるや嬉野の南風

（旅行）ともし火は壁上の詩歌を照して雨戸くる音も絶えたるころ、家居まばらなる隣近所は靜まりかへりて時々打ち笑ふ聲かすかに聞ゆ。何とは無く思ひに沈みたる眼を開けば柱に懸けし古蓑に思はず六年の昔ぞ偲ばれける。千葉より小湊に出でんと以喜のほとりに梅雨に逢ひて宿とらんも面白からず、さりとて菅笠一蓋には凌ぎかねて路の邊の小店にて求めたる此蓑、肩にうちかけたる時締めて行脚のたましひを入れて

　梅雨のわれ蓑著たり笠著たり

水戸旅行には藤代に宿りしつぐの朝より降りそめて

　はたごやの門を出づれば梅の雨

歸り路は水戸を出んとする時大雨盆を傾くるが如し。

　雨だら〳〵餘寒を降って落しけり

昨年は金州の會館に暴風雨に逢ひて飯たく煙に二日の間いぶされけるも今は語の種なり。

　元山や春雨まじり嵐吹く

（親鸞眞傳）といふ書世に出でぬ。善いかな此著。由來闇黒の中に投ぜられいたづらに金箔を以て塗りあげられたる佛教諸派の中に眞宗の眞相を知らんと欲するや久し。只ゝ其著なきに苦めり。今親鸞眞傳を得て通讀一過其考證の精確と著論の公平とを併せたる點に於て、吾人門外漢をして直ちに眞宗の起源と教理の大體とを知らしむる點に於て益を受くる事多し。其信者と他宗信者とは議論公平なる能はず、歷史家は宗教を度外に置き、西洋學者は佛書を讀まず、哲學者は佛教中の哲理をのみ研究する世の中に此種の書を著す其功亦多し。若し完備を求めなば教義及び眞宗特色の儀式習慣等を一層詳細に記し、親鸞の事蹟に就きては年表的の說明を附する等猶其外にも注文少からず。はた修辭の上にも多少の申分無きにあらず。

○種竹山人　非難の聲も詩人攻撃につれて起りぬ。山人が梅見の旅行に送別の詩多きは少と仰山に過ぐる嫌無きにあらず。されども山人と梅との關係を知らば何故に仰山なるかを知るを得べし。種竹もと梅花を愛すること太甚だしく從って梅花の勝地とあれば直ちに之を訪ふ、必ずしも路程の遠近難易を問はず、梅花の詩とあれば直ちに之を拔抄す、必ずしも詞意の巧拙雅俗を論ぜず、啻に自ら好んで梅花の詩を作るのみならざるなり。其梅花を好む斯の如しされば其自ら梅花を詠ずるの詩を見る、余未だ曾て其梅花の精神を得るに驚かずんばあらず。余は大膽にも左の斷定を下さん、曰く古來我邦と支那とを問はず、梅花を詠ずる者終に種竹の右に出づる者なしと。此點に於て學問に於ても種竹に及ばざる遠し。況して槐南寧齋の如き人情人事に偏する者恐らくは其苦心の處を知らざるべし。其梅花を愛する斯の如し。されば月ヶ瀬旅行は種竹に取りては一世一代の晴れなり。此晴れの首途に送別會を開き送別の詩を徵集すること山人自身にありては固より怪むに足らざるなり。世人此旅行を以て普通俗紳士の物見遊山と同一視するは則ち誤なり。論より證據、試みに聞け、此旅行より得來る數十首の五律亦如何に金石の聲を成すかを。縱し芳野村觀梅の古詩に及ばずとするも猶他人の企及し得べきものならざるは明けし。（世人或は謂ふ、種竹の本領は詠史に在りと。是れ昔日の種竹を守りて今日の種竹を知らざる者なり）

○文壇一佳話　種竹山人の嘗て人に言はざる一佳話あり。山人は何處迄も之を祕する積りならん。されども山人と梅花との關係を知らし

めんが爲に余は山人の意に逆つてこゝに之れを表白せんとす。即ち山人の月瀬行は能因の古事に似たる所あり。否寧ろ支考の芳野行に似たる所あるなり。山人も亦曰く今度は能因をやらかすのだと。其梅花に熱心たること斯の如し。されば其詩も旅行三四日間の咄嗟に出でたる者のみに非ずして數年の推敲に出でたるも多からむ。余は青崖の富士日光に行き遼東に行きたると種竹の芳野村に行き月瀬に行きたると同じく是れ詩壇の佳話なりと思ふなり。何事もこれ程の熱心無くては迚も名人に成り得べきにあらざるべし。されば種竹の月瀬行は名義上の旅行に止まりたるかと言ふに決して然らず。其月瀬より歸るや余に語つて曰く、想像は何處迄も想像なり、終に實際に及ばず、月瀬に行きて余の利する處極めて多し、前年作る所の一半は之を改竄したりと云々と。嗚呼種竹は終に梅花狂のみ。

夢に美人來れり曰く梅の精と

（四月二十七日）

○春もはや　今日明日と押しつまりぬ。九十の春光を梅よ櫻よとうかれありきて今は其おこたりを悔む人もあらん。永き日の花見にも飽かでおもしろき夜を誰やらと酒酌みかはしたるはては胡蝶の夢覺めて借錢に首のまはらぬ人もあらん。われはたゞ六疊の部屋にたれこめてくやむべき程の樂みをも得せず、惜むべき程の春を持たざりき。今日の苦みは昨日の樂みより來り明日の樂みは今日の苦みより起る世の中にさりとは昨日も今日も明日も何を苦みて此世にはながらへたる。あはれ又來ん春はありやなしや。

行く春を徐福がたよりなかりけり

紙あまり日記も春のなごりかな

○宇宙は吾に在り。方丈の中に八萬四千の大衆を容れて息の出來ぬ程に窮屈にもあらず。また八萬由旬の蓮座も佛もはひるべき餘地あり。さりとて入れ物が大きくなりたるにはあらではひる物が小さくもなりたらんかし。一たび吾頭腦中に縮めたる宇宙を頭腦の外に投げ出せば宇宙は再び無量際に迄ひろがりぬ　さてや吾頭腦を取りて此宇宙に置けばこれはまた頭腦の小さゝよ。おもしろきものは相對なり、煩惱なり、つまらぬものは絶對なり、悟りなり。

出て見れば春の風吹く戸口かな

○小說　文學者として小說を讀めば世に小說程つまらぬ者はあらず。先づ劈頭より文章がたるみたり言葉が拙しとそれにのみ氣を取られ、やう／＼二回三回と讀みさしてから卷中の人物となじみたる後は又此所行が此人に似あはしからず、此趣向がこゝの味ひを殺ぎ去りたりなどいさゝかなる瑕さへ眼にさはりて、卷を掩ふて後、さてこれは面白かりきと思ふ程のもの少し。況して現世の人ことに顏迄知りあひたる中などには嫉妬といふこともあるべし。吾れ從來小說が好きながら小說を讀むことは稀なり。大方にはじめの一行を讀み試みて唾を吐く、さらずば半枚許り讀みて其本を抛たざることなし。それは餘りに氣の強き人かなと傍より笑はれ自らも笑ひ居たるを、人といふものは變てこなるものかな、ふさぎ勝に吐息つきあへぬ今日此頃何とはなしに小說を讀めば身のうさくさは忘れはてゝさてもこれ程面白きものはなし。卷中に吾とおぼしき人あり、吾の相手とおぼしき人あり。讀めば讀む程餘所事とは覺えず、獨りほゝ笑み獨り氣をもむをかしさよ。讀み終りて惡きくだり無理なる趣向なきにもあらず、されど面白き處のみ心にとまりて忘れられず。小說はたしかに藥よりもきゝめ多し。あれこれと讀みもて行けばこゝに一物あり。

〇たけくらべ　といふ。汚穢山の如き中より一もとの花を摘み來りて清香を南風に散ずれば人皆其香に醉ふて泥の如し。われは全篇の趣向をもほめず、事情に通ぜるにも感心せず、しかも一行を讀めば一行に驚き一回を讀めば一回に驚きぬ。文章に就きていはんか、西鶴を擬する者或は之れあらん、佶屈を以て解弛を免るゝ者或は之れあらん、西鶴を學んで佶屈に失せず、平易なる言語を以て此緊密の文を爲すもの未だ其の比を見ず。其一節の趣向に就きていはんか、或は笑ひ或は怒り或は泣き或は[illegible]する處に於て終始[illegible]を離れざるは作者の技倆を見るに足る。其缺點は必ずしも言はず、枝葉廣がりて幹短きも其一なるべし。われ曾て閨秀小説の語を厭ふ、之を讀むを欲せず、人の之を評するを聞くをだに嫌へりしなり。一葉何者ぞ。吾は多數の作者におこそ頭巾を贈らまくほりす。

「白百合」第一巻は世に出でぬ。表紙の圖様より既に特色[illegible]にして深く思ひを構へざる「[illegible]」を見はしたるゆかしき心地す。昔は英を[illegible]の今に[illegible]を[illegible]へ世の中に佛國の文學美術」とはいみじともおもしろし。只ゝ其隆盛を祈るより外はあらず。されど此卷を見るに誠に無造作に過ぎてこれといふて目のとまる節無きは如何にや、これも乾燥派（南派）の特色にや。先づ櫻癡の琴責論は哲理の絲瓜のと少し仰山過ぎてお腹の中が見えるやうなり。「琴の形を竪に見れば、漲り落つる瀧の水、其水をくれる心の水責」などいふ法廷に不似合なる駄洒落を劇賞せらるゝやうではまだ文學者となるには間のある事なり。斯る論説を掲げんよりも繪畫を掲げられては如何。彩色は出來ずとも意匠ばかりにても美術界を益すること多からん。但し乾燥派は色の外に意匠無しとあらば致し方無し。

（五月四日）

〇夏來れり　狭き庭を見れば葵は乳のあたり迄伸び出で青薄はや風を受けて亂れ初めたり。薔薇は赤き枝の若きが只すい／＼と丈高く、赤き葉、赤き刺のうつくしき中に蕾の紅を含みていくつも並びたるなか／＼に開き盡したるよりは見處多し。上野の山は低き垣の上に見えて物古りたる杉木立の間に若葉少し洩れて日に照されたるもすが／＼しく覺ゆ。

夏に入りてけん／＼いまだ衰へず

古杉の間に光る若葉かな

〇端午の節句　は東京にては新暦を用ふることとて舊暦の三月末に當り、しかも立夏に立てあひたるもをかし。儀式は大方にすたれたるを幟樹つることばかりはいよ／＼はやり行くを見るに、子を可愛がる親の心は文明開化も同じことなるべし、それさへ定紋を染め鍾馗を畫きたる幟は吾等のかすかなる記憶にのこりて、今は最も俗なる鯉幟のみ風の空に翻りぬ。此日ある場末を通りけるに家の庇に菖蒲葺きたる家あり。それをいと珍しと見つゝ更に行けば極めて淋しき片側町の門邊に菖蒲と蓬とを束ねて掛けたるを見るに兎角に昔なつかしき心地せらる。

君が代や[illegible]の[illegible]菖蒲の太刀

東京や菖蒲掛けたる家古し

〇櫻癡居士が文學者として文學界の下級に在ることは專門家皆之を知れり。只ゝ世の俗人は二十年前の名譽にかぶれて今猶第一流の文章家と稱し文學者とせぬ迄もたりなどゝ稱するものあり。吾れ櫻癡の文學者にもあらず、其所謂文章家にもあらざるは疾くに之を知れりと雖も、其文學以外に日用の文章すら文章を爲さぬ迄に下手なりとは今日迄知らざりき。試みに[illegible]の琴責哲理論の冒頭を見よ。

高尚雄偉なる想念は從來我國の[illegible]

に於て甚だ罕なりとは淺薄の論家が往々口にする所たり是はまだ我國の著作を熟讀せざる輩が漫に放言するに過ぎざるの妄評なるのみ

あゝ是れ櫻癡先生の文か。吾れ不文を以て妄りに先輩を議する固より僭越を免れず。然れども先生が文章に拙なりといふ断定はあながちに吾僻見に非ざるが如し。先生は二十年前の先生にして世の中は二十年後の世の中とは先生自身には御存じあるか如何

○彌次馬的詩人　今日の文壇にて歌、俳、詩の三者を比較して其進歩の程度を比較せんに詩を第一とし俳を第二とし歌を第三とす。（其詩と言ひ俳と言ふ者皆舊派の老人連を含まず）吾の詩を見ること此の如し。故に詩人の行爲に於てあきたらざる者甚だ多し。殊に彌次馬的詩人なるものあり。名家先生の處をおとづれて菓子箱其他の品物を呈し叩頭拜伏して己が詩の批評添削を乞ふ。其批評を乞ふ者は以て自ら省んとにはあらず、只〻圈點を成るべく澤山に頂戴して世人に誇らんとするなり。其添削を乞ふ者は以て修技の參考と爲さんとにはあらず、只〻先生の長所を假りて己の短所を補ひそれを自己の作の如く見せて世人を瞞着せんとするなり。目的既に世を欺くに在り。彼は批評と添削とを以て喜ぶ者に非ず。其批評せられたる詩を先生擔任の新聞紙上に載せられんことを請ふ。已に甲新聞に載せらる。乃ち乙新聞に行きて又其詩を載せんことを請ふ。已に乙新聞に載せらる。乃ち丙雜誌に行きて其詩を載せんことを請ふ。只〻是れ一首の惡詩、二新聞一雜誌に載せられて自ら以て無上の光榮となす。噫、此種の詩人の陋劣何ぞ夫れ此の如く甚だしきや。而して此間に起る多少の魂膽の如きは醜の又醜なる者、之を筆にするに堪へざるなり。（五月九日）

○草庵　におとづれたまふ人々庭前の即景とて詠み出でし發句どもの中に

主人病ひあり石竹いまだ開かす　牛伴
二三本あやめ咲いたる小庭かな　飄亭
一畝の覆盆子葉茂り實少し　虛子
雨晴れて茨に夕日の二三尺　鳴雪

など皆眞を寫さぬはあらず。此等の句を並べ見る時は一幅荒園の圖知らぬ人も眼に浮ぶべし。日蔭の小草も秀句を得て誇りかに生ひやまさらん。

○めざまし草　の裏に毎號疎畫をさしかへて入れること面白き趣向なり。長原といふ人大作の出來るか否か知らねど、小景を畫かせては不器用の中に雅致ありてなか／＼に俗を離れたり。大村の銅像などいとをかし。最も醜きもの丶一つに數へたる銅像も此畫を得て少しは雅致を添へたる心地せり。併し此人畫師になるつもりにてはあるまじとある人語りぬ。

○鷗外漁史　一言を發すれば衆口一齊に之を攻擊す　是れあながちに其說の謬れるを駁すといふにはあらで、只〻鷗外は生意氣なりやッつけろやッつけろといふが如き觀無きにあらず。吾無學にして其說の可否を判するに苦しむと雖も、しかも其無學なる吾等にさへ筋も理窟もなき攻擊と思はる丶もの少からず。吾今迄は鷗外を左程えらい者とも知らざりしを、屁鋒文學者は己の無能をあらはさじとて却て鷗外の名を成したり。あら笑止。

○文學批評家　といふ者多くは一時の道樂又は餬口より起りし商賣なればあらかじめ世の需要に應ずる程のもとでを仕込みたるものにもあらざるべし。さればめざまし草にて譯語を論じ音樂を論じ西班牙語を論ずれば各批評家は爭ふて譯語を論じ音樂を論じ西班牙語を論じ以て之を駁す。其めざまし草を見しより之を駁する迄に

は圖書館に行きてインデッキスを探すやら、專門家に就いて片端を聞きかじるやら、伊太利人に西班牙語の發音を聞くやらいろ〳〵の魂膽もあることなるべし。之を思へば今の批評家はめざまし草のために學問させらるゝものなり。

○寧齋主人 吾を難じて「青厓湖村といふことの不倫なるは猶槐南寧齋といふの不倫なるに等しく」云々と言へり。已に等しくといふ以上は二人宛の一團が好對なることを證せり。只さ槐南と寧齋とを竝ぶることに就きてこそ不平あるらめ。若し師弟の關係あるが爲に竝列すべからずとならば徂徠南郭抔とも言はれぬ譯なり。若し力量異なるが爲に竝列すべからずとならば更に改めて青厓と槐南とを對し湖村と寧齋とを對せんか、湖村恐らくは之を恥ぢん、寧齋も亦之を恥ぢん。然らば更に改めて青厓と寧齋とを對し湖村と槐南とを對せんか、青厓恐らくは之を恥ぢん、湖村も亦之を恥ぢん。他の二者も亦之を喜ばざるべし。然らば則ち奈何すべき。二人を二人づゝ組合せたる順列法は此三樣の外に出でざるを奈何せん。寧齋主人の言終に解すべからず

○「詩人の惡癖」と題して前に掲げたる者未だ盡きずと注意せられたる人あり。其言に曰く詩人にして高利貸を營む者あり。年始狀の末にさへ貸金の催促を爲すに至りては其貪慾も亦太甚し。是れ一。詩人にして本屋を營む者あり。他人の珍書を借り來り之をたまに使ひて客の足を引くに至りては其狡猾も亦太甚し。是れ二。詩人にして座席を爭ひ技術に誇り他人を誹り而して自ら學問も知らず一首の詩も完全には出來ぬ者あり。京都詩人なる者多くは是れなり。彼等老輩は取るに足らずとするも東京のにして猶此惡習に倣ふ者あり。陋も亦太甚し。名家是れ三。詩人にして自ら大家を以て居る者、後進の才ある者を妬んで之を抑へんとす。愚も亦太甚し 是れ四。詩人にして新聞雜誌の詩欄を擔當する者あり。それを文壇の霸權にても握りたる如く心得て人の詩を出してやるにも成るたけ勿體をつけ、縱し菓子箱持參せぬ迄も平身低頭して頼む者に非れば容易には出さぬぞとりきみたまふ。其から威張も亦太甚し。是れ五。

（五月十八日）

○牡丹は百花第一の花なり。艶麗はなか〳〵に俗なりとて排斥せし昔の俳人はひたすら芭蕉の糟粕を嘗めて牡丹などは句にも作らざりけん。さるを天明の頃俳諧一變して當時の人やゝ美しき者を詠み出でたるも曉臺蘭更などなかなかに花に氣おされ牡丹の句に善きは稀なり。ひとり蕪村は牡丹の句二十首に及びてしかも首々其精神を得たり。此一事已に其手腕の大なるを見る。われ蕪村の句を見てそゞろ咏嘆の餘り終に西施の顰に倣はんと筆執りて一いきに十句許り書い付けゝるを讀みくらべ見ればあな可笑しや。醜女は鏡見ぬものなりとてわざと蕪村の句は書かず、我句ばかり左に

廃苑に蜘の圍閉づる牡丹かな
牡丹散つて其夜嵐の音すなり
宰相の詩會催す牡丹かな
薄月夜牡丹の露のこぼれけり
卓一香消えなんとする牡丹かな
廊下より手燭さし出す牡丹かな
凜として牡丹動かず眞晝中
書幅の雲影移る牡丹かな
篝火の燃えうつらん白牡丹
花買ふ大雨の中の牡丹かな

○風流宰相 牡丹侯は淸國に老詩人を會して詩など作りたまひしとなん。爲是昇平の事多となにがしの殿の歌ひ給ひしには似るや似ずやわれは知らず。ひそかに當日の模樣を漏れ聞

くに招かれたる詩人十餘人、時を期して新橋に集れば、鳩南先づ在り、諸氏を導いて汽車に乘らしむ。汽車大磯に著けば錦山先づ在り、諸氏を導いて滄浪閣に行く。諸氏門を入れば主人侯袴を穿つて一階を下つて迎ふ。午餐は握飯と折詰の御馳走に野趣を示し、夜に入れば銀燭光り輝きて老妓女將笙歌盃盤の間に周旋す。侯爵夫人亦次の間に在り、婢を督して粗相なからしめんことを力め、餘興として末松夫人の見臺を構へ義太夫を語るなど歡待至らざるは無し。若し夫れ座間主客の應待に至りてはわれ等の最も聞かんと欲するもの、しかも聞くを得ざるは遺憾に堪へざるなり。然れども試みに臆測を下さんか、黄村の超然として諂はず憚らざる、雪爪の昂然として物に關せざる、中洲の眞率にして輕佻なる、青洋の饒舌にして失策多き、錦山の外剛にして内柔なる、槐南の戰々兢々として唯ゝ其命に悖らんことを恐るゝ、菜伯の賢にして愚なる、學海のことさらに圭角を露したる、黄石の阿諛に妙を得たる、一六の傍若無人に義太夫を語りたる、梅潭の一隅より座中を觀察するが如き、思ふに皆其特色を現はし來りしなるべし。殊に學海が席を進めて相公の前に跨り突拍子にも朝鮮の事に就いて伺ひたいと大唱し滔々と議論したるなど一場の花を咲かせたりと聞ゆ。吁風流の人、風流の會、風流の地、しかも待遇の厚き禮數の寛なるわれ等をして實に垂涎萬丈ならしむ。賓客諸氏想ふに感涙に咽びたらんかし。只ゝ惜むらくは相公徒に老詩人を招いて而して金莖玉露一杯の恩澤は其他に及ばざりしを。世の老儒者老歌人老書家老畫師老俳人老小説家にして此厚遇を受けたば彼等感泣して爭ふて相公の徳を頌せんとす。相公願はくは一視同仁の意を以て彼等を見たまはんことを。

○法性寺入道 は政治家として如何の技量あるかわれ之を知らず、然れども關白太政大臣として威權の赫々たりしは今の春畝相公にもまさりてん。其名稱の長きことにて彼は百人一首に名を得たれども、此點に於ては彼終に春畝相公の内閣總理大臣何位大勳位侯爵といふ長さには及ばずてあたら恥を掻きけんいと氣の毒なり。只ゝ彼は歌人にあらずして歌を詠み此は詩人にあらずして詩を詠ず。しかも兩者の詩歌を比較すれば自ら其人柄を見るに足るものあり。入道の歌は只ばつと廣くして大海を心の中に藏めたらんが如く、相公の詩は小さき人が裾野に立ちて富士を見上げたらんが如し。況して入道は伊周房杜などいふむづかしきことは知らざりしと見えて曾て言はず、相公はまた入道などいふ出世間の事を知りたまはずと覺しくいまだ其の沙汰を聞かず。いづれが物の役に立つべきか、時世異なれば同じ樣に論じ難かるべし。

（五月二十五日）

○明け易き夜頃 をひとり机に向ひてつく〴〵と身の行末、世の變遷を思ふにある時はあるにあられぬ心なやみに泡沫夢幻を觀じて消えなんとするともし火挑げあへず靜かに眼をふさぐ。ある時は月明晝の如く空を照らし見渡す限り奇草花を開き紛々たる異香鼻を撲ち來りて前途は無上の歡樂を以て滿されたるが如し。書を繙けば數卷立ちどころに讀み盡し筆を執れば一字の紙に上るなし。八聲の雞遠くに聞え森の鴉棟のほとりに鳴けば夏の夜忽ちに明けて眠らぬ夢は覺めたり。惘然。金殿玉樓の中にはまだ鼾のさかりなるべし。

短夜や空のなかばの天の川
短夜のにはかに明くるけしきかな
短夜や幽靈消えて雞の聲
短夜や燒場の灰のあたゝまり

○利口なやうで愚なのは伊藤侯なり。侯は維新の元勳として憲法の起草者として其力量を現はしたるは言ふまでもなく、總理大臣として長く其位置を保ち能く薩長諸元老の上に位するは其才識拔群の程思ひやられてなつかしきに、人間には拔目あるものかな、中にはこれが彼才相のしわざにやと驚かるゝことさへあり。近くは滄浪閣に詩人を招き侯自ら階を下つて迎ふるなど其雅量といひ謙德といひさすがは斯人なり心にくゝものせられたりと見るに、其の時衆客に示されたる侯の詩は體を失し且つから威張りに威張りたる如く感ぜらる。侯にして若し威張る意ありて作られしならばなかなかにめでたけれども、恐らくは侯は謙遜の意にて作りたるなるべきか、侯の詩律に精しからぬため斯く聞ゆるならんか。是れ利口なやうで愚な處なり。詩に精しからずと知らば利口な人は詩を作らざるべし。縱し作りても人に示さざるべし。縱し人に示すともそは十分に專門詩家の意見を聞きて後のこととなるべし。侯の側に侍る詩家は詩人として立派なる技倆を有すれども侯を諫むるの膽力無く、遂に侯をして思はぬ恥を搔かしむるに至る。由來侯の幕下には才子多くして侃々諤々の士無し、是れ一大缺點なり。

○行屆いたやうで行屆かぬは大隈伯なり。苟も伯を知る者誰か其行屆きたるに感ぜざらん。以て總理大臣と爲るべく以て大藏大臣と爲るべく以て內務大臣と爲るべく以て外務大臣と爲るべく其他農商務、遞信何れの省に大臣たるも能く其職を盡して尸位素餐の誚を受けざるべき者は大隈伯一人のみ。近くは伯の歸鄕途中各處に迎へられて演說するや學生に向ひては學問を說き實業家に向ひては實業を說き伊勢人に向ひては神苑の改良を說く。誰か其行き屆きたるに感ぜざらん。若し伊藤侯ならば何處に於ても誰に向ひても「日淸戰爭は諸君の力に依て大勝利を得ました……只今は戰勝後の經營に力を用ふるの時であります……不肖博文は陛下の親任を辱うし此大任に當り……」と活字で刷つたやうに演說せらるべきをさすがは大隈伯なり。斯くまで行屆きたる人が條約改正にはなぜに失敗したるか。之を思へば行き屆いたやうで行屆かぬは大隈伯なり。伯の野心は時として騎虎の勢ひ止むべからず、徒らに成功を急ぎて復行き屆きたると否とを顧るに遑あらざらしむる事さへあるなり。此際に在りて伯を見ば伯は血氣にはやりたる一壯士の如き感あり。且つ伯は膽略に於て伊侯に勝り才識に於て板伯に勝りたるに拘らず時々自由黨の苦しむる所となるは何ぞや。是亦伯の行き屆かざる所なり。伯の幕下には膽力、才略、經濟等に於て秀でたる者少からず、而して伯は一人の愚直なる者を養ふ能はず。余日蓮傳を讀みて感ず。（六月十五日）

○客觀　世の人或は俳句（和歌等）に求むるに主觀的のものを以てす。主觀的のものに二種あり。一を感情的のもの一を知識的のものとす。前者は文學に屬すれども後者は文學に屬せず。普通の文學者（小說家等）は感情的のものを要求し文學者に非る者は知識的のものを要求す。甚だしきは感情的のものに非ざれば文學に非ずと爲すに至りては、所謂文學者も亦いまだ其美感に於て十分の發達を爲さゞる者といふべし。感情的のもの惡きに非ず、主客兩觀相雜はる者亦佳ならざるに非ず、只これが爲に全く客觀的のものを文學以外として排除すべからず。人或は之をいやしめて寫眞師の寫眞と同一視す。然れども客觀の世界に於て文學的の場所を選擇し（一）それを文學的に文字に現したる（二）處に於て文學といふ固より不可を見ざるなり。客觀的の俳句數首を左に揭ぐ。

五月雨や垣根に白き草の花　叟柳
五月雨や眞菰の中に板の橋　其村
野の道の蔦飾あたり蓮咲く　碧梧桐
青薄萩の若葉を壓すべく　虚子
若葉せり楠の根株にもり〳〵と　飄亭

（一）器の大小　世の人或は俳句を以て器小なりとす。實に十七八字の天地に俯仰する者なれば之を小說、長篇の韻文等に比して器の小なる論を俟たず。されど器の小なるを以て之を捨てよといふ人あるに至っては其意を得ざるなり。こゝに寶石を納るべきさゝやかなる函を持つ人あり。其人に向って「汝何ぞ此の如き小き器を持って滿足する。其小き函を捨てよ。其代りに大なる倉庫を建つべし、巨萬の財産は大なる倉庫に非ざれば納れ難し」と言はんに誰か其愚を笑はざらん。函は物を納るべき爲に作らるゝ者、其物小なれば函も隨って小なるを便とす、其物大なれば函も隨って大なるを便とす。而して其物に至りては大にして善き者あり、小にして善き者あり。兩者各特色あるを以て一を取り他を捨つべからざるは論なし。物已に大小あり。函豈大小なきを得んや。俳句の趣味は其簡單なる處に在り。簡單を捨てゝ複雜に就けよといふ者は終に其の簡單の趣味を解せざるの言のみ。落語家曰く大は小を兼ぬるといへども杓子は耳搔の代りを爲さずと。

（一）俳句と繪畫　世の人或は俳句を誹って曰く其幽玄といひ豪爽といふ、概ね十七字界中に就ての評言のみ、其說く所、他の詩文の包容する所に比して、何の幽玄かあらむ、何の豪爽かあらむと。是れ其人の斯く感ずるなるべし、、山濱の新體詩を無上にありがたがる者には芭蕉蕪村の俳句を說くとも其妙を解せざるは當然のみ。ある人又俳句を論じて曰く之を繪畫に譬ふ、單に柳眉を畫きて（中略）以て一箇窈窕の美人を虛無縹緲の間に想見せしむるもの、これ成功したる十七字の姿態なるべしと。誠に此說の如き者あり。只ゝ其譬喩の適切ならざるのみ。俳句に詠ずる所の者を分つて二種となすべし、曰く小にして精なる者と大にして疎なる者と、小にして精なる者稍ゝある人の譬喩に近し。されども此譬喩全くは當らず。更に之を小景近寫に譬ふ。大にして疎なる者は或人の言はざりし所、之を疎畫に譬ふ、疎畫は空間の廣きことを許す、局部の精細なることを許さざるなり。

（七月十日）

（一）戶外遊戲　といふ・の古より我邦に存する者、鬼事、隱れ子、いくさ事、游泳等小兒のすなるものを除きては其種類極めて少し。其之れ有るは多く上等社會の歡娛に供する者にて蹴鞠、流鏑馬、笠懸、犬追物、打毬等なりとす。（鷹狩、牧狩杯は全くの遊戲に非ず、今の射的の如し。今の大弓は稍ゝ戶外遊戲に近し）其外の戶外遊戲は皆西洋より來りしものにて中に就きて今最も盛んに行はるゝを端艇競漕とす。端艇競漕は河上、湖上又は海上數町の間を占むるを以て其空間の廣き點に於て外觀を壯ならしむべく又多數の人の觀覽に供するを得べし。只ゝ此遊戲は（他の戶外遊戲に比して）多額の費用を要すると競漕に適せる水面を要するを以て廣く一般に及ぶこと能はず、僅かに隅田川と橫濱海上とに限りたるを近來琵琶湖上にても之を試むるに至れり。所謂陸上運動にるものは端艇競漕を除きて殆ど總ての戶外遊戲を含む者なり。而して普通に陸上運動會又は陸上競技會と稱する者は競走を主とし高飛、棹飛、幅飛、槌投、クリケット球、鐵丸投等の種類之に屬す。此れと全く種類を異にする陸上遊戲あり、之を競馬と爲す。遊戲は多く年少血氣の多人數を驅りて一場の競爭を試まし

むるを常とするに獨り競馬は其仕掛の大なるに比して少人數の（比較的）老人を驅り、しかも其費用は端艇競漕等よりも遙に多きを要するを以てこは多く紳士富家の專有物に歸せり。此技我邦人の嗜好に投ぜぬにや近來いよ〳〵振はざるが如し。今の競馬なる者は西洋より輸入し來りし者なれども加茂の競馬は古より行はれて史乘に見えたり。田舍にても祭禮の時かあらぬか土地の荷馬などを集めて競馬を催すことあり。是等はまことの戸外遊戯なるべし。

（ローンテニス　以上三種の外猶幾多の戸外遊戯あれども、最も普通なるをローンテニス及びベースボールとす。前者は殆ど十坪程の平地を要するばかりなれば洋人等多く庭園内に之を設け朝夕の運動に供す。此技、ゴム球をバット（長さ四尺許りの杓子形の者）にて打ち合ふ者なれば男女打ちまじりて爲すことも多し。人數は四人又は二人なれば我邦の蹴鞠などにも比すべきか。諸學校には此設あれど邦人の自邸内に之を設くる者多くを聞かず。蓋し邦人戸外の遊戯を好まず、且つ婦女は運動する能はざればならん。

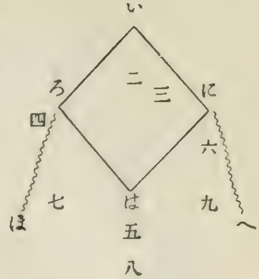
○ベースボール　に至りては之を行ふ者極めて少く之を知る人の區域も甚だ狹かりしが、近時第一高等學校と在横濱米人との間に仕合ありしより以來ベースボールといふ語は端なく世人の耳に入りたり。されどもベースボールの何たるやは殆ど之を知る人無かるべし。ベースボールは素と亞米利加合衆國の國技とも稱すべき者にして其遊技の國民一般に賞翫せらるゝは恰も我邦の相撲、西班牙の鬪牛抔にも類せりとか聞きぬ。（米人の吾に負けたるをくやしがりて幾度も仕合を挑むは殆ど國辱とも思へばなるべし）此技の我邦に傳はりし來歷は詳かに之を知らねども、或は云ふ元新橋鐵道局技師平岡凞と云ふ人が米國より歸りて之を新橋鐵道局の職員間に傳へたるを始とすとかや。（明治十四五年の頃にもやあらん）それよりして元東京大學（豫備門）へ傳はりしと聞けど如何や。又同時に工部大學校、駒場農學校へも傳はりたりと覺ゆ。東京大學豫備門は後の第一高等中學校にして今の第一高等學校なり。明治十八九年來の記憶に據れば豫備門又は高等中學は時々工部大學、駒場農學と仕合ひたることあり。又新橋組と工部と仕合ひたることもありしか。其後青山英和學校も仕合に出掛けたることありしかど年代は忘れたり。されば高等學校がベースボールに於ける經歷は今日に至る迄十四五年を費せりといへども尤も生徒は常に交代しつゝあるなり稍ゝ其完備せるは二十三四年以後なりとおぼし。これ迄は眞の遊び半分といふ有樣なりしが此時より稍ゝ眞面目の技術となり技術の上に進步と熟練とを現せり。少くとも外式の上に於て整頓し初めたり。即ち攫者が面と小手（撃劍に用ふる面と小手の如き者）を著けて直球を攫み投者が正投を學びて今迄九球なりし者を四球、或は六球なりしかに改めたるが如き是れなり。次に其遊技法に就きて多少說明する所あるべし。

（七月十九日）

○ベースボールに要するもの　は凡そ千坪許りの平坦なる地面（芝生ならば猶善し）皮にて包みたる小球（直徑二寸許りにして中は護謨、絲の類にて充實したるもの）投者が投げたる球を打つべき木の棒（長さ四尺許りにして先の方稍ゝ太く手にて持つ處稍ゝ細きもの）一尺四方許りの荒布にて座蒲團の如く拵へたる基三個本基及投者の位置に置くべき鐵板樣の物一個宛、攫者の後方に張りて球を遮るべき網（高さ一間半幅二三間位）競技者十八人（九人宛敵味方に分るゝもの）審判者一人、幹事一人（勝負を

記すもの等なり。

○ベースボール競技場　圖によりて說明すべし。



（い）本基

（ろ）第一基（基を置く）

（は）第二基（基を置く）

（に）第三基（基を置く）

（一）攫者の位置（攫者の後方に網を張る）

（二）投者の位置

（三）短遮の位置

（四）第一基人の位置

（五）第二基人の位置

（六）第三基人の位置

（七）場右の位置

（八）場中の位置

（九）場左の位置

直線いほ及びいへ（實際には線無し、或は白灰にて引く事あり）は無限に延長せられたるものとし直角ほいへの內は無限大の競技場たるべし。但し實際は本基にて打者の打ちたる球の達する處即ち限界となる。いろはには正方形にして十五間四方なり。勝負は小勝負九度を重ねて完結する者にして小勝負一度とは甲組（九人の味方）が防禦の地に立つ事と乙組（即ち甲組の敵）が防禦の地に立つ事と二度の半勝負に分るゝなり。防禦の地に立つ時は九人各々其專務に從ひ一、二、三等の位置を取る。但し此位置は勝負中多少動搖することあり。甲組競技場に立つ時は乙組は球を打つ者等一二人（四人を越えず）の外は盡く後方に控へ居るなり。

○ベースボールの勝負　攻者（防禦者の敵）は一人づつ本基（い）より發して各基（ろ、は、に）を通過し再び本基に歸るを務とす、斯くして歸りたる者を廻了といふ。ベースボールの勝敗は九勝負終りたる後ち、各組廻了の數の總計を比較し多き方を勝とするなり。例へば一八に對する二十三の勝といふは乙組の廻了の數八甲組廻了の數二十三にして甲組の勝なりといふ意なり。されば競技者の任務を言へば攻者の地に立つ時は成るべく廻了の數を多からしめんとし、防者の地に立つ時は成るべく敵の廻了の數を少からしめんとするに在り。廻了といふは正方形を一周することなれども其間には第一基第二基第三基等の關門あり、各關門には番人第一基は第一基人之を守る第二第三皆然り）あるを以て容易に通過すること能はざるなり。走者（通過しつゝある者）或る事情のもとに通過の權利を失ふを除外といふ。（普通に殺されるといふ）審判官除外と呼べば走者（又は打者）は直ちに線外に出でて後方の控所に入らざるべからず。除外三人に及べば其の半勝負は終るなり、故に攻者は除外三人に及ばざる內に多く廻了せんとし、防者は廻了者を生ぜざる內に三人の除外者を生ぜしめんとす。除外三人に及べば防者代りて攻者となり攻者代りて防者となる。此の如くして再び除外三人を生ずれば即ち第一小勝負終る。彼れ攻め此れ防ぎ各々防ぐ事九度、攻むる事九度に及びて全勝負終る。

○ベースボールの球　ベースボールには只ゞ一個の球あるのみ。而して球は常に防者の手にあり。此球こそ此遊戲の中心となる者にして球の行く處即ち遊戲の中心なり。球は常に動く故

に遊戯の中心も常に動く。されば防者九人の目は瞬時も球を離るゝを許さず。打者走者も球を見ざるべからず。傍観者も亦球に注目せざれば終に其要領を得ざるべし。今尋常の場合を言はゞ球は投者の手に在りて只ゝ本基に向つて投ず、本基の側には必ず打者一人（攻者の一人）棒を持ちて立つ。投者の球正當の位置に來れりと思惟する時は（即ち球は本基の上を通過し且つ高さ肩より高からず膝より低からざる時は）打者必ず之を撃たざるべからず。棒球に觸れて球は直角内に落ちたる時（之を正球といふ）打者は棒を捨て、第一基に向ひ一直線に走る。此時打者は走者となる。打者が走者となれば他の打者は直ちに本基の側に立つ。然れども打者の打撃球に觸れざる時は打者は依然として立ち、攫者は後（一）に在りて其球を止め之を投者に投げ返す。投者は幾度となく本基に向つて投ずべし。此の如くして一人の打者は三打撃を試むべし。第三打撃の直球（投者の手を離れて未だ土に觸れざる球をいふ）棒と觸れざる者攫者能く之を攫し得ば打者は除外となるべし。攫者之を攫し能はざれば打者は走者となるの權利あり。打者の打撃したる球空に飛ぶ時（遠近に關せず）其球の地に觸れざる前之を攫する時は（何人にても可なり）其打者は除外となる。

（七月二十三日）

〇ベースボールの球（承前）場中に一人の走者を生ずる時は球の任務は重大となる。若し走者同時に二人三人を生ずる時は更に任務重大となる。蓋し走者の多き時は遊技いよ〳〵複雜となるに拘らず球は終始只ゝ一個あるのみなればなり。今走者と球との關係を明かにせんに走者は只ゝ一人敵陣の中を通過せんとするが如き者、球は敵の彈丸の如き者なり。走者は正方形（前回の圖を參照すべし）の周邊を一周せんとする者にして一歩も此線外に出づるを許さず、而して此線上に於て一たび敵の球に觸るれば立どころに討死（除外）を遂ぐべし。（こゝに球に觸るゝといふは防者の一人が手に球を持ちて其手を走者の身體の一部に觸ることにして決して球を敵に投げつくることに非ず。若し投げたる球が走者に中れば死球といひて敵を殺さぬのみならず却て防者の損になるべし）されば走者が此の危險の中に身を投じて唯一の牆壁と頼むべきは第一第二第三の基なり。蓋し走者の身體の一部此基（座蒲團の如き者）に觸れ居る間は敵の球たとひ身の上に觸るゝも決して除外とならず。（此場合に於て基は大事のをかの如し）故に走者は成るべく球の自己に遠かる時を見て疾走して線を通過すべし。例へば走者第一基に在り、これより第二基に趨らんとするには投者が球を取て本基の打者に向つて投ずる其瞬間を待ち合せ球手を離るゝと見る時走り出すなり。此時攫者は其球を取るや否や直ちに第二基に向つて投ずべく、第二基人は其球を取りて走者に觸れんと擬すべし。走者は匆卒の際にも常に球の運動に注目し、[illegible]る時は直ちに進んで險を冒し第二基に入るか退いて第一基に歸るかを決斷し之を實行せざるべからず。第二基より第三基に移る時も亦然り。第三基より本基に回る時も亦然り。但第三基は第二基より攫者に近く本基は第三基よりも攫者に近きを以て通過せんとするには次第に危險を増すべし。走者二人ある時は先に進みたる走者を先づ斃さんとすること防者が普通の手段なり。走者三人ある時は之を滿基といふ。（一基に走者一人以上留まることを許さず、故に走者は三人を以て最多數とす）滿基の時打者が走者となれば今迄の走者は是非とも一

基づゝ進まざるべからず。是れ最も危險なる最も愉快なる場合にして此時の打者の一擊は實に勝負にも關すべく、打者若し好球を擊たば二人の廻了を生ずることあり、若し惡球を擊たば三人盡く立盡（或は立往生といふ）に終ることさへあるなり。兎に角走者多き時は人は右に走り左に走り球は前に飛び後に飛び局面忽然變化して觀者をして要を得ざらしむることあり。球戲を觀る者は球を觀るべし。

〇ベースボールの防者　防禦の地に在る者即ち遊技場中に立つ者の役目を說明すべし。攫者は常に打者の後に立ちて投者の投げたる球を受け止めるを務とす。其最も力を盡す處は打者が第三擊にして擊ち得ざりし時其直球を攫むと、走者の第二基に向つて走る時球を第二基人に投ずると、走者の第三基に向つて走る時球を第三基人に投ずると、走者の本基に向つて來る時本基に出て之を喰ひとめると等なりとす。投者は打者に向つて球を投ずるを常務と爲す。其正投の方、外曲、內曲、墜落等種々あり。蓋し打者の眼を欺き惡球を打たしめんとするに在り。此外投者は常に走者に注目し走者基を離るゝこと遠き時は其基に向つて球を投ずる事等あり。投者攫者二人は場中最樞要の地を占むる者にして最も熟練を要する役目とす。短遮は投者と第三基の中程に在り、打者の打ちたる球を遮り止め直に第一基に向つて投ずるを務とす。此位置は打者の球の多く通過する道筋なるを以て茲に此役を置く者にして短遮の任亦重し。第一基は走者を除外ならしむるに最も適せる地なり。短遮等より投げたる球を攫み得て第一基を蹈むこと（若しくは身體の一部を觸るゝこと）走者より早くば走者は除外となるなり。蓋し走者は本基より第一基に向つて走る場合に於ては單に進むべくして敢て退く可らざる位置に在るを以て、球の其身に觸るゝを待たずして除外となること此の如き者あり。第二基人第三基人の役目は攫者等より投げたる球を攫み走者の身に觸れしめんとする者にして此間に夾擊等面白き現象を生ずる事あり。場右、場中、場左の如き皆打者の打ちたる飛球を攫み（此時打者は除外となる）又は其球を遮り止めて第一基等に向ひ之を投ぐるを役目とす。然れども球戲は死物にあらず、防者に在りては只ゝ敵を除外ならしむるを唯一の目的とするを以て、之がためには各人皆臨機應變の處置を取るを肝要とす。防者は皆打者の球は常に自己の前に落ち來る者と覺悟せざる可らず。基人は常に自己に向つて球を投げらるゝ者と覺悟せざる可らず。

〇ベースボールの攻者　攻者は打者と走者の二種あるのみ。打者は成るべく強き球を打つを目的とすべし。球強ければ防者の前を通過するとも遮止せらるゝことなし。球の高く揚るは外觀美なれども攫まれ易し。走者は身輕にいでたち、敵の手の下をくゞりて基に達すること必要なり。危險なる場合には基に達する二間許り前より身を倒して辷り込むこともあるべし。此他特別なる場合に於ける規定は一々之を列擧せざるべし。蓋し一々之を列擧したりとも徒に混雜を加ふるのみなればなり。

〇ベースボールの特色　競漕競馬競走の如きは其方法甚だ簡單にして勝敗は遲速の二に過ぎず。故に傍觀者には興少し。球戲は其方法複雜にして變化多きを以て傍觀者にも面白く感ぜらる。且つ所作の活潑にして生氣あるは此遊技の特色なり、觀者をして覺えず喝采せしむる事多し。但し此遊びは遊技者に取りても傍觀者に取りても多少の危險を免れず。傍觀者は攫者の左右又は後方に在るを好しとす。

〇ベースボール未だ曾て譯語あらず、今こゝに

掲げたる譯語は吾の創意に係る。譯語妥當ならざるは自ら之を知るといへども匆卒の際改竄するに由なし。君子幸に正を賜へ。(七月二十七日)

○時鳥　は京に少ければ都の歌よみども其音をめづらしがりてあるは初音聞きにとつれだちて山深く入るなど物ずきもありきとか。

時鳥まことは鳥がすくないか　牧童

江戸には時鳥多かりしにやあまたの鳥樹に宿りて終日鳴きたつるに困じはてゝ頭痛きなど傍痛に書けり。われ故郷にありし頃時鳥の聲聞きたる事なし。東京へ來て後も十年絶えてそれとおぼしき聲を聞かず、根岸に移りても聞かんとの念少かりしためにや猶時鳥を知らず。一昨年の頃や丶それかとばかり聞き初めたり。おぼつかなければ

それでなくとそれにして置け時鳥

など口ずさみて自ら笑ひしが今年は如何にしたりけん春の暮より夏へかけて頻りに鳴き立てたり。ある時書過ぎなりけんキヨ〳〵といふ聲聞えて二の聲も三の聲も同じ處に近く聞ゆるに、さらば障子推し開けて其姿見まほしといらだちたりしかど足立たねば其のまゝやみぬ。其後人あまた集りて發句など詠むことありしに夜も少し更けて九時を過ぎたりけん四鄰は寐て音なく人々も句案に首傾け一座たゞ靜まり返りたる時例のキヨ〳〵と呼ぶ聲三つ四つばかりつゞけざまに聞えぬ。あれ時鳥よと一人が言へば皆一度に上野の方を振り向きたり。得聞かざりし人は口をし、われいまだ時鳥といふもの知らぬになどいふ時又キヨ〳〵〳〵と鳴きぬ。人人あれよ〳〵といふに又キヨ〳〵〳〵〳〵と鳴きたり。餘りつゞけ鳴きに鳴きたるに果てはなくもがなとつぶやく人さへ多かりき。されど一座これに興を得て時鳥の句など多く出來ぬ。われも

時鳥鳴くや上野の森の上

と書きぬ、餘り平凡なるは作らねばなるべし。上といふ字二つあるに氣のつかざりしも可笑し。

○蛙　を好みて之を前栽に養ふは大阪の露石子なり。知人に囑して蛙の句を作らしめ之を押集と名づけて、上梓せんとす。一のものずきなり。近頃種竹山人根岸の閑居に在りて時鳥を喜ぶ。庭前の小池蛙聲かまびすしくために時鳥の聲を妨ぐるを惜み蛙を捕へて之を捨つ。亦一種のものずきなり。捨つる神あれば助くる神あり、種竹山人に捨てられたる蛙の露石子に拾はれなば如何に蛙の幸ならん。

時鳥蛙を捨てに出る夕

○閑古鳥　といふ鳥種々の說ありて分らず。俳句にはたゞ閑靜の場所に之を用ゐたり。或は時鳥の雌なりといふ、說聞よりあてにならねど同じ季候に鳴く鳥なるべければ或は多少似よりたる鳥ならんかとも思はる。此頃奥州の人に聞く、同地の山間かつこ〳〵と鳴く鳥甚だ多し、郭公の音に似たり、時鳥の一種ならんかと。蓋し是れ閑古鳥なるべし。後世にては專ら「かんこどり」と言へど昔は俳句に「かつこどり」と書きたるもあり、或は羯皷の字をあてたるもあり。

かつこ鳥板屋の背戸の一里塚　越人

羯皷鳥纒節つくる佳拵かな　晴燕

など皆元祿の句なり。和漢三才圖會に「かつこう」とあるも是れなるべし。さらば此鳥時鳥と同じく啄木類に屬すと見えたり。貞滿のかんこ鳥は喚子鳥の字音よりとなへ誤れるなりといふはいかゞや。

○蟬　は寒蟬とも言ひ稍々寒くなりて鳴くことあり。俳句にても蟬を夏とし蜩を秋とせり。今年梅雨晴の夕頻りに鳴き立つる聲のすゞや

かなる者を何ぞと聞けばひぐらしなりと答ふ。今迄蟬は先にして蜩は後とばかり思ひしを、まだ初蟬の聲さへ聞かぬに先づ蜩を聞きたることのいかにも不審に思はるゝも、實地の研究足らずして書物にばかりたよりたるとがなるべし。

ゆふべ〳〵ひぐらし鳴いて秋近し

（八月一日）

〇人身攻撃　といふ語は洋語より翻譯せられて以來長く世間に用ゐられしが吾は今に至りて稍〻其意義の上に疑を生ぜり。由來人身攻撃といふ語は惡き事に用ゐられ吾も亦しか用ゐたり。例へば某學者の學問淺きことを言はんとして其人の私行をも摘發し却て其私行の惡を以て學問淺きことを證と見せしむるが如き是れなり。然るに人身攻撃といふ語の濫用は終に惡人が自己を防衞するの楯となり、他人より攻撃せらるゝ時、被攻撃者自から「それは人身攻撃なり、人身攻撃は卑劣なり」抔と他を誹り返すに至りて、人身攻撃なる語は吾をして一種異樣の意味ある如く感ぜしめぬ。若し人身攻撃なる語にしてありもせぬ惡行を捏へ出して人を罵るを謂ふとせば其如何なる場合を問はず人身攻撃とは惡き事なり。若し人身攻撃なる語にして他の政略、學問、技藝等を攻撃すべき所に他の惡行（實際在りたりし）を擧げて之を攻撃し是に由りて他の政略等を攻撃する手段となすを謂ふとせば其手段の卑劣なる點に於て人身攻撃とは惡き事なり。若し又人身攻撃なる語にして單に人の惡言惡行（實際在りたりし）を擧げて之を非難するを謂ふとせば人身攻撃は必ずしも惡き事に非るなり。此の如くんば人身攻撃は社會の制裁に於て德義の制裁に於て必要なること屢〻之れ有り。例へばある新聞が其紙上に於て單に某政治家某詩人某商人の惡言惡行を擧げ之を非難したるに、ある者は之を人身攻撃として其新聞を誹る。政治家は政治家たる側に於て私行の善惡に拘らざるべし。詩人も商人も其詩人たり商人たる側に於て私行の善惡に拘らざるべし。故に政治家の政略を議するに私行を言はず、詩人商人の技藝商略を議するに私行を言はざるは勿論なり。されども政治家も詩人も商人も其社會の一人たる上に於ては一言一行の上に道德上の責任を免るべきにあらず。社會も亦人間として同胞として宜しく遠慮なく彼等の惡を責むべし。彼等の惡を責むるは徒に彼等を貶するの目的にあらず、人間の安寧と社會の秩序とを保たんがためなり。然れどもある人は之を人身攻撃なりといふ。是に於てか人身攻撃なる語の意義に疑を生じたり。唯〻識者の敎を乞ふのみ。

〇惡言惡行　を擧げて之を非難するは必要なりとするも之を非難する者の意思、社會のために非ず道德のために非ずして他の利己の目的に在りとせんか、其人の行爲の惡きことは論を俟たず。世間此種の非難を爲す者多ければこそ他の惡言惡行を擧ぐるを孔子も世間も惡むなれ。されども利己の目的に非ざらんか、惡言惡行を擧げて非難すること孔子者流の言ふ如く又ある人の言ふ如く惡き事には非るなり。孔子春秋を著せば世之を賞揚し新聞一個人の言行に就きて之を褒貶すれば人或は之を非難す。何ぞ迂愚の甚だしき。政治上の行爲に就きて善惡を正すは國家として必要なるが如く一個人の行爲に就きて善惡を正すは社會として必要なり。其間に些の徑庭あるべくもあらず。然るに重きを前者に置くは國家を見て社會を見ざる腐儒の論のみ。

〇新聞紙上　に善行を載すること少く惡事を掲ぐること多しとして非難する人あり。これに

は原因ありて存するなり。第一、善き事は爲さざるべからず惡き事は爲すべからずとは誰も誰も知りたる事なり。されば普通の場合に善き事を爲し惡き事を爲さざりしとて當り前の事にして特別に記すべきに非ず。爲しにくき時に善を爲し、爲さゞりにくき時に惡を爲さずして始めて記すべきなれども斯の如きは希有の場合たるを免れず。惡事は、爲すべからざる當り前の事を守り得ずして爲したる者、其の點に於て已に稍々記すべき者あり。第二、善を褒めて勸善となるべき場合少く惡を誹りて懲惡と爲るべき場合多し。例へば學問も何も知らぬ百姓が親に孝行するは彰すべき事なれども現れ難く又彰し難し。學問もあり見識もある紳士にして少しばかり孝行したりとて當り前の事なれば之を褒むるとも勸善にはならず。之に反して學問もあり見識もある紳士にして些細なりとも惡事を爲さんには社會の風紀に關係多きを以て直ちに之を懲さゞるべからず。人を議するに惡事のみを擧げて善行を擧げざるは世の通弊にして亦人身攻擊といふ非難の起る所以なり。然れども紳士に在りては些善の賞するに足らず、些惡の責むべきは前に言へる如し。況んや善事は廣く世に知られ惡事は未だ世に知られざるに於ては惡事のみを擧ぐること新聞の如き簡單なる者に在りて普通の事なりと言はざるを得ず。

○善事惡事　竝擧すべしとは誠に公平なる議論なれども試みに世の實際に就きて見ば殆ど有り得べからざることを發見すべし。惡人が善事を爲し善人が惡事を爲すこと果して之れ有るか。吾は絕無なりとは言はず、然れども僅有なるべし。（こゝに謂ふ所の善惡は行爲の結果に就きて言ふに非ず、其人の本心の善惡を言ふなり）

（八月八日）

○俳句批評　は俳句を作らざる文學者連中の筆にも上りぬ。而して多くは俳句攻擊の聲なり。俳句は複雜なる思想を現す能はず、故に吾れ俳句に與せずと言ふは可なり。若し俳句は複雜なる思想を現す能はず、故に下等なる文學なりと言はんと欲せば先づ複雜なる思想は簡單なる思想よりも高等なりといふことを證明せざる可らず。然れども何人もしか明言し能はざるべし。何となれば短篇時に長篇に勝り、複雜なる小說或は簡單なる小說に劣るは實際に於て誰も見認ざるを得ざる所なるべければなり。若し又複雜なる者は如何なる場合に於ても簡單なるに勝れりといふ奇人あらば吾は其人を如何ともする能はざるなり。或る詩人が如何なる小說をも排斥して之を野卑なりと言へるが如きこれと正反對の例に屬す。亦如何ともすべからず。

○批評の標準　が道理の上より來らずして感情の上より來るは珍しき事に非ず。しかも其感情より來りし者が道理の衣裳を被て舞臺の上に現れ來るに於ては時に樂屋を知る者の一噱を値すること少からず。去秋以來俳句稍々文壇に現れて勢力を逞うせんとするや、從來の文學者は先づ異類の珍客の來襲に驚かされて俳句或は文壇を蹂躙せんかと迄の恐怖心は多少の嫉妬心をも呼び起し、終に種々の理由を附して俳句非難の說は盛んに行はれぬ。然れども漸く月を經るに從ひ彼等は俳句が全く小說戲曲等の外に立ちて敢て互に範圍を犯すが如き者に非るを知るや漸く安心したりけん俳句攻擊の聲は自ら靜まりぬ。是より後小說戲曲は小說戲曲、新體詩は新體詩、俳句は俳句として各自の方向を取り相妬み相爭ふこと無かるべしと信ず。之を或る人に聞く、上野鐵道の通ずる初め根岸の鶯は汽車の響に驚き一時は蹤を隱しゝも漸くにして汽車の害を爲さゞるを知りけん二三年の後復もとの住居に歸り來りしと

なん。實に[illegible]の心のやさしさよ。

○俳句排斥の輩は小說家又は小說批評家より起れり。彼等は一方に俳句を排斥すると同時に他の方に於て小說戲曲新體詩等を辯護したるは言ふ迄も無し。之に對する俳句辯護說も俳人中より起れり。然れども俳句辯護說が小說戲曲新體詩等を排斥せんとしたることは未だ曾て聽かざる所なり。是れ何の故ぞ。俳人の卑怯は之を排斥し得ざりしか、吾れは俳人の卑怯を笑はん。俳人の無識は之を排斥し得ざりしか、吾は俳人の無識を笑はん。然れども吾は他に其原因あるを知る。又は俳人は防禦の地に立ちたるがために之を攻撃するに及ばざりしか、排斥論の起る前に於ても排斥論の靜まりし後に於ても此種の說を爲す者あらざるを見れば其然らざるを知る。然らば則ち何の故ぞ。曰く俳人（勿論舊派の俳人を含まず）は俳句を知ると共に多少小說戲曲をも知り新體詩をも知れり。而して俳句排斥者は多く小說戲曲新體詩を知りて俳句を知らざりしがためのみ。此知識の相異は攻撃防禦の上に此偏頗なる現象を示したる者とおぼし。美の標準は詩歌俳句戲曲小說等あらゆる文學を通じて同じき部分極めて多し。其同じき部分に就きては詩人能く小說を評すべし、小說家能く詩を評すべし。然れども全く俳句を知らざりし小說家批評家は其小說又は他の文學と俳句と同じき部分の何處に橫るかも見得ざりしなるべし。既往の批評家に向つて咎むる所あるも益なし。將來の批評家は其俳句を輕蔑すると否とに拘らず比較的に各種の俳句の美不美を判定する能力あるを要す。

○舊派俳諧師 亦新派俳句を罵る。多くは幼稚と爲し生硬と爲し疎大と爲す。新舊兩派何れか幼稚なるか何れか生硬なるかこゝに論ずるを用ゐず。唯ゞ此罵言の裏面には十分の恐怖心あることを知らば足れり。舊派の宗匠連は新派のために自己の名譽を毀損せられ從つて自己の職業をも奪ひ去られんことを恐るゝなり。然れども是れ杞憂のみ。蓋し舊派俳諧の及ぶ所と新派俳句の及ぶ所と其區域全く異れり。新派俳句更に廣く流行すとも彼無學なる床屋、肴屋、八百屋・番頭、丁稚は終に其區域内に入ることなかるべし。世人或は俳句を以て平民的なりと云ふ。然れども新派は到底舊派の如く平民的なるを許さず。

（八月九日）

○日本美術全書沿革門 此書は英人アンデルソンの著にして末松謙澄氏の譯述に係る。書中記する所は書名の示す如く日本美術の歷史にして他日應用門の一書出でて此書完備すべしとなり。アンデルソンは醫を以て業とし傍ら美術學に通じ繪畫を善くす。嘗て久しく醫術を以て我が海軍省に聘用せられ其間本邦の美術を研究せりとは譯書緒言に記する所なり。本書美濃紙形大本にして表紙は靑色に模樣ある者淸婉なり。本書插む所の畫に就きて緒言に說明する所吾れには解せざるものありと雖も、兎に角洋紙摺の畫 多くは寫眞彫刻銅版 四十枚、日本紙摺の畫 原書には文章の間に插みし者とか 十三枚載せて卷首に在り。此の如く多くの畫を插みたる者我が國にはいと珍し。譯文は流暢にして明晳なり。蓋し記する所の事總て我國に出でざればなるべし。本書記する所の事實正しきや否や、能く要領を得たるや否やは吾等素人の知る所に非ずと雖も、譯者の勵精と黑川氏の校閲とは少くも事實に誤謬無き事を證して餘ありと信ず。書中處々下す所の論評の如きも、當否は亦吾等の得て判定する所に非されども或は甚しき謬見なからんか。蓋し著者の論評なる者は多くは我が國人が普通に論評する所を取りて其儘に記したる者とおぼしく、たまく

北齋に關する意見の如き本邦人と稍ゝ異なるも猶極端なる北齋崇拜者は雷同せざるが如し。されば吾が見る所にては此の書の價値は事實評論の上に甚しき誤謬無き所と且つ日本の美術史が小規模ながらも完備し居る所とに在りと信ず。若し此の美術史を破碎して一部々々を見んか、恐らくは何の價値も無かるべし。何となれば其記事は精細ならずして評論も亦粗雜なればなり。或人云ふ、此插畫中には多少の僞物ありと。或は然るべし。猶插畫に就きて其種類に偏頗ありと思ふ廉少なからねども應用門に分載すとあれば同書の出版を見ざれば論じ難し。

○九鬼隆一氏の序　なる者此譯書の首に在り。九鬼氏は美術批評家を以て自ら居り他より目せらるゝ者之に序する誠に適當なるべし。而して其序を讀むに及びて呆れかへりたり。其序記する所の事は平凡なれども平凡なるは猶可なり。其文章の漢文にして拙を極めたるは之を何とか謂はん。試みに之を擧げんに左の如し。

本邦人士長美術。而多不重其學術。余夙憂之。英人安氏著美術書也。友人末松文學博士與大有力矣。今又譯之。更改脩增補。將梓公世。請余序。余大喜本書技術上。足以知歐米鑑識者所注目。與學術不可不重也。

（下略）

余大喜以下數句殆ど解し難し。此書を讀んで學術を重んぜざる可からざるを知るに足るとは何の理由ありてしか言ひしかを知る能はず。此不理窟此不文章これが九鬼氏の序なりとは驚くに堪へたり。美術文學は方法こそ變れ美に二致あるべくもなし。九鬼氏若し善く美術を知る者ならばまさかに斯の如き惡文は作らじ。此惡文を作りて自ら惡文と知らぬ程ならば吾れは信ず九鬼氏は美術をも深く知らざる人なりと。況んや序文は漢文に限りたりと思ひ漢文に非ればえらさうに見えずと思ふが如きは極めて幼稚なる俗書生の考なり。九鬼氏若し天下の人目を眩せんと欲せば惜しい錢を少し許り出して文章家に代作せしめたまへ。此序の後に青萍の附記したる者蛇足なり。小中村氏の書も力無し。

○青萍先生　の自序といふ者あり、曰く

予ハ此書ノ爲メ容易ナラザル勞力ト尠少ナラザル費用トヲ費シタリ其間朋友知人ニ對シテハ多ク尋問應接ノ機會ヲ失ヒ動モスレバ怠慢ノ譏ヲ招キ家眷親族ニ對シテハ毎々團欒歡晤ノ時間ヲ失ヒ動モスレバ不快ノ感ヲ招キシコトアリ云々

譯者の苦辛察すべし。吾れは其苦辛に向つて多謝すべし。然れども此翻譯のために朋友の交際を缺き家族の不快を來したりとありては少しも褒めたことに非ざるなり。末松氏が自分の道樂又は名譽のために翻譯するとならば知らぬこと、若し邦人ニ裨益アルヲ信ズルガ故ニ翻譯するとならば吾れは之を止めたかりき。蓋し末松氏の職掌よりするも本分よりするも斯くまでして此書を譯さゞるべからざる義務無ければなり。されども公益とあらばそれも惡き事にはあらねどわざ〳〵自己の骨折の御披露は少し如何やと思はる。蓋し末松氏の骨折は裏面より見れば同氏の美術に素人なりしことを證明するに過ぎざればなり。猶また日本の美術家に向つて一言責むる所なかるべからず。日本の美術家にして早く日本美術史を著し置かば末松氏をして此の如く翻譯に骨折らしむるに及ばざりしなり。末松氏をして骨折らしめ家族朋友に負かしめたる者日本美術家の罪なり。（八月十三日）

○一題十句　といふことをものし初めたるは今年夏の初なりけん。其後友と出會ひし時などよりよりに之を試みたるに、はては難題を出して

奇功を奏せんとする程になりぬ。碧梧桐、栗の花といへるを課して皆々作りける其中に

僧房の谷に臨んで栗の花　紅緑
野社や鳥居に垂るゝ栗の花　同
瀧おどろ／＼栗の花散る茶店かな　肋骨
栗の花に隠家を探す小道かな　同
日高きに宿求め得つ栗の花　虚子
藪原や谷を隔てゝ栗の花　同
栗の花こぼれて居るや神輿部屋　碧梧桐
照り雨や茂りの中の栗の花　同
合歓いまだ覺めず栗の花旭に映ず
栗の花落ちてきたなき小庭かな

など詠めるいづれも面白しといふ程ならねど古人の多く詠まざりし題目なれば陳腐に流るゝことは少かるべし。それより水飯といふ題をも作りて其日は別れたり。其後孑孑十句を試みしが

孑孑や天水桶に魚放つ　碧梧桐
水熱し孑孑沈む手水鉢　同

等に壓せられて他は顔色なかりき。

○夏川といふ題にて十句作ることありしに

夏川を二つ渡りて田神山
夏川や橋はあれど馬水を行く
橋なくて人立ちもどる夏の川
夏川や中流にしてかへり見る
夏川やわれ君を負ふて渡るべし
夏川や溢れて草を流れこす
夏川のあなたに友を訪ふ日かな
夏川を瀧に落すや山の宿
夏川を渡りつれたる小荷駄かな
夏川や鍋洗ふべき門構

などものしぬ。昔夏季休暇を得て歸省し居たる頃田舎の友を訪ひたる時のけしき思ひいでゝそれより考へつきたるが多かり。或時松窓松南の二人とつれだちて武市某の村荘をおとづれんと城下を出で二里にして内川に來りしに橋無し。水の幅十間許りあれど淺くして脛を沒するに至らず。われ三人の中にて年少なりければ木履を脱ぎ裳を搴けて川に入り、いざたまへ渡し參らせんと背を向くるに松窓いと氣の毒がりて負はれけるを渡し次に松南をも渡しけり。松南稍ゝ肥え居たりしかばさぞ重かりしならんなど背の上よりいたはりたる總てきのふの如き心地す。われ君を負ふてとはこの時を思ひ起したるなり。

〔新題〕をものするも一興ならんと獨り筆を執りて夏帽十句を試みたる中、

夏帽の白きをかぶり八字髯
夏帽の人見送るや蜑が子等
潮あびる裸の上の藁帽子
夏帽の對なるをかぶり二三人
夏帽子人歸省すべきでたちかな
夏帽の古きをもつて漢方醫
夏帽も取りあへぬ辭誼の車上かな

もとよりつまらぬが多かれどこれこそは古來誰一人詠まざりし新題なれば一句々々陳套を脱せしこと自ら保證しても可なるべし。呵々。夏帽十句と聞きて先づ題ばかりにてはや面白しと喜びたるは碧梧桐なり。題ばかり聞きて鋭氣當るべからずと嘲笑せられたるは鳴雪翁なり。此頃も日蝕十句をものしたる中に

お日様を蟲が喰ひけり秋の風
日の神も御病氣とやらこの殘暑

などいへるある人は舊弊と笑ふべけれども舊弊由來雅趣を存する事多かり。さりとて明治の詩人と生れて科學的の俳句も無くてやはと戯れに

日と月と重なりあふて晝暗し
日蝕に滿月の裏ぞ見られける

と試みたるこれにては天文學者の説明を聞くやうなりと獨り笑ひやまず。只と當に秋の季を利かせる處俳句の特色とはいへそれもこじつけなるべし。されば事實にも違はぬやうにそれで今少し理窟を離るゝやうにと自ら注文して

北海や日蝕見えず晝の霧
日蝕すること八分芭蕉に風起る

とやりたるいよ〳〵出でていよ〳〵拙し。筆を投じて笑ふこと半晌。（因に云ふ古人に月蝕の句は一二首之を見たり。日蝕の句は未だ見しことなし）

（八月二十四日）

○江左氏逝く　林江左氏名は和一、江戸の人、早くより代言を業とし後衆議院議員と爲る。氏幼より俳諧を好む。吾れの俳句を新聞に載するや氏直ちにわが草庵を叩きて好を通じ贈るに晋子の短册を以てせらる。雅量人を容れてまた年齢を問はず、吾れ亦しば〳〵氏を團子坂に訪ふ。款待甚だ厚し。氏俳諧に於て自ら得たりと爲すあるに拘らず一方に於て多少吾れを推奬するの意あるが如し。深く其の知己の恩に感ず。然れども氏の俳諧は到底世俗一般の卑野を免れず又自ら其の卑野を脱せんとも努めざりき、法律家として氏の今日に價値無きは世已に之を知れり、政治家としても亦社會に重きを爲さゞるは氏を知る者の皆じて疑はざる所なり。而して氏は世人の輕侮するが如く自らを輕侮せざりき。是を以て氏の東京辯護士會副會頭に選ばるゝや天下やゝ與し易しと爲したるが如く一たび衆議院議員と爲るや老木復花を咲かすに難からじと信ぜしなるべし。是れ氏が一生の誤りなり。不幸にして議院の解散せらるゝや氏は勇退せずして却て猛進せり。再び財産を擲ちて田口氏と選擧を爭ひたる結果は終に身を此地に置く能はず、去つて西京の片ほとりに閑居す。當時一書を吾れに寄せてつぶさに其困苦を述べ且つ以て風流の極と爲す、獨り俳諧を以て其悶を遣る。氏の身を政界に投ずるや其無謀は世人の指笑を受けしこと少からずとは雖も、しかも一朝失敗するや能く其窮に處し夫の天命を樂むを得たる者、蓋し俳諧の功に非るなきを得んや。氏後相州葉山に遷る。本年六月二十七日同處に歿す。享年五十九、いたましきかな。氏の京都に行きし後吾れ東西に流浪して一書をだに發せず、今夏漸く其居を知るを得て一句以て平生の久濶を詫びなんと思ひしに未だ書を發せずして已に訃音を聞く。吾れ實に氏に負く所多し。惻怛に堪へず。

日盛りや蟻も地獄へ落ちて行く　江左

とは六月初の吟にして

寢返りもならぬ耳なり時鳥　江左

の一句は實に氏の辭世なりしとぞ。われも一首を手向けて聊か其靈を弔ふ。

今頃は蓮にすわつて時鳥

前年吾が奥羽行脚を思ひ立つや氏は吾が爲に二三の宗匠を紹介し、且つ行李用の泥硯一個をはなむけとして贈らる。今は行脚も昔の夢に殘りて身は一室の内を出づる能はず。そゞろ感に堪へず。

旅硯庭の桔梗は咲きにけり

○避暑旅行　とて大磯の海水浴に行くべき友は持たず、さりとて分相應の旅行の仕方もあれど鐵道のかゝらぬさきに木曾へこゝろざしたるは大我なり。墨水は靜岡へ行かんとて菅笠に身を隱し箱根越えたん望みも面白く

團扇もてわれに吹きおくれ富士の風

と一句をはなむけにす。肋骨野州に閑居し碧梧桐其後を追ひ揃つて榛名に遊ぶ。壯遊いづれか羨ましからぬは無けれど殊に榛名は十年前一たび屐痕を殘せし所、今にして當時を思へば胸中一種の感慨に打たれて嗚咽に堪へざらんとす。曾遊を追懷して數句を賦す。

やゝ寒みちりけ打たする温泉かな
草むらや露あたゝかに温泉の流れ
高樓やわれを取り卷く秋の山
山駕や榛名上れば草の花

駕二つ徒歩五六人花薄

種竹山人も赤松島へ行かんとて出で立つ由聞えしかば發句して送る。

歌は古し詩で白河の秋の風

ひと〳〵もの松島の秋に驚くな

徒然坊さきつ頃小田原より端書おこせしが新聞を見ればいつの間にやら富士へ上りたりと見ゆ。いま〳〵しさに堪へねばわれも富士へ上りたるつもりにて一二句。

世の夏を見おろして居る寒さかな

星凍る銀明水や土用の入

唾せば若し夕立となりやせん

見渡すや只秋の空秋の雲

秋風や下界の雲をかきまぜる

ひやゝかな赤い朝日がぽつかりと

（八月二十七日）

○井原西鶴と芭蕉と近松とを合せて元祿頃の三文學者と稱すべしとは嘗て論じたる所なり。然れども三人の價値に就きては論評其當を得たる者太だ少しと思はる。是れ其信仰を有する多きを以て自然譽め過ぐるの傾向を生じたるによるか。西鶴が御伽草子、金平本、赤本などの幼稚なる中に立ちて獨り人情を描き出だしたる功は文學史上に明記せられて磨滅すべからざる者なり。而して其人情なる者如何と問へば僅に兩性の愛情に過ぎず。其愛情も亦曲節無く變化無く、關聯無く節操無く、僅に其一部を寫し僅に其模型を存するに過ぎず。西鶴の著を總評するには癡の一字を以て足れりとす。彼は純粹の癡情を寫して得意とする者、其著の愛すべき所以亦こゝに在りと雖も是れ當時の事情を聯想しての上の事なり。今日より見れば實に幼稚極まる作のみなり。吾れの西鶴を愛するは主として文章に在り。西鶴の文は簡勁なれども素樸に失せず。能く瑣事を寫せども卑野冗漫に流れず。其世態人情を穿つ處一語一句の間に無限の妙を存するは言ふ迄もなく小景を敍する處亦一種の雋氣あり。敍景文は芭蕉の長ずる所なりと雖も小景は終に西鶴の才筆に及ばず。西鶴實に文に於て達する所深し。後來八文字屋の如き西鶴を摸せりとはいへども其文章は西鶴の片腕にも及ばざりき。然れども西鶴は一の文章家たるに止れり、しかも形式的の文章家たるに止れり。

○松尾芭蕉　和歌は數百年來大家を出さずして其墮落は德川の初世に至りて極まり、俳諧は宗鑑、守武、貞德、宗因に依りて其萌芽を發せりといへども猶乳臭紛々として一場の笑話に異らず、漢詩は纔に起らんとして未だ世に打つて出でず、季吟の輩却て白氏文集を尊崇するの時に當り、杜甫の詩を誦して萬葉以後始めて眞面目の韻文を成したる者芭蕉の功亦大なり。殊に西鶴、巢林の著は其傑作と雖も今日より見て不完全なる者多きに拘らず、獨り芭蕉の佳句は意匠、文字共に間然する所無きは一は俳句の短きに因るといへども一は芭蕉が稍ゝ完全なる人間なりし事を證するに足るべし。俳文なる者亦一派を成して敢て西鶴巢林に下らず。芭蕉が他の二子と最も異なる所は人間を研究せずして自然を研究したる處に在り。古來和歌者流時に歌枕を探ると稱すといへどもそは單に山と野とを區別し櫻、山吹、萩などの名所を探りて其花あるを認めし位の事に過ぎず、西行の文才と經歷とを以てして猶且つ名所を詠み込む程の働きを又無き風流としたるが如く、深く天然を研究したるは實に芭蕉を以て始とすべし。其活眼實に驚くに堪へたる者あり。然れども芭蕉は著作の分量に於て遙に西鶴巢林に劣りたり。西鶴巢林が一時其名を世に忘れられたるに反し、芭蕉は死後名聲隆々として高まり、其著作

としいへば斷簡零紙をも珍藏せられ、日々の傳作さへ書き添へられて纔一葉集一部あるのみ。是れ一は芭蕉の著作が最後十年の短日月に成りし故とは言へ（西鶴著作の年數も亦左まで多からざるべし）一は芭蕉が文學を以て稍々末技視したるに因らずんばあらず。文學者として論ずれば芭蕉は實に卑怯なる文學者なり。蓋し西鶴が世の中を茶にして暮したると異なり芭蕉は最も世の中に執著しつゝ暮したるなり。巣林が世の中の秘密を種々に苦辛して觀察したると異なり芭蕉は世の中の上に超越して獨り清淨の生活を保たんとしたるなり、芭蕉が世の中に對する此顯著は文學以外に於ける彼が宗教的の成功となりて芭蕉塚、芭蕉堂、其他畫像木像等の流行は其名譽の頂點に達したり。芭蕉が稍々文學を賤しめ德行を重んじたるは彼が此成功を奏したる所以にして、若し此成功無かりしめば彼は却て文學の上に猶多少の進歩を遺し猶幾多の著述ありたるやも知るべからず。（九月四日）

○近松門左衞門　人間を觀察して之を文學の上に現したる者、我邦にては源氏物語を始とす。只源語には事物の簡單なる昔時に在りてしかも社會の一幕を繰り返し卷き返し描寫したるに過ぎず。源氏出でゝ後數百年、復人間には文學者の觀察に上らず。門左衞門の世に出づるや彼は天賦の才能を以て複雜なる元祿時代の社會を表裏兩面より研究したる結果、彼れが模寫し出したる小天地は續々として世人の眼前に現れ來りたり。彼が寫し出したる者の中には古代あり今代あり、上流社會あり下流社會あり、善あり、惡あり、愛情あり節操あり、義理あり私慾あり。彼れは斯く總ての部分を觀察したるのみならず、しかも一篇の戯曲は統一したる脚色と多少性格を備へたる人物とを以て成れり。後世の戯曲の終始統一せざる者、極めて架空的なる人間を現す者等に比して彼は優に其上位を占めたり。其後百餘年の間は演劇が大體に於て彼の範圍を脫する能はざりしを見ても其勢力の及ぶ所を知るに足るべし。彼れは文學史の上に偉大なる功績を殘せり。然れども近松門左衞門は元祿の文傑にして千古の文傑に非るなり。見よ今日の標準を以て近松を評しなば、其能く非難を免るゝもの幾何ぞ。先づ第一に其著作が蕪雜として幼稚なることは（同時代を除く外）一も今日の舞臺に上らざるにても知るべし。ある人は之を辯護して云く人形芝居の爲に作りたる故なりといふ、何ぞ知らん今日に殘りたる人形芝居にも寛政前頃流行したる人形芝居に即ち近世の脚色を用ゐて近松の作に依らず、即ち近松の作は歌舞伎に適せざるのみならず、人形に適用して興味少きを證すべし。彼は社會の種々の方面を寫したれども終に一篇をも出し寫し出す能はざりき。時代物は脚色いたづらに複雜にして少しも自然なる所無く、人物は架空的にして毫も其性格を現はさず。世話物は時代物に比して遙かに勝れりと雖も人物の性格の如きは猶其端緒を現はさんとして架空に陷ること少からず。近松が戯曲に於て著しく成功したるは其世話物の脚色なりとす。されども其之を寫す方法に於て不完全を免れず。換言すれば近松の作は實際よりも甚だ多く時間を短縮したる所、動もすれば觀者の無味に落ちんとす。されば後世の作者は近松の世話物を骨子として幾多の改竄を加へ之を舞臺に上せたり。其改竄は蛇足を添へ統一を破り性格を失ひしこと無きにあらずといへども、しかも其眼目たるある場所に至りて能く人情を盡し同感を起し觀者をして歔欷堪へざらしむるの妙は近松の夢にだも知らざりし所とす。近松は世話物に於て當時の世態を盡したるが如しといい

へども、そは其時代の比較上に言ふべくして今日より觀れば實に狹小なる區域を出でざりしなり。所謂心中物は其大部を占むる者にして心中とは遊女等の情死をいふ。遊女社會をのみ寫す固より狹小なれどもそは猶恕すべしとせん、豈遊女を寫す必ず心中にのみ限らんや。況んや其心中なる者も滑稽三昧に行はるゝが如き觀あるをや。此の如く論じ來れば近松に完全なる者は見るべからず。而して近松の文章は如何。世人は多く近松に名文ありといふ。其道行は殊に賞讚を受くる者にして中に就きて曾根崎心中の道行は名文の名最も高し。吾が見る所全くこれに異なり。近松は能文達筆にして萬斛の泉源地を擇ばずして噴出するの勢ありといへども終に名文と稱すべからず。道行の文は殊に其拙なる者なり。橋づくし、八百屋物づくしの如き諧謔の氣を帶びて心中物などには適せざるのみならず、無理に縁語を求めて成るべく長く引きのばす處阿保陀羅經に類し最も厭ふべし。

例へば

此世の名殘夜も名殘、死に行く身を譬ふれば仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響きの聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上ぐれば、雲心なき水の面、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川(下略)

此文に於て名殘の字を三度用ゐたる極めて拙く、鐘といふ字を下に用ゐんとて「七つの鐘」と言はざりしは其窮せるを見る。「鐘ばかりかは」と聯絡したる處は十五六の少年に七五文を書かしめたるが如く、「世」と「夜」と「鐘」と「草」と「木」と「空」と六箇の物を竝べたていづれも其名殘を惜みたるなど、布置と言ひ配合と言ひ少しも整はざるを見る。「死に行く」云々は著想平凡にして文字たるみたり。一句々々評して此の如く疵多く、さて全體より見て如何といふに、少しも面白き所を見出さず。鐘聲を數ふるだけ新趣向なれども其馬鹿らしさ加減は評には及ばぬなり。心中の時に鐘を數ふるの必要はありと假定するも、固より七つと知りたる鐘を六つまで數ふるなど丸でまゝ事の心中なり。誰れか捧腹絶倒せざらんや。要するに道行の文は句々の間に瑕瑾多く全體の上に統一無く、惡句のかたまりとも謂ふべき者なり。道行以外の文は流暢なる叙事に瑕瑾少く其他少しにても彫琢したる所皆缺點あり。近松は終に形式的名文を作る能はざるなり。

〇以上三子者の優劣は吾れの判する能はざる所なれども皆文學史の上に功績を殘したる點に於て同じく、時代の觀念を除きて評論すれば皆幾多の缺點ある所に於て亦同じ。試みに世人に向つて其優劣を問はんか、俳諧の宗匠は多く芭蕉を以て第一と爲さん。然れども是れ信用すべき言に非ず。何となれば彼等は多く西鶴巣林を知らざればなり。小説家は多く近松を以て第一と爲さん。然れども是れ亦信用すべき言に非ず。何となれば彼等は多く芭蕉を知らざればなり。而して西鶴を以て第一と爲す者は或る一派の小説家の外恐らくは極めて少からん。芭蕉は今日に於て名譽の頂點に達せり。今後之を尊ぶ者漸く少からんか。近松は今日に於て一層の名譽を得んとす、今後或は多くの信仰者を得ん。

(九月五日)

〇西洋畫漸く勢を加へ來りて或は日本畫を壓し去らんとするの觀あり。而して一人の日本畫家の能く之に頡頏するもの有るなし。危いかな。所謂日本畫の大家なる者は人の西洋を讃くを聞いて啞然として笑つて曰く言ふ莫れ西洋

西洋と。洋畫の卑俗なる焉んぞ高尙なる日本畫を壓するを得んや。況して洋畫盛大なりといふと雖も畫家の數の僅少なるは日本畫家の千を以て數ふると相比して數に於て優劣既に明かなり。洋畫能く何の點に於てか勝を制せんと。是れ恐らくは時勢を知る者の言に非るなり。德川氏の將に亡びんとし薩長の漸く起らんとするや、德川氏は曰く天下の大を保ち三百の諸侯を率ゐ加ふるに祖宗の威靈を以てす。二三强藩の叛くあるとも能く何事をか成さんと。何ぞ計らん時勢は海嘯の闇を捲いて來るが如く、蠢々の聲に驚かされて夢猶全く醒めざる德川政府を根柢より覆して遙の沖に運び去りたり。今日日本畫の衰頽は德川幕府の末年に似たる者ありとせば所謂大家の言は自家の危急を知らざる德川氏の誇言に同じきなからんや。吾れは日本畫の運命に於て危む所無き能はざるなり。然れども吾れは日本畫の滅びよと思ふに非ず、之を永久に榮えしめんことを欲するなり。之を永久に榮えしめんことを欲すといへども今日の狀態にては終に永久の持續に堪へざらんことを恐るゝなり。

日本畫は如何にして持續すべきか。吾れは此問に答へて日本畫の一大家（今の所謂大家より）夐かに勝りたる者の出づるに非ざれば此頽敗せる日本畫を一新し永久に持續すること能はざるべしと言はん。只々恨むらくは人物は必ずしも社會の需用に應じて直ちに出で來る者に非ざるを。然らば其の大家に需むる所は如何。大家にして從來の日本畫と面目を異にする一畫風を創開するあらんか、吾れは最も熱心に之を歡迎すべしといへども丹は吾れの希望外にしてここに論ずる日本畫持續とは問題を異にせり。日本畫持續は從來の日本畫に多少の進步を爲すを以て足れりとせん。多少の進步とは種々の點に於て進步するを望まざるに非ずといへども主として新意匠に富まんことを望むなり。試みに今日日本畫家の爲す所を見よ。先生躍鯉浮萍を畫く、弟子も亦躍鯉浮萍を畫く。先生巉巖急流を畫き危橋を著け樵夫を著く。弟子も亦巉巖急流を畫き危橋を著け樵夫を著く。何ぞ其意匠に富まざるの甚しきや。畫に筆畫色彩ありて自己の意匠無くんば是れ美術に非ずして職工的技術なり。近時職工的技術の精密に赴くと共にます〳〵日本畫無からんとするは展覽會を一見せし人の知る所なるべし。嗚呼日本畫の運命かゝつて一縷の絲に在り。危いかな。

（寫生）といふ一事は少くとも西洋畫をして日本畫の如き陳套に陥らしめざるの利あり。況んや寫生ならずして好畫を作すこと極めて難きをや。日本畫家曰く寫生は卑き手段なり、理想の高きに如かずと。此言を爲す者多くは寫生を知らざる者なり。繪畫の能事は寫生を以て終る者に非ることは言を俟たずといへども、高尙なる理想も寫生によらざれば成功すること難かるべし。聞く東京美術學校にても器物を寫生し游魚を寫生することありと。器物游魚の寫生は寫生の至る者に非ず。況んや其器物の寫生すら教師の之を敎ふるに非ず、卻て敎師生徒に劣ることありといふ。斷く云へばとて寫生とは油畫の如くせよとに非ず、意匠に富むとは北齋を習へとに非ず。猶他日愚考を述べて博雅に質すことあるべし。兎に角此等の注文は未來の大家に向つて望む者にして今の大家に望む者に非ず。今の大家に望まんには只々古式を守るべし、模寫を變ずべからずと望まんのみ。之を經歷ある人に聞く、今の畫家の半ば古式に依り半ば新意を出だしたる者を見るに、多くは古式を摸したる所に於て功に新意を出だしたる所に於て拙なりと。杜撰なる遠近法陰影法を用ゐて徒に西洋畫家の笑ふ所と爲るが如きは鷄、鵜を學んで水に浴する類のみ。

（九月十一日）

○亀戸の秋　百花園の花は如何ならん。去年は居らずをとゞしは訪はず、今年は足立たねばうつり變る庭前のけしきにたゞ世の中も斯くやとばかり推しはかり行くせめてもの心やりなりかし。去年の秋の末旅より歸りて庭先の刈株何ぞと問へばこは鄰なる某の嫗のたまはりし萩なりといふ。此草花咲く頃は枝垂れて衣をほすにたよりよからずとて、小さき株を猶小さく分けて半ばを殘し半ばを又二つに分けて少し離れたる處に植ゑ並べけるが、今年はいたく生ひひろごりて小庭を塞ぎ小草を壓し筋向ひの家を隱しはては上野の森をも隔てんとす。花の頃こそと獨り待たるゝを、まだ莟も見えぬに向島ははや少し咲き初めたりなど人のうはさなり。來る人毎に此の萩いと遲しといふにいよ〳〵もどかしくされば、庭の草木も主と共に世に後れたればいかでか今年は花も得咲かすべきとて心にもあらず笑ひなどす。

○九月一日　といふに朝起き出づれば萩こそ咲きつれといふ。いかにぞと障子あくればわづかに一點の紅を認め得たり。次の日は二點、又次の日は四點、斯くては盛りは一月の後なめりなど言ひあへりしが、倍増しの割合は恐ろしき者かな十日といふにはや薄き株の方は大方花となりけるを、うたて植ゑかへたる方はまだ咲かんともせず。此頃人の集ることありしに庭前の即景句になるべしとて思ひ〳〵に詠み出でたる中に

男萩女萩男萩ばかりは咲きにけり　牛伴
豆腐屋も肴屋も來ぬ萩の花　碧梧桐
萩の中を豆腐屋の來る小庭かな　蒼苔
萩三株小庭なかばに廣がりぬ　同
萩の中しかつめらしく松立つたり　櫻巷
井戸端の盥に萩のこぼれけり　把栗
萩咲いて主人の病癒えにけり　其村

などいへるいづれもめでたし。

○古株の萩のうしろに、これも鄰の嫗よりたまはりたる薄一むら、はら〳〵と穗に出でて月にもさはらんとするを、日頃吹き續きたる野分の風は兎角に此尾花を西南の方へ吹きなびけぬ。水汲みに通ふべき道の妨けなりとてくゝりよするを餘りに興なしといへば倒れたる穗を伐り取りなどす。多からぬ薄を伐り取るも心うく如何になるらんと思ふに、穗は後より〳〵とのびてほうほうと取り亂したる體見ばえなきにしもあらず。人々の句の中に

上根岸萩も薄もあるところ　牛伴
芒の穗六尺にして檐を摩す　同
十日見て少し狂ひぬ花すゝき　碧梧桐
萩芒中に小松の生ひまじる　墨水
薄高く萩低く庭に嵐吹く　同
蜻蛉のとまりかねたる薄かな　蒼苔
伏して見るや薄の中の上野山　天歩
風吹いて障子にさはる芒かな　同
鵥飛んで芒のそよぐ小庭かな　左衛門
ざわ〳〵と芒は萩をこぼしけり　櫻巷

など薄を詠み出でたるも多し。

○朝顏は毎年垣根に植ゑて垣一面に花咲かす例なるに、今年は如何したりけん苗のそだちあしくて竹垣の上杉垣の中、まばらに花を著けたるものなか〳〵にあはれ深し。あるは松が枝に取りつきて千代とは契らず、たゞちに萎みたるもはかなき花のさまなり。某の女の童のたはむれに雞頭植ゑてんとて夏の頃苗を持ち來りてかたばかりに土かぶせたるが、今は痩せながら高くのびて小枝多く出でたるもものうしや。其側に黄なる雞頭のさゝやかなるが萩に押されたる、猶水引草、檀特、荔枝、白粉花など皆草がくれに見えみ見えずみ咲きたり。

杉垣の裏や日中の小朝顏　牛伴

　蟻二匹蟷螂の臂を引いて行く　牛伴
　蟷螂の松に取りつくは花白し　碧梧桐
　庭狹し蟷螂雞頭萩薄　蒼苔
　竹垣の蟷螂みんな萎みけり　左衛門
　雞頭のひよろ／＼高き小庭かな　同
　庭内や曰く雞頭曰く萩　悠々

日陰に咲きたる草どものかゝる佳句を得ていかに映栄えありとか喜ぶらん。草の葉も光を生じたる心地す。

(九月二十一日)

○暗合剽竊　といふことは文學の上にありうちのことなれどもそれが暗合なるか剽竊なるかは當人ならでは知るべからず。傍人より見て此人は正直の人なれば剽竊すべきわけなし、必ず暗合ならんと斷定するは大方に誤らざるべし、然れども此人は剽竊などすべき人なればこれも剽竊ならんと斷定するは必ずしも當らざるべし、剽竊を好んでしかも恥とせざる人世には無きにはあらねど、さりとて其人の著作の前人に似たる者を取つて盡く剽竊なりとは言ひ難かるべし。只ゝ其道に經驗多き人ならば其の暗合又は剽竊したる所を判定して兩者孰れかを斷定する必ずしも難しとせず。蓋し普通に暗合し得べき意匠又は句法と、普通に暗合し得べからざる意匠又は句法とは自ら區別あればなり。普通に暗合し得べからざる者が偶類似せる場合に於ては或は之を剽竊と言ひ得べしといへども、盡く剽竊ならずして

○不明瞭なる記憶　より來る者あり、不明瞭なる記憶より來るとは、嘗て一見したる著作の記憶は我が頭腦中に存在したれども其記憶薄弱なるがために、其後記憶によりて再現したる者が前の著作なりしことを忘れ自己の創意に出でたるが如く思惟するなり。韻文の如き短き者には此種に屬する類似多しとなす。俳句は殊に然り。一俗人が景物を得んとして前人の句を剽竊するが如きはこゝに論ずる限りにあらず

○俳句に於ける類似　極めて多し。是れ一は俳句の短きがためと、一は學問見識無き者が俳句を作るためとの二原因に歸すべし。和歌に類似せる者多きは和歌に用ふる言語少きためにして、知りながら類似せる歌を作る者比々皆然り。俳句に於て一句全く同じき者あれども其作者の同人異名なるやも知れねばこゝに擧げず。其最も能く相似たる者を擧ぐれば左の如し。

　秋來ぬと目に物見する一葉かな　一桂
　秋來ぬと目に見する桐の一葉かな　乙由
　秋來ぬとさやかに見せる一葉かな　卜童

一桂は寛永頃、乙由は享保頃、卜童は明和頃なり。此句が暗合なるか剽竊なるかはた記憶より出でたるかは知るによしなけれど、かゝる平凡なる趣向にて且つ「秋來ぬと目にはさやかに見えねども」の歌によりたる者なれば暗合すまじき者にもあらず。

　手も足もはね題目の踊かな　立圃
　手に袖にはね題目の踊かな　斗文

前者は寛永頃に、後者は安永頃なり。これ亦極めて簡單なる句なれば暗合せずとも限らず。

　梅が香や嵐の中の松の風　昌叱
　梅が香や嵐が中の松の風　似竹

此兩句殆ど相同じ。前者は慶長頃、後者は安永頃なり。此句は趣向稍ゝ複雜にして且つ梅が香といひ春風といひ嵐といふもの重るべからざる程の關係深き者ならねば一句暗合とは思はれじ。剽竊か然らざれば記憶の誤りより出來たる句ならん。

　雉子の聲にも動く柳かな　御製
　雉の聲にもしなふ柳かな　玉匣

前者は明應頃後土御門天皇の御製か。後者は安永頃なり。剽竊とも暗合とも記憶の誤とも知り難し。

白鷺に烏帽子着せたし御祓川　只丸
白鷺に烏帽子著せばや御祓川　蓼太

前者は元祿頃、後者は安永頃なり。此の句殆ど同じ。此趣向は極めて奇なる趣向にして普通に人の考ふべきものならねば斷じて暗合にあらず。況して兩句とも此の趣向を御祓川に配合したること餘り不思議にして或は剽竊ならんかとも思はるゝ程なり。蓼太といふ人固より正直の男にはあらねど、さりとて古句を剽竊して尻尾をあらはす程の馬鹿にもあらざるべければ、或は不明瞭なる記憶は此の句を自己の創意と誤認したるにもやあらん。（十月五日）

初雪のはづかしさうに降りにけり　一吟
初雪やはづかしさうに降りしまひ　梅布

前者は元祿なり、後者は享保以後か。命意殆ど同じけれども、後者の「降りしまひ」としたるは「恥かしさう」に對して善く利きたり。それにしても前者ありとすれば後者は大手振つて我句なりと誇るわけにも行くまじ。此の如き場合に後者は前者を修正したるものと見ればいと興あり。

日和見のならひの外や花曇　正隆
日和見るならひにもなし花曇　衆水

前者は寛文頃なり。後者は享保前後にもあるべし。意匠全く相同じ。何れにしても拙き句なれば論ずるに足らねど、寛文の古句に暗合するとは不名譽なる暗合なるべし。若し又寛文の句を剽竊せしものならば其人の見識の程も知られていとあさまし。

風やんで鄰へもどす柳かな　不角
吹きやんで鄰へ垂るゝ柳かな　馬龍

前者は享保前後にや。後者に安永の句なり。兩句殆ど同意匠なれども、垂るゝといふ方自然にして、「戻す」といふ語の意味を付けて俗にしたるよりは勝れり。これも前の初雪の句の如き些少の差異なれば修正せしものとして見て置かんのみ。

水もばけ氷となるや狐川　良次
狐川水さへばける氷かな　春可

兩句共に寛永頃の作なれば暗合にてもあらんか。斯かる洒落的の句は暗合すること多かるべし。

灌佛やめでたきことに寺參り　支考
よろこびに寺へ參るや佛生會　江和

前者は享保頃、後者は明和頃なり。同じ趣向にして後者の方句作遙に劣れり。これ等こそ剽竊なるべけれ。見苦しとも見苦し。

名月や鶴のかあがる上手の陰　且只
名月や鶴のびあがる小松原　午寂

前者は元祿、後者は安永頃なり。小松原といひたる方趣味少しまさりたる如く覺ゆれど、猶初雪、柳の例と同じものなるべし。

鶯や柳にさます梅の醉　乙由
鶯の竹にさますや花の醉　潛柳

後者は享保なり。前者も其頃なるべし。兩句暗合にはあらずと見ゆるものから何れか先にして何れか後なるや知り難し。但乙由は名ある宗匠にして潛柳とは世に聞えざる人なれば暫く乙由を以て先となさんか。乙由の此句麥林集以前に何等かの書に載せあらば其の時代を知るの便ともなるべし。知りたまふ人あらば教へたまへ。

月一つばひとり勝のこよひかな　一雪
月一つばひとりに見るこよひかな　秀木

前者は元祿以前の句、後者は明和頃の句なり。同じことを言ひて後者の方劣りたれば論に及ばず。（何れにしても佳句に非ず）後者は「春の遊び」（明和年間刊）といふ書に出たる句なれど此書甚だ駄句多くして實に信用し難し。前に擧げたる卜童（一葉の句）江和（佛生會の句）皆此書に

在り。いづれも剽竊ならんか。

　仙人の宿にすむかの春日かな　宗養

　仙人もねたまん宿の春日かな　昌叱

共に連歌の發句なり。宗養は弘治に歿し昌叱は慶長に歿したれば年には五十年程の差あり。連歌の發句は此二句に限らず類似の者極めて多し。此處には只〻其一例を擧ぐるのみ。蓋し連歌の發句は大約和歌に似てしかも和歌より短ければ材料も趣向も忽ち陳腐に屬し去るにぞ、後に出たる者は已むを得ず前人の發句を取り來りて僅に其中の一部分を改め以て自己の句となすこと彼等の慣ひとはなり、それを陳腐とも恥とも思はぬなり。されば此句の如きも昌叱にありては暗合にもあらず剽竊とも思はず、却て「ねたまん」の一語に新意を出だして優に前者をも壓するに足るとも思ひて作りしなるべし。只〻今日より見れば昌叱の句は固より剽竊を免れずして、しかも「ねたまん」と新意を出だしたる所なか〳〵に前者の自然なるには劣れることの笑ふべきあるのみ。

（十月十二日）

　[illegible]を來らしかけたる竹の皮　[illegible]馬

　[illegible]に[illegible]き[illegible]るものや竹の皮　[illegible]

共に元祿の句なり。暗合ともいづれを先とも分らず。句作は前者稍〻優れり。

　馬の尾を島田にゆふや五月雨　梅雪

　五月雨や使者馬の尾の投島田　白雲

前者は元祿、後者は安永なり。此句暗合にはあらざるべし。句作は前者優れり。後者は巧を弄して却て俗に陷りたり。

　つたふ間も久しき露の雫かな　紹巴

　落つる間も程ふる露の雫かな　宗因

紹巴は慶長に歿し宗因は天和に歿す。是れ亦連歌發句類似の一例なり。

　凧きれて空のなごりとなりにけり　不角

　いつ歸る空のなごりを凧　功悠

前者は元祿初年なり。後者も大略同時代なるべきか。或は少し後れたらん。

　人に似て猿も手を組む秋の風　珍碩

　手を組んだ猶の様や秋の暮　希因

前者は元祿なり。後者は享保以後ならん。後者場所を敍したる所印象を明瞭ならしめんとしたるものなるべけれど、猿の位置遠ざかりたるため却りて手を組むといふ形容詞かず、唯だ見劣りせらる。且つ前者俳諧集中の句にて後者希因の句なれば剽竊と斷定せざるべからず。若し不注意より生ぜし暗合ならば宗匠にあるまじき大不注意と謂ふべし。

　いさかひの跡はづかしき砧かな　佳雨

　むつとして戻れば庭に柳かな　蓼太

前者は享保、後者は天明なり。言葉使ひ少し異なれど見つけ處は全く相同じ。蓋し蓼太の剽竊したるか、或は翻案したるものにや。前者佳句に非ず。而して後者は時間の經過を含み、場所を示し、しかも婉曲に言ひまはしたる處、世俗の喝采を博し端唄にも唄はれたる所以なれど、其端唄に唄はるゝは寧ろ其卑俗を證する者にして、俗氣多き處は前者にも劣りたらん

　菜の花にこがれてとまる螢かな　貞角

　菜の花におくれて戻る螢かな　里圃

前者は元祿、後者は安永なり。此二句の如き句法言葉は甚だ類似したれども意匠は同じからず。二句共に存すべし。

　曇る日の白魚見せん都人　和海

　[illegible]になれし白魚見せん都人　香興

共に元祿なり。こはわざと同じ句を取りて二人が附句を付け試みたるなり。後者の滑稽じみて拙なるを憐れまれとやせん。

　物數の急になつたる砧かな　[illegible]

物賣の夜中を過ぐる寒さかな　成美

前者は元禄、後者は安永なり。これも少しは趣向變れり。後者或は勝りてん。

葛水や涼しく曇る錫の色　珠來

葛水や黑きに戻る錫の色　吐鳳

前者は寶暦頃、後者は安永頃なり。似たりと言はば似たらん、似ずと言はば似さらん。然れども終に同類の咎を免るゝ能はざるべし。

見る人も廻り燈籠にまはりけり　其角

物うけに廻り燈籠のまはりけり　失名

前者は寶永以前、後者は安永頃なり。趣向稍ゝ異なれり。吾れも曾て其角の轍に倣ひて「同じ事を廻り燈籠のまはりけり」と作す。今失名氏の句を見るに吾が句彼れに似ず却て此れに似たり。蓋し暗合なり。

爪やある夜ひそかに雪の花　菊伍

五月雨やある夜ひそかに松の月　蓼太

前者は享保を去る遠からざる句なるべく、後者は安永、天明の間ならん。此二句に就きては世已に論あり。後者が前者の提へ得たる趣味を偸み來りて翻案したるは言ふまでもなけれど、翻案にして妙ならば敢て咎むるに足らず。只ゝ世人が兩句の比較に於て（剽竊の事は姑く問はずして）後者を以て甚だ勝る者と爲すは誤れり。蓋し功は後者に多し。是れ世人の後者を推す所以なり。而して雅趣は却て前者に在り。吾れは寧ろ前者を取らん。以上は天明以前の句に就きて目のとまりたる者を抄出したるのみ。此他猶無數の類句あるべし。況んや天明以後をや。

（翻案、又は燒き直し、又は陳腐、又は剽竊、又は換骨脱胎、又は化腐爲新など種々の稱呼あれども畢竟類似を言ふのみ。翻案と言ひ換骨脱胎と言へば寧ろ之を譽むる方の意に用ゐ、燒き直しと言ひ陳腐と言へば之を貶する方の意に用ふ。蓋し程度の相異に因るのみ。故にいづこまでを翻案としいづこまでを剽竊とするやは只ゝ各人の判斷に在り、而して此判斷は各人に多少の差異を見ること常なり。（十月十九日）

（小說雜誌新聞の插畫）として西洋畫を取るに至りしは喜ぶべき事なり。其の喜ぶべき所以多かれど、第一、目先の變りて珍しきこと、第二、世人が稍ゝ西洋畫の長所を見とめ得たること、第三、學問見識無く高雅なる趣味を解せざる浮世畫師の徒が壓せられて、比較的に學問見識ありて高雅なる趣味を解したる洋畫師が伸びんとすること、第四、從來の畫師が殆ど皆ある模擬に束縛せられ模擬外の事は之を畫く能はざりしに反し如何なる事物にても能く寫し得らるべき畫風の流行すること、第五、日本畫が好敵手を得たること等を其主なるものとす。

（新小說）の插畫中、綠陰僊美は自然ならずして拵へたやうな所あるは畫師の意匠に非ずして他よりの注文には非るか。草木繁茂せる門闈の光景は固より言分なく、言分は只ゝ人物に在り。ある人曰く少年を取り去らば即ち可ならん。他の人曰く而して少女を草刈の女と爲さば更に可ならん。神將駕雲圖は小說の插畫にしてしかも小說中の畫師が工夫せる畫題なり。從來小說家が畫師を寫す概ね畫を知らざるが爲に誤謬を爲すこと多し。むき玉子の如き是れなり。此作者畫を知るや否や疑はしけれども兎に角これだけの畫題を工夫することは今までの小說家には無きことなり。此畫、趣向に於ては殆ど畫師の意を用ゐざれどもさりとて畫として惡しからず。只ゝ神將の容貌幾分の俗氣を帶びたるにあきたらぬのみ。ある人曰く此畫、畫として面白き所なしと。果して如何。秋草美人の圖何等の趣味ありとしも見えず。

（世界之日本）の插畫中、櫻花朝暾は櫻ばかり畫きたるが趣向なるべし。つまらぬ彩色に骨折

りて手數を掛けたるだけの手柄は現はれず。瑣末の事に凝りて大體を忘るゝ者今日日本畫家の弊なり。名聲嘖々たる日出國の海軍はありふれたる趣向なり。少しも感服する所あらず。色もいやな色多しと素人目には見ゆるなり。ある人は軍艦の位置、形狀などに注意したる此人の特得なりと言へど、吾れは右の端にある一艦を取り去り、中央にある大艦を今少し正面より見せしむるやうに改めなば更に雄壯の感を増さんかと思ふなり。或人は此畫を賞して曰く趣向の堂々たる處、神將抔の比に非ずと。然れども軍艦の畫は龜井何とやらの筆にものりたり。何の珍しきことあらん。此畫に就きて最も我が不快を感ずる者は此畫の表題なり。只ゝ日出國と題するも可なり。海上日出などとするも可なり。せめては日出國の海軍と題する位ならば猶可なり。名聲嘖々たる日出國の海軍とは何等のいやみぞや。由來畫家文學を備せざるがためにいやみな表題など附けること少しとせず。表題は文學的なるか繪畫的なるかを要す。而して表題無きは更に可なり。團菴の圖無造作に過ぎて見所少し。鐵欄干二つかけて綠陰見ゆる處涼意の動くを見るのみ。同雜誌又彫刻の寫眞を載す。細微なる技術の巧拙は知らねど大體のかつこうの拙きこと言語に斷えたり。妖魔小兒を魅する處など妖魔と土臺との釣合惡き、妖魔の形の不恰好なる、小兒の無邪氣ならざる、妖魔の手と小兒の手と錯雜したる、缺點いふ可らず。

○繪畫展覽會　を觀る。概して名家は名の無き小家よりも巧なり。然れどもいづれを傑作とせん、知らず。古畫も左程に感服せず。ある人雪村の畫を賞揚すれども雪村は筆力餘りありて神韻足らず、從つて其畫を觀て微妙の感を起す事無し。吾れ甚だ雪村の畫を愛せず。應擧の小幅、小幅なればにや却て趣味多きを見る。

○繪畫共進會　青年の筆亂暴なるためにや大家にも亂暴なる者あるかと覺ゆ。景年の小幅、玉章の大幅たゞ先づめでたきものならん。淨穢界の圖いと珍らかに面白し。されどもある人の激賞せるによりて吾は強ひて其缺點を求めて全體の位置少しすわらぬ心地す。これは芳崖の觀音の靜止せる者と反して飛揚せる者なれば今少し空間を廣くしては如何。吾れには右の手の掌なきが如く見ゆるは僻目か。橋本氏が畫家として新意を出だす處、筆力の勁健なる處、用意周到なる處固より他の畫家の企及すべきに非ず。然れども氏は無理に新意を出さんとするがために時に化け物的の畫を作す。虎溪の三笑の如き竹に猫の如き、博覽會の虎の如き一長所はあるべけれども惡き方より之を見ば之を化物と謂はざるべからず。ある人は猫を評して幽微なる興趣を寫し出さんために云々といふ。吾れは此畫に否雅邦氏の畫に幽微なる興趣なる者を認むる能はず。對幅雪景は素湯の如しといふ評當れり。

○白馬會　諸先生已に詳評あり。吾れ贅せず。

（十月二十二日）

○京都　に遊び三尾の紅葉を見たるも既に五年の昔になりぬ。京に著きたる其日は空打ち曇りてふりみふらずみ何とはなく古き都の時雨雲心を傷むるに獨り車を雇ひて高尾に行けば路の邊の小店に紅葉の形つけたる手拭など掛けたるもなつかし。紅葉の谷に下り阪を上り古寺の物さびたるけしき清瀧川の流などはるかに見下して再びもとの處に歸れば車夫は何處より得たりけん、楓の薄く濃く染めたる一枝を攜へて吾れを待てり。槇尾栂尾も見て茶屋に歸り庭前に下り立ち硯と筆とを借りて高尾の楓の葉を自らハンケチに打ちこみなどす。中にも濃き葉を選りたれどいと善うは寫らぬを、ふと思

ひつきて半ば青き葉を取りて試るに青き色もあざやかに寫りて殊にめでたく見ゆるに手の疲るゝをも知らで幾枚となく打ちつ敲きつ餘念なき程、廊下より吾れを驚かす者あり。槌を止めて見あぐれば虚子なり。うれしさに室に入りて別後の物語するに話の緒口絶えんとして絶えず夜深けて別れぬ。

　手拭に紅葉打ち出す砧かな

翌の日は小春の空晴れてあたゝかなるに虚子は來りぬ。打ちつれだちて晝頃より嵐山見んとて出でしが路の程に文學上の爭ひ起りて互みに言ひあひつゝ歩みしに何時とはなく三軒屋に著きぬ。郭公亭にて舟を傭ひ酒を携へて大悲閣に上る。冬に入りぬれど紅葉見には猶早かり。歸路妓王寺の跡を尋ねたれど日暮れて其處とも分かず。闇を辿りて又旅籠屋に歸りぬ。此日の興筆には書き難し。此時吾れは最も前途多望に感じたりし時なり。吾れに取りては第一の勁敵なる學校の試驗と縁を絶ちたりし時なり。況して此勝地に遊び此友に逢ふ。喜ばざらんと欲するも能はず、之を抑ふればます／＼喜びは力を得て迸發せんとす。吾が顏は喜びの顏なり、吾が聲は喜びの聲なり、吾が擧動は喜びの擧動なり、はては一呼一吸する空氣の中に喜びの小兒は兩腋の羽を動かして無數に群れたるを見る。此時の吾が喜び虚子ならでは知るまじ。此時の虚子が喜びも吾れならでは知るものなし。目前の何が樂しきかと問へば何が樂しきか知らず。前途に如何の望かあると問へば自ら答ふる能はず。然れども人間の最も樂しき時は何かは知らず只ゞ樂しき時に在るなり。喜び極まりてしかも些の苦痛を感ぜざりしは吾が今日迄の經歴にて只ゞ此時あるのみ。既往且つ然り、今後再び此喜びあるべしとも覺えず。

　木老いて歸り花だに咲かざりき

（愚庵　は東山清水のほとりに在り。ある夜虚子を携へて門を叩きしに庵主折節内に居たまひてねもごろにもてなさる。庵は方丈に過ぎず、片隅に佛壇を設け片側に二疊をしきりて爐を切りたり。廬は絶壁に倚りたれば窓の下直ちに谷に臨み谷を隔てゝ靈山手に取るが如し。窓は東に向つて開き机は山に對して安んず。主客三人僅かに膝を容るゝに過ぎざれど境、靜かに人、俗を離れたればたゞ此世の外の心地して氣高き香ひの室内に滿ちたるを覺ゆ。三人爐を圍んで談興に入る時茶を煎て一服を分たる。携へ來りし柚味噌を出だせば庵主手を拍つて善哉と呼ぶ。

　老僧や掌に柚味噌の味噌を點ず

庵主爐上の釜を指して曰くこは淨林の作にして一箇の名物なるをある人の喜捨によりて庵の寶と爲りしものなりと。言はるゝまゝにつくづく見れば菊桐の紋一つ二つ鑄出したるがいたく年古りたりとおぼしくゆかしき樣なり。つたなき發句などものすれば短册にしたゝめてよと強ひらるゝいなみも得ず、庵主能書なれば代りに其筆跡を得て歸りぬ。其れより後汽車にて京都を乘り過ぐる事あれど俗縁にまつはられて得驚かさず。此春庵主東遊のついで我が庵をさへおとづれたまひて高き鼻長き眉、羅漢をうつしたらんが如き秀でたる容顏は昔にも變らじと見しものから東山の廬は常に吾が夢をはなれず。月の朝、しぐるゝ夕、ものにつけて思ひ出づるは彼の釜にたん。

　凩の淨林の釜恙なきや

（十二月二十三日）

○愚庵十二勝　といふを撰びて詩を作らる。王維の俤をとゞめておもしろし。此詩一たび出でゝ唱和の作山の如く庵主の徳を慕ふ者多し。此頃庵主書を寄せていふ、老少不定なり。子が

病亦重きを加ふと。願はくは十二勝を和してわがための記念とせよ。或は知らず我却て子に先だつて逝くを。云々。吾が病稍ゝ間あり。此書を見て覺えず微笑を漏らしぬ。乃ち書を返していふ、吾れ詩を善くせず。推敲日を移さば或は終に高嘯に負かん。因りて同人と共に俳句十二首を作り以て責を塞ぐ。只ゝ俳句は詩に比して暴露に傾くの嫌あり。然れども暴露却て是れ俳家の眞面目なりと信ず。伏して嚴斧を請ふ。

歸雲巖

秋落葉石冷えて雲歸るべく　碧梧桐
午頃にしぐれし岩の夕日かな　虚子
吹きたまる岩の窪みの霰かな　把栗
雲消えて花ふる春の夕かな　子規

雲石洞

石を爲す鐘乳の露滴るよ　碧梧桐
雪を丸めて佛を作る雪の朝　虚子
佛の灯清水にうつる洞午なり　把栗
春風や眼も鼻も無き石佛　子規

梅花谿

白梅は紅梅に劣る廂かな　碧梧桐
散る梅の掃かれずにある窪みかな　虚子

曉の山に月出づ梅の花　把栗
活けんとす梅こぼれけり維摩經　子規

紅杏林

君心ありて伐り捨てざりし杏かな　碧梧桐
鴉ありて白李の種を盗みけん　虚子
烏啼くや杏の花に日三竿　把栗
靈璧女來らず杏腐り落つ　子規

清風關

更衣出べくとして我約ありし　碧梧桐
敲けども／＼水鷄許されず　虚子
竹林に晝の月見る涼しさよ　把栗
涼風や愚庵の門は破れたり　子規

碧梧井

桐にしてかぶさる井戸の青葉かな　碧梧桐
桐を栽ゑて古びし井戸を新らしむ　虚子
山の井の底に沈める一葉かな　把栗
桐掩ふ庭の清水に塵もなし　子規

棗子逕

長い棗圓い棗も熟しけり　碧梧桐
熟したる棗の下に徑を爲す　虚子
鐵鉢に棗盛りたる稀奇なり　把栗
行脚より歸れば棗熟したり　子規

採菊籬

菊一籬こゝに愚庵十二勝を成す　碧梧桐
鋏誤つて白菊を切る黄菊かな　虚子
晝鎖す門に菊花の亂れ咲く　把栗
靈山の麓に白し菊の花　子規

錦楓崖

個個を造り出でゝ紅葉夕日なり　碧梧桐
崖の上に鳴かざる鹿の馴れて來る　虚子
崖を削つて道つくるべく蔦紅葉　把栗
紅葉散りて夕日すくなし苔の道　子規

嘯月壇

物干に月一痕の夜半かな　碧梧桐
犢鼻褌を干す物干の月見かな　虚子
松はしぐれ月山角に出でんとす　把栗
嘯けば月あらはるゝ山の上　子規

爛柯石

寒夜一棋石盤をうつて鳴る　碧梧桐
石の上に春帝の駕の朽ちてあり　虚子

閑古鳥僧石に詩を題し去る　把栗
野狐死して尾花枯れたる石一つ　子規

古松塢

松に蔦風吹き荒れて塚ならざる　碧梧桐
草枯れて松緑なる御法かな　虚子
蛇の衣のかゝる木末や雲の峰　把栗
冬枯や曰く庭前の松樹子　子規

（十二月二十四日）

○貧しきは常のことながら月の末は殊に貧しく年の暮は更に貧し。貧の極度は一文も無きことぞと覺えたる書生の内はなか〳〵に一文も無きこそ魂落ちつきて心安きこと多けれ。手の内、財布の底盡くあらためて種仕掛も無き空嚢の中より達磨二つ三つ取り出すさへいくらかの修行は必要なるに、此頃見習の世帯持がありたけの物はたり取られて猶正月の餅つかんとあせる思ひを鄰の杵の音に驚かさるゝ苦しさよ。病めるは吾れの常、寒ければ殊に惱ましきも猶年々の常ながら病めるが上に病み惱めるが上に惱めること誰れかは思ひよるべき。病魔は勢に乘り五臟六腑を喰ひ裂きて猶飽き足らず、頭のつむじより足の踵まで透間もあらず攻め寄せ〳〵攻め落さんとすれど多年の籠城に馴れたる身は更に驚くべくもあらず。肺、氣を入れず胃、食を容れず足、地を踏む能はず、縱しさらば運を天に任せて褥中に仰ぎ臥し壁上に記したるパラダイス、ロストの一節を讀み下せば惡魔は金の階子に腰掛けて見下しつゝ吾れを嘲るに似たり。口惜しくも腹立たし。貧は一文無しより樂しきは無く病は靜かに寐たるより安きは無し。吾れ徒らに病魔に愚弄せられて分陰を浪費するに忍びんや、年將に暮れんとす、吾子何ぞ起たざると自ら叱し自ら勵み一枚の禿筆を揮つて燈下に文を草せんとすれば壁上の惡魔呵々として笑ふ。

行く年を母すこやかに吾病めり
また生きて借錢乞に叱らるゝ

○菓物程味の高く清きものはあらじ。小兒は之を好み仙人も之を喰ふとかや。青梅は酸強く口を絞れども鹽少しばかりつけんには味言ひ難し。うら若き女の人には隱れて眉あつめたるもらうたげなり。杏はからびて賤しく李は水多くしてあさはかなり。いちごは西洋いちごを善しとす。されど行脚の足くたびれて草鞋の緒ゆるみたる頃畷の角に腰打ち掛けて汗を拭ふ手の下に端なく見つけて取り食ひたる、味は問はず時に取りていと嬉し、出羽の山中に思はず日を暮したるもこれが爲なり。神戸に病みし時物一つ咽を通らず乳さへ飲み得ぬに、わがためにとて碧虚二子の朝な朝な諏訪山の露を分けて一籠の赤き玉をもたらしたるこれに一日の腹をこやしたるもわりなしや、枇杷はうまけれど種子大きく肉少なきこそ飽かぬ心地はすれ。桑の實はなべての人に知られねども菓物の中これを外にして甘き者は無し。晝餉さへしたゝめずに食ひたる木曾の旅の思ひいでられてなつかし。夏橙、ザボンの類ひ俗を離れて涼し。さして善しとにはあらねど少し病みて飯得たうべぬ折などまたなきものとぞ覺ゆる。梨は涼しくいさぎよし。南窓に風を入れて柱に倚り襟を披き片手に團扇を持ちながら一片を口にしたる氷にもまさりてすが〳〵しうこそ。川崎八幡に詣りかかりて時ならぬ頃茶屋の店先に見つけたる殊にうまし。林檎は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えてすゞやかなる風ばかり口の中に殘りたる仙人の藥にも似たらんか。桃には種類多し。善きもあり惡きもあり。王母後園の風味は知らねど總て桃は世にへつらはぬ處に一段高き處あり。甜瓜西瓜ひなびたれど誠あ

り。捨て難し。殊に西瓜の色は浮きたるふしもまじりながら田舎女の戀したらんが如く、都會嬢の僞り多きには似もつかず。葡萄は甘からず澁からず人に媚びずさりとて世に負かず君子の風あり。栗は淺し、甘藷とくらべられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷かなる腸を持ちながら味はいと濃かなり。多情の人、世を厭ひて野に隱れながら猶物に觸れ一熱血を迸らすにもたとへんか。冷腸熱血吾れ最も此物を愛す。柚子は氣高けれど食ふ可らず。石榴無花菓のわれから裂けたるは喰ひ劣りぞする。密柑は浮氣にして誰れにも好かれ俗世の儀式などにも用ゐらる、やゝ厭ふべし。われ此夏頃よりわけて菓物を食り將書かんとすれば必ず之を食ふ。書きさして倦めば又之を食ふ。食へば則ち心すずしく氣勇む。氣勇めば則ち想湧き筆飛ぶ。吾れ力を菓物に待ること多し。

日毎々々十顆の菓を喰ひけり
小刀や鉛筆を削り菓を剝く
朱硯に葡萄のからの散亂す
書に倦みて燈下に柿を剝く半夜
柿くふて洪水の詩を草しけり

やがて新しき柿をも得つ。況して時は冬に入りて木の實などあるべくもなし。吾が筆少しも動かず。

（十二月二十日）

（病み初めたるは、十一月の半になん。にはかの事なれば來合せたる人々を驚かしぬ。今まで何事のありとも知らざりし小春の空は鳶舞ひ雀鳴きつるに、晝過る頃より黑雲少しづゝ飛び行くと見しが夕暮には忽ち陰險なる光景をあらはし、夜に入れば雷鳴り電閃き雨濺ぎ霰走り日顛れ月碎け天柱傾き地皮裂け大海立ち熱泉湧き虎、風を吹き龍、火を吐く。夜半音絶えて星斗天に在り。それより後ち日毎夜毎折々には忽ち風、忽ち雨、忽ち獅子吼え、忽ち餓鬼泣く。人々代る〳〵おとづれとふらひたまひし中にも碧虚二子は常に枕をはなれず看護ねもごろなり。去年と言ひこたびと言ひ二子の恩を受くること多し。吾が命二子の手に繫りて存するものゝ如し。吾が病める時二子傍に在れば苦も苦しからず死も亦頼むところあり。

窓の影小春の蝶簾に飛ぶ
胃痛やんで足のばしたる湯婆かな
詩腸枯れて病骨を護す蒲團かな
看病や君を取り巻く冬籠
碧梧桐の君をいたはる湯婆かな

しぐるゝや湯婆冷えて臍の上
小夜時雨上野を虚子の來つゝあらん
木の葉をり〳〵病ひの窓を打て去る
茶の花の二十日餘りをわれ病めり

（ある夜病やゝ癒えて痛みもほどやみたるものから頭重なやましく安く寢られず。夢ともなくうつゝともなく頭に「青柿を打てばかつ散る青葉かな」「田女の青柿をかつ木陰かな」といふ句を口の中に繰り返す。繰り返してはいよゝ安からず覺えて終にはいつとなく全くのうつゝに返りそれより何故とは知らず考は柚味噌に移りぬ。病み臥して此かた俳句など思ひもつかざりしが柚味噌を思ひいでてより柚味噌の句つくらまほしく眠らんとすれど目さえて眠られず。終に二十首許りを得たり。やがてしら〳〵と夜明けゝれば虚子を呼び起して其句を記さしむ。其中に

われ病んで京の柚味噌の喰ひたかり
柚味噌買ふて吉田の里に歸りけり
柚の木兀として京極に柚味噌出づ
柚味噌の蓋金の蒔繪に切り拔けり
柚味噌盡きて更に柑子を愛すかな
昨夜星落ち今朝柚味噌缺る

柚味噌としいへば京都の事先づ思はるゝぞか

し。

○琵琶といふものは薩摩琵琶を聞きたれど昔の琵琶は如何なるものなりけん知らず。平家は書にてこそ讀みたれ琵琶にかけては如何に謠ひけん知らず。只ゝ物の本にあらくれ武士を泣かせたる事などゆかしくのみ覺えたるを、去る琵琶法師の平家を語る由聞きて病をつとめて往きぬ。法師は盲にして古代めきたる頭巾をかぶり袴を著け膝組みて琵琶彈き出でたる其の容いと氣高くなつかしき樣なり。拾ひ物には宇治川先陣、節物には横笛時頼を尋ぬる一節を語りしが、詞と地との區別あり、地の處も水の流るゝが如く謠ひて節付に變化少く音調の抑揚甚しからねば薩摩琵琶の如く情激し氣昂ること無しといへども、いとみやびかに物古りて薩摩の俗氣多きとは違へり。總て簡單なる處は古代の遺音を傳へけるものならん。

頭巾著て平家を語る法師かな
蠟燭の涙を流す寒さかな
琵琶冴えて星落ち來る臺かな
嘈々としぐるゝ音や四つの絲
琵琶迫れば凩さつと燭を吹く
四絃一齊霰たばしる聖かな

（十二月三十日）

松蘿玉液子を祭る

陳玄子松蘿玉液と號す。清國徽州の産、其年齢を知らず。或は言ふ子の海を渡つて日本に來るや漂泊して南海の濱に到る、是れ今を距る殆ど三十餘年前の事なりと。吾れ昨年秋郷に歸りて病を養ふ。偶ゝ子と相見る。子軀幹長大尋常に異なり。乃ち喜んで携へ歸る。子老鋪の匣中に藏るゝこと三十年、一朝知己の恩に感ずるや常に左右に侍して命を俟つ。吾れ病餘猶褥に在り、少しく間あれば即ち几に倚り文を草す。猶杖に扶けられて郊外に山を看るの氣力無くはた孤舟を烟波に放つて獨り釣絲を垂るゝの興を擅にするを得ず。終日無聊に堪へずますます子と相親む。吾れの東上するや子亦行李の間に相隨ふ。爾來相伴ふこと一年餘、花晨月夕興到れば則ち子を勞し風曉雨夜心平ならざれば則ち子を勞す。子粉骨碎身敢て勞を言はず。終日孜々として猶力の足らざるを恐る。然れども歲月身を磨し陶泓肉を消す。子終に烏有に歸す。嗚呼。才子佳人を見る一夕の情猶百年の命を致す。吾れ子を得てより眷戀の情已む能はず、朝夕幾度か匣を開き子を見る。一たび子が顔を見れば則ち文思流溢詩興勃然止まる所を知らず。吾れの子が力を藉る甚だ多し。今や匣を開いて復子を見ず。追懷の情に堪へず。弔するに俳句一首を以てす。

詩百篇君去つて歲行かんとす

（十二月三十一日）

墨汁一滴

病める枕邊に卷紙狀袋など入れたる箱あり、其上に寒暖計を置けり。其寒暖計に小き輪飾をくゝりつけたるは病中いさゝか新年をことほぐの心ながら歯朶の枝の左右にひろごりたるさまもいとめでたし。其下に橙を置き橙に並びてそれと同じ大きさ程の地球儀を据ゑたり。此地球儀は二十世紀の年玉なりとて鼠骨の贈りくれたるなり。直徑三寸の地球をつく〴〵と見てあればいさゝかながら日本の國も特別に赤くそめられてあり。臺灣の下には新日本と記したり。朝鮮滿洲吉林黑龍江などは紫色の内にあれど北京とも天津とも書きたる處無きは餘りに心細き思ひせらる。二十世紀末の地球儀は此赤き色と紫色との如何に變りてあらんか、そは二十世紀初の地球儀の知る所に非ず。とにかくに狀袋箱の上に並べられたる寒暖計と橙と地球儀と、是れ我が病室の蓬萊なり。

枕べの寒さ計りに新玉の年ほぎ繩を掛けてほぐかも　（一月十六日）

一月七日の會に麓のもて來しつとこそいとやさしく興あるものなれ。長き手つけたる竹の籠の小く淺きに木の葉にやあらん敷きなして土を盛り七草をいさゝかばかりづゝぞ植ゑたる。一草毎に三四寸許りの札を立て添へたり。正面に龜野座といふ札あるは菫の如き草なり。こは佛の座とあるべきを緣喜物なれば佛の字を忌みたる植木師のわざなるべし。其左に五行とあるは厚き細長き葉の稍ゝ白みを帶びたる、こは春になれば黃なる花の咲く草なり、此等皆寸にも足らず。其後に植ゑたるには田平子の札あり。はこべらの事か。直後に芹と薺とあり。薺は二寸ばかりも伸びてはや蕾のふゝみたるもゆかし。右側に植ゑて鈴菜とあるは丈三寸許り小松菜のたぐひならん。眞中に鈴白の札立てたるは葉五六寸ばかりの赤蕪にて紅の根を半ば土の上にあらはしたるさま殊にきはだちて目もさめなん心地する。源語枕草子などにもあるべき趣なりかし。

あら玉の年のはじめの七くさを籠に植ゑて來し病めるわがため　（十七日）

此頃根岸倶樂部より出版せられたる根岸の地圖は大槻博士の製作に係り、地理の細精に考證の確實なるのみならず吾等根岸人に取りてはいと面白く趣ある者なり。我等の住みたる處は今鶯橫町といへど昔は狸橫町といへりとぞ。

田舍路はまがりくねりておとづるゝ人のたづねわぶること吾が根岸のみかは抱一が句に「山茶花や根岸はおなじ垣つゞき」又「さざん花や根岸たづぬる革ふばこ」また一種の風趣ならずやさるに今は名物なりし山茶花かん竹の生垣もほと〳〵その影をとゞめず今めかしき石煉瓦の垣さへ作り出でられ名ある樹木はこじ去られ古への奧州路の地藏などもてはやされしも取りのけられ鶯の巢は鐵道のひゞきにゆりおとされ水雞の聲も汽笛にたゝきつぶされおよそ風致といふ風致は次第に失せて唯ゝ細路のくねりたるのみぞ昔のまゝなり云々

と博士は記せり。中にも鶯橫町はくねり曲り

て殊に分りにくき處なるに尋ね迷ひて空しく歸る俗客もあるべしかし。（十八日）

蕪村は天明三年十二月二十四日に歿したれば節季の混雜の中に此世を去りたるなり。然るに此忌日を太陽暦に引き直せば西洋紀元千七百八十四年一月十六日金曜日に當るとぞ。即ち翌年の始に歿したる事となるなり。（二十日）

伊勢山田の商人勾玉より小包送りこしけるを開き見ればくさ〴〵の品をそろへて目錄一枚添へたり。

祈平癒呈

御雨宮之眞境（古版）　二
御神樂之圖（摺紙）　五
五十鈴川口のはぜ（藥といふ丑の日に釣る）　六
高倉山のしだ　一

いたつきのいゆといふなる高倉の御山のしだぞ箸としたまへ

辛丑のはじめ　大内人勾玉

まじめなる商人なるを思へば折にふれてのみやびもなか〳〵にゆかしくこそ。（二十二日）

病床苦痛に堪へずあがきつゝめきつ身も世もあらぬ心地なり。傍らに二三の人あり。其内の一人、人の耳許り見て居るとよつぽど變だよ、など話して笑ふ。我は健かなる人は人の耳など見るものなることを始めて知りぬ。（二十三日）

年頃苦しみつる局部の痛の外に左横腹の痛去年より強くなりて今ははや筆執りて物書く能はざる程になりしかば思ふ事腹にたまりて心さへ苦しくなりぬ。斯くては生けるかひもなし。はた如何にして病の牀のつれ〴〵を慰めてんや。思ひくし居る程にふと考へ得たるところありて終に墨汁一滴といふものを書かましと思ひたちぬ。こは長きも二十行を限とし短きは十行五行あるは一行二行もあるべし。病の間をうかゞひて其時胸に浮びたる事何にてもあれ書きちらさんには全く書かざるには勝りなんかとなり。されど斯かるわらべめきたるものをことさらに掲げて諸君に見えんとにはあらず、朝々病の牀にありて新聞紙を披きし時我書ける小文章に對して聊か自ら慰むのみ。

筆禿びて返り咲くべき花もなし（二十四日）

去年の夏頃ある雜誌に短歌の事を論じて鐵幹子規と並記し兩者同一趣味なるかの如くいへり。吾れ以爲へらく兩者の短歌全く標準を異にす、鐵幹是ならば子規非なり、子規是ならば鐵幹非なり、鐵幹と子規とは並稱すべき者にあらずと。乃ち書を鐵幹に贈つて互に歌壇の敵となり吾れは明星所載の短歌を評せん事を約す。蓋し兩者を混じて同一趣味の如く思へる者の爲に妄を辯ぜんとなり。爾後病牀寧日少く自ら筆を執らざる事數月未だ前約を果さゞるに、此の事世に誤り傳へられ鐵幹子規不可並稱の說を以て尊卑輕重に因ると爲すに至る。然れども此等の事件は他の事件と聯絡して一時歌界の問題となり、甲論乙駁喧擾を極めたるは世人をして稍〻歌界に注目せしめたる者あり。新年以後病苦益〻加はり殊に筆を執るに懶む。終に前約を果す能はざるを憾む。若し墨汁一滴の許す限りに於て時に批評を試むるの機を得んか猶幸なり。（二十五日）

俳句界は一般に一昨年の暮より昨年の前半に及びて勢を逞うし後半はいたく衰へたり。我が短歌會は昨年の夏より秋にかけていちじるく進みたるが冬以後一頓挫したるが如し。こは固より伎倆の退きたるにあらず、されど進まざるなり。吾が見る所にては短歌會諸子は今に至りて一の工夫もなく變化もなく只〻半年前に作りたる歌の言葉をあそこゝ取り集めて僅かに新作と爲しつゝあるには非るか。斯くいふ吾れも其中の一人なり。さはれ吾れは諸子に向つて強ひて反省せよとはいはず。反省する者は反省せよ。立つ者は立て。行く者は行け。若し心勞れ眼眠たき者は永き夜の眠を貪るに如かず。眼さめたる時浦島の玉くしげくやしくも世は既に次の世と代りあるべきか如何。（二十七日）

人に物を贈るとて實用的の物を贈るは賄賂に似て心よからぬ事あり。實用以外の物を贈りたるこそ贈りたる者は氣安くして贈られたる者は興深けれ。今年の年玉とて鼠骨のもたらせしは何々ぞ。三寸の地球儀、大黑のはがきさし、夷子の繪はがき、千人兒童の圖、八幡太郎一代記の繪草紙など。いとめづらし。此を取り彼をひろげて暫くは見くらべ讀みこゝろみなどするに贈りし人の趣味は自ら此取り合せの中にあらはれて興盡くる事を知らず。

　年玉を竝べて置くや枕もと　（二十八日）

一本の扇子を以て自在に人を笑はしむるを業とせる落語家の樂屋は存外殺風景にして窮屈なる者なりとか聞きぬ。芳菲山人の滑稽家たるは人の知る所にして、狂歌に狂文に諧謔百出盡くる所を知らず。しかも其人極めてまじめにしていつも腹立てゝ居るかと思はるゝ程なり。我俳句仲間に於て俳句に滑稽趣味を發揮して成功したる者は漱石なり。漱石最もまじめの性質にて學校にありて生徒を率ゐるにも嚴格を主として不規律に流るゝを許さず。紫影の文章俳句常に滑稽趣味を離れず。此人亦甚だまじめの方にて、大口をあけて笑ふ事すら餘り見うけたる事無し。之を思ふに眞の滑稽は眞面目なる人にして始めて爲し能ふ者にやあるべき。古の蜀山一九は果して如何なる人なりしか知らず。俳句界第一の滑稽家として世に知られたる一茶は必ずまじめくさりたる人にてありしなるべし。（三十日）

人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確實になるならひなり。我病牀に於ける希望は初めより極めて小さく、遠く歩行き得ずともよし、庭の内だに歩行き得ばといひしは四五年前の事なり。其後一二年を經て、歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉しからん、と思ひしだに餘りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが一昨年の夏よりは、立つ事は望まず坐るばかりは病の神も許されたきものぞ、などかこつ程になりぬ。しかも希望の縮小は猶こゝに止まらず。坐る事はともあれせめては一時間なりとも苦痛無く安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな。最早我望もこの上は小さくなり得ぬ程の極度にまで達したり。此次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期、釋迦は之を涅槃といひ耶蘇は之を救ひとやいふらん。（三十一日）

大鏡に花山天皇の繪かき給ふ事を記して

　さては走り車の輪には薄墨にぬらせ給ひて大さのほどやなどしるしには墨をにほはせ

給へりし。げにかくこそかくべかりけれ。あまりに走る車はいつかは黒さの程やは見え侍る。又筍の皮を男のおよび毎に入れてめかゝうして兒をおどせば顏赤めてゆゆしうおぢたるかた云々

などあり。又俊頼の歌の詞書にも

大殿より歌繪とおぼしく書たる繪をこれ歌によみなして奉れと仰ありければ屋のつまに女をとこに逢ひたる前に梅花風に從ひて男の直衣の上に散りかゝりたるにをさなき兒むかひ居て散りかゝりたる花を拾ひとるかた有所をよめる

などあるを見るに古の人は皆實地を寫さんとつとめたるからに趣向にも畵法にもさま〴〵工夫して新しき畵を作りにけん。土佐派狩野派などいふ流派盛になりゆき古の畵を學び師の筆を摸するに至りて復畵に新趣味といふ事なくなりたりと覺ゆ。こは畵の上のみにはあらず歌もしかなり。

（二月一日）

吾筆を執る事が不自由になりしより後は誰か代りて書く人もがなと常に思へりしが此頃馬琴が八犬傳の某卷に附記せる文を見るに、初めに自己が失明の事、草稿を書くに困難なる事など述べ、次に

文溪堂及貸本屋などいふ者さへ聞知りて皆うれはしく思はぬは無く爲に代寫すべき人を索るに意に稱ふさる者のあるべくもあらず云々

とあるを見れば當時に於ける馬琴の名望位地を以てしても猶思ふまゝにはならずと見えたり。猶其次に

吾孫興邦は尙乳臭机心失せず。且武藝を好める本性なれば恁る幫助になるべくもあらず。他が母は人並ににじり書もすれば教へて代寫させばやとやう〳〵に思ひかへしつ第百七十七回の中音音が大茂林濱にて再生の段より代筆させて一字毎に字を教へ一句毎に假名使を誨るに婦人は普通の俗字だも知るは稀にて漢字雅言を知らず假名使てにをはだにも辨へず偏旁すらこゝろ得ざるに只ゝ言語をのみもて教へて寫する吾苦心はいふべうもあらず。況て教を承て寫す者は夢路を辿る心地して果はうち泣くめり云々

など書ける、此の文昔は只ゝ餘所のあはれとのみ見しが今は一々身にしみて我上の事となり了んぬ。されど馬琴は年老い功成り今方に八犬傳の完結を急ぎつゝあるなり。我身の未だ發端をも書きあへず早く已に大團圓に近づかんとすると固より同日に論ずべくもあらず。（二日）

○伊藤圭介歿す九十餘歲。英國女皇崩ず八十餘歲。李鴻章逝く七十餘歲。

○星亨訴へられ、鳩山和夫訴へられ、島田三郎訴へらる。

○朝汐負け、荒岩負け、源氏山負く。

○神田の歲の市に死傷あり。大阪の十日夷に死傷あり。大學第二醫院の火事に死傷あり。

○背痛み、臀痛み、横腹痛む。

（三日）

節分に豆を撒くは今もする人あれどそれすら大方はすたれたり。況して其外の事はいふもおろかなり。我郷里（伊豫）にて幼き時に見覺えたる樣は猶をかしき事多かり。其日になれば男女の乞食ども、女はお多福の面を被り、男は顏手足總て眞赤に塗り額に紙の角を結び手には竹のささらを持ちて鬼にいでたちたり。お多福先づ屋敷の門の内に入り、手に持てる枡の豆を撒くまねしながら、御繁昌樣には福は内鬼は外、とい

ふ。此時鬼は門外にありてさゝらにて地を打ち、鬼にもくれねば這入らうか、と叫ぶ。其いでたちの異樣なるに其聲さへ荒々しければ子供心にひたすら恐ろしく、若し門の内に這入り來なばいかゞはせんと思ひ惑へりし事今も記憶に殘れり。鬼外にありて斯くおびやかす時、お多福内より、福が一しよにもろてやろ、といふ。斯くして彼等は餅、米、錢など貰ひ歩行くなり。やがて其日も夕になれば主人は肩衣を掛け豆の入りたる桝を持ち、先づ惠方に向きて豆を撒き、福は内鬼は外と呼ぶ。それより四方に向ひ豆を撒き福は内を呼ぶ。これと同時に廚にては田樂を燒き初む。味噌の臭に鬼は逃ぐとぞいふなる。撒きたる豆はそを蒲團の下に敷きて寐れば腫物出づとて必ず拾ふ事なり。豆を家族の年の數程紙に包みてそれを厄拂にやるはいづこも同じ事ならん。たらの木に鰯の頭さしたるを戸口々々に插むが多けれど柊ばかりさしたるもなきにあらず。それも今はた行はるゝやいかに。（四日）

節分の夜に寶船の繪を敷寐して初夢をうらなふ事我鄕里のみならず關西一般に同樣なるべし。東京にては一月二日の夜に寶船を賣り歩行くこそ心得ね。しかしこれも古き風俗と見え、滑稽太平記といふ書に

回祿以後漸相成家居に越年して

去來たちて家居もあらた丸太かな　卜養

寶の船も浮ぶ泉水　玄札

此寶の船は種々の寶を船に積たる處を畫に書回文の歌を書添へ元日か二日の夜しき寐して惡しき夢は川へ流す呪事なりとぞ又年越の夜も敷事有故に冬季とも云たり然るに二つある物は前の季に用る行年をとらんためなれば此理近かるべしと云るも有されども玄札老功たり既にする時は如何とも春たるべしと云ふも有鳬

と記せり。「元日か二日の夜」とあれば昔は二日の夜と限りたるにも非るか。（五日）

節分には猶さまざまの事あり。我昔の家に近かりし處に禪宗寺ありけるが星を祭るとて燭あまたともし大般若の轉讀とかをなす。本堂の椽の下には板を掲げて白星黑星半黑星などを畫き各人來年の吉凶を示す。我も立ち寄りて珍しげに見るを常とす。一人の幼き友が我は白星なり、とて喜べば他の一人が、白星は善過ぎて却て惡きなり半黑こそよけれ、などいふ。我もそを聞きて半黑を善きものゝやうに思ひし事あり。又この夜四辻にきたなき犢鼻褌、炮烙、火吹竹など捨つるもあり。犢鼻褌の類を捨つるは厄年の男女其厄を脫ぎ落すの意とかや。それも手に持ち袂に入れなどして往きたるは效無し、腰につけたるまゝにて往き、懷より手を入れて解き落すものぞ、などいふも聞きぬ。炮烙を捨つるは頭痛を直す呪、火吹竹は瘧の呪とかいへどたしかならず。

四十二の古ふんどしや厄落し（六日）

我國語の字書は言海の著述以後やうやうに進みつゝあれども猶完全ならざるはいふに及ばず。我友竹村黃塔（鍛）は常に眼をこゝに注ぎ一生の事業として完全なる一大字書を作らんとは彼が唯一の望にてありき。其字書は普通の國語の外に各專門語を網羅し且つ各語の歷史即ち其起原及び意義の變遷をも記さんとする者なり。されど資力無くしては此種の大事業を成就し得ざるを以て彼は字書編纂の約束を以て一時書肆冨山房に入りしかど教科書の事務に忙殺せられて志を遂ぐる能はず。終にこゝを捨て

て女子高等師範學校の教官となりしは昨年春の事なりけん。尋で九月始めに肺患に罹り後赤十字病院に入り療養を盡しゝ效も無く今年二月一日に亡き人の數には入りたりとぞ。社會のために好字書の成らざりしを悲しまんか。我二十年の交一朝にして絶えたるを悲しまんか。我はた我に先だつて彼の逝きたるは彼も我も世の人もつゆ思ひまうけざりしをや。

我舊師河東靜溪先生に五子あり。黄塔は其第三子なり。出でて竹村氏を嗣ぐ。第四子は可全。第五子は碧梧桐。黄塔三子あり皆幼。（七日）

雜誌を見る時我讀む部分と讀まざる部分とあり。我讀まざる部分は小說、新體詩、歌、俳句、文學の批評、政治上の議論など。我讀む部分は雜錄、歴史、地理、人物月旦、農業工業商業等の一部なり。新體詩は四句程讀み、詩は圏點の多きを一首讀み、隨筆は二三節讀みて出來加減をためす事あり、俳句は一句か二句試みに讀む事もあれど歌は讀みて見んと思ひたる事もあらず。（八日）

近日我貧廚をにぎはしたる諸國の名物は何々ぞ。大阪の天王寺蕪、函館の赤蕪、秋田のはたはた魚、土佐のザボン及び柑類、越後の鮭の粕漬、足柄の唐黍餅、五十鈴川の沙魚、山形ののし梅、青森の林檎羊羹、越中の干柿、伊豫の柚柑、備前の沙魚、伊豫の緋の蕪及び緋皮ザボン、大阪のおこし、京都の八橋煎餅、上州の干饂飩、野州の葱、三河の魚煎餅、石見の鮎の卵、大阪の奈良漬、駿州の蜜柑、仙臺の鯛の粕漬、伊豫の鯛の粕漬、神戸の牛のミソ漬、下總の雉、甲州の月の雫、伊勢の蛤、大阪の白味噌、大德寺の法論味噌、薩摩の薩摩芋、北海道の林檎、熊本の飴、横須賀の水飴、北海道の鰊、其外アメリカの蜜柑とかいふはいと珍しき物なりき。（九日）

十返舍一九の金草鞋といふ繪草子二十四冊程あり。こは三都をはじめ六十餘州の名所靈蹟巡覽記ともいふべき仕組なれど作者の知らぬ處を善き程に書きなしたる者なれば實際を寫し出さぬは勿論、驚くべき誤も多かるが如し。試みに四國八十八ケ所廻りの部を見るに岩屋山海岸寺といふ札所の圖あり、其圖斷崖の上に伽藍聳え其傍は海にして船舶を多く畫けり。これは海岸寺といふ名より想像して畫きたりと思はるれど、其實此寺は海濱より十里餘も隔りたる山の奥の奥にあるなり。寺の稱を斯くいふ故は此處を詠みし歌に、松の風を波の音と聞きまがへて海邊にある思ひす、といふやうなる意の歌あるに因るとか聞きたれど歌は忘れたり。此寺の建築は小き者なれど此處の地形は深山の中にありて或は千仭の危巖突兀として奈落を踏み九天を支ふるが如きもあり、或は絶壁、屏風なす立ちつゞきて一水潺々と流るゝ處もあり、とにかく此邊無雙の奇勝として好事家の杖を曳く者少からず。（十日）

朝起きて見れば一面の銀世界、雪はふりやみたれど空は猶曇れり。余もおくれじと高等中學の運動場に至れば早く已に集まりし人々、各級各組そこゝに打ち群れて思ひ〳〵の旗、フラフを翻し、祝憲法發布、帝國萬歲など書きたる中に、紅白の吹き流しを北風になびかせたるは殊にきはだちていさましくぞ見えたる。二重橋の外に鳳輦を拜みて萬歲を三呼したる後余は復學校の行列に加はらず、芝の某の館の園遊會に參らんとて行く途にて得たるは「日本」第

一號なり。其附錄にしたる憲法の表紙に三種の神器を畫きたるは、今より見ればこそ幼稚ともいへ、其時はいと面白しと思へり。それより余は館に行きて假居太神樂などの催しに興の盡くる時も無く夜深けて泥の氷りたる上を踏みつつ歸りしは十二年前の二月十一日の事なりき。十二年の歳月は甚だ短きにもあらず「日本」はいよいよ健全にして我は空しく足なへとぞなりける。其時生れ出でたる憲法は果して能く歩行し得るや否や。　（十一日）

「日本」へ俳句寄稿に相成候諸君へ申上候。筆硯益ゝ御清適の結果として小生の枕邊に玉稿の山を築き此冬も大約一萬句に達し候事誠に御出精の次第と且つ喜び且つ賀し奉り候。然る處玉稿拜讀致候に御句の多き割合に佳句の少きは小生の遺憾とする所にして一日本一の俳句欄も投句のみを以て塡め兼候場合も不少候。選拔の比例を申候はんに十分の一以上の比例を取り候は格堂寒樓等諸氏の作に候。其他は百分の一に當らざる者すら有之候。多作第一とも稱すべき八重櫻氏は毎季數千句を寄せられ一題の句數大方二十句より四五十句に及び候。されど其句を見るに徒に多きを貪る者の如く平凡陳腐の句と剽竊の句も構はず矢鱈に排列せられたるは稍ゝ厭はしく感じ申候。又一題百句など數多寄せらるゝ人も有之候。一題百句は第一期の修行として極めて善き事なれど其中より佳句を拔き出す事は甚だ困難なるべく、況して其題が火燵、頭巾、火鉢、蒲團の類なるに於ては讀まずして其の句の陳腐なること知れ申候。故に箇樣なる場合に於ては初めの十句程を讀み其中に佳句無くば全體に佳句無き者として沒書致すべく候。小生も追々衰弱に赴き候に付二十句の佳什を得るために千句以上を檢閱せざるべからずとありては到底病腦の堪ふる所に非ず候。何卒御自身御選擇の上御寄稿被下候樣希望候。以上。　（十二日）

毎朝繃帶の取換をするに多少の痛みを感ずるのが厭でならんから必ず新聞か雜誌か何かを讀んで痛さを紛らかして居る。痛みが烈しい時は新聞を睨んで居るけれど何を讀んで居るのか少しも分らないといふやうな事もあるが又新聞の方が面白い時はいつの間にか時間が經過して居る事もある。それで思ひ出したが昔關羽の繪を見たのに、關羽が片手に外科の手術を受けながら本を讀んで居たので、手術も痛いであらうに平氣で本を讀んで居る處を見ると關羽に馬鹿に強い人だと子供心にひどく感心して居たのであつた。ナアニ今考へて見ると關羽も矢張讀書でもつて痛さをごまかして居たのに違ひない。　（十三日）

徳川時代のありとある歌人を一堂に集め試みに此歌人に向ひて、昔より傳へられたる數十百の歌集の中にて最も善き歌を多く集めたるは何の集ぞ、と問はん時、そは萬葉集なりと答へん者加茂眞淵を始め三四人もあるべきか。其三四人の中には餘り世人に知られぬ平賀元義といふ人も必ず加はり居るなり。次に此等歌人に向ひて、然らば我々の歌を作る手本として學ぶべきは何の集ぞ、と問はん時、そは萬葉集なり、と躊躇なく答へん者は平賀元義一人なるべし。萬葉以後一千年の久しき間に萬葉の眞價を認めて萬葉を模倣し萬葉調の歌を世に殘したる者實に備前の歌人平賀元義一人のみ。眞淵の如きは只ゝ萬葉の皮相を見たるに過ぎざるなり。世に義之

を尊敬せざる書家なく〳〵、杜甫を尊敬せざる詩家なく〳〵、芭蕉を尊敬せざる俳家なし。しかも羲之に似たる書、杜甫に似たる詩、芭蕉に似たる俳句に至りては幾百千年の間絶無にして稀有なり。歌人の萬葉に於けるは之に似て之よりも更に甚だしき者なり。彼等は萬葉を尊敬し人丸を歌聖とする事に於て全く一致しながらも毫も萬葉調の歌を作らんとはせざりしなり。此間に於て只〻一人の平賀元義なる者出でて萬葉調の歌を作りしは寧ろ不思議には非るか。彼に萬葉調の歌を作れと敎へし先輩あるに非ず、彼の萬葉調の歌を歡迎したる後進あるに非ず、しかも彼は卓然として世俗の外に立ち獨り喜んで萬葉調の歌を作り少しも他を顧ざりしは蓋し心に大に信ずる所なくんばあらざるなり。（十四日）

天下の歌人擧つて古今調を學ぶ、元義笑つて顧ざるなり。天下の歌人擧つて新古今を崇拜す、元義笑つて顧ざるなり。而して元義獨り萬葉を宗とす、天下の歌人笑つて顧ざるなり。斯の如くして元義の名は其萬葉調の歌と共と當時衆愚の嘲笑の裏に葬られ今は全く世人に忘られ了らんとす。

忘られ了らんとする時平賀元義なる名は昨年の夏羽生某によりて岡山の新聞紙上に現されぬ。しかれども此時世に紹介せられしは「戀の平賀元義」なる題號の下に奇矯なる歌人、潔癖ある國學者、戀の奴隸としての平賀元義にして、萬葉以來唯一の歌人としての平賀元義には非りき。幸にして備前兒島に赤木格堂あり。元義曾て其地某家に寄寓せし緣故を以て元義の歌の散逸せる者を集めて一卷となし其眞筆十數枚と彼羽生某の文をも併せて余に示す。是に於て余は始めて平賀元義の名を知ると共に其歌の萬葉調なるを見て一たびは驚き一たびは怪しみぬ。蓋し余は幾多の歌集を見、幾多の歌人に就きて研究したる結果、眞個の萬葉崇拜者を只〻一人だに見出だす能はざるに失望し、歌人のふがひなく無見識なるは殆ど罵詈にも値せずと見くびり居る時に當りて始めて平賀元義の歌を得たるを以て余は寧ろ不思議の感を起したるなり。まぬけのそろひともいふべき歌人等の中に萬葉の趣味を解する者は半人も無き筈なるにそも元義は何に感じてか斯く萬葉には接近したる。こゝ殆ど解すべからず。（十五日）

元義の歌は醇乎たる萬葉調なり。故に古今集以後の歌の如き理窟と修飾との厭ふべき者を見ず。又實事實景に非れば歌に詠みし事なし。故に其歌眞摯にして古雅毫も後世纎巧嫵媚の弊に染まず。今數首を抄して一斑を示さん。

天保八年三月十八日自彥崎至尾村途中

うしかひの子らにくはせと天地の神の盛りおける麥飯の山

五月三日望逢崎

柞葉の母を念へば兒島の海逢崎の磯浪立ちさわぐ

五月九日過藤戸浦

あらたへの藤戸の浦に若和布賣るおとひをとめは見れど飽かぬかも

逢崎賞月

まそかゞみ清き月夜に兒島の海逢崎山に梅の散る見ゆ

望父峰

父の峰雪ふりつみて濱風の寒けく吹けば母をしぞ思ふ

小田渡口

古のますらたけをの渡りけん小田の渡りを吾も渡りつ

神崎博之宅小飲　二首

こゝにして紅葉を見つゝ酒のめば昔の秋し思ほゆるかも

盃に散り來もみぢ葉みやびをの飲む盃に散り來もみぢ葉　（十六日）

元義の歌

兒島備後三郎大人の詩の心を

我大君ものなおもほし大君の御楯とならん我なけなくに

失題

大君の御門國守まなり坂月面白しあれ獨り行く

（御門國守まなり坂は皆地名）

高島の神島山を見に來れば磯まの浦に鶴さはに鳴く

妻ごみに籠りし神の神代より清の熊野に立てる雲かも

うへ山は山風寒しちゝの實の父の命の足冷ゆらしも

三宮郷八幡大神の大御行幸を拜み奉りて

掛まくも文に恐き、いはまくも穴に尊き、廣幡の八幡の御神、此浦の行幸の宮に、八百日日は有といへども、八月の今日を足日と、行幸して遊び坐せば、神主は御前に立ちて、幣帛を捧け仕ふれ、眞子なす御神の子等は、木綿あさね髪結ひ垂らし、胸乳をあらはし出だし、裳緒をばほどに押し垂れ、歌ひ舞ひ仕へまつろふ、今日の尊さ

十一月三日芳野村看梅作歌

板倉と撫川の鄕の、中を行く芳野の川の、川岸に幾許所開は、誰栽し梅にかあるらん、十一月の月の始を、早も咲有流　（十七日）

元義の歌

送大西景枝

眞金吹く吉備の海に、朝なきに來依る深海松、夕なきに來依る（）みる、深みるのよせて來し君、（みるのよせて來し君、いかなれや國へかへらす、ちゝのみの父を思へか、いとこやの妹を思へか、劍太刀腰に取佩き、古の本を手にきり、國へかへらす

十二月五日御野郡の路上にて伊豫の山を見てよめる歌并短歌

百足らず伊豫路を見れば、山の大島の崎々、眞白にそみ雪ふりたれ、竝立の山のことごと、見渡の島のことゞゝ、冬といへど雪たに見えぬ、山陽の吉備の御國は、住よくありけり

反歌

吹風ものとに吹なり冬といへと雪たにふらぬ吉備の國内は　（十八日）

元義の歌には又は吾妹子の語を用ゐる極めて多し。故に吾妹子先生の諢名を負へりとぞ。蓋し元義は熱情の人なりしを以て婦女に對する愛の自ら詞藻の上にあらはれしも多かるべく、彼が事實以外の事を歌に詠まざりきといふに思ひ合せても吾妹子の歌は必ず空想のみにも非るべし。古今集以後空想の文字に過ぎざりし戀の歌は元義に至りて萬葉の昔に復り再び基礎を感情の上に置くに至れり。吾妹子の歌左に

失題

妹と二人曉露に立濡れて向つ峯上の月を看るかも

妹が家の向の山はま木の葉の若葉すゞしくおひいでにけり

鴨山の瀧津白浪さにつらふをとめと二人見れど飽かぬかも

久方の天つ金山加佐米山雪ふりつめり妹は見つるや　（十九日）

元義吾妹子の歌

遊于下原

石上ふりにし妹が園の梅見れどもあかず妹が園の梅

正月晦日

皆人の得かてにすちふ君を得て吾率寝る夜は人な来りそ

自玉島至下原途中

矢かたをうち出て見れば梅の花咲有山邊に妹が家見ゆ

河邊渡口

若草の妻の子故に川邊川しば〳〵渡る嬬の子故に

自下原ノ篠沖村路上

吾妹子を山北に置きて吾くれば濱風寒し山南の海

夜更けて女のもとに行きて

有明の月夜をあかみ此園の紅葉見に來つ其戸令開

從兒島還一宮途中

妹に戀ひ汗入の山をこえ來れば春の月夜に雁鳴きわたる

失題

妹が家の板戸押ひらき吾入れば太刀の手上に花散りかゝる

夕闇の道は暗けど吾妹子に戀ひてすべなみ出てくるかも

遠くともいそげ大まろ吾妹子に早見もせまくほしき此文

吾妹兒破都婆那乎許多食雞良詩昔見四從肥坐二雞林

讃岐の國に渡りける時吉備の兒島の逢崎にて

逢崎は名にこそありけれはしけやし吾妹が家は雲井かくりぬ

美作にいける時故郷の酒妓のもとより文おこせければ

春の田をかへすく〳〵も妹か文見つゝし居れば夜そあけにける

妹に關する歌は實に元義の歌の過半を占め居るなり。　（二十日）

元義の熱情は彼の不平と共に澆ぎ出されて時に狂態を演ぜし事無きに非るも、元來鞏固なる信仰と超絶せる識見の上に立ちて自己の主義を守るを本分としたる者にして、決して、戀の奴隷となりて終るが如き者に非ず。されば其歌に吾妹子の語多きに對してますらをの語多きが如き亦以て彼が堂々たる大丈夫を以て自ら任じたるを知るに足る。ますらをの歌

西蕃洞張良賛

言あげて撫稱つきじ月の沒る西の戎の大丈夫こゝろ

望加佐米山

高田の加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠吹きはなつ

自延味郷至松島途中

大井川朝風寒み大丈夫と念ひてありし吾ぞはなひる

遊于梅園

丈夫はいたも痩せりき梅の花心つくして相見つるから

失題

天地の神に祈りて大丈夫を君にかならず令生ざらめや

鳥が鳴くあづまの旗に丈夫が出立將行春ぞ近づく

石竹もにくゝはあらねど丈夫の見るべき花は夏菊の花

[illegible]大技を訪ふ

弓柄とるますらをのこし思ふこととげずほとほとかへるべきかは

元義は妹といはでもあるべき歌に妹の語を濫用せしと同じく丈夫とはいはでもあるべき歌に丈夫の語を濫用せり。此の如き者即ち兩面に於ける元義の性情をあらはしたる者に外ならず。（二十一日）

元義は大丈夫を以て、日本男兒を以て、國學者を以て自ら任じたる可く、詠歌の如きは固より其の餘技に屬せしものならん、古學に對する彼の學識は必ず大いに聞く可きものありしならんも、今日に於て遺稿などの其を徴するに足るものなきは遺憾なり。今其歌に就いて多少其主義を表したりと思ふものを擧げんに

失題

おほらかに思ふな子ども皇祖の御書に載れる神の宮處

詠高階醫師

菅の根の長き春日を徒に暮らさん人は猿にかもおとる

題西蕃三人畫

ことさへぐ國の長人さかつきに其が影うつせ妹にのません

和安田定三作

今日よりは朝廷たふとみさひつるや唐國人にへつらふなゆめ

備中國[illegible]城に學舍をたてゝ漢文よませらるゝときゝて

晴四鬼の司人等ねかはくは皇御國の大道を行け

失題

大君の御楯加賀荒日之本荷作業須流奈[illegible]廻漢人（二十二日）

以上擧ぐる所を以て元義の歌の如何なるかは略ぼ之を知る事を得べし。元義は終始萬葉[illegible]を學ばんとしたるがために其格調の高古にして些の俗氣なきと共に其意向は平淡にして變化に乏しきの感あり。されど時としては情の發する所格調の如何を顧みるに遑あらずして稍〻異様の歌となる事なきに非ず。例へば

高橋宅宴飲

天照皇御神も酒に醉ひて吐き散らすをば許したまひき

述懷

大な牟遲神の命は袋負ひをけりの命は牛かひましき

失題

足引の山中治左が佩ける太刀神代もきかずあはれ長太刀

五番町石橋の上で我〇〇をたくさにとりし我妹子あはれ

彌兵衞が十ツかの劍遂に拔きて富子を斬りて二きたとなす

彌兵衞がこやせる屍うごたかれ見る我さへにたぐりすらしも

吾猶常るときをさばかむろきのすくなひこなにつらくはれんか

弓削破只名一社在鶏卯弓削人八田乎婆雖作弓八不能

此等の歌多くは事に逢ふて率爾に作りし者な

るべく文字の排列などには注意せざりしがために歌としては善きも惡きもあれどとにかく天眞爛漫なる處に元義の人物性情は躍如としてあらはれ居るを見る。

（二十三日）

羽生某の記する所に據るに元義は岡山藩中老池田勘解由の臣平尾新兵衛長治の子、壯年にして沖津氏の厄介人（家の子）となりて沖津新吉直義（退去の際元義と改む）と名のり又源猫彦と號したり。弘化四年四月三十一日（卅日の誤か）藩籍を脱して（此時年卅六七）四方に流寓し後遂に上道郡大多羅村の路傍に倒死せり。こは明治五六年の事にして六十五六歳なりきといふ。

格堂の寫し置ける元義の歌を見るに皆天保八年後の製作に係るが如く天保八年の歌は既に老成して毫も生硬澁滯の處を見ず。されば元義が一家の見識を立てゝ歌の上にも悟る所ありしは天保八年頃なりしなるべく弘化四年を卅六七歳とすれば天保八年は其二十六七歳に當るべし。されど弘化四年を卅六七歳として推算すれば明治五六年は六十二三歳に當る譯なればこゝに記する年齢には違算ありて精確の者に非るが如し。

（二十四日）

元義の岡山を去りたるは人を斬りしためなりともいひ不平のためなりともいふ。

元義は片足不具なりしため夏といへども其片足に足袋を穿ちたり。よつて沖津の片足袋といふ諢名を負ひたりといふ。

元義には妻無く時に婦女子に對して狂態を演ずる事あり。晩年磐梨郡某社の巫女のもとに入夫の如く入りこみて男子二人を擧げしが後長子は竊盜罪にて捕へられ次子も亦不肖の者にて元義の稿本抔は散佚して尋ぬ可らずといふ。

元義には潔癖あり。毎朝歯を磨くにも多量の鹽を用ゐ廁用の紙さへも少からず費すが如き有樣なりしかば誰も元義の寄食し居るを好まざりきといふ。

元義は髮の結び方に好みありて數里の路を厭はずある髮結師のもとに通ひたりといふ。

元義ある時刀の鞘があやまつて僧の衣に觸れたりとて漆の剝ぐる迄に鞘を磨きたりといふは必ずしも潔癖のみにはあらず彼の主義としてひたぶるに佛教を嫌ひたるがためなるべし。

元義は藤井高尙の門人業合大枝を訪ひて、志を話さんとせしに大枝は拒みて逢はざりきといふ。

元義には師匠なく弟子なしといふ。

元義に萬葉の講義を請ひしに元義は人丸の太子追悼の長歌を幾度も朗詠して、歌は幾度も讀めば自ら分るものなり、といひきといふ。

脱藩の者は藩中に住むを許さゞりしが元義は默許の姿にて備前の田舍に住みきといふ。

元義の足跡は山陰山陽四國の外に出でず。京にも上りし事なしといふ。

以上事實の斷片を集め見ば元義の性質と境遇とは略〻之を知るを得べし。國學者としての元義は知らず、少くとも歌につきて當程の卓見を有せる元義が一人の同感者を持たざりしを思ひ、其不平の如何に大なりしやを思ひ、其境遇の當程に不幸なりしを思ひ、其不平を漏らす所なきを思ひ、而して後に婦女に對する其熱情を思はゞ時に彼の狂態を演ずる者寧ろ憐むべく悲しむべきにあらずや。

（二十五日）

格堂の集錄せる元義の歌を見るに短歌二百餘首長歌十餘首あり。此他は存否知るべからず。

元義の筆跡を見るに和樣にあらず寧ろ唐樣なり。多く習ひて得たる樣にはあらで只ゞ無造作に書きなせるものから大字も小字も一樣にして澁滯の處を見ず。上手にはあらねど俗氣無し。

萬葉以後に於て歌人四人を得たり。源實朝、德川宗武、井手曙覽、平賀元義是れなり。實朝と宗武とは貴人に生れて共に志を伸す能はざりし人、曙覽と元義とは固より賤しききはにていづれも世に容れられざりし人なり。宗武の將軍たる能はざりしに引きかへ實朝が名のみの將軍たりしは猶慰むるに足るとせんか、しかも遂に天年を全うするに至らざりしは千古の慘事とすべし。元義の終始不遇なるに對して曙覽が春嶽の知遇を得たるは晩年稍ゝ意を得たるに近し、しかも二人共に王家の臣たる能はざりしは死して猶遺憾あるべきにや。

曙覽は汚穢を嫌はざりし人、されど身のまはりは小綺麗にありしかと思はる。元義は潔癖の人、されど何となくきたなき人には非りしか。

四家の歌を見るに、實朝と宗武とは氣高くして時に獨創の處ある相似たり。但宗武の方、稍ゝ氣稍ゝ弱きが如し。曙覽は見識の進歩的なる所、元義の保守的なるに勝れりとせんか、但伎倆の點に於て調子を解する點に於て曙覽は遂に元義に如かず。故に曙覽の歌の調子とゝのはぬが多きに反して元義の歌は殆ど皆調子とゝのひたり。されど元義の歌は其取る所の趣向材料の範圍餘りに狹きに過ぎて從つて變化に乏しきは彼の大歌人たる能はざる所以なり。彼にして若し自ら大歌人たらんとする野心あらんか其歌の發達は固より此に止まらざりしや必せり。其歌の時に常則を脫する者あるは彼に發達し得べき材能の潛伏しありし事を證して餘りあり。惜しいかな。 （二十六日）

近來雜誌の表紙を模樣色摺となし且つ用紙を舶來紙となす事流行す。體裁上の一進步となす。雜誌日不辭草の表紙模樣不折の意匠に成る。面白し。但何にでも梅の花や櫻の花をくつゝけるは不折の癖と知るべし。

雜誌明星は體裁の美麗なる事普通雜誌中第一のものなりしが遂に廢刊せし由氣の毒の至なり。今廢刊する程ならば最後の基本金募集の廣告なからましかは、死際一層花を添へたらんかと思ふ。是非なし。

雜誌精神界は佛教の雜誌なり。始に髑髏を畫きて其上に精神界の三字を書す。其樣何とやら物質的に解剖的に心理を研究する意かと思はれて佛教らしき感起らず。髑髏の畫の稍ゝ精細なるにも因るならん。

雜誌みのむしは伊賀より出づる俳諧の雜誌なり。表紙に芭蕉の葉を畫けるに其畫拙くしてどうやら蕪の葉に似たるやう思はる。蕪村流行の此頃なれば芭蕉翁も蕪村化したるにやといと可笑し。

雜誌太陽の陽の字のつくり時に易に从ふものあり。そんな字は字引に無し。 （二十七日）

「日本」へ寄せらるゝ俳句を見るに地方々々にて俳句の調にも其他の事にも多少の特色あり、從つて同地方の人は萬事をかしき程に似よりたる者あり。同一の俳句又は最も善く似たる俳句が同地方の人二人の稿に殆ど同時に見出ださるる事などしば〳〵あれど、此場合には何れを原作とし何れを剽竊とせんか、ほと〳〵定めかねて打ち捨つるを常とす。總じて其地方の俳句會盛なる時は其會員の句皆面白く俳句會衰ふる時はあるだけの會員悉く下手になる事不思議なる程なり。

句風以外の特色をいはんか、鳥取の俳人は

皆四方太流の書體巧なるに反して、取手（下總）邊の俳人はきたなき讀みにくき字を書けり。出雲の人は無暗に多く作る癖ありて、京都の人の投書は四五十句より多からず。大阪の人の用紙には大阪紙と稱ふるきめ粗き紙多く、能代（羽後）の人は必ず馬糞紙に光澤多き紙を用ゐる。越中の人に限りて皆半紙を二つ切にしたるを二つに折りて小く句を書くなり。はがきに二句か三句認めあるは何れの地方に限らず初心なる人の必ずする事なり。（二十八日）

黄塔まだ世に在りし頃余が書ける漢字の畫の誤を正しくれし事あり。それより後よりより余も注意して字引をしらべ見るに余等の書ける楷書は大半誤れる事を知りたれば左に一つ二つの誤り易き字を記して世の誤を同じくする人に示す。

○○萑薩勤などの終の横畫は三本なり。二本に書くは非なり。活字にも此頃二本の者を拵へたり。

○達の字の下の處の横畫も三本なり。二本に非ず。

○切の字の扁は七なり。土扁に書く人多し。

○助の字の扁は且なり。目扁に書く人多し。

○○○麻摩魔などの中の方を林の字に書くは誤なり。此頃活字にも此誤字を拵へたれば注意あるべし。

○○兎免共に四角の中の劃を外まで引き出すなり。活字を見るに兎の字は正しけれど免の字はことさらに二畫に離したるが多し。併し此等は誤といふにも非るか。

「つか」といふ字は冢塚にして冢に點を打つなり。然るに多少漢字を知る人にして冡塚の如く冡の上に一を引く人多し。されど冡塚皆東韻にして「つか」の字にはあらず。

○○令愈などの冠は入なり。人冠に非ず。

○○分貧などの冠は八なり。人にも入にも非ず。

○神祇の祇の字は音「ぎ」にして示扁に氏の字を書く。普通に祗（氏の下に一を引く者）の字を書くは誤なり。祗は音（し）にして祗候などの祗なり。

○廢は廢く「すたる」の意に用ゐる。疒だれの癈は不具の人をいふ。何處にでも疒だれの方を用ゐる人多し。（三月一日）

○誤　前々號蟹汁一滴にある人に聞けるまゝ雜誌明星廢刊の由記したるに、廢刊にあらず、只印刷中なり、と與謝野氏より通知ありたり。余は此雜誌の健在を喜ぶと共にたやすく人言を信じたる粗相を謝す。

二月二十八日　晴。朝六時半病牀眠起。家人暖爐を焚く。新聞を見る。昨日帝國議會停會を命ぜられし時の記事あり。繃帶を取りかふ。粥二碗を啜る。梅の俳句を閲す。

今日は會席料理のもてなしを受くる約あり。水仙を漬物の小桶に活けかへよと命ずれば桶なしといふ。さらば水仙も竹の掛物も取りのけて雛を祭れと命ず。古紙雛と同じ畫の掛物、傍に桃と連翹を亂れさす。

左千夫來り秀眞來り麓來る。左千夫は大きなる古釜を携へ來りて茶をもてなさんといふ。釜の蓋は近頃秀眞の鑄たる者にしてつまみの車形は左千夫の意匠なり。麓は利休手簡の軸を持ち來りて釜の上に掛く。其手紙の文に牧溪の畫をほめて

　我見ても久しくなりぬすみの繪のきち
　の掛物幾代出ぬらん

といふ狂歌を書けり。書法たしかなり。

左千夫茶を立つ。余も菓子一つ薄茶一碗。

五時頃料理出づ。麓主人役を勤む。獻立左の如し。

味噌汁は三州味噌の煮漉、實は嫁菜、二碗

代ふ。
鱠は鰹の甘酢、此酢の加減傳授なりと。余は皆喰ひて添山葵ばかり殘し置きしが茶の料理は喰ひ盡して一物を餘さぬものとの掟に心づきて俄に當惑し山葵を味噌汁の中にかきまぜて飲む。大笑ひとなる。
平は小鯛の骨拔四尾。獨活、花菜、山椒の芽、小鳥の叩き肉。
肴は鯛を焼いて煮たるやうたる者鰈と頭と尾とは取りのけあり。
口取は焼玉子、栄螺(?)、栗、杏及び青き柑類の煮たる者。
香の物は奈良漬の大根。
飯と味噌汁とはいくらにても喰ひ次第、酒はつけきりにて平と同時に出し且つ飯且つ酒とちびちびやる。飯は太鼓飯つぎに盛りて出し各ゝ椀にて食ふ。後の肴を待つ間は椀に一口の飯を殘し置くものなりと。余は遂に料理の半を殘して得喰はず。飯終りて湯桶に醮湯を入れて出す。余は始めての會席料理なれば七十五日の長生すべしとて心覺のため書きつけ置く。
點燈後茶菓雜談。左千夫、其釜に一首を題せよといふ。余問ふ、湯のたぎる音如何。左千夫いふ、釜大きけれど音かすかなり、波の遠音にも似たらんかと。乃ち

題釜

氷解けて水の流るゝ音すなり　子規

（二日）

料理人歸り去りし後に聞けば會席料理のたましひは味噌汁にある由、味噌汁の善惡にて其日の料理の優劣は定まるといへば我等の毎朝吸ふ味噌汁とは雲泥の差あることといふ迄もなし。味噌を選ぶは勿論、ダシに用ゐる鰹節は土佐節の上物三本位、それも善き部分だけを用ゐる、それ故味噌汁だけの價三圓以上にも上るといふ。（料理は總て五人前宛なれど汁は多く拵へて餘す僅なれば一鍋の汁の價と見るべし）其汁の中へ、知らざる事とはいへ、山葵をまぜて啜りたるは餘りに心なきわざなりと料理人も呆れつらん。此話を聞きて今更に臍を噬む。

茶の道には一定の方式あり。其方式をつくりたる精神を考ふれば皆相當の理ある事なれど只ゝ其方式に拘るために傳授とか許しとかいふ事迄出來て遂に茶の活趣味は人に知られぬ事となりたり。茶道は成るべく自己の意匠によりて新方式を作らざるべからず。其新方式といへども二度用ゐるに陳腐に陷つる事あるべし。故に茶人の茶を玩ぶは歌人の歌をつくり俳人の俳句をつくるが如く、常に新鮮なる意匠を案出し臨機應變の材を要す。四疊半の茶室は甚だ妙なり。されど百疊の廣間にて茶を玩ぶの工夫もなかるべからず。掛軸と插花と同時にせずといふも道理ある事なり。されど掛軸と插花と同時にするの工夫もなかるべからず。室の構造装飾より茶器の選擇に至る迄方式に拘らず時の宜しきに從ふを賞玩すべき事なり。

何事にも半可通といふ俗人あり。茶の道にても茶器の傳來を説きて價の高きを善しと思へる半可通少からず。茶の料理なども料理として非常に進歩せるものなれど進歩の極、鰹魚節の二本と三本とによりて味噌汁の優劣を爭ふに至りては所謂半可通のひとりよがりに墮ちて餘り好ましき事にあらず。凡て物は極端に走るは可なれど其結果の有效なる程度に止めざるべからず。

茶道に配合上の調和を論ずる所は俳句の趣味に似たり。茶道は物事にきまりありて主客各ゝ其きまりを亂さゞる所甚だ西洋の禮に似たりとある人いふ。

（三日）

誤り易き字左に

盡は書盡の字よりは横畫一本少きなり。聿の如く書くは誤れり。行書にて聿の如く書くことあれども其場合には四筒の點を打たぬなり。

逸と寛とには點あり。此點を知らぬ人多し。

學覺などいふ「かく」の字と與譽などいふ「よ」の字とは上半の中の處異なり。然るに兩者を混同して書ける者たとへば學の字の上半を與の字の如く書ける者書籍の表題等にも少からず。

内兩共に人を誤りて入に書くが多し。

喬の夭を天に誤り、望閏の壬を王に誤るが多し。

衆は人冠に人四箇に十なり。然るに十字の上にも中にも横の棒を引く事古きよりの習ひと見えたり。

吉の士を土に誤り書く者多し。

舍は人冠に舌なり。されど人冠に土に口を書きし字も古き法帖に見ゆ。

臼の下の處は一を引くなり。兒も同じ。されど此一の棒の中を切りて二畫に書くは書き易きためにや。

鼠(ねずみ)の上の處は臼なり。然るに此頃巤の字を書く人あり。後者は獵獺臘などの字の旁にて「ろふ」「れふ」の音なり。

易は日に勿なり。賜の字、惕の字など皆同じ。されど陽揚暘場煬湯など陽韻に屬する字の旁は易の字の眞中に横の棒を加へたるなり。

賴瀨獺懶などの旁は負なり頁に非ず。

「ちり」は塵なり。然るに艸冠をつけて薼の字を書く人あり。後者は艸名(よもぎの訓あり)ならん、「ちり」の字にはあらず。こは塵の草體が艸冠の如く見ゆるより誤りしか。

解は角に刀に牛なり。牛の字を井に誤るが多し。

漢字廢止論のある此頃斯る些少の誤謬を正すなど愚の至なりと笑ふ人もあるべし。されど一日なりとも漢字を用ゐる上は誤なからんを期するは當然の事なり。況んや國文に漢字を廢するも漢字は永久に滅びざるをや。但斯かる事は數十年慣れ來りし誤を一朝に改めんとすれば非常に困難を覺ゆれど初め教へらるゝ時に正しき字を教へこまるれば何の困難もなき事なり。小學校の先生たち成るべく正しき字を教へたまへ。

（四日）

誤り易き字左に

段鍛は「たん」にして假蝦瑕霞遐は「か」なり。段と叚と扁もつくりも異なるを混同して書く人多し。

蒹葭は「あし」「よし」の類なるべし。葭簀張の葭も同字なり。然るに近頃葮の字を用ゐる人あり。後者は字引に「むくげ」とあるはたしかならねど「よし」にあらざるは勿論なり。

「おき」は沖なり。然るに此頃は二水の冲の字を用ゐる人多し。兩字とも水深の意なきにあらねど我邦にて「おき」の意に用ゐるは字義より來るに非ずして寧ろ水の眞中といふ字の組立より來るに非るか。

汽車の汽を滊と書く人多し。字引に汽は水气也とあるを福澤翁の見つけ出して譯字に當てたるなりと。滊の字あれど意義異なり。

四の字の中は片假名のルの字の如く右へ曲ぐるなり。讀贖などのつくりの中の處も四を書くなり。されど賣の字の中の處は四の字に非ず。右へ曲ぐる事なく眞直に引くなり。いさゝかの事故どうでもよけれど只ゞ讀(とく)のつくりが賣(ばい)の字に非ることを知るべし。

奇の字の上の處は大の字なり。奇の字を字引で引かんとならば大の部を見ざるべからず。されど立の字の如く書くも古き代よりの事なる

べし。

逢逢峯は「ほう」にして降絳は「こう」なり。終りの處少し違へり。

姫(ひめ)の字のつくりは臣に非ず。

士と土、爪と瓜、岡と罔、齊と齋、戊と戌、此等の區別は大方知らぬ人もなけれど商(あきなひ)と啇(音テキ)、班(わかつ)と斑(まだら)の區別は猶知らぬ人少なからず。

以上擧げたる誤字の中にも古くより書きならはして一般に通ずる者は必ずしも改むるにも及ばざるべし。但甲の字と乙の字と取り違へたるは是非とも正さゞるべからず。甲の字と乙の字と取り違へたる場合は致し方なけれど或る字の畫を誤りたる場合は之を印刷に附する時は自ら正しき活字に直る故印刷物には誤字少き譯なり。蓋し活字の初は康熙字典によりて一字々々作りたりといへば活字は極めて正しき者にてありき。然るに近來出來たる活字は無學なる人の杜撰に作りしものありと見えて往々僞字を發見する事あり。せめては活字だけにても正しくして世の惑を増さゞるやうしたき者なり。　(五日)

自分は子供の時から湯に入る事が大嫌ひだ。熱き湯に入ると體がくたびれて其日は仕事が出來ぬ。一日汗を流して勞働した者が勞働がすんでから湯に入るのは如何にも愉快さうで草臥が直るであらうと思はれるが其他の者で毎日のやうに湯に行くのは男にせよ女にせよ必ずなまけ者にきまつて居る。殊に楊枝をくはへて朝湯に出かけるなどといふのは墮落の極である。東京の錢湯は餘り熱いから少しぬるくしたら善からうとも思ふたがいつそ錢湯などは罷めてしまふて皆々冷水摩擦をやつたら日本人も少しは活潑になるであらう。熱い湯に醉ふて熟柿のやうになつて、あゝ善い心持だ、などといふて居る内に日本銀行の金貨はどん／＼と皆外國へ出て往てしまふ。　(六日)

自分が病氣になつて後ある人が病牀のなぐさめにもと心がけて鐵網の大鳥籠を借りて來てくれたのでそれを窓先に据ゑて小鳥を十羽ばかり入れて置いた。其中にある水鉢の水をかへてやると總ての鳥が下りて來て爭ふて水をあびる樣が面白いので病牀からながめて樂しんで居る。水鉢を置いてまだ手を引かぬ内にヒワが一番先に下りて浴びる。浴び樣も一番上手だ。ヒワが浴びるのは勢ひが善いので日たゝく間に鉢の水を半分位羽ではたき散らしてしまふ。そこで外の鳥は殘りの乏しい水で順々に浴びなくてはならぬやうになる。それを豫防する積りでもあるまいが後にはヒワが先づ浴びようとするとキンバラが二羽で下りて來てヒワを追ひ出し二羽並んで浴びてしまふ。其後でジャガタラ雀が浴びる。キンカ鳥も浴びる。カナリヤも浴びる。暫くは水鉢のほとりには先番後番と鳥が詰めかけて居る。浴びてすんだ奴は皆高いとまり木にとまつて頻りに羽ばたきして居る。其樣が實に愉快さうに見える。考へて見ると自分が湯に入る事が出來ぬやうになつてから最う五年になる。　(七日)

余は漢字を知る者に非ず。知らざるが故に今更に誤字に氣のつきし程の事なれば余の言ふ所必ず誤あらんとあやぶみしが果してある人より教をたまはりたり。因つて正誤かた／＼之を載せ併せて其好意を謝す。

(略)賴瀨獺懶等の旁は負なり頁にあらずとせられ候へども負にあらず負の字

にて貝の上は刀に候、勝負の負とは少しく異なり候、右等の字は刺より音生じ候、久聖の下は壬にあらず王(音テイ)に候、呈望等皆同樣に御座候、右些細の事に候へ共氣付たるまゝ一老人投ず)

又ある人より

(略―菩薩薩摩の薩は字源薛なり博愛堂集古印譜に薩摩國印は薛……とあり譯經師が假借にて薛に二點添付したるを元明より產の字に作り字典は薩としあるなり唐には決して產に書せず云々

右の誤は字典にもあり鹿島人も佛教家も一般に知らであれば正したき由いひこされたり。

(八　日)

雜誌日本人に「春」を論じて「我國は舊と太陰曆を用ゐ正月を以て春の初めと爲しゝが」云々とあり。語簡に過ぎて解しかぬる點もあれど昔は歲の初即正月元旦を以て春の初となしたりとの意ならん。陰曆時代には便宜上一二三の三箇月を以て春とし四五六の三箇月を以て夏となし乃至秋冬も同例に三箇月宛を取りしこといふまでもなし。されど陰曆にては一年十二箇月に限らず、十三箇月なる事も多ければ其場合には四季の内何れか四箇月を取らざるべからず。これがために氣候と月日と一致せず、去年の正月初と今年の正月初といたく氣候の相異を來すに至るを以て陰曆時代にても嚴密にいへば歲の初を春の初とはなさず、立春(冬至後約四十五日)を以て春の初と定めたるなり。其證は古くより年內立春などいふ歌の題あり、古今集開卷第一に

年の內に春は來にけり一年を去年とや
いはむ今年とやいはむ

とあるも此事なり。此歌の意は歲の初と春の初とは異なり、さればいづれを計算の初となすべきかと疑へる者なれば之を裏面より見れば此頃にても普通には便宜上歲の初を春の初となしたる事なるべし。されど朝廷の儀式にも特に立春の日を選びてする事あり。公事根源に

供若水　立春日

若水といふ事は去年御生氣の方の井をてんして蓋をして人に汲せず春立つ日主水司內裏に奉れば朝餉にて之をきこしめすなり荒玉の春立つ日之を奉れば若水とは申すにや云々

とあるを見ても知るべし。平民社會にては立春の儀式といふ事は知らねど節分(立春前一夜)の儀式は種々ありて今日に至る迄其一分を存せり。中にも此夜各〻の年齡の數に一つ增したるだけの煎豆を紙に包みて厄拂に與へ、來年の厄を拂はしむるが如きは明かに立春を以て計算の初となし立春に入る事によりて新たに齡一つを加ふる者と定めたるを見るべし。(陰曆の正月元旦に立春に最も近き朔日を取りたる者なれば元日と立春と十五日以上の差違ある事なし。されど元日前十五日立春の年と元日後十五日立春の年とを比較すれば氣候に三十日の遲速あり)

右の如く昔は歲初と春初と區別あるが如くなきが如く曖昧に過ぎ來りしが明治に至り陽曆の頒布と共に陰曆は公式上廢せられたれば兩者は斷然と區別せられて一月一日は每年冬季中に來る者と定まれり。此際に當りて春夏秋冬の限界に就いては何等の規定する所なければ余は依然として立春立夏立秋立冬を以て四季の限界とする說に從ひ居るなり。元來此立春立夏等の節は陰曆時代にも用ゐられたれど其實月の盈虧には何等の關係も無く却て太陽の位置より算出せし者なれば之を太陽曆と並び用ゐて毫も矛盾せざるのみならず每年略ゝ同一の日に當るを以て記憶にも甚だ便利あり。

雜誌日本人の説は西洋流に三四五の三箇月と
せんとの事なれども、我邦には二千年來の習慣
ありて其習慣上定まりたる四季の限界を今日
に至り忽ち變更せられては氣候の感覺を詩人文
人に取りて迷惑少からず。されど細かにいへば
今日迄の規定も習慣上に得たる四季の感と多
少一致せざるかの疑無きに非ず。もつとも氣
候は地方によりて非常の差違あり、殊に我邦の
如く南北に長き國は千島のはてと臺灣のはてと
同樣に論ずべきにあらねど、試に中央東京の
地に就いていはんに(京都も大差なかるべし)立
春(二月四日頃)後半月位は寒氣強くして冬の
感去らず。立秋(八月八日頃)後半月位は暑氣
強くして秋の感起らず。又菊と紅葉とは古來秋
に定めたれど實際は立冬(十一月八日頃)後半
月位の間に盛なり。故に東京の氣候を以ていは
んには立春も立夏も立秋も立冬も十五日宛繰り
下げて却て善きかと思はるゝなり。されば西洋
の規定と實際は大差なき譯となる。併しながら
こは私に定むべき事にあらねば無論舊例に依
るを可とすべきか。(西洋の規定は東京よりは
稍ゝ寒き地方より出でし規定に非るか)(九日)

自己の著作を賣りて原稿料を取るは少しも惡し
き事に非ず。されど其著作の目的が原稿料を取
るといふ事より外に何もなかりしとすれば、著
者の心の賤しき事いふ迄もなし。近頃出版せ
られたる秋竹の明治俳句は果して何等の目的
を以て作りたるか。秋竹は俳句を善くする者な
り。俳句に堪能なる秋竹が俳句の集を選びたる
は似つかはしき事にして、素人の杜撰なるもの
と同日に見るべからず。されど秋竹は始めより
俳書編纂の志ありしか、近來俳句に疎遠なる
秋竹が何故に俄に俳句編纂を思ひ立ちたるか。
此句集が如何なる手段によつて集められしかは
問ふ所に非ず。此書物を出版するにつき、秋竹
が何故に苦しき序文を書きしかは余の問ふ所に
非ず。若し余の邪推を明にいはば、秋竹は金
まうけの爲に此編纂を思ひつきたるならん。秋
竹若し一點の誠意を以て俳句の編纂に從事せん
か、其手段の如何に拘らず之を贊成せん。され
ど余は秋竹の腐敗せざるかを疑ふなり。されば
余は個人として秋竹を攻撃せんとには非ず。今
の新著作斯の如きもの十の九に居る故に特に秋
竹を假りていふのみ。　(十日)

漢字廢止、羅馬字採用又は新字製造などの遼
遠なる論は知らず。余は極めて手近なる必要に
應ぜんために至急新假字の製造を望む者なり。
其新假字に二種あり。一は拗音促音を一字にて
現はし得るやうなる者にして例せば茶の假字を
「ちや」「チャ」などの如く二字に書かずして一字
に書くやうにするなり。「しよ」(書)「きよ」(虛)
「くわ」(花)「しゆ」(朱)の如き類皆同じ。促音は
普通「つ」の字を以て現はせどもこは假字を用ゐ
ずして他の符號を用ゐるやうにしたしと思ふ。
併し「しゆ」「ちゆ」等の拗音の韻文上一音なると
違ひ促音は二音なれば其の符號をして矢張一字
分の面積を與ふるも可ならん。

他の一種は外國語にある音にして我邦に無き
者を書きあらはし得る新字なり。

此等の新字を作るは極めて容易の事にして殆
ど考案を費さずして出來得べしと信ず。試
にいはんか朱の假字は「し」と「ユ」又は「ゆ」の二
字を結びつけたる如き者を少し變化して用ゐ、
著の假字は「ち」と「ヨ」又は「よ」の二字を結びつ
けたるを少し變化して用ゐるが如く此例を以て
他の字をも作らば名は新字といへど其實舊字の
變化に過ぎずして新に新字を學ぶの必要もなく
極めて便利なるべしと信ず　又外國音の方は

外國の原字を其儘用ゐるか又は多少變化して之を用ゐ、五母音の變化を示すためには速記法の符號を用ゐるか又は拗音の場合に言ひし如く假字をくつゝけても可なるべし。とにかくに仕事は簡單にして容易なり。且つ新假字增補の主意は、强制的に行はぬ以上は、誰一人反對する者なかるべし。余は二三十人の學者たちが集りて試に新假字を作り之を世に公にせられん事を望むなり。　（十一日）

不平十ケ條

一、元老の死にさうで死なぬ不平
一、いくさの始まりさうで始まらぬ不平
一、大きな頭の出ぬ不平
一、郵便の消印が讀めぬ不平
一、白米小賣相場の容易に下落せぬ不平
一、板ガラスの日本で出來ぬ不平
一、日本畫家に油繪の味が分らぬ不平
一、西洋人に日本酒の味が分らぬ不平
一、野道の眞直について居らぬ不平
一、人間に羽の生えて居らぬ不平　（十二日）

多くの人の俳句を見るに自己の頭腦をしぼりてしぼり出したるは誠に少く、新聞雜誌に出たる他人の句を五文字ばかり置きかへて何知らぬ顔にて又新聞雜誌へ投書するなり。一例を擧げていはゞ

　○○○○○裏の小山に上りけり

といふ十二字ありとせんに初五に何にても季の題を置きて句とするなり。「永き日の」「のどかさの」「霞む日の」「爐塞いで」「櫻咲く」「名月や」「小春日の」等其外如何なる題にても大方つかぬといふは無し。實に重寶なる十二字なり。或は

　灯をともす石燈籠や○○○○○

といふ十二字を得たらば「梅の花」「絲柳」「絲櫻」「春の雨」「夕涼み」「庭の雪」「夕時雨」など其外樣樣なる題をくつゝけるなり。或は

　廣目屋の廣告通る○○○○○

といふ十二字ならば「春日かな」「日永かな」「柳かな」「櫻かな」「暖き」「小春かな」などを置くなり。これがためには豫てより新聞雜誌の俳句を切り拔き置き、いざ句作といふ時にそれをひろげてあちらこちらを取り合せ十句にても百句にても立どころに成るを直に之を投書として郵便に附す。選者若し其陳腐剽竊なることを知らずして一句にても二句にても之を載すれば投句者は鬼の首を獲たらん如くに喜びて友人に誇り示す。此の如き模倣剽竊の時期は誰にも一度はある事なれど幾年經ても此泥坊的境涯を脱し得ざる人あり。氣の毒の事なり。　（十三日）

　今日は病室の掃除だといふので晝飯後寢牀を座敷の方へ移された。此二三日は右向になつての仕事が過ぎた爲でもあるか漸く減じて居た局部の痛みが又少し增して來たので座敷へ移つてからは左向に寢て痛所をいたはつて居た。いつもガラス障子の室に居たから紙障子に松の影が寫つて居るのも趣が變つて初めは面白かつたが遂にはそれも眼に入らぬやうになつて只ゝ痛みばかりがチク〳〵と感ぜられる。いくら馴れて見ても痛むのは矢張痛いので閉口して居ると、六つになる鄰の女の子が畫いたといふ畫を内の者が持つて來て見せた。見ると一尺許の洋紙の小切に墨で畫いてある。眞中に支那風の城門(勿論輪郭ばかり)を力ある線にて眞直に畫いて城樓の棟には鳥が一羽とまつて居る。此城門の粉本は錦繪にあつたかも知らぬが、其城樓の窓の處を横に三分して「オ、シ、ロ」の三字が一區畫に一字づつ書いてあるのは新奇の

意匠に違ひない。實に奇想だ。それから城門の下には猫が寐て居る。其上に「ネコ」と書いてある。輪郭ばかりであるが僅かに猫と見える。猫の右側には女の立つて居る處が畫いてあるが、お河童で振袖で下駄はいてしかも片足を前へ踏み出して居る處迄分る。帯も後側だけは畫いてある。城門の左側には自分の名前が正しく書けて居る。見れば見る程實に面白い。城門に猫に少女といふ無意識の配合も面白いが棟の上に鳥が一羽居る處は實に妙で、最も高い處に鳥が蹲つて居て最も低い處に猫が寐て居る意匠抔は古今の名畫といふても善い。見て居る内に余は興に乘つて來たので直に朱筆を執つて先づ城樓の左右に日の丸の旗を一本宛畫いた。それから猫に赤い首玉を入れて鈴をつけて、女の襟と袖口と帯とに赤い線を少し引いて頭には總のついた簪を一本著けた。それから左の方の名前の下に裸人形の形を成るべく子供らしく畫いて、最後に小鳥の嘴をチョイと赤くした。さて此合作の畫を遠ざけて見ると墨と朱と善く調和して居る。うれしくてたまらぬ。そこで乾菓子や西洋菓子の美しいのを此畫に添へて、御褒美だといふて鄰へ持たせてやつた。（十四日）

散歩の樂、旅行の樂、能樂演劇を見る樂、寄席に行く樂、見せ物興行物を見る樂、展覽會を見る樂、花見月見雪見等に行く樂、細君を携へて湯治に行く樂、紅燈綠酒美人の膝を枕にする樂、目黒の茶屋に俳句會を催して栗飯の腹を鼓する樂、道灌山に武藏野の廣きを眺めて崖端の茶店に柿をかじる樂。歩行の自由、坐臥の自由、寐返りの自由、足を伸す自由、人を訪ふ自由、集會に臨む自由、廁に行く自由、書籍を捜索する自由、癇癪の起りし時腹いせに外へ出て行く自由、ヤレ火事ヤレ地震といふ時に早速飛び出す自由。――總ての樂、總ての自由は盡く余の身より奪ひ去られて僅かに殘る一つの樂と一つの自由、即ち飲食の樂と執筆の自由なり。しかも今や局部の疼痛劇しくして執筆の自由は殆ど奪はれ、腸胃漸く衰弱して飲食の樂亦其過半を奪はれぬ。アヽ何を樂に殘る月日を送るべきか。

耶蘇信者某一日余の枕邊に來り說いて曰く此世は短いです、次の世は永いです、あなたはキリストのおよみ返りを信ずる事によつて幸福でありますと。余は某の好意に對して深く感謝の意を表する者なれども、奈何せん余が現在の苦痛餘り劇しくして未だ永遠の幸福を顧るに暇あらず。願くは神先づ余に一日の間を與へて二十四時の間自由に身を動かしたらふく食を食らしめよ。而して後に徐ろに永遠の幸福を考へ見んか。（十五日）

○正誤　醫科外科の醫治の際は讀書にあらずして畫苑なりと。

名前ばかり聞きたる人の容貌をとあらんかくあらんと想像する事は誰もする事なるが扨其人に逢ふて見ればいづれも意外なる顏つきに驚かぬはあらず。此頃破笛の日記を見たるに左の一節あり。

東京鳴球氏より郵送せられし子規先生の寫眞及び蕪村忌の寫眞が屆きしは十日の晩なり。余は初めて子規先生の寫眞を見て實に驚きたり。多年病褥と戰つて此大業を成したるの勇氣は凛乎として眉宇の間に現はれ居れども其枯燥の態は余をして無遠慮に云はしむれば全く活きたる羅漢なり。日本紙上連日の俳句和歌時に文章如何にして此人より出づるかを疑ふ迄に余は深き感に撃たれたり。

蕪村忌寫眞中余の面識ある者は鳴球氏一人

のみ。前面の虚子氏はもつと勿體振つて居るかと思ひしに一向無造作なる風采なり、鳴雪翁は大老人にあらずして還暦には今一ト昔もありさうに思はる。獨り洋装したるは碧梧桐氏にして眼鏡の裏に黒眸を輝かせり。他の諸氏の青年等なるには一驚を喫したり。

去る頃ある雑誌に「竹の里人が禿頭を振り立て〻」など書ける投書あるを見たり。竹の里人を六十七十の老人と見たるにや。若し此等の人の想像通りに諸家の容貌を描き出さしめば更に面白からん。（十六日）

誤り易き字に就きて或人は盡の上部は聿なり閏の中は王なりなど説文を引きて論ぜられ、不折は古碑の文字古法帖の文字抔を目のあたり示して全、内、吉などの字の必ずしも入にあらず必ずしも士にあらざる事を説明せり。斯く専門的の攻撃に遇ひては余等康熙字典位を標準とせし素人先生は其可否の判斷すら爲しかねて今は口をつぐむより外なきに至りたり。猶誤字につきて記する所あらんとせしが何となくおぢ氣つきたれば最早知つた風の學者ぶりは一切爲さゞるべし。

漢字の研究は日本文法の研究の如く時代により人により異同變遷あるを以て多少の困難を免れず。説文により古碑の文字により比較考證して其正否を研究するは面白き一種の學問ならんもそは専門家の事にして普通の人の能くする所にあらず。普通の人が楷書の標準として見んは矢張康熙字典にて十分ならん。只〻余が先に餘り些細なる事を誤謬といひし故に此攻撃も出で來しなればそれらは取り消すべし。されど甲の字と乙の字と取り違へたる程の大誤謬（祟タヽルを崇アガムに誤るが如き）は嚴しく之を正さゞるべからず。

附記。ある人より舍の字は人冠に舌に非ず人冠に干に口なる由いひこされ、又ある人より協議の協を恊に書くは誤れる由いひこされたり。（十七日）

寶引（ほうびき）といふ事俳句正月の題にあれど何の事とも知らず只〻福引の類ならんと思ひてありしが此頃虹原の説明を聞きて疑解けたり。虹原の郷里（羽前）にてはホッピキと稱へて正月には今もして遊ぶなりと。其樣は男女十人ばかり（男三分女七分位なるが多く、下婢下男抔もまじる事あり）ある家に打ち集ひ、食物又は金錢を賭け（善き家にては多く食物を賭け一般の家にては多く金錢を賭くとぞ）くじを引いて之を取るなり。くじは十人ならば四五尺許りの繩十本を用意し、親となりたる者一人其繩を取りて其中の一本に環又は二文錢又は胡桃の殻などを結びつく、之を胴ふぐりといふ、是れ當りくじなり、親は十本の繩の片端は自分の片手にまとひ他の一端を前に投げ出す。元祿頃の句に

寶引のしだれ柳や君が袖　失名

とあるは親が繩を持ちながら胴ふぐりを見せじと其手を袖の中に引つこめたる處を形容したるにや。斯くて投げ出したる繩を各〻一本づつ引きて其中胴ふぐりを引きあてたる者が其場の賭物を取る。其勝ちたる者代りて次の親となる定めにて、胴ふぐり親の手に殘りたる時は之を親返りといふとぞ。

保昌が力引くなり胴ふぐり　其角
寶引や力ずくで取れぬ巴どの　西青
時宗が腕の強さよ胴ふぐり　沾裘

などいふ句は爭ふて繩を引張る處をいへるなるべく

寶引やさあと伏見の登り綱　山鷯

といふ句は各〻が綱を引く處を伏見の引網の綱を引く樣に見立てたるならん。

寳引に夜を寐ぬ顏の朧かな　李由
寳引の花ならば書を留かな　遊客

などいふ句あるを見れば寳引はおもに夜の遊びと見えたり。其外寳引の句

寳引に蝸牛の角をたゝくなり　其角
投げ出すや己引き得し鬮ふぐり　太祇
寳引や稚君樣にして見せん　嘯山
寳引や今度は阿子に參らせん　之房
寳引の宵は過ぎつゝ逢はぬ戀　几董

結句

寳引やどれが結んであらうやら　李流

（十八日）

病室の三方には襖が十枚あつて茶色の紙で貼つてあるが其茶色も銀の雲形も大方はげてしまふた。左の方の柱には古箋と古袋とが掛けてあつて、右の方の暖爐の上には寫眞板の手紙の額が黒くなつて居る。北側の間半の壁には坊さんの書いた寒山の詩の小幅が掛つて居るが細めて澁い字である、どちらを見ても甚だ陰氣で淋しい感じであつた。其間へ大黑樣の状さしを掛けた。病室が俄かに笑ひ出した。

（十九日）

頭の黑い眞宗坊さんが自分の枕元に來て、君の文章を見ると君は病氣の爲に時々大問題に撞着して居る事があるといふた。其は意外であつた。

病牀に日毎餅食ふ彼岸かな　（二十日）

露伴の二日物語といふが出たから久しぶりで讀んで見て、露伴がこんなまづい文章（趣向にあらず）を作つたかと驚いた。それを世間では明治の名文だの修辭の妙を極めて居るだのと評して居る。各人批評の標準がそんなに違ふものであらうか。

（二十一日）

三日後の天氣豫報を出してもらひたい。

（二十二日）

大阪の雜誌寳船第一號に、蘆陰舍百堂なる者が三世夜半亭を襲ぎたりと說き其證として「平安夜半翁三世浪花蘆陰舍」と書ける當人の文を擧げたり。されどこはいみじき誤なり。夜半翁三世といふは蕪村より三代に當るといふ事にて、三世夜半亭といふ事に非ず。若し三世夜半亭の意ならば重ねて蘆陰舍といふ名號を書く筈もあるまじ。思ふに此人大魯の門弟にて蕪村の又弟子に當るにやあらん。

（二十三日）

加賀大聖寺の雜誌[illegible]第三卷第三號出づ。表畫[illegible]は[illegible]の筆なる由實にうまい者なり。唯ゝ蕪村の句の書き樣は稍ゝ位置の不調子を免れざるか。

右雜誌の中に重箱楊枝と題する文の中に

俳諧に何々額といふ語は、盛に蕪村や太祇に用ゐられた、そこで子規君も多分此二人の新造語であらうとまで言はれたが、是は少し言ひすごしである。元祿二年板の其角十七條に、附句の體として

宿札に假名づけしたるとはれ額

とある、恐らくこの邊からの思ひつきであらう。

と書けり。余はさる事をいひしや否や今は忘れたれど若し言ひたらばそは誤なり。何々額と

いふ語は俳諧に始まりたるに非ずして古く源氏物語などにもあり、空も見知り顔にといへる文句を擧げて前年ホトトギス隨問隨答欄に辯じたる事あり。されば連歌時代の發句にも

又や鳴かん聞かず顔せば時鳥　宗長

などあり。猶俳諧時代に入りても元祿より以前に

ふぐ干や枯なん葱の恨み顔　子英

といふあり。こは天和三年刊行の虚栗に出でたる句なり。其外元祿にも何々顔の句少からず。

寺に寐て誠顔なる月見かな　芭蕉

苗代やられし顔にも鳴く蛙　許六

蓮踏みて物知り顔の蛙かな　卜柳

雛立て今日ぞ娘の亭主顔　硯角

など其一例なり。因にいふ。太祇にも蕪村にも几董にも訪はれ顔といふ句あるは其角の附句より思ひつきたるならん。　（二十四日）

羽後能代の雜誌俳星は第二卷第一號を出せり。爲山の表紙模樣は蕗の林に牛を追ふ意匠斬新にしてしかも模樣化したる處古雅、妙いふべからず。

破笛ホトトギスの五當募集に應じ今又此雜誌の裏書を書く。前日蟲籠に出だしたる「猿芝居」の如き小品文の上乘なる者なり。其多能驚くべし。若し俳句の上に一進歩あらば更に妙ならん。

南瓜道人俳星の首に題して曰く

風流たる蛸公子。又春潮に浮かれ來る。手を握つて妾が心かなしむ。君が疣何ぞ太甚だひややかなる。

と。笑はざるを得ず。

月兎の比翼蘆に就きて俳星に論あり。されどこは見やうによる事か。若し道修町の藥屋の若旦那新護花嫁を迎へし喜びに祝の句を集めて小冊子となし之を知人に配るとすれば風流の若旦那たるを失はず。若し大阪の俳人月兎物もあらうに己が新婚の句をわざ〳〵活版屋の小僧に拾はせて製本屋の職工に綴ぢさせて其得意さを世間に披露したりとすれば甚だ心ばせの卑しき俳人といはざるを得ず。　（二十五日）

或日左千夫鯉三尾を携へ來り之を盥に入れて吾病牀の傍に置く。いふ、君は病に籠りて世の春を知らず、故に今鯉を水に放ちて春水四澤に滿つる樣を見せしむるなりと。いと興ある言ひざまや。さらば吾も一句ものせんとて考ふれど思ふやうに成らず。とやかくと作り直し思ひ更へてやうやう十句に至りぬ。さはれ數は十句にして十句にあらず、一意を十樣に言ひこころみたるのみ。

春水の盥に鯉の喩喁かな

盥淺く鯉の背見ゆる春の水

鯉の尾の動く盥や春の水

頭並ぶ盥の鯉や春の水

春水の盥に滿ちて鯉の肩

春の水鯉の活きたる盥かな

鯉多く狹き盥や春の水

鯉の吐く泡や盥の春の水

鯉の背に春水そゝぐ盥かな

鯉はねて淺き盥や春の水　（二十六日）

先日短歌會にて、最も善き歌は誰にも解せらるべき平易なる者なりと、ある人は主張せしに、歌は善き歌になるに從ひいよ〳〵之を解する人少き者なりと他の人は之に反對し遂に一場の議論となりたりと。愚かなる人々の議論かな。文學上の空論は又しても無用の事なるべし。何と

て實地に就きて論ぜざるぞ。先づ最も善きといふ實地の歌を擧げよ。其歌の選擇恐らくは兩者一致せざるべきなり。歌の選擇既に異にして枝葉の論を爲したりとて何の用にか立つべき。蛙は赤きものか靑きものかを論ずる前に先づ蛙とはどんな動物をいふかを定むるが議論の順序なり。田の蛙も木の蛙も共に蛙の部に屬すべきものならば赤き蛙も靑き蛙も兩方共にあるべし。或は解し易きにも善き歌あり解し難きにも善き歌ありと思ふは如何に。（二十七日）

廢刊せられたりといひ傳へたる明星は廢刊せられしにあらで此度第十一號は恙なく世に出でたり。相變らず勿體なき程の善き紙を用ゐたり。かねての約に從ひ短歌の批評を試みんと思ふに數多くしていづれより手を著けんかと惑はるゝに先づ有名なる落合氏のより始めん。

わづらへる鶴の鳥屋みてわれ立てば小
雨ふりきぬ梅かをる朝

「煩へる鶴の鳥屋」とあるは「煩へる鳥屋の鶴」とせざるべからず。原作の儘にては鶴を見ずして鳥屋ばかり見るかの嫌ひあり。次に病鶴と梅との配合は支那傳來の趣向にて調和善けれどそこへ小雨を加へたるは甚だ不調和なり。寧ろ小雨の代りに春雪を配合せば善からん。且つ小雨にしても「ふりきぬ」といふ急劇なる景色の變化を現はしたるは、他の病鶴や梅やの靜かなる景色に配合して調和せず、寧ろ初めより降つて居るの穩かなるに如かず。次に梅かをる朝といふ結句は一句としての言ひ現はし方も面白からず、全體の調子の上より此句への續き工合も面白からず。此事を論ぜんとするには此歌全體の趣向に渉つて論ぜざるべからず。そは此歌は如何なる場所の飼鶴を詠みしかといふ事、即ち動物園かはた個人の庭かといふ事なり。若し個人の庭とすれば「見てわれ立てば」といふ句似あはしからず、「見てわれ立てば」といふはどうしても動物園の見物らしく思はる。若し動物園を詠みし者とすれば「梅かをる朝」といふ句似あはしからず。「梅かをる朝」といふは個人の庭の靜かなる景色らしくして動物園などの騷がしき趣に受け取られず。若し又動物園とか個人の庭とかに關係なく只ゞ漠然とこれだけの景色を摘み出して詠みたるものとすればそれでも善けれど、併しそれならば「見てわれ立てば」といふが如き作者の位置を明瞭に現はす句は成るべく之を避けて只ゞ漠然と其景色のみを敍せざるべからず。若し此の趣向の中に作者をも入れんとならば動物園か個人の庭かをも明瞭にならしむべし。是れ全體の趣向の上より結句に對する非難なりき。次に此結句を「小雨ふりきぬ」といふ切れたる句の下に置きて獨立句となしたる處に非難あり。此の如き佶屈なる調子も詠みやうにて面白くならぬにあらねど此の歌にては徒に不快なる調子となりたり。斯樣に結句を獨立せしむるには結一句にて上四句に匹敵する程の強き力なかるべからず。

法師らが髯の剃り杭に馬つなぎいたく
な引きそ「法師なからかむ」　（萬葉十六）

といふ歌の結句に力あるを見よ。新古今に「ただ松の風」といへるも此句一首の魂なればこそ結に置きたるなれ。然るに「梅かをる朝」にては一句輕くして全首の押へとなりかぬるやう思はる。先づ此歌の全體を考へ見よ。こは病鶴と小雨と梅が香と取り合せたる趣向なるが其景色の內にて最も目立つ者は梅が香にあらずして病鶴なるべし。然るに病鶴は一首の初め一寸置かれて客たるべき梅の香が結句に置かれし故尻輕くして落ちつかぬなり。せめて病鶴を三四の句に置かば此の尻輕を免れたらん。一番旨い皿を初めに出しては後々に出る物のまづく感ぜらるゝ

故に肉汁を初に、フライ又はオムレツを次に、ビステキを最後に出すなり。されど濃厚なるビステキにてひたと打ち切りては却て物足らぬ故更に附物として趣味の變りたるサラダか珈琲菓物の類を出す。歌にてもいかに病鶴が主なればとて必ず結句の最後に病鶴を置くべしとにはあらず。病鶴を三四の句に置きて、「梅かをる朝」といふ如きサラダ的一句を添ふるは悪き事もなかるべけれどさうなりし處で此「梅かをる朝」といふ句にては面白からず。此結一句の意味は判然と分らねどこれにては梅の樹見えずして薫のみする者の如し。さすれば極めてことさらなる趣向にて他と調和せず。何故といふに梅が香は人蔘の如き高き香にあらねば稍〻遠き處にありて之を聞くには特に鼻の神經を鋭くせずば聞えず。若しスコ〳〵と鼻の神經を無法に鋭くし心を此の一點に集めて見えぬ梅を嗅ぎ出したりとすれば外の者病鶴や小雨やはそつちのけとなりて互に關係無き二ケ條の趣向となり了らん。且つ「梅かをる朝」とばかりにてはさるむづかしき鼻の所作を現はし居らぬなり。若し又梅の花が見えて居るのに「かをる」といひたりとすればそは昔より歌人の陷り居りし穴を未だ得出ずに居る者なり。元來人の五官の中にて視官と嗅官とを比較すれば視官の刺激せらるゝ事多きは論を竢たず。梅を見たる時に色と香と孰れが強く刺激するかといへば色の方強きが常なり。故に「面白し」といへばそれより香の聯想多少起れども只〻「梅かをる」とばかりにては今梅を見て居る處と受け取れずして却て梅の花は見えて居らで薫のみ聞ゆる場合なるべし。然るに古より之を混同したる歌多きは歌人が感情の言ひ現はし方に注意せざる罪なり。此の歌の作者は果して孰れの意味にて作りたるか。次に最後の「朝」、此朝の字をこゝに置きたるが氣にくはず。元來此歌に朝といふ字がどれ程必要……圖に乘つて餘り書きし故腕筋痛み出し、止めぬ。

こんな些細な事を論ずる歌よみの氣が知れず、などいふ大文學者もあるべし。されどかゝる微細なる處に妙味の存在無くば短歌や俳句やは長い詩の一句に過ぎざるべし。（二十八日）

明星所載落合氏の歌

いざや子ら東路にのせてある道はこの道はるのわか草

此歌一讀、變な歌なり。先づ第一句にて子等と呼びかけたれば全體が子等に對する言葉たるべしと思ひきや言ひかけは第四句に止まり第五句は突然と敍景の句を出したり。變な歌といはざるを得ず。或は第五句も亦子らにいひかけたる言葉と見んか、いよ〳〵變なり。又初に「いざや」とあるは子等を催す言葉なれども此歌一向に子等を催して何をするとも言はず。どうしても變なり。此歌のために謀るに最上の救治策は「いざや子ら」の一句を省くに如かず。代りに「いにしへの」とか何とか置くべし。さすれば全體の意味通ずる故少々變なれども大した變にもならざるか。そはとにかく前の歌の結句といひ此歌の結句といひ思ひきりて佶屈に詠まるゝ處を見れば作者も若返りて所謂新派の若手と共に走りツこをもやらるゝ覺悟と見えて勇ましとも勇ましき事なり。次の歌は

鉞の背に歌かきつけてなき乳母のはなちし池よふか澤の池

いよ〳〵分りにくき歌となりたり。此歌くり返して讀む程從〻分らず、どうしても裏面に一條の小說的話說でもありさうに思はるゝなり。先づ此歌の趣向に就きて起るべき疑問を列擧せんか。第一、此歌の作者の地位に立つべき者は少年なるか少女なるか、且つ其少年か少女かは如何なる身分の人なるか。第二、鉞の背に歌書

きたるは何のためか、いたづらの遊びか、何かのまじなひか、或は紅葉題詩といふ古事に倣ひて戀に戀の媒でも賴みたる譯か。第三、乳母は如何なる素性の女にて、どれ程の教育ありしか。第四、乳母の死にしは何年前にして、病死か、はた自殺か。第五、乳母の死と龜の事と何等の關係無きか有るか。凡そ此等の事をたしかめたる後に非ざれば此歌の評に取り掛る能はず。若しそんな複雜な事も何もあらず只ゝ此表面だけの趣向とすれば丸で狐につまゝれたやうな趣向なり。なぜといふに龜の背に歌かくといふ事既に不思議にして本氣の沙汰と思はれぬに、しかも其歌の書き主が乳母である事いよいよ不思議なり。普通には無學文盲にていろはすら知らぬが多き乳母の中にて特に歌よみの乳母を持ち出したるは何故ぞ。はた其乳母が既に死んで居るに至つては不思議といふも愚なる次第なり。されど斯かる野暮評は姑く棚に上げてずつと推察した處で、池を見て亡き乳母を懷ふといふある少女の懷舊の歌ならんか。假りにそれとして結句ばかりを評すれば「深澤の池」とばかりにては固有名詞か普通名詞かそれも判然せず、氣ぬけのしたるやうに思はる。普通名詞としては無論面白からず。小說的固有名詞なりとすれば乳母の名も「おたよ」とか「おふく」とかありたき心地す。以上は此歌を小說的の趣向と見て評したる者なれども、若し深澤の池は實際の固有名詞にして龜に歌書くなどいふ事實もあるものとすれば更に入口を變へて評せざるべからず。併し餘り長くなる故に略す。（二十九日）

明星所載落合氏の歌

簪もて深さはかりし少女子のたもとに
　つきぬ春のあわ雪

簪にて雪のふかさをはかるときは疊算と共に、ド、遊中の材料らしくいやみおほくしてこゝには適せざるが如し。「はかりし」とこゝには過去になりをれど「はかる」と現在に云ふが普通にあらずや。「つきぬ」とは何の意味かわからず、或はクッヽクの意か。それならば朶よりふる雪のクッヽキたるか下につもりたる雪のクッツキたるか、何れにしても穩かならぬやうなり。結句に始めて雪を云へる歌にして第二句に「ふかさ」と云へるは順序顚倒ししかも其距離遠きは餘り上手なるよみ方にあらず。（三十日）

明星所載落合氏の歌

舞姬が底にうつして繪扇の影見てをる
　よ加茂の河水

此歌は場所明かならず。固より加茂川附近といふ事だけは明かなれども此舞姬なる者が如何なる處に居るか分らぬなり。舞姬は、河岸に立ちて居るか、水の中に立ちて居るか、舟に乘りて居るか、河中に置ける縁臺の上に居るか、水上にさし出したる棧敷などの上に居るか、又は水に臨む高樓の欄干にもたれて居るか、又は三條か四條邊の橋の欄干にもたれて居るか、別にくはしい事を聞くに及ばねど橋の上か家の内か舟の中か位は分らねば全體の趣向が感じに乘らぬなり。次に第二句の始に「底」といふ字ありて結句に「加茂の河水」と順序を顚倒したるは前の雪の歌と全く同一の覆轍に落ちたり。「うつして」といひて「うつれる」といはざるは殊更にうつして遊ぶ事をいへるなるべく、此殊更なる處に厭味あり。此種の厭味は初心の少年は甚だ好む事なるが、作者も好まるゝにや。「見てをるよ」といふも少しいかゞはしき言葉にて「さうかよ」と惡洒落でもいひ度くなるなり。（三十一日）

明星所載落合氏の歌

むらさきの文筥の紐のかた／＼をわが
のとかへて結びやらばいかに

「わがのと」とは「わが紐と」といふ事なるべけれど、我の紐といふ事十分に解せられず。我文筥の紐か、我羽織の紐か、我瓢箪の紐か、はた其紐の色は赤か青か白か黒か、若し又紫ならば同じ濃さか同じ古さか、それらも聞きたくなきにはあらねど作者の意はさる形の上にあらずして結ぶといふ處にあるべく、この文筥は固より戀人の文を封じ来れる者と見るべければ野暮評は切りあげて、只〻我等の如き色氣無き者には此癡なる處を十分に味ひ得ざる事を白状すべし。一つ氣になる事は結ばれたるかた／＼の紐はよけれど、それがために他のかた／＼の紐の解かれたるは縁喜惡きにあらずや。賣卜先生をして聞かしめば「此の縁談初め善く末わろし狐が川を渉りて尾を濡らす といふかたちなり」などいはねば善いがと思ふ。　(四月一日)

明星所載落合氏の歌

君が母はやがてわれにも母なるよ御手
とることを許させたまへ

男女のなからひか義兄弟の交りか何れとも分らねど今の世に義兄弟といふやうな野暮もあるまじく、こゝは男女の中なる事疑ひなし。男女の中とした處で、此歌は男より女に向ひていへる者か女より男に向ひていへる者か分らず。昔ならばやさしき女の言葉とも見るべけれど今の世は女よりも男の方にやさしきにやけたるが多ければ、こゝも男の言葉と見るが至當なるべし。御手とるとは日本流に手を取りて傍より扶くる意にや。西洋流に握手の禮を行ふ意にや。日本流ならば善けれど若し西洋流とすれば母なる人の腕が（老人であるだけ）抜けはせずやと心配せらるゝなり。それから今一つ變に思はるゝは母なる人の手を取ることの許可を母其人に請はずして却て其人の娘たる戀人に請ひし事なり。されど手を取るといふ事及び斯くいひし場合明瞭ならざれば詳しく評せんに由なし。

この身もし女なりせでわがせことたの
みてましを男らしき君

「せで」は「せば」の誤植なるべし。「女にて見たてまつらまし」など源氏物語にあるより翻案したるか。されどそれは男の形のうつくしきを他の男より斯く評せるなり。然るに此歌は男の男らしきを側の男よりほめて君はなかなか男らしくて頼もしい奴だ、僕が女ならとうから君に惚れちよるよ」抔いふのであるから殺風景にして少しも情の寫りやう無し。前者は女的男を他の男が評する事故至極尤と思はるれど、此歌の如きは男的男を他の男が評する事故餘り變にして何だかいやな氣味の惡い心持になるなり。畢竟此歌にて「男らしき」といふ形容詞を用ゐたるが惡きにて、斯かる形容詞は無くてもすむべく、又他の詞を置きてもよかりしならん。　(二日)

明星所載落合氏の歌

まどへりとみづから知りて神垣にのろ
ひの釘をすてゝかへりぬ。

此種の歌所謂新派の作に多し。趣向の小説的なる者を捕へて之を歌に詠みこなす事は最も難きわざなるに只〻歴史を敍する如き筆法に敍し去りて中心も無く統一も無き無趣味の三十一文字となし自ら得たりとする事初心の弊なり。此歌も亦同じ病に罹りたるが如し。先づ此の歌の作者の地位に立つべき者はのろひ釘の當人と見るべきか、若し當人が自分の事を敍すとせば「すてゝかへりぬ」といふ如き他人がましき敍しや

らあるべからず。又傍觀者の歌とせんか、秘密中の秘密に屬するのろひ釘を見る事もことさらめきて誠しからず、はた「惑へり」と自ら知りて一と其心中迄明瞭に見拔きたるもあるべき事ならず。されど場合によりては小說家が小說を作する如く、秘密なる事實は勿論、其心中迄も見拔きて歌に詠む事全く無きにあらねどそは至難のわざなり。此歌の如く「すてゝかへりぬ」と結びては歴史的即ち雜報的の結末となりて美文的即ち和歌的の結末とはならず、つまり此歌は雜報記者が雜報を書きたる如き者にして少しも感情の現れたる處無し。これでは先づ歌の資格を持たぬ歌ともいふべきか。釘をすてゝ歸るなどいふ事も隨分變的な想像なれど一々に論ぜんはうるさければ省く事とすべし。妄評々々死罪々々。（三日）

春雨の朝からショボ／＼と降る日は誠に靜かで小淋しいやうで閑談に適して居るから、斯ういふ日に傘さして袖濡らしてわざ／＼話しに來たといふ遠來の友があると嬉しからうがさういふ事は今まであつた事が無い。今日も雨が降るので人は來ず仰向になつてぼんやりと天井を見てゐると、張子の龜もぶら下つてゐる、芒の穗の木兎もぶら下つてゐる、駝鳥の卵の黑いのもぶら下つてゐる、ぐるりの鴨居には菅笠が掛つてゐる、蓑が掛つてゐる、瓢の花いけが掛つてゐる。枕元を見ると箱の上に一寸許りの人形が澤山並んでゐる、其中にはお多福も大黑も惠比壽も福助も裸子も招き猫もあつて皆笑顏をつくつてゐる。こんなつまらぬ時に斯ういふオモチャにも古笠などにも皆足が生えて病牀のぐるりを歩行き出したら面白いであらう。（四日）

恕堂が或日大きな風呂敷包を持て來て余に、音樂を聽くか、といふから、余は、どんな樂器を持て來たのだらうと危みながら、聽く／＼と答へた。それから瞳を凝して恕堂のする事を見てゐると、恕堂は風呂敷を解いて蓄音器を取り出した。此器械は余は始て見たので、一尺程のラッハが突然と余の方を向いて口を開いた樣にしてゐたのもをかしかつた。それから又箱の中から竹の筒を六七寸に切つた樣なものを取り出した。これが蠟なので、この蠟の表面に極めて微細な線がついてをるのは、これが聲の痕であるさうな。これを器械にかけてねぢをかけると、ひとりでにブル／＼／＼／＼といひ出す。此の竹の筒の樣なものが都合十八あつたのを取り更へ取り更へてかけて見たが、過半は西洋の歌であるので我々にはよくわからぬ。併し日本の唱歌などに比べると調子に變化があつて面白く感じる。日本のは三つ程の內に越後獅子の布を晒す所おやといふのが一つあつた。それは甚だ面白かつた。西洋の歌の中にラフイング、ソングが、（笑歌）と題するのがあつて何の事だかわからぬが、調子は非常な急な調子で、ところ／＼に笑ひ聲が這入つてゐる歌であつた。此は笑ひ聲に巧みなといふ評判の西洋音樂師が吹き込んだのださうで今試みにこの歌を想像して見ると、

鴉が五六羽飛んで來て、權兵衞の頭に糞かけた、アッハハ、ハッハ、アッハハハ・

神鳴り四五匹ゴロ／＼／＼、雲の上からスッテンコロ／＼、[illegible]ほし臍にひかゝつた。

太鼓が破れて滅茶々々だ。アッハハハ、ハッハ、アッハハハ

猫屋の婆さん四十島田、猫の子十匹產み居つた。白猫黒猫三毛猫山猫招き猫。アッハハ、ハッハ、アッハハハ

といふ樣にも聞えた。併し原作がこんなに俗であるかどうか其は知らぬ。（五日）

故陸奥宗光氏と同じ牢舍に居た人に、陸奥はどんな人か、と問ふたら、眼から鼻へ抜けるやうな男だ、といふ答であつた。今生きて居る人にも眼から鼻へ抜ける程の利口者といはれて居るのが二三人はある。自分も一度斯ういふ人に逢ふて、眼から鼻へ抜ける工合を見たいものだ。（六日）

此頃は左の鄰の内でブツ〳〵〳〵〳〵といふ音が絶えず聞える。これは「怫々々々」と不平を鳴らして居るのであらうか。或は「佛々々々」と念佛を唱へて居るのであらうか。或は「物々々物」と唯物說でも主張して居るのであらうか。（七日）

僕は子供の時から弱味噌の泣味噌と呼ばれて小學校に往ても度々泣かされて居た。たとへば僕が壁にもたれて居ると右の方に並んで居た友だちがからかひ半分に僕を押して來る、左へよけようとすると左からも他の友が押して來る、僕はもうたまらなくなる、そこで其際足の指を蹈まれるとか横腹を稍ゝ强く突かれるとかいふ機會を得て直に泣き出すのである。そんな機會はなくても二三度押されたらもう泣き出す。それを面白さに時々僕をいぢめる奴があつた。併し灸を据ゑる時に僕は逃げも泣きもせなんだ。然るに僕をいぢめるやうな强い奴には灸となると大騷ぎをして逃げたり泣いたりするのが多かつた。これはどつちがえらいのであらう。（八日）

一人間一匹

右返上申候但時々幽靈となつて出られ得る樣以特別御取計可被下候也

明治三十四年月日　何がし

地水火風御中（九日）

余の郷里にては時候が暖かになると「おなぐさみ」といふ事をする。これは郊外に出て遊ぶ事で一家一族近所合壁などの心安き者が互にさそひ合せて少きは三四人多きは二三十人もつれ立ちて行くのである。それには先づ各自各家に辨當か又は其他の食物を用意し午刻頃より定めの場所に行きて陣取る。其場所は多く川邊の芝生にする。川が近くなければ水を得る事が出來ぬからである。又川邊には適當なる空地があるからでもある。そこに毛氈や毛布を敷いて坐り場所とする。敷物が足らぬ時には重箱などを包んである風呂敷をひろげて其上に坐る。石ころの上に坐つて尻が痛かつたり、足の甲を松針につゝかれたりするのも興がある。こゝを本陣として置いて食時ならば皆こゝに集まつて食ふ、それには皆辨當を開いてどれでも食ふので固より彼我の別は無い。茶は川水を汲んで來て石の竈に藥罐を掛けて沸かすので、食ひ盡した重箱などは矢張其川水できれいに洗ふてしまふ。大きな砂川で水が淸くて淺くて岸が低いと來て居るから重寶で淸潔でそれで危險が無い。實にうまく出來て居る。食事がすめばサア鬼ごとといふので子供などは頰ぺたの飯粒も取りあへず一度に立つて行く。女子供は普通に鬼事か擲草かをやる。余の親類がこぞつて行く時はいつでも三十人以上で、子供が其半を占めて居るからにぎやかな事は非常だ。一度先生につれられて詩會を斯ういふ芝生で開いた事もあつた。誠に閑靜でよかつた。併し男ばかりの詩會などは特別

であつて、普通には女子供の遊びときまつて居る。半日運動して、しかも清らかな空氣を吸ふのであるから、年中家に籠つて居る女にはどれだけ愉快であるか分らぬ。固より其場所は町の外で、大方半里許の距離の處で、そこら往來の人などには見えぬ處である。歌舞伎座などへ往て悪い空氣を吸ふて喜んで居る都の人は夢にも知らぬ事であらう。（十日）

虚子曰、今迄久しく寫生の話も聞くし、配合といふ事も耳にせぬでは無かつたが、此頃話を聽いてゐる内に始めて配合といふ事に氣が附いて、寫生の味を解した樣に思はれる。規曰。僕は何年か茶漬を廢してゐるので茶漬に香の物といふ配合を忘れてゐた。（十一日）

我試みに「文士保護未來夢」といふ四枚續きの畫をかいて見ようか。

第一枚は、青年文士が眞青な顏をして首うなだれて合掌して坐つて居る。其後には肩に羽のある神樣が天の瓊矛とでもいひさうな劍を提げて立つて居る。神樣は次の如く宣告する、汝可憐なる意氣地無き、心臟の鼓動し易き、下腹のへこみ易き青年文士よ、汝の生るゝ事百年許り早過ぎたり、今の世は文士保護論の僅かに芽出したる時にして文士保護の實の行はるゝ時にあらず、我汝が原稿を抱いて飯にもありつけぬ窮境を憐んで汝を一刀兩斷せんとす、汝出直して來れ。

第二枚は、文士の首は前に落ちて居る處で、斬られたる首の跡から白い煙が立つて居る。其煙がまるらせ候といふ字になつて居て、其煙の末に裸體美人がほのかに現はれて居る。神樣の劍の尖からは紫色の血がしたゝつて其したゝりが戀愛文學といふ字になつて居る。

第三枚は、芝居の舞臺で、舞臺の正面には「嗚呼明治文士之墓」といふ石碑が立つて居る。墓のほとりには菫が咲いて居て、墓の前の花筒には白百合の枯れたのが插してある。此墓の後から西洋風の幽靈が出て來るので、此幽靈になつた俳優が川上音次郎五代の後胤といふのである。さて此幽靈がこゝで大に文士保護の演説をすると、見物は大喝采で、金貨や銀貨を無暗に舞臺に向つて投げる、投げた金貨銀貨は皆飛んで往て文士の墓へひつゝいてしまふ。

第四枚は、大宴會の場で、正面の高い處に立つて居るのが川上音次郎五代の後胤である。彼は次の如く演説する、此度「明治文士」といふ演劇大入に付當世の文士諸君を招いて聊か粗酒を呈するのである、明治文士の困難は即ち諸君の幸福と化したのである、明治文士の濺いだる血は今諸君杯中の葡萄酒と變じたのである、明治文士は飯の食へぬ者ときまつて居たが、今は飯の食へぬ者は文士になれといふ程になつた、明治文士は原稿を抱いて餓死した者だが今は文士保護會へ持つて行けばどんな原稿も價よく買ふてくれる、それが爲に原稿の價が騰貴して原稿取引所で相場をやる迄になつた、云々。拍手喝采堂に滿ちて俳優萬歲、文士萬歲を連呼する。（十二日）

美しき花も其名を知らずして文にも書きがたきはいと口惜し。甘くもあらぬ駄菓子の類にも名物めきたる名のつきたらむは味のまさる心地こそすれ。（十三日）

左千夫いふ、俳句に畑打といふ題が春の季になり居る事心得ず、畑を打ち返すは秋にこそあ

れ、春には畑を打ち返す必要なきなり、若し田を打ち返す事ならばそれは春稍〻暖くなる頃に必ずするなり、云々。我此言を聞いて思ひ見るに、こは田打を春の季としたるが始めにて、後に畑打をも同じ事のやうに思ひ誤りたるならんか。連歌の發句にも

すき返せ草も花咲く小田の原　紹巴
山川のめぐり田かへす裾輪かな　同
濁りけり山田やかへす春の水　同

など田をかへすといふ事は既にいへり。其後寛文頃の句に

沼津にて
ぬまつくや泥田をかへす鱣島　俊治

これも田をかへすと詠めり。然るに元祿に入りて「あら野」に左の三句あり。

動くとも見えで畑打つ麓かな　去來
萬歳をしまふて打てる青山かな　昌碧
子を獨りもりて田を打つ孀かな　快宜

其中他の二句は皆田を打つとあるに去來ばかりのは畑打つとあり、或は此句などが俑を作りたるにやあらん。
此外元祿の句にて畑打とあるは

畑打に替へて取つたる菜飯かな　嵐雪
ちら〳〵と畑打つ空や南風　好風

などなり。それより後世に至れば至る程田打といふ句少くなりて畑打といふ句多くなりたるが如し。
斯く田打と畑打とが誤り置かれたる理由如何といふに大方次の如くなるべし。關東北國などにては秋の收穫後、田は其儘に休ませある故春になりてそを打ち返すものなれど、關西にては稻を刈りたる後の田は水を乾して畑となし麥などを蒔くならひなれば春になりても打ち返すべき田なきなり。麥を刈りて後其の畑を打ち返して水田となす事はあれどそは夏にして春にあらず、それ故關西の者には、春季に田を打つといふ事却て合點行かず、何とはなしに畑打と思ひ誤りたる者ならん。されど古來誤り詠みたる畑打の句を見又我々が今迄畑打と詠み來りたる心を思ふに、固より田と畑とを判然と區別して詠めるにもあらず、只〻嚴寒の候も過ぎ春暖くなるにつれて百姓どもの野らに出て男も女も鍬ふり上ぐる樣ののどかさを春のものと見たるに過ぎず。さはれ左千夫の實驗談は參考の材料として聞き置くべき値あり。　（十四日）

ガラス玉に金魚を十ばかり入れて机の上に置いてある。余は痛みをこらへながら病床からつくづくと見て居る。痛い事も痛いが綺麗な事も綺麗ぢや。　（十五日）

筋の痛を怺へて臥し居れば晝靜かなる根岸の日の永さ

パン賣の太鼓も鳴らず日の永き

上野は花盛學校の運動會は日毎絶えざる此頃の庵の眺

松杉や花の上野の後側

把栗鼠骨が一昨年我病を慰めたる牡丹去年は咲かずて

三年目に蕾たのもし牡丹の芽

窓前の大鳥籠には中に木を栽ゑて枝々に藁の巣を掛く

追込の鳥早く寢る日永かな

毎日の發熱毎日の蜜柑此頃の蜜柑は稍〻腐りたるが旨き

春深く腐りし蜜柑好みけり

鄰醫瓢を花活に造り椿を活けて贈り來る滑稽の人なり

ひねくり者ありふくべ屋椿とぞ呼べる

焚かねば邪魔になる煖爐取除けさせたる次の

朝の寒さ

煖爐取りて六疊の間の廣さかな

齒の痛み三處に起りて柔かき物さへ嚙みがてにする昨今

筍に蟲歯痛みて暮の春

或人苔を封じ來るこは奈良春日神社の石燈籠の苔なりと

苔を包む紙のしめりや春の雨　(十六日)

鼠骨が使をよこしてブリキのカンをくれといふからやつたら、其カンの中へ御くじを入れて來た。先づ一本引いて見たらば、第九十七凶といふので、其文句は

霧罩重樓屋　佳人水上行
白雲歸去路　不見月波澄

といふのであつた。此文句の解釋が出來んので、それから後毎日考へてもう三十日も考へ續けて居るが今に少しも解釋の手掛が出來ぬ。(十七日)

今日は朝よりの春雨稍々寒さを覺えて蒲團引被り臥し居り、垣根の山吹やう／＼に綻び、盆栽の桃の花は西洋葵と並びて高き臺の上に置かれたるなどガラス越に見ゆ。午後は晝もぬくもり殊に今日は痛みもうすらぎたれば靜かに俳句の選拔など餘念なき折から、本所の茶博士より一封の郵書來りぬ。披き見れば他の詞は無くて

擬墨汁一滴　左

總じて物にはたらき無きは面白からず。されどもはたらき目だちて表に露れたるは却ていやしき處あり。內にはたらきありて表ははたらき無きやうなるが殊にめでたきなり。

道人の樂の茶碗や落椿

春雨のつれ／＼なるまゝの戲にこそ、と書きたり。時に取りていとをかし。(十八日)

をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕樣がないから、うめくか、叫ぶか、泣くか、又は默つてこらへて居るかする。其中で默つてこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少し痛が減ずる。(十九日)

諸方より手紙被下候諸氏へ一度に御返事申上候。小生の病氣につきいろ／＼御注意被下、或は深山にある何やらの草の根を煎じて飮めば病立處に直るといはるゝもあり、或は人膽丸は萬病に利く故チャン／＼の膽もて煉りたる人膽丸をやらうかといはるゝもあり、或は何がしの神を信ずれば病氣平癒疑なしといはるゝもあり、或は此病に利く奇體の灸點あり幸に其灸師只今田舍より上京中なれば來てもらふては如何などいはるゝもあり、或は某醫師は尋常の醫師に非ず、從つて其療法も亦尋常療法に非ず、某將軍深く之を信ず、君此人に診察させては如何などいはるゝもあり、或は某醫師の養生法は山師流の養生法に非ず我家族の一人は現に此法を用ゐて十年の痼疾頓に癒えたる例あり、君も試みては如何などいはるゝもあり、中には見ず識らずの人も多きにわざ／＼書を寄せられてとかくの御配慮に預り候事誠に難有次第とぞんじ感淚に沈み申候。併し遠地の諸氏は勿論、在京の諸氏すら小生の容態を御存じ無き方多き故茲に種々の御心配を懸け候事と存候。小生の病氣は單に病氣が不治の病なるのみならず病氣の時期が既に末期に屬し最早如何なる名法も如何なる妙藥も施すの餘地無之

神様の御力も或は難相及かと存居候。小生今日の容態は非常に複雑にして小生自身すら往々誤解致居次第故迚も傍人には說明難致候へども先づ病氣の種類が三種か四種か有之、發熱は毎日、立つ事も坐る事も出來ぬは勿論、此頃では頭を少し擡ぐる事も困難に相成、又疼痛のため寐返り自由ならず蒲團の上に釘付にせられたる有様に有之候。疼痛烈しき時は右に向きても痛く、左に向きても痛く、仰向になりても痛く、丸で阿鼻叫喚の地獄も斯くやと思はるゝ許の事に候。且つ容態には變化極めて多く、今日明日を計らず今朝今夕を計らずといふ有様にて此頃は引續いて宜しいと申すやうな事は無之、それ故人に容態を尋ねられたる時答辭に窮し申候。「此頃は善い方です」とは普通に人に答ふる挨拶なれども何の意味も無き語に有之候。一時的容態は斯く變化多けれども一年の容態をいへば昨年は一昨年よりも惡く、今年は昨年よりも惡き事歴々として事實に現れ居候。斯の如き次第故藥も其他の療養法も折角御教被下候事ながら小生には難施事と御承知可被下候。只ゝ小生唯一の療養法は「うまい物を喰ふ」に有之候。此「うまい物」といふは小生多年の經驗と一時の情況とに因りて定まる者にて他人の容喙を許さず候。珍しき者は何にてもうまけれど刺身は毎日くふてもうまく候。くだもの、菓子、茶など不消化にてもうまく候。朝飯は喰はず昼飯はうまく、夕飯は熱が低ければうまく、熱が高くても大概喰ひ申候。容態荐增 如此候。（二十日）

前日記したる御籤の文句につき或人より三世相の中にある元三大師御鬮鈔の解なりとて全文を寫して送られたり。其中に佳人水上行を解して

かじんすいじやうにゆくとはうつくしき女の水の上をあゆむがごとくわがなすほどのことはあやふく心もとなしとのたとへなり

とあり。不見月波澄を解して

きりふかく月を見ざればせめてみづにうつるかげなりとも見んとすれどなみあればみづのうへの月をも見る事なしとなり

とあり。其次に

○病人はなはだあやふし○悅事なし○失物出がたし

○待人きたらず…○死生あやふし…

などあり。適中したる事多し。前年神戸病院を退きて故郷に保養しつゝありし際衰弱甚だしかりしがある日勇を鼓して郊外半里許の石手寺を見まかぬ。其時本堂の縁に腰かけて休みつつ其傍に落ちありし紙片を拾ひ擴け見たるに此寺の御籤の札なり。凶の籤にして中に大病あり命にはさはりなし、などいへる文句あり、善く當時の事情に適中し居たり。かゝる事もあるによりて卜筮などに對する迷信も起るならん。（二十一日）

自分の俳句が月並調に落ちては居ぬかと自分で疑はるゝが何としてよきものかと問ふ人あり。答へて云ふ、月並調に落ちんとするならば月並調に落つるがよし、月並調を恐るゝと云ふは善く月並調を知らぬ故なり、月並調は監獄の如く恐る可きものに非ず、一度其中に這入つて善くその内部を研究し而して後に娑婆に出でなば再び陥る憂無かるべし、月並調を知らずして徒に月並調を恐るゝものはいつの間にか月並調に陥り居る者少からず、試みに蒼虬梅室の句を讀め。（二十二日）

何人の忘れ置きけん枕元に尾形光琳傳と書ける一冊の者あり。二十四行の短文にして末に、明治三十四年四月文學博士重野安繹撰、と書けり。思ふに此頃光琳等四家の展覽會とかありといへば其邊の引札の類ならんか。それにしても

其畫ク所花卉翎毛山水人物悉ク金銀泥ヲ用ヒテ設色スルニ穠艶妍媚ナラザルハナク而モ用筆簡淡ニシテ一種ノ神韻アリ

とあるが如き餘り杜撰なるべし。用筆簡淡の四字は光琳の畫を形容し得ざるのみならず寧ろ光琳風の如き畫の感じを少しも含まざるなり。何はともあれ光琳の畫の第一の特色は他諸家の輪郭的なるに反して沒骨的なる處に在り、而して此用筆簡淡の四字が果して沒骨畫に對する批評と見るを得べき語なるか、何人も恐らくは爾か思はざるべし。撰者も亦そんな事を考へたるにはあらで筆の先にてゴマカシたるや必せり。或は

又茶道ヲ千宗佐ニ受ケテ漆器ノ描金ニ妙ヲ得硯箱茶器ノ製作ニ巧ミナリ

とあるが如き些しも意を成さず。此文にて見ると光琳は茶を習ひしため蒔繪が上手になりたる事と聞ゆ。論語を習ひに往たら漢學が上手になつたといふ如き類にて、狐を馬に載せたる狂論法なり。若し二句何の關係もなき者ならば何故に續けて書けるか分らず。其外怪しげなる事多し。撰者夢中の作とおぼし。何にもせよ今の世に光琳の名を世にひろめんとする者、畫を知らぬ漢文書きに頼みて其傳を書かしむるなど馬鹿な事なり。（二十三日）

昨夜の夢に動物ばかり澤山住んで居る處に來た。其動物の中にもう死期が近づいたかころげまはつて煩悶して居る奴がある。すると一匹の親切な兎があつて其煩悶して居る動物の邊に往て自分の手を出した。彼動物は直に兎の手を自分の兩手で持つて自分の口にあて嬉しさうに其を吸ふかと思ふと今迄の煩悶はやんで甚だ愉快げに眠るやうに死んでしまふた。又外の動物が死に狂ひに狂ふて居ると例の兎は前と同じ事をする、其動物も亦愉快さうに眠るやうに死んでしまふ。余は夢さめて後いつ迄も此兎の事が忘られない。（二十四日）

碧梧桐いふ、

山吹やいくら折つても同じ枝　子規
山吹や何がさはつて散りはじめ　同

の二句は月並調にあらずやと。斯ういふ主觀的の句を月並調とするならば

鶴の巣や場所もあらうに××の家　子規

なども無論月並調の部に入れらるゝならん。抱琴いふ、

鶯や塀に來にける子の一間　太祇

は月並調に非ずやと。插雲いふ、

初午はおのれが遊ぶ子守かな　插雲

の句は月並調に陷り居らずやと。以上の句人のも自分のも余は月並調に非ずと思ふ。余が月並調と思へる句は左の如き句なり。

二日灸和尚固より灸の得手　碧梧桐
草餅や子を世話になる人のもと　插雲
手料理の大きなる皿や洗ひ鯉　失名

など月並調に近きやう覺ゆ。古人の句にても

七草や餘所の聞えも餘り下手　太祇
七草や腕の利きたる博奕打　同
歸り來る夫のむせぶ蚊遣かな　同

など月並調なり。芭蕉の

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉

なども時代の上よりいへば月並調の一語を以て

評し去ること氣の毒なれど今日より見れば無論月並的の句なり。もと月並調といふ語は一時便宜のため用ゐし語にて、理窟の上より割り出したる語にあらねば其意義甚だ複雑にして且つ曖昧なり。されど今一二の例に就きていはんか、前の「山吹や何がさはつて」の句を其山吹を改めて

夕櫻何がさはつて散りはじめ

となさば月並調となるべし。こは下七五の主觀的形容が櫻に適切ならぬためことさらめきて厭味を生ずるなり。又「二日灸和尚固より」の句を

二日灸和尚は灸の上手なり

となさば月並臭氣なかるべし。こは言葉遣ひの如何によりて月並調になりもし又ならずにも済むなり。二日灸といふ題もと月並的臭氣を含めるに、「其上に和尚固より灸の得手」といふ如く俗調を乘氣になつて用ゐし故俗に陥りしなり。極めて俗なる事を詠むに雅語を用ゐて俗に陥らぬやうにする事天明諸家の慣手段なり。又「歸り來る夫の咽ぶ」といふは趣向のきはどき處に厭味ある者なれば全く趣向を變へねば月並調を脱する能はざるべし。「歸り來る」も「夫」も「むせぶ」も皆厭味を含めり。よく〳〵の月並的趣向なり。

附記。少し變な句を月並調かと思ふ人多けれどそは誤なり。月並には却て變な語、變な句法などは排斥するなり。月並は表面甚だもつともらしくて底に厭味ある者多し。變な句は月並調に非ずと知るべし。

（二十五日）

ある人に向ひて短歌の趣向材料などに就きて話すついでにいふ、「松葉の露」といふ趣向と「櫻花の露」といふ趣向とを同じやうに見られたるは口惜し。余が去夏松葉の露の歌十首をものしたるは古人の見つけざりし場所、或は見つけても歌化せざりし場所を見つけ得たる者として誇りしなり。若し花の露ならば古歌にも多くあり、又舊派の歌人も自稱新派の歌人も皆喜んで取る所の趣向にして陳腐中の陳腐、厭味中の厭味なる者なり。試みに思へ松葉の露といへば立所に松葉に露のたまる光景を目に見れども花の露とばかりにては花は目に見えて露は目に見えず只ゝ心の中にて露を思ひやるなり。是に於てか松葉の露は全く客觀的となり、花の露は半ば主觀的となり、兩者其趣を異にす。然るに花の露を形容するに、松葉の露を形容するが如き客觀的形容を用ゐたりとて實際の感は起らぬ事論を竢たず。例すれば「花に置く露の玉」といひても花の露は見えぬ故玉といふ感は起らず。「花の白露」といひても色の白は實際見えぬ故只漠主觀的に思ひやらざるべからず。風が花を搖かして露の散る時、其外露の散る時は始めて露の見ゆる心地すれど、それも露の見ゆるにはあらで寧ろ露が物の上に落つる音を聞きて知る位の事ならん。音なればこれも普通の客觀的の者ならざるはいふ迄もなし。古の歌よみは固より咎むるにも値らず。今の歌よみにしてこれ程に客觀と主觀との區別ある兩種の露を同じやうに見られたる事かへす〴〵も口惜し。

（二十六日）

不折鳥羽僧正の畫に就きて言へりしに對して茅堂は不折の説を駁する一文を投ぜり。茅堂不折兩氏ともに親しく交際する仲なれば交際上どちらに贔屓もなけれども畫の事に就きては茅堂は不折の向ふを張つて之が反對説を主張する程の資格を持たずと思ふ。此際に於ける論の當否は姑く措く、平生茅堂が畫に於けるを觀るに

觀察の粗なる嗜好の單純なる到底一般素人の域を脱する能はざるが如し。詳かに言へば茅堂は寫生の何たるをも能く解せざるべく、鳥羽僧正の寫生の伎倆がどれだけに妙を極めたるかも解せざるべく、只々其好きな茶道より得たる幽玄簡單の一趣味を標準として、寫生何かあらん、鳥羽僧正の畫も幽玄の處無し、餘り珍重すべき者に非ず、など容易に判斷し去りたる事ならん。茅堂若し畫の事を論ぜんとならば今少し畫の事を研究して而して後に論ぜられたき者なり。樂燒主義ノンコ趣味を以て鳥羽僧正の畫を律せんとするは瓢簞を以て鯰を押ふるの類か。　（二十七日）

夕餉したゝめ了りて仰向に寢ながら左の方を見れば机の上に藤を活けたるいとよく水をあげて花は今を盛りの有樣なり。艷にもうつくしきかなとひとりごちつゝそゞろに物語の昔などしのばるゝにつけてあやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりたればおぼつかなくも筆を執りて

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも

藤なみの花をし見れば紫の繪の具取り出で寫さんと思ふ

藤なみの花の紫繪にかゝばこき紫にかくべかりけり

瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす

去年の春龜戸に藤を見しことを今藤を見て思ひいでつも

くれなゐの牡丹の花にさきだちて藤の紫咲きいでにけり

この藤は早く咲きたり龜井戸の藤咲かまくは十日まり後

八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

おだやかならぬふしもありがちながら病ひのひまの筆のすさみは日頃稀なる心やりなりけり。をかしき春の一夜や。　（二十八日）

春雨霏々。病牀徒然。天井を見れば風車五色に輝き、枕邊を見れば瓶中の藤紫にして一尺垂れたり。ガラス戸の外を見れば滿庭の新緑雨に濡れて、山吹は黄漸く少く、牡丹は薄紅の一輪先づ開きたり。やがて繪の具箱を出させて、五色、紫、緑、黄、薄紅、さていづれの色をかくべき。　（二十九日）

病室のガラス障子より見ゆる處に裏口の木戸あり。木戸の傍、竹垣の内に一むらの山吹あり。此山吹もとは隣なる女の童の四五年前に一寸許りの苗を持て來て戲れに植ゑ置きしものなるが今ははや繩もてつがぬる程になりぬ。今年も咲き〳〵て既になかば散りたるけしきをながめてうたゝ歌心起りたれば原稿紙を手に持ちて

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花

小繩もてたばねあげられ諸枝の垂れがてにする山吹の花

水汲みに往來の袖の打ち觸れて散りはじめたる山吹の花

まをとめの猶わらはにて植ゑしよりいく年經たる山吹の花

歌の会開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花

我庵をめぐらす垣根隈もおちず咲かせ見まくの山吹の花

あき人も文くばり人も往きちがふ裏戸のわきの山吹の花

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寐ながら見ゆる山吹の花

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

[illegible]、出たらめ、むちやくちや、いかなる評も謹んで受けん。若は只々歌のやすやすと口に乗りくるがうれしくて。　（三十日）

病牀で絵の写生の稽古するには、モデルにする者はそこらにある小い器か、さうでなければいけ花か盆栽の花か位で外に仕方が無い。其範囲内で花や草を画いて喜んで居るとある時不折の話に、一つの草や二つ三つの花などを画いて絵にするには実物より大きい位に画かなくては引き立たぬ、といふ事を聞いて嬉しくてたまらなかつた。俳句を作る者には殊に味ふべき教へである。　（五月一日）

「[illegible]」第一巻第二巻の召波句集小冊を読みて心づきし事一つ二つ

紙子きて嫁が手利をほゝゑみぬ

老婆心よく現はれてゐるとの評なれど余は此句は月並調に近き者と思ふ。

反椀は家にふりたり納豆汁

古くなつて木が乾くに従ひ反つて来るとあれども反椀は初より形の反つた椀にて、古くなつて反つた者には非るべし。

あたゝめよ瓶子なからの酒の君

此句に季ありや。若し酒をあたゝむるが季ならばそれは秋季なるべし。或は連句中の雑の句などに非ずや。

河豚しらず四十九年のひが事よ

四十九年の非を知るとは論語にあるべし。「ひが事」の「ひ」の字は「非」にかゝりたるなり。

佐殿に文覚鰒をすゝめけり

比喩に堕ちてゐるから善く無いとあれども此句の表面には比喩無し。裏面には比喩の面影あるべし。

無縁寺の夜は明けにけり寒念仏

寒念仏といふのは無縁の亡霊を弔ふために寒中に出歩行く者なれば此句も無縁寺の門で[illegible]の念仏し居る様には非るべし。

此村に長生多き閲見かな

老人が深山来て閲見をしてゐるのでは無く、老人の多い目出たい村を閲見してゐる事ならん。

附けていふ、碧梧桐近時召波の句を読んで三歎す。余も未だ十分に研究を得ざれども召波の句の趣向と言葉と共にはたらき居る事太祇蕪村几董にも勝るかと思ふ。太祇蕪村一派の諸家其造詣の深さ測るべからざる者あり。暁台闌更白雄等の句遂に児戯のみ。　（二日）

ある人いふ勲位官名の肩書をふりまはして何々養生法などいふ杜撰の説をなし世人を毒するは医界の罪人といはざるべからず、世には山師流の医者も多けれど只々金まうけのためとばかりにて其方法の無効無害なるは猶恕すべし、日本人は牛肉を食ふに及ばずなど言ふ牽強附会の説をつくり一寸蓄財家丁髷連を籠絡し、蜜柑は袋共に食へとか、芋の養分は中よりも外

皮に多しとか途方もなき養生法をとなへて人の腸胃を害すること驚き入つたる次第なり、故幽谷翁なども一時此説に惑ひて死期を早められたりと聞けり、とにかく勲位官名あるために惑はさるゝ人も多きにやあらん。世人は藥劑官を醫者の如く思ふ人あれど藥劑官は醫者に非ず、且つ其藥劑官の名さへ十分の資格もなくて恩惠的にもらひたるもありといへばあてにはならぬ事なり云々。

先頃手紙して此養生法を余に勸めたる人あり。其時引札やうのものをも共に贈られたり。養生法の引札すら既に變てこなるに、其上に引札の末半分には三十一文字に竝べられたる養生法の訓示を以て埋められたるを見ていよ／＼山師流のやり方なる事を看破せり。世の中に道徳の歌、教育の歌、或は此養生法の歌の如き者多くあれど斯かる歌など作る者に眞の道徳家、眞の教育家、眞の醫師ありし例なき事なり。今ある人の説を聞いて余の推測の違はざるを知れり。(三日)

しひて筆を執りて

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

別れ行く春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

くれなゐの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

若松の芽だちの綠長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

心弱くとこそ人の見るらめ。(四日)

岩手の孝子何がし母を車に載せ自ら引きて二百里の道を東京迄上り東京見物を母にさせけるとなん。事新聞に出でゝ今の美談となす。

たらちねの母の車をとりひかひ千里も行かん岩手の子あはれ

草枕旅行くきはみさへの神のいそひ守らさん孝子の車

みちのくの岩手の孝子名もなけど名のある人に豈劣らめや

下り行く末の世にしてみちのくに孝の子ありと聞けばともしも

世の中のきたなき道はみちのくの岩手の關を越えずありきや

春雨はいたくなふりそみちのくの孝子の車引きがてぬかも

みちのくの岩手の孝子文に書き歌にもよみてよろづ代までに

世の中は悔いてかへらずたらちねのいのちの内に花も見るべく

うちひさす都の花をたらちねと二人し見ればたぬしきろかも

われひとり見てもたぬしき都べの櫻の花を親と二人見つ

(五日)

新華族新博士の出來る毎に人は、又か、とい

ひて眉を顰むるが多し。これは他人の出世を妬む心より生ずる言葉にていとあさまし。余は寧ろ新華族新博士の益々多く愈々ふえん事を望むなり。されどこれも裏側より見たる嫉妬心といはばいふべし。

博士もお盃の巡り來るが如く來るものとすれば俗世間にて自分より頭の上にある先輩の數を數へて順番の來るを待つべきなり。雪嶺先生なども今頃お盃を廻されては「辭する程の價値も無い」とでも言はねばなるまじ。併し新博士には博士號を餘り有り難がらぬ人もたまにあるべけれど新華族になる程の人華族を有難がらぬは無かるべし。宮内省と文部省との違ふためか、實利と虛名とのためか、學識無きと學識あるとのためか。（六日）

五月五日にはかしは餅とて槲の葉に餅を包みて祝ふ事いづこも同じさまなるべし。昔は膳夫をかしはでと言ひ歌にも「旅にしあれば椎の葉に盛る」ともあれば食物を木の葉に盛りし事もありけんを、今の世に至りて猶五月のかしは餅ばかり其名殘をとゞめたるぞゆかしき。かしは餅の歌をつくる。

椎の葉にもりにし昔おもほえてかしはのもちひ見ればなつかし

白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも

いにしへゆ今につたへてあやめふく今日のもちひをかしは葉に卷く

うま人もけふのもちひを白かねのうつはに盛らずかしは葉に卷く

ことほぎて贈る五月のかしはもち食ふもくはずも君がまに／＼

かしは葉の若葉の色をなつかしみこゝだくひけり腹ふくるゝに

九重の大宮人もかしはもち今日はをすかも賤の男さびて

常にくふかくのたちばなそれもあれどかしはのもちひ今日はゆかしも

みどり兒のおいすゑいはふかしは餅われもくひけり病癒ゆがに

色深き葉廣がしはの葉を廣みもちひぞつゝむいにしへゆ今に　（七日）

碧梧桐いふ、

手料理の大きなる皿や洗ひ鯉

の句には理窟めきたる言ひ廻しもなきに何故に月並調なるか。余いふ、月並調といふは理窟めきたる言ひ廻しをのみいふに非ず、此句手料理も大きなる皿も共に俗なり、全體俗にして一點の雅趣なき者も亦月並調とはいふ、若し洗ひ鯉に代ふるに初松魚を以てせんか、いよ／＼以て純粹の月並調となるべし。碧梧桐いふ、手料理といひ料理屋といふは常に我々の用ゐる所、何が故に此語あれば月並調といふか。余いふ、そは月並派の仲間入でも爲さば直に分る事なり、先づ月並の題に初松魚といふ題出でたりとせよ、此題を得たる八公熊公の徒はなか／＼以て、「朝比奈の曾我を訪ふ日や初松魚」などいふ句の味を知る者に非ず、大概は著物を質に置くとか手料理で一杯やるとかいふやうなきまり文句を竝べて出すなり、さういふ句に飽きたる我等は最早手料理といふ語を聞いたばかりにて月並臭氣を感ずるやうになれり。併し手料理といふ語あればいつでも月並調なりといふにはあらず。

附けていふ。手料理といふ語は非常なる月並臭氣を感ずれども料理屋といふ語には臭氣無し。これは月並派にて手料理の語を多く用ゐれども料理屋といふ語を用ゐぬ故なり。斯かる事は實際に就いて知るべく、理を以て推すべから

ず。（八日）

今になりて思ひ得たる事あり、これ迄余が横臥せるに拘らず割合に多くの食物を消化し得たるは咀嚼の力與つて多きに居りし事を。噛みたるが上にも噛み、和らげたるが上にも和らげ、粥の米さへ噛み得らるゝだけは噛みしが如き、あながち偶然の癖にはあらざりき。斯く噛み噛みたるためにや咀嚼に最も必要なる第一の臼歯左右共にやう〳〵に傷はれて此頃は痛み強く少しにても上下の歯をあはす事出來難くなりぬ。かくなりては極めて柔かなるものも噛まずに呑み込まざるべからず。噛まずに呑み込めば美味を感ぜざるのみならず、腸胃直に痛みて痙攣を起す。是に於て衛生上の營養と快心的の娛樂と一時に奪ひ去られ、衰弱頓に加はり晝夜悶々、忽ち餓の問題は起る。人間は何が故に生きて居らざるべからざるか――

さへづるやから臼なす、奥の歯は蟲ばみけらし、はたつ物魚をもくはえず、木の實をば噛みても痛む、武藏野の甘菜若菜を、粥汁にまぜても煮ねば、いや日けに我つく息の、ほそり行くかも

下總の結城の里ゆ送り來し春の鶉をくはん歯もがも

菅の根の永き一日を飯もくはず知る人も來ずくらしかねつも　（九日）

ある人いふ、「寶船」第二號に

錢金を湯水につかふ櫻かな　鬼史

やはらかに風が引手の柳かな　月兎

の二句あり、月並調にあらずや。答へ、二句共に月並調に非ず、柳の句俚語を用ゐたる故月並調らしく見ゆれど實際月並派にては斯く巧に、思ひきつて、得いはぬなり、櫻の句も

錢金を湯水につかふ松の内

とでもなさば月並調となるべし、「櫻かな」といふ五文字は月並派にては得置かぬなり。（十日）

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀にうち臥してこのかた、年々春の暮より夏にかけてほとゝぎすといふ者の聲しば〳〵聞きたり。然るに今年はいかにしけん、夏も立ちけるにまだおとづれず。剝製のほとゝぎすに向ひて我思ふところを述ぶ。此剝製の鳥といふは何がしの君が自ら鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ために斯く製して贈られたる者ぞ。

龍岡に家居る人はほとゝぎす聞きつといふに我は聞かぬに

ほとゝぎす今年は聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつるかも

逆剝に剝ぎてつくれるほとゝぎす生けるが如し一聲もがも

うつ抜きに抜きてつくれるほとゝぎす見ればいつくし聲は鳴かねど

ほとゝぎすつくれる鳥は目に飽けどまことの聲は耳に飽かぬかも

置物とつくれる鳥は此里に昔鳴きけんほとゝぎすかも

ほとゝぎす聲も聞かぬは來馴れたる上野の松につかずなりけん

我病みていの寢らえぬにほとゝぎす鳴きて過ぎぬか聲遠くとも

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほとゝぎす

ほとゝぎす鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり

歌は得るに從ひて書く順序なし。（十一日）

試みに我枕もとに若干の毒薬を置け。而して余が之を飲むか飲まぬかを見よ。（十一日記）

五月十日、昨夜睡眠不定、例の如し。朝五時家人を呼び起して雨戸を明けしむ。大雨。病室寒暖計六十二度、昨日は朝來引き續きて來客あり夜寢時に至りしため墨汁一滴を認むる能はず、因つて今朝つくらんと思ひしも疲れて出來ず。新聞も多くは讀まず。やがて僅かに睡氣を催す。蓋し昨夜は背の痛み強く、終宵體温の下りきらざりしやうなりしが今朝醒めきりしにやあらん。熱さむれば痛みも減ずるなり。眠る。目さませば九時半頃なりき。稍〻心地よし。ほとゝぎすの歌十首に詠み足し、明日の俳句と共に封じて、使して神田に持ちやらしむ。

十一時半頃午餐を喰ふ。松魚のさしみうまからず、半人前をくふ。牛肉のタゝキの生牛肉少しくふ、これもうまからず。齒痛は常にも起らねど物を噛めば痛み出すなり。粥二杯。牛乳一合、紅茶同量、菓子パン五六箇、蜜柑五箇。

神田より使歸る。命じ置きたる鮭のカン詰を持ち歸る。こは成るべく齒に障らぬ者をとて擇びたるなり。

週報應募の牡丹の句の殘りを檢す。

寢床の側の疊に麻もて簞笥の環の如き者を二つ三つ處々にこしらへしむ。疊堅うして疊針透らずとて女ども苦情たら〳〵なり。こは此麻の環を余の手のつかまへどころとして寢返りを扶けんとの企なり。此頃體の痛み強く寢返りにいつも人手を借るやうになりたれば傍に人の居らぬ時などのために斯かる窮策を發明したる譯なるが、出來て見れば存外便利さうなり。

繃帶取替にかゝる。昨日は來客のため取替せざりしかば膿したゝかに流れ出て衣を汚せり。背より腰にかけての痛今日は強く、輕く拭はるるすら堪へ難くして絶えず「アイタ」を叫ぶ。はては泣く事例の如し。

浣腸すれども通ぜず。これも昨日の分を怠りしため秘結せしと見えたり。進退谷まりなさけなくなる。再び浣腸す。通じあり。痛けれどうれし。此二仕事にて一時間以上を費す。終る時三時。

著物二枚とも著かふ、下著はモンパ、上著は綿入。シャツは代へず。

三島神社祭禮の費用取りに來る。一疋やる。

繃帶かへ終りて後體も手も冷えて堪へ難し。俄かに燈爐をたき火鉢をよせ懷爐を入れなどす。

繃帶取替の間始終右に向き居りし故背のある處痛み出し最早右向を許さず。よつて仰臥のまゝにて牛乳一合、紅茶略同量、菓子パン數箇をくふ。家人マルメロのカン詰をあけたりとて一片持ち來る。

豆腐屋蓑笠にて庭の木戸より入り來る。

午後四時半體温を驗す、卅八度六分。しかも兩手猶冷、此頃は卅八度の低熱にも苦しむに六分とありては後刻の苦さこそと思はれ、今の内にと急ぎて此稿を認む。さしあたり書くべき事もなく今日の日記をでたらめに書く。仰臥のまゝ書き終る時六時、先刻より熱發してはや苦しき息なり。今夜の地獄思ふだに苦し。

雨は今朝よりふりしきりてやまず。庭の牡丹は皆散りて、西洋葵の赤き、をだまきの紫など。

（十二日）

今日は闕。但草稿卅二字余が手もとにあり。

（十三日）

松の若緑は一尺もあらうと思ふのがズン／＼と上へ眞直に伸びて行く。杉の新芽は小いのがいくつ出ても皆下へぶら下つてしまふ。それでも丈くらべしては到底松は杉に及びはせぬ。

（十四日）

五月はいやな月なり。此二三日漸く五月心地になりて不快に堪へず。頭もや／＼考少しもまとまらず。

夢の中では今でも平氣に歩行いて居る。併し物を飛びこえねばならぬとなるといつでも首を傾ける。

此頃の天氣豫報の當らぬにも驚く。

體の押されて痛い時は外に仕方が無いから、物に觸れぬやうに空中にフハリと浮きたいと思ふ、空氣の比重と人間の比重とを同じにして。

去年の今頃はゐざるやうにして次の間位へは往かれたものが今年の今は寐返りがむづかしくなつた。來年の今頃は動かれぬやうになつて居るであらう。

先日余の引いた凶の圖を穴守樣で流してもらふたとわざ／＼鼠骨の注進。蛤を掘つて見たい。

日光新緑を射て驟雨一過、快。緑のぬれぬれしたる中を鴉一羽葉に觸れさうに飛んで行く。

附記、後で見れば文體一致せず。頭のわるい證なり。

（十五日）

今日は朝から太鼓がドン／＼と鳴つて居る。根岸のお祭なんである。お祭といふとすぐに子供の時を思ひ出すが、余がまだ十か十一位の事であつたら、田舍に鄕居して居た伯父の内へお祭で招かれて行く時に余は懷劍をさして往た。これは余の内には頑固な風が殘つて居て、男は刀をさすべきであるが今となつてはそれも憚りであるから、せめて懷劍でもさして往くが善いといふので母の懷劍を貸されたのである。余はそれが嬉しいので、伯父の内へ往て後獨り野道へ出て何か此懷劍で切つて見たいと思ふて終にとめ紐を解いてしまふた。そこで其足元にあつた細い草を一本つかんでフッと切ると固より切る程の草でも無かつたので力は餘つて懷劍の切先は余が左足の足首の處を少し突き破つた。子供心に當惑して泣く／＼伯父の内迄歸ると果して母にさん／＼叱られた事があつた。其の時の小さい疵は長く殘つて居て今それを見る度に昔を偲ぶ種となつて居たが、今は其左の足の足首を見る事が出來ぬやうになつてしまふた。

（十六日）

痛くて／＼たまらぬ時、十四五年前に見た吾妻村あたりの植木屋の石竹畠を思ひ出して見た。

（十七日）

一「春夏秋冬」序

春夏秋冬は明治の俳句を集めて四季に分ち更に四季の各題目によりて編みたる一小册子なり。

春夏秋冬は俳句の時代に於て「新俳句」に次ぐ者なり。新俳句は明治三十年三川の依託により余の選拔したる者なるが明治三十一年一月余は同書に序して

（略）元祿にもあらず天明にもあらず文化にもあらず固より天保の俗調にもあらざる明治の特色は次第に現れ來るを見る。（略）

しかも此特色は或る一部に起りて漸次に各地方に傳播せんとする者此種の句を「新俳

句に求むるも多く得難かるべし。「新俳句」は主として模倣時代の句を集めたるにはあらずやと思はる。（略）但特色は日を逐ふて多きを加ふ。昨集むる所の「新俳句」は刊行に際する今已に其處何か幼稚なるを感ず。刊行し了へたる明日は果して如何に感ぜらるべき。云々

といへり。果して新俳句刊行後新俳句を閲いて見る毎に一年は一年より多くの幼稚と平凡と陳腐とを感ずるに至り今は新俳句の佳什を求むるに十の一だも得る能はず。是に於て新たに俳句集を編むの必要起る。然れども新俳句中の俳句は今日の俳句の基礎をなせる者宜しく相參照すべきなり。

新俳句編纂より今日に至る僅かに三四年に過ぎざれども其間に於ける我一個又は一團體が俳句上の經歷は必ずしも一變再變に止まらず。しかも一般の俳句界を概括して之を言へば、「蕪村調成功の時期」とも言ふべきか。

蕪村崇拜の聲は早くも已に明治二十八九年の頃に盛なりしかど實際蕪村調とおぼしき句の多く出でたるは明治三十年以後の事なるべし。而して今日蕪村調成功の時期といふも他日より見れば如何なるべきか固より豫め知る能はず。

太祇蕪村召波几董等を學びし結果は啻に新趣味を加へたるのみならず言ひ廻しに自在を得て複雜なる事物を能く料理するに至り、從ひてこれ迄捨てゝ取らざりし人事を好んで材料と爲すの異觀を呈せり。これ余が曾て唱道したる「俳句は天然を詠ずるに適して人事を詠ずるに適せず」といふ議論を事實的に打破したるが如し。

春夏秋冬は最近三四年の俳句界を代表したる俳句集となさんと思へり。しかも俳句切拔帳に對して擇ばんとすれば俳句多くして紙數に限りあり、遂に茫然として爲す所を知らず。辛うじて擇び得たる者亦到底俳句界を代表し得る者に非ず。されど若し新俳句を取つて之と對照せば其差啻に五十步百步のみならざるべし。

明治三十四年五月十六日　獺祭書屋主人

（十八日）

「春夏秋冬」凡例

一 春夏秋冬は明治三十年以後の俳句を集めて四季四册となす。

一 各季の題目は時候、人事、天文、地理、動物、植物の順序に從ふ。時候は立春、暮春、餘寒、暖、麗、長閑、日永の類をいふ。人事は初午、二日灸、涅槃會、畑打、雛祭、汐干狩の類をいふ。天文は春雪、雪解、春月、春雨、霞、陽炎の類をいふ。地理は氷解、水ぬるむ、春水、春山の類をいふ。動物は大略獸、鳥、雨棲爬蟲類、魚、百蟲の順序を用ゐる。植物は木を先にし草を後にす、木は花木を先にし草は花草を先にす。

一 新年は之を四季の外とし冬の部の附錄とす。其他は從來の定規に從ふ。

一 撰擇の標準は第一佳句、第二流行したる句、第三多くの選に入りし句等の條項に據る。

（十九日）

痛むにもあらず痛まぬにもあらず。雨しとしとと降りて枕頭に客無し。古き雜誌を出して星野博士の守護地頭考を讀む　十年の疑一時に解くる嬉しさ、冥途への土產一つふえたり。

（二十日）

余は閻魔の大王の構へて居る卓子の下に立つて

「お願ひでござりまする。」

といふと閻魔は耳を劈くやうな聲で

「何だ。

と應へた。そこで私は根岸の病人何がしであるが最早御前よりの御迎へが來るだらうと待つて居ても一向に來んのは何うしたものであらうか來るならいつ來るであらうかそれを聞きに來たのであると譯を話して丁寧に頼んだ。すると閻魔はいやさうな顏もせず直に明治三十四年と五年の帳面を調べたが、そんな名は見當らぬといふ事で、閻魔先生少しやつきになつて珠數玉のやうな汗を流して調べた結果、其名前は既に明治三十年の五月に帳消しになつて居るといふ事が分つた。それから其時の迎に往たのは五號の青鬼であるといふ事も書いてあるので其青鬼を呼んで聞いて見ると、其時迎へに往たのは自分であるが根岸の道は曲りくねつて居るのでとう〱家が分らないで引つ返して來たのだ、といふ答であつた。次に再度の迎へに往たといふ十一號の赤鬼を呼び出して聞いて見ると、成程往たことは往たが鶯横町といふ立札の處迄來ると町幅が狭くて火の車が通らぬから引つ返したといふ答である。之を聞いた閻魔様は甚だ當惑顏に見えたので、傍から地藏様が

「それでは事のついでに最う十年ばかり壽命を延べてやりなさい、此上は地藏の顏に免じて。

などとしやべり出された。余はあわて〱

「滅相なこと仰しやりますな。病氣なしの十年延命なら誰しもいやはございませんが、此頃のやうに痛み通されては一日も早くお迎への來るのを待つて居る許りでございます。此上十年も苦しめられてはやるせがございません。

閻王は直に余に同情をよせたらしく

「それならば今夜すぐ迎へをやろ。

といはれたので一寸驚いた。

「今夜は餘り早うございますな。

「それでは明日の晩か。

「そんな意地のわるい事をいはずに、いつとなく突然來てもらひたいものですな。

閻王はから〱と笑ひして

「宜しい、それでは突然とやるよ。併し突然といふ中には今夜も含まれて居るといふ事は承知して居てもらひたい。

「閻魔様。そんなにおどかしちやあ困りますよ。(此一句菊五調)

閻王から〱笑ふて

「こいつなか〱我儘ッ子ぢやわい。(此一句左團調)

拍子木　　幕　　(二十一日)

遠洋へ乗り出して鯨の群を追ひ廻すのは壯快に感ぜられるが佃島で白魚舟が篝焚いて居る景色などは甚だ美しく感ぜられる。太公望然として百本杭に鯉を釣つて居るのも面白いが小い子が破れた傘を持つて蜆を掘つて居るのも面白い。併し竹の先に網をつけて臭い泥溝をつついてアカイコ(東京でボーフラ)を取つては金魚の餌に賣るといふ商賣に至つては實に一點の風流氣もない。それでも分類するとこれも矢張漁業といふ部に屬するのださうな。(二十二日)

漱石が倫敦の場末の下宿屋にくすぶつて居ると、下宿屋の上さんが、お前トンネルといふ字を知つてるかだの、ストロー(藁)といふ字の意味を知つてるか、などと問はれるのでさすがの文學士も返答に困るさうだ。此頃伯林の灌佛會に滔々として獨逸語で演説した文學士なんかにくらべると倫敦の日本人は餘ほど不景氣と見える。(二十三日)

病牀に寢て一人聞いて居ると、垣の外でよその細君の立話がおもしろい。

あなたネ提灯を借りたら新しい蠟燭をつけて返すのがあたりまへですネ其れをあなた前の蠟燭も取つてしまふ人がありますヨ同じ事ですけれどもネさう云つたやうな事がネ……

などとどつかの惡口を云つて居る、今の政治家營業家などは皆提灯を借りて蠟燭を分捕する方の側だ。尤もづう／＼しいやつは提灯ぐるみに取つてしまつて平氣で居るやつもある。

　提灯を返せ／＼と時鳥　（二十四日）

余は、春夏秋冬を編むに當り四季の題を四季に分つに困難せり。そは陽暦を用ゐる地方（又は家）と陰暦を用ゐる地方（又は家）と兩樣ありてそれがために季の相異を來す事多ければなり。たとへば

陽暦を用ゐれば
春―灌佛、端午
夏―七夕、盂蘭盆會
秋―十夜、御命講、芭蕉忌
冬―新年、やぶ入

陰暦を用ゐれば
春―新年、やぶ入
夏―灌佛、端午
秋―七夕、盂蘭盆會
冬―十夜、御命講、芭蕉忌

の如きものにして東京は全く新暦を用ゐ居れど地方にては全く舊暦に從ひ居るもあり、又は半ば新暦を用ゐ半ば舊暦を用ゐ居るもあり。此際に當りて東京に從はんか地方に從はんかは新舊暦いづれが全國の大部分を占め居るかを研究しての後ならざるべからず。余は此事に就きて未だ研究する所あらざれども恐らくは「新年」の行事ばかりは新暦を用ゐる者全國中其過半に居るべしと信じ之を冬の部に附けたり。其他は舊歳時記の定むる所に從へり。但こは類別上の便宜をいふ者なれば實地の作句は其時の情況によりて作るべく、四季の名目などに拘るべきに非ず。　（二十五日）

「近古名流手蹟」を見ると昔の人は皆むつかしい手紙を書いたもので今の人には甚だ讀みにくいが、これは時代の變遷で自ら斯うなつたのであらう。今の人の手紙でも二三百年後に近古名流手蹟となつて出た時には其時の人はむづかしがつて得讀まぬかも知れぬ。それから最う一時代後の事を想像して明治百年頃の名家の手紙が近古名流手蹟となつて出たらどんな者であらうか。其手紙といふ者は恐らくは片假名平假名羅馬字などのごた／＼と混雜した者で迚も今日の我々には讀めぬやうな書きやうであらうと思はれる。　（二十六日）

羽後能代の方公手紙をよこして其中にいふ、

御著俳諧大要に言水の

　姨捨てん湯婆に燗せ星月夜

の句につきて「湯婆に燗せとは果して何のためにするにや云々と有之候其湯婆につき思ひ當れるは當地方にて銚子の事をタンポと申候事にてお銚子持つて來いをタンポ持つて來いと申候これにて思ふに言水の句も銚子の事をいへるにて作者の地方か又は信州地方の方言を用ゐたるには非るかと存候云々

此解正しからん。　（二十七日）

今は東京の小學校で子供を教へて居る人の話

に、東京の子供は田舍の子供に比べると見聞の廣い事は非常な者であるが仕事をさせても田舍の子よりは頓で不器用である、たとへば半紙で帳面を綴ぢさせて見るに高等科の生徒でありながら殆ど滿足に綴ぢ得る者は無い。これには種種な原因もあらうが總ての事が發達して居る東京の事であるから百事それ／＼の機關が備つて居て、田舍のやうに一人で何も彼もやるといふやうな仕組で無いのも其一原因であらう、これは子供の事では無いが余は東京に來て東京の女が魚の料理を爲し得ざるを見て驚いた、けれども東京では魚屋が魚の料理をする事になつて居るからそれで濟んで行く、濟んで行くから料理法は知らぬのである、云々との事であつた。道理のある話で餘程面白い。自分も田舍に住んだ年よりは東京に住んだ年の方が多くなつたので大分東京じみて來て田舍の事を忘れたが、成程考へて見ると田舍には何でも一家の内でやるから手間のあることが多い。洗濯は勿論、著物も縫ふ、疊も綴る、綿も引く、明日は氏神のお祭ぢやといふので女が出刃庖刀を荒砥にかけて鯉か、貰ふてある鯛の鱗を引いたり腹綿をつかみ出したりする樣は思ひ出して見る程面白い。併し田舍も段々東京化するから仕方が無い。（二十八日）

其先生の又云ふには、田舍の子供は男女に限らず唱歌とか體操とか云ふ課をいやがるくせがあるに東京の子供は唱歌體操などを好む傾きがある、と云ふ事であつた。これらも實に善く都鄙の特色をあらはして居る。東京の子は活潑でおてんばで陽氣な事を好み田舍の子は陰氣でおとなしくてはでな事をはづかしがると云ふ反對の性質が既に萠芽を發して居る。かう云ふ風であるから大人に成つて後東京の者は愛嬌があつてつき合ひ易くて何事にもさかしく氣がきいて居るのに反して田舍の者は甚だどんくさいけれどしかし國家の大事とか一世の大事業と云ふ事になると却て田舍の者に先鞭をつけられ東京ッ子はむなしく其後塵を望む事が多い。一得一失。（二十九日）

東京に生れた女で四十にも成つて淺草の觀音樣を知らんと云ふのがある。嵐雪の句に

五十にて四谷を見たり花の春

と云ふのがあるから嵐雪も五十で初めて四谷を見たのかも知れない。これも四十位になる東京の女に余が筍の話をしたら其の女は驚いて、筍が竹になるのですかと不思議さうに云ふて居た。此女は筍も竹も知つて居たのだけれど二つの者が同じものであると云ふ事を知らなかつたのである。しかしこの女らは無學文盲だから特にかうであると思ふ人も多いであらうが決してさう云ふわけではない。余が漱石と共に高等中學に居た頃漱石の內をおとづれた。漱石の內は牛込の喜久井町で田圃からは一町か二町しかへだたつてゐない處である。漱石は子供の時からそこに成長したのだ。余は漱石と二人田圃を散歩して早稻田から關口の方へ往たが大方六月頃の事であつたらう、そこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいで居るのは誠に善い心持であつた。此時余が驚いた事は、漱石は、我々が平生喰ふ所の米は此苗の實である事を知らなかつたといふ事である。都人士の菽麥を辨ぜざる事は往々此の類である。若し都の人が一匹の人間にならうと云ふのはどうしても一度は鄙住居をせねばならぬ。（三十日）

僅かにでた南京豆の芽が豆をかぶつたまゝで

鉢の中に五つ許り並んで居る。渾沌。(三十一日)

ガラス玉に十二匹の金魚を入れて置いたら或る同じ朝に八匹一緒に死んでしまつた。無殘。

(六月一日)

此頃碧梧桐の俳句一種の習調をなす。其中に「も」の字最も多く用ゐらる。たとへば

椿の木に高く幹も茶山かな　碧梧桐

の類なり。其可否は姑く措き、碧梧桐が一種の調をなすはさすがに碧梧桐たる所以にして、人は此種の句を好まざるも好まざる故を以て之を排斥せんとは思はず。然るに俳人の中には何かな新奇を弄し少しも流行におくれまじとする連中ありて早くも既に此「も」の字を摸せんとするは其輕挑其輕薄實に驚くべきなり。近日ある人はがきをよこしていふ、前日投書したる句の中に

いちご賣る世辭よき美女や峠茶屋

とありしは「美女も」の誤につき正し置く、一字といへどもおろそかにはなしがたき故わざわざ申し送る云々とあり。これ碧梧桐調を摸する者と覺えたり。碧梧桐調は專賣特許の如き者にいち早く之を摸して世に誇らんとするは不徳義といはんか不見識といはんか況して其句が平々凡凡「も」の一字により毫も價を増さゞるをや。一字といへどもおろそかにはなしがたきなどいふは老練の上にあるべし、まだ東西も知らぬ初學の上にては生意氣にも片腹痛き言分といふべきなり。一字の助字「や」と「も」とがどう間違ひたりとて句の價に幾何の差をも生ずる者にあらず、そんな出過ぎた考を起さうよりも先づ大體の趣向に今少し骨を折るべし。大體の趣向出來たらば其次は句作の上に前後錯雜の弊無きやう、言葉の竝べ方即ち順序に注意すべし。斯くして大體の句作出來たらば其次は肝腎なる動詞形容詞等の善く此句に適當し居るや否やを考へ見るべし。これだけに念を入れて考ふれば「てには」の如き助字は其間に自らきまる者なり。出鱈目の趣向、出鱈目の句作にことさらに「も」の一字を添へて物めかしたるいやみ加減は少しひかへてもらひたき者にこそ。(二日)

先日牡丹の俳句を募集したる時「ぼうたん」と四字に長くよみたる句の殆ど過半數を占めたるは實に意外なりき。いつの間に斯く全國に此語がひろがりけんと訝かるゝのみ。されど此語余には耳なれぬ故いづれの句も皆厭に感じたり。或人いふ蕪村既に此語を用ゐたれば何の差支もあるまじと思ひて我等も平氣に使ひ居たるなりと云々。余云ふ。蕪村既に用ゐたればこれを用ゐることにつき余が喙を容るべきにあらず、併しながら蕪村は牡丹の句二十もある中にぼうたんと讀みたるは唯〻一句あるのみ。而も其句は

ぼうたんやしろかねの猫こがねの蝶

といふ風變りの句なり、これを見れば蕪村も特に此句にのみ用ゐたるが如く決して普通に用ゐたるにあらず。それを蕪村が常に用ゐたるが如く思ひて蕪村が此語を用ゐたりなどいふ口實を設けこれを濫用することと蕪村は定めて迷惑に思ふなるべし、此事は特に蕪村の爲に辯じ置く。(三日)

募集の俳句は句數に制限なければとて二十句三十句四十句五十句六十句七十句も出す人あり。出す人の心持は此れだけに多ければどれか一句は拔かれるであらうと云ふ事なり。故に之

を寫實的描寫と云ふ。かやうなる句は初め四五句讀めば終迄讀まずとも其可否は分るなり。いな一句も讀まざる内に佳句なき事は分るなり。凡そ何の題にて俳句を作るも無造作に一題五六十句作れる程ならば俳句は誰にでもたやすく作れる誠につまらぬ者なるべし。そんなつまらぬ俳句の作りやうを知らうより絲瓜の作り方でも研究したがましなるべし。（四 日）

松宇氏來りて蕪村の文臺と云ふを示さる。天の橋立の松にて作りけるとか。木理あらく上に二見の岩と扇子の中に松とを畫がけり。筆法無雅氣にして蕪村若き時の筆かとも思はる。文臺の裏面には短文と發句とありて寶暦五年蕪村と署名あり。其字普通に見る所の蕪村の字といたく異なり。寶暦五年は蕪村四十一の年なれば蕪村の書方も未だ定まらざりしにや。姑く記して後考を待つ。（五 日）

此頃の短夜とはいへど病ある身の寢られねば行燈の下の時計のみ眺めていと永きこゝちす。午前一時、隣の赤兒泣く。

午前二時、遠くに雞聞ゆ。

午前三時、單行の汽鑵車通る。

午前四時、紙を貼りたる壁の穴僅にしらみて窓外の追込籠に鳥ちゝと鳴く、やがて一雀やがて羣す。

午前五時、戸をあける音水汲む音世の中はやうやうに音がちになる。

午前六時、靴の音茶碗の音子を叱る聲拍手の聲善の聲惡の聲千聲萬響遂に余の苦痛の聲を埋め終る。（六 日）

俳句を作る人大體の趣向を得て後言葉の遣ひ方をおろそかにする故主意の分らぬ樣になるが多し。

浮いて居る小便桶や梅の花

と云ふ句の如きは作者の意は梅の花が小便桶に浮いて居る積りなるべけれど此の云ひやうにては小便桶が水にでも浮いて居るやうに見えるなり。此種の句投書の中に甚だ多し。

隨て云ふ、浮いて居るを散つて居ると直しても矢張分らぬなり。（七 日）

「心の花」に大塚氏の日本服の美術的價値といふ演説筆記がある。この中に西洋の婦人服と日本の婦人服とを比較して最後の斷案が

始終動いて居る優美の舉動や又動くにつれて現はれて來る變化無限の姿を見せると云ふ點で日本服はドウしても西洋服に勝つて居ります

としてある。これは運動を見せる事の多いといふ理窟から推して日本服は西洋服よりも美なりと斷定せられたのであらうか、萬一さういふ次第ならばそれは不都合な議論であると思ふ。いふまでも無く我々が物の美醜を判斷するのは理窟の上からでは無く、只々感情の上からである。如何に理窟づめに出來上つた者でも感情が美と承知せぬからは美とはいはれぬ。運動を見せるとかいふ事を殊更に衣服の美の標準としたところで而して日本服が餘計に其美を現すやうに出來て居ると理窟の上で判斷せられたところで、さて感情の方でそれを美と感じなければ美といはれぬのは當然である。論者は果して感情の上で先づ美と感ぜられて而して後に此理窟を發明し出されたのであらうか。

論者若し感情の上から先づ日本女服の美を感ぜられたとならば余の感情は論者のと一致し

て居らぬといふ事を告白せねばならぬ。西洋日本兩様の婦人服を取つてどつちが善いかといはれても、それは一寸言ひかねる事であるが、併し「運動を見せる」とかいふ理窟一點張で日本服を以て勝れりとするのは感服が出來ぬ。況して「運動を見せる」といふ事は一方よりいへば日本服にはビラ〳〵した部分が多いといふ事で、さて其ビラ〳〵した部分が多い日本服には「だらりとして取締の無い」といふ缺點があるのだ。そこへ行くと西洋服の方は善くしまりがついて居る。しまりがあるといふても所謂「運動を見せる」部分が無いといふのでは無い。胴で細く引きしめた反對に裾は思ひきつて廣げてある。日本服の全體がだらりとして居るのとは趣が違ふ。

「運動を見せる」とかいふのも善いけれど、美な運動を見せてくれなければ困る。日本服には美な運動も見えるけれど醜な運動も見える。即ち運動する部分（袖とか裾とかゞ自由に出來て居るだけは運動のために醜な形を現す場合が多いのも必然である。

純粹の美の上からいへばそんなものであるが、實際衣服は半以上必要に迫られて其制が自ら定まつた者であるから、それをいはずに日本服と西洋服を比較するといふのは如何に理論上とはいへ無理な話である。現に論者は運動といふけれど其運動といふ事は歩行とか舞踏とかいふ事から出て來たのでそれは西洋人を主としての議論である。日本では中流以上の女は舞踏は勿論、眞直に立つて居る場合すら少いのであるから「運動を見せる」といふ一點で日本服を論ずるのは斟酌をせねばならぬ所がある。日本の女は坐つて居るのが普通だから衣服も坐れるやうに造らねばならぬ。美の上からいへば日本服は立つても坐つても美なやうに造らねばならぬといふむづかしい條件がある。（西洋服は膝を折つて坐る必要は無い）西洋服は裾の部分に裝飾が多いに反して、日本服には袖の部分に裝飾が多いのは皆膝を折つて坐るといふ必要より出て來たのである。それだから立つた時の形を比較して西洋服をほめ日本服をおとすのは殘酷である。（併し此論者のは日本服をほめるのだから別だ）　（八日）

調高く身苦し。初めは呻吟、中頃は叫喚、終りは吟聲となり放歌となり都々逸端唄謡曲假聲片々寸々又繼又續倏忽變化自ら測る能はず。一夜價の如く發熱詩の如く偈の如き警語一句二句重疊して來る、一たび口を出づれば復記する所なし。中に就きて僅かに記する所の一二句を取り補ふて四句となす。只ゞ解すべく解すべからざる處奇妙。

星落白蓮池。　池塘草色齊。
行々不逢佛。　一路失東西。　（九日）

東京にすばしこき俳人あり。運座の席に出て先輩の句に注意し又どのやうな句が多數の選に入るかを注意し其句を書きつけ歸り直に其句の特色を模倣して寧ろ剽竊して東京の新聞雜誌に投じ又は地方の新聞雜誌に投じ只ゞ其後れん事を恐る。一般の世人は又其模倣を模倣し其剽竊を剽竊し斯くして其の特色は忽ち天下に廣がり原句未だ世に出でざる先に既に陳腐に屬し、たとひ之を世に出すも誰も顧みる者無きに至る。これでは俳句界にも專賣特許局がほしくなるなり。　（十日）

病室の片側には綱を掛けて陸中小坂の木同より送り來し雪沓十種許り其外かんじき蓑帽子

など掛け並べ、其つゞきには満洲にありしと云ふ曼陀羅一幅極彩色にて青き佛赤き佛様々の佛達を書きしを掛け、ガラス戸の外は背後の空心よく晴れて庭の緑したゝらんとす。昨日膿瘍を切りて膿口つゞき出でたる為にや今日は顔のはれも引き、身内の痛みさへ常よりは甚く堪へ易き今日の只今、半杯のコヽアに牛乳を加へ一匙又一匙、これ程の心よさこの数十日絶えて無き事なり。（十一日）

植木屋二三人来て病室の前に高き棚を作る。日おほひの役は糸瓜瓢簞に頼むなり。栽植漸く了て各一香を酬ひ去る。曰く清遊日く雅遊。（十二日）

日本の牛は改良せねばならぬといふから日本の牛の乳は悪いかといふと、少しも悪い事は無い、只乳の分量が少いから不経済であるといふのだ。又牛肉は悪いかといふとこれも、牛肉は少しも悪い事は無いのみならず神戸牛と来たら世界の牛の中で第一等の美味であるのだ、それをなぜ改良するかといふに今の日本牛では肉の分量が少いのに食物は割合に多く食ふからつまり不経済であるといふのだ。

西洋いちごよりは日本のいちごの方が甘味が多い、けれども日本のいちごは粒につゝつて食卓に上すやうに仕組まれぬから遂に西洋種ばかり栽培するのだ。桜の實でも西洋のよりは日本の方が小いが甘味は多い、けれども日本では桜の實をつくつて賣るといふものがないので此の頃では西洋種の桜の實がそろ〳〵這入つて来た。

余の郷里四国などにも東京種の大根を植ゑる者がある。若し味の上からいへば土地固有の大根の方が甘味が多いのであるけれど東京大根は二倍大の大きさがあるから経済的なのであらう。

何でも大きな物は大味で、小さな者は小味だ。うまみからいふと小い者の方が何でもうまい。余の郷里にはホゴ、メバルなどいふ四五寸許りの雑魚を藁に串いて賣つて居る。さういふのを煮て食ふと實にうまい。併し小骨が多くて肉が少くて、食ふのに骨の折れるやうなわけだから料理に使ふことも出来ず客に出すことも出来ぬ。

日本は島国だけに何も彼も小さく出来て居る代りに所謂小味などいふうまみがある。詩文でも小品短篇が発達して居て絵畫でも疎畫略畫が発達して居る。併し今日のやうな世界一家といふ有様では不経済な事ばかりして居ては生存競争で負けてしまふから牛でも馬でもいちごでも桜んぼでも何でも彼でも輸入して来て、小い者を大きくし、不経済的な者を経済的にするのは大賛成であるが、それがために日本固有のうまみを全滅する事の無いやうにしたいものだ。

それに就いて思ひ出すのは前年やかましかつた人種改良問題である。若し人種の改良が牛の改良のやうに出来る者とすれば幾年かの後に日本人は西洋人に負けぬやうな大きな體格となり力も強く、病も無く、一人で今の人の三人前も働くやうな経済的な人種になるであらう。併し其時日本人固有の氣性のうまみは存して居るであらうか、何だか覚束ないやうにも思はれる。（十三日）

「日本人」に「試験」といふ問題が出て居たので端なく試験といふ縁あつて不愉快な事件を想ひ起した。

余は昔から學校はそれ程いやでもなかつたが試驗といふ厭な事のあるため遂には學校といふ語が既に一種の不愉快な感を起す程になつてしまふた。

余が大學豫備門の試驗を受けたのは明治十七年の九月であつたと思ふ。此時余は共立學校（今の開成中學）の第二級でまだ受驗の力は無い、殊に英語の力が足らないのであつたが、場馴れのために試驗受けようぢやないかといふ同級生が澤山あつたので固より落第の積りで戯れに受けて見た。用意などは露もしない。ところが科によると存外たやすいのがあつたが一番困つたのは果して英語であつた。活版摺の問題が配られたので恐る〳〵それを取つて一見すると五問程ある英文の中で自分に讀めるのは殆ど無い。第一に知らない字が多いのだから考へやうもこじつけやうも無い。此時余の同級生は皆片隅の机に並んで坐つて居たが（これは始よりお互に氣脈を通ずる約束があつた爲だ）余の鄰の方から問題中のむづかしい字の譯を傳へて來てくれるので、それで少しは目鼻が明いたやうな心持がして善い加減に答へて置いた。其時或字が分らぬので困つて居ると鄰の男はそれを「幇間」と教へてくれた、もつとも鄰の男も英語不案内の方で一二人鄰の方から順々に傳へて來たのだ、併しどう考へても「幇間」では其文の意味がさつぱり分らぬので此の譯は疑はしかつたけれど自分の知らぬ字だから別に仕方もないので幇間と譯して置いた。今になつて考へて見るとそれは「法官」であつたのであらう、それを口傳へに「ホーカン」といふたのが「幇間」と間違ふたので、法官と幇間の誤などは非常な大滑稽であつた。

それから及落の掲示が出るといふ日になつて、まさかに豫備門（一ツ橋外）まで往て見る程の心頼みは無かつたが同級の男が是非行かうといふので往て見ると意外の又意外に及第して居た。却て余等に英語など教へてくれた男は落第して居て氣の毒でたまらなかつた。試驗受けた同級生は五六人あつたが及第したのは菊池仙湖（謙二郎）と余の二人であつた。此時は試驗は屁の如しだと思ふた。

こんな有様で半は人の力を借りて入學して見ると英語の力が乏しいので非常の困難であつた。それも其の筈共立學校では余はやうやう高橋（是清）先生にパーレーの萬國史を教へられて居た位であつた。それで十七年の夏休みの間は本郷町の進文學舍とかいふ處へ英語を習ひに往つた。本はユニオン讀本の第四で先生は坪内（雄藏）先生であつた。先生の講義は落語家の話のやうで面白いから聞く時は夢中で聞いて居る、其の代り余等のやうな初學な者には英語修業の助けにはならなんだ。（これは書生氣質が出るより一年前の事だ）

とにかくに豫備門に入學が出來たのだから勉強してやらうといふので英語だけは少し勉強した。もつとも余の勉強といふのは月に一度位徹夜して勉強するので毎日の下讀などは殆どして往かない。それで學校から歸つて毎日何をして居るかといふと友と雜談するか春水の人情本でも讀んで居た。それでも時々は良心に咎められて勉強する、其法は英語を一語々々覺えるのが第一の必要だといふので、洋紙の小片に一つ宛英語を書いてそれを繰り返し〳〵見ては諳記するまでやる。併し月に一度位の徹夜では迚も學校で毎日やるだけを追つ付いて行くわけには往かぬ。

ある時何かの試驗の時に余の鄰に居た人は答案を英文で書いて居たのを見た。勿論英文なんかで書かなくても善いのを其人は自分の勝手ですら〳〵と書いて居るのだから余は驚いた。この様子では余の英語の力は他の同級生とどれだ

け違ふか分らぬのでいよ〳〵心細くなつた。此人は其後間もなく美妙齋として世に名のつて出た。

併し余の最も困つたのは英語の科でなくて數學の科であつた。此時數學の先生は隈本(有尙)先生であつて數學の時間には英語より外の語は使はれぬといふ制規であつた。數學の說明を英語でやる位の事は格別むづかしい事でもないのであるが余にはそれが非常にむづかしい。つまり數學と英語と二つの敵を一時に引き受けたからたまらない、とう〳〵學年試驗の結果幾何學の點が足らないで落第した。（十四日）

余が落第したのは幾何學に落第したといふよりも寧ろ英語に落第したといふ方が適當であらう。それは幾何學の初にあるコンヴアース、オツポジトなどといふ事を英語で言ふのが余には出來なんだので其外二行三行のセンテンスは諳記する事も容易でなかつた位に英語が分らなかつた。落第してからは二度目の復習であるから前のやうにない、餘程分り易い。コンヴアース、オツポジトを英語でしやべる位は無造作に出來るやうになつたが、惜しい事には此時の先生はもう隈本先生では無く、日本語づくめの平凡な先生であつた。併し此落第のために幾何學の初歩が心に會得せられ、從つて此幾何學の初歩に非常に趣味を感ずるやうになり、それにつゞいては、數學は非常に下手で且つ無知識であるけれど試驗さへ無くば理論を聞くのも面白いであらうといふ考を今に持つて居る。これは隈本先生の御蔭かも知れない。

今日は知らないが其頃試驗の際にズルをやる者は隨分澤山あつた。ズルとは試驗の時に先生の眼を偸んで手控を見たり鄰の人に聞いたりする事である。余も入學試驗の時に始めて其味を知つてから後はズルをやる事を何とも思はなんだが入學後二年目位に、ふと氣がついて考へて見るとズルといふ事は人の力を借りて試驗に應ずるのであるから不正な上に極めて卑劣な事であると始めて感じた。其以後は如何なる場合にもズルはやらなかつた。

明治二十二年の五月に始めて喀血した。其後は體が惡くなつて試驗がいよ〳〵いやになつた。

明治二十四年の春哲學の試驗があるので此時も非常に腦を痛めた。ブツセ先生の哲學總論であつたが余には其哲學が少しも分らない。一例をいふとサブスタンスのレアリテーは有るか無いかといふやうな事がいきなり書いてある。レアリテーが何の事だか分らぬに有るか無いか分る筈が無い。哲學といふ者はこんなに分らぬ者なら余は哲學なんかやりたく無いと思ふた。それだから滅多に哲學の講義を聞きにも往かなかつた。けれども試驗を受けぬ譯には往かぬから試驗前三日といふに哲學のノート、蒟蒻板に刷つたる手帳一冊とを携へたまゝ飄然と下宿を出て向島の木母寺へ往た。此境内に一軒の茶店があつて、そこの上さんに善く知つて居るから、斯う〳〵で二三日勉强したいのだが百姓家か何處か一間借りてくれまいかと頼んで見た。すると上さんのいふには二三日なら手前どもの内の二階が丁度明いて居るからお泊りになつても善いといふので大喜びで其二階へ籠城する事にきめた。

それから二階へ上つて蒟蒻板のノートを讀み始めたが何だか霧がかゝつたやうで十分に分らぬ、哲學も分らぬが蒟蒻板も明瞭でない、おまけに頭腦が惡いと來てゐるから分りやうは無い。二十頁も讀むと最ういやになつて頭がボーとしてしまふから、直に一本の鉛筆と一冊の手帳とを持つて散步に出る。外へ出ると春の末の

うらゝかな天氣で、櫻は八重も散つてしまふて、野道にはげん／＼が盛りである。何か發句にはなるまいかと思ひながら畦道などをぶらり／＼と歩行いて居ると其愉快さはまたとはない。腦病なんかは影も留めない。一時間ばかりも散歩すると又二階へ歸る。併し歸るとくたびれて居るので直に哲學の勉強などに取り掛る氣は無い。手帳をひろげて半出來の發句を頻りに作り直して見たりする。此時は未だ發句などは少しも分らぬ頃であるけれどさういふ時の方が却て興が多い。つまらない一句が出來ると非常に名句のやうに思ふて無暗に嬉しい時代だ。或はくだらない短歌などもひねくつて見る。こんな有樣で三日の間に紫字のノートをやう／＼一回半ばかり讀む、發句と歌が二三十首出來る。それでも其時の試驗はどうか斯うかごまかして濟んだ。もつともブッセといふ先生は落第點はつけないさうだから試驗がほんたうに出來たのだかどうだか分つた話ぢやない。　（十五日）

明治二十四年の學年試驗が始まつたが段々頭腦が惡くなつて堪へられぬやうになつたから遂に試驗を殘して六月の末歸國した。九月には出京して來る試驗を受けなくてはならぬので準備をしようと思ふても書生のむらがつて居るやかましい處では迚も出來さうも無いから今度は國から特別養生費を支出してもらふて大宮の公園へ出掛けた。萬松樓といふ宿屋へ往てこゝに泊つて見たが松林の中にあつて靜かな涼しい處で意外に善い。それにうまいものは食べるし丁度萩の盛りといふのだから愉快で／＼たまらない。松林を徘徊したり野逕を逍遙したり、くたびれると歸つて來て頻りに發句を考へる。試驗の準備などは手もつけない有樣だ。此愉快を一人で貪るのは惜しい事だと思ふて手紙で竹村黄塔を呼びにやつた。黄塔も來て一二泊して去つた。それから夏目漱石を呼びにやつた。漱石も來て一二泊して余も共に歸京した。大宮に居た間が十日ばかりで試驗の準備は少しも出來なかつたが頭の保養には非常に效驗があつた。併し此時の試驗もごまかして濟んだ。

此年の暮には余は駒込に一軒の家を借りて只ゞ一人で住んで居た。極めて閑靜な處で勉強には適して居る。しかも學課の勉強は出來ないで俳句と小說との勉強になつてしまふた。それで試驗があると前二日位に準備にかゝるので其時は机の近邊にある俳書でも何でも盡く片付けてしまふ。さうして机の上には試驗に必要なるノートばかり置いてある。そこへ靜かに座をしめて見ると平生亂雜の上にも亂雜を重ねて居た机邊が清潔になつて居るで、何となく心持が善い。心持が善くて浮き／＼すると思ふと何だか俳句がのこ／＼と浮んで來る。ノートを開いて一枚も讀まぬ中に十七字が一句出來た。何に書かうもそこらには句帳も半紙も出してないからラムプの笠に書きつけた。又一句出來た。又一句。餘り面白さに試驗なんどの事は打ち捨てゝしまふて、とう／＼ラムプの笠を書きふさげた。これが燈火十二ケ月といふので何々十二ケ月といふ事はこれから流行り出したのである。

斯ういふ有樣で、試驗だから俳句をやめて準備に取りかゝらうと思ふと、俳句が頻りに浮んで來るので、試驗があるといつでも俳句が澤山に出來るといふ事になつた。これ程俳魔に魅入られたら最う助かりやうは無い。明治二十五年の學年試驗には落第した。リース先生の歷史で落第したらうといふ推測であつた。落第もする筈さ、余は少しも歷史の講義聽きに往かぬ、聽きに往ても獨逸人の英語少しも分らぬ、おま

けに余は歴史を少しも知らぬ、其上に試驗にはノート以外の事が出たといふのだから落第せずには居られぬ。これぎり余は學校をやめてしまふた。これが試驗のしじまひの落第のしじまひだ。

余は今でも時々學校の夢を見る。それがいつでも試驗で困しめられる夢だ。（十六日）

名古屋を境界線として是より以東以北の地は朝飯をたいて味噌汁をこしらへる、是より以西以南の地は朝は冷飯に漬物で食ふ。これは氣候の寒暖の差から起つた事であらう。（十七日）

東京中の鼠を百萬匹として毎日一萬匹宛捕るとすれば百日にて全滅する理窟だ。併し百日の内に子を産んで行くとすれば實際はいつなくなるか分らぬ。何にしろ一旦始めたのだから鼠の盡きるまでやつて見るが善いであらう。頭の白い鼠や頭の黒い鼠もちと退治るが善い。（十八日）

先頃の新房漫錄に美の事を論じて獨りぎめになつては困るといふやうな事を書いてあつたと思ふ。余の考では美の判斷は二人ぎめでも三人ぎめでも無い、矢張獨りぎめより外は無い、只〻獨りぎめに善いのと惡いのといろ／＼ある。（十九日）

「俳星」に虚明の「お水取」といふ文があつて奈良の二月堂の水取の事が細しく書いてある。余は之を讀んでうれしくてたまらぬ。京阪地方には此様な儀式や祭が澤山にあるのだから京阪の人は今の内に成るべく細しく其様を寫して見せてもらひたい。其地の人は見慣れて面白くもなからうがまだ見ぬ者にはそれがどれ程面白いか知れぬ。殊に高樣な事は年々すたれて行くから今寫して置いた文は後には其地の人にも珍しくなるであらう。京都の壬生念佛や牛祭の記は見た事もあるがそれも我々の如き實地見ぬ者にはまだ分らぬことが多い。葵祭祇園祭などは特別な故でもあらうが却て細しく書いた者を見ぬ。大阪にも十日戎、住吉の田植などいふ事がある。奈良に薪能が今でもあるなら是非見て來て書いてもらひたい。御忌、御影供、十夜、お取越、御命講のやうな事でも各地方のを寫して比較したら面白いばかりでなく有益であらうと思はれる。（二十日）

ある人諸官省の門番の横著なるを説く。鳴雪翁曰く彼をして勝手に驕らしめよ、彼は此場合に於けるより外に人に向つて驕るべき場合を持たざるなり、此心を以て我は帽を脱いで丁寧に辭儀すれば則ち可なり、と。蓋し有道者の言。（二十一日）

學校で歴史の試驗に年月日を問ふやうな問題が出る。こんな事は必要があればだん／＼に覺えて行く。學校時代に無理に覺えさせようとするのは無用な事だ。（二十二日）

刺客は無くなるものであらうか無くならぬものであらうか。（二十三日）

板垣伯岐阜遭難の際は名言を吐いて生き殘ら

れたので少し間の悪い所があつた。星氏の最期は一言もないので甚だ淋しい。願はくはブルタス、汝も亦と云ふやうな一句があると大に振ふ所があつたらう。（二十四日）

中村不折君は來る二十九日を以て出發し西航の途に上らんとす。余は横濱の埠頭場まで見送つてハンケチを振つて別を惜む事も出來ず、はた一人前五十錢位の西洋料理を食ひながら送別の意を表する譯にもゆかず、已むを得ず紙上に惡口を述べて聊か其行を壯にする事とせり。

余の始めて不折君と相見しは明治二十七年三月頃の事にして其場所は神田淡路町小日本新聞社の樓上にてありき。初め余の新聞小日本に從事するや適當なる畫家を得る事に於て最も困難を感ぜり。當時の美術學校の生徒の如きは余等の要求を充たす能はず、其外浮世畫工を除けば善くも惡くも畫工らしき者殆ど世に無かりしなり。此時に際して不折君を紹介せられしは淺井氏なり。始めて君を見し時の事を今より考ふれば殆ど夢の如き感ありて、從來余の意見も趣味も君の教示によりて幾多の變遷を來し、君の生涯も亦此時以後、前日と異なる逕路を辿りしを思へば此會合は無趣味なるが如くにして其實前後の大關鍵たりしなり。其時の有様をいへば、不折氏は先づ四五枚の下畫を示されたるを見るに水戸弘道館等の畫にて二寸位の小さき物なれど筆力勁健にして凡ならざる所あり、而して其人を見れば目つぶらにして顔おそろしく服裝は普通の書生の著たるよりも猶遙かにきたなき者を著たり、此顔此衣にして此筆力ある所を思へば此人は尋常の畫家にあらずとまでは即座に判斷し、其畫はもらひ受けて新聞に載する事とせり。これ君の畫が新聞にあらはれたる始なり。

其頃新聞に骸骨物語とかいふ續き物ありしがある時之に畫を插まんとて其文の大意を書き此文にはまる様な畫をかいてもらひたしと君に頼みやりしに君は直に其の畫をかいて送りこしたり。此時の骸骨雨宿りの畫は意匠の妙といひ筆力の壯といひ社中の同人を驚かしたる者なり。余がこれまでの經驗によるに畫工に向つて注文する所往々にして其主意を誤られ、よし誤られざるも十箇條の注文の中僅かに三四箇條の條件を充たさるゝを以て滿足せざるべからざる有様なりき。然るに不折君に向つての注文は大主意だに説明し置けば些末の事は言はずとも痒き處に手の屆くやうに出來るなり、否余等素人の考の及ばざる處まで一々巧妙の意匠を盡せり。是に於て余は漸く不折君を信ずるの深きと共に君を見るの遲きを歎じたり。これより後また新聞の畫に不自由を感ずる事なかりき。（二十五日）

されど獨り余は不折君に對して滿たざる所あり、そは不折君が西洋畫家なる事なり。當時余は頑固なる日本畫崇拜者の一人にして、まさかに不折君がかける新聞の插畫を迄も排斥する程にはあらざりしも、油畫につきては絶對に反對し其沒趣味なるを主張してやまざりき。故に不折君に逢ふ毎に其畫談を聽きながら時に論難攻撃をこゝろみ其度毎に發明する事少からず。遂には君の説く所を以て今迄自分の專攻したる俳句の上に比較して其一致を見るに及んでいよいよ悟る所多く半年を經過したる後は稍ゝ畫を觀るの眼を具へたりと自ら思ふ程になりぬ。此時は最早日本畫崇拜にもあらず油畫排斥にもあらず、畫は此の如き者畫家は此の如き者と大方に知りて見れば今迄只ゝ漠然と善しといひ惡

しといひし我等同人は十中八九迄此誤れるを發見し、併せて今迄畫家に對する待遇の無禮なりしを憤ゆるに至れり。固より初より畫家なりとて毫も輕蔑したるにはあらねど畫家の職分に對しては誤解し居たり。余は畫家に向ひて注文すべき權利を有し畫家は余の注文に應じてかくべき義務を有すと思へりしは甚だしき誤解なり。これ蓋し當時の浮世畫工をのみ知りたる余には無理ならぬ誤解なりしなるべく、今も猶一般の人は此誤解に陥り居る者の如し。

明治二十七年の秋上野に例の美術協會の繪畫展覽會あり、不折君と共に往きて觀る。其時參考品御物の部に雪舟の屏風一雙（琴棊書畫を畫きたりと覺ゆ）あり。素人眼には誠につまらぬ畫にて、雪舟崇拜と稱せし當時の美術學校派さへ之を凡作と評したる程なりしが、不折君はやゝ暫し見て後頻りに讃歎して已まず、これ程の大作雪舟ならばこそ爲し得たれ到底凡人の及ぶ所に非ずといへり。斯くて不折君は余に向ひて詳に此畫の結構布置を説きこれだけの畫に統一ありて少しも抜目無き處さすがに日本一の腕前なりとて説明詳細なりき。余此時始めて畫の結構布置といふ事に就きて悟る所あり、獨りうれしくてたまらず。

二十八年の春金州に行きし時は不折君を見しより一年の後なれば少しは美といふ事も分る心地せしにぞ新たに得たる審美眼を以て支那の建築器具などを見しは如何に愉快なりしぞ。金州より歸りて後同年秋奈良に遊び西大寺に行く。此寺にて余の坐り居たる傍に二枚折の屏風ありて墨畫あり。つく／＼見て居るに其趣向は極めて平凡なれど其結構布置善く整ひ崖樹と遠山との組合せの工合など凡筆にあらず。無落款なりければ誰が筆にやと問ひしに小僧答へて元信の筆といひ傳へたりといふ。さすがに余の眼識は誤らざりけりと獨り心に誇りてやまず。余が不折君のために美術の大意を教へられし事は余の生涯に幾何の愉快を添へたりしぞ、若し之無くば數年間病牀に横はる身のいかに無聊なりけん。

（二十六日）

余が知るより前の不折君は不忍池畔に一間の部屋を借りそこにて自炊しながら勉強したりといふ。其間の困窮はたとふるにものなく一粒の米、一錢の貯だになくて食はず飲まずに一日を送りしことも一二度はありきとぞ。其他は推して知るべし。小日本と關係深くなりて後君は淡路町に下宿せしかば余は社よりの歸りがけに君の下宿を訪ひ話を聞くを樂とせり。君はいふ、今は食ふ事に困らぬ身となりしかば十分に勉強すべしと。而して毎日草鞋掛けにて熊谷あたりへ油畫の寫生に出かけ、夜間は新聞の插畫など畫く時間となし居たり。君が生活の状態は此時以後漸く改善して終に今日の盛運を致したる者なり。

君が風采のきたなきと耳の遠きとは君が常に職を求むる能はずして非常の困窮に陥りし所以なるか、余等相識る後も一般の人は君を厭ひ或は君を輕蔑し、余等傍にありて不折君に對し甚だ氣の毒に思ひし事も少からず。されど君が畫に於ける伎倆は次第にあらはれ來り何人も之に對しての賞讃を首肯せざる能はざる程になりぬ。達磨百題、犬百題、其他何十題、何五十題といふが如き、或は瓦當其他の模樣の意匠の如き、いよ／＼出でゝいよ／＼奇に、滾々として其趣向の盡きざるを見て、素人も玄人も舌を捲いて驚かざるはなし。

君の大百題などを畫くや、意匠に變化多く、材料の豐富なるは言ふまでもなけれど、中にも歴史上の事實多きを見て、世人は余等の竊かに材料を供給するに非るかを疑へり。併しこは

誤りたる推測なり。余は毫も君に材料を與へざるのみか却て君の說明によりて歷史上の事實を教へられし事少からず。とはいへ君は決して博學の人にあらず、讀書の分量は餘り多からざるを信ず。而して此の如く多方面にわたりて材料を得る者は平素萬事に對して注意の深きに因らずばあらず。君の如く注意の綿密にして且つ範圍の廣きは蓋し稀なり。

畫く者は論ぜず、論ずる者は畫かず。君の如く畫家にして且つ論客なるは世に少し。若し不折君の說を聞かんと欲せば一たび君を藤寺横町の書室に訪へ。質問未だ終らざるに早く既に不折君の滔々として辯じ初むるを見ん、若し傍より妨げざる限りは君の答辯は一時間も二時間も續くべく、しかも其言ふ所條理井然として亂れず、實例ある者は實例（繪畫の類）に就きて一々に指示す。通例畫家が言ふ所の漠然として要領を得ざるの比に非ず。余が君のために教へられて何となく悟りたるやうに思ふも畢竟君の教へやうのうまきに因る。（二十七日）

各自專門の學藝技術に熱心なる人は少くもあらねど不折君の畫に於ける程熱心なるは少かるべし。いつ逢ふてもいつまで語つても苟も人に逢ひて之と語らば終始畫談をなして倦まず、筆あらば直に筆を執つて戯畫を畫き或は說明のために種々の畫をかく。時を嫌はず處を擇ばず宴會の席にても衆人の中にても人は酒を飲み妓をひやかしつゝある際にても不折君は獨り畫を畫き畫を談ず。其熱心實に感ずるに餘ありといへども若し一般の人より見れば餘り熱心過ぎて却てうるさしと思はるゝ所多からん。然れども不折君はそれ程人にうるさがらるゝとは知らであるべし。これ君の聾なるが爲のみ。

君が勉強は信州人の特性に出づ、されど信州人といへども君の如く勉強するは多からざるべし。君は自分の爲にも勉強し人に賴まれても勉強す。一枚方二尺位の油畫を畫く爲に毎日郊外二三里の處に行きて一箇月も費したる事屢々あり。一昨年の初夏なりけん君カンヴアスを負ふて澁川に行き赤城山を寫す。二十餘日を經て五尺許りの大幅見事に出來上りたる積りにて得々として歸り直に淺井氏に示す。淺井氏曰く場所廣くして遠近さだかならず子若し此畫を畫とせんとならば更に一週の日子を費して再び澁川に往けと。君は淺井氏よりの歸途余の病牀を訪はれしが其時君の顏色たゞならず聲ふるひ耳遠く非常に激昂の樣見えしかば余は君が旅の勞れと今日の激昂との爲に熱病にでもかゝりはせずやと憂ひたる程なり。何ぞ計らん其翌日君は再びカンヴアスを抱へて澁川に到り十分に畫き直して一週間の後歸京せり。余は今更に君が不屈不撓の勇氣に驚かざるを得ざりき。此畫は淡煙と題して展覽會に出でたる者なり。（宮内省御用品となる）是等は皆自分のために勉强したる例なり。

畫家は多くは其性疎懶にして人に賴まれたる事も期日迄に出來るは甚だ少きが常なり。然るに不折君は人に賴まれたる程の事盡く之に應ずるのみならず、其期日さへ誤る事少ければ書肆などは甚だ君を重寶がりまたなきものに思ひて教科書の插畫、其他書籍雜誌の插畫及び表紙を依賴する者絶えず。想ひ起す今より七八年前椎舟の畫天下に行はれ椎舟の外に畫家なしと迄思はれたる頃なりき。博文館にても何かの插畫を椎舟に賴みしに期に及んで出來ず、館主自ら車を飛ばして椎舟を訪ひ頭を下げ辭を卑うし再三繰返して懇ろに賴み居たる事あり。それを思へば期日を延すべからざる雜誌などの插畫かきとして敏腕にして且つ規則的なる不折君を得たる博文館の喜び察すべきなり。其の

外套の前に書畫帖を置いて畫を乞ふ者あれば君は直に筆を揮ふて瞬時に畫を成す。爲山氏の深思熟考する者と全く異なり。只々君が容易に依頼者を滿足するの弊として往々粗末なる杜撰なる拙劣なる無趣味なる畫を成す事あり。然れども依頼者は多く君の雷名を聞いて來る者、畫の巧拙は之を鑑別するの識なし。容易に君の揮毫を得たるを喜んで皆ホク／＼として歸る。是等は君が人に頼まれて勉強する一例なり。（二十八日）

不折君と爲山氏は同じ小山門下の人で互に相識る仲なるがいづれも一家の見識を具へ立派なる腕を持ちたる事とて、自ら競爭者の地位に在るが如く思はる。縱し當人は競爭する積りに非るも傍に在る余等常に兩者を比較して評する傾向あり。しかも二人の畫も性質も擧動も容貌も一々正反對を示したるは殊に比較上興味を感ずる所以なり。二人の優劣は固より容易に言ふべからざるも互に一長一短ありて甲越對陣的の好敵手たるは疑ふべきにあらず。先づ其容貌をいはんに爲山氏は丈高く面長く全體にすらりとしたるに反し、不折君は丈低く面鬼の如く蹲ばう／＼として全體に逞き方なり。爲山氏は善き衣善き駒下駄を著け金が儲かれば直に費し果すに反して不折君は粗衣粗食の極端にも耐へ成るべく質素を旨として少しにても臨時の收入あれば之を貯蓄し置くなり。君が赤貧洗ふが如き中より身を起して獨力を以て住居と畫室とを建築し、それより後二年ならずして洋行を思ひ立ちしかも他人の力を借らざるに至ては君が勤儉の結果に驚かざるを得ず。爲山氏は餘り議論を好まず普通の談話すら聲低くして聞き取り難き程なるに反して不折君は議論は勿論、普通の談話も聲高く明瞭なり。爲山氏は感情の人にして不折君は理窟の人なり。爲山氏は無精なる方にて不折君は勉強家の隨一なり。爲山氏は酒も飲み煙草も飲む。不折君は酒も飲まず煙草も飲まず。凡そ此等の性質嗜好の相異はさる事ながら其相異が盡く畫の上にあらはるゝに至つて益々興味を感ずるなり。

爲山氏の畫は巧緻精微、不折君の畫は粗樸雄健。爲山氏は熟慮して後に始めて筆を下し不折君はいきなりに筆を下して縱横に畫きまはす。爲山氏は一草一木を畫きて畫となす事も少からねど不折君は寸大の紙にも猶山水村落の大景を描く癖あり。同一の物を寫生するに爲山氏のは實物よりも稍々丈高く畫き不折君のは實物よりも稍々丈低く畫く。爲山氏は何か畫いても自分の氣に入らねば直に捨てゝ顧みず、不折君は一旦畫き初めし者はどうでもかうでも仕上げてしまふ。爲山氏は調子に乘つて畫く、調子乘らざればいつ迄も畫かず、不折君は初より終迄孜々として怠らずに畫く。此等の相異枚擧に遑あらず。（二人相似の點も無きに非ず）

余は猶多くを言はんと思ひしも不折君出發後故無きに矢を放つもいかゞなれば要求質問注意の箇條を節略して左に記し以て長々しき文章の終となし置くべし。

傲慢なるは善し。弱者後輩を輕蔑する莫れ。

君は耳遠きが爲に人の話を誤解する事多し。注意を要す。（少しほめたるを大にほめたるが如く思ふ誤、即ち程度の誤、最も普通なり）

人二人互に話し居る最中に突然横合から口を出さぬやう注意ありたし。

餘りうかれぬやうありたし。

畫の事に就きてとかうの注意がましき事をいふなどは餘り生意氣の次第なれど余は豫てより君に向つていひたく思ひながらも此頃の容態にては君に聞ゆる程の聲を出す能はず、因つてここに一言するなり。それは君の嗜好が餘りに大、

冊などいふ方に傾き過ぎて小にして精、細にして新などいふ方の美を賞し過ぎはせずやといふ事なり。近年君の畫を見るに稍々其嗜好を變じ今日にては必ずしもパノラマ的全景をのみ喜ぶ者には非るべけれど猶ややもすれば廣袤の大なる場所を貴ぶの癖なきに非ず。油畫にてはなけれど小き書畫帖に大きなる景色を畫いて得々たるが如きも余は久しき前より心に之を厭はしく思へり。大景必ずしも惡からずといへども大景―少くとも家屋と樹木と道路位は完備するでありさへすれば畫になる如く思へるは如何にしても君が大景に偏するを證すべきなり。併し余は大景を捨てゝ小景を畫けといふに非ず、只々君の嗜好の偏するにつきて平生意見の衝突すれども直に言はれざりし不平をこゝに僅かに漏らすのみ。

西洋へ往きて勉強せずとも見物して來れば澤山なり。其上に御馳走を食ふて肥えて戻ればそれに上こす土産はなかるべし。餘り齷齪と勉強して上手になり過ぎ給ふな。（二十九日）

羯翁の催しにて我枕邊に集まる人々、正客不折を初として鳴雪、湖村、虚子、豹軒、及び諸氏等、蕨眞も折から來合されたり。草庵爲に光を生ず。

虚子後に殘りて謠曲舟辨慶一番謠ひ去る。（三十日）

健康な人が蚊が少し出た許りの事で大騷ぎをやつてうるさがつて居る。病人は蒲團の上に寢たきり腹や腰の痛さに堪へかねて時々わめく、熱が出盛ると全體が苦しいから絶えずうなる、蚊なんどは四方八方から全軍をこぞつて刺しに來る。手は天井からぶらさがつた力紐にすがつて居るので蚊を打つ事は出來ぬ。仕方がないので蚊帳をつると今度は力紐に離れるので病人は勞力の半を失ふてしまふ。其上に若し夜が眠られぬと來るとやるせも何もあつたものぢやない。（七月一日）

鮓の俳句をつくる人には譯も知らずに「鮓桶」「鮓壓す」などいふ人多し。昔の鮓は鮎鮓などなりしならん。それは鮎を飯の中に入れ酢をかけたるを桶の中に入れておもしを置き、斯くて一日二日長きは七日も其餘も經て始めて食ふべくなる、之を「なる」といふ。今でも處によりて此風殘りたり。雜鮓も同じ事なるべし。余の郷里にて小鯛、鰺、鰆など海魚を用ゐるは海國の故なり。これらは一夜壓して置けばなるゝにより一夜鮓ともいふべくや。東海道を行く人は山北にて鮎の鮓賣るを知りたらん、これらこそ夏の季に屬すべき者なれ。今の普通の握り鮓ちらし鮓などはまことは雜なるべし。（二日）

病牀六尺

一

○病牀六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病牀が余には廣過ぎるのである。僅かに手を延ばして疊に觸れる事はあるが、蒲團の外へまで足を延ばして體をくつろぐ事も出來ない。甚しい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も體の動けない事がある。苦痛、煩悶、號泣、麻痺劑、僅かに一條の活路を死路の内に求めて少しの安樂を貪る果敢なさ、其れでも生きて居ればいひたい事はいひたいもので、毎日見るものは新聞雜誌に限つて居れど、其れさへ讀めないで苦しんで居る時も多いが、讀めば腹の立つ事、癪にさはる事、たまには何となく嬉しくて病苦を忘るゝ樣な事が無いでもない。年が年中、しかも六年の間世間も知らずに寢て居た病人の感じは先づこんなものですと前置きして

○土佐の西の端に柏島といふ小さな島があつて二百戸の漁村に水産補習學校が一つある。教室が十二坪、事務所とも校長の寢室とも兼帶で三疊敷、實習所が五六坪、經費が四百二十圓、備品費が二十二圓、消耗品費が十七圓、生徒が六十五人、校長の月給が二十圓、しかも四年間昇給なしの二十圓ぢやさうな。其ほかには實習から得る利益があつて五錢の原料で二十錢の罐詰が出來る。生徒が網を結ぶと八十錢位の賃銀を得る。其等は皆郵便貯金にして置いて修學旅行でなけりや引出させないといふ事である。此小規模の學校が其道の人には此頃有名になつたさうぢやが、世の中の人は勿論知りはすまい。余は此話を聞いて涙が出る程嬉しかつた。我々に大きな國家の料理が出來んとならば、此水産學校へ這入つて松魚を切つたり、鰯を煑したり網を結んだりして斯樣な校長の下に教育せられたら樂しい事であらう。（五月五日）

二

○余は性來臆病なので鐵砲を持つことなどは大嫌ひであつた。尤も高等中學に居る時分に演習に往つてモーゼル銃の空撃ちをやつたことがあるが、其の外には室内射的といふことさへ一度もやつたことがない。人が鐵砲を持つて居るのを見てさへ、何だか劍呑で不愉快な感じがする位であるから樂しみに銃獵に出かけるなどといふことはいくらすゝめられても思ひつかぬことであつた。昨年であつたか岩崎某がその友人である大學生の某を誤つて撃殺したといふことを聞いた時に、縁も由縁もない人であるけれど余は不愉快で堪らなかつた。然るにこの事件は撃たれたる某の父の正しき請求によりて、岩崎一家は以來銃獵をせぬといふ家憲を作りて目出たく納まつたのでそれは愉快に局を結んだが、隨つて一般の銃獵といふことに對しては益々不安を感じて來た。然るに近來眼がわるくなると共に、理窟臭いものは一切讀めぬことになつて、遂には新聞などに出て居る銃獵談をよむほど面白く心ゆくことはなかつた。ある坊さんがいふには、銃獵ほど殘酷なものはない、鳥が面白く歌ふて居るのを出しぬきに後から撃つといふのは丁度人間が發句を作つて樂しんで居るのを、後ろから撃殺すやうなものである、こんな殘酷なことはないといふたことがある。それは尤もな話で、鳥の方から考へる時には誠に殘酷に

違ひないが、併し普通の俗人が銃獵をして居る時の心持は誠に無邪氣で愛すべき所があるので、その銃獵談などを聞いても政治談や經濟談を聞くのと違つて、愉快な感じを起す事になるのであらう。

○そのうへに銃獵は山野を場所として居るのでそれが爲に銃獵談に多少の趣を添へることが多い。殊に玄人になると雀や頬白を撃つて徒に獵の多いことを誇るやうなことはせぬやうになり、自ら其間に道の存する所の見えるのも喜ぶべき一箇條である。然るに惜しいことには無風流な人が多いので、その話をきくと殺風景な點が多いのは遺憾なことである、銃獵談は前いふやうに山野に徘徊するのであるから、鳥を撃つといふことよりも、それに附屬したる件に面白味があるのにきまつて居るが、其趣を發揮する人が甚だ少ない。近頃獵友といふ雜誌で飯島博士が獨逸で銃獵した事の話が出て居るが、是は餘程こまかく書いてあるので、外のよりは際立つて面白いことが多い。例せば井上公使の獵區に出掛けた時の有樣を說いて、各々が手製の日本料理をこしらへて、正宗の瓶を傾け、しかもそこに雇ひつけの獵師(獨逸人)に日本語を教へてあるので、それから部屋の中でからに、飯を食ふ時などは、手をポン〳〵と叩く、ヘイと返辭をするのだと教へて置く、所が獵師の野郎ヒイといふて奇妙な聲を出して返辭をする、どうも捧腹絶倒實に面白い生活です。などと書いてあるところは實に面白く出來て居る。總てかういふ風に銃獵談はして貰ひたいものである。否もう少しこまかく敍したならば更に面白いに違ひない、銃獵もこゝに至つて殘酷な感を脫してしまふことが出來る。(六日)

三

○東京の牡丹は多く上方から苗が來るので、寒牡丹だけは東京から上方の方へ輸出するのだやさうな。この外に義太夫といふやつも上方から東京へ來るのが普通になつて居る。さうして東京の方を本として居るのは、常磐津、淸元の類ひである。牡丹は花の中でも最も派手で最も美しいものであるのと同じやうに、義太夫は是等の音曲のうちで最も派手で最も重々しいものである。して見ると美術上の重々しい派手な方の趣味は上方の方に發達して、淡泊な方の趣味は東京に發達して居るのであらうか、併し句でいふて見ても昔から京都の方が美しい重々しい方に傾いて、江戸の方は一ひねくりひねくつたやうなのが多い。蕪村の句には牡丹の趣がある。闌更の句は力は足らんけれども矢張牡丹のやうな所がある。梅室なども俗調ではあるが、松葉牡丹位の趣味が存して居る。江戸の方は其角嵐雪の句でも白雄一派の句でも假令いくらかの美しい所はあるにしても、多少の澁味を加へて居る所はどうしても寒牡丹にでも比較せねばなるまい。(七日)

四

○西洋の古畫の寫眞を見て居たらば、二百年前位に和蘭人の畫いた風景畫がある。是等は恐らくは此時代に在つては珍しい材料であつたのであらう。日本では人物畫こそ珍しけれ、風景畫は極めて普通であるが、併しそれも上古から風景畫があつたわけではない。巨勢金岡時代はいふまでもなく、それより後土佐畫の起つた頃までも人間とか佛とかいふものを主として居つたのであるが、支那から禪僧などが來て佛教上に互に交通が始まつてから、支那の山水畫なる者が輸入されて、それから日本にも山水畫が流行したのである。

日本では山水畫といふ名が示して居る如く、

多くは山や水の大きな景色が畫いてある。けれども西洋の方はそんなに馬鹿に廣い景色を畫かぬから、大木を主として畫いた風景畫が多い。それだから水を畫いても川の一部分とか海の一部分とかを寫す位な事で、山水畫といふ名をあてはめることは出來ぬ。

西洋の風景畫を見るのに、昔のは木を畫けば大木の嚴めしいところが極めて綿密に寫されて居る。それが近頃の風景畫になると、木を畫いても必ずしも大木の嚴めしいところを畫かないで、普通の木の若々しく柔かな趣味を輕快に寫したのが多いやうに見える。堅い趣味から柔かい趣味に移り嚴格な趣味から輕快な趣味に移つて行くのは今日の世界の大勢であつて必ずしも畫の上ばかりで無く、又必ずしも西洋ばかりに限つた事でも無い樣である。

嘗て文學の美を論ずる時に、敍事、敍情、敍景の三種に別つて論じた事があつた。それを或人は攻撃して、西洋には敍事、敍情といふ事はあるが敍景といふ事は無いといふたので、余は西洋の眞似をしたのではないといふて其時に笑ふた事であつた。西洋には昔から風景畫も風景詩も少いので學者が審美的の議論をしても風景の上には一切說き及ぼさないのであるさうな。これは西洋人の見聞の狹いのに基いて居るのであるから先づ彼等の落度といはねばならぬ。（八日）

五

○明治卅五年五月八日雨記事。

昨夜少しく睡眠を得て昨朝來の煩悶稍ゝ度を減ず、牛乳二杯を飮む。

九時麻痺劑を服す。

天岸醫學士長州へ赴任のため暇乞に來る。序に余の脈を見る。

碧梧桐、茂枝子早朝より看護のために來る。

鼠骨も亦來る。學士去る。

きのふ朝倉屋より取り寄せ置きし畫本を碧梧桐等と共に見る。月樵の不形畫藪を得たるは嬉し。其外鶯邨畫譜、景文花鳥畫譜、公長略畫など選り出し置く。

午飯は粥に刺身など例の如し。

繃帶取替をなす。疼痛なし。

ドンコ釣の話。ドンコ釣りはシノベ竹に短き絲をつけ蚯蚓を餌にして、ドンコの鼻先につきつけること。ドンコ若し食ひつきし時は勢よく竿を上ぐること。若し釣り落してもドンコに限りて再度釣れることなど。ドンコは川に住む小魚にて、東京にては何とかハゼといふ。

鄕里松山の南の郊外には池が多きといふ話。池の名は丸池、角池、庖刀池、トーハゼ（唐櫨）池、鏡池、彌八婆々の池、ホイト池、藥師の池、浦屋の池など。

フランネルの切れの見本を見ての話。縞柄は大きくはつきりしたるがよいといふこと。フランネルの時代を過ぎて、セルの時代となりしことなど。

茂枝子ちよと内に歸りしが稍ゝありて來り、手飼のカナリヤの昨日も卵産み今朝も卵産みしに今俄に樣子惡く巢の外に出て身動きもせず如何にすべきとて泣き惑ふ。そは糞づまりなるべしといふもあれば尻に卵のつまりたるならんなど云ふもあり。余は戯れに祈禱の句をものす。

菜種の實はこべらの實も食はずなりぬ
親鳥も頼め子安の觀世音
竹の子も鳥の子も只やす〳〵と
糞づまりならば卵の花下しませ

晩飯は午飯と略ゝ同樣。

體溫三十六度五分。

一點燈後碧梧桐謠曲一番殺生石を謠ひ了る。

余が頭稍ゝ惡し。

鼠骨歸る。

主客五人打ちよりて家計上のうちあけ話しあり、泣く、怒る、なだめる。此時窓外雨やみて風になりたるとおぼし。

十一時半又麻痺劑を服す。

碧梧桐夫婦歸る。時に十二時を過る事十五分。

余此頃精神激昂苦悶已まず。睡覺めたる時殊に甚だし。寢起を恐るゝより從つて睡眠を恐れ從つて夜間の長きを恐る。碧梧桐等の歸る事遲きは余のために夜を短くしてくれるなり。　（十日）

六

○今日は頭工合稍〻善し。虚子と共に枕許に在る畫帖をそれこれとなく引き出して見る。所感二つ三つ。

余は幼き時より畫を好みしかど、人物畫よりも寧ろ花鳥を好み、複雜なる畫よりも寧ろ簡單なる畫を好めり。今に至つて何其傾向を變せず、其故に畫帖を見てもお姫樣一人畫きたるよりは椿一輪畫きたるかた興深く、張飛の蛇矛を携へたらんよりは柳に鶯のとまりたらんかた快く感ぜらる。

畫に彩色あるは彩色無きより勝れり。墨畫ども多き畫帖の中に彩色のはつきりしたる畫を見出したらんは萬綠叢中紅一點の趣あり。

呉春はしやれたり、應擧は眞面目なり、余は應擧の眞面目なるを愛す。

手競畫譜を見る。南岳、文鳳二人の畫合せなり。南岳の畫は何れも人物のみを畫き、文鳳は人物の外に必ず多少の景色を帶ぶ。南岳の畫は人物徒に多くして趣向無きものあり、文鳳の畫は人物少くとも必ず多少の意匠あり、且つ其形容の眞に逼るを見る。もとより南岳と同日に論ずべきに非ず。

或人の畫に童子一人左手に傘の疊みたるを抱へ右の肩に一枝の梅を擔ぐ處を畫けり。或は餘處にて借りたる傘を返却するに際して梅の枝を添へて贈るにやあらん。若し然らば畫の簡單なる割合に趣向は非常に複雜せり。俳句的といはんか、謎的といはんか、而も斯の如き畫は稀に見るところ。

抱一の畫、濃艷愛すべしと雖も、俳句に至つては拙劣見るに堪へず。其濃艷なる畫に其拙劣なる句の讚あるに至つては金殿に反故張りの障子を見るが如く釣り合はぬ事甚し。

公長略畫なる書あり。纔に一草一木を畫き而も出來得るだけ筆畫を省略す。略畫中の略畫なり。而して此のうち幾何の趣味あり、幾何の趣向あり。蘆雪等の筆縱橫自在なれども却て此趣致を存せざるが如し。或は余の性簡單を好み天然を好むに偏するに因るか。　（十二日）

七

○左千夫曰ふ柿本人麻呂は必ず肥えたる人にてありしならむ。その歌の大きくして逼らぬ處を見るに決して神經的瘦せギスの作とは思はれずと。節曰ふ余は人麻呂は必ず瘦せたる人にてありしならむと思ふ。その歌の悲壯なるを見て知るべしと。蓋し左千夫は肥えたる人にして節は瘦せたる人なり。他人のことも善き事は自分の身に引き比べて同じ樣に思ひなすこと人の常なりと覺ゆ。斯く言ひ爭へる内左千夫はなほ自說を主張して必ず其肥えたる由を言へるに對して、節は人麻呂は瘦せたる人に相違なけれども其骨格に至りては強く逞しき人ならむと思ふなりと云ふ。余は之を聞きて思はず失笑せり。蓋し節は肉落ち身瘦せたりと雖も每日サンダウの啞鈴を振りて勉めて運動を爲すがために其骨格は發達して腕力は普通の人に勝りて強しとなむ。さればにや人麻呂をも亦斯の如き人なら

むと己れに引き合せて想像したるなるべし。人間はどこ迄も自己を標準として他に及ぼすものか。

○文晁の繪は七福神如意寶珠の如き趣向の俗なるものはいふ迄もなく山水又は聖賢の像の如き繪を描けるにも何處にか多少の俗氣を含めり。華山に至りては女郎雲助の類をさへ描きてしかも筆端に一點の俗氣を存せず。人品の高かりし爲にやあらむ。到底文晁輩の及ぶ所に非ず。

○余等關西に生れたるものゝ目を以て關東の田舍を見るに萬事に於て關東の進歩遲きを見る。只關東の方著く勝れりと思ふもの一あり。曰く醬油。曰く味噌。

○下總の名物は成田の不動、佐倉宗五郎、野田の龜甲萬(醬油)。

(十三日)

八

○名所を歌や句に詠むには其名所の特色を發揮するを要す。故に未だ見ざるの名所は歌や句に詠むべきにあらざれども、例せば富士山の如き極めて普通なる名所は、未だ之を見ざるも或は人の語る所を聞き、或は人の書き記せる文章を讀み、或は繪畫寫眞に寫せる所を見などして、其特色を知るに難からず。さはいへ矢張實際を見たる後には今迄の想像とは全く違ひたる點も少なからざるべし。余未だ芳野を見ず。且つ繪畫文章の如きも詳しく寫しこまかに敍したるものを知らず。今年或人の芳野紀行を讀みて幾許の想像を逞しうするを得て試みに俳句數首を作る。若し實地を踏みたる人の目より見ば、實際に遠き句にあらずんば、必ず平凡なる句や多からん。只ゝ夫れ無難なるは主觀的の句のみならんか。

六田越えて花にいそぐや一の坂
芳野山第一本の櫻かな
花見えて足踏み鳴らす上り口
花の山藏王權現鎭まりぬ
指すや花の木の間の如意輪寺
案内者の楠語る花見かな
案内者も吾等も濡れて花の雨
南朝の恨を殘す櫻かな
千本が一時に落花する夜あらん
西行庵花も櫻もなかりけり

(十四日)

九

○余が病氣保養の爲に須磨に居る時、「この上になほ憂き事の積れかし限りある身の力ためさん」といふ誰やらの歌を手紙などに書いて獨りあきらめて居つたのは善かつたが、今日から見るとそれは誠に病氣の入口に過ぎないので、昨年來の苦しみは言語道斷殆ど豫想の外であつた。それが續いて今年もやう／＼五月といふ月に這入つて來た時に、五月といふ月は君が病氣のため厄月ではないかと或る友人に驚かされたけれど、否大丈夫である去年の五月は苦しめられて今年はひま年であるから、などと寧ろ自分では氣にかけないで居た。ところが五月に這入つてから頭の工合が相變らず善くないといふ位で每日諸氏のかはる／＼の介抱に多少の苦しみは紛らしとつたが、五月七日といふ日に朝からの苦痛で頭が惡いのかどうだか知らぬが、兎に角今迄に例の無い事と思ふた。八日には少し善くて、其後又天氣工合と共に少しは持ち合ふてゐたが十三日といふ日に未曾有の大苦痛を現じ、心臟の鼓動が始まつて呼吸の苦しさに泣いてもわめいても追つ附かず、どうやらかうやら其日は切拔けて十四日も先づ無事、唯しかも前日の反動で弱りに弱りて眠りに日を暮し、十五日の朝三十四度七分といふ體溫は一向に上らず、それによりて起りし苦しさはとても前日の

比にあらず、最早自分もあきらめて、其時恰も牡丹の花生けの傍に置いてあつた石膏の肖像を取つて其裏に「自題。土一塊牡丹生けたる其下に。年月日」と自ら書きつけ、若し此儘に眠つたらこれが絶筆であるといはぬ許りの振舞、それも片腹痛く、午後は次第々々に苦しさを忘れ、今日は恰も根岸の祭禮日なりと思ひ出したるを幸に、朝の景色に打つてかへて、豆腐の御馳走に祝の盃を舉げたのは近頃不覺を取つたわけであるが、併しそれも先づ〳〵目出度いとして置いて、さて五月もまだ是から十五日あると思ふと、どう暮してよいやらさツぱりわからぬ。

○五月十五日は上根岸三島神社の祭禮であつて此日は毎年の例によつて雨が降り出した。しかも豆腐汁木の芽あへの御馳走に一杯の葡萄酒を傾けたのはいつにない愉快であつたので、

この祭いつも卯の花くだしにて
鶯も老て根岸の祭かな
修覆成る神杉若葉藤の花
引き出だす幣に牡丹の飾り花車
筍に木の芽をあへて祝ひかな
歯が抜けて筍堅く烏賊こはし
不消化な料理を夏の祭かな
氏祭これより根岸蚊の多き

(十八日)

十

○前にもいふた南岳文鳳二人の手競畫譜の繪について二人の優劣を判じて置いたところが、或人は之を駁して文鳳の繪は俗氣があつて南岳には及ばぬといふたさうな。余は南岳の繪はこれより外に見たことがないし、殊に大幅に至つては南岳のも文鳳のも見たことがないから、どちらがどうとも判然と優劣を論じかねるが、併し文鳳の方に繪の趣向の豐富な處があり、且つ其趣味の微妙な處がわかつて居るといふことは、この一冊の畫を見ても慥に判ずることが出來る。尤も南岳の繪も其全體の布置結構其他筆つきなどもよく働いて居つて固より輕蔑すべきものではない。故に終局の判斷は後日を待つこととしてこゝには手競畫譜にある文鳳のみの繪について少し批評して見よう。(もとこの畫譜は餘齋の道中歌を繪にしたものとあるからして大體の趣向は其歌に據つたのであらうが、ここにはその歌がないので、十分にわからぬ)

この道中畫は大方東海道の有樣を寫したものであらうと思ふ。且つ歌合せの畫を左右に分けて畫に寫したのであるから、左とあるのが凡て南岳の畫で、右とあるのが凡て文鳳の畫である。

其始めにある第一番の右は即ち文鳳の畫で、三艘の舟が、前景を往來して居つて、遙かの水平線に帆掛舟が一つある。其外には山も陸も島も何もない。この趣向が已に面白い。殊に三艘の舟の中で、前にある一番大きな舟を苫舟にして二十人許りも人の押合ふて乘つて居る乘合船を少し沖の方へかいたのが凡趣向でない。普通の繪かきならば、必ずこの乘合船の方を近く大きく正面にしてかいたであらう。

二番の右は道中の御本陣ともいふべき宿屋で貴人のお乘込みを待ち受けるとでもいふべき處である。畫面には三人の男があつて、其中一人は門前に水を撒いて居る。他の二人は幕を張つて居る。その幕を張つて居る方の一人は下に居つて幕の端を持ち、他の一人は梯子に乘つて高い處に幕をかけて居る。その梯子の下には草履がある。箒がある。蹈つぎがある。塵取がある。その塵取の中には芥がはひつて居る。實にこまかいものである。それで全體の筆數はといふと、極めて少いもので、二分間位に書けてしまひさうな畫である。これらも凡手段の及ぶ

所でない。

三番の右は川渡しの畫で、稍々大きな波の中に一人の川渡しがお客を肩車にして渡つて居る所である。こゝにも波と人との外に少しの陸地もかゝないのは、この川を大きく見せる手段であつて前の舟三艘の畫と其點が稍々似て居る。其川渡しの人間は一人が横向きで、一人が後ろ向きになつて居る。其兩方の形の變化して面白い處は實際の畫を見ねばわからぬ。

四番の右は何んの畫とも解しかぬるので評をはぶく。

五番の右は何の粗筆で、極めて簡略にかいて居るが、其趣向は極めて複雜して居る。正面には一間に一間半位の小さい家をかいて、其看板に「御かみ月代、代十六文」とかいてある。其横に在る窓からは一人の男が、一人の髯武者の男の髯を剃つて居る處が見える。其窓の下には手簾が掛けてあつて、其手簾の下の地面卽ち屋外には、髮盥と手桶のやうなものが置いてある。今いふた窓が東向きの窓ならば、それに接して折曲つた方の北側は大方壁であつて、其高い處に小さな窓があけてあつて、其窓には稗蒔のやうな鉢植が一つ置いてある。其窓の横には「やもり」が一匹這ふて居る。屋根は板葺で、石ころがいくつも載せてある。かういふ家が畫の正面の大部分を占めて居つて、其家は低い石垣の上に建てられて居る。其石垣といふのは、小さな谷川に臨んで居るので、家の後ろ側の處に橋の一部分が見えて居る。それだからこの畫の場所を全體から見ると、小川にかけてある橋の橋詰に一軒の小さな床屋があるといふ處である。其趣のよいのみならず、これ程の粗畫にこの場所から家の構造から何から何まで悉く現はれて居るといふのは到底文鳳以外の人には出來る事でない、實に驚くべき手腕である。

六番の右は薄原に侍が一人馬の口を取つて牽いて居る處である。此畫も薄の外に木も堤も何もないので、且つ其薄が下の方を少しあけて上の方は畫けるだけつめてかいてあるので、薄原が廣さうにも見え、凄さうにも見え、爪先上りになつて居るやうにも見える。そこで侍も馬も畫面のなかばよりは稍々上の方にかいてある。この畫の趣向は十分にわからぬけれど、馬には腹帶があつて、鞍のない處などを見ると、侍が荒馬を押へて居る處かと思はれる。これが侍であつて馬士でない所（それは髷と服裝と刀とでわかるが）も面白いが、馬が風の薄にでも恐れたかと思ふやうな荒々しき態度のよく現はれる處も面白い。

（二十二日）

十一

（ツヾキ）七番の右は寧ろ景色畫にして岡傳ひに小さき道があつて、其道は二つに分れ、一筋は其岡に沿ふて左に行くべく、一筋は橋を渡つて水に沿ふて左に行くべくなつてをる。點景の人物は一寸位な大きさのが三人あるばかりで、それは格別必要な部分を占めてをるのではない。唯々斯ういふやうな一寸した景色を此中に插んだのが意匠の變化するところで面白い。

八番の右は立場と見えて坊さんを乘せた駕が一挺地に据ゑてある。一人の雲助は何か餅の如きものを頰ばつて居る。一人の雲助は錢の一さしを口にくはへて其内の幾らかを兩手にわけて勘定してをる。其傍に挾箱を下ろして煙草を吹かしてをる者もある。更に右の方には馬士が馬の背に荷物を附けるところで、其馬士の態度といひ、馬が荷物の重みを自分の身に受けこたへてをる心持といひ、其處の有樣が實によく現はれてをる。其傍には僅一二人の人があつて何となく混雜の樣が見えてをる。南岳の畫は人が大勢居つても其の人は唯々群集してをるばかりであるが文鳳の畫は人が大勢居れば其大

勢の人が一人々々意味を持つて居る。此處らで見ても兩人の優劣は略ゝ顯はれて居る。

九番の右は四人で一箇の道中駕をかついで行くところで、駕の中の人は馬鹿に大きく窮屈さうに畫いてある。何でもないやうであるがそれだけの趣向を現はしたのが面白い。

十番の右は旅人が一人横に寢て按摩を取らしてをる處である。旅人の枕元には小さな小荷物があり笠がある。其前には煙草盆があり煙草入れがある。頭巾を被つた儘で頰杖を突いて目をふさいで居るのは何となく按摩の爲に心持の善さゝうな處が見える。按摩は客の後ろ側より其の脚を揉んで居る。處で其右の眼だけは丸く開いて居る。而も左の眼はつぶれて居つて口は左の方へ曲つてをる、此二人の後の方に行燈が三つかためて置いてある。これは勿論灯のついて居る行燈では無からう、客の座敷に斯樣の行燈が置いておるといふ事はいかにも貧しい宿であるといふ事を示して居る。（二十三日）

十二

（ツヾキ） 十一番の右は正面に土手を一直線に畫いてある。この一直線に畫いてある處既に奇拔である。其土手の前面には小さな水車小屋があつて、作業がある。土手の上には笠を著た旅人が一人小さゝ畫かれてある。かういふ景色の處は實際にあるけれども、畫に現はしたものは外にない。

十二番の右は笠著た旅人が笠著た順禮に奉捨を與へる處で、順禮が柄杓を突出して居ると、旅人は其步行をも止めず、手をうしろへまはして柄杓の中へ錢を入れて居る處は能く實際を現はして居る。殊に其場所を海岸にして、蘆などが少し生えて居り、遠方に船が一つ二つ見えて居る處なども、この平凡な趣向をいくらか賑やかにして居る。

十三番の右は景色畫でしかも文鳳特得の伎倆を現はして居る。場所は山路であつて、正面に坂道を現はし（坂の上には小さな人物が一人向ふへ越え行かうとして居る處が畫いてある）坂の右側に數十丈もあらうといふ大樹が鬱然として立つて居る。筆數は餘り多くないが、其大樹がある爲に何となく其景色が物凄くなつて、其樹は慥に下の方の深い谷間に聳えて居るといふことがよくわかる。心持の可い畫である。

十四番の右は百姓家の入口に猿廻しが猿を廻して居る處で、其家の入口の繩暖簾をかゝげて子供が二人許のぞいて居る。一人の子供は六つ七つ、一人の子供は二つ三つ位の歳で、大方兄弟であらうと推せられる。其入口の兩側には莚が敷いて麥か何かが干してある。家の横手には一寸した菊の垣がある。小菊が花を澤山つけて咲いて居る。この繪などは單に田舍の景色を能く現はして居るといふ許でなく、甚だ感じのよい所を現はして居る。

十五番の右は乞食が二人ねころんで居る處でそこらには草が澤山生えて居る。

十六番の右は鳥居の柱と大きな杉の樹とが何れも下の方一間許だけ大きく畫いてある。それは社の前であるといふことを示して居る。其社の前の片方に手品師が膝をついて手品をつかつて居る。襷をかけ、廣げた扇を地上に置き、右の手を眼の前にひらけて紙屑か何かの小さくしたのを散かして居る。「春は三月落花の風情」とでもいふ所であらう。この手品師が片寄せて畫いてある爲に見物人は一人も畫いて居ない。そこらの趣向は餘り類のない趣向である。

十七番の右は並木の街道に旅人が二三人居る處であるが、これは別に趣向といふ處もないやうで、たゞ松の木の向ふ側に人を畫いたのが趣向でもあらうか。

十八番の右は海を隔てゝ向ふに富士を望む處

で別に趣向といふでもないが、たゞこの一卷の最終の畫であるだけに、この平凡な景色が何となく奥床しく見える。

要するに文鳳の畫は一々に趣向があつて、其趣向の感じがよく現はれて居る。筆は粗であるけれど、考へは密である。一見すれば無造作に畫いたやうであつて、其實極めて用意周到である。文鳳の如きは珍しき繪かきである。然も世間ではそれ程の價値を認めて居ないのは甚だ氣の毒に思ふ。（二十四日）

十三

○古洲よりの手紙の端に

御無沙汰をして居つて誠にすまんが、實は小提灯ぶらさげの品川行時代を追懷して今日の君を床上に見るのは余にとつては一の大苦痛である事を察して呉れ給へ。

とあつた。此小提灯といふ事は常に余の心頭に留まつてどうしても忘れる事の出來ない事實であるが、流石に此道には經驗多き古洲すらも尚記憶してをるところを以て見ると、多少他に變つた趣が存してゐるのであらう。今は色氣も衒氣もなき病人が寢床の上の懺悔物語として昔ののろけも亦一興であらう。

時は明治二十七年春三月の末でもあつたらうか、四箇月後には驚天動地の火花が朝鮮の其處らに起らうとは固より知らず、天下泰平と高をくゝつて遊び樣に不平を並べる道樂者、古洲に誘はれて一日の日曜を大宮公園に遊ばうと行て見たところが、櫻はまだ咲かず、引きかへして目黒の牡丹亭とかいふに這入り込み、足を伸ばしてしよんぼりとして待つて居る程に、あつらへの筍飯を持つて出て給仕して呉れた十七八の女があつた。此女あふるゝ許りの愛嬌のある顔に、而もおぼこな處があつて、斯る料理屋などにすれからしたとも見えぬ程のおとなしさが甚だ人をゆかしがらせて、余は古洲にもいはず獨り胸を躍らして居つた。古洲の方も流石に惡くは思はないらしく、彼女がランプを運んで來た時に、お前の内に一晩泊めて呉れぬか、と問ひかけた。けれども、お泊りはお斷り申しまする、とすげなき返事に、固より其事を知つて居る古洲は第二次の談判にも取りかゝらずにだまつてしまふた。それから暫くの間雜談に耽つてゐたが、品川の方へ廻つて歸らう、遠くなければ歩いて行かうぢやないか、といふ古洲がいつに無き歩行說を取るなど、趣味ある發議に、余は固より贊成して共にぶら〳〵とこゝを出かけた。外はあやめもわからぬ闇の夜であるので、例の女は小田原的小提灯を點じて我々を送つて出た。姉さん品川へはどう行きますかといふ間に、品川ですか、品川は此さきを左へ曲つて又右に曲つて……其處迄私がお伴致しませうといひながら、提灯を持つて先に駈け出した。我々は其後から踵いて行て一町餘り行くと、藪のある横町、極めて淋しい處へ來た。此から田圃をお出でになると一筋道だから直ぐわかります、といひながら小提灯を余に渡して呉れたので、余はそれを受取つて、さうですか有難うと、別れようとすると、一寸待つて下さい、といひながら彼女は四五間後の方へ走り歸つた。何かわからんので躊躇してゐるうちに、女は又余の處に戻つて來て提灯を覗きながら其中へ小さき石ころを一つ落し込んだ。さうして、左樣なら御機嫌宜しう、といふ一語を殘したまゝ、もと來た路を闇の中へ隱れてしまふた。此時の趣、藪のあるやうな野外れの小路のしかも闇の中に小提灯をさげて居る自分、小提灯の中に小石を入れて居る佳人、余は病牀に苦悶して居る今日に至る迄忘れる事の出來ないのは此時の趣である。それから古洲と二人で

春まだ寒き夜風に吹かれながら田圃路をたどつて品川に出た。品川は過日の火災で町は大半燒かれ、殊に假宅を構へて妓樓が商賣して居る有樣は珍しき見ものであつた。假宅といふ名がいたく氣に入つて、蓆圍ひの小屋の中に膝と膝と推し合ふて坐つて居る浮れ女どもを竹の窓より覗いてゐる。古洲の尻に附いてうつかりと佇んでゐる此時我手許より焰の立ち上るに驚いてうつむいて見れば今まで手に持つて居つた提灯は其蠟燭が盡きた爲に火は提灯に移つてぼうぼうと燃え落ちたのであつた。

うたゝ寐に春の夜淺し牡丹亭
春の夜や料理屋を出る小提灯
春の夜や無紋あやしき小提灯

（二十五日）

十四

○病に寢てより既に六七年、車に載せられて一年に兩三度出ることも一昨年以來全く出來なくなりて、ずんずんと變つて行く東京の有樣は僅かに新聞で讀み、來る人に聞くばかりのことで、何を見たいと思ふても最早我が力に及ばなくなつた。そこで自分の見た事のないもので、一寸見たい 思ふ物を擧げると、

一、活動寫眞
一、自轉車の競爭及び曲乘
一、動物園の獅子及び駝鳥
一、淺草水族館
一、淺草花屋敷の狒々及び獺
一、見附の取除け跡
一、丸の內の楠公の像
一、自動電話及び紅色郵便箱
一、ビヤホール
一、女劍舞及洋式演劇
一、鰕茶袴の運動會

など數ふるに暇が無い。

（二十六日）

十五

○狂言記といふ書物を人から借りて二つ三つ讀んで見たが種々な點に於て面白い事が多い。狂言といふものは、どういふ工合に發達したか十分には知らぬが、兎に角能樂と共に舞臺に上る處を見ると能樂が稍ゝ高尙で全く無學の者には解せられぬ處があるから、能樂の眞面目なる趣味、古雅なる趣味に反對して、滑稽なる趣味、卑俗なる趣味をもつて俗人に解せしめるやうに作られたのである。併し昔の申樂とか田樂とか言ふものゝ趣味は能樂よりも却て狂言の方に多く存して居るかも知れぬ、少くとも彼等古樂の趣味が半ばは能樂となつて眞面目なる部分を占領し半ばは狂言となりて滑稽なる部分を占領したのであらう。そこで此狂言といふものには時代の古いものがあるかも知れないが先づ普通には足利の中頃より德川の初め迄に出來たものかと思はれる。從つて狂言は其時代の風俗及び言葉を現して居るものとして見ると隨分面白い事が多い。狂言の趣味はしばらく論ぜずに唯ゝ歷史的の觀察上面白い事は、たとへば此に「スハシカミ」といふ狂言を取つて見ようならば是れは酢賣と薑賣との事であつて二人が互ひに自分の賣物に勿體をつけるといふ趣向である。これを見ると其の頃酢賣とか薑賣とかいふものがあつて、町を賣歩行いて居つたといふ事がわかる。而も其酢賣は和泉の國と名乘り、薑賣は山城の國と名乘つて居る處を見ると、是等の處が酢又は薑の產地であつた事もわかる。それから酢は竹筒に入れてあつて、それを酢筒と名付け、薑は藁ヅトの中に入れてある。それから其言葉を見るに、酢の賣言葉は「スコン」と言ひ、薑の賣言葉は「ハジカミコン」といふなど何となく興味がある。此の「コン」といふ言葉は意味のある言葉かどうか善

く分らないが或は一實はう」といふ言葉のつまつたのかとも思はれる。又「シャウバイ」とも言ひ、「アキナヒ」ともいふを見れば此時代から既に兩方の言葉が用ゐられて居つたのが分かる。又酢賣が薑賣に對して「ホヌシ」といひ、薑賣が酢賣に對して「ソチ」といふのを見ても當時の二人稱には斯樣な言葉を用ゐたのである。余の郷里（伊豫）などにては余の幼き頃まで尚「オヌシ」又は「ソチ」などいふ二人稱が普通語に殘つて居つた。又薑賣の言葉に「コノワラヅトウナドニハ、イカウケイヅノアルモノヂャ」といふて居る。而して其の「ケイヅ」といふのは昔生薑賣が禁中に召されて何々といふ歌を下されたといふ事なのである。シテ見ると此「ケイヅ」といふ言葉は誇る可き由緒といふやうな事を意味する當時の俗言であつたと見える。又「スキハリシャウジ」「カラカミシャウジ」などいふ言葉があるのを見ると、今いふ紙張の障子のことを「スキハリシャウジ」と言ひ、今いふ「カラカミ」の事を「カラカミシャウジ」といふたのである。其外、風俗言語の上に、尚いろ／＼と變つた事があるやうであるが、よく／＼研究せねば吾々には分らぬ事が多い。追々分つて來たらば愈々面白いに違ひない。（二十七日）

十六

〇病勢が段々進むに從つて何とも言はれぬ苦痛を感ずる。それは一度死んだ人か若しくは死際にある人でなければわからぬ。然もこの苦痛は誰も同じことと見えて黑田如水などといふ豪傑さへも、矢張死ぬる前にはひどく家來を叱りつけたといふことがある。その家來を叱ることについて如水自身の言ひわけがあるが、その言ひわけは固より當になつたものではない。畢竟は苦しまぎれの小言と見るが穩當であらう。陸奥福堂も死際には頻りに細君を叱つたさうだし、高橋自恃居士も同じことだつたといふし、して見ると苦しい時の八つ當りに家族の者を叱りつけるなどは余一人ではないと見える。越後の無事庵といふは一度も顏を合したことはないが、これも同病相憐む中であるので、手紙の上の問ひ訪づれは絕えなかつたが、ことし春終に空しくなつてしまふた。其の弟の、人其遺子木公と共に近頃吾が病床を訪づれて、無事庵生前の話を聞いたが、斯くまで其容體の能く似ることかと今更に驚かれる。一二の例を擧ぐれば、寸時も看病人を病牀より離れしめぬ事、凡て何か命じたる時には其詞の未だ絕えざる中に、其命令を實行せねば腹の立つ事、目の前に大きな人など居れば非常に呼吸の苦痛を感ずる事、人と面會するにも人によりて好きと嫌ひとの甚しくある事、時によりて愉快を感ずると感ぜざるとの甚しくある事、蒲團堅ければ骨ざはり痛く、蒲團やはらかければ身が蒲團の中に埋もれて却て苦しき事、食ひたき時は過度に食する事、人が顏を見て存外に瘦せずに居るなどと言はれるのに腹が立ちて火箸の如く細りたる足を出して是でもかと言ふて見せる事、凡そ是等の事は何一つ無事庵と余と異なる事の無いのは病氣の爲とは言へ、不思議に感ぜられる。此日はかゝる話を聞きし爲に、其時迄非常に苦しみつゝあつたものが、遽に愉快になりて快き晝飯を食ふたのは近頃嬉しかつた。

無事庵の遺筆など見せられて感に堪へず、吾も一句を認めて遺子木公に示す。

鳥の子の飛ぶ時親はなかりけり

（二十八日）

十七

〇甲州の吉田から二三里遠くへ這入つた處に何とかいふ小村がある。其小村の風俗習慣など一

五方に聞いたところが甚だ珍しい事が多い。
一二をいふて見ると。
總て此村では女が働いて男が遊んで居る。女の仕事は機織りであつて卽ち甲斐絹を織り出すのである。其甲斐絹を織る事は存外利の多いものであつて一匹に二三圓の利を見る事がある。尤も一匹織るには三日程かゝる、併し此頃は不景氣で利が少いといふ事である。一家の活計はそれで立てゝ行くのであるから從つて女の權利が强く且つ生計上の事に就ては何事も彼も女が辨じる事になつて居る。男の役といふは山へ這入つて薪を採つて來るといふ位の事ぢやさうな。

甲斐絹の原料とすべき蠶は矢張其の村で飼ふては居るがそれだけでは原料が不足なので、信州あたりから絲を買ひ入れて來るさうな。其出來上つた甲斐絹は吉田へ行つて月に三度の市に出して賣るのである。

甲斐絹のうちでも蝙蝠傘になる者は無論織り方が違ふ。

機を織るものは大方娘ばかりであつて既に結婚した程の女は大概機を織る迄の拵へにかゝつて居る。それが爲に娘を持つて居る親は容易に其娘に結婚を許さない。成るべく長く(二十二三迄も)自分の内に置て機を織らせる。其結果は不品行な女も少くないといふ事である。

古來の習慣として男子が妻を娶らうと思ふ時には先づ自分の好きな女に直接に話し合ふて見る。其女が承諾したならばそれから仲人の如きものをして雙方の親達に承諾せしむるのである。女の親が承諾しないといふやうな場合には男は數多の仲間を語らひて其女をかどはかし何處かに隱してしまふといふやうな事がある。併し此頃ではさういふ事が少くなつたさうな。

此村は桑園菜畑抔は多少あるが水田は無い、又燒石が多くて木も草も無いやうな處がある。此邊の習慣では他人の山林へ這入つて木を樵つて來ても咎めないのである。柿の木などがあれば其柿の實は誰でも勝手に落して食ふ。干柿などがあれば其干柿を取つて來て食ふ。さうして何某の内の柿を取つて食ふたといふ事を公言して憚らないさうな。

此邊は勿論食物に乏しいので、客が來ても御馳走を出すといふ場合には必ず酒を出すのである。下物は菜漬位である。女でも皆大酒であるといふ事ぢや。

此邊は固より寒い處なので其の火燵は三尺四方の大きさである。併し寢る時は火燵に寢ないで別に設けてある寢室に行て寢る。其寢室は一人々々に一室づゝ備はつて居る狹い暗い處であつて蒲團は下に藁蒲團を用ゐ、別に火を入れる事は無い。さうして其の蒲團は年が年中敷き流しである。(寢室の別に在るところは西洋に似て居る)

寢室に限らず餘り掃除をする事がない。

客が來ても客に煙草盆を出すことは無いさうな。若し客が卷煙草でも飮まうと思へば其處にある火燵で火を附けるか、又は自らマッチを出して火を附けるかする。其吹殼の灰を疊のへりなどへはたき落して置いて平氣のものである。

前にいふた樣に機織の利が多いのに外にこれといふ贅澤の仕樣も無いので、こんな邊鄙の村でありながら割合に貧しくないといふ事である。

此村には癩病は多い。それが爲かどうかは知らぬが、今迄は一切他の村と結婚などはしなかつたといふ事である。 (二十九日)

十八

○文人の不幸なるもの寧齋第一、余第二と思ひしは二三年前の事なり、今はいづれが第一なる

か知らず。

○種竹山人長崎より一封を寄せ來る。開き見れば詩あり。

崎陽客次。閲國民新報所載。虛子併諸日記。敍子規子近狀。黯然久之。因賦一絶。遙贈子規。併似虛子

松魚時節辭潮頭。染葉知矯入眼青。不寐思君過夜半。天邊何處子規亭。

(三十日)

十九

○立齋廣重は浮世畫家中の大家である。其の景色畫は誰も外の者の知らぬ處をつかまへて居る。殊に名所の景色を畫くには第一に其實際の感じが現はれ、第二に其景色が多少面白く美術的の畫になつて居らねばならぬ。廣重は慥にこの二箇條に目をつけて且つ成功して居る。この點に於て已に彼が凡畫家でないことを證して居るが、尚其外に彼は遠近法を心得て居た。即ち近いものは大きく見えて、遠いものは小さく見えるといふことを知つて居た。これは誰でも知つて居るやうなことであるが、實際に畫の上に現はしたことが廣重の如く極端なるものは外にない。例へば淺草の觀音の門にある大提灯を非常に大きくかいて、本堂は向ふの方に小さくかいてある。目の前にある熊手の行列は非常に大きくかいてあつて、大鷲神社は遙かの向ふに小さくかいてある、鎧の渡しの渡し場は非常に大きくかいてあつて、向ふの方に藏が小さくかいてある。といふやうな著しい遠近大小の現はしかたは、日本畫には殆どなかつたことである。廣重は或は西洋畫を見て發明したのでもあらうか。兎に角彼は慥に尊ぶべき畫才を持ちながら、全く浮世繪を脱してしまふことが出來なかつたのは甚だ遺憾である。浮世繪を脱しないといふことは其筆に俗氣の存して居るのをいふのである。

(三十一日)

二十

○廣重の草筆畫譜といふものを見るに蕙齋の略畫式の斬新なのには及ばないが、併し一種によく出來て居る。今其の草筆畫譜の二編といふのを見付け出して初めから見て行くと多少感ずる所があるので必ずしも畫の評といふ譯ではないが一つ二つ舉げて見よう。

每年正月には麓より竹籠に七草を植ゑたのを賣つて來るから是れは明治になつての植木屋の新趣向であらうと思ふて居たら此の草筆畫譜(嘉永三年出版)にも同じやうな畫が出て居る。足の三本ついた竹籠に何か小さいものが植ゑてあつて其中に木札が四五枚立つて居る、さうして其の籠の傍には羽子板が一つ置てあるのを見ると此の籠の中に植ゑてあるものは慥かに七草に違ひない。斯かる氣の利いた贈物は江戸では昔からあつたものと見える。

同じ本に龜戸神社の畫があるが、これは鳥居と社とばかりであつて其の傍に木立と川とがある。さうして其の近邊には家も何もない、今とは形勢が非常に變つて居たものと見える。

同じ本に二寸角ばかりの中に女郎花が畫いてある。其の女郎花の畫き方が前の方にある一二本は其の草の上半部即ち花の處が畫いてある。さうして其の畫の後部即ち上の方には女郎花の下半部即ち下の方の莖と葉ばかりの處が二三本畫いてある。これは極めて珍しい畫き方と思ふが果して廣重の發明であるか、或ひは光琳などでも畫いて居る事があらうか、或ひは西洋畫からでも來て居るであらうか。

同じ本に大月原と題する畫がある、これは前に突兀たる山脈が長く横はつて其上に大きな富

士が白く出て居る所である。富士の畫などは兎角陳腐になり又嘘らしくなるものであるが、此畫の如く別に珍しい配合も無くして却て富士の大きな感じが善く現はれて居るのは少ない。

同じ本に鵜飼の畫がある、それは舟に乘つた一人の鵜匠が左の手に二本の鵜縄を持つて右の手に松火を振り上げて居る。鵜飼の事は十分に知らぬけれど、是れでは鵜縄をら上げる事が出來ぬやうに思ふが、それとも實際からいふ方法もあつたのであらうか。　（六月一日）

二十一

○余は今迄禪宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で生きて居る事であつた。

○因みに問ふ。狗子に佛性有りや。曰、苦。
又問ふ。祖師西來の意は奈何。曰、苦。
又問ふ。…………………。曰、苦。　（二日）

二十二

○大阪の露石から文鳳の帝都雅景一覽を贈つて吳れた。これは京の名所を一々に寫生したもので、其畫に雅致のあることはいふ迄もなく、其畫が其名所の感じをよく現はして居ることは自分の嘗て見て居る處の實景に比較して見てわかつて居る。他の處も必ず譃ではあるまいと思ふ。應擧の畫いた嵐山の圖は全くの寫生であるが、其外多くの山水は應擧と雖も、寫生に重きを置かなかつたのである。其外四條派の畫には淸水の櫻、栂の尾の紅葉などいふ眞景を寫したのが無いでは無いやうであるが、併しそれは一小部分に止つてしまつて、全體からいふと景色畫は寫生でないのが多い。然るに文鳳が一々に寫生した處は日本では極めて珍しいことといふてよからう。其後廣重が浮世繪派から出て前にもいふたやうに景色畫を畫いたといふのは感ずべき至りで文鳳と併せて景色畫の二大家とも言つてよからう。たゞ其筆つきに至つては、廣重には俗な處があつて文鳳の雅致が多いのには比べものにならん。併し文鳳の方は京都の名所に限られて居るだけに其畫景が小さいから、今少し宏大な景色を畫かせたら其景色の寫し工合が廣重に比して果してうまくいくであらうかどうであらうか、文鳳の琵琶湖一覽といふ書があるならば、それには大景もあるかも知れんが、まだ見たことがないからわからん。　（三日）

二十三

○歐洲に十年許も居て歸つて來た人の話に今では世界中で日本程恐ろしい國はないと西洋人は思ふて居るであらう。日本の政治家は腐敗して居るとか、官吏が收賄して居るとか、議員が買收せられたとか、華族が役にたゝんとか、兎に角上流社會に向つてはいくらの非難があるとしても、下等社會が悉く慥かである。將校にはいくら腐敗したものが多くとも、兵卒は皆愛國の民である、かういふ風に一國の土臺となるべき下等社會が慥かであれば其國の亡びる氣遣はない。若し此上に進歩して行たならば日本はどんなことを仕出來すかも知れない。何處の國でも恐らくは日本の將來を恐れて居らぬ者はなからう。

ところが西洋の社會を見ると、日本とは反對に上流社會即ち紳士なる者は皆立派なる人達であるが、下流社會即ち一般の人民は皆腐敗して居る。下等社會に愛國心のあるなどといふのは一人もない。言はゞ利の爲に集まつて居るやうなものである。

西班牙などは最も甚しく亂れて居る國であるが人民が少しも其政府を信用して居らぬ爲に金のある者も自分の國の公債を買はずに信用ある外國の公債を買ふ。別莊を建てるのにも自分の國へ建てずに外國へ建てゝ置くといふ次第である。

佛蘭西なども到底共和政治で持切つて行く事は出來まい。佛蘭西の下等社會も今の政府に對して餘り信用を置いて居ない。

獨逸は流石に今日勃興しつゝある勢は盛で此國の下等社會は他國程腐敗せずに居る。

英國も矢張衰へて行く方であらう。

露西亞はえらい。

土耳其は殆ど滅びて居る。

和蘭も矢張老衰でしかたがない。

白耳義は奇妙な國で陸海軍のない、たゞ商工業を以て成立つて居る國である。天子樣も商賣は上手で、非常な金持である爲に外の者は心服しなくとも、少くも商人だけは一目を置いて居る。先日廢せられた有名な公許賭博場も、天子樣が一大華客である。などと噂せられる程のことである、此國の鐵道は有名なもので、これは悉く國有である。この頃は日本からも商業上の留學生を此國へ出すやうになつたが、黒田の話では晝の修業も、此國へ留學させたらよからうといふて居た。

要するに新たに勃興した國は總て勢が強く、古い國は多くは腐敗して衰運に傾きつゝあるやうに見える。

それから大國と小國との關係に就いて、例へば丁抹とかいふやうな兵力のない國は、大國に對して少しも頭が上らないであらうと思ふやうであるが、實際はそれ程でもないものである、何か國際上の問題が起つた際にも、小國の方では自分が小國であるから大國に馬鹿にされるのであるといふやうなひがみ根性を起して存外に手強く談判を持込むやうなことがある。日本でも事によると自分の弱いのを氣にして却て大國に向つて強く突込んで行く事がないでもない。

權利とか平等とかいふけれど、日本程下等社會の權利が主張せられる處は西洋には少いであらう。日本では下等社會の奴が巡査の前で堂々と自己の權利を言ひ張つて何處迄も屈しないといふやうなのがあるが、西洋では上等社會と下等社會と喧嘩したらば、如何なる場合でも上等社會が勝つに極つて居る。よき著物を著たものと汚ない著物を著たものと喧嘩したらば、よき著物を著た方が巡査の前へ出ても必ず勝つことに極つて居る。（四日）

二十四

○近作數首

悼清國蘇山人

陽炎や日本の土にかりもがり

送別

歐羅巴へ行く人の許へ棍岸の筆の寄を贈りて

君を送る狗ころ柳散る頃に

無事庵久しく病に臥したりしが此頃みまかりぬと聞きて

日本の春の名殘や豆腐汁

時鳥辭世の一句無かりしや

鳴雪翁との書畫帖に自ら病中の芍藥を寫生し一句を讃す

芍藥の衰へて在り枕許

芍藥を畫く牡丹に似も似ずも

謠曲殺生石を讀みて口占數句

玉蟲の穴を出でたる光りかな

化物の名所通るや春の雨

殺生石の空や遙かに歸る雁

（五日）

二十五

○近頃方井山人が梟の鳴聲を聞かんと四方の士に求められけるに續々四方より報知ありて色々面白い鳴聲もあるやうであるが、大體は似て居るかと思はれる。吾が郷里豫州松山では、梟が「フルツク、ホーソ」となけば雨が降る「ノリツケ、ホーソ」と鳴けば明日の天氣は晴であるといふ天氣豫報に見られて居る、さうして梟の事をば俗にフルツクといふ。俳句では之を冬の部に入れてあるが、それは恐らくは

　梟は眠る所をさゝれけり　猿蓑

といふ句が猿蓑の冬の部に入れられたから始まつたのであらう、從つて木兎も矢張同じ事に取扱はれて居るが、貞享式に、古抄は秋の部に入れたれど渡り鳥にもあらず、色鳥にもあらず、まして鳴聲の物淋きは寒さを厭へる故にとや、決して冬と定むべし」とあるけれど、梟は元來何時の時候をよく鳴くものであるか、余の經驗によると、上野の森では毎年春の末より秋の半ばへかけて必ず梟が鳴く、これは余が根岸に來て以來經驗する所であるが、夏の夕方、雉子町を出でて、吾家への歸るさ、月が涼しく照して氣持のよい風に吹かれながら上野の森をやゝ來ると、音樂學校の後ろあたりへ來た時に必ず其のフルツクホーツの聲を聞く事であつた。併し毎晩大概同じ見當で鳴くやうではあるが、何處の邊の木で鳴くのか其處まで研究したことは無い。病に寢て後も矢張り例の鳴聲は根岸まで聞えるので、此頃でも病床で毎晩聞いて居る。日の晩れから鳴き出して夜更けにも鳴くことがあるが時としては二羽つれ鳴に鳴く聲が聞える事がある。又ある時は吾が庭の木近くへ來て鳴く事もあるが、餘り近く鳴かれると流石に物凄く感じる。さうして秋の半ば稍ゝ夜寒の頃になると何時も鳴かなくなつてしまふ。して見ると上野には秋の半ば迄棲んでゐて、それから餘所へ轉居するのであらうか、又は上野に居るけれども鳴かなくなるのであらうか、物知りに敎へてもらひたいのである。

此鳥の鳴聲の事をいふと余は何時もコルレッヂのクリスタベルを聯想する。

And the owls have awakened the crowing cock;

Tu-whit! — Tu-whoo!

（六月）

二十六

○今日只今（六月五日午後六時）病牀を取卷いて居る所の物を一々數へて見ると、何年來置き古し見古した蓑、笠、伊達政宗の額、向島百花園晩秋の景の水畫、雪の林の水畫、酔桃館藏澤の墨竹、何も書かぬ赤短册などの外に

寫眞雙眼鏡、是れは前日活動寫眞が見たいなどといふた處から氣をきかして古洲が贈つて呉れたのである。小金井の櫻、隅田の月夜、田子の浦の浪、百花園の萩、何でも奥深く立體的に見えるので、外の人は子供だましだといふかも知れぬが、自分には之を覗くのが嬉しくて嬉しくて堪らんのである。

河豚提灯、是れは江の島から花笠が贈つて呉れたもの、それを頭の上に吊してあるので、來る人が皆豚の膀胱かと間違へるのもなか／＼興がある。

喇嘛敎の曼陀羅、是れは三尺に五尺位な切れで壁にかけるやうになつて居る。其中央一ぱいに一大圓形を畫き、其圓形の內部に正方形を畫き、其正方形の內部に更に小圓形を畫き、其圓形の中に小さな佛樣が四方四面に向き合ふて畫いてある。其あたりには佛具のやうな物や佛壇のやうなものが矢張幾何學的に排列せられて居る。又大圓形の周圍には、佛樣や天部の神樣のやうなものや、紫雲や、青雲や、白雲や、奇

妙な赤い縁括りのやうなものが附いて居る樹木や、種々雑多の物が赤青白黄紫などの極彩色で書いてある極めて精巧なものである。

大津絵二枚、是れは五枚の中のへげ残りが襖に貼られて居る。四方太が大津から買ふて来た本書帽のものである。今在るのは猿が瓢箪で鯰を押へとる處と、大黒が福禄寿の頭へ梯子をかけて月代を剃つて居る處との二つである。

丁字盆一枚。是れは朝鮮に居る人からの贈物で座敷の茶棚にかゝつて居る。この簾を透して縁の翔翔のうちの首数がそよいで居る。

花菖蒲及び蠅取撫子、是れは二三日前、宗の者が堀切へ往て取つて帰つたもので、今は床の間の花活に活けられて居る。花活は秀真が鋳たのである。

美女桜、ロベリヤ、松葉菊及び黄色の草花、是れは先日碧梧桐の持つて来て呉れた鉢植で、今は床の間の前に並べて置かれてある。美女桜の花は濃紅、松葉菊の花は淡紅、ロベリヤは草よりも小さな花で紫、他の一種は学環草に似た花であるとかで、花の色は山吹の如き檀色である。

黄百合二本、是れは去年信州の木外から贈つて呉れたもので、諏訪山中の産ださうな。今は盛りと庭の真中に開いて居る。

美人草、よろ〳〵として風に折れさうな花二つ三つ。

錦葵一本、松の木の蔭に伸びかねて居る。

薔薇、大方は散りて殷紅色の花が一二輪咲残つて居る。

其外庭に在る樹は椎、樫、松、梅、ゆすら梅、茶など。

枕許にちらかつて在るもの、絵本、雑誌等数十冊。置時計、寒暖計、硯、筆、唾壺、汚物入れの丼鉢、呼鈴、まごの手、ハンケチ、其中に目立ちたる毛繻子のはでなる毛蒲団一枚、是れは軍艦に居る友達から贈られたのである。（七月）

二十七

○枕許に光琳画式と鶯邨画譜と二冊の彩色本があつて毎朝毎晩それをひろげて見ては無上の楽として居る。唯それが美しいばかりで無く此小冊子でさへも一人の長所が善く比較せられて居るので其趣も大に面白味を感ずる。殊に両方に同じ画題（梅、桜、百合、椿、萩、鶴など）が多いので比較するには最も便利に出来て居る。いふ迄も無いが光琳は光悦、宗達などの流儀を真似たのであるとはいへ兎に角大成して光琳派といふ一種無類の画を書き始めた程の人であるから総ての点に創意が多くして一々新機軸を出して居るところは殆ど比肩すべき人を見出せない程であるから、とても抱一などと比すべきものではない、抱一の画の趣向無きに反して光琳の画には一々意匠惨澹たる者があるのは怪しむに足らない。そこで意匠の点は姑く措いて筆と色との上から見たところで、光琳は筆が強く抱一は筆が弱い、色に於ても光琳が強い色殊に黒い色を余計に用ゐはせぬかと思はれる。従つて草木などの感じの現れ方も光琳はなか〳〵強い處があつて抱一は唯なよ〳〵として居る。此点に於ては勿論どちらが勝つて居ると一概にいふ事は出来ぬ。強い感じのものならば光琳の方がよいであらう。弱い感じのものならば抱一の方が旨いであらう。それから形似の上に於ては草木の真を写して居る事は抱一の方がよほど精密な様である。要するに今日の上に於て画家としての値打は勿論抱一は光琳に及ばないが、草花画かきとしては抱一の方が光琳に勝つて居る点が多いであらう。抱一の草花は形似の上に於て、写生に研究が行届いてあるし、趣向の書き方も光琳よりは柔かく書いてあるし、殊に色も精柔かく綺麗に彩色せられて居る。或人は丸で[illegible]の無い画だといふて抱一の悪口をいふ

かも知れぬが、草花の如きは光琳なよ／＼と優しく美しいのが其の特徴であつて魂の無いところが理[illegible]眞を寫して居るところではあるまいか、此の二小冊子を比較して見ても同じ百合の花が光琳のは強い線で畫いてあり抱一のは弱い線で畫いてある。同じ桔梗の花でも光琳のは葉が硬いやうに見えて抱一のは葉が軟かく見える。吊り鐘の様な軟かい花は抱一の方が最も善く眞の感じを現して居る。鶯邨畫譜の方に枝垂れ櫻の畫があつて其木の枝を僅かに二三本畫いたばかりで枝全體には悉く小さな薄赤い蕾が附いて居る。其の優しさいぢらしさは何ともいへぬ趣があつて斯うもしなやかに畫けるものかと思ふ程である、光琳畫式の櫻は之に比すると餘程武骨なものである。併し乍ら光琳畫式にある畫で藍色の朝顔の花を七八輪畫き其の下に黒と白の狗ころが五匹許り一緒になつてからかひ戯れて居る意匠などといふものは別に奇想でも何でもないが、實に其趣味のつかまへ處はいふにいはれぬ旨味があつて抱一などは夢にも其の味を知る事は出來ぬ。（八日）

二十八

〇長崎にては昔から支那料理の事を「シッポク」といふげな。何故といふことは分らぬ、食卓といふ字の音でもあるまい。余の郷里にては饂飩に椎茸、芹、胡蘿蔔、焼あなご、くずし（蒲鉾）など入れたるをシッポクといふ。これも支那傳來の意であらう。麪類は總て支那から來たものと見えて皆漢音を用ゐて居る。メン（麪）ソーメン（索麪）ニューメン（乳麪か此語漢語か何か知らぬ）メンボー（麪棒）ウンドン（饂飩）の類皆これである。それに猶面白い事は夜間饂飩蕎麥など賣りに來る商人が地方によりて「ハウ／＼」と呼ぶ事である。此「ハウ」は支那語の好の字にてハウ／＼は即ち好々といふ意になる。支那では一般に好的、好々などいふて恰も我邦の「善い」「上等」などいふ處に用ゐる。

〇ソーメンを素麪と書くは誤つて居る。矢張「索麪」と書く方が善い。索（ナハ）の如き麪の意であらう。（九日）

二十九

〇魚を釣るには餌が必要である。其餌は魚によつて地方によつて餘程違ひがあるやうであるが吾が郷里伊豫などにては何を用ゐるかと、其の道の人に聞くに

蚯蚓 を用ゐるものは鯰釣、鮒釣、ドンコ釣、ゲイモ釣、鰻釣、手長海老釣、スッポン釣

川海老 を用ゐるものは鯰釣、ギィー釣・ギゾ釣

エブコ（野葡萄の如き野草の莖の中に棲む蟲）を用ゐるものは鯰釣

ギスゴ、ハタハタ を用ゐるものは鯊釣

蠶 を用ゐるものは鯰釣

セムシ（川の淺瀬の石に蜘蛛のやうな巣を張りて住む大きなものと川の砂の中に砂を堅めて小さき筒狀の家を作りて住む形の小さなものとの二種類ある）を用ゐるものは鯰釣

田螺 を用ゐるものは手長海老

赤蛙 を用ゐるものは鯰釣

海の小海老 を用ゐるものは小鯛釣、メバル釣、アブラメ、ホゴ其外沖の雜魚釣

シャコ を用ゐるものは小鯛釣

小烏賊 を用ゐるものは大鯛釣

シラサ海老 を用ゐるものは大鯛釣・鱸釣・チヌ釣

ゴカイ チヌ釣、雜魚釣

などの如く多くは動物を用ゐるのであるが、中には變則な奴もある、それは鮎を釣るにカヾシラ釣（蚊頭）を用ゐ・鯊を釣るにハイガシラ（蠅

頭を用ゐ、ウルメを釣るにシラベ（白き木綿絲を合せたるもの）を用ゐ、烏賊を釣るに木製の海老を用ゐる如き類ひである。かゞシラとは獸毛を赤黑等に染めたる短きものを小さき鈎につけて金又は銀の小さき頭がついてゐる。鮎は此の美しき鈎を見て蚊と思ひあやまりて喰ひつくといふ事である。ハイかゞシラは獸毛を薄黑色に染めた短いものを鈎につけてそれに黑い頭がついてゐる。木製の海老とは木で海老の形に作つた二寸許りのもの、尾の所に三本の鋭き鈎が錨形についてゐる。烏賊は之を眞の海老だと思つて八本の手で抱きつくと鈎は彼の柔かな肉を刺すのである。

東京の釣堀なぞでは主に鯉を釣るのであるが、さて其の餌とすべきものは甚だ種類が多い。ゝかゝゝゝかゝゝゝゝゝ、フカシイモ、ウドン、ゴカイ、ムキミ、ミヽズ、ゝゝゝゝかゝゝゝゝゝゝ、サナギを節糟にて練りたるもの、などを用ゐる。さすがは都の產れだけに東京の鯉は贅澤になつてこんなに樣々な御馳走を貪るのであらうか。地方によつては此外に猶種々の異つた餌があるであらう。

（十日）

三十

○窮して而して始めて一條の活路を得、始めより窮せざるもの却て死地に陷り易し。

○釣に巧なるものあり、川の寫眞を見て曰く、此川にはきつと鮎が居ると。

○幕府以來の名家昔より相當の資產あり、而して其の朝飯は味噌汁と香の物の外、又一物を加へず。之れを主人に質せば、主人曰く、我も餘りまづい朝飯とは思へど、古來の習慣今更致方もなしと。

○蚊が出ても蚊帳がないといふ者あり。曰くランプを十分に明るくして寢よ。

（十一日）

三十一

○高等女學校の教科書に石川雅望の書きたる文を載せたるに、其文は兩國の四ツ目屋といふいかゞはしき店の記事にてありしため俄かに世間の物議を起し著者を責むるもあれば、文部省の審査官を責むるものもあり、其責め樣にも幾らか程度の寛嚴があるやうであるか。余の考へにては世間一般の人が責める所の方面、即ち著者の粗漏とか、審査の粗漏とかいふ事でなく、他の方面より責めたいのである。それは著者及び審査官の無學といふ事である。余の臆測にては著者も文部省の審査官等も恐らくは四ツ目屋の何たるを解せずして之を書中に引き又之を審査濟として許可したるものであらうと思はれる。して見れば彼等の無學は終に此の不都合なる結果を來したるもので、其無學こそ責むべきものではあるまいか。從來國文學者又は和學者などといふものは主に源氏物語、枕草子などの研究にのみ力を用ゐ、近世の事即ち德川氏以下の事に至つては之を單に卑俗として排斥し顧みない爲に、近世三百年間の文學は全く知らないものが十の八九に居るのである。今度の四ツ目屋事件も之を知らなんだといふ事は固より一小事であつてさのみ咎むるに足らんやうであるが、其實此事に限らず德川文學を全く研究しないといふ結果が偶然爰に現はれたのであるから余は何處迄も所謂擬古的文學者の無學なのを責めたいのである。殊に其意味さへ解せずして之を教科書に引用した教科書著者の亂暴には驚かざるを得ない。此機を以て文學者の猛省を促すのである。

（十二日）

三十二

○道具の贅澤などは一切しようと思はぬが只だ硯ばかりは稍〻よきものをほしいと思つてゐた。併し一圓や三圓のはした金では買へぬと聞いてあきらめてゐた。所がどういふわけだか近

頃になつて急にそれがほしくなつたけれど、今更先の知れた身で大金を出すのも餘り馬鹿々々しいので仕方なしに作り來りの十錢か十五錢の硯ですましてゐると、碧梧桐が其亡兄黄塔の硯を持つて來て貸して呉れた。其硯は一面は三方を溝の如く彫り、他の一面は芭蕉の葉を浮出に彫つてある。其石材は餘りよいのでもない樣に思はれるが併し十五錢位の勸工場物とは固より同日の論では無い上に、黄塔のかたみであることが、何となくなつかしく感ぜられて朝夕枕もとに置いて寢ながらのながめものになつてゐる。

墨汁のかわく芭蕉の卷葉かな
芍藥は散りて硯の埃かな
五月雨や蒼き硯石借り得たり

（十三日）

三十三

○同郷の先輩池内氏が發起にかゝる「能樂」といふ雜誌が近々出るさうである。この雜誌は今將に衰へんとする能樂を興さんが爲に其一手段として計畫せられたるものであつて、固より流儀の何たるを問はず、殊に囃子方などのやうに人ずくなになり行くを救はんとするのが其目的の主なるものであるさうな。元來能樂といふものは保存的のものであつて、進歩的のものではないのであるから、今日に於て改良するといふても、別に改良すべき點はない。只ゞ時勢と共に多少の改良を要するといふ點は、能役者間に行はれたる從來の習慣のうちで、今日の時勢に適せないものを改良して行く位の事なのである。而して其能役者間に行はれて居る習慣といふのは、今日からいふと隨分馬鹿馬鹿しい事も少くはない上に、又今日所謂家元なるものが維新後扶持を失ふたが爲に生計の道に窮して種々の惡弊を作り出した事も少くはないのである。是等の惡習慣は一擊に打破つてしまへば何でもないやうな事であるが、其の實之をやらうといふには、非常の困難を感ずる。誠に生活問題と關係して居ることは、考へて見れば能役者に對しては氣の毒な次第であつて、一方の道を打破する上は、他の一方に於て相當の保護を與へてやらねばならんのは至當の事である。昔岩倉具視公の存生中には、公が能樂の大保護者として立たれたるが爲に、一旦衰へたる能樂に花が咲いて一時は稍ゝ盛んならんとする傾きを示したに拘らず、公の薨ぜられた後は誰れ一人責任を負ふて能樂界を保護する人もないので遂に今日の如く四分五裂してしまつたのである。たま〳〵或る人が出て能樂界を振はせようとして會などを興した事などもあつたが、兎角流儀爭ひなどの爲に子供のやうな喧嘩を始めて折角の計畫も遂に畫餠に屬するに至つたのは遺憾な事である。能樂雜誌記者は固よりこゝに見る所があつて、能樂上の一大倶樂部を起し、天下の有志を集めて何の情實なく金春、金剛、觀世、寶生、喜多などいふ仕手の五流は勿論、脇の諸流も笛、鼓、太鼓などの囃子方に至る迄、悉く之を保護し且つ後進を養成せんとする目的をも有せらるゝと聞くのは甚だ賴もしいことに思はれる。余の考へにては能樂は宮内省の保護を仰ぐか若しくは華族の鞏固なる團體を作つて之を保護するか、どちらかの道によらなければ今日之を維持して行くのは、非常の困難であらうと思ふ。又能樂の性質上宮内省又は華族團體の保護を仰ぐといふことは不當な要求でもなく、又一方より言へば今日之を特別保護の下に置くのは宮内省又は華族團體のなすべき至當の仕事であらうと信ずる。其代りに能樂界の方に於ても出來得るだけの改良を圖つて、從前の如く能役者はダダをこねるやうな仕打をやめ、諸流の調和を圖り

又家元なるものゝ特權を揮ふて後進年少を進んで行かうといふ道を杜絶することのないやうにして貰はねばならぬ。一方に生活の道さへ立てば他方に於て卑しい行なども自ら滅じて行く道理で、一例を言へば能衣裳の損料貸などいふことが今日ではある一派の能役者の生計の一部になつて居るので、それが爲に卑劣なる仲間喧嘩の起るのみならず、遂には各派が分裂してしまふ程にも立ち至つたのであるが、かういふことは一方に相當の收入さへあれば自ら消滅して行くであらうと信ずる。尚此外にも論ずべきことは澤山あるが、それは後日に讓ることとする。

（十四日）

●正誤　「四時六尺」第十二に文晁の畫に就いて十六番の右は鳥居の前に千鳥師の作品を使つて居る處であらうと言つたのは間違ひだといふ説もあるから暫く取消す。
「四時六尺」第二　互に堆肥の句として掲げたのは記憶の誤りであつて、實際は

和紙は黴ちところたさゝれけり　半　暖

といふ句が此處にあるのであつた。この外にも木兎の句は四時英に一句あるが、其の句は亡黴と年代の分明といふ作者に出てゐるのが、余が知るうちでは最も古い句である

尾角四斗へ音告書を引用するのが確めて一例であるに、尊い文献な記事によつて書くのであるといふ訳でゐせするのであるから、許して貰ひたい

三十四

○床の間に虞美人草を二輪活けて其下に石膏の我小臥像と一つの木彫の猫とが置いてある。此猫は蹲まつて居る形で、實物大に出來て居つて、さうして黄色な様なペンキで塗つてある。此ペンキは夜暗い處で見ると白く光る様に出來て居るので、普通のペンキとは違つて居る。これは水難救濟會で使用する爲に態々英國から取り寄せたのであつて、これを高い標柱に塗つて救難所のある處の海岸に立てゝ置くと、如何なる暗夜でも沖に居る難破船から其標柱が見えるので、其處に救難所のあるといふ事が船中の人にわかる様になつて居る。これを木彫の猫に塗つて試に暗所の隅に置いて見たところが其夜はいつもの様に鼠が騒がなかつた。併し唯ぼうと薄白く光るばかりで勿論猫の形が闇に見えるわけでもないから、翌晩などは例の通りいたづら物は荒れ放題に荒れた程で敢てこれが鼠除けになるわけではないが、併し難破船の目標としては多少の效力がある事はいふ迄も無い。

此水難救濟會といふのは難破船を救ふのが目的であつて既に日本の海岸には二三十箇處の救難所を設け其の救難所にはそれ〴〵救難の準備が整ふて居るさうである。今日のところではまだ不完全極まるものであつて此後幾多の設備を要する事であるが、最近の報告によると昨年などは既に一日平均三人を救ふたわけになつて居るさうな。して見ると其效能は極めて大なるものであつて日本の如く海の多い國では此上も無く必要なものであるが、世人は存外に之に對して冷淡にある如く見えるのは甚だ遺憾である。彼の赤十字社の如きは勿論必要なものであるけれども、併し今赤十字社が無いとして忽ち差支を生ずるといふ程のものでもない。然るに田舍の紳士共は其勳章めいた徽章がほしいわけであるか、或は縣官等の勸めに餘儀無くせられたるわけであるか、今日のところでは非常に盛大なものとなつて、或は實用的よりも却て虚飾的に流れはせぬかと思ふ程である。水難救濟會は其會の目的が日常的のものであつて今日の赤十字社の如く戰時に入つて働くといふ様なものとは性質を異にしてをるに拘らず却て微々として振はんのは縣官の勸誘も赤十字社の如く普く及ばないのであるか、或は勳章めきた徽章の無い爲であるか、何にしても惜しむべき事であると思ふ。少くとも海に沿ふて居る各地の人は總て水難救濟會の會員となる様

にしたいものである。

（十五日）

三十五

○鳥づくしといふわけでは無いが、昨今見聞した鳥の話をあげて見ると、

一、此頃東京美術學校で三間ほどの大きさの鳶を鑄たさうな、これは記念の碑として仙臺に建てるのであるさうなが是位な大きなフキ物は珍しいと言ふ事である。

一、上野の動物園の駝鳥は一羽死んださうな。其肉を喰ふて見たらば鴫のやうな味がしてそれで餘り旨くなかつたが、其肉の油で揚物をこしらへて見たら是れは又非常に旨かつたといふ事である。

一、押入の奥にあつた剝製の時鳥を出して見たらば口の内の赤い色の上に埃がたまつて居つた。

一、そこらにある繪本の中から鶴の繪を探して見たが、澤山の鶴を組合せて面白い線の配合を作つて居るのは光琳。唯ゞ譯もなく長閑に竝べて畫いてあるのは抱一。一羽の鶴の嘴と足とを組合せて唯ゞ複雜なる線の配合を作つてゐるのは公長。最も奇拔なのは月樵の畫で、それは鶴の飛んで居る處を更に高い空から見下した所である。

一、廣重の東海道續繪といふのを見た所が其中に何處にも一羽も鳥が畫いてない。それから同人の五十三驛の一枚畫を見た所が原驛の所に鶴が二羽田に下りて居り袋井驛の所に道ばたの制札の上に雀が一羽とまつて居つた。

一、先日の「日本」に伊豫松山からの通信として梟がトショリコイと鳴くと書いてあつたが、それは誤りで八幡鳩（珠數カケ鳩）が、トショリコイと鳴くのである。

一、上野の入口へ來ると三層樓の棟の所に雁が浮彫にしてある。それは有名な「雁鍋」である。それから坂本の方へ來ると、或鳥屋の屋根に大きな雄鷄の突立つた看板がある。それから根岸へ來ると三島前の美術床屋には剝製の白鷺が石膏の半身像と共に飾つてある。

（十六日）

三十六

○信玄と謙信とどつちが好きかと問ふと、謙信が好きぢやといふ人が十の八九である。梅ケ谷と常陸山とどつちが好きかと問ふと、常陸山が好きぢやといふ人が十の八九である。その好き嫌ひに就いては、多少の原因がないではないが、多くは只ゞ理窟もなしに、好きぢやといふに過ぎぬ。併し一般の人は自重的の人よりも、快活的の人を好むといふことが、知らず知らず、その好惡の大原因をなして居るかも知れぬ。余は回向院の角力も觀たことがないので、贔屓角力などはないがどつちかといふと梅ケ谷の方を贔屓に思ふて居る。さうして子供の時から謙信よりも信玄が好きなやうに思ふ。それはどういふ譯だか自分にも分らぬ。

（十七日）

三十七

○明治維新の改革を成就したものは二十歳前後の田舍の青年であつて幕府の老人ではなかつた。日本の醫界を刷新したものも後進の少年であつて漢法醫は之れに與らない。日本の漢詩界を振はしたのも矢張り後進の青年であつて天保臭氣の老詩人ではない。俳句界の改良せられたのも同じく後進の青年の力であつて昔風の宗匠は寧ろ其の進歩を妨げようとした事はあつたけれど少しも之れに力を與へた事は無い。何事によらず革命又は改良といふ事は必ず新たに世の中に出て來た青年の仕事であつて、從來世の中に立つて居つた所の老人が中途で説を變へ

した爲に革命又は改良が行はれたといふ事は殆ど其の例がない。若し今日の和歌界を改良せんとならばそれは勿論青年歌人の成す可き事であつて老歌人の爲し得らるゝ事ではない。若し今日の演劇界を改良せんとならば、それは寧ろ壯士俳優の任務であつて決して老俳優の成し得らるゝ所ではない。然るに文學者とも言はるゝ程の學者が團十菊五などを相手にして演劇の改良を説くに至つては愚と言はうか迂と言はうか實に其の眼孔の小なるに驚かざるを得ない。

(十八日)

三十八

○玆に病人あり。體痛み且つ弱りて身動き殆ど出來ず、頭腦亂れ易く、目くるめきて書籍新聞など讀むに由なし。まして筆を執つてものを書く事は到底出來得可くもあらず。而して傍に看護の人無く談話の客無からんか。如何にして日を暮すべきか、如何にして日を暮すべきか。

(十九日)

三十九

○病床に寢て、身動きの出來る間は、敢て病氣を辛しとも思はず、平氣で寢轉んで居つたが、此頃のやうに、身動きが出來なくなつては、精神の煩悶を起して、殆ど毎日氣違のやうな苦しみをする。この苦しみを受けまいと思ふて、色々に工夫して、或は動かぬ體を無理に動かして見る。愈ゝ煩悶する。頭がムシャ／＼となる。もはやたまらんので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうかうなると駄目である。絶叫。號泣。益ゝ絶叫する。益ゝ號泣する。その苦その痛何とも形容することは出來ない。寧ろ眞の狂人となつてしまへば樂であらうと思ふけれどそれも出來ぬ。若し死ぬることが出來ればそれは何よりも望むところである、併し死ぬることも出來ねば殺して吳れるものもない。一日の苦しみは夜に入つてやう／＼減じ僅かに眠氣さした時には其日の苦痛が終ると共にはや翌朝寢起の苦痛が思ひやられる。寢起程苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けて吳れるものはあるまいか、誰かこの苦を助けて吳れるものはあるまいか。

(二十日)

四十

○「如何にして日を暮らすべき」「誰か此苦を救ふて吳れる者はあるまいか」此に至つて宗教問題に到著したと宗教家はいふであらう。併し宗教を信ぜぬ余には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救ひの手は屆かない。佛教を信ぜぬ者は南無阿彌陀佛を繰返して日を暮らすことも出來ない。或は書本を見て苦痛をまぎらかしたこともある。併し如何に面白い書本でも毎日々々同じ物を繰返して見たのでは十日もたゝぬうちに最早陳腐になつて再び苦痛をまぎらかす種にもならない。或は雙眼寫眞を弄んで日を暮らしたこともある。それも毎日見ては段々に面白味が減じて、後には頭の痛む時など却て頭を痛める料になる。何よりも嬉しきは親切なる友達の看護して吳れることであるがそれも屢ゝ出逢ふては、別に新しき話もないので病人も看護人も兩方が差向ふて一はたゞ苦しみ、一は其苦しみを見て心に苦しむやうになる。去年頃迄は唯一の樂しみとして居つた飲食の慾も、今は殆ど消え去つたのみならず、飲食其物が却て身體を煩はして、それが爲に晝夜もがき苦しむことは、近來珍しからぬ事實となつて來た。或は謠を聞き或は義太夫を聞いて樂しんだのは去年のことであつたが、今は軍談師を呼んで來ようか、活動寫眞をやらして見ようかとの友達の親切なる慰めは却て聞くさへも頭を痛めるやう

になつた。大勢の人を集めて、之と室を共にすることも苦しみの種である。其の聲、三味線の音も遙かの遠音を聞けばこそ面白けれ、枕許近くにては其音が頭に響き、甚しきは我が呼吸さへ他の呼吸に支配せられて非常に苦痛を感ずるやうになつてしまふた。畢竟自分と自分の周圍と調和することが甚だ困難になつて來たのである。麻痺劑の十分に效を奏した時は此調和が稍〻容易であるが、今は其麻痺劑が十分に效を奏することが出來なくなつた。余は實にかやうな境界に陷つて居るのである。いつ見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿々々しくうるさいであらうが、苦しい時には苦しいといふより外に仕方もなき凡夫の病苦談「如何にして日を暮らすべきか」「誰かこの苦を救ふて呉れる者はあるまいか」情ある人我病牀に來つて余に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで余は爲に多少の苦を救はるることを謝するであらう。余に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文學談にあらず、宗教、美術、理化、農藝、百般の話は知識なき余に取つて悉く興味を感ぜぬものはない。ただ斷つて置くのは、差向ふて坐りながら何も話のない人である。

(二十一日)

四十一

○此日逆上甚だし。新しく我を慰めたるもの

一、果物彩色圖二十枚
一、明人畫帖中八仙圖一卷(模寫)
一、闕名畫花卉粉本一卷(模寫)
一、汪洪模寫山水一卷(模寫)
一、煙霞翁筆十八皴法山水一卷(模寫)
一、櫻の實一籠
一、菓子麪包各種
一、菱形走馬燈一箇

來客は鳴雪、虚子、碧梧桐、紅緑諸氏。
事項は「ホトトギス」募集文案、蕪村句集秋の部輪講等。
食事は朝、麪包、スープ等。午、粥、さしみ、鷄卵等。晩、飯二碗、さしみ、スープ等。間食、葛湯、菓子麪包等。
服藥は水藥三度麻痺劑二度。(六月二十日)

(二十二日)

四十二

○今朝起きると一封の手紙を受取つた。それは本郷の某氏より來たので余は知らぬ人である。其の手紙は大略左の通りである

拜啓昨日貴君の「病牀六尺」を讀み感ずる所ありて左の數言を呈し候

第一、かゝる場合には天帝又は如來とともにあることを信じて安んずべし

第二、もし右信ずること能はずとならば人力の及ばざるところをさとりてたゞ現狀に安んぜよ現狀の進行に任ぜよ痛みをして痛ましめよ大化のなすがまゝに任ぜよ天地萬物わが前に出沒隱現するに任ぜよ

第三、もし右二者共に能はずとならば號泣せよ煩悶せよ困頓せよ而して死に至らむのみ

小生は嘗て瀕死の境にあり肉體の煩悶困頓を免れざりしも右第二の工夫によりて精神の安靜を得たりこれ小生の宗教的救濟なりき知らず貴君の苦痛を救濟し得るや否を敢て問ふ病間あらば乞ふ一考あれ(以下略)

此親切なる且つ明瞭平易なる手紙は甚だ余の心を獲たものであつて、余の考も殆ど此手紙の中に盡きて居る。唯〻余に在つては精神の煩悶といふのも、生死出離の大問題ではな

い、病氣が身體を衰弱せしめた爲であるか、脊髓系を侵されて居る爲であるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には、何とも彼とも致し樣の無いわけである。併し生理的に煩悶するとても、其の煩悶を免れる手段は固より、現狀の進行に任せるより外は無いのである。號叫し煩悶して死に至るより外に仕方の無いのである。たとひ他人の苦が八分で自分の苦が十分であるとしても、他人も自分も一樣にあきらめるといふより外にあきらめ方はない。此の十分の苦が更に進んで十二分の苦痛を受くるやうになつたとしても矢張あきらめるより外はないのである。けれども其れが肉體の苦である上は、程度の輕い時はたとひあきらめる事が出來ないでも、なぐさめる手段がない事もない。程度の進んだ苦に至つては、實になぐさめる事の出來ないのみならず、あきらめて居ても尚あきらめがつかぬやうな氣がする。蓋しそれは矢張あきらめのつかぬのであらう。笑へ。笑へ。健康なる人は笑へ。病氣を知らぬ人は笑へ。幸福なる人は笑へ。達者な兩脚を持ちながら車に乘るやうな人は笑へ。自分の後ろから巡査のついて來るのを知らず路に落ちてゐる財布をクスネンとするやうな人は笑へ。年が年中晝も夜も寢床に横たはつて、三尺の盆栽さへ常に目より上に見上げて樂しんで居るやうな自分ですら、麻痺劑のお蔭で多少の苦痛を減じて居る時は、煩悶して居つた時の自分を笑ふてやりたくなる。實に病人は愚なものである。これは余自身が愚なばかりでなく、一般人間の通有性である。笑ふ時の余も、笑はるゝ時の余も同一の人間であるといふ事を知つたならば、余が煩悶を笑ふ所の人も、一朝地をかふれば皆余に笑はるゝの人たるを免れないだらう。嗤々大笑。（六月二十一日記）

（二十三日）

四十三

○まだ見たことのない場所を實際見た如くに其人に感ぜしめようと云ふには其地の寫眞を見せるのが第一であるがそれも複雜な場所はとても一枚の寫眞ではわからぬから幾枚かの寫眞を順序立てゝ見せる樣にするとわかるであらう。名所舊跡などいふ處には此樣な寫眞帖が出來て居る處もあるが其寫眞帖は只ゝ所々の光景を示したばかりでそれ／＼の位置が明瞭しないので甚だ其效力が薄い。それで此種の寫眞帖には必ず一枚の地圖を附けて其中にあるそれ／＼の寫眞の位置と方位とを知らしむる樣にしたらば非常に有益であらうと思ふ。日光を知らぬ人にも此寫眞帖を見せれば其人は日光へ往つた樣な感じになるであらう。西洋に往くことのできない人でも此種の寫眞帖を見たらば西洋へ往つたと同じ樣な感じになる事が出來る。比較的簡單で廉價でさうして是れほど有益なものは他に類が少ないであらう。

（二十四日）

四十四

○警視廳は衞生の爲といふ理由を以て、東京の牛乳屋に牛舍の改築又は移轉を命じたさうな。そんなことをして牛乳屋をいぢめるよりも、寧ろ牛乳屋を保護してやつて、東京の市民に今より二三倍の牛乳飮用者が出來るやうにしてやつたら、大に衞生の爲ではあるまいか。（二十五日）

四十五

○寫生といふ事は、畫を畫くにも、記事文を書くにも極めて必要なもので、此の手段によらなくては畫も記事文も全く出來ないといふてもよい位である。これは早くより西洋では、用ゐられて居つた手段であるが、併し昔の寫生は不完全な寫生であつた爲に、此頃は更に進歩して一層精密な手段を取るやうになつて居る。然る

に日本では昔から寫生といふ事を甚だおろそかに見て居つた爲に、畫の發達を妨げ、又文章も歌も總ての事が皆進歩しなかつたのである。それが習慣となつて今日でもまだ寫生の味を知らない人が十中の八九である。畫の上にも詩歌の上にも、理想といふ事を稱へる人が少くないが、それらは寫生の味を知らない人であつて、寫生といふことを非常に淺薄な事として排斥するのであるが、其の實、理想の方が余程淺薄であつて、とても寫生の趣味の變化多きには及ばぬ事である。理想の作が必ず惡いといふわけではないが、普通に理想として顯れる作には、惡いのが多いといふのが事實である。理想といふ事は人間の考を表すのであるから、其の人間が非常な奇才でない以上は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。固より子供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには、理想といふ事が其人を感ぜしめる事が無い事はないが、略ゝ學問あり見識ある以上の人に見せる時には非常なる偉人の變つた理想でなければ、到底其の人を滿足せしめる事は出來ないであらう。是れは今日以後の如く教育の普及した時世には免れない事である。之に反して寫生といふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化して居るだけ其れだけ、寫生文寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄のやうに見えても、深く味へば味はふ程變化が多く趣味が深い。寫生の弊害を言へば、勿論いろ〳〵の弊害もあるであらうけれど、今日實際に當てはめて見ても、理想の弊害ほど甚しくないやうに思ふ。理想といふやつは一呼吸に屋根の上に飛び上らうとして却て池の中に落ち込むやうな事が多い。寫生は平淡である代りに、さる仕損ひは無いのである。さうして平淡の中に至味を寓するものに至つては、其妙實に言ふ可からざるものがある。（二十六日）

四十六

○ある人のいふ所に依ると九段の靖國神社の庭園は社殿に向つて右の方が西洋風を摸したので檜葉の木が或は丸く或は錐なりに摘み入れて下は綺麗な芝生になつて居る。左側の方は支那風を摸したので桐や竹が植ゑてある。後側は日本固有の造り庭で泉水や築山が拵へてある。斯ういふ風に庭園を比較したとはいふものゝ甚だ區域が狹いので十分に其特色を發揮する事が出來て居らぬ。そこで此庭園に就いても人々によつて種々の變つた意見を持つて居つて、これが神社である以上は神々しき感じを起させる爲に社殿の周圍に深山の大木を植ゑねばならぬなどといふ人もある。けれどもそれは昔風の考へであつて、神社であるから必ずしも大木が無ければならぬといふ事はない。二十年程前に余が始めて東京へ來て靖國神社を一見した時の感じを思ひ起して見ると、外の物は少しも眼に入らないで、綺麗なる芝生の上に檜葉の木が綺麗に植ゑられてをるといふ事がいかにも愉快な感じがしてたまらなかつたのである。勿論それは子供の時の幼稚な考へから來た事であるけれども、併し世の中の人は幼稚な感じを持つて居る方が八九分を占めて居るのであるから、今でも昔の余と同じ樣にこの西洋風の庭を愉快に感ずる人が屹度多いであらうと思ふ。其故に若し靖國神社の庭園を造り變へるといふ事があつたら、いつそ西洋風に造り變へたら善からう。まん丸な木や、圓錐形の木や、三角の芝生や、五角の花畑などが幾何學的に井然として居るのは、子供にも俗人にも西洋好きのハイカラ連にも必ず受けるであらう。固より造り樣さへ巧くすれば實際美學上から割り出した一種の趣味ある庭園ともなるのであ

る。東京人の癖として、公園は上野の樣なのに限るといふ人が多いけれども、必ずしも上野が公園の模範とすべきものであるとは定めれない。日比谷の公園なども廣い芝生を造つて廣ッパ的公園としても善いではないか。無暗矢鱈に木ばかり植ゑて一寸散歩するにも鼻を衝く樣な窮屈な感じをさせるが公園の目的でもあるまい。

(二十七日)

四十七

○此頃ホトヽギスなどへ載せてある寫生的の小品文を見るに、今少し精密に敍したらよからうと思ふ處をさら／＼と書き流してしまふた爲に興味索然としたのが多いやうに思ふ。目的が其事を寫すにある以上は假令うるさい迄も精密にかゝねば、讀者には合點が行き難い。實地に臨んだ自分には、こんな事は書かないでもよからうと思ふ事が多いけれど、それを外の人に見せると、そこを略した爲に意味が通ぜぬやうな事はいくらもある。人に見せる爲に書く文章ならば、どこ迄も人にわかるやうに書かなくてはならぬ事はいふ迄もない。或は餘り文章が長くなることを憂へて短くするとならば、それは外の處をいくらでも端折つて書くは可いが、肝腎な目的物を寫す處は何處迄も精密にかゝねば面白くない。さうして又其目的物を寫すのには、自分の經驗を其儘客觀的に寫さなければならぬといふ事も前に屢々論じた事がある。然るに寫生的に書かうと思ひながら却て概念的の記事文を書く人がある。是は無論面白くない。例を言へば米國に在る支那飯屋といふのを書く積りならば、自分が其支那飯屋へ往た時の有樣を成るべく精密に書けば、それでよいのである。然るに其方は精密に書かずに却て支那飯屋はどういふ性質のものであるといふやうな概念的の記事を長々と書くのは雜報としてはよいけれども、美文としては少しも面白くない。まだ雜報と美文の區別を知らない人が大變多いやうである。同雜誌の一日記事の如きもたゞ簡單に過ぎて何の面白味もないのが多いやうに見える。是れは今少し思ひきつて精密に書いたならば多少面白くなるだらうと思ふ。

(二十八日)

四十八

○此頃賣り出した雙眼寫眞といふのがある。これは眼鏡が二つあつてその二つの眼鏡を兩眼にあてゝ見るやうになつて居る。眼鏡の向ふには寫眞を挿むやうになつて居つて、その寫眞は同じやうなのが二枚並べて貼つてある。これは一寸見ると同じ寫眞のやうであるがその實少し違ふて居る。一つの寫眞は右の眼で見たやうに寫し、他の寫眞は同じ位置に居つて同じ場所を左の眼で見たやうに寫してあるのである。それを眼鏡にかけて見ると、二つの寫眞が一つに見えて、しかもすべての物が平面的でなく、立體的に見える。そこに森の中の小徑があればその小徑が實物の如く、奥深く歩いてゆかれさうに見える。そこに石があればその石が一々に丸く見える。器械は簡單であるが一寸興味のあるもので、大人でも子供でもこれを見出すと、そこにあるだけの寫眞を見てしまはねば止めぬといふやうな事になる。遊び道具としては、まことに面白いものであると思ふ。しかしこの寫眞を見るのに、二つの寫眞が一つに見えて、平面の景色が立體に見えるのには、少し伎倆を要する。人によるとすぐにその見やうを覺る人もあるし、人によると幾度見ても立體的に見得ぬ人がある。この雙眼寫眞を得てから、それを見舞に來る人ごとに見せて試みたが、眼力の確かな人には早く見えて、眼力の弱い人卽ち近眼の人には、餘程見えにくいといふことがわかつた。これによつて余は悟る所があつたが、近眼

の人はどうかすると物のさとりのわるいことがある、いはゞ常識に缺けて居るといふやうなことがある。その原因を何であるとも氣がつかずに居たが、それは近眼であるためであつた。近眼の人は遠方が見えぬこと、すべての物が明瞭に見えぬこと、これだけでも普通の健全なる眼を持つて居る人に比すると既に半分の知識を失ふて居る。まして近眼者は物を見ることを五月蠅がるやうな傾向が生じて來ては、どうしても知識を得る機會が少くなる。近眼の人にして普通の人と同じやうに知識を持つて居る人もないではないが、さういふ人は非常な苦心と勞力を以て、その知識を得るのであるから、同じ學問をしても人よりは二倍三倍の骨折りをして居るのである。人間の知識の八九分は皆視官から得るのであると思ふと眼の惡い人は餘程不幸な人である。

（二十九日）

四十九

○英雄には髀肉の嘆といふ事がある。文人には筆硯生塵といふ事がある。余も此頃「錐錆を生ず」といふ嘆を起した。此の錐といふのは千枚通しの丈夫な錐であつて、之を買ふてから十年餘りになるであらう。これは俳句分類といふ書物の編纂をして居た時に常に使ふて居たもので其頃は毎日五枚や十枚の半紙に穴をあけて、其の書中に綴込まぬ事はなかつたのである。それ故錐が鋭利といふわけでは無いけれど、錐の外面は常に光を放つて極めて滑かであつた。何十枚の紙も容易く突き通されたのである。それが今日不圖手に取つて見たところが、全く錆びてしまつて、二三枚の紙を通すのにも錆の爲に妨げられて快く通らない。俳句分類の編纂は二三年程前から全く放擲してしまつて居るので、「錐に錆を生ず」といふ嘆を起さゞるを得ない。

（三十日）

五十

○肺を病むものは肺の壓迫せられる事を恐れるので、廣い海を見渡すと洵に晴れ／＼といゝ心持がするが、千仞の斷崖に圍まれたやうな山中の陰氣な處には迚も長くは住んで居られない。四方の山に胸が壓せられて呼吸が苦しくなる樣に思ふ爲である。それだから蒸汽船の下等室に閉ぢ込められて大洋を航海する事は極めて不愉快に感ずる。住居の上に就いても餘り狹い家は苦しく感ずる。天井の低いのは殊に窮屈に思はれる。蕪村の句に

　　屋根低き宿うれしさよ冬籠

といふ句があるのを見ると、蕪村は吾々とちがふて體の丈夫な人であつたと想像せられる。此頃のやうにだん／＼病勢が進んで來ると、眼の前に少し大きな人が坐つて居ても非常に息苦しく感ずるので、客が來ても、なるべく眼の正面をよけて横の方に坐つて貰ふやうにする。其外ランプでも盆栽でも眼の正面一間位な間を遠ざけて置いて貰ふ。それは餘りひどいと思ふ人があるだらうが理窟から考へても分ることである。人の眼障りになるといふのは誰でも眼の高さと同じ位なものか、又はそれよりも高いものかゞ我が前にある時にうるさく感ずるのである。それであるから病人の如くいつも横にねて居るものには眼の高さといつても僅かに五寸乃至一尺位なものである。今病人の眼の前三尺の處に高さ一尺の火鉢が置いてあるとすると、それは坐つて居る人の眼の前三尺の處に凡そ三四尺の高さの火鉢が置いてあるのと同じ割合になる。此場合には坐つて居る人でも多少の窮屈を感ずるであらう。まして病人の如く身體も動かず、手足も働かず如何なる危險があつてもそれを手足で防ぐとか身を動かして逃げるとかすることの出來ないものは只さへ危險を

感ずるのであるから、其上に呼吸器の弱いものは非常な壓迫を感じて、精神も呼吸も同時に苦しくなる事は當り前の事である。其點からいふと寢床を高くして置けば善い譯であるが、それには又色々な故障があつて余等の如きは普通の寢臺の上に寢る事を許されぬからこまる。なぜ寢臺が惡いかといふと寢臺の幅の狭いのも一つの故障である。寢臺は腰のところで尻が落ち込んで身動きの困難なのも一つの故障である。病氣になるとつまらない事に苦しまねばならぬ。（七月一日）

五十一

○拜復。盆栽の寫眞十八枚御贈り被下難有奉存候。盆栽のことは吾々何も存ぜず候へ共、定めて日々の御手入も一方ならざる事と存候。盆栽の並べかたについては必ず三鉢を三段に配置しあり候處、定めて天地人とでも申す位置の取りかたに可有之、作法もむづかしきことゝ存候。併しながら小生の如き素人目より見候へば、三段の並べかたも勿論面白く候へ共、さりとて悉く同じやうな配置法を取り候ては變化に乏しく多くの寫眞を見もて行く間に、或は前に見たると同じ寫眞に非ずやと疑はるゝことも有之候。そは畢竟餘り同一趣味に偏し居り候爲と存候。配置法と申しても唯ゝ面白く配置すればよき事と存候へば、或は一鉢許り寫してよきことも可有之、或は二鉢寫したるもよかるべく、又時によりては四鉢五鉢六鉢等澤山に並べて面白きことも可有と存候。又高低の工合も御寫眞にあるやうに一定の規則に從ふにも及び申す間敷、或は同じ高さに並べて面白きことも可有、或は僅か許りの高低の度に配置して面白きことも可有、或は一は非常に高く一は非常に低く配置して面白きも可有候。又盆栽の大きさに就いても御培養の物は同一大のが多きやうに見受け申候。今少し突飛的に大なる物も交り居らば却て興味を添ふる場合多かるべく候。又鉢についても必ずしもよき鉢には限り申す間敷、或は瓦鉢或は擂鉢其他古桶などを利用致したるも雅味深かるべく候。但畫をかきある鉢は如何なる場合にも宜しからずと存候。又鉢を置くべき臺につきても、紫檀黒檀の上等なる臺のみには限る間敷、これも粗末なる杉板の臺にてもよく、又は有合せのガラクタ道具を利用したるもよく、又は天然の木の根石ころなどの上に据ゑたるも面白き場合多かるべく候。又盆栽を飾りたる場所も必ずしも後ろに屏風を立てゝ盆栽許り見ゆるやうに置きたるにも限り申す間敷、或は床の間に飾りたる處を寫し、或は机の上に置きたる處を寫し、或は手水鉢の側に置きたる處をも寫し・或は盆栽棚に並べたる處をも寫し、或は種々の道具に配合したる處をも寫し、色々に寫しやうは可有之と存候。勿論何を配合するにも配合上の調和を缺き候ては宜しからず、この木はこの鉢に適するとか、この盆栽と彼の盆栽と並べ置くに適するとか、或はこの盆栽はどの臺へ適するとか、どの場所に適するとか、それぞれ適當なる配合を得るやうに考へ然る後に千變萬化を盡さば興味限りなかるべくと存候。活花にても遠州流など申して、一定の法則を墨守致し候も有之候へ共、是れ恐らくは小堀遠州の本意にはあるまじく、要するに趣味は規則をはづれて千變萬化する所に可有之候。隨つて盆栽に爲すべき草木其物に就ても必ずしも普通の松楓などには限るまじく、何の木何の草にても面白くすれば面白くなるべくと存候。御寫眞の趣にては、葉のある樹に限りたるやうに見受申候。之も餘り狭きには過ぎずやと存候。木には限らず草も面白かるべく、又花の咲く物もそれぞ

れ面白かるべくと存候。右御禮かた〳〵愚意大略申述候。失禮の段御容赦可被下候。

頓首。（二日）

五十二

○日本の芝居ばかり見てゐる人が西洋の芝居の話などを聞いて其仕組の違ふのに驚く事がある。例をいへば、西洋の芝居にはチョボが無い、花道が無い、廻り舞臺がない、などいふ事が、不思議に思はれる事がある。有る方が不思議か、無い方が不思議か、それは考へて見たらばわかる事であるけれど、日本の芝居ばかり見て居る間は何も考へないで、チョボも廻り舞臺も花道も皆芝居には最必要な者で極めて當然な者の如く思ふて居るのである。扨是等の日本芝居に限られたる特色はどうして出て來たか、といふと、それは大概能樂から出て來て居るのである。能樂と芝居との關係は知つて居る人にはわかりきつて居る事であるが、どうかすると芝居の事ばかり心得て其能樂との關係に少しも注意せぬ人がある。今試みに兩者の類似點、卽ち芝居がどれだけ能樂の仕組に倣ふてゐるかといふ事を擧げて見ると、

第一、舞臺の構造に就いて見ても、芝居の花道は能の橋がかりから來て居る事はいふまでも無い。唯ゝ花道は舞臺の前へ、卽ち見物の座の中へ突き出て居るのと、橋がかりは能舞臺の横の方へ斜に出て居るとの違ひである。芝居の上手下手の入口は能樂の切戸（臆病口ともいふ）に似て更に數を增して居る。芝居の引幕は能の揚げ幕とは趣を異にして居る樣ではあるが、併し元は矢張揚幕から出た考へであらうと思ふ。チョボ語りの位置は地謠の位置と共に舞臺に向つて右側の方に在る。

第二に樂器の關係に就いても能にも芝居にも囃方といふ者がある。其樂器は兩者の間に著しい差違があるが、併し能に用ゐらるゝ笛、鼓、太鼓は芝居にも用ゐられて居る。唯ゝ能では鼓を重に用ゐる代りに、芝居では三味線を重に用ゐる。芝居で長唄常磐津などの連中が舞臺方に竝んで所謂出語りなる者を遣る事があるが、其れは能の囃方や地謠の舞臺に竝んで居るのと同じ趣である。

第三に脚本の上に就いていふと、能では詞よりも寧ろ節の部分が多くて、其節の部分は地と地で無いのとの二種類になつて居る。芝居は詞が主になつて居るけれども矢張節の部分も少くは無い。さうして節の部分は必ずチョボで語る事になつては居るが、其文句の性質からいふと矢張能の如く地に屬すべき者と、さうで無いものとの二つがある。地で無い部分といへば役者の自らいふべき詞に節附けをした者で、能では役者が其の節を自ら謠ふ、否或時は地に屬す可き分迄も謠ふ事があるが芝居では役者が謠ふといふ事は無い。チョボ語りが必ず役者に代つて謠ふ事になつて居る。それから能には番每の間に必ず狂言を加へる事になつて居る。芝居に中幕とか附け物とかいふ事があるのは幾らか能に狂言の加はつて居る所から思ひ附いたのではあるまいか。又能は大概一日に五番と極まつて居るが近松あたりの作に五段物が多いのは能の五番から來たのではあるまいか。又脚本の性質に就いていふても、能には眞面目なものばかりがあつて滑稽な趣向は一つも無い。滑稽の部分は唯ゝ狂言にのみ任せてある。芝居にても矢張眞面目な趣向の者が多くて特に滑稽劇といふべき者は極めて少い。唯ゝ眞面目な趣向のところ〴〵に所謂道化又は茶利たる者を插む位である。

其他能樂の始めに翁を演ずるに倣ひて芝居にても幕始めに三番叟を演ずるが如き、或は能樂を多少變改して芝居に演ずるが如き、或は芝居

の熟語の多く能の熟語より出でたるが如き、是等は眞似といふよりも寧ろ能樂其者を芝居に取りたる者故眞似て居る事は誰も知つて居る事で今更いふ迄も無い。尚此外に猶些細な部分の類似は非常に多いであらう。

芝居の廻り舞臺に就いては別段に能樂から出たと思ふ點は無い樣である。これは全く芝居の發明といふて善からう。

芝居の屋臺崩しといふ事は幾らか能の道成寺などから思ひついたかも知らぬが、併しこれも先づ芝居の發明といふて善からう。　（三日）

五十三

〇川崎文鳳の畫いた畫本は文鳳畫譜といふのが三冊と、文鳳麁畫といふのが一冊ある。そのうちで文鳳畫譜の第二編はまだ見たことがないが、いづれも前にいふた手競畫譜の如き大作ではない。しかし別に趣向のないやうな簡單な畫のうちにも、自ら趣向もあり、趣味も現はれて居る。文鳳麁畫といふのは極めて略畫であるが、人事の千態萬狀を窮めて居てこれを見ると殆ど人間社會の有樣を一目に見盡すかと思ふ位である。筆間の一掃百態は其形勢のたくましきこと、趣味の自由自在に變化しながら姿勢のくづれぬ畫とは、天下獨歩といふてもよいが、しかし文鳳麁畫に比すると、數に於て少なきのみならず趣味に於てもいくらか乏しい處が見える。たゞ文鳳の大幅を見たことが無いので、大幅の伎倆を知ることが出來ぬのは殘念である。

（尾張の月樵は、文鳳に匹敵すべき畫家である。其不形畫藪といふのを見ると實にうまいもので、趣向は文鳳のやうに複雜した趣向を取らないで單に些細の處を捉まへ處とし、さうして筆勢の上については文鳳の如く手輕く書きとばす方ではなく、むしろ極めて手ぎはよく畫いてのける處に眞似の出來ぬ伎倆を示して居る。この外に何とかいふ粗畫の本で、闊い俳句の讃があるのは惡かつたが、その粗畫は澤山あるが悉く月樵の筆であつて、しかも一々見てゆくと、一々にうまい趣向のある本を、或人に見せられたことがある。それは端本であつたやうだが、そんな本が未だ外にあるならば見たいと思ふけれど、誰に聞いても持つて居る人が無いのは殘念である。この人の大幅といふでもないが、半折物を二つ三つ見たことがある。一つは鶴に竹の畫で別に珍しい趣向ではないがその形の面白いことは、とても他人の及ぶ處ではない。今一つは寒山の畫でこれは寒山の一かたまりが、縄によつて束ねられた處で、畫としては簡單な淋しい畫であるが、その寒山が少し俯いて縄にもたれて居る工合は、極めて微妙な處に趣向を取つて居る。その外蕉門の畫を見たことがあるが、それも尋常でないといふことを不折は語つて居つた。けれども人物畫には少し劣るかと思はれる。兎に角月樵ほどの畫かきは滅多に類がないのであるのに、世の中の人に知られないのは極めて不幸な人である。又世の中に月樵を見る人が少ないのにも驚く。　（四日）

五十四

〇近刊のホトトギス第五卷九號の募集俳句を見るに、鳴雪、碧梧桐、虚子共に選びしうちに

　著つゝなれし菖蒲重や都人　[illegible]

とある。著つゝなれし菖蒲重とはいかが。菖蒲重といふのは、端午の節句に著る著物なるべければ著つゝなれしといふわけはない筈である。著つゝなれしといへば無論ふだん著か紋付かの類で長く著てゐるものでなければなるまい。同じ部に

　枇杷の木に夏の日永き田舍かな　太[illegible]

とある。この枇杷の木には實のなり居るや否や。そこが不徹底である。若し實のなつて居る枇杷の

木とすれば、この景色は枇杷の木に蔽はれてしまふわけになる。若し夏の日の永き田舍の無聊なる様を言はんとならば實のない枇杷の木でなくては趣が寫らぬ。併し夏の枇杷であれば實のないとも限らぬ。そこが不確な處である。

鳴雪選三座の句に

　上京や松に水打つ公家屋敷　井々

とある。この句に於て作者の位置がわからぬ。上京やといふ五字も浮いて聞える。公家屋敷の外から見た景色とすればよいけれど、それでは松に水打つところが見えぬであらう。碧梧桐選三座の句に

　鄙振や蓼を摘みて鮓の中に　梅影

鮓の中にといふは殊更に聞える。中にといふことが散らし鮓の飯の間から少し蓼の葉が見えて居ることだといふ選者の説明であるが、まさかさうはとれまい。虚子選三座の句に

　院々の高き若葉や京の月　不泉

とある。院々といふのは叡山か三井寺かのやうな感じがするけれど、それでは京の月といふのに當てはまらぬ。或は智恩院あたりの景色でもいふのであらうか。高き若葉といふのは若葉の木が高いのか、或は土地が高みにあるので若葉迄高く見えるといふ意味か明瞭でない。鳴雪選者吟のうちに

　時鳥鳴くやお留守の西の京

　菜蒔き畑も右京の太夫かな

　筍や京から掘るは京の藪

とあるのは面白さうな句であるが、いづれも意味がわからぬ。碧梧桐選者吟のうちに

　江戸役者を團扇と譏り京扇

とある。是も解し難い句ぢや。（五月）

五十五

○鐵砲は嫌ひであるが、獵はすきである。魚釣りなどは子供の時からすきで、今でもどうかして釣りに行くことが出來たら、どんなに愉快であらうかと思ふ。それを世の中の坊さん達が殺生は殘酷だとか無慈悲だとか言つて、一概に惡くいふのはどういふものであらうか。勿論坊さんの身分として殺生戒を保つて居るのは誠に殊勝なことでそれはさもあるべき事と思ふけれど、俗人に向つて魚釣りをさへ禁じさせようとするのは、餘り備はるを求め過ぐるわけではあるまいか。魚を釣るといふことは多少殘酷な事としても、魚を釣つて居る間は外に何等の邪念だも貯へて居ない所が子供らしくて愛すべき處である　其上に我々の習慣上魚を釣ることは益々殘酷と感ぜぬ。是よりも殘酷な事、是より邪氣の多い事は世の中にどれだけあるかわからん。鳥獸魚類の事はさて置き、同じ仲間の人間に向つてさへ、隨分殘酷な仕打ちをする者は決して少くない。殺生戒などと殊勝にやつてる坊さん達の中にも、其同僚に對する仕打ちに多少の殘酷な事も不深切な事もやる人が必ずあるであらうと思ふ。これといふ程のひどい事でなくても人間同士の交際の上にごく些細な缺點があつても極めて不愉快に感ぜられるもので、それは生きた魚を殺すよりも遙かに罪の深いやうな思ひがする。余は俗人の殺生などは、寧ろ害の少い樂みであると思ふて居る。（六月）

五十六

○酒は男の飲む者になつて居つて、女で酒を飲むものは極めて少ない。これは生理上男の好くわけがあるであらうか、或は單に習慣上然らしむるのであらうか。寧ろ後者であらうと信ずる。

　女は一般に南瓜、薩摩芋、胡蘿蔔などを好む。男は特に之を嫌ふといふ者も澤山無いにしても兎に角女程に好まぬ者が多い。これは如何なる原因に基くであらうか。

男でも南瓜、薩摩芋等の甘きを嫌ふは酒を飲む者に多く、酒を飲まぬ男は之に反して南瓜などを好んで食ふ傾向があるかと思はれる。して見ると女の南瓜などを好むのは酒を飲まぬ爲であつて、男の之を好む事が女の如くないのは酒を飲む爲ではあるまいか。酒は酢の物の如き類とよく調和して、菓子や團子と調和しにくい事は一般に知つて居る所である。南瓜、薩摩芋、胡蘿蔔などは野菜中の最も甘味多き者であるので酒とは調和しにくいのであらう。酒飲みでも一日酒を廢すると汁粉黨に變る事がある。して見ると女は酒を飲まぬが爲に南瓜などを好むのに違ひない。　（七日）

五十七

○畫讃といふ事は支那に始まつて、日本に傳はつた事と思はれるが、恐らくは支那でも近世に起つたことであらう。日本でも支那畫をまねた者には、畫の餘白へ詩を書いた者もあるが、多くは贊の無いのが普通である。山水などの完全したる畫には何も文字など書かぬ方が善いので、完全した畫に更に其の意味を添へるのが心得ぬ事である。併し人の肖像などを畫きたる者には讃があるのが面白い場合がある。それは人物許りでは畫として不完全に考へられることもあるので畫讃を以て其不足を補ふのである。所謂俳畫などといふ種類の畫に俳句の讃を書くのは、山水などの場合と違ふて、面白き者が多い。粗畫にても趣向の完全したる者には、畫讃は蛇足であるが畫だけでは何だか物足らぬといふやうな場合に俳句の讃を書いて其意味の不足を補ふ事は惡い事ではない。それ故に或畫に讃をする時には其讃と其畫と重複しては面白くない。例へば狐が公達に化けて居る畫が畫いてある上に

公達に狐化けたり宵の春

と讃したのでは、畫も讃も同じ事になるので、少しも讃をしただけの効がない。祇園の夜櫻といふやうな景色を畫いた粗畫の上に、前にいふた「公達に狐化けたり」の句を讃として書くならば、夫れは面白いであらう。蛙が柳に飛びつかうとして誤つて落ちた處を畫いた畫に、世俗には

見付けたりかはづに臍のなき事を

といふ讃をした。是れは蛙といふ事は重複して居るけれども、臍のないと特に主觀的にいふた處は、この畫を見たばかりでは、思ひ付くべき事ではない、一種の滑稽的趣向を作者が考へ出したのであるから、是れは讃として差支がない。只ゞ葵の花ばかり畫いた上へ普通の葵の句を畫讃として書いた處で重複といふ譏でもあるまいが、併しかういふ場合には葵の句を書かずに、同じ題の他の句を書くのも面白いであらう。それは葵の花の咲いて居りさうな場所をあらはした句とか、又は葵の花の咲いて居る時候をあらはした句とか、又は葵の花より聯想の起るべき他の句とか、さういふものを畫讃として書くのである。も一つ例を擧げていふならば團扇の畫に螢の句を書く、とか、螢の畫に團扇の句を書くとか、もし又團扇と螢と共に畫いてある畫ならば、涼しさとか夕涼みとかいふやうな句を讃する。要するに畫ばかりでも不完全、句ばかりでも不完全といふ場合に畫と句を併せて、始めて完全するやうにするのが畫讃の本意である。歌を畫讃にする場合も俳句と違ふた事はない。　（八日）

五十八

○自分の目的ときめて毎日手に持つて居る極下等な團扇が一つある。この團扇の畫は淺草の凌雲閣が畫いてあるので、勿論見るに足らぬものとしてよくも見たこともなかつた。或時何とはなしにこの團扇の畫をつくづくと見た所が非常に驚いた。凌雲閣はとても畫にな

るべきものとは思はれんのであるが、この團扇の繪は不思議に妙な處をつかまへて居る。それは淩雲閣を少し横に寄せて團扇いつぱいの高さに畫いて、さうしてこのひよろ／＼高い建築と直角に帶のやうな海を畫いて、其地平線が八階目の處を横切つて居る。下の方は少し許り森のやうなものを淩雲閣の麓に畫いて、其上の處の嶋も地平線に並行して横に引いてある。是れは稍〻高き空中から見たやうな畫きやうである。さうして片隅のそらに馬鹿に大きな三日月が畫いてある。こんな大きな三日月はないわけであるが、是も淩雲閣といふ突飛な建物に對して、この大きさでなくては釣合はぬからから畫いたのである。面白い繪ではないけれども、淩雲閣を材料として無理に繪を畫くならば、先づこんな趣向より外に畫きやうはないであらう。つまりこの繪の趣向は竪に長い建築物に對して、直横に地平線と嶋とを引いた處にあるのである。玉英と署名してあるが、餘り聞いた名でないけれども、若し是れが多少の考があつて畫いた繪とすれば、外の日本繪の大家先生達はなか／＼に是程にも出來ないであらうと思ふ。この團扇の裏を見ると、裏には柳の枝が五六本上からしだれて萌黃色の芽をふいて居る、其の柳の枝の間から櫻の花がひら／＼と散つて少し下に溜つて居る處が畫いてある。是れだけの簡單な畫であるが餘程面白い趣向だ。落花を畫いて置きながら櫻の樹を畫かず却て柳をあしらふた處は凡手段でない。大家先生の大作の寫眞などを時々見るが、とても是程の善い感じは起らない。殊に是れが極下等な團扇であるだけに却つて興が深いので、何だか拾ひ物でもしたやうな心地がする。（九日）

五十九

○今日人と話し合ひし事々

一、徳川時代の儒者にて見識の高きは蕃山、白石、徂徠の三人を推す。徂徠が見解は聖人を神樣に立てゝ全く絕對的の者とする。宋儒の如き心を明かにするとか、身を修めるとかいふ樣な工夫も全く之を否認し唯〻聖人の道を行へばそれで善いといふ處は餘程豁達な大見識で、丁度眞宗が阿彌陀樣を絕對と立てゝ、總にあなた任せの他力信心で遣つて行くのと善く似て居る。もつとも徂徠の說は、吾々は到底聖人にはなれぬ、如何に心の工夫しても吾々の氣質が變つて聖人になるといふ事は斷じて無いといふのであるから、そこの處は佛教の卽身卽佛といふのとは少し違ふて居る樣に見えるが、併し徂徠のいふ所は吾々は聖人にはなれぬけれども、聖人の道を其儘行ひさへすれば聖人になつたも同じ事であるといふのだから、矢張卽身卽佛と同じ樣な結果になるのである。彼があながちに佛教を排斥せずして、人民は佛教を信じて居ても差支無い、吾々は聖人の道を行へばそれで澤山である、などと說く／＼ところは實に心持の善い說で、とても韓退之などの夢にも考へつく處では無い。唯〻惜い事には今一歩といふ處まで來て居ながら到頭殼の內を脫ける事が出來なかつたのは時代の然らしむるところで仕方が無い。若し彼が明治の世に生れたならばどんな大きな人間になつたらうかといつも思はぬ事は無い。

一、生活の必要は人間を動かしめる。生活の必要が大になればなる程勞働も亦大にならねばならぬ、併し人間の勞働には限りがあるばかりでなく、勞働に對する報酬にも亦限りがある。それ故に人によると、幾ら働いても生活の必要に應ずる事が出來ない場合がある。こゝに漢學者があつた、其學は死んでしまふて其遺產の少し許りあつたのを三四人の兒

業に従事した。其時はそれで満足であつたが、だんだん妻子一名を家つて、女房を娶る、子が出來る、それも子一人位の時はまだ善かつたが、だんだん殖えて來て三人も四人もとなつた。上の子供は小學校へも行くといふ年になつた。父親は小學校の教頭を勤めて十圓か十一圓の月給を取つて居る。二十年一日の如く働いて居るが月給も二十年居据りである。さあどうしても食へないといふ事になつた所で、どうしたら善からうか、是が問題なのである。誠に正直で、誠に勉強で、謙譲りの[illegible]であつて、誠に貴ぶべき人であるけれど、只ゝ世の中にうとい爲に外に職[illegible]家内六人、是れはどうしたら善からうか、[illegible]學者の說を聞きたい。

一、名古屋の料理通に聞くと、東京の料理は甘[illegible]過ぎてゐるさうな。

一、[illegible]て、其代り分量が極少くしてある。是れは[illegible]味のある事である。然るに料理屋にあつらへると、金錢の點からどうしても分量を多くして食ひ[illegible]事が出來ないのは[illegible]である。

一、能樂界の内幕は[illegible]して居つて[illegible]からは十分にわからぬが、要するに上掛りと下掛りとの[illegible]の[illegible]であるらしい。

一、高等學校生[illegible]、私は今度の試驗に落第しましたから、當分の内[illegible]も[illegible]ました。

一、今度大學の土木課を卒業した工學士の内五人だけ米國の會社に傭はれて漢口へ[illegible]きに行くさうな。世界は廣い。これから後は日本などでこせこせと仕事して居るのは馬鹿を見る樣になるであらう。（十日）

六十

○[illegible]

一、田園に建家の殖えたる事

一、[illegible]の事

一、[illegible]事

一、[illegible]事

一、[illegible]なりし事

一、時鳥によつて屢ゝ音をもらし、梟何[illegible]事

一、[illegible]並べたる事

一、御行[illegible]事

一、傭翁、藻洲、稼竹、湖邨等の諸氏去りて、碧梧桐、[illegible]等の諸氏[illegible]事

一、[illegible]

一、[illegible]

一、[illegible]

一、草庵の松葉[illegible]、美人蕉等今を盛りと花さきて、庵主の病よろしからざる事（十一日）

六十一

○明和頃に[illegible]まつたしまりのある俳句、[illegible]なるものは、[illegible]に[illegible]て、寬政になると[illegible]の[illegible]、[illegible]文化文政と進んで行くに從つて、又更に局[illegible]なると、[illegible]の天保調、所謂月並調となつてしまつた。文化文政の句は天明調と天保調の中間に[illegible]だけに、[illegible]けれども、[illegible]を學んで[illegible]

る。今こゝに寛政の末頃である、諸國を行脚して俳人に句を書いて貰ふたといふ其帳面を見るに

春の風俄の月夜に唯白し

雉啼て靜かに出の夕日かな

の如きがある。この「唯白し」とか「靜かに」とかいふ詞は、こゝでは少しも月並臭氣を帶びて居るとは言へないけれども、この詞の底が段々に現はれて來ると、つゞまる所天保調が生れて來るのである。極端な月並調ばかりの句を見て居ると、かやうな句を不注意に見過す人が多いが、歴史的に見て行くと、天明調と天保調との中間にかういふ調子の句が一時流行したといふことに氣がつくであらう。又同じ帳面に

尻鳥の横雲に眼や時鳥

梅雨に身振ひするや原の雉子

畑打のひまや襷の渡し守

などいふ句は已に月並調に落ちて居る。たゞその落ちかたが淺いだけに月並ふ所に見せたらば是等は可も不可もなき平凡の句として取るであらう。（十二日）

六十二

○泥坊が阿彌陀様を念ずれば阿彌陀様は攝取不捨の誓によつて往生させて下さる事疑なしといふ。是れ眞宗の論なり。此間に善惡を論ぜざる處宗教上の大度量を見る。しかも他宗の人はいふ、泥坊の念佛には猶不安の狀態あるべしと。泥坊の信仰に就いては佛教に限らず耶蘇教にも其例多し。彼等が精神の狀態は果して安心の地に在るか、或は不安を免れざるか、心理學者の研究を要す。（十三日）

六十三

○日本の美術は繪畫の如きも模樣的に傾いて居ながら純粹の模樣として見る可きものゝうちに幾何學的の直線又は曲線を應用したる者が極めて少ない。繪畫が模樣的になつて居るのみならず模樣がまた繪畫的になつて居る。殊に後世に至る程其の傾向が甚しくなつて純粹の模樣を用ゐて善き場合にも波に千鳥とか鯉の瀧上りとか其外模樣的ならざる、寧ろ繪畫的の花鳥などを用ゐる事が多い。偶〻卍つなぎとか巴とかの幾何學的模樣があるけれど其等は皆支那から來たのである。近頃鍬形蕙齋の略畫を見るに其の幾何學的の直線を利用した者が幾らもある。たとへば二三十人も一直線に並んで居る處を畫くとか、又は行列を縱から見て畫くとかいふ樣な類があつて、日本繪の内では余程眼新しく感ぜられる所がある。其の外能樂の舞には直線的の部分が多い。是れは支那から來た古い舞樂に直線的の部分が多いので能樂は或は其影響を受けて居るかも知れん。近來藝妓などのやる踊りなるものは半ば意味を含んだ擧動をやる爲に幾何學的の處が極めて少ない。日本人は西洋の舞踏の幾何學的なるを見て極めて無趣味なる者として排斥する者が多いが、よし無趣味なりとしても日本の踊の不規則なる擧動の非常に厭味多く感ぜられるのには優つて居るであらう。支那の演劇の時代物といふべき者には非常に幾何學的の擧動が多いので模樣的に面白い處があるが演劇としては幼稚な者の樣に見える。それに比すると日本の能樂は幾何學的にも偏せず、寧ろ善く調和を得たるやうに思はれる。（十四日）

六十四

○七月十一日。晴。始めて、蜩を聞く。

梅雨晴や蜩鳴くと書く日記

七月十二日。晴。始めて蟬を聞く。

蟬始メテ鳴ク鮠釣る頃の水繪空

（十五日）

六十五

○病氣になつてから既に七年にもなるが、初めの中はさ程苦しいとも思はなかつた。肉體的に苦痛を感ずる事は病氣の勢ひによつて時々起るが、それは苦痛の薄らぐと共に忘れたやうになつてしまふて、何も跡をとゞめない。精神的に煩悶して氣違ひにでもなりたく思ふやうになつたのは、去年からの事である。さうなると益々本當の常病人になつて、朝から晩迄誰か傍に居つて看護をせねば暮らせぬ事になつた。何も仕事などは出來なくなつて、たゞひた苦みに苦しんで居ると、それから種々な問題が涌いて來る。死生の問題は大問題ではあるが、それは極單純な事であるので、一旦あきらめてしまへば直に解決されてしまふ。それよりも直接に病人の苦樂に關係する問題は家庭の問題である、介抱の問題である。病氣が苦しくなつた時、又は衰弱の爲に心細くなつた時などは、看護の如何が病人の苦樂に大關係を及ぼすのである。殊に唯物淋しく心細きやうの時には、傍の者が上手に看護して呉れさへすれば、即ち病人の氣を迎へて巧みに慰めて呉れさへすれば、病苦などは殆ど忘れてしまふのである。然るに其看護の任に當る者、即ち家族の女共が看護が下手であるといふと、病人は腹立てたり、癇癪を起したり、大聲で怒鳴りつけたりせねばならぬやうになるので、普通の病苦の上に、更に餘計な苦痛を添へるわけになる。我々の家では下婢も置かぬ位の事で、まして看護婦などを雇ふてはない。そこで家族の者が看病するといつても、食事から掃除から洗濯から裁縫から、あらゆる家事を勤めた上の看病であるから、なかなか朝から晩迄病人の側に付ききりに付いて居るといふわけにも行かぬ。そこで病人はいつも側に付いて居て呉れといふ。家族の女共は家事があるからさうは出來ぬといふ。先づ一つの爭ひが起る。又家族の者が病人の側に坐つて居て呉れても種々な工夫をして病人を慰める事がなければ、病人は矢張無聊に堪へぬ。けれども家族の者にそれだけの工夫がない。そこでどうしたらばよからうといふ問題が又起つて來る。我々の家族は生れてから田舍に生活した者であつて、勿論教育抔は受けた事がない。所謂家庭の教育といふことさへ受けなかつたといふてもよいのである。それでもお三どんの仕事をするやうな事は寧ろ得意であるから、平日はそれでよしとして別に備はるを求めなかつたが、一朝一家の大事が起つて、即ち主人が病氣になるといふやうな場合になつて來た處で、急に看護の必要が生じて來ても、其必要に應ずることが出來ないといふ事がわかつた。病人の看護と庭の掃除とどつちが急務であるかといふ事さへ、無教育の家族にはわからんのである。況して病人の側に坐つて見た處でどうして病苦を慰めるかといふ工夫などは固より出來る筈がない。何か話でもすればよいのであるが、話すべき材料は何も持たぬから只々手持無沙汰で坐つて居る。新聞を讀ませようとしても、振り假名のない新聞は讀めぬ。振り假名をたよりに讀ませて見ても、少し讀むと全く讀み飽いてしまふ。殆ど物の役に立たぬ女共である。茲に於て始めて感じた、教育は女子に必要である。（十六日）

六十六

○女子の教育が病氣の介抱に必要であるといふ事になると、それは看護婦の修業でもさせるのかと誤解する人があるかも知れんが、さうではない。矢張普通學の教育をいふのである。女子に常識を持たせようといふのである。高等小學の教育はいふ迄も無い事で、出來る事なら高等女學校位の程度の教育を施す必要があると

思ふ。平和な時はどうかかうか濟んで行く者であるが病人が出來た樣な場合に其病人をどう介抱するかといふ事に就て何等の知識も無い樣では甚だ困る。女の務むべき家事は澤山あるが、病人が出來た曉には其家事の内でも緩急を考へて先づ急な者だけをやつて置いて、急がない事は後廻しにする樣にしなくては病人の介抱などは出來る筈が無い。掃除といふ事は必要であるに相違無いが、うん／＼と唸つて居る病人を傍に置いて隅から隅迄拭き掃除をしたところで、それが女の義務を盡したといふわけでもあるまい。場所によれば毎日の掃除を止めて二日に一度の掃除にしても善い、三日に一度の掃除にしても善い。二度炊く飯を一度に炊いて置いてもよい。或は近所の飯屋から飯を取寄せてもよい。副食物も悉く内で煮炊きをしなくてはならぬといふ事は無い。これも近所に在る店で買ふて來てもよい。併し病人の好む場合には特に内で煮炊きする必要が起る事もある。さういふ場合には成るべく注意して鹽梅を旨くするとか、又は病人の氣短く請求する時は成るべく早く調製する必要も起つて來る。たとへば病人が何々を食ひたいといふ、而も至急に食ひたいといふ。けれども人手が少なうて、別に臺所を働く者が無い時には病人の傍で看病しながら食物を調理するといふ必要も起つて來る。かやうな事は格別むづかしい事でも無い樣であるが實際これだけの事を遣つてのける女は存外少ないかと思はれる。それはどういふわけであるかといへば、それを遣るだけの知識さへ缺乏して居る、即ち常識が缺乏して居るのである。女のする事を見て居ると極めて平凡な仕事を遣つて居るに拘らず割合に長い時間を要するといふ者は、畢竟其遣り方に無駄が多いからである。一つの者を甲の場所から丁の場所へ移してしまへば善いのを、先づ初に乙の場所に移し、再び丙の場所に移し、三度目にやう／＼丁の場所に移すといふ樣な餘計の手數をかけるのが女の遣り方である。平生はこれでも善いが一旦急な場合には迚もそんな事して居ては間に合ふ者では無い。それ位な工夫は常識がありさへすれば誰にでも出來る事である。其常識を養ふには普通教育より外に方法は無い。どうかすると女に學問させてそれが何の役に立つかといふて質問する人があるが、何の役といふても讀んだ本が其儘役に立つ事は常にある者では無い、つまり常識を養ひさへすれば、それで十分なのである。

（十七日）

六十七

○家庭の教育といふ事は、男子にも固より必要であるが、女子には殊に必要である。家庭の教育は知らず／＼の間に施されるもので、必ずしも親が教へようと思はない事でも、子供は能く親の眞似をして居る事が多い。そこで家庭の教育は其子供の品性を養ふて行くのに必要であるが、又學校で教へないやうな形式的の教育も、極些細な部分は家庭で教へられるのである。例をいへば子供が他人に對して、辭儀をするといふ事を初めとして、來客にはどういふ風に應接すべきものであるかといふ事などは、親が教へてやらなくてはならぬ。殊に女子にとつては最も大切なる一家の家庭を司つて、其の上に一家の和樂を失はぬやうにして行く事は、多くは母親の教育如何によりて善くも惡くもなるのである。處が今迄の日本の習慣では、一家の和樂といふ事が甚だ乏しい。それは第一に一家の團欒といふ事の缺乏して居るのを見てもわかる。一家の團欒といふ事は、普通に食事の時を利用してやるのが簡便な法であるが、それさへも行はれては居らぬ家庭が少なくはない。先づ食事に一家の者が一所に集る。食事をしながら雜談

もする。食事を終へる。又雑談をする。是れだけの事が出來れば家庭は何時迄も平和に、何處迄も愉快であるのである。是れを從來の習慣に依つてせぬといふと、其内の者、殊に女の子などは一家團欒して樂しむべきものであるといふことを知らずに居る。そこで他家へ嫁入して後も、家庭の團欒などいふ事をする事を知らないで、殺風景な生活をして居る者がある。甚しいのは男の方で一家の團欒といふ事を、無理に遣らせて見ても、一向に何等の興味を感ぜぬのさへある。斯やうな事では一家の妻たる者の職分を盡したとはいはれない。それ故に家庭教育の第一歩として、先づ一家團欒して平和を樂しむといふ事位から教へて行くのがよからう。一家團欒といふ事は常に一家の者が、平和を樂しむといふ效能があるばかりでなく、家庭の教育も亦この際に多く施されるのである。一家が平和であれば、子供の性質も自ら平和になる。父や母や兄や姉やなどの談話が、有益なものであれば子供はそれを聽いてよき感化を受けるであらう。既に雑談といふ上は、むづかしい道德上の議論などをするのではないが、高尚な話題を擇へ、人の[illegible]、無[illegible]話のうちにも必ず其高尚な點を現して居るので、これを聽いて居る子供は、自ら高尚な點に感化せられる。この感化は別に教へるのでもなく、又教へられるとも思はないのであるが、其深く沁み込む事は學校の教育よりも更に甚しい。故に家庭教育の價値は或場合に於て學校の教育よりも重いといふても過言では無い。（十八日）

六十八

○此頃の暑さにも堪へ兼て風を起す機械を欲しと言へば、碧梧桐の自ら作りて我が寢床の上に吊り與へたる、假に之を名づけて風板といふ。夏の季にもやなるべき。

風板引け鉢植の花散る程に

先つ頃如水氏などの連中寄合ひて、謡能を催しけるときゝて、素顔に笠著たる姿など話に聞くもゆかし

涼しさの皆いでたちや謡能

總選擧も間際になりて日毎の新聞の記事さへ物騒がしく覺ゆるに

庭を這ふ夏野の夢路草茂る

（十九日）

六十九

○病氣の介抱に精神的と形式的との二様がある。精神的の介抱といふのは看護人が同情を以て病人を介抱する事である。形式的介抱といふのは病人をうまく取扱ふ事で、例へば薬を飲ませるとか、繃帯を取替へるとか、背をさするとか、足を按摩するとか、著物や蒲團の工合を善く直してやるとか、其外浣腸沐浴は言ふ迄もなく、始終病人の身體の心持よきやうに傍から注意してやる事である。食事の献立塩梅などをうまくして病人を喜ばせるなどは其中にも必要なる一箇條である。此二様の介抱の仕方が同時に得られるならば言分はないが、若し何れか一ツを擇ぶといふ事ならば寧ろ精神的同情のある方を必要とする。うまい飯を喰ふ事は勿論必要であるけれども、其の介抱人に同情が無かつた時には甚だ不愉快に感ずる場合が多いであらう。介抱人に同情さへあれば少々物のやり方が惡くても腹の立つものでない。けれども同情的看護人は容易に得られぬ者とすれば勿論形式的の看護人たけでもどれだけ病人を慰めるかわからぬ。世の中に澤山ある所の所謂看護婦なるものは此形式的看護の一部分を行ふものであつて[illegible]を行ふものに至つては甚だ乏しいかと思はれる。勿論一人の病人に一人以上の看護婦がつきゝりになつて居るとき

は形式的看護の仕事を行ふわけであるが、それも余程氣の利いた者でなくては病人に満足を得る事はむづかしい。看護婦として病院で修業する事は看護の助手の如きものであつて、此處に所謂病氣の介抱とは大分に違ふて居る。病人を介抱すると言ふのは畢竟病人を慰めるのに外ならんのであるから、教へることも出來ないやうな極めて些末なる事に氣が利くやうでなければならぬ。例へば病人に着せてある蒲團が少し顔へかゝり過ぎて居ると思へば其れを引き下げてやる。蒲團が重たさうだと思へば輕い蒲團に替へてやるとか、或ひは蒲團に紐をつけて上へ吊り上げるとかいふやうなことをする。病人が自分を五月蠅がつて居るやうだと思へば少し次の間へでも行つて隠れて居る。病人が人戀しさうに心細く感じて居るやうだと思へば自分は片時も其側を離れずに居る、或は他の人を呼んで來て静かに愉快に話などをする。或は病人の意外に出でゝ美しき花などを見せて喜ばせる、或は病人の意中を測つて食ひたさうなといふものを旨くこしらへてやる。斯様な風に形式的看護と言ふても矢張病人の心持を推し量つての上で、これを慰めるやうな手段を取らねばならぬのであるから、看護人は先づ第一に病人の性質と其癖とを知る事が必要であるけれども是れは普通の看護婦では出來る者が少ないであらう。多くの場合に於ては娘とか嫁とか姉とか妹とか、常に居つて平生から病人の嗜好の工合などを善く心得てある者の方が、うまく出來る筈である。うまく出來る筈であるけれども、それも實際の場合には中々病人の思ふやうにはならんので、病人は困るのである。一家に病人が出來たといふやうな場合は丁度一國に戰が起つたのと同じやうなもので、平生から病氣介抱の修業をさせるといふわけに行かないのであるから、そこは其人の氣の利き次第で看護の上手と下手とが分れるのである。

（二十日）

七十

○梅に鶯、竹に雀、などいふ様に、柳に翡翠といふ配合も蒔繪などには陳腐になる程描き古されて居る。此頃畫本を見るにつけて此陳腐な配合の畫を屢ゝ見る事であるが、それにも拘らず美しいといふ感じが强く感ぜられて面白く、興味がある様に覺えたので、柳に翡翠といふのを題にして戯れに俳句十首を作つて見たこれは昨年の作春水の鯉といふ事を題にして十句作つた事があるのを思ひ出して又やつてみたのである。

翡翠の魚を覗ふ柳かな
翡翠をかくす柳の茂りかな
翡翠の來る柳を愛すかな
翡翠や池をめぐりて皆柳
翡翠の來ぬ日柳の嵐かな
翡翠も鶯も來て居る柳かな
柳伐つて翡翠終に來ずなりぬ
翡翠の足場を選ぶ柳かな
翡翠の去つて柳の夕日かな
翡翠の飛んでしまひし柳かな

春水の鯉は身動きもならぬ程言葉が詰まつて居たが、柳に翡翠の方は稍ゝゆとりがある。從つて幾らか趣向の變化を許すのである。而して其結果はといふと翡翠の方が厭味の多いものが出來た樣である。併しこんな句の作り樣は、一時の戯れに過ぎないやうであるが、實際にやつて見ると句法の研究などには最も善き手段であるといふ事が分つた。つまり俳句を作る時に配合の材料を得ても句法の如何によつて善い句にも悪い句にもなるといふ事が、此やり方でやつてみると十分にわかる樣に思ふて面白い。

（二十一日）

七十一

○近刊の雜誌寶船に

甘酒屋打出の濱に卸しけり　青々

といふ句があるのを碧梧桐が賞讃して居つた。そこで余が之をつくづくと見ると非常に不審な點が多い。先づ第一に「卸しけり」といふ詞の意味がわからんので、之を碧梧桐に質すと、それは甘酒の荷をおろしたといふのであると說明があつた。それが余にはわからんのでどうも此詞で其意味を現はすことは無理であると思ふ。併しながらこの句の句法に至つては碧梧桐青々などのよく作るところで余は平生より頭ごなしに排斥してしまふ方であつたから、この機會を利用して、更に研究せうと思ふたので、第一の疑問は暫く解けたものとして、それから第二の疑問に移つた。卽ち甘酒屋と初句をぶつつけに置いた處が不審な點である。すると碧梧桐の答へは、そこが尋常でない處であるといふのであつた。この答は豫て期する所で、一ひねりひねつて句法を片輪に置いてある爲に、余はどうしても俳句として採ることが出來ぬと思ふやうな句をいつでも碧梧桐が採るといふ事を知つて居る。併しこの青々の句は少し他と變つて居るやうに思ふたので、余は幾度も繰り返して考へて見た。さうするといふと、打出の濱に甘酒屋が荷をおろしたといふ趣向には感が深いので、おろしけりの詞さへ假に許して見れば、非常に面白い句でありさうに段々感じて來た。この話をしてから一夜二夜過ぎて復考へて見ると、此度は前に感じたよりも更に善く感じて來た。甘酒屋と初めに据ゑた處を手柄であると思ふやうになつた。甘酒屋と初めに置いたのは、丁度小說の主人公を定めたやうに、一句の主眼を先づ定めたのである。假に之を演劇に譬へて見ると今千兩役者が甘酒の荷を舁いで花道を出て來たといふやうな有樣であつて、其主人公はこれからどうするか、其位置さへ未だ定まらずに居る處だ。それが打出の濱におろしけりといふ句で其位置が定まるので、演劇でいふと、本舞臺の正面より稍〻左手の松の木蔭に荷を据ゑたといふやうな趣になる。それから後の舞臺はどう變つて行くか、そんな事はこゝに論ずる必要はないが、兎に角おろしけりと位置を定めて一歩も動かぬ處が手柄である。若し「おろしけり」の代りに「荷を卸す」といふやうな結句を用ゐたならば、尙不定の姿があつて少しも落著かぬ句となる。又打出の濱といふ語を先に置いて見ると、卽ち「打出の濱に荷を卸しけり甘酒屋」といふやうにいふと、打出の濱の一小部分を現はすばかりで折角大きな景色を持つて來たゞけの妙味はなくなつてしまふ。そこで先づ「甘酒屋」と初めに主人公を定め、次に「打出の濱に」と其場所を定め「おろしけり」といふ語で其場所に於ける主人公の位置が定まるので、甘酒屋が大きな打出の濱一面を占領したやうな心持になる。そこが面白い。演劇ならば其甘酒屋に扮した千兩役者が舞臺全面を占領してしまふたやうな大きな愉快な心持になるのである。その心持を現はすのには、余が前に片輪だと言つたやうな此句法でなければ、しまつがつかぬといふことになつて來る。さうなつて來た序に、この「おろしけり」といふ詞も外に言ひやうもなき故に假に之を許すとして見ると、この甘酒屋の句は、その趣味と言ひ、趣味の現はしかたと言ひ、古今に稀なる句であると迄感ずるやうになつた。

（二十二日）

七十二

○先日週報募集の俳句の中に

京極や夜店に出づる紙帳賣

といふが碧梧桐の選に入つて居つた。餘り平凡

なる句を何故に碧梧桐が評びしかと疑はるゝのでよく／＼考へて見た末今ノ中七字が妥當で無いといふ事が分つた。普通には「夜店出したる」と置くべきを「夜店に出づる」とした處が誤つて居るのであつた。「夜店出したる」といへば只ゝ客觀的に京極の夜店を見て紙帳賣の出て居た事を傍から認めたまでであるが「夜店に出づる」といへば稍ゝ主觀的に紙帳賣の身の上に立ち入つて恰も小說家が自家作中の主人公の身の上を敍する如く、紙帳賣のがはから立てた言葉になる。卽ち紙帳賣になじみがあるやうな言ひかたである。之を演劇にたとへていふならば、幕があくと京極の夜店の光景で、其の中に紙帳賣が一人居る、これは前の段に屢ゝ見てなじみになつて居る菊五郎の紙帳賣である、といつたやうな趣になる。併し此句に就いては猶研究を要する。

（二十三日）

七十三

○家庭の雜務を減ずるために飯炊會社を興して飯を炊かすやうにしたならば善からうといふ人がある。それは善き考である。飯を炊くために下女を置き竈を拵へるなど無駄な費用と手數を要する。吾々の如き下女を置かぬ家では家族の者が飯を炊くのであるが、多くの時間と手數を要する故に病氣の介抱などをしながらの片手間には、ちと荷が重過ぎるのである。飯を炊きつゝある際に、病人の方に至急な要事が出來るといふと、それがために飯が焦げ付くとか片煮えになるとか、出來そこなふやうな事が起る。それ故飯炊會社といふやうなものが有つて、それに引請けさせて置いたならば、至極便利であらうと思ふが、今日でも近所の食物屋に誂へれば飯を炊いてくれぬことはない。たま／＼にはこの方法を取る事もあるが、矢張昔からの習慣は捨て難いものと見えて、家族の女どもは、それを厭ふて成る可く飯を炊く事をやる。ひまな時はそれでも善いけれど、人手の少くて困るやうな時に無理に飯を炊かうとするのは、矢張り女に常識の無いためである。そんな事をする勞力を省いて他の必要なる事に向けるといふ事を知らぬからである。必要なる事は其家によつて色々違ふ事は勿論であるが、一概を言へば飯炊きに骨折るよりも、副食物の調理に骨を折つた方が、餘程飯は甘美く喰へる譯である。病人のある内ならば病牀について居つて面白き話をするとか、聞きたいといふものを讀んで聞かせるとかする方が餘程氣が利いて居る。併し田舍の飯にはその家によつて堅きを好むとか柔かきを好むとか一様で無いから、西洋の麪包と同じ譯に行かぬ處もあるが、そんな事はどうとも出來る。飯炊會社がかたき飯柔かき飯上等の飯下等の飯それ／＼注文に應じてすれば小人數の内などは内で炊くよりも、誂へる方が却て便利が多いであらう。

（二十四日）

七十四

○大阪は昔から商賈の地であつて文學の地でない。たまには懷德堂、無腸子のやうな篤志家も出なんだではないが、此地に根を下した學者といふても多くは他國から入りこんで來た者であつた。俳人で大阪者といへば宗因、西鶴、來山、淡々、大江丸などであるが是位では三府の一たる大阪の産物としてはちともの足らぬ氣がする。蕪村を大阪とすればこれは又頭拔けた大達者であるが蕪村は大阪を嫌ふたか江戸と京で一生の大部分を送つた。近時新派の俳句なる者行はるゝに至つて靑々の如き眞面目に俳句を研究する者が出たのも、大阪に取つては異數のやうに思はれる。しかのみならず更に一團の少年俳家が多く出て俳句といひ寫實的小品文といひ敏捷に輕妙に作りこなす處は天下敵無しとい

ふ勢ひで、何地より出る俳句雜誌にも必ず大阪人の文章俳句が跋扈して居るのを見る每に大阪のために其全盛を賀して居る。然るに此少年の一團を見渡すにいづれも皆才餘りありて識足らずといふ缺點があつて如何にも輕薄才子の態度を現して居る。其文章に現れたる所に因つて察するに生意氣、ハイカラ、輕躁浮薄、傍若無人、きいた風、半可通、等あらゆる此種の形容詞を用ゐても猶足らざる程の厭味を備へて居つて見る者をして嘔吐を催さしむるやうな擧動をやつて居るらしいのは當人に取つても甚だ善くない事でこれがために折角發達しつゝある才の進路を止めてしまふ事になる、又大阪に取つても前古未曾有の盛運に向はんとするのをこれぎりで挫折してしまふのは惜しい事ではあるまいか。畢竟之を率ゐて行く先輩が無いのと少年に學問含蓄が無いのとに基因するのであらう、幾多の少年に勸告する所は、成るべく謙遜に奥ゆかしく、眞面目に勉强せよといふ事である。（二十五日）

七十五

○或人からあきらめるといふことに就いて質問が來た。死生の問題などはあきらめてしまへばそれでよいといふた事と、又嘗て兆民居士を評して、あきらめる事を知つて居るが、あきらめるより以上のことを知らぬと言つた事と撞著して居るやうだが、どういふものかといふ質問である。それは譬喩を以て說明するならば、ここに一人の子供がある。其子供に、養ひの爲に、親が灸を据ゑてやるといふ。其場合に當つて子供は灸を据ゑるのはいやぢやといふので、泣いたり逃げたりするのは、あきらめのつかんのである。若し又其子供が到底逃げるにも逃げられぬ場合だと思ふて、親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑて貰ふ。是は已にあきらめたのである。併しながら、其子供が灸の痛さに堪へかねて灸を据ゑる間は絶えず精神の上に苦悶を感ずるならば、それは僅にあきらめたのみであつて、あきらめるより以上の事は出來んのである。若し又其子供が親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑさせるばかりでなく、灸を据ゑる間も何か書物でも見るとか自分でいたづら書きでもして居るとか、さういふ事をやつて居つて、灸の方を少しも苦にしないといふのは、あきらめるより以上の事をやつて居るのである。兆民居士が一年有半を著した所などは死生の問題に就いてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を樂しんでといふやうな樂しむといふ域には至らなかつたかと思ふ。居士が病氣になつて後頻りに義太夫を聞いて、義太夫語りの評をして居る處などは稍〻わかりかけたやうであるが、まだ十分にわからぬ處がある。居士をして二三年も病氣の境涯にあらしめたならば今少し樂しみの境涯にはひる事が出來たかも知らぬ。病氣の境涯に處しては、病氣を樂しむといふ事にならなければ生きて居ても何の面白味もない。（二十六日）

七十六

○近頃月樵の大幅を見た。それは雪中に狸の歩いて居る處で、弓張月が雲間から照して居る。狸を眞中に畫いて其前後には枯茅の如きものに雪の積んだ處があしらつてある。畫の中の材料はそれきりで極めて簡單であるが、最も不思議な事は、狸の顏の上半分と背中の處だけは薄墨で畫いて、其餘は眞黑に畫いてある。其の淡墨と濃墨との接する處は極めて無造作であつて、近よつて之れを見ると何とも合點のゆかぬ程であるが、少し遠ざかつて見ると背中の淡白い處が朦朧として面白く見える。これは

多少雲も積つて居るであらうし、其上を月が照して居るためにかういふ風に見えるといふ趣をあらはして居る。かやうな處へ極意を凝らすのは月樵の月樵たる所で、とても他人の思ひ及ぶ所では無い。又竪に少し遠ざかつて見るやうに書いたのは僅の髮の毛を一本々々書くやうな小細工な日本畫家と同日に論じられん所である。

前に月樵の名譽が揚らないといふ事に就いて或人は態々手紙をよこして、月樵の名譽の高き事をいふてあつた。余も月樵の名譽が全く無いとは思はないけれど、今日ある所の名譽は實際の技倆に比して果して相當な名譽であるであらう歟、それが疑はしいのである。蕪村の俳句に於ける名譽も、いつも多少の地位を占めて居つた事は明かであるが、其名譽は固より實際の技倆に副ふ程の名譽では無かつたので、明治の今日に至つて、始めて相當の名譽を得たのである。現に月樵の事に就いて手紙をよこした人も、月樵が或時應擧と共に一日百枚の席畫を畫いたが日の暮頃に應擧はまだ八十枚しか畫かないのに月樵はすでに九十枚畫いて居つた。これでも月樵の筆の達者な事がわかると、自慢してあつた。けれども それ等は實に不見識な話で、元來席畫などは、畫かきの戯に書くものである。それを百枚畫いたとて、二百枚畫いたとて、少しも名譽にはならぬ。こんな事で誉められては月樵も迷惑するであらう。月樵の本分は何處にあるか、まだ世間には知られて居らんと見える。

（二十七日）

七十七

○日本、新聞の俳句は敢て募集するとにはあらねど、篤志の人は投書あるべし。投書は紙一枚に一題に限る。一枚毎に番號を記し置くべし。題は其季のもの何にてもよろし。斯く横着にも敢て募集せずといふは投書を排斥するの意には非ず。若し募集すといふ以上は選擇の責任重くなりて病身の堪ふる所に非ず。場合によりては善き句も見落す事あるべく、又初め四五句讀みて其出來加減を試み其以外の句は目も通さで棄つる事もあるべし。斯かる無責任の目標にてもかまはぬ人は俳句を寄せられたし。

○此頃「古池舊蹟芭蕉翁社創立十年祭記念物奉納並大日本俳家人名錄發行諸言」と題する摺物の内に贊成員幹事員などいふ名目ありて我名も其幹事員の中に記されたり。されどこは我が知る所に非ず。尤も幹雄等には十年程前に一二度面會したる事あり、明治二十六年奥羽行脚に出掛し時などは翁の紹介書を得たるなど世話になりたる事もあり。されど古池舊蹟會には何の關係も無く、又俳家人名錄などいふ事にも何等の關係なし。

○毎週水曜日及日曜日を我病床の面會日と定め置く。何人にても話のある人は來訪ありたし。但し此頃の容態にては朝寢起後は苦しき故、朝早く訪はるゝ事だけは容赦ありたし。病人の事なれば來客に對しても相當の禮を盡す能はず、あらゆる無禮を爲すは勿論、餘り苦しき時は面會を斷る事もあるべし。其外場合によりては、をいひ指圖がましき事などをいふかも知れず。是等は前以て承知あらん事を乞ふ。話の種は雅俗を問はず何にても話されたし。學術と實際とに拘らず各種專門上の談話など最も聽き度しと思ふ所なり。短冊、畫帖など其他總て字を書けとの依頼は斷り置く。又面會日以外は面會せずといふわけには非ず。

（二十八日）

七十八

○西洋の審美學者が實感假感といふ言葉をこしらへて區別を立てゝ居るさうな。實感といふのは實際の物を見た時の感じで、假感といふのは

畫に書いたものを見た時の感じであるといふ事である。こんな區別を言葉の上でこしらへるのは勝手であるが、實際實感と假感と感じの有樣がどういふ風に違ふか吾にはわからぬ。例へばパノラマを見るやうな場合について言ふて見ると、パノラマといふものは實物と畫とを接續せしめるやうに置いたものであるから、之に對して起る所の感じは實感と假感と兩方の混合したものであるが、其實物と畫との境界に在るもの即ち實物やら畫やら殆どわからぬ所のものに對して起る所の感じは何といふ感じであらうか。若し畫に書いてあるものを實物だと思ふて見たならば其時は畫に對して實感が起るといふても善いのであらうか。又實物を畫と誤つて見た時の感じは何といふ感じであらうか。其時に實物に對して假感が起つたといふても善いのであらうか。さうなると實感が假感か、假感が實感か少しも分らぬではないか。元來畫を見た時の感じを假感などと名付けた所で、其假感なるもの〻心理上の有樣が十分に說明してない以上は議論にも成らぬことである。吾々が畫を見た時の感じは、種々複雜して居つて、其中には實物を見た時の實感と、同じやうな感じも幾らかこもつて居る。其外彩色又は筆力等の上に於て美と感ずるやうな感じもこもつて居る。然るにそれを唯〻假感と名付けた所で、どんな感じを言ふのか捕へ所の無いやうな事になる。吾は審美學の書物を讀んだ事もなければ、又これから讀む事も出來ぬ。若し吾說が誤つて居るならば、教を聞きたいものである。

（二十九日）

七十九

○夏の長き日を愛すといへる唐のみかどの悟りがほなるにひきかへ我はかび生ふる寢床の上にひねもす夜もすがら同じ天井を見て横にはゐることのつらさよ。立ちてはたらく人はしばらくの暇を得て書齋の肱を曲げなんと思ふ頃、我は杖にすがりて一足二足庭の木の影を踏まば如何にうれしからんと思ふ。されどせんなし。暑き日は暑きに苦しみ雨の日は雨に苦しみ、いたづらに長き日を書も讀までぼんやりとあれば、はては心もだえ息せまり手を動かし聲を放ち物ぐるはしきまでになりぬるもよしなしや。此頃すこしく痛みのひまあるに任せて俳句など案じわづらふ程に、古の俳人たちに斯かる夏の日を如何にして送りけんなど思ひつゞくれば、あるは面白、其人々の境涯あるは其宿の有樣あり／＼と眼の前に浮ぶまゝにそゞろしを捉へて、一句又一句、十餘人十餘句を得てけり。試みに記して書齋の目ざまし草、茶のみ時の笑ひ草にもなさんかし。

芭蕉

破團扇夏も一爐の備へかな

其角

鶴山のお相手暑し一斗

去來

柿の花散るや仕官の暇無き

丈草

靑嵐去來や來ると門に立つ

智月尼

義仲寺へ乙州つれて夏花摘

園女

罌粟咲くや尋ねあてたる智月庵

惟然

古蚊帳に乞食と見れば惟然坊

鬼貫

酒を煮る男も弟子の句つくり

太祇

俳諧の帳下句の安居かな

蕪村

團扇二つ角と雪とを畫きけり

召波

村と話す維駒團扇取って傍に

几董

李斯傳を風吹きかへす晝寐かな

（三十日）

八十

○七月二十九日。火曜日。曇。

昨夜半碧梧桐去りて後眠られず。百合十句忽ち成る。一時過ぎて眠る。

朝六時睡覺む。蚊帳はづさせ雨戸あけさせて新聞を見る。玉利博士の西洋梨の話待ち兼ねて讀む。印度仙人談完結す。

一時間程眠る。

九時頃便通後稍〻苦しく例に依りて麻痺劑を服す。藥いまだ利かざるに既に心愉快になる。

此時老母に新聞讀みてもらふて聞く。振假名をたよりにつまづきながら他愛も無き講談の筆記抔を讀まるゝを我は心を靜めて聞きみ聞かずみうと〳〵となる時は一日中の最も樂しき時なり。

牛乳一合、麺包すこし。

胡桃と蠶豆の古きものありとて出しけるを四五箇づつ並べて菓物帖に寫生す。

午飯、卯の花鮓。豆腐滓に魚肉をすりまぜたるなりとぞ。

又晝寐す。覺めて懷中汁粉を飲む。

午後四時過左千夫今日の番にて訪はる。

晩飯、飯三碗、燒物、芋、茄子、富貴豆、三杯酢漬、飯うまく食ふ。

庭前に咲ける射干を根ながら掘りて左千夫の家土産とす。

床の間の掛物龜に水草の畫、文鳳と署名しあれど僞筆らし。

座敷の掛額は不折筆の水彩畫、富士五合目の景なり。

銅瓶に射干一もとを插む。

小鉢に富士の燒石を置き三寸許りの低き虎杖を二三本あしらひたるは四絕生の自ら造りて贈る所。

（三十一日）

八十一

○食物に就きて數件

一、茶の會席料理は普通の料理屋の料理と違ひ變化多き者ならんと思へり。然るに茶の料理も之れを料理屋に命ずれば矢張千篇一律なり。曰く味噌汁、曰く汁鱠、曰く椀盛、曰く燒物と。斯の如き者ならば料理屋に依賴せずして亭主自ら意匠を凝らすを可とす。徒に物の多きを貪りて意匠無きは會席の本意に非ず。

一、東京の料理はひたすらに砂糖的甘味の強きを貴ぶ。これ東京人士の婦女子に似て柔弱なる所以なり。

一、東京の料理はすまし汁の色白きを貴んで色の黑きを嫌ふ。故に醬油を用ゐる事極めて少量なり。これ椀盛などの味淡泊水の如く殆ど喫するに堪へざる所以なりと。些細の色のために味を損ずるは愚の極といふべし。

一、餅菓子の白き色にして一箇一錢を値する者其の色を赤くすれば則ち一箇二錢五厘となる。味に相違あるに非ず。しかも一箇にして一錢五厘の相違は染料の價なりと。贅澤に似たれども其觀の美は人をして其味の美を増す思ひあらしむ。

一、鯛の白子は眞子よりも遙かに旨し。しかも世人此味を解せざるために白子は價廉に眞子は貴し。

一、醬油の辛きは鹽の辛きに如かず。山葵の辛きは薑の辛きに如かず。

（八月一日）

八十二

○我々の所謂俳句仲間にて俗宗匠の作る如き句を月・並・調と稱す。これは床屋連、八公連などが月並の俗調を得て景物取りの句作を爲すより斯くいひし者が、俳句の流行と共に今は廣く擴がりて、わけも知らぬ人迄月並調といふ語を用ゐる樣になれり。從つて或場合には俳句以外の事に迄俗なる者に之を月並と呼ぶ事さへ少からず。近頃或人と衣・食・住・の月並といふ事を論じたる事あり。著物の縞柄に就きても極めて細き縞を好むは月並なり。著物の地合に就きていへば縮緬の如きは月並なり。食物に就きていへば砂糖漬などを多く入れて無暗に甘くしたるは月並なり。住居に就いていへば床の間の右側の柱だけ皮附きの木にするは月並なり。此の類枚擧に遑あらず。然るに俳句の上にて月並の何たるを解する人にして却て日常衣食住の上には殆ど月並趣味を脱する能はざる人極めて多し。例へば著物の縞などは殊に細かきを貴ぶ人多く、而も其月並たるを知らざるのみならず却て縞柄の大きく明瞭なるを以て俗と稱ふるが如きあり。是等は流俗に雷同して其可否を研究せざるにもよるべく、將た俳句に得たる趣味を其の上に一貫せしむる事を思はぬにもよるべし。俳句の俗宗匠が細みなどと唱へて極めて繊細なる下らぬ事を句に作りて喜べる所謂細みを誤解したる者なり。大きなる景色などを詠みたる句は面白からずとも俗には落ちざるべし。畫にても俗の畫の毛を一本づゝ書きたる如きに勞力之を月並といふべし。然るに著物の縞に限りて細きを好むが如きは衣服は殊に虚飾を爲すには必要なる者なれば色氣ある少年達の往々世の流行に雷同して月並に落ちたるをも知らざる者多きは笑止なり。婦人の上は姑く措く。男子にして修飾を爲さんとする者は須らく一箇の美的識見を以て修飾すべし。流行を追ふは愚の極なり。美的修飾は贅澤の謂に非ず、破袴弊衣も配合と調和によりては縮緬よりも友禪よりも美なる事あり。名古屋山三が濡燕の装ひは美にして伊左衛門の紙衣は美ならずとはいひ難し。余は修飾を以て惡しき事とは思はず、唯ゝ一般の俗人はいふ迄も無く、俳句の上にては高尚なる趣味を解する人さへ、月並的修飾を爲すを悲しむなり。（二月）

八十三

○能・樂・社・會・には家元なるものがあつて、それが技藝に關する一切の事の全權を握つて居る。例へばシテの家元には金春、金剛、觀世、寶生、喜多といふのがある。ワキの家元には寶生、春藤などといふのがある。其外大鼓の家元は誰とか、小鼓の家元は誰とか一々きまつて居る。狂言の方にも大藏流、鷺流など其外にもある。さうしてこれ等の家元が各々跋扈して自分の流義に囚はれ、容易に他人には流義の奥秘を傳授せぬなどといふ事に成つて居る。けれども昔の時代はそれでも善かつたが、今日の世の中では今少し融通を附けて遣つて行かぬと、能樂界が滅びてしまひはせぬかとの懸念がある。今日では最早能役者に扶持の附いて居る時代では無いのである。それにも拘らず各種の藝に一々家元呼ばはりなどをして居つては、人が足らないで能樂が出來ぬやうな事に成つてしまふ。其處で今日の場合に應じて行かうといふには、一人でいいいいいいいいいいいいい出來るだけの藝を兼ねて遣るやうにしたら善いいいいからうと思ふ。例へば小鼓を打つものは大鼓を打ち太鼓も打つ位のことは雑作無いであらう。或はワキ師がハヤシ方に成つても善からう。若し出來るならばシテも遣る、ワキも遣る、ハヤシ方も遣る、狂言も遣る、さういふやうな人もあつて差支無いであらう。かういふ事をいふと昔風な頑固な人は、それは出來るもので無

いと拒むかも知れない、一藝に達する事さへ容易で無いのに數藝に達するなんかは思ひも寄らぬ事であるなどといふであらう。それも一理が無いではないが必ずしもさういふ譯のものでも無い、昔の人は漢學を知つて居るものは國學を知らない。詩人は歌を作ることを知らない。歌人は俳句を作ることを知らない。昔は總てさういふ風であつたのである。それが明治に成つて見ると歌を作り俳句を作るといふ者も澤山出來て來た。詩も作り歌も作るといふ者も出來て來た。中には數學專門の人で俳句を作る者もある。して見ると能役者が二藝三藝兼ねる位の事は譯も無い事といはねばならぬ。其上に其成績はどうかといふと一藝專門の者が皆達者で二藝以上兼修の者は腕が鈍いといふでも無い。それは俳句界で第一流といはれる蕪村が畫の方でも亦凡人にすぐれた技倆を持つて居つたのでもわかる。尤もこれは誰にでも出來るといふ譯では無いから、人を强ふる譯には行かぬが、若し自分が奮發して遣つて見ようといふものがあるならば二藝でも三藝でも修めるが善いであらうと思ふ。家元なる人も亦斯の如き後進を扶けて行く事に力めて、ゆめにも其進路を妨げるやうな事をしてはならぬ。　（三日）

八十四

○此頃病牀の慰みにと人々より贈られたるものゝ中に

鳴雪翁より贈られたるは柴又の帝釋天の掛圖である。この圖は日蓮が病中に枕元に現はれたといふ帝釋天の姿を其儘寫したもので、特に病氣平癒には緣故があるといふて贈られたのである。其像は四寸許りの大きさで全體は影法師を寫したといふ爲に黑く畫いてある。顏ばかり稍ゝ明瞭で、菱形の目が二つ竝んで居る。傍には高祖眞筆自刻帝釋天王、東葛西領柴又、經榮山題經寺と書いてある。上の方には例の題目が書いてあつて其傍に草書でわからぬ事が澤山書いてある。其中に南無釋迦牟尼佛とか、病之良藥とかいふのが僅かに讀める。いろいろな神樣を祭らせて成るべく信仰の種類を多くせうとした日蓮の策略は淺墓なやうであるけれども、今日に至る迄多くの人の信仰を博して柴又の緣日には臨時汽車迄出させる程の勢ひを持つて居るのは、日蓮のえらい事を現はして居る。

鼠骨より贈つて呉れた玩器は、小さい丸い薄いガラスの玉の中に、五分位な人形が三つはひつて居る。其人形の頭は赤と綠と黑とに染分けてある。それで其玉に水を入れて、口を指で塞いで玉を横にすると、人形が上の方に浮き上つたり又下に沈んだりするやうになつて居る。しかも其人形は同時に浮き沈みせずして別々に浮沈みする。これは薄いガラスを指で壓する爲に壓せられたる水が人形の空虛に出入して、それが爲に浮沈するのであらう。簡單な物であるけれど、物理を應用して、子供などを喜ばせるやうに出來て居る處はうまいものである。これに口上が添ふと一層面白くなるので、露店の群がつて居る中でも、この玩器を賣る店は最も賑はふ處であるさうな。實際の口上は知らぬが、鼠骨の假聲を聞いても餘程興がある。「赤さんお上り、青さんお上り、青さんお下り、黑さんお下り」「小隊進めオイ」などとしやべりながら、片方の手でガラスの外から絲を引くやうな眞似をするのは、鼠骨得意の處である。今一つの玩器は、日比野藤太郎先生新發明の活動寫眞といふので、これは丁度、トランプ程の大きさの紙が三十枚程揃へてあつて、それには相撲の取組んで居る繪が順を追ふて變化するやうに畫いてある。それを指の先で一枚宛ばら〳〵とはじいて見るので活動寫眞になるのぢやさうな。人

を馬鹿にして居る處が甚だ面白い。

義郎が贈つたといふよりも實際目の前でこしらへて見せた田面の人形といふのがある。これは義郎の來る日が恰も新暦の八月一日に當つて居つたので、義郎の故郷（伊豫小松）でする田面の儀式をして見せたのである。それは糝粉で二三寸許りの粗末な人形を澤山作つて、盆のぐるりに竝べる。其中央には矢張糝粉の作り物を何でも思ひ〳〵にこしらへて置くのぢやさうな。余の幼き時に僅かに記憶して居るのは、これと少し違つて黍殼に赤紙の著物などを著せて人形として、それを板の上に澤山竝べるのであつた。この田面祭りといふのは百姓が五穀を祭る意味であるから、國々の田舍に依つて多少の違ふた儀式が殘つて居るであらうと思ふ。併し人形の行列を作るのは何の意味であるかよくわからぬ。　（四日）

八十五

○此頃茂りといふ題にて俳句二十首ばかり作り碧梧桐虛子に示す。碧梧桐は

人住まで荒入らしめず木の茂り

の句善しといひ虛子は

桐にもならで茂りぬ五百年

の句善しといふ。しかも前者は虛子之を取らず後者は碧梧桐之を取らず。

植木屋は來らず庭の茂りかな

の句に至りては二子共に可なりといふ。運座の時無造作にして意義淺く分り易き句が常に多數の選に入る如く、今二子が植木屋の句に於て意見合したるは此句の無造作なるに因るならん。其後百合の句を二子に示して評を乞ひしに碧梧桐は

用ありて在所へ行けば百合の花

の句を取り、虛子は

姫百合やあまり短き筒の中

の句を取る。しかして碧梧桐後者を取らず虛子前者を取らず。

瀧もあり百合など咲いて島ゆたか

の句は余が苦辛の末に成りたる者、碧梧桐は之を百合十句中の第一となす、此句未だ虛子の說を聞かず。賛否を知らず。　（五日）

八十六

○此ごろはモルヒネを飲んでから寫生をやるのが何よりの樂しみとなつて居る。けふは相變らずの雨天に頭がもや〳〵してたまらん。朝はモルヒネを飲んで蝦夷菊を寫生した。一つの花は非常な失敗であつたが、次に畫いた花は稍〻成功してうれしかつた。午後になつて頭は愈〻くしや〳〵しやとしてたまらぬやうになり、終には餘りの苦しさに泣き叫ぶ程になつて來た。そこで服藥の時間は少くも八時間を隔てるといふ規定によると、まだ藥を飲む時刻には少し早いのであるが、餘り苦しいからとう〳〵二度目のモルヒネを飲んだのが三時半であつた。それから復寫生をしたくなつて忘れ草（萱草に非ず）といふ花を寫生した。この花は曼珠沙華のやうに葉がなしに突然と咲く花で、花の形は百合に似たやうなのが一本に六つ許りかたまつて咲いて居る。それをいきなり畫いたところが、大々失敗をやらかして頻りに紙の破れ盡す迄もと磨り消したがそれでも追付かぬ。甚だ氣合くそがわるくて堪らんので、また石竹を一輪畫いた。これも餘り旨い成績ではなかつた。兎角こんなことをして草花帖が段々に畫き塞がれて行くのがうれしい。八月四日記。　（六日）

八十七

○草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に寫生して居ると、造化の祕密が段々分つて來るやうな氣がする。　（七日）

八十八

○八月六日。晴。朝、例によりて苦悶す。七時半麻痺劑を服し、新聞を讀んでもらふて聞く。牛乳一合。午餐。頭苦しく新聞も讀めず書もかけず されど鳳梨を求め置きしが氣にかゝりてならぬ故休み〳〵寫生す。これにて菓物帖完結す。始めて鳴門蜜柑を食ふ、液多くして夏橙よりも甘し。今日の番にて左千夫來る。午後四時半又服劑。夕刻は昨日より稍〻心地よし。夕刻寒暖計八十三度。（八日）

八十九

○或繪具と或繪具とを合せて草花を畫く、それでもまだ思ふやうな色が出ないと又他の繪具をなすつてみる。同じ赤い色でも少しづゝの色の違ひで趣が違つて來る。いろ〳〵に工夫して少しくすんだ赤とか、少し黄色味を帶びた赤とかいふものを出すのが寫生の一つの樂しみである。神様が草花を染める時も矢張こんなに工夫して樂しんで居るのであらうか。（九日）

九十

○梅も櫻も桃も一時に咲いて居る、美しい岡の上をあちこちと立つて歩いて、こんな愉快な事は無いと、人に話しあつた夢を見た。睡眠中と雖も暫時も苦痛を離れる事の出來ぬ此頃の容態に何うしてこんな夢を見たか知らん。（十日）

九十一

○日本酒が此後西洋に澤山輸出せらるゝやうになるかどうかは疑問である。西洋人に日本酒を飮ませて見ても、どうしても得飮まんさうぢや。これは西洋と日本と總ての物が其の嗜好の違ふにつれて其の趣味も異つてゐるやうに單に習慣の上より來て居るものとすれば、日本の名が世界に廣まると共に、日本の正宗の瓶詰が巴里の食卓の上に並べられる日が來ぬとも限らぬ。併し吾々下戸の經驗を言ふて見ると、日本の國に生れて日本酒を嘗めて見る機會は可なり多かつたに拘らず、どうしても其の味が辛いやうな酸ばいやうなヘンな味がして今にうまく飮む事が出來ぬ。之に反して西洋酒はシャンパンは言ふ迄もなく葡萄酒でもビールでもブランデーでも幾らか飮みやすい所があつて、日本酒のやうに變テコな味がしない。これは勿論下戸の說であるから是れでもつて酒の優劣を定めるといふのではないが、兎に角西洋酒よりも日本酒の方が飮みにくい味を持つてゐるといふ事は多少證明せられて居る。それでも日本酒好になると、何酒よりも日本酒が一番うまいと言ふことは殆ど上戸一般に聲を揃へて言ふ所を見ると、その辛いやうな酸ばいやうな所が其人等には甘く感ぜられるやうに出來て居るのに違ひない。西洋人と雖も段々日本趣味に慣れて來る者は、日本酒を好むやうな好事家も幾らかは出來ぬ事はあるまいが、日本の淸酒が何百萬圓といふ程輸出せられて、それが爲に酒の値と米の値とが非常に騰貴して、細民が困るといふやうな事は先づ近い將來に於ては無いといふてよからう。（十一日）

九十二

○大做小做五對

（木）大阪の博覽會場內へ植ゑつけた並木は宮內省から貰ひ受けた何やらの木も甚だ生長が惡く十分に茂りを見せぬさうな。これは初め福羽氏より話があつたやうに銀杏の並木にして欲しかつた。銀杏の並木といふ事を聞いてから意外の考案に驚かされて今に之を夢想して居るのぢやが、博覽會場などで無く永久に保存すべき地に銀杏の

並木を造つて五十年百年と經過したなら如何に面白きものになるであらうか。夏の青葉の清潔にして涼しき、殊に晩秋より初冬にかけて葉が黄ばんで來た時の風致は楓や櫨などの紅葉とも違ふて得も言はれぬ趣であらう。冬枯に落葉して後も亦一種のさびた趣があつて他の凡木とは同日の論でない。それに銀杏の葉といふものも形の雅に色の美しきのみならず蟲さへ食はぬ程の清潔な者であるから何か之を裝飾に利用したら雅致のある者が出來はすまいかと思はれる。

去年の夏、毎日々々暑さに苦められて終日病牀にもがいた末、日脚が斜めに樹の影を押して、微風が夕顔の白き花を吹き搖かすのを見ると何ともいはれぬ善い心持になつて始めて人間に生き返るのであつた。其暑中の苦と其夕方の愉快さとが忘られんので今年も去年より一倍の苦を感ずるのに知れきつて居るから、せめて夕顔の白き花でも見ねば迚もたまるまいと思ふて夕顔の苗を買ふて病室の前に植ゑつけたが、一本も殘らず枯れてしまふた。看病のために庭の掃除も手入も出來ぬ上に、植木屋が來てくれんで松も椎も枝がはびこつて草苗などは下陰になつて生長することが出來ぬのであらう。もう今頃は白い花が風に動いて居るだらうと思ふと、見ぬ家の夕顔さへ面影に立つて羨ましくて羨ましくてたまらぬ。

（火）福岡の衞戍病院は三十餘年前に床の下に入れて置いた地雷火が此頃思ひ出したやうに爆發して人を燒き殺したさうな。

我家の炭も木ツパも連日の雨に濡れていくら燃やしつけても燃えぬ。それがために朝飯がいつも後れる。　（十二日）

九十三

（大傚小傚のツヾキ）

（土）此頃の霖雨で處々に崖が崩れて死傷を出した處もあるさうだ。其中にも横須賀の海軍經理部に沿ふた路傍の崖崩れは最も甚しき被害を與へたもので、十許りの人命と三臺の人力車とを一時に埋め去つたとは氣の毒な次第である。

我が草庵の門前は鶯横町といふて名前こそやさしいが、隨分嶮惡な小路で、冬から春へかけては泥濘高下駄を沒する程で、爲に來訪の客はおろし立ての白足袋を汚してしまふたといふやうな事は珍しくもないのである。それが此頃は夏であるに拘らず長雨の爲に門前の土が掘取つたやうにくぼくなつたさうで、知らない人はこゝで下駄をくねらしてころぶこともあるやうすである。誠に氣の毒な次第である。

（金）枝光の製鐵所では鎔鑛爐の作業を中止したさうた。

草庵の臺所では段々暑氣に向ふて咽喉のかわきをいやす工夫が必要になつたので、大なるブリキの藥罐を買ふて來て麥湯の製造に着手して居る。

（水）梅雨になつて降り出して、梅雨があけて復降り出して、土用に入りて降出して土用があけて復降り出したといふ、のべつ晴れなしの雨天なので、此頃では大川も小川も到る處溢れ出して家を浸して居る處もあり田畑を浸して居る處もある。泥鰌は喜んで居るだらうが、人間には隨分ひどい害をなして居る。

常に枕元に置いて居る硯は其溝が幅が狹くて深さも餘り深くないが、今迄水入れの水を入れるのにガブと入れ過ぎたやうた

時でも一度も溢れ出した事はない。それは種の山林にも深い森が残つてあるので、此溝は平生用を為さぬやうであるが、それが為に洪水を防ぐやうに出来て居る。此法を以て治めたら如何なる大河の水も治まらぬ事はあるまい。（十三日）

九十四

○上總にて山林を持つ人の話

一、此頃の杉の繁殖法は實生によらずして多くさし穂を用ゐる事

一、杉の枝は十年三十年六十年の三度位に伐り落す事

一、一丈廻りの杉の木は二百年以上を經たる者と知るべき事

一、杉の上等なるものは電信電話の柱として東京へ輸出し、其外多く上總戸と稱する粗末なる雨戸となして東京へ出す事

一、雨戸は建具屋職人一人にて一日八九枚より十四五枚を造る、東京へ持ち出しての相場は今一圓に三枚か三枚半との事

一、雨戸を東京へ出す迄に左の七人の手を經る事

一、山主　二、根ぎり（木を伐り倒す人）

三、木びき　四、建具屋

五、荷馬車　六、停車場運送店

七、東京木材問屋

一、松は二寸に一寸五分角位の垂木のやうな棒にして出す、之を松わりと呼ぶ事

一、くぬ木は炭となして佐倉へ出す、東京にてサクラ炭といふは此くぬ木炭なるべき事

一、松の伐くれ多く木材にならぬものは之を炭となす、下等の炭なり、併し東京の鰻屋は一般に之を用ゐる事

一、山林養成に最も害をなすものは第一、野火、第二、馬車の材木を積んで林の間を通る者、第三、小兒の惡戯等なる事（十四日）

九十五

○病牀六尺（七十八）に於て實感假感といふ語の定義に就いて疑を述べて置いたが、其の後「審美綱領」といふ書を見たら假情といふ事を説明してある、これが大かた前にいふた假感に當つて居るものであらう。併しこれには「一美なる感情を名づけて假情といふ」と規定してあるのだから假情といふ語の定義に就いては別に論ずべき餘地は無い。若し論ずるならば「一美たる感情」に就いて論ずべきである。さうなると問題が全く別になる。即ち倫理の順序を一變せねばならぬ。

此「審美綱領」といふ書を少し許り見たるに、僅か紙數なるためと耳遠い語の聞き慣れぬためとに、分りにくい處が多いが、斷々續々に、無駄なく、順序立ちて書いてある文は世間には少い方で甚だ心持が善い。今の新聞雑誌の文は反復して一事を説明するため其一事をすつかり合點させるには都合が善いが、其弊は冗長に流れて人を倦ませる事が多い。論説は[illegible]、などと言つて一般に新聞の論説を讀まぬが都人士の風になつて居るのも、畢竟論説欄の無味なるにもとづくと言ふよりも文が冗長になつて論旨が繰り返し／＼述べられて居るからであらう。新聞と書籍とは同様に論ずべきでは無いが、どつちにしても同じやうな事を同じやうな言葉で繰り返される者が多いのに閉口する。（十五日）

九十六

○子供の時に幽靈を恐ろしい者である様に教へると、年とつても幽靈を恐ろしいと思ふ感じが止まぬ。子供の時毛蟲を恐ろしい者である様に教へると、年とつて後も毛蟲を恐ろしい者の様に思ふ。余が幼き時婆々様がいたく蚕を可愛

がられて、毎晩夕飯がすんで座敷の縁側に煙草盆を据ゑて煙草を吹かしながら涼んで居られると手水鉢の下に茂つて居る一ッ葉の水に濡れて居る下からのそ〳〵と蟇が這ひ出して來る。それがだん〳〵近づいて來て、其處に落してやつた煙草の吸殻を食ふて又あちらの暗闇の後ろの方へ隱れてしまふ。それを婆々樣が甚だ喜ばれるのを始終傍に居つて見て居た爲に、今でも蟇に對すると床しい感じが起るので、世の中には蟇を嫌ふ人が多いのを却て怪しんで居る。讀書する事、勞働する事、謹愼する事、酒を飲む事、何でも子供の時に親しく見聞きした事は自ら習慣となる樣である。家庭教育の大事なる所以である。

(十六日)

九十七

○日利博士の果物の話の中に、最も善い味を持つて居る西洋梨が何故流行らぬかといふと永く蓄へる事が出來ぬからである、併しこれから後は段々無封袋の梨が流行るであらうといふ事であつた。併しこれは他にも原因のある事で、西洋梨には汁の少ないといふ缺點がある、夏日の果物は最も清涼の液を渇望する傾向があるので、この點に於て日本の梨が西洋梨に優つて居る間は到底西洋梨が日本梨を壓してしまふことは出來ぬであらう。

果物も培養の結果段々甘美いものが出て來るやうに成つたが、其中堅い果物が段々柔かく成つて來るといふのも一つの傾向である。これも博士の話にあつたやうに、人間が堅いものより柔かいものを好むやうに嗜好が變化した事もあるが、果物などは實際柔かいものは昔は無かつたのが今に成つて出て來るやうに成つたのである。併し他の食物に就いて見ても柔かいものを好むといふ傾向が一般に甚しくなつて來た事が分る。現に旅籠屋の飯が段々柔かく成つたのは近來の事である。始は半、衛生のため抔といふて居つたものもあつたが、段々柔かい飯を食ひなれると、柔かい方がうまい味があるやうに感じて來たのである。果物でも水蜜桃の如きは極端に柔かく成つて、しかも多量の液を蓄へて居るから善いが、林檎の如く肉が柔かでも液の少い者は(甘味と酸味と共にあつて美味なる者の外は)咽喉を通りにくいやうで餘り旨くもなく、從つて澤山は食はれぬ。バナナの如きも液は無いけれど善く熟した者は濡ひがあつて食ひ易い所がある。柔かな者には濡ひが多いといふが通則である。

(十七日)

九十八

○天台の或る和尚さんが來られて我病室にかけてある支那の曼陀羅を見て言はるるには、曼陀羅といふものは元と婆羅門のもので佛教では之を貴ぶ可き謂れは無いものである、これは子供が佛樣の形などをこしらへて並べて遊んで居るのと同じ意味のものである、と言ふて聞かされた。

(十八日)

九十九

○おくられものくさ〴〵

一、史料大觀(台記、槐記、扶桑名畫傳)

このふみを、あまし﹅人、このふみ
を、よめとたばりぬ、そをよむと、
ふみあけみれば、もじのへに、なみ
だしながる、なさけしぬびて

一、やまべ(川魚)やまと菁は節より

しもふさの、ゆふきごほりの、きぬ
川の、やまべのいをは、はしきやし、
見てもよきいを、やきてにて、うま
らにをせと、あたらしも、かれの心
を、おくりくる、みちにあざれぬ、
そをやきて、うまらにくひぬ、うじ

ははゝども
そらみつやまとのいもは鳥のねのと
みゝにすなるつくいもなるらし

一、やまめ川魚三尾は甲州の一五坊より
なまよみの、かひのやまめは、ぬば
たまの、夜ぶりのあみに、三つ入り
ぬ、その三つみなを、わにおくりこ
し

一、假面二つ某氏より
わざをぎの、にぬりのおもて、ひよ
との、まがぐちおもて、世の中の、
おもなき人に、かさんこのおもて

一、草花の盆栽一つはふもとより
秋くさの、七くさ八くさ、一はちに、
あつめてうゑぬ、きちかうは、まづ
さきいでつ、をみなへしいまだ

一、松島のつとくさぐさは左千夫歌員より
まつしまの、をしまのうらに、うち
よする、波のしらたま、そのたまを、
ふくろにいれて、かへりこし、うた
のきみふたり

（十九日）

百

○病牀六尺が百に滿ちた。一日に一つとすれば百日過ぎたわけで、百日の日月は極めて短いものに相違ないが、それが余にとつては十年も過ぎたやうな感じがするのである。外の人にはないことであらうが、余のする事は此頃では少し時間を要するものを思ひつくと、是れがいつまでつゞくであらうかといふ事が初めから氣になる。些細な話であるが、病牀六尺を書いて、それを新聞社へ毎日送るのに狀袋に入れて送る其狀袋の上書をかくのが面倒なので、新聞社に頼んで狀袋に活字で刷つて貰ふた。其之を頼む時でさへ、病人としては餘り先きの長い事をやるといふて笑はれはすまいかと竊かに心配して居つた位であるのに、社の方では何と思ふたか、百枚注文した狀袋を三百枚刷つて呉れた。三百枚といふ大數には驚いた。毎日一枚宛書くとして十箇月分の狀袋である。十箇月先きのことはどうなるか甚だ覺束ないものであるのに竊かに心配して居つた。それが思ひの外五六月頃よりは容體もよくなつて、遂には百枚の狀袋を費したといふ事は余にとつては寧ろ意外のことで、此百日といふ長い月日を經過した嬉しさは人にはわからんことであらう。併しあとにまだ二百枚の狀袋がある。二百枚は二百日である。二百日は半年以上である。半年以上もすれば薔薇の花が咲いて來る。果して病人の眼中に薔薇の花が咲くであらうか。

（二十日）

百一

○先日西洋梨の事をいふて置いたが、其後も經驗して見るに西洋梨も熟して來ると液が多量にある、あながち日本梨に劣らない。併し西洋梨と日本梨と液の種類が違ふ。

熱い國で出來る菓物はバナナ、パインアップルの如き皆肉が柔かで且つ無暗に臭いところがある。柑橘類でも熱い土地の產は肉も袋も總て柔かで且つ甘味が多い。それから又寒い國の產も矢張肉の柔かなものが多い。林檎の柔かさはいふ迄もない。梨でも柔かなものが出來る。然るに其中間の地、たとへば東海道南海道などで出來るものは柑橘類でも比較的堅くしまつて居るところがあつて、液が多量にあり、しかも其液には酸味が多い。それ故其液は甘味といふよりも寧ろ清涼なるために夏時の菓物として適して居る。日本梨の液も西洋梨の液に比すると矢張清涼なところがあつて、しかも其液は粒の多い梨の方が多量に持つて居るやうだ。

（二十一日）

百二

○ホトトギス第五巻第十號にある虚子選句の三座は人が

川狩や刀束ねて草の上　天蓮

といふ句である。これは昔の武士の川狩の樣であらうが「束ねて」といふは人は一人で刀は大小二本であるか或は二人三人の刀を束ぬるのであるか疑はしい。それから刀といふは大をいふのであるかどうか。昔の武士でも川狩に行く時は大概大小をたばさむやうの事は無く脇指一本位で行つたらうと思ふが、脇指でも刀といふであらうか。其上

川狩や地藏の膝に小脇指　一茶

といふ古人の句もあるから、どちらにしても此句の手柄は少いかと思ふ。地の句は

鐙をかたけて渡る清水かな　碧空生

といふのである。清水といふは山や野にある泉の類で、其泉の流れを成して居る邊をいふとしても其水の幅は半間か一間位に過ぎない、其幅の狭い清水を「渡る」といふた處が一歩か二歩で渡つてしまへる、其一歩か二歩で渡つてしまへる處をなぜにわざ〳〵つかまへて俳句の趣向にしたのであらうか。かやうなつまらぬ事を趣向にしてこと〴〵しくいふのは月並者流のする事である。天の句は

佐野が宿鉈ふるふべき薪かな　徵羽郎

といふのである。佐野が宿は源左衛門の宿なるべく、鉢の木の梅松櫻を伐りたる面影を留めて夏季の薪を伐るに轉用したる處既に多少の厭味があるやうに思ふ。其上に錆びたる長刀をふるふ武士の面影を見せて、「鉈をふるふ」と、ことさらにいかめしく言ふて見た處は、十分に素人おどしの厭味を帯びて居る。「べき」といふ語も厭味がある。

（二十二日）

百三

○今日は水曜日である。朝から空は霽れたと見えて病牀に寝て居つても暑さを感ずる。例に依つて草花の寫生をしたいと思ふのであるが、今一つで草花帖を完結する處であるから何か力のあるものを畫きたい、それには朝顔の花がよからうと思ふたが、生憎今年は朝顔を庭に植ゑなかつたといふので仕方がないから鄰の朝顔の盆栽を借りに遣つた。處が何と間違へたか朝顔の花を二三許りちぎつて貰ふて來た。それでは何の役にも立たぬので獨り腹立て丶居ると鄰の主人が來られて暫くぶりの面會であるので、余は草花帖を展してから色々の話をした。

正午頃に主人は歸られたが、其命令と見えて幼き娘達に朝顔の鉢を持つて來てくれられた。未だ一つだけ咲いて居ますと眼の前に置かれるのを見ると紫の花が一輪萎れもしないで殘つて居る。其處で其鉢を控へて後寫生に取り懸つたが大略の輪廓を定めるだけに可なりに骨が折れて容易には出來上らない。幼き娘達は幾らか寫生を見たいといふ野心があるので、遊びながら畫の出來るのを待つて居た。時々其帖を覗きに來て、まだよと小さな聲で失望的にいふのは今年七ツになる兒である。其中内の者が外に餘つて居る繪の具を出して遣つたので此七ツになる兒と、直ぐ其姉に當る十になる兒と二人で畫を畫き初めた。年かさの大姉さんといふのが傍に居て監督して居る。二人の子は余が寫生した果物帖を廣げてそれを手本にして畫いて居る樣子である。林檎にしませう、これがいいでせう抔といふのは七ツになる兒で、いえそれはむづかしくて畫けません、櫻んぼにしませうといふのは十になる兒である。それから、この色が出ないとか繪の具が足りないとか頻りに騷いで居たが、遂に其結果を余の前に持ち出した。見ると七つの兒の櫻んぼの畫はチャンと出來て

居る。十になる方のを見ると、是れも櫻んぼが更に確かに寫されて居る。原圖よりは却て手際よく出來て居るので余は驚いた。やがてこれにも倦いたと見えて朝顏の畫の出來上るのも待たずに皆歸つてしまふた。余はたつた一輪の花を畫いたのが成績がよくなかつたので、稍〻困りながら、大きな葉の白い斑入りのやつを書いて見たが、是れは紙か繪の具をはじくために全く出來ぬのもあり又自ら斑入りのやうに出來上るのもあつてをかしかつた。蔓の縺れて居る工合を見るのも何と無く面白かつた。この時どやどやと人の足音がして客が來たらしい。やがて刺を通じて來たのは孫生、快生の二人であつた。（二十三日）

百四

（ツヾキ）二人とも一年ばかり逢はなかつたので殊に快生などはこの前見た時には子供々々したいつその小僧さんのやうに思ふて居たが今度逢つてみると、折節髭も少しばかり伸びて居たので、いたく大人びた樣な感じがした。余は寫生の書き殘りを尙書き續けながら話をしてゐたが、其うち繪は暫く出來上つたので寫生帖を傍に置き、繪の具を向ふの方へ突きやつてしまふた頃、孫生がいふには、實は渡邊さんのお孃さんがあなたにお目にかゝり度いといふのですがと意外な話の絲口をほどいた。さうですか、それはお目にかゝり度いものですが、といふと、實は今來て待つておいでになるのです、といはれたので、余は愈〻意外の事に驚いた。其うち孫生は玄關の方へ出て行て何か呼ぶ樣だと思ふとすぐ其渡邊のお孃さんといふのを連れて這入つて來た。前からうす〳〵噂にも聞かぬでもなかつたが、固より今遇はうとは少しも豫期しなかつたので、其風采なども一目見ると豫て想像して居つたよりは遙かに品の善い、それで何となく氣の利いて居る、いはゞ余の理想に近いところの趣を備へて居た。余は之を見るとから半ば夢中の樣になつて動悸が打つたのやら、脈の高くなつたのやら凡て覺えなかつた。お孃さんはごく眞面目に無駄のない挨拶をして其れで何となく愛嬌のある顏であつた。斯ういふ顏はどちらかといふと世の中の人は一般に餘り善くいはない、勿論惡くいふものは一人も無いが、さてそれだからといふて、之を第一流に置くものも無い、其れで世人からは其程の尊敬は受けないのであるが、余から見ると此程の美人――美人といふとどうしても俗に聞えるが余がいふ美人の美の字は美術の美の字、審美學の美の字と同じ意味の美の字の美人である――は先づ幾らも無いと思ふ。唯〻十分な事をいふと少し余の意に滿たない處はつくりが、じみ過ぎるのである。勿論極端にじみなのでは無い、相當の飾りもあつて其調和の工合は何ともいはれん味があるが、それにも拘らず余は今少しはでに修飾したらば一層も二層も引き立つて見えるであらうと思ふ。けれどそれは餘り贅澤過ぎた注文で、否寧ろ無理な注文かも知れぬ。これだけでも余の心をして恍惚となる迄にするには十分であつた。話はそれからそれと移つて快生が今迄居た下總のお寺は六疊一間の庵室で閑靜の高みにある、眺望は極めて善し、泥坊の這入る氣遣は無し、それで檀家は十二軒、誠に氣樂な處であつたなどといふ話に稍〻涼しくなるやうな心持もした。暫くして二人は暇乞して歸りかけたので余は病牀に寢て居ながら何となく氣がいらつて來て、どうとも仕方の無い樣になつたので、今歸りかけて居る孫生を呼び戻して私かに余の意中を明してしまふた。餘り突然なぶしつけな事とは思ふたけれども余は生れてから今日の樣に心をなやました事は無いので、從つて又今日の樣に英斷を施したのも初

あてであつた。孫生は快く承諾して兎に角お孃さんだけは置いて行きませうといふ。それから玄關の方へ行て何かさゝやいた末にお孃さんだけは元の室へ歸つて來て今夜はこゝに泊ることゝなつた。其うち日が暮れる、飯を食ふ、今は夜になると例の如くに半ば苦しく半ば草臥れてしまふ。お孃さんと話をしようと思ふて居る内に、もう九時頃になつた。九時になると、少し睡氣がさすのが例であるが、兎に角自分だけは蚊帳を釣つてもらふて、それからゆつくりと話でもしようと思ふて居る處へ郵便が來た。それは先刻孫生に約束して置いた百人豪とかいふ本をよこして呉れたので、蚊帳の中でそれを讀み始めたが、終に眠くなつて寢てしまふた。

翌朝起きてみると二通の郵便が來て居る。其一通を開いてみると、古生からよこしたので端書大の洋紙に草花を寫生したのが一枚あつた。一つはグロキシアといふ花、今一つは何ヒーとかいつて豌豆の樣な花である。是はきのふ自分で寫生したのだといふてよこしたのであるが、餘り美しいので始めのうちは印刷したものとしか思へなかつた。今一通の郵便を手に取つてみると孫生、快生連名の手紙であつたので、動悸ははげしく打ち始めた。手紙を開けて讀んでみると昨日あれから話をしてみたが誠によんどころ無いわけがあるので、貴兄の思ふ樣にはならぬといふ事であつた。併しお孃さんは當分の内貴兄の内に泊つて居られても差支無いといふのである。失望といはうか、落膽といはうか、余は頻りに煩悶を始めた。到底我掌中の物で無いとすればお孃さんにもいつそ今歸つて貰つた方がよからう。一度でも二度でも見合つたり話し合つたりする程、愈〻未練の種である。最早顏も見度くない。などと思ひながら孫生、快生へ當てゝ一通の返事を書いてやつた。其返事は極めて尋常に極めておとなしく書いたのであつたが何分それでは物足りない樣に思ふて又終りに恨の言葉を書きて

断腸花つれなき文の返事かな

と一句を添へてやつた。それから何をするとも無く、新聞も讀まずにうつら〳〵として居つたが何分にも煩悶に堪へないので、再び手紙を書いた。いふ迄も無く孫生、快生へ當てた第二便なので今度は恨みを陳べた後に更に何か別に良手段はあるまいか、若し余の身にかなふ事ならどんな事でもするが、とこま〴〵と書いて

草の花つれなきものに思ひけり

といふ一句を添へてやつた。それで其日は時候の爲か何の爲か兎に角煩悶の中に一日を送つてしまふた。

其次の日、小さな紙人形を寫生してしまふた頃丁度午後の三時頃であつたらう、忽ちうちの電話は一つの快報を齎らして來た。それは孫生、快生より發したので、貴兄の望み通りかなふた委細は郵便で出す、といふ事であつた。嬉しいのなんのとて今更いふ迄も無い。

お孃さんの名は南岳艸花畫卷。（二十四日）

百五

○略畫なぞといつて筆數の少ない畫を畫くのは、寧ろ日本畫の長所といふてもよい位であるが、其略畫といふのは複雜した畫を簡單に畫いて見せるのを本領と思ふて居る人が多い。併しそれには限らぬ。極めて簡單なるものの簡單なる趣味を發揮するのも固より略畫の長所である。公長略畫といふ本を見ると、非常に簡單なる趣向を以て、手輕い心持のよい趣味をあらはしてあるのが多い。例へば三四寸角の中へ稲の苗でもあらうかと言ふやうな青い草を大きく一ぱいに畫いて、其中に蛙が一匹坐つて居る、何でもないやうであるが、青い色の

中に黒い蛙が一匹、何となくよい感じがする。或ひは水を薄く青く塗つて其中へ蛙が今飛び込んだといふ處が畫いてある、其の足は三本だけ明瞭に見えるが、一本の足と頭の所は見えて居らん、これも平凡な趣向であるけれど、青い水と黒い蛙とばかりを畫いた所は矢張前の畫と同じやうに極めて小さい心持のよい趣味に富んで居る。其外、蓮の葉を、數線に畫いて、傍らに仰いで居る鷺と俯いて居る鷺と二ツ畫いてある如きは、複雜なものを簡單にあらはした手段がうまいのであるが、簡單に畫いた爲に、色の配合、線の配合など直接に見えて、密畫よりは却て其趣味がよくあらはれて居る。其の外此本にある畫は今迄見た畫の中の、最も簡單なる畫であつて、而も其の簡單な内に一々趣味を含んでゐる處は蓋し一種の伎倆と言はねばならぬ。（二十五日）

百六

○雜誌ホトトギス第五卷第十號に載せてある蕪村句集講義の中

探題雁字

一行の雁や端山に月を印す

といふ句の解釋は當を得ない。これは誰も此雁字といふ題に氣がつかなかつた爲で、余も輪講の當時此句を見ずに傍聽して居たので此題を聞き逃してしまふた。雁字といふのは雁の群れて列をなして居る處を文字に喩へたのであつて原と支那で言ひ出しそれが日本の文學にも傳はつて和歌にて雁といふ題には屢々この字の喩を詠みこんであるのを見る。此俳句の趣向は雁を文字に喩へたから月を「印」に喩へたのだ。赤い丸い月が出て居る有様を朱肉で丸印が捺してあるものとして、一行の雁字と共に一幅を成して居るかのやうにしやれて見たのであらう。「一行の雁」とは普通の語であるけれど此句で特に一行といふたのは一行の文字といふやうに利かせた事は言ふ迄も無い。又端山といふのに意味があるか無いかは分らぬが、之を意味あるものとして、端山も一幅畫中の景色の一部分であるといふやうに解するのは穩當でないかと思ふ。寧ろ端山は全く意味の無い者で、上と下とを結ぶ爲の連鎖になつて居るばかりのものと見たい。併しこの光景を空中高き處と見て、雁も月も縹渺たる大空の眞中、しかも首を十分に擧げて仰ぎ望むべき場合にありとすれば此比喩が適切でなくなる。端山邊の低い處に赤い月があるのでいくらか印のやうな感が強くなるのである。因にいふ。丸印は昔から時々用ゐられる、尾形光琳の如きは丸印の方を普通に用ゐたやうだ。（二十六日）

百七

○ホトトギス第五卷第十號の募集句に追加したる虚子の選者吟のうちに

本陣の槍に鴉や明易き

とあるは鴉が槍にとまつて居るといふ景色であるか、又は槍の邊を飛んで居るといふ景色であるか、よく分らないので作者に聞いて見たところが、作者の意はそんな景色などはわからないでも善いのだといふので、鳥は飛んで居ようと、とまつて居ようと、鳴いて居ようと、そんな事はどうでもよい、たゞ本陣の槍と鴉といふものとをもつて來たところに趣があるのであるといふことであつた。其説明を聞いても余は倘漠然たる光景に趣味を感ずる事は出來ない。本陣の槍に鴉やといふ句を見れば、どうしても客觀的に其景色を目に浮べて見たくなる。從つて鴉の位置を明瞭にしなくては氣がすまんのである。

松を伐る鉈や誤つて土を斷を

とあるのは、一寸わかりかねる處があつて是

も作者に質して見た處が、松を伐るといふのは天然松の立木を伐る事ぢやさうな。併し立木を伐るとなれば、大抵は鋸を用ゐるので鉈を用ゐることは殆どない。鉈で伐れるやうな木ならば、極めて小さい立木と見ねばならぬ。そんな事はどうでもよいとして、さて結句の「土を蘭を」といふ言ひかたは、餘り詞を働かせようとして句法が奇に過ぎるやうになり、隨つて厭味に感ずるのである。かういふ趣向は一般の場合に於てどうしても厭味が勝つて初心臭くなる傾きがある。

石に腰百合の中なる鐔かな

とあるのは、是も其意味を解しかねて作者に尋ねた者が、百合の中なる鐔といふのは、百合の花の中に鐔がはひつたといふのではなく、百合が満開に咲きて居る中へ鐔がはひつたといふわけなのであらうな。けれども其意味がこの句で現はれて居るであらうかどうであらうか、鐔が百合の生じて居る中にあるといふのも一寸變な趣向であつては、それを中なる鐔かなといふやうな句法にした爲に、益々變に感じられて、何の事だかわからなくなつてしまふ。作者は態と、鐔かなといふやうな句法にしたのでそれが爲に句が活動して來るやうに思ふといふことであつた。それから是は作者自身の事か、又は作者は傍にあつて他人の事を見て作つたのかといふ事を尋ねて見たらば、傍らから見たのだといふ答へであつた。併し「石に腰」といふ言ひかたも、總て「百合の中なる鐔かな」といふ言ひかたも、作者自身からいふたやうな詞つきであつて、他の武士の腰かけて居る有樣を傍らから見たやうな詞つきでないと思ふ。要するに作者は鐔が百合の中に在るといふ光景がひどく嬉しくて堪らんのでそれを現はしたのであるさうなが、どうも他から見ると無理なやうに思ふ。

採蓮を見て居る武士や旅刀

とあるのは、是は採蓮といふ支那の遊びに就いて作者も誤解して居つたので、到底日本的の武士を持つて來たのでは調和しないのである。

以下の句をひつくるめて作者と評者との衝突點が何處にあるかといふと、つゞまる處虚子は頻りに句を活動させようとする爲に其句法が言はゞ活動的句法とでもいふやうになつて居る。其活動的句法が厭味になつて又無理になつてどうも俳句として十分でないやうに余には感じられるのである。余もあながち活動をわるいといふのでないが、活動に伴ふ所の弊害即ち厭味とか無理とかいふものを避けることが甚だむづかしいと思ふのである。厭味や無理と余がいふ所のものを虚子は寧ろ得意として居るのであるから、これらの句が極端に衝突を起したわけである。（二十六日）

百八

『ホトトギス』第五巻第十號に在る碧梧桐の獺祭書屋俳句帖抄評の中に

砂濱に足跡長き春日かな

を評して自分の足跡だか、人の足跡だかわからぬといふ事であつたが、余の考は無論自分の足跡といふわけではなく、唯そこについて居る足跡を見た時の感じをいふたのである。

日一日同じ處に畑打つ

といふ句を評して作者自身が畑打つ場合であるかわからぬといふてある。是は余の考へは人の畑打を他から見た場合を詠んだ積りであつたのぢやけれど、作者自身が畑打つ場合と見られるかも知れん。

一錢の釣鐘撞くや春霞

之を評して、賽錢を投げて鐘を撞く事であるといふてあるが、余の趣向はさうでない。一錢出すと釣鐘を一つ撞かすといふ處がある。其釣鐘を撞いた積りなのである。

一桶の藍流しけり春の川

此句を評して「一桶の」といふのは實際桶に入れて藍を棄てたといふのでなくて染物を洗ふため水の染んでゐる工合を云々といふてある。併し余の趣向はさうで無い。實際一桶の藍を流したので、是は東京では知らぬが田舎の紺屋にはよくある事である

鶯音に雨に遇ひけり花曇り

此句に就いて余は「鶯音で」と俗語を持つて來たところが少し得意であつたのだ。

碧梧桐評の中に此句は乙二調だとか、此句は暮雨調だとか、いふ事が而も二十句許り列擧してあつたのには驚いた。是は隨分大膽な評で、殊に碧梧桐の短所ではあるまいか。隨分杜撰なやつもある。漢韓人を欺くの手段であらう。

長き夜や人灯を取つて庭を行く

此句を評して、上五字を「夜寒さや」としては障害になるのであらうか、といふて居る。併し余の考は夜寒の積りではなかつたのである。是は長い夜の單調を破つた或る一事件をひつかまへたので、詳しくいはば長い夜の何も變つた事は無い、唯ゞ長い／＼と思ふて居る時に、誰か知らぬが灯を持つて庭先を横ぎつた者があつたといふ一事件があつて、さて其後は又何事も無く、同じ様に長い／＼夜であつたのである。（ツヾク）　（二十八日）

百九

秋風や侍町は畑ばかり

昔の句に就きこの碧梧桐の攻撃は、此句を維新前の光景を詠みたるものとし從つて畑ばかりといふを澤山あつて目立つて居る處と解した爲に起つたのである。併し余の趣向はさうではない。これは鄉里に歸つて城北の侍町を過ぎた時の所感を述べたもので無論維新後に頽廢した侍町の積りである。畑ばかりには昔のまゝのお大方は頽れながら猶殘つて居るが、其内を見ると家はなくて竹藪が物凄き迄生ひ茂つて居る處もあり、或は畑になつて茄子玉蜀黍などつくつてある傍に柿の木が四五本まだ青き實を結んで居る處もあるといふやうな光景を詠んだつもりであつたが、これは前書をつけて置かなかつたのが悪かつた。

山門を出て下りけり秋の山

「いで下りけり」と讀むのは無理ではあるまいか。余は「でゝ下りけり」と讀ませる積りであつた。もつとも俳句としての句法上では「でて」と二字で切る方が無理なのであらう。

佛壇の柑子を落す鼠かな

これは無論枝の柑子なぞでは無い。[illegible]足か何かに盛つてあつたのをころがした積りであつたのぢやが、今考へて見ると不完全な句である。余は柑子のころげた音を聞いて鼠の光景を想像して居たのを斯う作つたのであるか、それは無理ぢや。曾て蕪村の「[illegible]はみこぼす鼠かな」に就きて同しやうな論があつたと思ふ。（ツヾク）　（二十九日）

百十

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

この句を評して「柿食ふて居れば鐘鳴る法隆寺」とは何故いはれなかつたであらうと書いてある。これは尤もの説である。併しかうなると稍々句法が弱くなるかと思ふ。

菊の花天長節は過ぎにけり

季のことに就いては云ひつたのであるが、こゝにも亦誤解がある。余は立冬以後を冬とするのであるから、從つて天長節は秋季に這入つて居るのである。十一月五六日もまた秋の中である。それから余は十月といふ題の句はこゝ

に入れてはない。

木枯や鐘曳き捨てし道のはた

これは余の趣向は大きな釣鐘を寺へ曳つぱつて行く道で日が暮れたものであるから、其釣鐘は其夜一夜は道のはたに曳き捨てゝ置く、其時の光景を詠んだ積りなので、従つて時は日の暮か若しくは夜の積り、さうして講中の人数などは無論家に帰つてしまふて、こゝには居らぬのである。いはゞ道のはたで大釣鐘が独り立つて居るといふやうな物凄い淋しい場合を趣向に取つた積りであるから、木枯を配合したのである。

下駄穿いて行くや焼野の薄月夜

この句の下駄穿いて行くといふことに就いて、疑問を起してあるが、余が特に下駄を持つて来たのは、下駄ならば茨の焼けた跡なども平気で踏んでゆけるといふやうな心持からいふたのである。併し必ずしも茨を踏むといふのではない。更に面白くない趣向である。

閉る時の傘に落ちたる菖蒲かな

この句を評して、きはどい場合の句であるといふてあるのに異議は無い。併し余は菖蒲の花に縋つてそれで落ちたと思ふと、それ程きはどく無くなるやうに思ふ。

鳴きやめて飛ぶ時蟬の見ゆるなり

この句を評して趣味に乏しいとあるのは尤な説である。併し余自身には一寸捨て難い處がある。

聾なり秋の夕の渡し守

この句を評して、下手な小説を読むやうな感じがあると言うてある。偶評者に尋ねて見たるに或人が渡し守に話しかけて見たらば其渡し守が聾であつたといふやうな場合と想像したのぢやさうな。余は此方の岸から、向岸の渡し守を呼んでも呼んでも出て来ぬので、そこで聾なりといつたのである。(ヲハリ)　　(三十日)

百十一

○余が所望したる南岳の艸花画巻は今は余の物となつて、枕元に置かれて居る。朝に夕に、日に幾度となくあけては、見るのが何よりの楽しみで、ために命の延びるやうな心地がする。其筆つきの軽妙にして自在なる事は、殆ど古今独歩といふてもよからう。是れが人物画であつたならば、如何によく出来て居つても、余は所望もしなかつたらう、また朝夕あけて見る事も無いであらう。それが余の命の次に置いて居る程の花卉画であつたために、一見して惚れてしまふたのである。兎に角、この大事な画巻を特に余のために割愛せられたる[illegible]道和尚の好意を謝するのである。　　(三十一日)

百十二

○愈〻暑い天気に成つて来たので、此の頃は新聞も読む事出来ず、話もする事出来ず、頭の中がマルデ空虚になつたやうな心持で、眼をあけて居る事さへ出来難くなつた。去年の今頃はフランクリンの自叙伝を日課のやうに読んだ。横文字の小さい字は殊に読みなれんので三枚読んではやめ、五枚読んではやめ、苦しみながら読んだのであるが、得た所の愉快は非常に大なるものであつた。費府の建設者とも言ふ可きフランクリンが、其の地方の為に経営して行く事と、且つ極めて貧乏なる植字職工のフランクリンが一身を経営して行く事と、それが逆流と失敗との中に立ちながら、着々として成功して行く所は、何とも言はれぬ面白さであつた。此書物は有名な書物であるから、日本にも之を読んだ人は多いであらうが、余の如く深く感じた人は恐らく外にあるまいと思ふ。去年は此の日課を読んでしまふと、夕顔の白い花に風が吹いて初めて人心地がつくのであつたが、今年は夕顔の花がな

いので苦々しくて仕方がない。　（九月一日）

百十三

○所謂詩人といふ漢詩を作る仲間で、送別の詩などを大勢の人から貰ふて其行色を壯にするとかいふて喜んで居る。それはわるいことでもないけれど餘り言ふにも足らぬ程の旅行に不相應な送別の詩などを、然も無理やりに請求して次韻などさすことはよくないこと、兼てより思ふて居た。所が近來は俳句仲間にも其弊風が盛んになつて送別ぢやの留別ぢやの事が出來たので、祝賀をするのと、其時々につけて交際のある際に其句を請求する、それは其句の價値かと思ふと、矢張名聞の爲なので、其澤山の句を並べて新聞雜誌などに出して得意がつて居るといふに至つては、餘り見識のないしやうではないか、其癖この種の句に限つて殊にろくでもないのが多いのに。　（二日）

百十四

○日本青年會のことに就て何か意見はないかといふ需であつたが、余の意見として發表する程の特別な意見は持たぬ。何にせよ一つの團體がある以上は何か事業でも起さねば甚だ薄弱な會合になつたりしたといふやうな傾きはあるが、併し日本青年會は事業的の團結でないのであるから、どこまでも精神的團結でやつて貰ひたいのである。雜誌日本青年も甚だつまらぬ（世間的意味に於て）雜誌であるけれど、そのつまらぬ處が會員にとつては却て面白い處であると思ふ、こんな雜誌を出して其地方へ往た時に會員を尋ねて話する位の交際をしてそれだけで日本青年會の値打は十分にあると思ふ。徒らに大きなことをいふて身分不相應な事業、又は雜誌などをするといふことはよもあるまい。余は日本青年會がどこ迄も精神的團結にあることを願ふばかりである。　（三日）

百十五

○漢語で風聲鶴唳といふが鶴唳を知つて居るものは少い。鶴の聲はしはがれたやうなはげしき聲を出すから夜などは餘程遠く迄聞える。聲聞于天といふも理窟が無いではない。若し四五羽も同時に鳴いたならば恐らくは落人を驚かすであらう。　（四日）

百十六

○暑き苦しき氣のふさぎたる一日もやうやく暮れて、隣の普請にかしましき大工左官の聲もいつしかに聞えず、菅子の漬物に石を打ち鳴らしたる夕餉の膳おしやりあへぬ時に、向島より一鉢の草を持ち來ぬ。緑の廣葉うち茂りし間より七八寸もあるべき眞白の花ふとらかに咲き出でて匂いはまだしうゆらめきたる涼しさいはんかたなし。蔓に紙ぎれを結びて夜會草と書いつけしは日をしき花の名なめりと見るに其傍に細き字して一名夕顔とぞしるしける。彼方の床の間の掛物には天津の防青が萬年傘に代へてところの紳董よりも贈られたりといふ標色の旗二流おくり來しを掛け垂したる、其のもとにくだりの鉢植置き直してながむれば又異なる花の趣なり。此帛に此花ぬひたらばと思はるる。

くれなゐの、旗うごかして、夕風の、
吹き入るなへに、白きもの、ゆらゆら
ゆらぐ、立つは誰、ゆらぐは何ぞ、か
ぐはしみ、人か花かも、花の夕顔　（五日）

百十七

○如何に俗世間に出て働く人間でも、碁を打つ位な餘裕がなくてはいかんよ、などと豪傑を氣取つて居るのはよいが、さて其の人が碁を打つ

有様を見て居ると、一番勝てば直ぐに鼻を高くし、二三番も續いて負けると燎火の如くせき込んで、モー一番、モー一番と、呼吸もつかずに考へもしない碁を夜通しにパチ／＼と打つて居る。傍から見て居るとマルで氣違ひのやうぢや。是れでは餘裕も何もありはしない。（六日）

百十八

○けふ或る雜誌を見て居たらば、新刊書籍のうちに、鳴雪翁の選評にかゝる俳句選といふものの拔萃が出て居つた。其中から更に拔萃して見ると

白酒に醉ふも三日や草の宿
　評　嚢中錢士は年年窮

菜の花のあなたに見ゆる妹が家
　評　黄雲千頃、家是天の涯

よき衣によき帶しめて暑いなり
　評　白粉も汗にとくらん

田舎人のつき飛されし祭かな
　評　ヒヤア、うつたまげ申した

役人の札立てゝ去る青田かな
　評　アリャ何だんべー

などいふ類である。この俳句の巧拙などはこゝで論じるのでないが、この評の厭味多くして氣のきかぬ事に就いて余は少し驚いたのである。鳴雪翁は短評を以て人を揶揄したり、寸言隻語を加へて他の詩文を翻弄したりすることは寧ろ大得意であつたのであるが、今この俳句選の評を見ると如何にも乳臭が多くて、翁の評とは思はれぬ程である。もつとも拔萃のしやうがわるいため、會々不手際なやつが揃ふて居るのかも知れぬが、兎に角これらを標準として翁の伎倆を評する人があるならば大なる寃罪を翁に加へるものである。（七日）

百十九

○近頃は少しも滋養分の取れぬので、體の弱つた爲か、見るもの聞くもの悉く癪にさはるので政治といはず實業といはず新聞雜誌に見る程の事皆我をじらすの種である。露月が俳星に出して居る文章などは一々に讀まぬからよくはわからぬが、自分が今始めて元祿の俳書などを讀んで今更事珍し氣に吹聽するのは何感ずべき點があるとしても、自分が好きな十句を作つて東京諸俳友の評を乞ひ其各評の惡口を障面も無く雜誌へ出したところは虚心平氣といへば善いやうであるが、あの標準で恥ぢぬ所は少し一方の大將としては覺束ない處がある。今一工夫欲しいものである。青々の達吟に至つては實に驚く可きものであるが、さりとて杜鵑二百句といふに至つては流石の先生、無邪氣に遣つてのけた處は善いが、これで俳句になつて居る積りでは全く經驗の足らぬ科であらう。二百羽の杜鵑をひつゝかまへたといふのは一羽もひつつかまへないといふ事であるとは題を見てもわかつて居る事であるのに。（八日）

百二十

○雜誌ホトトギス第五卷第十號東京俳句界の中に

茂山の雫や凝りて鮎となり　耕村

といふ句を碧梧桐が評したる末に「且つ茂山をシゲヤマと讀ますこと如何にも穩せずや」とあり。されどこは杜撰なる評なり。

筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり

とかいふ名高き古歌もあり、俳句にも

茂山やさては家ある柿若葉　蕪村

といふ蕪村の句さへあるにあらずや。（九日）

百二十一

○碁の手將棊の手といふものに汚ないと汚な

くないとの別がある。それが又其人の性質の汚ないのと汚なくないのと必ずしも一致して居ないから不思議だ。平生は誠に温順で君子と言はれるやうな人が、碁將棊となるとイヤに人をいぢめるやうな汚ない手をやつて喜んで居る。さうかと思ふと、平生は泥坊でも詐欺でもしさうな奴が、碁將棊盤に向くとまるで人が變つてしまふて、君子かと思ふやうな事をやる。少しも汚ない手をしないのみならず、誠に正々堂々と立派な打方をするのがある。この外によく其人の性質を現はしたやうな碁打ち將棊さしも固より澤山ある。是には種々な原因があつて、若し心理的に解剖して見たらば餘程面白い結果を現はすのであらうと思ふが、其中の一原因をいふと、碁將棊の道に淺いものは如何なる人によらず汚ない手を打つのが多くて、段々深く入つて、正式に碁將棊を學んだものには、其人の如何に拘らず餘り汚ない手は打たないのである。（十日）

百二十二

○一日のうちに我痩足の先僅かに腫れ上りてブクブクとふくらみたる其さま火箸のさきに徳利をつけたるが如し。醫者に聞けば病人には有勝ちの現象にて血の通ひの悪きなりといふ。兎に角に心持よきものには非ず。

四方太は八笑人の愛讀者なりといふ。大に吾心を得たり、戀愛小説のみ持囃さるゝ中に鯉丈崇拜とは珍し。

四方太品川に船して一網にマルタ十二尾を獲。而も網を外れて船に飛び込みたるマルタのみも三尾あり、總てにて一人の分前四十尾に及びたりといふ。非常の大漁なり。昨又隅田の下流に釣して沙魚五十尾を獲同伴のもの皆十尾前後を釣り得たるのみと。其言にいふ釣は敏捷なる針を擇ぶことゝ餌を惜しまぬことゝに在りと。

左千夫いふ　性の悪き牛、乳を搾らるゝ時人を蹴ることあり。人之を怒つて大に鞭撻を加へたる上、足を縛り付け、無理に乳を搾らむとすれば、その牛、乳を出さぬものなり。人間も性悪しとて無闇に鞭撻を加へて教育すれば益々其性を害ふて悪くするに相違なしと思ふ。云々。

節いふ。かづらはふ雜木林を開いて濃き紫の葡萄園となさむか。（十一日）

百二十三

○支那や朝鮮では今でも拷問をするさうだが、自分はきのふ以來晝夜の別なく、五體すきなしといふ拷問を受けた。誠に話にならぬ苦しさである。（十二日）

百二十四

○人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度に迄想像した樣な苦痛が自分の此身の上に來るとは一寸想像せられぬ事である。（十三日）

百二十五

○足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大盤石の如し。僅かに指頭を以てこの脚頭に觸るれば天地震動、草木號叫、女媧氏未だこの足を斷じ去つて、五色の石を作らず。（十四日）

百二十六

○芭蕉が奥羽行脚の時に、尾花澤といふ出羽の山奥に宿を乞ふて馬小屋の隣にやうやう一夜の夢を結んだ事があるさうだ。ころしも夏であつたので、

蚤虱馬のしとする枕許

といふ一句を得て形見とした。しかし芭蕉はそれ程臭氣に辟易はしなかつたらうと覺える。

○上野の動物園にいつて見ると（今は知らぬが）前には虎の檻の前などに來ると、もの珍し氣に江戸兒のちやき〳〵などが立留つて見て、鼻をつまみながら、くせえ〳〵などと惡口をいつて居る。其後へ來た青毛布のぢいさんなどは一向臭ひなにかには平氣な樣子で唯〻虎のでけえのに驚いて居る。

（十五日）

百二十七

○芳菲山人より來書

拜啓昨今御病床六尺の記二三寸に過ず頗る不穩に存候間御見舞申上候 達磨儀も盆頃より引籠り繩鉢卷にて筧の瀧に荒行中御無音致候

俳病の夢みるならんほとゝぎす拷問などに誰がかけたか

（十七日）

仰臥漫録

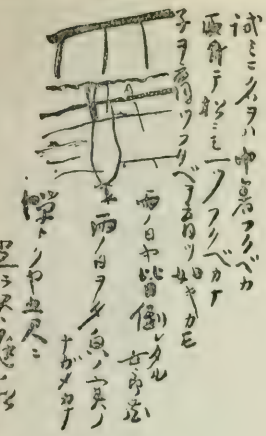
夕顔ノ實ヲフクベトハ昔カナ
夕顔モ絲瓜モ同シ棚子同士
夕顔ノ棚ニ絲瓜モ下リケリ
鄙ノ宿夕顔汁ヲ食ハサレシ

右八月二十六日
俳談會席上作

夕顔ノ太リ過ギタリ秋ノ風
棚一ツ夕顔フクベヘチマナンド

病牀ノナガメ

棚ノ絲瓜思フ處ヘブラ下ル



（右圖の句）
試ミニ名ヲハ巾著フクベカ（ナ）

取付テ松ニモ一ツフクベカナ
子ヲ育ツフクベヲ育ツ如キカモ
雨ノ日ヤ皆倒レタル女郎花
雨ノ日ヲ夕顔ノ實ノナガメカナ
蟬ナクヤ五尺ニ足ラヌ庭ノ松

絲瓜ブラリ夕顔ダラリ秋ノ風
病間ニ絲瓜ノ句ナド作リケル
野分近ク夕顔ノ實ノ太リ哉
濕氣多ク汗バム日ナリ秋ノ蠅
雞頭ノマダイトケナキ野分カナ
秋モハヤ鹽煎餅ニ澁茶哉

朝　粥四椀、ハゼノ佃煮、梅干　砂糖ツケ
晝　粥四椀、鰹ノサシミ一人前、南瓜一皿、佃煮、
夕　奈良茶飯四碗、ナマリ節　煮テ少シ生ニテモ　茄子一皿
此頃食ヒ過ギテ食後イツモ吐キカヘス
二時過牛乳一合コ、ア交テ

煎餅、菓子パンナド十個許
晝飯後梨二ツ
夕飯後梨一ツ
服藥ハクレオソート、晝飯晩飯後各三粒（二號カフセル）
水藥　健胃劑
今日夕方大食ノタメニヤ例ノ左下腹痛クテタマラズ暫ニシテ屁出デ筋ユルム
松山木屋町法界寺ノ鰌施餓鬼トハ路端ニ鰌汁商フ者出ルナリト母ナドモ幼キ時祖父ドノニツレラレ辨當持テ往テ其川端ニテ食ハレタリト尤舊暦二十六日頃ノ闇ノ夜ノ事ナリトイフ
　餓鬼モ食ヘ闇ノ夜中ノ鰌汁
午後八時腹ノ筋痛ミテタマラズ鎭痛劑ヲ呑ム
藥未ダ利カヌ内筋ヤ、ユルム
母モ妹モ我枕元ニテ裁縫ナドス三人ニテ松山ノ話殊ニ長町ノ店家ノ沿革話イト面白カリキ
十時半頃蚊帳ヲ釣リ寢ニツカントス呼吸苦シク心臟鼓動強ク眠ラレズ煩悶ヲ極ム心氣稍〻靜マル頭腦苦シクナル明方少シ眠ル

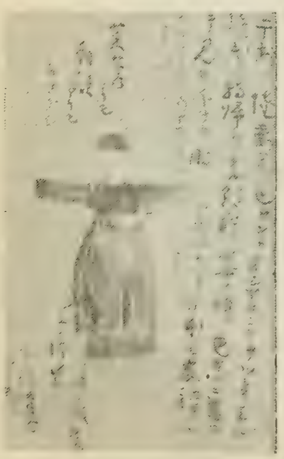
九月三日 朝雨 午前十一時頃晴 其後陰晴不定
朝繃帶取換十時頃又便通
陸氏只今歸ラレシ由
晝前陸氏來ル天津肋骨ヨリノ土産
拂子一本、俗畫二枚、板畫（ケシキ）一枚
陸氏ハ支那ノ王宮ノ規模ノ大ナルニ驚キタリ
トイフ
朝 ヌク飯二椀 佃煮 梅干
牛乳五勺ココア交 菓子パン數個
晝 粥三椀、鰹ノサシミニ蠅ノ卵アリソレ
ガタメ半分程クフ、晩飯ノサイニ買ヒ置
キタルワラサヲサシミニツクル旨クナシ
食ハズ
味噌汁一椀
煎餅三枚 氷レモン一杯呑ム
夕 粥二椀 ワラサ煮 旨カラズ
三度豆芋二三 鮭少シ 絲蒟蒻
總テ旨カラズ佃煮ニテクフ 梨一ツ
陸氏内ヨリ朝鮮ノ寫眞數十枚持タセオコス
午後母ハ車ニテ芝南佐久間町ノ池内氏ヲ
訪フ政夫氏ノクヤミナリ
瓢亭來ル
今日ハ昨夜來ノツヾキニテ何トナク苦シ
背腰ノ膿ヲ押出スニ晝夜絶エズ出ル昨日モ今
日モ同ジ

町川ニボラ釣ル人ヤ秋ノ風

九月四日 朝曇 後晴
昨夜ハヨク眠ル
新聞日本二六京華大阪毎日ヲ讀ム例ノ如シ海
南新聞ハ前日ノ分翌日ノ夕刻ニ屆クヲ例トス
朝 雜炊三椀 佃煮 梅干
牛乳一合ココア入 菓子パン二
晝 鰹ノサシミ 粥三椀 ミソ汁 佃煮 梨
二ツ
葡萄酒一杯（コレハ食時ノ例ナリ前日日
記ニヌカス）
間食 芋坂團子ヲ買來ラシム（コレニ付悶
著アリ）
アン付三本燒一本ヲ食フ 麥湯一杯
鹽煎餅三枚 茶一碗
晩 粥三椀 ナマリ節 キャベツノヒタシ物
梨一ツ
午前種竹山人來ル 菖蒲田原釜ナコソナドノ海
水浴ニ遊ンデ歸ルト 原釜ニテハ松魚一尾八錢高
キトキ十三錢

家庭ノ快樂トイフコトイクラ云フテモ分ラズ
物思フ窓ニブラリト絲瓜哉
肋骨ノ贈リ來リシ美人畫ハ羅ニ肉ノ透キタ
ル處ニテ裸體畫ノ如シ
裸體畫ノ鏡ニ映ル朝ノ秋
美女立テリ秋海棠ノ如キカナ

九月五日 雨 夕方遠雷
朝 粥三椀 佃煮 瓜ノ漬物
晝 メジノサシミ 粥四椀 燒茄子 梨二ツ
間食 梨一ツ 紅茶一杯 菓子パン數個
夕 鷄肉 卵二ツ 粥三椀餘 煮茄子
若和布 二杯酢カケ
夕刻三吉氏來ル明日京へ歸ルトナリ



([illegible]の日記と同)

午前陸妻君巴サントオシマサントヲツレテ來ル

陸氏ノ持歸リタル朝鮮少女ノ服ヲ巴サンニ著セテ見セントナリ 服ハ立派ナリ日本モ友禪ナドヤメテ此ヤウナモノニシタシ

支那ヨリモ朝鮮ヨリモウツクシク

夕顔ト絲瓜殘暑ト新涼ト
青[illegible]ト[illegible]庵芭蕉ト[illegible]

書屋今昌宅ニ逗留

蠅拂子（[illegible]別荘ノクレシ拂子ノ長サ三尺モアリ）

馬の尾に佛性ありや秋の風

神鳴ノ鳴レドモ秋ノ暑サカナ

九月六日 晴雨不定

朝 粥三椀 佃煮 不足

晝 サシミ（カツヲ） 粥三四椀 ミソ汁 梨一

間食 今日ハ週報募集句檢閲ノ日ナレバトテ西瓜ヲ買ハシム 西洋西瓜ノ上等ナリ 一度ニ十五キレ程クフ

夕 粥三碗 アカヱ キャベツ 冷奴 梨一ツ

便通 朝、午後、夜、三度

今日ハ齒ノ膿オサズ

夜 羊羹二切

肋骨ヨリ託セシ荷物近衛公ノ内ヨリ陸へ來リ更ニ陸ヨリ届ケテ來ル 二尺程ノ青漆ノ箱ナリ中カラ出タモノハ

○四君子等ノ掛物小幅六枚（地ハ緞ニテ彩色畫ハ甚ダ俗ナモノナリ）

○天津人形四箇大サ八寸許（[illegible]人等）只土ヲコネテ衣服ヲ彩色シタルモノ、中空ニナリ居ラザル故非常ニ重ク多少壊損セリ

○鼠一ツ

○オキアゲノ如キ俗ナ者十枚程 ○團扇二本

午後オイクサン、巴サン、オシマサン三人來リ西洋ノ廻燈籠ヲマハシテ遊ブ皆無邪氣ノ樣ナリ

左千夫來ル昨夜興津ヨリ來リシナリト山北ノ鮎鮓御土産ニ買ヒ來リシガ新橋著遲ク且ツ雨ナリシ故コチラヘ寄ラズニ歸リタリト興津行ハ週報課題松ノ歌ヲ作リニ行キシナリト（今日ハ太白トイフ八[illegible]）

（[illegible]）余曰クソレワロシ、松トイフ題已ニ陳腐ナルニ殊ニ陳腐ナル興津ニ行ツコト大間違ヒナリ。ソレヨリモ知ラヌ野寺ノ庭ノ松カ兒ノ庭ノ松ヲ詠ミタル方マサリタラン云々

四方太數時晩餐（ウナギ飯）ヲ喫シ歸ル

[illegible]亭陸へ行キシ歸リナリトテ立寄ル

今日蒸ツテタマラズ晝ノ内ヨリ汗出テ時々ゾクゾクト寒サニ冒サレシ心地イヤナリ

夜ニ至ツテ腹ノハリタルタメニヤ苦シクテタマラズ煩悶ス強ヒテ便通ヲ試ミタルニ都合ヨクアリイタク疲勞同時ニ熱發檢溫器ヲ入レテ見ルニ卅七度七分シカナシトイフ此熱ナカ〳〵苦シ

九月七日 忽雨忽晴

今朝週報募集句ノ原稿ヲ持タセ使ヲ出シ序ニ宮本へ往テ腹ノハリヲ散ラス藥ヲモラヒ來ラシム

白イ散藥ヲモラヒ來ル

朝繃帶カヘ便通アルコト例ノ如シ

秋一室拂子ノ髯ノ動キケリ

秋ノ蠅殺セドモ猶盡キヌカナ

鷄頭ヤ今年ノ秋モタノモシキ

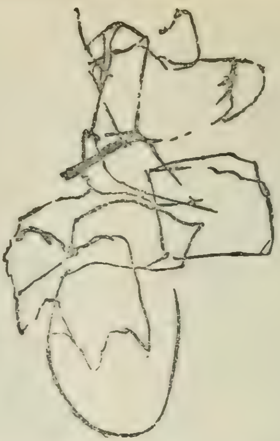
夜碧梧桐來ル蕪村句集講義讀合ノタメ

朝 粥三碗 佃煮ワロシ、コーコ少シ（茄子ト瓜）

牛乳五勺 ココア入 鹽センベイ三枚

晝 カツヲノサシミ 粥三碗 ミソ汁 西瓜

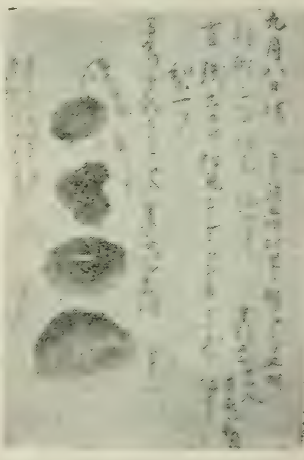
二切 梨一ツ
間食 菓子パン十箇許 鹽センベイ三枚
茶一杯
夕 栗飯三ワン サハラ焼 芋煮
此夜ハヨク寐タル方ナリ
此日著物シャツ著カヘ



（右圖は絲瓜の素描）



（右圖は絲瓜の圖）



（右圖の日記）

九月八日 晴 午後三時頃曇 暫クシテ又晴
朝 粥三ワン 佃煮 梅干 牛乳五勺コヽア入 菓子パン數個
晝 粥三ワン 松魚ノサシミ フジ豆ツクダニ 梅干
梨一ツ
間食 牛乳五勺コヽア入 菓子パン數個

朝庭ノ棚ヲ見ルニ絲瓜ノ花八、南瓜ノ花二
○追込籠ノカナリヤ金網ニトリツイテ鐵網ニ附著シタル白毛ヲ啄ム ○白キ蝶女郎花ノ花ヲ吸フ ○蝶二ツニナル ○ブイ／＼絲瓜ノ花ヲ吸フ ○蛾一ツガラス戸ヲ這フ ○揚羽ノ蝶來ル 倉皇トシテ去ル ○鳥一羽籬ノ上ヲ飛ビ過グ ○山女郎（黑蝶）來ル ○雲無シ
紅綠來ル 午前十一時頃苦ミ泣ク
夕顔ヤ野分恐ルヽ實ノ太リ
病間アリ 秋ノ小庭ノ記ヲ作ル
午後理髮師來ル 一分刈二十五錢ヤル
理髮師ノ言ニヨルニ夕顔ニ似テ圓キ者ハ干瓢ナリト
干瓢ノ乳ヘウツクシ朝寒ミ
棚ニ白キ花二ツ咲ク（夕顔カ瓢カ干瓢カ分ラズ）
夕飯 粥二椀 焼鰯十八尾 鰯ノ酢ノモノ
キャベツ 梨一
秋ノ蠅追ヘバマタ來ル叩ケバ死ヌ
此夜一時頃迄安眠
此日便通三度

九月九日 晴
便通及繃帶
朝 栗小豆飯三碗（新暦重陽） 佃煮
間食 紅茶一杯牛乳（牛乳來ラズ 菓子パン

三箇
便通アリ
午 粟飯ノ粥四碗 マグロノサシミ 葱ノ味噌和 白瓜ノ漬物 梨一ツ又一ツ
氷水一杯
夕 小豆粥三碗 鮪鍋 昔ノサシミノ残リ
和布 煮栗

朝雨足ヲ按摩セシム
長塚ノ使栗ヲ持チ来ル手紙ニイフ今年ノ栗ハ蟲ツキテ出来ワロシ僅ニ栗ソロケレバ其年ハ豊作ナリト果シテ然リ云々栗ノ袋ノ中ヨリ将棊ノ駒一ツ出ヅ

新暦重陽
栗飯ヤ糸瓜ノ花ノ黄ナルアリ
主病ム糸瓜ノ宿ヤ栗ノ飯
栗飯ノ四碗ト書キシ日記カナ

糸瓜ノ花一ツ落ツ ○茶色ノ小キ蝶低キ雞頭ニトマル ○曇ル ○追込籠ノジャガタラ雀イツノ間ニカ籠ヲヌケテ糸瓜棚松ノ枝ナド飛ビメグルヲ見ツケル ○鄰家ノ手風琴聞ユ ○ジャガタラ雀鄰ノ庭ノ木ニ逃ゲル家人籠ノ鐵網ヲ修理ス ○蟬ツク、、ボーシノ聲暑シ ○日照ル ○蜻蛉一ツ二ツ ○揚羽、山女郎或ハ去リ或ハ来ル ○栗ヲクフ

題畫美人 骨所題
ウスモノ、秋ニ勝ヘザル姿カナ
美人ノ畫ト拂子ト並べ掛ケタル
夕顔ノ垣根覗キソ美人禪

即事
九月蟬椎伐ラバヤト思フカナ
栗出来ヌ年ハ五穀豊穣ナリトカヤ
糸瓜ニハ可モ不可モナキ殘暑カナ

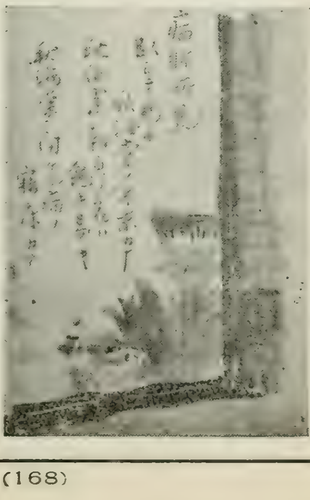
○
人間ハマダ生キテ居ル秋ノ風
牡丹ニモ死ナズ瓜ニモ糸瓜ニモ
病牀ノウメキニ和シテ秋ノ蟬
朝顔ヤ九月ノ花ニ恥多キ

頭ヲ扇ガシム ○氷水ニ葡萄酒ヲ入レテ飲ム
氷嚙ンデ毛穴ニ秋ヲ覺エケリ

寒暖計八十五度
病人ニ八十五度ノ殘暑カナ

夕刻五城玄關迄来ル土産林檎六箇ト煙草ノ灰吹ナリ灰吹ハ陶器ニシテ布袋ノアクビシタル處布袋ノ口即灰吹ノ口ナリコレハ出雲ノ産ナリト

點燈後寒暖計八十二度
上野ノ梟少シ鳴イテ又罷ム
秋ノ灯ノ糸瓜ノ尻ニ映リケリ



(右圖の句)
病牀所見
臥シテ見ル秋海棠ノ木末カナ
秋海棠朝顔ノ花ハ飽キ易キ
秋海棠ニ向ケル病ノ寐床カナ

蟲ノ聲滋シ歌ヨミナラバ歌ヨマン
鄰家ニ八石數會ト云フアリ
八石ノ拍子木鳴ルヤ蟲ノ聲
細脛ノ影襖ニアリ
ツクヅクト我影見ルヤ蟲ノ聲

○

コホロギヤ物音絶エシ臺所

サマヾヽノ蟲鳴ク夜トナリニケリ

夜更ケテ米トグ音ヤキリヾヽス

痩臑ニ秋ノ蚊トマル憎キカナ

九月十日　薄曇　午晴

朝飯　ヌク飯二椀　佃煮　紅茶一杯　菓子パン一ツ

便通　間ニアハズ　繃帶取換

便通

午飯　粥　イモ入　三碗　松魚ノサシミ　ミソ汁　蔥茄子　ツクダ煮　梨二ツ　林檎一ツ

間食　燒栗八九箇　ユデ栗三四箇　煎餅四五枚　菓子パン六七箇

夕飯　イモ粥三碗　オコゼ豆腐ノ湯アゲ　オコゼ鱠　キャベツヒタシ物　梨二切　林檎一ツ

午時　ジャガタラ雀歸リテ庭ニ在リ

鳴雪翁來ル「ホトヽギス」會計ノ上ニツキ話アリ水飴一罐ヲ贈ラル

國分ミサ子女史來ル義仲寺寫眞二枚發句刷物一枚ヲ贈ラル

家人近込籠ヲ修理ス母ハ籠ノ中ニ妹ハ籠ノ外ニアリ針ガネノ取リヤリスルナリ

新聞ノ號外來ル曰ク伊庭想太郎無期徒刑ニ處セラル

青物ヲ入レタル笊ノ中ニ蟲鳴クトテ其笊ヲ座敷ニ置イテ聞ク閻魔コホロギニヤアランナドイフ

夜半家人ヲ起シテ便通アリ

此蛙ノ置物ハ前日安民ノクレタルモノニテ安民自ラ鑄タル也



無花果ニ手足生エタト御覧ゼヨ

蛙鳴蟬噪彼モ一時ト蚯蚓鳴ク

(右圖の説明と句)

此蛙ノ置物ハ前日安民ノクレタルモノニテ安民自ラ鑄タル也

無花果ニ手足生エタト御覧ゼヨ

蛙鳴蟬噪彼モ一時ト蚯蚓鳴ク

ヨク眠ル

此日水ノ如キ唾頻ニ出ヅ

九月十一日　曇

朝飯　イモ雜炊三碗　佃煮　梅干　牛乳一合　コヽア入　菓子パン

便通及繃帶取換

便通

晝飯　粥三碗　鰹ノサシミ　蜊汁

間食　煎餅十枚程　紅茶一杯

夕飯　粥三四碗　キスノ魚田二尾　フキ膾二椀　佃煮　梨一ツ

午前日南氏來ル話頭、フランクリンノ常識、アングロサクソンノ特色、フランスハ亡國的富、今ノ日本デハ眞成ノエライ奴ハ却テチヽクレテ世ニ出ラレヌコト等

午後　母神田ヘ

牧野ノ細君國產ヲ携ヘテ玄關迄來ル

ツクヽヽボーシツクヽヽボーシバカリナリ

ツクヽヽボーシ明日無キヤウニ鳴キニケリ

ツクヽヽボーシ雨ノ日和ノキラヒナシ

家ヲ遶リテツクヽヽボーシ樫ノ林

夕飯ヤツクヽヽボーシヤカマシキ

母歸ラル　河東高濱二軒ヲ訪ハレシニ皆留守

ナリキト
側ノ理髪師雞頭ノ盆栽ヲ携ヘ來ル
ジャガタラ雀今日モ庭ヘ來ル
點燈後小蟬程ノ大キサノ蟲飛ビ來リラムプノ側ニアル盆栽ノ雞頭ヲ上下ス家人ヲ呼ンデ何ノ蟲ゾト聞ケバ、昨夜蚊帳ノ中ニテ鳴キタルハコレナリトイフ
燈下ニユデ栗七八箇クフ時ニ皮ヲムイテモラフ

九月十二日 曇 時々照ル
便通及繃帶取換
朝飯 ヌク飯三椀 佃煮 梅干
牛乳五勺紅茶入 ネヂパン形菓子パン一ツ（一ツ一錢）
午飯 イモ粥三椀 松魚ノサシミ 芋 梨一ツ 林檎一ツ 煎餅三枚
間食 枝豆 牛乳五勺紅茶入 ネヂパン形菓子一ツ
便通アリ
夕飯 飯一碗半 鰻ノ蒲焼七串 酢牡蠣 キャベツ 梨一ツ 林檎一切
漳州氏來ル

午後沼津ヨリ麓ノ手紙來ル
麓留守宅ヨリ鰻ノ蒲焼ヲ贈リ來ル
高濱ヨリ使、茶一カン、苔林檎二三十、金一圓持來ル茶ハ故政夫氏ノクヤミカヘシ、林檎ハ野邊地山口某ヨリ贈リ來ル者、金圓ハ晴齋ヨリ病氣見舞
沼津麓ヨリ小包便ニテ桃ノカン詰二箇來ル
病間ニ絲瓜ノ花ノ落ツル晝
夜病室ノ庇ニ岐阜提灯（潮音所贈）ヲ點ス
消エントシテトモシ火青シキリギリス
昨日床屋ノ持テ來テクレタ盆栽
草花ノ鉢並ベタル床屋カナ
（雞頭ノ畫アリ略ス）

九月十三日 曇
便通及繃帶取換
朝飯 ヌク飯三碗 佃煮 梅干
牛乳五勺紅茶入 菓子パン二ツ
便通
午飯 粥三碗 堅魚ノサシミ ミソ汁一椀
梨一ツ 林檎一ツ 葡萄一房

間食 桃ノカンヅメ三箇 牛乳五勺紅茶入
菓子パン一ツ 煎餅一枚
夕飯 稲荷鮓四箇 湯漬半碗 セイゴト昆布ノ汁 晝ノサシミノ殘リ 焼セイゴ 少シ
テクハレズ
佃煮 葡萄 林檎



（右圖 句）
朝顏ヤ繪ノ具ニジンデ繪ヲ成サズ
朝顏ヤ繪ニカクウチニ萎レケリ
此句既ニアルカ
朝顏ノシボマス秋トナリニケリ
蕣ノ一輪ザシニ萎レケリ

ジャガタラ雀再ビ追込籠ニ入ル（小キ籠ニ餌ヲ入レテ追込籠ノ側ニ置キシニジャガタラ雀

其籠ノ中ニ這入リテ餌ヲ食ヒ居ル處ヲ口ヲ塞ギ取リタルナリ）

我庭ノ三本松伐リナバ家主怒ラン伐ラズバ緑ハビコリ上ツ枝ハ日影サヘギリ下ツ枝ハ露シヅク垂レウツクシキ花モソダタスハシキヤシウマ木モ枯レヌ我庭ノ三モト松上ツ枝モ下ツ枝モ伐レ家主怒ルトモサ庭ベニハビコル松ノ枝伐ラバ家主怒ランサモアラバアレ

下陰ノ草花惜シミ日ヲ蔽フ松ガ枝伐ラン家主怒ルトモ

我庭ノ三モト松伐リアハレ深キ千草ノ花ニ日ノ照ルヲ見ン

夜涼如水書燈ニ迫ル蟲ノ聲
夜涼如水天ノ川邊ノ星一ツ
松蟲ヤ露ニ濡レタル絹團扇
ムラ雨ノ過ギテ鷄頭ノ夕日カナ（ニトマリケリ）
毒蝶ノ秋海棠ヲ犯スカナ
枝豆ヤ病ノ牀ノ晝永シ
枝豆ヤ三寸飛ンデ口ニ入ル
學校ニ行カズ枝豆賣ル子カナ
枝豆ノ月ヨリ先ニ老イニケリ

枝豆ノツマメバハジク仕掛ケナ
明月ノ豆盜人ヲ照シケリ
枝豆ノカラ棄テニ出ル月夜カナ
芋ヲ喰ハヌ枝豆好ノ上戸カナ
芋アリ豆アリ女房ニ酒ヲネダリケリ
明月ヤ枝豆ノ林酒ノ池
枝豆ヤ俳句ノ才子曹子建
枝豆ヤ月ハ絲瓜ノ棚ニ在リ

週報募集俳句ヲ閲ス題ハ枝豆

俚歌ニ擬ス

枝豆 枝豆 ヨクハジク枝豆 プイト飛ンデ 三萬里 月ノ兎ノ目ニアテタ 目ツカチ兎 ヨクハジク枝豆 十三夜ノオ月様

○

秋風ヤ絲瓜ノ花ヲ吹キ落ス

九月十四日 曇

午前二時頃目さめ腹いたし家人を呼び起して便通あり腹痛いよ／＼烈しく苦痛堪へ難し此間下痢水瀉三度許アリ絶叫號泣

鄰家の行山婦を頼まんと行きしに旅行中の由電話を借りて宮本醫を呼ぶ

吐アリ

夜明稍〻靜マル 醫者來ル 散藥ト水藥トノム

疲勞烈シ

氷片ヲカム 或ハ葡萄酒ニ入レテ

牛乳 葛湯 ソップ 飴湯

九月十五日

昨夜疲レテ善ク眠ル

牛乳 葛湯

晝飯 粥三碗 泥鰌鍋 牛乳 菓子パン 水飴

午後二度便通アリ

夕飯 粥三碗 佃煮 味醂漬 飴湯

大阪靑々ヨリ奈良漬ヲ送リ來ル

加藤義叔母飯田町ヨリ來ル序ナリトテ來ラル土産味醂漬ト薩摩流アゲ蒲鉾

夕暮前稍〻苦シ喰過ノタメカ

九月十六日 晴 ヒヤ／＼スル

週報俳句卷閲ノ際一息ニ急イデ見了ル爲目痛クナリ昨日ナドハ新聞ヲ讀メバ目痛ミ明ケラ

レズ内テ今朝ハ新聞ヲ見ズ少シバカリ律ニ讀マス

石ノ卷ノ野老トイフ人ヨリ小包ニテ梨十バカリヨコス長十郎トイフ梨トゾ一ツクフニ美味アリ

朝 牛乳 菓子パン二ツ 梨一ツ

晝 粥三碗 泥鰌鍋 薩摩アゲ 味醂粕漬 梨一ツ 葡萄一房

夕 粥三碗 鰻 薩摩アゲ 味醂粕漬 牛乳 コヽア入 菓子パン小二箇 葡萄 梨一ツ

午後四時頃次ノ間ニテ便通

朝竹冷氏ノ使トシテ暘東及ビ某來ル五元集ヲ返シ烏龍茶ヲ贈ラル

先日久松老公七十ノ賀筵ニ萬圓ヲ費サレシト聞キシガ今度韓帝五十ノ賀筵ハ二百萬元ヲ要スル由考ヘテ見ル程妙ナ心持ニナル

今年ノ夏馬鹿ニ熱クテタマラズ新聞ナドニテ人ノ旅行記ヲ見ルトキ吾モチョイト旅行シテ見ヨウト思フ氣ニナルソレモ場合ニヨルガ谷川ノ岩ニ激スルヤウナ涼シイ處ノ岸ニ小亭ガアッテソコデ浴衣一枚ニナッテ一杯ヤリタイト思フタ

二六ニアル樂天ノ紀行ヲ見ルト毎日西瓜ヲ食フテ居ル羨マシイノ何ノテ、

大阪デハ鰻ノ丼ヲ「マムシ」トイフ由聞クモイヤナ名ナリ僕ガ大阪市長ニナッタラ先ヅ一番ニ布令ヲ出シテ「マムシ」トイフ言葉ヲ禁ジテシマフ

米國大統領マッキンレーハ狙撃サレタ結果終ニ死ンダトノ報ガ來タ無政府黨トイフ事ニツキテハ非常ノ疑ガアル

鼠骨來ル共ニ午餐ヲクフ

鼠骨去ル左千夫義郎蕨眞來ル晩餐（鰻飯）ヲ共ニス

夕飯前宮本國手來診

九月十七日 晴 ヒヤ〳〵スル

朝 粥三碗 佃煮 奈良漬 梅干

繃帶取換及便通

牛乳七勺位 コヽア入 アンパン一ツ 菓子パン大一ツ

晝 粥三碗 鰹ノサシミ 零餘子 奈良漬 梨一ツ 飴湯 ユデ栗

夕 ライスカレー三碗 ヌカゴ 佃煮 ナラ漬

體溫三十七度三分

繃帶取換後律四谷加藤へ行ク加藤轉居後始メテ行クナリオ土産ハ例ノ笹ノ雪

野老氏ニ酬ユ

石ノ卷ノ長十郎ガ見舞カナ

吾ヲ見舞フ長十郎ガ誠カナ

家人ノ秋海棠ヲ剪ラントイフヲ制シテ

秋海棠ニ鋏ヲアテルコト勿レ

大阪青々ニ酬ユ

奈良漬ノ秋ヲ忘レヌ誠カナ

欲睡

秋ノ蠅叩キ殺セト命ジケリ

二三日前チギリシ夕顔（實物大）（畫アリ略ス）

依様畫胡盧

節ヨリ送リコシ栗ハ實ノ入ラデ惡キ栗ナリ

眞心ノ蟲喰ヒ栗ヲモラヒケリ

即事

イモウトノ歸リ遲サヨ五日月

母ト二人イモウトヲ待ツ夜寒カナ

○夕顔ノ實ノ太ケクニ墨黒ニ目鼻ヲカヽバ
人トナランカモ
律歸ルオ土産ハパインアップルノ罐詰ト索
麪

九月十八日 晴 寒シ 朝寒暖計六十七度
朝 體温三十五度四分
粥三椀 佃煮 ナラ漬
便通及繃帶取換
晝 飯二碗 粥二碗 カジキノサシミ 南瓜
ナラヅケ 梨一ツ
便通
牛乳 コヽア入 ネヂパン形菓子パン半分
程食フ堅クテウマカラズ
因テヤケ糞ニナツテ羊羹
菓子パン鹽煎餅ナドクヒ
澁茶ヲ呑ムアト苦シ
夕 粥一椀餘 煮松魚少シクフ 佃煮 ナラヅ
ケ 梅干 煮茄子 葡萄
夜便通
今日寒ニ堪ヘズ（昨夜ハ左足ノサキ終ニアタ
タマラズ）湯婆ヲ入ル
種竹山人來話、少シ話シタル故カ苦シクナル
山人ハ根津方円ニ轉居セリト 美術學校改革ニ
ツキ職ヲ辭シタル話アリ
獨知居士來ル 繃帶取換中ニテ歸ル
庭ニ出來タ只一ツノ南瓜ヲ取ラシム
午後虚子來ル 晩飯ヲクフテ歸ル 虚子ハ九段坂
上ニ轉居セリ 家新シ 家賃十六圓ナリト
晩飯後 腹ハリテ苦シ 四五日前ノ薬ヲ出シテ
呑ム
伊豆修禪寺ノ岡麓ヨリサラシ飴ヲヨコス
母佃煮買ヒニ行カル
シャツ著換、蒲團取換、寒サノ用意ナリ
坂本町祭ノ太鼓聞ユ
玻璃窓外星二三點
犬頻リニ吠ユ
鄰ノ時計九時ヲ打ツ

九月十九日 晴
朝飯 粥三碗 佃煮 奈良漬
便通
午飯 冷飯三碗 堅魚ノサシミ 味噌汁 サツマ
イモ 佃煮 奈良漬 梨一ツ 葡萄一房
間食 牛乳五勺コヽア入 菓子パン 鹽煎餅
飴一ツ 澁茶
便通及繃帶取換
晩飯 粥三碗 泥鰌鍋 キャベツ ポテトー
奈良漬 梅干 梨一ツ
ツク、、ボウシ猶啼ク ○追込ノ小鳥啼ク
○向ノ子供啼ク ○ドコヤラノ汽笛鳴ル（午時
ノ景）
自分ガ旅行シタノハ書生時代デアツタノデ旅
行トイヘバ獨リ淋シク歩行イテ宿屋デ獨リ淋シ
ク寐ルモノヂヤト思フテ居ル。ソレダカラ到ル
處デ歡迎セラレテ御馳走ニナルナドトイフ旅
行記ヲ見ルト羨マシイノ妬マシイノテ、
奥羽行脚ノトキ鳥海山ノ横ノ方ノ何トカイフ
處テアツタガ海岸ノ松原ニアル一軒家ニトマツ
タコトガアル 一日熱イ路ヲ歩行イテ來タノデカ
ラダハクタビレキツテ居ル 此松原へ來タトキニ
ハ鳥海山ノ頂ニ僅ニ夕日ガ殘ツテ居ル時分ダ
カラ迚モ次ノ驛迄行ク勇氣ハナイ止ムヲ得ズ此
怪シイ一軒家ニ飛ビ込ンダ 勿論一軒家トイフテ
モ旅人宿ノ看板ハ掛ケテアツタノデキタナイ家
ナガラ二階建ニナツテ居ル、併シコヽニ一軒家
ガアツテソレガ旅人宿ヲ營業トシテ居ルトイフ

ニ至ッテハドウシテモ不可能トイハザルヲ得ナイ安價ナ借家ノ外ノスミッタ貧民窟ノ住居デナイトカ言ヘヌ不潔ト不衛生トヲ兼ネタ建物デハアラウト想像セラレタ自分カコヽヘ泊ルニツイテ懸念ニ堪ヘナカッタノハソンナコトデハナイ、食物ノコトデアッタ毎日ノ旅ニカラダハ弱ッテキルシ今日ハ殊ニ野菜ヘ飢レテ甚ダ弱ッテ居ルノデアルカラ何カ食ベタケハないウマイ者ガ食ヒタイトイフ注文ガアッタノデアル其注文ハ迚モ此宿屋デウナヘラレヌトイフコトデアッタケレドモモウ一歩モ行ケヌカラソンナコトハアキラメルトシテ泊ルコトニシタ門ヨリ門モ垣モ何モナイ家ノ横ニ廻ッテトメテクダサイトイフタガ客ラシイ者ハ居ナイヤウダカラ自分ヲ幾度コトワラレルデアラウト思フタ、處ガ意外ニモアガレトイフコトデアッタ草鞋ノ紐解イテ街道ニ臨ンダ方ノ一間ノ一室ニ古メタ鳥渡出ハ窓ニ當ッテキルソコデ足投ゲ出シテハ日ノ暮ルヲイタハリナガラツクヾヽ此家ノ貧窮ヲ見ルニ別ニ怪ムベキコトモナイ十三四ノ少女ト三十位ノ女ト二人居ルガ極メテキタナイ風ヲシテ居ル白粉ナドハチットモ無イヤウシテ居ル、自分一人デアル、ナドト考ヘテ居ルト黒ガ來テ驚イタ牡丹色ノ花ノ蕾ヲ取ルトコレモ牡丹ダガ一イ、ヽ、非常ニコマイ新シイ花ヲダ實ニ思ヒガケナイ一軒家ノ御馳走デアッタ歡迎セラレナイ處ニモ清稀ノ興味ハアル

其家ヨリ鴫三羽小包ニテ差出ス由、假來ル其表ニ

昨今秋もやうやうけしき立申候。百舌も鳴き出し候。鶺鴒どりもわたり申候。萩女郎花もそろそろ咲出し候。田の出來は申分なく稀盛も珍しき當りに候。

トアリ田舎ノ趣見ルガ如シ一寸往テ見タイ

目ハ鴫ノ一聲ヲ枕元ノ疊ノヘリニサシタ

默然ト絲瓜ノサガル庭ノ秋

夕顏ノ果ニ及バザルフクベカナ

日暮瓜ノ蔓ノ這ヒ足ラズ

美人ノ團扇持チタル圖

新團扇ツレナヘ秋トナリニケリ

夕飯後鴫ノ小包届著三羽一ク、リニシテアリ

淋シサノ三羽減リケリ鴫ノ秋

實價ヲシラベ

虛子ハ九段上ニ十六圓　鳳亭ハ番町ニ九圓

碧梧桐ハ猿樂町ニ七圓五十錢　四方太ハ淺嘉町ニ五圓五十錢　鼠骨ハ釣町圓居ニ上野淡泉ニ二圓五十錢

宮益上根岸横町ニ六圓…ホト、キス事務所ハ一圓五十錢　把栗ハ大久保ニ四圓　丞員ハ本所綠町ニ四圓　露月ハ其ナシ

自分ハ一ツノ梅干ヲ二度ニモ三度ニモ食フ、ソレデモマダ捨テルノガ惜シイ梅干ノ核ハ幾度吸ハブッテモ猶酸味ヲ帶ビテ居ルソレヲハキダメニ捨テ、シマフトイフノガ如何ニモ惜シクテタマラヌ

貴人ノ膳ナドニハ必ズ無數ノ殘物ガアッテアメラ掃溜ニ捨テラル、ニ違ヒナイ肴ノ骨ニハ肉ヲ澤山ツイテキルデアラウ味噌汁トカ吸物トカイフモノモ皆途ハ吸ヒ盡シテナイデアラウ斯ウイフ者コソ眞ニ天物ヲ暴殄スル者ト謂フベシダ之ヲ彼孤兒院トカ養育院トカニ寄附シテ喫ハスヤウニシタラ善イダラウ自分ノ内デモ牛乳ヲ捨テルコトガ度々アルノデイツデモ之ヲ惜ノデイ孤兒ニ呑マセタラト思フケレド仕方ガナイ何カ斯ウイフ處ヘ連絡ヲツケテ過ヲ以テ不足ヲ補フヤウニシタイモノダ

兵營ヤ學校ノ殘飯ハ貧民ノ生命デアルトイフカラ家々ノ殘飯モ集メテ廻ルワケニ行カナイダラウカ

ナド思フト犬ヤ猫ヲ飼フテ牛肉ヤ鰹節ヲヤルナドハ出來タコトデナイ小鳥ニ粟ヲヤルサヘ無益ナ感ジガスル

宮内省ノ觀櫻ノ御宴ナドガ雨ノタメヤミニナツタトイフヤウナ場合ニハ用意シテアツタ御馳走ハ養育院孤兒院ノヤウナ處へ下サルトイフコトデアル

桂山デ何ガシガ孤兒院ノヤウナモノヲ開イタラ若イ女學生ガ饅頭一袋持ツテ來テ名ヲ言ハズニ歸ツタサウナ

九月二十日　曇　時々雨

朝　ヌク飯三碗　佃煮　ナラ漬

午　粥三ワン　燒鰯三尾　キヤベージ　ナラ漬　梨一ツ　葡萄

間食　牛乳一合　コヽア入　菓子パン大小數箇　鹽煎餅

便通及繃帶取替

晩　與平鮓二ツ三ツ　粥二碗　マグロノサシミ　茄子ナラ漬　葡萄一房

夜　林檎二切　[illegible]

十時半寢ニ就ク

昨夜[illegible]

[illegible]ス

俳星ヲ見レバ露月ノ日記アリ其[illegible]ナルニ足ル我日記モ露月ニ見セタシ

同雜誌中俳壇天ノ句ニ

草ニ火ヲ落シテ行クヤ螢追　某

トイフアリ趣無シトイフニ非ズ月並調ニ近キヲ嫌フ

格堂選天ノ句ニ

草ニ据エル五右衛門風呂ヤ雁ノ聲　某

トイフアリ面白キ句ナリ併シ格堂未ダ俳句ノ品格トイフコトヲ知ラズト見エタリ但彼ノ作ル所

芋ノ葉ニ昨夜ノ雨ノ涙カナ　格堂

松露掘ツテ山谷ノ盧ヲ叩キケリ　同

遙カニ俗流ノ上ニ出ヅ侮ルベカラズ

露月選地ノ句ニ

草花ヲ見ツメテ遠ノ愛宕カナ　某

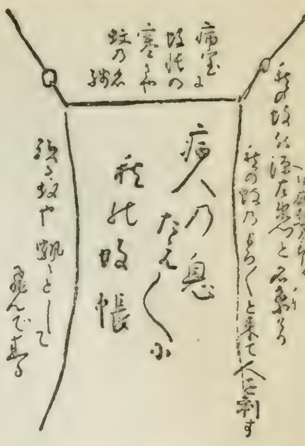
トイフアリコレ位初心ナ句ヲ露月ハ得見ワケザルニヤ露月モト鈍根、長ク工夫シテ漸ク一條ノ活路ヲ得タル者シカモコヽニ多少上慢ノ心起リテ復一段ノ進歩ヲ見ズ平凡ノ趣微細ノ趣ハ未ダ全ク解セザルガ如シ猶ニ折ヲ要ス

夕刻左千夫本所ノ與平鮓一折ヲ携ヘテ來ル

上野ノ森ノ梟シバシ鳴イテスグヤム

虚子ヨリホトヽギス先月分ノトシテ十圓送リ來ル

律ハ理窟ヅメノ女ナリ同感同情ノ無キ木石ノ如キ女ナリ義務的ニ病人ヲ介抱スルコトハスレドモ同情的ニ病人ヲ慰ムルコトナシ病人ノ命ズルコトハ何ニテモスレドモ婉曲ニ諷シタルコトナドハ少シモ分ラズ例ヘバ「團子ガ食ヒタイナ」ト病人ハ連呼スレドモ彼ハソレヲ聞キナガラ何トモ感ゼヌナリ病人ガ食ヒタイトイヘバ若シ同情ノアル者ナラバ直ニ買フテ來テ食ハシムベシ律ニ限ツテソンナコトハ曾テ無シ故ニ若シ食ヒタイト思フトキハ「團子買フテ來イ」ト直接ニ命令セザルベカラズ直接ニ命令スレバ彼ハ決シテ此命令ニ違背スルコトナカルベシ其理窟ツポイコト言語道斷ナリ彼ノ同情ナキハ誰ニ對シテモ同ジコトナレドモ只カナリヤニ對シテノミハ眞ノ同情アルガ如シ彼ハカナリヤノ籠ノ前ニナラバ一時間ニテモ二時間ニテモ只何モセズニ眺メテ居ルナリ併シ病人ノ側ニハ少シニテモ永ク留マルヲ厭フナリ時々同情トイフコトヲ說イテ聞カスレドモ同情ノ無イ者ニ同情ノ分ル筈モナケレバ何ノ役ニモ立タズ不愉快ナレドモアキラメルヨリ外ニ致方モナキコトナリ



秋の蚊の源左衛門と名乗けり　伊恩太郎カ
秋の蚊のよろ／＼と來て人を刺す
病室に蚊帳の寒さや蚊の名殘
病人の息たえ／＼に秋の蚊帳
殘る蚊や瓢々として飛んで來る
（右圖の句）

九月二十一日　彼岸ノ入　昨夜ヨリ朝ニカケテ大雨　夕晴

朝　便通、繃帯トリカヘ
　ヌク飯三ワン　佃煮　梅干
　牛乳一合ココア入　菓子パン　鹽センベイ
午　マグロノサシミ　粥二ワン　ナラ漬　胡桃煮付　大根モミ　梨一ツ
　便通
間食　餅菓子一二個　菓子パン　鹽センベイ
　澁茶
　食過ノタメカ苦シ
晩　キスノ魚田二尾　フキナマス二碗　ナラ漬　サシミノ殘リ　粥三碗　梨一ツ　葡萄一房

律ハ強情ナリ人間ニ向ツテ冷淡ナリ特ニ男ニ向ツテシヤイナリ彼ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリシカモ其事ガ原因トナリテ彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ若シ余ガ病後彼ナカリセバ余ハ今頃如何ニシテアルベキカ看護婦ヲ長ク雇フガ如キハ我能ク爲ス所ニ非ズヨシ雇ヒ得タリトモ律ニ勝ル所ノ看護婦即チ律ガ爲スダケノ事ヲ爲シ得ル看護婦アルベキニ非ズ律ハ看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリオ三ドンデアルト同時ニ一家ノ整理役ナリ一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ祕書ナリ書籍ノ出納原稿ノ淨書モ不完全ナガラ爲シ居ルナリ而シテ彼ハ看護婦ガ請求スルダケノ看護料ノ十分ノ一ダモ費サヾルナリ野菜ニテモ香ノ物ニテモ何ニテモ一品アラバ彼ノ食事ハ了ルナリ肉ヤ肴ヲ買フテ自己ノ食料トナサンナドトハ夢ニモ思ハザルガ如シ若シ一日ニテモ彼ナクバ一家ノ車ハ其運轉ヲトメルト同時ニ余ハ殆ド生キテ居ラレザルナリ故ニ余ハ自分ノ病氣ガ如何ヤウニ募ルトモ厭ハズ只彼ニ病無キコトヲ祈レリ彼アリ余ノ病ハ如何トモスベシ若シ彼病マンカ彼モ余モ一家モニツチモサツチモ行カヌコトトナルナリ故ニ余ハ常ニ彼ニ病アランヨリハ余ニ死アランコトヲ望メリ彼ガ再ビ嫁シテ再ビ戻リ其配偶者トシテ世ニ立ツコト能ハザルヲ證明セシハ暗ニ兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ持チシ爲ニヤアラン禍福錯綜人智ノ豫知スベキニアラズ

○

秋ノ蠅蠅タヽキ皆破レタリ
病室ヤ窓アタヽカニ秋ノ蠅
　草木國土悉皆成佛
絲瓜サヘ佛ニナルゾ後ルヽナ
成佛ヤ夕顔ノ顔ヘチマノ屁

彼ハ癇癪持ナリ強情ナリ氣ガ利カヌナリ人ニ物問フコトガ嫌ヒナリ指サキノ仕事ハ極メテ不器用ナリ一度キマツタ事ヲ改良スルコトガ出來ヌナリ彼ノ缺點ハ枚擧ニ遑アラズ余ハ時トシテ彼ヲ殺サント思フ程ニ腹立ツコトアリサレド其實彼ガ精神的不具者デアルダケ一層彼ヲ可愛

ク思フ情ニ堪ヘズ他日若シ彼ガ獨リデ世ニ立タネバナラヌトキニ彼ノ缺點ガ如何ニ彼ヲ苦ムルカヲ思フタメニ余ハ成ルベク彼ノ癇癪性ヲ改メサセント常ニ心ガケツヽアリ彼ハ余ヲ失ヒシトキニ果シテ余ノ訓戒ヲ思ヒ出スヤ否ヤ

病勢ハゲシク苦痛ツノルニ從ヒ我思フ通リニナラヌタメニ絶エズ癇癪ヲ起シ人ヲ叱ス家人恐レテ近ヅカズ一人トシテ看病ノ眞意ヲ解スル者ナシ

陸奥福堂高橋自恃ノ如キモ病勢ツノリテ後ハ屢々細君ヲ叱リツケタリト

○

三人集ツテ菓子クフ

肴屋ヨリ約束ノキスヲ持ツテ來ヌトテ母肴屋ニ行カル

九日ノ月絲瓜棚ニアリ

向ツ家ニ謡ノ聲ス

今日ハ車屋水汲ミニ來ズ

律綿買ヒニ行ク

晩餐後ハ直ニ眠氣ヲ催スヲ常トスサレド餘リ早ク寐テハ夜半以後ニ寐ラレヌ憂アリ故ニ成ルベク長ク起キテ居ルナリソレデモ八時過ニハ寐ルコト多シ消化ノタメニモ少シハ長起ガヨキナリ

九月二十二日　晴

便通及ホウタイ取換

朝　ヌク飯四ワン　佃煮　ナラ漬　葡萄三房

午　マグロノサシミ　粥一碗半　ミソ汁　ナラ漬　梨一ツ

便通

間食　牛乳一合ココア入　菓子パン

背中ゾクゾクスル體溫卅七度七分毛布著ル

汗少シ出ル

夕　粥三ワン　鰌鍋　燒茄子　サシミノ殘リ　ナラ漬

飄亭來ル雜誌デハダメダ新聞起サネバイカヌトイフ

原千代子來ル川崎ニ綴マレタリトテ葡萄一籃ヲ持テ來ルコレカラ今戸ヘ往クナリトテ自ラコネタ木兎ノ香合ヽマダ燒カヌヲ見セルソレカラ蒔繪ノ話ヲ聞ク

角力

幕ノ内ニナツテ故郷ニ歸リケリ

阿波人ハ阿波ノ相撲ヲヒイキカナ

大關ニナラデ老イヌル角力カナ

大關ト大關ト組ム角力カナ

幾秋ヲ負ケテ老イヌル角力カナ

角力取ニ角力取ノ子モナカリケリ

マハシ著ケテ子供角力ノ遊ビケリ

朝左ノ足冷エテ温マラズ温メカタヾヽ按摩セシム

夕飯頃義郞秋水大團扇ヲ携ヘテ來ル直徑三尺許秋水ノ畫アリ（我々歌フ間ノ盆踊リスル樣）

日未ダ全ク暮レヌニ梟御院殿ノ方ニ當リテ鳴ク

「千松島」ニテ左ノ句ヲ見ル

霧ナカラ大キナ町ニ出ニケリ　移竹

余多年此感アリテ句ニナラズ今此句ヲ見テ更ニ移竹ノ技倆ニ驚ク因ニ云此頃所々ニ移竹ヲ論ズル者出ヅ皆自己ノ創見ノ如クイフサレド移竹ヲ論ジタルハ余ガ太祇論ノ中ニ書キタルガ恐ラクハ嚆矢ナラン

九月二十三日　晴　寒暖計八十二度（午後三時）

未明ニ家人ヲ起シテ便通アリ

朝　ヌク飯三ワン　佃煮　ナラ漬　胡桃飴煮

便通及繃帶トリカヘ　腹痛堪ヘル心持アリ

午　牛乳五合　コヽア入　小菓數箇
堅魚ノサシミ　ミソ汁 實ハ玉葱ト芋　粥三
ワン　ナラ漬　佃煮　梨一ツ　葡萄四房
間食　牛乳五合　コヽア入　コヽア湯　菓子パ
ン小十數箇　鹽センベイ一二枚
夕　燒鰮四尾　粥三ワン　フヂ豆　佃煮
ナラ漬　飴二切

書アリ略ス

ほとゝぎす著

昨日鹿子君の消息を讀み泣きましたこの畫はグレーと云ふ田舍の景色なり御病床の御慰み迄差上候　木魚生

只今は歸りがけに巴里によりて遊居候其内に歸朝致久振にて御伺申すべく存候御左右其後いかゞ被爲入候哉

三十四年八月十八　畏秀三

本日縣君等と木魚老の寓をたゝき談笑時を移し貴下の御噂なんどいたし候未だ拜眉の榮を得ず候へども折角御加養御快癒の程乍蔭奉祈上候　和田英作

私も未だ御目もじしない者ですが同席しましたから御見舞申上る榮を得たのです　滿谷國四郎

巴理淺井氏ヨリ上ノ如キ手紙來ル

○　五月雨ヲアツメテ早シ最上川　芭蕉

此句俳句ヲ知ラヌ內ヨリ大キナ盛ンナ句ノヤウニ思フタノデ今日迄古今有數ノ句トバカリ信ジテ居タ今日フト此句ヲ思ヒ出シテツクヾヽト考ヘテ見ルト「アツメテ」トイフ語ハタクミガアッテ甚ダ面白クナイソレカラ見ルト

五月雨ヤ大河ヲ前ニ家二軒　蕪村

トイフ句ハ遙カニ進歩シテ居ル

九月二十四日　秋分　晴

便通及繃帶取カヘ
朝飯　ヌク飯三ワン　佃煮　ナラ漬　牛乳　コ
コア入、　餅菓子一ツ　鹽センベイ二枚
午飯　粥三ワン　カジキノサシミ　芋　ナラ
漬
梨一ツ　オ萩一二ケ
間食　餅菓子一ツ　牛乳五勺コヽア入　牡丹
餅一ツ　菓子パン　鹽センベイ　澁茶一
杯
夕　體溫卅七度七分　寒暖計七十七度
生鮭照燒　粥三ワン　フヂ豆　ナラ漬
葡萄一フサ

夜　便通ヤヽ堅シ

朝歌原大叔母御來ラルオ土産餅菓子

陸ヨリ自製ノ牡丹餅ヲモラフ此方ヨリハ菓子屋ニ誂ヘシ牡丹餅ヲヤル菓子屋ニ誂ヘルハ宜シカラヌコトナリサレド衞生的ニイハヾ病人ノ內デ拵ヘタルヨリ誂ヘル方宜シキカ何ニセヨ牡丹餅ヲヤリテ牡丹餅ヲモラフ彼岸ノトリヤリハ馬鹿ナコトナリ

オ萩クバル彼岸ノ使行キ逢ヒヌ
梨腹モ牡丹餅腹モ彼岸カナ
餅ノ名ヤ秋ノ彼岸ハ萩ニコソ
西ヘマハル秋ノ日影ヤ絲瓜棚

高橋ヨリ幸便ニ信州ノ氷餅ヲ贈リ來ル

芭蕉ノ

アラ海ヤ佐渡ニ横タフ天ノ川　はせを

トイフ句ハタクミモナク疵モナケレド明治ノヤウニ複雜ナ世ノ中ニナツテハコンナ簡單ナ句ニテハ承知スマジサリナガラ

霧ナガラ大キナ町ニ出ニケリ　移竹

ノ如キ趣ニ至ツテハ却テ解セザル者多シ

此頃ノ若イ人ハ歩行ク旅行ノ趣ヲ解セズ

此頃地方ノ俳句雜誌ヲ見ルニ東京ニテハ太祇ノ流行ヤンデ召波ニ移レリナド書ケリ片ハラ痛

キコトナリ余等ハ諸子ノ句中太祇ラシキ句一句モ見タルコトナク且ツ召波調ノ句トハドンナ句ヤラマダ研究モトヾカヌニサテ、、素バシコイ世ノ中ナリ

　昨年ノハジメ頃ニヤ余

　　ノビ、ヾシ歸リ詣ヤ小六月

トイフ句ヲ得テイクラカ太祇メキタルヤウニ思ヒ始メテノコトナレバウレシク之ヲ十句集ニ出シタルニ一點モツカザリキト覺ユ

麥人モ太祇好ナリ此男普通才子ノ如ク敏捷ニナキガ却テアル趣ニ入ルコト深シアル時來テ

　　サソハレテ妻ヲヤリケリ二ノ替

トイフ余ノ句ヲ短册ニ書ケトイフ蓋シ其太祇調ナルヲ以テノ故ナラン其時彼ノ句モ聞キ面白シト思ヒシガ忘レタリ

太祇ノマネスルトイフテモ彼ノ集中第一流トモイフベキ句ハマネラル、者ニアラズ其以下ノ句ヲマネルナリ

　　移シ植エシ秋海棠ヤ麻テ見ユル

　（十人ノ家内ヤ芋ノ十皿程

　　盛リ分ツ十皿ノ芋ヤ臺所

　　大家ヤ芋煮エテ居ル臺所

　蓮ノ實ヤ飛ンデ小僧ノ口ニ入ル

　筆モ墨モ溲瓶モ内ニ秋ノ蚊帳

夜八時頃左向ク頻リニ俳句ヲ考ヘツ、アルニ俳氣サヽズ眠氣ザシテナラズ遂ニ眠ル左向ニナレバ直ニ眠タクナルナリ

九月二十五日　晴

朝寐ノ氣味アリ

朝飯　粥三ワン　佃煮　ナラ漬　牛乳コ、アス
　菓子パン小二

便通ト繃帶取カヘ

午飯　粥四ワン　カジキノサシミ　ミソ汁　實ハ茄子　ナラ漬　アミ佃煮　梨一ツ　餅菓子二ツ

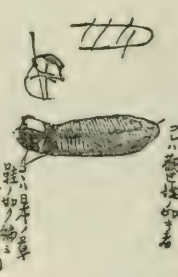
間食　菓子パン　鹽煎餅　餅菓子一ツ　オハギ半箇　牛乳五勺　コ、ア入

夕　體温卅六度九分
　鰌鍋　若和布ニハイ酢　馬鈴薯　胡桃　ナラ漬　アミ佃煮　粥三ワン　葡萄一フサ

　高濱ヨリ小包ニテ曲物一箇送リ來ル小鰕ノ佃煮ナリ前日アミノ佃煮此邊ニナキコト虚子ニ話シタル故ナリ

午後三人集ッテ菓子ヲクフ

南品川中村某ヨリ朝鮮ノ草鞋トイフ者ヲ贈リ來ル



畫アリ略ス

天津ノ[illegible]ヨリ來リシハガキノ半分

コレハ前日池内氏ヨリ贈ラレタルカン詰ノ外皮ノ紙製ノ袋ノ側面也

（雞肉ヲ敲キテ味噌ノ如クシタル者ナリCHICKEN LOAF）

畫アリ略ス

此紙ノ箱ニ今ハ方一寸位ノ脱脂綿ノ小片澤入レアリコレハ毎日腐膿ノ膿ヲ押シ出シテハ此綿ノキレデ拭ヒ取ルナリ

鼻毛ヲ摘ム

　庭ノ棚ニ夕顔三ツ瓢一ツ干瓢三ツソレヨリ少シモフエヌニ絲瓜バカリハイクラデモフエル今一寸見タトコロデ大小十三程アリ

　今宵珍シク夕顔ノ花一ツ咲ク絲瓜ノ花モ最二ツ三ツ見ユルノミトナレリ

ヒグラシノ聲ハ疾クヨリ聞カズツク、、ボウシハ此頃聞エズナリヌ

本膳ノ御馳走食フテ見タシ

夕方梟御院殿ノ方ニ鳴ク

ガチャ〳〵庭前ニテヤカマシク鳴ク此蟲秋ノ初メハ上野ノ崖ノ下ト思フアタリニテサワガシク鳴キ其後次第々々ニ近ヨリ來ルコト毎年同ジコトナリ

九月二十六日　曇　午後小雨

朝　ヌク飯四ワン　アミ佃煮　ハゼ佃煮　ナラ漬（西瓜）

繃帶取替及便通

牛乳一合　ココア入　餅菓子一箇半　菓子パン　鹽センベイ

午　マグロノサシミ　胡桃　ナラ漬　ミソ汁實ハサツマイモ　梨一ツ

間食　葡萄　オハギ二ツ　菓子パン　鹽センベイ　澁茶

便通

夕　キャベツ卷一皿　粥三ワン　八ツ頭　サシミノ殘リナラ漬　アミ佃煮　葡萄十三粒

虚明ヨリ義仲寺ノ刷物三枚送リ來ル前ニ操子ニモラヒタルト異ナリ

家人屋外ニアルヲ大聲ニテ呼ベド應ヘズタメニ癇癪起ノヤケ腹ニナリテ牛乳餅菓子ナドヲ貪リ腹ハリテ苦シ家人屋外ニアリテ低聲ニ話シヲル其聲ハ病牀ニ聞ユルニ病牀ニテ大聲ニ呼ブ其聲ガ屋外ニ聞エヌ理ナシソレガ聞エヌハ不注意ノ故ナリトテ家人ヲ叱ル

午後家庭團欒會ヲ開ク鄰家ヨリモラヒシオハギヲ食フ

週報募集俳句「フクベ」ヲ閲ス

小草ノ盆栽ニ蟷螂ノ居ルヲ其マヽ枕元ニ持テ來テオク

昨日モ今日モ夕飯食ハヌ内ニハヤ眠タキ氣味アリ此模樣ニテハヤガテ晝モ夜モウツラヽヽトシテ日記書クノモイヤニナルヤウナ時來ランカト思フ

新聞雜誌ヲ見テ面白シト思ヒシコトノ今ニ腦裏ニ殘リ居ル者ヲ試ニ列記センカ

其一

ビスマルク曰ク新聞トハ紙ノ上ニスリツケタルインキナリ

其二

曰クオ山ノ大將曰ク總領ノ甚六曰ク石部金吉曰ク大馬鹿三太郎曰ク知ラヌ顏ノ半兵衞曰ク權兵衞曰ク助平曰ク何曰ク何濟々タル多士

其三

黑船浦賀ニ來リシ時ノ狂句

オドカシテヤツタトペルリ舌ヲ出シ

其四

田舍芝居ノ舞臺ニテ大勢ノ役者ガセリフヲ割ツテ一句ヅツイフ時一人ノ役者ガ次ノ役者ノセリフヲイフテシマヒシニ次ノ役者ハ何トイフベキスベモ知ラズ當惑セシガヤガテ曰ク

拙者ノセリフガゴザラヌワイ

其五

峩山和尚天龍寺ノ泉水ノホトリヲ散歩シ居リシニ丁稚ラシキ者來リテ、和尚サン此池ノ鯉オクレンカ、トイフ和尚イフ、コノ池ノ肴取ッテハナラヌゾ、丁稚、ソンナコトイフテオ前ガ取ルノデハナイカナ、和尚、イフ・峩山モコノ返答ニハ困ツタワイト、和尚弟子ニ語テ曰ク何トイフテモ無我ニハ勝テヌゾヤ

其六

伊藤侯ノ薩摩下駄ガ桐ノ柾デ十五圓、落語家圓遊ノ駒下駄ガ何トカノ鼻緒デ七圓

九月二十七日　曇（陰暦八月十五日）
便通
朝飯　ヌク飯四ワン　アミ佃煮　ハゼ佃煮　ナラ漬
牛乳五勺コヽア入　菓子パン少々
午飯　マグロノサシミ　煮茄子　ナラ漬　粥三ワン　梨一　焼栗五六　カン詰ノパインアップル
間食　牛乳五勺コヽア入　菓子パン　鹽煎餅十箇許
夕　少シ發熱ノ氣味アリ測レバ卅七度七分
便通及繃帶トリカヘ
サツマ四ワン（コレハ小鯛ノ骨ヲ焼キテ善ク叩キテ粉ニシ汁ニ和シテヌク飯ニカケ食フナリ此鯛ノ肉ハ生ニテ汁ニ混ジアルナリ）
枝豆　アゲモノ一　カン詰ノ鳳梨
母廣徳寺前ニテ罌粟石竹等ノ種五六袋買フテ歸ル（罌粟ハ余ノ所望ナリ）オミヤゲ焼栗一袋（十個入二錢）ハ上野廣小路六阿彌陀へ參ラレシ歸リ門前ノ露店ニテ求メラレタリト余、何故ニモスコシ多ク買ハレザルカト問ヘバ餘リニ高キ故ナリト
東京ノ婦女子時ニ神詣寺參ナドト稱ヘテ出歩行クハ多ク料理屋ニテ飯クフカ少クトモ蕎麥屋汁粉屋位ノオゴリハスルナリ手土産ヲ持チ歸ルハイフ迄モナシ田舍者ハサル贅澤ヲ知ラズ内ノ者ナドタマヽ出歩行クモ淺草ナラバ仲店ヲ見物シテ一錢カ二錢ノ花簪一二本買フ位ニ過ギズ其簪何ニスルト問ヘバ國ノ誰ソレニ送ルナリトソンナ簪ワザヽヽ三百里ノ道ヲ送ラズトモ松山ニモイクラモアルベシトイヘバサニアラズ江戸土産トイヘバ善惡ニ拘ラズウレシキコト子供ノ時覺エアリトヤサシキ心ガケ、生活ノ程度ハマダコンナ者ナリ
淨名院（上野ノ律院）ニ出入ル人多ク皆絲瓜ヲ携ヘタリトノ話、絲瓜ハ咳ノ薬ニ利クトカニテオ呪デモシテモラフナラン蓋シ八月十五日ニ限ルナリ
月無シ
ホトヽギス十二號來ル

九月二十八日　曇
例ノ如ク湯婆ヲ入レル
朝飯　ヌク飯三ワン　ハゼ佃煮　ナラ漬
牛乳　菓子パン
便通及繃帶
午飯　マグロノサシミ　粥三ワン　ミソ汁　實ハ葱　アミノ佃煮　鰹ノ佃煮　梨一　葡萄廿粒
間食　牛乳　菓子パン　鹽センベイ　カン詰鳳梨　林檎一
便通　體溫卅七度六分
夕飯　鰈一尾（十四錢）　粥三ワン　焼茄子　アミ佃煮　蝦佃煮　ブダウ一フサ　ヤキイモ
鼻糞ヲセヽル鼻血出ル
午後秀眞芳雨二人來ル二三日前函館ヨリ歸リシトナリ
函館ノ展覽會ハ損ニナリタルヲ土地ノ賛助員ニ出シテモラフテ事スミタリト青森ノ林檎一籃オミヤゲニモラフ（茂春ト三人連名）
イザヨヒモ月出ズ
門附表ヲ流シテ通ル
サツマ芋ヲ焼イテモラフテ食フ
此夜蚊帳ヲツラズ
二ツ三ツ蚊ノ來ル蚊帳ノ別カナ
蚊帳ツラデ畫美人見ユル夜寒カナ

九月二十九日　曇　湯婆ト懐爐ヲ入レル
便通及繃帶
寒暖計　六十七度

朝飯　ヌク飯四ワン　アミ鰕佃煮　ナラ漬
午飯　サシミ　粥三ワン　ミソ汁　佃煮　ナラ漬
　　牛乳五勺コヽア入　菓子パン
　　牛乳五勺コヽア入　菓子パン　梨一　リンゴ一
間食　菓子パン　鹽センベイ　紅茶一杯半
夕　體温卅七度三分
　　鰻飯一鉢（十五錢）飯軟カニシテ善シ
　　芋　糠味噌漬
夜便通

把栗來ル　長州ヘ行キ且ツ故郷ニ行キテスグ歸ルトナリ細君孕ミシトナリ男子生ルベシトノ豫言ナリ天津ヨリ來リシ押繪一枚産屋ノカザリニト贈ル

午飯ノトキサシミ惡ク粥モ汁モ生ヌルクテ不平ニ堪ヘズ牛乳ナドイロヽヽ貪ル

イリタテオ豆食ヒタシ

「ホトヽギス」ニアル文ノ中碧梧桐ノ「富士ノ頂上」ハ作者ノ手柄ト見ルベキトコロハ無ケレド場所ガ場所ダケニ富士ヲ知ラヌ我等ニハ面白ク讀マレタ但結句ハ非常ニマヅイ四方太ノ墓參ハ拙ノ又拙ナル者ヂヤ四方太ハ主觀的懷舊談トデモ云フベキ者ヲ書クトイツデモ失敗スル此前ニ洪水ノ懷舊談ヲヤツテ其時モ失敗シタ四方太先生チトシツカリシタマヘ餘リ凝リ過ギテ近來出來ガ惡イヂヤナイカ若シ又體ガ衰弱シテ居ルナラバシツカリ御馳走ヲ食ヒタマヘ把栗君デサヘ子ヲ生ムトイフヂヤナイカ扨紅緑ノ「下駄ノ露」ハ「富士ノ頂上」ト同ジク作者ノ工夫ハ見エヌ併シ寫生ニ行カレタ御苦勞ハ受ケ取レル若シ吉原十一時トイフヤウニ完成シタラバ面白カラウ此「下駄ノ露」（コレハ吉原ノ朝ヲ寫シタルモノ）ニ就イテ思ヒ出シタコトガアル

アルトキ一念ニ伴ハレテ角海老ニ遊ンダ次ノ朝一念ハ居續ケスルトイフノデ蒲團カブツテ相方トサシ向ヒデウマサウニ豆腐カ何カ食ツテタカラ自分ハ獨リ茶屋ヘ歸ツテ其二階カラシバラク往來ヲ見テ居タスルト其時横町カラ出テ病院ヘデモ行クノデアラウト思ハレル女ガ二人頭ハ大シヤグマ、美シキ裲襠著テ靜カニ竝ンデ歩行ク後姿ニ今出タバカリノ朝日ガ映ツテ龍カ何カノ刺繡ガキラヽヽシテ居ル之ヲ見テ始メテ善イ氣持ニナツタ吉原デ淸イ美シイ感ジガ起ツタノハ此時バカリダ

夜ニ入ツテ呼吸苦シ

　芋ノ湯氣團子ノ露ヤ花芒
　蟲ノ音ノ少クナリシ夜寒カナ
　十三四五六七夜月ナカリケリ

先刻把栗ヨリ話アリ其時「日本」文苑ノ俳句ヲ出ス事ヲ約ス夜一日分ダケ送ル

コンナニ呼吸ノ苦シイノガ寒氣ノタメトスレバ此冬ヲ越スコトハ甚ダ覺束ナイソレハ致シ方モナイコトダカラ運命ハ運命トシテ置イテ醫者ガ期限ヲ明言シテクレヽバ善イモウ三ケ月ノ運命ダトカ半年ハムツカシイダラウトカ言フテモラヒタイ者ヂヤソレガキマルト病人ハ我儘ヤ贅澤ガ言ハレテ大ニ樂ニナルデアラウト思フ死ヌル迄ニモウ一度本膳デ御馳走ガ食フテ見タイナドト云フテ見タトコロデ今デハ誰モ取リアハナイカラ困ツテシマフ若シコレデモウ半年ノ命トイフコトニデモナツタラ足ノダルイトキハ十分按摩シテモラフテ食ヒタイトキニハ本膳デモ何デモ望ミ通リニ食ハセテモラフテ看病人ノ手モフヤシテ一擧一動悉ク傍ヨリ扶ケテモラフテ西洋菓子持テ來イトイフトマダ其言葉ノ反響ガ消エヌ内西洋菓子ガ山ノヤウニ目ノ前ニ出ルカン詰持テ來イトイフト言下ニカン詰ノ山ガ出來ル何デモ彼デモ言フ程ノ者ガ疊ノ縁カラ湧イテ出ルトイフヤウニシテモラフ事ガ出來ルカモ知レナイ

體温ヲ測ツテ見ル先刻ト同ジ（卅七度二分）
寒暖計モ朝ト同ジ（六十七度）

九月三十日　晴

朝　ヌク飯三ワン　佃煮二種　奈良漬（茄子）
牛乳五勺　菓子パン　鹽センベイ
午　カジキノサシミ　粥三ワン　ミソ汁　實ハ茄子　ナラ漬　林檎一ケ半
便通及ホータイ取替
體温卅七度二分
夕　鯖一切（十錢）　小松菜ヒタシモノ　ナラ漬（瓜）　粥三ワン　葡萄一フサ
夜　菓子パン

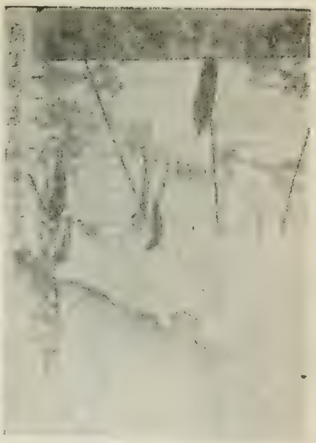
昨夜十二時過ヤウヽヽ眠ル
眠リサム上野ノ梟鳴クドコヤラノ飼鶴鳴ク牛乳ノ車通ル鄰ノ時計四時ヲ打ツ
明方僅ニ眠ル睡眠足ラズ
午後大我來ル文苑俳句ノ事出雲ヘ旅行ノ事敏捷ナ小キ鴫ガ打テヽモ鈍ナ大キナ雉ガ打テヌ事ナド話ル
寢床ヲ暫ク座敷ニ移シテ病室ヲ掃除ス
今日モ息苦シ

中田氏新聞社ヨリノ月給（四十圓）ヲ携ヘ來ル
明治二十五年十二月入社月給十五圓。二十六年一月ヨリ二十圓　二十七年初新聞小日本ヲ起シコレニ關スルコトトナリ此ヨリ卅圓　同年七月小日本廢刊「日本」ノ方ヘ歸ル同樣　卅一年初四十圓ニ増ス此時ハ物價騰貴ノタメ社員總テ增シタルナリ

余書生タリシトキハ大學ヲ卒業シテ少クトモ五十圓ノ月給ヲ取ラント思ヘリ其頃ハ學士トリツキノ月給ハ醫學士ノ外ハ大方五十圓ノキマリナリキ其頃ノ五十圓トイヘバ今日ノ如ク物價ノ高キトキノ五十圓ヨリハ値打多カリシナラン扨余ガ書生時代ノ學費ハトイフニ高等中學在學ノ間ハ常盤會ノ給費毎月七圓ヲモラヒ大學在學ノ間ハ同給費十圓ヲモラヒタリ（此頃ハ下宿料四圓位ガ普通ナリ）サレド大學ヘ入學以後ハ病身ナリシタメ故郷ヨリモ助ケテモラヒシ故一ケ月十三圓乃至十五圓位ヲ費シタリ然ルニ家族ヲ迎ヘテ三人ニテ二十圓ノ月給ヲモラヒシトキハ金ノ不足スルハイフ迄モナク故郷ヘ手紙ヤリテ助力ヲ乞ヘバ自立セヨト伯父ニ叱ラレサリトテ日本新聞社ヲ去リテ他ノ下ラヌ奴ニオ辭誼シテ多クノ金ヲモラハンノ意ハ毫モ無ク余ハアルトキ雪ノフル夜社ヨリノ歸リガケオ成道ヲ歩行キナガラ蟇口ニ一錢ノ殘リサヘナキコトヲ思フテ泣キタイ事モアリキ余ハ此時マダ五十圓ノ夢サメズ縱シ學士タラズトモ五十圓位ハ譯モナク得ラルヽモノト思ヘリサレド新聞社ニテハ非常ニ余ヲ優遇シアルナリ余ハ斯クテ金ノ爲ニ一方ナラズ頭ヲ痛メシ結果遂ニ書生ノトキニ空想セシ如ク金ハ容易ニ得ラルヽ者ニ非ズ五十圓ハオロカ一圓二圓サヘ之ヲ得ル事容易ナラズ否一錢一厘サヘオロソカニ思フベキニ非ズコハ余ノミニ非ズ一般ノ人モ裏面ニ立チ入ラバ隨分困窮ニ陷リ居ル者少カラヌヤウナリ五十圓ナド到底吾等ノ職業ニテハ取レル者ナラズトイフコトヲ了解セリ金ニ對スル余ノ考ハ此頃ヨリ全ク一變セリ此ヨリ以前ニハ人ノ金ハオレノ金トイフヤウナ財産平均主義ニ似タ考ヲ持チタリ從ツテ金ヲ輕蔑シ居リシガ此ヨリ以後金ニ對シテ非常ニ恐ロシキヤウナ感ジヲ起シ今迄ハ左程ニアラザリシモ此後ハ一二圓ノ金トイヘドモ人ニ貸セトイフニ躊躇スルニ至リタリ

三十圓ニナリテ後ヤウヽヽ一家ノ生計ヲ立テ得ルニ至レリ今ハ新聞社ノ四十圓トホトヽギスノ十圓トヲ合セテ一ケ月五十圓ノ收入アリ昔ノ妄想ハ意外ニモ事實トナリテ現レタリ以テ滿足スベキナリ

夕顔ノ實ニ富ヲ得シ話カナ　（宇治拾遺）



（右圖は病室前ノ絲瓜棚（臥シテ見ル所）の圖）

雞頭ヤ絲瓜ヤ庵ハ貧ナラズ

夜徃菓子パン買ヒニ行ク其ツイデニ文苑俳句ノ原稿ヲ郵便ニ出ス

破垣ニ灯見ユル家ノ夜寒カナ

此月ノ拂ヒノ内

○一圓六十九錢五厘　油、薪
○六圓十五錢　魚（サシミ一皿十五錢乃至二十錢）
○三圓四十五錢　車及使（内水汲賃一圓半）
○三圓七十三錢一厘　八百屋
○一圓四十八錢五厘　牛乳
○三圓　米
○一圓五十二錢　醤油、味噌、酢
○一圓十一錢　炭
○一圓七十八錢　菓子、砂糖、氷（付落澤山アリ）
○二圓三十錢二厘　現金拂飲食費（付落澤山アリ）（鰻、鮨、西洋料理、佃煮、八百屋物等）
○六圓五十錢　家賃

計三十二圓七十二錢三厘

十月一日　晴

朝　ヌク飯三ワン　佃煮　ナラ漬
便通及ホータイトリカヘ
牛乳五勺ココア入　菓子パン

午　マグロノサシミ　粥三ワン　ミソ汁　ナラ漬　林檎一　ブダウ一フサ
牛乳五勺ココア入　菓子パン
便通ヤヽ堅シ

晩　親子丼（飯ノ上ニ鶏肉ト卵ト海苔トヲカケタリ）　焼茄子　ナラ漬　梨一　苹果一

九時眠ル

今日ハ逆上ヤヽ強シ水ニテ額ヲ冷ス

母神田へ薬取及買物ニ往テ午後三時頃歸ル

○

朝寒ヤ鼻血オサヘシ旅ノ人

松蕈ヤ思ヒ出デタル古人ノ句

綻處ヲカヘタル蚊帳ノ別カナ

秀調死セシヨシ

病牀

惡ノ利ク女形ナリ唐辛子

痩骨ヲサスル朝寒夜寒カナ

夜陸翁來ル支那朝鮮談ヲ聞ク曰ク支那ノ金持ハ贅澤ナリ曰ク北京ノヤウナ何ノ束縛モナキ處ニ住ミタシ曰ク朝鮮ニテハ白イ衣ヲ山ノ根方ノ草ノ上ニ干スナリ持統天皇ノ歌ノ趣アリ日本人ハ昔朝鮮ヨリ來リシカノ心地セリ

十月二日　晴

朝　ヌク飯四ワン　ハゼ佃煮　ナラヅケ
牛乳五勺ココア入　菓子パン　塩センベイ
便通及繃帶トリカヘ

午　マグロノサシミ　粥三ワン　煮豆（黒豆トウヅラ豆）　ナラ漬　梨二ツ
牛乳　菓子パン

夕　雞肉タヽキ　卵一　ムシ飯三ワン　煮豆
　サシミノ殘　梨一

一兩日來左下横腹（腸骨カ）ノトコロイツモヨリ痛ミ強クナリシ故ホータイ取替ノトキ一寸見ルニ眞黑ニナリテ腐リ居ルヤウナリ定メテ又穴ノアクコトナラント思ハル捨テハテタカラダドーナラウトモ構ハヌコトナレドモ又穴ガアクカト思ヘバ餘リイヽ心持ハセズコノコト氣ニカヽリナガラ午飯ヲ食ヒシニ飯モイツモノ如クウマカラズ食ヒナガラ時々涙グム

一念來ル話ハ新聞論ト林檎論

麓潮音二人來ル話ハ沼津論修善寺論（麓ノオミヤゲ雞肉タヽキ）

大原伯父ヨリ手紙ヨコサル中ニ大原祖父ノ京滯在中宿元ヘヨコサレタル古手紙入レアリ其中ニ

（畧）正岡にも去月十七日安産男子出生之由別而うれしき事に候‥‥八重儀あともけんきに候と相見日あきに參候よし大仕合に御座候小兒も丈夫に候得共少しちゝ付候よしどふぞ〳〵早くおなおり候様いのり候事に候‥‥一正岡うぶきもいかゞ相成候哉うけた（元ノマヽ）まり度候歸足之節は唐さらさ位のてんち與守り袋くらいにてすましたき積に御座候孫の名は何とつき候や正岡の紋はなにに候や御序御申越可被下候‥‥

十月八日夜　武右衛門

お重どの
佑之丞殿

（畧）子は澤山有之ても孫は又々別のものと見へ早く見度存事に候‥‥

ナドアリコレハ慶應三年ノコトニテ此手紙ニ孫トアルハ余ノコトナリ京ヨリ歸ラレシトキノオミヤゲハ守袋ナリシ由

不折ヨリ巴理著ノハガキ來ル下宿所

Grand Hôtel Soufflot 1 Rue Toullier C—F—

右間代五十法　食料百法　合計百五十法（七十五圓）ノ由日本人同宿九人ナリト

夜鼻血出ル水ニテ額ヲ冷ス

十月三日　晴

朝　便通
　麥飯三ワン　佃煮　ナラ漬
　牛乳五勺コヽア入　菓子パン小七箇

午　マグロノサシミ　粥三ワン　ミソ汁實ハ玉葱　ナラ漬　葡萄十八粒　梨一　苹果一
　牛乳　菓子パン　鹽センベイ　澁茶

一日間所見ノ動物

庭前ノ追込籠ニハカナリヤ六羽（雄四雌二）キンバラ二羽（雄）キンカ鳥二羽（雌雄）ジャガタラ雀一羽（雌）合セテ十一羽カナリヤ善ク鳴ク

○黄蝶二ツ匆々ニ飛ビ去ル　○秋ノ蠅一ツ二ツ病人ヲナヤマス　○蜂カ虻カ絲瓜棚ニ隱現ス

○揚羽ノ蝶絲瓜ノ花ヲ吸フ　○鳶四五羽上野ノ森ニ近ク舞フピーヒョロリピーヒョロリ　○蜻蛉一ツ絲瓜棚ノ上ヲ飛ビ過ギ去ル　○極メテ小キ蟲ヤヽ群レテ山吹ノ垣根アタリヲ飛ブ　○茶褐色ノ蝶最高キ雞頭ノ上ニトマリテ動カズ

○向家ノ犬吠ユ　○蜂一ツ追込籠ノ中ヲ飛ブ

午後ハ北側ノ間ニ寢床ヲ移シタル故此所見ハ中絶セリ又別ノ日ヲ選ンデヤルベシ

鼠骨來ル

午後逆上益々ハゲシ北側ノ四疊半ノ間ニ移ル額ヲ冷シ頭ヲ扇ギ只鼻血ノ出ンコトヲ恐ル

目痛ク續イテ新聞ヲ見ル能ハズ

半纏ノ料ノ足シ五十錢トイフコトニツキ論アリ

此後ハ逆上ノタメ筆ヲトラズ聊カ追記スレバ

四日鳴雪翁ホト、ギスヨリノ十圓ヲトドケラレ且ツホト、ギスニ就キ談ズル所アリ



（右圖は絲瓜棚の上を飛ぶ蝶の圖）

五日ハ衰弱ヲ覺エシガ午後フト精神激昂夜ニ入リテ俄ニ烈シク亂叫亂罵スル程ニ頭イヨイヨ苦シク狂セントシテ狂スル能ハズ獨リモガキテ益々苦ム遂ニ陸翁ニ來テモラヒシニ精神ヤヤ靜マル陸翁ツトメテ余ヲ慰メ且ツ話ス余モツトメテ話ス九時頃就寢シカモウマク眠ラレズ

六日（日曜）朝雨戸ヲアケシムルヨリ又激昂ス叫ビモガキ泣キイヨイヨ異狀ヲ呈ス十一時頃虚子四方太碧梧桐來ルコレハホト、ギスノ茶話會ヲ開クツモリニテハガキ出シ置キシ者ナルガ（鳴雪翁ヨリハコトワリ來ル）此始末ニテ目的ヤヤハヅレタリ虚子ノミヤゲ淡路町風月堂ノ西洋菓子各種、四方太ハバナナ、トレモン、碧梧桐ハ燒鮒トソラ豆ナリ今日ハ御馳走會デハナカリシニイヅレモヨリ持參アリ意外ノ事ナリ我内ノハマグロノサシミ、鰺ノ膾、鯛ノ吸物ナリ内ノ御馳走モ意外ノコトナリ

コンナコトデ夜迄話シテモラフ 晩飯ハ鰻飯ナリ其中ニ雞飯一ツアリ鬮引ニテ雞めし四方太ニアタル

夕方柳醫來ル

皆歸ル 眠薬ヲノミテ寐ルケロリカントシテ寐ラレズ翌午前三時ヲ過ギテ僅ニマドロム

七日朝睡眠不足ノタメ頭面白カラズ 碧梧桐來ル曰ク虚子來ル筈ナリシガ今朝午前三時過大畠ノ老婦歿シタルニヨリ來ラレズト 晝飯ヲクフテ歸ル

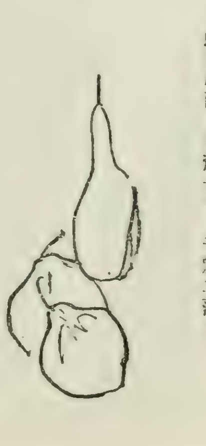
午後麓鶉亭ノ支那料理ヲ携ヘ來ル晩餐ヲ喫シテ歸ル書籍抵當談アリ

此日ハノボセサゲノ水藥ヲ三囘ノミ夜ハ眠藥ヲノンデヨク眠ル

前日來痛カリシ腸骨下ノ痛ミイヨイヨ烈シク堪ヘラレズ此日繃帶トリカヘノトキ號泣多時 イフ腐敗シタル部分ノ皮ガガーゼニ附著シタルナリト

背ノ下ノ穴モ痛ミアリ體ヲドチラヘ向ケテモ痛クテタマラズ

此日風雨 夕顏一ツ、干瓢二落ツ



十月八日 風雨

精神稍々靜マルサレド食氣ナシ

朝飯遲ク食フ 小豆粥二ワン ツクダ煮

昨日ノ支那料理ノ殘リ

牛乳 西洋菓子

午飯 サシミ 飯一ワン ツクダ煮 燒茄子

梨 ブダウ

牛乳 西洋菓子 シホセンベイ

便通トホータイ

晩飯 サシミ三四切 粥一ワン フデ豆

梨 ブダウ レモン
來客ナシ

十月九日
昨夜服薬セザリシモ熟睡九時過目サム
朝飯 粥三ワン ツクダ煮 梅干
カキ三箇間食
午飯 飯一椀 サシミスコシ 無花果
牛乳五勺 西洋菓子間食
晩飯 雑炊半ドンブリ
午前鈴木氏柿ヲ携ヘ來ル、ハガキヲ出シテ秀眞氏ニ來テ貰フ、十時過來ル、油土ニテ母ノ顔ヲ作ル、三時過虚子來ル、夕刻宮本國手來ル
昨夜熟睡ノタメ朝來心地ヨシ唯雨晴レ俄カニ暑フ覺エタルタメスコシ逆上ス
（右九日分虚子記）
此日宮本醫來診ノトキ繃帯ヲ除イテ新シキ口及ビ背中尻ノ樣子ヲ示ス暫クブリノコトナリ醫ノ驚キト話トヲ餘所ナガラ聞イテ余モ驚ク病勢思ヒノ外ニ進ミ居ルラシ

十月十日 晴 晝來客ナシ
便通
朝飯 ヌクメシ三ワン ツクダ煮 梅干
牛乳 菓子パン
午飯 粥三ワン マグロノサシミ フヂ豆
柿二
間食 サツマイモヲ焼キタル 葡萄
夕飯 ——エキス一皿 フキナマス 粥一ワン 大根ドブ漬
體温 三十八度七分 夜葡萄ヲクフ
黒眼鏡ヲカケテ新聞ヲヨム雑誌ヲヨム
午後少シバカリ頭ヲ扇ガス
余ノ内ヘ來ル人ニテ病氣ノ介抱ハ鼠骨一番上手ナリ鼠骨ト話シ居レバ不快ノトキモ遂ニウカサレテ一ツ笑フヤウニナルコト常ナリ彼ハ話上手ニテ談緒多キ上ニ調子ノ上ニ一種ノ滑稽アレバツマラヌコトモ面白ク聞カサルヽコト多シ彼ノ觀察ハ細微ニシテ且ツ記憶力ニ富メリ其上ニ彼ハ人ノ話ヲ受ケツグコトモ上手ナリ頃日來逆上ノタメ新聞雑誌モ見ラレズヤヽモスレバ精神錯亂セントスル際此鼠骨ヲ缺ケルハ殘念ナリ鼠骨ハ今鑛毒事件ノタメ出張中ナリ
夜碧梧桐來ル林檎葡萄一籃ヲモタラス余曾テ林檎ノ名ヲ知リタシトイヘルニヨリ名ヲ聞キ來レリト直ニリンゴノ上ニ名ヲ記シ置カシム
満紅（最モウマキ者ナリト） 大和錦 吾妻錦
松井（最大ナル者） 岡本 紅シボリ ホウラン（黄）
鳴雪翁ガ先日ノ茶話會ノ結果ヲ聞キニ來ラレシコトナド碧梧桐話シ話頭紅緑ノ上ニ移ル紅緑ハコレ迄世上ニテトカク善カラヌ噂アリタレド俳句ニ於ケル紅緑ハ全ク別人ノ如ク清淨無垢ナリシカバ吾等モドコ迄モ清淨無垢ノ人トシテ相當ノ敬禮ヲ盡シタリ然ルニ此頃紅緑ノ擧動ナド人ヅテニ聞ク所ニヨレバ俗界ノ紅緑ハ俳句界ノ紅緑ト混和シテ世ノ中ニ立タントスルガ如シコレ紅緑人格ノ上ニ一段ノ進歩ナルベキモ俳句界ノ紅緑ハ多少ノ汚濁ヲ被ルヤモ測ラレズコヽ一大工夫ヲ要ス
繃帯ヲトリカヘテ眠ニツク

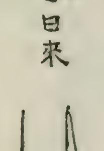
十月十一日 晴 體温卅八度七分
便通
朝 ヌク飯四ワン ハゼツクダ煮 梅干
牛乳 菓子パン 満紅（リンゴ）ヲ食フ
樽柿二ツ

十月十二日　晝挿雲來ル話ナシ飄亭來ル夕虛子來ル雜用借用高略ヽ定マル
便通三度

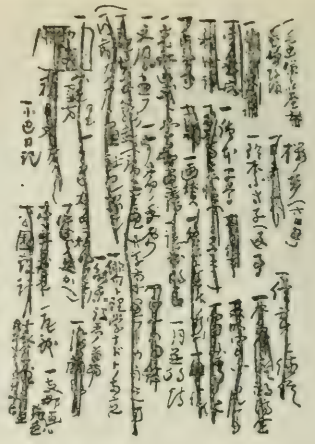
十月十三日　大雨恐ロシク降ル　午後晴
今日モ飯ハウマクナイ晝飯モ過ギテ午後二時頃天氣ハ少シ直リカケル律ハ風呂ニ行クトテ出テシマフタ母ハ默ツテ枕元ニ坐ツテ居ラレル余ハ俄ニ精神ガ變ニナツテ來タ「サアタマランタマラン」「ドウシヨウ〳〵」ト苦シガツテ少シ煩悶ヲ始メルイヨヽヽ例ノ如クナルカ知ラント思フト益ヽ亂レ心地ニナリカケタカラ「タマランタマラン」「ドウシヨウ〳〵」ト連呼スルト母ハ「シカタガナイ」ト靜カナ言葉、ドウシテモタマランノデ電話カケウト思フテ見テモ電話カケル處ナシ遂ニ四方太ニアテヽ電信ヲ出ス事トシタ母ハ次ノ間カラ賴信紙ヲ持ツテ來ラレ硯箱モヨセラレタ直ニ「キテクレネギシ」ト書イテ渡スト母ハソレヲ疊ンデオイテ羽織ヲ著ラレタ「風呂ニ行クノヲ見合セタラヨカツタ」トイヒナガラ錢ヲ出シテ來テ「車屋ニ賴ンデコウ」トイハレタカラ「ナニ同ジ事ダ向ヘ迄往ツテオイデナサイ五十歩百歩ダ」トイフタ心ノ中ハ吾ナガラ少シ恐ロシカツタ「ソレデモ車屋ノ方ガ近イカラ早イダロ」トイハレタカラ「ソレデモ車屋ヂヤ分ラント困ルカラ」ト半バ無意識ニイフタ余ノ言葉ヲ聞キ棄テニシテ出テ行カレタサア靜カニナツタ此家ニハ余一人トナツタノデアル余ハ左向ニ寐タマヽ前ノ硯箱ヲ見ルト四五本ノ禿筆一本ノ驗溫器ノ外ニ二寸許リノ鈍イ小刀ト二寸許リノ千枚通シノ錐トハシカモ筆ノ上ニアラハレテ居ルサナクトモ時々起ラウトスル自殺熱ハムラヽヽト起ツテ來タ實ハ電信文ヲ書クトキニハヤチラトシテヰタノダ併シ此鈍刀ヤ錐デハマサカニ死ネヌ次ノ間ヘ行ケバ剃刀ガアルコトハ分ツテ居ルソノ剃刀サヘアレバ咽喉ヲ搔ク位ハワケハナイガ悲シイコトニハ今ハ匍匐フコトモ出來ヌ已ムナクバ此小刀デモノド笛ヲ切斷出來ヌコトハアルマイ錐デ心臟ニ穴ヲアケテモ死ヌルニ違ヒナイガ長ク苦シンデハ困ルカラ穴ヲ三ツカ四ツカアケタラ直ニ死ヌルデアラウカト色色ニ考ヘテ見ルガ實ハ恐ロシサガ勝ツノデソレト決心スルコトモ出來ヌ死ハ恐ロシクハナイノデアルガ苦ガ恐ロシイノダ病苦デサヘ堪ヘキレヌニ此上死ニソコナフテハト思フノガ恐ロシイソレバカリデナイ矢張刃物ヲ見ルト底ノ方カラ恐ロシサガ湧イテ出ルヤウナ心持モスル今日モ此小刀ヲ見タトキニムラ〳〵トシテ恐ロシクナツタカラヂツト見テヰルトモカクモ此小刀ヲ手ニ持ツテ見ヨウト迄思フタヨツポド手デ取ラウトシタガイヤヽヽコヽダト思フテヂツトコラヘタ心ノ中ハ取ラウト取ルマイトノ二ツガ戰ツテ居ル考ヘテ居ル内ニシヤクリアゲテ泣キ出シタ其内母ハ歸ツテ來ラレタ大變早カツタノハ車屋迄往カレタキリナノデアラウ

逆上スルカラ目ガアケラレヌ目ガアケラレヌカラ新聞ガ讀メヌ新聞ガ讀メヌカラ只考ヘル只考ヘルカラ死ノ近キヲ知ル死ノ近キヲ知ルカラソレ迄ニ樂ミヲシテ見タクナル樂ミヲシテ見タクナルカラ突飛ナ御馳走モ食フテ見タクナル突飛ナ御馳走モ食フテ見タクナルカラ雜用ガホシクナル雜用ガホシクナルカラ書物デモ賣ラウカトイフコトニナル……イヤヽヽ書物ハ賣リタクナイサウナルト困ル困ルトイヨヽヽ逆上スル

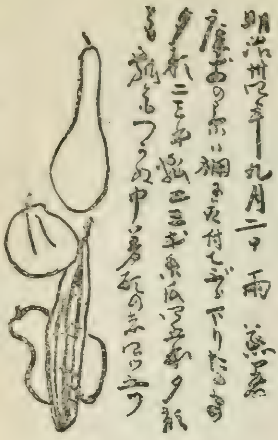
古白曰來



仰臥漫錄 二



（右圖は仰臥漫錄二の表紙裏）



（右圖の日記）

明治卅四年九月二日　雨　蒸暑

庭前の景ハ棚に取付てぶら下りたるもの夕顔二三本　瓢二三本　絲瓜四五本夕顔とも瓢ともつかぬ巾着形の者四ツ五ツ



（右圖の言葉）

女郎花眞盛　雞頭尺より尺四五寸のもの二十本許

再びしやくり上て泣候處へ四方太參りほとゝぎすの請金の話などいろ／＼不平をもらし候ところ夜に入りては心地はれ／＼と致一

申候

十月十四日誰も參り不申

十月十五日一昨夜寐られざりし故昨夜はよひの程より眠り申候　起きては眠り／＼とうとう夜明け候へば直に便通あり心地くるしく松山伯父へ向け手紙一通したゝめ申候

天下の人餘り氣長く優長に構へ居候はゞ後悔可致候

天下の人あまり氣短く取いそぎ候はゞ大事出來申間敷候

吾等も餘り取いそぎ候ため病氣にもなり不具にもなり思ふ事の百分の一も出來不申候

併し吾等の目よりは大方の人はあまりに氣長くと相見え申候

貧乏村の小學校の先生とならんか日本中のはげ山に樹を植ゑんかと存候

會計當而已矣　牛羊茁壯長而已矣　此心持にて居らば成らぬと申事はあるまじく候　吾等も死に近き候　今日に至りやう／＼悟りかけ申候やう覺え候　瘦我慢の氣なしに門番闕守夜廻りにても相つとめ可申候と存候　只時々の御慈悲には主人の殘肴きたなきはかまはず肉多くうまさうな處をたまはりたく候　食氣

ばかりはどこ迄も増長可致候
兆民居士の一年有半といふ書物世に出候よし新聞の評にて材料も大方分り申候居士は咽喉に穴一ツあき候由吾等は腹背中臀ともいはず蜂の巣の如く穴あき申候一年有半の期限も大概は似より候ことゝ存候併し居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけ吾等に劣り可申候理が分ればあきらめつき可申美が分れば楽み出来可申候杏を買ふて来て細君と共に食ふは楽みに相違なけれどもどこかに一點の理がひそみ居候焼くが如き晝の暑さ去りて夕顔の花の白きに夕風そよぐ處何の理窟か候べき

吾等なくなり候とも葬式の廣告など無用に候家も町も狭き故二三十人もつめかけ候はば柩の動きもとれまじく候
何派の葬式をなすとも柩の前にて弔辭傳記の類讀み上候事無用に候
戒名といふもの用ゐ候事無用に候曾て古人の年表など作り候時狭き紙面にいろ〳〵書き並べ候にあたり戒名といふもの長たらしくて書込に困り申候戒名などは無くもがなと存候
自然石の石碑はいやな事に候
柩の前にて通夜すること無用に候通夜するとも代りあひて可致候
柩の前にて空涙は無用に候談笑平生の如くあるべく候

昨来腹工合アシク今日ハ朝飯クハズ
電話ニテ虚子ヲ招ク来ル午後秀眞来ル
今夜ハホトヽギス事務所ニ山會アル筈ナレバ夕刻電信ニテ「ヤマクワイコイ」ト言ヒヤル碧梧桐一人来リシノミ

十月十六日　終日無客。秀眞来ル。ツトメテ話ヲ絶ヤサヌヤウニスル苦辛見エテ氣ノ毒ナリ

十月十七日　雨　朝鼠骨来ル　鑛毒地ヨリ歸レルナリ
午後碧梧桐来ル今日ハ神嘗祭ナリ夜紅緑来ルコレハ山會参會ノタメナリ今夜草廬ニテ山會アリトナリ虚子病氣ニテ来ラズ使ヲヨコシテ山會ヘブダウ余ヘ雲丹ト「一年有半」ヲ贈リ来ル碧梧桐ハ余ヘ先日ノト異ナルリンゴナリトテ金太郎トツコーノ二種及ビブダウヲ贈ル
碧梧桐ヲシテ山會ノ文二篇（虚子ノ停車場茶屋ト碧梧桐ノ紀行矢口渡）ヲ讀マシム
此夜頭腦不穏頻リニ泣イテ已マズ三人ニ歸ツテモラヒ糞シテ睡リ薬ヲ呑ンデ眠ル（下痢ヤマズ毎日三四度便通アリ）

十月十八日　雨　昨夜睡リ得ズ今朝平穏ナリ
終日無客、新聞ナドアラマシ見ル夜「一年有半」ヲ見ル
秀眞雨ヲ犯シテ来ル
朝　便通　朝飯ナシ　朝寒暖計六十度以下
牛乳五勺ココア入　菓子パン
便通及ホータイカヘ
午　マグロノサシミ　粥三ワン　茄子　大ハゼノ佃煮（昨日蒼苔ノ贈ル所）　ブダウ
晩　サシミノ残リ　松蕈飯三ワン　蒸松蕈
大ハゼ　無花果二ツ　夜、梨一ツ
松蕈ハ余ノ注文ニテ母ハワザヽヽ雨中ヲ買ヒニ出ラレシナリ
今日ハ週報俳句（波ヲ閲ス）
鼠骨車ニテ来ル十一時頃車ニテ歸ル秀眞泊ル
便通後眠ル

十月十九日　雨、便通、秀眞去ル、又便通、繃帶取替、午飯、マグロノサシミ、粥四ワン、大ハゼ三尾、リンゴ一ツ

十六七歳頃ノ余ノ希望ハ太政大臣トナルニアリキ上京後始メテ哲學トイフコトヲ聞キ哲學程高尚ナル者ハ他ニ無シト思ヒ哲學者タランコトヲ思ヘリ後又文學ノ末技ニ非ルヲ知ルヤ生來好メルコトトテ文學ニ志スニ至レリシカモ此間理論上大臣ヲ輕視スルニ拘ラズ感情上何トナク大臣ヲ無上ノ榮職ノ如ク考ヘタリ然ルニ昨年以來此感情全クヤミ大臣タルモ村長タルモ其處ニ安ンジ公ノタメニ盡スニ於テ一毫ノ輕重ナキヲ悟リタリ

今日余若シ健康ナラバ何事ヲ爲シツヽアルベキカハ疑問ナリ文學ヲ以テ目的トナストモ飯食フ道ハ必ズシモ之ト關係ナシ若シ文學上ヨリ米代ヲ稼ギ出スコト能ハズトセバ今頃ハ何ヲ爲シツヽアルベキカ

幼稚園ノ先生モヤッテ見タシト思ヘド財産少シナクテハ余ニハ出來ズ造林ノ事ナドモ面白カルベキモ其方ノ學問セザリシ故今更山林ノ技師トシテ雇ハルヽノ資格ナシ自ラ山ヲ持ッテ造林セバ更ニ妙ナレド買山ノ錢無キヲ奈何

晩飯サシミノ殘リト裂キ松蕈

此日便通凡五度、來客ナシ

十月二十日　晴　鼠骨來ル加藤叔父來ラル午後虛子來ル

朝便通、朝飯ナシ、牛乳五勺紅茶入　ビスケット

午飯三人共ニ食フ、サシミ、豆腐汁、柚味噌、ヌク飯三ワン　リンゴ一ツ

牛乳五勺紅茶入　ビスケット　煎餅

三河ノ同樂ヨリ松蕈、小松ノ森田某ヨリ柿ヲ送リ來ル

同樂ノ手紙ニ曰ク

過般日本紙上墨汁一滴やみ又俳句も不出相成候節は誠に落膽致候俳しました週報に御選之句出候故聊か力を得候へども小生は若し御訃音之廣告出候かと日本來ることに該欄を眞先に披見致居候……

眞率ニシテ些モ隱サヾル處太ダ愛スベシ

晩餐虛子ト共ニス鰻ノ蒲燒、フヂ豆、柚ミソ、飯一ワン　粥二ワン　柿二ツ　無花果二ツ

夕刻前便通及ビホータイ取替、夜便通

十月二十一日　客無シ夜ニ入リテ癇癪起ラントス病牀ノ敷蒲團ヲ取リ代フルコトニヨリテ癇癪ヲ欺キ了ル

十月二十二日　午後鼠骨來ル中村某ヨリ松蕈一籃ヲ送リ來ル

十月二十三日　午後いもヲ燒イテ喰ヒツヽアルトキ田中某來ル手土産ビスケット

河東繁枝子來ル手土産鮭ノ味噌漬二切

左千夫來ル手土産葡萄一籃、外ニ蕨眞ヨリノ屆ケモノ栗一袋、左千夫ハ房州ヲ旅シテ歸レルナリ上總ノ海邊ノ砂(中ニ小キ赤キ珊瑚マジル)及ビ阿房神社ノオ札ヲ携ヘ來ル

夕刻大阪ノ文淵堂主人來ル手土産奈良漬一桶

左千夫ト共ニ晩餐ヲ喫ス繁枝子ニモ次ノ間ニ於テ同ジ晩餐ヲ出スラシ

夜秀眞來ル故鄕ヨリ携ヘ來レリトテ手土産柿二種(江戶一及ビ百日)　マルメロ三箇

男女ノ来客アリシ故此際ニ例ノ便通ヲ催シテハ不都合イフベカラザル者アルヲ以テ余ハ終始安キ心モナカリシガ終ニコラヘオホセタリ夜九時過衆客皆散ジテ後直ニ便通アリ山ノ如シ
赤黄緑三色ノ木綿ヲ縫ヒ合セテ財布ヲ作ル之ヲ頭上ノ力綱ニ掛ク中ニ二十圓アリコレ今月分ノ余ノ雑用トシテ虚子ヨリ借ル所

十月二十四日

朝 便通
牛乳一合 ビスケット
黒眼鏡ヲカケテ新聞ヲ見ル

午 マグロノサシミ 粥二ワン 里芋ヨキ芋ナリ
ナラ漬 柿二ツ

巡査来リ玄關ニテ、夜間戸締ノ注意ヲナス聲聞ユ「ソーデスカ三人デスカ雇人ハ居マセンカ」大聲ヲ殘シテ歸リ去ル
虚子来ル焼栗ヲ食フ虚子余ノ俳稿（新聞ノ切抜）ヲ携ヘ去ル

晩 便通及繃帯取替
サシミノ残リ 飯二ワン 茄子 松蕈
鮭ノ味噌漬 支那麪（過日叔父ノ恵マレシモノ）
ナラ漬 葡萄一房 柿一ツ

不折細君柿苹果ヲ贈リ来ル
夜九月十三夜ナリ庭ノ蟲聲猶全ク衰ヘズ月ハ薄曇ナリト夜半ヨリ雨

十月二十五日　曇

朝便通及ホータイ替
牛乳五勺砂糖入 ビスケット 鹽センベイ

午 マグロノサシミ 飯二ワン ナラ漬 柿三ツ
牛乳五勺 ビスケット 鹽センベイ

晩 栗飯一ワン サシミノ残リ 裂キ松蕈
ナラ漬 澁茶一ワン

夜 便通山ノ如シ

加賀ノ洗耳ヨリ大和柿一籃ヲ贈リ来ル
客ナシ
週報募集俳句歌（題蚯蚓鳴）ヲ閲ス

「一年有半」ハ淺薄ナコトヲ書キ並ベタリ死ニ瀕シタル人ノ著ナレバトテ新聞ニテホメチギリシタメ忽チ際物トシテ流行シ六版七版ニ及ブ近頃「二六新報」へ自殺セントスル由投書セシ人アリ其人分リテ忽チ世ノ評判トナリ自殺セズニスムノミカ金三百圓程品物若干ヲ得且ツ烟草店迄出シテヤロトイフ人サヘ出来タリ「一年有半」ト好一對

余モ最早飯ガ食ヘル間ノ長カラザルヲ思ヒ今ノ内ニウマイ物デモ食ヒタイトイフ野心頻リニ起リシカド突飛ナ御馳走（例、料理屋ノ料理ヲ取リヨセテ食フガ如キ）ハ内ノ者ニモ命ジカヌル次第故月々ノ小遣錢俄ニホシクナリ種々考ヲ凝ラシヽモ書物ヲ賣ルヨリ外ニ道ナクサリトテ賣ル程ノ書物モナシ洋紙本ヤラ端本ヤラ賣ツテ見タトコロデ書生ノ頃ベタヽヽト捺シタ獺祭書屋藏書印ヲ誰カニ見ラルヽモ恥カキナリトサマカウサマ考ヘタ末終ニ虚子ヨリ二十圓借ルコトヽナリ已ニ現金十一圓請取リタリコレハ借錢ト申シテモ返スアテモナク死後誰カ返シテクレルダロー位ノコトナリ誰モ返サヾルトキハ家具家財書籍何ニテモ我内ニアル者持チ行カレテ苦情ナキ者也トノ證文デモ書イテオクベシ

右ノ如ク死ニ瀕シテ余モ二十圓ヲ得タルヲ思ヘバ「一年有半」ヤ烟草屋ヲ儲ケ出シタル投書家程ノ手際ニハ行カザリシモ余ニシテハ先ヅ上出来ノ方ナリ併シイヅレモ生命ヲ賣物ニシタルハ卑シ

病牀ノ財布モ秋ノ錦カナ
粟飯ヤ病人ナガラ大食ヒ
カブリツク熟柿ヤ髯ヲ汚シケリ
驚クヤ夕顔落チシ夜半ノ音

十月二十六日 晴

朝 粥ニ牛乳カケテ三椀 佃煮 奈良漬
便通及繃帶取替
午 雞鍋 卵二ツ 飯一碗 味噌汁實は薩摩芋
柿三ツ 奈良漬
晩 雞肉タヽキ サシミ 柿ナド
夜 澁茶 ビスケツト等
眠ラレズ

女客二人アリ。
午後碧梧桐來ル。手土産雞肉タヽキ。外ニ古渡更紗ノ財布ニ金二圓入レテ來ル。約束ナレバ受取ル。
石ノ巻鮑瓜ヨリ生鮭一尾送リ來ル。
夜鼠骨來ル。

此頃ノ容體及ビ毎日ノ例

病氣ハ表面ニサシタル變動ハナイガ次第ニ體ガ衰ヘテ行クコトハ爭ハレヌ。膿ノ出ル口ハ次第ニフエル、寢返リハ次第ニムツカシクナル、衰弱ノタメ何モスルノガイヤデ只ボンヤリト寢テ居ルヤウナコトガ多イ。

腸骨ノ側ニ新ニ膿ノ口ガ出來テ其近邊ガ痛ム、コレガ寢返リヲ困難ニスル大原因ニナツテ居ル。右ヘ向クモ左ヘ向クモ仰向ニナルモイヅレニシテモ此痛所ヲ刺激スル、咳ヲシテモコヽニヒヾキ泣イテモコヽニヒヾク。

繃帶ハ毎日一度取換ヘル。コレハ律ノ役ナリ。尻ノサキ最痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フスラ猶疼痛ヲ感ズル。背部ニモ痛キ箇所ガアル。ソレ故繃帶取換ハ余ニ取ツテモ律ニ取ツテモ毎日ノ一大難事デアル。此際ニ便通アル例デ・都合四十分乃至一時間ヲ要スル。

肛門ノ開閉ガ尻ノ痛所ヲ刺激スルノト腸ノ運動ガ左腸骨邊ノ痛所ヲ刺激スルノトデ便通ガ催サレタ時之ヲ猶豫スルノ力モナケレバ奥ノ方ニアル屎ヲリキミ出ス力モ無イ。只其出ルニ任スルノデアルカラ日ニ幾度アルカモ知レヌ。從ツテ家人ハ暫時モ家ヲ離レルコトガ出來ヌノハ實ニ氣ノ毒ノ次第ダ。

睡眠ハ此頃善ク出來ル。併シ體ノ痛ムタメ夜中幾度トナク目ヲサマシテハ又眠ルワケダ。

歯齦カラ出ル膿ハ右ノ方モ左ノ方モ少シモ衰ヘヌ。毎日幾度トナク綿デ拭ヒ取ルノデアルガ盡ノ弱ツテ居ル日ハ十分ニ拭ヒ取ラズニ捨テ置クコトモアル。

物ヲ見テ時々目ガチカヽヽスルヤウニ痛ムノハ年來ノコトデアルガ先日逆上以來愈ヽツヨクナツテ新聞ナドヲ見ルト直ニ痛ンデ來テ目ヲアケテ居ラレヌヤウニナツタ。ソレデ黒眼鏡ヲカケテ新聞ヲ讀ンデ居ル。

朝々湯婆ヲ入レル。熱出ヌ。小便ニハ黃色ノ交リ物アルコト多シ

食事ハ相變ラズ唯一ノ樂シミデアルガモウ思フヤウニハ食ハレヌ。食フトスグ腸胃ガ變ナ運動ヲ起シテ少シハ痛ム。食フタ者ハ少シモ消化セズニ肛門へ出ル。

サシミハ醬油ヲベタトツケテソレヲ飯又ハ粥ノ上ニカブセテ食フ。

佃煮モ飯又ハ粥ノ上ニ少シヅツ置イテ食フ。

歯ハ右ノ方ニテ噛ム。左ノ方ハ痛クテ噛メヌ。

朝起キテスグ新聞ヲ見ルコトヲヤメタ。目ヲイタハルノヂヤ。人ノ來ヌ時ハ新聞ヲ見ルノガ唯一ノヒマツブシヂヤ。

食前ニ必ズ葡萄酒（澁イノ）一杯飲ム。クレオソートハ毎日二號カフセルニテ六粒。

十月二十七日　曇

明日ハ余ノ誕生日ニアタル（舊暦九月十七日）ノ今日ニ繰リ上ゲ晝飯ニ岡野ノ料理ニ人前ヲ取リ寄セ家内三人ニテ食フ。コレハ細ノ財布ノ中ヨリ出タル者ニテイサヽカ平生看護ノ勞ニ酬イントスルナリ　蓋シ亦余ノ誕生日ノ祝ヒヲサメナルベシ　料理ハ會席膳ニ五品

○サシミ　マグロト　胡瓜　黄菊　山葵

○椀盛　莢豌豆　鳥肉　小鯛ノ燒イタノ　松茸

○口取　栗ノキントン　蒲鉾　車鰕　家鴨　煮當歸

○煮込　アナゴ　牛蒡　八ツ頭　莢豌豆

○香ノ物　[illegible]　昆布　煮杏　薑

午後蒼苔來ル。四方太來ル。

牛乳ビスケットナド少シ食フ晩飯ハ殆ド食ヘズ

料理屋ノ料理程千篇一律デウマクナイ者ハナイト世上ノ人ハイフ。サレド病牀ニアリテサシミバカリ食フテ居ル余ニハ其料理ガ珍シクモアリウマクモアル　平生臺所ノ隅デ香ノ物バカリ食フテ居ル時ヤ妹ニハ更ニ珍シクモアリ更ニウマクモアルノダ。

去年ノ誕生日ニハ御馳走ノ食ヒヲサメヲヤル積リデ碧四虚鼠四人ヲ招イタ。此時ハ余ハイフマニイハレヌ感慨ニ打タレテ胸ノ中ハ實ニヤスマルコトガナカツタ。余ハ此日ヲ非常ニ自分ニ取ツテ大切ナ日ト思フタノデ先ヅ庭ノ松ノ木カラ松ノ木ヘ白木綿ヲ張リナドシタ。コレハ前ノ小菊ノ色ヲウシロ側ノ雞頭ノ色ガ壓スルカラ此白幕デ雞頭ヲ隱シタノデアル。トコロガ暫クスルト曇リガ少シ取レテ日ガ鉢トサシタノデ右ノ白幕ヘ五六本ノ雞頭ノ影ガ高低ニ映ツタノハ實ニ妙デアツタ。

待チカネタ四人ハヤウヽヽ夕刻ニ揃フテソレカラ飯トナツタ。余ハ皆ニ案内狀ヲ出ストキニ土産物ノ注文ヲシテオイテ　ソレハ虚子ニ「赤」トイフ題ヲ與ヘテ食物カ玩具ヲ持ツテ來イトイフノデアツタガ虚子ハ、ニデ卵ノ眞赤ニ染メタノヲ持ツテ來タ。コレハニコライ會堂デヤルコトサウナ。鼠骨ハ「青」ノ題デ青蜜柑、四方太ハ「黄」ノ題デ蜜柑ト何ヤラト張子ノ虎トヲ持ツテ來タ。碧梧桐ハ茶色。余ハ白デアツタガ何ヤラ忘レタ。食後次第ニ話ガハズンデ來テ余ハ晝ノ間ノ不安心不愉快ヲ忘レル程ニナツタ。余ハ象ノ逆立ヤジラフノ逆立ノポンチ繪ヲ皆ニ見セウト思フテ頻リニ雜誌ヲアケテ居ルト四方太ハ張子ノ虎ノ鬚ヲヒネリ上ゲナガラ「獨逸皇帝ダ獨逸皇帝ダ、ナドト言フテ居ル。實ニ愉快デタマラナンダ。

ソレニ比ベルト今年ノ誕生日ハソレ程ノ心配モナカツタガ餘リ愉快デモナカツタ。體ハ去年ヨリ衰弱シテ寢返リガ十分ニ出來ヌ。ソレニ今日ハ馬鹿ニ寒クテ午飯頃ニハ余ハマダ何ノ食慾モナカツタ。ソレニ昨夜善ク眠ラレヌノデ今朝ハ泣カシカツタ。ソレデモ食ヘルダケ食フテ見タガ後ハ只不愉快ナバカリデ且ツ夕刻ニハ左ノ腸骨ノホトリガ強ク痛ンデ何トモ仕樣ガナイノデ只叫ンデバカリ居タ程ノ惡日デアツタ。

十月二十八日　雨後曇

午後左千夫來ル丈ノ低キ野菊ノ類ヲ横鉢ニ栽エタルヲ携ヘ來ル

鼠骨來ル

繃帶取換ノ際左腸骨邊ノ痛ミ堪ヘ難ク號泣又號泣困難ヲ極ム

此日ノ午飯ハ昨日ノ御馳走ノ殘リヲ肴モ鰕モ蒲鉾モ昆布モ皆一ツニ煮テ食フコレハ昨日ヨリ

モ卯テウマシオ祭ノ翌日ハ昔カラサイノウマキ日ナリ

晩餐ハ余ノ誕生日ナレバニヤ小豆飯ナリ鮭ノ味噌漬ト酢ノ物（赤貝ト烏賊）ノ御馳走ニテ左千夫鼠骨ト共ニ食フ

食後話ハズム余モイツモヨリ容易クシヤベル十時頃二人去ル

十月二十九日　曇

明治三十五年三月十日　月曜日　晴　日記ノ無キ日ハ病募ツ

午前七時家人起キ出ヅ昨夜俳句ヲ作ル眠ラレズ今朝ハ暖炉ヲ焚カズ

八時半大便、後腹少シ痛ム

同　四十分　麻痺剤ヲ服ス

十時　繃帯取換ニカヽル　横腹ノ大筋ツリテ痛シ

此日始メテ腹部ノ穴ヲ見テ驚ク　穴トイフハ小キ穴ト思ヒシニガランドナリ　心持悪クナリテ泣ク

十一時過　牛乳一合タラズ呑ム　道後煎餅一枚食フ

十二時　午餐　粥一碗　鯛ノサシミ四切　食ヒカケテ忽チ心持悪クナリテ止ム

午後一時頃　牛乳

始終ドコトナク苦シク、泣ク

午後四時過　左千夫蕨真二人来ル左千夫紅梅ノ盆栽ヲクレ蕨真鰯ノ鮓ヲクレル（クサリ鮓トイフ由）

五時　大便　蕨真去ル

晩飯　小田巻（饂飩）サシミノ残リ　腐リ鮓　金山寺味噌（長塚所贈）ウマク食フ

七時頃麻痺剤ヲ服ス

牛乳　煎餅　蜜柑　飴等

左千夫歌ノ雑誌ノ事ヲ話ス　九時頃去ル

夜

ソレヨリ寝ニ就ク睡眠善キ方ナリ

此頃ノ薬ハ水薬二種（一ハ胃ノ方、一ハ頭ノオチツクタメ）

三月十一日

朝ストーブヲ焚ク　大便　牛乳　十時朝飯

粥二碗　鯛ノサシミ七切程　味噌　腐鮓

蕗ノ薹ト梅干　蜜柑三ケ　十一時　牛乳　コヽアス入　煎餅一枚

十一時半　麻痺剤ヲ服ス　陸ノオマキサン梨数顆持テ来テクレル

午後一時半頃　繃帯取換

三時碧梧桐来ル　頭背痛殊ニ烈シク麻痺剤ヲ呑ム　秋竹山人来ル直ニ去ル

五時頃晩餐　ゴモク飯一碗　ヲダマキ　サシミノ残リ　鱈汁　鱈ト人参ノ煮物　九時頃

牛乳

夕方ヨリ碧梧桐妻来ル十時共ニ帰リ去ル

十一時過又痛烈シク起ル麻痺剤ヲ服ス

此頃ハ一日ノ牛乳三合必ズコヽアヲ交ゼル

三月十二日　晴　朝寒暖計五十度許　暖炉ヲ焚ク

午前十時頃新聞ヲ読マセル

十一時半　午餐サシミ（鯛）金山寺味噌　芹トアゲ豆腐　ジャガタラ芋　注文セシ「ヲダマキ」来ラズ

揷雲露子二人来ル瓢亭来ル

正午麻痺剤ヲ服ス　三人去ル

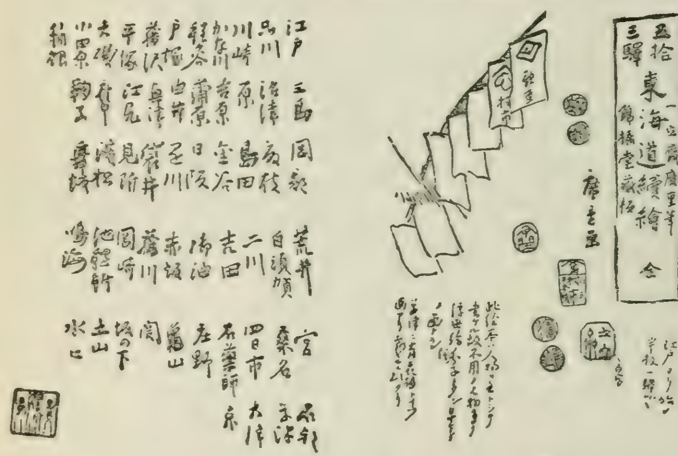
午後二時牛乳二杯　煎餅三四
繃帯取代　左ヘ寝戻リテヨリ背腰殊ニ痛ム
ウト、、スレド眠ラレズ
午後四時　フダマキ蒸饂飩　サシミ少々　陸
ヨリモラヒタル豆ノモヤシナド食フ
虚子来ル　ハム、ローフヲクレル
六時　ヌク飯ニワン　サシミノ残リ
談話　牛乳
十時　マヒ剤ヲ呑ム　虚子去ル

明治三十五年
麻痺剤服用日記

六月二十日（コレヨリ以前ハ記サズ）
正午　午後九時
六月二十一日
午後五時四十五分
六月二十二日
午前九時五分
六月二十三日
午前二時十五分
ソコツ　六月二十四日　雨　桑實長塚ヨリ、清水
峠筍、今成木公ヨリ
午前九時　午後六時二十分
キヨシ　六月二十五日　晴　盆栽ノ寫眞、岐阜三
浦某ヨリ。寫眞數枚古竹ヨリ。光琳百圖虚子
ヨリ
午前八時卅五分
六月二十六日　曇
午前八時
六月二十七日　雨　體温卅七度八分
午前六時　午後十時
六月二十八日　雨　梅影ヨリ澱粉三種（甘藷、
里芋、馬鈴薯）ヲ贈リ來ル
午前十時二十分　午後八時二十五分
六月二十九日　雨
午前九時
六月卅日　曇　體温卅七度二分
午前七時　午後七時二十分
七月一日　雨
午前八時半　午後五時二十五分
七　二日　曇、抱一畫（梅、水さし、ハサミ）
文鳳庵畫、櫻ノ實、忍川豆腐
午前八時半　午後七時十五分
七月三日　雨
午前七時　午後三時半
七月四日　晴　建氏畫苑、立齋百畫、狂詩
畫帖等小包ニテ來ル
午前四時過　午後四時
七月五日　曇　草花一鉢（麓ヨリ）茂春來
リ繪本二三十卷ヲ見セル
午前七時過　午後五時
七月六日　晴　來客八人、漁村、新甫、瓢亭、
四方太、豐泉、排村、村井某、森田義郎
午前八時頃　午後七時頃
七月七日　晴
午前八時半　午後
七月八日　晴
午前七時半　午後五時半
七月九日　晴　イワシコ、豆腐、
午前九時十五分　此日衰弱疲勞ノ極ニ
達ス
七月十日　雨　煽風器成ル
ノマズ
七月十一日　晴　始メテ蜩鳴ク
二度呑ム
七月十二日　晴　始メテ蟬鳴ク、茶ノ會席料
理デ碧梧桐、四方太、虚子會ス
午前八時　午後四時四十分
七月十三日　晴　鼠骨、熱サニ堪ヘズ、壽
子、鳴翁訪ハル

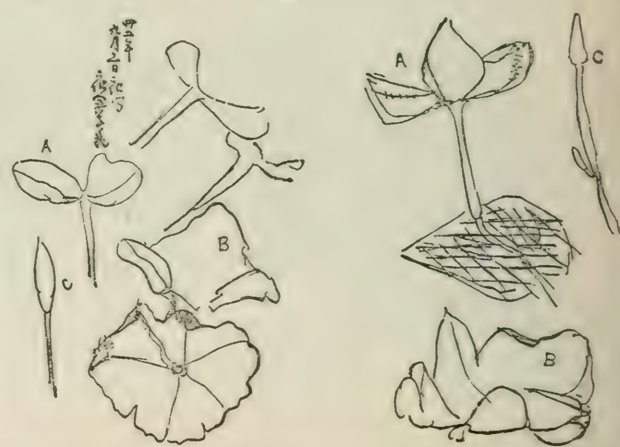
午前四時　午後三時過
七月十四日　小雨、懷中汁粉、碧梧桐番
午前二時　午後三時
七月十五日　晝曇夜雨、虚子番、
前二時　午後一時半　午後九時半
七月十六日　曇　義郎番
午後零時三十五分
七月十七日　曇　碧梧桐番　秀眞來
午前一時　午後零時三十分　午後八時半
七月十八日　曇　鼠骨番
午前九時半　午後五時半
七月十九日　虚子番　此日疲勞極點ニ達シ
折々
午前九時半
七月二十日　碧梧桐鼠骨來　正午疲勞稍々
回復
ノマズ
七月二十一日　曇　左千夫蕨眞來、月樵ノ
貍ノ畫ヲ見ル
午前十時
七月二十二日　晴　義郎番、如水子來
午前七時半
七月二十三日　雨
午前十時

七月二十九日　曇　左千夫番
午前十時卅五分



六月闔閭起八月走君王多謝柴
中佐不使敵遮牆
獨軍不知禮露軍不重名
粗食而愛國只有日本兵

（右ハ朝顔夜會草ノ花の寫生圖）





傘提灯　氷餅
紙人形
虎杖ト焼石
○日本青年會
○碁ノ手ト人物

煮兎憶諸友

下總の節のもとゆ贈り来し柔毛兎を厨刀音かつ〳〵と牛かひの左千夫がほふりふた股の太けきを煮て桐の舎と陽光そ食すあなうまそひらの肉の炙れるを病む我取らん残れるを秀眞もかもな家遠み呼ぶすべをなみもみち葉の赤木も悶もあはれ幸なし

段毀

おくられものゝ歌数首　病床六尺の中にあり

九月三日椀もりの歌　戯寄鄰翁

藪の海に汐みちくれは茗荷子の葉末をこゆる眞玉白魚

戯れに左千夫氏におくる（牛舎改築後洪水あり）

おほやけのみことかしこみ牛の爲に建てし小屋はもけふの水の爲

山林家蕨眞氏におくる

市に住めは水の患あり山を買へば火の患あり火の患君は

○くれなゐの梅散るなへに故郷につくしつみにし春し思ほゆ

わか病める枕邊近く咲く梅に鶯たかばうれしけむかも

○つくしこはうま人なれや紅に染めたる梅を絹傘にせる

梅の花散らはをしけん朝な夕な枕へ去らず目な乏しめそ

○家の内に風は吹かねどことわりに爭ひかねて梅の散るかも

○鉢植の梅はいやしもしかれとも病の床に見らく飽かなく

紅のこそめと見えし梅の花さきの盛りは色薄かりけり

ふゝめりし梅咲にけりさけれとも紅の色薄くしなりけり

○春されは梅の花咲く日にうとき我枕への梅も花咲く

枕へに友なき時は鉢植の梅に向ひて歌考へつゝ

梅の花見るにし飽かず病めりとも手震はすは畫にかゝましを

京の人より香菫の一束を贈り来しけるを

玉つさの君か使は紫の菫の花を持ちて来しかも

君か手につみし菫の百菫花むらさきの一たははや

やみてあれは庭さへ見ぬを花菫我手

にとりて見らくうれしも
うち日さす都の君の送り來し菫の花
はしをれてつきぬ
玉透のガラスうつはの水清み香ひ菫の
花よみかへる
わかやとの菫の花に香はあれと君か
菫の花に及ばぬ
土かひし君か菫は色に香に野への菫
に立まさりけり
一たひもいまた見なくにわかためにす
みれの花をつみし君かも
なくさもるすべもあれとか花菫色あ
せたれとすてまくをしも
小包を開きて見れは花菫その香にほ
ひてしをれてもあらす
言さへくとつ國種の花菫其香を淸み
嗅けとあかぬかも
まそ鏡直目に見ねと花菫つみておく
りし人し戀しも

碧梧桐赤羽根につく〳〵し
つみにと再び出てゆくに
赤羽根のつゝみに生ふるつく〳〵しの
ひにけらしもつむ人なしに

赤羽根の茅草の中のつく〳〵し老いほ
うけけりはむ人なしに
赤羽根に
日のくれてつみ殘したるつく〳〵し再
かん人つゝぬまに
び往きこつみて來にけり
赤羽根のつゝみにみつるつく〳〵し我
妹と二人つめと盡きぬかも
つく〳〵しひたと生ひける赤羽根にい
さ君も往け道しるへせな
赤はねの汽車行く路のつく〳〵し又來
む年も往きてつまなむ
うちなけき物なおもひそ赤羽根の汽車
行く路につく〳〵しつめ
痩せし身を肥えんすべもか赤羽根に生
ふるつく〳〵しつむにしあるべし
つく〳〵しつみて歸りぬ煮てやくはん
ひしほと酢とにひてゝやくはん
つく〳〵し長き短き何もかも老いし老
いさる何もかもうまき
つく〳〵し又つみに來む赤はねの汽車
行く路と人に知らゆな
つく〳〵し故鄕の野につみしことを思
ひいてけり異國にして
女等のわりこたつさへつく〳〵しつみ
にと出る春したのしも

みつから病中の像をつくりて
わか心世にしのこらはあら金のこの
土くれのほとりにかあらむ

近江日野なる鈴木ふさ子より
寒晒粉を贈りこしければ
近江のやいふきおろしにさらしたる米
の粉たひし君し戀しも

黑キマデニ紫深キ葡萄カナ
ナリ初メシ自家ノ葡萄ヲ侑メケリ
吹キ下ス妙義ノ霧ヤ葡萄園
盆栽ノ石榴實垂レテ落チントス
蓑蟲ノ鳴ク時蕃椒赤シ
朝顏ノ盛過ギタル施餓鬼カナ

男の子一人ほしといふ人に
代りて
桃太郎は桃金太郎は何からぞ
女の子ほしといふを
花ならは爪くれなゐやおしろいや

年ふけて修學する不幸女一
女郎花女なからも一人前

百宗類燒にかゝりて二萬卷
やきたりとかや
腹中に殘る暑さや一萬卷

大漁
十ケ村鰮くはぬは寺ばかり
日蓮の骨の辛さよ唐辛子
よべこゝに花火あげたる芒哉
大岩の穴より見ゆる秋の海
朝顏や我に寫生の心あり
草花を畫く日課や秋に入る
門川や机洗ふ子五六人
物洗ふ七夕川の濁り哉
洗ひたる机洗ひたる硯哉

丁堂和尚より南岳の百花
畫卷をもらひて朝夕手を放
さず
病床の我に露ちる思ひあり

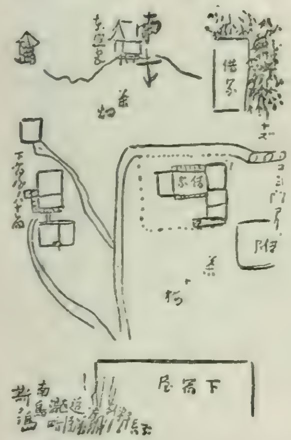
題畫
庭行くや露ちりかゝる足の甲

臥病十年
首あげて折々見るや庭の萩

親鸞讃
御連枝の末まで秋の錦哉

薩摩知覽の提灯といふを新
園にもらふたり
蟲取る夜運座戻りの夜更など

千里女子寫眞
桃の如く肥えて可愛や目口鼻
桃の實に目鼻かきたる如きかな
翡翠や芙蓉の枝に羽つくろひ
桃賣の西瓜食ひ居る木陰哉



法然讃
念佛に季はなけれとも藤の花

盆過の梅早く福壽草遲し

四十二
四辻やどちら向いても春の月

十二種
苗代や第一番は萬通寺?
猩々臙脂に何ませて見ん牡丹かな
氷屋の軒並べたる納涼哉

弘法讃
龍を叱す其御唾や夏の雨
よべこゝに花火あげたる芒かな
日蓮の骨の辛さよ唐辛子

大漁
十ケ村鰮くはぬは寺はかり

親鸞讃
御連枝の末まで秋の錦かな

傳教讃
此樹や秋を定めて一千年

日蓮讃
鯨つく漁夫ともならで坊主哉
鬼灯の行列いくつ御命講

西行
冬枯の中に錦を織る處
石蕗の花盛りに咲きて寺臭き

晋　其　角

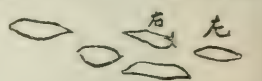
蓮の香も夕立つ方に醒し
明石より雷晴れて鮓の蓋
瓜守や桂の生洲絶えてより
いそのかみ清水なりけり手前橋
蟲はむと朽木の小町干されけり
蟻の歩み一萬句の塵あふきけり
姿か家螢に小唄告けやらん
伊勢にても松魚なるへし酒迎
早乙女に足洗はする嬉しさよ
涼みまて都の空や連と金
桐の花新渡の鸚鵡不言
草の戸やいつまて草のかび粽

召　波

日も暮ぬ人も歸りぬ水雞鳴く
凄哉競馬左右の鐙合
[illegible]まてと插りよせけり蚊帳の破
鞋のもの忘日ながらや蟲拂
茄子ありこゝ武藏野の道入口
茄子食一夏の僧をおとづるゝ

夏山ヤ嵐アラハレテ[illegible]
○[illegible]モアリ百合ナド咲イテ島ニテカ

○一列ニ十本バカリユリノ花
○隠ノ様家南向イテユリノ花
百姓ノ麥打ツ庭ヤユリノ花
○仲ビ足ラヌ百合ニ大キナ蕾カナ
○姫百合ヤ日本ノ女丈低シ
○百合ノ花田舍臭キヲ好ムナリ
百姓ノ土手ニ沿フテ百合ノ花
○百合持ツテ來タル田舍ノ使カナ
○宣教師ノ細君百合ヲ好ミケリ
花賣ノ親爺ニ問ヘバ鐵砲百合
○姫百合ヤ餘リ短キ筒ノ中
○六尺ノ百合三尺ノ土塀カナ
○用アリテ在所へ行ケバ百合ノ花



小照自題
蝸牛の頭もたけしにも似たり

病中作
消きた目をつゝきに來るか鳶の聲

謠曲熊坂
盗人の晝も出るてふ夏野かな
みしか夜や金商人の高いびき（此首[illegible]年ノ作）
夏草や吉次をねらふ小盗人
夏の月大長刀の光哉

選擧競爭
鹿を逐ふ夏野の夢路草茂る
すゝしさの皆打扮や袴能
風板引け鉢植の花散る程に
此日寒暑不定折柄淡雪とい
ふ菓子をもらひて即事
湯婆断で淡雪かむや今土用
芋蟲や女をおどす惡太郎
生きかへるなかれと毛蟲ふみつけぬ
毛蟲殺す毛蟲きらひの男哉
細川の酒醸りけり鮓の蓼
ラムネ屋も此頃出來て別莊地

夏夜　明ケ易　暑サ　涼シサ　炎天　五月晴
薫風　夏月　卯花下シ　五月雨　夕立　雲ノ
峰　青嵐
清水　夏山　夏野　夏川

扇　團扇　蚊帳　蚊遣　書簾　眞菰刈
田植　端午　幟　祭　祇園會　葵祭　行
水　涼　納涼　鵜飼　夏籠　夏書　更衣　袷
掛香　夏羽織　灌佛　日傘　御祓　鮓　新茶
淸水　氷室　氷水　粽　ハツタイ　煮酒
若葉　茂　常ハ木落葉　葉柳
橘　樗　栗花　石榴花　椎花　桐花
卯ノ花
夏橙、林檎　イチゴ　梅實　ユスラ梅　杏
李、バナナ、
ケシ　美人草　蓮花　花菖蒲　杜若　河骨
百合　牡丹　薔薇　茨　藻花　晝顏　夕顏
苔花　夏草　艸茂　蓮葉　筍　若竹　竹落葉
茄子　胡瓜　瓜　茄　早苗　麻
時鳥　カツコー　蝙蝠　雨蛙　蟇　行々子
翡翠　松魚　鮎　蝸牛　ナメクジリ
螢　蚊　蟬　蠅　蚋　火取蟲　蚤　孑孑　水
馬　鼓蟲
浴衣著テ田舍ノ夜店見ニ行キヌ
夜店ナル安夏帽ヤ買ヒガテヌ

夏ノ月京ハ夜店ノ灯カナ
言巧ニ蚤取粉賣ル夜店カナ
坂本ハ夏菊少シ夜店カナ
暑キ日ノ暮レテ著ク町ノ夜店カナ
氷屋ノ夜店出シタル始メカナ
腐リタル松魚ヲ照ス夜店カナ
夜店出テ鄙町夏シニギハヒヌ
閑古鳥三箇ノ祕事ハ傳絶エヌ
ヤブ入ノ小僧ノ群ヤ夏芝居
ハツタイヤ嫂娘笑ハヌコト五年
夏野行ク人ヤ天狗ノ面ヲ負フ
背ニ負ヘル天狗ノ面ヤ木下闇
遠クカラ見エシ此松氷茶屋
○鎌倉は堅魚もなくて小鰺かな
○曉の第一聲や松魚賣
力入レテ蚤ノ卵ヲツブシケリ
蚤共ニ卵ツブル、音高シ
豆よりも細き灯や蓮の亭
○若楓築山ノ亭荒ニケリ
○草花ヲ庇スル木々ノ茂カナ

○天狗住ンデ斧入ラシメズ木ノ茂リ
○植木屋ハ來ラズ庭ノ茂リカナ
翡翠ヲ隱ス柳ノ茂リカナ
○日光ハ杉茂リ箔ノ光カナ
○椎ノ木ノ茂リテ見エヌ上野カナ
○市中ノ山ノ茂リヤ煉瓦塔
○人住マヌ湖中ノ島ノ茂カナ
○一老樹遠枝茂リテ下ニ茶店
金ピラノ社ヲカクス茂カナ
○辛崎ノ松ハ枯レツ、茂リツ、
○蓬萊ノ松ノ茂リヤ鶴百羽
八方へ茂リ廣ガル松ニ枝
○墓ノ木ハ茂リヌ玉ヤ腐ルラン
楓茂リ櫻茂リテ寺暗シ
○目印ノ高木茂ル小村カナ
○釣床ニ夕日漏リ來ル茂リカナ
○柱ニモナラデ茂リヌ五百年
○門ヲ入リテ木々ノ茂リヤ家遠シ
○トコロ\／＼庭ノ額出ス茂リカナ
○八方へ枝茂ル松ヤ杖百本

棉花

海近クナリヌ帆見エテ棉ノ花（帆ノ大キサヨ）
○此濱ヤ此頃埋メテ棉ノ花

草市

草市ヤ雨ニ濡レタル蓮ノ花

篝木

〇草市ノ草ノ匂ヒヤ廣小路
鎌丸ハ篝木ノ舍ト名ノリケリ
〇篝木ノ舍ハ鎌丸ノ舍號カナ
〇篝木ノ四五本同ジ形カナ

蟬

六月會
山深ク見馴レヌ花ヤ蟬モ鳴カズ
〇アナガマノ蜂ヤ手ノ蟬袖ノ蟬

舟遊

網ノ舟料理ノ舟ヤ舟遊ビ
〇舟遊ビ愛宕ノ塔ヲ右ニ見テ

翡翠

御庭池川セミ去ツテ鷺來ル
〇川蟬ノ魚ヲ覘フ柳カナ

掛香

掛香ヤ紅粉ヤクサヾヽ京土產
〇掛香ヲ人ニクレケリ後家ノ君

蟬始メテ鳴ク鯰釣る頃の水繪空
梅雨晴や鸛鳴くと書く日記
腸の塵を洗はん沖鱠
沖鱠鱸の鱠のくさり時
盆栽に水やり時や夏蘗
刈殘す一畝の桑や夏霞
眞黑な毛蟲の糞や散松葉
カナリヤの卵腐りぬ五月晴
薔薇を剪る鋏刀の音や五月晴

川セミノ魚銜ミ去ル夕日カナ
川セミノネラヒ誤ル濁カナ
川セミノ來ル柳ヲ愛スカナ
川セミヤ池ヲ遶リテ皆柳
川セミノ來ヌ日柳ノ嵐カナ
川セミモ鷺モ來テ居ル柳哉（遂ニ來ズナリヌ）
柳伐テ川セミ魚ヲ取ラズナリヌ
川セミノ足場ヲエラブ柳哉
川セミノ去テ柳ノ夕日哉
川セミノ飛デシマヒシ柳カナ

無事庵遺子木公來る
鳥の子の飛ぶ時親はなかりけり

芍藥を畫いて
芍藥の衰へて在り枕もと
芍藥を畫く牡丹に似も似ずも

夜涼如水三味彈キヤメテ下リ舟
驟雨欲來五尺ノ百合ヲ吹ク嵐
修竹千竿灯漏れて碁の音涼し

垂釣僊詠
薰風吹袖魚竿擔ぐ者は我

若葉青葉魚のぞきつゝ遡る（魚釣るべき枝流れ）
鮎釣らんか如かずドンコを釣らんには
蘆茂る水濁らして魚居らず

芭蕉
破團扇夏も一爐の備哉

キ角
肅山のお相手暑し晝一斗

去來
柹の花散るや仕官の暇なき

蕪村
團扇二ツ角と雫とを畫きけり

太祇
俳諧の佛千句の安居哉

召波
村と話す維駒團扇取つて傍に

丈草
青嵐去來や來ると門に立つ

几董
李斯傳を風吹きかへす晝寐かな

智月
義仲寺へ乙州つれて夏花摘

園女
罌粟さくや尋ねあてたる智月庵

惟然

書蚊帳に乞食と見れば惟然坊

鬼貫

酒を煮る男も弟子の發句よみ

陸前石卷より大鯛三枚氷に
つめて贈りこしければ

三尺の鯛生きてあり夏氷

三尺の鯛や蠅飛ぶ臺所

虚子ノ女一男ノ寫眞

筍哉虞美人草の蕾哉

渡邊某に似す

南瓜の賦茄子の篇や村夫子

寫生帖ノ後ニ數句アリ

寄香譜

相別れてバナヽ熟する事三度

讀吉野紀行

○六田越えて櫻に近し一の坂

○吉野山第一本の櫻哉

○花の山足踏み鳴らす登り口

南側の櫻咲きけり登り口

○花見つゝ吉野の町に入りにけり

○花の山藏王權現靜まりぬ

花に來て芳雲館に晝餉哉

○指さすや花の木の間の如意輪寺

○案内者の楠語る花見かな

花の宿くたびれ足を按摩哉

○西行庵花も櫻もなかりけり

西行の飯たく跡や春の山

○千本が一時に落花する夜あらん

水分の神が霧ふく櫻哉

○案内者も紳士も濡れて花の雨

○南朝の恨を殘す櫻かな

殺生石　謠曲

殺生石の空はるかなる歸雁かな

石にそふ狐の跡や別れ霜

初雷やはしめて落しわらは病

蟲穴を出て殺生石に魂もなし

春殿に玉藻の前の光かな

化物の名所へ來たり春の雨

三浦の介上總の介や泊り山

陽炎や石の魂猶死ナズ

何事庵追悼

時鳥辭世の一句なかりしや

夏草にまだ見ぬ人の行へ哉

叔父の歐羅巴へ赴かるゝに
笹の雪を贈りて

春惜む宿や日本の豆腐汁

里人は土筆も食はず蓬摘

蓬つむや鶯遲き蛋か里

おくればせに蓬摘むなり彼岸過

學校へ行かぬ子達か蓬摘

送別

君を送る狗ころ柳散る頃に

母ノ花見ニ行キ玉ヘルニ

たらちねの花見の留守や時計見る

春の海鯛も金毘羅參り哉

律土筆取にさそはれて行けるに

看病や土筆摘むのも何年目

病床を三里はなれて土筆取
茶器どもを獺の祭の並べ方
獺の祭を畫く意匠かな
寒食や庚申堂の線香立
寒食の村を過行飛脚かな
つゝじまだ吹かで淋しき園生哉

悼蘇山人

陽炎や日本の土に殯
蝶飛や蘇山人の魂遊ぶらん

蒲公英やボールコロゲテ通リケリ
銅製ノ雄蒲公英ノ造リ花
蒲公英ヤ細工ニスベキ花ノ形

盆栽紅梅

紅梅の鉢や寢て見る置處
火を焚かぬ煖爐の下や梅の鉢
紅梅や平安朝の女だち
紅梅に中日過し彼岸哉
紅梅の落花をつまむ疊哉
紅梅の散りぬ淋しき枕元

牡丹餅ノ使行キ逢フ彼岸カナ
春水ヤ闇ヒ分ケタル金魚ノ子
春ノ水都ニ入リテ濁リケリ
下總ノ國ノ低サヨ春ノ水
春ノ日ヤ時計屋ニ立ツ田舍人
春ノ日ヤ賞牌胸ニ美少年
春ノ日ノ御願ホドキモツイデカナ
ノドカサニ書餉モ食ハデ歩キケリ　類句アリシカ
名物ノ餅ヲ搗キ居ルノドカサヨ
ノドカサヤ案内者ツレシ田舍者
闇ヲ出テ朧ニ人ノ影二ツ
朧夜ノ眼藥買ヒニ藥師道
路地口ヲ出デテ朧ノ大路カナ
朧夜ノ端唄ヲ歌フ往來カナ
見返レバ住吉ノ灯ノ朧ナル　人家遠ニ下リ舟
篷アゲテ見ル兩岸ノ朧カナ
朧月狐ニ魚ヲ取ラレケリ
朧野ヤ朧ヲ破ル藁砧
朧灯ヲ見ナガラ歩行ク疲レ足
幽靈ノ如キ東寺ヤ朧月
大佛ノ目ニハ吾等モ朧カナ
取リ殘ス畑ノ絲瓜ヤオボロ月

話シナガラ土手ノ上行ク人影
末遂ゲヌ戀ノ始ヤオボロナル
背ノ高キ人佇メリ朧陰
遠クトモ近クトモ見エテ灯朧
馬ノ灸ノ張紙出タリ摩耶參
今流行ル馬ノ病ヤ摩耶參
馬カザル心ヤサシヤ摩耶參
東風吹クヤ船ノ寄ル待ツ離レ島
夕東風ヤ火ヲトモシタル漁舟
蝶々ヤ驛々ノ子守歌
蝶ノ羽ニ霜置ク夜半ヤ冴エ返ル
蝶飛ブヤアダムモイヴモ裸ナリ
虎杖モ蕨モ伸ビヌ山ノ樣
馬ノ齒ニヤハラカキ萩ノ若葉カナ　萩ノ若葉ノヤハラカキ
宮城野ノマ萩ノ若葉馬ヤ喰ヒシ
ウレシキカナト麥フルマヒヌ店卸
捕ヘタル雀ヲ放チケリ
ツリ上ゲシ魚ノ光ヤ暖キ
春ヲ湛フ濱荻筆ノ穗ノ長キ　（雜）
蠶飼スル國ヤ佛ノ善光寺

春ノ山女夫ノ神ヲ祀リケリ
茶屋アリテ夫婦餅賣ル春ノ山
土佐カ畫ノ人丸兀ゲシ忌日カナ
橘ノ曙覧ノ庵ヤ人丸忌
貝寄ノ風戯波ノ汀カナ
ニカクヨル玉藻カナ

轉居シテ椿咲ク庭海ちる戸
家遷シテ椿ノ苗ウレシカリ
江戸詰モ已ニ久シヤ蜆汁
落花流水草芳シキ裾模様
鶴引クヤ蓬萊ノ松遠霞
雪解ケテ熊來ベナリシ孤村カナ
霽朝ヤ上野ノ鐘ノ霞ム日ニ
殘雪ニ雞白キ餘寒カナ
家ヲ出テ根岸田圃ノ杉菜カナ
山焼イテ十日ノ市ヤ初蕨
水取ヤ杉ノ梢ノ天狗星

移居十首

手水鉢八手の花に位置をとる
庭石や霜に鳥なく藪柑子
北窓に春まつ梅の老木哉

蓬萊も家越車や松の内
新宅は神も祭らで冬籠
鮟鱇鰒河豚の苦説もなかりけり
かぜ引の妻よ夫よ玉子酒
貧をかこつ鄰同士の寒鴉
軸の前支那水仙の鉢もなし
琴箱のうらは藪なりさゝ鳴す

明治卅五年一月

碧梧桐兄 一粲

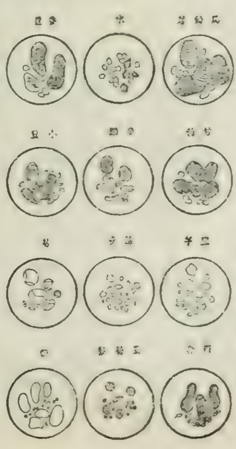
病床口吟

室外

蕾つく梅の苗木や霜柱
朝霜に青き物なき小庭哉
枯盡す絲瓜の棚の氷柱哉
鄰住む貧士に餅を分ちけり
清潭の居る山寒し獅子の聲
烏帽子著よふいご祭のあるし振

室内

蓋取ツテ消息いかにあんこ鍋
薬のむあとの蜜柑や寒の内
煖爐たく部屋暖にふく壽草
滿玉や仰向にねて一人見る



澱粉

顯微鏡にて見たる澱粉の形状

病牀やおもちや飽へて冬籠
解しかぬる碧巖集や雑煮腹

一番町二十七番地
井伊屋敷下
谷コーシ

曼珠沙華

一

車馬絡繹の處ではなく、本通の曲り角に方一町を塗塀に圍ひ廻して、表はいかめしき格子造、左の方へ曲れば外より見ゆる家藏、棟と棟とを竝べて數知れず、右の方へ曲れば檜皮葺の門、常はしめきりて、裏の方にも通用門をつけ、年が年中人の出入の絕えぬ、これが昔より御領內第一の富家と聞えし野村治右衞門の家構である。殿樣は御國替になる、藩主が縣令になる、縣令が縣知事になる、城下目拔の武家町は崩されて停車場になる、三年見ねばがらりと變る世の中に、三百年來の野村治右衞門は、昔から此名、昔から此家、昔から此財產、藏の壁に附けてある桔梗の紋は此處の名物の隨一と言はれて、變らぬ者の譬に引かれる位であつた。山の者、村の者が城下見物に娘子供を連れ立ちては、必ず此家の前に立ちどまりて、面白さうに奧を覗くがきまりで、こゝの桔梗の紋と山本村の地藏樣の數とは今迄數へた者が無い、と物知り顏にいふて聞かせるのが親の自慢であつた。野村の內には、大阪もあるさうな、東京もあるさうな、日本三景も一目に見えるさうな、極樂がこしらへてあつて天人も舞ふて居るさうな、此中には凡そ人間が欲しいと思ふ程の者皆出來て居るさうな、と誠らしく言ふ者もある位の繁昌であつた。

聞けば極樂とて羨ましいが、さて極樂に住む身は、衣食住の樂みといふ事も無ければ、蓮の花が四時咲き通して、迦陵頻伽が晝夜啼きつゞけでは、まさかに善導が法然でも飽きたまはぬ事はあるまい。況して凡夫の悲しさは、貧乏は金持を羨み、下役は上役をねらひ、位高く官高き者は品格を保つて行かんならんが爲に思ふ存分の道樂が出來んとて愚癡をこぼして居る。いづれにしても變化なき生活が感情の强い者に不愉快を與へ、窮屈に束縛せられたる境遇が才走つた者に不平を起さしむるのであらう。野村の家の總領息子、名さへ玉枝とて女のやうな優しい生れ、今年十六七の花盛りに、固よりかしこく慈悲深く、學問さへすぐれて居るので、此家に此子、未來の治右衞門のおひさき見えて野村の礎はぐすとも言ふまい、と人は皆譽め羨めど、何がどうしたか、玉枝の塞ぎ樣、朝から晩迄物も言はねば笑ふでもない、苦蟲踏潰したといふ顏つきで默つてぼんやりと机にもたれて居る、机に凹みが出來はせんかと思はれる程で。乳母は晝飯の膳を下げに來て、どこぞ御氣分が惡うございますか。と尋ねた。これは每日斷らいふて聞くので今日も聞いたのだ。玉枝も每日聞かれた時のやうに今日も默つて居る。

此頃は御膳も進んではあがりませず、學校からも早う戻んでおいでなさる、お內でも前方のやうに御本を御覽になるでもないし、それに夜は十二時迄も御目ざめの御樣子には見えまするし、お父樣にしてもお母樣にしても是程とは御存じありますまいが、若し御存じになりましたら、どの位御心配なさいますか知れませぬ。

乳母は眞心をあらはして言ふたけれど玉枝には聞えなんだと見える。

此間も學校への御出がけに內の黑犬の後つ

けて来るが怖いとやらで、血の出る迄杖でお打をなされたと勝が申して居りました。今迄蟲一つお殺しもなされぬ若旦那様が左様な事をなされますといふに、餘程お氣が立つて居るのであらう、と勝でも申します。それといふも矢張お加減の悪い故でございませう。どうも此頃のお顔の色は平常ではございません。

玉枝は默つて居る。

若し深い譯も無しにつまらんといふやうなお考へでもございますれば、何様な面白い事でもなされたらどうでございませう。出來ん事の無い御身分で、たとへ天下中の綺麗な女子を皆連れて來てお側にお置きなさらうが御勝手でございます。此お家でつまらんと仰いましたら、唐天竺を鐵の草鞋で探したにしても、面白い事はありますまい。

心ありげに乳母は少し笑ひかけたので玉枝はいよ/\うるさくてたまらん、と言ふ風で立ち上るや否や出て行かうとした

何處ぞへお出かけなさいますか、表へ出ておいでなされたらお氣が晴れて宜しうございます。お着物はそれではいけません。お駕でも出しませうか。

二

ジャケツに竹の鞭、子供らしき打扮に、何やらいふ乳母の言葉を聞き捨てゝ裏門より逃げるやうに飛出したが、町はづれの小社の後へ來て、ほつと息をついた時、玉枝は始めて自己を知覺した様子であつた。

見渡せば稲田遠く西に開けて、南を遮る一帯の土手には松、榎、楝など枝を交へて森の如く茂つて居る。監獄署の高き白壁と黍畑との間の小道を通り抜けて土手へ取りつくと、少し心が落著いたので、下闇をぶら/\と草木など鞭で叩きながら歩行いて居た。名高い化地蔵の前へ來ると子供心に恐ろしく思ふて居た名残で今も氣味が悪いけれど、一足横へ踏み込んで其前へ往て見た。いつでも此地蔵の首は前の方に轉がつた儘であるのが、今日は首が膝に載せてある。載せてはあるが眼口鼻が見えぬので若し後ころではあるまいかと傍近よつて見て玉枝は覺えず笑ひ出した。首は横向いて著いて居る。思はぬ處で地蔵に笑はされてから後は獨り歩行いて居ても何か分らぬが無暗にをかしい。いつでも走つて通り抜けて居た墓原へ來ても恐ろしくはない。赤い信女が舞の怪しき居士の膝に倒れかゝつた儘、そこを枕に寝て居るもをかしい。新墓の供物をつゝいて居た鴉が人影に驚いて樹の枝へ飛び上り何やら咥ふて居た物をつい取り落してそれを拾ひにも得下りず惜しさうに阿房阿房と鳴いて居るのもをかしい。日頃玉枝の胸の中にかたまつて居た鬱結は此日此時一時に笑ひとなつて蒸發し了つた。向ふの無縁塚に干してある經が木の間に白く見えるのも愉快、あちらの村社に二三本幟が立つて居るのも愉快、知らぬ鳥が鳴いて居るのも愉快、小さき蟲の飛んで居るのも愉快、若し周圍の萬象に靈魂があるならば彼等は今たしかに玉枝を中心にして活動し始めたのであらう。

ふつと耳を貫く音に立ちとまつて見廻せばいつか寺の門に來て居る。玉枝は何か急に思ひついたやうに、彼處の木の間、此處の草むらと、道無き處を探し歩行いたが、終に堤の林を離れて田の縁に出た。返さうとして後方を見れば土手を十間許り離れて田の中に一塊の高まり、何とも知れぬ大木一株雲に聳えて、其下には今を盛りと曼珠沙華が透間も無く生えて居る。それが傾く西日に映りて只赤毛氈を敷きつめたやうな。其中に坐つて何やらして居る一人の小娘を見つけたので、あれに聞いて見ようかと獨

り言して畦道づたひに小高き處をぐるりと廻りて、少女の後からそつと覗いた。乞食でもあらうか繼ぎ／＼のきたない着物に、帶は何やらの片側に赤き縮緬をつけたのを繩のよれた如く結び、髮は只やたらに束ねて居た。足投げ出して居る側に草花少し入れた籠を置き、そこらにある曼珠沙華を挘りては餘念なく絲で縛つて居る。

玉枝は後よりだしぬけに、

オイ。

と驚かした。驚いて振り向くだらうと期したるに違ひて、聞えたか聞えぬか、少女は返事さへせぬ。

こゝらに昔の大將の討死したといふ塚があつて石が立つて居るといふのはお前知らんか。

と問へば、

此石より外に石の立つとる處は知らんがな。

と顎で教へながら、手に持つた花束を腹立たしげにぐしや／＼と揉み潰して、玉枝の足もとへ投げ出した。見れば大木の根元に立つたる石碑、これにかあらんと玉枝は裏表幾度となく見たが、苔蒸し石缺けて一字も讀むことは出來ん。爲ん方なさに一足後へ戻りて少女を見れば、投げ出した左の足の拇指の尖、石疊に躓きてしたゝかに傷つたと見えて、足首のあたり迄血に染みて今も少しづゝ流れて居るけれど、それも知らぬ態で只花を束ねて居る。

初めは殘酷なやうに思はれたが、自分が平氣で居るのは心に氣高い所があるかとも思はれて、何とはなしに去りかねて、佇んだまゝ何をするかと見つめて居た。女は花籠にある賣れ殘りとおぼしき桔梗の蕾を挘つては一つづゝ絲にてくゝり合せ又くゝり合せて、それを圓く玉のやうにしようとして居る。玉枝は其成功を見る迄と、側に立つて居るが、女はそれには頓着せぬ、寧ろそれを知らぬのでもあるらしい。やがて桔梗の花は餘程出來上つたが、今一つ二つ花が足らんので、籠の中を探したが、もう花は盡きてしまふた。女が困つて居るのを見て、先より此花束に同情を表して居た玉枝もひどく心で困つて、どうかして助けてやりたいと思ふて居る内、ふと思ひ出して自分の帽子に挿んで居た桔梗を取つて女の前に投げ出した。女はそれを默つて拾ふて、やう／＼花束を完成した。それを手の上に轉がしながら女は一寸玉枝を見あげてにつこり笑ふた。玉枝の體にある凡ての神經が一時に物に感じたやうに動いた。此時初めて女の顏を見たが、年は十五六でもあらうか、眼圓く鼻低く、赤き唇、白き歯、淨き容貌にはあらで、恐ろしと見える處もあるが、肥えたる薄赤き頰の眞中に靨をこしらへて笑ふと、言ふに言はれぬ一種の愛嬌がこぼれて、それが人の心を奪ふ程の力を持つて居る。

玉枝は好奇心と魔力に打たれて見て居たが、頻りに桔梗の玉がほしくなつたので、貰ふて歸らうと思ふたけれど、生憎金も持つて來なかつた。どうしようともぢ／＼して困つて居たが、

其桔梗くれんか。

と試みに言ふて見た。

女は何も言はずに花を草の上へ轉がしたまゝ見向きもせぬ。大方呉れといふのであらう、と推して玉枝は急いで拾ひあげた。毘沙門様のお鬮にでも中つたやうに嬉しさうに見て居る。

今日は何も無いが、こんだ持つて來る、明日でも。……桔梗程好きな花は外に無い……

ひとり言のやうにつぶやくやうに言ふた。

桔梗や何か。

女も口の中で言ふた、極めて桔梗を輕蔑した

らしい調子で。
　桔梗は嫌ひか、何が好き、何が。
また曼珠沙華をむしつてくゝり合せながら、
　好きな花を言ひあてゝお見なさい。
玉枝はしばらく呼吸をはかつて、
　お前の好きな花ちふのは女郎花ぢやろ。
　違ひます。
　そんなら萩か。
　イヽエ。
　朝顔。
首を振つた。
　撫子。
又首を振つた。
少し考へて、
　分つた〳〵、秋海棠。
とても中らんといふ顔付で黙つて居る。
　秋草ではないのかい。
　今咲いて居るがなア。
　咲いて居つても人の知らぬ草ぢやないか。
　誰でも知つて居るがなア。
今迄立つて居た玉枝は我知らず其所へ腰を据ゑて、襷を振り動かしつゝ、
　分らん〳〵。江戸菊でもあるまいな。
黙つて居る。
　鶏頭か知らん。
花束をくゝりたる絲の殘りを歯にて切りながら、首を振つた。玉枝は少しいらだつて來て、
　何、何。到底分らん。
とせき込んで問へど、矢張黙つて花をこしらへて居る。今しもやう〳〵のことで出來上つた花の塊、今度は桔梗の代りに曼珠沙華を毬玉の如く丸くしたるを嬉しげに打ち眺めては、絲にぶら下げて見ては、又手に置いて見ては、終にそれを玉枝の鼻尖にぶらさげて、
　此花ぢやがなア。
玉枝は意外なのに驚いた。
　それは葬式花、死人花ぢやの言ふて、人のいやがる花ぢやないか。葉も枝も何も無うて、ぽんと立つて、墓原などに生えるもので、色と言や厭な赤い、赤うても子供も取らん、それが好きかい、その誰でも嫌ふ花が。
　そぢやけん、可愛がつてやるのぢやがなア。
花の束を見つめて居た少女は少し力を入れて言ふた。沈んだる聲に悲しき調子を帯びて、一時出まかせの口の先の冗談とも聞かれなんだ。
　みいさん、乗つて往かんか。
しばし語の途ぎれたる此場の靜かさを破つて、此聲は聞えた。玉枝はうろたへて立ち上りながら振り返ると、彼方の畦道に童が、牛を率いて此方を向いて立つて居るのを見た。
　鎌さんや。今戻りかな。今日はもう城下を歩行くのも厭ぢやし、内へ去んで叱られるのも厭ぢやしと、こゝにぐづ〳〵して日を暮して居つたのぢやが、乗せてくれるなら去なうかな。
花籠持つて起き上りたる少女は籠の底より一筒の花の薬玉、おのが手にあると同じやうなるを取り出し、それを前のと一寸程置いて連ね下げて、其絲を長く首に掛けた。二つの小さい薬玉は胸に下がつてゐる。女はうれしさうに我胸を下目で見ながら畦道へ出て往く。
　お前、足を怪我したか。
鎌とやらが問ふた。
　悪まれるとなると石に迄悪まれるけん。誰ぢやて一人可愛がつてくれやせん。
少女はちよと笑みながら容易く牛の背へ後向に乗つて、童が下からさし出す我花籠を受け取つた。
　みいさん方の叔父さんは、みいさんをどう

して憎むかな、德さんは可愛がられるけんど。

牛追ひ〳〵歸り行く二人の話は玉枝に聞えぬ程に遠ざかつた。女の顏も見わけのつかぬやうになつた。胸に掛けて居る二つの勳章は夕日に映つて動いて居る。右へ曲つた。低い處へはひつた。小川を渉るのであらう。又高い處へ出た。動かぬやうに見える。夕靄は薄く立ち罩めて牛も人も只紫色に見ゆる時・玉枝は我家に懸けてある、白象に普賢菩薩の古畫を思ひ出した。

三

山本村は一年一度の鎭守の祭、それも去年と一昨年とは赤痢がはやつて祭は内祝ひ、神輿さへ舁かれぬとの達しで、極めて淋しかつた其の反動か、今年の景氣の盛んなことは譬へやうも無い程である。若い者は獅子舞の太鼓の稽古をする、年寄は淨瑠璃の下ざらへ、子供は縮緬の襦袢とさゝやかな鈴いくつとなく附けたる木綿襷とを揃へて、それを每夜枕許へ置いて待つて居る。宵の祭も過ぎて翌の天氣はと氣遣ふた雲もいさ今日といふ日になれば何處へやら隱れて、曉から太鼓の音勇ましき一天快晴、箱屋菓子屋抔到る處に荷を卸して思ひの外の儲があつたらしい。

昔の庄屋でもあらうか、低き白壁を繞らして、大きな門構の内の廣き中庭に數十人の男女は集つた。此群集に取り巻かれて居る五十ばかりの男の頭は半分白髮になつて束ねられて、足には長刀草履を穿いて、帶は太い黑い繩のやうなもので三重も四重も廻してある。やがて彼男は其帶を解いて兩手にぶら下げると、驚くまいか、二匹の蛇になつた。蛇を持つた儘兩手を擴げて、見物の前を見せ歩行くと、今迄何やら知らずに來て居た女などは肝を潰して逃げ出したのもある。一廻り廻りて蛇使が元の處へ歸つた時は、人の輪が前よりは廣くなつて居た。男は思ふまゝに蛇を使ふて見せた。或は手を絞めさせて見せた。首を絞めさせて見せた それから二匹の蛇を繩によつて見せた。二匹の蛇を繋いで襷に掛けて見せた。終には二匹とも懷へ入れてしまふて、まだ一匹帶にして居たのも解いて懷へ入れた。何處から蛇が出て來るやら分らぬので皆は後しざりしながら、皆注意して居たが、蛇使は立つた儘で蛇が何處からも出なんだ。出ないのが猶氣味惡くて、見物は心の内で心配して居ると、一人が、

アレ。

と叫んだ。よく見れば蛇使の首のぐるりに三匹の蛇は僅かに頭ばかりを出して、ぺろ〳〵と赤い舌を見せて居る。ぞつとしてそれとなく襟をかき合せて居る女の顏の色は無い。變な聲を出して男が頭を叩くと蛇は三匹とも頭の上にあがつてとぐろを卷いて居る。やがてそれを引張り下して右の手でつかまへてしまふた。藝が終ると、蛇使は先づ貰ふた錢を帶の間から手を入れて何處かへ納めて、一匹の蛇を又帶に結んだ。今一つの蛇を頭へぐる〳〵と鉢卷に卷かせて、殘る一つの尾を左の手に提んでぶら下げ、門を出かけた。群衆は我先にと逃げ出して急に淋しくなつたが、猶少しは後から附いて行く者もある。遠くから恐い者見たさに見て居る者もある。

蛇使を商賣にするちふは因業な事ぢやのう、商賣のしやうは何ぼでもあらうに。

と後家らしい一人の肥え太つた女が一緒に立つて居る三人の女に話しかけた。

あんな者でも嫁になり人があらうかな。

と他の一人が言ふと、肥えた女が、

女の蛇使もあるちふけれ、蛇使同士で夫婦になるぢやろぞい、これが似た者夫婦よ

のウ。

言ひ終つてせゝら笑ひをしたが、傍の痞地な神經質らしい女は身振ひして、

我が好きで嫁になつた者はそれで善えぢやらうが、生れた子が可哀さうぢやな、蛇の中で育てゝ行くのは。

又身振ひをした。

そのいにもあるまいぞい。赤子の時分から蛇を遊び物のやうにしとつたら、蚯蚓位に思ふとろぢやないか。しまひには其奴も亦どうせ蛇つかひにでもなるのよ

と笑ひながら肥えた女は愉快さうに話して居る。

さうよ。さうでも爲にやア、男は善えが、女の子ぢやつたら嫁に取り人もあるまいし、仕方が無いけん。

と他の一人が言ふ時、向ふから來かゝる男、一寸會釋して、

お民さん。もうお神輿さんがこゝへ來るぞな、いんま向ふの一本松の處を舁いて居つたけん。

と言ひ〳〵通り過ぎた。

お神輿さんが來るなら初坊に見せてやろ。もうまア起きて泣きよるかも知れん。そしたら、お久さん　おたよさんも榮さんに見せてお上げなゝ。

神經質の女は小走りに杉垣のうしろへ隱れてしまふたので皆別れ〳〵に歸つた。

殘忍な相を顏に現して居る蛇使は、蛇を提げたまゝ、とある寺の横を曲らうとする時、一人の少女が花籠を手に持つて、片手に何やら喰ひながら來るのに出逢ふた。はつと思ふて一足退いたが、少女の顏を見て、蛇よりも恐ろしい眼で睨みつけた。少女はあわてゝ喰ひさしたものを投げ棄てゝ、首を垂れて、默つて花籠の花をいぢつて居る　男は叱りたくてたまらんので、口を開いて何か言はうとしたが、種々な言葉が一時にこみあげて、何とも言へぬので、終に右の手に小娘の胸ぐらを取つて、寺の荒壁へ押しつけた。

何しに此處へうせた。

漸く一語を發した。

拔かすなら拔かして見い。又お祭見にぢやろ。畜生め。

今度は拳骨で打つ積りで、左の手を振りあげたので、今迄桔梗の花を舐めたり、花籠の手に卷きついて少女の指を舐めたりして遊んで居た蛇は驚いて空でのた打つた。やがて此蛇も主と共に責めるのやら、少女の顏のあたりへ紅い舌を出して居る。頭に卷かれた蛇迄が男の耳の所から首出して少女をなぶつて居るやうに見える。

何ぢやてゝ城下で花賣つて來んか。こんな處でそれが賣れるか。萎馬鹿。

再び胴づいた。通りかゝつてさつきから見て居た男があつたが、見かねたか子供を押しわけて出て來た。

花なら買ふてやる。今日は怺へてやれ。このめでたい祭に喧嘩や何か緣起が惡い。

と詫びながらの扱ひに、さすがの親父も手を放さずには居られなんだ。

花は何ぼぢや。

皆買ふて貰ふなら五錢で宜しうございます。

それ五錢。

と錢を渡して彼男は行つてしまふた。しばし樣子を見て居た蛇使は直に小娘の側へ寄つて、物も言はずに、花籠の底に入れたる賣溜を、一文も殘さず、搔き集めた。手のひらで一寸勘定して見てから、我懷中へ押し込んで、猶落ちぬやうにと頻りに腹の邊をいぢつて居る。

早う去ね。德が待つて居る。買喰ばつかり

して、内へも戻んて來ん。不孝者。早う去ね。

再び睨みて蛇使は家ある方に急いで行た。少女は泣きながら花籠を提げて、蟻の歩行く程に歩行いて居たが、忽ちわい／＼と言ふ人聲が近く聞えて、向ふから神輿の來るのに驚いて、横の小道へ避けた。畦豆の中に立つて目たゝきもせずに見て居る、人の頭の動くのを、頭の中から手が湧いて出るのを、神輿の鏡が動くたびにきら／＼と目に映るのを、ともすれば神輿が横に傾いて倒れさうになるのを、さうすると神輿の上に乘つて居る人の落ちようとするのを、其後から小さい子の群が善き著物著て走つて行くのを、面白さうに見澄つて居る。神輿も人も家の陰へ隠れて見えずなるや否や一さんに駈け出した。

四

花籠提げた少女は小川に沿ふて蘆蔭茂りたる田圃道に來た時、何だか目早く見つけて、草むらを分けて見る途端、縞蛇一つする／＼と川を渉つて逃げるのを見送つて、

早う逃けよ。早う／＼。遠い處へ逃げて往て、二度とこの邊へ出て來ちや、いかんよ。こゝらでまご／＼しとると、屹度ひどい目に逢はされるけん。

獨り言いひながら板橋を渡つて形ばかりの門を這入つた。十を少し越えたりと見ゆる童の戸口に遊んで居るのを見て、其側に立つて、する事を見て居た。童は小さき蛇を手に卷きつけたり、解いて見たりして樂んで居るので、若し之を都の人に見せたら、さぞ、淺ましい者と、驚きも、さげすみもするだらう。けれども何も不思議は無い、蛇使の子が蛇使になるのは醫者の子が醫者になるのと同じことなのである。蛇が可哀さうだと言ふなら、百姓が牛馬を使ふのは、牛馬が可哀さうなと言はねばならぬ。牛や豕を殺して食ふのは猶更可哀さうと言はねばならぬ。蛇を恐ろしいものゝやうに言ふて、見さへすりや打ち殺すが普通の人の爲る事ぢやないか。その蛇を飼ふて可愛がつて見せるのは普通の人より慈悲が深いのである。これは、死んだ女房が生きて居る内に子の教育に就いて、蛇の事に就いて、夫に訴へた時の夫の答であつた。

姉が歸つて來て見てくれるので、童はますます得意になつて、藝のありたけを盡して居る。

姉、どうぢや。おとなしいぢやないか。こいつは善が黒はいかん。これが一番好きぢや。何でもいふこと聞く。

小さき蛇を手のひらにつぐねたり、紐のやうに結んだりして、姉の眼前へつきつけて見せた。眼ばかり光る色黒き童の顔には、普通の人の解し得ぬ一種の誇ひを含んで居る。

德や。お主、どうしてお祭見に行かんけ。お父について往きや善えのに。お祭嫌ひけ。

それでもお父が往かれんと言ふたもの。往きたうないのけ。どうしてもついてくと言や善えに。言はんけん。來年になつたら連れて往くと言ふた。それ迄に善う使へるやうにならにや、連れて往かんてゝ。

そないなこと言ふたけ。好かんお父ぢやのう。蛇使ふたりさゝいでも、只連れて往きや善えのに。お主、お神輿様の後から子供と一緒について往て遊びたらないけ、著物が無いもん。

女は憮然として立つて居た。

可哀さうぢやのう、著物が一枚無いのぢやけれ。お母が生きとつたら善えのにのう。

お主、お母の顔、覺えて居るけ。

ム、、知つとる。

知つとる。そんなら、お母が蛇や何か、可哀さうに遊び事にするものぢやない、あんまりひどい目にすると、畜生に生れ變るて、、お主を叱つて居つたのを知つとるけ。

童は手持無沙汰に蛇をいぢくつて居たが、變な顔をして姉の顔を見あげた。

生れ變るて、どうするのけ。

畜生になるのよ。

何時から畜生になるのけ。

何時か知らんが、なるのよ。

ほんたうけ。

ほんたうよ。

畜生て、何になるのけ。獅子なら善えな。

獅子が一番強い。馬でも牛でも皆負けるのぢや。人でも何でも皆くふてしまふのぢや。

蛇をひどい目にしたら、蛇になるかも知れん。

蛇なら構はん。黑蛇が善えな、強いけん。

少女は稍ゝ呆れた顔で童を見つめて居た。

あらあぢやが、お主は蛇になつて、ひどい目にしられたり、杖で叩き殺されたりしても構んのけ。

ひどい目にしられちや厭よ。

お主ぢやて、厭なら、其蛇も可哀さうぢやないか。逃がしてやらんけ。それ逃がしてやつたら、明日お主の好きなもの買ふて遣るぞ。

あの赤いお菓子買ふてくれるけ。そして毎晩一緒に寝てくれるけ。いつやらの樣に、獨り寝るのは恐ろしいけん。

オヽ〳〵。お菓子はたんと買ふてやるし、夜は一緒に寝るし、それから兒來也のお話もするし……

兒來也は強いなア。あれから勝つのけ負けるのけ。

これからが面白い處ぢやけん、寝たら次を……

橋板を踏む音がして、親父の咳拂ひが聞えたので、少女は急ぎかけこんで、童は土間の隅に投げ出し、茶の間で土瓶の下を掻きまぜて居る。

五

草の上へお寢なさるとは餘り無法な爲され方、大事なお體が露に冷えて、風邪でもお引かせ申しては、水晶のやうな涙こぼしてお泣きなされる、誰やらのお顔、眼に見るやうでおいとしい。もしお起きなされませぬか。それではお頭が痛みませうに、玉の枕、それならで神樣拵ひし菜枕、せめては草枕にかへて、束の間の夢の通ひ路、思ひの萬分の一でも通ふたら嬉しうございます。許して下さいますか。

今迄草の上に直に寝て居た頭を膝へ上げられた心持に、玉枝は眠を覺ましたが、眼は得開けなんだ、どうも女が少し顔を赤くして、自分の顔を覗きこんでゐるやうに思はれて。さうすると耳の處が燃えるやうに感じて來る。いよいよ間が惡いので寝た風をして居ると、一滴の雨が頬へかゝつたので覺えず眼を開いた。女は物思ふさまで俯向いて居る 泣いて居るのであらう。いつでも笑顔ばかり見て居た女が、眉を顰めて惱ましげにして居る顔を玉枝は始めて見て、それが又格別に美しくいぢらしい。

泣いて居るのかい。どうした。今迄笑ふてばかり居つたぢやないか。お前は生れてから涙を出したことの無い人か知らんと疑ふて居つた位ぢや。

女はます〳〵塞ぐ。

泣くといふ事は貴方方にはお分りになりますまい。泣くといふ事は女の事、下司の

事、母親の無い娘の事、男に生れ、善き家に生れ、坊様の若様のと育てられて、どうしてそれが分りませう。涙は敵の早う出來る呪と思ふて居らるゝお身の上、羨ましいとも妬ましいとも。固より賤しく生れた身の、況して年はも行かねば、何が何やら、世の中はどんな物やら、人が夢にも知らぬ榮耀をしてくらして居るとも、自分が選りに選りて不幸な境涯に生れて居るとも、氣は付かず。父親は恐ろしい者、母親は戀しい者、弟は可愛い者とより外に知らなんだ者が、計らぬことで斯うなつてからは、始めて目が明いて物が見え出したやうな氣がして人と自分との境がどうやら分つてまゐりました。知らぬが佛とやら、分つて來れば來る程、恥かしいやら、口惜しいやら、いつそのこと、迚も叶はぬ事とあきらめてしまふかと思ふ甲斐も無く相應しからぬ望が出て來る。とは申しながら、妾どもの分際でだいそれた其望を是非叶へてなどとは思ひませぬ。よく／＼考へて見れば斯うして居るさへ勿體ないやうな氣もしまする。それぢやと言ふて、此頃のやうにお顏も見られぬと、胸は燃える、氣は寒がる、人並ならぬ身で淺ましいとは思ふて見ても、どうやら思ひ初めたとでも言ふやうに、これがやるせが無いと言ふ者でござりませう。ともするとお屋敷の近所迄行て餘所ながら御樣子窺はうかと思ひ立つ時もござりまするが、いや／＼此身で空恐ろしい、若しも御名前に泥塗るやうな事があつてはと思ひ返して、無理に靜める我心、お眼にかゝつた時、善う辛抱した、殊勝な、とたつた一言いはれたいのが一ぱいでござります。お察しなされて。

とあとは涙に掻きくれたるか、暫時言葉もとぎれて靜かな。

せめては月に一度でも、一年に一度でも、斯うして居られる内は、それを樂みになががらへて居りませう。美しい奧樣はおいでになる、可愛らしい赤子樣はお生れになる、夢にもお側へ寄られぬやうになつたら、どうして生きて居られませう。前の世に何樣罪をつくつて斯う今の身に生れたか、それさへ恐ろしいのに、又此世でも執著を離れずに迷ふて／＼迷ひ死んだなら、後の世は必ず畜生道とやらへ墮ちることでございませう。さすがにあつかましく一つ蓮とも得申しませぬ今生ばかりのはかない縁、此後再びお目にかゝれるやら、これが未來永劫のお別れになりまするやら、定め無い世の中、障碍の多い娑婆、何として善いものか分りかねまする。もし／＼。すや／＼とお眠みぢやげな。魂とやらは極樂へ遊びに行かれたでございませう。

とせぐり來る涙に堪へかねて玉枝の上に倒れんとして、やう／＼氣がついた樣子であつた。

あゝ。うか／＼と何やら申しましたさうな。オホヽヽヽ。サアお起きなさりませ。露が深うなつて參りました。お休みになるなら、あちらにお床が敷いてございます。サア行きませう。

と無理に搖り起して、我が先に立つて行くを、何とも心得ぬながら、玉枝はついて行けば、思ひがけぬ野の中に見馴れぬ樣したる家が、夢のやうに立つて居る。案内も乞はず、つか／＼と上つて行く女の後より恐る／＼手探りして踏み込みたれど、其邊に人氣も無いやうにしんとして、暗いのに燈火も點けず、冷たい生臭い空氣が頰を撲つて來るに、ぞつとして立ち止まれば、女は彼方の襖を開けてさし招いた。向ふの間から、條の青き光がさしたので、それに力を

得て、其處迄行くと、此内へ這入れと指ざす。其の物も言はずに命令する樣が、如何にも嚴格で、自然威があつて、否應無しに服從しなければならぬ塩梅で、全く神樣か何かの樣に考へられて、默つて室の中に這入つた。女は襖を立てゝ何處へか行た。不思議な事もあるものだ。玉枝は恐る〳〵室の内を見廻したが、いよ〳〵不思議でならぬ。四方の襖の繪は悉く曼珠沙華を描いて、床の間は奧深く頗暗な中に一本の大木が生えて居る。それが書てあるか活かは分らぬが、どう見ても實物としか見えない。折々風の吹かして、さら〳〵と木の葉が動くのが、向ふの月代に透かして見えるかと思はれる。室の片隅に淋しげに立つて居る一本の燭臺は、金の蛇が二つより合ふて木を捲いた形に造られたもので、其二つの蛇が上向いて開いて居る口の中に、一本づゝ蠟燭が立ててある。火は五色の焔を吐いて、蒸せるやうな瓦斯を發す。蛇は少しづゝ動く。或は火の搖ぎで、さう感じられるのかも知れぬ。玉枝は現に物に襲はれる心地がして、悄然と立つて居たが、忽ち人のけはひのしたので、後向いて見れば、白衣の天人威儀端然として、うるはしく笑ひを含んで立つて居た。驚いてつく〴〵眺めて、花實の少女なることを知つた時には再び驚いた。

　お休みなさいませ。

　玉音朗かに言はれて、女の影の行く方を能く見れば、青疊と思ふた處に、壁と同じ色の襖が明けてある。何にしたものかと躊躇して居る内、自分の身は既に襖の中に這入つて居つた。

　けれどもなか〳〵に寢つかれぬ。やがて少女は優しき聲にて、誰やら呼ぶにやと思はれたが、十許りの女の童はいつの間にか此處に來て命を待つて居るやうな。何やら言ひつけられると、女の童は向ふの袋戸より目馴れぬ器出して少女の前に置いた。少女は點頭いた。女の童は束の間の大木の陰へ這入つたと思ふと音もせずに消えてしまふた。女は盃を持つて來て、酒をついでくれたので、ぐつと飲みほしたが、其味は甘いやうな辛いやうな少し舌を刺すやうで、非常に旨い。玉枝はもう一杯といふたけれど女は頭を振つた。

　深山飲むと、此酒は死にます。

と少し笑ふて居る。

　お前寢んのか。

と言へば、

　貴方のお休みになつとる間に、何ぞ惡い物が來るといけませんから妾は起きて番して居ります。

と矢張笑ふて居る。いよ〳〵變に思ふたが、酒の醉が出たか、玉枝は床に這入つた。暫時とろ〳〵と寢たと思ふと、苦しくなつて、金の蛇が二三匹來て咽喉を絞めて呼吸がつまるやうなので、うなされながら眼が醒めた。背中は冷汗一ぱいになつて居る。猶恐ろしさが殘つて居るのに怖へかへて再び起きると、矢張玉枝は大將塚の前の芝生に寢て夢を見たのであつた。誰か居る、と見廻したが、暮色蒼然と四方から迫つて來て、そこらには誰も居なかつた。

　あゝ變な夢を見た。併し思ふて居るから見たのかも知れぬ。まだ來んやうぢやが、今迄來んやうなら、今日は來んのぢやらう。暫く來なんだので、此處に來て居るとも知らずに、寄らずに去んだんでもあらう。どう考へても不便な者ぢや。毛一本でも不足の無い人間に生れて人間の交際が出來んのぢやから。そんな理窟が天下にあるものか。今日の四民同等の世の中に、固より穢人でもなければ、罪人でもない、無垢清淨天女のやうな者ぢや。それをうぬ等が淺ましい心で輕蔑するとは、そも〳〵間違ふて居る。それも當人がそこに氣が付かなけ

りや善えが、此頃では親しくなる程自分の生れの賤しいのを恥づる様子がいよ〳〵可哀さうに感じられる。いつそ恥かしいと打ち明けてしまや其迄ぢやがそれもせん。心の中の苦悩を隠して色の如く快活に見せようとするのが實に可愛さうぢや。自分の生命を犠牲に供しても、彼を苦患の中から救ふてやりたいと思ふけれど、習慣といふ障害が横はつて居るので

玉枝が獨りつぶやいて居る最中に、

ホヽヽヽ

といふ笑ひ聲が忽然聞えた。何者かと見れば大木の蔭から半分顔を出して少女は笑ふて居る。やがて玉枝の側へ来て、

お魂消なしたか。そうと来て咽喉をこそばかしたんぢやがなア。

と笑ふ。

少し見ん内に人が悪くなつたよ。みいさん。

とくすぐり返さんとすれば、ハヽすぐられぬ内に、はやけたへりと笑ふたわいなさ。

今こゝで寝た間に夢を見た、面白い。お前の泣いた夢を。

どんな夢をなア。どうして泣いたんぞなア。

玉枝は黙つて笑ふて居る。

嘘ぢや〳〵。

嘘ぢやあるものか、お前に涙を添ふに泣き腫らして、貴方に奥様が出来たら……

言ひかけて玉枝は復黙つてしまふた。

それからどうしたんぞ、次をお言んかなア。

と少女は稍じれかゝる。

ちと言ひ難いから言ふまい。

あれ。そんな事言ふてなぶらずに早う次を言ふて使アさい。

と少し涙を含んで言ふに玉枝は哀れに感じて、夢のあらましを善き加減につゝみふて話した。

女は一寸玉枝の顔を見上げたが、又俯向いて急に塞いで来た。玉枝は悪い事を話したと悔んだが今更仕方が無い。

オイ。

と呼びかけて見ても返事もせぬ。餘程深く思ひ入つたる様子だ。玉枝は何とかして慰めんと考へたけれど言ひ出す言葉を知らぬので暫時黙つて草を捲つて居た。

オイ、又桔梗の薬玉を拵へてくれんかい。

女は黙つて塞いで居る。

何でも欲しい物がありやア拵へてやろか。

黙つて居る。

著物はいらんかい。……帯は。……簪でも指釣でも……絹くゝりでも……

いよ〳〵黙つて居る。玉枝は甚だ當惑して、

夢や何かどうでも善えぢやないか。

と夢の話を打ち消さうとした。

それでもなア、魂が抜け出して他所へ往たりするといふけん妾の魂が貴方の心の中へ這入たんぢやないか知らん。

そんな事があつて堪るものか。夢は其人が思ふとる事や何かを見るのよ。

そしたら貴方が思ふておいでるのぢやたア。

玉枝は端と答につまつた。

正直に言やア お前が さう思ふとりや爲んかと思ふて居つたから、夢につい見たのかも知れん。

女は又返事せぬ。

何ぼ心配せいても、一生、妾や何か持たんから。

女は矢張黙つてある。玉枝も後の言葉が續かぬ。日はずぶりと暮れて宵闇は辺の景も見えぬ中に、二人は向き合ふた儘、沈黙にはてしな

無い。蟲はそこらで、ジー／＼、と啼き出す。向ふの村で人を呼ぶ聲は遠くはつきりと聞える。兵營の喇叭は、歸れ／＼、といふやうにも、寢ろ寢ろ、といふやうにも聞かれる。水の音が次第に高くなる。遠くに鈴の音がする。段々に近よつて來る。終には馬の蹄の石に躓く音迄が聞える。又段々と遠くなつて行く。彼等は湯を沸かして待つて居る妻の顏を見ようとて急いで居るのであらう。馬士歌も鈴の音も蟲の聲も同じやうになつてしまふて、沈默はまだ續いて居る。斯くて三十分も過ぎたかと思ふ頃、女は大聲に突然と叫んだ。

あれ。大きなお月樣が。

玉枝も振り向いて見た。女は立ち上つて、極めて快活た調子で話しかけた。

今、あの山の上へ往とつたら何樣なか知らん。お月樣があれよりももつと大きう見えるかなア。

六

桔梗、刈萱、千日紅は宜しう。尾花に女郎花は宜しう。

草花を少しづゝの束にくゝつて、花籠に堆う盛りたるを、紐は前にて持ちながら、籠は背に掛けて居る。見る影も無き着物の胸も合はぬに、丈さへ短くて脛もあらはに、跣足の儘で、町々を呼びありく女花賣は何時に無く力無さゝうに見える。

桔梗に紫菀に吾木香……宜し……

やさしき玉を轉がすやうな聲は震へて、瞼には露を湛へて居るらしい。身に餘る思ひを胸の中に收めかねて、居るに居られず、言ふに言はれぬのであらうとは無邪氣な若き顔にも現れて居る。とぼ／＼と步行く内、ふと聲を掛けられて、見ると人力車が突つかゝつて來る勢ひに恐れて飛び退いた。車は二臺で前の方のは二十許りの島田、後の方は洋服著た紳士、どうしても夫婦と見える年ばへ、打扮だ。花賣は稍ゝしばし車の後から見送つて居たが、車が見えんやうになると、步行き出した。十步程行くと又立ち止まつて、嚴しき滿門の内を覗いて見て居る。先の車は此家から出たと想像して覗いて居るのであらうが、何故覗いて居るのかは分らん。門の内に寢て居た犬が何に驚いてか眼を明いて見ると、人が覗いて居るので、烈しく吠え初めた。花賣が步行き出すと、犬は門の前へ迄出て吠える。それでもまだ滿足せんので後を跟けて往て吠えて居る。人の屑の非人とて、同じ仲間の人間より畜生の如く取扱はれるを見て、大道が輕蔑するのであらう。併し犬は美しき着物著て通る者は吠えぬ。彼は繿布と襤褸とを區別する能力を持つて居るが、泥坊と佛とは一つだ。

花は宜しう、花は宜しう。

呼び步行いても買ふてくれる者が無い。人にも犬にも見捨てられた此少女の愁を、天は見知り顔に怪しく曇つて來た。

今日はまんが惡い。去なう／＼。

とつぶやきながら後へ引き返した。

町はづれの橋際、金毘羅の裏手へ掛ると、

みいさん／＼

と呼びとめる者がある。見れば其方の木陰に寄り集ふ仲間の花賣二三人、草に團欒して面白さうに話して居た。吾も其一人に加つて、前に花籠を下すと其に尻を据ゑた。

みいさん、此頃はいつでも／＼つまらんと言ふ樣な顔ばかりして、何んといふ事ぢや。又お父に叱られたか。

と瘦せ高い反齒の花賣が問ふた。

さうよ。何んや知らんが、つまらんけん、つまらん顔をして居りや、人は正直ぢや、誰も花一把買やせん。もう花賣は懲り／＼した。今日限り花賣は止めぢや。誰が花賣や

何が賣るものか。
そのいに愚癡を言ふものぢやない。花賣ぢやて、馬鹿にした事か、どうして出世するか知れやせん。女子は玉の輿とやら言ふげな。今のお嫁になるまい事か。のウたあさん。
さうよ。お谷さんの言ふ通りぢや。何時迄花賣をして居るものか、時々や旨い事もなくちや人間ぢやもん暮しには往かれやせん。今日は野村の婚禮で、籠を明けた上に祝儀迄貰ふて來た。
みいさん、少イと出やうが遲かつた。
と色の黑い、赤帶しめた女が氣の毒さうに言ふた。此話に俄に顏色を變へて俯向いたまゝ、兩手で胸を押へて居る不幸なる少女の心配も知らずに、反齒は愉快さうな調子で、
みいさん、まア聞いておくれ。野村の婚禮とはどんな者か一寸覗いて見たい、とたあさんが言ふぢやないか、お前、婚禮知らんか、お絹さんの時も見たろ、と言や、橋の下の婚禮と疊の上の婚禮と一つにしたと言ふて大笑ひよ。それぢやてゝ、神樣の爲る事ぢやなし、對な人間なら、野村も糸瓜もいつたものか、女子が男の處へ往きや、それで濟むのぢや。金銀の盃で三々九度とやら呪のやうた事をして、後は錦襴緞子の蒲團に寐る位な事であらうぢやないか。
サア、其ぐらゐと云ふぐらゐが分らんのぢや。三々九度たどんな面白い者か、錦襴緞子の肌ざはりはどんな心持がするか、それが聞きたい。お谷さんは物知りぢや、分つとるなら教へておくれ。
と赤帶が詰りにかゝれば、反齒得意になりて、わざと胸など張り出して見せ、
敎へてくれなら敎へてやろ。三々九度と言ふのは、聟殿と花嫁と竝べて置いて、先づ盃を嫁御へさす、それから聟殿、それから嫁御、飮み返し飮み重ねて都合九度飮むのが三々九度の盃、分つたか、それから錦襴緞子の蒲團と言ふのは……
分つた〳〵。もう聞かいでも善え。そんなら、あらたまつてお谷さんに聞くことがある。お谷さんは三々九度 お盃でも錦襴緞子の蒲團でも何でも彼でも善う知つてぢやが、こりや大方野村程の金持へ嫁入した覺えかあるのであろ、そして嫁入先は何處ぞ聞きたいものぢや。
そないに馬鹿にするもんぢやない。今度生れ變つたら、どこぞのお姬樣に生れて錦襴緞子も著て見せるぞな。
反齒が極めて眞面目に本氣らしく言ふたので、皆々少し笑ひ出した。赤帶も笑ひながら、
お谷さんがお姬樣であつたら、此方等にも少と得の附く事がありそなもんぢやな。
ム、、得が附くどころか、每日花を持つておいで、値善うに買ふてあげるけん。
赤帶は笑ひころげたので、外の者も釣りこまれて、大聲に笑ふた。反齒もたまらず終に笑ひ出した。赤帶はやう〳〵可笑しさをこらへて、
たつたそれぎりか、若いお姬樣ぢや。それでもお嫁入の時は少ときばつて祝儀でも出るかな。
と言ひながら又笑ひ轉けた。
たあさんは先時にからお嫁入ぢやの三々九度ぢやのと、そんな事ばかり言ふてぢやが、どこぞ心當があるのかな。何處へお嫁に行くのか、こゝで白狀しておしまひ。
赤帶稍々眞面目になつて、
知らんがな。
と言へば、反齒は猶面白がりて冷かしかゝる。
いよ〳〵白狀せんのぢやな。そんなら言

ふて見よか。何ぞ當つとるぞな。善えかな。あの辨護士の娘さんぢやないかな。

赤帯は少し險立てたる樣子にて、

好かんお谷さんぢや。誰うそんな事言ふておいてよ。お谷さんこそもう定つて居るといふ評判ぞな。

反齒は乗氣になつて、

そんな事言ふて兩方から言ひやひこしたてゝ分りやせん。たあさん、そんなら鬮を引いて見よ。なアみいさん、それが善えぢやないか。鬮をこしらへるぞな。

草を拔いて鬮をこしらへ始めし反齒は此方向いて、

四本こしらへるけん、みいさんも兼さんも、ついでに一緒にお引きよ。

と言ふと、

妾は厭ぞな。除けておくれ。

と今迄默つて居た十四許りの女の子が言ふた。

善えぢやないか、兼さん、遊び事ぢやがな。兼さんぢやてゝ何時ぞはお嫁に行くのぢやもの。

みいさん。桔梗一つおくれな。取るぞな。

桔梗の花を一輪むしつて何やら陰でして、

サア出來た。皆お引きな。桔梗のくゝり付けてあるのが當つた人は其亭主が定つとるのぢや。金毘羅樣のお鬮ぢやけん、間違ひは無い。

鬮の先を揃へて出すのを、皆眞剣さうに心配さうにつまんだ。

また引き拔いちやいかんぞな。一緒に手を開けるけれ、サア善えかな。開けるぞな。

手を開いた。鬮は銘々の手にぶらさがつて殘つたが、桔梗は意外の處へ引かれた。

みいさんぢや／＼。一升お買ひよ。

さう言や、みいさんの浮かん顔して默つておやが。ひよつと戀煩ひぢやないかな。

皆に冷かされるので、顔を眞赤にして俯向いて居る。

鬮が當になるものかな。妾や一生嫁入や何かせんけれ、見とつておくれ。譃言ふたら首あげる。

みいさんの首貰ふても仕方が無い。首の代りにお饅でもおくれんか。お饅もなるたけなら門饅の薄皮が善えぞな。

小さき女の子は色を變へて突然立ち上つた。

もう去のや。たあさん、巡査が來たがな。叱られん内に去のや。

巡査が何ぞや。惡いことせにや、叱られるもんか。

それでも此間叱られつたがな。

ありや人の内の前に立つてをつたけれよ。上手の上に坐つとつたて、怒られる氣遣は無い。

去なうや。

と反齒も言ひ出したので赤帯も立ち上つた。

まだ早いけれ、去にしなに桔梗摘して見よか。此頃の雨で大分出たに違ひ無い。

話しながら反齒と赤帯は草を分けて出て往た。小さき女の子も生きかけたが立ち戻つて、

みいさん。どうぞしたのかな。

心配氣に尋ねてくれるに、強ひて笑顔をつくり、

どうもせんがな、少と喉がきしこんで來た。直後から行くけれ、先へ去によつておくれな。

と紛らせば、

去んでも善えかな。直戻んておいでな。

と言ひ殘して二人の後を慕ふて走り行く。後見送つて少女は立ち上つた。今は憂愁を帶びて居た顔は變じて凄味を眼と眉のあたりにちらつかせて居る。二人の後影が木の陰に隱れてしまふと少女は再び町の方へ引き返して來た。

七

野村の家の前は人力車四五臺下りて、客やら商人やらの出入はげしく、家の内にはゝしり騒ぐ聲がして居る。やがて箪笥幾竿、長持幾竿、釣臺幾つ、列を爲して此處に止まつたので、暫くは軍の如き騒ぎであつた。引き渡す宰領、受け取る番頭、何やら言ひ爭ふ人夫の聲、荷物は一つ一つ内に運ばれて、外面の邊の靜まつた頃、奥の方でどよめき笑ふ聲が聞こえるには人夫が酒肴振舞はれての高話と知られる。車の客は一人一人皆歸つて往た。人夫もがや／＼とわめきながら空臺吊つて物など擔いで出て往た。内外稍ゝ静かになつて客の足絶えた時、一人の男、前垂掛けて商人らしきが格子戸あら／＼しく閉てゝ、十歩程行くと、後追ふて出て來た三十許りの肥えた女が、

「當さん／＼。

と呼んだ。呼ばれて引返して來た男は女と顏突き合して頻りにつぶやいて居たが、女の聲は次第に高くなつて來た。

「當さん、そんなら貴方嘘を言ふたんぢやな。

「さう言ふ譯ぢやないが、此間から忙しうて堪らんもんぢやけれ、つい忘れてしまふた。

「忘れる、忘れるてゝ、あれ程言ふて置いたのを、何ぼ忙しいてゝ、忘れるといふがあるものかな。それを忘れるやうなら……

「マアあんまり高い聲をおしなゝ、外聞が惡い。

男はなだめんとすれど、女は段々いらだつて來る。

「高い聲したりや何ぞな。あの位言ふて置いたのを忘れる貴方ならもう何も彼も頼みにならぬ。此方が惡いのよ、欺されたんぢやけれ。

「そないに怒つちや事が分らんがな。そりや忘れる譯に無い。忘れやせんけれど……

「今忘れたと言ふて置いて、又忘れやせんぢやの。

「マアお聞きな、忘れてしまや爲んけれど、此四五日といふ者にあの騒ぎぢやないか。どうする隙も無い。髪摘もと思ふても其間が無いのぢやけれ。

「忙しいのは前から分つとるのぢやもの……そんな事言ふたてゝ今日はお嫁入ぢやないか、お嫁入の日になつてどうなるものか。忙しうてまご／＼しよるのぢや。

「此方もお嫁入ぢやけれ、要るのぢやないかな。どうしても晩迄に……

六十にもなるべき大家の隱居にやあらん、杖突立てゝさつ／＼と歩み來る門の前、アヽと聲を伸す所を、肥えたる女ふと見つけて遠よりつ辭宜すれば隱居は杖の上に手を重ねて女を相手に何やら話しかける。女は氣が氣でなくもぢもぢして居るけれど隱居を捨てゝ置く譯にも行かず夢中で受け答へをして居る。其隙に男は小走りに逃げるやうに去つた。終に隱居は笑ひ聲を殘して野村の内へ這入つた。肥えた女は直に男の後を追ふて往た。これで稍ゝ暫時そこらに人が絶えた。

花籠負ふた少女は人無き隙を見すまして横町の角から徐りと現れ出た。格子戸の明いたままであるので、拔足して内庭へ忍び込んで見たが、玉枝の影も見えぬ。聲も聞えるかと襖に耳つけて聞いたけれど、だみたる下女の叫ぶ聲と爼板叩く音より外に何も聞えぬ。奥の間を覗いて見ようとするけれど、殊に幅廣の衝立に遮られて少しも見えぬ。其横の方に何とは知らず厚紙の袋著せたる器、其袋の上に桔梗の紋畫きたるが幾つともなく積んであるばかりだ。ど

うしようかとうろ〳〵して居る時、外面に足音が聞えたので、少女は出ようとする途端、先の肥えた女はいきせき歸つて來た。

誰だや。どうしたのだや。

といきなりに叫んだ、あわてゝ居る花賣の樣を見て怪しき者とかんづいた樣子で、

花賣がこんな處へ這入つとるが誰ぞお呼びたか。

大きな聲で奧へ向いて言ふた。

サアお出な〳〵、こんな處へ這入つて。

更に奧向いて、

お里さん。履物に氣をつけておくれな、一寸人の居らん間に、うさんな奴が這入つて來るけん、油斷も隙もなりやアせん。

花賣は格子戸の外へ閉て出されて、しばし躊躇して居たが、思ひ直して横町へ曲つた。野村の家の裏門の方へ廻つて見るに賤しき商人の出入の外、それと咎むべき人も居らんので何氣無き態に中へ這入つて往た。

八

玉枝は二親より結婚を勸められた時、三度迄は斷つたが、四度目に勸められて從順なる彼は最早それでもとは得拒まなんだ。強ひて斷れば斷られんでもなかつたが、自分に後暗い處があるので、今きつぱりと斷つてしまふと、却つて勘づかれるかも知れぬと思ふ、それが弱味になつて承諾せねばならぬやうになつた。尤も家族の者は此頃の玉枝の外出勝ちなのを怪しみて、惡所通ひでもするのではあるまいか、惡い友達に誘はれて藝者など揚げて遊ぶのではあるまいかと邪推して居るのである。玉枝の外出を止めたのも此譯で、急に結婚せよと言ふのも此譯であらう、終に何某といふ豪家の娘を貰ふことに定つて、結納の取りかはせも早速に濟んだ。

それから後といふものは、玉枝は良心に咎められて、濟まぬ〳〵と思ひながら樂しからぬ日を送つた。一旦承諾して置いて、其後またどうか善き考がつくだらう、と漫に思ふて居た善き考は今日が婚禮といふ其日になつても出ぬ。おぼこな、氣の小さい、世の中に經驗の無い玉枝は此急場になつて頻りに頭腦を惱ましたけれど、固より何の分別もつかう筈は無い。時が遁れば遁る程ます〳〵良心に苦められて煩悶して居る耳には、時計のチッ〳〵鳴つてゐる音も吾を責むるかと疑はれる。床の間に飾つてある嶋臺迄が吾を詰つて居るやうな。人の喜び騷ぐのを見ても胸がつまる。立つて見たり、坐つて見たり、心の落ちつかぬさまを見て、さすがにまだうら若き少年の婚禮嬉しくて心の浮き立つにや、と兩親などは察して居るらしい。其兩親の笑顔を見るにつけて玉枝はまた良心に恥ぢる。たまらなくなつて玉枝は書院の縁側へ出た。いつそ築山でも散歩しようと庭下駄穿いて飛石づたひ泉水の石橋へ來た時、向ふの枝折戸の處を見て非常に驚いた。枝折戸を小楯に取つて花賣は佇んで居た。

玉枝は轟く胸を押へて四方を見廻したが幸ひに人が居らんので靜かに小手招きした。少女は玉枝の前へ來ると其儘、飛石の上に身を投げて泣いて居る。玉枝はいろ〳〵言はうと思ふたけれど何も言ふことが出來なんだ。

どうして來た。

と只一言言ふた。只さう言ふたばかりで何の意味で言ふたのか、それは玉枝自身も知らぬ。少女は、

もう逢ふことは出來ません。

と言ひながら聲を出して泣いて居る。此後は顏見ることも出來ぬものと固く思ひ定めて居るらしい。玉枝はさうは思はねど、少女が思ひこみたる一言に、共に泣かずには居られなかつた。

そんな事があるものか。今迄のやうに逢はれるから。屹度間違ひは無い。

少女は固より此言葉を眞實とは信ぜぬ。只一時の慰めに過ぎぬと思ふて居る。今迄でさへ思ふやうに逢はれなんだのに此後また逢はれるといふ事は信じられる道理が無い。そんな事仰しやつても、それは謔です、これが一生のお別れでございます。と口には言はねど泣き聲が話して居る。少女の泣き聲を聞いて居る玉枝は、哀れの者よ、不便の少女よ、と思ふにつけて、其泣き聲がいろ〳〵に話しかける。屹度逢はれると仰しやる、其屹度が違ふ證據です、間違ひ無く逢はれると仰しやるのはもう逢はれんと仰しやる事でございませう、斯ういふことにならうとは固より覺悟して居ります、今更に此身のふつゝかをこそ歎け、露お怨はございませぬ、これから後は奥様と中よくお暮しなされ、暑さ寒さにつけてもお身大事とおいたはり遊ばしませ、妾はこれ限りお目にかゝりません、もうこれがお顔の見をさめでございます、若し月の夕、雨夜のつれ〴〵、昔の夢を思ひ出される事もありましたら、此世に亡き者と思しめして一遍の御回向を願ひまする。泣き聲は次第に絶望の調子を帶びて玉枝に訴へるが如く感ぜられて玉枝も共に泣くばかりであつた。玉枝は今全く少女に同情を表した。少女の身體は總て自分の身體である如く、少女の憂はこと〴〵く自分の憂である如く、少女の泣き聲は卽ち自分の泣き聲である如く、少女の未來は言ふ迄もなく自分の未來である如く、感じた玉枝は最早彼女を慰めようとは思はぬ。彼が死せんとするとも、それを止めようとも思はぬ。彼が死ぬるなら自分も一緒に、と思ふ決心の外、玉枝の心の中には今何物も無かつた。

忽ち築山の後に人聲が聞えたので、悲哀の極、殆ど正氣を失ふて惘然と立つて居た玉枝は吾に返つた。折悪しと思ひながら、ためらふべき時にもあらねば、泣き伏せる少女の耳へ口寄せて、

人が來た。早く出て。見つけられちや惡い。早く〳〵。

と急き立てたけれども少女は動かうともせぬ。玉枝は狼狽して處置に窮して居る內、人聲はいよいよ近くなつた。今は已むを得ぬと女を其儘捨てゝ置いて急いで書院の中へ隠れてしまふた。

この松は隨分人に骨を折らす松ぢや。なア乙や、妙になつて池の上へ出しやばつて居る。

これ遣るかな。

なに、止め〳〵。此間遣つたのぢやもの。

今日は止めぢや。

さうよ。夜のお客なら、誰も見る氣遣は無いわい。

石燈籠の苔を落してやれ。なア乙や。

話しながら築山の後より出て來た二人の園丁は、しよんぼりと立つて居た女を見つけて吃驚した樣子であつた。

何者ぞ、こんなは。

と若き園丁が言ふた。

追ひ出せ〳〵。何しに這入つて來たのぢや。混雜紛れに泥坊でも遣らうと思ふて。

と年とつた方の男が睨みつけた。

警察へ引つぱつて往こ。

と若い方の男がはやるのをなだめて、

今日は許してやれ、おめでたい日ぢや。

と年かさの方が言ふた。

そんならこらへてやる。早よ出んか。糞乞食。

若い方の男に肩を取つて突き飛ばされて、花賣は向ふへのめるやうに倒れた。花は籠の中から抛り出されて、ばらばらになる。籠の底に入

れてあつた小錢はあそこゝへ輪をなして轉げて居る。頓て少女は起き上つたが、花を拾ふでもない、錢を集めるでもない、着物の土を撲ふでもない、其儘默つて出て行かうとする花賣を呼びとめて、花も錢も拾ふに行けと鬪丁は命じた。けれども振向きもせぬ。仕方が無いので、男は迷惑さうに花と錢を集めて居る内に、花賣の姿は見えなくなつた。

空はいよ／＼物凄くなつて來た。風にもならず雨にもならず、おつと靜まつて居るだけ猶恐ろしいやうな感じがする。花賣が掻き亂れたる髮の間より閃き眼を更に瞪りて、黒雲の掩ひかかれる桔梗の紋の藏を睨みつけた時は、竝んだる藏が一時にびり／＼と震へるかと思はれた。しばし睨みつけて居たが、やがて振り向くと其儘後も見ずに往てしまふた。

九

野村の奥座敷に三々九度の盃めでたく濟んで、四海波靜かにと謡ひ出でたる時は、大粒の雨供待の車夫を驚かして風の音障子を破るばかりであつた。暫時は上下一同の騒ぎに風雨の音も押されて居たが、次第に烈しくなるに連れて、物にも紛れぬ樹の音、家の揺ぎは一座の興をさます程になつて來た。それを機に嫁聟も歸れば、家内の者も草臥に勝たれて、嵐にも構はず寐てしまふたか、釣瓶の音も聞えなくなつた。玉枝は床の中へ這入つたけれど、昔の事、未來の成行、それに對する自己の處置、種々の妄想妄念が身を責めて固より寐つかれる譯ではない。終には過去も未來も無くなつて、現在を如何せん、と言ふ問題ばかり心頭に殘つた時、體中の血は悉く頭に上つた心持がして、何んとなく氣狂はしくなり始めた。世界は靜まつたと見えて、風はます／＼荒れて來る。はては神鳴さへおどろ／＼と響いて來た。頭腦も胸も火燄となつて内臓から身を焼かるゝ苦しさに、玉枝は最早靜かに寐て居ることさへ出來ぬ。寧ろ家の外へ出て冷たき雨風に撲たれて見たら善き心地であらうと思ふた。

アゝ苦しい、アゝつらい。

と心の中で叫んで獨り悶えて居る。

自己は何故結婚したのである。

と自分で自分を叱つた。

何故と問ふは既に遅い。現在を如何する積りか。

と自ら問ふたが、

仕方無い、離縁するばかりぢや。

と自ら答へた。併し此手ぬるい答は自分に滿足を與へなんだので、玉枝はいらつて更に問ふた。

離縁、それは未來の事ぢや。現在、只今、此瞬間の苦痛をどうして救ふか。

この自己の問に對する答は直に決斷することが出來ずに稍々躊躇した。

一刀兩斷、仕方が無い。可哀さうなれど、最早決心した。不幸なる吾妻は結婚の其夜、夫の手に因つて殺害せらるべき運命を持つて生れて來たのぢや。殘忍なる無智なる先見の明無き吾、即ち吾妻の夫は結婚の其夜、罪も無き怨も無き美しき其妻を手づから殺害せざるべからざる因縁を持つて世の中に出て來たのぢや。吾妻と吾とは僅三時間の夫婦にして、未來永劫の仇敵であるべき關係を持つて結婚せざるべからざる事を神は豫め命じて置いたのぢや。

玉枝は妻を殺さうと決心した。否、殺さゞるべからざる者と思ふた。それから刃物の在處を考へた。刀箱は藏に在れば容易に出すことは叶はぬ。出刃庖刀は餘り殘酷な。何處かに懷劔が出て居たが、何處とも記憶せぬ。どうして

殺すべきか。暫く蒲團を被つた儘考へたが、忽ち、何の爲に殺さねばならぬかと言ふ疑問は起つて來た。此答が得られぬので、蒲團を頭から被つて俯伏になつて考へた。其儘眠つてしまふたと思はれる程靜まつて、暫時は身動きもせなんだ。

やがて玉枝はむつくと首を擧げて四方を見廻した。其顏付には何とも言へぬ凄味があつて、今迄の優しい玉枝ではなかつた。眼の中には、たしかに非常の決心を現して居る。何事も知らぬ花嫁は、眠つて居るのかどうだか、息の通はぬ死人かと疑はれる位である。枕許の行燈は、何處から來るとも知れぬ風にあふられて、或は明るく或は暗くなる度に屛風の西王母の顏を淋しく照して居る。

玉枝はふと耳を欹てた、雨戸の外に誰やらの泣き聲が聞えるやうに思ふたので。併し聞き直して見ると泣き聲ではない、庭木が風に吹かれる音だ。暫時すると又泣き聲がする。今度はたしかに庭木ではない。併し善く聞いて見ると矢張人の泣くのでもない。袖垣が風にゆすられて何處かで擦れあふのでもあらうか。忽ち電光が閃いた。するとアレー、と叫ぶ聲が聞えた。どうしてもこれは草や木なんどの非情の物が發する聲ではない。もう堪へられなくなつた。あの聲の正體見屆けねばと、玉枝は血眼になつて、まだ暖まらぬ鴛鴦の衾をそつと拔け出した。若し悟られはせんかと一足戻つて振り返つて見たが相變らず死人の如く寐て居るのに安心して、屛風の後へ隱れた。

十

風も風、書籍にも、記錄にも、天保生れの老人の記憶にも、觀象臺の測量にも、何にも彼にも未だ曾て吹いた事の無い大風は、花貴が桔梗の紋の藏を睨みつけた其日の夜、玉枝が花貴を捨てゝ何某と結婚した其夜の夜半過に起つた。すさまじき風の勢ひは宇宙の闇を動かして天と地をいぐはすかと覺えた。風に力を添へて時々閃く電光に照し見れば、山も川も北へ靡いて居る。草も木も北へ倒れて居る、砂も石も北向いて飛んで居る、茫々たる空間總て北へ向つて走つて居る中に、見よ、渺たる人一人、風に逆らつて南に向いて走つて居る者がある。彼は玉枝である。彼は眞暗な暴風の中を何處ともいはず走り廻りて、

みいさん〳〵。

と呼んだけれど、我聲さへ風に吹き取られて我にも聞き取り難きに、固より返事の聲が聞えう筈が無い。

みいさん〳〵。

非常な聲を出して又呼んだ。答ふる者は、がらがうと木の葉の吹き騷ぐ音ばかりだ。

みいさん〳〵。

半ば泣き聲に失望の調を帶びて叫んだ。誰も答へぬ。上手の大木のめら〳〵と折るゝ音は吾を嘲つて居るやうな。岩に當つて碎くる波の音は吾を笑つて居るやうな。玉枝は爲ん方盡きてぼんやりと立つて居れば風は闇の中から手を出して衝き倒さう押し倒さうとする。木の葉やら小石やらばら〳〵と目面を打つて來る。忽ち電光のくわつと閃くや否や、天の柱は折れて我が頭上に落ちかゝると覺えて、吾を忘れて玉枝は其處につッ伏してしまふた。暫く恍惚として居る内、ふと眼の覺めたやうな心持で、嵐の音にも波の音にも紛れぬ程の大きな足音を聞いた。二三人の人は段々我に近づいて來るかと思はれるので、玉枝は俯向いた儘、身動きもせず息を殺して居る。足音はやう〳〵に近くなつた。何者であらう、と考へて居ると彼等は何か可笑しげにから〳〵と高笑ひをした。此大風に此暗夜に平氣で笑ひながら歩行いて居るのを見

れば、よも人間ではあるまい。神か。鬼か。或は魑魅魍魎の類が自分を殺しに來たのであらうと思へば、いよ／＼恐ろしくてたまらぬ。彼等は話を始めた、羽團扇持つたる天狗といふ者でもあるかと思はるゝ聲音だ。

今夜の風では大方人間も驚いたらう。彼等次第に生意氣が增長するから、時々肝を潰させて遣るが善い心持だ。

と一人が言へば、大天狗らしき聲で、

今度はひどく遣られたわい。西濱には海嘯があるし、此近邊の村家は大分潰されたらう。それに北山の大杉が折れる、谷の杉林には根こぎにせられたのも多い。峰の五本杉も皆折れた所はすさまじい。絕頂の祠などは吹き飛ばされて跡も無いのはすさまじいよ。

南谷の方は十人許り往て居る筈だから大丈夫でせう。けれども此嵐ぢや弱い奴は翅が利かんから覺束ない。

と他の一人が言ふた。大天狗は更に他の一人を顧みて、

大將塚の老木はどうだ。

と言ふと、若き天狗の聲で、

今見て來た所ではまだ折れては居らんが、大分弱られ居るから朝迄は持ちますまい。

と答へた。

それでは佛の若い二人も今夜を過す事は出來ぬであらう。可哀さうだが助ける譯にも行くまい。

と大天狗の話の尾について木の葉天狗の聲で、

彼等は煩悶して居るから今の内に苦患を絕つてやる方が功德で。

後は風に妨げられて何も聞えなんだが、やがて又彼等の笑ひどよめく聲が聞えると、それに付いて風も水も木も草も一時に笑ひ出した。怪しき物は我に害を加ふるにもあらで通り過ぎたので、もう頭を擧げて見ようかと思ふて居る所へ、今度は優しい足音がした。或は女だらうと思はれる。

それが我の側を通り過ぎた頃徐ろに起きて見たがあやなき闇には何者も見えなんだ。稻妻はぴかりと照した。あはや我の前三尺の處に女が立つて居たので、あらみいさん。と言ひさま玉枝は飛びついたが手は空を攫んで足はよろめいた。殘念と足踏み止めて再び闇を探つたけれど風より外に手に障るものもない。絕間無くきらめく電光に見透かせば向ふの森の樹陰に隱れたやうに思はれて遮二無二叢の中を分けて行つたが少しも分らぬ。詮方なく大木に倚りて川の面を見て居る時きら／＼／＼と稍〻しばし照し光に、と見れば向ふの絕壁の上に雲に臨む端近く、女は悠然と立つて居る。丈に餘る黑髮を風に吹かせ、此方を向いて莞爾と笑んで居た姿はどうしても神樣とより思はれぬので玉枝は只尊さに打たれて、さすがに、みいさんとも言はれなんだ。再びもとの闇に立ち戻つては又たまらなくなつて、みいさん／＼。と狂ひながら走つて行く後より、いきなり我にしがみつく者があるので、アレーと死物狂ひで叫んだ、妖怪にでも捕られるのかと思つたので。そちらへ行つたら川へ落ちます。といふ聲はたしかに女の聲であるに、嬉しくて、みいさんか、さつきにから尋ねて居た。と言ふたのは聞えたやら聞えぬやら向ふでも何やら言ふたやうだが風の音に壓せられて少しも聞えなんだ。引かるゝまゝに木の間を橫ぎつて田圃へ出た途端正面より颯と吹いて來る暴風に得こらへず其儘其處へ倒れてしまつた。嬉しさに心ゆるみがして今迄は平氣で凌いで居た風に吹き倒される迄弱つたのであらう。それではいかんがな。と引き起されて抱かれるやうにして歩行いたが又吹き直す風に吹かれて二人一緒に草の上へ轉んだ。女に起さう

として苦んで胴を抱き上げると力盡きて手がゆるむので又だうと倒れる。電光一閃、雷鳴はおつかぶせる如く響いたので、吾知らず女は玉枝にしがみついた。胴に耳つけて胸に手を當てて静かに聞いて居れば玉枝の呼息あらく心臓が高く打つて居るのが善く分るから女は驚いて、難儀なのかな。と言ふて見たが返事が無い。耳に口つけて、胸が難儀なのかなア。と再び問へば幽かな聲で、苦しくはない。と言ふ。恐ろしいのかなア。と言へば恐ろしくもない。といふ聲いよ〳〵幽かな。どうしたら善えか知らん。と少し震へ聲になりて氣遣へば、どうもないで、斯うして居れば。とばかり口籠りて、やがて身を起しさま女の手をしかと握つた其手は震へて居る。風はます〳〵荒れる。神はいよ〳〵怒る。惡魔はありたけの聲を出して愉快を呼んで居る。雨は加はる。闇につのる。咫尺を分たぬ目の前に一塊の火焔降るかと思ふ間もあらず雷とも知らず何とも知らず只天地は音となつてしまふたかと思はれて、女は玉枝の膝に頭をすりつけた。山鳴り川響きてしばしはどよみわたりし音少しやみて、玉枝もやうやく我に返りたる心地に、餘もそれ程に怖がるには及ばないものを。と慰めた。それにやゝ力を得て、まだ生きて居るかなアといふ聲尋常ならず。何が恐ろしい、鳴神は木の叉をねらふてこそ落ちるものお前のやうな人の上へは落ちて來るものでない。何が恐ろしいてゝ、鳴神樣は落ちいでも聲だけでも恐ろしいし風も恐ろしいし闇も恐ろしいし、斯ういふ時に人を喰ふやうな獸が出て來る者ぢやと聞いたが、出て來たらばどうしませう。妾一人であつたら今宵は屹度生きては居られんがなア。獸はおろか、此分では此世の中のをはりかも知れぬ。それは何の事ぞなア。人間も無くなつてしまふ、世界は皆な微塵になつて何處かへ飛んでしまふだらう。世界が碎けて此地べたが坐つて居る下から無くなつたら妾等は何處へ落ちて行きます。それは下へ落ちるか上へ飛ぶか仕合せにどの星かへぶつつかつて二人で氣樂に暮すことが出來るかも知れぬ。そんな嬉しいことになるものなら、若し一人づゝ別別にならぬやうに貴方の袂と妾の袂と斯う結び合せて地の底海の底何處迄も離れぬやうに、これなら死んでも恐ろしうはないがなア。と微笑む顏を思はずはつと照されて互に見合す一刹那の快樂は實に二人にいふにいはれん程であつたらしい。

玉枝は嬉しいと思ふと又氣が遠くなつて居る如く身を投げた。さすがに人の惱ましげに弱つて居るのを見ては女は否から氣強くなつて、さま〳〵にいたはつて居る。玉枝は只力無き聲に、みいさん死んでも。といふあと分らずにがう〳〵と相變らず吹き荒んで居る。氣をたしかにお持ちなさい、弱いことといふては負けます。と眠たがる子を起すやうに腕に抱へて抱きしめたが物も言はずに非常に弱つて居るやうな。餘りのいとしさに熱き唇を冷たき額に當てたので少し氣が付いたらしく玉枝は眼を開いてそこらを見廻した。見廻して居る内に何を見付けたか急に立ち上つた。金の蛇〳〵。とあわてゝ袂を引いたけれど女は立ち上らなんだ。死んでも善えがな。蛇は居らんがなア。少しも動かぬのでいよ〳〵いらだちてはつと引くと袂の結び目はわりなく解けた。玉枝は蛇に追へられると思ふて一生懸命、森ともいはず田ともいはず街を飛ぶかと駈け出した。やがて何やらに躓いてはたと倒れた。玉枝は最早起き上る力は無い。荒れに荒れる風の音も果は音樂の如く聞えて遠くで面白く鳴つて居る。

十一

玉枝が眼を開いて見た時には我家の座敷

の中に蒲團を着せられて内の者誰彼となく取り巻いた中に寝て居る自分を認めた。不思議に感ぜられて成行を考へて見たが夢であつたか現であつたかそれも分らぬ。昨夜の事であつたか一年も二年も前の事であつたかそれも分らぬ。家人に聞いて見ようかとも思ふたが其答を聞くのが恐ろしいやうで終に聞いても見なんだ。併しその事を思ひ出すたびにいつでも一種異様な感に打たれて體が痲痺するやうであつた。

玉枝は夜になると熱がたかまつて譫語をいふのが例で、看護人の油斷を見ては床を飛び出さうとする事さへある。「それ、金の蛇が屏風の後へ隠れた」「あれ書院の庭の枝折戸の處で女の泣聲がする」などゝいふので側に居る女どもの恐ろしがるのは毎晩の事である。

こゝに不思議なるは去にし夜の野分はげしかりし後、眼の丸い女花賣の桔梗刈萱といふやさしい聲を聞いた者は此町に一人もない、同じ仲間の花賣さへ其行方を知らぬといふ事であつた。

（明治三十年）

花枕

上

神の工が削り成しけん千仭の絶壁、上平に草生ひ茂りて、三方は奇しき木の林に包まれ、東に向つて開く一方、遙の下に群れたる人家、屈曲したる川の流を見るべし。此處に飛び來れるは、さゝやかに美しき神の子二人、何處よりか採りて來し種々の花を植ゑ試みつゝ、白き羽の一人は黄なる羽の一人に向ひ、

「匂よ。菫、苧環、櫻草、丁字草、五形、華鬘草の類は皆此方に栽ゑて枕元を飾るべし。」

「それこそ善からめ。吾は此方に蒲公英、母子草、金鳳花、金仙花、福壽草など栽ゑんは色は如何に。見よ、光よ。色彩美からずや。」

「あらまし出來上りぬ。吾は猶五形を殖やすべし、五形の花は最も柔軟に頭ざはり善しと宣ひしかば。汝も金仙花を減して蒲公英を增しては如何に。」

「さても美し、此處は恣の儘にてあるべし。嫁菜、薺、蓬など少しは善からん。」

「それよ、思ひ出でたり。茅針は肌ざはり惡しとのたまひけるぞ。そこらに一本にてもあらば拔き取れよ。匂よ。汝は最早植ゑ終りたるか。」

「光よ。これ見ずや、吾谷の底よりやうやうに採り出でたる蘭の二本三本、此葉の得ならぬは何處にか植ゑてまし。枕邊少し離れて東風吹き入るゝ處ぞ善かるべき。」

「それ濟みたらば、山吹を裾の方に栽ゑんと思ふに、汝も手を貸せよ、一人の力に及ばねば。」

山吹の花一むら植ゑ終りて、二人の神の子は右より見つ左より見つ、自ら寐ころびても見つ、飛び上りて上よりも見つ、手を拍つて喜びぬ。

「匂よ。わが君のいでまし處またなく美しく出來たるよ。これならば、よも五濁の人間界とは見えじ。」

「光よ。吾に未だ飽き足ら節あり。花の枕、花の褥、花づくしの閨のぐるりに花の莖無きは口惜しからずや。」

「吾も聊か思はぬにはあらねど、何を幕にすべき。」

「言はずとも幕になるべきは山藤の花なれど……」

「其藤を如何にして吾等の力に移すべきか。」

「光よ。吾もさは思へども、思ひ立ちては止まるべくもあらず。吾力のあらん限りを盡すべければ、汝も力を合せよ。」

「匂よ 汝も膽太き事を思ひ立ちしものよ。されど出來るだけは試みなん。來よ、匂よ。」

二人は山深く分け入りつ、藤の生ひひろごりたるを求め得て、辛く其を纏ひつきたる樹の枝より取り放しぬ。森の中を引きずり行かんは枝、荊棘に蔓を取らるゝ憂あれば、宙を飛んで提げ行かんと、談を定めけるに、さらばとて二人は其を携へ虛空に上るに、餘りに重ければ、力盡きて屢ゝ森の上に落ちんとす。

「匂よ。吾は最早堪へ得じ。藤を放すべきか。」

「今少しなり。光よ。辛抱せよ。今此處にて森の上に落しなば蔓は再び樹にまつはり花は無殘に散り落つべし。今少しにて閨に達すべきに、此處にて挫けなば今迄の苦勞は春の陽

炎と消え去らん。

髑みつ驚まされつ、漸くにして絶壁の上に來りぬ。二人は落つるが如く下りし儘、其處に倒れたり。光は頻りに息をはずませて、

「匂よ。吾手はしびれて、筋の切れたらんが如き心地す。最早吾にはこを植うべき力無し。汝自ら善きやうにせよ。

匂は徐に起き上りて瞼を瞠り、

「實にくたびれけるよ。さはいへ此處迄持來りて捨て置くやうやある。汝勞れたらば吾一人にても試みるべし。

と言ひつゝ、藤の蔓を取り、少し飛び上りては周圍の樹に幵を纏ひつかせ、又下りては又他の蔓を持ち上り、幵を鄰の樹に纏ひつかせなどす。斯くして仕事半ば成りし時、匂は急に悲しき聲を出だして叫びぬ。今迄草に横りて稍まどろみし光は悲しき聲に驚かされて、其方を見れば、匂は如何にしけん兩足を藤蔓に取られて體は宙にぶら下りし儘、そを抜け出でんと頻りに黄なる翅を搖かしてあせればいよ／＼蔓は足を締めて、逃れんやうも無きに、哀れに悲しき聲をぞ立てしなる。光はあわてゝ起き上り飛び上り纏れたる蔓を解かんとすれど容易に解けねば、自ら右の手を樹の枝に掛け、左の手を伸ばして、匂に之を握れといふ。匂は光の手を取りければ、光は、我手を力にして出來るだけ強く足を引き抜けと注意す。匂は教へられたる如く足を引きけるに辛うじて抜けたれば、草に下りて足の痛みを手にしてもみなどす。光は匂に代りて蔓をあちらこちらの枝に掛け渡し終りて、これも匂の側に坐し、

「見よ。蔓も張り終りぬ。見事々々。これだけの遊び處天上にもあるまじ。必ず男君の御意にこそ叶ふべけれ

と言へば、匂も四方を見まはして覺えず微笑みながら、

「いざ歸りて君に事の由を申すべし。光よ。行かずや。

「匂よ。吾に猶心殘りあり。あらゆる花は皆此處に集まりながら薊の缺けたるぞ飽かぬ心地する。赤き薄赤き紫なる薄紫なる、薊程美しき花は無きに。

「止めよ／＼如何に美しとも薊の刺の君が御體にも障りなば如何で怒り給はざらん。況して幵を移さんこと迚も出來べきにあらじ。

「さな言ひそ。御體に障らぬ處に植ゑ置かんに其等の心配は無用なり。掘り來らんは困難ならぬにはあらねど、出來ぬ事やある。暫く待ちね。吾試みるべし。

光は森の奥に入りぬ。匂は猶痛む足をさまざまにいたはりて光の歸るを待つ程に、

「匂よ／＼。早く來よ。

といそがしく呼ぶは光の聲なり。其聲をしるべに尋ぬれば、薊おびたゞしく林の如く生ひたる中に光を見つけたり。匂來ると見て光は薊の中より、

「匂よ。吾を救へ。吾は此薊の林にくゞり込みて最もうつくしき一株を得んとするに、手を動かせば刺に刺され、足を動せば刺に刺され、少しも仕事出來ず。已むなく思ひ絶えて出でんとするに、出口を失ひ、何處へ行くも刺滿ち／＼て出づるによすがなし。

と悲しく言ふ。匂は眉を顰め首を傾け、

「如何にせば救ひ出すべき。まゝよ、吾もくゞり入りて先づ刺を押しのけ道を開くべし。汝は其時吾に從ひ出で來れ。

と入らんとすれば、光は、

「待てよ／＼。匂よ。二人這入りて二人ともに出られずば何とせん。吾に手だてあり。汝は吾がために釣鐘形の花の大なるを一つ小なるを二つ取り來れ。

とこふ。匂は心得ねど教へられし花を摘み來

りて薊の中に突き入るれば、光はそを引き入れて、大なる花をおのが頭に冠り、小なる花二つは其中に各々の手を入れて手袋の如くし、頭と手二つとにて刺を押し開きつゝ、やつと薊の外に出で來りぬ。光は手を入れたる花を振り落し、聲高く笑ひながら匂を見て、

「さておどけたる狂言なりしよ。記念として吾は永久此花の冠を脱がざるべし。」

と言へば匂も笑ひて、

「吾も足を痛めたる記念を殘すべし。」

と共に芝生の處に歸りて、匂は藤の一房を頭に卷きつけぬ。二人は笑壺に入りて、光は、

　花の冠、とこしへに
　　吾があやまちの記念なり。
　色濃き藤の花輪世に
　　いさをを殘す汝一人。

と歌へば匂も、

　賢しき心、清き形
　　星と輝く汝が光。
　日の影透かぬ森の間、
　　花蔭み行く吾が匂。

と和す。二人聲を揃へて、

　神こそ待たせたまふらめ
　　吾怪我せしと知らでゆめ。

　今日の手柄をほめられて、
　　共に甘露に醉はんさて。

と歌ふ聲かすかに、霞に紛れて飛び去りぬ。

中

襤褸の著物いたく窶れたれどもつぎ〳〵の色紙なか〳〵に畫師に畫かるべき打扮に、半ば落葉を盈たしたる籠を負ひ、熊手を持ちて、森の中を歩み行く十四五の少女、垢つきよごれたれど何となく氣高く、一人この人氣絶えたる木立をさまよひて路を失ひながら泣きもせずいらちもせず淋しとも思はねば恐しとも思はず、恰も森を住家とする者の如く穩なる面持は住むべき世も持たず歸るべき家も持たぬ、世の外の神にやあらん。少女は當も無く下草踏み分けて行く中に、ふと立ち止り、少し體を傾けて、木の間を透し見たり。何物をか見つけたらん樣なり。拔足して橫へ外れ行くこと五六步、大木の陰に身を隱して覗き見る時、山鳥一羽叢を飛び出でぬ。近けば飛ぶ山鳥を追ひ廻して彼方此方へと走る程に森の奧に稍々明るき光を見て、鳥追ふことも忘れ、光を慕ひ行きぬ。

　僅に十步に餘る程の平地、木も無く雜草も無く美しき草夥しく生ひ出でて色々の花を著けたるにしばし見とれたる少女は籠を卸し熊手を捨てゝ終に花の上に坐りぬ。

「斯る面白き處ありと知らば妹をも伴ひ來べかりしに惜しき事してけり。妹は今頃折檻せられ居るやも知れず。吾も歸らば折檻を受くべきに定まれり。吾が折檻せらるゝは堪へ得べきも、妹の折檻せらるゝを見るつらさは如何にしても得堪へじ。今の母樣憎しとは思はねど、先の母樣あらばさぞ嬉しかるべき。何時もより吾の歸る時刻遲るゝ時は門の外に立つて吾を待ちたまはりし母樣、妹は其母樣の事知らねば、たゞ母樣は恐しき者とのみ覺えたる哀れさよ。それを思へば何時迄も家に歸りたからず。夕食して軒の下に寐るとも折檻せられて庭の隅に夜を明したるを思へば物の數ならず。若し斯る花の枕、花の筵に手足伸ばして一夜の樂き夢を結びなば明日は森の中に飢ゑ死すともなか〳〵に本望なるべし。されど出づるに惜からぬ家を出でず捨つるに惜からぬ命を捨てぬは妹あるがためなり、吾家に在らずば吾も折檻せられず折檻せらるる妹をも見ずに濟めども、さりとて如何ばかり、姉を失ひし妹の悲むべき。」

少女はつと立ちて厓端危き處迄進み、下を

見下しぬ。夕榮は東の空に殘りて、山々紫に暮れんとする時、鴉一むれ二むれ野を横ぎりて歸れば、川上僅かに光りたる水も霞みて見えず。きら〱と夕日受けたる屋根も森も一つに黑うなりて、大道一筋白う暮れ殘りたるに、蟻の這ふが如くに見ゆるは小荷駄の一列にやあらん。

「あの中に父樣や居たまふらん。」

と耳を向けて聞くに、鈴の音かすかに鳴りて風の吹くたびに父の歌うたふ聲さへ聞ゆるかと覺ゆ。

「父樣はたしかに歸りたまへり。父樣居給はば折檻も強からじ。吾は暫く此處に寐て行かんか。」

全く暮れはてゝ見る物も無きまゝ、もとの處に歸りて五形の上に身を横たへぬれば山吹の花は足を掩ひ腹の上まで垂れかゝりたり。眠らんとするにゆかしき香氣紛々と鼻を撲ちて我ながら夢とも幻とも分かず。

下

黄金の高殿、水晶の門、珊瑚の枝に玉を貫きたる雲の上の榮華は人間の理想にのみ畫かれて夢に見てさへ珍しきを、千代も八千代も變ることと無く此處に住みてはそれにも興盡きて、たまさかに人間界に下りて遊び戯るゝも榮耀過ぎての物ずきなるべし。男神は萠黄の羅を著流して手に短き杖を持ちながら透明なる卓にもたれ、

「光は居ずや。匂は如何にせし。」

と呼び給へば、二人は紅の帷を掲げて入り來りぬ。

「時こそ善けれ、出で行くべし。光は笙をや用意したる。匂は琴を携へたるか。」

二人は用意とゝのひたる旨を答へ、さらばとて男神立ち上らんとし給ふ時、白銀の屏風に吹かるゝ如く開きて、やがて女神は身を現し給ひぬ。やゝしばし樣子見給ひし後歩み寄りて男神に向ひ、

「何處にか行き給ふ、二人を伴れて。」

と玉の如き聲に少し角立てゝのたまへば、男神も稍ゝためらひつゝ、

「今しも人間界に遊ばんと思ひて出で行くなり。御身が靜なる呼吸十ばかりの間に歸り來べきに暫し待ち給へ。」

女神は眉を顰め胸を兩手にて抑へながら、

「汚れたる振舞なしたまひそ。下界には惡魔も多からんに心を用ゐ給へ。あまつさへ人間にも美女ありと聞くに、妾が胸に火の燃ゆること多かり。今宵も恐らくは人間の美女を伴ひ給はん、それを思へば胸の火は妾を焼き盡し此高殿をさへ灰になさまほし。あな苦し。光よ。匂よ。汝も善き程に遊べ。足の裏の汚るゝ遊びはせぬものぞと誡め置けるに、下界の土を踏みたがることよ。匂よ。汝が足に血のにじみたるは何故ぞ。疾く語らずや。」

と急きたまへば、匂は畏みて藤蔓に足をからまれたる由語りたり。

「それ見よ。惡戯すれば善きことはあらじ。光の羽の痛く破れたるも要こそあらめ。何したるぞ。」

と問はれて薊の中をくゞり出でんとて斯く羽を傷ひたる旨言ひ出でぬ。男神は女神をなだめて、

「さな怒りなせそ。實は今宵吾一人の少女を艱苦の中より救はんとするなり。さはれ其は吾が仇なる心にあらず。心正しき少女の人間の苦を受くるを見るに忍びず、此處に連れ來りて御身の腰元と爲さんと思ふに御身も心よく受け引き給はずや。」

とのたまへば女神纔にうなづきたまひけるに、

「さらば直に歸り來んに其處にて待ちたまへ。」

と言ひ殘して男神は二人の神の子を從へ立ち出

で給ひぬ。門を出でゝ見まはしつゝ男神、
「人間界は暗し。路を誤らずや。
と問ひ給へは、光、
「よく〳〵究め置きたる路なれば誤るべくもあらず。今日の下に見ゆる闇の中にも殊に黑きは森なり。あの森の續きにこそいでまし處はあなれ。
とて急ぎ下り行きぬ。男神は光と匂に導かれて闇の中を下り給ふ程に森近くなれば、先に行きし光は少し引き返して、
「はや到り著きぬ。如何すべき。
と言ふ。男神、
「少女は來てありや、潛に下りて見よ。
とのたまへば、匂は下り立ちしが直に飛び戻り、
「花を枕に眠らんとするけはひなり。
と言ふ。
「好し。さらば汝等はこの梢に在りて樂器を奏でつゝ「眠れ」の曲を歌へよ。吾は下りて彼の穢を洗ふべし。
とて男神は花の上に下り少女を窺ひ給ひぬ。樂は始まりたり

寐よ、寐よ、寐よや。
寐るべき時は來りたり。
人より天に近き森、
一夜を眠れ花ざかり。
ねむ、ねむ、ねむれ。
枕を花に眠る、誰。
ねむ、ねむ、ねむれ。
浮世に一人清き汝。

神は三たび少女を廻りぬ。又樂の音

寐よ、寐よ、寐よや。
褥を草に代へて寐よ。
捨つべき浮世汝が浮世、
濁らぬ夢を結べやよ。
ねむ、ねむ、ねむれ。
眠らば神にならん、汝。
ねむ、ねむ、ねむれ。
眠れと汝をさそふ、吾。

神はやがて山吹の一枝を折りて振りかざしたまへば、露は水銀の如く凝りて、少女の顔とも言はず體とも言はず玉を轉がしぬ。少女は笑ひかゝりし顔に眠を湛へて面白き夢見るが如く起きんともせず。「洗へ」の曲は始まりぬ。

洗へよ、洗へ。
汚れを洗へ花の露、
露ふりそゝぐ額眉。
洗へよ、洗へ。
洗はゞ花の露雫、
雫に冷やせ胸の慾。
洗へよ、洗へ。
洗へば凝りて露も霜、
霜置きまどふ足も手も。
洗へよ、洗へ。
洗ひあげたる汝が體、
白玉椿白き肌。

神は少女を洗ひ終りて少女の額に吻を當てぬ。光も匂も共に下り來れば神は少女をよそほへと命じぬ。二人は山吹、藤を取りて少女の髮に插し、種々の花飾りを編みて首に掛け腕に掛け胴を卷きなどす。裝ひ終るを待ち「覺めよ」の曲をしらべよと再び命ぜられて、二人は少女の枕元に坐し笙を吹き琴を彈き出でたり。

覺めよ、覺めよ。
眠るは何處の賤の者、
覺めなば神の天少女。
夢の世ながら人間の
夢より出なば神の夢。
覺めよ、覺めよ。
菫、五形の花衣、
藤、山吹の花かつら。
こゝろみに乘れ天つ雲、
人を離れて高き空。

少女は静かに身を起していぶかしげに四方を見れども何物も見えず。只妙なる音樂の響に感歎の耳を澄ましぬ。斯くと見て男神森の梢に上り給へば、光も匂も樂を奏しながら男神につきて上りぬ。少女は樂の音喧はしく、遠くなるまゝに足を斂つれば、足は自然に地を離れて、飛ぶが如くに倶に上りぬ。神と神の子は少女を誘ひつゝ樂を鳴らして次第に高く上れば少女も次第に高く上り來る。少女は不圖我身を見るに種々の花身に纒ひて闇にも自から光を放つに自ら驚き、上の方を仰ぎ見れば玉の臺など畫に見るやうに光りて遙に浮びたり。下を見れば烏羽玉の闇、何處までも黒き中に赤き圓き珠の如き者轉び出でたり。

「こは何としたるぞ。」

と怪みつぶやきて立ちとまれば、匂はそと少女の耳に口を寄せ、

「上に見ゆるは天上界、下に見ゆるは月球なり。我男神は御身を人間の苦より救ひ出だして天人には爲し給ひたるぞ。」

とさゝやきぬ。少女覺えず笑みて、

「そは嬉しさの限りなり。されど吾一度人間に歸りて妹をも倶して再び上り行かんは如何に。」

とやゝ氣遣はしげに言ふを打ち消し、光は、

「御身一たび人間に下れば再び上るに路なかるべし。はやはや上り給へ、君の待たせ給ふに。」

と耳にさゝやけども、少女は聽かず。

「しばしが程なり、願はくは待たせ給へ。妹を伴れて直に歸り來んに何の間も入るべき。」

とて光、匂の止むる袂を振り切つて投ぐるが如く身を落せば、忽ち本の花の上に落ちながら渾身泥の如く少しも動き得ず。やうやうに正氣づきて身を起し眼をこすれば、體は花の露に濆りて香は闇の空に擴がり、始めて夢見たる心地に茫然と佇む足下、今しも地を離れたる許りの赤き丸き月一つ。

（明治三十年四月）

月の都

上の巻

䷺ 渙亨王假有廟利涉大川利貞

第一爻 用拯馬壯吉

三十一文字の徳は神明に通じ十七文字の感應は鬼神を驚かすといふめるを、花に寄せ鳥に寄せては詠み出づる歌に戀の誠をあらはし、月に比へ雪に比へては口すさむ句に世になき美人の面影を偲ぶことこゝに何年、斯くても猶出雲の御神玉津島明神をはじめ八百萬の神々は知らず顔にうしろむき給ふは如何にぞや。末世に及びて神徳も衰へたるか我が信心の足らぬか美人一人今の世になき事かと許りあけくれ歎くすき心の何某、浮世をよしや見引の山の手邊に住居して今實平と重ねつきの[illegible]、目には見ゆれど手には取られずと歎つ道哲の評判、まだ十三の歳より[illegible]の[illegible]術を[illegible]使振り[illegible]らせて罪を造り[illegible]けもとなく[illegible]を[illegible]人とぞいふ。

此人若して、[illegible]下[illegible]に大きい[illegible]らめかす貧の子の陰に生れなば、麥刈り時の村芝居鎭守の森の盆踊りは引く手數多の身一つを、こゝの數談に月を忍びかしこの畔道に夜風を恨むこともあるべし。あるひは出入に[illegible]す下駄の響とひねもすはじく十露盤珠の音のみかしましき其中に奮聲高く生れなば、[illegible]の歸り念佛講の崩れは北の里の夜櫻に三十日の月と傾城の誠を知り、南の廓の有明にきぬ/\の柳其うしろ髪を引きたらんも、あはれや直人都の眞中に生れなまじひに數々の書など讀み覺えしからに中々に催馬樂めきたる片田舍のかざりなき人情も知らず、蒟蒻本の一二冊繙けて廓とは何處の外國ぞ、ナンシ、ザマスといふ言語は書よりもむつかしとぞ言ひける。

一薄氷一夜泊りの帰に水[illegible]のこじとの仇言[illegible]よりは出でて實に根引したる曉には先づ小指の不具なるを悔みはじめ、朝日の影窓に縮まりて下女[illegible]を吹ぎ[illegible]頃やう/\衾の中より片手現して[illegible]草二三服すひ[illegible]と吹かし、やをら身を[illegible]して、[illegible]、[illegible]、寢[illegible]のあけたけをならべたて、三度の食事には總菜の苦情、毎日の化粧には結髪の小言、大事の晝をうか/\と暮して夜に大引迄のしやべり續け、義理の母親を陰にては鵯手とぞ呼びける。これではまさかソクラテスも堪忍なるまじと、ある人の話されたる、何の事やら分らねど兎に角に傾城といふもの嫌なり。

さはなくとも女學校の學生、繩簾を引きずり牛の糞を戴き太き靴を細き靴にねり込み、[illegible]立てたる歩行樣を男女同權といふとか。やんごとなき際は夜會舞踏會に喜んで毛だらけの鬼の手を握り、其次は男女交際會に赤きハンケチ巻きたる首玉にかじりつき、其次は一枚のケットーに二人くるんで近所の寄席に出かけ、下々の下は薄暗き木陰に佇んで洋服の書生には禰が無いと申すよし。世はさま/\其女學生を妻と定めて五百圓の年俸に箱馬車をねだられ、味噌や濁醪は不消化物と名を變へ島田髷や振袖は野蠻時代の遺風と定まりたる事情なし。日曜の散步、花時の花見はこれ見よがしに手を繋ぎ、[illegible]ごしの[illegible]を覗き込みて淺草の觀音程に有難がる馬鹿らしさ、見るも嫌、聞くも嫌、女學生といふものは傾城よりも猶嫌なり。

[illegible]去つて[illegible]紫女死して淑女無き

こと〻に千年、せめては祇王、祇女、佛、常盤、靜、高尾、小紫を一つに舂き閉めて造物主にこれ直させたる程の者にてもあるべし。この廣き武藏野に紫のゆかりの「一本は」と覺えず微笑む意中の一物、人を誤り身を傷る毒矢なりとは白眞弓、引けばより來る戀は曲者、早くも覘ふ一分の虚。

第二爻　渙奔其机悔亡

今日は花見の宴にと直人は叔母の家へ招かれぬ。盃一めぐり二めぐり、はや櫻色に照りそふ大座敷に主客入り亂れての無禮講、折から來合せたる水口浪子の琴の祕曲、直人が得意の仕舞いづれ劣らぬ堪能の其あとは、盃飛び皿碎けて酒の泉溢れ肉の山崩れ下戸は座に堪へず。數寄を盡したる前栽の趣、遣水の流れもただならぬ築山づたひ、池の汀の小石道少し曲れば今を盛りの花の雲に埋れて悄然と立つ少女の姿、櫻の精の拔け出でたらんかと驚く直人は胸を靜めて二歩三歩近づきて徐ろに立ち留りぬ。今更逃ぐるにも逃げられぬ少女は目たゝきもせず眺めたる池の面、何とはなしに直人も詮方なきまゝ見詰め居れば、それと知るや知らずや樂しげに群れ遊ぶ魚の樣。緋鯉四五尾、稍々白み勝ちなる斑入の大きなる鯉一つ、黒き鯉十餘尾上下左右に重なりて池のかなたより群れくる目あては、水の眞中に蹲る大石一つ、石の鼻に來れば群鯉二つに割れ、一群は右より一群は左より石を廻つて再び勢を合せ左に曲りて松の木陰に頭をあつめ、一二遍くるり〳〵と廻る其輪おのづとはじけて又長き隊を組み渚に沿ふて遠く去りぬ。見る〳〵再び寄せくる隊伍整々一直線に大石を目がけてアハヤ突き當らんとする途端、何に驚きてかはつと隊を崩して横へ散り底へ潛みし鯉群、再び水面へ浮び出づれば自らなる鶴翼の姿を爲して、もと來し方へ歸る道すがら兩翼少しづゝ縮まりて、もとの隊伍整々敗軍を收めて歸り行く自然の妙機、一心に見とれたる直人は「あゝ面白」と叫びぬ。

群鯉去て跡なく、水は漣漪をつくりて松の影ゆら〳〵と龍尾を搖かすより外には物も見えぬ池の面、いづくよりとも無く薄桃色の大鯉唯獨り悠然として現はれたり。右へ廻り左へ返し高く浮み低く沈み、の〻字に泳ぎ巴に遊び序破急と次第にはやめて再び序に戻り全く靜かに體を定めてしんとする時、忽ち其尾に力を入れて一掉り掉れば眞一文字に一間許り進み、勢よわる所を尾を右に輕くひねれば石に添ふて左に曲り、渚に近よれば急がしく尾を搖かして杭の間を潛りぬけ、遠く廻りて池の眞中に浮み出づる時、颯と吹く風にさそはれてもろくも散る櫻の花一かたまり空に舞ひて少女の鬟を掠め、池の上にひら〳〵と落る影に驚きけん、きやぶんと音して忽ち深く沈みし大鯉、靜に浮みて水に漂ふ落花一片ぱくりと飲み込みて少し沈み再び浮き上りてさゞ波と共に吐き出す花片、其まゝ身を返して彼方の岸に行き止まり忽ち頭を沈めて底へと潛めば、しばし水面に動く尾も終に隱れうせし後には散りうく花幾片水と共に渦卷くけしき、少女は我知らず漏らす玉音「ああ美し」

「落花心あれば流水亦情を知る、つれなしと誹る一陣の風伯、梢の雲を吹き散らして水の上に積む雪、さゞ波に甃めらるゝ造化の美術今更につれなしと誰か思はん。三十六鱗老いて龍門に上るの念もなく、空しく小池の中に住みて花に戲るゝ今の心、何も彼も打忘れて樂める姿、お浪樣何と歌に詠みて下さらぬか。」問はれて驚く少女心轟きながら「拙き歌にはいかで及ぶべき、畫師ならばこそ筆にもすべき此美しさ」「其畫師にも畫けぬ程の美しき者此他にあり、そ

れ見せ給ふ氣は無きか」「筆捨山といふ名所ありと豫て聞けばそこに尋ね行き給ひ天下無雙の景色とく程見て來て其話聞せてたまはれ」「いや筆捨山の景色見る迄も無し。今こゝに立てる美形一つ」「それは何」「昔漢土の某といふ女はおのが像を三度畫き直させしといふ、それにはあらで幾度畫くとも畫かれまじき眼前の美形」「其謎は解けました」「それは—」「いはでもうつくしき此櫻花、昔より畫き劣りのすると申せしもの違ひはあらじ」とそらされて「其櫻花よりも猶うつくしく、しかも物いふ花まだ推し給はずや」「さらば花の露に永き日を囀る鶯か」と再びそらされて直人もどかしく「櫻と鶯を一つにしたる貴女の容貌女神にも遙か勝りて歌にも畫にも盡されまじ」と言ひ放たれ「なぶり給ふもことにこそ」と顔赤らめてうつむく嬌態消えも入りたき樣に、こなたもきまり惡げに俯向きたる直人、幾度躊躇ひし口吃らして「我家へは來て給はらぬか」と思ひきつていへば「來年の花見には參るべし」と又そらされて、今度は清水の舞臺より飛ぶ覺悟「只今は來給はぬか」

忽ち栗山の彼方より「姉樣々々」と妹に呼ばれて「今行きます」と逃げ行きたる後見送りて悵然とかたへの櫻の木にもたれ、吐息つく〳〵見上げたる春の空まだ暮れやらぬ夕の雲を西日に彩りて色紙に似たる其中に銀泥もて畫きたる三日の月影、一刻千金とは安い者なり。

第三爻　渙其躬无悔

直人は其日家に歸りておのが書齋に入りしまま寢もやらぬに按摩の笛、汽車の響遠音に霞む頃はまだ心も一つならず。やがて時計チンと一つ打つ寂しさ、世間ひつそりとして草木も眠れば、動く者は我が觀念許り。「豫て叔母樣に聞きたる浪子の性質優にして才あり博く學んで深く藏す奥ゆかしさ、殊に其歌其手跡の見事なる、正月の藪に筍は生ゆる今の世にもこれ程珍らしき物またとあるまじ。男さへ及ばぬものを、況して伽羅の香に咽ぶ深窓の令孃、汽車の中で聲高く新聞を朗讀する束髮の女才子爭でか其片腕にも足らん。此の女に配すべき男、天下に一人なりともあらば我れ其門を叩かん、浪子の父は紳商か法學博士ならではと言ひける由、まさかに彼女はさまでに淺ましき心はもたじ。我が意中の人、彼の意中の人」と思はず見る床の香爐に炷き殘りの香烟、朦朧として現はるゝ美人の姿、我身はいつしか叔母の家の泉水のほとり、一心に鯉を眺めたる浪子の袖捉ふる手、力なくふつと消ゆるに、これはと驚いて目を見張れば正面に掛けたる達磨の像、其面憎しと目を閉づれば婀娜たる面影「我家へは來給はずや」と逃ぐる裾にすがれば「こしやくな青二才が」と頭の上で高笑ひするは一丈に餘る鬼女の姿。

我胸ぐら攫んで投げらるゝに、身内ぞつとして眼を開けば無心の達磨「咄、我心未だ安からず」といへば、又天井にてから〳〵と笑ふ聲、夜はいたく更けたり。

「我れ生れてよりの學問は金モールの禮服に朝日を胸に輝かせ、月毛の駒の尾に春風吹かせんとの野心にはあらざりけるを、世の中は盲千人、法學博士ならではといふ浪子の父の不見識呆るるより外なし。今より一二年意を曲げて法律を學び博士の號を取りて彼奴に鼻明かせんか。いやいや我未だ左程に愚の奴とはならじ。我財産を賭けて投機商となり一攫千金の計謀成らば浪子は是れ手中の者なれど、嗚呼我ながら愚に呆れたり斯くまでに卑劣なる妄想を起さんとは。父如何に愚なりとも浪子は我を知らぬ程の愚にはあらず」と、とつおいつ每日の思案、さなきだに痩せたる直人の猶目に見えて衰へ行くやら覺ゆる母親の心配を察して、ある日の事叔母が來て「書齋に閉ぢ籠つて書讀むとも四疊半の世界

にては男の業を成すに疾し。天然の山水、實地の風俗に草枕を探り人情を知るこそ面白かるべけれ。くよ〳〵として犬死する都の能無しと笑はれ給ふな」とそゝのかされて「それこそ上分別、樹下石上の誓ひを忘れたる不覺さよ。さらば」と許り脚半草鞋をつくろふて飄然家を出で品川の町はづれに出づれば、はや旅の心ゆきて天か水か白帆ひら〳〵と飛んで著物の裾を吹く沖風、胸は忽ちに開け今迄の鬱積は一時に消えて跡を留めず。金澤八景を眺めて鎌倉に入り、土牢の前にそゞろ涙を留めあへず、頼朝の墓を尋ねて半ば頽れたる玉垣、七百年の苔蒸し蔦纏はりたる、思へば飛ぶ鳥も落ちし天下の御大將さへ、三寸息絶ゆれば骨ぞかし。鶴が岡に靜の昔を偲び、大佛を餘所に、江島にはわけて何事をか祈りける。大磯に虎子石を叩き化粧井を覗き箱根を越えて沼津、浮島が原、こゝへ來て雲間の富士を探す事初旅の興なり。薩埵清見の絶景に美術の眞相を感じながら宇津の山に蔦の隧道をくゞり、夜泣石は今泣かぬかと問へば淺草で見せ物にと思ひつく人ありてより泣き止みぬとなり。無間の鐘は唯物論の盛な今の世には後生願ひの人も無ければ、撞き破られんことを恐れて影を隠しけるよし。熊野の故郷、八橋の跡尋ねて後は奈良芳野紀州を廻り、須磨明石に松風村雨の昔を聞き、引き返して京に入り王城千年の榮枯盛衰、身に入て嵯峨野千鳥が淵に亡き人の俤をぞ偲びける。琵琶に七小町、石山に紫式部を夢に見て近江を後に磨針嶺、馬籠嶺越えて巴、山吹の子孫、山の中にも美女ありけりと、こゝからは歸り急がれて一飛びに都へ歸り著きぬ。

一月餘りの長旅、面白かりしも直人は更に一つの戀を増しぬ。一千里の旅、二十餘箇國、幾多の山川を經、幾萬の男女を見しも、富士山程の美人外に見當らず。頭より尻まで見上げ見下し、前より眺め後より眺めて一點の瑕無き此白璧、それにも劣らぬ意中の人、孰れか孰れ浪子と富士山、二個の情人一つに合せて見たし。

第四爻　渙其群元吉渙有丘匪夷所思

一生に始めてうつくしと思ひそめたる面影は終身忘れ難く、それに似ぬ者は醜女と極りぬる事淺まし。昔眇の姿に心を入れたる人あり。此人には天下の女皆目が一つ丈多過ぎたるよし。直人浪子を戀ひ始めては、三十二相圓滿の觀世音とのみ拜まれて、外の姿にに心とまらず、繪を見ても彫刻を見ても浪子に似ぬ顔恨めしく、小町も薄雲も天人もマリヤも、甚く〳〵憎きかへたしとぞ腹立てける。

曉早く起きて直人は行脚の昨日を思ひ出で、木枕に頭を痛めて時鳥の寢覺うれしかりし事など考へし頃、ひまつぶしの朋友二三人音信れぬ。選擧競爭の話を發端として、「壯士に傭はれなば資本なしの大儲け、借達る氣はないか」と一人が言へば、「そんな金儲けは何にもならず僕凌雲閣から飛び下りるから十萬圓くれるか」と他の者がいふ。「十萬圓は高い十圓に負かるまいか」「仕方がない百圓に負けてやろ」「さらば中折五十圓に負けて置け」と譯も無き冗話、直人は始終默つて浮かぬ顏なり。「五十圓といへば例の女義太夫殿は五十圓で身受けされたとは餘り安い話ではないか」と一人が言ふに、又一人が「水口令孃の婚約は持參金一萬圓支度料千圓といふ事だが、高木君聞いたか其話を」と言はれて直人は忽ち屹と膝を立て直し、「誰と結婚するのか」「誰あらう天下に名高き痘痕博士よ」直人の顏色は變りたり。されど友達の歸りたる跡にてよく〳〵考へ見たれば、あれは我をなぶらん爲の笑談か、さらずば根もなき噂ならんとまで分りたり。

直人はあるゆふべ蚊遣の煙を煽ぎながら、鳥

居嶺に掛りし時、腹は飢ゑ足は惱みて心地死ぬべかりしを、知らぬ女に菓荑を惠まれ戻り馬に馬士の情知りたる事など思ひつゞけし頃、直人の最も歡びたる例の叔母は來りぬ。四方山の咄も面白からねど、直人はそれとなく調子を轉じ聽耳して終に浪子が結婚の噂に迄話を落しぬ。「其の樣な噂は夢にも知らず」と叔母の返辭を聞いて安心すべき下心と察せぬか、叔母は無造作にも「結婚の日取も極り吳服屋の出入も繁しと取り取りの噂なり」と答へぬ。謹つかぬ叔母の答に直人は胸の動悸を躍らせたり。其夜は此事をのみ考へ明かせしつぐの朝、明星のきらりと光る時自ら大悟せり假令親は如何樣に迫るとも浪子は學位にばかされる程の愚にあらず一

つまらぬ／＼の口癖も言ひ飽きたる此頃直人は家を出でて向島への散歩、何處から拔けて何處通りしとも知らず、車夫に叱られ馬丁に銜き除けられ行く內、眼の前に遮る物あり。不圖仰ぎ見れば三臺の人力車を後に從へてそろ／＼と步行ながら今しも割烹店に這入る三人、一人は浪子、一人は父、浪子は他の一人の方を向きて嬉しさうに笑ふ横顏、彼奴、彼奴法學博士か。

直人は家に歸りて一間に閉ぢ籠りしまゝ飯も喰はず、人にも逢はず。浪子の笑ひし横顏はうつくしいのか憎いのか今に眼を離れず。どう考へ直してもあの時の笑ひは嬉しき笑ひとより外は見えぬものを、此度は三日三夜まどろみもせずに考へし結果は浪子にかゝる疑ひの雲終に濛々と廣がりぬ。一今迄つまらぬと言ひし浮世も今は厭なり。好嫌ひのありし人間も今は盡く厭なり。あゝ我ながら過てり。理想の美人を人間に求めしこと第一の不覺、言ふも詮なし。他人が嫌なより我自ら人間が嫌なり。

第五爻　渙汗其大號渙王居无咎

直人の母は風邪の心地と床に就きぬ。三代出入の醫者殿に診せしに「これはお染風邪といふ流行風邪、何の氣遣ひもあるべきか」と、平氣に云ひ放したる容體は日増に惡くはつきりと熱の離るゝ時も無きに、今は葉末に搖ぐ白露、風をも待たでこぼれん程なるに、ある夕浪子を枕元近く坐らせ、「今に始まらぬ我病氣、去年の冬より咳氣も治らず、重るとは無くて弱りたる今度の衰へ、殊に覺悟の上なれば今更に驚く事もなけれどまだ行末の見定めつかぬ御身一人殘さんことの心元なく、はかなき命を一日も生き延びんと思ふ事老の心の愚癡なるべし。父樣さへ御存生ならばと行く水に數かく樣な考へ詐り先へ立ちながら、其御顏だに知らぬ御身に見すべき寫眞もなし。父樣は若き頃をこゝの花、かしこの柳と愛で興じ給ひし中に御代はがらりつと代つて此世の中、昔の夢さめて見れば時勢に後れたる事悔しと其後は外へも出でず朝も酒、夕も酒と夜晝の差別なく、終には酒の爲に世を早うし給ひき。せめては御身の叔父樣に當り給ふ人なりとも居られなばと思ふ眞人さへ身を持ち崩して家を出給ひしまゝ今に何の便りもあらず。ある人が陸奧の天涯にてチラと見たる面影、それかとも思ひながら姿變り居たれば定かには知れずと言ひしもはや十年の前なり。親子は血を分くると言ひたれど、父樣にこれ程迄に似たる御身の顏見るに付けても氣遣はしき事の多さ、若い內は二度とあらぬ事を取り返しのつかぬ事必ずし給ふな。此母の親戚に何某といふ娘、善き年ばへと思ふまゝ、幼き時より許嫁ともいふべき事なりしを、今迄は挨拶なくて默止けるが御身の考へは如何にぞ」と問はれて直人はひたと當惑しぬ。一此事許りは御許し下されーといへば水口の令孃娶らんといふ考へかーと再び問はれて驚く額押し隱し一世の中總て嫌になりたる今好きの嫌ひのといふ事も覺えず。いつかは出家せんと思ふ素志より外は無きを、

結婚は思ひもよらぬ事、「これ許りは」と思ひきつたる直人を見上げて、それは若氣の不料簡といふものと、後は頻りに出る咳に惱まされて言葉つぐべき隙も無く、其後はがつかりと弱り果て、人生の定めにはまだ五六年といふ坂越えかねて秋風よりさきに成佛したりけり。

産婆の祝儀と法師の布施と孰れか多きとある時は飽く迄冷淡に見たる浮世も、母に後れてよりは中々に悲歎の涙止めあへず。我一生の大望も皆母樣の爲にとこそ思ひしに、今迄の養育の御恩、露程も酬いで、二十年の艱難を手向の水の泡沫と爲し給ふこと、思へば我程の不孝又とあることかは、墓の前に跪けばあり〱と見ゆる御姿、此下に斯く眠り給ふらん。こゝらひし〱と立ち並びたる塚墓も皆浮世の苦樂のはてなりとは今迄も知りながら、白骨の主が躍つたり泣いたり笑つたりせし昔を思ひやる事今が始めてなり。此主こそ我が苦みをも知り給ふべけれと何とも知れぬ無縁の墓に手向くる水か涙か。

夕暮の鐘聞き初めてより佛經にのみ曝せし眼も今は藥瓶を睨む身となりぬ。叔母の深切なる介抱に助けられて一月餘りの後一先づ病の床を上げけるが、殘るかたみは凹みたる眼と嵩みたる借財なり。家も地面も賣りて吹き透す風に涼しき町はづれの怪しき小家に移りぬ。

第六爻　渙其血去逖出无咎

「お孃樣何故御返答をなされませぬか。」といふて此乳母でも覺えのある事、島田髷にぱら金の一つもかけ外面歩行くにも帶の結び樣氣遣はしく十歩に一度づつ振り顧る年頃には、男といへば嬉しさより恥しさが先に立つもの、妾のやうな賤しい生れの三平二滿でも二親の話偸聽して我身の縁談なりし時、動悸の打ちしことついぞ外に覺えなし。折に觸れては婚禮せぬといひ給ふ事、お孃樣のみか此頃の若い女衆の流行言葉、其癖お友達の中でも一生男は持たぬといはれしお方、大方ははや子守歌まで覺え給ひき。お父樣があのやうに心配して仰せらるゝこと、袴とか博士とかいふお學者なりとも強盜とか豪商とかいふ素封家なりとも、どちらへころげても損のなき御縁、貴女の采配一つなり。それ程に迷ひ給はゞ名を書いた紙縒二本こしらへてそを引きても心を決め給はずや。じれつたやまだ御返辭の無きは兩手に桃櫻、いづれと分けかね給ふなるべし。明朝あらためて伺ひますれば今宵の夢に見たるお方とお定め遊ばせ」としやべり散らして歸る後に浪子枕に就きしも、生憎に犬の遠吼鼠の障子傳ふ音のみ聞えて睡氣さゝず。

「從五位に嫁ぐ者五萬圓を娶る者世の中は大方是なりと誰かの笑はれたるはこゝなり。從五位貴くとも身にふさはざれば笊さげて豆腐買ふに勝りたる苦みあるべし。五萬圓少からねども身もちあしくば大道に筵を敷いて行來の憐みを乞ふのはてなしとも言ひ難し。二人の心だに合はば乞食するとも手鍋提ぐるとも、そは厭はねど親の命に負かんこと何よりの不本意なり。固より親の御心は我が爲あしかれとは思ひ給はぬからに、假令ひ一旦は孝道に負くとも行末望みを果しなば終に孝道に叶はぬ事もあるまじ。それにしても高木樣の何と思ひ給ふか更に分らず。此方より如何に思ひを焦すとも片思ひのかひなからば何とせん。唯これ許りは氣がかりなり。さりとて彼方より否み給ふとも今更に思ひ切らるべき事にもあらねば」と思案の中　姉樣迷ふたよ迷ふたよ」と妹お貞の寢言に驚き四邊見まはして兩手に押へしうつくしき胸の上に動悸の波しばしは靜まらず。「何の夢見給ふてか」と妹ゆり起せば胸なでて「嬉しや夢なりしか。姉樣と二人野に出て秋草摘みし折柄二三間彼方にそ

れはそれは可愛らしい小鳥、そろりと寄ればそろりと逃げ、走りつけば高く飛ぶ、餘りの事に十間行き二十間行きつい一町二町追かけて今度は慥に攫んだ手の內滑りて向ふの高い木に飛ぶよと見しが遂に行へ分らず。氣が付いて振り顧れば姉さまは見えず來た道は知れず。薄の穗の動く恐ろしさに姉樣呼びかけて泣く處を起された」と喜び顏の後ははやスヤ〳〵と眠りて涅槃にも入りなん樣のあどけなさ、迷ひ込むともいづれ極樂の道なるべし。

衆生を濟度するはお釋迦樣の慾、小鳥を捕るはお貞の慾、そも我慾はと浪子考へし時覺えず顏を赤らめ、今の心若し淨玻璃の鏡にも寫らばと恥かしさ限りなし。さるにても夢の辻占折に合せて氣懸りなるは神の告げ給ふにやあらん、はた我と我心の咎むるにやあらんと想ひ煩ふ夜は、ほのぼのと小窓の照り障子に明けて、八聲の鷄遠く近く聞え世間何となく騷々しき時、乳母はや御返答はと云ふ。猶躊躇ふて答の無きに乳母いらだち「さらば思ひ給ふ人外にあるべし試しに妾が中てゝ見ん程に、若し中つたならしつかり御返事なされ」と甲かと問へどもそれではなし。乙かと問へど猶中らず。最早思案に盡きたりと思ふ頃、忽ち鐵漿の剝げたる前齒二三枚現しての笑ひ貌。お孃樣これかと耳に口つけて囁きし時、俯きし浪子の耳、冬枯の礒の鷄冠菜見るが如し。「お父樣のお氣には入るまじけれど云はずにもすまぬ事」「さりとて先方の御心が分らぬに」といふも霜枯にすだく蟲の音、消え入りさうにいふ二言三言押問答の末「さらばお手紙を」と乳母は立ちて違棚の硯箱下しくるに卷紙おしひろげて書いては破り消しては書き、二時間許りにして出來上りたるを、潛かに乳母に渡した跡にて「姉樣の紅は眞黑よ」とお貞笑ひぬ。

今か〳〵と時計の針の動くたびに待つ返事其日は來らず。若しやお留守かも知れぬと理窟付けて大方明日の朝はといふた明日一日、身體の痩せたと思ふに何の便なし。待たぬ積りの夜も終に待ちあかして三日目の夜、御手紙をと妹の出した時、嬉しいのやら悲しいのやら少しも覺えず。いつの間にか封きつて讀み下すにも足らぬ短い返辭―いやです―

これを見た時の一瞬間浪子は我坐つてゐる下の疊も劈けて、我身は金輪奈落の底へめりこみし心地なり。正氣なく一夜明くれば堪へきれず、とつかはと我家拔け出でゝやう〳〵尋ねあたりし直人の侘住居、鎖もかゝらぬ破れ門、おし開けて內にはひれば雨戶障子開け放し書物は引き散らしたまゝ主は空蟬の殼、隱れるにも押込も無き裏借家の窓の戶ふと仰ぎ見れば「月の都へ旅立ち候」と書き殘した筆の跡、まだ乾きもあへぬ白露に、濡れて綻ぶ垣根の朝貌、今を盛りの花の色、誰に見よとてか。

下の巻

䷼中孚豚魚吉利涉大川利貞

第一爻　虞吉有它不燕

何處より來りて何處にか去る。我身の上知らぬ世の人の愚かさ。さりとて罵り騷ぐ哲學者が無理か道理か十人十色の見識、それも奧まで詮じつめれば譯も無き屁理窟の果は不思議分際に落つるぞ是非なき。百代の過客は入道の扇にも止らず。五尺の肉團は九年の坐禪にも猶腐り盡さずと聞けば、何を目的に蝸牛の廬に屈まりて蠹魚と情死せんこと詮なし。浮世を漏れぬ雨風に屋根は破れて月の漏る光は夢路に向上の一路を辿れども、憂きを忘れ草、燻らして唾壺に煙の昇り龍、何の通天の助なるべき。何處か旅路ならん。何處か旅路ならざらん。江天蘆花白うして初雁の一聲。來るとや言はん歸ると

や言はん、固より雁に故郷は無きものを。
　大隱は市に隱る。心こそ厭へ姿が世をば厭はゞこそ。さりとては凡夫の淺ましく墨染の衣に道心の怠りを勵み、錦襴の袈裟に絹布の昔を忍ぶことの恥かしさよ。況して出家ならぬ高木直人、行脚の姿に身を窶して思はぬ空の富士の根に菅笠の著工合惡く小石まじりの新街道に横ざまになりし草鞋の尻、早くきれたり。何事も猶浮世なりけりと足に任せて都を後に走り出でつ。いざ今より何處にか行かん。月の照る處花の咲く處。見渡せば天地茫々として山又山、水又水。
　我一人に九族昇天の望を繫け、墨染の衣に浮世を思ひ捨てたる樣、見るも尊き相好の五十に近き高僧、錫杖を鳴らしつゝ來掛る松縄手、とある切株に腰打ち掛けて見やる横合に小屋も無く筵も無く倒れた儘の一寢入、非人とは見えて手に扇一本を命のかなめ、一文二文の憐を乞ふて昨日と暮しけふの細布合ひかねて現はるゝ胸の色白きは生れ落ちての賤しき者ならずと、額を眺め扇を眺め額と扇を一日々々に、しばし見つめたる法師、つか〳〵と立寄りて搖り起せば大欠一つして「ひだるさに馴れては通ふ邯鄲の草枕、今しも胡國の王位に登りて食前方丈の饗應は鳳凰の羹、麒麟の脯、いざ一口と取る象牙の箸、何者か叩き落すと見て夢覺ませしは此賣僧の所行よな。さりとも我に一椀の飯取らせんとの好意か。如何に〳〵」と詰め寄る顏、樣子ありげに眺めて、「そも汝の名は何とかいふ」

非人「愚かや。我は無名の始に歸らんと思ふ者を。古人の癡肉團と云ひ酒嚢飯袋といひしも我名にやあらん。路通る人の乞食よ非人よと呼ぶも大方は我の名なるべし」僧「さらば汝は何處の生れぞ誰の子ぞ」非人「をかしや見かけにも似ぬ物知らずよ。天は父、地は母なりとも言ひ、聚まれば人畜餓鬼、散ずれば地水火風とも言はずや。渾沌の宇宙に二氣和合して暫時は差別の境涯なるか。さりとも昔西行が骨にて作りたて破れたる笛を口に入れ置きしものか。固より生住壞空の浮世、泡沫夢幻の人生何處にか止まり得ん。況してや我は青天井に草筵、伸をしたとて手はつかへず。日が暮れたりとて戸締もいらず。野をなつかしみては花菫に一夜の情を乞ひ、行きくれては木の下陰に花を今宵の主人と賴む。野中の夕立、一本松に駈け著て、木の根枕にしばしの晝寢も、足を大夫の腹に加へしとの咎も無く、そよぐ薄の手に招かれては白露の玉の床に女郎花抱へての添臥、馴るれば後朝の惜まるゝ事ぞかし。天地逆旅は唐人の寢言、乾坤無住は芭蕉の言ひ草。我は人に米もらひながら花鳥に浮かれての流れ渡り、行き著く處が故郷なり」僧「何處を指して行くか」非人「風に任せての雲水なれども、先づ月の都を志して」僧「汝の扇子に認めたるは」非人「喰ひ盡す三千世界、腹猶餘あり。誰か與ふる一椀の殘飯、以て其處を滿たさん」僧「汝一念執著の迷ひ未だ去らず。鬼となり佛となり花となり月となる事、淺ましさの限なり。三千世界そも何處にか在る」非人「納めて腹の底に」僧「笑止や納めんと思ふも迷ひなり。納めしと見るも迷ひなり。迷ひ迷ひて手の掌の天地に流浪せば何時か眞如の大道に出でん。來れや若者。今より我無風といふ名の一字を與へて汝を白風と呼ばん」
　法師に隨ふて行く事三日、とある山陰の草屋に著きぬ。傾きたる柴の戸開けんとするに、蔦紅葉麗しくからみ付きて、錠なき門を鎖したり。無下に引き放たんは本意無くて垣の頽れより入りぬ。苔蒸して滑りさうなる庭石に草鞋を解き、半ば腐りたる竹緣、あそこゝ踏んで內に入れば僅に六疊一間、此方の佛壇には一個の尊像、蛛の巢に閉ぢられて流石に倒れもやらず。和尚其前に一禮し終つて奧の障子を開け前栽の

木立見渡して「嬉しや佛も御無事、竹も平安」

第二爻　鳴鶴在陰其子和之我有好爵吾與爾靡之

烏より先に起きては、閼伽の水汲みに谷の細道を傳ひ、蔦葛の攫まへ處も覺えて紅葉の影を手桶に湛へながらの歸り道、片手に野菊我亦紅の一枝二枝を折りて毎日々々佛へのつとめ面白く、御釋迦樣の顏に馴染が付いては、浮世といふ者何時しかに忘れ、和尚樣の眉毛の長いと、日に三度宛飯運んでくる五郎兵衛後家の口のとがつたのとの外は折々病に痩せたる母の顏、思ひ出す許りとなりぬ。

無風は毎日村へ出ての托鉢にはや日數重れば、「何時迄こゝに居るとも詮なし。暫時の間行脚に心を養はん。我歸りは早くとも二月三月、遲くは來年の春にも成べし。汝留守を守つて猶悟道に心がくること怠るべからず。維摩の默然は口に掛枝を銜んで知り、隻手の聲は耳を斷つ時に聞く可し。迷ふ勿れ白風、執著は迷なり。悟に執著すれば悟りも亦迷なり。執著の雲を拂ふて眞如の光を見んこと大事ぞかし、悟れ白風」と言ひ殘して出で行く無風の跡見遣れば今迄何とも思はざりし和尚、自ら慕はしく父親あらば別るゝ時の悲哀斯くやと迄思ひそめし白風、門の前の一本杉まで驅け出して、「和尚樣々々々」と覺えず叫びし聲、後の山へ響きて我ながら凄じと驚くに振り向きもせぬ和尚、薄の間見え隱れに衣の袖翻へる樣の、歩むが如く飛ぶが如く、飄然として足地に著かず、悠然として身空を行くかと思はるゝに、樹にしがみついたる儘、惘然としたる白風「何ぢや、和尚樣は風なり」

和尚出で行きし跡に其訓誡の言葉のみ耳に殘りし白風は、朝夕に、「迷ふ勿れ白風。悟れ白風」と幾度か繰り返して坐禪觀法に月日の駒は油斷なく進みぬ。蒲團も無き破れ疊の上、結跏趺坐する時鼠糞頭上に落ちて膽を冷し、荒くなる鼻息無理に押へて不思量底を思量する時、小男鹿の妻呼ぶ聲、坐に哀憐を催す。怪しや蟲の聲踏み分けて來る人の足音、稍々近づくと思へばほと〳〵と戸を叩くに誰ぞやと呼べば寂然として音もなし。迷ふ勿れ白風と獨語ながら舌上顎に掛けて脣齒相著くる時又戸を叩く音、堪へず起て窓の戸押し明くれば外面黑し、紙燭を點して再び覗へば人の影だに見えず。折々そよそよと吹く秋風身に沁む毎に吳竹の戸を撲つは、そも風の動くか竹の動くか。イヤ我心の動くよと窓の戸礑と閉めて再び正身端坐する時、「風も動かず心も動かず、此浪が動いて」と背にて言ふ聲は浪子なり。白風默然。「高木樣」と優しき詞。默然。「直人樣」默、「白風樣」默。「二度呼んで應へ給はぬは」と泣く聲打ち消して、「迷ふ勿れ白風」と念じも終らず。「貴君が迷ひ給はずとも此處まで迷ふて來た妾を何となされる」と頸筋に取り付く冷き手を拂ひて、「我を誑さんとて來りしは狸か狐か。修行の妨すな」と大喝一聲。「この五百生の野狐身、一言の下に解脫せしめ給はで我獨り道心を磨き給ふが悟りか。たとへ心弱き女の命かけし手紙をいやですと言ふつれなき曲なき情なき一言で殺し給ふが慈悲か」と膝にもたれて顏覗くを知らぬ振に無言。返事無きに腹立てゝつと立ち行く浪子の裾捕へて「待ち給へ」と云へば後振り向いて「いやです」と笑ひ顏。「其顏憎し」と引き据ゑて打たんと振り上ぐる手を摑んで「此腕の細り給ひしことは」と言ふ　白風「痩せた故にいやと言ひ給ふか」女「勿體ない、痩せ給ひてこそ猶うつくし」と笑ふ顏を眺めて。　白風「頰の痩せ給ひし事は」女「これ迄に痩せる思ひをいやですと打ち消し給ふ情知らずの方樣故に」と、ほろほろと溢す涙を拭いてやりながら、白風、恨ま

れては迷惑なり。實貴女の上を思へばこそ三日の間目も合さぬ上の思案なれ。初め母の遺言に當惑し、實は其時貴女を疑ひし故に、一生結婚せぬと言ひし男の一言も破り難く、貴き人にも嫁がるべき貴女の出世妨げんも心無く、且は我病の浮世に長き身ならぬを、夢の間の契に覺めて貴女を傷しがらせんこと罪の上の罪ぞと遠く慮りての返辭なり。それさへ初は承知の手紙認めしも思ひかへて矢は斷りの手紙、しかも三間程の分解したるを讀み返し〳〵見るうち竟には誰が所爲かと其書き手惡く思はれ、啣み裂き引き裂きて火鉢の烟と爲したる後は、又兎やかうとねつ起きつ考ふれば考ふる程我身狂はしく、墨を取れば疊の上を摩り筆を持てば手先動かず、何としてよいやら分らぬ末に我書くとも知らで書いたあの返辭、それは其時の惡魔がした事、此白風がどうしてそんな事が言はれうか。これ謝罪つた〳〵。この樣にあやまつたと手を合しても、こちら向き給はぬか」女「いやです」白風「さらば此處を去りて我迷ひを解き給ふか」女「いやです」白風「扨は手鍋提げても此荒屋にさし向ひて住み給ふ氣か」默。白風「さらば玉の輿に乘りて我等を見下げ給ふ氣か」默。白風「しぶとき女人。これでも定より出ぬか」と捻りに掛る白風の指先嚙み付いて、女「これ嚙み切らば何とかし給ふ」白風「切られてこそ一指頭の禪。誓文恨なし。早く切り給へ」女「いやよ先づ妾のより截り給へ」と出す手喉と握りて、白風「神ぞ嬉しや」と言ふ時、霹靂一聲頭上に響き後の山崩れかゝるが如き音に驚かされて我身を見れば端然として結跏趺坐。心無き獵人の殺生や。

第三爻　得敵或鼓或罷或泣或歌

「高木樣こちらへお上り下され。汚穢しき老婆が住居、却てお足がよごれるかも知らねど。コレお歌やお客樣もお出でなされたに猫の額許り取つて居ずに早くおすゝぎをあげぬか。ソレ下盥ではいかぬに」と獨り氣を揉んでの接待風に白風脚半解き捨てゝ上れば「先づ此處へお坐り下され。床の間も無き荒宅は日あたりの善き處が上座」と言ひながら縁側に乾したる襤褸かたよせ己れも座に直りて土瓶の底よりも猶黑き出流れの茶を罅裂燒の茶碗に注いで差し出し、火鉢の緣の灰を手で掃きながら「先づ火の側へおより遊ばせ。今年は大變に寒さが强くて」と何やら心落付かぬ擧動、又起つて壁の破れへ枕屏風推しあて棚の隅より線香一本拔き取りて佛壇に供へ一寸拜みて又元の座に直り「マアお顏のお焦げなされたので一度御目に懸つたる妾にはお見謬申して擦り違ひに二歩三歩行き過ぎたを何處やら覺えのある顏容に若しやとお聲かけて見れば高木樣。嬉しいやら恨めしいやら貴君はマア何處においでなされたか」「いつか書狀を見た時には飛び立つ程に嬉しかりしを、よくよく後先の事考へて見れば、どうしても斷らねばならぬ事宜、終にすげない返辭をした後は都に居るも未練のもとゝ豫てより思ひ立つ行脚、つまりはある和尚樣の庵室に閉ぢ籠つての修行、少しの間殊勝にして居た甲斐も無く、不圖都の事思ひ出しては絕えずうしろ髮引かるゝ心地に、我知らず庵を立ち出でゝ二足行つては一思案、十足行つては一思案、エヽまゝよと思ひ切つて見れば一刻も早くと心急かれて己が足遲く宙より飛んで此土地迄來たは來ても取り付く可き島も無し。途方に暮れて居る折柄呼び止められ何かは知らず此家へ來たが、何やら仔細のありさうな話し振」「其仔細を申上ようと思へば貴君をお尋ね申す日頃の念が屆いたも貴君が何知らず此地へお出で成されたも皆貴君の事許り宜ひしお孃樣のお引き合せ」と、はやうるみ聲なり。「話が皆胸までこみ上げて何から申

上ようやら分りませぬが、私が貴君の處へお手紙を屆けてから四日目にお孃様不圖何處へ行かれたか見えず、御兩親始め水口のお家は上を下への騷動、取りあへず妾への御使に驚き慌てゝ結ひかけた髷束ねもあへず飛んで出て、一町の間に三度も四度も轉んで膝皿血のにじむ程すり剝いたも知らず、後に水口様を出る時に履物を探し廻つた末、駒下駄と足駄とかたかたに穿いて來た事が分つて、お鍋が笑ふたも心なし。斯様に狼狽しも畢竟は若しや貴君の事ではあるまいか、お手紙の事ではあるまいかと直様奥様に逢ふて聞けば、心當りは皆探したが分らずと云はるゝに愈々怖しとお貞様に聞いて見れば、前の晩に何處からか知らねどお手紙が來たとの事、扨は我思慮的を外れずと引き返して貴君のお内へ行き、外面より覗へばお影も見えず。戸口の張札文盲には讀めねど都合により轉宅かと思へばお道具は其儘、どうも分らぬと隣で聞けども知らず。扨はお二人ともお怜悧でもまだお若い方、一時の不料簡に辛さも恐ろしさも忘れての道行と一も二もなく極めたが、義太夫より外に學問は知らぬ裏長屋者の不覺、著物の前引き違へる間もなく／＼歸つて内に其事を話せば、奥様のお驚き、旦那様お手出した後で叱られるやら恨まれるやら分疏は無かりき。其晩はそれやこれやにて誰も眠らず。翌日下男の忠助が急ぎ歸りて、お孃様の行へ分らずがつかりして還る途中、ふと眼に留つたは大川の下流で棒杭に引掛つて居た駒下駄、似た物は世の中に多けれど餘り能く似て居たとの注進、聞いた時に此乳母の胸の内況して奥様は其處へ倒れ給ひき。若し死んだものなら死骸が浮く筈なるに、それさへ無きはまだ死にはせぬと旦那様の言はるゝを聞かず。今は世に亡き者と定められた奥様、お心の中に念佛唱へ給ふも尤なり、されど片心に若しや存命へてと思ふも亦親の欲、それより三日待つて音沙汰無きに愈々水底の藻屑と事定まりて花よ位牌よ線香よと立ち騷ぐ中へ表の戸がらりと開けて。ハイ御免なさいましと言ふは聞き知らぬ女の聲なり。息苦しき様にて這入て來るは年頃三十餘りの見知らぬ女、髮は亂れ著物は破れて[illegible]の處どころに生疵あるは昨夕の口説の記念にやあらん。何處からと問へば奥様に直に逢ふてとの答、種々様子有りげなるに奥様へ其事を申上げ潛かに襖の陰で聞いて居れば、妾は去る船頭の妻なるが三日前の事夫が空船流して大川を下る誰そ彼時、ざんぶと音したは怪しと漕ぎ付けて見れば慥に入水、浮き上る處を助けて歸りしに共々介抱して内へおつれ申、見れば窈窕しきお孃様これには大川より深い譯もあらうに膝とも談合、お話し下さらば善い智慧出ぬにも限らず。如何に／＼と幾度言つてもお返辭なし。只心持が惡きとて枕上げ給はぬかと思へば折々は駈け出さんとし給ふ氣色、氣を付けて看病に終日終夜泣き暮し泣き明し給ふのみにて眠り給はず。又何事も言ひ給はず。今朝も粥煮きながら、何時迄隱し給ふ、御宅はと尋ねけるに、今迄は言ふまじと誓ひしに餘りに厚きお情にほだされてと言はるゝを聞けば此方の御孃様。さりながら身投の理は露程も漏し給はず。しかのみならず何しに家へ歸らるべき、親許に知らせて恥を見せ給ひそとの仰、其場は堅く請合ふて竊かに其事を夫に話せば、それこそもつけの僥倖、此方にも思ふ仔細あれば今しばし默つて居るに如かずと云ふに腹を立て。何を言はるゝか親御様は何様にお尋ねなさることかと駈け出さんとすれば。やらじと言ふ。いや行く。いや遣らじと見苦しくも摑み合ふた末やう／＼是迄來ましたとの話、一伍一什を聞き給ふ奥様、餘りの嬉しさにお禮もそこそこ座を立て此方へ來給ふ襖の陰、顏を見合せて暫時は言葉も無く、嬉しきにも涙なり。急ぎ忠

助を使にして船頭の內へ迎へにやりしにお孃樣はいつかな歸ろと宣はず。さりとて置かるべき、無理に連れ行かんとする忠助を障へてお孃樣の言葉を口實に返さぬと云ふ船頭の權幕に持て餘して忠助歸れば。それ表立て言へば返さぬと言ふ筈なけれど內分に濟まさんと言ふ此方の弱點に付込みし船頭の計略、其心は憎けれど再生の恩も有る事、詮方なしと旦那樣の謀らひにて夥しきお金を遣りて、いやがり給ふを無理に迎へ取りお孃樣は再びお家に歸り給ひしが其儘枕あげ給はず。食事し給はず、藥さへ飲み給はず。只泣き暮して許り居らるゝに見る見る體軀の痩せ給ふ心地してさらでも細き腕は火箸の如く、眼落ち頰削け骨と皮許りと見ゆるに涙の雨何處に宿りてか絕えず。日頃は開け給ひし奧樣も今は茶斷鹽斷に神佛を禱られそれ迄は百までも千までも命あつての樂、殺されても死なじと思ひし此乳母さへ我命代らるゝものならばと念じぬ。されど苦しき時の神頼みは一向に受け給はず。果は熱に浮かされてさめざめと泣き給ふかと見ればまたハヽヽと笑ひ給ひ、折々高木樣直人樣と言ひては又泣きつ笑ひつ正氣は無きかと思へば忽ち眠り給ふ如く寂然として聲無し。斯くては最早四五日の御命とお醫者樣の言はるゝに今は身も世もあられぬ思ひ落つる涙の玉霰、手の掌に乘せて消ゆるを待つ心地して耳に這入る人の言語の辻占さへ氣に掛る。ある夕軒端に鳴く烏の聲たゞならずと胸安からぬ折柄、今迄眠り給ひしお孃樣、忽ち眼を開きて乳母やと呼び給ひぬ。

第四爻　月幾望馬匹亡无咎

「お歌やそこの窗の下を燻らしては困るよ」と我顏背けて眼を拭ふに暫時は話途絕えて炭のはしる音のみ高し。「お孃樣の呼び給ふに轟く胸を靜めて。何の御用かと問へば。今迄の我儘、乳母の世話になつたも皆昔の夢、最う此世の暇乞も近よつては未來で逢ふた時に報ゆべく父樣母樣への不孝も來世にて御詫する覺悟なり。只死ぬる今はにも心に掛るは高木樣の事、固より二世を契りし中にもあらぬを何とかせん。さりとて左程に人情知り給はぬお方ならぬに、あのお返辭も深い譯あるべしとは思ひながら何分にも心に落ちぬなされ方、今更の未練なり。妾身まかりし後にて回向もいらず、念佛もいらず。高木樣何處の盡頭に居給ふとも尋ね出して此遺書渡しくれよ。と力なき手にて蒲團の下搔探りて出し給ふ一封、何時の間に認められてか妾に渡し給ひしは是なり」と乳母は起て佛壇の奧より出して來た遺書、白風の前に置き又押込より一個の袱包を出して遺書に竝べ。「此小袖は譯ありて古くより我家に傳はるもの之を遺物にとてお手紙に添へ給ひたり。其を受取て後はこれがお言葉の聞き收めかと、はやしやくり上ぐる胸苦しく。何のお心弱い事、これしきの御病氣にと言ひたる自分さへ其言葉が誠心よりとは聞かれざりき。其後は安心せられてか餘りに魘はれ給ふ事もなく一日置いて翌の日の夕方。乳母頼むと言はるゝ聲さへ幽に地獄の底より來たかと思はれしに其まゝ眠る樣に」と後は涙にかきくれて俯伏たる額暫時は疊を離れず。白風は憫然として火鉢に涙の煮える音聞きながら始終何の言葉も無し。「早く死ぬる子は發明なと下世話にもいふ通り目から鼻へ拔ける樣なお孃樣、內のお歌の愚鈍のを見るに付けても同甲子かと又思ひ出すはあの令孃の事許り、明けても暮れても忘るゝ隙は無けれど貴君のお行方の分らぬに礑と當惑して爲すべき樣もなく、いづれ其內風の便に知れる事もと今迄待つた甲斐あつて、遺書をお渡し申したは嬉しけれど御存生の中に一目なりとも逢ひ給はゞ其お喜びは如何にぞや」と返らぬ事迄繰返して泣けども喞てども

失望と悲哀に正氣を失ひたる白風の耳へは最早一言も聞えず、忽ち思ひ出したる如く其處に在る遺書を奪ひ取る樣にして開きて見つ、讀み畢つて血ばしる眼の裏、忽ち袱包引提げて立ち出づる白風、慌てゝ止むる乳母の手を拂ひ除け物も言はず門外へ飛び出し一町行きては天水桶の陰に坐りて遺書廣げてさめ〴〵と泣く。

きのふけふとは思はざりしつひの別れも今更に藻にすむ蟲の我から急ぐ今はのきは盡きぬ思ひの山〴〵を硯の海のあさはかにも落つる涙に筆の命毛書きつくしとりゝ……

二町行きては道傍の捨て石に腰掛けて又遺書見てはさめ〴〵と泣く。

月のみやことやらんにおはし候はんには十五夜の清光をたよりに月に一度のあふせなりともいかばかりうれしかるべくとはかなき事のみ力に此世の御暇ごひ……

月の朝は月に泣き雨の夕は雨に泣くこのあした秋風吹きぬこのゆふべ秋風吹きぬ……

枯野の草に胡蝶の冬を泣き木枯の風に鐘撞の寒さを泣く。風早の浦に立ちさわぐ浪より

今迄涙に咽んで一言も發せざりし白風、忽ち手に持つ遺書微塵に引き裂きから〳〵と笑ひて

「悟れ白風こゝなり〳〵」

第五爻　有孚攣如无咎

「來たよ〳〵鉢叩きよ」と叫く子供の聲にもまれて行く白風、木枯に吹き破られたる襤褸一枚にちら〳〵と降る雪を凌ぎ、いと古びたる瓢簞を拍子をかしく叩きて「先づ賴む椎の木もあり夏木立ふるは霰か檜の木笠南無阿彌陀佛〳〵。雪か霰か浪か風か。浪風も聲たてそへて。南無阿彌陀佛〳〵」聲の內より、まぼろしに見えければ、あれは浪子か君にてましますかと狂ひ行く村はづれ、道の邊の石地藏にしがみつきて「これお浪樣。聞えぬ〳〵。こゝに居るならゐるとなぜに疾うから云ふては給はらぬ。雪の降るのも火の降るのもかまはゞこそかうして尋ねて居るにこれは又減相な、黑髮を落して尼になるとはゝと地藏の頭撫で廻して淚ほろり。軈て其手を握つて、互に手に手を取りかはせば又、消え消えと成行けば。いよ〳〵思ひはます鏡。これなぜに物を言ひ給はぬ。何ぢや、いやですぢや。これは又執念の深い。昔の夢は貘に食はして、サアこれ色よい返辭を聞かせ給へ。これ〳〵」と打つ手の痛さに呆れて見詰むる地藏の顏「これお前はお地藏樣ぢやないか。お浪樣とは取つても付かぬ顏、その惡らしい顏でよく我を欺し居つたな。よし〳〵因果覿面、恨み給ふな」と竹の端にて突けばころりと落つる地藏の首、急ぎ拾ふてもとの如く載せ「ハヽヽヽこれ地藏樣、お前の首の脆い事は。石の首でも人を誑せばこれぢやもの。大方の人は鐵の首でもあらうか、ハヽヽヽ地藏樣。首は接げたに、まだ何が不足で其佛頂面、その面憎いは〳〵。地藏樣も憎い。お浪樣も憎い。憎けりやこそ嚙付いてやりたいハヽヽヽ。左樣なら、いづれ後の世でお目に懸りませう」と踏み出した足又引こめて「どうも後の世へ行く道が分らぬ。どの道が本道か。それを教へるは六道の辻に立つお前樣のお役目。いざ教へて下され。この道か。あの道か。これは又何と言ふても默つてござる。指はいつも西向けて。それよ西向いて一筋にといふ事か。實に理りなり西行も死出の山路を問はゞ問へかし。これお地藏樣、迚もの事に案内しては給はらぬか。いやと云はるゝなら仕方無し。いざ參らう。よしなう人は教へずとも。冥途への道しるべこそ候へ。あれ御覽候へ雁金の渡

り候。さきだてし。雁を淨土のしるべにて。文覺袈裟に手を引かれ。蓮生敦盛の後追ふて。行くや西方極樂世界。ハヽヽ。手を引いて給はれお浪樣。これ手を引いて下され」と抱き付く冬田の案山子、ぐじやと共倒れに倒れたる白風「これは又強い〳〵お浪樣。うま〳〵と投げられた。巴が板額でもあるまいに。や。お浪樣は何處へ行かれた。これは不思議や。お浪樣は藁になられた。藁はいらぬ。お浪樣ほしや。お浪樣お浪樣。これ程叫んでもお返辭の無きは月の都へ上られたさうな。どれ〳〵こゝに落ちて居るは月を象つたよい形見。この菅笠をから冠つて。何と似合ふたか。似合ふたか似合はぬか。浪か風か。雪か霰か菅の笠。南無阿彌陀佛〳〵」と瓢簞敲いて來かゝる鄰村の入り口、はやわやわやと面白さうに群れ來る子供。浪風よ氣違ひよともてはやせば「氣違ひとは曲もなや。物に狂ふは我のみかは。鐘に櫻の物狂ひ、嵐に波の物狂ひ、菜種に蝶の物狂ひ、嵐に波の物狂ひ、波に嵐の物狂ひ、波か風か、風かなむあみ阿彌陀佛　さて〳〵かしましきわらんべよ。

第六爻　翰音登于天貞凶

「ふるは霰か檜の木笠、霰か雪か、浪か風か、動くは浪よ狂ふは風よ。南無阿彌陀佛〳〵。風早の三穗の浦わをこぐ船の。浦人さわぐ浪路かな。これは三保の松原に。白風と申す漁夫にて候。實に長閑なる時しもや。春のけしきの松原の。浪立ちつゞく夕霞。月も昇りの天の原。及びなき身のながめにも。心空なるけしきかな。風向ふ雲のうき波立つと見て。〳〵。氣違ひ獨りや狂ふらん。浪は音なき夕風に、待つ人遲きこよひかな。〳〵。お浪樣はどこへ行かれた。これ程尋ねて居るにかいくれ影も見えぬは屹度天へ登られたさうな。天上でよい男をこしらへて蓮の臺でゆら〳〵と樂んで居るに違ひはあるまい。あれ〳〵ふるは〳〵、花がふつて來たは。花のみかさは白妙の。浪かと見れば上より散る。櫻か。雪か。浪か。花かと。浮き立つ雲の。河風に。散ればぞ浪も櫻川。〳〵。流るゝ花をすくはん。すてはてゝ身はなきものと思へども。雪のふる日は寒くこそあれ。花のふる日はうかれこそすれ。花にもうかれ月にもうかるゝ。うかれ鳥のなく聲に。さむれば夢の浮世とは。うつゝに誰か白雲の。花の下にて我死なん。その衣更著の望月の。頃やこよひの空ならん。や音樂が聞える。琴も笛も篳篥も段々近くなつて來た。あれ〳〵あの月の中に御殿のうつくしい事は。池の端に咲き亂れたる花のはらはらとこゝまで散つて來る匂ひの芳しさ。孔雀も舞ふ鳳凰もかける。迦陵頻伽も飛び廻るあの中に天冠きらつかせたる大勢至をはじめとして。音樂面白くこゝへ來るは〳〵。いろいろの天女の中に。妙に見えたる御姿。雪の貌ばせ氷の肌へ。霞の袂うちなびき。ひくや玉裳の裾模樣。五色の雲に蘇迷盧の。山をやこゝに寫すらん。不思議やなさもうつくしき羅蓋の下。蓮の上に立ち給ふは。如何なる天女にましますぞと。白風近く立ち寄れば。これ〳〵お浪樣、いつからそこに隱れての榮耀ぞ。性わるめ人をうまうまと出しぬいてその綺麗な著物に綺麗な華鬘、それでお釋迦樣をたらさうとはきつい罪作り。これから手を握つたからは仁王樣の拳骨でなぐられたとていつかな放す事ではない。これなぜに物を言ひ給はぬ。男に口をきかれぬといふが天上の御規則か。それとも昔のいやですを氣にして恨み給ふか。なに何と言はるゝ。恨みつらみは人間の事ぢや天上にそんな事はないと。これは面白い。白風謀つた〳〵。恨みも歎きも腹の立つ事も皆下界へ落してこれからゆつくりと羽の上で遊ぶべし。いざ給へ。天の羽衣身につくれば固より浪も風も無し。雨に潤ふ花

の袖。翼をならべて。舞ふとかや。然るに月宮殿の有樣。玉斧の修理とこしなへにして。白衣黑衣の天人の。數を三五に分つて一月夜々の天をと女。ほうじを定め役をなす。我も數ある天をとめ。月の桂の身を分けて假にあづまの駿河舞。世に傳へたる。曲とかや。南無歸命月天子。本地大勢至。東遊びの舞の曲。あるひは。天津御空の綠の衣。又は春立つ霞の衣、色香も妙なりをとめの裳裾。さゆふさ。さゆふ颯々の。花をかざしの天の羽袖。なびくもかへすも。舞の袖。東遊びの數々に。〳〵。其名も月のいろ人は。三五夜中の空にまた。滿願眞如の影となり。御願圓滿國土成就。七寶充滿の寶をふらし。國土にこれをほどこし給ふ。さるほどに。時うつゝて。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原うき島が雲の。愛鷹山や富士の高ね。かすかになりて天つみそらの。霞にまぎれて。うせにけり—

謠ふ聲おのづから消えて忽ち變る天氣すさまじく黑雲月を捲き込んで烏羽玉の空あやなく闇を動かして吹きしきる風の音、天柱は折け坤軸は搖ぎ山を倒し海を立て百鬼彼方に號泣すれば群魔此方に火焰を吐く。黑暗々たる世界、明晃々たる稻妻、はたゝ神あれにあれ叫びに叫び篠つく雨は盆を覆して走りかゝる白馬、崩れかゝる怒濤に當つて碎くる玉の緒はもろし泡沫の世や。

斯くて時經る程に無常の風吹きやめば煩惱の波自ら平かに五障の雲悉く晴れ渡りて又現はるゝ眞如の月、影は西へと入海の空ほの〴〵と明けて無明の闇跡をとゞめず。

淺綠に白帆を散らしたる三保の海の曙、寒からぬ風に春を吹かせ一筋の靑き霞の裾を松原にかたよせたる彼方の空に、麗しや浮み出でたる白妙の富士、三國一の額際は曇らぬ水鏡に寫して影かき亂す海人だに無し、時も知らず世も知らず下界の塵に汚れぬ淸らかさ、白銀の猫打ち捨てし西行が、見とれたる心の內、世の俗人は何とか見ると獨り微笑む無風法師、錫杖立てゝ憩ふ樹の下、何處とも知らず得ならぬ匂ひの鼻を撲つに驚かされて見あぐる松が枝に、いぶかしや紫雲に天人の模樣ある古代の小袖、誰が所行かと四邊を見るに人も無し、思案の首傾くる脚下を打つては返す白浪にゆら〳〵と寄る破れ笠、取りあげて見れば其上に記されたる文字幽かに讀まれたり。

月の都へ歸り候。

(明治二十五年)

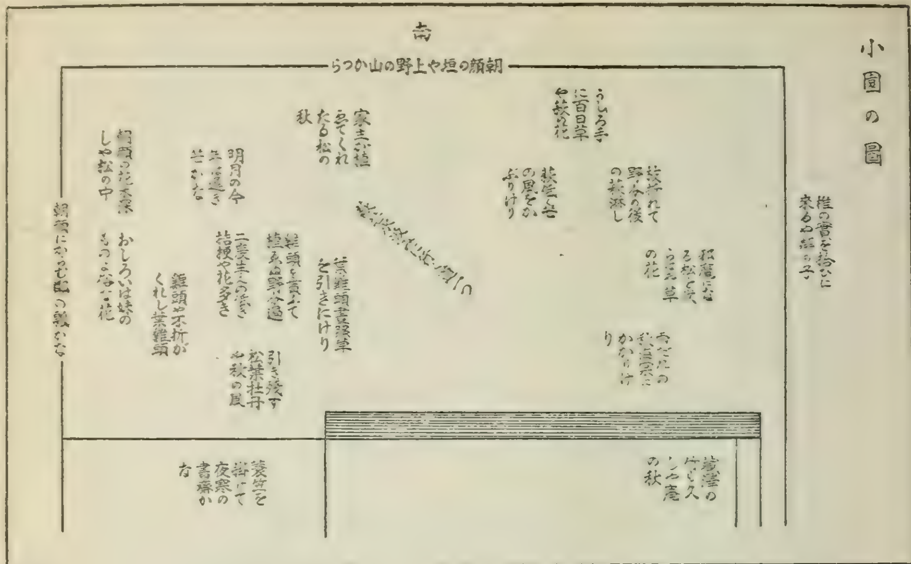
小品篇

小園の記

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば青空は庭の外に擴がりて雲行き鳥翔る樣もいとゆたかに眺めらる。始めてこゝに移りし頃は僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて稍ゝ物めかしたるに、鄰の老媼の與へたる薔薇の苗さへ植ゑ添へて四五輪の花に吟興を鼓せらるゝことも多かりき。一年軍に從ひて金州に渡りしが其歸途病を得て須磨に故鄕に思はぬ日を費し半年を經て家に歸り著きし時は秋まさに暮れんとする頃なり。庭の面去年よりは遙にさびまさりて白菊の一もと二もとねぢくれて咲き亂れたる、此景に對して靜かにきのふを思へば萬感そゞろに胸に塞がり、からき命を助かりて歸りし身の衰へは只此うれしさに勝たれて思はず三逕就荒と口ずさむも涙がちなり。ありふれたる此花、狹くるしき此庭が斯く迄人を感ぜしめんとは曾て思ひよらざりき。況して此より後病いよ〳〵つのりて足立たず門を出づる能はざるに至りし今小園は余が天地にして草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむる者は此十歩の地と數種の芳草とあるがために外ならず。つぐの年、春暖漸く催して鳥の聲いとうらゝかに聞えしある日、病の窓を開きて端近くにじり出で讀書に勞れたる目を遊ばすに、いき〳〵たる草木の生氣は手のひら程の中にも動きて、まだ薄寒き風のひや〳〵と病衣の隙を侵すもいと心地よく覺ゆ。これも鄰の媼よりもらひしといふ萩の刈株寸ばかりの綠をふいてたくましき勢は秋の色も思はる。眞晝過より夕影椎の樹に落つる迄何を見るともなく醉ふたるが如く勞れたるが如くうつとりとして日を暮らすことさへ多かり。

今迄病と寒氣とに惱まされて弱り盡したる余は此時新たに生命を與へられたる小兒の如く此より萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黃なる蝶の飛び來りて垣根に花をあさるを見てはそゞろ我が魂の自ら動き出でゝ共に花を尋ね香を探り物の芽にとまりてしばし翅を休むるかと思へば低き杉垣を越えて鄰りの庭をうちめぐり再び舞ひもどりて松の梢にひら〳〵水鉢の上にひら〳〵一吹き風に吹きつれて高く吹かれながら向ふの屋根に隱れたる時我にもあらず悵然として自失す。忽ち心づけば身に熱氣を感じて心地なやましく內に入り障子たつると共に蒲團引きかぶれば夢にもあらず幻にもあらず身は廣く限り無き原野の中にありて今飛び去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて何處ともなく數百の蝶は群れ來りて遊ぶをつらつら見れば蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて彼等は躍りつゝ舞ひ上り飛び行くに我もおくれじと茨葎のきらひ無く踏みしだき躍り越え思はず野川に落ちしよと見て夢さむれば寢汗したゝかに繻袢を濡して熱は三十九度にや上りけん。

げん〳〵の花盛り過ぎて時鳥の空におとづるる頃は赤き薔薇白き薔薇咲き滿ちてかんばしき色は見るべき趣無きにはあらねど我小園の見所はまこと萩芒のさかりにぞあるべき。今年は



去年に比ぶるに萩の勢ひ強く夏の初め枝ぶりさへいたくはびこりて末頼もしく見えぬ。葉の色も去年の稍ゝ黄ばみたるには似ず緑いと濃し。空晴れたる日は椅子を其ほとりに据ゑさせ人に扶けられてやうやく其椅子にたどりつき、氣晴しがてら萩の芽につきたるちひさき蟲を取りしことも一度二度にはあらず。桔梗撫子は實となり朝顔は花の稍ゝ少くなりし八月の末より待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり。飛び立つばかりの嬉しさに指を折りて翌は四、あさつては八、十日目には千になるならんと思ひ設けし程こそあれ、ある夜野分の風はげしく吹き出でぬ。安からぬ夢を結びてあくる朝、日たけて眠より覺むれば庭になにやらのゝしる聲す。心もとなく這ひ出でゝ何ぞと問ふ。今迄さしも茂りたる萩の枝大方折れしをれたるなりけり。ひたと胸つぶれていかにせばやと思へどせん無し。斯くと知りせば枝に杖立てゝ置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹き飛ばしたる去年の野分だに斯うはならざりしを今年の風は萩のために方角や惡かりけん。此日は晴れわたりやゝ秋氣を覺え初めしが余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツとかな盥に水を湛へて折れ殘りたる萩の泥を洗へりしかど、空しく足の痛みを増したるばかりにて、泥つきし枝のさきは蕾腐りて終に花咲くことなかりき。園中何事も無きは只松と芒とのみ。

　去年の春彼岸やゝ過ぎし頃と覺ゆ、陶外漁史より草花の種幾袋贈られしを直に播きつけしが百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉雞頭をほしかりしをいと口をしく思ひしが何とかしけん今年夏の頃、怪しき芽をあらはしし者あり。去年葉雞頭の種を埋めしあたりなれば必定それなめりと竹を立てゝ大事に育てしに果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくてあたりの雑草など引きぬけやう／＼尺餘りになりし頃野分荒れしかばこれぼかり氣遣ひしに、思ひの外に萩は折れて葉雞頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖にしばりなどせしかば恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。痩せてよろよろとしながら猶燃ゆるが如き紅、しだれて

いとうつくし。二三日ありて向ひの家より貰ひ來たりとて肥え太りたる雞頭四本ばかり植ゑ添へたり。其つぐの日なりけん。朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば不折子が大きなる葉雞頭一本引きさげて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ手づから植ゑて去りぬ。雞頭、葉雞頭、かゞやくばかりはなやかなる秋に押されて萩は早や散りがちなりしもあはれ深し。薔薇、萩、芒、桔梗などをうちくれて余が小樂地の創造に力ありし鄰の老嫗は其後移りて他にありしが今年秋風にさきだちてみまかりしとぞ聞えし。

ごて〳〵と草花植ゑし小庭かな

（明治三十一年十月）

車上所見

秋晴れて、野に出でばや、稲は刈りをさめしや、稲刈り女の見知り顔なるもありや、あぜの草花は如何に色あせたらん、など日毎に思ひこがるれど、さすがにいたつきのまさんことも心もとなければ、さてやみつ。今日も朝日障子にあたりて蜻蛉の影あたゝかなり。世の人は上野、淺草、團子坂とうかるめり。われも出でなん。病のつのらばつのれ、待たばとて出らるゝ日の來るにもあらばこそ。車呼びてこといふ。やがて歸りて 車は皆いではらひたり、遠くに雇はんや、といふ。さまでは、今日の日和には足ある人ぞ先づ車にて出でたる、と笑ふ。晝餉待つとて天長節の原稿したゝめなどす。

一時過ぎて車は來つ。車夫に負はれて乘る。成るべく靜かに挽かせて鶯横町を出づるに垣に咲ける紫の小き花の名も知らぬが先づ目につく。

音無川に沿ひて行く。八百屋の前を過ぐるにくだ物は何ならんと見るが常なり。川にて男三人ばかり染物を洗ふ。二人は水に立ち居り。傍に無花果の木ありて其下に大根のきれはしは芥と共に漂ひつ、いときたなげなるを、彼男に押し流させたく思ふ。

笹の雪の横を野へ出づ。野はづれに小き家の垣に山茶花の一つ二つ赤う咲ける、窓の中に檜木笠を掛けたるもゆかし。

空忽ち開く。村々の木立遠近につらなりて、右には千住の煙突四つ五つ黒き煙をみなぎらし、左は谷中飛鳥の岡つゞきに天王寺の塔聳えたり。雲は木立の上すこし隔りて地平線にそひて長く横にたなびきたるが、上は山の如く高低ありて、下は截りたる如く一文字に揃ひたる、絶えつ續きつ環をなして吾を圍みつ、見渡す限り眉墨程の山も無ければ、平地の眺めの廣き、我國にてはこれ程の處外にはあらじと覺ゆ。胸開き氣伸ぶ。

田は半ば刈らずあり。刈りたるは皆田の縁に竹を組みてそれに掛けたり。我故里にては稲の實る頃に水を落し刈る頃は田の面乾きて水なければ刈穂は盡く地干にするなり。此邊の百姓は落し水の味を知らざるべし。吾にはこの掛稲がいと珍しく感ぜらる。榛の木に掛けたるは殊に趣あり。其上より森の梢、塔の九輪など見えたる更に面白し。

道の邊に咲けるは蓼の花ぞもつとも多き。そのくれなゐの色の老いてはげかゝりたる中に、ところ〳〵野菊の咲きまじる様、ふるひつくばかりにうれし。此情、人には語られず。

穂蓼野菊の花にさはる程に掛稲の垂れたるもいとあはれに、繪にかゝまほしと思ふ。

我車のひゞきに、野川の水のちら〳〵と動くは目高の群の驚きて逃ぐるなり。あないとほし。目高を見るはわが野遊びのめあての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らで過ぐめ

り。世に愛でられぬを思ふにつけていよ／＼いとほしさぞまさるなる。

小鮒にやあらんすばやく逃げ隠れたる憎し。たま／＼に蛙の浮きたるはなくもがな。

向ふより人力車來れり。見れば男一人乗りて前に藁づとを置きたる、其端より黄なる實の漏れて見ゆるは蜜柑か金柑か。一足、町を離るれば見るものひなびて雅なり。

我車を挽きたる男、年は五十にも近からん、先程より頻りにふり返りて我を窺ひ居しが、遂に口を開きて、我國を問ふ。四國なり、といへば失望したる様なり。お前の國は、と問へば、越中なり、越後界にて海岸に臨めり、眺めは海岸に如く者なきを東京には海岸なければ、など東京をおとしめていふ。「かいがん」といふ漢語をいく度もいふが耳ざはりなり。越中は米國ならずや、といへば、さなり、今頃に皆刈盡して田には影もなし、新暦の十一月の中頃には最早ちら／＼と降りそむるなり、など善く語る。

道の傍に稲刈る女、年の程を思ふに一人は兄よめにして一人は妹ならん。妹といふは十五六とおぼしく鎌持ちながら我を見る。顔も見にくきが、手拭を目の上まで被りたればうしろへそる程仰向きて見おこせたる殊に心よからず。うつ向いて稲の穂を握りつゝ、又ふり返つてちよと我を見る。直にうつ向きてさと刈る。其間に我車は過ぎ行きぬ。

三河島の入口に社あり、前に四抱へばかりの老樹の榎とも何とも知らぬが立てり。其幹に繪馬の形したる板一つ吊りさげあるを近づくまゝに見れば、繪と見しは鐵砲の繪にて「こゝにて打つべからず」と記せる、興さむるわざかな。

村に入る。山茶花の頃、花多くつきていとうつくし。「やきいも」といふ行燈懸けて店には青蜜柑少し並べたる家につき當りて、左に折れ、地藏にあらぬ佛の五つ六つ立てる處を右に曲りて、紺屋の横を過ぎ、くねりて復野に出づ。

畦の榛の並木間近く立てれば狭くるしき心もち前とはいたく異なり。やがてまた家居まばらにある處に入る。雑木茨など暗く繁りたる中に山茶花の火をともしたる荒れたる村のたましひ、俳人に見逃さぬなるべし。

夫婦してから竿を振り上げて席の稲穂を打つ。から竿は麥にこそ使へ、四國にては稲には用ゐず、といへば、車夫、越中もしかなり、米國にて米の出來夥しければ何事も手早くあらましにするなり、東京の如くゆるやかなる事にては、などいひつゝ挽く。

一間ばかりの高さに稲を積みあげたる車二挺來たるに我は路ばたによけてやり過す。前の車は三十四五の男挽きて、後押しは同じ年ばへの女なり。夫婦なるべし。後の車は六十をも越えたる翁のいと苦しげに挽き居たれば如何なる女か後を押すらんと見るに三十許りの男なり。これは親子にやあらん。同じ事ながら前の車は樂しく、後のはくるしき心地す。

路のほとりに咲ける草にて葉と莖とは蕎麥に似て花は半ば薄紅なるが多く川邊にあり。蕪村が「水かれがれ蓼かあらぬ蕎麥か否か」といひしは此花にはあらずやと、見るたびに思ふなり。車夫に名を尋ねたれど知らず。或は溝蕎麥といふ物か。

柿の樹に柿の殘りたるはあちこちにあり。一つくひたし。烏瓜の蔓に赤き實の一つだに殘りたるを見ず。

畑中に高さ四尺ばかりの若木の柿に赤き實二つなりたる、其側に幼子の二人四人藁の束に上りなどして遊び居るがあり。その子供の柿を取らぬがいぶかしく思はるゝなり。或は澁柿にもやあらん。

目高多き小川を過ぐ。

畚はいよ／＼多く路はいよ／＼細し。路にず

ゐきを積み捨てたるが、處々高くて車を覆さんとす。こゝより車を返す。

　此路、此畚、こはわが忘れんとして忘れ得ざる者なり。こゝに來て畚の飛ぶを見ては我はそゞろに昔をしのばざるを得ざりき。今より四年前の事なり。世は日清戰爭にいそがはしく、わが身を委ねし事業は忽に倒れ、わが友は多くいくさに從ひて韓鮮に支那に渡りし頃の其秋なりき。此時專らわが心を動かせしは新聞紙上の戰報にして、吾はいかにしてか從軍せんとのみ思へり。されどわが經歷とわが健康とはわが此願ひを許さるべくもあらねば、人にもいはず、ひとり心をのみ惱ましつゝ、日毎に郊外散歩をこゝろみたり。一冊の手帳と一本の鉛筆とは寫生の道具にして、吾は寫生的俳句をものせんとて、眼に映るあらゆるものを捕へて十七字に捏ねあげんとす。わが俳境のいくばくか進歩せし如く思ひしは此時にして、さ思ふにつけて猶面白ければ總てのうさを忘れて同じ道をさまよふめり。三河島附近はもつともしば〳〵遊びありきしところなり。ある日三河島を過ぎ更にある貧しき村を過ぎ、田のあぜ道を何處とも定めず行く程に人里遠くへだたりて、人の影だに見えぬまでなりぬ。そこにあぜ道とは見ゆれど幅稍〻廣く草など生ひたる處あり。固より世の人の往來する路にあらず、いと淋しくて心置くかたも無ければ、草に腰据ゑてしばらく憩ふ。此あたりは畚殊に多く覺えて、稻を搖かす音かしましく、あるは路草に遊ぶも多かりけるが、はてはわが袖ともいはず背ともいはず膝ともいはず飛びつきはね返り這ひ上りなどして、いとむつまじく馴れたり。鳥蟲のたぐひなりとも我に馴れたるはさすがにいとほしくて、得去りもやらず。終にはくたびれたるまゝ草を枕に横臥しになりて畚の音を聞く。うつら〳〵と我に返りては、驚きて都に返り務めに就く。をり〳〵こゝに遊びては畚を友にしてうさをはらすに、曾て人に遇ひし事なければおのづから別天地の心地して今に得忘れず。翌春支那に行きしもかへつて病を得て歸りしかば其後こゝを見舞ふこともなかりしが、今や思はずも此覺えある小路に來てうたゝ思ひ亂るゝに堪へず。ひそかに彼の別天地を思ひやるに、草いたづらに茂りて畚吾を待つらんかとも疑はれ、はた何者か吾に代りてかしこに寐ねたらんかと思ふに心猶穩ならず、漸く車向け直してもとの道をたどる。

　童二人とある門の内より「人力々々」とわめく。

初より少しづゝ痛みし腰の痛み今は堪へ難くなりぬ。手にて支へなどすれどかひなし。

　わざと新しき道を右に取りて川ぞひに行く。向ふより來る女の童の十ばかりなるが、手拭を被り左手には竹にて編みたる大きなる物を持ち、右手には小桶に鮒を入れたるを持ちたり。眼圓くすゞしく、頰ふくやかに口しまりて、いと氣高きさまはよの常の鄙育ちの兒とも見えず、殊に其さかしささへ眼の色に現れてなつかしさ限り無し。足にして立たば、彼童の後につきてひねもす魚捕るわざの伽にもなりなんと思ふ。せめては名だに聞かまほし。かよチャンとは呼ばずや。

　野道の回り角に肥溜ありて中に大きなる蛙七八つも浮きたり。たま〳〵きよッ〳〵と啼く聲高くして道行く人を驚かす。斯る蛙を見る毎に不便に堪へず、助けやらましかば功德にもならましと思ふにいつも志を果さず。肥溜なればせん方も無しとぞ人はいふめる。肥溜なればこそ救ひてやりたけれ。

　燒場の前に出づ。晝なればにや烟ほそ〴〵と立つ。枳殼の垣につきて廻れば燒場の裏門より太鼓叩きておでん賣の車あらはれたり。調和の惡き取合せ者なり。

諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き風俄に寒ければ興盡きて歸る。三年の月日を寐飽きたるわが褥も車に痛みたる腰を据うるに綿のさはりこよなくうれし。世にかひなき身よ。

(明治三十一年十一月)

雲の日記

明治卅一年十二月十五日　朝晴れて、障子を開く。赤ぼけたる小菊二もと三もと枯芒の下に霜を帶びて立てり。空青くして上野の森の上に白く薄き雲少しばかり流れたるいと心地よし。われ此雲を日和雲と名づく。午後雨雲やうやくひろがりて日は雲の裏を照す。散り殘りたる餘所の黄葉淋しげに垣ごしにながめらる。猫のそ〳〵と庭を過ぐ。

十六日　快晴、雲無し。

十七日　雲無く風無し。空霞み庭潤ふ。

十八日　雲無し。芭蕉しをれたり。

十九日　ありなし雲、樫の端に在り。

二十日　庭に落葉を焚く。風吹いてあぶなしといふ。障子あけさせて見るに雲無し。

廿一日　眞綿の細き雲あり。虚子來る。

廿二日　雪雲終に雪を釀してちら〳〵と夜に入る。虚舟鴨を風呂敷に包みて持て來る。盥に浮かせて室内に置く。

廿三日　雪は庭に殘りて綠なる空に鳶一羽寒げなり。

廿四日　寒さ骨に透る。朝日薄く南窓を射、忽ちまた陰る。午後日影朗かなり。蕪村忌小會。今日は鴨の機嫌殊に好し。

廿五日　日和善し。暖かなり。雲無きは此頃の例なり。

廿六日　ちぎれ雲、枯尾花の下に在り。鴨、緣側の日向にあり。俳句新派の傾向を草す。夜を徹す。

廿七日　午前二時頃より雨だれの音聞ゆ。朝九時脱稿、十時寢に就く。午後二時覺む。七時頃より再び眠る。からだ勞れて心地よし。少量の麻醉劑を服したるが如し。

廿八日　雨晴れ雲無し。朝、眼ざめて聞けば、鴨逃げて鄰の庭に行きたりとてのゝしる。

廿九日

卅　日

卅一日　毎夜、夜を更かして頭痛み雲掩ふ。窓外の天氣常に晴朗。

(明治卅二年一月)

夢

先日徹夜をして翌晩は近頃にない安眠をした。其夜の夢にある岡の上に枝垂櫻が一面に咲いてゐて、其枝が動くと赤い花びらが粉雪のやうに細かくなつて降つて來る。其下で美人と袖ふれ合ふた夢を見た。病人の柄にも無い艶な夢を見たものだ。

(明治卅二年一月)

蝶

空はうらゝかに風はあたゝかで、今日は天上に神樣たちの舞踏會のあるといふ日の晝過、白い蝶と黄な蝶との二つが餘念無く野邊に隱れんぼをして遊んで居る。今度は白い蝶の隱れる番で、白い蝶は百姓家の裏の卯の花垣根に干してある白布の上にちよいと、とまつて靜まつて居ると、黄な蝶はそこらの隅々を探して、釣瓶の中や井の中を見たが何處にも居らんので稍ゝ失望した樣子であつた。忽ち思ひついたかして彼方の垣の隅へ往て、葵の花を上から下へ一々に覗いても矢張こゝにも居らんので、仕方無し

にもとの井戸端に歸らうとして、ふと干し布の上の白い蝶を見つけた。「オヤいやだよ、こんな處に居たのだよ」ト變な調子でいふたので、白い蝶は思はず笑ひ出した。「ほんとに可笑しいよ、お日様の照る處に居るのがきイちやんには見えないのだもの。さア、早くお隱れよ。直に見ツけてあげるから」ト白い蝶はいふたので、黄な蝶も笑ひながら、あちらの木立を指して飛んで往た。暫くして白い蝶は後を追ふて産土神の鳥居迄來て、あたりを見廻して居ると向ふの木の間に、ちらりと物影が見えたやうであつた。「屹度あの榎のうろの中へ隱れたんだよ」ト獨りつぶやきながら、榎の陰迄來ると、羽音を靜めて、あべこべにおどかしてやらうと思ふて、うろへはひるや否や、大きな聲で、「とー」トいふた。すると、神鳴のやうな聲で、「誰だよ、出し抜けに大きな聲をしやアがるのは」トいふのを見ると目に餘るやうな山女郎であつた。白い蝶は肝を潰して眞青になつて後も見ずに逃げ出したが、空を飛んでは追ひつかれると思ふて、成るたけ刺の多い草むらの間をくゞり〳〵逃げた。黄な蝶は薊の葉裏に隱れて居たが、白い蝶の事ありげにあわてゝ飛んで往くのを見て、後から追ひかけた。「オーイ〳〵」といふて呼ぶといよ〳〵あわてゝ逃げるやうなので、「あたいだよ〳〵」ト續け様に呼んだら、やう〳〵聞えたか後ふり向いて息をはずませて居る。「どうしたのだよ」トいふと、「なに、山女郎が追つかけると思ふて」ト前の一伍一什を話した。「それではあの化物榎なの。あんな處へあたいが隱れて居ると思ふたの。化物榎と聞いたばかりでも身の毛がよだつぢヤないか」ト黄な蝶は羽を震はしていふた。「だけれど、若しあんな處へ隱れて居ておどかす積りかも知れないと思ふて」ト、少し落ちついた様子だ。やゝ暫し二つで何事か相談して居たが終につれだちて野中にある何がし様のお下屋敷の塀の内へ飛んではひつた。お下屋敷の牡丹畠にはおくれ咲の牡丹がところ〴〵に植ゑてある。向ふの方には舶來の草花らしいのが毒々しい色に咲いて、鉢栽のまゝいくつも片よせられて居る。今年はひイ様が御病氣で、牡丹の盛りにもこちらへおいでが無いので、園は少し荒れたまゝ手入せずにある。留守居の人一人と門番の爺さん夫婦としか居らんのでお邸の内はしんと靜まつて、丸で明家のやうだ。二つの蝶はこゝへ來ると案内知り顔にあちらの花こちらの花とうれしさうにうかれて居たが、やがて二つは一緒に、くれなゐの大輪の牡丹の蕋に、羽をかはしてとまつた。「くたびれて眠くなつた」ト白い蝶は僅に羽を動かしながらいふた聲は眠さうであつた。「もう寢るの」ト黄な蝶もはや眠りかけて居る。夕日の影は斜に權現の森を掠めて遠くに聞ゆる入相の鐘はあくびするやうに響いて來る。牡丹の花びらは少しづゝ〳〵つぼまつてとう〳〵二つの蝶を包んでしまふた。遠くも近くも霞みながらに暮れて、かづきかけたやうな月がぼんやりと上つた時、空遙かに愉快さうな音樂が聞えた。丁度今は六番目の舞踏で、美の神が胡蝶の舞を始めた處であつた。

哲學書を入れた本箱の上に「女王」と上書した小さい函がある。これが僕の蓄へて居る蝶の宮殿だ。蓋の裏に列記せられたる女王の名は「花せゝり」「黄まだら」「日陰蝶」「蛇の目」「豹文」「緋威」「黄べり立羽」「揚羽」「一文字」「山黄蝶」「日光白蝶」「大紫」「山女郎」などで、其中の價貴いのは大紫、可愛らしいのは山黄蝶であらう。

獨り病牀にちゞかまりて四十度以下の寒さ

に苦しむ時、竹に遊び居たる鄰の子が、あれ蝶々が蝶々がといふ聲を聽いて一道の春は我が心の中に生じた。それはたしか二月の九日であつた。

（明治三十二年四月）

酒

一つ橋外の學校の寄宿舍に居る時に、明日は三角術の試驗だといふので、ノートを廣げてサイン、アルファ、タン、スイータノ＼と讀んで居るけれど少しも分らぬ。困つて居ると友達が酒飲みに行かぬかといふから、直に一緒に飛び出した。いつも行く神保町の洋酒屋へ往つて、ラッキョを肴にして酒を飲んだ。自分は五勺飲むのがきまりであるが、此日は一合傾けた。此勢ひで歸つて三角を勉強せうといふ意氣込であつた。ところが學校の門を這入る頃から、足が土地へつかぬやうになつて、自分の室に歸つて來た時は最早醉がまはつて苦しくてたまらぬ。試驗の用意などは思ひもよらぬので、其晩はそれつきり寐てしまつた。すると翌日の試驗には滿點百のもりをやう／＼十四點だけもらつた。十四點とは前代未聞の無い事だ。酒も悪いが先生もひどいや。

夏の夜の音

（明治三十二年六月）

時は明治卅二年七月廿二日夜、處は上根岸の薬師の藪内の最も奥の家、八疊の間の眞中に病の牀を設けて南側の障子明け放せば上野おろしは闇の庭を吹いて枕邊の燈火を搖かす。我は横に臥したる體をすこしもたげながら片手に頭をさゝへ片手に蚊を打つに餘念無し。

午後八時より九時迄

北側に密接してある臺所では水瓶の水を更ふる音、茶碗、皿を洗ふ音漸く止んで、南側の垣外にある最合井の釣瓶の音まだ止まぬ。

垣の外に集まりし子供の鼠花火、音絶えて、南の家の子供は自分の家に歸つた。南東の藻洲氏の家では子供二人で唱歌を謠ふて居る。はては板の間で足拍子取ながら謠ふて居る。

南の家で赤子が泣く。

南へ一町ばかり隔てたる日本鐵道の汽車は衆響を壓して轟々と通り過ぎた。

螢一ついづこよりか枕もとの硯箱に來てかすかに火をともせり。母は買物にとて坂本へ出で行き給へり。

上野の森に今迄鳴いて居た梟は、はたと啼き絶えた。最合井の邊に足音がとまつて女二人の話は始まつた。一口二口で話が絶えると足音は南の家に這入つた。

隣の唱歌は一旦絶えて又始まつたが今度は「支那のチャン／＼坊主は餘ッ程弱いものだ」といふ歌に變つた。しばらくして轉業の口上に變つた。同時に二三人が何やらしやべつて居る、終に總たひとなつた。

列車の少い汽車が通つた。

午後九時より十時迄

東鄰の家へ、此お屋敷の門番の人が來て、庭へ立ちながら話してすぐ歸つた。

南の家で、窓から外へ痰を吐いた。

誰やら水汲みに來た。

障子を閉さしむ

南の家では、入口の前で、闇に行水する様子だ。

下り列車が通つた。

遠くに深山の犬が吠える。

寒暖計を閲す、卅八度五分。

行水がすんで、團扇で尻か何か、叩く音がする。

足音がした。南裏の木戸が明いた。

母はちひさき燈籠とみそ萩とを提げて歸り給へり。

今年は坂本の町が廣くなつて草市の店が賑かに出た。

など話し給ふ。

汽車過る やがて單行の汽罐車が過る。

南の家で戸じまりの音がする。

南東の家で戸じまりの音がする。四鄰漸く靜まる。

次の間で摩木を折る音がする。

上野の十時の鐘が聞える。

午後十時より十一時迄

下り列車過る。

單行の汽罐車、笛を鳴らし〳〵、今度は下つて往た。間もなく上り列車が來た。

上野停車場の構内で、汽罐車が湯を吐きながら進行を始める音が聞える。

蛙の聲が次第に高くなる。

遠くに犬が頻りに吠える。

門前の犬吠え出す。

又水汲みに來た。

東隣では雨戸をしめる。

又星が見えると獨りごち給ふ。

戸締りの音。

蚊帳を釣り寢に就く

午後十一時より十二時迄

枕もとの時計の音のみ聞えて天地は極めて靜かな。

縁側に置いてある籠の鶉、物に驚いたるやうにはねる音がする。

うと〳〵と眠る。

汽車が通つたさうな。

忽ち表の戸をはげしく敲く音に眼が覺めた。何事かと思へば新聞の配達人が人を起して新聞の不著の言譯をするのであつた。

十二時の鐘。

午後零時より二時迄起き居る

間に

鼠の音一度

聞きしのみ。そよとの風も吹かず。犬の遠吠もせず。動物園のうなり聲も聞えず。夜一夜騷ぐ鶉も鼠も此夜は騷がず。梅雨晴の靜かさ、此時星の飛ぶもあるべし。

（明治三十二年七月）

旅

旅はなさけ、恥はかきずて、宿屋に著きて先づ飯盛女の品定め、水臭き味噌汁すゝりながら、ここに遊君はありやといへばござりまする。片田舍とて侮り給はゞ思はぬ不覺を取り給ふべし、などいふ、今の世の中に旅といふもの可愛い子にはさせまじき者なり。白河二所の關とは一夫道にあたりて萬夫も進まざる恐ろしき峻嶮、鬼も出づべしと思ひきや、淋しき町はづれにいかめしき二階づくり、火にぎやかにともし連ねたるを何ぞと近よれば、こゝも一廓、秋風の吹かぬ處ぞかし。名所なつかしさに、某の君を見たてゝ一夜うかれ遊び酒一杯飲むにもあらねば、素話身にしみて、かた樣のお國はと問はるゝに、東京と答ふれば、吉原といふ處面白いさうな、吉原で遊び給ふ身のこゝらでは遊ばれまじ、といふ。東京は廣し、同じ處に居ても吉原は知らぬといへど誠とせず。そなたの生れはと問へば、

最後でございまする、朋輩の何がしは三年のつとめ濟んで、身のしろ金で嫁入りしたさうな、うらやましやといふ。媚びるにもあらず、ふるにもあらぬ質朴の田舍かたぎ、おとなしき氣に入つて、財布の底を掃ひたるもたかし、歸りがけに名を聞きしがそれも忘れける。綽名といふ温泉にて雨にふられ、旅のうさ今更覺えけるに、廓ありと聞きて、宿屋の廊下に知らぬ闇路辿んで、遠く音吹く門に這入りける。翌朝、宿へ歸ればこゝの小ものが笑ふて、ゆうべ旦那の買はれしはやつがれと同じ國の生れなりといふ。狭い處では一夜のうちに何も彼も知れぬは無し。濱松にて東の闇の逢瀨、何處やらに惚れこみ、志を少し紙にひねつて、後にも知らさず其袂に投げこんだを、あとで何と言ひしやら聞きたし。大垣の宿屋、家は小さけれど間は綺麗なり。女の色白き事こゝの名物なるべし。噂はこぶ小女郎、あたら惜しきものに思へどせんなし。京にても宿屋の下女、とき〻にはまめきて、三日のなじみ、さはらば落つべかりしか、それもこゝにては掃き捨てる塵ぞかし。それよりも不思議は、一生に只一度の思ひは然る木曾川の停車場とて田の中に茶屋三軒、其一軒に憩ひて汽車待ち合せしに、丸顔に眼涼しく、色黒き女、十六ばかりに何の見處も無きが、これは又如何にしてか心の奧迄しみこんで、こゝに一夜を明す言ひ草まだ考へつかぬ内に汽車が參りました、お急ぎなされませ、と彼女がいそ〳〵しく我が荷物さきに持ちて出るに我もおくれじと汽車に乘りこみける。其無邪氣な顔どうしても今に忘られず。大方主人の子はあるべし。（明治三十二年七月）

ゐざり車

東京の町はいつも同じ事なり。半年や一年に、いちじるしく變る者に非ず。並立つ路、高き低き家、同じ町には大方同じ店、同じ店には大方同じ品物を並べて、何の珍しげもなけれど、たま〳〵田舍より出でたる者はいと興ありげに佇みて、時計屋の店に人形の搖くを不思議さうにながめ、細工場の前に機械運轉を見てすばらしきものに思ふらん。吾も東京を見たき一人なり。

八月廿三日快晴、風少し。朝、歌話を書かんとて歌の本など取り散らし見る。始めて田安宗武の歌を見るに萬葉調にして趣向斬新なり。實朝以後歌人無しと思ひしに僅に此人を得て驚喜に堪へず。吾は前よりの事ごとに虛子を根岸庵に訪はんと思ひ立ちぬ。

歌話を草し了りて晝餉をしたゝめんとせしに、こゝらを徘徊するのら猫は恐しき廚より一尾の魚を奪ひ去りたりとてのゝしり騷ぐ。

午後に熱き日なりければ三時過ぎて人車に載せられ出づ。三月彼岸に虛子を訪ひて風邪引きしこのかた、始めての外出なり。

新坂より坂本に通ずる路、前はヤッチャ場と稱へし處町屋皆新らしくなりて全く昔の樣にあらず。滄桑の變なり。

上野は變りたる處無し。只こゝらを歩行き居る西洋人のいと嬉しげに見ゆるは內地雜居のためにやと思ふも我心からなるべし。

ハノラマの前の樂隊、幕取りのけてあらはなるに興さめて、我家で遠音聞く程に面白からず。

辨天へ下りる石段は此春普請中なりしが出來上りたるは今見たり。

裏町にて砂利小石などを箱に入れて賣るを見たり。

滄集館は南明館と變り居たり。

虛子の家に著く。虛子在らず。今マー坊をつれて寫眞取りに行きしが、もう歸る程なり、と妻

なる人の、そこらに出し散らかしたる新聞紙と書込みを片寄せ押しやりつゝ言ふ。

窓ごしに見し、庭の木の枝に貧乏徳利を掛けて下に玩具の噴水をたしかけたり。但し今は水を吹かず。此吹出しの口を漏斗にせば面白からんと笑へば、あの口へ球をあてがへ置けば水の力にて高く吹きあぐるなり、と或る人言ふ。どれだけの高さに、と問へば、これ位と手まねして答ふ。此珍客、吾のために此玩具の運轉を始めて、細工場の機械が田舎者を威むるが如く、もてなさるゝ筈にて待ちまうけしが、終に失望せり。

簾の高く捲きたるに、廻り燈籠の透いて見えたり。

太陽を開きて江馬天江といふ翁の白き長き鬚など見居る内、虚子は子を抱きて、重し〳〵といひつゝ歸り來れり。

今日此頃吾の來ることを思ひまうけざりけむ驚き喜びて話す。吾も、宗武を得たる嬉しさを述ぶ。

妻なる人、氷はいかに、といふ。それおろし、と虚子いふ。アイスクリームは、といふ。虚子、それも、といはんとするを打ち消して、喰ひたし、と吾は無遠慮に言ひぬ。誠は日頃此物得たしと思ひしかど根岸にては試みざりしなり。二杯を喫す。此味五年ぶりとも六年ぶりとも知らず。

ベルモットを飲む。これも十年ぶり位なるべし。

マー坊は去年三月生れなり。僅かに一二の語を解す。其他はわけの分らぬ事を父に向ひて、意味ありげに喃々と說く。いと可愛し。喜んでベルモットを飲み、盡くれば又コップを父の顏につきつけてねだる　吾も子供一人ほしく思ふ。

虚子、飄亭を呼びにやる。

又宗武の歌をおろ覺えに覺えたる限りいひ聞かす。

虚子、日蓮の傳を取り出だして、頻に日昭、日朗の事をいふ。

飄亭來る。どうして來た、といふ。宗武にうかれて來たといふ。

西洋料理をもてなさる。

灯を點す。

碧梧來る。

歌の話、小說の話、表具の話、床の間の沿革の話、きのふ黒鯛を釣つたといふ話、俳僧が弟子をつれて行脚に行くといふ話、許六の傳が面白いといふ話、此頃は俳句が出來ぬといふ話、松山に盆踊が無くて獅子舞があるといふ話、話の種は盡くる事無し。

廻り燈籠には灯をともさゞりき。

吾を送る車の門に來りし頃恰も驟雨は月夜ながらに襲ひ來りぬ。

雨は惡からず、雨曇りがいやなりといへば、飄亭は風がいやなりといふ。盆の月の善かりし事など話す内に雨の音やみければ思ひ出づ。

車は駿河臺に上る。

巻煙草に火のつきたるを持ちて大手ふりつゝ急ぎ足に行く人闇に見ゆ。

月薄く雲間にありて、稻妻は北の方に頻りなり。

稻妻十句をものせんと思ひつゝ、そろ〳〵と引かれ行く。

稻妻や足場掛けたる藏の間

御茶の水橋を渡り、女子師範學校橫手を眞直に行く。

調子外れて大きなる石門の家あり。

枳殼寺につきあたる。

池の端に出づ。

町を出でゝ稻妻廣し森の上

稻妻のする時雲の形かな

稻妻のひらめく水の映りかな

稻妻の遠くに光る月夜かな

待合の樓上に三味の音聞えて、下には石炭舩を叩く假聲つかひあり。此光景吾覺えてより同じ事なり。何年たゝば變るべきか。

三橋に出づ。

上野に上る。入口の左の木陰暗き處に人二人ちひさく屈まりて默つてつい居り。吉か凶か。

稻妻の木がくれなりぬ森に入る

稻妻の世を觀ずらん大佛

句作に苦痛を紛らしてやうやく草盧に歸り著きぬ。十句に足さんとて、

稻妻や一本杉の右左

稻妻や飛魚飛んで海暗し

稻妻や燈臺番の妻一人

車に揺られしためか、喰ひ過ぎしためか、夜の空氣に觸れしためか、此夜、寐つきあしかりき。

（明治三十二年九月）

飯待つ間

余は昔から朝飯を喰はぬ事にきめて居る故病人ながらも腹がへつて晝飯を待ちかねるのは毎日の事である。今日は早や午砲が鳴つたのにまだ飯が出來ぬ。枕もとには本も硯も何も出て居らぬ。新聞の一枚も殘つて居らぬ。仕方が無いから蒲團に頬杖ついたまゝぼんやりとして庭をながめて居る。

をとゝひの野分のなごりか空は曇つて居る。十本ばかり竝んだ雞頭は風の害を受けたけれど今は起直つて眞赤な頭を揃へて居る。一本の雁來紅は美しき葉を出して白い干し衣に映つて居る。大毛蓼といふものか馬鹿に丈が高くなつて薄赤い花は雁來紅の上にかぶさつて居る。

さつき此庭へ三人の子供が來て一匹の子猫を追ひまはしてつかまへて往つたが、彼等はまだ其猫を持て遊んで居ると見えて垣の外に騒ぐ聲が聞える。竹か何かで打つのであるか猫はニャーニャーと細い悲しい聲で鳴く。すると高ちャんといふ子の聲で「年ちャんそんなに打つと化けるよ化けるよ」と稍ゝ氣遣はしげにいふ。今年五つになる年ちャんといふ子は三人の中の一番年下であるが「なに化けるものか」と平氣にいつて又強く打てば猫はニャー／＼といよ／＼窮した聲である。三人で暫く何か言つて居たが、やがて年ちャんといふ子の聲で「高ちャん高ちャんそんなに打つと化けるよ」と心配さうに言つた。今度は六つになる高ちャんといふ子がおつて居るのと見える。やゝあつて皆々笑つた。年ちャんといふ子が猫を抱きあげた樣子で「猫は、猫は宜しうござい」と大きな聲で呼びながらあちらへ往つてしまつた。

飯はまだ出來ぬ。

小い黃な蝶はひら／＼と飛んで來て干し衣の裾を廻つたが直ぐまた飛んで往て遠くにあるおしろいの花を一寸吸ふて終に萩のうしろに隱れた。

籠の鶉もまだ晝飯を貰はないのでひもじいと見えて頻りにがさ／＼と籠を搔いて居る。

臺所では皿徳利などの物に觸れる音が盛んにして居る。

見る物がなくて空を見ると、黒雲と白雲と一面に丑寅の方へずん／＼と動いて行く。次第に黒雲が少くなつて白雲がふえて往く。少しは靑い空の見えてくるのも嬉しかつた。

例の三人の子供は復我垣の外迄歸つて來た。今度はごみため箱の中へ猫を入れて苦しめて喜んで居る樣子だ。やがて向ひの家の細君即ち高ちャんといふ子のおッかさんが出て來て「高ちャん、猫をいぢめるものぢャありません、いぢめると夜化けて出ますよ、早く逃がしておやり

なさい」と叱つた。すると高ちやんといふ子は少し泣き聲になつて「猫をつかまへて來たのはあたいぢや無い年ちやんだよ」といひわけして居る。年ちやんといふ子も間が惡うて默つて居るか暫く靜になつた。

くワツと疊の上に日がさした。何か來た。

（明治三十二年十月）

子規子より「餅待つ間」の原稿送り來されたる同封中に猫の寫生畫二つあり。一は顏にして、一は尻高く頭低く丸くなりたるところなり。其の畫の周圍に次の如き文あり。餅待つ間と相照應して面白く覺えたれば爰に載録す　（虚子記）

明治卅二年十月九日「餅待つ間」といふ原稿書き了へし處へ、彼子猫はやうやくいたづら子の手を逃れたりとおぼしくゆう／＼と我家に上り我横に寢居る蒲團の上、丁度我腹のあたりに蹲りてよごれ亂れたる毛を嘗め始めたり。妹は如何思ひけん絲に小さき球をつけて之を猫の目の前にあちこちと振りつゞけしかば、猫は舌を收めて首傾け一心に球を見つめ居る、そこを寫生したるなり。然るに僅に首だけ寫し了りし時、絲切れて球動かざりしかば疲れに疲れたる猫は其まゝ身を蒲團の谷あひに横たへ顏を尻の處へ押しつけて寢入りぬ。其樣尻高く頭低く、寐苦しかるべき樣なり。我はそを見下しながらに右の方の圖を作る。寫して正に終る時妹再び來りて猫をつまみ出しぬ。猫追へども去らず、再び何やらにて大地に突き落しぬ。猫は庭の松の木に上りて、枝の上に蹲りたるまゝいと平らなる貌にてこなたを見おこせたり。斯くする間此猫一たびも鳴かざりき。

柚味噌會

秋田の片田舍に怪しき物あり。名づけて露月といふ。渾沌の孫、失意の子なり。この子初め東都に出でゝ文を學んで成らず怏々として郷里に歸る。再び東都に出でゝ醫を學ぶ。僅に試驗に及第して京都に遊ぶ事六ケ月、今や山々の紅葉、錦衣を染むるの頃、醫療機械を載せて再び郷里に歸らんとす。昔、郷を出づるや、木綿の兵兒帶、二子の羽織、今、郷に歸るや、縮緬の帶、七子の羽織、垢を水道の水に落し、顏を鴨川の水に磨く、輸來新樣の帽子は巍峩として中天に聳え、縫珍嶋緞の下駄は鏗鏘として地軸に響く、懷劍の光は人の目を眩し、香水の香は人の鼻を撲つ。想ふに露月閭門に入るの日、父老路に迎へて相賀し、家嫂機を下りてために炊かんとすらん。露月の得意知る可きなり。

東都の同人、日を卜して露月を道灌山胞衣神社の傍に送る。此日秋陰將に雨ならんとして冷氣野に滿つ。障子を閉ぢ火鉢を圍んで話す。五彩の幣帛束に垂れて靜にして風無く、淺紅の茶梅階に落ちて微に聲あり。崖上に句を拾ふ者、胞衣塚に畫を寫す者、呼べば則ち來る。行廚を開き芳醇を酌む。虚子齎す所の柚味噌、是日第一の雅味と爲す。其他奈鮓あり、切鮓あり、麵包あり、黄粉飯あり、罐詰あり、佃煮あり、カラスミあり、サンドヰツチあり。分飲旁食、一皿八珍。碧梧桐と露月とは各ゝ火鉢を抱へ炭を按排し柚味噌を燒くに周旋す。少時尻焦げ蓋揚る時衆箸一齊に下る。牛伴は牛の如く、把栗は栗の如く、五城は城の如く、紅石は石の如く、四方太は白眼にして四方を望む。虚子は醉ふが如く醉はざるが如く、靑々は有が如く又無きが如し。子規は横臥、餓鬼の如し、刀子を把つて仔細に柿の生熟を鑑定す。未刻雨至る。一座沈黙、柚味噌獨寒し。

子規子口を開いて曰く何ぞ柚味噌の露月と相似るの甚しきや。柚の花の華ならざる、柚の實の老いて而して痩せたる既に露月の少にし

て老成せると其趣味を同じくするものあり。其の皮を柚にして腸を味噌にし、一綠葉を粧ふて恬然として散坐するに至りては、露月と柚味噌と、蓋し是一是二なり。況んや其火上に置きて膂を焙らるゝに當つて、初は緘黙し、後漸く氣息を漏らし黄沫を噴く。直に蓋を取つて味噌を嘗むるに冷、水の如し、怪みて、其底を探れば味噌漿を吐き柚香紛々として來るが如き、恰も此露月胸中の寫眞鏡に非ずや。何ぞ柚味噌の露月と相似るの甚しきや。

柚味噌怫々として怒つて曰く我豈露月と似んや。我嘗て露月に似ず、露月或は我に似たらんのみ。我豈露月と似んや。乃ち歌ふて曰く、

柚味噌を見るに蓋あり。七子豈紋なからん。

柚味噌を見るに葉あり。露月盍ぞ鋒を蓄へざる。

歌ひ畢つて復言はず。

子規子更に露月に謂ふて曰く、爾、彼柚味噌の言を聽くか。柚味噌の言、微旨あり。昔爾の江湖に流落して東都に來るや、我一見以て異となす。推して職に文字に就かしむ。しかも爾は職に堪ふる能はず。一二年にして郷里に歸る。我病床に在りて熟ゝ之を思ふ、惆悵の情に堪へず。或は爾が志の堅からざるを憐み、或は我が人を見るの明無きを愧ぢ、或は文學に志す者の末路は多く此の如くならざるべからざるかを歎きぬ。後爾の再び東都に來り醫を學ぶや、我先づ其成否を疑ふ、思へらく薄命兒、亦[illegible]日の[illegible]けんのみと。而して今や爾ニ業成り志滿ち錦を著て再び秋田に歸るの日に遇ふ。得意の眼、眉宇の間に溢る。我之を見る、喜んで而して泣かんとす。然れども文學は爾の餘技にして其仕或は世に傳はり、方技は爾の職分にして其名未た人の知る所とならず、豈多少の遺憾無からんや。得意は爾が長く處るべきの地にあらず。長く處らば則ち殆し。如かず疾く失意の鄕に隱れ、失意の酒を飲み、失意の詩を作りて以て奧羽に呼號せんには。而して後に詩境益ゝ進まん。往け。

附　記

此日即事即景を詠ずる者無慮二百餘句、左に記する句は十の一を擧ぐるのみ。

鶉衣塚や櫻落葉の吹溜り　牛伴
蕎済けて十の硯を備へけり　同
湧きあがる柚味噌の蓋や傾きぬ　同
冷酒に始まり粥に終りけり　碧梧桐
送別の萩留別の芒かな　碧梧桐
十五人十五の柚味噌分ちけり　四方太
いつしかに焦げし柚味噌の釜の尻　同
掃きよせし落葉に霜の降り出しぬ　虚子
稲筵人の往來も見ゆるかな　同
各の醉ざめ顔や秋の雨　繞石
崖下に田端が見ゆる芒かな　同
君を送つて歸る人皆秋の暮　把栗
山茶花にしぐれそめたる崖下り　五城
山茶花の家を別の筵かな　青々
皆曰く是より遠し秋の風　露月
山茶花や子供遊ばす芝の上　子規

（明治三十二年十一月）

闇汁圖解

一、時は明治卅二年十月二十一日午後四時過ぎ、處は保等登藝須發行所、人は初め七人、後十人半、半人はマー坊なり。

一、闇汁の催しに評議一決して、客も主も各ゝ物買ひに出づ。取り殘されたる我ひとり横に長くなりて寂しげに人々の歸りを待つ。

一、おくればせに來られし鳴雪翁、持寄りと聞き

いて、匆々に品買ひに出で行きたまふ。出がけに「下駄の齒が出て來ても善いのですか」と諧謔一番。

一、一人歸り、二人歸り直に臺所に入りて、自ら洗ひ自ら切る。時にクスクスと忍び笑ふ聲、忽ちハヽヽヽと、どよみ笑ふ聲。

一、準備出來る迄に一會催すべしとの議出づ。座上柿あり、柿を以て題とす。鳴雪翁曰く十句の時は乾度句が失せますと。果して然り。

一、瓢亭、靑々後れて到る。物無く句無し。

一、一個の大鍋は座敷の中央に据ゑられ、鍋を圍んで坐する人九人、伏す人一人、いづれも眼を圓くし、鼻息を荒くして鍋の中を睥睨す。鍋の中から仁木彈正でもせり上りさうな見えなり。ぬば玉の闇汁會はいよ〳〵幕あきとなりぬ。

一、鳴雪翁曰く、飯を喰ふて來て殘念しましたと。先づ椀を取つてなみなみと盛る。それより右廻りに順を追ふて各々盛る。廻つて未だ半に至らず鳴雪翁旣に二杯目を盛る。曰く、實にうまいです。」

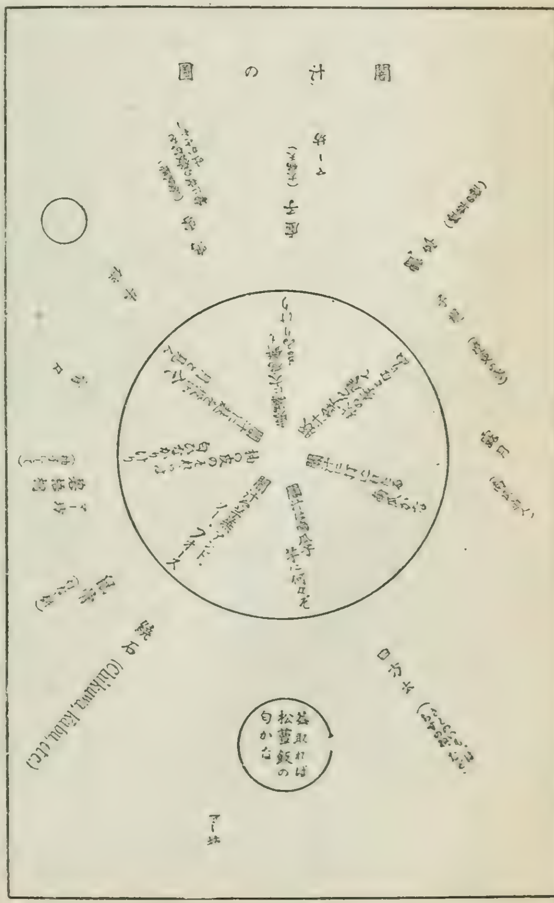
一、盛るに從つて杓子にかゝる者、靑物類はいふに及ばず、豚あり、魚あり、餅あり、竹輪あり、海の物、山の物、何が何といふ事を知らず。只からぬは一寸八分の觀音樣あるのみ。

一、「鍋の中を杓子にてかきまぜながら、ヤー〳〵饂飩がかゝつたぞ、誰だ〳〵、大福を入れたのはーと碧梧桐叫ぶ。皆々笑ふ。固より入れた者の外に入れた者を知らず。

一、鳴雪曰く、うまい。碧梧桐曰く、うまい。四方太曰く、うまい。漱石曰く、うまい。我曰く、うまい。虛子曰く、うまい。鼠骨獨り言はず、立ちどころに三椀を盡す。

一、マー坊出沒常無し、こゝに隱れ彼處に現る。或は飯櫃の邊に彷徨し、或は碧梧桐の膝に上る。やがて向ひ側にある父の顏を見るや其懷こひしく、碧梧桐の背を通り拔け牛伴のうしろより進まんとし、忽ち鳴雪翁の鬚に逆著して泣き〳〵走り返る。鳴雪翁直ちに指を掩ふて曰く、わるかつた〳〵。

一、下戸も喰ひ、上戸も喰ひ、すこやかなる者も喰ひ、病める者も喰ひ、飯喰ふた者も喰ひ、



闇汁の圖

何喰はぬ者も喰ふ。喰ひ〳〵て鍋の底現るゝ時、第二の鍋は來りぬ。衆皆腹を撫でゝ未だ手を出さゞるに、露月默々として既に四椀目を盛りつゝあり。

一、初は牛飲馬食の勢あり。中頃は牛を飲み馬を食ふの概あり。第二の鍋の未だ半を盡さゞるに、胃滿ち神疲れ、漸く牛に飲まれ馬に食はれんずるの有樣を示しぬ。我は鼓腹を抱へて衆に先だつて歸る。

一、圖中の名は各人の位置を示し、名の下には各々の持寄り品を示す。但し後日調べたる者と知るべし。

一、名の上に記したる句は各人の作なり。

一、鳴雪翁は別に蛤一箇宛を椀に入れて各々に配る。之に湯を注げば蛤自から開きて昆布、辻占、麩、鰹、など躍り出る仕掛なり。

一、四方太闇汁十句の作あり。其内

芋買うて歸れば露月既に在り　四方太
闇汁の南瓜におくれ里の芋　同
芋五合大汁鍋の底に在り　同
里芋を二つの鍋に分ちけり　同
芋入れて汁が煮えくりかへるかな　同
芋買うて臺所から上りけり　同

（明治三十二年十二月）

根岸草盧記事

一、去年の暮、虛子が生ける小鴨一羽を贈つてくれたので盥に入れて飼ふて居た。夜は緣側に盥を据ゑて雨戸をしめて置く。我は障子の内に居て何か書いて居ると、鴨は盥の中に置いてある石の上へ上つて時々羽ばたきをする樣子で、それからしばらくすると緣側へ飛び出してコツコツと步行いて居る樣子で、終にはラムプの最も明るく映つて居る障子へガサと搔きつかうとする樣子である。それがうるさいので試に盥共に障子の内へ入れて我机の向ふへ置いてやると少しも騷がないで靜かに三尺の池に浮いて居る。物書きながら餘り靜かだから最う寢て居るのだらうと思ふて鴨を見ると、なか〳〵寢て居ないので丸き小き眼をラムプに光らせて居る。さなくとも早寢がちの根岸、冬の夜の十二時過ぎては死んだやうな靜かさで笹一枚動く音もせぬ。其しんとした中に我と鴨とが起きて居ると思ふと淋しいやうな嬉しいやうな心持がして、いつ迄も鴨と離れたくなかつた。併しながら盥の中では長く活きて居まいといふ心配と、鄰の主人の懇望とで、今年の元日に鄰の池へ放してやつた。我も人の背に負はれて、鄰迄往て鴨の羽ばたき幾度となくしては遂に石の上で安らかに眠つて居たのを見とどけて歸つた。其後、鄰では雌鴨を買ふて來て一緖に馴らさうとしたが其雄鴨は少しも人馴れないので、伏籠を掛けて飼ふて居る中に死んでしまふたといふ話であつた。六つばかりになる鄰の女の子が遊びに來るたびに「鴨は」といふて聞くと、「居るよ」と答へる、「どんなにして居る」と問ふと「石の上で眠つて居るワ」と輕快な調子で答へるのが常であつた。それから二十日ばかりして例の女の子が來たから例の如く「ともチャン、鴨は」と聞くと、いつになく澁つた調子で「鴨、鴨はネ、泥溝の中へ首突つこんで死んでしまつてヨ」といふ答であつた。

一、今年の春、又虛子から生ける鶉の番ひをもらふた。これは虛子が雪嶺氏から贈られたのを又贈つてくれたので、病牀のなぐさめにせよといふ事であつた。鶉は形の面白いのでそれだけで氣に入つて居たが、内の者は、鳴かぬ鳥は面白くないなど、不平をいふて居る。或る人に聞いて見たら、籠を別にしたら鳴くであらう、併し卵の中から籠で育てたのでなければ鳴かぬ、

といふ事だから、早速籠を買ふて來て番ひを別々に入れた。果して明方になると、一聲二聲、變な短い調子で雄が鳴きはじめた。けれども朝一二度より外は鳴かぬ。昔から鶉は秋のものとなつて居るから秋になつたら善く鳴くかも知れぬといふて居たが、庭の萩の散る頃より盛んに鳴き出した。二つの籠は同じ檐並びに四五尺離れて釣つてあるのであるが、中に葉が出て居て互に見えぬ様になつて居る。日がずつぷり暮れて内では灯をともす時分になると、先づ雌の方からクックッ、クックックッと切な聲で喚ぶやうに鳴く。雌の聲を聞くと直にそれに答へて雄は大きな聲で二三度續けざまに鳴く。其聲が夏聞くのと違ふて悲しくあはれに聞える。それから其籠をおろして二つ竝べて緣側に置くと兩方から覗き合ふて、クッ／＼／＼／＼といひながら頻りにウロ／＼して出口を探して居る。如何にも思ひに堪へぬといふ様子が見えるので非常にあはれを催した。考へて見れば人間は殘酷なもので、番ひになつて居る鶉をわざ／＼別に離して、そしてそれを悲しがらせて泣かせて、そして其聲が善く響くとか面白いとかいふて喜んで居る。つく／＼愛想の盡きた者だと思ふた。さう思ひながら再び考へて見ると、人間も鶉のやうな境涯にある者が少くは無い。いふて見れば横笛と時頼との如き、朝顔と阿曾次郎の如き、お染と久松との如き、焦れ／＼し戀人と咫尺の間に居りながら逢ふ事が出來ぬ、逢ふ事が出來なくて切ないから此人等は皆大聲あげて泣いた、すると其泣きやうが面白いといふので琵琶や三味線に掛けて其泣く眞似をして見せる、それを聞いて皆ひどく喜んで居る。けれども人間は其泣きまねをして喜んで居るのであるが、實際其人の泣く處を聞いてこれは泣き聲が善い、などゝ譽めてござる神様があるのではあるまいか。二人の戀人が咫尺の間に居てそれで逢ふ事が出來ぬといふやうな場合は、神様が人間を別々の籠に入れてそれをくつゝけて置かれたのに違ひ無いと思はれる。

一、我住居の周圍には椎、槻、榛、椋などの四丈も五丈もあるのがいくつも突つ立つて居るので鶯横町の方から見ると物凄いやうな感じがする。東隣の長屋つゞきに居る人は毎年此大木へ高いハゴを掛けて小鳥を取る例になつて居るが今年も裏の木と表の木と二處へそれをこしらへた。表の方は椋の木に掛けてあつて裏の方は椎の木に掛けてある。チョウマ、イスカ、シメなどいふ囮を入れた籠は四つ五つ連りて、これも高い處に引きあげられて居る。毎朝まだ暗い内から囮は樹で鳴いて居るが、氣の毒にも此ハゴに掛る鳥が少くても一朝に四五羽はある。其中に幸福な鶸が一羽あつて其鶸は我内に貰はれて來た。毎日晝過になると我病室の障子に鳥籠の影が寫る。其籠の中に飛んで居る小鳥の影も寫る。此鳥が其鶸である。やがて日が傾いて來ると鳥籠の影も鳥の影も長くなつて遂に消えてしまふ。其あとへは椎の影が一面に押して來る。此椎がハゴの掛けてある椎で、即ち此鶸の取られた椎だ。

一、此秋の野分に悉く倒れた鷄頭は別に枯れもしないで段々大きくなつて行く。薄も刈つてしまひ、萩も枯れてしまひ、外の草は皆跡も留めぬやうになつた冬の初に、十本餘りの燃えるやうな鷄頭ばかりが殘つた。大概な者は枯れて萎む頃に鷄頭ひとりは猶太るかと思はれた。時々障子を明けて、これ見よ、といはれる。見ると最も近くにある一本が殊に大きいので、背丈は十ばかりの子供位ある。花の大きさは其子供の頭より大きいかも知れぬ。或る日虚子が來て青青が來て此日は何となく愉快な日であつたが、虚子に障子明けてもらふて庭を見ると、例の鷄頭が竝んで居るのがたまらなく愉快であつた。

其眞赤な色に段々黒みを帯びて殷紅色といふやうな色になつてしかも光澤がある。其色の善さは身に入みる程であつた。其傍にある赭い小菊も色がさめて善い色になつて居る。此小景には統一が無いから絵にはならぬが、絵にならないでも善いから絵にして殘して置きたかつた。我拙い筆にても面影を寫したいと思ふたが此色は油畫でなければ出ぬ色だから仕方が無い。それでも試に自分が畫いて見よかといふ念が全く無いでもなかつた。それから三日ばかりして、これ見よ、と障子を明けられたから見ると驚いた、あれ程美しかつた鷄頭は霜に打たれたか全く枯れてしまふて實に見苦しき殘骸を留めて居た。アヽ殘念した。若し自分の思ひ焦がれて居る戀人の肖像を畫かう〳〵と思ひながらまだ畫かぬさきに其戀人に死なれたら、こんな心持がするであらうか。

（明治三十二年十二月）

熊手と提灯

本郷の金助町に何がしを訪ふて歸る時の事、車をゆる〳〵と歩ませて切通の坂の上に出た。それは夜の九時頃で、此冬の月が冴え渡つて居るから病人には寒く感ぜらる。坂を下りながら向ふを見ると遠くの屋根の上に眞赤な星が忽ち現れたので一寸驚いた。彗星が三つ四つ一處に出たかと思ふやうな形で怪しげな色であつた。今宵は地球と彗星とが衝突すると前からいふてゐた其夜であつたから彗星とも見えたのであらうが、善く見れば鬼灯提灯が幾つもかたまつて高くさしあげられて居るのだ。それが淺草の雷門邊であるかと思ふ程遠くに見える。一の酉でしかも晴天であるから、昨年來雨に降られた償ひを今日一日に取りかへさうといふ大景氣で、その景氣の中に高く揭つてある提灯だと分る。其赤い色が非常に愉快に見えて來た。

坂を下りて提灯が見えなくなると熊手持つて歸る人が頻りに目につくから、どんな奴が熊手なんか買ふかと一々に人相を鑑定してやらうと思ふて居ると、向ふから馬鹿に大きな熊手をさしあげて威張つてる奴がやつて來た。職人であらうか、しかし暗くて分らぬ。車が後から照して居るので顔ははつきり見えぬが何でも慾ばつて居るやうな人相だ。こんな奴には乾浸福は來ないよ。身分不相應な大熊手を買ふて見た處で、いざ倒産といふ時に寶船の中から鼠の糞に落ちようと金が湧いて出る氣遣は無し、まさか大儲の當にもならぬものを何屋だつて心よくは買ふまい……やがて次の熊手が來た。今度は二人乘のよぼ〳〵車に窮屈さうに二人の婆さんが乘つて居る、勿論田舎の婆さんで其中の一人が誠に小さい一尺ばかりの熊手を持つて居る。若し前の熊手が一番といふ大きさなら此熊手は廿九番位であるであらう。其小さな奴を膝の上にも置かないで頭上へ向けて大熊手持つたやうに差あげて居たのもをかしい。其無邪氣な間の抜けた顏は鷹揚に無慾といふ事を現して居るので、こいつは大に福を與へてやりたかつた。自分が福の神であつたら今宵此の婆さんの内に往て、そつと其枕元へ小判の山を積んで置いてやるよ、あしたの朝起きて婆さんがどんなに驚くであらう。併し善く考へると福禄といふ點では無い。寧ろ貧福の方であつて、六十年來持來つたつぎまぜの財布を孫娘の嫁入に譲つてやる方だ。して見ると福の神はこんな皺くちや婆さんを嫌ふのであらうか、實は福の神は此の婆さんの内の門口迄行くのであるけれど、婆さんの方で、福なんかいらないといふて追ひ返すやうな人間とも見える……次も二人乘り車だが今度は健康な善い、乘つてる者は三十餘りか、四十

にも宜い店の、かつぷくの善い、帽子を被つた男で中位な熊手を持つて居る。大方可なりな商家の若旦那であらう。四十近くでは若旦那でも無い譯だが、それは六十に餘る達者な親父があつて、其親父が大慾ばりきつたごうつくばりのえら者で、なかなか六十になつても七十になつても隱居なんかしないので、立派な一人前の後つぎを持ちながらまだ帳場に財産を渡さない、それで仕方無しに今に若旦那で居るといふ人相をして居る。側に乘つて居るのは十二三の少年でこれが末の弟に違ひない。こいつも餘り福をやりたくないのであるが、併し大鳥大明神なかなか慾ばつて居るから是位の熊手を買ふてもらふた義理に少しは掻き込んでやるかも知れない。……仲町を左へ曲つて雪見橋へ出ると出あひがしらに、三十四五の、丸髷に結ふた栗に目口鼻つけたやうな顏の手頃の熊手を持つた、不斷着のまゝに下駄はいた、どこかの上さんが來た。くたびれた様も見えないで、下駄の齒をカラ〳〵と鳴らしながらさつさと歸つて行く。其人相を見るに、これは夫婦ぐらしで豆屋を始めて居て夫婦とも非常な稼ぎ手ではあるが、上さんの方が却つて愛嬌が少いので、上さんはいつも豆の煎り役で、亭主の方が紙袋に盛り役を勤めて居る。もつとも此亭主は上さんよりも年は二つ三つ若くて、上さんよりも綺麗で、上さんよりもお世辭が善い。それで夫婦中は非常に調和して居るから不思議だ。今其上さんが熊手を持つて忙しさうに歸つて行くのは、内に居る子供に酉の市のお土産でも待つて居るのかと見えるがさうでは無い。此夫婦は子は一人も無いので此上さんは大きな三毛猫を一匹飼ふて子よりも大事にして居る。併し猫には飯迄喰はして出て來たのだからそれを氣に掛けるでは無いが、何しろ夫婦ぐらしで手の拔けぬ處を毎年の事だから今年も一寸お參りをするといふて出かけたのであるから、早く歸らねば内の商賣が案じられるのである。ほんたうに辛抱の強い、稼ぎに身を入れる善い上さんだ、これにこそ福を與へて善からう。若し此上さんに福をやらなければ福をやるべき人間は外にある筈は無い、此上さんが毎晩五錢づゝ貯金箱に入れる事にきめて居るのだが、せめてこれを十錢づゝにしてやりたいよ。すると其貯金がたまつて後には金持に出世する。併し大鳥の意見と僕の意見と往々衝突するから保證は出來ない。

　二溝を出ると驚いた。兩側の店は檐のある限り提灯を吊して居る。二階三階の内は二階三階の檐も皆提灯を透間無く掛けて居る。それでまだ不足らぬと見えて屋根の上から三橋の欄干へ綱を引いてそれに鬼灯提灯を掛けて居るのもある。どうも綺麗だ。何だか愉快でたまらん。車は「揚出し」の前をすぎて進んで往た。「[illegible]鍋」も、「達磨汁粉」も家は提灯に隱れて居る。瓦斯燈もあつて電氣燈もあつて、鐵道馬車の灯は赤と緑とがあつて、提灯は兩側に千も萬もあつて、其上から月が照つて居るといふ景色だ。實に綺麗で實に愉快だ。自分は此時五つか六つの子供に返りたいやうな心持がした。そして母に手を引かれて歩行いて居る處でありたかつた。そして兩側の提灯に眼を奪はれてあちこちと見廻して居るので度々石につまづいて轉ばうとするのを母に扶けられるといふ事でありたかつた。そして遂には何か買ふてくれとねだりはじめてとう〳〵ねだりおほせて其邊の菓子屋へはひるといふ事でありたかつた。車は早や山へ上りかけた。左には瓦斯の火で「鳥久」といふ字が出て居る。松源の奥には鼓がぽん〳〵と鳴つて居る。何となくこゝを見捨つるのが殘り惜いので車を返せといはうと思ふたがそれも餘り可笑しいからいひかねて居ると車は一足二足と山へ上つて行く。何か買物でもせうかと思ふ

て、それで車返せといはうとしたが、一寸買ふ樣な物が無い。車は一足二足と又進む。いつそ山下から返れといはうと思ふたがそれもと思ふて躊躇して居ると車は山を上つてしまふた。もう提灯も何も見えぬ。もう仕方が無いとあきらめると、つめたい風が森の中から出て電氣燈の光にまじつて來るので、首卷を鼻迄かけて見たが直に落ちてしまふ、寒さは寒し、急に背中がぞく／＼して氣分が惡くなつたから只うつむいたばかりで首もあげぬ。早く内へ歸れば善いとばかり思ひつめて居る。車はズー／＼ズー／＼往た。暗い森の間をズー／＼ズー／＼過ぎた。何だか書生が續々唄を歌つて居るのに出逢つたが、それもどこか知らぬ。ズー／＼ズー／＼行く中に餘りひどい音がしたので、今迄熱にうかされてうと／＼として居たやうな心持が破られた。首をあげて見ると新坂の踏切で汽車に逢ふたのであつた。それから又ズー／＼ズー／＼行く中に急に明りがさしたから、見ると右側に一面にスリガラスを入れた家がある。内側には灯が明るくついて居るので鉢植の草が二鉢程スリガラスに影を寫してあざやかに見える、一つは丸い小さい葉で、一つは萬年青のやうな長い葉で、今一つは蘭のやうな狹い長い葉が垂れて居る。やう／＼床屋の前まで來たのであつた。又曲つた道をいくつも曲つて、とう／＼内へ歸りついて蒲團の上へ這ひ上つた。燈爐を燃やして室は煖めてある。湯たんぽの湯も今取りかへたばかりだ。始めて生き返つたやうな心持になると直に提灯の光景が目の前に現れて來る。横になつて煖まりながらいろ／＼考へて居たが、此家の椽から庭の樹から一面に球燈を釣つて其下へ、團子屋鮓屋汁粉屋をこしらへて、そして此二三間しかない狹い庭で園遊會を開いたら面白いだらうといふ事を考へついた。

（明治三十二年十二月）

病

明治廿八年五月大連灣より歸りの船の中で、何にか勞れたやうであつたから下等室で寢て居たらば、鱶が居る、早く來いと我名を呼ぶ者があるので、はね起きて急ぎ甲板へ上つた。甲板に上り著くと同時に痰が出たから船端の水の流れて居る處へ何心なく吐くと痰では無かつた、血であつた。それに驚いて、鱶を一目見るや否や階子を下りて來て、自分の行李から用意の藥を取り出し、それを袋のまゝで着て居る外套のカクシへ押し込んで、自分の座に歸つて靜かに寢て居た。自分の座といふのは自分が足を伸ばして寢るだけの廣さで、同業の新聞記者が十一人頭を並べて居る。自分等の頭の上は假の棧敷で、そこには大尉以下の人が二三十人、いつも大聲で戰の話か何かして居る。其棧敷といふのは固より低いので、下に居る自分等がやう／＼坐れる位のものだから、呼吸器の病に罹つて居る自分は非常に陰氣に窮屈に感ぜられる。血を咯く事よりも此天井の低い事が一層いやであつた。此船には醫者は一人居たがコレラの藥の外に藥は無いさうだ。固より病人の手あてなどしてくれる船では無いから、時々カクシの藥を引き出しては獨り呑んで見るけれど、血はやはりとまらぬ。もつとも着物は洋服一枚著たきりで日本服などは無い、外套も引つかけたまゝで寢て居るのである。此航海中の船暈は誰も知つて居るが、自分のは無暗に心配が加はつて居るので、只早く日本へ著けば善いと思ふばかりで、永き夜の暮し方に困つた。時々上の棧敷で茶をこぼす、それが板の隙間から漏りて下に寢て居る人の頭の邊へポチ／＼と落ちて來る、下の人が大きな聲で、何かこぼれますよ、

と怒つたやうにいふ、上の人が、アヽさうですか失敬々々、などゝいふ。こんな問答でもあると其間だけ氣が紛れて居るが、そんな事も度々は無い。退屈の餘り凱旋の七絶が出來たので、上の棧敷の板裏へ書きつけて見たが、手はだるし、胸は苦しゝ遂に結句だけ書かずにしまつた。その内にも船はとまつて居るのでもないから其次の日であつたか又次の日であつたのか午前に日本が見えるといふ處迄來た。日本が見える、青い山が見える、といふ喜ばしげな聲は處々で人々の口より聞えた。寢て居る自分も此聲を聞いて思はずほゝ笑んだ。午後には馬關にはひつた。此時室内を見まはして見ると、五六十人も居る廣い室内に殘つて居る者は自分一人であつた。自分も非常に嬉しかつたから、そろ／＼と甲板へ出た。甲板は人だらけだ。前には九州の青い山が手の屆く程近くにある。其山の緑が美しいと來たら、今迄兀山ばつかり見て居た目には、日本の山は緑青で塗つたのかと思はれた。こゝで檢疫があるので此夜は碇泊した。其夜の話は皆上陸後の希望ばかりで、長く戰地に居た人は、早く日本の肴が喰ひたい、早く日本の蒲團に寢たい、などゝいつて居る、早く細君の顏が見たいと思ふて居るのも二人や三人はあるらしい。翌日は彦島へ上つて風呂にはひつた。著物も消毒してもらふた。此日は快晴であつたが、山の色は綺麗なり、始めて白い砂の上を歩行いたので自分は病氣の事を忘れる程愉快であつた。愉快だ／＼と、いはぬ者は一人も無い。中には此きたない船にコレラの無かつたのは不思議だ、などゝいふて喜んで居る者もある。併し此喜びと愉快が三時間とは續かなんだ。三四艘の艀は我々を載せて前後して本船に歸つてから、まだ幾分時もたゝぬに、何やら船中に事が起つたらしい。甲板を走る靴の音は忙しくなつて、人々の言ひ罵る聲が聞える。或は誰かゞ誤つて海中へ落ち込んだでもあらうか、など想像して居る中に、甲板から下りて來た人が驚くべき報知を持ち來した。それは此船に乘つて居た軍夫が只今コレラで死んだ、といふことであつた。之を聞くと自分の胸は非常な動悸を打ち始めて容易に靜まらぬ。周圍は忽ちコレラの話となつてしまふた。只此後の處分がどうであらうといふ心配が皆を惱まして居る内に、一週間停船の命令は下つた。再び鼎の沸くが如くに騷ぎ出した。終に記者と士官とが相談して、二三人づゝの總代を出して船長を責める事になつた。自分も氣が氣でないので寢ても居られぬから彌次馬でついに往た。船長と事務長とをさんざん窮迫したけれど既往の事は仕方が無い。何でも人夫どもに水を飲ませるのが惡いといふので、水瓶の處へ番兵を立てる事になつた。自分は足がガク／＼するやうに感ぜられて、室に歸つて寢ると、やがて足は氷の如く冷えてしまふた。これは先刻風呂に這入つた反動が來たのであるけれど、時期が時期であるから、もしやコレラが傳染したのであるまいかといふ心配は非常であつた。此梅干船、此船は貼が惡いので此評名を得て居た―が我最期の場所かと思ふと恐しく悲しくなつて一分間も心の靜まるといふ事は無い。併し郵便を出してくれると聞いて、自分も起き直つて、やう／＼硯などを取り出し、東京へやる電報を手紙の中へ封じてある人に賴んでやつた。斯ういふ際には電報をやるだけでもいくらかの心やりになるものだ。此夜又檢疫官が來て下痢症のものは悉く上陸させるといふので同行者中にも一人上つた者があつた。自分も上陸したくてたまらんので同行の人が周旋してくれたが檢疫官がどうしても許さぬ。自分の病氣の輕くない事は認めて居るが下痢症で無い者を上陸させろといふ命令が無いから仕方が無いといふ事であつた。如何に

も不親切な、臨機の處置を知らぬ檢疫官だと思ふて少しは恨んで見た。併し今は平和の時で無いのだから餘り卑怯な事はいふまい位の覺悟は初めからして居る。さう思ふて自分はあきらめた。けれどもつく〴〵と考へて見ると又思ひ亂れてくる。平生の志の百分の一も仕遂げる事が出來ずに空しく檀の浦のほとりに水葬せられて平家蟹の餌食となるのだと思ふと如何にも殘念でたまらぬ。此夜から喀血の度は一層烈しくなつた。固より船中の事で血を吐き出す器も無いから出るだけの血は盡く呑み込んでしまはねばならぬ。これもいやの思ひの一つであつた。夜が明けても船の中は甚だ靜かで人の氣は一般に沈んで居る。時々アー〳〵といふ歎聲を漏らす人もある。一週間碇泊とは隨分長い感じがする。甲板から歸つて來た人が、大山大將を載せた船は今宇品へ向けて出帆した、と告げた時は誰も皆羨ましく感じたらしい。此船は我船より後れて馬關へはいつたのである。殊に第二軍司令部員であつた記者は、大山大將が一緒に歸ろといはれたのを聽かず先へ歸つて實にいまいましい譯だ、と悔んで居た。乘合一同思案にくれて居る中、午後四時頃になつて一道の光明は忽ち暗中に閃いて見えた。それは、上陸の許否は分らぬが、兎に角和田の岬の檢疫所へ行く事を許されたといふ事であつた。上陸せん迄も、泊つて居るよりは動いて居る方が善いといふのは船中の輿論である。船は日の暮に出帆した。非常にのろい速力でゆつくりと行たので、翌日の午後に漸く和田の岬へ著いた。上陸が出來るか出來んかと皆聞耳を欹んで待つて居たが此日には上陸が出來ずに暮れてしまふた。翌日の十時頃に上陸の事にきまつたので一同は愁眉を開いた。殊に荷物を皆持つて上れといふ命令があつたので多分放免になるのであらうと勇みに勇んで上陸した。湯に入つて自分は拭いたゞけで新調の御馳走を喰ふて、珍しく疊の上に寢て待つて居ると午後三時頃に萬歳萬歳、といふ聲が家を搖かして響いた。これは放免になつた歡びの叫びであつた。此時の嬉しさは到底いふ事も出來ぬ。自分は人力車で神戸の病院へ行く積りであつたから、肩には革包をかけ、右の手には可なり重い行李を提け、左の手は刀を杖について、喘ぎ〳〵そろ〳〵と歩行いて見たが、歩行くたびに血を咯くので、砂の上へ行李を卸して腰かけて休んで居た。聲を揚げて人を呼ぶ氣力も最う無い。折よく連の人が來たので、自分の容體を話し、迚も人力には乘れぬから釣臺を周旋してくれまいかと賴んだ。其の人は快く承諾して、他の連と相談した上で一人を介抱のために殘して置いて出て往た。此際に自分が同行者の親切なる介抱と周旋とを受けた事は深く肝に銘して忘れぬ。二時間ばかり待つてやう〳〵釣臺が來てそれに載せられて檢疫所を出た。釣臺には油單が掛つて居て何も見えぬけれども人の騷ぐ音で町へ這入つた事は分る。殊に往來の多いのと太鼓などの鳴つて居るのとで考へると土地の祭禮であるといふ事も分つた。上陸した嬉しさと歩行く事も出來ぬ悲しさとで今迄煩悶して居た頭腦は、祭禮の中を寢臺で通るといふコントラストに逢ふて又一層煩悶の度を高めた。丁度灯ともし頃神戸病院へ著いた。入院の手續は連の人が既にしてくれたので直に二階のある一室へ這入つた。二等室といふので餘り廣くはないが、白壁は綺麗で天井は二間程の高さもある。三尺許りの高さほかない船室に寢て居た身はこゝへ來て非常の愉快を感じた。殊に既往一ケ月餘り、地べたの上へ蒿稈を敷いて寢たり、石の上、板の上へ毛布一枚で寢たりといふ境涯であつた者が、俄かに、蒲團や藁蒲團の二三枚も重ねた寢臺の上に寢た時は、丸で極樂へ來たやうな心持で、これたら

死んでも善いと思ふた。併し入院後一日々々と病は募りて後には骨肉に痩せる程になつてからは尖死にたくないのでいよいよ心細くなつて來た。やがて虚子が京都から來る、叔父が國から來る、從弟の電報に接して母上と碧梧桐とが東京から來る、といふ騷ぎになつた。これが自分の病氣のそもそもの發端である。

（明治三十二年十二月）

新年雜記

○復新年を迎へた。うれしい。紙鳶をあげて喜ぶ男の子、善き衣著て羽子板かゝへて喜ぶ女の子、年玉の貰ひをあてにする女髪結、雜煮が好きで福引が好きでカルタが好きでカルタよりもカルタの時に貰ふお鮓や蜜柑が好きだといふお鍋お三、これ等の人を外にして新年が嬉しいといふのは大方自分のやうな病人ばかりだらう。自分はをとゝしの新年を迎へた時に非常に愉快でたまらなかつた。それは前年の大患を切り拔けてとにかく次の年を迎へたといふ事が愉快でたまらなかつたのである。併しそれと同時に未來を考へた。それは來年の正月を迎へられるかどうかといふ事なので、これは自分に取つては容易ならぬ問題である。なにまだ死なゝいよ、今年一ぱい大丈夫だ、などゝ自分勝手な判斷をして居たが、首尾善く去年の正月も迎へた。發會式はあしたに迫つた、福引の品を揃へねばならぬ、烏帽子と島田のかつらが是非ほしい、根岸になければ淺草へ往たらある、などと身は病床にありながら獨りいそがしがつて居るのが心では嬉しくてたまらん。固より發會式も嬉しい。福引も嬉しいけれどもそれよりも今年の發會式や福引に逢ふ事が出來たといふ其事が一番嬉しいのだ。併し此嬉しさの底には一來年の正月に逢へるか逢へぬかといふ大問題が首を出して居るといふ事は誰も知るまい。なに今年も大丈夫だと自分で手輕くやつてのけたが、「なに今年も」といつた去年はさう手輕くは行かなかつた。少しは苦しめられもし騷がしもして、餘り平和な年でもなかつたが、それもやうやうをさまつて、復新年を迎へた。うれしいうれしい。其うれしいがまだ盡きぬ内にはや次の大問題は首を擧げて來る、一來年の正月は一。さて此大問題に逢著したところで「なに今年も」とやつてのける勇氣は最早なくなつた。

一初暦五月の中に死ぬ日あり　とも詠んだ。併しそれは嘘だ。また五月なんかに終る氣づかひは無い。とにかく來年の正月迄は生きる積りだ。といつては見たが「とにかく」迄は、積りだ、といふ言葉を省く事が出來なかつた。

○役に立たぬつまらぬ事を考へて縁起でも無いから御幣として汚れをはらふてしまはうと思ふて居ると、箱の底から、前年の滿洲土産に貰ふた赤い紙が一束ね出た。紙は幅三寸竪六寸位で支那人の名刺にするのださうだが、それを見ると、ふと支那の家に貼つてある赤紙の事を思ひ出して、その紙へ、めでたい縁起の善い慾ばつたやうな言葉を選んで書きつけた。それを何處へ貼らうかと仰いで室内をながめたが、西側には伊達政宗が羅馬法王にやつた手紙の寫眞版が額になつて掛つて居る。北側には、柱の短册掛の上に支那の團扇が掛けてあつて、其横に、趙陶齋の書、安倍仲丸の歌と仲丸の祕書監になつた事とを書いた幅が掛つて居る。西側が羅馬で北側が支那であつたのは偶然であつた。南側には彫刻師が雞を彫つて居る繪か小い額になつて居る。東側の押込のある方には眞中の柱に蓑と笠が掛けてあるばかりだからこゝへ貼る事にきめた。先づ菅笠の上へ「立春大吉」といふのを貼つて、あとは勝手に貼らせたら、左の鴨居

に「辨財天女」「歳徳神」「福如東海」「鶴龜松竹」「壽如南山」「春の四時に」「卯歳男」「大願成就」「錢湧如雨」「百事如意」「吉祥天」「南無三寶」といふ順に貼られた。日本風の薄ッぺらな家には此眞赤な紙が調和せんので目立つてことさらに見える。此位目立つたら福の神にも見えぬ事はあるまい。これで福が來ぬなら福の神が惡いのだ。

（それでもまだ福が來さうにないので、更に福壽草を買つた。蕾が三つばかり横平たい鉢に植ゑてあるがまだ咲き初めもせぬ。これが一輪咲いたら例の寫生をやらうと思ふて其咲くのを待つて居た。繪の具は不折がくれた泥繪の具があるから其使ひ初めもしたいと考へたのだ。併し福壽草だけでは興味が無いから何か善き配合物はあるまいかと部屋中見廻したが、どうも思ひつきが無くて困つて居た。然るにある朝、眼を覺まして見ると福壽草の側に寒暖計が置いてあつたので、此偶然の配合が非常に面白く感じた。此寒暖計は室内の下の方の空氣の温度を測るためにことさらに低く棚の上に置くやうにしてあるのだ。此配合を得たから花の咲くのを待つて寫生しようと思ふて、樂んで居ると、ある日、鬼史が來て「新年の寒暖計や福壽草」と先づ俳句にしてしまふた。

○去年の正月と今年の正月と自分に格別違ふた事も無いが、少し違ふたのは、からだの餘計に弱つたと思ふ事と、元日の蜜柑の喰ひやうが少かつた事と、年賀のはがきが意外に澤山來た事と、病室の南側をガラス障子にした事と位である。ガラス障子にしたのは寒氣を防ぐためが第一で、第二には居ながら外の景色を見るためであつた。果してあたゝかい。果して見える。見えるも、見えるも、庭の松の木も見える、杉垣も見える、物干竿も見える、物干竿に足袋のぶらさげてあるのも見える、其下の枯菊、水仙、小松菜の二葉に霜の置いて居るのも見える、庭に出してある鳥籠も見える、籠の鳥が餌を喰ふのも見える、さうして一寸尻をあげて糞をするのも見える、雀が松の木をあちこちするのも見える、鳩が四五羽つれだつて枯木へ來たと思ふと直に又はら〳〵と飛んでしまふのも見える、雀が一羽默つて垣根をあさりながらふい〳〵と飛びまはるのも見える、裏戸あけて水汲みに行くのも見える、向ひの屋根も見える、上野の森も見える、凍つたやうな雲も見える、鳶の舞ふて居るのも見える、四角な紙鳶と奴紙鳶と二つ揚つて居るのも見える、四角な紙鳶がめんくらつて屋根の上に落ちたのも見える、それを下から引張るので紙鳶が屋根腹に掛つてうなづいて居るのも見える。殊に雪の景色は今年つく〴〵と見た。山吹の枝に雪の積んだのが面白いといふ事も今年知つた。併しこれ等はガラス障子につきて略〻豫想した事であつたが其外に豫想しない第三の利益があつた。それは日光を浴びる事である。眞晝近き冬の日は六疊の室の奥迄さしこむので、其中に寝て居るのが暖いばかりで無く、非常に愉快になつて終には起きて坐つて見るやうになる。此時に病氣といふ感じが全く消えてしまふ。枕もとを見ると寒暖計に九十度近く迄上つて福壽草の蕾は一點の黄をあらはして來た。

○外出するのに人力車に乘つては腰が痛いばかりで無く冬は寒くて困るから、何か善い乘物はあるまいかと考へた。駕籠では外が見えないし、馬車や牛車では田圃の小道を行く事が出來ぬ。いつそ膝行車をこしらへてはどうだといふ人もあつたが、こいつは箱根權現の霊驗でもあつて初花といふ美人が曳いてくれるのなら別だが、三尺の車を棚にして自ら漕いで行くのは餘り面白くも無いから先づ願ひさげとして、一つ善い物を工夫した。それは板でも[illegible]代でも七

鳥でも何でも善いからそれで駕籠のやうな者をこしらへて、そしてぐるりにガラス窓をつけて置く、もつとも中の廣さは足を伸べられる位、まさかの時は横に寝られる位にする。肱もたせもこしらへる、勿論手爐や燈爐などは入れられる、蒲團はたゞつて居る、側に茶や菓子や薬物が備へてある、といふやうな工合になつて居る。これなら腰も痛くなし、冬でも寒くもなし、田圃の小路でも何でも行けるし、咽喉が渇いたからとて茶店を求める必要もないし、何處でも景色の善い處で駕籠を下して休む事も出來るし、花見月見雪見何でも出來るといふ誠に重寶な物であらう。これで根岸の郊外へ出たら人は日暮里の焼場へ行くのかと思ふだらうが、さう思はれるのは寧ろ幸だ。若し來年迄無事で居たら、斯ういふ駕籠を一つこしらへて見たい。若し又其次の年迄ながらへて居たら、庭にバネのある寝床を求め、其側に煖爐を据ゑつけ、綺麗綺麗窓掛を掛け、天井から丸いガラスの釣花いけをぶら下げてそれに下へ垂れて咲く花を活けて置きたいと思ふ。若し又次の次の年迄生きて居たら、自分の門の前迄レールを敷いて特別汽車を仕立てゝ日本中何處へでも行けるやうにしよう。若し又次の次の次の次の年迄生きのびたら、今度は天人を一人呼び下して……こゝ迄書いて來ると押込の中で角のある笑ひ聲が聞えた。はてなと思ふて考へて見ると、先日不折が、大津畫の鬼が奉加帳を腰にさげて自轉車に乗つて居る處を畫いてくれたのがある。乾度あの鬼が笑つたのであらう。

（明治三十三年一月）

ラムプの影

病の牀に仰向に寝てつまらなさに天井を睨んで居ると天井板の木目が人の顔に見える。それは一つある節穴が人の眼のやうに見えてそのぐるりの木目が不思議に顔の輪郭を形づくつて居る。其顔が始終目について氣になつていけないので、今度は右向に横に寝ると、襖にある雲形の模様が天狗の顔に見える。いかにもうるさいと思ふて其顔を心で打ち消して見ると、襖の下の隅にある水か何かのしみが又横顔の輪郭を成して居る。仕方が無いから試に左向きに寝て見るとガラスごしに上野の杉の森が見えて其森の隙間に向ふの空が透いて見える。其隙間の空が人の顔になつて居る。丁度畫探しの畫のやうで横顔が稍ゝ逆さになつて見えるのは少し風變りの顔だ。再び仰向になつて、今度は顔の無い方の天井の隅を睨んで居ると、馬鹿に大きな顔が忽然と現れて來る。

斯樣に暗裏の鬼神を畫き空中の樓閣を造るは平常の事であるが、ラムプの火影に顔が現れたのは今宵が始めてゞある。

年の暮の事で今年も例のやうに忙しいので、まだ十三四日の日子を餘して居るにも拘らず、新聞へ投書になつた新年の俳句を病牀で整理して居る。讀む、點をつける。それ〳〵の題の下に分けて書く、草稿へ棒を引いて向ふへ投げやる。それから次の草稿へ移る。又讀む、點をつける、水仙といふ題の處へ四五句書き抜く、草稿へ棒を引いて向ふへ投げやる。同じ事を繰返りして居る。夜は纔に更けそめても周圍は靜まつてゐる。いくらか熱が出て居るやうでもあるが徹夜の事だからそれにも構はず仕事にかかつて居る。けれども熱のある間は呼吸が迫るので仕事はちつともはかどらぬ。それのみでない蒲團の上に横になつて、右の肱をついて、左の手に原稿紙を持つて、書く時には原稿紙の方を動かして右の手の筆の尖へ持つて往てやるといふ次第だから、只でも一時間か二時間かやると肩が痛くなる。徹夜などした時は、仕事がす

んでから右の手を伸ばさうとしても容易に伸ばす事が出來んやうになつてしまふ。今日も晝からつゞけざまに書いて居るので大分くたびれたから、筆を投げやつて、右の肱を蒲團の外へ突いて、頰杖をして、暫く休んだ。熱と草臥とで少しぼんやりとなつて、見るとも無く目を張つて見て居ると、ガラス障子の向ふに、我枕元にあるラムプの火の影が寫つて居る。もつともガラスとラムプの距離は一間餘りあるので火の影は搖れて稍ゝ大きく見える。それを只見つめて居ると涙が出て來る、すると灯が二つに見える。けれどもガラスの疵の加減であるか、其二つの灯が離れて居ないで不規則に接續して見える。全くの無心で大きな火の影を見てゐると其火の中に俄に人の顏が現れた。

見ると西洋の畫に善くある、眼の丸い、くるくるした子供の顏であつた。それが忽ち變つて高帽の紳士となつた。もつとも帽の上部は見えて居らぬ。首から下も見えぬけれど何だか二重廻しを著て居るやうに思はれた。其顏が三たび變つた。今度は八つか九つ位の女の子の顏で眼は全く下向いて居る。額際の髮にはゴムの長い櫛をはめて髮を押へて居る。四たび變つて鬼の顏が出た。此顏は先日京都から送つてもらふた牛祭の鬼の面に似て居る。同樣にして順々に變つて行く、時間が非常に早く且つ其顏は思はぬ顏が出て來るので、今度は輿に乘つてどこ迄變化するかためして見んと思ひはじめた。丸で見せ物でも見るやうな氣になつたのだ。さう思ふとそれから變りやうが稍ゝ遲くなつた。

其次には猿の顏が出た。それが西洋の昔の學者か豪傑かの顏と變つた。其顏は少し横向きで柔かな髮は肩迄垂れて居る、極めて優しい顏であるが只見たやうに思ふだけで誰の肖像か分らぬ。それから暫くは火が輝いて居るばかりで何の形も現れて來ぬ。猶見つめて居ると火の眞中に極めて明るい一點が見えて來た。それが次第に大きくなつて往く。終に一つの大目玉が成り立つた。それが崩れると又暫く何も出來ずに居たが、やうやう丸髷の女が現れた。其の女の鬢が兩方へ張つて居るのは四方へ放つて居る光線がさう見えるのである。其光線の鬢は白くまばらなので石膏細工の女かと思はれた。此女は初め下向いて眼を塞いで居たが、其眼を少しづゝ明けながら其顏を少しづゝあげると、段々すさまじい人相になつて、遂に髮の逆立つた三寶荒神と變つてしまふた。其神樣が消えると耶蘇が出て來た。これは十字架上の耶蘇だと見えて首をうなだれて眼をつぶつて居るが、それにも拘らず頭の周圍には丸い御光が輝いて居る。耶蘇が首をあげて眼を開くと、面頰を著けた武士の顏と變つた。その武者の顏をよく見て居る内に、それは面頰でなくて、口に呼吸器を掛けて居る肺病患者と見え出した。其次はすつかり變つて般若の面が小く見えた。それが消えると、癩病の、頰のふくれた、眼を剝いたやうな、氣味の惡い顏が出た。試に其顏の恰好をいふと、文學者のギボンの顏を飴細工でこしらへて其顏の内側から息を入れてふくらました、といふやうな工合だ。忽ち火が三つになつた。

何か出るであらうと待つて居ると又前の耶蘇が出た。これではいかぬと思ふて、少く頭を後へ引くと、視線が變つたと共にガラスの疵の工合も變つたので、火の影は細長い鍵の樣な者になつた。今度は乾度風變りの顏が見えるだらうと見て居たけれど、火の形が變なためか一向何も現れぬ。やゝ暫くすると何やら少し出て來た。段々明らかになつて來ると仰向に寢た人の横顏らしい。いよいよさうときまつた。眼は靜かに塞いで居る。顏は何となく沈んで居て些の活氣も無い。たしかにこれは死人の顏であらう。見

せ物はこれでおしまひにした。（明治三十三年一月）

車上の春光

　四月二十九日の空は青々と晴れ渡つて、自分のやうな病人は寝て居る足のさきに寂寞を感ずる程であつた。格堂が来て左千夫の話をしたので、ふと思ひついて左千夫を訪はうと決心した。左千夫の家は本所の茅場町にあるので、牡丹の頃には是非来いといはれて居たから今日不意に出て驚かしてやる積りなのだ。格堂はさきへ往て左千夫の外出を止める役になつた。

　昼飯を喰ふて出ようとすると偶然秀真が来たから、これをもそゝのかして、車を並べて出た。自分はわざと二人乗の車にひとり横に乗つた。

　今年になつて始めての外出だから嬉しくてたまらない。右左をきよろ／＼と見まはして、見える程のものは一々見逃すまいといふ覚悟である。併しそれがために却て何も彼も見るあとから忘れてしまふ。

　暗い丈夫さうな門に「質屋」と書いてある。これは昔からいやな感じのする處だ。

　竹垣の内に若木の梅があつてそれに豆のやうな實が澤山なつて居るのが車の上から見える。それが嬉しくてたまらぬ。

　鋸横町の海棠はもう大抵散つて居た。色の褪せたきたない花が少しばかり葉陰に見える。

　仲道の庭桜は若し咲いて居るかも知れぬと期して居たが、何處にもそんな花は見えぬ。[illegible]ほとりの大木に栗の花のやうな花の咲いて居たのがはや夏めいて居た。車屋に沿ふて曲つて、團十床屋に沿ふて曲ると、菓子屋、おもちや屋、八百屋、鰻屋、古道具屋、皆変りは無い。去年穴のあいた机をこしらへさせた下手な指物師の店もある。例の爺さんは今しも削りあげた木を老眼にあてゝ覚束ない見やうをして居る。

　やつちや場の跡が廣い町になつたのは見るたびに嬉しい。

　坂本へ出るとこゝも道幅が廣がりかゝつて居る。

　一葉の踏切まで行かずに左へ曲ると、左側に石鹸などちらかして居るきたない店がある。其店の前に腰掛けて居る三十余りのふつくりと肥えた愛嬌のある女が胸を一ぱいに現はして子供に乳を飲ませて居る。子供は赤いちやん／＼を着て居る。其女に並んで腰を掛けて居るのが五十位の女で、此女がしきりに何かをしやべつて居るらしい。

　其隣は假面をこしらへる家で、店の前の日向に、狐の面や、ひよつとこの面がいくつも干してある。四十余りのかみさんは店さきに縁側に坐つていそがしさうに面を塗つて居る。

　突きあたつて右へ行く。二階の屋根に一面に苔の生えて居る家がある。

　突きあたつて左へ行く。左側に縄暖簾の掛つて居る家があつて、障子が四枚はまつて居る。其障子の上の方に字が書いてある。最も右の端の障子には「にごり」と仮名で書いてある。其次のは「さけ」とあるらしいが、縄暖簾の陰になつて居て分らぬ。其次のには「なべ」と書いてあつて、最も左の端の障子には「蛤」の字が二つ書いてある。「蛤」「なべ」といふ順序であるべきのが「なべ」「蛤」と逆になつて居るので不思議だとよく／＼見ると、どうも三枚の障子があちらこちらにたて違へてあるやうであつた。これが車上の所見の中で最も奇警な趣向であると独り誇つて居る。

　観音前の商人の家の二階の格子窓の前の屋根の上に反故紙が置いてあつて、それが格子窓にくくりつけてある。何のためか分らぬ。

　はや鯉や吹貫を立てゝ居る内がある。五色の

吹抜がへんぽんとひるがへつて居るのはいさましい。昔の絵草紙を見ると其の中には必ず幟や吹抜が澤山立つて居て愉快さうに美しさうであるが、吹抜を見ると直に昔のいくさを聯想するのが常だ。

横町を見るとこゝにも幟がひるがへつて居る。また躑躅がきれいに咲いて居る。

何とかいふ芝居小屋の前に来たら、役者に贈つた幟が澤山立つて居た。此幟の色に就いてかねて疑があつたから注意して見ると、地の色は白、黄、淺黄などの類であつた。

陶器店の屋根の上に棚を造つて大きな陶器をあけてある。其奥も端に便器が落ちさうに立てかけてあるのが気になる。

吾妻橋まで来た。橋の袂に水菓子屋があつて林檎を店に美しく並べてあつた。

橋の上に来て左右を見わたすと、幅の廣い水がたぷり／＼と風にゆさぶられて居るのが、大きな愉快な感じがする。年が年中六疊の間に立て籠つて居る病人にはこれ位の廣さでも實際非常な感じがする。船はいくつも上下して居るが、舟を漕つて溯つて行くのが殊に勢い。其隅田川は木曾川でも信濃川でも[illegible]常に廣い。海の者にくらべると丈が三分の一ばかりしか無い。これは今まででも夢らであつたのであらうが、今日始めて見たやうな心持がして、此短い間に僅だをかしくてたまらぬ。けれどもこれが橋の下を通る船の特色であると思ふと、其をかしい處になほしい善い處がある。

橋を渡つた。もうくたびれてしまふて暑くするのがいやになつた。此處は何處を通つて往たか知らぬ。

ついでにことわつて置くが、幌を車の右へ片寄せて乗つて居るから、觀察は町の左側の方が多い。

本所停車場を過ぎてやう／＼左千夫の家に著いた。碧梧桐は出て来たが主人は出て来ない。主人は留守であるのだ。どうするか、と暫く躊躇した。頭のつかへさうな低き冠木門の右には[illegible]が少し芽をふきかけて居る。左には無花果がまだ裸で居る。其向ふに牛小屋があるらしい。

道に逡巡して亀井戸天神へ行く事にきめた。秀真碧梧桐の二人は歩行いて往た。突きあたつて左へ折れると平岡工場がある。これらの草原にはげんげ、が美しく咲いて居る。其間の竹藪の中には水溜があつて蛙が鳴いて居る。

天神橋を渡ると左側に[illegible]の菓子屋と何屋とがぶら下つて居る。大きな蜂が五つ六つではない、た首をふら／＼と絶えず振つて居るところは最も善く藤に適した感じがした。

天神の裏門を境内に這入つてそこの茶店に休んだ。折ふし池の泥を浚へて居るところで、池は水の氣も無く、掘りかけてある泥の深さが四尺もあらう。五六十人の人夫は泥と戦ふ者もある、其掘つた泥を運ぶ者もある、皆泥にまみれて居る者ばかりだ。泥の臭ひは時々と鼻を衝いて来る。滿面皆泥の此けしきを見て先づ心持が悪くなつて来た。

少し休んで居る内背中がぞく／＼と寒くなつて来ていよ／＼不愉快だ。まぎらかしに歌でも作らうと相談して、三人がだまつて考へこんだが歌も出来ぬ様子だ。池の泥を浚へるので鯉はどこに居るか知らん、と歌に詠まうとしたが出来ぬ。何か材料は無いかと見廻したけれど、藤はまだ五六寸しか伸びて居らぬ。池のあちらに紅梅が少しはかり咲いて其下につゝじがある。紅梅がをかしいので實はまだ早い、といふ事を歌にして見たが一向に面白くない。太鼓橋を人の渡るところを詠まうと思ふたが、それは出来ぬ。それを眺めて句題を案じて見ようかと思ふたばかりで出来ない。一時間ばかりこゝに居たが、いよ

いよ〳〵寒けがしてたまらぬから歸る事にして、車夫に負はれて車に乘つた。

土産に張子細工を一つほしいといふたので、玄関は四五本提いて持つて來てくれた。一本選り取つて見たら、張抜した親爺が包を背負つて竹の皮包か何かを手に提げて居るのであつた。

それから復讐の伺ふてある處を通つて左千夫の家に立ちよつたが、主人はまだ歸らぬといふ事であつた。いつそ此儘歸らうかとも思ふて、門の内で三人相談して居たが、細君の勧めもあるから、遂に座敷に上りこんで待つ事にした。やがて車の音がして主人は息を切らして歸つて來られた、これは細君が方々へ使を出して主人の行先を尋ねられた爲であつた。

容斎の芳野、曉斎の鶴其外いろ〳〵な繪を見せられた。それに就いて繪の論が始まつた。庭にはよろ〳〵とした松が四五本あつて、下に木賊が植ゑてある。塵一つ落ちて居ない。夕飯もてなされて後、燈下の談柄は歌の事で持ちきつた。四つの額は互に向き合ふて居る。

段々發熱の氣味を覺えるから、蒲團の上に横たはりながら「日本」募集の櫻の歌に就いて論じた。歌界の前途には光明が輝いて居る、と我も人もいふ。

本をひろげて晃の圖や日陰のかづらの編んである圖などを見た、それに就いて又簡單な趣味と複雜な趣味との議論が起つた。

夜が更けて熱がさめたので暇乞して歸途に就いた。空には星が輝いて居る。

夜は見るものが無いので途が非常に遠いやうに思ふた。根岸まで歸つて來たのは丁度夜半であつたらう。ある雜誌へ歌を送らねばならぬ約束があるので、それからまだ一時間程起きて居て歌の原稿を作つた。

翌日も熱があつたが、くたびれ紛れに寢てしまふた。

其又翌日即ち五月一日には熱が四十度に上つた。

（明治三十三年七月）

明治卅三年十月十五日記事

余が病體の衰へは一年々々とやう〳〵にはなはだしく此頃は睡眠の時間と睡眠ならざる時間との區別さへ明瞭に判じ難き程なり。睡さめて見れば眼明かにして寐覺の感じ無く、眼を塞ぎて靜かに臥せばうつら〳〵として妄想は其儘に夢となる。されば朝は六時頃に眠さむるを常とすれど肉の疲勞せる時間を起きて頭腦を使はんは少しにても靜かにあらんに如かずと、七時八時頃迄うつら〳〵として夢と妄想の間に臥し居るなり。今朝眠さめたるは五時頃なるべし。四隣猶靜に、母は今起き出でたるけはひなり。何となく頭たゞ重きに再び眠るべくもあらねば雨戸を明けしむ。母來りて南側のガラス障子の外にある雨戸をあけ窓掛を片寄す。外面は霧厚くこめて上野の山も夢の如く、まだほの暗きさまなり。庭先の雞頭葉鶏頭にさへ霧かゝりて少し遠きは紅の薄く見えたる、珍しき大霧なり。余は西枕にてガラス戸にやゝ背を向けながら、今母が枕もとに置きし新聞を取りて臥しながら讀む。朝眠さむるや否や一瞬時の猶豫も無く新聞を取つて讀むは毎朝の例なり。「日本」を取りて先づ一ページをざつと見流し直にひろげて二ページを讀む。支那問題はいつ果つべくも見えず伊藤内閣も出來さうで出來ず埒のあかぬ事なり。五ページを見て三ページを見て四ページを見て復一ページに返り論説雜録文苑などこまかく見る。斯くする間に時事新報、大阪毎日新聞など來る。新聞を讀む間、一時間半より二時間半に至る。其間寸時休む事なし。ガラス

戸の方を向くに霧漸く薄らぎ、葉鶏頭の濡れたる梢に朝日の照る、うつくしく心地よし。
いたく疲労を覚ゆるに再び眠りたく眼を塞ぎたるも例のうつら〳〵とするばかりにて安眠を得ず。浸就を呼ぶ。海南新聞来る。中に知人の消息はなきやとかゝろけて見る。妹に繃帯取換を命ず。繃帯取換は毎日の仕事なり。未だ取りかゝらざる内に怪庵来る。枕もとの襖をあけて敷居ごしに話す。余は右向きになり頭を擡げ左手の臂を蒲團の上につき居り。こは客に接する時、飯くふ時、筆を持つ時に取る所の態度なり。先日手紙にて頼み置きたる者出来居るか、と怪庵いふ。余、僕は字を書く事は誰にもことわつて居るのだから此分だけ書く訳にゆかず、宜しく先方へさういふてくれ、と頼む。怪庵、小ぎれに書きたる木堂の書を出して示す。それより書の話に移る。怪庵、僕は外に望は無い、書ばかりは少し書いて見たい、といふ。僕も時々大きな字をなぐりつけたけれど筆が無いので買ひにやると一六先生用筆といふ二十銭の筆を買ふて来た、書いて見ると一六先生に似たやうなよつぽど変な字が出来るので呆れてしまふた、と話して笑ふ。一六はいやだ、と怪庵口をとがらしていふ。きのふ蘇山人に貰ひたる支那土産の小筆二本と香嚢とを出させて怪庵に示す。怪庵、筆にかぶせてある銅の筆套を抜き、指の尖にて筆の穂をいぢりながら、善く書けさうだな、といふ。それより、能書不擇筆といふか昔の書家に多く筆を擇ばし事、不折が近来法帖氣違となりし事、不折の書牘の善き事、ホトトギスが發行期日をあやまる事、西洋の新聞雜誌が莫大金をかけて思ひきつた仕事をする事、雪嶺翁が校正の時に文章を非常に直すので活版屋が、小言をいふ事、外に、藏雲其他の消息など暫く話して、怪庵は歸る。

日光はガラス戸越しに寐牀の際迄一間程さしこみて、午時は近づきたり。心地よくしかも疲れを覺ゆ。再び枕に臥して飯を待つ。朝餉くはぬ例なれば晝飯待たるゝなり。やがて母は、歯磨粉、楊枝、溫湯入れしコップ、小さきブリキの金盥など持ち來りて枕もとに置く。少しうがひして金盥に吐く。大きなブリキの金盥に溫湯を入れ來る。これにてかたばかり顏を洗ふ。寐て居て顏は洗へぬものなり。

或は枕に就き或は頰杖つきて待つ。午過ぐる頃やう〳〵に母、飯を運び來る。膳の代りにしたる長方形の木地の盆を蒲團の上に置く。御馳走は、あたゝかきやはらかき飯、鰹魚の刺肉、薩摩芋の味噌汁の三種なり。皆好物なるが上に配合殊に善ければうまき事おびたゞし。飯二碗半、汁二椀、刺肉喰ひ盡す。ブランデー一口を飲む。母は給仕しながら、そこに坐りて膠嚢にクレオソート液を入れ居り。食了りて、クレオソート三嚢を呑む。漬物と茶は用ゐぬ例なり。自ら梨二個を剝いて喰ふ。終に心を嚙み皮を吸ふ。

食後、新聞、原稿紙、手入すべき投書など寐床近く寄せしめ置きたれど、喰ひ勞れに勞れたれば筆を取る元氣もなくて又枕に就く。

暫くして妹は箱の上に薬、膿盤などを載せ、張子の淺き籠に繃帯木綿、油紙、綿などを一しよに載せ持ち來る。母はガラス戸に窓掛を掩ひ、襖を盡くしめきりて去る。これより繃帯に取かゝるなり。余は右向きに臥し帯を解き繃帯の紐を解きて用意す。繃帯は背より腹に巻きたる者一つ、臀を掩ひて足に繋ぎたる者一つ、都合二つあり。妹は余の後に在りて、先づ臀のを解き膿を拭ふ。臀部殊に痛み烈しく、綿もてやはらかに拭ふすら殆ど堪へ難し。若し少しにても強くあたる時は覺えず死聲を出して叫ぶなり。次に背部の繃帯を解き膿を拭ふ。こゝは平常は痛み少く、膿を拭はるゝは寧ろ善き心

持なり。左の横腹に手を觸れ見れば痛み所あり腰の分量も平日に異ならずとぞ。されど平日の分量といふがどれ程の者か余は知らず。其外痛み所の模樣など一切自分には分らぬなり。三年程前に、ある時余は戯に寫して背中の有樣を見んはんと思ひ妹にいふに妹頻りに止めて聽かず、余は强ひて鏡を持ち來らしめ寫し見るに、瘻孔の跡、膿口など白く赤くして、すさまじさいはんやうもなく二目とは見られぬ樣に、顏色をかへて驚きしかば、妹は傍より、ーかされのやうだ、とひやかし、余は痛く其無禮を怒りたる事あり。これに懲りて其後は鏡に照したる事もなけれど、三年の間には幾多の變遷を經たれば定めて荒れまさりたらんを、畢竟目は妙なものにて、今頃は綺麗な背に綺麗な膿の流れ居るが如く思ふこそはかなき限りなれ。

膿を拭ひ終れば、油薬を塗り、脫脂綿を掩ひ其上に油紙を掩ひ、又其上に只の綿を掩ひ、其上を又清潔なる木綿の繃帶にて掩ひ、それにて事濟むなり。此際浣腸するを例とす。今日は浣腸せず。便通善し。毎日の此日課に要する時間は凡そ四五十分間なるべし。此頃の如く痛み少き時は繃帶取換は少しも苦にならずして寧ろ急がるゝ程なり。そは、繃帶取換後は非常に愉快にして、時として一二時間の安眠を得る事あるに因る。

妹は不潔物を室外に持去り、母は金盥を持ち來り、窓掛をあけなどす。余は起き直らんとして、疊の上に在りし香嚢の房の先のビードロを肘に敷きて、一つ割る。桃色のシャボンにて手を洗ふ。

繃帶後のくたびれにて又枕に就く。今日は暖かなれば此室の掃除をなさんは如何、と母問ふ。余同意す。母は座敷に寢牀を設けて、余に、移れ、といふ。距離僅に一間許りなれど千里を行くの思ひして、容易には思ひ立たれず。やがて思ひ立つて身を起し辛うじて四つ這ひになる。されど左の足は痛みて動かず。左の膝子節の下に、足の蒲團といふ一尺ばかりの小蒲團を敷きて其儘一分刻みにずり行く。敷居の難所を越えて、一間の道中恙無く、座敷の寢牀に著く。蒲團の上に這ひ上りて、今度は足を障子に向けて北枕に寢ぬ。珍しき運動に腹俄に減りたる心地して嬉し。母は掃除せんと箒持ちしまゝ病室の端に佇みて、外をながめながら、上野の運動會の聲が聞えるよ、と獨り言をいふ。

硯、紙など復枕もとに運ばせたれど一間半の旅行に勞れて筆を取る勇氣も出ねばしばし枕に就く。湯婆を呼ぶ、足の冷たければ湯婆に湯を入れしむ。此頃余の著物はフランネルのシャツ一枚、フランネルの單衣一枚にて夜も晝も同じ事なり、只肩をもたげて仕事などする時は此上に綿入半纏一枚を加ふ。今日は暖かなる儘に足の上に白毛布一枚を掩ひて著蒲團を用ゐざりし程に足冷えたれば湯婆を呼びしなり。湯婆を用ゐるは一ケ月も前よりの事なれば今更珍しきにはあらず。

やゝありて頭を擡げ筆を取る。ホトトギス募集の週間日記の手入に掛る。前日の仕殘りなり。日記は長くて面白きあり。短くて面白きあり。あれこれと濫書して今度は最長の日記を取りて少しづゝ書直す。これは河內の田舍にありて毎日二里の道を小學校へ通ふといふ人の日記なり。何の珍しき事もなけれど朝から夜迄の普通の出來事を丁寧に書き現したるために其人の境遇の詳細に知らるゝが面白きなり。殊に小學校の先生といふが猶面白く感ぜらる。近來小學校敎員の不足といふ事が新聞に見ゆる度に余は田舍の貧乏村の小學校の先生になりて見たしと思ひ居りし際なれば深く感ぜしならん。只惜むべきは學校に於ける授業上の記事少き事なり。土曜日の濫書の段の如く他もありたし。此

文長ければ學校外の記事を成るべく簡略にせんとて二三日分を直しかけたれど寐て書く事故少しも捗取らず、右手しびれて堪へ難ければ手を伸ばして左手にて肘を揉む。やがて右手を頬杖に突きて暫く休む。

紅茶を命ず。煎餅二三枚をかじり、紅茶をコップに半杯づゝ二杯飲む。晝飯と夕飯との間に、菓物を喰ふか或は茶を啜り菓子を喰ふかするは常の事なり。

悄然と休み居る内、ふと今日は十月十五日にしてホトトギス募集の一日記事を書くべき日なる事を思ひ出づ。今朝寐覺には一寸思ひ出したるが其後今迄全く忘れ居しなり。余も何か書かんと思ひ居し故今日は何事かありしと考ふるに何も書くべき事なし。實に平凡極る日なり。來客も非常に少く、其他に家内にも何一つ事も起らぬと見ゆ。猫が鳥籠を襲ふ程の騒ぎは毎日ある事なれどそれも今日は無し。障子に日のかげりたるに最早四時を過ぎたれば此後又人を驚かす程の新事件起るべくもあらず。何か面白き事は無きかと頬杖の儘正面を見れば正面は一間の床の間にして例の如き飾りつけなり。

此例の如き飾りつけといふは、先づ眞中に、極めてきたなき紙表裝の墨竹の大幅を掛けあり。此繪の竹は葉少く、竿多く、最太い竿は幅五六寸もあり、蕭澤といふ余と同名の古人の筆なり。墨色濃ふが如く趣向も善きにや淺井下村中村など諸先生にほめられ、湖村は一ケ月に幾度來ても來る度にほめて行く。余が家此外に藏幅なければ三年經ても五年經ても床の間の正面はいつも此古びたる竹なり。

竹の下、正面に優美な黒塗の春日卓あり。其上に昨日の俳句會の會稿らしき者載せあり。竹と會稿とは共にきたなき所調和すべけれど、卓は竹とも會稿とも調和せず。

床の間の右の隅には西洋料理を運ぶ箱の如き上の方の稍ゝ細き箱あり。こは抹茶の器を入れたる儘ある人の貸しくれたるなり。西洋料理の箱に似たるが變なり。余は抹茶を飲まねど左千夫は毎日十服以上を飲む程の人なれば同氏來る毎に此箱をあてがひ置く次第なり。其箱の前に秀眞の作りたる青銅の花瓶の足三つ附きたるありて小き黄菊の花を活けあり。すぐ其横に、鐵石の俗なる小花瓶に赤菊二枝ばかり挿す。總て此邊の不調和なる事言語道斷なり。

床の間の左の隅の小暗き處には、足のつきたる淺き籠ありて、綠色の美しき羽根の小鳥が一尺許りの小枝の上にとまつて居るのが明かに見ゆる外は善く見えず。見えざれど余は固より之を知る。此箱に小鳥と共に載せあるは余が今春病牀にありて自ら土をこねて造りし三個の寶物なり。第一は四寸許の高さの首なるがこは自分の顔を鏡に寫しながら二日を費して捏ねあげし者なれど少しも似ずと人はいふ。第二は右の首の臺にもと思ひ五寸許の高さにて圓テーブルの如き者を造り其テーブルの下の臺に多くの花と葉を浮彫の如く彫りあり、花は六瓣にして何の花ともつかず、葉は牡丹に似たり、こはラムプの下にて一夜に捏ねたる者なりと誇りかにいへば圓テーブルはをかしとて人は笑ふ。とにかくに首臺には危ければ首は常におろし置くなり。第三は煎茶の湯ざましの一端に蜻蛉をとまらせ其尻を曲げて持つ處にしたるなり。蜻蛉の考へつきは面白しなど俗受善きだけ俗な者なり。右の首を燒いてくれずやと曾て秀眞に頼みしに、ぶらんどにしてなければ燒けずといふ。陶器を燒くといふ某女來りし時又頼みしが、燒かぬ方よろしからんとこれもいふ。因つて首は終に燒かぬ事にきめて今に鼠色なり。

此等を載せたる箱の前に五六寸程の眞黒なる鳥の稍ゝ大を枝にとまりたるあり。これは時鳥なり。ある人鷹狩に行きて鷹に取らせたる時鳥

を余のために特に製にして贈られしなり。土の首は此時鳥のために半ば隠れ居るやうなる位置に置かる。

ついでに庭のけしきを見んと、母を呼びて障子を左右にあけしむ。同じ庭ながら病室の前に當る處は雞頭、葉雞頭など今にぎやかに見ゆれど、こちらの方は見るべき花もなきに殊に日もかげりたれば寒き身にしみて小淋しき様なり。萩は已に刈られ花もなき菊の一本二本ねぢくれたるが杖に扶けられて僅に腰をあげあり。薔薇、朝鮮薔薇は葉大方落ちて返り咲の一輪二輪かすかにほのめく。其後にある一間ばかりの丈の赤松の根元に二枚の板をもたせ置けるあり。こは前日の野分に倒れたるを母などが引き起して假初の板を置きそれで支へる積りなり。松に並びて垣根にある櫻桃、梅、柿、石榴などの苗木、殺風景いはん方なし。

鐵網の大鳥籠はこゝよりは病室にて見ると反對の側を半ば見るなり。鐵網を隔てゝ雞頭の赤や黄が二三本見ゆ。鐵網と雞頭、如何に俗なる事ぞ。されど此内に面白き所もあるなり。

平和なる天氣は静かに暮れて少しの風もなければ感冒を恐れて障子をたてしむ。猶ぼんやりと頬杖の儘なり。両腦やゝのぼせたる氣味なれば、硯箱の中に筆と共に入れられたる験温器を取り出して左の脇に挟む。胴も腕も瘦せたれば脇の下うつろとなりて、験温器ゆるく、やゝもすれば辷り落ちたるを知らざる事あり。

母、夕飯を運び來る。験温器を検するに卅七度五分なり。膳の上を見わたすに、粥と汁と芋と鮭の酪乾少しと。温き飯の外は粥を喰ふが例なり。汁は「すまし」にて椎茸と蕪菜の上に卵を一つ落しあり。菜は好きなれど此種の卵は好まず。今夕の飯御馳走不足にて不平の氣味なり。母は今來たる雜誌の封を破つて、傍にあるホトトギス募集句の山なせる上に置きながら、今度の明星は表紙色が變つた、といふ。余は横目にて一寸見る、茶色なり。汁をかへよ、といはれて、喰ふて見れば喰へぬ程にもあらねば、かへて喰ふ。芋は、といはれてこれも二皿喰ふ。芋の煮たてはうまきものなり。粥二碗、汁二椀、芋二皿、鮭の乾肉悉く喰ひつくして膳の上復一物なし。クレオソート三袋。自ら梨一個を剝いて喰ふ。心を噛み皮を吸ふ。

少し休みて日記の手入にかゝる。妹、五分心の置ラムプを點じ來る。やゝありて發熱の氣味あり。筆を投じて仰ぎ臥す。験温器を挾み見るに卅八度一分に上る。此の如きは余にありては高き熱にあらねど此頃の衰弱は是程の熱にも苦められて二三時間は、うめきつゝもがきつゝするなり。さりながら卅九度以上の熱にても苦痛は左程の差違なし。畢竟苦痛は熱の高低に因るよりも體の強弱に因る事多きか。元氣よき時は卅九度の熱ありながら筆を取りて原稿を書く事すらあり。

ふと思ひ出でゝ仰臥のまゝ「明星」を取りて見る。一枚々々あけては表題を見、挿畫を見る。ゲーテの死顔の畫ある處に到りてしばし注目して見る。畫ときの短き文を讀む。又一枚々々あけ行くに蛇口佛心と題して余に關せる一文あり。讀む。前號に余が受けたる嘲罵は全く取り消されたり。此度の事は誤報臆測等より出でたる間違ひなれども全體余は世人より嘲罵を受くる値打ありと自ら思ふ。又一枚々々あけて、あけ終る。

徒に静臥しあらんは却て苦しければ、談話して苦痛を紛らさんと、母を呼ぶ。此時妹は錢湯にでも行きたるらし。母は長火鉢の間の襖をあけて入り來り、ラムプの向ふに坐す。先づ、翌の晩の御馳走は何にしよう、と余はいふ。これは左千夫、碧梧桐、虚子、鼠骨の四人を明日の夕刻來てくれと招き置きたる者にて、其用事は

頃日余が企てたる興津へ轉居の事今迄遷延して決せざりしを、諸氏と相談の上最後の決定をなさんとするなり。余は前議を取り消して今度は轉居中止の議を提出せん心組なり。御馳走つて別に仕樣も無い、と母の返答。御馳走といふは例の通り何か一つ珍しい者がほしいだけの事なり、此前のやうなおりん饅はいけないが何か菓子でもあるまいか、茶人が多いからわざと西洋菓子にでもしようか、といへば、西洋菓子とは靑木堂へでも行くのか、それならば今夜行かんと明日は迚も行く隙無し、と母いふ。今夜てに今から行けるものでない、それなら岡野に何か珍しい菓子はあるまいか、と言へば、餅菓子の上等はどうか、といふ。餅菓子の上等、それは餘りに平凡なり、と余は笑ふ。それはそれとして膳の上は肴一皿、初茸汁、したし物と定む。したし物にキャベツはあるまいか、いつかのやうにゆでたやつを牛の油で煮ると非常にうまいが、といへば、母は、牛の油で煮たりしたのでは岡さんが得おたべまい、といふ。得くはぬ所が嫌さ、と余いふ。此頃八百德でキャベツを見ないから無いであらう、といふ話に、無ければ何でも善い、といふ事にて相談了る。先程より余は左側に寄て、母に背を向けながら話し居たるが相談すみて母は立ちて行く。

又獨になりて、今日の日記の事思ひ出す。これ位波瀾なき平和なる日は一ケ月に二日とは無きに丁度それが日記の日に當りたるは不運なり。併し余は曾て人に見するにはあらで自分の一日の生活を極めて詳細に書きて見たしと思ひし事あり、其後、志を果さゞりしが今此機を利用して今日の記事を書かんには平和なる日こそ却て自分の境遇を現すに適すべけれ。之を雜誌に載せんには餘りに人を馬鹿にしたる事なれど之を以て消息に代へんには妨けなかるべきか。從來地方の親戚知人より容體を問はるゝ事屢々なれど一々詳細の返事もせざるため種々の誤解を來し、或は實際の病狀より重く見て特に虚子抔に手紙を贈りて安否を問はるゝ事あり、或は實際よりは極めて輕く見て、安坐は勿論、多少の步行位は出來る者として漫遊を促し來り、俳稿其他の添削を頼み來る事あり。これ等の誤解を正さんには容體的記事も又必要なるべきか、などさま〴〵に思ひ煩ふ。沒頭を呼ぶ。

先刻來慢性的嘔吐を催す事頻なり。こは殆ど平常の事なれど今夜は稍ゝ多量なり。晩飯を喫ひ過ぎたりと見ゆ。

妄想は一轉して倫理教育の上に至る。中學以上の生徒に分りきつたる忠孝のお話など何の役にも立たぬ事なり。殊に不道德なる先生の鹿爪らしき道德談や、或は二三十圓の月給を頂戴してやう〳〵に中學校の教員となつて校長のお髯を拂ふやうな先生が天下丸呑の立志論を述べ立つる抔片腹痛きにも限りあるものなり。今に知らねど余が中學や高等中學に通ふ頃の倫理の先生は必ず漢學者なりしもをかし。こは倫理學は西洋よりも支那が發達し居るといふ譯にや、又は漢學者の道德は西洋學者より高きといふ譯にや、此わけ校長に聞いて見たらば校長も返答に困るなるべし。學生の道德を高くするは薰陶より外に良法無しと思ふ。されど若し倫理科の先生を置かざる可らずとせば校外に求めても成るべく名望ある人を聘して講釋でも演説でもさすべし。生徒の輕蔑し居る先生がいくら口を酸くして倫理を説くとも學校内のいたづら者が一人にても減るまじ。今の東京の高等學校にては哲學的の倫理學を説くとか、そは不道德先生の道德談に勝ること萬々なれど、これ亦倫理哲學を教ふるがためにいたづら者の一人にても減るまじきは前同斷なり。

妄想又妄想、終に漢字制限論に移る。文部省が尋常小學四年期間に教ふべき者として漢字

十三首を撰びたるは一日一字を書ける程の割合になりて字數の上にては略ゝ適度を得たるべし。されども其字の撰び方は當を得たりや否や疑問に屬す。余は字引を繰つて普通なる字を片端より拔き出だすなどの方法を取らんよりも、小兒の談話を筆記し、其中より其一人其一家又は其一地方に固有なる語を省き、極めて普通なる者のみを撰び、之を標準として教科書を作らば、教へらるゝ者には記憶し易くして忘れ難きの利あるべし。たとへば三歳の兒童の用語、四歳の兒童の用語、乃至、五歳、六歳、七歳と其年齡に從ひて用語表を作らば教科書を作るの參考になるのみならず、兒童心理の研究にも裨益する事論なし。はた詩人の眼より見ても興味少きにあらず。

ふと自分が仰のけに臥したる影の大きくなりて襖の上に寫りたるを見るに、両膝を立てたる上に毛布を著せたれば、其影はノッペりしたる山の如く、膝の處にてどんと絶壁をなして急に落ちたり。之をつくづく見る内に、近頃屢ゝ書く、文章の山の圖を思ひ出す。しかも落語的尻きれ的の拙き文章を圖に現はす時、山の形が、今の膝の影に似たるによりて自分の影を益ゝ面白からず思ふ。

妄想と、空涙と、口の内にて演説のまねと、今朝來の經過を繰り返して考へ、見る事と、二つの扁額、爲山の水畫、不折の油繪を見つむる事と、此等の中にやうやう苦痛の三四時間を過ぎて、熱次第にさめかゝる。

余は勇氣を鼓して右向に直り筆を取る。再び日記の手入にかゝる程に、熱全くさめて、頭腦明瞭に、筆の進むを覺えず。發熱後はいつも頭腦明瞭にして仕事の捗取非常に早ければ昨年頃迄は徹夜して爲したる仕事多かりしが、翌日苦しき故に今は徹夜する勇氣なくなりたり。發熱後一二時間の仕事にても其夜は睡眠出來ずして翌日は一日頭惡く仕事も何も出來ぬが例なり。

四鄰ひつそりとして音無く、日記の手入次へ次へと移る。母は忽然襖をあけて、煎餅でもやらうか、といふ、これは平生夜仕事の時に何か食ふが例となり居れば斯くいふなり。生憎今夜は嘔吐稍ゝ烈しかりしために腹工合惡く、食欲なけれど、無下にことわるも如何にて、煎餅より外に何も無いか、といへば今日貰ふたる日光羊羹ありといふ。食意地のきたなさに、それ貰はうか、と答ふ。母は羊羹を持ち來りて小刀にて切る。二切を食ふ。母も食ふ。時計十二時を打つ。又筆を取る。終に秀眞の鑄物日記に到る。これ今度の募集日記の第一等なり。面白く趣味ある材料の充實したる上に、書き方も倶らしく眞率にして技術家の無邪氣なる所善くあらはれたり。書き直すに及ばず。二三個處字を直して、それにて全く總ての日記の手入終る。嬉し嬉し。

母を呼んで、もう寐る、といふ。妹は湯の勞れにて早く寐たりと覺ゆ。母は寢室に敷き蒲團の上に更に毛布を敷きなどす。余は再び病室の方に這ひ戻りて蒲團に上るや頭を枕の上に安めて、口の中にて、極樂、といふ。日記の手入すみたるが馬鹿に嬉しきなり。母は余が枕もとに背の低き角行燈をともし置き、座敷の方の硯箱、原稿、などを片づけて寢に就く。

羊羹のためにや口の中苦し。一時を聽く。

附記

喀痰は一晝夜の分量、二個のコップに六七分目宛位なり。朝殊に多し。血痰をまじへず。

睡眠の時は多く仰臥なり。仰臥も後には背の痛み堪へ難くなれば其時は左向に寢ぬ。寢るには右向よりも左向を可とすれど、左向になりては頭を蒲團の上にすりつくるやうにして寢るのみにて、半ば體を起して仕事な

どする事出來ず。且つ左向は長く續かねば終には仰臥に返るなり。左の足は屈まりて伸びず。故に仰臥の時は左の膝は常に立て居るなり。

沐浴せず。時々アルコールにて體を拭ふのみなれどそれも一ケ月に一二度位なるべし。但足先の垢はアルコールにて取れねば一ケ月に一度位脚湯するなり。

斬髪は一ケ月一度位、床屋を呼び來りて、自分は半ば身を起して居て刈らしむ。

食器杯は余の分と家人の分と別々に取り扱ふなり。來客の分はいふを待たず。

郵便は一日平均三四通はあるべし。されど「日本」への投書なとは家人の取扱に任して余は手も觸れねば此日も何通來りしや知らず。

此日位の熱は平常なり。此頃は筆取らぬ日さへ多ければ此日の如きは多くの仕事をしたる日なり。蓋し平日よりは余の氣分の善かりしを證するに足る。（明治三十三年十一月）

初夢

（座敷の眞中に高脚の雜煮膳が三つ四つ据ゑてある。自分は紋羽織で上座の膳に著く。）「こんなに揃つて雜煮を食ふのは何年振りですかなア、實に愉快だ、ハヽー松山流白味噌汁の雜煮ですな。旨い、實に旨い、雜煮がこんなに旨かつたことは今迄ない。も一つ食ひませう。」「羽織の紋がちつと大き過ぎた樣ぢやなア。」「なに大きいことは無い。五つ紋の羽織なんか始めて著たのだ。紋の大きいのは結構だ。（自分は嬉しいので袖の紋を見る。）仙臺平の袴も始めてサ。こんなにキウ／＼鳴ると恥かしいやうだ。」「お雜煮を最一つ上げよか。」「もうよございます。屠蘇をも一杯飲まうか。おい／＼硯と紙とを持て來い。何と書いてやらうか。俳句にしようか。出來た出來た。大三十日愚なり元日猶愚なりサ。うまいだらう。嘗て僕が腹立紛れに亂暴な字を書いたところが、或人が龍飛鰐立と讃めてくれた事がある。今日のも釘立ち蚯蚓飛ぶ位の勢は慥かにあるヨ。これで書初めもすんで、サア廻禮だ。」

「おい杖を持て來い。」「どの杖をナ。」「どの杖てゝまさかもう撞木杖なんかはつきやしないヨ。どれでもいゝステッキサ。暫く振りで薩摩下駄を穿くんだが、非常に穿き心地がいゝ。足の裏の冷や／＼する心持は、なまぬるい湯婆へ冷たい足の裏をおつゝけて寐ぶつてゐた時とは大違ひだ。殊に麻裏草履をまづ車へ持ていて貰つて、あとから車夫におぶさつて乘るなんどは昔の夢になつたヨ。愉快だ。たまらない。」

（急いで出ようとして敷居に躓づく。）「あぶないぞナ。」「なに大丈夫サ、大丈夫天下の志士サ。おい車屋、眞砂町迄行くのだ。」

「お目出度う御座います。先生は御出掛けになりましたか。」「ハイ只今出た所で、まア御上りなさいまし。」「イヤ今日は急いでゐるから上りません。」「あなたもうそんなにお宜しいので御座いますか。此前お目にかゝつた時と御容子なんどがたいした違ひで御座います。」「病氣ですか、病氣なんかもう厭き／＼しましたから、去年の暮にすつかり暇をやりましたヨ。今朝起きて見たら手や足が急に肥えて何でも十五貫位はありませうよ。」「さうですか、それは結構で御座います。まアお上りなすつて、屠蘇を一つさし上げませう。」「いや改めてゆつくり參りませう。サヨナラ。おい、車屋金助町だ。」

「ヤアこれは驚いた。先生もうそんなにお宜しいのですか。もうお出になつても宜しいのですか。マアどうぞ、サアこちらへ。（座敷へ通る。）お目出度う御座います。舊年中はいろ／＼、御

變りませず。」「お目出度う御座います。」「今日もお噂を致して居りましたところです。こんなによくおなりにならうとは實に思ひ懸けが無かつたのです。まだそれでもお足がすこしよろよろしてゐるやうですが。」「足ですか、足は大丈夫ですヨ。すこし居敷に障つてるんでせう。」「時にけふの飾りはひどく洒落てゐますな。この幅目は探幽ですか。炭取りに椿を生けたのですか。いづれ又參りませう。おい車屋、今度は猿樂町だ。」

「いや、お目出度う御座います。留守ですか。さうですか。成程斯ういふ内ですか。」「まアあんさん一寸お上りやす。」「いゝえ急いでゐますから……私の書生の頃この邊の下宿屋にゐたのですが、もう十四五年も前のことですから、この邊の樣子はすつかり違つてゐますヨ。サヨナラ。」

「おやお珍しう、もうそんなにすつかりお宜しう御座いますので、まアお上りなさいませ。（座敷に通る。）お目出度う御座います。舊年中は……相變りませず。」「お留守ですか。」「ハイ唯今河東さんがお出になつて一緒に出て行きました。」「マーチャンお目出度う。」「マーチャンお辭儀おしなさい。このをぢさん知つてゐますか。オホン／＼をぢちやんがネー御病氣がすつかりよくおなりなすつていらしつたのだからお辭儀をしなくちやいけません。」「マーチャンはことし四つになつたんでせう、さうしてあかチャンの姉チャンになつておとなしくなつたからこれをあげるヨ。」「おやいゝものを戴いた、此中には何が這入つてるだらう、あけて御覽なさい。おやいゝもんだネー。オヤもうお歸りでございますか。」

「おい君暫く逢はなかつたネー。」「やあ珍しい。まアお目出度う。」「君はいつから足が立つやうになつたのだ。僕は全く立たんと聞いてゐたが。」「なに今朝から立つたのだヨ。今朝立つて見たら君、痛みなんどはちつとも無いのだもの。」「さうか、そりや善かつた。大變心配してゐたんだヨ。もうとても、いけないだらうッて、誰か言つた位であつたから。」「併し君は何處へ行くんだ。」「僕は新橋迄行くのだ。」「さうか、それぢや僕も一緒に行かう。」「もう午ぢやが君飯食はないか。」「それぢや一緒に食はう。」

「これか、新橋ステーションの洋食といふのは。兎に角日本も開けたものだネー。爰處へ斯んな三階作りが出來て洋食を食はせるなんていふのは。ヤア品川灣がすつかり見えるネー、成程あれが築港の工事をやつてゐるのか。實に勇ましいヨ。どし／＼遣らなくつちやいかんヨ。」「僕は二時半の東海道線だが、尤も本所へも寄つて行きたいのだが、本所はづれ迄人力で往復しては日が暮れてしまふからネー。」「本所へ行くなら高架鐵道に乘ればよい。」「さうか。高架鐵道があるのだネ。そりや一番乘つて見よう。君この油繪はどうだ非常にまづいぢやないか。こんな畫き方つてないものだ。へーこれは牡丹の花だ。これが所謂室咲だな。此頃は役者が西洋へ留學して、農學士が植木屋になるのだからネ。」「オイ／＼君ソップがさめるヨ。」「成程これは旨い。病室で飲むソップとは大違ひだ。」（チャラン／＼／＼）

「寢臺附の車といふのはこれだな。こんな風に寢たり起きたりしてをれば、汽車の旅も樂なもんだ。この邊の兩側の眺望はちつとも昔と變らないヨ。こんな煉瓦もあつたヨ。こんな庭もあつたヨ。松が四五本よろ／＼として一面に木賊が植ゑてある、爰處だ／＼、イヤ主人が茶を立てゝゐるヨ。お目出度う、（と大きな聲をする。）聞こやあしないや。こゝは山北だ。おいおい鮎の鮓は無いか。さうか。鮎の鮓は冬は無いわけだナ。此邊を通るのはどうもいゝ心持だ。

こゝが與津か。この家か、去年の秋移らうかといつたのは。成程これなら眺望がいゝだらう。」（大阪の連中が四五人汽車の窓の外に立つてゐる。）「先生お目出度う御座います。〳〵〳〵お目出度う御座います。〳〵。」「ヤアお目出度う御座います。諸君お揃ひで。」「今東京から電報が來たもんですからお出迎へに來たのです。」「さうですか、それは有難う御座いますが、一寸國へ歸つて來ようと思ひますから、歸りによりませう。さうですか。サヨナラ。」

「おい車屋、長町の新町迄行くのだ。ナニ長町の新町といつてはもう通じないやうになつたのか。それならば湊町四丁目だ。相變らず狹い町で低い家だナア。」

「アラ誰だと思ふたらのぼさんかな。サアお上り、お勞れつらう、もう病氣はそのいにようおなりたのか。」（座敷へ通る。）「アラおまいお戻りたか。」「マア目出度う。おばアさん相變らず御元氣ぢやナア……いゝエおばあアはもうぼれてしもてなんの役にもたゝんのヨ。」「おいさんはお留守かな。」「おいさんは神社だけ詣るといふて出たのぢやけれ、もうもんて來るぢやあろ。」「それぢやさアあたしも神社だけ詣つて來よう。道後が普請になつたさうなナア。」「さうヨ、去年は皇太子殿下がおいでになるといふてこゝも道後も騷いだのぢやけれど、またそれが止みになつたといふことで、皆精を落してしまふたが、ことしはお出になるのぢやといふて待つてゐるのぢやさうな。」「それぢや一寸出て來よう。」「マアお待ちや、お燗酒だけせうわい。おなかゞすいたらお鮓でも食べといき。」「いゝエもうえゝ。」「そんならすぐもんておいでや。こよひはうちへお泊りるのぢやあらうナア。」「こよひかな。こよひは是非東京へ歸つて活動寫眞を見に行く約束があるから、泊るわけには行かんが。」「そのいにお急ぎるのか。」「さうヨ、今度は一寸出て來たのだから……兎に角うちの古い家を見て來よう。」

「オヤ〳〵櫻の形勢がすつかり違つてしまつた。親櫻の方は消えてしまつて、子櫻の方がこんなに大きくなつた。これで此の子櫻の年が二十二三位になる筈だ。ヤア松の梢が見える。あの松は自分が土手から引いて來て爰處へ植ゑたのだから、これも二十二三年位になるだらう。あの松の下に蘭があつて、其横にサフランがあつて、其後ろに石があつて、其横に白丁があつて、すこし置いて椿があつて、其横に大きな木斛があつて、其横に柾があつて、厠の後ろにゴサン竹といふ竹があつて、其竹はいつもおばアさんの杖になるので、其筍は筍のうちでも旨い筍だといふことであつた。其ゴサン竹の傍に菖蒲も咲けば著莪も咲く、其邊はなんだかしめつぽい處で薄暗いやうな感じがしてゐる處であつたが、其しめつぽい處に菖蒲や著莪がぐちやぐちやと咲いてゐるといふことが、今に頭の中に深く刻み込まれてをるのはどういふわけかわからん。兎に角自分が二つの歳から十六の歳迄毎日々々見たり歩いたりしてゐた此庭が、今はどんなになつてゐるであらうか、一寸見たいと思ふけれど、今は他人の家になつてをるのだから仕方がない。垣から覗いて見ようと思ふにも、川の隔てがあるからそれも出來ん。」

「ヤア目出度う。お前いつお歸りたか。」「今歸つたばかりサ。道後の二階といふのはこれかナ。あしやア此邊に隱居處を建てようと思ふのぢやが、何處かえゝ處はあるまいか。」「爰處はどうかナ。」「これではちつと地面が狹いヨ。あしやア實は爰處で陶器をやる積りなんだが。」「陶器とはなんぞな。」「道後に名物がないから陶器を燒いて、道後の名物としようといふのヨ。お前らも道後案内といふ本でも拵へて、ちと他國の客をひく工夫をしては何うかな。道後の旅

店なんかは三津の濱の艀の著く處へ金字の大廣告をする位でなくちやいかんヨ。も一歩進めて、宇品の埠頭に道後旅館の案内がある位でなくちやだめだ。松山人は實に商賣が下手でいかん。」

「成程これや御城山へ登る新道だナ。男も女も馬鹿に澤山上つて行くが、ありやどういふわけぞナ。」「あれは皆新年官民懇親會に行くのヨ。」「それぢやあしも行つて見よう。」（向ふの家の中に人が大勢立つて混雜してゐる。其中から誰やら一人出て來た。）「おい君も上るのか。上るなら羽織袴なんどぢやだめだヨ。この内で著物を借りて金剛杖を買つて來給へ。」「さうか。それぢや君待つてくれ給へ。」（白衣に著更へ、金剛杖をつく。）サア君行かう。富士山の路は非常に險だと聞いたが、こんなものなら譯はないヨ。オヤ君は爰に寫生してゐたのか。もう四五枚出來てる？、それはえらいネー。もう五合目い來たのか。兎に角あしこの茶屋で休まうぢやないか。ヤア日本茶店と書てある。何がある。しる粉がある？。それならしる粉くれ。頻りに皆立つて行くぢやないか。なんだ。日の出か。成程綺麗だ。赤いもんがキラ〱してゐらア。君もう下りるか。それぢや僕も一緒に下りよう。成程砂をすべつて下りるとわけは無いヨ。マア君待ち給へ、馬鹿に早いナア。（急いで下りる積りで砂をふみ外して眞逆樣に落ちたと思ふと夢が覺めた。）

＊　＊　＊　＊　＊

目を明いて見ると朝日はガラス戸越に少しくさし込んで、ストーブは既に焚きつけてある。腰の痛み、背の痛み、足の痛み、この頃の痛みといふものは身動きもならぬ始末であるが、去年の暮の非常に烈しい痛が少し薄らいだ爲に新年はいくらか愉快に感ずるのである。ア、けふもエー天氣だ。

（明治三十四年一月）

死後

人間は皆一度づゝ死ぬるのであるといふ事は、人間皆知つて居るわけであるが、それを強く感ずる人とそれ程感じない人とがあるやうだ。或人はまだ年も若いのに頻りに死といふ事を氣にして、今夜これから眠つたらばあしたの朝は此儘死んで居るのではあるまいかなどゝ心配して夜も眠らないのがある。さうかと思ふと、死といふ事に就て全く平氣な人もある。誰も一度は死ぬるのだよ、などゝおどかしても耳にも聞えない振りでゐる。要するに健康な人は死などといふ事を考へる必要も無く、又暇も無いので、唯夢中になつて稼ぐとか遊ぶとかしてゐるのであらう。

余の如き長病人は死といふ事を考へだす樣な機會にも度々出會ひ、又さういふ事を考へるに適當した暇があるので、それ等の爲に死といふ事は丁寧反覆に研究せられてをる。併し死を感ずるには二樣の感じ樣がある。一は主觀的の感じで、一は客觀的の感じである。そんな言葉ではよくわかるまいが、死を主觀的に感じるといふのは、自分が今死ぬる樣に感じるので、甚だ恐ろしい感じである。動悸が躍つて精神が不安を感じて非常に煩悶するのである。これは病人が病氣に故障がある毎によく起すやつでこれ位不愉快なものは無い。客觀的に自己の死を感じるといふのは變な言葉であるが、自己の形體が死んでも自己の考は生き殘つてゐて、其考が自己の形體の死を客觀的に見てをるのである。主觀的の方は普通の人によく起る感情であるが、客觀的の方は其趣すら解せぬ人が多いのであらう。主觀的の方は恐ろしい、苦

しい、悲しい、瞬時も堪へられぬやうな厭な感じであるが、客觀的の方はそれよりもよほど冷淡に自己の死といふ事を見るので、多少は悲しい果敢ない感もあるが、或時は寧ろ滑稽に落ちて獨りほゝゑむやうな事もある。主觀的の方は、病氣が惡くなつたとか、俄に苦痛を感じて來たとか、いふ時に起るので、客觀的の方は、長病の人が少し不愉快を感じた時などに起る。

　去年の夏の頃であつたが、或時余は客觀的に自己の死といふ事を觀察した事があつた。先づ第一に自分が死ぬるといふとそれを棺に入れねばなるまい、死人を棺に入れる所は子供の内から度々見てをるがいかにも窮屈さうなもので厭な感じである。窮屈なといふのは狹い棺に死體を入れるばかりでなく、其死體をゆるがぬやうに何かでつめるのが厭なのである。余が故郷などにてはこのつめ物におが屑を用ゐる。半紙の嚢を(縱に二つ折りにしたのと、横に二つ折りにしたのと)二通りに拵へてそれにおが屑をつめ、其嚢の上には南無阿彌陀佛などと書く。これはつめ處によつて平たい嚢と長い嚢と、各々必要がある。それで貌の處だけは幾らか斟酌して隙を多く拵へるにした所で、兎に角頭も動かぬやうにつめてしまふ。つまり死體は土に葬らるゝ前に先づおが屑の嚢の中に葬らるゝのである。十四五年前の事であるが、余は猿樂町の下宿にゐた頃に同宿の友達が急病で死んでしまつた。東京には其男の親類といふものが無いので、我々朋友が集まつて葬つてやつた事がある。其時にも棺をつめるのに何を用ゐるかと聞いて見たら、東京では普通に樒の葉なども用ゐるといふ事であつた。それからそれを買ふて來て例の通り紙の袋を拵へてつめて見た所がつめ物が足りなかつた。其處で再び樒の葉を買ふて來て、今度は嚢を拵へるのも面倒だといふので、其儘で其處らの隙をつめて置いた。棺は寢棺であつたが死人の頰の處に樒の葉が觸つてゐるなどゝいふのは、いかにも氣の毒に感じた。昔から斯ういふ感じがあるので、余は自分を棺につめられる時にどうか窮屈にない樣に、つめて貰ひたいものだと、其事が頻りに氣になつてならぬ。西洋では花でつめるといふ事があるさうだが、これは我々の理想にかなふたやうな仕方で實によい感じがするのであるが、併し花ではからだ觸りが柔かなだけに、詰物にはならないやうな氣がする。尤も棺の幅を非常に狹くして死體は棺で動かぬやうにして置けば花でつめるといふのは日本のおが屑などゝ違つてほんの愛嬌に振撒いて置くのかも知れん。さうすれば其棺は非常に窮屈な棺で、其窮屈な所が矢張り厭な感じがする。

　スコットランドのバラッドに Sweet William's Ghost といふのがある。この歌は或女の處へ、其女の亭主の幽靈が出て來て、自分は遠方で死んだといふ事を知らすので、其二人の問答の内に次のやうな事がある。

"Is there any room at your head, Willie?
Or any room at your feet?
Or any room at your side, Willie,
Wherein that I may creep?"

"There's nae room at my head, Margret,
There's nae room at my feet,
There's nae room at my side, Margret,
My coffin is made so meet."

其意は、女の方が、私はお前の所へ行き度い

が、お前の枕元か、足元か、又は傍らの方に、私がはいれる餘地があるかといふて、問ふた所が、明かに[illegible]答へるには、わたしの枕元にも、足元にも、傍らにも少しも隙間がない、わたしの棺は、そんなにしつくり出來て居る。といふたのである。まさか其實地でも二つの死骸を一つの棺に入れるわけではないから、そんな事はないのであるが、併し此の歌は擬情的に現はしてをると同時に、棺の窮屈なものであるといふ事を現はしてをる。斯んな歌になつて見ると、棺の窮屈なのも却て趣味がないではないが、併し今自分の體が棺の中に這入つてをると考へると、可成窮屈にないやうにして貰ひたい感じがする。尤もこれは肺病患者であると、胸を壓せられるなども他の人よりは幾倍も窮屈な苦しい感じがするのであらう。

或時世界各國の風俗などの圖を集めた本を見てゐたら、其中に或國、國名は忘れたが、歐羅巴邊の大國ではなかつた、の王の死骸が棺に入れてある圖があつた。其棺は普通よりも高い處に置いてあつて、棺の頭の方は足の方よりも尚一層高くしてある。其處には燈火が半ば明るく半ば暗く照して居つて、周圍の裝飾は美しさうに見える。王は棺の中に在つて、顏は勿論、腹から足迄白い著物が着せてあるところがよく見える。王の眼は靜かにふさいでゐる。王は今天國に昇つてゐる夢を見てゐるらしい。此畫を見た時に余は一種の物凄い感じを起したと同時に、神聖なる高尚なる感じを起した。王の有様は少しも苦しさうに見えぬ。若し余も死なねばならぬならば、斯ういふ工合にしたら窮屈でなくすむであらうと思ふた事がある。併し幾ら斯んなにして見た所が、棺の蓋を被ふてコン／＼と釘を打つてしまつたら、それでおしまひである。棺の中で生きかへつて手足を動かさうとした所で最早何の效もない。其處で棺の中で生きかへつた時に直ぐに棺から這ひ出られるといふ樣な仕組みにしたいといふ考へも起る。

棺の窮屈なのは仕方がないとした所で、其棺をどういふ工合に葬られたのが一番自分の意に適つてゐるかと尋ねて見るに、先づ最も普通なのは土葬であるが、其土葬といふ事も余り感心した葬り方ではない。誰の棺でも土の穴の中へ落し込む時には極めていやな感じがするものである。況して其棺の中に自分の死骸が這入つてをると考へると、何ともいへぬ厭な感じがする。寢棺の中に自分が仰向けになつてをるとして考へて見給へ、棺はゴリ／＼／＼ドンと下たに落ちる。施主が一鍬入れたのであらう、土の塊りが一つ二つ自分の頭の上の所へ落ちて來たやうな音がする。其あとはドタバタ／＼と土は自分の上に落ちて來る。またゝく間に穴を埋めてしまふ。さうして人夫共は埋めた上に土を高くして其上を頻りに踏み固めてある。もう生きかへつてもだめだ。いくら聲を出しても聞えるものではない。自分が斯んな土の下に葬られてをると思ふと窮屈とも何ともいひやうがない。六尺の深さならまだしもであるが、友達が深切にも九尺でなければならぬといふので、九尺に掘つて呉れたのはいゝ迷惑だ。九尺の土の重さを受けてをるといふのは甚だ苦しいわけだから此上に大きな石塔なんどを据ゑられては堪まらぬ、石塔は無しにしてくれとかねて遺言して置いたが、石塔が無くては體裁が惡いなんていふので大きなやつか何かを据ゑられては實に堪まるものぢやない。

土葬はいかにも窮屈であるが、それでは火葬はどうかといふと火葬は面白くない。火葬にも種類があるが、煉瓦の煙突の立つてをる此頃の火葬場といふ者は棺を入れる所に仕切りがあつて其仕切りの中へ一つ宛棺を入れて夜になると皆を一緒に蒸燒きにしてしまふのぢやさうな。

そんな處へ棺を入れられるのも厭だが、殊に蒸燒きにせられると思ふと、堪まらぬわけぢやないか。手でも足でも片つぱしから燒いてしまふといふなら痛くてもおもひ切りがいゝが蒸し燒きと來ては息のつまるやうな、苦しくても聲の出せぬやうな變な厭な感じがある。其上に蒸しやきなんといふのは料理屋の料理みたやうで甚だ滑稽になつてゐる。火葬ならいつそ昔の隱坊的火葬が風流で氣が利いてゐるであらう。とある山陰の松の木立が立つてをるやうな陰氣な所で黒木立をひかへて一つの燒き場がある。燒き場といふても一寸した竈が立つてをる位で別に何の仕掛けもない。唯薪が山のやうに積んである上へ棺を据ゑると隱坊は四方から其薪へ火をつける。勿論夜の事であるから、炎々と燃え上つた火の光りは眞黒な松の半面を照して空には星が一つ二つ瞬いてをる。其處に居る人は附添人二人と隱坊が一人とばかりである。附添人の一人が隱坊に向つて「隱坊さん、何だか淒い天氣になつて來たが雨は降りやアしないだらうか」と問ふと、隱坊はスパ／＼と吹かしてゐた煙管を自分の腰かけてゐる石で叩きながら「さうですなー、雨になるかも知れない」と平氣な聲で答へてゐる。「今降り出されちやア困つてしまふ、どうしたらよからう」と附添の一人が氣遣はしげにいふと、隱坊は相變らず澄ました調子で「すぐ燒けてしまひまする」などゝいつてをる。火に照らされてゐる隱坊の顔は鬼かとも思ふやうに赤く輝いてゐる。こんな物淒い光景を想像して見ると何かの小説にあるやうな感じがして稍ゝ興に乘つて來るやうな次第である。併し棺から火がだん／＼まはつて來て棺は次第に燒けて來る。手や足や頭などに火が附いてボロ／＼と燒けて來るといふと、痛い事も痛いであらうが傍から見て居つてもあんまりいゝ心持はしない。おまけに其臭氣と來たらたまつた者ぢやない。併し其苦痛も臭氣も一時の事として白骨になつてしまふと最早サッパリしたものであるが、自分が無くなつて白骨ばかりになつたといふのは甚だ物足らぬ感じである。白骨も自分の物には違ひ無いが、白骨ばかりでは自分の感じにはならぬ。土葬は窮屈であるけれど自分の死骸は土の下にチャーンと完全に殘つて居る、火葬の樣に白骨になつてしまつては自分が無くなる樣な感じがして甚だ面白くない。何も身體髪膚之を父母に受くなどと堅くるしい理窟をいふのではないが、死んで後も體は完全にして置きたいやうな氣がする。

土葬も火葬もいかぬとして、それでは水葬はどうかといふと、この水といふやつは餘り好きなやつでない。第一余は泳ぎを知らぬのであるから水葬にせられた曉にはガブ／＼と水を飲みはしないかと先づそれが心配でならぬ。水は飲まぬとした所で體が海草の中にひつかゝつてゐると、いろ／＼の魚が來て何ともいはず胴ともいはずチク／＼とつゝきまはつては心持が惡くて仕方がない。何やら大きな者が來て片腕を喰ひ切つて歸つた時なども變な心持がするに違ひない。章魚や鮑が吸ひついた時にそれをもいでのけようと思ふても自分には手が無いなどゝいふのは實に心細いわけである。

土葬も火葬も水葬も皆いかぬとして、それならば今度は姥捨山見たやうな處へ捨てるとしてはどうであらうか。棺にも入れずに死骸ばかりを捨てるとなると、棺の窮屈といふ事は無くなるから其處は非常にいゝ樣であるが、併し寐巻の上に經帷子位を著て山上の吹き曝しに棄てられては自分の樣な皮膚の弱い者は、すぐに風邪を引いてしまふからいけない。それでチョイと思ひついたのは、ただ寐棺に入れて、蓋はしないで、顔と體の全面だけはすつかり現はして置いて、綺で見た或國の王樣のやうにして棄て

て貰ふてはどうであらうか。それならば窮屈にもなく、寒くもないから其點はいゝのであるが、それでも唯一つ困るのは狼である。水葬の時に魚につゝかれるのはそれ程でもないが、ガシガシと狼に食はれるのはいかにも痛さうで厭である。狼の食つたあとへ鳥がやつて來て臍を嘴でつゝくなども癪に障つた次第である。

どれもこれもいかぬとして今一つの方法はミイラになる事である。ミイラにも二種類あるが、エジプトのミイラといふやつは死體の上を布で幾重にも巻き固めて、土か木のやうにしてしまつて、其上に目口鼻を彩色で派出に書くのである。其中には人がゐるのには違ひないが、表面から見てはどうしても大きな人形としか見えぬ。自分が人形になつてしまふといふのもあんまり面白くはないやうな感じがする。併し火葬のやうに無くなつてもしまはず、土葬や水葬のやうに窮屈な深い處へ沈められるでもなし、頭から著物を澤山被つてゐる位な積りになつて人類學の參考室の壁にもたれてゐるなども洒落てゐるかもしれぬ。其外に今一種のミイラといふのはよく山の中の洞穴の中などで發見するやつで、人間が坐つたまゝで堅くなつて死んでをるやつである。こいつは棺にも入れず葬りもしないから誠に自由な感じがして甚だ心持かよいわけであるが、併し誰かに見つけられて此ミイラを風の吹く處へかつぎ出すと、直ぐに崩れてしまふといふ事である。折角ミイラになつて見た所が、すぐに崩れてしまふてはまるで方なしのつまらぬ事になつてしまふ。萬一形が崩れぬとした所で、淺草へ見世物に出されてお賽錢を貪る資本とせられては誠に情け無い次第である。

死後の自己に於ける客觀的の觀察はそれからそれといろ〳〵考へて見ても、どうもこれなら工合のいゝといふ死にやうもないので、ならう事なら星にでもなつて見たいと思ふやうになる。

去年の夏も過ぎて秋も半を越した頃であつたが或日非常な心細い感じがして何だか呼吸がせまるやうで病牀で獨り煩悶してゐた。此時は自己の死を主觀的に感じたので、あまり遠からん内に自分は死ぬであらうといふ念が寸時も頭を離れなかつた。斯ういふ時には誰か來客があればよいと待つてゐたけれど生憎誰も來ない。厭な一晝夜を過ごしてやう〳〵翌朝になつたが矢張前日の煩悶は少しも減じないので、考へれば考へる程不愉快を増すばかりであつた。然るにどういふはずみであつたか、此主觀的の感じがフイと客觀的の感じに變つてしまつた。自分はもう既に死んでゐるので小さき早桶の中に入れられてをる。其早桶は二人の人夫にかゝれ二人の友達に守られて細い野路を北向いてスタ〳〵と行つてをる。其人等は皆脚袢草鞋の出立ちでもとより荷物なんどはすこしも持つてゐない。一面の田は稻の穗が少し黄ばんで畦の榛の木立には百舌鳥がせはしく啼いてをる。早桶は休みもしないでとう〳〵夜通しに歩いて翌日の晝頃にはとある村へ著いた。其村の外れに三つ四つ小さい墓の竝んでゐる所があつて其傍に一坪許りの空地があつたのを買ひ求めて、棺桶は其邊に据ゑて置いて人夫は既に穴を掘つてをる。其内に附添の一人は近邊の貧乏寺へ行て和尚を連れて來る。やつと棺桶を埋めたが墓印もないので手頃の石を一つ据ゑてしまふと、和尚は暫しの間回向して呉れた。其邊には野生の小さい草花が澤山咲いてゐて、向ふの方には曼珠沙華も眞赤になつてゐるのが見える。人通りもあまり無い極めて靜かな瘦村の光景である。附添の二人は其夜は寺へ泊らせて貰ふて翌日も和尚と共にかたばかりの回向をした。和尚にも齋をすゝめ其人等も精進料理

を食ふて田舍のお寺の座敷に坐つてゐる所を想像して見ると、自分は其場に居ぬけれど何だかいゝ感じがする。さういふ工合に葬られた自分も早桶の中であまり窮屈な感じもしない。斯ういふ風に考へて來たので今迄の煩悶は痕もなく消えてしまふて、すがすがしいえゝ心持になつてしまふた。

冬になつて來てから痛みが増すとか呼吸が苦しいとかで時々は死を感ずるために不愉快な時間を送ることもある。併し夏に比すると頭腦にしまりがあつて精神がさわやかな時が多いので夏程に煩悶しないやうになつた。

（明治三十四年二月）

くだもの

植物學の上より見たるくだものでもなく、産物學の上より見たるくだものでもなく、唯病牀で食ふて見たくだものゝ味のよしあしをいふのである。間違ふてをる處は病人の舌の荒れてをる故と見てくれたまへ。

○くだものゝ字義　くだもの、といふのはくだすものといふ義で、くだすといふのは腐ることである。菓物は凡て熟するものであるから、それをくさるといつたのである。大概の菓物はくだものに違ひないが、栗、椎の實、胡桃、團栗などいふものは、くだものとはいへないだらう。さらば是等のものを總稱して何といふかといへば、木の實といふのである。木の實といへば栗、椎の實も普通のくだものも共に包含せられてをる理窟であるが、俳句では普通のくだものは皆別々に題になつて居るから、木の實といへば椎の實の如き類の者をいふ樣に思はれる。併し又一方からいふと、木の實といふばかりでは、廣い意味に取つても、覆盆子や葡萄などは這入らぬ。其處で木の實、草の實と並べていはねば完全せぬわけになる。此點では、くだものといへば却て覆盆子も葡萄もこめられるわけになる。くだもの類を東京では水菓子といふ。余の國などでは、なりものともいふてをる。

○くだものに準ずべきもの　畑に作るものゝ内で、西瓜と眞桑瓜とは他の畑物とは違ふて、却てくだものゝ方に入れてもよいものであらう。それは甘味があつて而も生で食ふ所がくだものの資格を具へてをる。

○くだものと氣候　氣候によりてくだものゝ種類又は發達を異にするのはいふ迄もない。日本の本州ばかりでいつても、南方の熱い處には蜜柑やザボンがよく出來て、北方の寒い國では林檎や梨がよく出來るといふ位差はある。況して臺灣以南の熱帶地方では椰子とかバナヽとかパインアップルとかいふ樣な、まるで種類も味も違つた菓物がある。江南の橘も江北に植ゑると枳殼となるといふ話は古くよりあるが、これは無論の事で、同じ蜜柑の類でも、日本の蜜柑は酸味が多いが、支那の南方の蜜柑は甘味が多いといふ程の差がある。氣候に關する菓物の特色をひつくるめていふと、熱帶に近い方の菓物は、非常に肉が柔かで酸味が極めて少い。其寒さの強い國の菓物は熱帶程にはないが、やはり肉が柔かで甘味がある。中間の溫帶のくだものは、汁が多く酸味が多き點に於て他と違つてをる。併しこれはごく大體の特色で、殊に此頃の樣に農藝の事が進歩すると、いろ〳〵の例外が出來てくるのはいふ迄もない。

○くだものゝ大小　くだものは培養の如何によつて大きくもなり小さくもなるが、違ふ種類の菓物で大小を比較して見ると、準くだものではあるが、西瓜が一番大きいであらう。一番小さいのは榎實位で、鬼貫の句にも一木にも似ずさ

ても小さき顆實かなとある。併し顆實はくだものでないとすれば、小さいのは何であらうか。水菓子屋がグーズベリーだといふてくれたものは顆實より少し大きい位のものであつたが、味は旨くもなかつた。野葡萄なども小さいか知らん。凡て野生の食はれるものは小さいのが多い。大きい方も西瓜を除けばポンカンかパインアップルーであらう。椰子の實も大きいが實物を見た事が無いから解らぬ。

（くだもの）色　くだものには大概美しい皮がかぶさつてをる。覆盆子系の實などは稍々違ふ。其皮の色は多くは始め青い色であつて、熟する程黄色か又は赤色になる、中には紫色になるものもある。西瓜の皮は始めから終り迄青い。普通のくだものゝ皮は赤なら赤、黄なら黄と一色であるが、林檎に至つては一個の菓物の肉に濃紅や淡紅や樺や黄や緑や種々な色があつて、色彩の美を極めて居る。其皮をむいて見ると、肉の色は又違ふて來る。瓜類は皮の色も肉の色も殆ど同一であるが、柿は肉の色が少し薄い。葡萄の如きは肉の紫色は皮の紫色よりも遙に薄い。或は肉の緑なのもある。林檎に至つては美しい皮一枚の下は真白の肉の色である。併し白い肉にも少しは區別があつて、稍々黄を帶びてゐるのは甘味が多うて、青味を帶びてゐるのは酸味が多い。

（くだもの）香　熱帶の菓物は熱帶臭くて、寒國の菓物は冷たい匂がする。併し菓物の香氣として昔から特に稱するものは柑類である。殊に此の香ばしい涼しい匂は酸液から來る匂であるから、酸味の強いもの程香氣が高い。柚、橙の如きはこれである。其他の一般の菓物は殆ど香氣を持たぬ。

（くだもの）旨き部分　一個の菓物のうちで處によりて味に違ひがある。一般にいふと心の方よりは皮に近い方が甘くて、尖の方よりは本の方即ち軸の方が甘味が多い。その著しい例は林檎である。林檎は心までも食ふ事が出來るけれど、心には殆ど甘味がない。皮に近い部分が最も旨いのであるから、これを食ふ時に皮を少し厚くむいて置いて、其皮の裏を吸ふのも旨いものである。然るに之に反對のやつは柿であつて柿の半熟のものは、心の方が先づ熟して居つて、皮に近い部分は澁味を殘して居る。又尖の方は熟して居つても軸の方は熟して居らぬ。眞桑瓜は尖の方よりも蔕の方がよく熟して居るが、皮に近い部分は極めて熟しにくい。西瓜などは日表が甘いといふが、外の菓物にも太陽の光線との關係が多いであらう。

（くだもの）鑑定　皮の青いのが酸くて、赤いのが甘いといふ位は誰にもわかる。林檎のやうに種類の多いものは皮の色を見て味を判定することが出來ぬが、唯緑色の交つてゐる林檎は酸いといふ事だけはたしかだ。梨は皮の色の茶色がゝつてゐる方が甘味が多くて、稍々青みを帶びてゐる方は汁が多くて酸味が多い。皮の斑點の大きなのはきめの粗いことを證し、斑點の細かいのはきめの細かいことを證してをる。蜜柑は皮の厚いのに酸味が多くて皮の薄いのに甘味が多い。賊へた蜜柑の皮に光澤があつて、皮と肉との間に空虚のあるやつは中の肉の乾びてをることが多い。皮がしなびて皺がよつてゐるやうなやつは必ず汁が多くて旨い。

（くだもの）嗜好　菓物は淡泊なものであるから普通に嫌ひといふ人は少ないが、日本人ではバナヽのやうな熱帶臭いものは得食はぬ人も澤山ある。又好きといふ内でも何が最も好きかといふと、それは人によつて一々違ふ。柿が一番旨いといふ人もあれば、柿には酸味が無いから菓物の味がせぬといふて嫌ふ人もある。梨が一番いゝといふ人もあれば、菓物は何でもくふが梨だけは嫌だといふ人もある。或は覆盆子を好

む人もあり葡萄をほめる人もある。桃が上品でいゝといふ人もあれば、林檎ほど旨いものはないといふ人もある。それらは十人十色であるが、誰も嫌はぬもので最も普通なものは蜜柑である。出盛りは最も廉く、[illegible]へ得るものであるから、食ふ人も自ら多いわけである。

○くだものと余　余がくだものを好むのは病氣のためであるか、他に原因があるか一向にわからん。子供の頃はいふ迄もなく書生時代になつても菓物は好きであつたから、二ヶ月の學費が手に入つて牛肉を食ひに行つたあとでは、いつでも菓物を買ふて來て食ふのが例であつた。大きな梨ならば六つか七つ、樽柿ならば七つか八つ、蜜柑ならば十五か二十位食ふのが常習であつた。田舍へ行脚に出掛けた時なども、普通の旅籠の外に酒一杯も飲まぬから金はいらぬ筈であるが、時々路傍の茶店に休んで、梨や柿をくふのが樂であるから、存外に錢を遣ふやうな事になるのであつた。病氣になつて全く床を離れぬやうになつてからは外に樂みがないので、食物の事が一番贅澤になり、終には菓物も毎日食ふやうになつた。毎日食ふやうになつては何が旨いといふよりは、只珍しいものが旨いといふ事になつて、とりとめた事はない。其内でも酸味の多いものは最も厭きにくゝて餘計にくふが、これは熱のある故でもあらう。夏蜜柑などはあまり酸味が多いので普通の人は食はぬけれど、熱のある時には非常に旨く感じる。之れに反して林檎のやうな酸味の少い汁の少いものは、始め食ふ時は非常に旨くても、二三日も續けてくふとすぐに厭きが來る。柿は非常に甘いのと、汁はないけれど林檎のやうに乾いて居らぬので、厭かずに食へる。併しだん／＼氣候が寒くなつて後にくふと、すぐに腹を傷めるので、先年も胃痙をやつて懲り／＼した事がある。梨も同じ事で冬の梨は旨いけれど、ひやりと腹に沁み込むのがいやだ。併しながら自分には殆と嫌ひぢやといふ菓物は無い。バナヽも旨い。パインアップルも旨い。桑の實も旨い。槇の實も旨い。くふた事のないのは杉の實と萬年青の實位である。

○覆盆子を食ひし事　明治二十四年六月の事であつた。學校の試驗も切迫して來るので愈々腦が惡くなつた。是では試驗も受けられぬといふので試驗の濟まぬ内に余は歸國する事に定めた。菅笠や草鞋を買ふて用意を整へて上野の汽車に乘り込んだ。輕井澤に一泊して善光寺に參詣してそれから伏見山迄來て一泊した。是は松本街道なのである。翌日猿が馬場といふ峠にかかつて來ると、何にしろ呼吸病にかゝつてゐる余には苦しい事いふ迄もない。少しづゝ登つてやう／＼半腹に來たと思ふ時分に、路の傍に木いちごの一面に熟してゐるのを見つけた。是は意外な事で嬉しさも亦格外であつたが、少し不審に思ふたのは、何となく其處が人が作つた畑の樣に見えた事である。やゝ躊躇してゐたが、此のあたりには人家も畑も何も無い事であるから、わざ／＼斯樣な不便な處へ覆盆子を植ゑるわけもないといふ事に決定して終に思ふ存分食ふた。喉は渴いて居るし、息は苦しいし、此際の旨さは口にいふ事も出來ぬ。

明治二十六年の夏から秋へかけて奥羽行脚を試みた時に、酒田から北に向つて海岸を一直線に八郎湖迄來た。それから引きかへして、秋田から横手へと志した。其途中で大曲で一泊して、六郷を通り過ぎた時に、道の左傍に平和街道へ出る近道が出來たといふ事が棒杭に書いてあつた。近道が出來たのならば横手へ出る必要もないから、此近道を行つて見ようと思ふて、左へ這入つて行つたところが、昔からの街道で無いのだから飯を食ふ處も無いのには閉口した。路傍の茶店を一軒見つけ出して怪しい晝飯

を濟まして、それから亀山で行く所がだん〱山が深くなつて淋しくなつて、心細い様ではあるが又なつかしい心持もした。山路にかゝつて來ると路は思ひの外によい路で、あまり林などは無いから笹林などを見下して晴れ晴れとしてよかつた。併し人の通らぬ處と見えて旅人にも會はねば木樵にも遇はぬ。もとより茶店が一軒あるわけでもない。頂上近く登つたと思ふ時分に向を見ると、向ふは皆自分の居る處よりも遥に高い山がめぐつてをる。自分の居る山と向ふの山との谷を見ると、何町あるかもわからぬと思ふ程下へ深く見える。其大きな谷あひには森もなく、畑もなく、家もなく、唯綺麗な谷あひであつた。それから山の脊に添ふて曲りくねつた路を歩むともなく歩んでゐると、遥の谷底に極平たい地面があつて、其處に澤山點を打つた様なものが見える。何ともわからぬので不思議に堪へなかつた。だん〱歩いてゐる内に、路が下つてゐたと見え、曲り角に來た時にふと下を見下すと、さきに點を打つた様に見えたのは牛であるといふ事がわかる迄に近づいてゐた。愈々不思議になつた。牛は四五十頭もゐるであらうと思はれたが、人も家も少しも見えぬのである。それから又暫く歩いてゐると、路の傍の荊棘の中でがさ〱といふ音がしたので、余は驚いた。見ると牛であつた。頭の上の方の山でもがさ〱といふ、其處にも牛がゐるのである。向ふの方が又がさ〱いふので牛かと思ふて見ると今度は人であつた。始めて牛飼の居る事がわかつた。崖の下を見ると牛の群がつてをる例の平地はすぐ目の前に近づいて來て居つたのに驚いた。余の位地は非常に下つて來たのである。其處等の叢にも路にも幾つともなく牛が群れて居るので余は少し當惑したが、幸に牛の方で逃げてくれるので通行には邪魔にならなかつた。それから又同じ様な山路を二三町も行た頃であつたと思ふ、突然左側の崖の上に木いちごの林を見つけ出したのである。あるも〱四五間の間は透間もなき、いちごの茂りで、しかも猿が馬場で見た様な瘠いちごではなかつた。嬉しさはいふ迄もないので、餓鬼の様に食ふた。食ふても〱盡きる事ではない。時々後ろの方から牛が襲ふてきやしまいかと恐れて後振り向いて見ては又一散に食ひ入つた。もとより厭く事を知らぬ余であるけれども、日の暮れかゝつたのに驚いていちご林を見捨てた。大急ぎに山を下りながら、遥かの木の間を見下すと、麓の村に夕日の殘つてをるのが畫の如く見えた。あそこいら迄はまだ中々遠い事であらうと思はれて心細かつた。

明治廿八年の五月の末から余は神戸病院に入院して居つた。此時虚子が來て呉れて其後碧梧桐も來て呉れて看護の手は十分に届いたのであるが、余は非常な衰弱で一杯の牛乳も一杯のソツプも飲む事が出來なんだ。そこで醫者の許しを得て、少しばかりのいちごを食ふ事を許されて、毎朝こればかりは闕かした事がなかつた。それも町に賣つてをるいちごは古くていかぬといふので、虚子と碧梧桐が毎朝一日がはりにいちご畑へ行て取て來てくれるのであつた。余は病牀で其を待ちながら二人が爪上りのいちご畑でいちごを摘んでゐる光景などを頻りに目前に描いてゐた。やがて一籠のいちごは余の病牀に置かれるのであつた。此いちごの事がいつ迄も忘れられぬので余は東京の寓居に歸つて來て後、庭の垣根に西洋いちごを植ゑて樂んでゐた。

○桑の實を食ひし事　信州の旅行は蠶時であつたので道々の桑畑はいづこも茂つてゐた。木曾へ這入ると山と川との間の狭い地面が皆桑畑である。其桑畑の圍ひの處には幾年も切らずにゐる大きな桑があつて、其には眞黒な實がお

びたゞしくなつてをる。見逃がす事ではない、余は其を食ひ始めた。桑の實の味はあまり世人に賞翫されぬのであるが、其旨さ加減は他に較べる者も無い程よい味である。余は其を食ひ出してから一瞬時も手を措かぬので、桑の老木が見える處へは横道でも何でもかまはず這入つて行つて貪られるだけ貪つた。何升食つたか自分にもわからぬが兎に角其が爲に其日は六里許りしか歩けなかつた。寐覺の里へ來て名物の蕎麥を勸められたが、蕎麥などを食ふ腹はなかつた。もとより此日は一粒の飯も食はなかつたのである。木曾の桑の實は寐覺蕎麥より旨い名物である。

○苗代茱萸を食ひし事　同じ信州の旅行の時に道端の家に苗代茱萸が眞赤になつてをるのを見て余はほしくて堪らなくなつた。駄菓子屋などを覗いて見ても茱萸を賣つてゐる處はない。道で遊んでゐる小さな兒が茱萸を食ひながら余の方を不思議さうに見てをるなども時々あつた。木曾路へ這入つて贄川迄來た。爰は木曾第一の難處と聞えたる鳥井峠の麓で名物蕨餅を賣つてをる處である。余はそこの大きな茶店に休んだ、茶店の女主人と見えるのは年頃廿許りで眉毛を剃つてをるがしんから色の白い女であつた。此店の前に馬が一匹繋いであつた。余は女主人に向いて鳥井峠へ上るのであるが馬はなからうかと尋ねると、丁度其店に休でゐた馬が歸り馬であるといふ事であつた。其馬士といふのはまだ十三四の子供であつたが、余にこれと談判して鳥井峠頂上迄の駄賃を十錢と極めた。此登路の難儀を十錢で免れたかと思ふと、余は嬉しくて堪らなかつた。併しそこらにゐた男共が其若い馬士をからかふ所を聞くと、お前は十錢のたゞまうけをしたといふ様にいふて、駄賃が高過ぎるといふ事を暗に諷してゐたらしかつた。それから女主人は余に向ひて蕨餅を食ふかと尋ねるから、余は蕨餅は食はぬが茱萸は無いかと尋ねた。さうすると、其茱萸といふのがわからぬので、女主人は其處らに居る男共に相談して見たが、誰にもわからなかつた。余は再び手眞似を交ぜて解剖的の説明を試みた所が、女主人は突然と、あゝサンゴミか、といふた。それならば内の裏にもあるから行つて見ろといふので、余は[illegible]所の様な處を通り拔けて裏迄出て見ると、一間許りの苗代茱萸が累々としてなつてをつた。これをくれるかといへば、幾らでも取れといふ。余が取りつつある傍へ一人の男が來て取つてくれる、女主人はわざ〳〵出て來て何か指圖をしてゐる。ハンケチに一杯ほど取りためたので、余はきりあげて店へ歸つて來た。此代はいくらやらうかといふと、代はいりませぬといふ。しかたがないから、少し許りの茶代を置いて余は馬の背に跨つた。女主人など丁寧に余を見送つた。菅笠を被つてゐても木曾路では斯ういふ風に歡待せられるのである。馬はヒョクリ〳〵と鳥井峠を上つて行く。おとなしさうなので安心はしてゐたが、時々絶壁に臨んだ時には若しや狹い路を踏み外しはしまいかと膽を冷やさぬでもなかつた。余はハンケチの中から茱萸を出しながらポツリ〳〵と食ふてゐる。見下せば千仞の絶壁鳥の音も聞えず、足下に連なる山又山南濃州に向つて走る、とでもいひさうな此の壯快な景色の中を、馬一匹ヒョクリ〳〵と歩んでゐる、余は馬上に在つて口を紫にしてゐるなどは、實に愉快でたまらなかつた。茱萸はとう〳〵盡きてしまつた、ハンケチは眞赤に染んでゐる、もう鳥井峠の頂上は遠くはないやうであつた。

○御所柿を食ひし事　明治廿八年神戸の病院を出て須磨や故郷とぶらついた末に、東京へ歸らうとして大阪迄來たのは十月の末であつた

と思ふ。其時は病後の衰弱から未だ癒えきらぬ時で少し歩くのに困難を感じたが、奈良へ遊ぼうと思ふて、病を推して出掛けて行た。三日程奈良に滞留の間は幸に病気も強くならんので余は面白く見る事が出来た。此時は柿が盛になつてをる時で、奈良にも奈良近辺の村にも柿の林が見えて何ともいへない趣であつた。柿などといふものは従来詩人にも歌よみにも見離されてをるもので、殊に奈良に柿を配合するといふ様な事は思ひもよらなかつた事である。余は此新しい配合を見つけ出して非常に嬉しかつた。或夜夕飯も過ぎて後、宿屋の下女にまだ御所柿は食へまいかといふと、もうありますといふ。余は国を出てから、十年程の間御所柿を食つた事がないので非常に恋しかつたから、早速沢山持て来いと命じた。やがて下女は直径一尺五寸もありさうな錦手の大丼鉢に山の如く柿を盛て来た。流石柿好きの余も驚いた。それから下女は余の為に庖丁を取て柿をむいてくれる様子である。余は柿も食ひたいのであるが併し暫しの間は柿をむいてゐる女のやゝうつむいてゐる顔にほれ〳〵と見とれてゐた。此女は年は十六七位で、色は雪の如く白くて目鼻立まで申分のない様に出来てをる。生れは何処かと聞くと、月か瀬の者だといふので余は梅の精霊でもあるまいかと思ふた。やがて柿はむけた。余は其を食ふてゐると彼は更に他の柿をむいてゐる。柿も旨い、場所もいゝ。余はうつとりとしてゐるとボーンといふ釣鐘の音が一つ聞えた。彼女は、オヤ初夜が鳴るといふて尚柿をむきつづけてゐる。余には此初夜といふのが非常に珍しく面白かつたのである。あれはどこの鐘かと聞くと、東大寺の大釣鐘が初夜を打つのであるといふ。東大寺が此頭の上にあるかと尋ねると、すぐ其処ですといふ、余が不思議さうにしてゐたので、女は室の外の板間に出て、其処の中障子を明けて見せた。成程東大寺は自分の頭の上に当つてゐる位である。何日の月であつたか其処らの荒れたる木立の上を淋しさうに照してゐる。下女は更に向ふを指して、大仏のお堂の後ろのあそこの処へ来て夜は鹿が鳴きますからよく聞えます、といふ事であつた。

（明治三十四年三月、四月）

煩悶

時は午後八時頃、体温は卅八度五分位、腹も背も臀も皆痛む。

アッ苦しいナ、痛いナ、アー〳〵人を馬鹿にしてゐるぢやないか、馬鹿、畜生、アッ痛、アッ痛イ〳〵、寝返りしても痛いどころか、ぢつとしてゐても痛いや。

アー〳〵いやになつてしまふ。もうだめかな。もういかんや。ほんたうに人を馬鹿にしとる。いやになつちまふな。いやになりんすだ。いやだ〳〵も……だつていやがらア。苦、衝に――挟り――か、天下の英雄は眼中に在り――か。人を馬鹿にしてるな。そりや聞えません伝兵ヱサンと来るぢやないか。三吉一つ歌つて見や。アイ〳〵。そんな事ぢやなかつたよ。坂は照る照る鈴、鈴鹿は曇る、あひの、あひの土山雨がふる、ヨー〳〵と来るだらう。向ふの山へ千松がと来るだらう。そんなのは無いよ。五十四郡の思案の臍と来るよ。思案の臍とはどんな臍だらう。コイツは可笑しい、ハヽヽヽ、痛い痛い〳〵横腹の痛みをしやくつて馬鹿に痛いよ。併し思案の臍といふ臍が五十四郡に一づゝ並んで居ると思ふと馬鹿に可笑しい。しかも其臍の上に一つづゝ土瓶が掛けてあつてそれが皆茶をわかして居ると思ふといよ〳〵可笑しい。臍があつて其上に鯨がぶら下つて居るといふの

は分るかい。へそ・も今夜は来ずであろサ。おそ・も今夜はのしやれだよ。そんな奴ならい・らもあるよ、築の中に子供を入れたので、さる餓鬼やする怖サ、[illegible]様が舌を出して其上に往を殺させる時は・・・ただ[illegible]の力持サ。昔いや。お[illegible]が古くなつていけないといつて躍本師匠か・・・[illegible]しい態を得ふやうな[illegible]です。手前の態は大変お古い、態で[illegible]を[illegible]ひますやうな[illegible]で、たのしみはうしろに[illegible]前に滑左右に[illegible]ふところに[illegible]と申しましてどうしてもはそとんのお韵でめしあがらないとうまくないといふことで、私などの[illegible]には一向分りませんが、ピーッアー愉快々々。一歩は[illegible]と来らア。何でも家がぐらぐらして[illegible]が[illegible]打つてあやがらア。ピー[illegible]は百[illegible]の[illegible]、[illegible]王様、ナンテ来らア。これでも[illegible]が内に待つてるだらうッちふので折詰を持つて帰るなどは大ていな事ぢやないよ。味大明神も[illegible]いて見るなぞは[illegible]いな、女房[illegible]ふ住持でもすゞ、ハヽヽヽ。これでも今夜帰ると、ピー、[illegible]大明神[illegible]くよ。あなた今夜どこで飲みましたよ、何いふだか・・・そこで飲んだ、そこで飲んだもねえものだ、おれの飲むのは[illegible]か柳橋、[illegible]か和田倉橋、チョットそいつはわからねだよ、何、今夜はね柳橋で小紫をあひかたで飲みましたよ、オヤ小紫つて――それなら柳橋ぢやない吉原ですら。ナーニ柳橋にも小紫といふおいらんがありますよ。スルト、吉原の柳橋においらんがありますか、そりや始て聞きました、それでは柳橋の何屋に、なにさ来るだらう。柳橋の[illegible]角屋サ先日吉原で無理心中をした其騒ぎへ今日小紫を抱へたのサ。尤小紫は吉原の大字にゐたのだが[illegible]自由廃業したと、チャント今朝の二六に出てるるぢやないか、とまじめにいふと、アラいやだよ人を馬鹿にしてる、あなたは乾度いゝ所があつてそこで・・・くやしいッていふので[illegible]か何かにくひつくよ、乾度。さうすると物になるね。家のはつれは乾のとが――よ――とおいでなさる、それをお前にとが――め――・・・。クヤ/\貴様は何ぢや、往来で大[illegible]は[illegible]ならんちふ位の事は心得て居るおやらう。どうも恐れ入りましてございます。恐れ入つたではいかんぢやないか。恐れ入りましてございます。貴様姓名は何といふか。へ、私は神田八丁堀二丁目五十五番地ふくべ屋[illegible]と申します、どうかお見知りおかれて御贔屓に願います。また無[illegible]た事申しちよるか。恐れ入りました。見受ける處は[illegible]の様だが内には女房も待つちよるだらうから早う帰つてはどうぢやらうかい。有り難うございます・・・世の中に何が有難いつてお[illegible]りさん位有難い者は無いよ。こんな[illegible]い[illegible]でも何でもチヤント立つて往来を[illegible]せ、何でも[illegible]しいものと見とめると、クヤ/\貴様は何ぢや、とおいでなさる。私は神田八丁堀二丁目五十五番地ふくべ屋[illegible]でございます、・来ると、見受ける處は[illegible]の様ぢやが内には女房も待つたよるだらうから早う帰つてはどうぢやらうかい、とおいでなさる。どうぢやろかい、とおいでなさる處が有難い、お[illegible]りさんがあんたにおつしやるから早々帰つて此折詰を女房にはやくとはぢやろかい。（未定稿）

（明治三十五年?）

九月十四日の朝

朝[illegible]の中で目を覚めた。[illegible]は夢中であつたがおい/\といふて人を起した。次の間に寝てゐる妹と、[illegible]室にある虚子とは同時に返事をして起きて来た。虚子は看護の為にゆうべ泊つて呉れたのである。雨戸を明ける。[illegible]

をはづす。此際余は口の内に一種の不愉快を感ずると共に、喉が渇いて全く滋ひの無い事を感じたから、用意の爲枕許の盆に載せてあつた甲州葡萄十粒程食つた。何んともいへぬ旨さであつた。金莖の露一杯といふ心持がした。斯くてやう〳〵眠りがはつきりと覺めたので、十分に體の不安と苦痛とを感じて來た。今人を呼び起したのも勿論それだけの用はあつたので、直ちにうちの者に不淨物を取除けさした。余は四五日前より容態が急に變つて、今迄も殆ど動かす事の出來なかつた兩脚が俄に水を持つたやうに膨れ上つて一分も五厘も動かす事が出來なくなつたのである。そろ〳〵と臑皿の下へ手をあてがふて動かして見ようとすると、大磐石の如く落著いた脚は非常の苦痛を感ぜねばならぬ。余は屢々種々の苦痛を經驗した事があるが、此度の樣な非常な苦痛を感ずるのは始めてゞある。それが爲に此二三日は余の苦しみと、家内の騷ぎと、友人の看護旁々訪ひ來るなどで、病室には一種不穩の徴を示して居る。

昨夜も大勢來て居つた友人(碧梧桐、鼠骨、左千夫、秀眞、節)は歸つてしまふて余等の眠りに就たのは一時頃であつたが、今朝起きて見ると、足の動かぬ事は前日と同じであるが、昨夜に限つて殆ど間斷なく熟睡を得た爲であるか、精神は非常に安穩であつた。顏はすこし南向きになつたまゝちつとも動かれぬ姿勢になつて居るのであるが、其儘にガラス障子の外を靜かに眺めた。時は六時を過ぎた位であるが、ぼんやりと曇つた空は少しの風も無い甚だ靜かな景色である。窓の前に一間半の高さにかけた竹の棚には葭簀が三枚許り載せてあつて、其東側から登りかけて居る絲瓜は十本程のやつが皆痩せてしまふて、まだ棚の上迄は得取りつかずに居る。花も二三輪しか咲いてゐない。正面には女郎花が一番高く咲いて、鷄頭は其よりも少し低く五六本散らばつて居る。秋海棠は尙衰へずに其梢を見せて居る。余は病氣になつて以來今朝程安らかな頭を持て靜かに此庭を眺めた事は無い。嗽ひをする。虛子と話をする。南向ふの家には尋常二年生位な聲で本の復習を始めたやうである。やがて納豆賣が來た。余の家の南側は小路にはなつて居るが、もと加賀の別邸內であるので此小路も行きどまりであるところから、豆腐賣りでさへ此裏路へ來る事は極て少ないのである。それで偶々珍しい飲食商人が這入つて來ると、余は奬勵の爲にそれを買ふてやり度くなる。今朝は珍しく納豆賣りが來たので、邸內の人はあちらからもこちらからも納豆を買ふて居る聲が聞える。余も其を食ひ度いといふのでは無いが少し買はせた。虛子と共に須磨にゐた朝の事などを話しながら外を眺めて居ると、たまに露でも落ちたかと思ふやうに、絲瓜の葉が一枚二枚だけひら〳〵と動く。其度に秋の涼しさは膚に浸み込む樣に思ふて何ともいへぬよい心持であつた。何だか苦痛極つて暫く病氣を感じないやうなのも不思議に思はれたので、文章に書いて見たくなつて余は口で綴る、虛子に賴んで其を記してもらふた。筆記し了へた處へ母が來て、ソツプは來て居るのぞなといふた。

(明治三十五年九月)

歌よみに與ふる書

歌よみに與ふる書

仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。實朝といふ人は三十にも足らで、いざ是からといふ處にてあへなき最期を遂げられ誠に殘念致候。あの人をして今十年も活かして置いたならどんなに名歌を澤山殘したかも知れ不申候。兎に角に第一流の歌人と存候。強ち人丸赤人の餘唾を舐るでも無く固より貫之定家の糟粕をしやぶるでも無く自己の本領屹然として山嶽と高きを爭ひ日月と光を競ふ處實に畏るべく尊むべく覺えず膝を屈するの思ひ有之候。古來凡庸の人と評し來りしは必ず誤なるべく北條氏を憚りて韜晦せし人かさらずば大器晩成の人なりしかと覺え候。人の上に立つ人にて文學技藝に達したらん者は人間として下等の地に居るが通例なれども實朝は全く例外の人に相違無之候。何故と申すに實朝の歌は只器用といふのでは無く力量あり見識あり威勢あり時流に染まず世間に媚びざる處例の物數寄連中や死に歌よみの公卿達と迚も同日には論じ難く人間として立派な見識のある人間ならでは實朝の歌の如き力ある歌は詠みいでられまじく候。眞淵は力を極めて實朝をほめた人なれども眞淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を知りて他の半面を知らざりし故に可有之候。

眞淵は歌に就きては近世の達見家にて萬葉崇拜のところ抔當時に在りて實にえらいものに有之候へども生等の眼より見れば猶萬葉をも褒め足らぬ心地致候。眞淵が萬葉にも善き調あり惡き調ありといふことをいたく氣にして繰り返し申し候は世人が萬葉中の佶屈なる歌を取りて「これだから萬葉はだめだ」など〻攻撃するを恐れたるかと相見え申候。固より眞淵自身もそれらを善き歌とは思はざりし故に弱みもいで候ひけん。併しながら世人が佶屈と申す萬葉の歌や眞淵が惡き調と申す萬葉の歌の中には生の最も好む歌も有之と存ぜられ候。そを如何にといふに他の人は言ふまでも無く眞淵の歌にも生が好む所の萬葉調といふ者は一向に見當り不申候。（尤も此邊の論は短歌に就きての論と御承知可被下候）眞淵の家集を見て眞淵は存外に萬葉の分らぬ人と呆れ申候。斯く申し候とて全く眞淵をけなす譯には無之候。楫取魚彦は萬葉を摸したる歌を多く詠みいでたれど猶これと思ふ者は極めて少く候。左程に古調は擬し難きにやと疑ひ居候處近來生等の相知れる人の中に歌よみにはあらで却て古調を巧に摸する人少からぬことを知り申候。是に由りて觀れば昔の歌よみの歌は今の歌よみならぬ人の歌よりも遙に劣り候やらんと心細く相成申候。さて今の歌よみの歌は昔の歌よみの歌よりも更に劣り候はんには如何申すべき。

長歌のみは稍〻短歌と異なり申候。古今集の長歌などは箸にも棒にもかゝらず候へども箇樣な長歌は古今集時代にも後世にも餘り流行らざりしこそもつけの幸と存ぜられ候なれ。されば後世にても長歌を詠む者には直に萬葉を師とする者多く從つて可なりの作を見受け申候。今日とても長歌を好んで作る者は短

歌に比すれば多少手際善く出來申候（御歌合派の氣まぐれに作る長歌などは端唄にも劣り申候）。併し或る人は難じて長歌が萬葉の模型を離るゝ能はざるを笑ひ申候。それも尤には候へども歌よみにそんなむつかしい事を注文致し候はゞ古今以後殆ど新しい歌が無いと申さねば相成間敷候。猶いろ〱申し殘したる事は後鴻に譲り申候。不具。

（明治三十一年二月十二日）

再び歌よみに與ふる書

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。其貫之や古今集を崇拜するは誠に氣の知れぬことなどゝ申すものゝ實は斯く申す生も數年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拜する氣味合は能く存申候。崇拜して居る間は誠に歌といふものは優美にて古今集は殊に其粹を拔きたる者とのみ存候ひしも三年の戀一朝にさめて見ればあんな意氣地の無い女に今迄ばかされて居つた事かとくやしくも腹立たしく相成候。先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て來る實に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外國人との合の子を日本人とや申さん外國人とや申さんとしやれたると同じ事にてしやれにもならぬつまらぬ歌に候。此外の歌とても大同小異にて駄洒落か理窟ッぽい者のみに有之候。それでも强ひて古今集をほめて言はゞつまらぬ歌ながら萬葉以外に一風を成したる處は取得にて如何なる者にても始めての者は珍しく覺え申候。只之を眞似るをのみ藝とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年の事なら兎も角も二百年たつても三百年たつても其糟粕を嘗めて居る不見識には驚き入候。何代集の彼ン代集のと申しても皆古今の糟粕の糟粕の糟粕ばかりに御座候。

貫之とても同じ事に候。歌らしき歌は一首も相見え不申候。嘗て或る人に斯く申し候處其人が「川風寒み千鳥鳴くなり」の歌は如何にやと申され閉口致候。此歌ばかりは趣味ある面白き歌に候。併し外にはこれ位のもの一首もあるまじく候。「空に知られぬ雪」とは駄洒落にて候。「人はいさ心もしらず」とは浅はかなる言ひざまと存候。但貫之は始めて箇樣な事を申候者にて古人の糟粕にては無之候。詩にて申候へば古今集時代は宋時代にもたぐへ申すべく俗氣紛々と致し居候處は迚も唐詩とくらぶべくも無之候へ共さりとて其を宋の特色として見れば全體の上より變化あるも面白く宋はそれにてよろしく候ひなん。それを本尊にして人の短所を眞似る寛政以後の詩人は善き笑ひ者に御座候。

古今集以後にては新古今稍〻すぐれたりと相見え候。古今よりも善き歌を見かけ申候。併し其善き歌と申すも指折りて數へる程の事に有之候。定家といふ人は上手か下手か譯の分らぬ人にて新古今の撰定を見れば少しは譯の分つて居るのかと思へば自分の歌にはろくな者無之「駒とめて袖うちはらふ」「見わたせば花も紅葉も」抔が人にもてはやさるゝ位の者に有之候。定家を狩野派の畫師に比すれば探幽と善く相似たるかと存候。定家に傑作無く探幽にも傑作無し。併し定家も探幽も相當に練磨の力はありて如何なる場合にも可なりにやりこなし申候。兩人の名譽は相如く程の位置に居りて定家以後歌の門閥を生じ探幽以後畫の門閥を生じ兩家とも門閥を生じたる後は歌も畫も全く腐敗致候。いつの代如何なる技藝にても歌

の格調の格などといふやうな格がきまつたら最早進步致す間敷候。

香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申す迄も無之候。俗な歌の多き事も無論に候。併し景樹は善き歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。それは景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ、只景樹時代には貫之時代よりも進步して居る點があるといふ事は相違無ければ從て景樹は貫之よりも善き歌が出來るといふも自然の事と存候。景樹の歌がひどく玉石混淆である處は俳人でいふと蓼太に比するが適當と被思候。蓼太は雅俗巧拙の兩極端を具へた男で其句に兩極端が現れ居候。且つ滿身の覇氣でもつて世人を籠絡し全國に夥しき門派の末流をもつて居た處なども善く似て居るかと存候。景樹を學ぶなら善き處を學ばねば甚だしき邪路に陷り可申、今の景樹派など申すは景樹の俗な處を學びて景樹よりも下手につらね申候。ちゞれ毛の人が束髪に結びしを善き事と思ひて束髪にゆふ人はわざ／＼毛をちゞらしたらんが如き趣有之候。こゝの處よく／＼闊眼を開いて御判別可有之候。古今上下東西の文學など能く比較して御覧可被成、くだらぬ歌書ばかり見て居つては容易に自己の迷を醒まし難く、見る所狹ければ自分の汽車の動くのを知らで隣の汽車が動くやうに覺ゆる者に御座候。不盡。

（明治三十一年二月十四日）

三たび歌よみに與ふる書

前略。歌よみの如く馬鹿な、のんきなものは、またと無之候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌程善き者は他に無き由いつでも誇り申候へども歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に歌が一番善きやうに自惚候次第に有之候。彼等は歌に最も近き俳句すら少しも解せず十七字でさへあれば川柳も俳句も同じと思ふ程の、のんきさ加減なれば、況して支那の詩を研究するでも無く西洋には詩といふものが有るやら無いやらそれも分らぬ文盲淺學、況して小說や院本も和歌と同じく文學といふ者に屬すと聞かば定めて目を剝いて驚き可申候。斯く申さば讒謗罵詈禮を知らぬしれ者と思ふ人もあるべけれど實際なれば致方無之候。若し生の言が誤れりと思さば所謂歌よみの中より只の一人にても俳句を解する人を御指名可被下候。生は歌よみに向ひて何の見識も持たぬ故に斯く罵詈がましき言を放たねばならぬやうに相成候。心の程御察被下度候。

歌を一番善いと申すは固より理窟も無き事にて一番善い譯は毫も無之候。俳句には俳句の長所あり、支那の詩には支那の詩の長所あり、西洋の詩には西洋の詩の長所あり、戯曲院本には戯曲院本の長所あり其長所は固より和歌の及ぶ所にあらず候。理窟は別とした處で一體歌よみは和歌を一番善い者と考へた上でどうする積りにや、歌が一番善い者ならばどうでもかうでも上手でも下手でも三十一文字並べさへすりや天下第一の者であつて秀逸と稱せらるゝ俳句にも漢詩にも洋詩にも優りたる者と思ひ候者にや其量見が聞きたく候。最も下手な歌も最も善き俳句漢詩等に優り候程ならば誰も俳句漢詩等に骨折る馬鹿はあるまじく候。若し又俳句漢詩等にも和歌より善き者ありといふならば和歌ばかりが一番善きにてもあるまじく候。歌よみの淺見には今更のやうに呆れ申候。

俳句には調が無くて和歌には調がある、故に和歌は俳句に勝れりとある人は申し候。これ

は強ち一人の論では無く歌よみ仲間には同様なる説を抱く者多き事と存候。歌よみどもはいたく調といふ事を誤解致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和なる長閑な様を歌ふにはなだらかなる長き調を用ふべく悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時又は天然にても人事にても景象の活動甚だしく變化の急なる時之を歌ふには迫りたる短き調を用ふべきは論ずる迄も無く候。然るに歌よみは調は總てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。斯る謬を來すも畢竟從來の和歌がなだらかなる調子のみを取り來りしに因る者にて、俳句も漢詩も見ず歌集ばかりを讀みたる歌よみには然か思はるゝも無理ならぬ事と存候。さて〳〵困つた者に御座候。なだらかなる調が和歌の長所ならば迫りたる調が俳句の長所なる事は分り申さゞるやらん。併し迫りたる調強き調などいふ調の味は所詮歌よみには到底分り申す間敷か。眞淵は雄々しく強き歌を好み候へども、[illegible]ると存外に雄々しく強き者は少く、實朝の歌の雄々しく強きが如きは眞淵には一首も見あたらず候。「飛ぶ鷲の翼もたわに」などいへるは眞淵集中の佳什にて強き方の歌なれども意味ばかり強くて調子は弱く感ぜられ候。實朝をして此意匠を詠ましめば斯様な調子には詠むまじく候。「もののふの矢なみつくろふ」の歌の如き鷲を吹き飛ばすほどの荒々しき趣向ならねど調子の強き事は並ぶ者無く此歌を誦すれば霰の音を聞くが如き心地致候。眞淵既に然りとせば眞淵以下の歌よみは申す迄も無く候。斯る歌よみに蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か讀ませたく存候へども、驕りきつたる歌よみどもは宗旨以外の書を讀むことは承知致すまじく勸めるだけが野暮にや候べき。

御承知の如く生は歌よみよりは局外者とか素人とかいはるゝ身に有之從つて詳しき歌の學問は致さず格が何だか文法が何だか少しも承知致さず候へども大體の趣味如何に於ては自ら信ずる所あり此點に就きて却て專門の歌よみが不注意を責むる者に御座候。箇様に惡口をつき申さば生を彌次馬連と同様に見る人もあるべけれど生の彌次馬連なるか否かは貴兄は御承知の事と存候。異論の人あらば何人にでも來訪あるやう貴兄より御傳へ被下度三日三夜なりともつゞけざまに議論可致候。熱心の點に於ては決して普通の歌よみどもには負け不申候。情激し筆走り候まゝ失禮の語も多かるべく御海容可被下候。拜具。

（明治三十一年二月十八日）

四たび歌よみに與ふる書

拜啓。空論ばかりにては傍人に解し難く實例に就きて評せよとの御言葉御尤と存候。實例と申しても際限も無き事にていづれを取りて評すべきやらんと惑ひ候へども成るべく名高き者より試み可申候。御思ひあたりの歌ども御知らせ被下度候。さて人丸の歌にかありけん、

ものゝふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも

といふが屢々引きあひに出されるやうに存候。此歌萬葉時代に流行せる一氣呵成の調にて少しも野卑なる處は無く、字句もしまり居り候へども、全體の上より見れば上三句は贅物に屬し候。「足引の山鳥の尾の」といふ歌も前置の詞多けれどあれは前置の詞長きために夜の長き様を感ぜられ候。これは又上三句全く役に立ち申さず候。此歌を名所の手本に引くは大たはけに御座候。總じて名所の歌といふは其の地の

特色なくては叶はず此歌の如く意味無き名所の歌は名所の歌になり不申候。併し此歌を後世の俗氣紛々たる歌に比ぶれば勝ること萬々に候。且つ此種の歌は眞似すべきにあらねど多き中に一首二首あるは面白く候。

　月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

といふ歌は最も人の賞する歌なり。上三句はすらりとして難無けれども下二句は理窟なり蛇足なりと存候。歌は感情を述ぶる者なるに理窟を述ぶるは歌を知らぬ故にや候らん。此歌下二句が理窟なる事は消極的に言ひたるにても知れ可申、若し我身一つの秋と思ふと詠むならば感情的なれども秋ではないがと當り前の事をいはゞ理窟に陷り申候。箇樣な歌を善しと思ふは其人が理窟を得離れぬがためなり、俗人は申すに及ばず今の所謂歌よみどもは多く理窟を竝べて樂み居候。嚴格に言はゞ此等は歌でも無く歌よみでも無く候。

　芳野山霞の奧は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

八田知紀の名歌とか申候。知紀の家集はいまだよまねどこれが名歌ならば大概底も見え透き候。此も前のと同じく「霞の奧は知らねど」も一と消極的に言ひたるが理窟に陷り申候。既に見ゆる限りはといふ上は見えぬ處は分らぬがといふ意味は其裏に籠り居り候ものをわざわざ知らねどもとことわりたる、これが下手と申すものに候。且此歌の姿、見ゆる限りは櫻なりけりなどいへるも極めて拙く野卑なり、前の千里の歌は理窟こそ惡けれ姿は遙に立ちまさり居候。序に申さんに消極的に言へば理窟になると申しゝ事いつでもしかなりといふに非ず、客觀的の景色を連想していふ場合は消極にても理窟にならず、例へば「駒とめて袖うち拂ふ影もなし」といへるが如きは客觀の景色を連想したる迄にて斯くいはねば感情を現す能はざる者なれば無論理窟にては無之候。又全體が理窟めきたる歌あり（釋敎の歌の類）、これらは却て言ひ樣にて多少の趣味を添ふべけれど、此芳野山の歌の如く全體が客觀的即ち景色なるに其中に主觀的理窟の句がまじりては殺風景いはん方無く候。又同人の歌にかありけん、

　うつせみの我世の限り見るべきは嵐の山の櫻なりけり

といふが有之候由さて〳〵驚き入つたる理窟的の歌にては候よ。嵐山の櫻のうつくしいと申すは無論客觀的の事なるにそれを此歌は理窟的に現したり、此歌の句法は全體理窟的の趣向の時に用ふべき者にして、此趣向の如く客觀的にいはざるべからざる處に用ゐたるは大俗のしわざと相見え候。「べきは」と係けて「なりけり」と結びたるが最理窟的殺風景の處に有之候。一生嵐山の櫻を見ようといふも變なくだらぬ趣向なり、此歌全く取所無之候。猶手當り次第可申上候也。

（明治三十一年二月二十一日）

五たび歌よみに與ふる書

　心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ不盡の嶺

といふは春海のなりしやに覺え候。これは不盡の裾より見上げし時の即興なるべく生も實際に斯く感じたる事あれば面白き歌と一時は思ひしが今見れば拙き歌に有之候。第一、麓といふ語如何や、心あてに見し處は少くも半腹位の高さなるべきをそれを麓といふべきや疑はしく候。第二、それは善しとするも「麓にて」の一句理窟ぽくなつて面白からず、只心あてに見し雲よりは上にありしとばかり言はねばなら

ぬ處に候。箇樣に、不盡の高く壯なる樣を詠まんとならば今少し力強き歌ならざるべからず、此の歌全體弱くして到底不盡に副ひ申さず候。几董の俳句に「晴るゝ日や雲を貫く雪の不盡」といふがあり、極めて尋常に敍し去りたれども不盡の趣は却て善く現れ申候。

もしほ焼く難波の浦の八重霞一重はあまのしわざなりけり

契沖の歌にて俗人の傳稱する者に有之候へども此歌の品下りたる事は稍〻心ある人は承知致居事と存候。此歌の傳稱せらるゝはいふ迄も無く、八重一重の掛合にあるべけれども余の攻撃點も亦此處に外ならず、總じて同一の歌にて極めてほめる處と他の人の極めて謗る處とは同じ點に在る者に候。八重霞といふものの固より八段に分れて霞みたるにあらねば一重といふこと一向に利き不申、又初に「藻汐焼く」と置きし故後に煙とも言ひかねて「あまのしわざ」と主觀的に置きたる處いよいよ俗に墮ち申候。こんな風に詠まずとも、霞の上に藻汐焚く煙のなびく由尋常に詠まばつまらぬ迄も厭味は出來申間敷候。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

此躬恒の歌百人一首にあれば誰も口ずさみ候へども一文半文のねうちも無之駄歌に御座候。此歌は譃の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候。趣向譃なれば趣も糸瓜も有之不申、蓋しそれはつまらぬ譃なるが故につまらぬにて、上手な譃は面白く候。例へば、「鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」面白く候。躬恒のは瑣細な事を矢鱈に仰山に述べたのみなれば無趣味なれども家持のは全く無い事を空想で現はして見せたる故面白く被感候。譃を詠むなら全く無い事とてつもなき譃を詠むべし、然らざれば有の儘に正直に詠むが宜しく候。雀が舌を剪られたとか狸が婆に化けたなどの譃は面白く候。今朝は霜がふつて白菊が見えんなどゝ眞面目らしく人を欺く仰山的の譃は極めて殺風景に御座候。「露の落つる音」とか「梅の月が匂ふ」とかいふ事をいふて樂む歌よみが多く候へども是等も面白からぬ譃に候。總て譃といふものは一二度は善けれどたびたび詠まれては面白き譃も面白からず相成申候。況して面白からぬ譃はいふ迄も無く候。「露の音」「月の匂」「風の色」などは最早十分なれば今後の歌には再び現れぬやう致したく候。「花の匂」などいふも大方は譃なり、櫻などには格別の匂は無之、「梅の匂」でも古今以後の歌よみの詠むやうに匂ひ不申候。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ

「梅闇に匂ふ」とこれだけで濟む事を三十一文字に引きのばしたる御苦勞加減は恐れ入つた者なれど、これも此頃には珍しき者として許すべく候はんに、あはれ歌人よ「闇に梅匂ふ」の趣向は最早打どめに被成ては如何や、闇の梅に限らず普通の香も古今集だけにて十分なるに、それより今日迄の代々の歌よみがよみし梅の香はおびたゞしく數へられもせぬ程なるに、これも善い加減に打ちとめて香水香料に御用ゐ被成候は格別、其外歌には一切之を入れぬ事とし鼻つまりの歌人と嘲らるゝ程に御遠ざけ被成ては如何や。小さき事を大きくいふ譃が和歌腐敗の一大原因と相見え申候。

（明治三十一年二月二十三日）

六たび歌よみに與ふる書

御書面を見るに愚意を誤解被致候。殊に變

なるに貴書面中四五行の間に撞著有之候。初に「客觀的景色に重きを置きて詠むべし」とあり次に「客觀的にのみ詠むべきものとも思はれず」云々とあるは如何。生は客觀的にのみ歌を詠めと申したる事は無之候。客觀に重きを置けと申したる事も無けれど此方は稍意に近きやう覺え候。「皇國の歌は感情を本として」云々とは何の事に候や。詩歌に限らず總ての文學が感情を本とする事は古今東西相異あるべくも無之、若し感情を本とせずして理窟を本としたる者あらばそれは歌にても文學にてもあるまじく、故に「皇國の歌は」など言はるゝは例の歌より外に何物も知らぬ歌よみの言かと被存候。「何れの世に何れの人が理窟を詠みては歌にあらずと定め候哉」とは驚きたる御問に有之候。理窟が文學に非ずとは古今の人東西の人悉く一致したる定義にて、若し理窟をも文學なりと申す人あらばそれは大方日本の歌よみならんと存候。

貴書中主觀客觀感情理窟の語に就きて或は貴意と相違致居候にや。又客觀的に詠みし歌なりとも感情を本としたるは言を俟たず。例へば橋の袂に柳が一本風に吹かれて居るといふことを其儘歌にせんには其歌は客觀的なれども、元と此歌を作るといふは此客觀的景色を美なりと思ひし結果なれば感情に本づく事は勿論にて只うつくしいとか綺麗とかうれしいとか樂しいとかいふ語を著くると著けぬとの相異に候。又主觀的と申す内にも感情と理窟との區別有之、生が排斥するは主觀中の理窟の部分にして、感情の部分には無之候。感情的主觀の歌は客觀の歌と比して、此主客兩觀の相異の點より優劣をいふべきにあらず、されば生は主觀に重きを置く者にても無之候。但和歌俳句の如き短き者には主觀的佳句よりも客觀的佳句多しと信じ居候へば客觀的に重きを置くといふも此邊の事を意味すると見れば差支無之候。

又主觀客觀の區別、感情理窟の限界は實際判然したる者に非ずとの御論は御尤に候。それ故に善惡可否巧拙と評するも固より劃然たる區別あるに非ず巧の極端と拙の極端とは誰も解るゝ所あれど巧と拙との中間に在る者は巧とも拙とも申し兼候。感情と理窟の中間に在る者は此場合に當り申候。

「同じ用語同じ花月にても其れに對する吾人の觀念と古人のと相異する事珍しからざる事にて」云々それは勿論の事なれどそんな事は生の論ずることゝ毫も關係無之候。今は古人の心を忖度する必要無之、只此處にては古今東西に通ずる文學の標準（自ら斯く信じ居る標準なり）を以て文學を論評する者に有之候。昔は風帆船が早かつた時代もありしかど蒸汽船を知りて居る眼より風帆船は遲しと申すが至當の理に有之、貫之は貫之時代の歌の上手とするも前後の歌よみを比較して貫之より上手の者外に澤山有之と思はゞ貫之を下手と評すること至當に候。歴史的に貫之を褒めるならば生も強ち反對にては無之候へども只今の論は歴史的に其人物を評するにあらず、文學的に其歌を評するが目的に有之候。

「日本文學の城壁とも謂ふべき國歌」云々とは何事ぞ、代々の勅撰集の如き者が日本文學の城壁ならば實に頼み少き城壁にて此の如き薄ッぺらな城壁は大砲一發にて滅茶々々に碎け可申候。生は國歌を破壞し盡すの考にては無之、日本文學の城壁を今少し堅固に致し度、外國の髯づらが大砲を發たうが地雷火を仕掛けうが、びくとも致さぬ程の城壁に致し度心願有之、しかも生を助けて此心願を成就せしめんとする大檀那は天下一人も無く數年來鬱積沈滯せる者頃日漸く出口を得たる事とて前後錯雜序次倫無く大言疾呼我ながら狂せるかと

存候程の次第に御座候。傍人より見たらば定めて狂人の言とさげすまるゝ事と存候。猶此度新聞の余白を借り得たるを機とし思ふ様愚考も述べたく、それ丈にては愚意分りかね候に付愚作をも連ねて御評願ひ度存居候へども或は先輩諸氏の怒に触れて差止めらるゝやうな事は無きかとそれのみ心配罷在候。心配恐懼、喜悦、感慨、希望等に悩まされて従来の病軀益々神経の過敏を致し日来睡眠に不足を生じ候次第愚とも狂とも御笑ひ可被下候。

従来の和歌を以て日本文学の基礎とし城壁と為さんとするは弓矢剣槍を以て戦はんとすると同じ事にて明治時代に行はるべき事にては無之候。今日軍艦を購ひ大砲を購ひ巨額の金を外国に出すも畢竟日本国を固むるに外ならず、されば僅少の金額にて購ひ得べき外国の文学思想抔は続々輸入して日本文学の城壁を固めたく存候。生は和歌に就きても旧思想を破壊して新思想を注文するの考にて随つて用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候。委細後便。

追て、伊勢の神風、宇佐の神勅云々の語あれども文学には合理非合理を論ずべき者にては無之、従つて非合理は文学に非ずと申したる事無之候。非合理の事にて文学的には面白き事不少候。生の写実と申すは合理非合理事実非事実の謂にては無之候。油画師は必ず写生に依り候へどもそれで神や妖怪やあられもなき事を面白く書き申候。併し神や妖怪を画くにも勿論写生に依るものにて、只々有りの儘を写生すると一部々々の写生を集めるとの相異に有之、生の写実も同様の事に候。是等は大誤解に候。

（明治三十一年二月二十四日）

七たび歌よみに与ふる書

前便に言残し候事今少し申上候。宗匠的俳句と言へば直ちに俗気を聯想するが如く和歌といへば直ちに陳腐を聯想致候が年来の習慣にて、はては和歌といふ字は陳腐といふ意味の字の如く思はれ申候。斯く感ずるもの和歌社会には無之と存候へど歌人ならぬ人は大方箇様の感を抱き候やに承り候。をり／＼は和歌を詠る人に向ひてさて和歌は如何様に改良すべきかと尋ね候へば其人が首をふつて、いやとよ和歌は腐敗し尽したるに、いかでか改良の手だてあるべき、置きね／＼など言ひなし候様は恰も名医が匙を投げたる死際の病人に対するが如き感を持ち居候者と相見え申候。実にも歌は色青ざめ呼吸絶えんとする病人の如くにも有之候よ。さりながら愚考はいたく異なり、和歌の精神こそ衰へたれ形骸は猶保つべし、今にして精神を入れ替へなば再び健全なる和歌となりて文壇に馳駆するを得べき事を保証致候。こはいはでもの事なるを或る人が、はやこと切れたる病人と一般に看做し候は如何にも和歌の腐敗甚しきに呆れて一見して抛棄したる者にや候べき。和歌の腐敗の甚しさもこれにて大方知れ可申候。

此腐敗と申すは趣向の変化せざるが原因にて、又趣向の変化せざるは用語の少きが原因と被存候。故に趣向の変化を望まば是非とも用語の区域を広くせざるべからず、用語多くなれば従つて趣向も変化可致候。ある人が生を目して和歌の区域を狭くする者と申し候は誤解にて少しにても広くするが生の目的に御座候。とはいへ如何に区域を広くするとも非文学的思想は容れ不申、非文学的思想とは理窟の事に有之候。

外国語も用ゐよ外国に行はるゝ文学思想も

取れよと申す事に就きて日本文學を破壊する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも將たサンスクリット詩を作るとも日本人が作りたる上は日本の文學に相違無之候。唐制に摸して位階も定め服色も定め置き唐ぶりたる冠衣を著け候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英國の軍艦を買ひ獨國の大砲を買ひ、それで戰に勝ちたりとも運用したる人にして日本人ならば日本の勝と可申候。併し外國の物を用ふるは如何にも殘念なれば日本固有の物を用ゐんとの考ならば其の志には賛成致候へども迚も日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文學にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候はゞ如何なる者か出來候べき源氏物語、枕草子以下漢語を用ゐたる物を排斥致し候はゞ日本文學は幾何か殘り候べき。それでも痩我慢に歌ばかりは日本固有の語にて作らんと決心したる人あらばそは御勝手次第ながら其を以て他人を律するは無用の事に候。日本人が皆日本固有の語を用ふるに至らば日本は成り立つまじく日本文學者が皆日本固有の語を用ゐたらば日本文學は潰滅可致候

或は姑息にも馬、梅、蝶、菊、文等の語はいと古き代より用ゐ來りたれば日本語と看做すべしなどいふ人も可有之候へど、いと古き代の人は其頃新しく輸入したる語を用ゐたる者にて、此姑息論者が當時に生れ居らばそれをも排斥致し候ひけん。いと笑ふ可き撞著に御座候。假に姑息論者に一歩を藉して古き世に使ひし語のみ用ふるとして、若し王朝時代に用ゐし漢語だけにても十分に之を用ゐなば猶和歌の變化すべき餘地は多少可有之候。されど歌の詞と物語の詞とは自ら別なり。物語などにある詞にて歌には用ゐられぬが多きなど例の歌よみは可申候。何たる笑ふ可き事には候ぞや。如何なる詞にても美の意を運ぶに足るべき者は皆歌の詞と可申、之を外にして歌の詞といふ者は無之候。漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。

(明治三十一年二月二十八日)

八たび歌よみに與ふる書

悪き歌の例を前に擧げたれば善き歌の例をここに擧げ可申候。悪き歌といひ善き歌といふも四つや五つばかり擧げたりとて愚意を盡すべくも候はねど無きには勝りてんと聊か列ね申候。先づ金槐和歌集などより始め申さんか。

武士の矢並つくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

といふ歌は萬口一齊に歎賞するやうに聞き候へば今更取り出でゝいはでもの事ながら猶御氣のつかれざる事もやと存候まゝ一應申上候。此歌の趣味は誰しも面白しと思ふべく又此の如き趣向が和歌には極めて珍しき事も知らぬ者はあるまじく又此歌が強き歌なる事も分り居り候へども、此種の句法が殆ど此歌に限る程の特色を爲し居るとは知らぬ人ぞ多く候べき。普通に歌はなり、けり、らん、かな、けれ抔の如き助辭を以て斡旋せらるゝにて名詞の少きが常なるに、此歌に限りては名詞極めて多く「てにをは」は「の」の字三、「に」の字一、二個の動詞も現在になり(動詞の最短き形)居候。此の如く必要なる材料を以て充實したる歌は實に少く候。新古今の中には材料の充實したる句法の緊密なる稍ゝ此歌に似たる者あれど、猶此歌の如くは語々活動せざるを覺え候。萬葉の歌は材料極めて少く簡單を以て勝る者、實朝一方に

は此萬葉を擬し一方には此の如く破天荒の歌を為す。其力量實に測るべからざる者有之候。又晴を祈る歌に

時によりすぐれば民のなげきなり八大
龍王雨やめたまへ

といふがあり恐らくは世人の好まざる所と存候へどもこは生の好きでく〳〵たまらぬ歌に御座候。此の如く勢強き恐ろしき歌はまたと有之間敷、八大龍王を叱咤する處龍王も懾伏致すべき勢相現れ申候。八大龍王と八字の漢語を用ゐたる處、雨やめたまへと四三の調を用ゐたる處、皆此歌の勢を強めたる所にて候。初三句は極めて拙き句なれども其一直線に言ひ下して拙き處、却て其眞率僞りなきを示して祈晴の歌などには最も適當致居候。實朝は固より善き歌作らんとて之を作りしにもあらざるべく只〻眞心より詠み出でたらんがなかなかに善き歌とは相成り候ひしやらん。こゝらは手のさきの器用を弄し言葉のあやつりにのみ拘る歌よみどもの思ひ至らぬ所に候。三句切の事は猶他日詳に可申候へども三句切の歌にぶつゝかり候故一言致置候。三句切の歌詠むべからずといふは守株の論にて論ずるに足らず候へ共三句切の歌は尻輕くなるの弊有之候。此弊を救ふために下二句の内を字餘りにする事屢〻有之、此歌も其一にて（前に擧げたる大江千里の月見ればの歌も此例）尚其外にも數へ盡すべからず候。此歌の如く下を字餘りにする時は三句切にしたる方却りて勢強く相成申候。取りも直さず此歌は三句切の必要を示したる者に有之候。又

物いはぬよものけたものすらたにもあ
はれなるかなや親の子を思ふ

の如き何も別にめづらしき趣向もなく候へども一氣呵成の處却て眞心を現して餘りあり候。序に字餘りの事一寸申候。此歌は第五句字餘り故に面白く候。或る人は字餘りとは餘儀なくする者と心得候へどもさにあらず、字餘りには凡三種あり、第一、字餘りにしたるがために面白き者、第二、字餘りにしたるがため惡き者、第三、字餘りにするともせずとも可なる者と相分れ申候。其中にも此歌は字餘りにしたるがため面白き者に有之候。若し「思ふ」といふをつめて「もふ」など吟じ候はんには興味索然と致し候、こゝは必ず八字に讀むべきにて候。又此歌の最後の句にのみ力を入れて「親の子を思ふ」とつめしは情の切なるを現す者にて、若し「親の」の語を第四句に入れ最後の句を「子を思ふかな」「子や思ふらん」など致し候はゞ例の如くやさしき調となりて切なる情は現れ不申、從つて平凡なる歌と相成可申候。歌よみは古來助辭を濫用致し候樣宋人の虚字を用ゐて弱き詩を作ると一般に御座候。實朝の如きは實に千古の一人と存候。

前日來生は客觀詩をのみ取る者と誤解被致候ひしも其の然らざるは右の例にて相分り可申、那須の歌は純客觀、後の二首は純主觀にて共に愛誦する所に有之候。併し此の三首ばかりにては強き方に偏し居候へば或は又強き歌をのみ好むかと被考候はん。尚多少の例歌を擧ぐるを御待可被下候。

（明治三十一年三月一日）

九たび歌よみに與ふる書

一々に論ぜんもうるさければ只〻二三首を擧げ置きて金槐集以外に遷り候べく候。

山は裂け海はあせなん世なりとも君に
ふた心われあらめやも

箱根路をわが越え來れば伊豆の海やお
きの小島に波のよる見ゆ

世の中はつねにもかもななぎさ漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも

大海のいそもとどろによする波われてくだけてさけて散るかも

箱根路の歌極めて面白けれども斯る想は古今に通じたる想なれば實朝が之を作りたりとて驚くにも足らず、只ゞ「世の中は」の歌の如く古意古調なる者が萬葉以後に於てしかも華麗を競ひたる新古今時代に於て作られたる技倆には驚かざるを得ざる譯にて實朝の造詣の深き今更申すも愚かに御座候。大海の歌實朝のはじめたる句法にや候はん。

新古今に移りて二三首を擧げんに

なこの海の霞のまよりながむれは入日を洗ふ沖つ白波　（實定）

此歌の如、客觀的に景色を善く寫したるものに新古今以前にはあらざるべくこれらも此集の特色として見るべき者に候。惜むらくは「霞のまより」といふ句が瑕にて候。一面にたなびきたる霞に間といふも可笑しく、縦し間ありともそれは此趣向に必要ならず候。入日も海も霞みながらに見ゆるこそ趣は候なれ。

ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風　（信明）

これも客觀的の歌にてけしきも淋しく艷なるに語を疊みかけて調子取りたる處いとめづらかに覺え候。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵を並べん冬の山里　（西行）

西行の心はこの歌に現れ居り候。「心なき身にも哀れは知られけり」などいふ露骨的の歌が世にもてはやされて此歌などは却て知る人少きも口惜く候。庵を並べんといふが如き斬新にして趣味ある趣向は西行ならでは得言はざるべく特に「冬の」と置きたるも亦尋常歌よみの手段にあらずと存候。後年芭蕉が新に俳諧を興せしも寂は「庵を並べん」などより悟入し、季の結び方は「冬の山里」などより悟入したるに非ざるかと被思候。

閨の上にかたえさしおほひ外面なる葉廣柏に霰ふるなり　（能因）

これも客觀的の歌に候。上三句複雑なる趣を現さんとて稍ゝ混雜に陷りたれど葉廣柏に霰のはじく趣は極めて面白く候。

岡の邊の里のあるじを尋ぬれは人は答へす山おろしの風　（慈圓）

此趣味ありて句法もしつかりと致し居候。此種の歌は第四句を「答へで」などいふが如く下に連續する句法となさば何の面白味も無之候。

さゝ波や比良山風の海吹けば釣する蜑の袖かへる見ゆ　（讀人しらず）

實景を其儘に寫し些の巧を弄ばぬ所却て興多く候。

神風や玉串の葉をとりかざし内外の宮に君をこそ祈れ　（俊惠）

神祇の歌といへば千代の八千代のと定文句を並ぶるが常なるに此歌はすつぱりと言ひはなしたるなか〳〵に神の御心にかなふべく覺え候。句のしまりたる所半ば客觀的に敍したる所など注意すべく神風やの五字も譯なきやうなれど極めて善く響き居候。

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ　（傳教）

いとめでたき歌にて候。長句の用ゐ方など古今未曾有にてこれを詠みたる人もさすがなれど此歌を勅撰集に加へたる勇氣も稱するに足るべくと存候。第二句十字の長句ながら成語なれば左迄目にたまらず、第五句九字にしたるはことさらにもあらざるべけれど此所はことさらにも九字位にする必要有之、若し七字句などを以て止めたらんには上の十字句に對して釣合取れ不申候。初めの方に字餘りの句あるが

ために候にも字餘りの句を置かねばならぬ場合は屢〻有之候。若し字餘りの句は一句にても少きが善しなどいふ人は字餘りの趣味を解せざるものにや候べき。

十たび歌よみに與ふる書

（明治三十一年三月三日）

先輩崇拜といふことは何れの社會にも有之候。それも年長者に對し元勳に相當の敬意を盡すの意ならば至當の事なれどもそれと同時に何かは知らず其人の力量技術を崇拜するに至りては愚の至りに御座候。田舍の者などは御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの樣に考へ、從て其人の歌と聞けば讀まぬ内からはや善き者と定め居るなどありうちの事にて生も昔は其仲間の一人に候ひき。今より追想すれば赤面する程の事に候。御歌所とてえらい人が集まる筈も無く御歌所長とて必ずしも第一流の人が坐るにもあらざるべく候。今日は歌よみなる者皆無の時なれどそれでも御歌所連より上手なる歌よみならば民間に可有之候。田舍の者が元勳を崇拜し大臣をえらい者に思ひ政治上の力量も識見も元勳大臣が一番に位する者と迷信致候結果新聞記者などが大臣を譏るを見て「いくら新聞屋が法螺吹いたとて、大臣は親任官、新聞屋は素寒貧、月と泥鼈の違ひだ」などと罵り申候。少し眼のある者は元勳がどれ位無能力かといふ事大臣は廻り持にて新聞記者より大臣に上りし實例ある事位は承知致し説き聞かせ候へども田舍の先生は一向無頓着にて不相變元勳崇拜なるも腹立たしき譯に候。あれ程民間にてやかましくいふ政治の上猶然りとすれば今迄隱居したる歌社會に老人崇拜の田舍者多きも怪むに足らねども此老人崇拜の弊を改めねば歌は進歩不可致候。歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤も無之候。歌よまんとする少年あらば老人抔にかまはず勝手に歌を詠むが善かるべしと御傳言可被下候。明治の漢詩壇が振ひたるは老人そつちのけにして青年の詩人が出たる故に候。俳句の觀を改めたるも月並連に構はず思ふ通りを述べたる結果に外ならず候。

緣語を多く用ふるは和歌の弊なり、緣語も場合によりては善けれど普通には緣語かけ合せなどあればそれがために歌の趣を損ずる者に候。縱し言ひおほせたりとて此種の美は美の中の下等なる者と存候。無暗に緣語を入れたがる歌よみは無暗に駄洒落を並べたがる半可通と同じく、御當人は大得意なれども側より見れば品の惡き事夥しく候。表面に巧を弄せんよりは眞率に言ひながしたるが余程上品に相見え申候。

歌といふといつでも言葉の論が出るには困り候。歌では「ぼたん」とは言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此詞は斯うは言はず必ず斯ういふしきたりの者ぞなど言はるゝ人有之候へどもそれは根本に於て已に愚考とは異り居候。愚考は古人のいふた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く。只〻自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。故に俗語を用ゐたる方其の美感を現すに適せりと思はば雅語を捨てゝ俗語を用ゐ可申、又古來のしきたりの通りに詠むことも有之候へどそれはしきたりなるが故に其を守りたるにては無之其のしきたりに之を用ゐたる迄の方が美を現すに適せるがために之を用ゐたる迄に候。古人のしきたりなど申せども其の古人は自分が新たに用ゐたるぞ多く候べき。牡丹と深見草との區別を申さんに生等には深

見草といふよりも牡丹といふ方が牡丹の幻影早く著く現れ申候。且つ「ぼたん」といふ音の方が強くして實際の牡丹の花の大きく凛としたる所に善く副ひ申候。故に客觀的に牡丹の美を現はさんとすれば牡丹と詠むが善き場合多かるべく候。

新奇なる事を詠めといふと、汽車、鐵道などいふ所謂文明の器械を持ち出す人あれど大に量見が間違ひ居り候。文明の器械は多く不風流なる者にて歌に入り難く候へども若しこれを詠まんとならば他に趣味ある者を配合するの外無之候。それを何の配合物も無く「レールの上に風が吹く」などとやられては殺風景の極に候。せめてはレールの傍に菫が咲いて居るとか、又は汽車の過ぎた後で罌粟が散るとか薄がそよぐとか言ふやうに他物を配合すればいくらか見よくなるべく候。又殺風景なる者は遠望する方宜しく候。菜の花の向ふに汽車が見ゆるとか、夏草の野末を汽車が走るとかするが如きも殺風景を消す一手段かと存候。

いろいろ言ひたき儘取り集めて申上候。猶他日詳かに申上ぐる機會も可有之候。以上。　月　日。

（明治三十一年三月四日）

あきまろに答ふ

「も」の字に就きて質問に御答申候。「も」の字は元來理窟的の言葉にて、俳句などにては「も」の字の有無を以て月並的俳句なるか否かを判ずる事さへある位に候へども、さりとて「も」の字盡く理窟なるにも無之候。拙作に對する質問に答へんは辯護がましく聞えて心苦しき限りながら議論は議論にて巧拙の評にあらねば愚意試に可申述候。

「も」の字にも種類ありて「櫻の影をふむ人もなし」「人も來ず春行く庭の」「屍をさむる人もなし」などいへる「も」は殆ど意味無き「も」にて「人なし」「人來ず」といへると大差なければ理窟を含まず、又「桃咲きぬ鮎ものぼりぬ」の「も」は桃と鮎とを相竝べていふ者なればこれも理窟には相成不申候。實朝の四方の獸すらだにも」は稍々理窟めきて聞ゆる「も」にて「老いゆく鷹の羽ばたきもせず」「あら鷹も君が御鳥屋に」の二つは稍々之に似たる者に有之候。其理窟めきて聞ゆるは二事二物を相對して言ふ意味ながら一事一物をのみ現し他を略したるが爲にして、例へば獸だに子を思ふといふは況して人は子を思ふといふ事を含み、羽ばたきもせずといふは況して飛び去らんともせずといふことを含み、あら鷹もといふは其外の鷹もといふ意を含むが如き者に候。併し此獸の歌も鷹の歌も全體理窟づめにしたる歌には無之悲哀感慨を述べたる者と見て差支無かるべく候。（羽ばたきもせずの歌稍々理窟めきたるは一ほだしにて」の語あるがためにして「も」の論とは異なり）

歌に就きても今迄大體を示すに忙しく細論する機なく候處「も」の字の實地論出で候まゝ「理窟」といふことをこゝに詳述可致候。心理學者が普通にいふ如く心の働きを知情意の三に分てば、前日來歌は感情的ならざるべからず」などいひし感情とは此「情」の一部分にして例の理窟とは「智」の一部分に相當申候。然らば理窟とは「智」の如何なる部分かといふに劃然と其の限界を示す能はざれども要するに智の最も複雜したる部分が程度の高き理窟にて、それが簡單になればなる程、程度の低き理窟となる譯に候。今迄用ゐたる理窟といふ語は最も簡單の智をば除きて言ひし積りなれど、貴書の意は智と理窟とを同一に看傚されたるかと覺え候。論理的に嚴密に議論せんとする場合には後說の方或は宜しかるべく、さうすれば理窟の內でも低度の理窟は文學的として之を許し、高度の理窟は非文學的として之を排斥する譯に相成申候。此低度の理窟即ち最簡單の智とは記憶比較の類の如き者にして、如何なる純粹の文學的感情といへども多少の記憶力比較力を交へざる時は文學として成り立つ者には無之候、若し理窟の語を廣義の方に用ふれば實朝の歌の如き之を理窟と言ひ得べく候へど、併し余の標準に從ふて判ずれば、これは許すべき理窟の部に屬し申候。

斯く申さば一方にて「すらだにも」の如きを許し、他の方にて「も」の一字を蛇蝎視するは如何との不審起り可申候。それは左の如き次第に候。いはでもの事ながら主觀的の歌は縱令感情を述べたる者なりとも客觀的の歌に比して智力を多く交へたるは不可爭の事に候。そは客觀的の歌は受身の官能に依ること多けれど主觀的の歌は幾何か抽象して現すの勞ある

がために候。實朝の歌の如き既に全體に於て主觀的なるからに「すらだにも」の語左程理窟ぼく聞えねど全體客觀的なる歌に只〻一字の「も」の字ある時は極めて理窟ぼく殺風景に聞え申候。「も」の意善く響けば響く程、益〻理窟くさく相成候。これは畢竟前後不調和なるが爲にや候べき。余の蛇蝎視する「も」の字は客觀的歌中に插まれたる「意味の強き『も』の字」の事に有之候。併し前にも言ふ如く「梅も櫻も」といふやうに二物以上相對物が文字上に現はれたる場合は理窟臭からず聞え候。

序に申候。俳句にては「人もなし」といふ語を「人無し」と同じく用ふれど「人もあり」といふ語を用ふれば「も」の字理窟臭く相成候。これも和歌より來れりと思しく、和歌にて「人もなし」「影もなし」といふは「も」に意味なけれど「：人もありけり」といへば、世の中を厭ふ人もあるが、世の中を喜ぶ人もあるといふやうに相對物ある場合が多きやに覺え候、從つて理窟くさく成りがちにて候。

(明治三十一年三月六日)

人々に答ふ

一

歌の事に就きては諸君より種々御注意御忠告を辱うし御厚意奉深謝候。猶又或る諸君よりは御鄭重な御見舞を辱うし誠に冥加至極に奉存候。早速御禮旁々御挨拶可申上之處、病氣にかゝり頃日來机に離れて横臥致居候ひしため延引致候。數百年の間常に腐敗したる和歌の上にも特に腐敗の甚だしき時代あるが如く吾等の如き常病人も特に病氣に罹る事有之閉口の外無之候、

何より御答へ可申かと惑ひ候へども思ひ出す儘に一つ宛可申述候。三月十一日紙上に番外百中十首（松の山人投）として掲げある歌を吾等が匿名にて掲げ候やの御尋ね有之候へども右は盡く柿園詠草中に在る歌にて吾等の歌とは全く異り居候。柿園詠草の歌を何人が投じて、如何にして紙上に載せられたるかは固より吾等の知る所には無之候。さて又此等の歌が吾等の歌と相似たるやに評する人も有之候由承り候に付彼歌に對する愚見を述べて其然らざるを明かに致し度存候。

朝風に若菜賣る兒の聲すなり朱雀の柳眉いそぐらむ

此歌は十首中にては第一と存候。全體面白く候へども「眉いそぐらむ」の語巧に失する者と存候。眉いそぐといふ事昔よりいふか否かは知らねども何だか變な言葉なるが上に此處に此の擬人的形容を用ゐるは宜しからず或は若菜賣る兒に對して柳眉といひたる者にも候ふべけれど左樣なシャレの無い方が却て趣深く聞え申候。尋常に柳が綠になると申度候。

暮れぬめり菫咲く野の薄月夜雲雀の聲は中空にして

此歌拙く候。「暮れぬめり」とありて「薄月夜」とあるは甚だしき撞著と相見え候。「中空にして」の止まりも甚だ心得難く、或は「暮れぬめり」に返る意にやとも思はるれどさりとては餘り拙くや候べき。

行くも花かへるも花の中道を咲き散る限り行きかへり見む

此の如き歌は或は俗受け宜しかるべく、吾等はたゞ厭味たらたらに感ずるのみに候。咲き散る限りとは何の意とも知らず、若し花の咲いたり散つたりする間といふ意にて長き時間を含む者とすれば六田の「うつせみの我世の限り見るべきは」といひし類にて少しも實情らしき處無し、又時間に非ずして花の中道の長さをいふものとすれば言葉の巧を弄したるのみにて何等の趣味も無之候。併し此歌は全體に厭味あれば一句を論ずるに及ぶまじく候。

桑とると霞わけこし里の兒がえびらにかゝる夕ぐれの雨

此歌さしたる難も無けれど又何の趣も無之候。蠶飼する時節は長閑に感ぜらるゝ者なるに、此歌前半の長閑なるに似ず後半は長閑に感ぜられず、これがために趣味少きにやと存候。えびらといふは如何なる物か知らねども此歌にては桑の葉を摘み入れる筐の類かと見ゆるが不審に存候。俊頼の歌に「山里のこやのえびらに洩る月の影にも繭の筋は見えけり」とあるえびらは家の中に在る器具かと見え候へどこれを桑の葉入れにも用ゐ候にや。識者の教を煩

はし度候。

　棹ふれし筏は一瀬過ぎながらなほ影なびく山吹の花

「棹ふれし筏」といふ言葉續きも「一瀬過ぎながら」の言葉續きもいと拙く覺え候。「ながら」といひて「猶」と受けたるもうるさく又「なびく」の語も「ゆらぐ」「動く」などに更め候方山吹に適切かと存候。此歌巧ならんとして言葉づかひ無理に相成候。

　山里は卯の花垣のひまをあらみしのび音もらす時鳥かな

此の歌尋常めきたれども吾等は厭味を感じ候。此の歌の作意は三四の句にあるべく其の三四が厭味を感ずる所に有之候。垣の隙があらいとて忍び音を漏らす譯は少しも無之、それを兩者相關係するが如く言ひなすは言葉のシャレと相見え申候。言葉のシャレが行はるゝ處にはいつでも趣味乏しく候。（三月二十日）

二

　蚊遣火の煙にとさす草の庵を人しも訪はゝ水雞聞かせむ

此の歌句法とゝのはず、四五の句に至りて調子拔けが致し候。四の句「人も訪へかし」などいふが如き言葉つきに改めなば少し續きよかるべくやと存候。さるにても「水雞聞かせむ」の句の俗なるは又一段の事に候。水雞聞くべくとか何とか改め候はんには少し俗氣少かるべく候へどもさりとて善き歌にも成り不申候。

　一むらの杉の梢に山見えて月よりひゞく瀧の音かな

上三句は尋常の景尋常の語なれども印象明瞭なる處却て他の巧を弄し詞をひねくりたる歌にまさり居候。惜いかな四五の句上に續き不申候。上三句の景より言へば山は杉林より隔りたる者の如く相見え、左迄近きとは覺えぬに、瀧の音とあるを見れば極めて近き山ならざるべからず、是に於て前後の撞著を來し申候。「月よりひゞく」などいふ語此の作者の得意の所なるべけれど多少の厭味は免れず候。此の歌の作意は瀧は見えずして音ばかり聞ゆる故、月中に響あるが如くいひなしたる者なるべけれどそれが却て厭味を生ずる種に相成候。若しあからさまに見ゆる瀧の下に立ちて見あげたる時瀧の上に月ありとせんか、此の場合に「月より響く」などやうの形容を用ふるは厭味少かるべく候。

　五百重山霧深からし菅笠のしづくも落つる有明の月

此歌の意明ならず、第二句想像の語とすれば旅人などの笠の雫を見て山は霧深からんといへるにや、さるにても言葉少し足らぬやうに存候。旅人の菅笠とでも言はざれば三句突然に出て面白からず候。「雫も落つる」の「も」の字も意味をなさず餘儀なき「も」とや申し候べき。

（三首中此歌一首は柿園詠草中に無きやうに覺え候如何の譯にや）

　雲かゝるわたのみなかにあら汐を雨とふらせて鯨浮べり

「雨とふらせて」の句此歌の骨子にしてしかも此歌の瑕瑾と存候。斯様な場合には「ふらせる」などいふやうな「せしむる」的の語を用ふれば勢を損じて不面白候。寧ろ「鯨の噴いた汐が雨となつた」と言ひはなす方宜しかるべく候。此人往々此種の句を插んで雄壯なる歌をだいなしにする癖有之候。「笠置山あすの時雨をさきだてゝ亂るゝ雲に嵐吹くなり」の如きも四五の句極めて面白しと思ふに一二三句異様の言葉つかひなるがため興味索然と致候。且つ雄壯の歌の第一句「雲かゝる」の五字極めて拙く候。斯く言ひては「雨とふらせて」と照應する

ために此蛇足の語を加へたる痕跡歴々として餘り見つとも無く候。且つ「海の眞中に雲がかゝる」といふことは聞えぬ言葉つゞきと存候。

渺々たる海上にある雲を「かゝる」とはいふべからず候。縱しそれも許して置いた處で「雲かゝる」といへば一片の雲と見ゆる處いと可笑しく候。試みに此歌の景を想像可被成候。

海は漫々として廣く空は一面に晴れわたりたる處に海の眞中に鯨汐を噴けば其鯨の眞上ばかりに一塊の雲ある處を描き出だして其が天然の景と見え可申候や。吾等には人間がこしらへた雲とよりは相見え不申候。いつそ雲は無い方が宜しく、若しくは雲の掩ひひろごりたる處を詠むが宜しく候。

（三月二十二日）

三

前に擧げたる十首の歌を意味は其儘にて言葉つきを全く改めて投書したる人（下總凡調子）有之候。此人の直し方は極めて尋常に直したる者なれば吾等が非難したる言葉つゞきの無理と厭味とを免れたれど多くは平凡に流れ申候。其二三を擧げんに

　おもしろく雲雀さひつる中空に月影見えて日は暮れにけり

言葉つゞきは安らかになりたれど善き歌ともならず。

　隅田川堤の櫻咲き匂ふ花の下道行きかへり見む

到底厭味を脱却する能はずと相見え申候。

　山里の卯の花垣の夕月夜しのび音もらす時鳥かな

平凡になりたれど却て原作の細工を施したるにまされりと存候。

　五百重山朝霧深み旅人の小笠の雫間なくちるなり

「旅人の」の五字を加へたるは贊成に候。結末猶飽き足らぬ心地致候。

　青海原沖さけ見ればあらしほを空にいふきて鯨浮べり

「雨とふらせて」「雲かゝる」の二句を除きたるは至極贊成なるがこれも結末に今一歩と思ふ所なきにもあらず候。さはいへど此の歌一番の出來かと存候。

或る人（八王子三田村玄龍子）曰く強き歌には強き調を用ゐ弱き歌には弱き調を用ふといふもさる事ながら古今集の如く同一の調にて千態萬狀を詠みたるも亦面白しと存候。云々。

答へて曰く御說一理無きにもあらず、されどそは古今集の如き文字の巧を弄したる俗調の上にはいふべからずと存候。歌にていはゞ萬葉調、俳句にていはゞ曠野調、詩にていはゞ詩經とか何とかいふ極古き調の上に於て始めてしか申すべきにやと存候。極めて古雅なる調を以て詠む時は雄壯なる事も左程に雄壯に聞えず優美なる事も左程に優美に聞えず候へども其代り凡ての物を古雅化して些の俗氣を帶びざる處に一種の面白みあり、故に萬葉調を以て凡百の物事を詠まんとならば大體に於て贊成致候。さりながら古今調を以て詠まんとならば大不贊成に候。殊に古今集を目して千態萬狀を詠みある者かの如くいはるゝは心得ず候。吾等の目より見れば古今集は一態一狀を詠みたる者かと怪しまるゝ程に候。

或る人（同）曰く蕪村派の俳句集と盛唐の詩集とを並べたるは不倫と存候。云々。

答へて曰く此不倫とは唐詩を以て勝れりとなす者と存候。さて如何にして不倫とは言はるるやらん、若し詩と俳句とは詩形に長短あり從つて規模に大小あり故に比すべからずとならば異論も無之候へども、技倆の上に大差ありとの事ならば御同意難致候。李杜王孟の如き詩人を蕪村時代の日本に生れて俳句を作らしめ

たりとも彼等が蕪村より遙かに立ちまさりたる技倆ありとも信じ難く、蕪村をして盛唐に生れしめなば一屁ッ鉾詩人にて終りたらんとも信じ難く候。但失敬俳句を十分に研究せずして蕪村の句も月並宗匠の句も大同小異位に思はるるには無之候哉。歌よみが歌を天下第一の如く思ふと同じく詩人が詩を天下第一の如く思ふも珍しき事にはあらず成るべく公平の御論を願はしく候。或る人自ら屑屋と名のり一屑籠の中よりふと竹の里人の歌論を見つけ出して之を讀むにイヤハヤ御高論……」などゝいふやうな調子にて長々とひやかされた處誠にひやかしに妙を得たる人もある者かなと感服致し候ひしに何がさて最後に歌論中の只ゞ一個處に對する長々しき攻撃有之しかも屁の如き攻撃に勢も何も抜け申候。其要領をいへば「躬恒の心あてに折らばや折らむの歌を竹の里人は誤解せり竹の里人は知るまいが白菊に霜置けば赤くなるものぞ躬恒は其の赤くなりて何れを白菊とも分ちかねたる所を詠めるなり物知らぬ奴が歌など作するはかたはらいたし」などゝいふに在り誠に以て驚き入りたる無稽に候。吾等庭前の白菊も今々赤くなり歌にも白菊の紫にうつろふよし詠めれば白菊は赤くなるものと豫ねて承知致居候處屑屋先生の今更高慢に説明せらるゝを見れば遼東に白頭の豕を珍しがりたる如く屑屋先生は白菊を餘り御覧なされぬ者と相見え候。さて又「置きまどはせる」といふ語が色の變つた意に取れ可申哉。又其の色の變つた菊を心あてに折らばやなどゝ仰山に出掛けて躬恒が苦心して折らんとしたるにや笑止とも何とも申様が無く候。如何に理窟好の躬恒でも斯様な説を聞いたら嘸かし困り可申候。屑屋が躬恒の辯護などするは贔屓の引倒しにや候べき。

（三月二十四日）

四

千葉稲城子に答へて曰く撞著と誤解の事猶誤解あるが如し。吾等が撞著といひしは前に「客観的景色に重きを置き」とありて後に「客観的にのみ」とありしをいふなり。即ち「重きを置き」は「のみ」と斷言したる後の言と意味同じからざるをいふ。

「國歌さへ知らぬ文學者」とは暗に吾等を指したる者か、吾等實に國歌を知らず慚愧に堪へず。されど吾等をして國歌を知らしめざる者半ば吾等の罪にして半ば國歌の罪なりと信ず。何となれば吾等國歌を研究せんとして歌集を繙きしこと屡々なるも何時も四五枚位讀みては最早眠氣さして讀み得ぬ迄に彼等はつまらぬなり。凡そ文學的の書は讀みはじむれば知らず覺えず讀み進むものなるに、獨り歌なる者に至りては義務的に讀まんとしてさへ、容易に讀み難き者、其趣味少きと變化無きとによらずんばあらず。況んや國歌を知らぬ者我等のみにあらず、所謂歌よみなる者も多くは國歌を知らずと思はる。彼等にして若し國歌を知る者ならば國歌の陳腐を感ぜざる譯なければなり。彼等は三代集と近世歌人中の一二の家集位を讀みて學者と心得居ると見えたり。歌よみに學問させたくは思へども歌以外の學問や外國の文學抔を勸めたとて效力もあるまじければせめては日本の歌集だけ通讀してもらひたき者なり。吾等の如く頭から歌を陳腐に思ふ者は幾册讀みてもます〳〵陳腐と頭痛を感ずるのみにて何の結果も無けれど、彼陳腐な歌を作りて自ら喜ぶ歌よみをして古今集以下の勅撰集を始め代々の歌集をつゞけざまに讀ましめば、まさかに陳腐を感ぜざるを得ざるべし。

理窟と感情との密に相關係するは前にもいへり、今更繰り返すを用ゐず。只「歌にあらず」といふ事につきて一言せん。固より歌と歌なら

ざる者との境界は判然と分れたる者に非ざれば論理的の嚴格なる意味を以て「これは歌なり」「これは歌にあらず」と斷定するは歌非歌中間の歌にありては最も難し。殊に普通に歌を評する場合にありては「歌にあらず」の語を誇張的に用ふること多し。即ち惡歌を指して何かいふなり。猶惡人を指して「人でなし」などゝいふが如し。故に此兩者を區別するを要す。又吾等が理窟は歌にあらずといふも大體の論にして一字一語の理窟めきたる者ありとてそれを直ちに「歌にあらず」（嚴格なる意味の）といふにあらず。若し嚴格にいはゞ毫も理窟なき者は歌なり、全く理窟ばかりなる者は歌にあらずと斷言すべし。されど其の中間の者にありては何處迄を歌とし何處よりを歌とせずと其境界を議論的に證明するに由なし。實地に或る製作をとらへて感情にて之を判斷するあるのみ。試みに此間の事を言ひ得るだけ言はゞ、一分の理窟あれば一分だけ歌ならざる方に近づき二分の理窟あれば二分だけ歌ならざる方に近づくとでもいはんのみ。併しそれすら極端に推論せられては過誤を生ずべし。例へば一分の理窟ある製作は些の理窟なき製作に比して一分だけ劣れりなどゝ推論せらるゝが如し。大體に於ては此推論に誤無けれども實地に當りて見れば必ずや多少の除外例を生ぜん。極簡單の理窟を含む歌にて善しと思ふ者あり、些の理窟を含まざる歌にて惡しと思ふ者あるは事實なればなり　若し理窟といふ語を廣き意味に解すれば此除外例は多くなる道理なり。（理窟の意義に廣狹ある事は「あきまろに答ふ」る文中にいへり）「我身一つの秋にはあらねど」の歌下二句には理窟を含めり。されど此歌を以て直に「歌にあらず」（嚴格なる意味の）とはなさず。但此歌が幾分か歌ならざる方に近づき居るは論を竢たず。

吾等の所謂理窟は理窟なりや否やの疑ありとの事なれども理窟なりや否やは知識上の事なれば疑問となる迄の價値なし。（文學として許すべき理窟なりや否やこそ常に疑問となれ）然れども吾等の用ふる「理窟」なる語が適當なりとか不適當なりとかの疑はあるべし。これならば文字は如何樣に變へてもよろし。只ゝ語を以て意を害する莫れ。

（三月二十九日）

五

文學の標準といふ事に就きての論要領を得ず。「科學的定義を完全し」云々の語あれども文學の標準は必ずしも科學的定義を附するに及ばず。又完全なる標準とかいふ語あれども完全なる標準と不完全なる標準とは何に因つて區別するか。子は文學の標準なる語を全く誤解せり。「英佛獨の文學者すらも」云々の語あるは日本人の言葉とも覺えず。子は英佛獨の學者が爲し得ざりし事を日本人は爲し得ずと定むるが如し。吾等敢て自ら矜るに非ざれどもそれ程迄に西人を崇拜し居らず、それ程迄に日本人を輕蔑し居らず。誤解する莫れ吾等は子の如き西人崇拜者にあらず。

文學の標準と吾等の言ひしは何もむづかしき事にあらず。詩文を見、繪畫彫刻を見て美なり美ならずと評するは、評者の胸中に文學美術の標準ありそれに因りて評するなり。吾等の言ひし文學の標準といふ者是のみ。即ち英佛獨の文學者にもそれ〴〵の標準ありしなるべく支那の文學者にも亦それ〴〵の標準ありしなるべし。子にも標準あるべし。吾等にも標準あるなり。只ゝ古今東西に通ずる標準と言ひしを以て誤解を來たせるが如し。文學の標準といへば古今東西に通ずる事は言はでも善かりしなり。既に標準といふ、古の歌を評すると今の歌を評するとによりて相異なるべくもあらず、東洋の歌を評すると西洋の歌を評す

るとによりて相異なるべくもあらず、古今東西に通ずるとは此事なり。千人萬人の標準が一定せりなどゝいふにあらず。

西洋や支那の「文學」といふ語の定義などを並べたるは全く無用に屬す。何となれば古人の所謂文、文學なる者は吾等の所謂文學と其範圍に於て相異ある者多きのみならず、各々意味を異にする者さへ少からず。支那にて文を道の意に用ふるが如き是なり。其根底に於て意味の異なる文の定義などを掲げて駁撃せんとするは見當違ひたるを免れず。吾等の所謂文學は理窟の外に立つ者にて道を載する者などに非ざるなり。吾等の所謂文學は吾等が屢々説明する如きをいふなり。若しこれら文學といふ語が當らぬとならば美文とも言ふべし。字の定義などを説くは枝葉に渉るの嫌あればこゝに説かず。

文學は實用と娯樂とを兼ねたりとの説固より吾等の説と異なり。(實用の語は普通の解釋に從ふ)理學にして文學に屬すべきものありといふ事ならば子の所謂文學は吾等の所謂文學と異なる者といよ／＼明かなり。實用的教訓を垂ることゝいふに至りては殆ど範圍の異なるを見る。普通の學者にては教訓的の者は文學の範圍外にあり。されど斯かる者をも文學といふとならば子の勝手なり。外人之を如何ともする能はず。只ゞ吾等のいふ文學と性質を異にするといふことを明言して置くに止めん。

「優美天地を撼かす」といふ語少と變な語なれども其意を察するに優美なる事をいふならん。支那の語にて優美なる詩が天地を撼かすとはいふまじと思へどそれも言葉の爲めに類すれば言はず。只特に優とか艷とかいふ字をこゝに出だしたるはかりそめの思ひつきなるべきも和歌の素風を自ら現したる者なり。歌よみは歌を優美に詠めよといふ、甚しきは優美ならざるは歌にあらずと迄いふ者もあり。是れ歌の腐敗したる一原因なり。吾等をして言はしめば歌を詠むには優美にも詠め雄壯にも詠め古雅にも詠め奇警にも詠め莊重にも詠め輕快にも詠めといはんとす。こゝに用ゐし語は深き意味なしとするも歌が一概に優とか艷とかいふことを離るゝ能はざりしは事實なり。

「和歌は人を鼓舞して忠誠を貫かしめ人を勵まして孝貞を竭くさしめ」云々「貴遊に花を賞し月を愛で春遊に思を遣り風月に心を寄する」云々の數行文意も曖昧に議論も變なり。和歌が人を鼓舞し云々したる事もたまにはありしかも知らず、されどそは文學に多くあることにあらず。況して和歌の如く無氣力なる者に於てありさうにも無き事なり。「無味の感念」などいふ語奇妙な語にして一寸解しかぬれど何だか花鳥を愛するを謂ひたる者の如し。吾等は花月を賞する上には趣味多し教訓的の事には趣味少しといふ説なれば兎に角大反對なり。

(四月一日)

六、

「和歌は和歌として獨立し」などゝは譯の分らぬ言葉なり。「俳句は俳句として獨立し」ともいふべきにあらずや。獨立とは他國文學の影響を受けぬといふことか知らねど和歌に漢語を用ふるは前にも言へるが如し。思想の上にも多少漢學佛教の影響を受けたるは事實なり。それでも猶日本固有の處があるとの意味かも知れねど其固有の處が極めて價値無き者ならばなか／＼にはづかしくて獨立などゝいへた義理に非ざるべし。維新前後の歌などに殘つて居る日本固有の部分は其價値無き者ならんと思ふなり。

「又、讀者をして新思想を抱かしめ知らず識らず舊思想を嫌惡否定するに至らしむるの用意なかる可らず」とは手段の緩慢をいへるなり。吾

等は必ずしも「知らず識らず」的の緩手段をのみ取らんとは思はず。知りて改むる人もあるべしと信ずるを以てなり。

外國の文學思想を輸入すべしといふ事外國の文學を剽竊せよといふにあらず。剽竊にあらずして輸入する事歌人の腕次第なり。外國文學より得たる思想にても日本歌人の腦中に入りてそれが歌となりて再び出づる時は其思想は日本化せられ居らざるべからず。既に日本化せられたる者は日本の思想なり。天眞の櫻花の人造の薔薇のといふ譬喩はかたはらいたし。櫻花をのみ無上にありがたがりて外の花の美を知らぬ人とは共に美術文學を語り難し。

或る人(秋田縣樺園子)曰く萬葉の歌は十中八九迄世道人心に關係あれば善し。古今以後の歌は徒に月を賞し花を玩ぶ。故に取らず。云々。

答へて曰く此の如き事は前にも度々言ひたれば今更繰り返すもと思へど猶少しいふべし。歌は世道人心に關係ある故善きにあらず。世道人心に關する歌にて善きもあり惡きもあり。歌は花月を弄びたるがために惡きにあらず。花月を弄びたる歌にて善きもあり惡きもあり。萬葉の中には「田子の浦ゆうちいでゝ見れば眞白にそ不盡の高嶺に雪はふりける」「わかの浦に汐滿ちくれば潟をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる」などゝいふ歌ありて人も名歌とし吾等も然か思へり。されど此等は世道人心に何等の關係も無きなり。善を勸め惡を懲らし人を教へ人を導くは道歌に如く者あるまじ。されど道歌なる者は總じてつまらぬ者なり。

又萬葉集を評して歌は國家治教の道なるより當時の人は思の儘を述べたる者なり などいへるは一文章の內既に撞著あり。國家治教とかを目的として歌詠まんには思の儘には詠まれぬ譯なり。思の儘に歌詠みたらんには國家治教などいへる事に關係無き歌も出來る譯なり。實にや萬葉時代の人は思の儘を詠みたればこそ國家治教などゝは似てもつかぬ歌を多く詠みいでたるなり。

一般にいへば歌は倫理的善惡の外に立つ處に妙味はあるなり。俗世間の渦卷く塵を雲の上で見て居る處に妙味はあるなり。倫理は徒に善を勸め徒に惡を懲らす傍に在りて歌は善とも惡ともいはず只々此の如く愉快に此の如く平和なる場所あることを默示するなり。世間は名利に迷ひ煩惱に苦しめられ掌大の土地の上に氣違ひの如く狂ひまはるを歌人は獨り之を餘所に見て一花に遊び月に戯れ無限の天地に清淨の空氣を吸ひ居るなり。彼俗人だちが歌を善惡の間、俗界の中に求むるは抑々誤れり。（四月二日）

七

「ものゝふの八十氏川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも」の歌を前に八田などの歌と共に舉げてかにかくと論ひしかば八田などの歌と同じさまに誹りたりと思はれたるにや之を難ずる人多し。此歌を八田などの歌と同じ樣に見たるにあらざることは其時の文にも記し置きたれど言葉足らざれば意通ぜざりけん。故に今改めて彼歌を例に引きたる譯を申すべし。

世の歌よみに萬葉集を崇拜する人あり、古今集を崇拜する人あり。いづれも一得一失はあるべけれど大體の上よりは吾等は萬葉集崇拜の方に贊成するなり。併し萬葉集崇拜家なる者は多く萬葉の區域(否、寧ろ萬葉集の或る部分)を固守して一歩も其外に越えざるを以て歌に入るべき事物材料極めて少く、ために吾人が感得する諸種の美を現すこと能はず。是れ吾等が萬葉崇拜家に不滿を抱く所なり。故に萬葉崇拜家が常に手本として示す所の「ものゝふの の歌を取りてことさらに云々したるなり。

美に簡單なる美あり、複雜なる美あり。世の文學者或は複雜のみを以て美となす。吾等取らず。人或は吾等を以て複雜の美をのみ好むと爲す。是れ誤解なり。吾等は簡單の美をも好み複雜の美をも好む。然れども簡單の美を詠みたる歌は複雜の美を詠みたる歌の如く多く出來ざる事は數に於て明なり。例へばこゝに十箇の材料ありとせんに之を一首に一個づゝ用ゐて歌を作りなば十首を得るのみなれど二個づゝを用ふれば九十首を得べく、三個づゝを用ふれば九百首を得べく、四個づゝを用ふれば九千首を得べき割合なり。且つ簡單なる美には趣味の少き物を詠むに不可なれども複雜なる者には趣味の少き物も趣味多き物と配合して用ゐ得る場合多し。又趣味の無き者と有る者とをことさらに並べて反映せしむる事もあるべし。かた〴〵以て複雜的の者は多く出來得て、簡單的の者は多く出來得べからざる理なり。然るに和歌なる者は古今以後常に簡單の美をのみ現さんと努めたる爲め一首に重複又重複、陳腐又陳腐となり了りたり。是れ歌の陳腐に流れたる一大原因なり。

「もの〻ふの」の歌たけ高く詠まれたる由は前にもいへり。吾等は人丸集中に此たけ高き歌あるを喜ぶなり、萬葉集中に此たけ高き歌あるを喜ぶなり、日本文學の中に此たけ高き歌あるを喜ぶなり。然れども此歌は趣向の最簡單なる者なり。簡單に傾きたる和歌の中にても殊に簡單なる者なり。其たけ高きも此簡單なる處にある者なれどさて之を手本として歌を作らんにはさらでも陳腐なる歌のいよ〳〵陳腐ならん事を恐るゝなり。此歌の如き調に傚ひたるは後世にありては戀歌に最も多し。

ほとゝぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな

吉野川いは波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

春日野の雪間を分けて生ひ出づる草のはつかに見えし君かも

の如きを初としてどの集にもこの集にも此の如き詠み方の戀歌は澤山に見ゆる故に吾等が見ると同じ歌を幾度も繰返して出したかと思ふ許りに陳腐となれり。但しこゝに注意し置きたきは吾等が今論じつゝあるは陳腐と否との論にして雅俗の論にあらずといふ事なり。若し雅俗の點よりいはゞ此種の歌は歌の中の雅なる者に屬し殊に戀歌の中の雅なる者に屬す。戀歌には俗なる者理窟つぽき者多き中に此種の戀歌は俗を脱し理窟を離る、右に擧げたる三首の如きは寧ろ戀歌中の佳作なるべし。されど陳腐と否との點よりいはゞ古今集時代即ち右に擧げたる歌の如きはいまだ陳腐ならず後世に至るに從ひ此種の歌漸々陳腐なるはあらず。吾等の歌を作するには第一に俗なる者は俗として之を斥け第二に俗ならざる者の中にても陳腐なる者は陳腐として之を斥く。こゝに論ずる者は陳腐の一點に在り。(名所としての「もの〻ふの」の歌は次に論ぜん)

(四月四日)

八

「もの〻ふの八十氏川の網代木に」の歌に名所の特色を現さずといふ事に就きて或る人難じて曰く、網代は宇治田上に限りたる者なれば特色無きに非ずと。網代が宇治の特色なることは吾等も知れり。されど此歌は宇治川も網代木も皆宇治川網代木其物を現さんとの意にはあらで單に下二句の意匠を引き出すための道具に過ぎされば名所の歌の手本にすべきに非ずといへるなり。言はゞ「山川のゐくひにかゝる白波のゆくへも知らぬ」といひても隅田川の百本杭といひても善き樣なる處なれば此歌を以て宇治川を詠じたる者とはなし難し。

或る人曰く此の歌の初三句意味無しとはいふべからず、「ものゝふの」とある故下二句に利くなりと。それはさる事もあるべし。さりながら「ものゝふの八十氏」といふ意味の語、初に無くとも猶此歌は善く聞ゆるにやと覺ゆ。如何や。

或る人曰く名所の特色いちじるく現れ居らずとも其名所を過ぎて詠みたる歌ならば差支なかるべしと。此説には異論無し。只ゝ名所の特色無き歌を名所の歌の手本として人に敎ふるの不可なるをいへるなり。此「ものゝふの」の歌の如きは名所の歌としては寧ろ變例に屬す。因みにいふ名所といふ事に就ては古來歌よみは大なる謬見を抱き居たり。昔の歌よみは所謂名所よみ込なる者を一度も見ずしていい加減に歌に詠み込む者なれば其名所の歌といふも多くは其地の特色を現したる者に非ず。只古歌に據りてどこそこは千鳥の名所なりどこそこは山吹の名所なりといふに過ぎず。されば其地に千鳥が啼かずとも其地に山吹が咲かずとも固よりそれらに頓着あるべくもあらず、甚だしきは有るか無きか分らぬやうな名所を平氣に用ゐて澄まして居たるのんきさ加減は驚き入りたる次第といふべし。尤も主觀的の歌の場合に名所を用ふるは知らぬ處にても差支なかるべけれど、苟も客觀的に詠む場合即ち景色を詠む場合には其地を知らざれば到底善き歌にはなるまじ、或は古歌古書に據り或は人傳に聞き或は繪畫寫眞にて其地の大概を知りたる後之を歌に詠む事は無きにあらねど、それすら常にする事にあらず。それを京都の外一歩も踏み出さぬ公卿たちが歌人は坐ながらに名所を知るなどと稱して名所の歌を詠むに至りては亂暴も亦極まれり。此の如きは古今以後和歌が堂上にのみ行はれたる弊にして、和歌が堂上に盛なりし一事は名所の歌のみならず總ての歌を腐敗せしむる一原因とはなれり。されどこは公卿の罪にあらずして寧ろ在野の人の罪なり。在滿等が和歌は堂上の專有物に非ずと大呼する迄は在野の歌よみは皆堂上方に屈伏して自分を輕蔑し居たりしなり。眞淵在滿など出でてより後和歌の權は公卿の手を離れたるも其弊習は猶全く之を拂ひ去る能はず。蒿蹊が勝地吐懷篇の凡例の下に「はた地理は知らでもよみうたにさはりなしといふは世の常なれどたとへば或る名所集辛崎の條下に朝妻讀合とばかりかけるをみていとまぢかき所のやうに讀みし人あり辛崎は比叡の東阪本にて志賀郡淺妻は坂田郡か湖を中に隔てあはひ十里餘やあらん」云々と書けるは殆分か空想的名所歌の弊を看破したるには相違なけれど、さりとて名所を知るは吾等の要無からしめんがためのみにはあらざるべし。要無しとて特色無ければ名所の歌にはあらじ。

附けていふ、前篇に歌の數を計算する度に錯列法を用ゐしは吾等の考へ謬りたるなり。改めて順列法に因りたる計算を記さんに、二箇づゝを用ゐたる歌の數は四十五首、三箇づゝを用ふれば百五十首、四箇づゝを用ふれば二百七十五首となるなり。

（四月十日）

九

或る人曰く子の歌は子の歌にてやるか善けれど一々古歌を打ち毀すは不服なり。云々。

答へて曰く「舊思想を破壞し盡し」など前に言ひし故或は誤解を來せしかも知らず。此の舊思想といふは古今集以後今日迄に行はるゝ理窟ッぽき思想、陳腐なる趣向などを指したるにて總ての古歌の想を否みたるにあらず、吾等が作る所の歌、固より歌の一部分と見ても宜しく、半分と見ても宜しく、此等の外に萬葉調の歌にて善き者も出來べく古今調の歌にて善き者も出來べく將た古人の調にもあらず吾等の調にもあらざる一種の新調にて善き歌も出來べく、決して吾

等の歌に非ざれば歌に非ずなどゝいふ狹い了見は少しも持たず。併し古人の歌でも名家の作でも理窟ッぽき思想、陳腐なる趣向は飽く迄批難を試みるべし。

或人曰く古來、歌といひ來りたるは子の作る所の如き者に非ず。されば子の作る所は一種特別の者なれば歌といはずに何とか外の名を用ゐては如何。云々。

答へて曰く面白き事を承る者かな。吾等は歌といふ語を拜借しても宜しからんとの考にて歌と言ひ來りたるもそれが惡しとならば如何にも名づけ給はるべし。俳諧歌となりと狂歌となりと味噌となりと糞となりと思ふやうに名づけられて苦しからず。吾等は名稱などに拘らざるなり。されど言葉の遊びを主とする古今集の俳諧歌と趣味を重んずる吾等の作とは根柢に於て同じからざるを忘れたまふな。地ぐちシャレを喜ぶ所謂狂歌と地ぐちシャレを擯斥する吾等の作と立脚地を異にする事を忘れたまふな。それを承知の上でなら何とでも名づけ給はるべし。

或る人曰く吾々が梅が香を鼻に感ずる上はそれを歌に詠まれぬ理はあるまじ。云々

答へて曰く固より梅が香を歌に詠まれぬといふ譯は少しも無けれど餘り陳腐なる詠多き故前に陳言を放ちたるなり。趣味あるやうに陳腐ならぬやうに詠まば梅が香も好題目なるべし。

或る人曰く漢語にても俗語にても構はず用ふる事になれば無學なる者が飛んでも無い歌をうなり出すやうな弊害を生ぜざるか。

答へて曰く弊害迄を考へらるゝは餘程親切な考なれども吾等はそんな事を考へずとも善かるべしと思ふ。弊害は固より起るべし。僅に一ケ月を過ぎたる今日にてすら飛んでも無い見當違ひの歌はいくらも吾等の几邊に飛び來るを見る。されど弊害は何處にもある事なり。從來の如く歌を詠むには多少古語を學ばざるべからざる時代に於ては如何。歌よみは文法だの語格だの詠み方だのとから威張に威張りひた拘りに拘りて無趣味なる陳腐なる歌のみを作りしにあらずや。漢語や俗語を用ゐてそれで善き歌を作り得べしとの見込あらば何處迄もそれを用ふることを勸むるが當然ならん。飛んでも無い歌が出て來たらば飛んでもない歌として斥けんのみ。

或る人曰く眞淵を許して存外萬葉の分らぬなどゝは片腹痛し。萬葉を崇拜しても萬葉を摸せざる所が眞淵の眞淵たる所以なり。云々。

答へて曰くこれも贔屓の引き倒しには非ざるか。眞淵が萬葉以外に一派を立てた一派といひ得べきか否か知らず。のはえらしとするも其一派なる者が萬葉より劣りたる者ならんには何の取得かあるべき。吾等は眞淵の歌は萬葉に劣れりと信ず。寧ろ萬葉を模倣したらば最ちつと善き歌を得たらんかと思ふなり。故に彼は萬葉の味を解せざりしかと疑ひしなり。右は短歌の上なれど長歌に至りては眞淵は萬葉を摸したり。從つて其値打短歌の上に在りと吾等は思ふ。難者の如きは眞淵の長歌を以て短歌に劣れりとなすにやあらん。然らば吾等とは全く見樣を異にするなり。　（四月十二日）

＋

或る人（玄龍子）曰く盛唐の詩集と蕪村派の句集とを並べいふことの不倫と申したるは勝劣の心にはこれなく、につかはしからず類せずなむとの意にて比較其當を得ざるなり、詩形とやらむ規模とやらむ技倆とやらむを云々するに非ず（略）おのれは晩唐諸家の文字に近きやと臆氣ながら見受け申候、不倫と申すこと要は蕪村一人の什を盛唐幾多の作家と比擬すること及び晩唐の方には却て比擬すべき作家あらむと思ひ、云々。

答へて曰く、吾等は蕪村の句を以て盛唐諸家の作に似たりといひし事なし。「蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か讀ませたく」といひしのみ。斯くいひし意は今の無趣味にして字句のたるみたる俳諧を救はんには蕪村派の俳句集を讀むが善かるべしとの考にて、特に蕪村派の俳句を擧げたるは其の最も趣味に富み字句しまり居る點に於て他派の俳句に勝るを以てなり。其盛唐の詩集といひたるも亦其趣味に富み字句しまり居るがためなり。されど蕪村派の俳句の趣味と盛唐の詩の趣味と同じといふにはあらず、蕪村派の俳句のしまり工合と盛唐の詩のしまり工合と同じといふには非るなり。又蕪村の俳句は寧ろ晩唐に類似を見るとの說も當らず。蕪村と似たる詩人を求むるに殆ど似よりたる者を見ず。若し蕪村時代の俳句界に似たる者を求むれば清初の詩界最も之れに近かるべし。諸家輩出せし處、詩想の精細になり婉麗になりながら俗に墮ちざりし處など稍〻相似たり、されど蕪村を以て清初の誰に比すべきかと問はゞ似たる者を見出だす能はず。

或る人(稻城子)曰く、詩聖ホーマーの如きも單に美を愛せりとするか、美にして善なるものを愛せしにあらざるか、云々。

答へて曰く、美にして善なるも善し。美にして善惡の外に立ちたるも善し。吾等はホーマーの詩を知らず、果してホーマーの詩は終始「善」を離れざるか。ホーマーの詩「善」を離れずとするも吾等はホーマーに倣はんと思はず、吾等は善惡の外に美を認むればなり。吾等はプラトーが眞善美とやらを說いたからとてそれに從はざるべからずとは思はず。吾等の美と信ずる所はホーマーもプラトーも如何ともする能はざるなり。

附けていふ。此等の事を嚴密に論せんとならば少くとも「善」の字の定義を定めざるべからず。若し天下の事物を盡く善惡の二に分つといふが如き論ならば格別、普通に用ふるが如き、善惡は人間の行爲を評するの語とせば天然物は善惡の外に立つ者なり。天然物既に善惡の外にあらば天然物を詠む詩歌にして善惡以外に立つ者多きは當然の事なり。西洋の詩は東洋の詩に比して天然を詠ずる事少き故に西洋人の論には善と美とを一つにするやうの事をいふ者多きにやあらん。西洋人の論なりとて一も二も無く崇拜するは固より愚者の事、論ずるに足らず。況んや西洋とて盡く同一の論のみには非るをや。

或る人問ひて曰く、足下の理窟として排斥するものは此の善なるべし、然らば足下は此の倫理的の思想を棄てゝ美の一方より歌をよむべしと強ふるものなり、吾人の感情をすてゝ自然に美を求めよと敎ふるものなり、然らば吾人歌を詠まんとして先づ詠むべき趣向を考へざるべからず、云々。

答へて曰く、何等の誤解ぞ、何等の愚論ぞ。吾等の理窟とする所は前に屢〻いへり、今更理窟と善とを一つにするとは呆れ返りたり。吾等の美とする所は倫理的善惡に拘はらず。故に美は善惡の外にありても多く存在す、されど美にして善なる者無しといふに非ず。善なる者は美に非ずといふに非ず。何が故に善を排斥すといふか、少しにても善を排斥せんとしたることあらず。排斥せんとするは美ならざる者のみ。縱令「善」なりとも美ならずんば固より之を排斥するなり。「倫理的の思想を棄てゝ美の一方より歌をよむべし」とは半ば吾等の意を獲たり。但し「強ふる」にはあらず。美の感じ無き者に歌を詠めとはいはぬなり。「吾人の感情を捨てゝ自然の美を求めよと敎ふ」とは譯の分らぬ言葉なり。自然の美を感ずるも感情なり。感情を捨てゝ自然の美を求むべきやうなし。或は「倫理的感

情を捨てゝの意か。それにしても自然の美を求めよ」といふは猶謬れり。吾等は自然の美をのみ取りて人事の美を捨つる者に非ざるなり。

（四月十七日）

十一

或る人（春園子）曰く意匠即調と云ふ意味を解し得ざるが如き、云々。

（駿臺小隱に代りて）答へて曰く調といふ語は古來種々の意義に用ゐ來れりといへども意匠といふ語と同じ意義に用ゐたる例はあるまじ。調は寧ろ意匠に關係無き音調といふが適當なり。其音調といふ事が縱し意匠と幾何かの關係ありとするもそは意匠の極小部分との關係なるべく、決して意匠即調といふを得ず。意匠は同じことにても言ひやうによりて調の高くなる事も卑くなる事もあるなり。

或る人（同）曰く文學豈獨り階級あるを免れ得んや（略）畫に於ては本畫と浮世畫、詩に於ては歌と俳句と皆是同じく社會に必要なる美術文學なり、而して又其間各〻品格の差ありたるは覺るべからざる事實ならずや。（略）馬糞を詠み焼芋を詠みたる[illegible]は縱令文學としては貴重すとも其品格は遂に高貴なる精神を養ふに適せざるが如し、云々。

答へて曰く文學美術にも品格の差ありといふことは吾等に異論無し。品格の高きといふことは普通に事物のゆるやかなる逼らざるやうな事をいふ。卅一字の方が品格善しといはゞ先づ可なり。馬糞を詠み焼芋を詠みたる俳句云々といふを以て俳句の品格を論ぜんとするは謬れり。馬糞焼芋を詠みたる俳句の下品なるは俳句其物の下品なるにあらずして馬糞焼芋の下品なるが爲なり。卅一字歌を如何に上品とするも馬糞焼芋を詠みたらば下品なること俳句に劣るまじ。又和歌は俳句に比して上品なりといふも極大體の比較にして實際一首一句の品格は其意匠材料音調の上に係る者多し。歌の下品なる者と俳句の上品なる者とを比較すれば俳句は歌よりも上品なり。世人俳句を知らず、俗間傳ふる所の俗宗匠の句を以て俳句と爲す、故に無下に下品なる者とのみ思ふなるべし。試に芭蕉時代蕪村時代の俳句を讀め、必ずや思ひ半に過ぎん。又文學の階級といふ語は不穩當なり。上品下品の意ならば品格の高下なといふべし。文學の階級といはゞ品格のみを標準とすべきに非ず。（高貴なる精神を養ふに適せずとは解し難し。思ふに筆誤らざる者ならん）

或る人（同）曰く俳句は下級にある丈不自由も少く範圍も廣きは理の當に然るべき所にして感化力を社會の下層にまで及ぼさんとの必要は品格を下したる所以ならずんばあらず、云々。

答へて曰く是れ亦同じ謬に陷れり。されど其の事は前に辯じ置きたれば言はず。感化力を社會の下層にまで及ぼさんとの必要は品格を下したりとはいたく謬れり、俗宗匠が附點選抜を以て餬口となさんとするには感化力を下等社會に及ぼすの必要あるかも知らず。芭蕉蕪村等が俳句を作るに種々の俗語漢語を用ゐ新材料を用ゐて自由に詠みたりとてそは下等社會を感化せんとにもあらず、又自ら下等社會の人間なるが故に俳句を作るといふにもあらず。俳句を作るは俳句の美を感じたるが故なり。俗語漢語新材料を用ふるは俗語漢語新材料の美を感じたるが故なり。下等社會と何等の關係も無きなり。歌よみは世間知らずにて何でも和歌を本尊に立つる故僻見多し。和歌が堂上にのみ行はれたるが如きは文學界の變象なれども歌よみはそれを平常と心得たるにやあらん。和歌は長く上等社會にのみ行はれたるが爲に腐敗し、俳句は兎角下等社會に行はれ易かりしため腐敗せり。吾等は和歌俳句の堂上に行はるゝを

望まず、和歌俳句の俗語にて作らるゝを望まず。和歌俳句は長く又學者の間に作らるゝ事を望むなり。

（四月二十七日）

十二

或る人（春園子）曰く、歌は俳句の長き物なり、俳句は歌の短き者なり、三十一文字なるが故に歌にして十七文字なるが故に俳句なりと思ひ誤り、詩形即ち字句の外に各々異なれる所あることを知らざるの徒輩到底共に詩を談ずるに足らざるなり、云々。

答へて曰く、歌俳句兩者は必要上其內容を異にしたりとの論の妄なることは既に之を言へり、されば歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと言ふて何の故障も見ず、歌と俳句とは只々詩形を異にするのみ。然れども論者の論の因る所を思ふに今迄の歌と俳句とが上品下品の差別ありとするに基因せるならん。成程大體に於て歌は俳句よりも上品なるべけれど、論者の思へるが如くは歌も上品ならず、俳句も下品ならざるなり。論者は前に糞、褌等といふ例を擧げたれど、糞等の句は古俳書に見當らず、糞小便の句は其角蕪村などに一二句あるのみ。決して俳句に多き者といふべからず。却つて歌の上に此等下品の材料ありやなしやと見るに矢張之れ有るを見る。しかも論者の崇拜する萬葉集には糞、褌などを詠み込みたる歌あるにあらずや。上品下品といはゞ糞も褌も下品なるには相違なけれど、さりとて歌の可否を言はゞ萬葉集の中にも此糞や褌の歌にも似たる歌あげて數ふべからず、況んや萬葉以外の歌をや。そはともかくに糞の歌も厠の歌も犢鼻褌の歌も屁の歌も古昔の歌も歌として書に載せられ居る事實は爭ふべきにあらず。歌必ずしも盡く上品ならんや。

或る人同曰く歌は歌ふといふことを旨として調ぶべき事是亦古人は韻律の歌に依て顯する者なり云々、萬葉の歌は言葉を練り品格高く調ぶるを專らとし之を第一義となし思ひを述ぶると云ふ方は第二義となしたる者ぞ、是歌ふ者なればなり、然るに世くだつていつしか此の定義は廢れけり、故に後世の歌は專ら思を述ぶると云ふ方に傾きて言葉調などいふ事は思を述ぶる材料に過ぎざるやうに成りゆきて歌は長く衰へにけり、云々。

答へて曰くこは大間違なり。歌の歌ふべきことはいふ迄もなし。古の歌を歌ひしのみならず今の歌も歌ふなり。日本の歌を歌ふのみならず支那西洋其他あらゆる國の詩は皆歌ふなり。歌ふ者なればこそ五言六言七言などそれぞれの調子もあれ、歌はざる者ならば何しに字に平仄を合すべき。然るに古の歌は歌ひて今の歌は歌はずと思へるは間違なり。但歌ふ調子は古と今と異なるべし、同時代にても人によりて異なるべし。調子の事は他日詳論すべし。又萬葉は調又は言葉を主とし後世の歌は想を主とするといへるも間違なり。萬葉の歌に想を主とせる歌少からず、古今萬葉の歌は思ふ儘を詠みたるが多きなり。萬葉の調の高きは多少練磨の功無きに非ざるも寧ろ當時の人いまだ後世の如き卑調を知らず、只々思ふ儘に詠みたるからに却て調の高きを致しゝならん。古今集以後に至りては詩想なる者漸く陳腐に歸し只々言葉の言ひかたの言ひまはしをのみつとめて無意味の歌を作れり。即ち言葉を練るといふ事は萬葉時代よりも多くして想の方は萬葉時代程に變化せざりしなり。論者の論あべこべなり。

或る人同曰く漢土に於ても詩と歌とは截然定義を異にし詩は志を述べ歌は言を永うすと云へるなり、然るに何事ぞや其の志を述ぶるを定義とせる詩に訓して唐歌といひたるは是れやがて歌ふを旨とするたる我國の歌を謬りて

漢土の詩と同じく志を述ぶるものとなせるなり、云々。

答へて曰くあまりの事に答へんすべも知らず。論者は支那の「詩」と支那の「歌」と如何なる差異ありとするか、日本の「ウタ」と支那の「歌」と如何なる類似ありとするか。支那の「詩」は志を述ぶるのみにて歌ふ者にあらずとするか、日本の「ウタ」は歌ふ者にして「心を種と」する者にあらずとするか。歌はぬ「詩」、心から出ぬ「ウタ」が世の中に成り立つべしとするか。明治の世に生れて斯かる言をいはるゝやうではチト頼もしからぬなり。今少し奮發して勉強せられては如何。「歌」の字の事はこゝに辯ずる迄も無し、宣長の石上私淑言を見るべし。

或る人(同)曰く歌ふを旨とすると思を述ぶるを旨とするとは詠詩に於ても詩形に於ても自ら其の趣を異にすべきは當然の理義なるが故に、云々。

答へて曰く前にもいふ通り歌はぬ歌も無く思を述べぬ歌もなければ兩者は全く一致して分つべき者にあらず。若し兩者其一を缺けば歌とは言はぬなり。されば特に歌ふを主とすといふ歌も無く思を主とすといふ歌も無き筈なり。但世人は緩く歌ふを指して歌ふといひ詩想複雜にして音調亦變化するを指して思を主とすといふにやあらん。

(五月三日)

十三

或る人(鳴雪氏)曰く和歌が古來より人を感動せしめたる例少しとの說は誤れり。和歌が人を感動せしめたる例枚擧に遑あらず。或は一首の和歌のために命を助かり領土を歸されしなどを始めとし屢々猛きものゝふを動かしたること歷史傳說の上に詳なり。子が其例少しといふは子自ら感動する歌少しとの事なるべし。云々。

答へて曰く誠にしかなり。古來人を感動せしめたる例はいくらもあれど其の歌が餘りつまらぬ歌にて歌といふ名を與ふるさへいかゞと思ふばかりなればそれ等をば余の考の中へ入れざりしなり。余の考の中に入るべき歌にて人を感動せしめたる例を尋ぬるも一寸思ひあたらざりける故例少しと言ひ放したる者にて餘り粗漏なる書き樣にぞありし。總て和歌俳句詩などが人を感動せしむる事は必ずしも其和歌などの善きがために非ずして相手(感動する人)と其の場合とに因る者なり。相手が極めて趣味低き者ならんには趣味低き歌は之を感動せしむる事あるべきも趣味高き歌は却て之を感動せしむる能はず。所謂大聲は俚耳に入らざるなり。猛きものゝふの心を和げなどいへど猛きものゝふといふ者多くは趣味卑き者なれば彼等を感動せしめたりといふ歌は趣味卑く取るにも足らぬぞ多き。又其歌は歌として取るに足らず從つて其歌の善きに感じたるに非ざるも、其作者が意外に歌など作りしといふ事或は其歌が其場合に善く適合せりといふ事のために人を感ぜしむる者あり。例へば小式部內侍が大江山の歌の如く歌としてそれ程の値打も無けれど、歌を得作らじと思ひし人の即座に作りしと其歌が其場合に善く適合したりとのために人を驚かしたりと覺ゆ。又太田道灌が歌を作りて「斯る言葉の花もありけり」と譽められたるが如き歌の善き事が人を感ぜしめたるよりも寧ろ意外の人が歌詠みたりとの一事は人を驚かしたる者ありしなるべし。貞任の連歌に義家がそを追はずなりたりといふ事宗任が梅の花の歌を詠みて公卿達を驚かしたりといふ事抔事實の有無は疑はしけれど、若し此種類の事ありとせば前者はきはどき場合に能くつられたりといふ事に感じ、後者は思ひがけなき東夷の風流に感じたるに外ならじ。故に此の如き歌は後人の之を見るにも其場合を聯想

してこそ幾多の興味はあれ、單獨に歌として文學上より批評せば一文の價打も無き者比々是なり。されば人を感ぜしめたる歌は必ずしも善き歌に非ずして却て惡歌拙歌を多しとす。此等は歌人ならざる者の場合を除きても、歌人などが贈答送別の歌に感じたる例少からず。されどこも其歌が其場合に適切なるがために多く感じたるにやあらん。縱し其人は自ら感じたる歌を善き歌と思ひたりとも他の人必ずしもそを善しとは思はず。余等は傳説に存りたる一歌人の感じたりといふ歌を見て感動すること少く却て普通に知られざる歌にて非常の感動を生ぜしむる者多し。

以上述べたる場合、即ち或時或人に限りて感動したる場合を除き、何時にても誰にても感動する歌を見るに縱余は多く之を淺薄と認めざるを得ず。其例として最多數の日本人を感動せしむる力ありと信ずる。

しきしまのやまと心を人問はゞ朝日に
　匂ふ山櫻花

の歌を見るに余は毫も此歌に感動せられざるのみならず、なか／＼に淺薄拙劣なるを見る。全體の趣向も平凡なれども、斯く此趣向の平凡に聞ゆるは幾何か此の歌を見馴れ聞き馴れたるにも因るべければそは論ぜず。縱し平凡なる趣向なりとも調子高く歌ひなば却て高尚なる歌となるべきを、此歌はまた無下に拙くつらねたる者にぞある。其の大缺點は「人問はゞ」の一句にあり。上に「人問はゞ」とあらば、下に「と答へん」と置かざるべからず。「と答へん」の語無ければ「人問はゞ」の語、浮きて利かず、從ひて厭味を生ずるなり。されど天下多數の人が感動するは此平凡にして解し易き趣向と此厭味ある言葉(人問はゞ)の働きとにあるべく、宣長の作意も亦こゝに在るべし。宣長の詩趣の解し加減と、天下多數の人の詩趣の解し加減と恰も一致して此大喝采を博せり。大喝采的の作必ずしも可ならざるなり。余も曾て此歌に感じたる時代あり。されど數年間文學專攻の結果は余の愚鈍をして半歩一歩の進歩を爲さしめたりと信ず。少しく文字ある者は都々逸を以て俚野唾すべしとなす。しかも賤妓冶郎が手を拍つて一唱三歎する者は此の都々逸なり。苟も詩を作る者は雲井龍雄、西郷隆盛等の詩を以て淺薄露骨以て詩と稱するに足らずとなす。しかも書生が放吟し劍舞し快と呼び壯と呼び彼等をして怒髮天を衝かしむる者は西郷雲井等の詩ならざるべからず。稍〻美文を解する者は、山居士の妝刀の歌を以て細膩幽玄を取るに足らずとなす。しかも兵士が挺身肉薄敵城を乗り取らんとする時彼等の勇氣を鼓舞する者は拔刀隊一曲の歌ならざるべからず。大喝采的の作は概ね此の如し。彼等は平易にして趣味低きを要す、或る時は露骨に偏し或る時は一種厭味の裝飾を用ふるを要す。語を更へて言はゞ多數素人へのあてこみは少數玄人の最も厭忌する方法を取らざるべからず。玄人の婉曲にいへといふ處は之を露骨にいひ、玄人の露骨にいへといふ處は之に厭味ある形容抔を加へ、而して後にあてこみ的大喝采的の作は成る。是れ從來の大喝采的の作なり。故に余は寧ろ大喝采的の作といふ一事を以て其卑俗を證せんとす。然れどもこは過去の事實のみ。未來に於ても此の如くならざるべからざるか否かは疑問に屬す。若し文學的趣味を具有して大喝采を博する歌あらば之を以て彼非文學的の作に代へんこと蓋し歌人の職務なるべし。

（五月十二日）

（明治三十一年三月――五月）

歌の題

詩歌の題はもと一種の符號の爲にて便宜のために之を設くるのみ。されば詩經の詩、催馬樂の歌の如きは初より題あるにあらず。後人が編集上の便宜をはかりて其の詩歌の冒頭の語又は主なる一二語を取て題と爲しゝなり。故に題には殆ど意味無き者もあり。後世に至りて詩歌の作者自ら題を附することゝなり、從って題は一首の詩歌の大意又は要點を現す者となれり。されど往々にして題を設けかぬる場合には、冒頭の語を直に題と爲す事あり、さなくとも、偶成、口占、書懷、述懷、折にふれて、などいへる漠然たる題を設くる事少からず。中にも、無題、題しらず、などいふが如きは殆ど字を略きたりといふ迄にして題とは言はれざる程の事なり。此等は先づ詩歌成りて後に題を附する故に斯く漠然たる殆無意義の者なども出で來るにぞあらん。

然るに我國には種々の變化起りて、詩歌未だ作らざるに題先づ定めらるゝ事さへありければ今迄は便宜上の符號に過ぎざりし題に新しき意義を附するに至れり。兼題、課題、勅題、などいふ場合是なり。和歌にては歌合といふ事始まりしより後、兼題盛んに行はれ、殊に歌合にては其歌が題意に適合するや否やを嚴密に吟味し少しにても題意に違ふ所あれば之を負と定むる慣なりしかば、此風習は歌合以外の場合にも廣く行はれ、一個人として歌詠むにも自ら先づ題を設け、甚だしきは自ら定めたる題に自ら束縛せられて、其歌の題意に適するや否やをきびしく吟味し、歌と題と相かなはざる時は題を改めずして却て歌を改むるが如き愚を成すに至りたり。貫之が「やまと歌は人の心を種とし」といへる時代は斯る弊少し。其後先づ題に付て緣の字を求めよ。題をよく心得べきやう」「常磐木など申さば題にさゝへて常磐なりなどはよむべからず」「深雪などいふ題をえてふかしとよめらん心うかるべし」と言ひ、長明が無名抄の劈頭に、「歌は題の心をよく心得べき也」と説くに至りては全く題のために歌を詠む事となり了れり。題詠の弊害は既に其極點に達したるを見る。

題詠に非ざれば歌を作らず、歌を作るには必ず題を設くといふ事となれば歌に作らるべき材料題目は普通尋常の花、櫻、月、雪などいへる者に限られ、新しき事物は採用せられず、新しき風趣は發揮せられず、剰さへ題意及び古歌の例に拘泥し、勝負を爭ひ虛名を求むるを目的とするために語句の上にのみ巧を弄して、事物の眞、趣味の妙などは毫も之を顧みず、終には何の題には斯く詠め、何の語には何を用ゐよ、何には何、何は何、と全く之を狹隘なる區域に追ひ入れ、しかも之を祕傳といひ口傳と稱へて珍重するに至る。是に於て歌はいよいよ退歩するの一方となれり。是れ題に拘泥したるの弊なり。其弊今日に傳はりて猶改められんともせざるは數百年來の慣習の然らす所とは言へ、歌よみ達の無見識に驚かざるを得ず。

歌を作るは善き歌を作れば則ち足れり。其方法は必ずしも問ふを要せず。題詠にても善き歌を作るを得ば題詠亦惡きに非ず。されど所謂歌よみの如く題に拘泥しては到底佳作を得べしとも思はれず。題には成るべく其意義を廣くし、單に歌の符號として取扱はれん事を望むなり。

唯上の一項として分析、取捨、次第、探題、席題

などを寫し、或はことさらに難題を設けて技倆を競ふ事も面白かるべけれどそは文學以外に屬する所あるを以て論ずる限りにあらず。苟くも善き歌を作るを目的とせば難題なども題を意味の者を用ゐて極り窮屈なる題意を用ゐぬぞ善かるべき。雨夜聞落葉などいふ題は餘り狭くして題にならず、せめては夜聞落葉位にて廣くせざるべからず。新樹妨月といふ題も狭くして漸次變化すべからず。殊に妨ぐといふは擬人的の語にして通常の場合に用ふべきにあらず。新樹月などゝすべし。甚だしきは梅花先春などいふ理窟的の題を課するに至りては何の故とも知らず、歌よみ等は斯る題にて善き歌を作り得べしと思へるにや。題は完全なる意味を有すべからず。完全なる意味を有する題を課するは初より歌の趣向を定めあるに同じ。況んや梅花先春などいへる理窟的の意味あるをや。

余は寧ろ題を廢するの可なるを思ふ。特に端書を要する者の外、題を廢するに如かず。俳句には題無し。余等の歌を掲ぐるに題を附するは多く便宜の事のみ。故に紅梅と題する歌に白梅を併せ詠みたるもあるべし。杉と題する歌に雪の主眼となりたるもあるべし。固より題には意味無しと知れ。

（明治三十一年六月二十七日）

五七五七七

上

短歌の形は萬葉の時既に五七五七七と定まりて今日に至りて變らず。されど變らざるは單に形體の上に止まり、之を吟じ之を誦する調子は古と今といたく異なりたるが如し。今の人は多く短歌を吟ずるに之を五七五と七七との二段に分つ。故に五七五を上の句と稱し七七を下の句と稱し之を文字に現はすにも五七五を一行に書き七七を他の一行に書くを常とす。是れ所謂七五調に近き者なり。萬葉時代は然らず。

萬葉時代の長歌は五七の二句をいく度か繰り返し終りに七の一句を添ふ。短歌は長歌の最も短き形にして五七を二度繰り返し七の一句を添へたる者なり。長歌の調じやうは五七にて讀み切り、又五七にて讀み切り、どこ迄も五七五七と讀み切りし者とすれば、短歌も亦同じやうに五七にて讀み切りし者なるべし。萬葉時代の短歌が五七調に讀まれし事は言葉續きと句切とを見て知るべく、即ち文句が多く七言句の終りにて切れたる事と、初の五言句と其の次に來る七言句と密に接着する事とは五七調の證據なり。しかし長歌はともあれ短歌は僅かに三十餘字の短き者なれば五七調とはいへ、場合によりては初より終り迄一息に「のべつ調」に讀み下したる事もあるべく思はる。そをいかにといふに、萬葉の和歌には二句切（第二句の終りにて文句の切れたる者を二句切といふ、三句切も之に準ず）の歌も多けれど、それよりも句切無しに一直下に續きたる者最も多く、且つたまたまには、三句切の歌さへまじりたるは正しくは五七調には讀まざりし故ならん。若し嚴格なる五七調に讀みしならば三句切の歌は一層少かるべく、三句切の歌は殆ど作らざりしなるべし。例へば、

　ちはやぶる神のいがきも
　こえぬべし今はわが名の
　をしけくもなし　（萬葉卷十一）

の如き三句切の歌を五七調に讀まんはいと苦しければなり。又萬葉卷八に、

　尼作頭句幷大伴宿禰家持所誂尼
　續末句等和歌一首

と題して、

　佐保河の水をせきあげてうゑし田を　（尼作）
　かるはついひはひとりなるべし　（家持續）

と二人して詠める其頭句なる者が五七五の三句なるを見るも、短歌が五七調に吟ぜられし者にあらざる事知るべし。五七調に非ずとすれば「七五調」的の者なりしか、はた「のべつ調」なりしかといふに、其七五調にあらざるは三句切の歌の極めて少なきにても知るべく、普通に流行したるは必ずや「のべつ調」の外ならざるべきを信ず。

然るに歳移り世下るに及びて七五調漸く流行し、はては七五調に非ざれば殆ど調子を感ぜざる程になりしかば、之と反對の五七調は全く打破し盡され、「のべつ調」も次第に七五調を讚ずるに至りぬ。古今集時代には五七的の形を存する長歌は僅に存しながら調子は全く七五となり、短歌には三句切のもの多く其數も増加し來るを見る。下つて後撰に至り、拾遺に至り、後拾遺に至り、詞花に至り、七五調は一時代每に流行を加へ、千載新古今に至りて、三句切の無數に著しく多きを致したり。

萬葉及び八代集に就きて概算したる二句切の歌と三句切の歌との比例を示せば左の如し。

二句切の歌を一とし之に對する
三句切の歌の比例、

萬葉集 〇、二四(？)　古今集 〇、七九
後撰集 〇、八〇　拾遺集 一、一四
後拾遺集 一、三一　金葉集 一、二四
詞花集 一、六八　千載集 三、三九
新古今集 三、二六

千載新古今時代は今樣の如き七五的の詩形を有する歌の發生せし時代にて、之より後七五調は韻文を支配せしのみならず、散文の中亦往々此の調を插むに至れり。　（七月三十日）

下

上世の人は鈍く、のろく、氣長く、重々し。五七調の如き尻重き歌は其氣質に應じて起れり。後世の人は賢く、はしかく、氣短く、輕々し。七五調の如き尻輕き歌は其氣質に應じて起れり。

五七調は莊重なり、古雅なり、高揚にして迫らず、繰り返し〱吟ずる程にそゞろに哀を催す。七五調は輕快なり、雄壯なり、活潑にして弛まず、一唱して案を拍つの妙あり。五七は平和を詠ずるに適し、七五は變化を詠ずるに適す。靜かに樂み徐ろに失ふは五七にあり、手輕な足蹈るは七五にあり。

支那にても五言詩は古に盛にして、七言詩は後世に盛なり。蓋し五言は二と三とに分れて尻重き調なり。我五七調に當る。七言は四と三に分れて尻輕き調なり。我が七五調に當る。

短歌の第三句にて讀み切るは七五調にはあらず、されど七五調と趣を同じうする者なり。十七と十四との二に分つは七と五との二に分つに同じ。されば三句切の盛に行はれしは七五調に推移りしと同じ原因に出づといへども猶他に一の原因あり。

韻文とは多く或る一定の調子を繰り返すを常とす。支那にて五言の古詩といへば五言の句を幾度も繰り返し、五言律は八度繰り返し、五言絶句猶且つ四度繰り返す。七言亦同じ。我長歌も亦五七を幾度か繰り返す者、今樣すら七五を四度繰り返すなり。然るに短歌に至りては五七を僅に二度繰り返すのみ。それも五七を二度繰り返すのみならば、幾何か長歌の短き者として節づけて歌ふを得しなるべけれど、終りに七字一句を添へしためになか〱に五七調も歌ひにくき者とはなれり。例へば一首の短歌を

足引の山鳥の尾の
しだり尾のながながし夜を
ひとりかも寢む

の如く三段に切りて吟ぜんには繰り返しの度數餘り少きため終りの七字一句突然として調子拔けの心地して面白からず。又、

足引の山鳥の尾の
しだり尾のながながし夜をひとりかも寢む

と二段に切りて、吟ぜんには最早繰り返しは思らぬ者となり、而して此十二字と十九字との二段は餘り長短の差異著きため亦拍子拔けを免れず。されば「のべつ調」に從はんか、抑揚無く頓挫なく、何の變化もなく、單調に失するを如何せん。是に於て十七字と十四字との二段に分ちたる者起りて、「のべつ調」の單調にも墮ちず、十二と十九との不釣合にも倣はず、一種の異彩を放つに至れり。然れども此の如く讀み切る短歌は或る一定の調子を繰り返す者に非ずして異樣の調子を異樣に配合したる者なることを記憶せざるべからず。是れ實に我短歌の特色なり。支那にも西洋にも恐らくは類似を見ざるべし。

新古今以後七五調は益〻行はれ、短歌も又十七「十四」調いよ〱行はれたらんと見ゆれど、

いつの代にも二句切の歌は少からず詠まれたり。是れ一は單に古歌の側に傚ふ者なるべく、二には「のべつ調」はいつの代にも行はれたるに因るべく、三にはことさらに調子と句切と一致せぬ歌を作りて變化を求めしなるべし。凡そ調子の切れ目と文句の切れ目とは一致せざるべからざる者に非ず。只〻一致し易きのみ。萬葉時代の如く簡單にして眞率なる歌に於て殊に然りとす。且つ然らざるべからざる者あり。されど後世の如く思想複雜に文句亦曲折多き時は調子と句切と一致を要せざるのみならず、兩者ことさらに食ひ違ひたる所に味あり。支那の語は一字一意なれば他國の語と同様に論ずべきにあらず。西洋の詩の如きは一句の終りと一文章の終りと必ずしも一致せず、甚しきは連續したる助動詞と動詞とが句を異にするに至る。所謂句の獨立なる者を主張して歌の中の一句は前後に連續せざるべからずなどいふは通ぜざる議論のみ。

前に述べし如く五七調と七五調とは互に長所あり、只〻場合の宜しきに從ひて擇ぶべし。一概に優劣すべき者に非ず。短歌の「のべつ調」と「十七」「十四」の調との二に於ける亦然り。世に萬葉[illegible]なる者ありて三句切の歌を難ず。彼等は「のべつ調」を尚ぶ故に此論を爲すにやあらん。されど「十七」「十四」調は場合によりて「のべつ調」に勝る事ありとすれば三句切固より難ずべきに非ず。歌を作るの要は只〻面白くするにあり。二句切と三句切とは我が關する所に非ず、「のべつ調」と「十七」「十四」調とは我が關する所に非ざるなり。

世人は五七五七七の詩形を見て同じ短歌なりと思へり。然れども此同一詩形は人によりて二様の調子を爲すことを忘るべからず。若し調子を本として論じなば短歌に二種（「のべつ調」と「十七」「十四」調をいふ、他の調は流行せざるべし）ありと謂はざるべからず。

（七月三十一日）

（明治三十一年七月）

曙覧の歌

余の初めて歌を論ずる、或人余に勸めて、俊頼集、文雄集、曙覧集、を見よといふ。其斯くいふは三家の集が尋常歌集に異なる所あるを以てなり。先づ源俊頼の散木奇歌集を見て失望す。いくらかの珍しき語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらぬなり。次に井上文雄の調鶴集を見て亦失望す。これも物語などにありて普通の歌に用ゐざる語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらぬなり。最後に橘曙覧の志濃夫廼舍歌集を見て始めて其尋常の歌集に非ざるを知る。其歌、古今新古今の陳套に堕ちず、眞淵景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて、縱横に[illegible]する處、却て高雅蒼老些の俗氣を帯びず。殊に其題目が風月の虚飾を貴ばずして、直に自己の胸臆を攄く者、以て識見高邁、凡俗に超越する所あるを見るに足る。而して世人は俊頼と文雄を知りて、曙覧の名だに之を知らざるなり。

曙覧の事蹟及び性行に關しては未だ之を聞くを得ず。歌集にある所を以て之を推すに、福井邊の人、廣く古學を修め、殊に勤王の志を抱く。松平春嶽擧げて和歌の師とす。推奬最つとむ。然れども[illegible]が如く、常に陋屋の中に住んで世と容れず。古書堆裏獨り破几に凭りて古を稽へ道を樂しむ。詩歌の如きは固より其專攻せし所に非ざるべきも、胸中の不平は他に漏らすの方無く、凝りて三十一文字と爲りて現れし者なるべく、其歌が卑氣を脱して世に媚びざるはこれがためなり。彼自ら詠じて曰く

吾歌をよろこび涙こぼすらむ鬼のなく聲する夜の窓

燈火のもとに夜な〳〵來れ鬼我ひめ歌の限りきかせむ

人臭き人に聞する歌ならず鬼の夜ふけて來ばつげもせむ

凡人の耳にはいらじ天地のこゝろを妙に洩らすわがうた

何等の不平ぞ。何等の氣焔ぞ。彼は此歌に題して「戯れに」といひしといへども「戯れ」の戯れに非ざるは之を[illegible]之を知るべし。然るを[illegible]て「戯れに」と題せしはかゝる者、其裏面には[illegible]無限の悲憤を湛ふるを見るなり。嗚呼此不遇の人、不遇の歌。

彼と春嶽との關係と、彼が生前の[illegible]とは、春嶽自記の文に詳なり。其文に曰く、

橘曙覧の家にいたる詞

おのれにまさりて物しれる人は、高き賤しきを選ばず、常に逢見て事[illegible]、あるは物語を聞まほしくおもふを、けふは此頃にはめづらしく日影あたゝかに、久しき雪も[illegible]りてのどかなれば山里のけしきこよなかるべしと、巳の貝うつ頃より野遊に出たりき。[illegible]橋といふ所にいたる。中根師質、あれこそ曙覧の家なれといへるを聞て、俄にとはむと思ひたち[illegible]いさゝか庵の[illegible]ましけにてかこひも[illegible]に、そこかしこはらひもせぬにや塵ひぢ山をなせり。柴の門もなく、おぼつかなくも家にいりぬ。師質心せきたるさまして[illegible]の御[illegible]ぞと大聲にいへるに驚きて、あるじよりしてもの膝折ふせながらはひいで[illegible]、すこし廣き所に入りてみれば[illegible]は[illegible]ばかりなれども、風に[illegible]

八百ふみうづたかくのせて、人丸の御像などもあやしき厨子に入りてあり。おのれきもぬきかへて我が著るへりおりに似たる衣をきかへたり。此時扇一握を牛井保にたまひて曙覧にたびことゝ傳へたり。おのれいへらく、みましの屋の名をわらやといへるはふさはしからず、橘のえにしあれば忍ぶの屋とはふよりあらためよといへり。屋のきたなきことたとへむにものなし。しらみてふ蟲などもはひぬべくおもふばかりなり。かたちはかく貧しくみゆれど其心のみやびこそいと〳〵したはしけれ。おのれは富貴の身にして大廈高堂に居て何ひとつたらざることなけれど、むねに[illegible]のたくはへなく、心は寒く貧しくして曙覧におとる事更に言をまたねばおのづからうしろめたくて顔あからむ心地せられぬ。今より曙覧の歌のみならで其心のみやびをもしたひ學ばゝや、さらば賞の心の汚れたるを洗ひ浮世の外の月花を友とせむに、つきづきしかるべしかし。かくいふは参議正四位上大藏大輔源朝臣慶永元治二年[illegible]更[illegible]にしるす。

曙覧が清貧に處して[illegible]安んずるの樣、はた春嶽が富貴の身を以て能く人に下るの雅量は此文を見て能く知るを得ん。此知己あり。曙覧地下に瞑すべきなり。

曙覧が清貧の生涯は略ゝ此文に見えたるも、彼の衣食住の有樣、即ち生活の程度如何は其歌に因つて一層詳に知る事を得べし。其歌左に

人にかさかしたりけるに久しうかへさゞりければわらはしてとりにやりけるにもたせやりたる

山吹のみの一つたに無き宿はかさも二つはもたぬなりけり

其貧乏き狀態、我等にも覺えのある事なり。

かた土に[illegible]しきてつねに机するおくちひさき伏屋のうちに竹生いてゝ繁うつたりけるを其のまゝにしおきて

壁くゞる竹に肩する窓のうちみしろくたびにかれもえた[illegible]る

膝いるゝはかりもあらぬ草屋を竹にとられて身をすぼめをり

明治に生れたる我等は[illegible]赤貧しくなれ得てもあらず一草堂を「草の屋」と號せて「草花」を「草の花」と讀ますること、集中に少からず。讀書にはあらず

錢乏しかりける時

米の泉なほたらずけり歌をよみ文をつくりて賣りありけとも

彼が米代を儲け出す方法は此歌によりて稍ゝ推すべし。(「泉」は「ぜに」と讀むべし)

[illegible]氏の[illegible]人おこせおのか[illegible]れるをつくろはす來つる男のこまめやかなる[illegible]にて此わたりはさておよかめりとおのかいふところ〳〵をもゆるしなう机もなにもうはひとりてこなたかなたへうつしやるおのれは盗人の入たらん夜のこゝちしてうろたへつゝかたへなるところに身をちひさくなして此をの子のありさま見をる我なからをかしさねんしあへて

あるしをもこゝにかしこに追たてゝ壁ぬるをのこ[illegible]

歌の[illegible]、あるじの無學者とは此言葉の中にあらはれて其人其光景目前に見るが如し。

おのれすみか[illegible]うつり

かへけれといつこもいつこも家に井なきところのみにて甕して水汲みはこはする事もかきかそふれは廿年あまりの年をそへにけるあはれ今はめもやう〳〵老にたれはいつまてかかくてあらすへきとて貧しき中にもおもひわつらはるるあまりからうして井ほらせけるにいときよきか水あふれ出つさくもてくみとらるへきはかりおほうあるそいとうれしきいつはりなりけむ

しほならてあさなゆふなに汲む水もからき世なりとぬらす袖かなと

そゝろこといひけることのありしか今はこのぬれける袖もたちまちかわきぬへう思はるればこの新しき井の號を袖干井とつけて

濡しこし妹が袖干の井の水の涌出るはかりうれしかりける

家に婢僕無く、最合井遠くして、雪の朝、雨の夕の小言は我等も聞き馴れたり。

「獨樂唫」と題せる歌五十餘首あり。歌としては秀逸ならねど彼の性質、生活、嗜好などを知るには最便ある歌なり。其中に、

たのしみはあき米櫃に米いてき今一月はよしといふ時

たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましうましといひて食ふ時

など貧苦の樣を詠みたるものあり。

文人の貧に處るは普通の事にして、彼等が幾何か誇張的に其貧を文字に綴るも亦普通の事なり。而して其文字の中には胸裏に蟠る不平の反應として厭世的又は嘲俗的の語句を見るも亦普通の事なり。是れ貧に安んずる者に非ずして貧に悶ゆる者。曙覧果して貧に悶ゆる者か否か。再び之を其歌詠に徴せん。

余は思ふ、曙覧の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、貧曙覧が安心の度は一般貧文人の安心よりも更に堅固なりと。蓋し彼に不平無きに非るも其不平は國體の上に於ける大不平にして衣食住に關する小不平に非ず。自己を保護せずして却て自己を棄てたる俗世俗人に對してすら、彼は時に一二の罵詈を加ふる事無きにしもあらねど、多くは之を一笑に付し去りて必ずしも爭はざるが如し。「獨樂唫」の中に、

たのしみは木芽瀹して大きなる饅頭を一つほほばりしとき

たのしみはつねに好める焼豆腐うまく煮たてて食せけるとき

たのしみは小豆の飯の冷たるを茶漬てふ物になしてくふ時

多言するを須ゐず、此等の言が曙覧ならざる人の口より出で得べきか否かを考へ見よ。陽に清貧を樂しんで陰に不平を訴ふる彼所謂文人が「獨樂唫」といふ題目の下に集して饅頭焼豆腐の味を思ひ出すべきか。彼等は酒の池、肉の林と歌はずんば必ずや麥の飯、藜の羹と歌はん。饅頭、焼豆腐を取つてわざ〳〵之を三十一文字に綴る者、曙覧ありて始めて之れ有るべし。あら面白の饅頭、焼豆腐や。

安心の人に誇張あるべからず、不平の詩に虛飾あるべからず。余は更に進んで曙覧に一點の誇張虛飾無き事を證せん。例の兩非文人は曰く、黄金百萬兩は門前のくろ(犬)の糞の如しと。曙覧は曰く

たのしみは錢なくなりてわびをるに人の來りて錢くれし時

たのしみは物をかゝせて善き價惜みけもなく人のくれし時

曙覧は欺かざるなり。彼は錢を糞の如しとは言はず、あどけなくも彼は錢を貰ひし時のうれ

しさを歌ひ出だせり。猶正直にも彼は錢を多く費ひし時の思ひがけなきうれしさをも白狀せり。仙人の如き佛の如き子供の如き神の如き曙覽は余は理想界に於て之を見る、現實界の人間として殆ど承認する能はず。彼の心や無垢淸淨、彼の歌や玲瓏透徹。

貧、此の如し。高、此の如し。一たび之に接して畏敬の念を生じたる春嶽は之を聘せんとして侍臣をして命を傳へしめしも曙覽は辭して應ぜざりき。文を賣りて米乏しきを歎き、意外の報酬を得て思はず打ち笑みたる彼は、此に至つて名利を見ること門前のくろの糞の如くなりき。臨むに諸侯の威を以てし招くに春嶽の才を以てし而して一曙覽をして破屋竹笋の間より起たしむる能はざりし者何が故ぞ。謙遜か、傲慢か、將た彼の國體論は妄に仕ふるを欲せざりしか。いづれにもせよ彼は依然として饅頭燒豆腐の境涯を離れざりしなり。慶應三年の冬、始めて祿を受くるの人となりしも僅に一年を經て明治元年の秋には彼は神の國に去りぬ。曙覽が古學を好み學問に耽りし事は別に說くを要せず、貧苦の中に在りて三代集に千文八百文を辛く載せたりといふ一事は之を證して餘りあるべし。其敬神尊王の主義を現したる歌の中に

高山彥九郞正之

大御門そのかたむきて橋上に頓首きけむ眞心たふと

をりにふれてよみつゝけける(錄一)

吹風の目にこそ見えね神々は此天地にかむづまります

獨樂吟(錄二)

たのしみは戎夷よろこぶ世の中に皇國忘れぬ人を見るとき

たのしみは鈴屋大人の後に生れその御諭をうくる思ふ時

赤心報國(錄一)

國汚す奴あらばと太刀拔て仇にもあらぬ壁に物いふ

示人(錄一)

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはばかしこみまつれ

極めて安心に極めて平和なる曙覽も一たび國體の上に想ひ到る時は滿腔の熱血を灑ぎて敬神の歌を作り不平の吟を爲す。慷慨淋漓、筆、劍の如し。亦平日の貧曙覽に非ず。彼が終に王政維新の盛典に逢ふを得たるは如何ばかりうれしかりけむ。

慶應四年春浪華に行幸あるに宰相君御供仕給へる御ともに仕まつりに上月景之主のめされてはるはるのぼりけるうまのはなむけに

天皇の御さきつかへてたつかねののとかにすらん難波津に行く

すめらきの稀の行幸御供する君のさきはひ我もよろこふ

天使のはろ〳〵下り給へりけるあやしきしはふるひ人ともあつまりゐる中にうちましりつゝ御けしきをかみ見まつる

隱士も市の大路に伏しならひをろがみ奉る雲の上人

天皇の大御使と聞くからにはるかにをかむ膝をり伏せて

勅使をさへかしこみかりて伏し拜みをろがむ彼をして一たび二重橋下に鳳輦を拜するを得せしめざりしは返すがへすも遺憾の事なり。

大行天皇の御はふりの御わざはてにけるまたの日泉涌寺に詣たりけ

るにきのふの御わきのなこりなへ
て佛さまに物し給へる御ありさま
にうち見奉られけるを思けれと
もうれはしく思ひまつりて
ゆゝしくも佛の道にひき入るゝ大御車
のうしや世の中

曙覧は王政維新の名を聞きて、其實を見るに及ばざりしなり。

社會の一貧民としての曙覧、日本國民の一人としての曙覧は、臆測ながら略ゞ之を盡せり。是より歌人としての曙覧に就きて少しく評する所あらんとす。

曙覧の歌は比較的に何集の歌に最も似たりとや問はゞ我も人も一齊に萬葉に似たりと答へん。彼が古今、新古今を學ばずして萬葉を學びたる卓見は我第一に賞揚せんとする所なり。彼が萬葉を學んで比較的善く之を摸し得たる技倆は我第二に賞揚せんとする所なり。そもそも歌の腐敗は古今集に始まり足利時代に至つて其極點に達したるを眞淵一派古學を開き萬葉を解き漸く一縷の生命を繋ぎ得たり。されど眞淵一派は萬葉を解きて萬葉を解せず、口には萬葉をたゝへながらおのが歌は古今以下の俗調を學ぶが如きトンチンカンを演出して笑を後世に貽したるのみ。萬葉が遙に他集に擢んでたるは論を待たず。其擢んでたる所以は、他集の歌が毫も作者の感情を現し得ざるに反し、萬葉の歌は善く之を現したるに在り。他集が感情を現し得ざるは感情を有の儘に寫さゞるがためにして、萬葉が之を現し得たるは之を有の儘に寫したるがためなり。曙覧の歌に曰く、

いつはりのたくみをいふな誠だにさく
れは歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ」古今集以下皆是なり。「誠」の一字は曙覧の本領にして、やがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にして、やがて和歌の本領なり。我謂ふ所の「有の儘に寫す」とは即ち「誠」に外ならず。後世の歌人といへども、誠を詠め、有の儘を寫せ、と空論はすれども其作る所の却ていつはりのたくみを脱する能はざるは誠、有の儘、の意義を誤解せるに因る。西行の如きは幾多の新材料を容れたる處或は此意義を解する者に似たれど、實際其歌を見ば百中の九十九は皆いつはりのたくみなるを知らん。趣味を自然に求め、手段を寫實に取りし歌、前に萬葉あり、後に曙覧あるのみ。

されば曙覧が歌の材料として取り來る者は多く自己周圍の活人事活風光にして、題を設けて詠みし題は花月に非ず、こは志士の贈答歌集を見る者の先づ感ずる所なるべし。彼は自己の貧苦を詠めり、亡き親を想ひては、親ある人もあるにと詠み、亡き子を想ひては、きのふ袂にすがりし子のと詠めり。行幸の供にまかる人を送りては、聞くだに嬉しと詠み、雪の頃旅立つ人を送りては、用心してなだれに逢ふなと詠めり。樂みては樂しと詠み、腹立てゝは腹立たしと詠み、鳥啼けば鳥啼くと詠み、磊飛べば磊飛ぶと詠む。これ尋常の事の如くなれど曙覧以外の歌人には全く無き事なり。面白からぬに面白しと詠み、香も無きに香に匂ふと詠み、戀しくもなきに戀にこがれと詠み、見もせぬに遠き名所を詠み、而して自然の美のおのが鼻の尖にぶらさがりたるをも知らぬ貫之以下の歌よみが、何百年の間、數限りも無くはびこりたる中に、突然として曙覧の出でたるは寧ろ不思議の感無きに非ず。彼は何に縁りて此に悟る所ありしか彼が見し事聞きし事時に觸れ物に觸れて、殘さず餘さず之を歌にしたるは、杜甫が自己の經歷を詳に詩に作りたると相似たり。古人が杜詩を詩史と稱へし例に傚はゞ曙覧の歌を歌史ともいふべきか。余が歌集に因りて其人の事蹟と性

行とを知り得たるも其歴史たるがためなり。然れども彼れ杜詩より得たるか否かは知るに由なし。只杜甫の經歷の變化多きに反して、曙覽の事蹟は甚だ平和に甚だ狹隘に、時は逢ひ難き維新の前後に在りながら、幾多の人事好題目を其歌集中に收め得ざりし事、實に千古の遺憾なりとす。

古今集以後今日に至る迄の選集家集を見るにいづれも四季の歌は集中の最要部分を占めて、少くも三分の一多きは四分の三を占むる者さへあり。之に反して四季の歌少く、雜の歌の著く多きを萬葉集及び曙覽集とす。此二集の他に[illegible]てたる所なり。蓋し四季の歌は多く題詠にして雜の歌は多く實際より出づ。古今集以後の歌集に四季の歌多きは題詠の行はれたるがためにして世下るに從ひ戀の歌も全く題詠となり雜の歌も十分の九は題詠となり了りぬ。曙覽の歌すら四季のには題詠とおぼしきがあり且つ善からぬが多し。題詠必ずしも惡しとに非ず、寫實必ずしも善しとに非ず。されど今日迄の歌界の實際を見るに題詠に善き歌少くして寫實に俗なる歌少し。[illegible]が實地を寫したる歌の中に飛騨の[illegible]を[illegible]みあるが如きは殊に珍しき者なり。

日の光いたらぬ山の洞のうちに火ともし入てかね掘出す
赤裸の男子むれゐて鑛のまろかり碎く槌うち揮て
さひつるや碓たてゝきら／＼とひかる塊つきて粉にする
筧かけとる谷水にうち浸しゆれは白露手にこほれくる
黑けふり群りたゝせ手もすまに吹鑠かせはなたれ落るかね
鑠くれは灰とわかれてきはやかにかたまり殘る白銀の玉
銀の玉をあまたに筥に收れ荷緒かためて馬馳らする
しろかねの荷負る馬を牽たてゝ御貢つかふる御世のみさかえ

探鑛溶鑛より運搬に至る迄の光景仔細に寫し出して目視るが如し。啻に題目の新奇なるのみならず、其敍述の巧なる實に萬葉以後の手際なり。彼魚彦が徒に萬葉の語句を摸して萬葉の精神を失へるに比すれば、曙覽が語句を摸せずして却て萬葉の精神を傳へたる伎倆は同日に語るべきにあらず。されど曙覽は徹頭徹尾萬葉を擬せんと務めたるに非ず。寧ろ其思ふまゝを詠みたるが自ら萬葉に近づきたるなり。而して彼の歌の萬葉に似ざる處は果して萬葉に優る處なりや否や、こは最大切なる問題なり。

余は斷定を下していはん、曙覽の歌想は萬葉より進みたる處あり、曙覽の歌調は萬葉に及ばざる處ありと。先づ歌想に就きて論ぜん。

歌想に主觀的なる者と客觀的なるものとあり。萬葉は主として主觀的歌想を述べたる者にして客觀的歌想は極めて少かりしが古今以後、客觀的歌想の歌、次第に其數を增加するの傾向を見る。

主觀的歌想の中にて理窟めきたるは其品卑しく趣味薄くして取るに足らず。古今以後の歌には理窟めきたるが多けれど萬葉集曙覽集には無し。理窟ならぬ主觀的歌想は多く實地より出でたる者にして、古人も今人もさまで感情の變るべきにあらぬに、況して短歌の如く短くして、複雜なる主觀的歌想を現す能はず、只ゝ簡單なる想をのみ主とする者は、觀察の精細ならざりし古代も觀察の精細に進みし後世も差異甚だ少きが如し。只ゝ時代々々の風俗政治等、等しからざるがために材料又は題目の上には多少の差異なきにあらず。例へば萬葉時代には實地より出でたる戀歌の著しく多きに引きかへ

[illegible]に[illegible]、親を懐ひ子を
[illegible]
[illegible]に[illegible]を失ひて、
きつふま一[illegible]衣手にとりすかり父よ父
よと[illegible]のを

父の十七[illegible]忌に、
[illegible]にいま[illegible]にもあ
[illegible]
[illegible]なりても親のある人もおほか
るものをわれは[illegible]たし

[illegible]に、
[illegible]見にてわかれまつりし身のうさは
[illegible]を[illegible]けり

古書を[illegible]て、
[illegible]の[illegible]古にららとひて事あき
らめし[illegible]代をそ思ふ

筑紫人の[illegible]へか[illegible]に、
[illegible]と夕占とひまつらむ
[illegible]に[illegible]行[illegible]

されど[illegible]を思ふも[illegible]思ふとはかり[illegible]む[illegible]にては、[illegible]なるを[illegible]無ければ、いづれにても[illegible]を[illegible]あるにあらず。此點に於て[illegible]と[illegible]て優劣するを[illegible]ず。而して[illegible]、[illegible]めり。

[illegible]は多く客觀的にして、[illegible]を深くすることを解せざりし[illegible]色を[illegible]も、以後再び進歩して徳川時代に[illegible]時代にては[illegible]客觀的[illegible]をなし、[illegible]に[illegible]されども[illegible]にして[illegible]を[illegible]ず、古人の用ゐ來りし[illegible]の中に[illegible]化を[illegible]しかみ[illegible]き、成るべく多くの[illegible]に入れたる[illegible]見に、[illegible]の昔に求めて之を日蓮に[illegible]したる[illegible]を[illegible]かすべく、[illegible]とし一[illegible]に[illegible]るに見る。徳川時代の歌人が[illegible]的[illegible]を[illegible]しな[illegible]にな[illegible]はざりし[illegible]るゝべからず」といふ從來の[illegible]を[illegible]する[illegible]はざりしに因る。[illegible]は先づ[illegible]一の門戸を[illegible]りて、[illegible]

[illegible]を[illegible]するは、[illegible]に[illegible]て、[illegible]を捉へし事に於て、[illegible]に[illegible]て、[illegible]法を用[illegible]す事を得たり。

[illegible]

[illegible]うるさ[illegible]
こひ人頭を打つ

酉 (該十二時の内)

[illegible]の[illegible]と[illegible]
に[illegible]

[illegible]に[illegible]
ふくろふの[illegible]に[illegible]
きはな[illegible]

こほれ[illegible]につ[illegible]りて[illegible]
[illegible]川に[illegible]くらす

[illegible]
[illegible]なづむ大[illegible]にあり
[illegible]

[illegible]ふる[illegible]の大ふせきしふきの
[illegible]

[illegible]
とこすれは[illegible]む 火ふき[illegible]
む[illegible]に[illegible]つ[illegible]

砂月涼

そとの濱千さとの日路に塵をなみすゝしさ寄き砂上の月

薔薇

猶ならす蜂あたゝかに見なさるゝ窓をうつりて咲くさうひかな

題しらす

雲ならで通はぬ峰の石陰に神世のにほひ吐く草花

歌會の樣よめる中に(錄五)

人麿の御像のまへに机すゑ燈かゝげ御酒そなへおく

設け題よみてもてくる歌どもを神の御前にならへもてゆく

こと〴〵く歌よみいてし顏を見てやをら晩夕の折敷ならふる

汁食とすゝめめくりてとほしたる火もきえぬへく人笑あたる

戸をあけて還る人々雪しろくたまれりといいてわひ〳〵そ行

稻荷詣

稻荷人見あくる朱の大鳥居ゆり動して人のほり來る

設け題「採り題」「あき米櫃」「饅頭を燒はる」「笑ひかたりに腹たゝよる」「疊かす狗のものゝ蹟さにて」「二郎太郎三郎」など思ふに任せて新語新句をはゞかり氣も無く使ひたるのみならず、「人豆をおつ」「涼しさ廣き」「窓をうづめてさく薔薇」などいふが如く、詩又は俳句には用ふれど、歌にはいまだ用ゐざる新句法をも用ゐたるは其見識の凡ならぬを見るべし。「神代のにほひ吐く草の花」といへる歌は彼の神明的理想を現したる者にて、此種の思想が日本の歌人に乏しかりしは論を俟たず。(曙覽の理想も常に此極處に觸れしにあらず)。殊に天然に對する歌人の觀察は極めて皮相的にして花はにほふと詠み、月は清しと詠み、鳥は啼く、とのみ詠むの外、花のうつくしさ、月の清さ、鳥の啼く聲をしみじみと身にしめて感じたる後に詠むといふ事なければ、變化の無きのみか、其實象を明瞭に眼前に浮ばしむる事は絶えて有る無し。曙覽の敍事法を見るに然らず。例へば「赤きもみぢに霜ふりて」「霜の上に冬木の影をうす黑くうつして」と詠めるが如き「もみぢ」の上に「赤き」といふ形容語を冠せ「影」の下に「うす黑き」といふ形容語を添へて、ことさらに重複せしめたるは、霜の白さを強く現さんとの工夫なり。其成功には兎も角も、其著眼の高きこと爭ふべからず。

曙覽は擬古の歌も詠み、新樣の歌も詠み、慷慨激越の歌も詠み、和暢平遠の歌も詠み、家屋の内をも歌に詠み、曠野の外をも歌に詠み、高山彦九郎をも詠み、御魚屋八兵衞をも詠み、俠家の雪をも詠み、妓院の雪も詠み、蟻も詠み、蝨も詠み、書中の胡蝶も詠み、夢中の鬼神も詠み、饅頭も詠み、女子も詠む。見る處聽く處觸るゝ處悉く三十一字中に收めざる無し。曙覽の歌想豐富なるは單調なる萬葉の及ぶ所にあらず。

世に萬葉を摸せんとする者あり、萬葉に用ゐし語の外は新しき語を用ゐず、萬葉にありふれたる趣向の外は新しき趣向を求めず、此の如くにして作り得たる陳腐なる歌を擧げ自ら萬葉調なりといふ、こは萬葉の形を摸して萬葉の精神を失へる者なり。萬葉の作者が歌を作るに用語に制限あるにあらず、趣向に定規あるにあらず、あらゆる語を用ゐてあらゆる趣向を詠みたる者即ち萬葉なり。曙覽が新言語を用ゐて新趣味を詠じ毫も古格舊例に拘泥せざりしはなか〳〵に萬葉の精神を得たる者にして、古今集以下の自ら畫して小區域に局促たりしと同日に語る可きにあらず。只ゝ歌全體の調子に於て曙覽終に萬葉に及ばず、貫之に劣りたり。惜む可き彼は完全なる歌人たる能はざりき。

暁覧の歌の調子に就きて例を擧げて論ぜんか。前に示したる鐵山の歌の如きは調子略ゝとゝのひたり、されどもこれ程にとゝのひたるは集中多く見るべからず、況してこれより勝りたるは殆ど有る無し。

　暑中乾胡蝶

からになる蝶には大和魂を招きよす
へきすへもあらしかし

結句字餘りの變萬葉を學びたれど勢拔けて一首を結ぶに力弱し。萬葉の「うれむそこれかよみかへらまし」などいへるに比すれば句勢に霄壤の差あり。

　細素見月

樒つみ懸する道をかへゆけと見るは一つの野路の月影

此歌は古今よりも劣りたる調子なり。此の如き理窟の歌は「月を見る」といふやうな尋常の句法を用ゐて結ぶ方よろし。「見る」は月影と有形物を以て結びたるはなかなかに拙しく厭にし。

　嫐

あないふせ其子かけてたゞ嫁のもゆと
はなしに嫉のみたつ

あないふせ」と首線に初に置きしこと感情の顚序に戻りて悪し。萬葉にては斷くいはず。全く此言を主とするか然らざれば「□立ついぶせ」などゝうに終りに置くべし。下二句の言ひ樣も俗なり。

　赤染

賤が家道入ははめて物うゝる畑のめぐりのほゝつきの色

此歌は酸漿を主として詠みし歌なれば一二三四の句皆一氣呵成的にものせざるべからず。然るに此歌の上半は趣向も混雜し且つ「せばめて」などいふ曲折せる語もあり、かたがた以て「ほほづきの色」といふ結句を弱からしむ。

よそありきしつゝ歸れはさひしけになりてひをけのすわりをる哉

句法のたるみたる樣西行の歌に似たり。「さびしけになりて」といふ續きも拙く、すわりをるかな」のたるみたるは論無し。「なりて」の語をやめて代りに火桶の形容詞など置くべく、結句は火桶すわりをる」の如き句法を用ふるか又は「○○すわりをる」「すわり○○をる」の如く結びて□を防ぐべし。

かつふれて巖の角に怒りたるおとたひすこき山の瀧つせ

此歌は瀧の勢を詠みたる者に一言葉にては怒りたるが主眼なり。さるを第三句に主眼を措きし故結末弱くなりて振はず。「怒り落つる瀧」などゝ結ぶが善し。

　島崎士夫主の軍人の中にあるに

妹か手にかはる甲の袖まくら寝られぬ耳にきくや夜嵐

上三句重く下二句輕く、瓢を倒にしたるの感あり。殊に第四句力弱し。

　狛君の別墅二樂亭

巖き水眞砂のつらに見る庭のなかめを引て山も連なる

前の歌と同じ調子同じ非難なり。

醉人の水にうちいるゝ石つふてかひなきわさに臂を張る哉

これも上三句重く下二句輕し。暁覧の歌法多く此頭重脚輕の病あり。

　宰相君よりたけを賜はらせけるに

秋の香をひろけたてつる松のかさいたきまつるもろ手さゝけて

これも前の歌と同じく下二句輕くして結び得ず。

羊腸ありともしらで人のよに負れて秋の山ふみをしつ

これも頭重脚輕なり。此歌にては背に負は

れ」といふが主眼なれば此主眼を結句に置かざれば据わらざるべし。

ふくろふの[illegible]すりおけと呼ふ聲に衣ときはなち妹は夜ふかす

こほれ絲網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす

此歌はいづれも趣向の複雑したる歌なれば結句に千鈞の力無かるべからず。然るに二首共に結句の力、上三句に比して弱きを覺ゆ。殊に第四句に「二郎太郎三郎」などいへるつまりたる語を用ゐなば第五句は益〻重く強きを要す。曙覧の歌調を概論すれば第二句重く第四句輕く、結句は力弱くして全首を結ぶに足らざる者最も多きに居る。[illegible]に此[illegible]の[illegible]なきは[illegible]今にも亦無し。[illegible]氏の末流[illegible]なる趣向を取るに至りて多くは皆此病を免れず。曙覧亦同じ。曙覧は殆ど歌調を解せず。歌調を解せざるがために彼は終に歌人たるを得ずして終れり。

之を要するに曙覧の歌は[illegible]に實質に及ばざる事遠しといへども[illegible]以下今日に至る[illegible]歌人も[illegible]新言語を用ゐ[illegible]趣向を求めたる[illegible]に[illegible]して[illegible]に[illegible]へざるべからず。[illegible]に歌人として[illegible]以後只一人[illegible]なり。[illegible]景樹[illegible]文章輩に比すれば彼は[illegible]の孤鶴なり。歌人として彼を賞讃するに千言萬語を費すとも過讃にはあらざるべし。然れども彼の和歌を以て之を俳句に比せんか。彼は殆ど作家と稱せらるゝだけの價値をも有せざるべし。彼が新言語を用ふるに先だつ百四五十年前に芭蕉一派の俳人は、彼が用ゐしよりも遥かに多き新言語を用ゐたり。彼の歌想は他の歌想に比して進歩したる所ありとこそいふべけれ、之を俳句の進歩に比すれば未だ其門墻をも窺ひ得ざる處にあり。俳人の極めて幼稚なる者といへども趣味の多様なる事は曙覧の歌の僅に新奇ならんとせしが如きに非ず。曙覧をして俳人たらしめば殆ど其名だに傳ふる能はざりしなるべし。況んや彼は全く調子を解せざるをや。然るに此の如き曙覧をも古來有數の歌人として賞せざるべからざる歌界の衰退はあはれにも氣の毒の次第と謂はざるべからず。余は曙覧を論ずるに方りて實に其褒貶に迷へり。若し夫れ曙覧の人品性行に至りては磊々落々世間の名利に拘束せられず、正を守り義を取り、俯仰天地に恥ぢざる、[illegible]し道無[illegible]の人なり。

此の稿を草する中にして曙覧翁の令孫今滋氏特に草廬を敲いて翁の傳記及び遺墨等を示さる。因つて翁の小傳を揭けて讀者の一覧に供せんとす。歌と傳と相照し見ば曙覧翁は眼前に在らん。

（明治三十二年三月――四月）

俳諧大要

こゝに花山といへる盲目の俳士あり。望一の流れを汲むにはあらで只々發句をなん詠み出でける。ゆく／＼に此わざを試みてより半年に足らぬ間に、其聲鏗鏘として聞く者耳を欹つ。一夜我假住居をおとづれて共に蟲の音を愛づるついでに、我も發句といふものを詠まんとはすれどたよるべきすぢもなし　君わがために心得となるべきくだり／＼書きてんやとせつに請ふ。答へて君が言好し、昔は目なしどち／＼後について來ませとか聞きぬ、われさるひじりを學ぶとはなけれど覺えたる限りはひが言まじりに傳へん、なか／＼に耳にもつはらなるこそ正風のたよりなるべけれ、いざいざと筆をはしらし僅かに其綱目ばかりを擧げてこれを松風會諸子にいたす。諸子幸ひに之を花山子に傳へてよ。

第一　俳句の標準

一、俳句は文學の一部なり。文學は美術の一部なり。故に美の標準は文學の標準なり。文學の標準は俳句の標準なり。即ち繪畫も彫刻も音樂も演劇も詩歌小說も皆同一の標準を以て論評し得べし。

一、美は比較的なり、絕對的に非ず。故に一首の詩、一幅の畫を取て美不美を言ふべからず。若し之を言ふ時は胸裡に記憶したる幾多の詩畫を取て暗々に比較して言ふのみ。

一、美の標準は各個の感情に存す。各個の感情は各個別なり。故に美の標準も亦各個別なり。又同一の人にして時に從つて感情相異なるあり。故に同一の人亦時に從つて美の標準を異にす。

一、美の標準を以て各個の感情に存すとせば、先天的に存在する美の標準なるもの有る無し。若し先天的に存在する美の標準(或は正鵠を得たる美の標準)ありとするも、其標準の如何は知るべからず。從つて各個の標準と如何の同異あるか知るべからず。即ち先天的標準なるものは吾人の美術と何等の關係を有せざるなり。

一、各個の美の標準を比較すれば大同の中に小異なるあり、大異の中に小同なるありと雖も、種々の事實より歸納すれば全體の上に於て永久の上に略ぼ同一方面に進むを見る。譬へば船舶の南半球より北半球に向ふ者、一は北東に向ひ一は北西に向ひ、時ありて正東正西に向ひ時ありて南に向ふもあれど、其結果を概括して見れば皆南より北に向ふが如し。此方向を指して先天的美の標準と名づけ得可くば則ち名づく可し。今假りに概括的美の標準と名づく。

一、同一の人にして時に從ひ美の標準を異にすれば、一般に後時の標準は概括的標準に近似する者なり。同時代の人にして各個美の標準を異にすれば、一般に學問知識ある者の標準は概括的標準に近似する者なり。但し特別の場合には必ずしも此の如くならず。

第二　俳句と他の文學

一、俳句と他の文學との區別は其音調の異なる

處に在り。他の文學には一定せる音調有るもあり、無きもあり。而して俳句には一定せる音調有り。其音調は普通に五音七音五音の三句を以て一首と爲すと雖も、或は六音七音五音なるあり、或は五音八音五音なるあり、或は六音八音五音なるあり、其他無數の小異あり。故に俳句と他の文學とは嚴密に區別す可らず。

一、俳句と他の文學との音調を比較して優劣あるなし、唯〻風詠する事物に因りて音調の適否あるのみ。例へば複雜なる事物は小說又は長篇の韻文に適し、單純なる事物は俳句和歌又は簡短の韻文に適す、雄壯なるは漢土の詩の長所なり、優柔なるは和歌の長所なり、輕妙なるは俳句の長所なり。然れども俳句亦雄壯、優柔を缺くに非ず、他の文學亦然り。

一、美の標準は美の感情に在り。故に美の感情以外の事物は美の標準に影響せず。多數の人が賞美する者必ずしも美ならず、上等社會に行はるゝ者必ずしも美ならず、上世に作爲せし者必ずしも美ならず。故に上等社會に行はるゝが故に美ならず、下等社會に行はるゝが故に不美ならず。自己の作なるが故に美ならず、今人の作なるが故に不美ならず。

一、一概に俳句と他の文學とを比して優劣あるなし。漢詩を作る者は漢詩を以て最上の文學と爲し、和歌を作る者は和歌を以て最上の文學と爲し、戲曲小說を好む者は戲曲小說を以て最上の文學と爲す。然れども是れ一家言のみ。俳句を以て最上の文學と爲す者は同じく一家言なりと雖も、俳句も亦文學の一部を占めて敢て他の文學に劣る無し。是れ概括的標準に照して自ら然るを覺ゆ。

第三　俳句の種類

一、俳句の種類は文學の種類と略〻相同じ。

一、俳句の種類は種々なる點より類別し得べし。

一、俳句を分ちて意匠及び言語（古人の所謂心及び姿）とす。意匠に巧拙あり、言語に巧拙あり。一に巧にして他に拙なる者あり、兩者共に巧なる者あり、兩者共に拙なる者あり。

一、意匠と言語とを比較して優劣先後あるなし。只〻意匠の美を以て勝る者あり、言語の美を以て勝る者あり。

一、意匠に雄健なるあり、優柔なるあり、壯大なるあり、纖細なるあり、高遠なるあり、平易なるあり、綺麗なるあり、闊達なるあり、莊重なるあり、輕快なるあり、奇警なるあり、淡泊なるあり、複雜なるあり、單純なるあり、眞面目なるあり、滑稽突梯なるあり、其他區別し來れば千種萬樣あるべし。

一、言語に區別あるは意匠に區別あるが如し。雄健なる意匠には雄健なる言語を用ゐざるべからず。優柔なる意匠には優柔なる言語を用ゐざるべからず。莊重なる言語は莊重なる意匠に適し、平易なる言語は平易なる意匠に適す。其他皆然り。

一、意匠に主觀的なるあり、客觀的なるあり。主觀的とは心中の狀況を詠じ、客觀的とは心象に寫り來りし客觀的の事物を其儘に詠ずるなり。

一、意匠に天然的なるあり、人事的なるあり。人事的とは人間世界の事物を詠じ、天然的とは天文、地理、生物、無生物、總て人事以外の事物を詠ずるなり。

一、以上各種の區別皆優劣先後あるなし。

一、以上各種の區別皆比較的の區別のみ、故に嚴密に其區域を限るべからず。

一、一人にして各種の變化を爲す者あり、一人にして一種に長ずる者あり。

第四　俳句と四季

一、俳句には多く四季の題目を詠ず。四季の題目無きものを雜と言ふ。

一、俳句に於ける四季の題目は和歌より出で、更に其區域を廣くしたり。和歌に在りては題目の數僅々一百に上らず、俳句に在りては幾百の多きに及べり。

一、俳句に於ける四季の題目は和歌より出で、更に其意味を深くしたり。例へば、涼し、と言へる語は和歌には夏にも用ゐ又秋涼にも多く用ゐたるを、俳句には全く夏に限りたる語とし、秋涼の意には初涼、新涼等の語を用ゐしが、今は漸くに其語も廢れ涼の字は只ゞ夏季專用の者と爲れり。即ち一題の區域は縮小したると共に其意味は深長と爲りたるなり。

一、單に月と稱すれば和歌にては雜となるべし。俳句にては秋季となるなり。時雨は和歌にては晩秋初冬共に之を用ふ。殊に時雨を以て木葉を染むるの意に用ふ。俳句にては時雨は初冬に限れり。從ひて木葉を染むるの意に用ふる者殆ど之れ無し、霜は和歌にては晩秋より之を用ゐ、亦紅葉を促すの一原因とす。俳句にては霜は三冬に通じて用ふれど晩秋には之を用ゐず。從ひて紅葉を促すの一原因となさず。俳句季寄の書には秋霜の題を設くと雖も、其作例は殆ど見る無し。

一、梧桐一葉落の意を詠じなば和歌にても秋季と爲るべし、俳句にては、一葉を秋季に用ふるのみならず、只ゞ桐と言ふ一語にて秋季に用ふる事あり。鷹狩は和歌にても冬季なり。俳句にては鷹狩を冬季に用ふるのみならず、只ゞ鷹と言ふ一語も冬季に用ふるなり。

一、四季の題目にて花木、花草、木實、草實等は其花實の最多き時を以て季と爲すべし。藤花、牡丹は春晩夏初を以て開く故に春晩夏初を以て季と爲すべし。必ずしも藤を春とし牡丹を夏とするの要なし。梨、西瓜等亦必ずしも秋季に屬せずして可なり。

一、古來季寄に無き者も略ゞ季候の一定せる者は季に用ゐ得可し。例へば紀元節、神武天皇祭等時日の一定せる者は論を竢たず、氷店を夏とし焼芋を冬とするも可なり。又虹の如き雷の如き定めて夏季と爲す、或は可ならんか。

一、四季の題目中虛(抽象的)なる者は人爲的に其區域を嚴限するを要す。之を大にしては四季の區別の如き是なり。春は立春立夏の間を限り、夏は立夏立秋の間を限り、秋は立秋立冬の間を限り、冬は立冬立春の間を限る。即ち立冬一日後にて秋風と詠ずべからず、立夏一日後にて春月と詠ずべからず。

一、長閑、暖、麗、日永、朧は春季と定め、短夜、涼、熱は夏季と定め、冷、凄、朝寒、夜寒、坐寒、漸寒、肌寒、身に入む、夜長は秋季と定め、寒、つめたしは冬季と定む。日の最も長きは夏至前後なり、然れども俳句にては日永を春とす、夜の最も長きは冬至前後なり、然れども俳句にては長夜を秋とす。これは理窟より出でずして感情に本づきたるの致す所なり。斯く一定せし上は日永、夜長は必ず春秋に用ふべし。他季に混ずべからず。

一、其外霞、陽炎、東風の春に於ける、薫風、雲峰の夏に於ける、露、霧、天河、月、野分、星月夜の秋に於ける、霜、霰、氷の冬に於ける如きも亦皆一定する所なれば一定し置くを可とす。然れども夏季に配合して夏の雲峰を詠じ、秋季に配合して秋の雲峰を詠ずるの類は固より妨ぐる所あらず。

一、四季の題目を見れば則ち其時候の聯想を起

十可し。例へば蝶といへば翩々たる小羽蟲の飛び去り飛び來る一個の小景を現はすのみならず、春暖漸く催し草木僅かに萌芽を放ち菜黄麥綠の間に三々五々士女の嬉遊するが如き光景をも聯想せしむるなり。此聯想ありて始めて十七字の天地に無限の趣味を生ず。故に四季の聯想を解せざる者は終に俳句を解せざる者なり。此聯想無き者俳句を見て淺薄なりと言ふも宜なり。俳句に用ふる四季の題目は俳句に限りたる一種の意味を有すといふも可なり。

一、雜の句は四季の聯想無きを以て、其意味淺薄にして吟詠に堪へざる者多し。只だ雄壯高大なる者に至りては必ずしも四季の變化を待たず。故に間々雜の佳句を見る。古來作る所の雜の句極めて少き其中に、過半は富士を詠じたる者なり。而して其吟詠すべき者、亦富士の句なり。

一、或人問ふて曰く、時候を人爲的に限りてこれに名を附し以て題目となす事は既に之を聞けり。空間は何故に區域を立てて之に命名せざるか。答へて曰く、時間は周期的に同一の變化を同一の順序に循環するが故に之を區別して以て之に命名すべし。然れども空間の變化は毫も順序なる者あらずして不規則なる者なり。例へば山嶽、河海、平原、田野、一も順序ある者なし。故に之に命名せんと欲せば人間の見聞し得る所の處一々に命名せざるべからず。地名是なり。地名は時間の區別に比して更に明瞭なる區別なれば、俳句に地名を用ふるは最も簡單なる語を以て最も錯雜なる形象を現すの一良法なりと雖も、奈何せん一人にして地球上の地名と其光景とを盡く知るを得ず。且つ其區劃明瞭なるが故に之を用ふるの區域甚だ狹隘を感ずるなり。他語以て之をいへば四季の名稱に對する者は地名なりと雖も、地名は區域明瞭に過ぎて狹隘に失し、且つ其地を知らざる者には何等の感情をも起さしむる事無し。即ち四季の變化は何人も能く之を知ると雖も、東京の名所は西京の人之を知らざる者多く、西京の名所は東京の人之を知らざる者多きが如きなり。

第五　修學第一期

一、俳句をものせんと思はゞ思ふまゝをものすべし。巧を求むる莫れ、拙を蔽ふ莫れ、他人に恥かしがる莫れ。

一、俳句をものせんと思ひ立ちし其瞬間に半句にても一句にても、ものし置くべし。初心の者は兎角に思ひつきたる趣向を十七字に綴り得ずと思ひ棄つるぞ多き、太だ損なり。十七字にならねば十五字、十六字、十八字、十九字乃至二十二三字一向に差支なし。又みやびたるしやれたる言葉を知らずとて趣向を棄つるも誤れり。雅語、俗語、漢語、佛語何にても構はず入れて一首の韻文となし置くべし。

一、初めより切字、四季の題目、假名遣ひ等を質問する人あり、萬事を知るは善けれど知りたりとて俳句を能くし得べきにあらず。文法知らぬ人が上手な歌を作りて人を驚かす事は世に例多し。俳句は殊に言語、文法、切字、假名遣など一切無き者と心得て可なり。併し知りたき人は漸次に知り置くも可し。

一、俳句をものしたる時は其道の先輩に示して教をこふも善し。初心の者の恥かしがるは却てわろし。中々に初心の時の句は俗氣をはなれてよろしく、少し巧になりし後にはなまなかに俗に陷る事多し

一、初心の恥かしがりてもものし得べき句をものせぬはわろけれど、恥かしがる心根はどうかなして善き句を得たしとの望なればいと殊

勝なり。此心は後々までも持ち續きたし。

一、自ら多く俳句をものして人に見せる者あり。敎を乞ふべき人無しと思はゞ見せずとも可なり。多くものする内には自然と發明する事あり。先輩に聞けば一日にして知り得可き者を數月數年の苦辛を經て漸く發明するが如きは、稍々迂に似たれども中々に迂ならず。此の如く苦辛して得たる者は腦中に染み込む事深ければ再び忘るゝ事無く（一）句をものする上に應用し易く（二）且つ他日又發明するの端緒となる可し（三）。

一、自らものしたる句は紙片に書き記し置く可し。時々繰り返して己の句を吟じ見るも善し。其間に前に言ひ得ざりし事を言ひ得るもあらん。又己の進歩を知るたよりともなりて、一はひとり面白く一は更に一段の進歩を促す事あるべし。

一、四季の題目は一句中に一つづゝある者と心得て詠みこむを可とす。但しあながちに無くてはならぬとには非ず。

一、成るべく其時候の景物を詠ずる事、聯想が早く感情が深くしてものし易し。尤も春に居て秋を思ひ夏に居て冬を思ふ事も全く缺くべからず。只々興の乘るに任せて勝手たる可し。

一、自ら俳句をものする傍に古今の俳句を讀む事は最必要なり。且つものし且つ讀む間には著き進歩を爲す可し。己の句に比べて他人の名句を見る時は他人の意匠の優れたる所を發見せん。他人の名句を讀みて後自ら句をものする時は、趣向湧出し句調自在になりて名人の己に乘り遷りたらんが如き感ある可し。

一、自ら著く進歩しつゝあるが如く感じたる時、或は何とは無けれど只々無暗に趣向の湧き出るが如く感じたる時には、其機を透かさず幾何にても出來るだけものし見る可し。かゝる時はたしかに一段落をなして進歩す可き時機にして、佛敎の大悟徹底、基督敎の聖靈と其趣を同じくし、心中に一種微妙の愉快を感ぜん。但し斯る事は俳句修學の上に幾度もある事なり。一度ありたりとて自ら已に大悟徹底したるが如く思はゞ、野狐禪に墮ちて五百生の間輪廻を免れざる可し。志は大にすべき事なり。

一、古人の俳句を讀まんとならば元祿、明和、安永、天明の俳書を可とす。就中俳諧七部集、續七部集、蕪村七部集、三傑集など善し。家集にては芭蕉句集、何れにても善けれど玉石混淆し居る故注意す可し。去來發句集、丈草發句集、蕪村句集などを讀む可し。但しいづれも多少に惡句あるを免れず。中にも最も惡句少きは猿蓑・俳諧七部集の内、蕪村七部集、蕪村句集位なる可し。（故人五百題は普通に坊間に行はれて初學には便利なり

一、古俳書など讀むも善し、或は之を寫すも善し、或は自ら好む所を拔萃するも善し、或は一の題目の下に類別するも善し。

一、古句を半分位竊み用ふるとも半分だけ新しくば苦しからず、時には古句中の好材料を取り來りて自家の用に供す可し。或は古句の調に擬して調子の變化をも悟る可し。

一、月並風に學ぶ人は多く初めより巧者を求め婉曲を主とす。宗匠亦此方より導く故に初心に小細工に落ちて活眼を開く時無し。初心の句は獨活の大木の如きを貴ぶ。獨活は庭木にもならずとて宗匠達は無理にひねくりたる松などを好むめり。尤も箱庭の中にて俳句をものせんとならばそれにても好し。然り、宗匠の俳句は箱庭的なり。但し俳句界はかゝる窮屈なる者に非ず。

一、初心の人古句に己の言はんと欲する者あるを見て、古人已に俳句を言ひ盡せりやと疑ふ。是れ平等を見て差別を見ざるのみ。試みに今一歩を進めよ。古人は何故に此好題目を遺して乃公に附與したるかと怪むに至るべし。

一、初心の人天の川の題を得て句をものせんとす。心頭先づ浮び來る者は

あら海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉
眞夜中やふりかはりたる天の川　嵐雪
更け行くや水田の上の天の川　惟然

などなる可し。此時千思萬考佳句を探るに、天の川の趣は終に右三句に言ひ盡されて寸分の餘地だも無き心地す。乃ち筆を抛て大息して曰く、已みなん／＼と。已にして古俳書を繙く、天の川の句頻りに目に觸るゝを覺ゆ。たとひ上乘にあらざるも皆一種の句調と趣向とを備へて必ずしも陳腐ならず。例へば

一僕を雨に流すな天の川　浪化
打ち叩く駒のかしらや天の川　去來
引はるや空に一つの天の川　乙州
西風の南に吹つゞや天の川　史邦
よひ／＼に曇れしか此夜天の川　白雄
天の川星より上に見ゆるかな　同
江に沿ふて流るゝ影や天の川　曉臺
天の川飛びこす程に見ゆるかな　士朗
天の川糺の涼み過ぎにけり　同
天の川田守とはなす眞上かな　乙二
てゝれ干す竿のはづれや天の川　嵐外

巨鼇山
山風や樫も檜も天の川　同

などものしたる、或は滑稽に或は壯大に或は眞率に或は奇抜に或は人事的に十人十色なるを思へば、初めの我思案こそ拙かりけれ、天の川を只ゞ大きく天にひろがりたるものとばかり見し故に趣向は浮ばざりしなり、成るほど七夕星を人間と見てそれが戀の爲に裾引つからげて天の川を渡る處など思ひなば可笑しき事もありなん、日暮れて馬上に銀河を見上げたる處、山上樹木蓊鬱たる上に銀河の白くかゝりたる處、途上に人と喧しながら不圖仰向けば銀河の我首筋に落ちかゝる處、天の川を大きく見ず、却て一二三尺程の小川の如く見立てたる處、或は七夕に手向けたる犢鼻褌の銀漢をかざしてひら／＼と翻る處、見樣によれば只ゞ一筋の天の川は幾樣にも變り得べき者なりしを合點するなるべし。

一、なまじひに他人の句を二三句許り見聞きたる時は殊に趣向なき心地す。十句二十句百句と多く見聞く時は却て無數の趣向を得べし。古人が既に己の意匠を言ひ居らん事を恐れて古句を見るを嫌ふが如きは、耳を掩ふて鈴を盜むよりも猶可笑しきわざなり。

一、一題一句づゝ多くの題につきて句を試むるも善し、或は一題十句、一題百句などの如く一題にて出來るだけの變化を試むるも善し。

一、一題百句などをものせんとする時に、始めの四五句を得るに非常の苦吟を感ず可し。其後は稍ゝ容易にものし得て、二三十句に達したる後は百句立どころに辨ずべく、猶百句位は出來べき心地すべし。

一、運座點取など人と競爭するも善し。秀逸の賞品を得るが如きは卑野にして君子の爲すべき所に非ず。但句の下卷又は卷を求むるは苦しからず。時宜に由りて俳書を賞品と爲すも善かる可し。

一、三笠附、懸賞發句募集、其外詩歌に類し私利に關する事にはたづさはるべからず。

一、一時間に數十百句をものするも善し、數日を費して一句を推敲するも善し。早くものすれば放膽の方に養ふ所あり、苦しみてもの

すれば小心の方に得る所あり。

一、俳句の中に言語又は材料の解する能はざる者あらば、索引書又は學者に就きて之を問ひ糺す可し。言語材料一々分明に解し得たら、一句の意味に解する能はざる所あらば自ら熟思す可し。熟思して得ざれば則ち學者に問へ。

一、初學の人俳句を解するに作者の理想を探らんとする者多し。然れども俳句は理想的の者極めて稀に、事物をありの儘に詠みたる者最も多し。而して趣味は却て後者に多く存す。例へば

古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉

といふ句を見て、作者の理想は閑寂を現はすにあらんか、禪學上悟道の句ならんか、或は其他何處にかあらんなど、穿鑿する人あれども、それは只々其儘の理想も何も無き句と見る可し。古池に蛙が飛びこんでキャブンの音のしたのを聞きて芭蕉がしかく詠みしものなり。

稻妻やきのふは東けふは西　其角

といふは諸行無常的の理想を含めたるものにて、俗人は之を佳句の如く思ひもてはやせども、文學としては一文の價値無きものなり。

一、初學の人にして譬喩、謎題、冠附、沓附、回文、盲附俳句、時事雜詠等の俳句をものせんとする人間々あり、然れども此等の條件は皆文學以外の分子にして、言はゞ文學以外の事に文學の皮を被せたる者なり。故に普通に言ひおほせたりとて俳句にはならぬなり。若し此の如き題をものしてしかも多少の文學的風韻あらしめんとするは老熟の上の戲れなり。初學の企て及ぶ所にあらず。

一、學識無き者は雅俗の趣味を區別すること難く、學識ある者は理想に偏して文學の範圍外にさまよふこと多し。然れども終局に於て學識ある者は學識無き者にまさること萬々なり。

一、文章を作る者、詩を作る者、小說を作る者、俄かに俳句をものせんとして其語句の簡單に過ぐるを患ふ。曰く、俳句は終に何等の思想をも現す能はずと。然れども是れ聯想の習慣の異なるよりして來る者にして、複雜なる者を取て盡く之を十七字中に收めんとする故に成し得ぬなり。俳句に適したる簡單なる思想を取り來らば何の苦も無く十七字に收め得べし。縱し又複雜なる者なりとも、其中より最文學的俳句的なる一要素を拔き來りて之を十七字中に收めなば俳句となる可し。初學の人は議論するより作る方こそ肝腎なれ。

一、俳句の古調を擬する者あらば古し、陳腐なりなどとて宗匠輩は擯斥すめり。何ぞ知らん自己が新奇として喜ぶ所の者盡く天保以後の俗調に過ぎず。同じく是れ陳腐なりとも金と鉛とは自ら價値に大差あり。初學者惑ふ莫れ。

一、古俳書なりとも俳諧の理窟を説きたる者は初學者の見るべき者に非ず。俳門の書と雖も十中八九は謬妄なり、其精神は必ずしも謬妄ならざるも、其字句は其精神を寫す能はずして後生の惑を來す者比々皆是なり。若し假名遣、手爾波抔を學ばんと思はゞ俳書に就かずして普通の和書に就け。古言梯、詞の八千衢、詞の玉の緒等幾何もあるべし。

一、俳諧は滑稽なりとて滑稽ならざるは俳句にあらずといふ人あり。局量の小なる一笑するに堪へたり。是れ己れ偶々滑稽よりして俳諧に入りしかばしか言ふのみ。濁酒を好む馬士の清酒を飲んで酒に非ずといひたらんが如し。

一、初學の人にして自己の標準立たずとて苦にする者あり、尤もの事なれども苦にするに

及ばず、多くものし多く讀むうちにはおのづと標準の確立するに至らん。

一、俳句は只〻己れに面白からんやうにものすべし、己れに面白からずとも人に面白かれと思ふは宗匠門下の景物連の心がけなり。縮緬一匹、金時計一個を目あてにして作りたる者は、縮緬と時計とを取り外したるあとにて見る可し。我ながら拙し卑しと驚く程の句なるべし。

一、閒ある時に是非とも俳句をものせんとあがくも宜しからず、忙しき時に無理に俳句をものせんとなやむも宜しからず、出づる時は出づるに任せ出ぬ時は出ぬに任すべし。閒なる時一句をも得ずして忙しき時に數句を立どころに得る事あり、最もおもしろし

一、俳句のために雅念を忘れたるは善し、ゆめ本職を忘るべからず。然れども熱心ならざれば道に進まず、熱心なれば本職を忘るゝに至る。其程度を知るは其人に在り。

一、俳句の題は普通に四季の景物を用ふ。然れども題は季の景物に限るべからず。季以外の雜題を取り季を結んでものす可し。兩者竝び試みざれば終に偏固を免れざらん

一、俳句の題は必ずしも其題を主としてものするを要せず。只〻其題を詠みこまばそれにて十分なり。例へば頭巾といふ題を得たる時に頭巾を主としてものすれば俗に陥り易く陳腐に傾き易し。故に時々此題を輕く詠みこみて他へそらすことも忘るべからず。

初めて東武に下る時

頭巾取り襟つくろふや富士の晴れ　　湖春

といふが如き富士を主としたるものをものするも差支無し、此の如くならざれば盡く陳腐に流れて而も變化すべき區域狹くなる可し。故に俳句の題は和歌の如く題に叶ふ叶はぬをやかましく穿鑿するに及ばず。

一、俳句の題を得たる時はそれを主とせずして可なるのみならず、其題を全く空想中の物となして實在せしめざるも亦可なり。例へば蔦といふ秋季の題を得たる時

野の宮の鳥居に蔦もなかりけり　　涼菟

の如く蔦といふ實物を句中に現在せしめざるも差支無し。これにて矢張秋季と爲るなり。

一、月並者流の題に文字結と言ふ事あり。例へば雪の題にて結字「後」と定められたる時は、雪の句の中に「後」の字をも詠みこむなり。これは單に雪の題ならば俗俳家が古人の雪の句を剽竊し來り、又は自己の古き持句を幾度も出さんとする者多き故に之を豫防するの策なり。苟も德義を解し廉恥を知る人に對して爲す可きに非ず。況んや文字結なる者は到底佳句を得る能はざるをや。

一、他人が惡しと言ふ句も己が善しと思はゞ人に構はず其種類をものす可し。若し其種の句にして果して惡き者ならば長くものし多くものする間には自然と厭嫌を生ず可し。

一、初學の人古人の俳句を見て毫も解する能はざる者多しとなす。是れ畢竟古句を見る事の少きがためなり。古句解すべからずとて俳句は學び難しと爲すに及ばず。能く解し得る者よりして道に進む可し。

一、或は解し難きの句をものするを以て高尚なりと思惟するが如きは俗人の僻見のみ。佶屈なる句は貴からず、平凡なる句はなかなかに貴し、

一、俳句の妙味は終に解釋す可からざるを以て各人の自悟を待つより外なしと雖も、字句の解釋に至りては固より容易に説明し得べし。故に初學者の爲に古句の解説を與へ、併せて多少の批評を爲す可し。

（修學第一期中に列ねたる條項は思ひつくまゝに記したるを以て、前後錯綜重複ある

を免れず、讀者請ふ之を諒せよ)

一、朝顔に釣瓶取られてもらひ水　千代

朝顔の蔓が釣瓶に卷きつきて其蔓を切りちぎるに非ざれば釣瓶を取る能はず、それを朝顔に釣瓶を取られたといひたるなり。釣瓶を取られたる故に餘所へ行きて水をもらひたりといふ意なり。此もらひ水といふ趣向俗極まりて蛇足なり。朝顔に釣瓶を取られたとばかりにて却て宜し。それも取られてとは最俗なり。唯ゞ朝顔の釣瓶にまとひ付きたるさまをおとなしくものするを可とす。此句は人口に膾炙する句なれども俗氣多くして俳句とはいふべからず。

一、井戸端の櫻あぶなし酒の醉　秋色

これは秋色といふ女が十三歳の時ものして上野の櫻に結びつけたりとて、其櫻を秋色櫻と名づけ今も清水堂の裏手に圍ひたる老樹あり。井戸も其傍に殘りあり。(されども考證家の說に據れば眞の秋色櫻の位置は此處にあらずして今の鉢山に近き方なりと)此意は井戸端に櫻の咲きたるを見んとて醉どれし人の何の氣も無く其木の下に近よるにぞ、若し過つて井の中に落ちもやせんと氣遣ひたるなり。「あぶなし」といふ語の主格は醉人にして櫻にあらず。しかも其の醉人といふ語は無く、只ゞ「酒の醉」と單にいひたるのみなれば、普通の文章のやうに解しては解し難きわけなり。さて此の句も千代の朝顔の句と同じく俗にして見るに堪へず。只ゞ千代のに比すれば俗氣少からんか。

一、蚊にこまる蚊もまたこまる團扇かな　失名

誰の句とは知らねど俗間に傳稱する句なり。意義は解釋する迄もなし。此句の如きは俗の又俗なるものにして、前二句に比するも亦數等の下にあり。只ゞ俗間此の如きものを發句と稱へ居る者多き故に其の妄を辯ずるのみ。

一、何事ぞ花見る人の長刀　去來

意は長刀さしたる人の花見に出掛けたるを咎めたるなり。花見とならばいかめしき長刀をさして群衆の中へ出るでもあるまじきに、其の無風流に何事ぞと嘲りたるなり。此等は多少の理想を含み居る故に俗間に傳はり稱せらるれども、名句と言ふは必ずしも此種の句に限らざるなり。否、此種の句は最も卑俗なり易きものと知るべし。此句は此の如く理想を含みたる句の上にては上乘とすべき名句なれども、初學者の此種の句を學ぶは最も危し。

一、蒲團著て寐たる姿や東山　嵐雪

これは實景を知らぬ人には其味を解し難し。試みに京都に行きてつくゞゝと東山を見るべし。低き山の近くに在りてしかも頂の少しづゝ高低ある處、恰も人が蒲團をかぶりて寐たるに似たり。さればこそ此譬喩的の吟ありたるなれ。此句は品の尊き句にあらねども滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにして容易に模倣し得べきに非ず。しかして此の句につきて俗人は勿論普通の文學者にも解し難き俳句上の特色あり。そは冬の季といふことなり。蒲團は冬季にして此句は蒲團を冠に用ゐたれども、他に季とすべき者なければ矢張冬季と爲るなり。俗人の解するが如く此句を單に東山の形容とするのみならば一寸をかしきばかりにて何の趣も無き句なれども、冬季になる故に趣を生ずるなり。さすがの都も冬枯れて見るもの淋しく寒きが中に彼の東山を見れば、これも春の頃のなまめきたる樣子を捨て、只ひつそりと寒さうに横はる處、如何にも蒲團うちかぶりて寐たると見れば淋しさの中に多少のをかしみもありて何と

なく面白う感ぜらるゝなり。人若し之を疑はば夏の東山を見て此句を味ひ、更に冬の東山を見て此句を味ひ、以て其趣の多少を比較す可し。必ず發明する所あらん。

一、我雪とおもへば輕し笠の上　其角

普通には「我ものと思へば輕し傘の雪」として傳はれり。されど「我もの」としては甚だ俗なり、「我雪」の方に從ふべし。意味は解釋する迄も無し。これは端唄などに入りたるため多少世人に逆き感を生ぜしめ、俗人は有難がれど是れ即ち此句の俗なる所以なり。其角の句としては[illegible]を以て賞す可し。若し之を模倣する者あらば直ちに平路に陷ること必定なり。

一、しばらくは花の上なる月夜かな　芭蕉

芭蕉吉野にての吟なり。これは吉野の花の多きことを言へるものにして、そこら一面の花なれば月もしばらくは花の上を立去らずとの意なり。此意にて「しばらく」といふは稍ゝ久しきことを言ひたり。これは素人好みのする句なれども深き味の無き句なり。蓋し實景を寫さずして理想に趨りたる爲ならん。

一、これが事と泥鰌の逃げし根芹かな　丈艸

芹は溝のはじめなり。芹摘みにと手を出したれば其芹のあたりに居たる泥鰌の捕へられんとや恐れけん、あちらに逃げ隱れたりといふ意にして、泥鰌を擬人法にして輕くおどけたる處、丈艸の獨擅なり。上品に非るも猶ほ名句たるを失はず。

一、門前の小家もあそぶ冬至かな　凡兆

冬至とは日の短き極端にして、一陽來復の日なり。然れどもこゝにては右の如き意味に用ゐたるに非ず。蓋し冬至は禪宗に於て供養の定日なるを以て、寺の門前に住みたる小家もお寺の縁により此日は遊び暮すとなり。門前とは普通の家の門前ならずして寺の門前なることは一句の上にて明かなり。又門前の小家といふこと何の爲の家とは分らねど、前後の連より察すればいづれ直接か間接か此寺の爲に生活し居る小家とは知れるなり。これは元祿の句なるが、當時にありて門前といふが如き言ひなれぬ漢語を用ふることは少きに、これは其一て後世蕪村の輩にも倣たるは如何といふに、山門前の意味なれば漢音にて門前と讀ませたるなり。山門に限らず佛語には漢音の用語多し。さて此句の趣を論ぜんに、固より餘韻ある句にあらねど一句のしまりてたるみ無き處名人の作たるに相違無く、將た冬至の句としては上乘の部に入る可し。諧活に衒氣なく言ひ出したる處、却て冬至の趣ありて味ひあり。

一、里人の渡り候か橋の霜　宗因

句意は橋上の霜に足跡あるを見て、大方里人の早や渡りたらんかと想像したる迄なり。されど此句は檀林の開祖宗因の作にして、一句の目當は趣にあらず、却て言葉の上の言ひにあること檀林の特色なり。此句も「候」などの字をつかひたるは謡曲の文句を用ゐたるなれども、そればかりにては未だ口あひにならず、蓋し謡曲の中には「里人の渡り候か」といふ言葉あるべし。今何の中にありと記憶せねども　其謡曲の意は此邊に里人はおぢやるかと尋ねたるものなるを、此俳句には「渡」の字の意義を轉用しておぢやるといふ事には用ゐず、橋を渡るの渡る意に用ゐ、以て口あひとなしたるなり。檀林風の句多くは此種なり。さて此種の句は俳諧史の上には著き功績ありたれども、今日より評せんには一文の價値もなかるべし。所謂趣味餘韻の如きは毫も之を有せざるがためのみ。

一、世の中は三日見ぬ間に櫻かな　蓼太

名高き句にて世の人大方は知れり。句意は世の中の有爲轉變なるは櫻花の少しの間に咲き

満ちたると同じとなり。誰にも能く分る句にてしかも理想を含みたれば世人には賞翫せらるゝものと覚えたり。されども理想を含みたる者必ずしも善からざるは前にも言ひたる如し　況んや此句の如き格調の下品なる者は俳句とも言ひ難き位なり。されどもはじめての作としては保存するも可なり、ゆめ摸倣すべからざるものなり。俗には「三日見ぬ間の」と伝へたれども矢張「見ぬ間に」と「に」の字の方よろし「の」とすれば全く空想となりて味ひ少く、「に」とすれば「桜」が主となり実景となる故に多少の趣を生ずべし。

一、朝顔や紺に染めても強からず　也有

朝顔を紺に染むれば線が強く丈夫になるとは俗に言ふ所なり。されど朝顔の花は紺色のものも矢張其朝限りの命にて強くもあらずとおどけ興じたるなり。也有の句概ね此類なり。これ等も一寸をかしみあれど初学の模倣すべきものにはあらず。

一、御手討の夫婦なりしを衣がへ　蕪村

遠く昔の小説にある態を詠みたるなり。某の男おのが主人の娘又は腰元などに馴れ染めしが、いつしか其事主人の耳に入り不義は御家の御法度なりとて御手討になるべき処を、側の者が申しなだめて二人の命を乞ひたるならん。其後二人は夫婦となりて安楽に暮らし居るさまを斯くはつゞりしなり。衣がへは更衣とも書きて夏の初めに綿入を脱ぎ袷に著かふることをいふ。特に此句に更衣を用ゐたるは今は二人の者が世帯を持ちて平穏に暮らし居る事を現さんがためにして、此等の言廻し取り合せなど總て老練の極なり。人世の複雑なる事実を取り来りて斯く迄に詠みこなすこと、蕪村が一大作家として芭蕉以外に一旗幟を立てたる所以なり。因みに云ふ、此趣向は小説の上にはありふれたりと雖も、蕪村時代にはまだ斯様な小説はなかりしものなり。

一、おちぶれて関寺うたふ頭巾かな　几董

頭巾は冬季なり。関寺とは関寺小町といふ謡曲の名にして、小町がおちぶれし後の事を綴りたるなり。昔はさるべき人の今はおちぶれて関寺小町などを謡ひ居るさまを詠めり。零落せし人故に特に関寺小町を取り合せたるなり。頭巾とはおちぶれし人の頭巾著て居るをいふなり。「うたふ頭巾かな」といふ續きにて頭巾著た人が謡ふとなること俳句に於て通例の句法なり。又頭巾といふ季を結びたるは冬なれば人の零落したる趣に善く適ひ、又頭巾を冠りて侘たる様子も見ゆる故なり。

一、うちそむき木を割る桃の主かな　白雄

桃とは桃花のことにて春季なり。桃の主とは前後の模様にて考ふれば樵夫か百姓などの類なるべし。木を割るとは薪を割るなり。うちそむきとは桃の花を背にして木を割るといふ意なり。即景其まゝにして多少の野趣あり。

一、時鳥鳴くや蓴菜の薄加減　暁台

蓴菜は俗にいふじゅんさいにして此処にてはぬなはと読む。薄加減はじゅんさいの料理のことにして塩の利かぬ様にする事ならん。さて時鳥と蓴菜との関係は如何と云ふに、関係と云ふ程のもの無く、只ゞ時候の取り合せと見て可なり。必ずしも蓴菜を喰ひ居る時に時鳥の啼き過ぎたる者とするにも及ばず。只ゞ蓴菜の薄加減に出来し時と時鳥のなく時と略ゞ同じ時候なるを以て、此二物により此時候を現はしたるなり。しかも二物ともに夏にして時鳥の音の清らなる蓴菜の味の淡泊なる処、能く夏の始めの清涼なる候を想像せしむるに足る。此等の句は取り合せの巧拙により て略ゞ其句の品格を定む。

一、初雪やくばり足らいで比枝許り　[illegible]

初雪が降ることは降つたが餘り少量故何處も彼も降るといふわけには行かず、只ゞ比叡山の上ばかりに降つたといふことなり。配り足らぬとは初雪を擬人法にしてさういふなり、巧者な句といふべし。

一、砂川や枕のほしき夕涼み　闌更

砂川に出で涼みて居れば涼しくもあり、且つは餘り砂川の清らさに枕をかりて此河原表の砂の上に寝轉びたしとの意にて輕妙なる句なり。

一、追々に塔の雫や春の雪　二柳

春の雪は早く解けるものなり。されど五重の塔の屋根には日向と日陰といろ〳〵にある故に、先づ一處より解け初むると思へば次第次第に此處彼處と解けて、果てはどこもかしこも雫が落つるやうになりたりといふ意なり。これは巧者な句なり。

一、菊の香や奈良には古き佛たち　芭蕉

此句に於て菊と佛とは毫も關係無し。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の側に菊の咲きたるにもあらず。強ひて場所の關係を言はゞ菊も古佛も共に奈良にある迄の事なり。作者の奈良に遊びし時恰も菊の咲く頃なりしなるべく、從つて此句を以て奈良を現したるなるべしと雖も、兩も菊花と古佛との取り合せは共にさび盡したる處、少しも動かぬやうに觀ゆ。こゝ作者の濶眼と知る可し。

一、秋風や白木の弓に弦張らん　去來

夏時白木の弓に弦を張れば膠が剝けるとて秋涼の候を待ちてするなり。故に秋風やと置けり。されどもそればかりにては理窟の句にて些の趣味無し。蓋し弓は昔時に在ては神聖なる武器にして、戰場に用ゐらるゝに言ふ迄も無く、蟇目などゝて妖魔を攘ふの儀式もある位なれば、金氣の蕭殺たるに取り合せて自ら無限の趣味を生ずるを見る。況んや其弓は白木の弓なるをや。白色には神聖の感あり、蕭殺の感あり、故に秋の色は白とす。此句無造作に詠み出で、男らしき處を失はず。有り難き佳句なり。

一、時鳥鳴くや雲雀の十文字　去來

時鳥は夏にして雲雀は春なり。されども時鳥は樹に鳴かずして雲雀も夏も囀る故此句は夏季となるなり。此意は時鳥は横一文字に飛ぶものにして雲雀は下より上へ眞直に上る者なり、故に丁度雲雀の上る處を時鳥が横ぎりて恰も十文字の如くなりたるを云ふなり、最も巧妙なる句なり。

一、卯の花の絶間敲かん闇の門　去來

闇夜に人の門を叩かんとするに、一寸先は闇にしていづくを門とも定め難し。唯そこらの垣一面に咲ける卯の花は闇にも白く見ゆるにぞ、其中に少しばかり卯の花の絶えたる處こそ門ならめと推量したるなり。夜目綺麗なれば素人の激賞する句なり、此句わろしとにはあらねど素人の好く程に善き句にあらず。(但し千代の朝顔の句、秋色の櫻の句抔に比すれば此句の高きこと數等なり)若し絶間といふ語を改めなば今一段の佳句ともなるべし。

一、生娘の[illegible]が引いて雉の聲　[illegible]

雉はやさしき姿ながらおそろしき聲を出すもの故、恰もたはれ男に誘引かれたる生娘が覺えず高聲を發したるにも似たりとなり。此句は生娘の聲を雉に譬へたりとするも、又は雉の聲を生娘に譬へたりとするも妨げ無し。

一、むつとして戻れば庭に柳かな　蓼太

「むつとして歸れば門に青柳の」と端唄にも謠はれたれば世の人には善く知られたらん。句意は[illegible]所で腹の立つ事ありてむつとしながら内に歸れば、庭に柳のおとなしく垂れたるを見

て、此柳の如く風にもさからはず、只ゝ柔和にしてこそ世の中も渡るべけれと悟りたるなり。色々樣な理想を含む故に端唄にもはひりたれど、俳氣十分にして月並調の本色を現せり。千代の朝顏の句よりもなほ厭な心地す。

一、庭にもと幾人思ふ花見かな　破笠

花見の中に交りて行けば美人が綺羅を飾りて澤山出で來る故に、あのやうな女を我妻にしたい、此やうな娘も我妻にしたいと思ふといふことなり。綺羅芬香して都會の花見の盛なるさまは裏面に現はれたり。

一、見ぐるしき馬にのりけり雲の峰　斗入

雲の峰は夏季にして夏雲多奇峰の意なり。此雲が出て來ると熱くなる故、雲の峰には夏の空の晴れて熱き心を言へるが例なり。此句は旅人のから尻などに乘りて行く樣を言ひしものなれば、綺麗な馬に非るは勿論なれど、特に見ぐるしきと言ふ上は通常のよりも餘程見ぐるしとの意なり。蓋し炎天に人を載せて歩むこと故、馬もいたく疲れて道はかどらず。毛は汗によごれて如何にも見苦しきさまを言へるなり。一句吟じ畢れば炎天に人馬の疲勞せしさま見るが如し。

一、初學の人道に進むは何れの方向よりするも勝手なれども、普通の學生などの俳句をものするは多く漢語を用ゐ、詩を應用する者を實際上多しとす。例へば水村山郭、酒旗風といふ杜牧の成句を取りてこれに秋季の景物を添へ

　沙魚釣や水村山郭酒旗風　嵐雪

といふが如きこれにても俳句なり。此道より悟入するも可なり。又成句を用ゐざるも只ゝ目前の景物を取りて一列に並べたるばかりにても俳句にならぬ事はあらじ。

　奈良七重七堂伽藍八重櫻　芭蕉
　藪寺や筍月夜時鳥　成美
　浦山や有明[illegible]迎櫻　羽人

などの作例もあるなり。此三句の中にて成美の句最も佳なりとす。

一、和歌を學びたる人の俳句に入るは詩人の俳句に入るよりも難し。是れ和歌の性質の然るにあらずして今日普通の和歌と稱する者の文學的ならざればなり。萬葉集の歌は文學的に作爲せしものに非れども、稚氣ありて俗氣なき處却て文學的なる者多し。新古今集には間々佳篇あり。金槐和歌集には千古の絶唱十首許りある可し。德川氏の末に至りては纖巧なる方のみ稍ゝ文學的とはなれり。これ等の歌より進む者は固より俳句に入り得べく、しかも詩人の俳句に入るよりも入り易きこと言を俟たず。されども古今集の如き言語ありて意匠なき歌より進み來らば俳道に入ること甚だ困難なるべし。蓋し俳句の上にては優長なる調子を容れず。寧ろ切迫なる方に傾くが故なり。試みに俳句的の和歌を擧げなば

　もののふの矢なみつくろふこての上に
　霰たばしる那須の篠原　源實朝

の如きを然りとす。此外古今の「入日をあらふ沖つ白浪」、「廣かしはに霰ふるなり」など、又に貫之の[illegible]の嵐、定家の夕立の雲など の如きは和歌の尤物にして俳句にもなり得べき意匠なり。

一、前には初學者のために多少古句の解釋など試みたれど、そは標準とすべき者を擧げたるにはあらず。故に今こゝに標準とすべき者十數句を擧げて第一期の結尾となす可し。但し俳句に入る人纖巧より佶屈より疎大より滑稽より各ゝ道を選びて進むこと勿論なれども、平易より進む方最も普通にしてしかも正路なりと思ふが故に、こゝに平易なる句を拔萃せり。分け登る道はいづれなりとも、其

極に至れば同じ雲井に一輪の大月を見るの外はあらじ。

五六本よりてしだるゝ柳かな　去來
永き日や大佛殿の普請聲　李由
凩や刈田のあとの鐵氣水　惟然
清水の上から出たり春の月　許六
聲かけて鵜繩をさばく早瀬かな　涼菟
鎌倉の街道をのす燕かな　尙白
春の日の念佛ゆるき野寺かな　同
靜かさは栗の葉沈む清水かな　同
よろ／＼と撫子殘る枯野かな　同
藁積んで廣く淋しき枯野かな　同
道ばたに多賀の鳥居の寒さかな　同
夕立や川追ひあぐる裸馬　正秀
山松のあはひ／＼や花の雲　その
市中はもの丶匂ひや夏の月　凡兆
百舌鳥鳴くや入日さしこむ女松原　同
なが／＼と川一筋や雪の原　同
旅人の見て行く門の柳かな　標上
春雨や松に鶴鳴く和歌の浦　同
我庵は榎許りの落葉かな　同

以上の句は皆俳諧の巧を求めず、只ありのまゝの事物をありのまゝにつらねたる迄なれば、殊に平易にして誰にも分るなるべし、而して其句の價値を問へば即ち多くは是れ第一流の句にして俳句界中有數の佳作なり。

第六　修學第二期

一、利根のある學生俳句をものすること五千首に及ばゝ直ちに第二期に入る可し。普通の人にても多少の學問ある者俳句をものすること一萬首以上に至らば必ず第二期に入り來らん。

一、句數五千一萬の多きに至らずとも、才能ある人は數年の星霜を經る間には自然と發達して、何時の間にか第二期に入り居る事多し。蓋し自ら多くものせずとも多年の間には他人の句を見、說を聞くこと多きがためなり。

一、第一期第二期の限界は判然たるものに非ず。然れども俳句をものする人は初めは五里霧中に迷ふが如く、他人任せに句を作るが如き感あり。只〻句數と歲月とを積むこと多ければ略〻一句のこなしつき、古人の句を見ても自分の句を見てもあらましの評論も出來、何となく自己心中に頼む所あるが如く感ずるに至らん。此邊より上へ先づ第二期と定めん。

一、第二期に入り來る人と雖も、其人の嗜好に於て進歩の方法順序に於て相異あるがために、發達する部分に程度の相異あるを免れず。例へば甲は意匠の點に於て發達したるも言語これに副はず、乙は言語の點に於て發達したるも意匠これに副はず、丙は雅趣を解して纖巧を解せず、丁は纖巧を解して壯大を解せざるが如き是れなり。

一、古雅に長じて他に拙なる者、纖細に長じて他に拙なる者、疎豪に長じて他に拙なる者等の如きは如何の方針を取てか進むべき。應へて曰く、一定の方針ある可き理なし。一は自己の長ずる所をして益〻長ぜしめよ、他は自己の及ばざる所に向つて研覈せよ。兩者若し竝び行ひ得べくんば竝び行へ。

一、自己の長ずる一方に向つて專攻するの方針を取るも稍〻多少の變化を知るを要す。變化を知るは勉めて自己の句の變化を試むるに在り。勉めて古今の句を多く讀むに在り。古人又は一時代の格調を模倣するも可なり。

一、人あり、古俳人某の俳句の格調の他に異なるを見て慕ふ可きものありとす。一度自ら其句を模して稍〻眞を得るに及んで忽ち其格調の[illegible]を愛するに至ることあり。故に博く學び多く作るを要す。

一、諸種の變化を要する中にも最も壯大雄渾の句あるを善しとす。壯大雄渾の趣は說き難しと雖も、之を形體の上について言はんに、空間の廣き者は壯大なり。湖海の渺茫たる、山嶽の巍峩たる、大空の無限なる、或は千軍萬馬の曠野に羅列せる、或は河漢星辰の地平に垂接せるが如き、皆壯大ならざるは無し。勢力の多き者は雄渾なり。大風の颯々たる、怒濤の澎湃たる、飛瀑の瀧々たる、或は洪水天に滔して田里を蕩流し、或は兩軍相接して彈丸雨注し、艨艟相交りて水雷海を湧かすが如き、皆雄渾ならざるは無し。

一、一些事一微物につきても猶比較的に壯大雄渾なる者あり。例へば牡丹を見る者、牡丹數輪の花を把り來ると、只ゝ一輪の牡丹を把り來るとを比較すれば、一輪牡丹の方花の大きなるやう感ず可し。是れ花の特別に大なるに非ず、一輪なれば比較すべき者なきがためなり。或は庭園中の牡丹を詠ずると、場所を指定せずして只ゝ一株の牡丹をのみ詠ずるとを比較すれば、後者の方牡丹の大なるを感ず。是れ亦牡丹の大なるに非ず、比較すべき者なきがためなり。（近く見れば大に遠く見れば小なるの理もあり）例へば

押し出して花一輪の牡丹かな　秋來
四五輪に陰日南ある牡丹かな　梅室

の二句を比較せば前者の花大にして後者の花小なるを感ずべし。

蠟燭に靜まりかへる牡丹かな　許六
どや／＼と牡丹つりこむ塀の内　士朗

の二句を比較せば前者の牡丹大にして後者の牡丹小なるを感ずべし。之を壯大といふは文字穩當ならずと雖も、小に對して大といふは即ち可ならん。

一、壯大雄渾なるものも纖細精緻なるものも普通の美術上の價値に於て差違なきは初に述べたる如し。而して今こゝに特に壯大雄渾を擧ぐる者は、此種の句最も少きを以て一層渴望に堪へざるがためなり。何故に此種の句少きかと問へば、第一に世間此種の趣味を解する者少きこと、第二に世間此種の天然的人事的大觀少きこと、第三俳句の字數少くして此種の大觀を見はすに苦しきこと是れなり。

一、美術の標準は吾人の主觀中に一定して動くものにあらずと雖も、客觀的に之を見れば同一の美術品にして時と場合により價値に差異を生ずることあり。即ち吾人の標準中には斬新を美とし陳腐を不美とするの一箇條あるが爲に、客觀的に變動するを免れざるなり。例へば昔は面白き繪畫なりと評せられし其意匠も、今日に在りて之を模倣せば人皆陳腐として之を斥けん。或は今日に在りて斬新なりとてもてはやさるゝ詩文小說も、後世に至り同樣の意匠を爲す者多からば終には陳腐として厭棄せられんが如き類なり。（元祿時代に所謂不易流行なる語はやゝ此意に近しといへども、後時代には推理的の頭腦を缺きし故曖昧を免れず）

一、壯大雄渾なる句は少きを以て、此種の句を作す者は之を渴望し居る人より歡迎賞美せらるべし。然れども壯大雄渾なる事物は其種類甚だ少く、目擊する事も稀なるが故に兎角陳腐に陷り易し。又十七八字の間に壯大雄渾の事物を包含せしむることは甚だ至難なるを以て、試みに或る大觀を取て詠ずるも、何等の景色なるか何等の人事なるか茫漠として讀者に知れ難き者多し。多少俳句に心得ある人、徒らに大觀の趣味を解したるまゝにして此種の句を爲す者、往々陳腐に陷り又は茫漠解すべからざるに至る。鑑みる所あるべし。

一、古來壯大雄渾の句を爲す者極めて稀なり。試に我心頭に記憶し來る者を記さば

あら海や佐渡に横ふ天の河　芭蕉
猪も共に吹かるゝ野分かな　同
湖の水まさりけり五月雨　去來
稻妻や海のおもてをひらめかす　史邦
初汐や鳴門の波の飛脚船　凡兆
凩吹く草の中より今日の月　樗良
五月雨や大河を前に家二軒　蕪村
湖の水傾けて田植かな　几董
蟻の道雲の峯より續きけり　一茶
蝉なくや天にひつゝく筑摩川　同
とう／＼と瀧の落ちこむ茂りかな　士朗

等の類なり。（芭蕉の句には猶數首の壯大雄渾なる者あれども、そは芭蕉雜談に論じたるを以てこゝに言はず。此外にも比較的に壯大雄渾なるものは枚擧に暇あらず）

一、纖細精緻なる句亦學ばざるべからず。生來美術心に乏しき人、又は漢學風の疎大に失する人は往々にして此種の趣味を解せざる者あり。然れども世上所謂美術家、文學家なる者の八九分は皆此一方に偏する者なり。只ゞ纖細精緻の極に達する人は八九分の内更に一分を出でざる可し。天然を講究する人一艸一木の微を知り、人事を觀察する人一些事一微物の眞面目を識り、人間心中間一髮の動機を觀る者は絶無にして僅有なり。俳句にては人事を講究すること小說家の如く精細なるを要せずと雖も、天然を講究する事は成る可く精微なるを要す。蓋し精細なる人事は之を十七字中に包含せしむる能はずと雖も、精細なる天然は包含せしめ得べき者多ければなり。

一、纖細精緻なる句は一々に引例に及ばざる可しと雖も、見當りたる者數首を取りて左に列記せん。

蒲公英や葉を下草に咲て居る　秋瓜
草刈りて菫選り出す童かな　鶴歩
白魚をふるひよせたる四つ手かな　其角
鶯の身をさかさまに初音かな　同
杜若しぼむ下から開きけり　自友
愛らしう撫子の花つぼみけり　平十
萩の花追々こけてさかりかな　孤舟
草の葉や足の折れたるきり／＼す　荷兮
臼起す小春の草のほのかなり　吟江
埋火に年よる膝の小さゝよ　咫尺
はこべ草枯野の土にしがみつく　蓮之

一、壯大なる事物は少く纖細なる事物は多し。數個の纖細なる事物を合すれば一箇の壯大なる事物となるべく、一箇の壯大なる事物を分てば數個の纖細なる事物となるべし。

一、壯大を見る者纖細を見得ざるが如く、纖細を見る者亦壯大を見得ざるが多し。注意せざるべからず。

一、壯大にも雅俗あり、纖細にも雅俗あり。壯大を好む者單に壯大を見て雅俗を判ずるを知らず、纖細を好む者單に纖細を見て雅俗を判ずるを知らず。今の宗匠者流は纖細に偏してしかも雅致を解せず、俗趣を主とす。故に其句俗陋なり。今の書生者流は壯大に偏してしかも熟練を缺く、故に陳腐に陷らざれば必ず疎豪にして趣味の解す可らざる句を爲す。他人の句を評するも亦之を標準とす。纖細なる者は膽を大にすべし、壯大なる者は心を小にすべし。

一、題目已に壯大なるあり、題目已に纖細なるあり。四季の題目を以て之を例せんに

夏山　夏野　夏木立　青嵐　五月雨　雲の峰　秋風　野分　霧　稻妻　天の河　星月夜　刈田　凩　冬枯　冬木立　枯野　雪　時雨　鯨

等は其壯大なる者なり。又

東風　菫　蝶　虻　蜂　孑孑　蝸牛　水馬

頭蟲、蜘蛛 蚤 蚊 撫子 扇 燈籠 草花 火鉢 巨燵 足袋 冬の蠅 埋火等は其纖細なる者なり。壯大を壯大とし纖細を纖細とするは普通なれども、時としては壯大なる題目を把て比較的纖細に作するの技倆も無かるべからず。例へば五月雨を詠ずるに

雲滿れて温泉を吐く川や皐月雨　春來
山陰に滿晴し五月雨　吟江

と大きく深くのみものせず、却て

五月雨に虹のおよぐ戸口かな　杉風
三味線や寢衣にくるむ五月雨　其角

などやゝ纖細にものするが如し。又これと同じく纖細なる題目も時としては比較的壯大に作するの技倆なかるべからず。例へば胡蝶の題にて

寐る胡蝶羽に露つけん緣の先　坡仄
飛びかふて初手の蝶々紛れけり　嘯山

とやさしく美しく趣向をつけるも固より善けれど、そはありうちの事なり。これを少し考へ變へて

ある程の蝶の數見るつむじかな　一排
眞直に矢走を渡る胡蝶かな　木導

など、一は強く一は大きくものしたるも珍らかに面白かるべし。

一、雅樸を好む者綺麗を嫌ひ、綺麗を好む者雅樸を嫌ふの癖あり。之を今日の實際に見るに、昔めきたる老人は雅樸の一方に偏し、綺麗なる者を俗の極として之を斥く。又今樣の美術文學家は往々綺麗の一方に偏し、雅樸なる者を取て卑野として不美術的として之を斥く。共に偏頗の論なり。

一、雅樸の中にも雅俗あり、綺麗の中にも雅俗あり。雅樸に偏する者は百姓と言ひ鄙と言へば則ち以て直ちに是とし、復他を顧みず。是れ他の卑野と目する所以なり。綺麗に偏する者は少女と言ひ金屏と言へば則ち以て直ちに是とし、復他を顧みず。是れ他の俗猥と目する所以なり。

一、日に焦げたる老爺鍬を肩にし一枝の桃花を折りて田畝より歸り、老婆浣衣し終りて柴門の邊に佇み暗に之を迎ふれば、飢雀其間を窺ひ井戸端の乾飯を啄む、是れ雅樸にして美術的なる趣向ならん。十數人の大廣間片側に金屏を繞らし、十四五の少女一枝の牡丹を傳り來りて之を花瓶に插まんとすれば、頻りに其の名を呼ぶ者あり、少女驚いて耳を欹ればをかしや樓頭の鸚鵡永日に倦んで此戯を爲すなり。是れ綺麗にして美術的なる趣向ならん。雅樸と綺麗と共に之を美術的にせんと欲せば、物の雅樸と物の綺麗とを選擇するの必要あるのみならず、之を美術的に配合するの必要あるなり。然れども配合の美術的なると否とは理論の上にて説明するは難し。實際の上に評論するを善しとす。

一、閑邃深靜を好んで繁華熱鬧を厭ふは普通詩人たるものゝ感情なり。前者の雅にして後者の俗なるは言ふ迄もなけれど、さりとて繁華熱鬧必ずしも文學的の分子を含まざるに非ず。況んや如何なる俗事物も之を冷眼に視る時は、其之を冷眼に視る處に於て多少の雅趣を生ずるをや。「白眼看他世上人」と言へば「世上人」は極めて俗なる者なれども「白眼看」の三字を添へて無上の雅致を生ずるが如し。(前項雅樸綺麗の條をも參照すべし)

一、理窟は理窟にして文學に非ず。されども理窟の上に文學の皮を被せて十七字の理窟をものするも亦文學の應用なれば時に之を試むるも善し。只ゞ理窟の爲に文學を沒却せらるること莫れ。理窟に合せんとすれば文學に遠く、文學に適せんとすれば理窟を離るゝこと、素と兩者全く其性を異にするより來る者故

是非も無き事なり。兩者を併して稍々調和したる者をものするは、非常の辛苦を要しながら存外に喝采を博すること能はざれば其覺悟なかるべからず。蓋し普通文學者は辛苦の處を察せず、單に其理窟的なるの點に於て之を擯斥す。又俗人はそれよりも猶卑俗に暴露的にものせざれば承知せざるべし。

一、理窟といふには非るも送別、留別、題畫、慶弔、祝賀なども稍々此に類せり。例へば

生きて世に人の年忌や初茄子　几董

と言へる句の如き、陳腐に似て陳腐ならず、卑俗にして卑俗ならず、奇を求めず巧を弄せざる間に無限の妙味を持たせながら常人は何とも感ぜざる可し。否、何とも感ぜぬのみならず、これにては承知せざる可し。年忌の法會などならば其人を思ひ出すとか、今に幻に見ゆるとか、年月の立つのは早いものとか、彼人が死でから外に友が無いとか、涙ながら靈を祭るとかいふ陳腐なる考を有り難がるも常人ならば是非無きも、文學者たらん者は今少し考へあるべし。此几董の句にても生きて世に、と口惜したる詞の働きより人の年忌や、とよく〳〵しものしたる最後に「初茄子」何心なく置きたるが如くにて、其實心中無限の感情を隱し、言語の上に意匠慘澹たる處は僅かに見ゆるなり。要するに此種の句は作るにも熟練を要し、見るにも熟練を要するなり。

一、初心の人は固より何事をも知らざれども、少し俳句に入りたる人は理窟的の句、又は前書附の句はむづかしきを悟る可し。而して後稍々熟練を經、辛うじて此種の句をものするに至れば獨り心に嬉しく、只々其言ひおほせたるを喜んで却て其句の雅俗優劣を判する能はざることあり。常に自ら省みるを要す。

一、天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず。稱して月並調といふ。然れども此種の句も多少は之を見るを要す。例へば俳諧の堂に入りたる人往々にして月並調の句を賞し、或は自らものすることあり。蓋し此人月並調を見る事多からざるを以て、其中の一體稍々正調に近き者を取て斯く評するなり。焉ぞ知らん此種の句は月並家者流に於て陳腐を極めたる者なるを。恥を掻かざらんと欲する者は月並調も少しは見る可し。

一、學生間に或は月並調を摸し自ら新奇と稱す。是れ彼自身には新奇なるものならん然れども其文學社會に陳腐なること久し。無學笑ふに堪へたり。

一、俳句に貞徳風あり、檀林風あり、芭蕉風あり、其角風あり、美濃風あり、伊丹風あり、蕪村風あり、暁臺風あり、一茶風あり、乙二風あり、蒼虬風あり、然れども是れ歴史上の結果なり。甲派を信ずる者乙派を排し、丙流を學ぶ者丁流を誹らざるべからざるの理無し。其何風と何派たるとに拘らず、美なる者は之を取れ、美ならざる者は之を捨てよ。

一、世上蕉風を信ずる者多し、我れ故らに奇を好んで檀林を奉ぜんと。是れ所謂負惜みの痩我慢なり。而して痩我慢より割り出したる俳句は毫も文學に非るなり。我れ其角派の系統を繼げり、故に其角派の俳句をものせんと。此の如く系統より割り出したる俳句は文學に非るなり。

一、梅に鶯、柳に風、時鳥に月、名月に雲、名所には富士、嵐山、吉野山、此等の趣向の陳腐なるは何人も之を知る。然れども春雨に傘、春風に女、卯花に人、五月雨に馬、紅葉に瀧、暮秋に牛、雪に燈火、[illegible]に[illegible]、名所には京、嵯峨、御室、大原、比叡、三井、瀬田、須磨、奈良、宇治、此等の趣向の陳[illegible]なるは深く俳句に入る者に非れば知る能はず

一、趣向は成るべく斬新なるを要すれども、時には此等の陳套を翻案して腐を新となし死を活となすの技倆あるを要す。

一、日本畫ばかり見たらん人の俄かに西洋畫の一二枚を見たらんには、偏り其態擬せるに驚きて暫くは巧拙を判定する能はざるべし。西洋畫ばかり見たらん人の日本畫を見たるも亦同じ。それと同しく俳句にても全く斬新なる趣向に至りては、見る者其巧拙を定むる能はず。或は之を以て美の極とし、或は之を以て拙の極と爲すに至る。而して幾多の日月を經て反復此句を吟誦し、且つ之を模倣する者も多くなりて後、當に初の句を味へば、先に美の極と公言したる人も其褒め過ぎたるを悔い、先に拙の極と公言したる人も其考への淺薄なりしを恥づるなるべし。故に斬新なる句を見る人は熟吟熟考して後に褒貶す可し。是れ大家の上にも免れざる一弊なりとす。

一、趣向の上に動く動かぬと云ふ事あり、即ち配合する事物の調和適應すると否とを言ふなり。例へば上十二文字又は下十二文字を得て未だ外の五文字を得ざる時、色々に置きかへ見る可し。其置きかへるは即ち動くが爲なり。

○○○○○雪積む上の夜の雨　凡兆

といふ下十二文字を得て後、上の句をさまざまに置きかへんには「町中や」「凍てつくや」「薄月や」「淋しさや」「音淋し」「藁屋根や」「二[illegible]かさや」「苫舟や」「歸るさや」「枯蘆や」など如何樣にもあるべきを、芭蕉は終に「下京や」の五文字動かすべからずといひしとぞ。一字一句の推敲もゆるがせにすべからざることなり。

一、何といふ語句を置くべきかといふ場合に推敲するは普通の事なり。然れども何かは知らず已に十七字を成したる後、其句に就きて一一に動く動かぬを檢するは學生諸子の多く爲さゞる所なり。自ら名句を得たりとて得意人に示す時、其人此語は如何と質問すれば、成程それは不穩なりき、何々の語の方善かりしものを抔氣のつく事多かるべし。生前に之を發見すれば一時の恥ばかりにて濟む事なれども、死んで後は人の批難を如何ともする能はざるべし。

一、四季の題目に就きて動き易き者を擧ぐれば

春風ト秋風　暮春ト暮秋　五月雨ト時雨

櫻ト紅葉　夕立ト時雨　夏野ト枯野　夏木立ト冬木立

等數ふるに遑あらざるべし。一寸此題目ばかり見れば餘り懸隔し居る故、それを置き違へると云ふは受取れぬ樣なれど、實際俳句をものする上に上手下手を問はず違へ易き事なり。只だ熟練し居る者は常に之を省み、初學血氣の士は全く不注意に看過するのみ。

一、俳句を學んで堂に入る者に意匠と言語と竝び達せんことこそ最も難けれ。誰でも先づ兩者相伴ふて進歩する者なれど、それはある一部分の事にて全體の上にあらず。例へば雄壯なる句をものするには甚だ句調の和合に長じながら、優美なる句をものするには句調全く和合せざる事あり。能く〱注意研究を要す。

一、言語の上にたるむたるまぬといふ事あり。たるまぬとは語々緊密にして一字も動かすべからざるを云ふ。たるむとは一句の聞え自ら緩みてしまらぬ心地するを云ふ。譬へば琴の絲のしまり居るとしまり居らぬとは素人が聞きても自ら差違あるが如し。一句たるみあるやうに感ずる時は一々之を吟味す可し。必ず此語は不用なりとか、此語に最少し短くしても事足りぬべきにとか、此語と彼語と位置を顛倒すればてにはの接續に無理を生ぜぬ

とか、何とかいふやうな事あるべし。趣向は老練の上にも拙なるあり、素人の上にも上手なるあり、只〻句調のたるまぬ處は必ず老練の上の沙汰なり。古人の名句抔に氣をとめて見る可し。

一、句調のたるむこと一概には言ひ盡されねど、普通に分りたる例を擧ぐれば虛字の多きものはたるみ易く、名詞の多き者はしまり易し。虛字とは第一に「てには」なり。第二に「副詞」なり。第三に「動詞」なり。故にたるみを少くせんと思はゞ成るべく「てには」を減ずるを要す。試みに天保以後の俳句を檢せよ。不必要なる處に「てには」を用ゐて一句を爲す故に句調たるみて聞くべからず。又之に次ぎて副詞はたるみを生じ動詞も亦たるみ易し。但し副詞、動詞などは其使ひ樣による可し。今たるみたる句の例を擧げんに

ものたらぬ月や枯野を照るばかり　蒼虬

といふ句の中に必要なるものは月と枯野との二語あるのみ。「月や枯野を照るばかり」といへばものたらぬの意は自ら其の中に含まれ、ものたらぬ月の枯野といへば照るばかりの意は自ら其中に含まれたり。若し、南方ことに實は無用の言のみ。此句の意は單に「月の枯野」とか又は「枯野の月」とかいふばかりにて十分なりとす。同じ事を幾樣にもくり返さねば其意の現はれぬ如き心地するは、初學者及び局外者の淺薄なる考より來るなり。今此句の外に枯野の月を詠ずる者を擧げんに

月も今土より出づる枯野かな　雨什

松明は月の所に枯野かな　大甲

晝中に月吹き出して枯野かな　金塢

三句各〻巧拙ありと雖も、蒼虬の句に比すれば皆數等の上にあり。蓋し此等は「ものたらぬ」とも「照るばかり」ともいはで其意を言外に含むのみならず、却てそれより外の趣向を取り交ぜて一句を面白くしたるなり。只〻枯野の月とばかりにては單純に過ぎて俳句になり難きが爲なり。併し單純に枯野の月を詠じたる句も無きにはあらず。

三日月の梢見する枯野かな　甘棠

といへるが如き是なり。此句固より幼稚なりと雖も、しかも三日月を捻出し且つ一氣呵成にものしたる處、遙かに蒼虬の上に在り。而して記臆せよ、雨什以下三人は皆、明以前の人にして、甘棠は元祿の人なることを。此に於て彼蒼虬が天保派の元祖にして當時の名家なるを思はゞ、誰か其面に唾するを欲せざらんや。しかも蒼虬の句中偶〻此惡句あるに非ず、彼が全集は盡く此種の塵芥を以て埋めらるゝ者なり。而して此派を稱して芭蕉の正風なりといふに至りては眞に芭蕉の罪人なり。

一、たるみにも程度あり。若し前の如き議論を極端にすれば名詞ばかり並べたる句が一番の名句となるわけなり。併したるみも或程度迄はたるみたるも善し。只〻其程度は一々實際に就いていふより外はあらじ。又たるみ樣にも全體たるみたると一部分たるみたるとあり。全體たるみたるは最美か若くは最不美なり。大體はしまりたるが如くにて一部分たるみたるは必ず惡し。

一、句調の最もしまりたるは安永、天明の頃なりとす。故に同時代の句は概ね善し。元祿の句は之に比すれば稍〻たるみたり。然れどもたるみ樣全體にたるみてしかも其程らひ善ければ、元祿の佳句に至りては天明の及ぶ所にあらず。つまり元祿の佳句には善きが多く、天明には少し。天保時代は全體たるみにて一句の採るべきなし。萬葉はたるみてもたるみ方善し　古今集はたるみて惡し。新古今は

やゝしまりたり。足利時代に似たるのみにて俳句の天保時代と相似たり。漢詩にては漢魏六朝は盛唐時代と同じくたるみても宜し。同時代はたるみもなく又たるみても悪しからず。俳句の元禄時代に似たり。宋時代は稍たるみといふ可なるべし。明時代に至りて大にしまりたる様なり。俳句の安永、天明に似たり。（然れども人によりてたるみたるも少からず。）

一、試みに句のたるみし有様を比較せんが為に、元禄と天明と天保との三句を列擧すべし。

古寺の築木も古びたり梅の花　[illegible]
二もとの梅に遅速を愛すかな　蕪村
すくなきは庵の常なり梅の花　蒼虬

句の巧拙は暫く論ぜず、其句調の上に就いていはんに、元禄と天明との句はありのまゝのけしきを詠みたる[illegible]にて少し出したる氣味あり。天明（蕪村）の句はとかくにゆるみ勝なるものを少しもゆるめじとて締めつけ〳〵て一分も動かさじと締めつけたらんが如し。天保（蒼虬）の句はゆるみ勝なるものを猶ゆるめたらん心持あり。要するに元禄は自然なる處に於て取るべく、天明は工夫を費す處に於て取るべし。獨り天保に至りては元禄を摹したるつもりにて元禄にも何にもならぬ者、即ち工夫を廻さぬふりして其實工夫を廻らしたる者、何の取所もなきことなり。少くとも此三體に於ける句法の變化を精細に知らざれば俳句の上に於て何たるといふを得ず。世上往々人は蒼虬の句を評して蕪村調などゝ評する者あり。笑ふに堪へたり。

一、元禄と天明とは各長所あり、何れに從ふも善し。又元禄にして天明に似、天明にして元禄に似たる者も多し。是れ天工人工其極處に至りて相一致する所以なり。

一、佐藤一齋にかありけん、某人に雨合羽の如し、腕に一つのしまりだにあれば全體に見ふはふはとしながら姿に態を亂れずと申せしとか。元禄調のしまり工合は先づこんなものなるべし。天明調はどこ迄も引しめて五分もすかぬ様に折目正しく著物著たらんが如く、天保調はしろまが帯を横に結ちて祭禮の錢集めに廻るが如し。又建築に譬ふれば元禄は丸木の柱、萱の屋根に庭木は有り合せの松にても杉にても其儘にしたらんが如く、天明は柱を四角に鑽り床違へ棚を附け、欄間の飾りより天井板まで美を盡してしかも俗ならぬ様に家は楔を打ちて動かぬ様に建てたらんが如く、天保は床脇の柱だけ丸木を用ゐ、無理に丸窓一つを明ち手水鉢の邊木も自然木を用ゐ、門楣の扁額は必ず有木を用ゐ、しかして家の内は小細工したる調度に[illegible]俗野なる者を用ゐたらんが如し。又之を衣服にたとへば元禄の人は[illegible]もつまらなくても眞實をありのまゝに話し、天明の人は上手に面白く嘘をつき、天保の人はありうちのつまらぬ嘘を眞實らしく話して其實はそれも嘘なりけんが如し。

一、四季の感情は皆ことごとく天然に目を注ぐ人の略ぼ同様に感じ居る所なり。然れども俳句詩歌等に深き人は四季の感情も自然に精密に發達し居るに他人の及ばず。面白くも感ぜざる山川草木を材料として幾千の俳句をものしたりとて俳句になり得べくもあらず。山川草木の美を感じて而して後始めて山川草木を詠ずべし。美を感ずることも深ければ句も亦随って美なるべし。山川草木を詠ずること深ければ時間に於ける山川草木の變化、即ち四時の感を起すこと深かるべし。初學の人山川草木を目のあたりに一寸浮べたるのみにて已に句を為す、故に其句は平凡に非ざれば陳腐なり。さるからに天然を研究して深き者が深思熟慮したる句を示すとも、初學の人は一向に其句の美

を感ぜざるべし。若し彼は天然の上に於ける美の分子あることを知らざればなり。

一、世人曰く、俳人京に行かんには春を可とす、奈良に行かんには秋を可とす、而して彼等初めて名句を得べしと。其言真に然り。然れども我等京に行きたりとも、奈良に行きたりとも、全く其の趣味の無くに著す。否、京も秋ならざるべからざる所あり、奈良も春ならざるべからざる所あり。其他夏又は冬ならざる可らざる所あり。而して夏冬に於ける感は世人多く之を知らざるなり。例へば奈良に當宿に實きていはんに、春日社、興福寺の森林、若草山、南大門、東大寺、太政官、二月堂等は最も春に適し、三笠山のつゞき、又は春日社内より手向山道迄の木立、又は木立の間に神社の見ゆる處等、總て奥深く茂りたる處は最も夏に適し、古都の感、古寺の感、七大寺の荒涼としたる處、鹿の淋しき聲、塔の寂寞最も秋に適し、其に至つる處は皆冬にも適し、しかも之は皆に比して何か面白けたる處あり。吾人の之を詳にせんと欲すれば

奈良の鹿打つ山の八重櫻　太祇

紅葉を出て奈良を立ち行く者かな　蕪村

菊の香や奈良には古き佛たち　芭蕉

奈良七夜ふるや時雨の七大寺　樗堂

の如し。之を譬へていへば春は美しく面白く、夏は大きく清らかに、秋は古びても淋しく、冬はさびてからびたる感あり。

一、俳句四季の題目の中に人事に屬し、しかも普く世人に知られざるものには季の感甚だ薄きを常とす。例へば寒摩の鐵祭の如き、夏季に屬すといへども之を詠ずる人、又其句を讀む人多くは夏の感を有せず。況んやその四月なるか五月なるかの差違に至りては殆ど之を知らず、故に此題を詠ずる者は皆だ苦吟し、彼に作る之を詠じたる句も無味淡泊を免れず。是れ時候の聯想なきが爲なり。

誰が代や寒摩祭も唯一つ　是人

は寒摩祭の唯一の句として傳へられたる者、一讀するの價あれども、其趣味は毫も時候の感と關係せず。寧ろ雜の句を讀むの感あり。然れども是れ古人が寒摩祭を知らざるの罪のみ。吾人をして若し此祭を見聞するに慣れしめば、何ぞ季の感を起さゞらん。季の感已に起らば何ぞ名句を得るに苦まんや。其他大師講の如き、吾人はその冬季たるの感最薄しと雖も、身其語の中に在りて親しく之を見し者は必ずや冬季に於ける幾多の聯想を起すべきなり。之を要するに見聞することの少き人事を詠ずるに、其の句を感ずると同様の感ありて無味を免れざるなり。

一、蛙といへる題目は古来以來春季に屬すと雖も、吾人は古句に春季の感を起さず。却つて夏季の感を起す傾きあり。春季と定むること是れ恐らくは古人普通の感情に違らひしものにあらざるを得んや。殊に

古池や蛙飛びこむ水の音　芭蕉

の句に至りては殆ど春季の感無し。さりとて夏季の感をも起さず。此句は只だ是れ無季の句と同一の感あるのみ。

一、第一期は何人にても修し得べく、第二期は稍々專門に屬す。是を以て天才ある者は殆ど第一期を通過せずして初めより第二期に入ることあり。然れども第二期は多少の修養學問を要するを以て、最早天才ある者もなき者も遲々として序を追ひ階級を踏まざるべからず。此點に至りては天才ある者も天才なき者に劣ることあり。蓋し天才は常に驕傲自負の質に富み、研究を厭ふ傾きあればなり。

一、古俳書を讀むには歴史的、個人的の研究を要す。即ち讀むに乙派あり、丙派ありて丁派

著なるの順序と、其各派の相違と變遷の原因とは歴史的研究の主なる者なり。各俳人の特色と其傳統せし流派と模倣せし程度と師弟の關係とは個人的研究の主なる者なり。同時代に數派の流行せし事を知らずして、無理に各派一系の傳統を立てんとする者は歴史研究家の弊なり。同時に同樣の流行せりしこと、即ち時代一般の特色ありしことを知らずして、其特色を一俳人の專有に歸せんとする者は個人研究家の弊なり。或は俳家を研究する者和歌、漢詩、西詩を解せず、偶ゝ某歌詩人の家集を讀んで曰く、此人某俳人に似たりと。而して彼は和歌、漢詩、西詩の特色を以て此一人に歸せしが如きこと無きにあらず。文學者は學問無かるべからざるなり。

一、俳句をものするには空想に倚ると寫實に倚るとの二種あり。初學の人概ね空想に倚るを常とす。空想盡くる時は寫實に倚らざるべからず。寫實には人事と天然とあり。偶然と故爲とあり。人事の寫實は難く天然の寫實は易し。偶然の寫實は材料少く、故爲の寫實は材料多し。故に寫實の目的を以て天然の風光を探ること最も俳句に適せり。數十日の行脚を爲し得べくんば太だ可なり。公務あるものは土曜日曜をかけて田舍廻りを爲すも可なり。半日の閑を偸みて郊外に散歩するも可なり。已むなくんば晩餐後の運動に上野、墨堤を逍遙するも豈二三の俳句を得るに難からんや。花晨可なり、月夕可なり、午睡可なり、夜雨可なり、何れの時か俳句ならざらん。山寺可なり、漁村可なり、曠野可なり、谿流可なり、何れの處か俳句ならざらん。

一、寫實の目的を以て旅行するとも汽車ならば何の役にも立つまじ。只ゝ心を靜めて氣の散らぬやうに歩む方最も宜し。駒下駄よりも草鞋の方可なり。洋服蝙蝠傘よりも菅笠脚絆の方宜し。連なき一人旅行に善し。されど行手を急ぎ路程を貪り體力の盡くる迄歩むは却て俳句を得難し。たまたま知らぬ地に踏み迷ひ足を引きずりてやうやうに夜山を越え山下に宿を乞ひたるなどは此限にあらず。

一、普通に旅行する時は名勝舊跡を探るを常とす。名勝舊跡必ずしも美術的の風光ならずと雖も、しかも歴史的の聯想あるが爲に俳句をものするには最も宜し。但し名勝舊跡の外にして普通尋常の景色に無數の美を含み居る事を忘るべからず。名勝舊跡は其數少く、人多く之を詠ずるが故に陳腐なり易し。普通尋常の景色は無數にして變化も多く且つ陳腐ならず、故に名勝舊跡を目的として途々天然の美を探るべし。鳥聲草花我を迎ふるが如く、雲影月色我を慰むるが如く感ずべし。

一、芭蕉は自ら我に富士、吉野の句無しといふ、眞なり。而して彼亦松嶋に到ても一句を得ざりしなり。世の文人墨客多く此等の地に到り俳句を得ざるを嘆ずる者比々是れなり。是れ蓋し美術文學を解せざるの致す所か。富士山の形は一般の場合に於て美術的ならず。只ゝ其日本第一の高山たると、種々の詩歌傳說とは之をして能く神聖ならしめたるも、其神聖なる點は種々に言ひ盡して今は已に陳腐に屬したり。吉野、松嶋の如きは其占有する所の空間廣くして一見縮幾多の時間を費す者、是れ天然の美ありとするも美術的ならざるなり。（即ち美術に爲し得べからざるなり）たとひ美術的なるも俳句には適せざるなり。只ゝ此光景を破碎して幾多の俳句と爲さば爲し得べきも、一部の光景は其地全體の特色を帶びざるが故に、世人は承知せざるなり。而して芭蕉の如きも猶不可能的の景色を取て俳句となさんと力むるに似たり。豈無理なる注文ならずや。況んや松嶋の如きは

甚だ天然の美に於て缺くる所多きをや。世人は奇を以て美となす、故に松島の奇景を以て日本第一の美となす。誤れるの甚しきなり。古來松島の名詩歌なく其名畫なき固より其處なり。若し松島の詩歌俳句等にして秀逸なる者あらば、そは必ず松島の眞景に非ざるなり。（吉野は我之を知らず、故に茲に論ぜず）

一、今試みに山林郊野を散歩して其材料を得んか。先づ木立深き處に枯木常磐木を吹き鳴らす木枯の風、ところ〴〵陂の溜り〴〵に吹き溜められし落葉の又はら〳〵と動きたる、岡の邊の田畔に續く處斜めに冬木立の連なりて其上に鳥居ばかりの少しく見えたる、冬田の水はかれ〴〵に錆びて刈株に微塵を見せたる、田の中の小道を行けば冬の小川水少く蘆は大方に枯れ盡したる中に鷺ばかりの[illegible]う殘りたる、とある處に古池の[illegible]間がくれに鳴きたる、空には小春日和の晴れて[illegible]舞ひ廻りし空を[illegible]遠山の[illegible]聳えて其の峰に富士の白く小さく見えたる、やがて日暮るゝ程にはら〳〵と時雨のふり來る音に怪みて木の間を見れば只[illegible]凄く出でたる十日ごろの片われ月、覺えず身擬ひして[illegible]美はこゝなりと合點すべし。寒さもまさり來るに急ぎ家に歸れば崩れかゝりたる火桶もなつかしく、風呂吹に納豆汁の御馳走は時に取りての醍醐味、風流はいづくにもある可し。

一、空想より得たる句に最美ならざれば最拙なり。而して最美なるは極めて稀なり。作りし時こそ自ら最美と思へ、半年一年も過ぎて見たらんには嘔吐を催すべき程いやみなる句ぞ多き。實景を寫しても最美なるは猶得難けれど、第二流位の句は最も得易し。且つ寫實的のものは何年經て後も多少の味を存する者多し。

一、はじめの程は空想ならでは作り得ぬを常とす。やがて實景を寫さんとするにつかまへ處無き心地して何事も句にならず。度々經驗の上寫實も少し出來るに至れば、寫實程面白く作り易きはなかるべし。空想の陳腐を悟り寫實の新斬を悟るも此時にあり。洋畫師牛伴と語る事あり。牛伴曰く、畫に於ても空想を以て爭はんには老熟の者必ず勝ち少年の者必ず負く。然れども寫生を以てせんか、少年の者の畫く所の者、亦老熟者を驚かすに足ると。眞なるかな。

一、空想によりて佳句を得んとするには、兀坐瞑目して天上の理想界を畫き出すも可なり。机頭手爐を擁して過去の實驗を想ひ起すも可なり。古俳書を繙きて他人の句中より新思想を得來る亦可なり。數人相會し一運座、競吟、探題などするも可なり。

一、課題を得て空想上より俳句を得んとする時に、其課題若し難題なれば作者に苦吟の餘り見るに堪へざる拙句を爲すこと、老練の人と雖も往々免れざる所なり。俳諧問答なる書に許六の自得發明辨といふ者あり。其初に題詠の心得を記したり。曰く

一、師の云、發句案ずる事諸門弟題號の中より案じいだす是なきものなり、餘所より尋來ればさて〳〵澤山成事なりと云へり、予が云我あら野彼蓑にて此事を見出したり、予が案じ様たとへば題を箱に入て其箱の上にあがりて箱をふまへ立ちあがつて乾坤を尋ると云へり、云々

と、蓋し是れ題詠の秘訣なり。

一、作者若し空想に偏すれば陳腐に墮ち易く自然を得難し。若し寫實に偏すれば平凡に陷り易く奇警なり難し。空想に偏する者は目前の山河草野に無數の好題目あるを忘れて徒らに暗中を摸索するの傾向あり。寫實に偏する者

は古代の事物、隔地の景色に無二の新意匠あるを忘れて目前の小天地に跼蹐するの弊害あり。

一、空想にあらず、寫實にあらず、なかば空想に屬し、なかば寫實に屬する一種の作法あり。即ち小說、演劇、謠曲等より俳句の題目を探り來り、或は繪畫の意匠を取り、或は他國の文學を翻譯する等是れなり。此手段甚だ狡獪なるを以て往々力を費さずして佳句を得ることありと雖も、老熟せざる者は拙劣の句をものして失敗を取ること多し。蓋し繪畫、小說の長所は時に俳句の短所に屬し、支那文學、歐米文學の長所は必ずしも俳句の長所ならざればなり。

一、壯大を好む者總ての物に大の字を附して無理に壯大ならしめんとするは往々徒爲に屬す。其物已に小ならば大の字を附して大ならしむべし。大牡丹、大幟、大船、大家等の如し。然れども其物已に大ならば、これに大の字を附するは能く之をして大ならしめざるのみならず、却て其物に區域あるが如き感を起さしめ、却て小ならしむることあり。大空、大海、大山、大川、廣野等の如し。

一、滑稽も亦文學に屬す。然れども俳句の滑稽と川柳の滑稽とは自ら其程度を異にす。川柳の滑稽は人をして捧腹絶倒せしむるにあり。俳句の滑稽は其間に雅味あるを要す。故に俳句にして川柳に近きは俳句の拙なる者、若し之を川柳とし見れば更に拙なり。川柳にして俳句に近きは川柳の拙なる者、若し之を俳句とし見れば更に拙なり。

一、狂體を好む者あり、狂體亦文學に屬す。然れども意匠の狂と言語の狂と相伴ふを要す。意匠狂して言語狂せざる者あり、狂人の時として眞面目なるが如し。意匠狂せずして言語狂する者あり、常人の時として狂せるまねするが如し。共に文學的ならず。

一、熟練の人にして俳句の二句目の終りにある「や」の字を嫌ふ人多し。例へば

雞の片足づゝや冬籠　丈艸
呼び出しに來てはうかすや猫の聲　去來
紙燭して廊下過ぐるや五月雨　蕪村
家見えて春の朝寐や鹽の山　嵐外

等の如し。そは一理なきにはあらず。初學の人此の種の「や」を用ふる時は全句にたるみを生ずる者多きが故なり。さりとてあながちに之を嫌ふはいはれなき事なり。上に擧ぐる所の句の如き各首趣味もあり、音調も具はりて「や」の字の爲にたるみを生ぜざるなり。ひたすらにたるみを嫌ふより出づるの一弊なり。鳴雪翁曰く、二句目のやは兎角たるむものなれど、下の五文字名詞のみならずして動詞、形容詞などを交へたらんには多少の調和を得べし。例へば

鶯のあちこちとするや小家がち　蕪村

といふ句の如きも「がち」の語あるが爲に「や」の字左程にたるまずと。此言眞なり。

一、俳句に熟達する人すら猶解し難き古句あり。其句若し古事古語等にたよりたるものならんには、思ひよりの書籍を探るべし。然れども其語句は普通のものにして全首の意通じ難きは熟ゝ思案すべし。只ゝ此一句を解する能はざるの恥なるのみならず、已れ未だ俳句のある部分に於て至らざる所あるを證する者なり。有りもせぬ意味をこしらへて句に勿體をつけるは古の註釋家の弊なり。含有する意味をもよくは探らで難解の句を放擲するは今の學生の弊なり。

一、第二期に入る人固より普通の俳句を解するに苦まずと雖も、用意の周到なる、針線の緻密なるものに至りては之を解する能はず。大家苦心の句を把て平凡と目するに至ること

あり。今古句數首を引て俳家の用意周到なる所を指摘し、倂せて多少の評論を費すべし。

一、禪寺の松の落葉や神無月　凡兆

此句を解する者曰く、只ゞ神無月の寂寞たる有樣を現はしたるのみ。しかも禪寺の松葉と見つけたる處神韻あり、云々と。果して解者の言ふが如く禪寺の松葉を以て十月頃の淋しさを現はさんとならば、神無月と云はずして霜月といはんに如かず。蓋し霜月は神無月に比して更に靜かなればなり。解者又曰く、霜月も神無月も大體同じ事なり、只ゞ句調の都合にて神無月と爲りたるのみと。是れ凡兆を知らざる者なり。元祿の大家にして神無月は霜月に動くと知りながら猶字數の都合にて神無月を置くが如き一時の間に合せを爲すべしとも覺えず。況や用意周到を以て勝りたる凡兆に於てをや。凡兆の俳句緊密にして一字も動かす可からざるは猿蓑を見て知るべく、此點に於て飽く迄強情なることは去來抄にも見えたり。されば此句に神無月と置きたる者、豈一時の間に合せならんや。凡兆深くこゝに考ふる所ありしや必せり。蓋し十月は多くの木の葉の落つる時なれば、俳諧に於て落葉を十月の季とし、松の落葉の如き常磐木の落葉は總て夏季に屬す。然れども松の落葉の如きは四時絶えざること論を俟たず。されば此句意は神無月の頃は到る處に木の葉落ち重なりて下駄草履にも音ある程なるに、獨り此禪寺は松の古葉の少しこぼれたるばかりなるぞ淸らかに淋しく禪寺の本意なるべきと口ずさみたる者ならん。更に言ひ換へなば、いづくも落葉だらけになりていとむさくろしきに、此禪寺は松ばかり植ゑ列ねて他の木をも交ぜねば、此の落葉の頃さへ普通の落葉は無く只ゞ松葉ばかりこぼれて禪寺めきたりとなるべし。（此句恐らくは南禪寺より思ひつきたらんか）是に於てか神無月の語は一歩も動かざるを見るべし。若し霜月としなば巳に落葉の時候も過ぎたるからに、たとひ落葉せし處も吹き散らし掃き除けたるかも測るべからず。さありては松の木ばかりの禪寺といふ意を現はすに足らざるなり。

一、鐘樓へは懲りてはひらぬ燕かな　也有

也有は狂文を以て名高し。故に其作句數千、十中の八九は狂體若しくはしやれ滑稽に屬するものなり。然れども此の句の如く諧謔のはなはだしきものは他に多く類を見ず。此の句の精神は「懲」の一字にあり。而して人の解する能はざる所また此の語にあり。故に此の句の意を探らんとならば、燕が何故に鐘樓に這入ることに懲りたるかを知るにあり。蓋し燕は眞一文字に飛ぶ者なれば、ある時何の氣もなく鐘撞堂の中を目がけて飛びこみたれば思はずも釣鐘に頭を打ちつけて痛き目を見つるならん。さらば鐘樓に這入らば又もや痛き目を見んかとて懲りて這入らぬなり。此の如き事は實際にあり得べしとも思はねど、燕の向ふ見ずに飛ぶ處より聯想し來りて也有は此諧謔の句をものしたりとおぼし。世人或は此解釋を以て牽强に過ぎたりとし、此外に幾樣の解釋を爲すものあるべし。然れども其解釋とこゝに擧げたる解釋とを比較して、何れか最も善く懲の意に適するか、何れか最も善く燕の特性を現はすかを見よ。而して後此解釋の牽强ならぬを知るべし。但し此句は諧謔に過ぎて品位最も低し。決して佳句と稱すべからず。世人又此種の諧謔の稍ゝ川柳調に近きを疑ひ、俳人にして川柳調を爲すの信ずべからざるを説く者あらん。然れども也有の全集を見る者、誰か也有の諧謔に過ぎたるを知らざらん。例へば

折られぬを合點で垂れる柳かな

鮒と見て水流ふ田打かな

足柄の山に手を出す蕨かな

ものゝ中の蟲に物着る寒さかな

片里に片側町の蟲の聲

草庵へ來て門叩きけり案嗔

の如きは撰は異なれども其意匠の奇に諧謔に傾き險語によりて盡く相似たり。以て全豹を推すべし。

一、飛入りの力者怪しき角力かな　蕪村

俳句に入る事深く自ら俳句を作りて幾多の秀句を爲す人、猶且つ此句を捨てゝ平凡取るに足らずと爲し、毫も顧みず。而して其解釋を問へば則ち淺薄にして殆ど月並者流の句を解するが如く然り。蕪村をして之を聞かしめば果して如何とか言はん。此の句固より蕪村集中の傑作に非ず、寧ろ下位にある者なり。然れども大家の技倆は往々惡句によりて評定せらるゝ事あり。此句恐らくは蕪村の技倆を知るに足らんか。蓋し此一句の精神は「怪」の一字にあり。人の誤解する所亦此一字にあるなり。國語に「あやし」といふ語幾樣の意に用ふるや能く究めずと雖も、昔は見苦しき賤が家をあやしげなる家など言ひたるは少からず。されどそは此處に用ふべきにあらず。普通にはあやしといふ語を漢字の怪の意に用ふ。怪とは奇怪、妖怪、怪力、神怪、鬼怪などゝて總て人間わざならぬ事に用ふ。此一句の意味を探るに左の如し。ある處にて秋のはじめつかた緑夜村の若衆抔打ち寄りて辻角力を催すに、力自慢の誰彼自ら集まりてかりそめながら大關關脇を氣取りて威張りに威張りつゝ面白き夜を篝火の側に更しける。さる程にある夜の事、今迄は見なれぬ一人の男のつと此角力場に來りて我も力競べんといふ。男盛りの若者ども血氣にはやりて、これ位の男何程の事かあらんといきなりに取てかゝれば無造作にぞ投げられける。次なる若者敵討たんと組みつけば之も物の見事にぞ投げられける。其外幾人となく取てかゝる者此有樣なれば、終には大關某自ら大勢の恥辱を雪がんとのさり／＼と歩み出づ。皆々此勝負こそはと片唾を呑んで眺め居れば、二人は立ち上りエイと組みオヽと引き左をさし右をはづし眸を凝らして睨み合ひたる其途端に如何したりけん、彼男のつと寄るよと見えしまゝにさすがの大關も難なく土俵の眞中へ叩きつけられぬ。見物はあつけに取られたり。やがてさま／＼の評判こそ口から口へさゝやかれけれ。さるにても彼の怪しの男は誰ならん、北村には見馴れぬ顏の男なり。北村の人に聞けども北村の人も知らず。南村の人に聞けども南村の人も知らず。さりとて本場を踏める關取力といふ風采にもあらねば、通り掛りの武者修行といふ打扮にもあらざりけり。疑惑は疑惑に重りぬ。私語はいよ／＼かしましくなりぬ。中に一人の年とりたる行司のしはぶきして小聲にていふやう、皆の衆靜かにせよ、彼こそはかしこの山の頂に住めるといふ天狗樣にこそはあるらめ、今宵の振舞を見るにたゞ人とは覺えず、思ふに我等の力わざに耽りていと誇りがほなるを片腹痛しと斯くは懲らしめ給ひたるものにぞあるらめといへば、皆々顏見合して襟元寒しと身振ひなどすめり。蕪村は實に此一場の事實を取り來りて十七字の中には包含せしめたり。而して其骨子は怪の一字に外ならず。角力は難題なり、人事なり。此錯雜せる俗人事を表面より直言せば固より俗に墮ちん。裏面より如何なる文學的人事を探り得たりとも、千篇一律は終に俳句の材料とは爲らざるなり。然れども蕪村が此俗境の中より多少の趣味を

具する此詩境を探り出だし、しかもそれを怪の一字に籠めたる彼の筆力に至りては、俳句三百年間誰一人其塁を摩する者かあるべき。世人亦此解釈を不當として種々に解釈を試むる者あるべし。然れども恐らくは其解釈は怪の一字を解し得ざるべく、然らざれば一字一句金鐵の如く緻密に泰山の如く動かざる蕪村の筆力を知らざる者の囈語のみ。

一、言ひ難きを言ふは老練の上の事なれど、そは多く俗事物を詠じて成るべく雅ならしむる者のみ。其事物如何に雅致ある者なりとも、十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につゞめんことは殆ど爲し得べからざる者なれば、古來の俳人も皆之を試みざりしに似たり。然れども一二此種の句なくして可ならんや、池西言水は實に其作者なり。

一、こゝに一の意匠あり、其意匠は極めて古き代の事を當時自身が其事に當りしことの如くに詠ずるなり。昔は老年になりてもの、役に立たぬ人を無残にも山谷に捨てし地方もありきとぞ。信州の姨捨山は其遺跡となん聞えし。其頃の事にして時は冬の夜の寒く晴れわたり満天の星のこぼれんばかりに輝ける中に、今しも姨捨てに行かなんとて湯婆を暖めよと命ずるなり。これだけの趣向がいかで十七字にはつゞまるべきと誰しも思はんを、さて詠みたりや。

姨捨てん湯婆に燗せ星月夜　言水

情景寫し出だして少しも餘す所を見ず。眞に是れ破天荒と謂つべし。但し此句につきては我未だ全く解せざる處あり。湯婆に燗せとは果して何のためにするにや。只ゝ寒き故に自ら手足を暖めんとにや、又は他に意味あるにや。大方の教を俟つ。

一、此等の句は言水に於ても他に多くの類を見ず。

黒塚や局女のわく火鉢　言水

の一句、僅かに前の湯婆の句と種類を同じうするのみ。此句の意は黒塚の鬼女が局女を捕へて其肉か子ごもりを截り取り、之を火鉢の上にて炙りなどし居る處なるべし。前の句も冬季としたる爲に凄味を添へ此句も亦冬季なるを以て一きは恐ろしき心地す。

一、身の内の道を覺ゆる清水かな　麥翅

もとより品高き句にはあらぬを、能くもかゝる事まで俳句にはしたるよと思はしむる處、作者のはたらきなり。句意は三伏の暑き天氣にかわきたる咽元を濡さんと冷たき水を飲めば、其水が食道を通過する際も胸中ひやゝかに感ずる所を詠みたるなり。

人の仕善

一、折つて後もらふ聲あり垣の梅　沾徳

といふ句は意匠卑俗にして取るに足らずと雖も、中七字のはたらきは俳句修學者の注意せざるべからざる所なり。餘所の垣根の梅を折つて今や歸らんとする時、貰ひますよと一言の捨言葉を殘したるを「もらふ聲あり」と手短かに言ひたる、さすがに老熟と見えたり。但此句の價値をいはゞ一文にもあたらず。

一、絶頂の城たのもしき若葉かな　蕪村

句意は聞えたる迄なり。或は絶頂といふ漢語あるを見て窮策に出でたりといひ、或はことさらに奇を好みたりといふ者あらん。然れども蕪村は奇を好まず、又窮策をも取らざるなり。特にこゝにいたゞきとはいはずして絶頂といひし所以の者は、「ぜつちやう」といふ語調の強きがために山いよ／＼險なるを覺え、隨つてたのもしきといふ意ます／＼力を得て全句活動す可し。又若葉の候と定めたるも、初夏草木の青々茂りて半ば城樓を埋めたる處は最も城の堅固なるを感ずべし。若し冬季を以て城樓に結ばゝ崇峻古城の感

を增すを以て、「たのもしき」といふ語は不適當となるべし。

一、學生俳句に多くの漢語を用ゐて自ら得たりと爲すも、佶屈に過ぎて趣味を損する者多し。漢語を用ふるは左の場合に限るべし。

漢語ならでは言ひ得ざる場合
漢土の成語を用ふる場合
漢語を用ふれば調子よくなる場合

一、現時の新事物は俳句に用ゐて可なり。但し新事物には俗野なる者多ければ選擇に注意せざるべからず。

第七　修學第一期

一、修學は第三期を以て終る。

一、第二期に在る者已に俳家の列に入るべし。名を一世に擧ぐるが如き亦難きにあらず。第三期は俳諧の大家たらんと欲する者のみ之に入ることを得べし。一世の名譽に區々たる者の如きは終に此期に入るを許さゞるなり。

一、第三期は卒業の期無し。入る事淺ければ百年の大家たるべく、入る事深ければ萬世の大家たるべし。

一、第二期は天稟の文才ある者能く業餘を以て之を爲すべし。第三期は文學專門の人に非ざれば入ること能はず。

一、第一期は淺學なる者、懶惰なる者、猶能く之を修むべし。第二期は鋭敏なる者・篤學なる者に非れば入る能はず。

一、第一期は知らず／＼の間に入り居ることあり。第二期は自ら入らんと決心する者に非れば入るべからず。

一、文學專門の人と雖も自ら誇り他を侮り研究琢磨の意なき者は第二期を出づる能はず。

一、一讀を値する俳書は得るに隨つて一讀すべし。讀み去るに際して其書の長所と短所とを見るを要す。

一、俳句につきて陳腐と新奇とを知るは最も必要なり。陳腐と新奇とを判ずるは修學の程度によりて其範圍を異にす。俳句を見る事愈々多ければ其陳腐を感ずること隨つて多かるべし。第二期に在る者初學の俳句を見れば只々其陳腐なるを見る。第三期に在りて第二期を見る、亦此の如きのみ。而して能く新陳兩者の區別を知るには多く俳書を讀むに如かず。

一、業餘を以て俳句を修する者、自己の句と古句と暗合するあるも妨げず。只々第三期に在る者は暗合を以て其陳腐を抹殺し得べきに非ず。偶々以て自己の淺學を證するのみ。

一、空想よりする者、寫實よりする者、共に熟練せざるべからず。非文學的なる者をして成るべく文學的ならしむるの技倆も具備せざるべからず。

一、空想と寫實と合同して一種非空非實の大文學を製出せざるべからず。空想に偏僻し寫實に拘泥する者は固より其至る者に非るなり。

一、俳句の諸體に通ぜざるべからず、自己の特色無かるべからず。

一、俳書を讀むを以て滿足せば古人の糟粕を嘗むるに過ぎざるべし。古句以外に新材料を探討せざるべからず。新材料を得べき歷史地理書等之を讀むべし。若し能ふべくんば滿天下を周遊して新材料を造化より直接に取り來れ。

一、俳句以外の文學にも大體通曉せざるべからず。第一和歌、第二和文、第三小說、謠曲、淨瑠璃類、第四支那文學、第五歐米文學等なるべし。

一、文學を作爲するは專門家に非れば能はず。和歌を能くして俳句を能くせず、國文を能くして漢文を能くせざるが如き、強ち咎むべきに非ず。然れども文學の標準は各體に於て各地に於て相異あるべからず。故に和歌の標

準を知りて俳句の標準を知らずといふ者は和歌の標準をも知らざる者なり。俳句の標準を知りて小說の標準を知らずといふ者は俳句の標準をも知らざる者なり。標準は文學全般に通じて同一なるを要するは論を俟たず。

一、文學に通曉せざるべからざるのみならず、美術一般に通曉せざるべからず。文學の標準は繪畫にも適用すべく、彫刻にも適用すべく、建築にも適用すべく、音樂にも適用すべし。

一、俳句の標準を得る者、和歌を解釋し得ざれば其美不美を斷ずべからず。漢詩、歐詩を解釋し得ざれば其美不美を斷ずべからず。繪畫、彫刻、建築、音樂を解釋し得ざれば其美不美を斷ずべからず。故に俳人は深く入ると共に博く通ぜざるべからず。

一、文學に通曉し美術に通曉す、未だ以て足れりとすべからず。天下萬般の學に通じ事に當らざるべからず。然れども一生の間に自ら實驗し得べき事物は極めて少數なり。故に多く學び博く讀まんと欲せば書籍によるを最良とす。歷史は材料を與ふべし、地理書は材料を與ふべし、其他雜書皆多少の材料を與へざるは無し、

一、極美の文學を作りて未だ足れりとすべからず、極美の文學を作る益〻多からんことを欲す。

一、一俳句のみ力を用ふること此の如くならば則ち俳句在り、俳句在り、則ち日本文學在り。

第八　俳諧連歌

一、易、源氏、七十二條など其外種々の名稱あれども多くは空名に過ぎず。實際に行はるゝ者は歌仙を最も多しとし、百韻之に次ぐ。

一、歌仙は三十六句を以て成り、百韻は百句を以て成る。長句、短句に拘らず之を一句といふ。發句と最後の一句を除きて外は各句兩用なるを以て、歌仙には三十五首の歌、則ち長句短句合したる者あり、百韻には九十九首の歌あるわけなり。

一、歌仙は長に過ぎず、短に過ぎず、變化度に適せり。故に芭蕉以後は歌仙最も多く行はれたり。初學の人連句を學ぶ、亦歌仙よりすべし。

一、連句は變化を貴ぶ故に其打越一句置いて前の句に似るを嫌ふ。卽ち第三の句は第二句に附くこと言ふまでも無く、而して第一句とは成るべく懸隔せるを要す。蓋し第一句、第三句共に第二句に附く、故に兩句動もすれば同一の趣向となり、或は正反對の趣向(黑と白、男と女、戰爭と平和等の如し)となるを免れず。同一の趣向の變化せざるは勿論にして、正反對の趣向も亦變化せざるものなり。

一、二句去り、三句去りなどゝいふことあり。何句去りとは何句の間其物を詠みこむを禁ずといふことなり。例へば竹は木に二句去りなりといへば、木を詠み込みし句より後二句の中に竹を詠まれぬが如し。此等の法則は餘りうるさき樣なれども、つまり法則的に變化せしめんとの意より出でたる者にして、愚人に連歌、連句を敎へんがためなり。苟も變化の本意を知る者はかゝる人爲の法則に拘泥するに及ばず。唯〻我が思ふまゝに馳驅して可なり。試みに芭蕉一派の連句を披き見よ。其古格を破りて縱横に思想を吐き散らせし處常に其妙を見はすを。

一、古來定め來りし去り嫌ひは稍〻寬に過ぐるを憂ふ。二句去り、三句去りといふもの多くは五句も六句も去らざれば變化少かるべし。

一、歌仙は分ちて表六句、裏十二句、名殘の表十二句、名殘の裏六句となす。

一、月花の定座なる者あり。そは月と花とを詠みこまざるべからざる句をいふ。即ち月の定座は表の第五句、裏の第七句、名殘の表の第十一句とし、花の定座は裏の第十一句、名殘の裏の第五句とす。但し此句と固定せるにはあらず、時に應じて種々に動くべし。

一、表六句(百韻は八句)には神祇、釋教、戀、無常、述懷、人名、地名、疾病等を禁ず。窮屈なるやうなれども一理なきにあらず、從ふべし。元來歌仙全體を一つの物と見る時は、表は詩の起句の如し、故に此處は成るべくすらりとして苦の無き樣に致し、以て後段に變化の地を殘し置くなり。二の表は更に變化を要する所なりとぞ。

一、脇(第二句)には字止といふ定めあり、字止は名詞止なり。第三には「て止」といふ定めあり。此等あながち固守すべきにもあらねど、亦一理なきにもあらず。初學は古法に從ふべし。

一、春秋二季は三句乃至五句續き、夏冬二季は一句乃至三句續くを定めとす。時の宜しきに從ふべし。

一、月といふ者必ずしも秋月たるを要せず。殊に裏の月は秋月ならぬ方却て宜しからん。

一、花といふ者必ず櫻花なるを要せず、梅、桃、李、杏固より可なり。他季の花を用ふる亦可なり。花と言はずして櫻といふ固より可なり。各人の適宜に任すべし。

一、戀を一句にて棄てずといふ定めあり、從ふに及ばず。

一、百韻は初折表八句裏十四句、二の折表十四句裏十四句、三の折表十四句裏十四句、四の折表十四句裏八句なり。

一、百韻の月の定座は表の終より二句目、裏(名殘の裏を除く)の九句目なり。花は裏の終より二句目なり。百韻にては殊に月花の定座に拘泥すべからず。

一、百韻は長き故にともすれば同一の趣向に陷り易し。全體の變化に注意すること最も肝腎なり。一句々々の附工合も歌仙に比すれば親句(ぴつたりと附きたる句)多かるべし。然らざれば窮屈なる百韻となり了らん。

一、規則附樣等一々に說明し難し。古書に就いて見るべし。

一、俳諧連歌に於ける各句の接續は多く不即不離の間にあり、密著せる句多くは佳ならず、一見無關係なるが如き句必ずしも惡しからず。切なる關係なしとは見えながら又前句と連續せざるにもあらざる處に多く妙味を存するなり。初學のために一例を擧げて解釋すべし。

一、左に錄する俳諧連歌は十八句より成り、召波十三回の追善會に興行せし者と知らる。脇起とは其座に居らぬ人の俳句を發句(第一句)として作る者にて、追善の場合に亡き人の句を發句とすること普通の例なり。これも亦しかなり。

一、冬ごもり五車の反古のあるじかな　召波

五車の書といふ支那の故事を轉じて反古となじ、反古の多きことを言へる者にして、冬ごもりの書齋狼藉たる樣なるべし。

一、ひとり寒夜に缻うつ月　維駒

維駒は召波の子なれば脇を著けたるなり。發句冬季なれば此の句も冬季にて受けたり。缻は缶の意にて「ほとぎ」と讀ましむる者か。缶は瓦器にして酒を盛る者なるを、秦人は之を擊ちて樂器となすとかや。五車の書といふこと支那の故事を引きたれば、脇も亦缶といふ支那の樂器を引用したるなり。但しこゝは支那の樂器を持出して擊つといふにはあらず、有り合せの瓶などを叩きたることをいへるなり。前句との附樣は冬籠りの中にある月あか

き夜、酒うち飲みて醉ひたるまゝに瓶など打ち叩きたるといふ趣向なり。

郊外何荽やらん畑して　鐵船

初五文字何荽と讀むやらん、「かうぐわい」と四音に讀むにや、又は「郊外に」とあるべきを字の脱けたるにや、或は外に讀み様あるべきか知らず。前句との附様は前の街打つ月といへるを町はづれなどの侘住居と見たる故に郊外の景色を見るがまゝに述べたるならん。此句雜の句なり。冬季は二句續くが普通の例なり。

流れの末の水は二筋　臥央

これは只ゝ前句を受けて郊外の景色を更に述べ添へたる迄なり。

枝伐て一のまぶしを定むらし　蕪村

まぶしとは獵師が木の枝などを地に刺し、其陰に隱れて鐵砲を放つものなりとぞ。一のまぶしとはまぶしいくつもあるうちに第一に射撃すべき處をいふにやあらん。此附様は前句の「流れの末の水は二筋」といふを山中の谷間の景色と見て、さて附様に獵師の様をばいひて郊外の景色を轉じたるなり。此句普通には月の定座なれども、脇に月を置きたる故にこゝには置かれぬ定めなり。

鶏の太郎が先づ口をきく　百池

附様は前の山畑に鹿など來るやと身を隱し息を殺して待ち居る處に、鶏の太郎が先づ物を言ひたるとなり。此口をきくとは何事を言ひたるや、そは定かならねども大方は鹿の來るを見つけて「來た〳〵」などゝ口走りたるならんか。

新宅の夏を住みよき柱組　也好

此句は全く趣向を轉じたり。附様は新築成りて其祝ひに（祝ひならずともよし）幾人か集まり居たる處に、鶏の太郎が一番に口をきゝたりといふことにしたるなり。

水打ちそゝぐ進物の鯛　春坡

此句は前の新築の祝ひに鯛を遣したるなり。水打ちそゝぐとは鯛の腐りかけたるを防ぐなるべし。此句夏季にはあらねど水打ちそゝぐといふは夏季に最も適切なり。

裂けやすき絲の亂れの古袴　正巴

これは前句祝宴なるが故に、祝宴の時に古袴ひきつくろひたるさまを敍したるなり。前の腐れ鯛に對してこゝには古袴の破れて絲のほつれたるを附けたる作者用意の處なり。

妻を尋ね往〳〵夜半の啼きに　之兮

妻はめと讀むなり。此附様は全く一轉じたり。さるべき戀の執心より人の妻を奪ひ行く其身なりもしどろに袴など裂けたるさまなり。前句の「絲の亂れの」といへるさま戀歌の言葉にて、如何にも主の心まで亂れたらんやうに見ゆるからに、此句は戀となしたるなり。但し袴といふにより此戀は門地ある人の戀と知るべし。（こゝにては前句の袴を女の袴と見たるにや）

ちら〳〵と雪降る竹の伏見道　道立

これは前句の妻を奪ひ行く夜道のさまを述べたるものにて戀の句にはあらず。前の戀は都の位ある人のしわざと見つけて、さては伏見と置きたるなり。伏見より竹を思ひ、竹より雪を思ふ。この清麗なる雪中の竹藪を以て前の上等社會の戀に酬ふ、亦用意周到の處なり。

小荷駄返して馬嘶ふらん　哉明

此句は只ゝ伏見邊郊外の景色なり。小荷駄返してといふ意何の事にや。荷主に荷を返すことをいふか。

泣く〳〵も稻を出だす暮の月　自笑

前句を只ゝ夕暮の淋しき景色と見て此附ありたるならんか。但し田舍にては夕暮に稻を出す處多し。此句月を入れて秋季なり。

よからぬ酒に胸を病む秋　佳棠

句の表は悪き酒を飲みて胸わるくなりたりといふ迄なり。されど其裏面にはさらでも人を失ひたる悲みに胸つかへたる頃を、焼け酒飲み過ぎて猶胸苦しさよとかこちたるさまをも見せたり。前秋季なれば此句も秋季にて受けたり。

小商ひ露のいく野の旅なれや　湖柳

此句は小商人の旅にて、わろき酒など飲みて鬱を晴さんとするに、なか〳〵胸につかへたりといふなり。いづれも秋の淋しき處より案じ出だせるなり。此句露とある故秋季なり。

燕來る日の長閑なりけり　湖嵓

此句は只々旅路のさまをいひたるなり。前句は秋季にて此句は春季なり。之を「季移り」といふ。此場合には前句を春季の句と見なして此句を附くるなり。露は秋季なれども春にも露あること勿論なれば、春と見なしても差支無きわけなり。

反古ならぬ五車の主よ花の時　几董

反古ならぬ五車の書の主といふ事なるべきを、發句に照應して反古ならぬとは言ひたり。斯様に發句に照應せしむること定則にはあらず、便宜の沙汰なり。此句花の定座にして花あり。

春や昔の山吹の庵　田鶴

これは只々五車の主の住居を山吹など咲きたらんと見立てたるなり。「春や昔」と懐舊の意にものしたるは、これも追善の意を含ませたるなり。

一、此連句にて各句の附工合はそれ〴〵に味ひありて面白し。只一句として面白き一句は

水うちそゝぐ進物の鯛
裂けやすき縦の亂れの古袴
妻を奪ひ行く夜半の暗きに
ちら〳〵と雪降る竹の伏見道
なく〳〵も棺を出だす暮の月

などなるべし。

（明治二十八年十二月十一日—十二月三十一日）

俳句問答

度外におかれたる俳句は漸く士君子の注目する所と爲りて、贊成の聲多きと共に反對の聲も多く、さまざまの疑問を受け嘲弄を受くるも隆盛に赴かんとするしるしなるべし。嘲弄を受け擯斥を被る者俳句の罪か、はた俳人の罪か、吾之を知らず。贊成を得、賞揚を受くる者俳句の功か、はた俳人の功か、吾之を知らず。吾は世の毀譽に關せず、自ら行かんと欲する道を行く者、敢て門戸の見を張らんとも思はず、敢て俳宗信仰者を増さしめんとも思はず、とはいへ疑問を發する人に向つては答辯を與へ、誤り想へるに向つては其誤りを正すこと、亦吾等の義務なるべきか。こゝに俳句問答を記して人の疑問に答ふる所以なり。疑問ある人は疑問をたまへ。吾が答へ得るだけは之に答へん、嘲弄せんと欲する人は嘲弄をたまへ。嘲弄を受けて吾れ心に恥づる所あらば翻然として過を改むべし、疑問又疑問、嘲弄又嘲弄、願はくは吾道の榮ゆるか否かを試みん。

○問　高尚なる和歌漢詩を捨てゝ野卑なる俳句に志すこと何故ぞ。

答　高尚と言ひ野卑と云ふこと思想言語の上にこそあるらめ、韻文の形の上にはあるまじ。和歌漢詩の野卑なる者少からず。俳句に高尚なる者少からず。そは作る人の心一つなり。月並連の俳句野卑なりとて一般俳句を野卑なりといはゞ、盗跖、五右衛門あるが爲に人間を皆盗賊なりともいふべからん。いはれ無き事なり。

○問　韻文の形の上に高尚と野卑との區別無きか。

答　全く無しとにもあらず。長歌類にて言はば五七調はおもおもしく七五調はかるがるし。重き者は高尚に傾き易く輕き者は野卑に流れ易し。短歌と都々逸とを比すれば七音の句を以て終りたる短歌は重く、五音の句を以て終りたる都々逸は輕し。片歌と俳句とを比するも片歌重くして俳句輕し。然れども是れ比較上に多少の區別あるのみ。實際に於て吾人の高尚と感じ野卑と感ずる者、多くは其思想に因る。重きもの固より善けれども、重きばかりが善きにもあるまじ。輕くとも俗氣無くば面白きもの多し。あながちに五七調を取りて七五調を捨つるは僻見なり。さりとて七五調ばかりを佳調と思へるは輕快を知りて莊重を知らざるなり。短歌を取りて俳句を捨つるも僻見なり。俳句を取りて和歌を捨つるも僻見なり。

○問　去る二十日御登載に相成候「雪隱の壁崩れけり春の月」「街道は馬糞多し桃の花」の二句の如きは題と申し調と申し感服の外無之候。其臭氣の程も思ひやられ申候。此等をば妙句と申候にや。

答　巧拙は比較的のものなれば一句許りを取りて十分に評定し難けれども、此句は文苑中に在りても上乘の句にては無し。さりとて月並連の俳句に比してさまで劣るべうも覺えず。若し此句を讀みて臭氣に堪へずとならば「脫肛の風に枇杷の花見かな…鬼貫」「大とこの糞ひりおはす枯野かな…蕪村」「いばりせし蒲團干したり須磨の里…蕪村」などの古句を見て何とか思はるゝならん。馬糞の句などは古來甚だ多し。枚擧に堪へず。此等の題目好みて用

ふべきものに非れども、世には糞臭よりも甚だしき者少しとせず。中にも吾等の最も嫌ふ所は銅臭なり。句の中に銅臭といふ文字無ければそれにて善きやうに思はるゝ輩つまりは知らず、吾等より見れば世上の俳句（に限らず和歌、漢詩、小說等）銅臭無き者は極めて稀なり。是れ馬糞を以て比較的に臭からずとするわけなり。されども馬糞は野道にちらばりてこそ野趣ありておもしろけれ、馬糞を錦に包みて床の間に置きたらんには吾之を取らず。

○問　近頃の俳句を見るに十七字にはあらで十八字、十九字、其外二十字にも餘れるなど少からず。それにても差支無きにや。

答　差支あるか無きかは俳句の定義を附したる上ならでは論じ難し。若し十八字、十九字等の句にして俳句といふべからずといふ人あらば、之を俳句といはずとも可なり。假に稱して十八字の新體詩、十九字の新體詩、二十字の新體詩ともいはん。吾ははじめより俳句を作らんとて骨を折るに非ず、只ゞ吾感情を現はさんとて骨を折るなり、其骨折りの結果が十七字となるか、十八字となるか、はた二十字以上となるかは豫期する所にあらず。

○問　俳句の名義の事は必ずしも言はず。音調の上にて十八字、十九字、二十字などありてはなめらかに行かぬやうなり。そは如何のものにや。

答　音調の善きと善からざるとは十七字の中にも區別あり、況して字餘りの句には猶更有ることなり。散文の上にも多少の音調あり、況して韻文の上には其必要言ふ迄もなし。されども歌は三十一文字ならでは音調惡しく、俳句は十七八文字ならでは音調惡しと一すぢに思へるは謬りなり。例へば十七字の句を吟ずるに適當なる音調を以て十八字の句を吟じ試み、これは一字餘りて音調惡しなどゝいふは所謂琴柱に膠する者なり。又なめらかに行かぬといふも美の標準の誤れる者なるべし。從來我邦の美術文學には優美といふことを主とせり。其の優美といふはこゝになめらかと言へると同じ意に用ゐられたるが如く、從つて歌などはやさしきことをのみ貴びて今に及べり。俳句は歌程にもあらざりしかど、猶優柔なる方に傾きしかば、天保以後には強き句もなく字餘りの句も作らぬやうにはなりたり。吾は美術文學何にてもやさしきと強きと相對して始めて面白き者なりとぞ思ふなる。やさしき處の面白きと同じく強き處も面白しと思ふ故に、音調の上にてもやさしくなめらかなるのみを好まず、強きことを言ひたる句は強く澁りたる音調を以て之に副へんと欲するなり。されば強き句をものせんとすれば、自然と漢語を用ゐ其句法を用ふるに至ること多し。世人或は字餘りを以て語の窮せるものと爲すは誤れるの甚しきなり。強き句には（又其外の句にても）ことさらに字を餘して句調を取ること少からぬことなり。さりとて佶屈なるを喜ぶにはあらず。誤ること莫れ。

○問　「梅も咲柳青みぬ冬木町……峯雄」といふ句は善き句なるか。又惡からば何處が惡きか示されたし。

答　此人にしては善き句なるべし。梅と柳とを重ねて用ゐたる處、「青むや」と言はずして「青みぬ」といふ處、共に新派の格調なり。新派の勢力は斯る老人に迄及ひたるにや。されども梅と柳とを對しながら一には「梅も」とものの字を添へ、一は只ゞ「柳」とばかり言ひはなしたる處、いと〳〵拙きわざなり。「梅も」と言はゞ「柳も」と言はざるべからず、只ゞ「柳」とばかり言はゞ只ゞ「梅」とばかり言はざるべからず。寧ろ改め

て「梅白く柳緑なり冬木町」と爲すに如かず。「白き梅」と「緑」と言ふ形容詞を用ふるは「咲く」「青む」と言ふ動詞を用ふるの冬木町に對して適切なるに如かずと爲す者あらん。そはともあれ原句のかたはなるに比すれば改竄せし方少しはまさりてんや。

○問　さきつ頃雪隱云々の問に對し鬼貫、蕪村等の古句を擧げ何とか思はるゝ云々との御答に候處只ゝ鼻をつまむの外無之候。御答の要旨は古句にも斯の如し、故に雪隱等を用ゐても可なりとの事にや。是れ實に意外の事に候。いたづらに古人呼ばはりするが如きは主人平日の御持論とも撞着致候やうなり。且つ斯の如き、きたなき題目は主人も認めらるゝが如く決して吟味の好題目にあらず、詩の範圍外は自ら別に存するものと信ず。如何。

答　古句を徒に擧げたるは古人といふ名を崇拜するより出でたる事にあらず。只ゝ參考のためにこゝを記し置きたるなり。且つ蕪村の二句の如きは得易からざる名句にして、何等の臭氣をも感ぜざるのみならず、十分に雅致を具へたる、此等の題目を取りて斯く迄に言ひこなしたる腕力の程も恐ろしく、此句ばかりにても蕪村の値打を知るに足る者あればことさらに掲げ出だしたり。又「きたなき」の一語を以て排斥せらるれども、そは少し受け取り難き處あり。若し此論據を以て進まば金殿玉樓は野店茅屋よりも美、美術の美なりに、田舍雲客は貧父老圃よりも美に、麟脯熊掌は豆腐蒟蒻よりも美なりと言はざるべからず。是れ固より今日の幼稚なる美人の幼稚なる感情にして、少し心ある美術家、美學者は斯る妄見を抱かざるべし。金殿玉樓に美術的の事多し。然れどもそれと同じ位の美の分量は野店茅屋の中にも存するなり。現に芭蕉一派の俳人は美の本體を以て野店茅屋の中に在せりと認め、傾向さへあり。牛溲馬勃亦必ずしもきたなきの一語を以て排し去るを得んや。況んや蕪村の句の如きは少しもきたなからざるをや。但し美は比較なり。實物を取て比較するに非ざれば到底其價値優劣を判じ難し。今試みに左の斷案を下さん、曰く、前に記したる蕪村の二句と几董、千代、士朗、蒼虬等の家集中の句とを比較するに、一句として蕪村の右に出づる者無し。又蕪村集中の句を上下の二等に分たば彼二句は上の部に屬す。（雪隱、馬糞等の題目が俳句界中の極小部分を占有するに止まるは論を俟たず）

○問　俳句の内容如何。

答　美術文學の定義さへうまく言ふことを知らぬ吾等、俳句の内容は斯く／＼と明言する能はず。されど若し文學の内容既に分り居らば、俳句の内容を説くこと固より易きのみ。曰く、俳句は十七八字に限り（一樣五七五的の音調を備へ）たる文學なり。但し十七字以上幾字迄を俳句とし、音調には幾何の變化を許すやといふに至りては、古來一定したる説も無く、亦今日之を定むべき方法も知らず。例へば二十二三字の一句ありとせんに、之を俳句と言はんとも片歌と言はんとも新體詩と言はんとも各人の隨意たるべし。名目は文學を作る上に必要ならず。又必要ありとするも到底截然たる區別を附すべからざるなり。

○問　「一[illegible]もらはるゝ[illegible]かな」といふ句の意義如何、又其好惡如何。

答　此句などこそ彼俳偕者流の俳の極に達したるものなれ。此意義は人とつれだちて野外をありくに、つれの人路端の草一もと二もとを摘り取り内へ持ち歸らんとするに、そを包むべき紙をこひければ懐紙をやりたりといふ事にてもや

あらん。それにては謎に類して感情に訴ふること少ければ、已に面白味の大部分を殺がれたり。俗宗匠輩は遠廻しにいふを婉曲なりとて喜ぶもの多し。婉曲といふは多く議論などに用ゐられ、純粹の文學、殊に俳句などには餘り必要ならず。況して謎の如きものをや。言葉の事は言はず、趣向の上ばかりにて言ふも、菫を紙に包んで取つて歸るといふだけの事は陳腐でもあり、又何の面白みもなきことなり。さりながら菫を紙に包んで取つて歸るといふ事を直敍すれば猶可なり。それをさらも言はずして己を傍觀の地位に置き、懷紙をねだられたりとは何等の殺風景ぞ。此趣向にて美と感ずべき處は菫のあはれなると、それを愛する人の心のやさしきとに在り。然るに此句の作法は重みを兩者に歸せずして、却て落ちを傍觀者たる自己に取らんとす。此輩到底美も文學も解した者に非ず。作者は古人に「鼻紙の間に萎む菫かな…園女」といふ名句あるを知るや知らずや。

○問 貴紙上に於て死木とか申さるゝ人、體の解剖を御始めなされ候　猶此後には赤裸體、起立體、横臥體抔と申すものあらはれ候にや。

答 死木とは子規の事たるべし。子規の何體、何體と分ちて自己の俳句を掲ぐること、何となく人に手本を示すが如き觀無きに非ず。しかも其何體は盡く惡句を以て充滿したるには誰か之に唖せざらん。されど作者はさる大望を起せしにもあらず。又斯る問もあらんと思ひて豫め最初にことわり置きたるなり。兎に角作者は幾多の苦辛を經て成したる者にして、問者の想像せらるゝ如き笑談半分の仕事には非ず。拙劣の譏は謹んで之を受く。僭越の罪は許したまひてよ。

○問 俳諧の上に於て四季は何を以て境とするや。

答 俳諧の四季は即ち暦の四季に因るなり。暦に立春（二月初）、立夏（五月初）、立秋（八月初）、立冬（十一月初）といふことあり。其立春より其立夏迄を春とし、立夏より立秋迄を夏とし、立秋より立冬迄を秋とし、立冬より立春迄を冬とす。故に太陽暦の新年は冬の中なり。然れども冬なるが爲に新年の句を詠まれずなどいふことはあらず、但氣候に關しては多少感情の上に相違あるべし。

附けていふ。さつき頃探し得ざりし「日もすがら」の作例は左の句なり。

蝶々や加茂の芝生に日もすがら　存義

又、士朗句集中蕪村の二句に及ぶ者無しと言ひたるは大體に於て誤りなけれども少し言ひ過ぎたり。

とう／＼と瀧の落ちこむ茂りかな　士朗

の如きは古今有數の句なり。彼二句に劣るべくもあらず。蓋し此句の如きは士朗集中他に儔を見ず。

○問 新年の句に用ふべき題は太陽暦、太陰暦共に同樣と心得て然るべくや。

答 大體は同樣なり。但し「今日の春」「今朝の春」「花の春」「國の春」「庵の春」などいへる題は少し遠慮すべきか。立春より一箇月も前に春といふこと如何やと思はる。さりとて太陰暦の時にても右樣の語は俳諧の上に於て必ずしも立春後に用ゐたるにはあらで、只と年始の意に用ゐたるが多ければ、今日とても年始に用ゐられずとも言ひ難し。若し陽暦の年始に春といふ字を用ふること不穩と思はゞ之を用ゐざるも可なり、はた春の代りに年と置くも可ならんか。即ち花の春、國の春、今朝の春といはずして花の年、國の年、今朝の年といふが如し。又初霞、初東風といふも新年の景物として用ゐ來りしか

ど、是れ恐らくは陽曆の新年に適し難からん。用ゐざるを可とす。

○問　「人寝ねて都もさびし時鳥」といふ句を作りたり。句に成り居るか如何。

答　甚しき無理も無ければ俗氣も無し、さりとて終に平々凡々たるを免れず。一句の趣向平凡たるを免れずとも、しかも少しの言ひ樣にて面白くなることあり。「時鳥平安城をすぢかひに……蕪村」と言へば平凡なる趣向も活動するやうに覺ゆ。此句の言葉を見るに熟せざる所多し、故に何となくたるみて聞ゆるならん。「都も淋し」といふ、淋しの語はこゝに不適當なり。淋しといふは古都抔を形容する語にして、此處は靜かといふべき處ならん。「人寝ねて都靜かなり時鳥」と言はゞ一歩を進むべし。されども猶「人寝ねて」といふ語は面白からず。第一「人寝ねて」といふは多少理窟に亙りたり。若し之を理窟的（主觀）ならず、感情的（客觀）にものせんとならば「灯消えて」「店閉ぢて」「往來絶えて」「犬吠えて」など置かざるべからず。第二、「都靜かなり時鳥」と言はゞ夜半の景は言はずとも知れたり。夜半なればこそ「人寝ねて」は言はずとも知れたり。かたがた以て此五字無用なり。（夜半の景色を重複して言ふとも客觀的の者ならば善し）故に今改めて

犬吠えて都靜かなり時鳥
犬吠ゆる都大路や時鳥

等となさんに猶名句たるを得ずと雖も、原作に比すれば一二歩を進めたるものならんか。

○問　「青嵐若葉の中を汽車が行く」といふ句を作りたり。如何。

答　第一、青嵐と若葉とは重複なり。二つとも同じ光景を現したるなれば、どちらか一つにて澤山なり。第二「若葉の中を汽車が行く」といふ言葉惡し。此言にては汽車の動く處が此趣向の主となるが如く聞ゆ。さありては汽車が通るといふだけに何の趣味も無ければ、此句も何の趣味も無き者となる。此趣向は汽車が通行するといふ汽車の擧動を主とせず、何處迄も若葉の中を汽車が行くといふ其全體の景色を現さんと力めざるべからず。全體の景色より言へば若葉は面積に於て其大部分を占め、汽車は其小部分を占めたること言ふ迄もなければ、句の作りざまも亦若葉に重きを置かざるべからず。即ち「汽車の過ぎ行く若葉かな」といふか、又は「汽車は若葉に隱れけり」等といふを要す。「汽車隱れけり」といふ趣向を用ふれば言葉の如何に拘らず若葉自ら主となるべし。蓋し汽車隱れてあとに殘る者は若葉なればなり。余の舊稿に、汽車見る〳〵山を上るや青嵐」「山にそふて汽車走り行く若葉かな」などあり。拙けれども參考のため記し置く。又「汽車はるかに若葉の中に隱れけり」「少しづゝ汽車隱れ行く若葉かな」などせんに拙劣は免れ難しと雖も、句法は原作に比して少しは勝りたらんか。（若し吾を去る四五尺の内に汽車の通りたる光景を言はんとならば、此の句とは全く趣を異にせり。斯る場所の狹き處には青嵐は用ふべからず）

○問　「秋晴れたあら鬼貫の夕やな……惟然」といふ句瘋く狂せりとのみ見えて象情共に定かならざるが如し。如何。

答　此句惟然坊が伊丹に鬼貫を訪ひし時の句にして、句作の狂せるは惟然の癖なり。されども句意已に狂せる時は句作亦之に應じて狂せざるべからざるが故に、此句の如き意匠に此調子を用ふるは當を得たる者なり。此句秋晴と鬼貫との綜合おもしろく、しかも伊丹の夕とでもいふべきを鬼貫の夕といひたる處、惟然獨擅のはたらきなり。「た」といひ「あら」といひ「や

な」といふ何の意味も無けれど面白し。かゝる謡曲の言葉を意味なく耳だゝぬやうにいふ事、老手に非れば能はず。此句余韻余情抔いふことに乏しけれど、遂に佳句たるを失はず。

〇問　新俳句と月並俳句とは句作に差異あるものと考へらる。果して差異あらば新俳句は如何なる点を主眼とし、月並句は如何なる点を主眼として句作するものなりや。

答　新俳句とは新派俳句の事を謂ふか。新派にも種々あるべく我悉く之を知らず。若し我俳句に就きて言はんか。第一、我は直接に感情に訴へんと欲し、彼は往々知識に訴へんと欲す。例へば「蔵建つる鄰へは来ず初乙鳥：：鶯笠」といふ句は蔵建つる鄰の富家には燕来らずして、蔵も無きわが草の戸には燕来れりとの意なるべし。されば此句の主眼は燕は富を喜ばず貧を嫌はず、寧ろ我家に来るは貧を楽むなりと帰納的に断定する処にあるものにして、即ち知識に訴へたる者なり。是れ我の取らざる所なり。しかも此種の相違は根柢よりの相違なり。第二。我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ彼は陳腐を好み新奇を嫌ふ傾向あり。例へば「黄鳥の初音や老の耳果報：：蓬宇」の如き誰が聞きても陳腐なるべきを、此老俳諧師は今更のやうに作れり。此句の如き必ずしも類句を挙げて而して後始めて其陳腐を知る者にあらざれども、念のために古人の類句を示さんに

鶯の耳に順ふ今年かな　紹巴
鶯や耳これを得て今朝の春　昌察
鶯や耳の果報を数ふ年　梅室

六十の春
鶯に耳面白き今年かな　乙由

の如きあり。殊に梅室の句は最も相類似せるを見る。第三、我は言語の懈弛を嫌ひ、彼は言語の懈弛を嫌ふ事我よりも少し、寧ろ彼は懈弛を好み緊密を嫌ふ傾向あり。例へば「日々に来て蝶の無事をも知られけり：：幹雄」の如き、「をも」の語は懈弛の甚しき者なり。第四、我は音調の調和する限りに於て雅語、俗語、漢語、洋語を嫌はず、彼は洋語を排斥し、漢語は自己が用ゐなれたる狭き範囲を出づべからずとし、雅語も多くは用ゐず。第五、我に俳諧の系統無く又流派無し、彼は俳諧の系統と流派とを存し、且つ之あるが為に特殊の光栄ありと自信せるが如し。従つて其派の開祖及び其伝統を受けたる人には特別の尊敬を表し、且つ其人等の著作を無比の価値あるものとす。我はある俳人を尊敬することあれども、そは其著作の佳なるが為なり。されども尊敬を表する俳人の著作といへども、佳なる者と佳ならざる者とあり、正当に言へば我は其人を尊敬せずして其著作を尊敬するなり。故に我は多くの反対せる流派に於て、佳句を認め又悪句を認む。――以上五箇条の区別は大体を尽せりと信ず。細目は一々枚挙すべからず。

〇問　「今年中こほりつきけり諏訪の舟」といふ句を非難する人あり。如何。

答　非難尤もなり。「今年中」といふは未来を指し、「氷りつきけり」といふは過去を指す。故に此句意解し難くなるなり。作者の意は諏訪湖の舟がこほりつきたるを見て、今年中は氷も解けねば此まゝにあることよと想像したるなり。意匠既に未来の長時間を含む処多少の無理あれば、其無理は知らず〱句の上に現れ来りしなり。改めて「氷りけり諏訪の捨舟今年中」となさんに猶無理は免れねども少しは解し易からんか。我は此種の非難に向つて多謝する者なり。

〇問　「寒き夜や片破月を風の吹く」此句佳句

なりや否や。又惡句ならば何處が惡き。教示を乞ふ。

答　可も無く不可も無き句なり。分けて言はば趣向は可なり、言葉は不可なり。「夜」といふ語最も耳にさはる邪物なり。「夜や」と言ひ放したるも拙く「風の吹く」と押へたるもたるみたり。「凧や片破月を吹いて居る」などゝせば少しは原句に勝りたらんか。

○問　匡子阪を過ぎて「蕎麥の看板古りぬ時鳥」と句を作りたり。如何。

答　句法も材料の取合も尋常にして可も無く不可も無し。只ゝ晝の景色とも夜の景色とも分らぬ處此句の大缺點なり。蓋し初十二字は晝の如く時鳥は夜の如く感ぜらるゝ故なり。

○問　俳句に理窟をいふことの惡きは既に命を聽く、如何なる者之に屬して理窟といふや。又其例として理窟の最も見易き句と、理窟の隱微にして最も見難き句と、理窟の少しも無き句とを示されんことを乞ふ。

答　理窟とは感情にて感じ得可らず、知識に訴へて始めて知るべき者を謂ふ。されども俳句（又は其他の文學）に於て全く知識の活動を許さずと云ふに非ず。例へば記憶は知識に屬すれども、短時間の記憶は殆ど感情と區別すべからざるものにして、之を用ふるを妨げざるが如し。故に吾の理窟と言ふは斯る細微なる知識を含まざる者なり。されば理窟多き句は何の面白き感をも起さゞるべく、之を無趣味とも趣味少しとも評するなり。例へば

つゝしめや火燵にて手のさはること　春澄

の如き全く理窟ばかりを並べたるは無趣味の極度なり。ある人は之を教訓の句として珍重すれども、教訓といふは理窟の内なれば文學にては取らず。又少し理窟ある句の例を擧ぐれば、

駒牽の木曾や出づらん三日の月　去來

といふあり。之を勘定の句なりとて芭蕉は笑へり。勘定といふも理窟の内なり。此句は多少の趣味を具へて前の春澄の句などゝ同日に論ずべきものに非ず。但駒牽は木曾などより駒を牽きて京に上り、京にては八月十五日に駒迎の式あるものなれば、三日頃に木曾を出立したらんと想像する處、勘定即ち理窟となるなり。されどもこれは全くの空想に屬する句に非ずして、作者は八月三日の月を見てふと駒牽に聯想し、終に「木曾や出づらん」と想像したるなり。

且つ此想像は單に理窟の上より想像したるにあらず、三日月と最も善く配合すべき材料を取り得たる者といふべく、若し之を理窟無しとして吟ずれば微妙なる感も起し得べきなり。蓋し此句をして何となく多少の理窟あるらしく思はしむるは句の面に想像たる事を現したればなり。若し中七を改めて「木曾を出でけり」「木曾出て行くや」等と爲さんか、或は拙ならんかも知れねど、理窟は全く消え去るべきなり。又或る雜誌を見るに、

名月や裏門からも人の來る

といふ句あり。外に惡い處とて無けれども「も」の一字はたしかに理窟を含み、此の一字のために全句を殺したり。「も」といふは一箇以上の事物を對照するものにして、此句の面には一箇だけ現れたり。他の一個は此裏面にあるものにして、即ち「表門からも人の來る」といふ事なり。故に此句を言ひ更ふれば、名月の夜は表門からも裏門からも人が來たといふ事實を現せしものとなるべし。而して其事實は一目に見得べからざる場處と稍ゝ長き時間とを要するを以て、人は知識の上に事實を納得するに止まり、感情の上に趣味を感ずること無し。蓋し長時間の記憶と二箇所以上にある事物とを同時に心頭に呼

び來るは多少の知識を要すればなり。若し單に「名月の夜人裏門より來る」といふ其一場の光景を言はゞ一の佳句となるべし。今試みに「裏門を叩く人あり今日の月」と改めん。又全く理窟無き句を擧ぐれば、

音なして畳に落つる椿かな　　呂蕭
襷に陣扇さしたる亭主かな　　蕪村
舟の火の草にうつるや岸の露　　雨谷
足もとへよるや枯野の鶴の影　　且水

の如し。

○問 「冬牡丹千鳥か雪の時鳥」芭蕉と申す句古書に見えたり。句意如何。

答 此句冬牡丹と夏の牡丹と對し千鳥と時鳥と對したり。冬牡丹の時、千鳥の鳴くこと恰も夏の牡丹の時、時鳥の鳴くに等しければ、千鳥を時鳥に譬へて雪中の千鳥を雪の時鳥ともいふべしと戯れたるなり。此句理窟にして面白からず。但句法には多少の熟練を現せり。

○問 「田三枚祖父が世からの田植かな」といふ句、田家の情景自ら備れりと思ふ。如何。

答 情景とあれども此句には景無し。此句を一讀すれば何の景も現れず、只ゝ事實の筋書の感あり。問者は田植の景ありと思へるなるべけれど、「祖父が世からの」といふ來歴を上に冠せては田植まで盡に聞ゆるを奈何せん、故に取らず。

○問 老鼠堂永機は俳諧師中の大家と稱せらる。左の翁の句は名句なりや否や、且つ翁の俳句の位置は如何。「時鳥聰に會ふ夜の若かりし」「夕立の戻りの雲や夜の雨」「霜月やはじめて松の嵐山」「名月やさすがに雲も捨てられず」「若楓ぬれ答かけてうつらせん」

答 老鼠と言ひ永機と言ふ人幾人もありとばかり覺えて能く其人を區別せず。故に此句の作者は如何なる價値のある人か、はた如何なる俳句を詠みしかを知らず。若しこゝに列擧したる五句に就きて見れば、盡く句法のしまりたるは多少の熟練を證せりといへども、意匠は皆輕くして句に重み無し。若し此種の句のみならんには到底二流以下の俳家たるに過ぎず。右五句の中にては夕立、霜月、若楓の句など面白し。名月は俗氣多く最も厭ふべし。

○問 俳句に字餘りの句を見る。字餘りは如何なる場合に於て許されたるか。

答 字餘りの事曾て答へたり。字餘りにして面白き處を字餘りにするのみ。

○問 蓴菜は千年近き沼にあらざれば生ぜずとの事なり。因って「蓴菜や千年の沼大蛇住む」の一句あり。此句如何。

答 蓴菜などの水面を掩ふたる沼は大蛇住むといふ恐しき感を起し難きやう覺ゆ。又蓴菜と大蛇とは形狀又は其他の點に於て配合可ならざるを覺ゆ。故に此句を讀みて何等の感をも起さず。

○問 「道端の筍無事に竹になり」「法さまざま蓮の絲も白きより」の二句紙上に見えたり。然れども前者は芭蕉の木槿の句の翻案の如く、後者は蕪村の七夕の句の焼き直しに似たり。此の如きも猶文學上の佳句と稱すべきにや。

答 翻案は剽竊に非ず。翻案固より可なり。況んや翻案の句、原句に勝りたらんには翻案なるがために毫も價値を落すこと無し。木槿の惡句の如き有りとも無きが如し。蓮絲の句は蕪村の「戀さまざま願ひの絲も白きより」の調を其まま取りたる處に於て何の手柄も無し。只ゞ之を蓮絲の曼陀羅に轉用したるがために一點の新趣

味を生ぜしのみ。此一點の新趣味あるがために之を捨てず。

○問　雜の句は如何なる場合に詠むべきか。又其價値如何。

答　雜の句は古來作例甚だ少く、一向に面白しと思ふ者無し。たま〳〵に面白しと思ふものは表面に季無くとも自ら季を含みたる者なり。即ち其句を吟じて自ら夏とか秋とか感ぜらるゝ句なり。故に雜の句なる者は價値甚だ低し。然れども雜の句の出來たる場合には其を捨つるにも及ばざるべし。（俳諧大要參照）

○問　「凩や何に取つく夕鴉」の句一再高教を蒙る、今高說を反覆熟讀して其無理を發見するを得たり。己はいかにせしものか何に取りつくの下にやらんの言葉を添へて解し居たるなり。然れば仰の如く中七字いまだ言ひおほせず。然れどもまた「取りつきかぬる」「吹き飛ばさるゝ」あるは「とまりかねたる」「梢にさわぐ」等にては、いまだ木梢のすさまじき光景を現はすに足らず。因つて中七字を「何にとまらん」又は「何に取りつかん」と改め見たり。これにては如何。高教をこふ。

答　前日答へたる所と反問とは全く論點を異にせり。「何に取りつく」といふ語は言ふ迄も無く「何に取りつくやらん」の意なり。此點に於て初めより他の解釋を爲しゝことなし。前日論ぜし處は森林の意句中に現れずと言ふ處にありたり。然るに「何にとまらん」「何に取りつかん」など〻改めたりとも、森林の意の現れざるは原句と異なることなし。況んや此改竄は原句と全く同一なる意味を言ひ換へて、しかも句調のたるみを見るのみ。此の如き改竄を爲さんよりは原句の儘に存するに如かず。

○問　槿花と木槿との區別如何。

答　槿花は、朝顏なり。木槿は「むくげ」なり。「むくげ」は垣などにもして花は白きと紫めきたるとあり。東京の俗語「はちす」といふ。

○問　「其若葉其時鳥二尊院」といふ句、日本紙上に見えたり。てにはなくとも宜しくば「丸木橋土橋藤橋閑古鳥」の句は如何。

答　てにはなくとも俳句になるべし。二尊院の句は其處の景色を現したるものなれど、閑古鳥の句は一處の景色とも見えず、其意解し難し。これにては俳句にならぬなり。

○問　俳句を學ばんとするには古人著書中初心に適する者何なりや。

答　初心に適する者とて小學讀本の如きは無し。たま〳〵初學者を指導すべきために作りたる書（苧環、眞木柱の如き）無きにあらねど、全く邪路に陷りて或は文學以外に度りたりと覺ゆる處少からず。此等は讀むべからず。初學者には類題の集こそ善かるべけれ。俳諧七部集、蕪村七部集、類題發句集、俳諧新選、題林發句集、新題林發句集、三傑集、故人五百題等先づ讀むべき書なり。各家の集も漸次に味ふべし。

○問　「綠陰に餘花妾むるか日永人」の句、日本紙上に見えたり。單に日永人とのみにて日の永き折の人と云ふ義に解し得べきか。古句あるは古文學書類に此語を用ゐ置きたるものありや。日永人として通ずるものとせば之と同一例なる夜長人、日短人、夜短人などの語は如何。

答　日永人の解、貴說の如し。此語古書にもなかるべし。夜長人は使ひやうに由りて句にもなるべし。日短人、夜短人は音調惡きために句にはなるまじ。總て斯樣なる言葉は音調に由

る者頗る多きを以て、一例を以て他に推し及ぼすべからず。例へば春風（はるかぜ）秋風（あきかぜ）と言へど夏風（なつかぜ）冬風（ふゆかぜ）とは言はず。短夜（みじかよ）と言へど永日（ながひ）とは言はず、日永（ひなが）と言へど夜短（よみじか）とは言はぬが如し。

○問　「ぬかづけば波に音なし川社」の句は頗る作句なりと思考せらる。果して然りや。

答　作句にあらず。第一に此句意解すべからず。一波に音なしとは細波を形容したるか、或は今迄波だちしものが静まりたりとの意か。いづれにしても此語にては不完全なり。其上に「ぬかづけば」と置くこと「ぬかづきたるがために」の意と聞ゆ。ます〳〵解すべからず。若し神にぬかづきたるがために波静まりたりと解せんか。此の如き事實際にあるべからず。實際ならずとも働く感ぜらるゝ事は實際に準じて不可なるなれども、今迄波だちたるものが瞬間に静まるといふことあるべからず。若しぬかづきたるがために波の音聞えずなりたりと解せんか。さる事もあるまじく、縦しありたりとも聞えずなりたるものを特別に取り出でゝいふ必要はなかるべし。寧ろぬかづきて水聲を聞きたりとならば多少の趣味はあるべきものを。兎に角に此句作句にあらず、惡句なり。

○問　「百姓の雨乞するや村社」といふ句、平々凡々と思ふ。併し惡句にもあらざるが如し。如何。

答　平凡の中にも取るべき者あり、又全く取るに足らざる者あり。此句平凡にして全く取るに足らざる者なり。蓋し雨乞と言へば普通に百姓の雨乞する事をいひ、百姓の雨乞と言へば普通に村社などにて祈るなり。されば此句は雨乞を解釋したるに等しく、何等の面白味をも感ぜず。恰も「裸になりて泳ぐ」「物をそなへて魂を祭る」「燈籠に火をつけて檐端に掛く」といへらんが如く、到底俳句とは言へぬなり。

○問　俳句を見るに其の題の主となり居らざる者あり。これは如何なるわけにや。

答　俳句にて題を主とすると主とせざるとは各自の好む所に從ひて可なり。從來の宗匠連は兼題又は運座の題などは題を主とするの傾向あり。されども漢詩の詠物の如きにはあらず、はた和歌の題に比しても猶多少寛なる處あるべし。吾は俳句の題は只ゞ其題の詠み込みてだにあらば可とす。また其主たると客たるとを問はず。「文字結」とは異なり、故に梅の題に梅と鶯とを合せて詠むも、それを題にかなはずとは言はず。蚊の題に蚊の居らぬ樣を詠むも逆法とは言はず。月の題に大佛を詠み合せて大佛が主となり月が客となるともそれを捨てず。此の如く吾の定めたる原因は種々あれども、主として題詠の區域を廣くし自由に思想をはたらかしめんとするに在り。但し以上言へる題は花、月、雪、風、鳥、凧、燈籠等の簡單なる物に就きていふなり。送別、留別、祝賀、哀挽、達磨讃、題東坡赤壁圖等の如く複雜したる題を得てそれを詠むは其字を詠み込むに非ず、其題意を取りて詠むなり。されば俳句にて此等の題を詠むは和歌、漢詩にて此等の題を詠むと毫も異なる處無し。（俳句を類題にしたる者は皆其題にて詠みたる句を集めたるに非ず、便宜のために類題にしたるのみ）

○問　其頃乙二の說なりとて記しゝ者を見し中に、遠き名所は妄りに發句に詠むべからず、此事は蕪村、曉臺もしか言ひし事愚老たしかに聞きたり。白雄も席上にて名所の句するは惡し、其の場に臨みてすれば左までならぬ句もめでた

く覺ゆと言へりなどあり。如何のものにや。

答　名所に行きて實景を句にするは當然なり。さりとて席上にて名所の句を嫌ふも理無し。前年見置きたる景色を眼に浮べて之を句にすること更に不可なる無し。只〻未見の名所は詠まざる方が善し。知らぬ所を詠むは實景と違ふの恐れあり。若し實景に違はざらんとせば其名所の特色を現すこと能はず。特色無ければ名所を詠む必要は無きなり。春見たる名所を夏秋又は冬の季にして詠むが如きは、甚しき誤も無かるべければ可ならん。然れども實地を見るが如き感じは到底起らざるべし。未見の地といへども人より聽き、書に讀み、繪畫寫眞にて見などし、自ら其光景眼中に在るかと思ふ程ならば句に作りて可なり。但此の如きは其地に著き特色ある者に限るべし。古來文學上又は歷史上に名を著したる地を、其歷史などに依りて主觀的の句にしたるは、未見の地といへども或は許さるゝことあるべし。

（問　「きり〴〵す」「こほろぎ」「いとゞ」「はたおり」などいへるは皆同じ蟲を言へるにや。

答　「こほろぎ」と「いとゞ」とは同物なるべし。「きり〴〵す」は異なり。「きり〴〵す」は東京などにてしか呼ぶもの是なり。「こほろぎ」は「きり〴〵す」よりも小さく色黑く緣の下にても鳴き、戸棚の中などにも潜むもの、即ち東京にて「こほろぎ」と呼ぶ者なり。「こほろぎや箸で追ひやる膳の上」孤屋「こほろぎや顏に飛びつく袋棚」北枝などいへる古句にて大槪を知るべし。「はたおり」といふは其聲機を織るに似たるより命名したるものなること論を竢たず。機を織るが如き聲を爲すものは前に言へる「きりぎりす」と東京にて「すいつちよ」又すいと、馬追といへる者との二より外あるべからず。東北のある地方にては「すいつちよ」を「はたおり」といふと聞けば、或は是れ正稱ならんか。吾が斯く言へるは俳句に詠む上に於て言ひたるなり。古學者の說によれば古の「きり〴〵す」は「こほろぎ」の事にして、今の「きり〴〵す」は古の「はたおり」たりと言へり。此說或は然らん。然れども今日にては普通に「きり〴〵す」と稱へ來れる者を取つて「きり〴〵す」と詠むこと俳句にては至當なるべし。又所謂「すいつちよ」なる者は古に在りて何と呼びしか。此疑問解けざる間は「はたおり」の解も猶疑無き能はず。俳句にて用ふる漢字は「きり〴〵す」に蟋蟀又は蛬の字を用ゐ、「こほろぎ」に蛬又は蟋蟀又は竈馬の字を用ゐ、「いとゞ」には必ず竈馬の字を用ふ。蟋蟀は「こほろぎ」に當つること然るべし。今の「きり〴〵す」に用ふるは然るべからず。「いとゞ」に必ず竈馬の字を用ふるは習慣に出でたるものにてもあるべし。此事猶考へ見ん。

（明治二十九年五月二日――九月十三日）

獺祭書屋俳話

獺祭書屋俳話小序

老子曰く、言者は知らず、知者は言はずと。還初道人曰く、山林の樂を談ずる者、未だ必ずしも眞に山林の趣を得ずと。政治を談ずる者政治を知らず、宗教を談ずる者宗教を知らず。英佛の法を說き獨露の學を講ずる者、未だ必ずしも英佛獨露を知らず。文學の書を著し哲理の說を爲すもの、未だ必ずしも文學哲理を知らず、知らざるを知らずとせず、而して之を口にし之を筆にし以て天下に公にす、知者は之を見て其謬妄を笑ひ、不知者は之を聞きて其博識に服す。故に之を談ずる者愈〻多くして之を知る者愈〻少し。余も亦俳諧を知らず、而して妄りに俳諧を談ずるものなり。曩に「日本」に載する所の俳話積んで三十餘篇に至る。今之を輯めて一卷と爲さんとす、乃ち前後錯綜せる者を轉置して稍〻俳諧史、俳諧論、俳人俳句、俳書批評の順序を爲すといへども、固と隨筆的の著作、條理貫通せざること多し。況んや淺學寡聞にして未だ先輩の教を乞ふに遑あらざれば謬解僻見亦應に少からざるべし。知者若し之を讀まば郢正の勞を賜へ。若し夫れ俳諧を知らざる者に至りては、知らずして妄りに說を爲す者の言に惑ふ莫れ。

明治二十五年十月二十四日　獺祭書屋主人識

俳諧といふ名稱

俳諧といふ語は其道に入りたるもの〻平生言ふ意義と、一般の世人が學問的に解釋する意義と相異なるが如し。俳諧といふ語の始めて日本の書に見えたるは古今集中に俳諧歌とあるものこれなり。俳諧といふ語は滑稽の意味なりと解釋する人多く、其意味に因りて俳諧連歌俳諧發句と云ふ名稱を生じ、俗に又之を略して俳諧と云ふ。されど芭蕉已後の俳諧は幽玄高尙なる者ありて必ずしも滑稽の意を含まず。こゝに於て俳諧なる語は上代と異なりたる通俗の言語、又は文法を用ゐしものを指して云ふの意義と變じたるが如し。然れども普通に俳諧社會の人が單に俳諧とのみ稱する時は俳諧連歌の意にて云ふものなり。而してこれと區別して十七字の句を發句といふが通例なれども、「俳諧を學ぶ」とか又は「俳諧に遊ぶ」とか云ふが如き場合には、必ずしも俳諧と發句とを區別せずして兩者を包含する程の廣漠なる意に用ふる事も少からず。斯くて終に局外の人をして往々迷を生ぜしむることあり。（余は世上の俳諧仲間に交はりしことなければ場處により其意義に相違あるや否や詳しきことは知らず）

因に云ふ。芭蕉又は其門弟等が俳諧は滑稽なりと稱する其滑稽といふ語は、余が前に述べたる滑稽、即ち通常世人が用ふる滑稽に非ず。只〻和歌の單一淡泊なるに對して其雅俗の言語混淆し其思想の變化多くして且つ急劇なるを謂ふのみ。

連歌と俳諧

俳諧の連歌より出で連歌の和歌より出でたるは人の知る所なり。其始めは一首の歌の上半下半を一二の人して詠みたる程のものなりしが、後には歌の上半即ち十七文字だけを離して完全の意味をなすに至れり。されど足利時代に在りては猶其趣和歌の上の句の如くにして、上代の言語を以て上代の思想を叙するに止まれば、其文學として讀者を感ぜしむるの度は在來の和歌に比して却て之に劣るものといふべし。且つ此時代の發句は所謂連歌の第一句にして、敢てそればかりを獨立せしめて一文學となす譯にあらねば、其力を用ふる事も隨つて專一ならず。之を讀めば多少の倦厭を生ぜしむるの傾きあり。松永貞徳徳川氏の初めに出でゝ連歌に代ふるに俳諧を以てせしより發句にも重みの加はりしかども、其發句は地口しやれ謎等の滑稽に過ぎざれば、文學上の價値に至りては足利時代に比して更に一層の下落を來したりといふも過言には非ざるべし。貞徳派千篇一律にして竟に高尚なる思想も出でざりしかば、宗因等起つて檀林の一流を創め一時は天下を風靡せしが、これ亦稍〻發達したる滑稽頓智に外ならざるを以て、忽ち芭蕉派の壓倒する所となりて今日に至る迄猶有るか無きかの有樣なり。芭蕉は趣向を頓智滑稽の外に求め、言語を古雅と卑俗との中間に取り、萬葉集以後新に一面目を開き、日本の韻文を一變して時勢の變遷に適應せしめしを以て、正風俳諧の勢力は明治の世になりても猶依然として隆盛を致せるものなるべし。而して芭蕉は發句のみならず俳諧連歌にも一樣に力を盡し、其門弟の如きも猶其遺訓を守りしが、後世に至りては單に十七文字の發句を重んじ、俳諧連歌は僅に其附屬物として存するの傾向あるが如し。

延寶天和貞享の俳風

足利時代の連歌より芭蕉派の俳諧に遷るに貞徳派檀林流等の階梯を經過したる事は前に述べたるが如し。然れども猶綿かに之を觀れば其間無數の階梯と漸次の發達とを經來りしものなり。寛文十二年撰べる貝おほひといふ書は芭蕉未だ宗房といひし頃編輯せし者なりといへども、猶赤子のかた言まじりにしやべるが如く、終に檀林を離るゝこと能はず。延寶八年に其角杉風がものせる田舍句合、常盤屋句合は稍〻其歩を進めたるに相違なきも、未だ小學生徒が草したる文章を觀るの思ひあり。天和三年に刊行せし虚栗集に至りては著しく俳諧の一時代を限りしものにて、其魂は既に正風の本體を得たりといへども、其詞は猶甚だ幼稚にして暴露の嫌あるを免れず。貞享四年刊行の續虚栗は更に幾多の進歩をなして殆ど正風の門を覗ふ者と謂ふべし。同年の吟詠なる四季句合(載せて元祿元年刊都筑の原にあり)は滑稽に陷らず、奇幻を貪らず、景を自然の間に探り味を淡泊の裏に求め、はじめて正風の旗幟を樹立したるものなり。(されど此四季句合の中には芭蕉翁一派の門弟ならざるもまじれり)其後曠野集、其袋、猿蓑等續々と世に出でゝ終に芭蕉の功名をして千歳に不朽ならしめたり。此間の階梯となりたる貞徳派をはじめ、虚栗、續虚栗に至るまで、終に此正風を發揮せしむるの階梯に相違なしと雖も、其間或は退歩したることなきにもあらず。是固より何事の發達中にも免るべからざる運命なるべし。明治の大改革ありてより文學も亦激劇の變遷を生じ、翻譯文、新體詩、言文一致等の諸體を唱ふるものありて大に文學界を騷がし其極世人をして其歸著する所を知

らず、竟に多岐亡羊の感を起さしむるに至れり。然れども天下の大勢より觀察し來れば是等も亦文學進歩の一段落に過ぎずして、後來大文學者として現出する者は必ず古文學の粹を拔き併せて今日の新文學の長所をも採取する者なるべく、而して是等は皆元祿時代に俳諧の變遷したると同じことならんと思はるゝなり。

足利時代より元祿に至る發句

天下稍ゝ檀林の俗風に厭くに際して機敏烱眼の一俳人寶井其角は別に一新體を創して世人を驚かさんと企てたり。然れども俗語を用ゐて俗客の一笑を買ふが如きは、卽ち前車の覆轍を踏むに等しくして到底之を傚ふべからず。さりとて和歌的連歌の句法を學ぶは陳腐にして復一箇の新題目を加へ一種の新思想を敍述するに地なし。是に於て其角は之を漢土の詩に求めて始めて一種の新體を成せり。田舍句合、虛栗、續虛栗の如きは卽ち此流の句集とも謂ひつべし。今、古來の發句に就きて變遷の一斑を知らしむる爲に、左に時代の順序に從ふて時鳥を詠ぜし數句を擧げん。

待てばこそ鳴かぬ日もあれ時鳥　道譽(菟玖波)

待たで見ん恨みてや鳴く不如歸　實隆(新筑波)

なくといふ文字は無の字か郭公　春庵(犬筑波)

一疋も音は貳疋そほとゝぎす　失名(毛吹草)

啼きさわげ日本つゝみの無常鳥　政定(貝おほひ)

鐘カン〳〵鶯破時鳥草の戶に　其角(田舍句合)

半日の下戶閑居にたへず郭公　千春(虛栗)

時鳥背に星をするたか嶺かな　暮角(續虛栗)

朝顏の二葉にうれしほとゝぎす　調柳(都筑の原)

馬と馬よばりあひけり不如歸　鈍可(あら野)

時鳥鐘つくかたへ鳴音かな　濁水(其袋)

郭公何もなき野の門構へ　凡兆(猿蓑)

時鳥顏の出されぬ格子かな　野坡(炭俵)

杜宇なかぬ夜白し朝熊山　支考(續猿蓑)

俳書

連歌俳諧の撰集は足利時代に在りても菟玖波集紀元二千十六年撰以後稀れに之れ有りといへども多く刊行せしものにあらず。寬永年間に至りては編集せる書も多く且つ之を刊行せしものなれば、時世の進歩と共に俳諧の盛運に赴きたるを見るべし。正保、慶安、承應、明曆、萬治、寬文の間は次第に著作の多きを加ふといへども、其の著しく增加したるは延寶年間なり。

余は特にこれが研究をなしたることなけれど、見當るまゝに書き付けたる者のみにても延寶年間の編著已に五十部になん〳〵とす。就中最も多きは延寶八年にして其の目を擧ぐれば

俳枕　軒端の獨話　洛陽集　向の岡　伊勢宮笥　西鶴大矢數(刊年は天和元年)　花洛六百句　猿鷄　阿蘭陀丸二番船　江戶大阪通し馬　俳諧江戶辨慶　破邪顯正返答　田舍句合　常盤屋句合

等にして猶此外に數多の著作あるべきなり。余淺學未だ是等の書の過半は一覽だになし得ずとはいへ、前後の時勢より察するに多くは皆片々たる一小册子に過ぎずして、敢て後世數卷を一部として發行するものと同時に論ずべくもあらざるべし。しかはあれど如何なる小册子なりとも二百餘年以前に在りて此の如く多きを見るは其繁盛を卜するに十分なりと信ずるなり。天和、貞享を經て元祿に至り愈々其極點に達したるが如く、寶永、正德、享保の間に下りては刊行の俳書いたく減じ盡し、唯々東華坊支考が十數部の著書あるのみとはなれりけり。是時に際して俳諧は暫時衰運の暗黒界に埋沒せられたるの觀ありて、芭蕉の英魂は其の死後二三十年に於て已に其勢威を失ひ盡したるが如し。

字餘りの俳句

俳句に字餘りの甚しきものは延寶天和の間を其甚しとす。十八九音の句は云ふに及ばず、時として二十五音に至るものありて却て片歌よりも長し。今日にありて之を見れば奇怪の觀なきにあらざれども、俳風變遷の階梯としては是等も亦見るべからざるものならんか。今暫く古人の句中より其格調の異なるもの數句を取りて列擧せんに、

天にあふぎ地に伏し待ちの月夜哉　立圃
古寺月なし狼客を送りける　北鯤
しほらしき物つくしちよろ木かいわり菜　杉風
鵲やさえわたる橋の夜半の月　宗長
夏衣いまだ蝨をとりつくさず　芭蕉
あれよ〳〵といふもの獨り山櫻　枳風
五月雨けりな小田に鯉とる村童　藤句
月の秋に生れいづるや桂男　千賴
雛丸が夫婦や桃の露不老國　也角
ところてんさかしまに銀河三千丈　蕪村
五月雨の端居古き平家をうなりけり　嵐雪
月に親しく天帝の塔に成たしな　才丸
曙の人顏牡丹霞に開きけり　杜國
新年の御慶とは申しけり八十年　任口
有德なる汐干の潟たる大きなる鱆　由卜
皿蒟蒻如何なる人の何を以て櫻　杉風
玉祭る里や橘爪男香爐たく女　松濤
流るゝ年の哀世につくも髮さへ漱捨つ　其角

等の如し。又十七音にても五七五の調子に外れたる者あり。例へば

岩もる水木くらげの耳に空シ　杉風
雪の鮭左勝水無月の鯉　芭蕉
海くれて鴨の聲ほのかに白し　同

等の如し。

俳句の前途

數學を修めたる今時の學者はいふ。日本の和歌俳句の如きは一首の字音僅に二三十に過ぎざれば、之を錯列法に由て算するも其數に限りあるを知るべきなり。語を換へて之をいはゞ和歌（重に短歌をいふ）俳句は早晩其限りに達して、最早此上に一首の新しきものだに作り得べからざるに至るべしと。世の數理を解せぬ人はいと之をいぶかしき說に思ひ、何でふさる事のあるべきや、和歌といひ俳句といふ、もと無數にしていつまでも盡くることなかるべし。古より今に至るまで幾千萬の和歌俳句ありとも皆其趣を異にするを見ても知り得べき筈なるにと抔云ふなり。然れども後說はもと推理に疎き我邦在來の文人の謬論にして敢て取るに足らず。其實和歌も俳句も正に其死期に近づきつゝある

者なり。試みに見よ、古往今來吟詠せし所の幾萬の和歌俳句は一見其面目を異にするが如しといへども、細かに之を觀、廣く之を比ぶれば其類似せる者眞に幾何ぞや。弟子は師より脱化し來り、後進は先哲より剽竊し去りて作爲せる者、比々皆是れなり。其中に就きて石を化して玉と爲すの工夫ある者は之を巧とし、糞土の中よりうじ蟲を掴み來る者は之を拙とするのみ。而して終に一箇の新觀念を提起するものなし。而して世の下るに從ひ平凡宗匠、平凡歌人のみ多く現はるゝは罪其人に在りとはいへ、一は和歌又は俳句其物の區域の狭隘なるによらずんばあらざるなり。人間ふて云ふ、さらば和歌俳句の運命は何れの時にか窮まると。對へて云ふ。其窮り盡すの時は固より之を知るべからずといへども、概言すれば俳句は已に盡きたりと思ふなり。よし未だ盡きずとするも明治年間に盡きんこと期して待つべきなり。和歌は其字數俳句よりも更に多きを以て數理上より算出したる定數も亦遙かに俳句の上にありといへども、實際和歌に用ふる所の言語は雅言のみにして其數甚だ少なき故に其區域も俳句に比して更に狭隘なり。故に和歌は明治已前に於て略ゞ盡きたらんかと思惟するなり。

新題目

人或は云ふ、人間の觀念は時勢の變遷と共に變遷する者なり。そは古來文學の變遷と政治の變遷とを比較して知るべきなり。而して明治維新の如く著しく變遷したることは古より其例少く、從つて文學上の觀念も亦大に昔日と異なるが如し。單に外部の皮相のみより見るも、今日の人事器物は前日の人事器物と全く同じからず。刀槍廢れて砲礮天に響き、轎輿は空しく病者の乘りものとなりて人車馬車汽車王侯庶人を乘せて地上を横行す。是等の奇觀は到る處にありて枚擧に遑あらず。此新題目此新觀念を以て吟詠せんか、和歌にまれ俳句にまれ其盡くる所あるべからずと。對へて云ふ。そは一應道理ある説なれども、和歌には新題目新言語は之を入るゝを許さず。俳句には敢て之を拒まずといへども、亦之を好むものにあらず。こは固より理の當然にして徒に天保老爺の頑固なる僻見より出づるものとのみ思ふべからず。大凡天下の事物は天然にても人事にても雅と俗との區別あり。(雅俗の解はこゝに述べず、通常世人の唱ふる所に從ふて大差なかるべし)而して文明世界に現出する無數の人事又は所謂文明の利器なる者に至りては、多くは俗の又俗陋の又陋なるものにして、文學者は終に之を以て如何とも爲し能はざるなり。例へば蒸氣機關なる語を見て我們が起す所の心象は如何。唯ゞ精細にして混亂せる鐵器の一大塊を想起すると共に、我頭腦に一種眩暈的の感あるを覺ゆるのみ。又試みに選擧、競爭、懲戒、裁判等の言語を聞きて後に如何なる心象を生ずるかを見よ。袖裡黄金を溢らせて低聲私語するの遊説者と、思ひ内にあれば覺えず微笑を取り落したる被説者と兩々相對するの光景に非ざれば、則ち喧公解語の花を携へて席上に落花狼藉たるの一室を畫き出さんのみ。此妄想に續きて發するものは道德壞頽、秩序紊亂等の感情の外更に一の風雅なる趣味、高尚なる觀念あるべきやうなし。人或は云ふ、美術文學は古に盛にして今に衰へたりと。以あるかな。

和歌と俳句

主人小斷店の一隅に立ちて他の髪を結ひ月代を剃る。八公熊公傍に在り。相對して坐す。

八公叫んで曰く、しめたりしめたりと。熊公頭を垂れて一語なし。甲公乙公各〻語りて曰く、桂馬を以て王を釣り出すべし。曰く、王頭の歩兵を突くべしと。囂々市場の如し。是れ髪結床に將棊を弄するなり。九霞山樵の山水一幅を掛けて下に池坊流の立花一瓶をあしらふ。庭間に松石相雜りて盆池青き處金魚尾を搖かす、籠鳥一二盆栽三四皆雅趣あらざるはなし。而して主客兩々笑はず語らず、時に丁々の聲あるのみ。是れ別墅の竹房に碁を圍むの光景なり。

横町へ少し曲りて最合井釣瓶繩朽つるの邊、書額蒔かぬ種をけえたるこなたの掃溜に臨みて、竹格子まばらなる中にみいちゃんお花ちゃんを相手にして破れ三味線を鳴らす。絃聲板橋を踏み鳴かすが如く、歌聲犬の遠吠に似たり。裏店の奥比々此類なり。玄關深く見こみて甃石遠く連り車馬門に滿ちて小倫式臺に迎ふ。左の方一帶の板塀を見越して春色爛漫たり。[illegible]檻草欄相交るの間、玉欄屈曲して玻瓈窓中佳人瑤箏を彈ず、珠玉盤上を走り幽泉岩区に咽ぶ。鶯語猶ほ遠なりと雖も終に百鳥の群鳴に勝る。

甲店の伴當百事として街上を走る。乙肆の主管[illegible]へて申して曰く、僕前日大阪の募集に應ず。入花料殆ど五十錢を費す。而して一句の賞點に入るなし、何事の胸わるさぞ。甲曰く、前月の卷已に成るや否や。乙曰く、知らず。一行商傍に在り、曰く、彼卷已に開きたり。天は某。地は某なり。我句幸にして十內に在り云々。甲乙皆失望の體あり。俳句を弄するもの皆此流の人。一侯一伯會々相逢ふ。侯曰く、前月の歌會貴下秀歌を詠ず。一座感賞して三代集中のものとせり。健羨の至りなり。伯曰く、敢て當らず、今夜某々を弊家に召して萬葉の講筵を開く。幸に駕を枉げられよ云々。和歌を詠ずるは此種の人なり。嗚呼何ぞ將棊、三絃、俳句の相似て碁、箏、歌の相類するや。前者は下等社會に行はれ後者は上流社會に行はる。前者は其起原新しく後者は其起原古し。新し、故に俚耳に入り易し。古し、故に雅客の興を助く。將棊盤は碁盤より狹く而して其手碁より多し。三絃は絲は箏より少く而して其音箏より多し。俳句の字は歌より短く而して其變化歌よりも多し。變化多ければ奇警斬新の事をなすべし。唯〻卑猥俗陋に陷るの弊あり。變化少ければ優美淸淡の味あり、唯〻陳套を襲ひ糟粕を嘗むるの譏を免れず。隨つて將棊、三絃、俳句は入り難く碁、箏、歌は入り易し。入り難けれども上達し易く入り易けれども上達し難し。此の六技は蓋し奇對といふべし。

寶井其角

蕉翁の六感なるものに六弟子の長所を評するの語あり。されども其語簡單にして未だ盡さざるのみならず、往々其要を得ざるものあれば漸次にこれが略評を試みんとす。初めに其角を評して「花やかなる事其角に及ばず」といへり。其角の句固より花やかなる者少からず。例へば

鶯の身をさかさまに初音かな
白魚をふるひよせたる四ッ手かな
名月や疊の上に松の影

等の如し。然れども其角一生の本領は決して此婉麗細膩なる所にあらずして、却りて傲兀疎宕の處佶奇斬新の處諧謔百出の處に在りしことは五元集を一讀せしもの丶能く知る所なり。其傲兀疎宕なる者を擧ぐれば左の如し。

鐘一ッうれぬ日はなし江戸の春
夕涼よくぞ男に生れける
小傾城行きてなぶらん年の暮

其角は實に江戸ッ子中の江戸ッ子なり。大盃

を滌洗し名優を提挈して紅燈緑酒の間に流連せしことも多かるべし。されば芭蕉も其大酒を誡めて「朝顔に我は飯喰ふ男哉」といひし程の鬱の者なれば、是等の句ある固より怪しむに足らず。而してこれ卻て千古一人の流行たる所以なり。其他奇抜奇警なる者は

世の中の榮螺も鼻をあけの春
枇杷の葉や取れば角なき蝸牛
初雪に此小便は何やつぞ

等の如し。是等卻ち巧者巧を弄し拙者拙を逞うする所にして、其角が一時人を瞞着するの手段なり。されば唯上の即吟に至りては其角の敏捷一座の喝采を博することは常に芭蕉に勝れたりとかや。其縱橫自在人頭を擡するものも、また才子の余裕を示し英雄の人を欺く所以なれば、其角に於てこれ無かるべけんや。例へば

こなたにも女房もたせん水祝ひ
饅頭で人を尋ねよ山櫻
みゝつくの頭巾は人に縫はせけり

等の如し。然れども多能なる者は必ず失す。其角の句巧に失し俗に失し奇に失し豪に失する者少からず。而して豪放洒宕なる者に常に暴露に過ぐるの弊あり、其角句中其弊を露はす者を擧ぐれば、

吐かぬ鵜のほむらに燃ゆる篝哉
二星私かに憐む隣の娘年十五
此秋暮文覺我を殺せかし

抔あり。抑又其角句中に一種の澹泊蕭索なる文字ありて其調稍々嵐雪、去來に近きが如し。例へば

あくる夜のほのかにうれし嫁が君
明星や櫻定めぬ山かつら
秋の空尾の上の杉をはなれたり

抔にして前に連ねし十數句とは其の趣いたく懸れり。之を要するに其角は豪放にしてしかも奇才あり、奇才ありてしかも學識あり。されば時として豪放の眞面目を現はし、時として奇才を弄し學識を現はすなど、機に應じ變に應じて盤根錯節を斷ずること大根牛蒡を切るが如くなれば、芭蕉も之を賞し同門も之に服し、終に兒童走卒をして其角の名を知らしむるに至りたり。其角はそれ一世の英傑なるかな。

嵐雪の古調

服部嵐雪は古文を好みしものと見え、其作る所の俳句も古書古歌に據りたるもの多く、其語調も亦和歌に似たる者少からず。例へば

ぬれ縁やなづなこぼるゝ土ながら
蔀あけて杙立置は朝まだき
石女の雛かしづくぞ哀れなる
みゑ房やかゝれとてしも雛の尼

等の如し。又同人の句に

行燈を月の夜にせんほとゝぎす

といふは世の中へ知れ渡りたるものなるが、こは萬葉集にある家持の

保等登藝須許欲奈枳和多禮登毛之備乎
都久欲爾奈蘇倍曾能可氣母見牟

といへる歌をそのまゝ俗譯せしものにして余り珍重すべきものとも思はれず。されど俳家者流の宗匠及び其門弟等は皆學問淺薄なる者のみ多かれば、さることのありとも知らず。よし之を知る者あれば卻てこそ賞讃して古歌にちなみたる名句なりなどゝ云ふこと、恰も今日の平凡學者がこれ歐洲の學者某の說なりといはゞ最も善き證論なりと思へるが如し。げにも片腹いたきことぞかし。余は此の嵐雪の句よりも

蠟燭のひかりにくしや郭公　越人
提灯の空に詮なし郭公　杉風

などといふ句の同じ意ながら古歌を翻案したるこそいと妙なれと思ふなり。

服部嵐雪

蕉門六感の中に「からびたる事嵐雪に及ばず」とあるは適評なるべし。嵐雪の俳諧雅にして古樸、しかも時に從ふて變化するの妙は其角の豪壯にして變化するものと相反照して蕉門の奇觀と謂ふべし。其所謂からびたる句は

梅一りん一りん程のあたゝかさ
相撲取ならぶや秋の唐錦
黄菊白菊其外の名はなくもがな

の類にして、此嵐雪一家の格調は終に他人の模倣し能はざる所なり。

文もなく口上もなし粽五把
蒲團着て寝たる姿や東山

是等の句は實景實情を有の儘に言ひ放しながら猶其の間に一種の趣味を有するものにして、是れ亦嵐雪の獨り擅にする所なり。蓋し嵐雪は一見識ある人なれども稍ゝ理想には乏しきものゝ如く、随つて宇宙の事物を觀察するに常に其の表面よりするの傾きあり。是を以て其表面的の觀察も亦重もに些細なる事物に向つて精密なるが如し。例へば

花に[illegible]て吹け酒の泡
五月雨や蚯蚓の通す鍋の底
白露や角に目を持つ蝸牛

の如き其一斑を知るに足るべきなり。猶此種の觀察の滑稽なる者には

鍋につく飯粒蠅に與へけり
門の雪臼と盥の姿かな
君見よや我手入るゝぞ莖の桶

あり。又人情の上に於ける觀察も曾て悽楚慘澹の處に向はず、はた勇壯豪放の處に向はずして、常に婦女若しくは兒童の可憐なる處に在るが如く見ゆ。そは

ほつ〳〵と喰積あらす夫婦かな
石女の雛かしづくぞあはれなる
我戀や口もすはれぬ青鬼灯
四見すと妹つくろひぬ小家の門
出代やをさな心にものあはれ
竹の子や兒の齒莖のうつくしき

等の數句を見ても知るべきなり。猶此外に

秋風の心動きぬ縄すだれ

の如く、稍ゝ理想的の句なきに非るも、終に嵐雪の本色に非ず。又其奇拔なるもの

順禮に打ちまじり行く歸雁かな
武士の足で米とぐ霰かな

等の類あれども、其角の變幻搖曳なきとは大に異なりて却りて味深き處あり。されば嵐雪の變化は其角の天地に渡りて縱横奔放するの類に非ずして、僅かに一小局部内に彷徨するものなれども、其趣味を存するの多きは其角も亦一歩を讓らざるべからず。宜なる哉一門人に其角嵐雪ありと並稱せしや。

向井去來

「實なる事去來に及ばず」とは蕉門六感の中に去來を評するなり。而して此評實に去來を盡すものと謂ふ可し。去來人と爲り温厚忠實、其芭蕉に事ふること親の如く又師の如く、常に親愛と尊敬とを失はざりしかば、芭蕉も亦之を見ること恰も吾愛兒の如くにして、他の門弟子とは一樣に思はざりき。されば芭蕉の去來に向つて或は之を賞め或は之を叱るも、皆師の弟子に於ける關係より出でずして親の子に於けるが如き愛情より發するものなり。去來曾て芭蕉と共に正秀亭に會す。其座の俳諧に去來第三を付けたるに、其句宜しからずとて芭蕉これを添削しけるが、會はてゝ後芭蕉は去來を叱りて「斯くのびやかなる第三を付くること前句の景色を探らず未熟の事なり、此度の[illegible]は是非一度[illegible]がん

と心がくべし云々とて夜もすがら怒りたりと。正秀も弟子なり、去來も弟子なり。弟子が弟子の前にて仕そこなふたりとても芭蕉に於て何か有らん。然るに斯くまで叱責することは弟子を以て之を見ず、骨肉の如く之を愛するが爲なるべし。去來實に此の如き人なれば、其作る所の句も亦優柔敦厚にして曾て輕躁浮泛に流るゝの弊を見ず、其角の如く奇を求め新を探りて人目を眩するの才なく、又丈草の如く徴を發き理を究めて禪味を悟るの識なしといへども、却て平穩質樸の間に微妙の詩歌的觀念を發揮せしが爲に、其句を讀む者一たび之を誦すれば終に復忘るゝ能はざるに至る。蓋し其意匠の幽遠に馳せずして却て高尚なるのみならず、其格調極めて自然にして敢て人工斧鑿の痕なければなるべし、其景を敍するの處、情を敍するの處、神理天工、一心一手の間に融會して外面一片の理想を著けず、裏面一點の塵氣を雜へざるに至りては芭蕉も亦之を模倣すること能はず。況んや其嵐二子をや。況んや其他の作家を以て自ら任ずる許六、支考の輩をや。試みに其句數首を擧ぐれば

上り帆の淡路はなれぬ汐干哉

涼しさや夕立ながら入日影

乘りながら秣はませて月見哉

芭蕉の鉢叩聞かんとて落柿舍に音づれける　折節鉢叩の來ざりければ

箒こせまねても見せん鉢叩

是等の句は皆其句の妙靈なるのみならず、去來其人の性質躍然として現れたるを見るべし。去來の句今日に傳ふる者僅に三百句許りにして、隨て一題數句ある者は稀なり。只ゝ櫻花、鵑、秋月、時雨、雪の五題は吟詠各十句の多きに及び、而して他の些事微物に至りては一句だに無き者少からず。是を以て見るも去來の觀念は每に那邊に向ひしかを知るに足らん。又去來は武士なる者の意氣凜然たる所を忘れざりしと見え、これを證するの句多し。

元日や家に讓りの太刀はかん

笋の時よりしるし弓の竹

鎧著てつかれためさん土用干

秋風や白木の弓に弦はらん

鴨啼くや弓矢をすてゝ十餘年

老武者と指やさゝれん玉霰

時として豪壯の氣を帶びる者あり。然れども終に規轍に失せず。

湖の水まさりけり五月雨

時として敎誨の意を含む者あり。

何事ぞ花見る人の長刀

時として稍ゝ纖巧にして奇警なる者あり。然れども其妙味は奇僻纖巧の處に非ずして却て神韻縹渺自然に渾成する處にあるが如し。

痩せにてゝ香にさく梅の思ひ哉

時鳥啼くや雲雀の十文字

卯の花の絶間叩かん闇の門

芭蕉曰く、上手にして始めて仕そこなひありと。蓋し去來も亦其一人なり。其奇に失する者、

年の夜や人に手足の十許り

上野の山莊に供し奉りて

梅が香や山路獵入る犬のまね

其俗に失する者、

賽錢も用意顏なり花の杜

時鳥きのふ一聲けふ三聲

從兄弟に逢ふて

昔思へ一ッ畠の瓜茄子

内藤丈草

僧丈草は犬山の士なり。繼母に仕へて孝心深し。家を異母弟に讓らんとてわざと右の指に疵をつけ、刀の柄握り難き由を言ひたて、家を遁

れ出でゝ道の傍に髪押し斬り、それより禪門に入る。其時の詩あり。

多年負屋一蝸牛。
化做蛞蝓得自由。
火宅最惶涎沫盡。
偶尋法雨入林丘。

其後芭蕉の弟子となりて俳句を學びしが、斯る心だての大丈夫なればにや、芭蕉もいたく之を愛し「人の上に立たんこと月を越ゆべからず」とはじめより喜べりとぞ。されば丈草も深く芭蕉に懐き、其死後も義仲寺のほとりに草廬を結びて一生を終へたり。明和の頃蝶夢なる俳人、去來發句集、丈草發句集を編み、其端書に記するに蕉風の正統を得し者は去來丈草二子なり。されども此二子は名聞を好まず、弟子をも取らざれば後世之を祖述するものなく、却りて其角嵐雪の淺淡のみ盛に行はれたり云々の意を以てせり。是れ實に去來丈草の知己と謂ふべし。

丈草の俳句を通覽する者は其禪味に富むことを心づかぬ者はあらざるべし。少くとも諸行無常といふ佛教的の觀念は常に丈草の頭腦を支配せしものと思しく、其種の作句實に多し。併しながら丈草の句は所謂坊主の坊主臭きものにして、多くは暴露に過ぎ稍ゝ厭ふべきものあり。之を芭蕉の禪味を消化して一句の裏面に包含せしむるものに比すれば及ばざること遠し。例せば

啄木鳥の枯木探すや花の中
眞先に見し枝ならん散る櫻
聖靈も出て假の世の旅寐かな
ぬけ殼とならんで死る秋の蟬
著て立て夜の衾も無かりけり
歸り來る魚のすみかや崩れ簗

其最巧妙にして蘊雅なる者は

取りつかぬ力で浮ふ蛙かな

其最拙劣にして平淺なる者は

贈新道心
蚊屋を出て又障子あり夏の月

此外禪味を含まずして格調の高きこと去來の壘を摩する者あり。

子規なくや湖水のさゝ濁り
黑みけり沖の時雨の行ところ
水底の岩に落ちつく木の葉哉

の類なり。又輕快流暢の筆を以て日常の瑣事を拈出するは丈草の長所なるが如く、

春雨やぬけ出たまゝの夜著の穴
ひまあくや蚤の出て行く耳の穴
つゝ立て帆になる袖や涼み舟
夜咄の長さを行けばとこの山
屋根ふきの海をねぢむく時雨哉

抔の例あり。又丈草の好題目として撰ぶ所のものは動物にして、丈草句中の三分の一は皆禽獸蟲魚に關係せり。是れ即ち芭蕉去來が好んで天象地理の大觀を吟詠するとは大に異なりて、丈草の一籌を輸する所以亦こゝに在る可し。俳句に擬人法を用ふるは後世に多くして元祿前後には少き樣なるが、丈草は側の動物を取りて擬人的の作意を試みたり。

我事と泥鰌のにげる根芹かな
大原や蝶の出て舞ふ朧月
夕立に走り下るや竹の蟻
啼きはれて目さしもうとし鹿の形

等のたぐひにて、是れ恐らくは禪學の上より得來りしものならんか。

東花坊支考

東花坊支考は蕉翁晩年の弟子なり。人と爲り磊落奇異、敢て法度に拘らず。芭蕉世に在るの間は吟詠妙境に到りて他の高弟をも凌駕し、いと頼もしく見えたり、然るに芭蕉死して後は自ら門戸を構へ學識に誇り多才を頼み、妄りに

芭蕉の遺教と稱して數十卷の俳書を著し、甚しきものは自ら書を著し自ら解釋と評とを加へて以て天下に刊行するに至れり。是に於て其句多く輕佻浮泛に流れて往々芭蕉正風の外に出でしが、其極終に美濃派の一派を起し、今日に至るまで多少の勢力を存して全國に蔓衍せりといふ。支考の性行此の如くなれば其吐く所の俳句も亦一種の理想を含む者十中八九まで是れなり。

月花の目をやすめばや春の雨
鶴に乗る支度は輕し衣がへ
世の中をうしろの皺や更衣
灌佛やめでたき事に寺參り
魂棚にこちらむく日を待つ身かな
名月やけふはにぎはふ秋の暮
一俵も取らで案山子の弓矢かな
臘八や痩せは佛に似たれども

此の如きもの數ふるに暇あらず。其

笠著せて見ばや月夜の雞頭花

と云ふに至りては理想已に極まりて稍々狂に近きものなり。此他理想といふべからざるも、其意匠自然に出でずして斧鑿の痕を存するものあり。即ち

梅が香の筋に立ちよる初日かな

野は枯れてのばすものなし鶴の首
二ッ子も草鞋を出すやけふの雪

等の類なり。擬人法はもと理想より生ずるものにして、丈草の此法を用ゐしことは已に言へり。支考に至りて此種の俳句實に夥多にして、動物植物を形容するの慣手段と爲せしが如し。其例を擧ぐれば

花の咲く木はいそがしき二月かな
鶯の肝潰したる餘寒かな
蛙の目の何か悟りて早合點
片枝に脈や通ひて梅の花
百合の花たゞものあちら向きたがる
物思ひ〳〵鳴く鶉かな
腸に秋のしみたる熟柿かな
節々の思ひや竹に積る雪

等の如し。又多少の理想なきに非ざるも、意匠諧謔に陷りて風雅の趣に乏しきものあり。例へば

蓮の葉に小便すれば御舍利かな
牛になる合點ぢや朝寢夕涼み
凩や鼻を出し行く人はなし
寒ければ寐られず寐ねば猶寒し

の類にして、支考が一生の本領も亦こゝに在りしなるべし。されば後來美濃派の起りしも主として此處より入りしが如し。蓋し支考は固より一個の英傑なる俳家たるを失はず。其敝する所稍々神韻に乏しと雖も、滑稽諧謔の中に一定の理想ありて全く卑俗に陷るを免れたり。然れども後世無學の俗輩一片の理想無くして此諧謔を學ぶ、俗陋平淺ならざらんと欲するも得んや。支考の多能なる俳句に於て到る處必ずしも前に論じたる境涯に止まらず、時として其角去來を學び、時として尚白涼菟に擬する者あり。是れ支考の支考たる所以なるべし。其の例

これ迄か〳〵とて作の雪
水澄て籾の芽青し苗代田
餅くはぬ旅人はなし桃の花
里の子の燕握る早苗かな
我笠や田植の笠にまぎれ行く
裸子よもの著ばやらん瓜一つ
初霜や蘆折れ逢ふ濱堤
一つ葉や一葉々々にけさの霜

志多野坡

志多野坡の俳句は意匠の清新奇拔なるものを取りて作するを常とす。故に其句多くは

初午や鍵をくはへて御戸開
苗代や二王のやうな足の跡
郭公顔の出されぬ格子かな
山端を一人が覗けば花の山
夕涼みあぶなき石に上りけり
落椿餘りもろさについで見る
飛びかへる竹の霰や窓の内

の類なり。其最諧謔を弄する者に至りては

長松が親の名でくる御慶かな
鉢巻を取れば若衆ぞ大根引

の如き者あり。其句法の警、人を駭かす者は

ほの〳〵と鴉黒むや窓の春
つゝまれて水ものびたる蓮かな
遠梅の残る影なき月夜かな

等なり。之を要するに野坡は常に滑稽を以て人頤を解かんとする者の如く、其の理想に至りては甚だ低きかと思はる。偶々

葉かくれて見ても傾城の浮世かな
豆腐とりて我も心の鬼灯たん

等の句あれども、恐らくは其眞面目にあらざるべし。されば蕉門の句に

撫子のちらと見えけり闇の梅
娘ある隣の衣とうたればや

とあるが如きは淺薄皮相殆ど讀むに堪へず。其理想は斯く低しといへども、其度量快濶なるは曾て其家に忍び入りし盗賊を相手に談笑せし一事を以ても知るべく、從つて其句も亦紆餘迫らざる處ありて假令上乘に非ざるも蕉風の特色を存して大に愛すべきものなり。即ち

押して見る山の乾きや蕗の薹
食の時皆あつまるや山櫻
靜かには啼かれぬ雉の調子かな
猫の戀初手から啼て哀れなり
秋もやゝ雁おりそろふ寒さかな
此頃の垣の結ひ目や初時雨
力なや膝をかゝへて冬籠

等の句を見て其一斑を見るべし。歳暮の句に

年のくれ互にこすき錢づかひ

とあるが如きは、元商家に生れたる故に其觀察のこゝに及びしものなるべけれども、此等の意は其人情を穿つに拘らず、卑俗に流れて偶々嫌厭を生ぜしむるに足るのみ。蕉翁六感に「おどけたる事野坡に及ばず」とあるは中らずといへども遠からざるの評なり。

武士と俳句

諸侯にして俳諧に遊びし者、蟬吟、探丸、風虎、露沾、嵐山、冠里、諸公あり。武士にして俳諧に遊びし者、芭蕉をはじめ此々皆然らざるはなし。されど中に就きて俳諧のみならず武士としても亦名高き人々は、大高子葉、富森春帆、神崎竹平、菅沼曲翠、神野忠知等なり。蕉門十哲の中、性行の清廉と吟詠の高雅とを以て古今に超絶する二豪傑、向井去來、内藤丈草も亦武士のはてにして、殊に丈草は一母に孝を盡し弟に家を讓らんが爲に我指に疵をつけ刀の柄握り難き由いひたてゝ、禪門に入りたる人なりとぞ。夫れ風流は弓馬劒槍の上に留らず。雅情は電光石火の間に宿らず。否これらは寧ろ風雅の敵にして、芭蕉も行脚の掟には腰に寸鐵たりとも帶すべからず、惣て物の命を取る事なかれといひ、去來も亦

何事ぞ花見る人の長刀

と詠して人口に膾炙せり。然りといへども實なきの風流は浮華に流れ易く、節操なきの詩歌は卑俗に陷るを免れず。文學美術は高尚優美を主とするものなり。而して浮華卑俗を以て作られたる文學美術ほど面白からぬものはあらじ。否、これほど世を害するものはまたとあるまじと思はる。後世和歌俳句の衰へたるも職としてこゝによらずんばあらず。享保年間は芭

蕉を去る事遠からず。而して已に三笠附といふ事もはら行れて一種の博奕となり、從つて德川氏も亦法律を設けて博奕と同じく之を禁ずるに至れり。近時に至り此三笠附なる者は餘り流行せずといへども、宗匠のあとつぎも發句の點も皆金錢に比例する世の中、損もうるとし。今初めにあけたる數家の俳句を左に連ねて二階からの目藥となさん。

しら炭や燒かぬ昔の雪の枝　忠知

馬叱る聲も枯野の嵐哉　曲翠

なんのその巖も通す桑の弓　子葉

とんでいる手にもたまらぬ霰哉　春帆

鴨啼くや弓矢をすてゝ十餘年　去來

啄木鳥の枯木探すや花の中　丈草

女流と俳句

女流俳句を嗜む者少からず。其の風調亦一種のやさしみありて句作の强からぬ所に趣味を存すること多く、却て男子の拈出し能はざる細事に着眼して心情を寫し出すこと其微に入り以て讀者を惱殺せしむるものあり。大凡世の人は女は歌こそよまゝほしけれ。歌はいみじうみやびたるわざにて鬼神をもひしぎたけきものゝふの心をも慰むるものなれども、なまなかに心ひなびて詞もむくつけき俳諧などしたらん女はよろづに男めきてあらあらしくなりなんとぞいふなる。これ固より一理ある論なれども、さのみ一概にはいふべからず。古へと今とは言語の變りあれば深閨に養はるゝ上﨟すら古學を修めぬものはたやすく和歌をよみいづべくもあらず。まして下々のいとなみにひまなききは、歌よむすべもしらねば卅一文字をつらぬることだにわきまへず。さるものは心まかせに俳句など口ずさまんことつき〴〵しく興ある業なるべし。且や古今の相違は言語の上のみにあらず、生活の方法、眼前の景物まで悉く變りはてたれば、日常の事又はそれより起る連想のたぐひも古人の窺ひ得ざる所多し。而してそを詠み出でんとするには是非とも今日の俗語を用ゐざるべからず。殊に女子の目擊する瑣事に至りてはいよ〳〵之を雅言に求めて得られざるものゝみ多きを如何せん。たゞ古今に亙り東西に通じて一點の相違なき者は人情なり。故に戀歌の類は必ずしも俗語を用ふるに及ばずといへども、其他は最早之を用ふるの已むを得ざるなり。和歌には伊勢、小町、相模、紫式部、清少納言の如き雲上の女傑輩出せしかども、俳諧には上﨟なき故に卑俗の二字を以て排し去る者多きはいかゞ事なり。言葉俗なりとも心うちあがりたらんは如何ばかり高尙ならまし。只ゝ此評を受くる者は俳諧社會に俗客入り來りて俗氣の紛々たるが爲ならんのみ。

元祿の四俳女

元祿前後の俳諧に遊ぶ婦女子の中、まづ捨女、智月、園女、秋色を以て四傑とも稱すべし。すて女は燕子花の如し。うつくしき中にも多少の勢ありて、りんと力を入れたる處あり。智月尼は蓮花の如し。清淨潔白にして泥に染まぬ其色浮世の花とも思はれず。秋色は撫子の如し。ゆら〳〵と風に立ちのびてやさしうさきいでたる、中々にくねりならはぬあどけなさに其人柄まで思ひやられてなつかし。園女は紫陽花の如し。姿强くして心おとなしきは俳諧の實にかなひ、日々夜々の花の色は風情の變化を示して終に閑雅の趣を失はずともいはん。而して四女の中句作にては、余は園女を推して第一とす。園女は見識氣槪ありて男子も及ばざる所あり。其某禪師に答ふる書の如き曾て婦女子

の婉柔優遊なる所を失ふて、唯々謾慢不遜なる一丈夫の趣あり。されど其俳句に遊ぶに際しては決して婦女子の眞面目を離れず。蓋し得難きの女傑と謂ふべし。近時の女學生以て如何となす。これらの人々の俳句に就て三四を抄萃して左に掲げん。

うき事になれて雪間の嫁菜かな　すて
日くらしや捨てゝおいても暮る日を　同
思ふ事なき顔しても秋のくれ　同
栗の穗や身は數ならぬ女郎花　同
我年のよるともしらず花盛　智月
有と無と二本さしけりけしの花　同
盆に死ぬ佛の中の佛かな　同
木枯や色にも見えずありもせず　同
井戸端の櫻あぶなし酒の醉　秋色
戀せずに猫の心の恐ろしや　同
雉の尾のやさしうさはる菫かな　同
佛めきて心おかるゝはちす哉　同
山松のあはひ〳〵や花の雲　その
鼻紙の間にしほむすみれかな　同
あるほどのだてしつくして紙衣哉　同
　常盤か[illegible]んだらを悼みて
衣がへ自ら縫らぬ罪深し　同

加賀の千代

加賀の千代は俳人中最も有名なる女子なり。其の作る所の句も今日に遺る者多く、俳諧社會の一家として古人に讓らざるの手際は幾多の鬚髯男子をして後に瞠若たらしむるもの少からず、俳諧の上にも男子にあらざれば言ふべからざることゝ女子にあらざれば言ふべからざることゝあり。今千代の句を以て兩者を對照するも亦一興なるべし。

一母方の紋めづらしやきそ始　山蜂
一我宿の鳥も遊ぶや着衣はじめ　千代

前者は男にして始めて言ふべく後者は女にして後作し得べきものなり。

一馬下りて若菜つむ野を通りけり　一具
一仕事ならくるゝたしまじ若菜摘　千代
一妻にもと幾人思ふ花見かな　破笠
一足跡は男なりけり初櫻　千代
一子もふまず枕もふまず時鳥　其角
一男さへきかれぬものを郭公　千代
一折からの賑くらべ見ん田植哉　麁言
一けふばかり男をつかふ田植かな　千代
一早乙女に足洗はするうれしさよ　其角
一早をとめや若菜つみたる道もあり　千代
一出女の口紅をしむ西瓜かな　支考
一紅さいた口もわするゝ清水哉　千代

餘所目に見る支考の句はをかしく我身の上を思ひかへしたる千代のはいとほし。

一白菊の目にたてゝ見る塵もなし　芭蕉
一白きくや紅さいた手の恐ろしき　千代

芭蕉は閨女をほめて吟じ千代は己を卑下して詠ず。

一姉なくてうたゝね悔ゆる火燵哉　淺山
　　尼になりしとき
一髪を結ふ手のひまあいてこたつ哉　千代

時鳥

連歌發句及び俳諧發句の題目となりたる生物の中にて、最も多く讀みいでられたるものは時鳥なり。此時鳥といふ鳥は如何なる妙音ありけん、昔より我國人にもてはやされて萬葉集の中に入りたるもの既に百餘首に上る位なれば、其後の歌集にもこれを二なく目出たきものに詠みならはし終には人數を分けて初音の勝負せんとて雲上人の時鳥きゝにと出で立てることなど古きものゝ本に見えたり。されば其餘流たら

またる道の俳諧に此題の多きも尤の譯にて、若し古今の發句の中にて時鳥に關したるものを集めなば恐らくは幾萬にもなるべからんと思はるゝなり。支那の詩にも子規を詠じたるもの多けれども、多くはこれを悲しきものにいひなせり。西洋の詩にも我子規に似たる鳥を詠みたるものありて、こは皆其聲をうれしきかたに聞くが如し。あはれ果報なる鳥よ。なの一聲は命にもかへて聞かんことを思はれ、千餘年前より今日に至るまで幾千萬の詩人をして其の腦漿を絞り出さしめたり。世の蛙鳴蟬噪輩果して何の顏かある。はた空しく川柳都々逸の材料となりて一生を終了する阿呆鳥の面の皮のあつさよ。

時鳥に關する古人の發句十數首をあぐれば

時鳥なかぬ初音ぞめづらしき　一遍上人
山彦の聲よりおくや郭公　宗碩
ほとゝぎす思はぬ波のまがひ哉　宗牧
鶯の捨子ならなけほとゝぎす　守武
郭公大竹原をもる月夜　芭蕉
時鳥々々とて寐入りけり　涼兎
ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁り　丈草
時鳥なくや雲雀の十文字　去來
ほとゝぎす雲踏みはづし〳〵　露川
目には青葉山ほとゝぎす初松魚　素堂
子規二十九日も月夜哉　蓼太
川舟やあとへ成たる郭公　士朗
子規鳴て江上數峯青し　道彦
この雨はのつ引ならし時鳥　一茶

扨はあの月か ないたか時鳥

時鳥の句の中にて世人の最も能く知りたるものは

　扨はあの月がないたかほとゝぎす

といふ句なり。此句の初五文字を「一聲は」として或は芭蕉の作といひ或は其角の作といふは杜撰なる俗説なり。俳家奇人談には瓢水の作なりといひ溫故集に藻風とあれば藻風は瓢水の別號かといへり。余近頃擧堂の著せる眞木柱(元祿十年刊)を見るに、はじめに中古の發句として擧げたる中に

　扨はあの月がないたか郭公　一三

とあり。又終りの方に

　　舟のつくまであとを見かへる
　扨はあの月がないたかほとゝぎす　藻風

中興の發句を取合たる可謂奇妙云々

とあり。されば此の句の作者は一三にして、藻風は附合の爲に此成句を應用したる者なること明らけし。そはとまれ此句は人口に膾炙して、後德大寺の和歌を翻案して更に巧妙なりと稱ふる人も少からず。然るにさきつ頃宗牧發句帳を繙きしに

　月や聲きゝてぞ見つる郭公

といふ句を見つけたり。之を前の句に比するに其調は連歌と俳諧との區別あれども、其命意は即ち符を合すが如し。其剽竊なるか、はた暗合なるかは知るによしなけれども、百餘年前に在りて已に此句ありとすれば、前の句が得たる名譽の過半は之を宗牧に讓らざるべからざるなり。文學に限らず天下此の如きたぐひ多し。其冤を雪ぎ其微を闡くは學者の義務なるべし。注書を抜萃翻譯して著作と號し、古書を翻刻出版して我編集といひ、以て初學者田舍漢を惑はさんとする當時の紳士學者は果して何とする者ぞ。

時鳥の和歌と俳句

伊勢の匂當杉田望一は盲人にして俳諧の達者なりしかども、寛永中に歿せし人なれば其作亦幼稚にして今日よりいへばこれといふべきもの

なし。只〻其

　それときく空耳もがなほとゝぎす

といふ句ばかりは後世にてもほむるものなるがこは後撰集の歌に

　時鳥はつかなる音をきゝそめてあらぬもそれとおほめかれつゝ　伊勢

とあるより得來りしものなるべし。又後世の句なるが

　時鳥なくやこぼるゝ池の藤　拘儀

　箱根山
　郭公人も名のりをしつゝ行　雨考

といふあり。前者は家持の

　はる／＼に鳴く時鳥、たち／＼ゝと妨ふれにちらす、藤波の花なつかしみ云々

といふより來り、後者は千載集中の

　あふ坂の山時鳥名のるなり關もる神や時にとふらん　匡時

とあるより變化したるものなり。又近頃出板せしある俳書を見しに

　時鳥初音きけばめづらしき友まちえたる心地こそすれ

といふ千鈞の歌を取りてか

　よい友にあふた心地よ時鳥

とありし一幅さは鳥の文盲なるものなり。發句も俗客又は無學者の惡戯場となりしより愈〻出でゝ愈〻陳腐なるものとはなれりけり。

初嵐（[illegible]）

一年の内風多し。春風はこそぐられるが如く、秋風はつめらるゝに似たり。こそぐられてははしだらなく眠り倒れ、つめられて後は身體りんとしまりて警むる所あり。況んや初嵐野分二百十日なんどありて秋の天氣は男の心にもたとへたるをや。二百十日の頃は稻つくる作男ならぬも米あきなふ商人ならぬも氣象臺の役員ならぬも如何に／＼と空のみ打ち仰ぐ夕暮に一點の黑雲北寅の方に出沒せしが、見る見る墨を流してはや頭の上に見あぐる程になりぬ。何程の事かあらんと枕に就きしが、雨戸烈しく吹きはなす音に目覺めて

　山風に野分かさなる寢覺かな　奇淵

と驚きしも、五風十雨順を失はざる大御代の癖とて

　朝露にさりけなき夜の野分哉　宗長

　冷々と朝日うれしき野分かな　支考

と晴れ渡りて嬉しや嵐のすぎたる心地なり。

　昔の代も二百十日はあれにけり

萩

我書窓の下に竹垣にそふて一本の萩生ひひろごりて軒端近く風に打ち返さるゝさま、けふや花咲くらん、あすや花亂すらんと朝な夕な打ち見やる程に、それかあらぬか置き亂す白露の間より紫のほのかに見えそむるに

　ほつ／＼と花になるなり萩の露　月居

といふ句ぞまづは思ひ出されける。うれしさに庭下駄穿ちて近よりて見れば今日咲きそめしと思ひしに

　萩の花咲くといふ日は亂れけり　禹洗

机の下に歸りてしばしは書讀みしもいつしかに又萩の方のみ見られて

　白露もこぼさぬ萩のうねりかな　芭蕉

實によくも萩の風姿を形容したりけりと倍〻數賞せらる。翠朝まだきに起き出でゝ見ればけふも眞盛りなるらんと思ふばかりなるに

　あたりへもよられぬ萩の盛りかな　序志

　とらば散らな、風情なり

　雉の引き出す萩の下枝かな　闌更

鷄なども出でよと打ち興ずる折から、此頃の癖とて小雨そぼふりて小庭の秋も何となくも

しさびたり。こなたの垣ごしには鶏の白萩いと氣高く咲きこぼるゝさま

白萩や露一升に花一升　蓼太

の句意にもかなへりや。兎角するうちに我魂はこゝにあらで向島の百花園、亀戸の萩寺とさまよひありけば

泥水の上に亂すや萩の花　芹虬

と口ずさまれ、遂には嘗て遊びにし大宮の公園、榛名山上の草原など思ひつゞけられて

草刈りよそれが重いか萩の露　杏由

と吟ずれば刈草高く背負ふたる翁もあとにつゞく童も共にふり向きてほゝゑむ心地ぞすなる。

ぬれて行く人もをかしや雨の萩　芭蕉
萩原や花とよれ行く爪さがり　曉臺

と誦すれば菅笠打ちかたげて芦薄を押し分け押し分け行くさま、けふの雨にたぐへて目の前にあり〳〵と見ゆるが如し。はてはまだ見ぬ玉川、宮城野まで思ひやられて。

花を重み萩に水行く野末かな　紹巴
白萩や細谷川の浪かしら　羅人

とは何處のけしきにやあらん。はた旅中に病んで

行き〳〵て倒れふすとも萩の原　曾良

と詠じたる人の心まで思へば萩ほどやさしく哀れなるものはまたとあらざりけり。

女郎花

秋の七草は皆それ〳〵の趣あるが中に女郎花ほど淋しく哀れなるものはあらじ。されば古來歌人もいろ〳〵に詠みならひ俳人も多く詠じ出せるが、其たけたかく伸びすぎて淋しく花のさかりたるを見て

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花　芭蕉
身の上をたどしほれけり女郎花　涼菟

といひ、其黄に咲きいでたる色をめでゝは

いたづらの色を去りけり女郎花　亀世

とよむ。又女郎花となんいへる名も聞きすてがたくて

女郎花都はなれぬ名なりけり　士朗

と吟ぜし人の心多さよ。そこらあたりの野も何となうなつかしく覺えて

井戸の名も野の名もしらす女郎花　蒼虬

とは風雅の本意なるべく

撫でられて牛も眠るやをみなへし　百花

とよみたらんを思へば落ちにきと戯れし法師も物かは。風のそよ吹く毎に我れさきに搖きそめし女郎花の風靜まりて後までも猶搖れ殘るわびしさよ。

吹くかたへ心の多し女郎花　涼袋
松風をかつきて臥せり女郎花　曉臺
何事のかふり〳〵そ女郎花　一茶

くねるといふ名に男の喜ぶべきを

身を恥ぢよくねるとあれば女郎花　秋色

と警めたる秋色の德の高さは此一句にても知られたり。

わがものに手折れば淋し女郎花　蓼太
兎角して一把になりぬ女郎花　蕪村

折り易きものは折らるゝ世の慣ひとはいひながら折られて喜ぶ花もあるべし。わけては

原中にひとりくるゝか女郎花　秋瓜
暮たがる花のやうすや女郎花　文角

と夕暮の魂を見つけたる詩人の多情には花も恥ぢらひてあからむくなるべし。

芭蕉

こゝに芭蕉といふものあり。木に似て枝なく草に似て遙かに高し。幹は大きやかなれど霜枯れにはいち早く枯れて形ものうく、葉は廣けれどいつしか雨に破れ風に吹かれて秋の扇にさも

似たり。山寺の庭に植ゑられて老僧坐禪の夜深くれば雨の音物すごく、隱栖の書窓にそふて閑人棋を圍むの時月出でゝ涼影枰上に搖く。秋草は皆さゝやかに花咲くものばかりなるに誰かは此芭蕉を取りて秋の季には入れたりける。むかし桃青深川の草庵に芭蕉を植ゑて其雅號となせしより以來、はせをといへば何となう尊くかしこきやうに思はるゝも此草の幸なりや。されば古今の俳人多く芭蕉を詠じ出だせるが中に

　秋風に卷葉折らるゝ芭蕉かな　加生

といふ句もさることながら

　芭蕉葉は何になれとや秋の風・　路通

と詠じたる手柄は又一きはにて、路通一生の秀逸は此句にとゞめたりとかや。

　風の夕芭蕉葉提げて通りけり　保吉

とあるは

　雨の日や門さげて行く燕子花　信德

より脫化し來りたれど猶見るべき所なきに非ず。

　稻妻の形は芭蕉の廢葉かな　一風

といふも奇なれども

　稻妻は棕櫚や芭蕉のそよきかな　巨海

と詠みしは平穩にして更に妙なり。さるを又

　はら〳〵と稻妻かゝる芭蕉かな　樗堂

といひかへたる器量をさ〳〵芭蕉翁の遺響あり。

　垣越しに引導のぞくばせをかな　卜枝

　芭蕉葉や在家の中の淨土寺　露川

露川は卜枝の糟粕を嘗めたり。蓼太更に之を翻案して

　七堂の外に大破のばせをかな　蓼太

とせしは奇に過ぎて狂體に陷りたるが如し。

　芭蕉葉や打ちかへし行く月の影　乙州

とけ月と風との景色を言ひおほせ

　雨蛙芭蕉にのりてそよぎけり　其角

とは異な處を見付けられたり。

　染かねて我と引きさく芭蕉かな　蓼太

　裏打のしたく成たる芭蕉かな　碩布

二句稍ゝ奇拔に過ぐれど新意を出だしたるは妙なり。

俳諧麓の栞の評

撫松庵兎裘なる人あり、一書を著して「俳諧麓の栞」といふ。之を一讀するに終始日本古代の文法論を述べて俳諧上に應用したるなり。蓋し古より俳人古學を修め文法を知る者少く、隨つて文法語意の點に於て誤謬をなす者比々皆是なり。況んや近世の俳人漫に自分免許の宗匠を以て愚者を惑はす者をや。著者こゝに見る所ありて此文法論を著し、今時の俳人の迷夢を破り、且つ古の俳書の杜撰を罵る。卓見識ありと謂ふべし。而して文法に至りては余も無學の一人なり。故に敢て是が批評を試みず、唯ゞ著者に向つて吾人に學問の好方便を與へられたるを謝するのみ。然れども今日の俳諧に古代の文法を其まゝ用ゐるよと云ふに至りては、余は著者に向つて一問答を煩はさゞるを得ざるなり。抑も著者が文法といふものは何の時代の文法なりや。太古か、奈良か、平安か、はた近古か。孰れの時代にもせよ、何故に其時代の文法を固守するや。文法は時代と共に變遷し得べからざるものか。是等の疑問は從來余が胸間に蟠りて解けざるものなり。著者は一心に文法を確守せらるゝが如し、故に敢て教を乞はんとす。同書第二百六頁の終りに曰く、「俳諧ニテハ俗ニ從フモ妨ナキガ如クナレドモ故意ニ定格ヲ犯スベキニ非ルナリ」云々と、是に於て著者は稍ゝ俳諧を見ること寬なるを知る。而して著者の主義愈ゝ模糊たり。(其故意に云々と云ふに至りては余も之を贊成するなり)又著者は俳諧學環

等を撃駁するに非らず、却りて芭蕉、越人等を庇護して此「かな」は筆者の誤なるべし、此「や」は感歎の「や」には非るべしと云ふは不公平の論たるを免れず。余は信ず、芭蕉、越人の如き假令古文法を知るとも故意に之を犯したる場合あるべしと。何となれば芭蕉時代には古文法一變して「や」「かな」等の用法意義共に古の「や」「かな」に非るを以てなり。其角の

　此人数舟なればこそ納涼かな

の如きは「虚栗」には「納涼なれ」と書きたり。然れども余は寧ろ「納涼かな」の句を以て其角の作なるべしと思惟す。よし其角の作は兎もあれ、余は此を以て彼より善しと考ふるなり。蓋し近世俳諧の習慣として「なれ」よりは「かな」の方語氣強ければなり。斯くいへばとて余は全く古文法を廢する意にもあらず。此事は思考中にて自ら判決し難き處あればこゝに詳言せず。只ゞ大方の教を俟つ。

俳諧麓の栞は二百五十頁に渡るの一冊子なれども、其内百六十頁は十二品詞の説明（殊に動詞の分類）を以て塞がりたり。故に其他に就きて疑はしき数點を擧げん。第五頁に「通常ノ句體ニ於テ切字ヲ用キルハ無形なる風情ヲ以テ有形ナル風姿ヲ判斷セシガ爲ニシテ詩ニハ之ヲ實虚ト稱ヘ無形ヲ以テ有形ヲ裁ケリ」云々

とあるが如きは讀み得て甚だ容易なるが如きを覺ゆと雖も、余は再三再四讀み返して猶其の何事なるやを解する能はず。徒に呪文を讀み讀經を聴くの感あり。無形の風情とは主観的觀念の如く、有形の風姿とは客観的萬象の如し。然れども切字なる一虚語が此主客兩觀の間に立ちて何程の功用を爲すかを怪まざるを得ざるなり。古來の歌書俳書には此の如き曖昧なる論固より多し。然れども明治の今日此種の説明を見るは奇怪至極と謂ふべし。文學は論理にて説明し盡すべき者に非ざれば、全く之を論ぜざるは則ち可なり。苟も之を説明する以上は今少し論理的の明晰を要すること勿論なるべし。著者の意果して如何。又第二百二頁に

　更科や月はよけれど田舍にて

のや字を玉鉾や道邊の例とするは甚だ心得ぬことなり。此やは感歎のやといふべきや否やは知らざれども、俳句にては其重なる語を極めるの用を爲すなり。此句にては更科といふ語が主にして題ともいふべきものなり。芭蕉の古池の句のやもこれに同じ。越人の

　行く年や親に白髪を隱しけり

のやも同じ事なり。別に變りたる意義あるに非ず。又第二百二十二頁に

　鳴く鹿もさかるといへば可笑けれ　闇子

のけれを攻撃しあれども、これは俳諧の上に用ふる一種の意義を含むものなれば、あながち責むるには及ばざるべし。況んやこその係りありて結び語なき古例さへある位なれば、其係り語なくしてけれの結語ありとも左迄珍しきことに非るべし。又第二百二十三頁より以後に定十體なる者を論じたり。其論は皆文法に關する美辭學中の一小部分なれば、余はこゝに之を講究するの勞を取らざるべし。

「俳諧麓之栞」を把りて之を讀むに、はじめに厭倦を生じはては嘔吐を催さしむるものは作例として擧げたる俳句の甚だ拙劣淺陋なることなり。蓋し此書は普通の俳書の如く古句を引きて例となさず、盡く今人（著者をも含む）の作を列ねたる故にぞありける。同書の凡例に曰く、作例ハ今少シク思フ所アレバ故意ニ近世ノ諸名家及余ガ社友ノ作什ニシテ法則ニ適合スルモノヲ以テ之ニ充テタリ云々と。余等其何故に斯く近人の句ばかりを擧げたるかは知るに由なけれども、思ふに古人の作例ばかりにては文法の變化の例として一々之れを擧ぐるに便なければなるべし。さるにても今少しは句の選び方

もあるべきを、初學の階梯とはいひながら係りなることゝ思はるゝなり。余は初めに此書を讀みし時は故意に今人の拙劣なるを示さんとの著者の謀りに出でたるものならんと思ひしが、凡例を再讀して佳什云々の字あり。且つ作例中著者自身の俳句さへあるを見て始めて其選び方の眞日面なるを知りたり。余は作例中其僅に可なる者を求めしに二十餘句を得たり。若し夫れ秀逸なる者に至りては一句だも見出すこと能はず。又「拾遺金玉」と題して擧げられたる諸作家の句にても過半は平句凡調のみ。然れども初學の余輩妄りに盲評を呈して大家を褒貶せんはあたら罪つくるわざなれば一旦は思ひ止らんとせしも人の勸めによりて次に一斑を論ずべし。之を要するに著者は文法に精しき人なるべし。而して俳諧の趣味を解し得るの人ならざるが如し。

「俳諧叢の栞」の末に、「拾遺金玉」なる一節あり。蓋し方今大家の名句を拾ひ集めたるの意なるべし。されども余輩の愚見を以てすれば箸にも棒にもかゝらぬと云ふべき者だに少からず。例へば

赤蟇のかしこまりけり禪の前

夏の月蹴りに出たうなりにけり

笹啼にいよ〳〵春の待たれけり

はらわたにほろりと染みぬ桐一葉

春風のあぢはひ知りぬ東山

花の山日の永いでもなかりけり

頭巾きた人さきたちて柳橋

うき秋も月に忘れて草枕

等の如し。其他發句といへばいふものゝ發句とも何ともつかぬ者亦少からず。

行燈もしたし夜長のふみ机

朴訥は仁者に近し毛見の衆

右二句の如き一は韓愈の詩を翻譯し、一は論語の語を應用したるまでにて何の手柄もなし。

こゝろ練る窓や木の葉の障る音

黒髮の亂れはづかし朝ざくら

義にはてし髑髏まつるや枯薄

南朝の御運なげくや榾のぬし

右四句の如き月並社會の俗調に落ちずといへども、亦意到りて筆到らざるものなり。

戸の透に蓑かけ替へて榾火哉　藤丸

「かけ替へて」の語巧を求めて却て失す。「押しつけて」等と改めては如何。

餘の木皆手持無沙汰や花盛り　芹舍

「手持無沙汰」とは最も拙劣なる擬人法にして、此類の句は月並集中常に見る所なり。故に余は私に之を稱して月並流といふ。余曾て句あり。

大かたの枯木の中や初ざくら

凡調見るに足らずといへども猶或は手持無沙汰のいやみに勝るべきか。呵々。

初秋のくるやまばらの松林　藍山

稍ゝ幽趣あれども惜い哉句法備らず。拙句甚だ相似たる者あり、錄して一粲を博す。

行く秋やまばらに見ゆる竹の藪

余「拾遺金玉」を探りて秀句四首を得たり。即ち

から草のかれ〳〵淋し薄園　柳仙

山畑や芋退くあとに蕎麥の花（[illegible]）　永機

行く秋や籠に殘りし蟲のすね（[illegible]）　晉子

白魚とはことなき魚の狹物かな　螢川

或は奇警、或は蒼勁、皆老練の筆なり。余輩後進の及ぶ所にあらず。（螢川の句中「白魚とは」の「と」字除きたきものなり）

發句作法指南の評

近頃其角堂機一なる宗匠あり。「發句作法指南」と云ふ一書を著して世に刊行す。余之を繙て一讀するに秩序錯亂して條理整然ならず。唯ゝ

思ひ出づるがまに〳〵記し付けたるが如き書きぶりは、猶明治以前の著書の體裁にして今日の學理發達したる世に在りては餘り珍重すべきの書にあらずといへども、此著者にして余が想像するが如く明治以前の教育をのみ受けし人ならしめば、余は此書を讃美して一讀の價値を有するものなりといふを憚らざるなり。蓋し今日の如く腐敗し盡せる俳諧者流の中より此一人現れ出でゝ同學者の汚點と淺識とを指摘したるの勇氣と見識とは、局外者の讒言を呶々するに勝りて愉快なるを覺ゆるなり。然れども之を讀んで猶不足を感ずるの個處多きは勿論の事にて、之を詳評するに勝へずといへども、一讀の際思ひあたりしことのみを擧げて著者の教を乞はんと欲するなり。

此書の始に俳諧の起原を說く中に「連歌は詞を和歌に取れる故（略）只中等以上の社會にのみ行はれしを我正風の祖師芭蕉翁大にこゝに慨歎する所ありて」云々と云ふは順序を顚倒せるものにて、連歌を俳諧に變じたるは芭蕉にあらずして貞德にあること勿論なり。されど後段に猶芭蕉の意向を述べて「今の俳諧の如きは作意になれる者のみなれば自然の妙は絕て無き者なり」と云ひたるは確論にして、且つこれによつて觀れば前段の誤謬は著者の誤解にあらずして敍述の粗漏に出づること明らけし。又著者は稍ゝ「俳諧は滑稽なり」と云ふ釋義に拘泥して、故らに戲謔に傾きたる俳諧を引用して例となし、且つ其主旨を演繹して「蕉翁が晉子を賞せられしも此道の第一義と立たる滑稽の他に拔でたる故ならん」と云ふに至りては其論甚だ妙なるが如しといへども、終に我田へ水を引くの誹りを免れず。其角の滑稽に妙を得たるは眞實にして著者の言當れり。唯ゝ滑稽を以て發句の本意とするに至りては其說甚だ誤れりと謂ふべし。然れども著者の滑稽の意義を解すること太だ曖昧にして、時として意を異にするなきかの疑を存せざるを得ざるなり。

發句作法指南に、發句の調格と題して、其中に「發句は纔に十七字なれば（略）和歌の如くひたすら優美なる姿を述る能はざる者あり、故に和歌よりは一層區域を弘めて俗言平語を交へ嫌ふなきなり。かゝれば姿は第二義として感を第一義とす。さればとて優美を嫌ふ者と思ふべからず」云々とあるが如きは至當の論なり。然れども姿の亂れたる例として、

枯枝に烏のとまりけり秋のくれ　芭蕉

ひなのさま宮腹々にまし〳〵ける　其角

柳散り清水かれ石ところ〳〵　蕪村

といふ字餘りの三句を擧げたるは未だ以て讀者の心を他かしむるに足らず。何となれば姿即ち句調の善惡は必ずしも字數のみに關せざるなり。若し句調は字數の上のみにありとせば、三十一文字に限りたる和歌の上に姿を論ずるの必要も無く、隨つて定家卿抔が姿に就きて喋々と言葉を費さるゝ事も無き筈なり。和歌既に然りとせば發句亦これなくして可ならんや。例へば

川中の根木によころぶ涼み哉　芭蕉

といふ句を試みに

よころんで涼むや川に出る根木

といひかへんか。其心は同じ事なれども其の格調に至りては天壤の差あること勿論なるべし。又

默禮にこまる涼みや石の上　正秀

といふ句を

石の上もく禮こまる涼み哉

と改めなば如何。僅かに言語の位置を顚倒せしに過ぎざれども、猶其句調は原作に劣るを見るべし。近時の書生にして俳諧を學ぶ者、作意到りて筆隨はざるの憾あり。蓋し其思想は豐富なれども未だ格調に於て到らざるものあるによ

らざるを得んや。

「發句作法指南」の中に「發句に雅調と俗調の別あり」と題して其中に「卑俗とは詞の上をいふにはあらず心の卑俗なるをいふ、（略）其の卑俗の調といふは例へば

家内皆まめでめでたし歳の暮

といへる類是れなり、此句の如きは詞の上卑しといふべき處は露ばかりもなけれど其心は無下に淺ましき俗調なり、此句を或人が

何事もなきを寶そ歳の暮

と直したるは、雅致淺からず姿もいと高し」云々とあり。余は一讀して稍ゝ怪しむ所あり。乃ち再三之を讀む。而して其意を得ず。初めに心の卑俗といへるは善し。然れども家内云々の句を何事も云々と改めて其心に幾何の差異ありや。余は兩句を比して其心は全く同じく只ゝ其姿遷せりといはんとするなり。又其姿は孰れが可なるといふに著者は「姿もいと高し」と判讀して後句を譽めたれども、余は後句に比して寧ろ前句の眞率なるを取る者なり。（尤其句の凡俗なるはいふまでも無し）此の如き甚だしき謬説に後生を誤ること多からんに注意ありたき者なり、又同書に「發句の沿革」と題して「發句の世に行はるゝ事、凡そ二百餘年、其間を大別して三となさんに守武宗鑑より貞德季吟に及ぶ之を其一とす」云々と說き出したり。然るに守武宗鑑は今を去る事大略三百五十年位前の人なれば二百餘年とは痛く違ひたり。又時代を三に分つとありて第一のみを擧げ第二第三の區別無きは不都合なることなれど、大方は活字の誤植か校正の粗漏によりしなるべし。さはいへ數字の誤謬程害の多き者あらざれば、著作編輯に從事する人は最も謹まざる可らず。又同書に發句の切字幷にてにをはを論じて「此發句の切字といふは一種格別に設けたるものにて歌と同樣に論ずべき者に非ず」と云ひしは卓見なれども「てにをはと唱ふる者は、自ら其詞に備りてある故、眞心のまゝに云ひ出れば知らず知らず自ら叶ふ者なり」といひ「變格といふ者を設け分らぬ者は皆此部にあて入れるなど笑止の限りなり、（略）格に變あらば格にあらず」といふが如き、餘り文法を輕蔑したる言ひ方にして、余は其の一理あるに拘らず、之れを評して「俳諧麓の栞」と共に兩極端に走る者なりと云はんとす。

「發句作法指南」の中に「發句の感あると感なきと」と題を掲げて白念といふ人

背向けて眠り催す榾火かな

と作りしを、ある人一讀して扨もあぶなき句を詠まれたりといへば、白念忽ち悟りて

背向てあぶながらるゝ榾火哉

と改めたることを記載し、それにて一座の秀吟となりし由をも言ひたり。然れども余が見る所を以てすれば、後句稍ゝ曲折を求めて却て卑俗に陥り一の妙味なし。寧ろ前句の淡泊無味なるこそ面白かるべけれと思ふなり。

同書の「蕉翁の六感」と題して其角、嵐雪、去來、丈草、支考、野坡の六門弟の句を芭蕉の感賞せしよし記し、且つ其句を掲げたり。こは誰が言ひ傳へしことか知らねども、蕉翁の感賞せりと云ふは誤謬なるべし。其證は去來の部に「實なること去來に及ばず」と書きて

應々といへど叩くや雪の門　去來

といふ句を載せたり。然るに去來の此名什は蕉翁沒後の作なる事去來抄に詳なれば、爰に去來抄の一部を抄出して示さん。同書に曰く

丈草曰此句去來が雪の門の句なり不易にして流行のたゞ中を得たり。支考曰いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰たゞ先師の聞給はさるを恨るのみ。曲翠曰句の善惡といはず當時作せん人を覺えずといへり。其角曰眞の雪の門也。許六曰

尤佳句也。いまだ十分ならず。露川曰く五文字妙也。去來曰人々の評亦おの〳〵其位より出づ　此句は先師遷化の冬の句なり。其頃同門の人も難しと思へり。今は自他ともに此場にとゞまらず。

これを讀めば芭蕉の此句を聞くに及ばざること明けし。又右六感の中に支考の句として

蚊屋を出て又障子あり夏の月

を舉げたり。されど此句は風俗文選に載せたる「贈新道心辭」といふ文の終りに附けたる句なれば丈草の作なること論を俟たず。恐らくは著者誤りて丈草と支考とを入れ違へたるものには非るか。

「發句作法指南」の中に一家人舉て風雅」といへる一項ありて「世に俳句を好む人多し、されども夫之を好むも妻はさる心なきあり、父之を好むも子其道を知らぬあり」云々とこと〳〵しく說き出しながら、其例として僅かに曲翠一家をのみ舉げたるはいと飽き足らぬ心地すれば、今余が知れるまゝに之を補はんと欲すれども、盡く列舉せんは餘りくだ〳〵しければ其有名ならぬ者と且つ疑はしき者とを除きてありふれたる者のみを舉げんとす。先づ其父子共に俳句を嗜む者は左の如し。

紹巴……玄仍・玄仲
倫里……來川
昌琢……昌程
智月尼……乙州
蟬吟……探丸
千那……角上
季吟……湖春・正立
荊口……巴靜・此筋・千川・文鳥
未得……未琢
東順……其角
堤亭……若翁
風虎……露沾
風麥……梢風尼

又其父子共に相聞ゆるに非るも、兄弟共に俳家たるもの少からず。即ち

玄陳……心前
仙風……杉風
望一……正友
牧童……北枝

等の如し。又叔姪共に之を嗜むものは

正秀……曲翠
半殘……東來

等あり。又夫も妻も之を嗜むもの多きが中に

嵐雪……妻
凡兆……登米
惟中……園
千春……綾戸
光貞……みつ

等最も有名なり。又一家數人を出だすものには

去來（兄）・魯町（弟）・千子（妹）
去來……風國（姪）
永參女……知足
知足……蝶羽・女つね
蝶羽……春女（蝶羽妻）

の如きあり。此外家奴にして俳諧に入る者、其角の奴に是吉あり。仙化の奴に吼雲あり。洞白の奴に與三あり。蓋し父子夫妻叔姪主從にして共に之を好む者は一は其遺傳により一は其薰陶に出でずんば非ざるなり。

「發句作法指南」の中に「延寶前にも名吟なきにあらず」といふ一項ありて、著者の名句と認めたる俳句を舉げて之を評論したり。然れども此中の過半は延寶以後の作ならんと思はるゝなり。今手許に參考書無きを以て一々之を證明する能はずと雖も、是等の句は歷史的に考ふるに決して貞享以前に於て此の如く多くある可らざるなり。蓋し貞享の頃芭蕉の一派を開きしより後は天下之が爲に風靡し、假令他門の俳家といへども多少蕉風の餘[illegible]を受けぬものは之れ無きに至れり。故に貞享以後には蕉門以外にも名句多けれども延寶以前に於ては此種の句決して此の如く多からざるなり。且つ又此項中に抑りて

元日や神代の事も思はるゝ　守武

草も木もめでたさうなりけさの春　貞徳
いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥　貞室
これは〳〵とばかり花の芳野山　同
元日の見るものにせん不二の山　宗鑑

等の如き延寶以前の名句を舉げざるは僻りありふれたりとてわざとせし事にや如何。又

ねふらせて養ひ立てよ花の雨　貞徳

と云ふ句を評して「此句は子を設けたる人にと某書あり、此ねふらせて。。。といふ一句家に嬰兒を養育する情を盡せり、（略）夫れ嬰兒は乳汁の養ひ足れば眠る、若しいさゝかにても不足すれば眠り得ぬのみにもあらず、種々の疾病是れより起り、よし幸に死せずとも生涯多病の者となる、此句は之を思ひて春時花を催す雨を乳に比していへる凡骨にあらざるなり」と長々しくいはれたり。されども余の考にては是れ大なる誤解なりと思はる。評者は「ね、ふらせて」を「眠らせて」と解し「雨」を「乳」に比したるが如く見ゆれども、余は「ね、ふらせて」は「舐らせて」と解し「雨」は「乳」にかけたるものと思ふなり。即ち飴をねぶらせて養ひたてよといふ事を花の雨に取り合せたるものなるべし。總て貞德時代の俳句は大抵此の同じきものにたよりて他の語をかけるが如き體のみ多きにして、唯々其物に類似の點ありて雨を乳に比するが如き事は僻りに當らぬなり。俳句に限らず總て詩歌文章を解するには其作者と其特性と其時代の風調とを知らざれば大なる誤謬を來たすは常のことなり。

「發句作法指南」に芭蕉句解を作りて

行く春や鳥啼き魚の目は泪　芭蕉
鰒汁や鯛もあるのに無分別　同
七月や六日も常の夜には似ず　同
あか〳〵と日はつれなくも秋の風　同

の數句をも名吟の如く評し、殊に秋風の句を取り一同賞せしが如きは其意を得ざるなり。芭蕉如何に大作家たりしとも其俳句皆金科玉條ならんや。又

青くてもあるべきものを唐辛子　芭蕉

といふ句を解して「唐辛子は青くても辛き者なれば青くてもあるべきに、さも辛さうに燃たつ如く赤くなる事よと飽まで辛きさまなるを言ひ顯したる處」云々とあれども、こは全く反對に誤解したるものにはあらざるか。愚考によれば此句の意は「唐辛子は固より辛き者なればせめて青きまゝにあらば目にも立たずしてよかるべきになまじひに赤くなるが故に人の目にも立つなり。目に立つ程うつくしければ甘くもあらんかと思へばさはなくて甚だ辛き者なる故に其赤き色に染まるだけが惜らし」となるべし。若し單に辛き形容とのみせんには「あるべき者を」の廻し方ゆるやかに聞えて面白からざる樣に覺ゆ。

又同書其角傳の終りに

寶。永。四年二月青流病を草庵に訪ふ
春夜閑室に笛の音とて
鶯の啼きさむしきり〳〵す

此句解し難きよし世上には云へと去來並に支考の評に云々

とあれども、去來は既に寶。永。元年に死したれば此の寶永四年の句を評すべきよしなし。こは何かの間違ひなるべし。

又同書の「或俳書にてにをはをいへる」と題せる一項は九頁の長きに渉りながら其の解說甚だ必要ならず。

「陣中へは。便りも。無用とかたく云ひつけ置たるに。」（略）これもてにはをのけて「陣中たより無用かた〳〵云ひつけ置たる（略）かくして聞ゆべきか（略）

といふが如き解釋にも及ばざる事をいくつともなく例を引きて無用の辯を費したる、實に蛇足に類するものにして僻りといへばいふべし。

又同書に諸家の略傳を敘し又は略評を下す處、多くは俳家奇人談の文章を取りて處々助辭接續辭杯を僅かに書き替へたり。古書を其儘採り用ふること既に見識なきが如くなれども、其文を全く引用してこれは何の書によれりと明言し置かば固より何の罪も無き事なるに、其文章の大方に採用しながら處々の言語を書き替へたるが如きは古文を剽竊して己れの文と僞り稱するの嫌疑を免れず。著者の意必ず此の如くならざりしなるべけれど、少くとも其不注意の罪は之を負はざるべからざるなり。猶此外多少の瑕瑾多かれども一々之を指摘するも煩はしければ其評論は止めつ。

（明治二十五年六月二十六日 ——十月二十日）

獺祭書屋俳話正誤

駟も舌に及ばず、況して筆に書きとめたるは後より言ひくろむることもならざるべし。それを思へば著書など云ふもの程大膽なるはあらじ。さきに俳話を世に公にしてよりこゝに數年、かしこもこゝも誤れりとは疾くより心づきぬれど、さりとて誤を正さんとすれば全篇を改めねばかなふまじきに、さることもなりがたくて一日二日と過ぎ行きしを、斯くては終に誤に誤を重ねて人を誤り自ら僞ることの本意ならねば、やうやく思ひたちて其一部を正誤する事となしたり。もとより端から端へ正誤するにてもなく、はた言ひ過ぎたり、言ひ足らずなど思へる處は必ずしもこゝに正さねば、正誤出てまた誤なしとな思ひたまひそ。

第十六頁　以下嵐雪を論ずる處甚だ誤れり。大體に於て嵐雪をやさしきものに見て、總て其角の反對なりと論じたるは、いたく嵐雪を取り違へたるなり。嵐雪は寧ろ其角に似たるなり。蕉門幾多の弟子中最も其角に似たる者は嵐雪なり。嵐雪の句の佶屈なる處、斬新なる處、勁拔なる處、滑稽なる處、古事を使ふ處、複雜なる事物を言ひこなす處等、甚だ其角に似て只ゝ一歩を讓るのみ。其角、嵐雪が特に名を得たるは其俳句に必ずし、名句多しとのわけならず、寧ろ何でも彼でも言ひこなす處、即ち兩人が多少の知識學問を具へたる處にあるなり。

例句

殿は狩りつ麥餅賣る櫻茶屋　嵐雪
煮鰹を干して新樹の烟りかな　同
煮取たくこゝでもお僧愚なり　同
星合に我妹かさん待女郎　同
稻妻にけしからぬ巫の目ざしやな　同
蓮の實の飛ぶは忠しかそもされば　同
早雲寺名月の雲早きなり　同

此外前書を存する者は嵐雪句集の過半にして、前書ある句は只ゝ言ひこなしの處に於て人

を驚かすものなり。蓋し嵐雪は言ひこなしの力あるを顧みて、我から文學的の趣向を探ることに力めず、偶然に遭遇する世俗事一切之を俳句の材料として消化せんとしたるならん。又嵐雪に理想的の句少しと言へりしかど、多少の理窟を說きたる者は其例に乏しからず。例へば

三の朝三夕暮を見はやさん　嵐雪
年已に明けて達磨の尻目かな　同
花の夢此身を留守に置きけるか　同
世のあやめ見ずや眞菰の髑髏・　同
庭清水心の塵ぞ沈みつく　同

の如し。嵐雪に擬人的、譬喩的の句甚だ多し。例へば左の如し。

四海波魚のきゝ耳あけの春　嵐雪
元日や晴れて雀のもの語り　同
めん〳〵の蜂をはらふや花の奢　同
手の行かぬ背中を梅の木ぶりかな　同
梅干ぢやと見知つて居るか梅の花　同
しだり尾の長屋〳〵に菖蒲かな　同
初鰹盛りならべたる牡丹かな　同
時鳥聞けば座頭の根付かな　同
名月や歌人に蛇の無きがごと　同
初雪や頬白の頬の白き程　同
蒲團著て寐たる姿や東山　同

畑中に吉野靜や菜拂ひ　嵐雪

此外前書長き句は譬喩的の者多し。是れ已むを得ざるに出づるなり。前書長き者は複雜なる事物、即ち十七文字には迚も包含すべからざる程の事を前書に現し、而して後其全體の趣味、若しくは一部の事物)を季に配合して文學的ならしめんとする者なれば、此場合に於て季の景物(又は色彩を施すべき配合物)を譬喩に使はねばならぬやうになるなり。

烏帽子著て白き者皆小田の雁　嵐雪

と云ふ句ばかりを見ても何の事とも解せぬなり。其前書を見れば

鶴が岡の放生會拜みにとて待宵の月かけて雪の下のやどりに侍り、試樂の笛に夜すがらうかれぬ。明れば朝日の木の間たえだえに樂人鳥の如くつらなり社僧雲に似てたなびき出る神のみゆきの嚴重なるに階下蹲しづまり松の嵐も聲をとゞめぬ。

とあり。即ち知る烏帽子云々の句は鶴ケ岡放生會の景況を敍したる者にして、小田の雁とは烏帽子著たる人のつらなりたるさまを斯く喩へたるなり。烏帽子白衣の人の形狀は小田の雁と餘り似たる處も無きを斯く云ひたるは何故ぞと言ふに、第一、放生會と云ふことを現すに烏帽子の人ばかりにては固より不十分なる故、せめては譬喩になりとも鳥を出さんとて雁を持ち出したるなり。第二、鳥を出すには寧ろ鶯の方善かるべきなれど、雁といはねば秋季にならぬ故雁と置きて、其列を爲したる處を譬喩の眼目としたるなり。斯る些細なることは文學上に左迄の價値無けれども、此句にても嵐雪の用意周到なる處、即ち其言ひこなしの上手なる處をあらはすに足れり。

第二十一頁「應々といへど叩くや雪の門」の一句を削る。余は此句を誤解し居たるなり。後に考へ得たる所に據れば、此句の作者は家の内に在りて應々と呼ぶ方の人なり。さすれば此句は此方で應々といくら返事しても外では叩いて居ると言ひしものなるべく、さて斯く考ふれば此句には雅致無くして却て俗氣あるを覺ゆ。當時此の種の印象明瞭なる句無かりしために誰も彼もめでしものと見ゆれど、今日より見れば月並調に近きものなり。

同頁下より二行目、去來の句二百句許りとあるを、三百句許りと改む。

同行、秋月と時雨の二題云々とあるは誤れり。去來の句集中、櫻花、鵑、秋月、時雨、雪の五題は十句以上あり。而して丈草も亦此

此題は十句以上あり。丈草が細微を詠ずるの傾向あるは誤れるにあらねど、此等の題を詠じたる句叢を以て比較するは誤れり。

第・十六頁・　俳句に擬人法を用ふるは後世に多くして云々とあるは疑はし。擬人法が孰れの時代に多きかは猶善く研究して後に言ふべし。元祿時代に擬人法の句は丈草以外にも多く之を見るなり。

第・五十七頁・　「月花の遊びはじめや歌がるた」の一句を削る。此句俗氣ありて且つ陳套を免れず。

増補第三頁・　下より三行目世上とあるは上世の誤りなり。

増補第七十一頁・　「人に春をこしらへさすよ薬竹寶」の一句及び其次の「煤ははかでも」云々の一行を削る。如何にしても此句俗にしてこゝに挟むに堪へず。

増補第八十頁・　大鵬蓼太を論ずる内、「一興つて力ある者也有、曉臺、蓼太、蕪村、闌更」云々とあるは少しく誤れり。也有は與らず、削るべし。而して白雄は加へざる可らず。

同頁、「縱横奔放咳唾珠を成す者を求むれば雪中庵蓼太を第一とす」とあるは大に誤れり。前に擧げたる五大家は皆縱横奔放咳唾珠を成す的の人なれども、特に蓼太を擧げて第一となさんこと甚だ誤れり。強ひて蓼太を辯護して言はゞ縱横奔放は或は他に勝りたらん、咳唾珠を成すに至りては少くも蕪村の下に在り。

同頁、「博學精通才識群に絶する者を求むるも亦蓼太を第一とす」とあるも誤れり。此點に於て蓼太恐らくは蕪村の下にあらん。

同頁、「蓼太の秀句の多き俳人中其比を見ざる所なり」と記せるも大に誤れり。古往今來俳人の佳句多き者に蕪村を第一とす。未だ佳句の多少に就きて精細に比較するを得ずと雖も、蓼太が蕪村は言ふ迄も無く曉臺、白雄、闌更に比して特に佳句多しとは斷言すべからざるなり。余或は恐る、五傑中最も佳句の少き者は蓼太に非るか。蓋し蓼太の句集は佳句無きに非れども玉石混合の嫌あり。若し五傑中俗句多き者を求むれば、言ふ迄も無く蓼太を第一とす。是れ蓼太が當時に於て最も人望ありし所以にして、五傑中人品に於て一等下る所以なり。

増補第八十七頁・　「實に成田蒼虬の功なり。」とある功の字二個共に力と改む。蒼虬の俳諧に於ける害ありて些の功無し。功の字を置くは缺妥なり。故に改む。

増補第百四十七頁・　五行目孔位置の移るを覺えず海の景色の動くかと疑はるゝの一句は衍文なり。削り去るべし。

増補第百六十九頁・　宗因調以下第百七十五頁・伊丹調に至る迄を削る。蓋し古人の調に擬せんとせば、第一に其人の俳句を熟讀して其人が用ふる所の句法、用ゐざる所の句法、好む所の詩境、好まざる所の詩境、取る所の材料、取らざる所の材料等を辨別せざるべからず。第二に作句の上に變化自在の技倆を有せざるべからず。而して余が宗因以下諸俳家の風調を模擬せし當時に在ては、善く其人の風調を究めず、且つ自己の作句は稚氣ありて眞の趣味なる者を解せず。既に其人の句を究めず、自己は趣味を解せず、是れ余が大膽にも何調々々と題して容易に數十句を得たる所以なり。今にして稍ゝ古人の面目を辨別し、自己の技倆の幼稚なるを悟るに及んでは、一句の古人に近き者を求むるも得べからず。況んや幾多の古名家を取り來り、十二句の俳句を以て其人の句調、好尚を現さんとするをや。此何調々々なる者は盡く句を成さず。余は此書を披いて此處に到る毎に必ず卷を覆ふ、其陋に觸るゝを厭ふなり。

中に就きて宗因調と素堂調とは猶或は存すべし。宗因、素堂二人の特色は皮相の句法にあ

り。趣味に至りては宗因は皆無、素堂は幼稚なり。且つ二人の句は全く他の諸俳家と異なるを以て、余が作たとひ宗因調、素堂調として適せざるも、猶他の諸俳家に紛るべくもあらず。是れ余が作の猶存するを得となす所以なり。去來調、尚白調は其句法趣味に於て稍〻類似する所なきに非ず、只〻其幼稚淺薄なる處、人をして一笑を催さしむるに過ぎざるのみ。凡兆調は諸調中の最拙劣なる者にして、幼稚淺薄なる處、面貌精神の似ざる處、徒に凡兆を誣ふるの感あり。來山調、伊丹調（鬼貫調とすべきもの）は面貌に多少の類似あり、精神は似ざる處多し。其可なる者は或は存するを得んか。來山、鬼貫の句は滑稽なる者に非れば平坦なる境遇を彩るに一種特異の句法を以てせしもの、彼の去來、尚白の格調を重んじ神韻を探りし者と異なる所あれば猶類似し易かりしならん。若し去來、凡兆、尚白諸調を以て芭蕉派の句となし、來山、伊丹諸調を以て芭蕉派以外の句となさんには、多少の區別し得たる所無きに非ず。強ひて之を各俳家に當てんとすれば一も其可なる者を見ず。

殊に[illegible]調の內、高燈籠、大三十日の二句、伊丹調の內、[illegible]の句に其の外形內容共に毫も類似せざるのみならず、其句の幼稚淺薄なる、しかも幾分の俗氣を帶びて一見嘔吐を催さんと欲す。昨年書成る時之を見る　此等數首の惡句を改めて猶各調の全形を存せんと思ひたり。今改めんとして再び之を見るに及んで、滿面の惡句筆を著くるに處なく、終に之を抹殺するの已むを得ざるに至る。

古人の風調果して擬すべからざるか。擬すべからざる者を擬せんとしたるは余の過なり、才の足らざるに非るなり。然れども也有が作れる

宗因調　大根引あと黑波とぞなりにける
季吟調　暮るゝ迄休まず引くや大根機
其角調　今ぞ小春見よ大ぬさの大根畠
許六調　手の甲で鼻拭ひけり大根引
惟然調　大根引ちからむひても哀れなぞ
露川調　繼母やたぶさ摑んで大根引

等の數句を見、蕪村が

倣素堂　乾鮭や琴に斧打つ響あり

と作れるを見るに及んで、古人の風調は擬し難きに非るを知る。擬し難きに非ずして擬し得ず。余の至らざるなり。此蕪村の句の如き、句形は素堂に似て趣味は素堂に似ず。蕪村は素堂が未だ解し得ざりし趣味を探り來りて之に素堂風の衣冠を著けしめ、以て素堂に倣ふと題す。而して素堂集中有らざる所の佳句を成す。其全部に於て素堂を似せざるは却りて蕪村の名譽なり。惡句を作りて古人を誣ふる者と同日に談ずべからず。此恥他日雪ぐことを得べきか、前日の事猶恕すべし。嗚呼此恥終に雪ぐべからざるか。噫。

增・補・第・百・七・十・五・頁・　根岸十二ケ月以下の俳句、今より見れば幼稚なる者多し。されども一一に之を改めんは煩勞に堪へず。全く之を削らんも本意に非ず。因りてこゝに太甚しき惡句と思ふ者をのみ削り去り、又は改作することゝしたり。

根岸十二ケ月の每句の上に冠せたる月名一月より十二月に至るは之を削り去る。前條宗因調等を存する場合にも亦此例によりて月名を削るべし。蓋し月名は陽曆陰曆の區別判然せず、且つ一季を通じて用ふべき景物を特に或る月に限りたるも穩ならればなり。

根岸十二ケ月の中

鶯よ名所の聲と[illegible]となく

の一句は平凡にして見所無し。因りて之を削る。或は

鶯の今朝も啼くなり楢の枝

等の句を以て代ふべきか。

菊の垣犬くゞりだけ折れにけり

の一句は俗氣あり故に之を削り、代ふるに

菊の垣南の山は上野なり

の一句を以てす。

名物の蚊の長生きや神無月

の一句は何等の趣味も無く極めて殺風景なり。此句を削り、代ふるに左の句を以てせんか。

冬枯や廣中堂の小豆飯

增補第百八十頁

行春を尋ねて見ばや京女郎

の一句は中七字面白からず。此句削るべし。

增補第百八十四頁

蝶々や順禮の子のおくれがち

の一句禪氣ありて言ひおほせず。「がち」の二字客觀を離れたる處殊に拙し。「おくれ」と終りに置きたるも拙し。此句の趣向の上に於て最も眼目とすべきは、順禮の子の蝶に戲れ草を摘みなどする處に在るなり。されば親に後るゝもかまはず道草を取るところこそいふべきに、此句道草を取りたるためにおくれたりといふやうに作れり。斯くてはおくれたる事主眼となりて道草は僅かに其原因をあらはすに過ぎざるなり。是れ理窟なり。故に此句を削る。

增補第百八十八頁

山里の梅は淋しき茗荷かな

の一句は奇を弄したるものにして實際の感じにあらず。茗荷といふものにして一面に廣々と畑に成り居る者ならば兎も角も、普通には茗荷は少しばかり群れ生ひたる者故、「梅に淋しき」といふ形容ことさらに覺ゆるなり。即ち特に茗荷を以て山里の梅と見ること穩當ならまじ。因りて之を削る。

竹むらの秋をうしろに浦家かな

の一句を削る。此句、句法の上に疵もなけれど、さりとて竹の秋の感情をも寫し出さず。

增補第百九十二頁

まゝ事の相手をしたり秋の夕

の一句は中七いたくたるみたり。且つ此の句法にては秋の夕つれ〴〵に戲れにまゝ事の仲間に入りたる如く聞えて、此處の病兒の看護の情を現さず。試みに改めて

まゝ事の相手に秋の日暮れたり

となさんか。又同頁

さま〴〵に畑分れて秋のくれ

の一句を削る。畑の分るゝといふ事、秋の夕の趣を寫さず、又さま〴〵といふ形容も穩ならず。

同頁最後の行に「提灯にしるす」とあるは前の句足もとへ蟲のなきよる夜寒かなといふ句の前書たるを誤つて獨立したるなり。

增補第百九十三頁

秋高く馬肥えにけり佐野の里

の一句を削る。此句「秋高く馬肥えにけり」の語は固より成語其まゝに用ゐたりともいふべく何等の手柄も無ければ、せめては終五字にて十分に利かすべきを、佐野の里と置きたるは源左衛門を附會したるのみにて蛇足といふべし。

稻妻を潮に卷きこむ鳴門かな

の一句は古句の

稻妻を渦に卷きつゝ鳴戸かな　泰甫

と暗合せるもの、今之を削る。前の句初より中七字十分ならず思ひ居しが、古句を見るに猶同じく拙なり。他に善き考案も無きにや。蓋し此趣向は空想より出でし者にて、稍ゝ實際を離れたれば此不調和を來すにてもあるべし。實際より言へば鳴門いかに渦急なりとも稻妻の瞬間的なるが如くきはどき者にあらねば、卷きこむ「卷きつゝ」等の活動せる語を用ゐて二物を結び付けんこと無理なるにあらずや。

稻妻の雲をはなれぬ月夜かな

の一句を削る。此句は近時の宗匠（？）某の句に

して、十餘年前余が未だ全く俳句を知らざる頃一見したる句なりしを、其後自ら俳句をものするに及んで、其句は一字を違へずして余の口に上り來りたるなり。近き頃筐底を探りて手抄の反故中に此句あるを發見したり。因りて之を削り且つ其粗漏を謝す。

增補第百九十四頁

天の川天の橋立ほの〴〵や

の一句を削る。此句天の川と天の橋立との關係位置分明ならず。其關係を明かにすべき下五文字總て利かず。此句を讀んで讀者の連想すべき位置は天の川と橋立の岬と上下に並行したる光景なるべけれど、此光景は美術的の光景にあらざるべし。

增補第百九十五頁

引き裂いた雲のあとなり秋の風

とあるは、あとありの誤なり。

增補第百九十七頁

宗鑑の生牢かじる野分かな

の一句を削る。此句宗鑑と生牢と野分との材料少しも取り合はず。故に何等の趣味をも感ぜず。

元山の句の作者「可金」とあるは「可全」の誤なり。

增補第二百一頁

葉雞頭や老萊の家綺麗なり

の一句を削る。葉雞頭の色を以て老萊子の彩衣に取り合せたる處、無下に拙し。

增補第二百七頁

しぐるゝや殘燈かすかに詩仙臺

とあるは、詩仙堂の誤なり。

增補第二百八頁

木枯やさめんとしては牛の夢

の一句を削る。此句は牛の心になりて作者の作りたる處いやみありて何の妙も無し。若し之を客觀的に牛の眠りたる有樣を敍したる者とすれば更に其拙きを覺ゆ。且つ中七、下五の句法ゆるやかなる處は春の日永などにや適せん、凩の趣にはあらず。

增補第二百九頁

潤青し雪の山々鳥歸る

の下五字を「鷄飛ぶ」と改む。鳥歸るは春季にまぎらはしく、且つ鴉といふの黑色をあらはすに如かずと思ふ故に改む。

增補第二百十一頁の初に●印を殘したるは「鴉」の字を插み落したるなり。

（明治二十九年十月二十六日
——十二月二十八日）

随問随答

（一）

○**第一問** 「俳句新派の傾向」に「剛力の清水濁して去りにけり」の句を複雑の例として擧げあり。されど蕪村の句にも「鮓つけてやがて去にたる魚屋かな」などいへるあり。剛力の句を以て明治の特色といふべき複雑の例に擧ぐるは其當を得ずと思ふ。如何。

答 御尤なる質問なり。筆到らずして此疑を來したり。余は剛力の句が複雑の度に於て天明の總ての句に超越したりといふに非ず。清水の句の中にて同じ樣なる趣向の句を竝べて其中で剛力の句が最も複雑したるを示したるなり。天明にも複雑なる句無きにあらねど、そは或る部分に限られたり。然るを明治に至りては總ての部分に於て複雑になり行きたりといふ一例として清水を擧げたる者なり。

○**第二問** 「てゝれ干す竿のはづれや天の川」といふ句あり。てゝれとは何ぞ。

答 てゝれは犢鼻褌なるべし。

○**第三問** きり〴〵すの句には古より或は蚊帳の釣手或は長押などに止りて鳴き、或は戸棚の中より飛び出すとか、或は芒の穗先に鳴き居るなどいふ趣向あり。されど余は斯る處を見つけたる事無し。地方によりては珍しからぬ事にや。承りたし。

答 今日東京にていふ「きり〴〵す」は色稍〻緑にして、形、蝗に似たり。余の郷里にては單に「ぎす」と稱ふ。今日東京にていふ「こほろぎ」は色黑くして小く、こは室内にも飛び込み戸棚よりも飛び出す者なり。余の郷里にては之を「かまご」といふ。俳句にて「いとゞ」といふも是なり。されど地方によりては東京の「きりぎりす」を「こほろぎ」と稱へ、東京の「こほろぎ」を「きり〴〵す」と稱ふとぞ。古書に在る「きりぎりす」「こほろぎ」に就きても古來論あり。或は兩者同物異名なりといひ或は然らずといふ。要するに此事は十分にたしかならぬが如し。余の臆測する所にては、「きり〴〵す」は今日東京にいふ「きり〴〵す」の事なるべしと思ふ。何故といふに其啼聲が最も善く「きり〴〵す」といふに似たればなり。但昔いふ所の「こほろぎ」が同物なるか異物なるかは知るによしなし。されど其「きり〴〵す」は問者の問の如く、室内に來らぬは勿論、普通に聞かるべき者に非ず。それを俳句にて最も普通に詠み、且つ室内にもあるが如く詠むは、或は「こほろぎ」と誤りたるもあるべけれど、多くは實際の「きり〴〵す」を詠むに非ずして、寧ろ「きり〴〵す」といふ語を「蟲の聲」といふと同じき意味に用ゐたるなり。さらば何故に「きり〴〵す」といふ語を、蟲の聲」といふが如き意に用ゐたりやといふに、そは初め歌にてしか用ゐたるに據れるなり。歌にてしか用ゐたる譯は、古今集以後には題詠盛りに行はれ、京都の公卿たちは實物を知らずして當推量に歌を詠みたる結果、「きり〴〵す」の如きも何かは知らず只〻鳴く蟲の名として濫用せられたるなり。歌既に此の如くなる上に俳人とても兎角舊慣に泥みて實地を離れんとする傾向より此誤謬を來したる者なるべし。今後は「きりぎりす」は「きり〴〵す」のやうに詠まれたき者なり。

○第四問　（略）寡聞に膠する陋見を去り明治の俳壇に一革命を喚起せんとする貴派同人にして

屠蘇臭くして酒に若かざる憤り
七草は薺はこべに何々ぞ
白き蝶黄なる蝶とばかりなり
涼しさうな處をよつて行き給へ

などの俳句有之、如何に首を傾け想像を逞くして吟腸の影を追ひ意匠の跡を求むるも其趣味を解すること能はず、ある宗匠に問ひしにこれは俳句にあらずして之れをしも俳句と云はゞ活字的配置は悉く俳句と謂はざるべからず、との事に有之候　右は一句の表面に現はれたるだけの意義にして復他に意義なる者無之候や。もし然りとせば何處に詩美を感得したるかを疑はざるを得ず候　云々

答　新派の句の可否を月並の宗匠に問ふとは氣の知れぬ事なり。問者は月並宗匠が「善い」といはざれば新派の句は善い者に非ずと斷定すると見えたり、我々が宗匠に譽めらるゝ句を作るやうならば初めより新派とか何とか騒ぐに及ばぬ譯なり。何處に詩美を感じたるかは其句に表れ居るだけにて分るべし。何も一音を傾け想像を逞くして吟腸の影を追ひ意匠の跡を求むなどそんなにむづかしく考ふるに及ばず。新派の句を宗匠に聽く程の量見ならば、此句に限らずどの句を見ても分らぬ事必定なり。萬一、分つたりといふ句あらば其分つたといふ處は宗匠の譽める處にして、却て新派の本領とする處に相違あるまじ。問者の文中（こゝには掲げず）に歌論を引きたるを思へば、或は和歌臭味の人にはあらざるか。幼稚、拙劣、陳腐、平凡、單調、無滑、何とも彼とも申しやうなき和歌を、さも面白げに讀み、さも勿體らしく貴ぶ人ならば、趣味の多様なる俳句の分らぬもことわりなり。「別れ居たる父母兄弟に逢ひし嬉しさなどは他をもあはれと思はすべくも」とは狹き量見見え透きて笑ふべし。そんな事は俳句にて言へもせぬが、縱し多少言ひ得たりとて、そは俳句に用ふる材料の幾分の一にも當らぬ事なり。歌はそんな事より外に材料無きものと思へる故に陳腐になり了るとはお氣がつかれずや。燒芋を喰ふたうれしさも俳句になる、馬糞を踏んだきたなさも俳句になる、大概な事は言ひ樣次第にて人を感ぜしむ可し。親兄弟に逢ふた嬉しさが無上の材料と思ふやうな狹い量見にては到底俳句の分る期はあるまじ。何處に詩美を感じたかとて、教へ樣も無けれど、先づ郊外に出でゝ、げん／＼蒲公英の花でも見給へ、それで分らずば木の芽をふかんとする林のけしきつくづくと見給へ、若し其時、仰向いた額へ鳶が糞を落したら俳句はこゝなりと知り給へ。

○第五問　左の句の中にて何れが物になり候や。

人を見て犬吠え出すや桃の里
知らぬ人に犬の吠ゆるや桃の村
桃の村見知らぬ人に犬吠ゆる

答　いづれも句になり申さず。

商人を吠ゆる犬あり桃の花　蕪村

といはゞ宜しからん。

○第六問　左の句は類句あるために落第せしや。又は趣味無きためにや。

手習の師匠が嫁や土筆

答　斯樣な駄洒落的の句を善きと思へるやうにては頼もしからず。土の筆といふ縁にて手習といふ事を取り合すが如きは貞徳派の手段にして、其品格の卑き事今更いふに及ばず。發音の掛け合せ、文字の掛け合せなどを捨てゝ、趣味の上に配合を求むべし。

○第七問　春季結足の句の中に足の字の見えざる者あり。如何。其例

此頃や踏心地よく春の草
よき人の家の花見の宴かな
小謡や櫻月夜の森のかげ
春百里限なく晴れぬ立の山

答　これは選者の粗漏なるべし。

○第八問　腕掌等手にちなみある者を詠みこめば手といはずして可なるか。

答　掌は「手な底」「手な心」にして手なり。「うで」は「う手」にてはあらずやと思ひて取りたり。但し後の方はたしかならず。

○第九問　六號募集俳句の中に全く同じ句「戀猫の足をかまれて戻りけり」と申すが二つ有之、右は何故二句相並不申候て其間に二十七の等級をつけられ候哉。

答　募集俳句は等級的に並べたるに非ず。

○第十問　「戀猫の足をかまれて戻りけり」「戀猫の足をぬらして戻りけり」兩者孰れがまさり候哉。

答　「ぬらして」にては戀猫の趣寫らず。「春の人足をぬらして戻りけり」とでもいひ得べき趣向なり。「かまれて」といふ故に猫の趣にもなり、且つ戀と反照して面白きなり。

○第十一問　左の句は何故に選に漏れたるぞ。

妹が手に更に更に美し櫻貝

答　「更に」が惡し。

○第十二問　俳句に「落し文」（夏季）といふ題有之候由に候へども其例を知らず候に付御示し被下度候。

答　知らず。

○第十三問　寂栞細みなどいふ俳諧上の通語を御說明下され度候。

答　世々の宗匠が思ひ〳〵に解して居るやうに思はれて何だか分らず。縱し分つたとてそんな事はどうでも善きにあらずや。我々仲間では通語でも何でも無い。

○第十四問　日本新聞に子規子の句に

戸口出て左へ曲る燕かな

とあり。特に左といふは何か意味があるにや。

答　意味無し。右にても左にても善し。さらば意味無き者を何故に左と置きたりや、といふに、印象を明瞭ならしむるためなり。只「戸口を出て曲る」といふよりも「左へ曲る」といへば、其處の光景、即ち燕が戸口迄來てそれより左の方へ曲る光景が、より明かに眼前に浮ぶべし。理論は此の如し。余の句は拙い句なり。

○第十五問　本誌第二卷第一號に四方太君の雜話と題せる文中「印象が明瞭でなければ餘情が無い、風韻が無い、實に餘情は明瞭の度に正比例して居る」云々と書いてある。然るに一二年前日本新聞紙上にて何かの俳論の中にこれと正反對のやうな說のあつた事を記憶せり。其概說に印象明瞭にして餘情のある句は作し得ずと。又左の算式を載せて、

		印象		餘情
10	=	0	+	10
10	=	1	+	9
10	=	2	+	8
10	=	3	+	7
10	=	4	+	6
10	=	5	+	5
10	=	6	+	4
10	=	7	+	3
10	=	8	+	2
10	=	9	+	1
10	=	10	+	0

明瞭なる印象はなくとも餘情あれば句となり、又餘情なくとも明瞭なる印象さへあれば完全の句となるやう、即ち印象明瞭と餘情と兩

立せざるかに論ぜられたり。予は深く四方太君の說を信ずるものなれども尙大に疑を生ずる事あり。詳細なる解答を望む。

答　爾樣なる議論は多く定義の異同より衝突を生ずる者なり。問者に先づ餘情といふ事の定義（或は實例）を示さゞれば之を論ぜんに由なし。されど試に余の說を述べんか。（餘韻の定義は言ひ難くして、却て煩雜を來すの憂あれば實例によりていふべし）世上一般の人が餘韻といひ餘情といふ句を見るに、

夏草やつはものどもが夢の跡　芭蕉

の如きをいふが如し。故に余も此等の句によりて餘韻といふ事の定義を歸納的に定めたるなり。其結果は餘韻と印象明瞭とは反對に走るの傾向を認め得たるを以て、質問中に記すが如き算式をも製したる次第なり。漢學家の用語法を見るも、彼等が餘韻ありと評するは明淸の客觀的印象明瞭的詩文にあらずして漢魏六朝の主觀的印象不明瞭的詩文にあり。俳句にても餘韻と稱するは主觀的の者か、又は客觀にてもいくらかぼんやりとしたる處を含む者なりと思ふ。卽ち景色ならば空間の狹き景色には餘韻少く、空間の廣き景色には餘韻多き傾向あり。例へば土藏の壁又は板塀にて圍まれたる小庭は一草一石悉く眼を遮る丶者なければ印象極めて明瞭なれども、餘韻多しとはいはぬなり。之に反して郊外に出で丶廣濶なる景色に對する時は、物々の印象は小庭の竹石の如く明瞭ならざれども、餘韻は此方にありといふを得べし。奧深き木立に對する時亦然り。今少しく理窟臭くいはんか。餘韻嫋々といふは鐘を撞きたる後に響の長く殘るが如き感じなれば、多少時間を含みたる感じなり。主觀的の者は時間を含みたり。客觀的にても廣き空間、奧深き空間は一瞬時に看盡すこと能はざるを以て時間を含みたり。（俳句にては廣き空間は言ひ盡す能はざるにより、其言の盡さゞる部分を想像するによりて時間的となる）此二者に餘韻多しといふは時間あるがためなり。印象明瞭なる小客觀も同じ光景を幾度か繰り返す事によりて時間的なるを得れども、そは一變化なき時間的なるを以て餘韻に於ては缺くる所多し。余の餘韻といふは大略此の如き者なり。四方太子の所謂餘韻は廣く文學的美を指したるかと疑はる。問者の意亦然るべし。若し餘韻といふ事をさう解したくばさう解するも勝手なり。但世人のいふ所は余の說の如き傾向あるを信ず。定義によりて事實を誤る無くば文字は如何樣にても可なり。故に問者は常に空論によらずして實例によるべし。

○第十六問　新派の句と月並の句との差別を明にせられたし。

答　新派の句と月並の句とを比較すれば自ら區別は明なり。其上にて若し不審あらば實例を擧けて質問す可し。

○第十七問　俳句の切字と文法上の終止言との區別を問ふ。

答　同じ事なり。

（三十二年四月）

（二）

（第一問）「キリギリスとコホロギの別は貴誌の如くに信じ居候。併しながらキリギリスは室內へ來らず、コホロギは室內へ來るとは吾田舍地方とは全く反對に候。キリギリスは稻ありて（卽ち貴誌の如くイナゴに似て色綠）にて方言ギースといふ、初秋夕方より朝迄鳴く者にして、夜間窓を明け行燈を照して裏口等に一涼を取る時、燈火を慕ひて行燈に來りギーツチョンギーツチョン（故にハタオリともいふ）とさも涼しさうに面白く鳴き、又は夜深けて一人

の静まる時蚊帳にとまりて鳴くなり。「コホロギは美音を發すれども室内へは來らず。常に地中に[illegible]間出でゝ鳴く。[illegible]地方キリゴといふ。色は[illegible]ぶといへども羽なくして僅に二三尺に過ぎず。『チッキリカセーハタテ〳〵』といふが如き口調を心に置きて聞けば殆ど斯くいふが如く聞ゆ。丈草の句に夜寒にも穴には鳴かずきりぎりす」とはコホロギの事には非るか。「此と同一種にてカマコとは形も何も同じけれど色は灰白色にして人家の竈邊に棲み夜間は廚等に出でゝ食物を拾ひ喰ひす。鳴聲はキチ〳〵キチといふのみにて更に面白からず。一躰に蟲の聲といふは松蟲、鈴蟲、コホロギ等には非なるか。(石見國田智郡田所村某)

答 問者の所謂キリヽヽスは東京にていふスイッチョ(又馬追ともいふ由)なるべし。此蟲ならば東京にても室内へ來るなり。其鳴聲は機織る音に似通ひたれば、古來歌などにいふハタオリは是なるべしと余も思ふ。されど古のキリヽヽスが此蟲の事なりや否やは知らず。兎に角東京にていふキリヽヽスは此蟲に非るなり。一問者の所謂カマコは余の前號にいひしコホロギ即ちカマゴと称合せり。但灰白色といふはいかゞ。一問者の所謂コホロギ即ちキリゴは東京にて何といふ蟲なるか知らず。余の[illegible]田舍に於て「テッキリ[illegible]腰ニサーシテ、[illegible]ヒョックリ、コックリ、ドコ行き[illegible]」と[illegible]る由なれど、其名は分らず。或は同じ蟲なるべし。一躰に蟲の聲といへば松蟲、鈴蟲、コホロギ、キリヽヽス、馬追等何の事にでもなるなり。一各地方にて蟲の名稱に就き著き相違あらば教へ給へ。(前號俳問俳答第二問參照)

○**第二問** 幸に高著、俳話、入門、大要等によりて俳諧の大道を悟了仕候へども其研究法は未だ十分に明解仕兼候。例之運座の方法、探題法竝に課題、兼題、せり吟、探題等に就いて御教示相願ひ度候。

答 我々が普通に遣って居る方法をいはゞ「運座とは、例へばこゝに十人會合したりとせよ。其時に狀袋十枚に一つづゝ題を書きて、それを一枚づゝ各人に配るなり。各人は自己が受け取りたる題に就きて一句を作り、之を小紙片(普通に紙よりに用ふる程の大きさの紙にて善し)に認め(自己の名は認めず)其狀袋の中に投ずべし。さて其狀袋の上には自己の名を小く書き(これは句を入れたといふ印なり)右隣の人へ廻すなり。斯くして左隣の人より自己に廻し來る狀袋を見、其題に就きて又一句を[illegible]入れ、前[illegible]、右[illegible]、[illegible]く[illegible]十人[illegible]たる時、狀袋の廻り出しの人が其中の句を引き出して別の半紙に淨書すべき義務あり。各々淨書終りたらば座中の一人其句を一句づゝ朗讀すべし。朗讀中に自己の句の誤謬あるを知らば其淨書したる紙を乞ひ取りて誤を直す事を得。朗讀終らば其淨書を一枚づゝ各人に配付し、併せて各人に總句數百句の中より十句を選ぶ事を命ず。(自選を許さず)各人は配付せられたる淨書の中より善しと思へる句を何句にても拔き之を別の紙に記し置く。檢閲し終りたる淨書の端には自己の名を小く認め之を右の方へ廻す。斯くして左より自己に廻り來りし淨書は直に之を閲して又善き句を書き拔き、之を右へ廻す。各十枚の淨書を一々閲し終りたらば、其時自己が書き拔き置きし句の中より更に十句を精選し別の紙に認むべし。さて各人の選句を集めて座中の一人之を朗讀すれば其句の作者は自己の名を名乘るべし。點を記す人は各人の名乘るを聞いて點を記すなり。得點表の體裁は左の如し。

被評者名／評者	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	點數	順番
甲	／	○○	○	○	○○○○		○	○○○	○	○○	十五	2
乙	○○	／	○○○	○○	○	○○○	○○	○○○○	○○	○○	廿一	1
丙	○		／	○○	○	○	○		○	○	八	7
丁	○	○○	○	／			○○	○	○	○	九	6 6
戊	○	○			／	○		○	○○		六	8
己	○	○		○		／	○		○		五	9
庚	○	○○○	○	○	○		／		○○	○○	十一	4
辛	○		○	○				／			三	10
壬	○		○○	○○	○	○○○	○○		／	○○	十三	3
癸	○	○	○		○○	○○	○	○		／	九	5 6

各人の得點を報告し終ればそれにて一回の運座は終るなり。若し各句の得點を知らんと要するならば、初めに句を淨書したる者を手のあきたる人に配付し置き、選句朗讀の際、其選ばれたる句の上に點を記し行くなり。又選句中にて特に天地人三座を定めたる場合には、得點表へ圖點を記す代りに天又は地又は人と記すべし。天地人も點數の算用には一點として加はるのみなれど、同點者ある時は天地人の多き方を勝とす。我々は會合人の十人以上ある時も以下の時も、いつも十題出すを普通とし、猶便宜によりて變更するなり。以上は衆議判の運座にて特に我々が行ひ居る者、此外にも多少變りたる方法はいくらもあり。選者を一人と定め置く場合などは最も其簡なれり。「一題十句は題を一つ出して其題にて十句作るなり。之を小紙片に書き淨書し選抜し點を記す方法は運座の時と同じ。若し四人以下なる時は初めより自己の十句を半紙一枚に列記し互に見せ合ふに止まる。此一題十句を作る時は多く三十分乃至一時間を限るを常とす。若し此時間内に出來ざる者は一句にても二句にても出來ざるだけを拋棄するなり。「せり吟は句數を限らず、時間のみを限る。例へば三十分と限らば其時間内にて何十何百句を作るも勝手なり。其句を小紙片に書き淨書し選拔し點を附する方法は運座及び一題十句に同じ。其四人以下なる時は亦一題十句の場合に同じ。題は一つ出し置くとも數多出し置くとも宜しきに從ふべし。以上總て選句の數は總句數の十分の一と定む。「探題は小紙片に一々異なる題を記して其紙をひねり、各々其ひねりを取りて其中に記しある題を詠むなり。これは見せあふのみにて勝負を決するに非ず。「兼題、宿題とは卽座に題を出して作るにあらず、兼てより題を出し置きて作るなり。斯くして作りたる者を、皆々會合して運座の如く點を附くるか、又は稿本に綴りてそれを廻送して點を附くるか、或は只〻見せあふに止むるか、いづれにても宜しきに從ふべし。「課題とは卽席にても宿題にてもゝ題を定めてそれを作らしむる事なり。右何れの場合にても互に句に就きて可否を評論するは極めて有益なり。自己は夜景の積りにて作りし句を人は晝間の景とする事あり。自己は女の事をいひたる積りなるに人は男の事とする事あり。さういふ場合につく〴〵と考へ見なば自己の思想が十分に句に現れ居らざる事を發明する事少からず。自己が作りて自己一人で褒めて居てはいつまでも進歩せざるべし、さりとて冷罵冷笑せよとにはあらず。成るべく精密に批評し駁擊し相互の衝突點を見出すを要す。但し點を附くる場合には得點表の成績を報告して後に批評に取り掛るを可とす。

○第三問 貴誌募集俳句は課題を以て主と爲さず唯〻配合物となすもかまはず候や。

答 かまはず。

○第四問 ほとゝぎす俳句分類中

足跡に潦程汐干かな

といふ句あり。「潦」は何と讀み何の意味なりや。

答 潦は「にはたつみ」と讀む。「にはたつみ」とは雨の降つた時に路上の凹みに出來る水溜りをいふ。

（第五問） 新年のほとゝぎすに子規氏の句「女王祿やねびまさりたる御笑顔」といふが有之候。「女王祿」とは如何なる者に候や。

答　公事根源に、「給二女王祿一　正月八日、參議辨史などむかひて承明門の内の西の座にて女王に祿を賜ふことあり、昔は王四百二十九人、女王二百六十二人と定められて年毎に今日祿を賜ひけるとかや、女王祿と字には書きたれど只ゞ王祿とばかり讀みて女の字を略するを口傳とはするなり、」とあり。俳諧歳時記に、「女王祿、正月八日これは女王に祿を賜ふことなり、其祿法、人別に絹二疋綿六屯とあり、江次第等に委し、云々、」とあり。

（第六問） 俳諧十家類題集（寛政木蔵）は善き本に候や。

答　此本、余は見た事無けれど、十家といふは多く大家なれば悪き事はあるまじ。

（第七問） 俳句には新暦を用ふべきにや、舊暦を用ふべきにや。

答　此分明な問らず。如何なる事又は場合をいへるにや、更に詳に記すべし。

（第八問） 俳句にては蜻蛉は秋季に入れられたれど實際は夏季なりと思はるゝなり。唯ゞ赤蜻蛉は秋季なり。如何に候や。

答　季の定めには多少の無理あり。蜻蛉に夏季の感強からば夏季に詠みて何の悪き事かあらん。されど古來久しく秋と定め來りし者なれば秋として置くも便利なる事あり。いづれにても好きな方を取るべし。

（第九問） 夏季に雷の題無きは如何。

答　夕立が夏なれば虹も雷も夏季と定めて不都合はあるまじと思ふ。

（第十問） 貴誌第二卷第七號、東京俳句界の中に「小芝居の幟濡れけり春の雨」といふ子規先生の句有之候。初めは誠に面白きやう思ひ候處、よく〳〵考へて見れば實際あり得べからざる事と存候。雨中には幟は取り入れて竿ばかり濡れ居るが實景と存候。併し幟と雨との配合は面白ければ理想的にあるとして詠みたるにや、斯る事は不都合無きか、御伺申上候。

答　斯る場合もあるべしと思ひて作りしなり。

（第十一問） 毎日新聞募集俳句、竹冷宗匠選、秀逸の吟中に左の句あり。

これが昔花の雫か吉野川
春風や四五寸水の上を吹く
春風や馬上の僧の物を食ふ
小半日蝶と舞ひけり芝の上
管絃や落花亂るゝ幕の内

以上五句の中第一句は評する迄もなからんが、其他の句は秀逸の價値ありや否や。善悪とも細評を煩す。

答　水の上四五寸などいふは細工に落ちて面白からず。第三句は一餅を喰ふ馬上の僧や春の風」と置きかへた方面白からんか。第四句解し難し。第五句は五句中にてひとり難無き者か。

（第十二問） 何々宗匠といふこと何年に起り如何なるいはれなりや。

答　知らず。貞徳に花の本の稱を賜ふといふ事あり。されど「花の本宗匠」といひしや否や知らず。宗祇に花の本宗匠の稱ある事、何かにありたりと覺ゆれど、此事甚だ疑はし。芭蕉にも天保年間に花の本宗匠を贈りたりとか。もと宗匠といふは漢語にて、一代の宗匠などゝ

いへり。天下第一の人といふ程の尊敬語なり。それを學位などの如く用ゐ初めたるは何時か知らねど、恐らくは花の本の下に宗匠を加へたるが其嚆矢なるべし。されば同時に二人の宗匠は無く、且つ私に稱へしにあらで公より賜はりしなり。貞徳死して貞室に二世の花の本を譲り、貞室死して貞恕に三世花の本を譲りしなどいふも疑はし。元祿には猶宗匠といふ言葉行はれざりしにや。俳家奇人談、馬場存義の傳に、宗匠の夜の雨といふ事あり。此頃は一般に俳諧師の先生を宗匠といひたりと見ゆ。（存義は天明の初に歿したる人なり）他日詳細を知るを得ば再び答ふべし。

○第十三問　第二卷第七號、香墨君の句に

小刀を見失ひたる棱木かな

支考の句に

小刀のそれから見えぬ棱木かな

右等類と見えたり。如何。

答　等類なり。

○第十四問　「松嶋やあゝ松嶋や松嶋や」右作者の芭蕉たるや其角たるや吾等要無し。只々疑ふ俳句としての眞價値ありや否や。

答　箸にも棒にもかゝらぬ句なり。芭蕉、其角の作に非ること論無し。

○第十五問　左の二句何れか完全なりや。

月影の御簾透すや梨の花

梨咲えて月やゝ澄めり笛を聞く

答　何れも完全ならず。「影」の字無用なり。「透す」の意さだかならず。「やゝ澄めり」といふは春月の形容と受け取れず。序にいふ、「咲え」は「咲いて」と書くべし。

○第十六問　寫生の句作を學ばんと、鉛筆と手帳を携へ、野外散歩を試るに「大要」にもあるが如く、景廣きに過ぎてつかまへ處なく、たとへば竹藪の中に椿の盛なるを見て、

竹藪の中に椿の盛かな

とか、又は田の中に捨てられたるまゝの大根の花咲きたるを、

大根の捨てられしまゝ花咲きぬ

とか、或は田の中に枯篠枯木等並びたるを、

所々枯篠見ゆる冬田かな

ひよろ／＼と枯木の竝ぶ田面かな

など試るに一も意に滿たず。終に倦みて歸る事幾度なるを知らず。斯道に志してよりこゝに一歳、少しも上達の跡見えず。如何せば其の焦點を觀破するを得るか。願くは高教を垂れよ。

答　寫生に往きたらばそこにある事物、大小遠近盡く詠み込むの覺悟なかるべからず。大きな景色に對して二句や三句位をやう／＼ひねくり出すやうにては迚も埒あかぬなり。大きな景色に持て餘さばうつ向いて足もとを見るべし。足もとに萌ゆる草、咲く花を一つ一つに詠まば十句や二十句は立處に出來るわけなり。蒲公英あらば蒲公英を詠め。嫁菜あらば嫁菜を詠め。麥畠あらば青麥を詠め、豆の花咲き居らば豆の花を詠め。畑打つ人を見つけたら畑打を詠め。芽をふく樹を見つけたら木の芽を詠め。霞んで居たら霞を詠め。うらゝかな天氣であつたら、うらゝかやと遣るべし。日永、長閑、暮春、夏近、桃花、楊柳、摘草、踏青、燕、孕雀、材料は捨てる程にぶらついて居るなり。そんなに澤山ある材料を等閑に見過し、やう／＼藪の中の椿を見つけて、これより外に善き材料は無いと思ふ事いと狹き量見なり。縱し又竹藪の中の椿を見つけてそれを句に作るにしても、「竹藪の中に椿の盛かな」などへたら長く作りては新趣向を入れる餘地が無くなるべし。此だけの事に「藪

の椿といふ六字に聞ゆる故、其外の十一字に其外の趣向を入れて之を插へるが肝要なり。又枯篠立てたるは畠にして、冬田にあらず、枯木の並びたるは田の畔にして、田面にあらず。それ位の事は少し注意すれば分る事なり。今一年寫生の修行して見給へ。その時に猶分らずば再び問ひ給へ。修行して進歩せぬ譯は無き事なり。

○**第十七問** 子規氏選は多く平凡的のやうに思はれ候へども、他に全く選に入る句の少きものにや。

答 余の選が平凡無しの選なり。外の人の選こそ、諸君を平凡して、直したり、作りかへたりして、成るべく澤山に取るなれ。余の選は横著なる殘酷なる選なり。外の人の選は親切なる平凡的なる選なり。（五月）

（三）

○**第一問** 俳諧大要第一期百句批評の處に於て雅俗の別を辨ぜられたれども未だ合點し得ぬ處有之候間、猶雅俗其ものゝ解說より始めて何故に此等各例が該當するかを一層精細に御教示を願上候

答 雅俗といふは感情的に辨別するものにして知識的に辨別するものに非ざれば、實例に就いて云ふ外は紙上にては論じ難し。實例に就いて說明したるものを見て猶解し難くば最早說明するに由なし。譬へば醬油は辛く砂糖は甘しと云ふも猶辛さと甘さとを區別する能はざる人には最早說明の道なきが如し。

○**第二問** 左に記す蕪村の句の内にて附圈の處を說明ありたし。

青梅や捧心の人垣を間

打はたす梵倫つれ立て夏野かな

奈良坂や當歸はたけの花一木

負腹の守敏も降らす旱かな

卯の花や貴布禰の神女の練の袖

山蟻の覆道造る牡丹かな

ほうたんやしろがねの猫こがねの蝶

山彦の南はいつち春の暮

おその住水も田に引く早苗かな

蘭夕狐のくれし奇楠を炷む

答 捧心とは西施の古事にて胸をおさへる事なり。西施少し病みて胸をおさへたる處を西施捧心といへり。此句は只ゝ女の事にして西施にはあらず。梵倫は普通に梵論と書く、又は暮露ともかく。「ぼろ」と讀むなり。虛無僧の事なり。昔はぼろ〳〵といふ。ぼろ〳〵の果し合をなすこと徒然草に見えたり、此句も同書の事實より思付きたるならん。當歸は「たうき」とよむ。草の名なり。和名ありや知らず。守敏は古代の僧にて弘法と競爭せし人なり。俗書弘法大師の傳によるに、

天長元年仲春の頃天下大に日でりす公家勅を下され大師をして雨をいのらしめむとす爰に守敏大德奏し申て曰く守敏眞言を學して同く御願をつとむ我すでに上﨟たり先うけたまはりておこなふべしとこれによりて守敏に仰て祈らしむるに七日のうちに雨くだると雖纔かに京中をうるほしていまだ山外に及ぶことなしかさねて大師をして神泉苑にして請雨經の法を修せられしに七日の間雨ふらず大師怪をなして定に入て見給ふに守敏呪力を以て諸龍を水瓶の內にかりこめたり但北天竺の境無熱池の中に龍王あり守敏か鉤召にもれたりと御覽じて公家に申うけて修法二ケ日をのべられしに（略）驟雨として甘雨まさに滂沱たり池水湧みちて大壇の上にいたれり三日の間洪雨しば〳〵ふりて普天の下に炎旱ながく休ぬ上一人より下四元にいたるま

で首をたれ掌を合せざるはなし眞言の道
　あがめらるゝ事これより彌さかりなり
とあり。雨乞の競爭に守敏は負けたれども猶少しは雨降りたることを此句に云へるにや。練の袖はねり絹にてつくりし衣の袖なり。覆道は複道とかくべきを蕪村の誤りたるものなり。複道とは家から家にかけたる廊下の如きものにて、阿房宮に長き複道をつくりし事古書に見えたり。此句にて複道といへるは何の事か解し難けれど、兎に角牡丹の華美なるに對して此の如き形容を用ゐしなり。こがねの蝶は黄色の蝶なり。いづちとは何處といふに同じ。おそは獺(をそ)のことなり。蘭夕とは「らん、ゆふべ」とよむ。蘭の花の咲きし夕の事なり。奇楠は「きやら」とよむ。伽羅に同じ。

○**第三問**　芭蕉の
　笠嶋やいづこ五月のぬかり道
と詠みし笠嶋とは何處なりや。蕪村の
　旅人よ笠嶋語れ雨の月
も同じ處なりや。

答　笠嶋は陸前の國名取郡にあり。岩沼より一里許りなり。實方中將の墓の跡いまも僅かに殘れり。蕪村のも同じ處たるべし。

○**第四問**　嵐雪の黒茶碗とはいかなることにや。

答　玄峰集に
　茶碗銘
黒茶碗あり花の朝はます／＼くろく雪の夕はいよ／＼黒し月待宵のやみをさくり闇夜に鼻をとられしはおの／＼つちめくらのましはりなるべし
撿挍　貧僧　大黒　小くろ
はちの子　早ふね　小雲雀
三代目をのんこといふのむここそ猶ふかき意味あれ祕してしはらく殘す
　松むしのりんともいはす黒茶碗
とあり。松むしといふ茶碗いまも雪中庵に傳はる由。

○**第五問**　ほとゝぎす五號五丁に
　芭蕉をとゞめて
　我宿は蚊の小さきを馳走かな　秋の坊
とあり。併し此の句は秋の坊の句にあらず。却て芭蕉の句なりときく。いかゞにや。

答　小文庫に
　我宿は蚊の小さきを馳走なり　はせを
とあり。芭蕉の句なること疑なし。秋の坊とかきしはある本の誤を其儘に用ゐしものなればこゝに正誤す。

○**第六問**　俳諧大要四十三丁に
　野の宮の鳥居に蔦もなかりけり　涼菟
とあり。此句も涼菟にあらず、芭蕉の句なりときく。いかゞにや。

答　元祿出版の皮籠摺(涼菟編)といふ書に涼菟の句として出でたれば涼菟の句たること間違なかるべし。芭蕉の句選などが却て誤りたるものならん。

○**第七問**　芭蕉の句に
　奈良にて
　阿古久曾の心は知らす梅の花
とある阿古久曾とはいかなる意味にや。又蕪村の
　阿古久曾の差貫ふるふ落花かな
とある阿古久曾も同一のものにや。

答　紀貫之の幼名を内敎坊阿古屎と云へり。芭蕉の句は貫之の、人はいさ心も知らずといへる歌によりて作れるなり。蕪村のも貫之なるべし、併し疑はしきは阿古久曾といふが固有名詞

なりや否やといふことなり。阿古は吾子の意にて人の子をいへる詞、亦久曾はこそともいひて敬語に用ふ。後世に某殿といへるが如し。源氏物語に老女の若き女を呼ぶに「くそたち」といへる處あり。亦雀こそといひて雀殿の意に用ゐたる俊頼の歌もあり。

是等を併せ考ふるに内教坊阿古屎とは内教坊の若様と云ふが如き意味にあらざるか。事序に記し置くなり。

○第八問　蕪村には往々何々顔なる句あり。是芭蕉の

　菜畑に花見顔なる雀かな

の句調によりたるものにや。芭蕉以前にも此種の語ありや。

答　何々顔といふこと古き詞なり。其一例を擧ぐれば源氏物語紅葉賀にも、

　かざしの紅葉いたうちりすきてかほのにほひにけおされたるこゝちすればおまへなるきくををりて左大將さしかへ給ふ日くれかかるほどに氣色ばかりうちしぐれて空のけしきさへみしりがほなるに

とある類なり。

○第九問　擬人法は如何なる場合に惡しきや、例を擧げて御説明下されたく候。

答　かゝる問は問ひ易くして答へ難し。只ゝ大方の場合に惡しと答へ置くべし。

○第十問　太祇の句に、

　婆つれし爺も來にけり二の替

と云ふがあり、二の替とは如何なる事に候や。

答　二の替とは初芝居の次の芝居なり。

○第十一問　嘗て日本紙上に於て見たる句に、

　離愁とは土筆の如きものなるか

と云ふ句あり、其意御説明下されたく候。

答　離愁とは土筆の如きものなるかと云ふ意味なり。外に説明の仕様なし。

○第十二問

　　新宅祝

　交りは安火を贈り祝ひけり　碧梧桐

と云ふがありたり。此安火とは如何なるものにや、又和歌などには新宅の祝ひに假令如何なる意味を持てるにしろ、火と云ふ字を忌む事甚し。俳句には差支なきや。

答　安火は東京語にて「あんか」といふ。木の箱の様なものゝ中に火を入れて手をあぶるものなり、歌にても火の字を忌むなどと云ふ定めはなし。只ゝ御幣擔の連中が御幣を擔ぐに過ぎず。俳句にても同じことなり。

○第十三問

　奈良は鹿の鳴かざるを見て戻りけり

これは奈良に行つた所が鹿の鳴かざりし故に戻りしと云ふ意なりや。若しさすれば「奈良は鹿の云々」といひては意通ぜざる如し。

答　鳴かざりし故に戻りしに非ず、奈良では鹿を見て歸つて來たといふ意味なり。鹿は見たれど鳴聲は聞かざりしが故に鳴かざるを見てと云へり。

○第十四問　左の句の上五文字は何と讀むにや。

　古禿倉もとより神の留守にして

答　「ふるほこら」と讀むなり。

○第十五問　俳句には係結の誤りしが多し。中にも動詞自他の誤は殊に多き様覺ゆ。文法は何か事ありて用ゐぬにや。又は文法などは究むる者なきにや。

答　韻文は各國とも文法はづれの事多し。日

本の和歌の文法に束縛せられし事は和歌の發達せざりし一原因と思はる。俳句は文法に係らず作りたるが故に和歌よりも發達速なりき。かく文法を破るはそれが爲に文學上の妙味を顯はすに都合よき處に用ゐらるゝ者なり。殊に自他の誤り居る處などは多くは俳句の面白き處なり。且文法なるものは一定不動のものなりとは思はず。何百年來俳句に用ゐ來りし一種の文法は之を襲用して差支なかるべし。但し文法を知らずして文法違ひを成すものは此限にあらず。

○**第十六問** 第七號に出て居る

大砲のどろ〱となる木の芽かな

と云ふ句の大砲と木の芽との調和がどうも分りませんが御解釋を願ひます。

答 調和は説明の仕樣なし。

○**第十七問**

朝顔の花や上野の山かつら

山かつらと云ふはいかなる所より出で、いかなる意味なりや。

答 山かつらの出處は解らず。意味は山にかゝつて居る曉の横雲の事なり。

○**第十八問**

武士の紅葉にこりず女とは　秋色女

右の句意御詳解を乞ふ。

答 謠曲紅葉狩に維茂が鬼女にたぶらかされたることとあり。此句は其事を云ひて男の好色を誡めたるものならん。

○**第十九問** 俳句と詩歌とは其趣味を異にすと云ふ事は兼て聞く所なるが俳句には必ず季を詠み込みあり。初心者の考にては俳句も詩歌の如く送別は送別の意丈を顯はし名所は名所の景丈を顯はさば強ひて季を詠まざるも可なるが如し。いかにや。

答 雜の句即無季の句を作るは勝手次第なり。俳句に之を禁じたるにあらず、然れども實際に於て俳人の雜の句を作ること多からざるは面白く出來ぬが爲なり。

○**第二十問** 俳句に四季の節序を分ち花に春、月は秋と區分しあれども中には不適當のものあり、梅は春と定めあれども寧ろ冬ならんか。落葉、山茶花の如き亦秋の部に屬すべきものならん、且今日に於ては昔日と暦を異にしあれば四季も從て動かざる可らず。然るに新俳句を見るに秋の部に天長節あり。冬の部に十月の句あるが如きは矛盾の甚しきものと云はざるを得ず。余は此に於て明治新派の俳人が依然俳諧歳時記栞草等に據り季を分ち題を課するが如きは改良したきものと存候。此邊いかゞに候や。

答 梅を春と定め落葉、山茶花を冬と定むるは分類上便宜の事に屬す。冬の末に梅を詠み秋の末に落葉、山茶花を詠むも勝手なり。但し梅を冬と定め落葉、山茶花を秋と定むるは一層不適當なり。今日は公事に太陽暦を用ゐ居れど、田舍にては祝祭其他の事、凡て太陰暦に從ふ處甚だ多し。故に俳句には新暦の句と舊暦の句と混じあるを免れず。天長節を秋の部に入れたるは秋なるがためなり。冬の部に十月の句あるは陰暦の十月を詠みし句なればなるべし。問者の季を分ち題を課すと云ふは其意義明瞭ならず。因に云ふ、春夏秋冬は新暦にても舊暦にても變ぜざるものなり。

○**第二十一問** 當地（盛岡）は梅も櫻も同時に咲き申候。櫻散らざるに子規啼き卯の花の中に桃の花咲き菜の花も薔薇も一時に綻び候樣な次第にして暮春と初夏と混同する

には閉口の外無候。此實景を詠まんとすれば春夏河雜の句出來申候が夫にても差支無御座候や。

答　少しも差支なし。盛岡の人は盛岡の實景を詠むが第一なり。

○**第二十二問**　鳰の浮巣の鳰と云ふ字は何と讀み亦いかなるものなりや。

答　鳰は「にほ」と讀み亦「かいつぶり」とも讀み水鳥の最小なるものにしてよく水をくゞるものなり。水鳥の巣は水面に浮び居る故浮巣とも云ふなり。

○**第二十三問**

わいへんはとばりもちけり星今宵　鳴雪

何の意味にや。

答　催馬樂に「わいへんは　とばりちやうをもたれたるを大君きませ　聟にせん」云々といふ歌あり。此意を七夕にとりあはせて作りたるなり。「わいへん」とは我家と云ふことなり。「とばりちやう」とは帷の事なり。

○**第二十四問**

曇りぬと妻の話や遠蛙

とある妻を只ゞ女としては趣味を損するにや。

答　妻が夫に向つて話す言葉なり。女とばかりにてはいかなる女とも知れ難し。

○**第二十五問**　俳句分類は好き句のみを選びしや。

答　好き句のみにあらず、名高き句、特に注意を要する句は月並調にても載することあり。

○**第二十六問**　募集句中に「かなめ垣」といふが二三箇所見えたり、いかなる垣にや。

答　「かなめ」は木の名にて若葉は赤きものなり。東京にては墓の圍ひには多くかなめ垣を用ふ。

○**第二十七問**

菜の花や遊女分け行く野の飯成

飯成は何と讀むか、又何の事なりや。

答　飯成は稻荷なるべし。

○**第二十八問**

春の夜によき女孺見たりさし油

女孺とさし油の義を問ふ。

答　女孺は「つま」と讀みて俗に女房と云ふが如き賤き意味なるべし。さし油は行燈に油をさし加ふることなり。

○**第二十九問**　第七號の「俳句と聲」の中に、

奥山や五聲つゞく聲をきく　去來

とあるは活字の誤植にや。

答　「鹿をきく」の誤りなり。

○**第三十問**　ハタオリと申す蟲は少しも鳴き申さず晝間野徑を行けば驚きて飛び去る羽音のきちきちと申し候のみ。子供等其後足を捉ふれば飛ばんとしてあせり候爲め體を上下に運動致し候故ハタオリと申す由或人の申候。是は前號御説明のハタオリと全く異なり候にや。

答　夫は我郷里にてもハタオリ又はハタハタと云ふ。古書にあるハタオリは前號に説明せしが如く夜啼く蟲なり。

○**第三十一問**　初學者に參考となるべき俳書二三御指命下され度候。

答　古俳書は得難ければ博文館出版の俳諧文庫を見るべし。其中にて蕪村曉臺全集など最も面白からん。明治の俳句を見んとならば民友

社の新俳句などか。

○第三十二問　「俳句新派の傾向」「俳人太祇」などを讀みて複雜と云ふことの趣味を幾分か悟りたれど猶疑はしき處あり。元來俳句は十七字の内に束縛せられたるものなれば、其趣向は單純た旨とする者にはあらざるか。複雜なる趣向を顯さんとすれば斧鑿の痕見えていやみの生ずる事なきか、敢て示教を乞ふ。

答　複雜と云ふも單純なる俳句に比較して云ふ事なり。他の長き韻文の如く複雜なる能はざるは論なし。複雜なるが爲にいやみの生ずる事あらば素より佳句と云ふ可らず。いやみの生じても複雜なれと云ふには非ず。（六月）

（四）

○第一問　季の題「藥降」及び「喰祭」の由來、竝に鮓を特に夏の題となし來りたる理由共に伺ひたし。

答　歲事記に「五月五日を藥日と言ひて、この日一切の藥草をとるなり。又是日雜藥を競ひ採る、夏の小正にいふ、藥を蓄へて以て毒氣を止[illegible]す」とあり。俗說に、この日空より藥が[illegible]いなは[illegible]、喰祭は[illegible]らず。鮓は夏季に多く擶へるもの故、夏季に入れたるものならん。今日普通東京にある鮓は四時絶えずあれども、このやうの擶へかたは後世の事にて、昔の鮓は肴の腹へ飯を充てたる、鮒鮓、鯖鮓などの如きものなりしなるべく、肴のとれる時又其肴の味の良き時も夏に限られたるもの多かりし如き、其多くは冷たきものを賞翫したる如きも鮓の夏季となりたる一原因なるべし。其上鮓はつけて後直に食ふものに非ず、多少なれ加減を待ちしものなれば、そのなるゝといふことも自然夏の方適したるやう覺ゆ。鮓の句の俳書に見えたるは延寶の末頃よりなり。

○第二問　「風薫る」といふ題の意味を問ふ。

答　唐の太宗の詩に薫風自南來、殿角生微涼。又呂氏春秋に東南之風曰薫風とあり。

○第三問　「ほとゝぎす」第二巻第六號子規子選句に「人情は手の裏かへす櫻かな」といふあり。ちと如何はしきやう思はるゝが、是にも趣味のあるにや。

答　趣味ありと言ひ、趣味なしといふは、各人の見識による事なり。別に議論のしやうもなし。

○第四問　「欺いて行ぬけ寺や朧月」の句の解釋を乞ふ。

答　朧月の夜寺のものをだまして其寺を行き抜けたといふなり。欺いてと言へば、咎め通り過ぎんとせしを咎められでもしたるなるべく、兎角詞を左右に託したるさまも見ゆ。行きぬけ寺と名詞にしたるは、俗にぬけ道などいふ働にて句の働きなり。

○第五問　「名月や湖水に浮ぶ七小町」の句の解釋を請ふ。

答　この句は芭蕉の「月見賦」中にある句にて、琵琶湖に月を賞したる時の句なり。名月の夜湖水に七小町が浮んで居るといふ理想の句にて、湖水の水なるがため自然うかぶともいふなり。實際浮びたるにあらず、たゞ月明かなる湖上の景を見たる時の理想なり。七小町といふは謠曲に草紙洗、通小町、鸚鵡小町、卒都婆小町、關寺小町（尙他に二ッあれども判然せず）をいふなるべし。然れども他にそをいふに非ずして、小町におとらず歌をよくよむ女の七人ありつるをいふといふ說もあり。湖水に小町を配合せしは、同月見賦中にもある如く蘇東坡の

欲把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜といふ詩句あるより、それに倣ひたるものなり。

○第六問　繪畫の多くの對象は空間的の物象にして詩・俳句をも含むものそれは多く時間的なりといふ議論は適切なりや。若し然りとせば、俳句に於て如何ばかり絶妙に空間的の物象を言ひ現し得るも、到底繪畫に及ばざるべき理にてはなきか。

長々と川一筋や雪の原

の句に就ても、若し此景を繪畫に寫さば容易に美感を人に與へざるか、俳句に比して且つ

尼寺やよき蚊帳垂るゝ宵月夜

晩鐘ながら山影門に入る日かな

等を以て繪畫的なりといふ。既に、繪畫的といへば之を繪畫に表現して視覺に訴ふるの優れるに非ざるか。

答　ある一つの景色を現すに、繪畫を以てすると俳句を以てすると、其二つにては繪畫の方が俳句よりも精密に現し得る事論なし。然れども巧拙あり、繪畫にして拙ならば、如何に精密に書きたりとも、十七字の俳句に及ばざる事あり。一概に論ずべきに非ず。

○第七問　凡兆の句は猿蓑集以外にも有之候や。

答　凡兆の句は猿蓑以外には極めて少し。元祿の俳書には、時に凡兆のを見る事あれども、皆一句二句位に止まる。蝶夢の類題發句集には、猿蓑以外の句少しありたりと覺ゆ。因にいふ、加生といふも凡兆の事なり。

○第八問　去來の句七部集及續虛栗、去來抄以外にもあれば其書名御教示を請ふ。

答　去來の句は大方去來發句集（蝶夢編）にあり。

○第九問　左の一句俳句になり居り候や。

早馬の城下に近き若葉かな

答　城下に近きといふ詞のため、早馬といふもの早しといふ感じもなく、寧ろ一所におつとして居るやうなり。是れ此句の大缺點なり。

○第十問　左の二句季なしと思ふ、如何。

築地殿のお講さびしや普請中

吉原で人にはぐれぬ酉の市

答　お講は親鸞の忌日にて十一月二十一日より二十八日迄の間營むといふ。報恩講とも御傳事とも御霜月ともいふ。御講は報恩講の略なるべし。酉の市は十一月の酉の日に立つなり。

○第十一問　蕪村の左の句は如何なる古事蹟あるにや、御教示を乞ふ。

繪團扇のそれも清十郎にお夏かな

答　お夏清十郎の事實は知らねど、西鶴の五人女にも出で、近松の作にも五十年忌歌念佛として此事を演じあり。清十郎といふ男、姫路の商家に奉公するうち、主家の娘お夏と通じけるが、主人の金を盗みしといふ言譯立たずして死罪に行はれ、お夏も菩提を弔ふとて尼になりける、是れあらましの傳なり。清十郎殺されて後、お夏が始めて其事を聞き知る處を敍して、五人女に、

何事も知らぬが佛お夏清十郎がはかなくなりしとは知らずとやかく物思ふ折ふし里のわらべの袖引きつれて清十郎殺さばお夏も殺せと歌ひける聞けば心にかゝつてお夏そだてしうばに尋ねければ返事しかねて涙をこぼすさてはと狂亂になつて生きて思ひをさせうよりもと子供の中にまじはり音頭とつて歌ひける皆々これを悲しくさまざま、とめてもやみ難く間もなく涙雨ふりてむ

かひ通るは清十郎でないか笠がよく似た菅笠
　笠がやはんはゝのけら〳〵笑ひうるはしき
　姿いつとなく取り亂して狂ひ出でける
云々とあり。最後に
　其頃は上方の狂言になし遠國村々里々迄
　ふたりが名を流しける
云々とあるを見れば當時專ら此事を取りはやしたりと見えたり。向ふ通るは清十郎でないか笠がよう似た菅笠がといふ文句は狂言などにて言ひ始めしか、今に人の口實に殘り居るなり。近松の歌念佛にもお夏笠物狂といふ條に
　よさこいと、云ふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寢たところ、褄に清十郎と寢たところヱ、少しはんゝ、寢ずれば夢の世や、寢てあたゝめしほところ子、いつの間にかうかれそめ、三界を只家として、編笠雨の宿りにも、心とゞめむ假枕、流れにあらぬ川竹の、筵のおざゝのびんざゝら、花の手おほひ、お手をひかれた、これも熊野の修行かや、姉様のこれの、勸進柄杓の、忝顔よしとて[illegible]招く、[illegible]の夏を何故に、浮世[illegible]みて見かへり、見が[illegible]とは遠近く、なぜにそなたはしほが無い、身にあはぬに身はだてに、頭は念佛の歌比丘尼、向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよう似た、菅笠がよく似た笠が、笠がよく似た菅笠がヱ
云々とあり。蕪村の句は團扇の繪にお夏清十郎を描きしを詠める者ならんか、これにつき鳴雪氏いはるゝは、蕪村の頃お夏清十郎の芝居流行りて團扇にも其似顏など多かりし者かと、此說然るべし。歌曲類纂を見るに、大阪北堀江の豐竹座の淨瑠璃外題安永七年十二月、夏浴衣清十郎染（菅助、豐春助作）興行とあり。同じつづきに寛政六年六月、お夏清十郎花[illegible]模樣菅專介作興行とあり。但しこれは蕪村歿後なり　江戸淨瑠璃外題の内にお夏清十郎（天明元年七月、森羅萬象、雙木千竹作）とあり、以て、當時、お夏清十郎の事を仕組める狂言の流行りし事見る可し　蕪村の句「それも」とは「それも亦」の意にて、さる團扇の澤山ありしをいふならん。

附記　「ほとゝぎす」第二卷第九號本欄第二十八問
　春の夜によき女嬬見たりさし油
といふ句の女嬬を、つまいと讀み、俗に女房といふ女嬬を貫き意味なるべし、と解したるは誤りにて、女嬬は「にようじゆ」又は「によじゆ」と讀み、女官の名にて其中にても卑しき役をつとむるものなり。或書には内侍司に屬して、掃除燈油等を掌るとあり。されば此句も自然宮殿中のありさまにて、「さし油」といふも判然すべし。されども以上「にようじゆ」「によじゆ」と言へるには皆「女孺」とかけり「孺」と「嬬」との字義に强いてかゝはるにあらざるも、句の作者は何に依により所ありて斯くかけるにや、將た誤りたるものにや、尙考ふべし。　（七月）

（五）

〔第一問　支麥調とは何ぞ。

答　支麥調とは支考、麥林の調なり。支考は美濃派の元祖にして、其美濃派なる者は極めて俗なる調なり。麥林は又乙由ともいへ、これも支考と同時代に出でゝ伊勢派といふものを起す。兩者の調子は異なるけれど、其卑俗なるは同じ事なれば、蕪村は之を輕蔑して支麥といへり。猶我等の今日に於て月並調といふと相似たる者、支麥調は無論月並調の一部なり。

〔第二問　ほとゝぎす十九號附錄十九頁に「四にいふ、春夏秋冬は新暦にても舊暦にても變らざるなり」とあり。余の見る所にては新暦一暦は

慥に四季に相違あるものと思ふ。例へば新暦の一月は冬なれども舊暦の正月は春なるが如し。此差如何。

答　前々號にいひしところは新暦の一月と舊暦の正月とが同じといふに非ず。例へば立春の日が今日とすれば新暦舊暦いづれにても今日が立春なりといふ事なり。今少し細しく說かんに、夏至といふは一年にて日の最も長き時、冬至といふは日の最も短き時、春分秋分は晝夜平分の時、而してこれ等は初より暦にて定まる者にあらず、天文學者が天文の觀測より割り出して其結果を示す者なれば、それは何の暦にも拘らず總て同日なり。（同日とは同名稱の日といふ事に非ず）さて立春といふは冬至後何日目、立夏は春分後何日目、立秋は夏至後何日目、立冬は秋分後何日目と定むる事故、これにも暦の上の相違あるべくもあらず、即ち何の暦にても同日同時に立春に入り立秋に入るなり。例へば今明治卅二年は新暦の八月八日、即ち舊暦の七月三日午前三時五十九分、立秋に入る譯なれば、此時より以後、新暦にても舊暦にても同じく秋となるなり。されば新暦は既に秋に入り舊暦はいまだ秋に入らずなどいふ理窟は無し。このいつでも同時刻に春に入り秋に入るなり。春夏秋冬といふ名稱に就きては種々の論ある事なれど、余は立春より立夏迄を春とし、立夏より立秋迄を夏とし、立秋より立冬迄を秋とし、立冬より立春迄を冬とする事に定め居れり。立春立夏等は舊暦にては毎年、日が違ふ故一々暦を見れば分られども、新暦にては年々同日なれば一度之を記憶し置けば、旅中にてもたやすく四季更迭の日を知る事を得べし。立春は二月四日、立夏は五月六日、立秋は八月八日、立冬は十一月七日、大略此の如し。

○第三問　千歳不易、一時流行とは俳句上如何なる義なるか。

答　これは元祿時代に流行りし詞にて去來、許六などが頻りに議論せし事あり。勿論個樣なる詞は人々によりて種々さつたに解する故、今ここで余が解釋するとも其解釋が昔の去來や許六の思ふて居た所とは吻合せざるべし。されど其字義に就きて試に解せんか、千歳不易とは、俳句の神韻的なるまじめなる者は、何時見ても何年立つても味が變らぬ、即ち十年前に善かつた者は十年後にも矢張善い、百年千年前に善かつた者は百年千年後にも矢張善い、といふ事なり。一時流行とは、俳句の滑稽的なる者、新奇なる者などは去年善いといひし句も今年は惡くなり、今日面白しといひし句も明日は面白しとはいはぬやうになるといふ事なり。例へば

湖の水まさりけり五月雨　去來

といふ句は元祿の當時に在りても名句といひしものにて、今も猶人之を名句といふ。これ即ち千歳不易の句なり。

長松が親の名で來る御慶かな　野坡

此句は元祿の時には珍しくて面白かりし者なるべけれど、今日では月並連も能く此位の句は作るべし。これ即ち一時流行の句なり。許六は流行は二三年に一變する、其流行に從ふ者は論ずるに足らず、として暗に其角を譽め去來を誹りしかば、不易好きの去來は不易の句を作る者亦能く流行の句を作る、流行の句を作る者必ずしも不易の句を作らず、などいひしなり。一口に二者の區別をいはゞ、不易とは陳腐になりにくい句、流行とは陳腐になりやすい句といふやうな事にもなるべし。固より陳腐とか新奇とかいふも人々皆解する所ある故、自分の好きな趣向は、趣向の種類に拘らず陳腐になり難き傾きありて、一向にあてにはならず。されど大體の上に不易、流行の別いくらかはあるべし。漢詩家に格調派と性靈派とありて相爭ふ事あり。

文字の前こそ違へ、格調は不易に近く、性靈派は流行に近きが如し。

○第四問　第九號牡丹選句中

　牡丹剪つて蟻に驚く女かな

は二三年前の日本紙上に於て慥に露石氏の作たる事を記臆致候。抹殺ありて可然存候。

　藤原の榮華久しき牡丹かな

これも二三年前の日本紙上にありし樣覺ゆる蕪村氏の「一門の榮華たゞひなき牡丹かな」と趣向能く似たり。陳腐には屬し不申哉。

　二三片牡丹崩るゝ甃

唯昨年の日本紙上なりしか青々氏の「禪宮や牡丹崩るゝ甃」といふがあり。されば陳腐には無之哉。又兩句何れが勝り申候哉。

　切らんとして切らでやみたる牡丹かな

第一卷ほとゝぎすなりしか「大輪の牡丹剪るべく惜むべく」といふがあり。これも何れか勝り申候哉。

　人も無き應接室の牡丹かな

は[illegible]として客の無き牡丹かなを思ひ出し候。[illegible]同じ意向の[illegible]存候。如何に候哉。

答　「蟻に驚く」の句は[illegible]句なりしを忘れしなり。「藤原」の句、類句ある事は忘れ居たり。併し句柄は「一門」の句より遙に勝りたれば保存するを善しとす。「甃」の句も類句ありとすれば抹殺して可なるべく、但優劣は定めかねたり。「大輪の牡丹剪るべく」といふは句柄拙し。「切らんとして」の穩當なるに如かず。「應接室」の句は趣味の上に於て蕪村のに及ばず。されど應接室といふ趣は蕪村の知らざる處、竝び存するを妨げず。總て全く同じき句又は極めて似たる句など出で來し時は、心づきし人斯く注意あらん事を望む。

○第五問　虛子氏の

　虎の皮の襌に居る蝨かな

の句は何れの季に屬すべきか。

答　夏ならんか。

○第六問　蕪村句集講義中に晉の謝靈運とあり。然るに或る書には靈運は宋人とあり。何れか正しきや。

答　宋人なり。

○第七問

　淺草の古き本屋や[illegible]拂　碧梧桐

此句は所謂動く句なるべし。如何となれば上五文字は「本町の」「京橋の」「横濱の」「品川の」等何とでも更へ得べし。併し淺草に限るにや。

答　淺草の古本屋として名高き淺倉屋など思ひ寄せたる作なるべし。

●

○第八問　俳句の鼻祖は[illegible]人なりや。宗鑑か宗祇か守武か承りたし。

答　宗鑑、守武を鼻祖ともいふべきか。

○第九問　第九號の募集句中牡丹の選に入りしは僅に卅七句のみ。之に反して薔薇の選に入りしは約五百句の多きあり。斯く迄大多數の差あるは如何なる故にや。

答　入選と落選とは境界線の高低によりて選句の多少を生ずるなり。境界線を高き處に置けば選句少く、低き處に置けば選句多し。境界線の高低は人により時によりて異なるべし。

○第十問

　李夫人の化して[illegible]の牡丹かな　丹之

此句の解釋を願ひます。

答　李夫人は漢の武帝の寵愛したる美人にして、李夫人死後に武帝は再び其顔を見たしと

て反魂香を焚きたる事などあり。此句意は屏風に描きたる牡丹の美しさを李夫人に比したる者にして此書牡丹は李夫人の生れ變りかといひしなり。

○第十一問　あざ笑ふ花和尚の聲やふぐと汁

此句の花和尚とは何と讀み何の意味なるか。

答　花和尚は、くわをしやう、と字音に讀む。水滸傳といふ支那の小説の中に出て來る豪傑なり。もと魯智深といふ男なるが人を殺して、其罪を遁れんために僧となる、渾身に入墨ある故花和尚とは呼ぶなり。此和尚なか〳〵の亂暴者にて僧となりし後も好んで肉食などし、常に鐵禪杖を携へて歩行く、併し正直な性なり。

○第十二問　李夫人を抱けば煙の初音かな　濤々

右夏の部にあり。只と初音といひて時鳥の意に通るや伺ひたし。

答　初音といふは普通に鶯と時鳥とに用ふ。李夫人の句にして鶯の句と聞えずば時鳥の句たる事知るべし。豆腐屋のあとを根岸の初音かなとは鶯の句なり。

○第十三問　俳諧史に化鳥風といふあり。趣味ある一風にや。

答　趣味なき一風なるべし。

○第十四問　古事等を援用して間接に季を言か現す事を得べきや。例

　詩に倦んで宰予を學びしびれけり

宰予を學ぶといふよりして右は夏の句(晝寐)として差支なきか。

答　差支無し。併し簡樣な謎のやうな句には些の面白味もつかぬなり。

○第十五問　俳句評釋第十頁に俳人の名を列舉せし中に、曲翠、曲水とあり。兩者別人の如く記されしは誤に非るか。

答　曲翠、曲水、一人の號なり。翠と水と通はし用ふるのみ。珍夕、珍碩も此類なり。

○第十六問　第七號募集俳句中に「妹が門琴になる木の若芽かな」といふあり。琴になる木は桐の木なるべし。わざ〳〵桐の木を琴になる木と作りしは奇に過ぎ、却て詩趣を沒却する者にはあらざるか。

答　此句で琴になる木といふは桐の木の事には限らず。木は何の木でも琴になる木であれば善きなり。特に琴といふ聯想を起したるは妹か門なる故なり。さるを單に純客觀の句として「妹が門に桐の若葉かな」と改めなば妹が門と桐と調和せぬ者となるべし。但し此句は左程善き句にはあらず。

○第十七問　芭蕉翁遺語なるものゝ中に「木の花は朝咲く、草の花は夕に咲く」とあり。當否諸君に於ても右の如き標準によるゝにや。

答　草木を詠むには實際の草木を見て詠むが善し。芭蕉翁遺語などいふ者に據る必要は少しも無きなり。草の花でも朝咲いて晩にすぼむ者多し。簡樣な者は芭蕉の遺語に非ること必せり。縱し遺語なりとするも明治の俳人がこんな者をあてにするやうではなさけなき次第ならずや。

○第十八問　秋色女の「武士の紅葉にこりす女とは」の句には「冠里公へはじめて伴されて」との前書あり。此武士の句を好色を誡めたる句とすれば秋色女が冠里公を誡めたる事となり、聞

る其意を得さる如し。如何となれば公は堂々たる大名にして殊に閣老をも勤められたる人なれば、一少婦女子が好色を云々するなど心得難き噺なり。此邊の消息如何にや承知致度候。

答　冠里公へ召されたる時の事情を知らねば此句が冠里公を誡めたる者なりや否やは知り難し。併し冠里公が大名であらうが閣老であらうが、好色の事などあらばそを誡めぬにも限らぬなり。又此句が冠里公の好色をたしなめた者とするも、此句を冠里公に示したりや否や、それも分らぬ事なり。（第九號隨問隨答第十八問參照）

○第十九問　左の句は月並調には非るか。

討死の便りありけり年の暮　虚堂
鶯の來るがうれしき庵かな　麥人

答　討死などいふ事は月並派にては詠まぬならん。又「來るがうれしき」などいふ無邪氣なる語は月並派にては得いはぬならん。

○第二十問　剽竊とは此打水の句の如きをいふか。

草の雨祭の車過ぎて後　蕪村
打水や祭の車の過ぎしあと　香墨

答　剽竊と翻案とは程度の相違なり。此句を剽竊と見るか翻案と見るかは各人の意見にあり。

○第二十一問　俳諧大要第七十五頁に「靜かさは栗の葉沈む清水かな ――― 同（尙白の同なり）」とあり。然るに此句は七部集に依れば柳陰の句なるが如し。如何。

答　猿蓑の几右日記に亡人柳陰とあり。柳陰なること疑なし。尙白の句とせしは誤なり。

○第二十二問　左の數句附圈の處御説明を請ふ。

茨散るうはなり打のしもとかな　鳴雪
薔薇花の下に兵を談ずる二喬かな　同
梅龕の蝶に花なし箱柱　子規

答　昔の風俗に、前妻を離縁したる男、後妻を娶れば、前妻及び其味方は手に手に棒など持ち來りて其後妻を打ちたゝきなどする事あり。それを「うはなり打」といふ。しもとは笞なり。二喬とは昔支那三國の頃、呉にありし姉妹二人の美人なり。曹操も此美人を得んと思ひしが望を遂げず。遂に二喬は孫策、孫權兄弟に嫁したり。梅龕は我等仲間の俳人にて、右の手を切斷し左手にて字を書きなどせしが、五六年前に死し小石川の植物園に近き寺に葬りあり。

○第二十三問　擬人法は何故に排すべきにや。

答　いやみあるが故なり。（八月）

（六）

○第一問　樗堂は何時代の俳人に候や。

答　樗堂は栗田氏、伊豫松山の商人、初め蘭芝と號す、二疊庵ともいふ。文化十一年八月二十日歿す。

○第二問　「有樂忌の話は雅莚戰記かな」の句、ほとゝぎす四號芳集俳句に在り、有樂忌とは何人の忌にや。俳諧歳時記冬季の中に見當らず候。

答　有樂忌とは織田有樂齋の忌日なるべし。有樂齋は信長の弟にして茶を利休に學ぶ、茶に名ある人なり。元和七年十二月十三日七十（一說七十五）にて歿す。十二月なれば有樂忌は冬季なり。歳時記に無くとも季に定まりある者は季とするに差支無し。

○第三問　せき立てゝ飯の暑さよ汽鑵宿

斯る折のあつさは著さといはんより熱さといふべき者にあらざるか。

答　熱につきていはゞ熱さなり。併し此句は饑の熱さに夏の暑さを兼ねたる者なれば暑の字を書くも不都合なかるべし。

○第四問　左の句の解釋を請ふ。

だんだうのかへぎに逢ひぬ朧月
夕顔の花にさめなる暑さかな

答　二句共に文字の間違ひあり。左の如し。

だんだらのかつぎに逢ひぬ朧月
夕顔の花にさめたる暑さかな

昔京の女は多く被衣かけて歩行きしが、その中にも宮中の女はだんだら筋の被衣を著たりとか。

○第五問　猿蓑集の洋製物は何地に有之候や。其代價御通知を乞ふ。

答　七部集の翻刻は一時多く出たれど今は跡を隱したり。俳諧文庫第一編芭蕉全集の内にも猿蓑はあり。これは博文館出版にて一冊定價二十五錢。

○第六問　「新俳句」の發行所及び代價郵税御教示を乞ふ。

答　京橋區日吉町四番地民友社發行、定價三十五錢郵税は六錢位なるべし。

○第七問　俳句は敍事詩に適して抒情詩に適せざる者に候や。

答　敍事詩、抒情詩といふは西洋のエピック、リ、ツクの事にや、それならば此等の名稱が俳句に適當せぬ事論を竢たず。問者はどんな意味にて此問を發したるか。敍事詩も抒情詩も俳句も何も知らぬ人ならでは斯樣な問を發すべき者に非ずと思ふ。

○第八問　日本國詩の發達に關して俳句は貢獻する所ありや否や。若しありとすれば敍事の點か、抒情の點か。

答　愚な事を問ふ人かな。俳句も日本國詩なるに、これが貢獻するとかせぬとか聞えぬ事なり。俳句が發達すれば即ち日本國詩の一部は發達したる道理ならずや。敍事か抒情かは俳句を見れば分るべし。俳句を見てそれが敍事であるか抒情であるか分らぬならば、敍事も抒情も俳句も分らぬ人なる事疑ひ無し。

○第九問　俳句は少年に於ては詩想の發表に適せざるものに候や。

答　問の意明瞭ならざれども、少年時代の熱情は俳句に現すこと殆ど難かるべし。

○第十問　芭蕉翁が元武門に出でし其經歷上より、奥の細道の夏草の吟、卯辰紀行の須磨懷古の文等に徴するも、翁が唯ゞ風月に放吟せる風狂騷客の類ならざるや明なり。この多血多涙の翁にして久しく東都に寓し親しく柳營の權勢驕奢に接觸せるもの、一度帝都に來り皇居の式微を一見して必ず多少の感慨無きを得んや。則ち潜に其懷を述べたるもの

京近き所に年をとりて
誰人か菰著ています花の春

の句に非るか。此吟殊更に京近くにてと題せる、言葉遣ひの愼重なる、唯ゞ風月の吟にあらずして皇室の式微を歎ぜるは察するに難からずと存候。然れどもこれ予が私見に過ぎず。幸に質問欄を借りて教を待つ。

答　芭蕉は俳人にして慷慨家に非ず。俳人が古蹟を訪ふて古英雄を弔ふは其雅懷より出づ。是を以て慷慨家と目するは非なり。芭蕉が誰人の句を作りたりとて勤王家といふべくんば、日

光にて「あら尊青葉若葉の日の光」と詠みしを證據に佐幕家ともいふべからん。此の如き臆說は無用の事なり。世人時に此樣の論を吐いて喜ぶ者あるは單に奇を好むのみにあらず、芭蕉をえらき者にせんとの考より出づるなるべし。然れども慷慨家が俳人よりえらき譯は少しも之無し。芭蕉をして俳人群中を脱せしめ慷慨家列傳の中に加へんには、芭蕉は一文半文の値打をも有つ能はざるなり。

○第十一問

　晝見れば頸筋赤き螢かな

の句は文學上最も價値ありとすべきや。如何。

答　善き句に非ず。されど一趣向ある句は存し置くべし。一讀の價はあらん。

○第十二問　聯句に、

　炭賣の己が妻こそ黑からめ
　　人の裝ひを鏡とぐ寒

といへるあり。付意の解釋を乞ふ。

答　鏡とぎが他人の化粧を寫すための鏡をとぐ事を炭賣の己が妻といふに對して附けたるなり。繰り返していはんか、炭賣の妻の色の黑からうといふ事と、鏡とぎが自分の妻を寫すためでない鏡をとぐといふ事と二對の貧夫婦を竝べたるなり。

○第十三問　古今を通じて無量計るべからざる大數の俳句中にて横綱たるを得べきは何といふ句なりや。

答　そんな句がある者にあらず。そんな句があると思ふは素人量見なり。

○第十四問　新派の句をなさんとする者が熟讀すべきは誰の句なりや。

答　元祿にて芭蕉、其角、去來等、天明前後にて太祇、蕪村、几董等。

○第十五問

　花茨に石斧掘出す古墳かな

石斧と古墳とは時代異なり。故に古墳より石斧の出づるは實に異例なるべし。句には差支なしや。

答　選者も作者もそこ迄は詮索のとゞかざりしなるべし。

○第十六問　十句集さては運座は點取俳句にはならざるにや。

答　點取俳句といふ事の意味分らねば答へ難し。

○第十七問

　芭蕉忌の去來も老いぬ卯七など

といふは如何なるわけにや。

答　去來は芭蕉の高弟にて殊に芭蕉とは最も親しかりし人なり。卯七は長崎の俳人にて去來と同鄉なれば或る年の芭蕉忌に兩人京などにて出逢ひし事もあらんとの想像より出でたる句なるべし。

○第十八問　ほとゝぎすし號に

　渡し呼ぶ女の聲や小夜千鳥　蕪村

此句は句集に無し。恐らくは蕪村の句にあらざるべし。如何。

答　句集に無ければとて蕪村の句に非ずと斷定する理由にはならざるなり。今日傳はる所の蕪村句集は前編とあり。後編は世に出でざりしかど、前編とある以上は少くも蕪村の句の半ばは句集に出で居らざる筈なり。

○第十九問　新俳句展讀の際解し得ぬ語を左に列記致候。詳細教示を蒙り度候。

一八　むら鳴く　笹鳴　零餘子　罔兩　なゐふる　驚破嵐　蛬　竈馬

答　一八はいちはつ又は、いつぱち、といふ。漢名は紫羅傘なり。春晩夏初に咲いて、かきつばたと善く似たり。草屋の棟に植ゑたる處あり。むら鳴くはむらに鳴くなり。むらは一樣ならざる意なり。笹鳴は「さゝなき」と讀む。さゝは小の意にて少し鳴くなり。これは冬季鶯の子の啼き習ひする事をいふ。零餘子は、ぬかご、なり。地方によりて「めかご」とも、むかご、ともいふ。いもの如き質にて小さく丸き者なれど、蔓になる者にして根にはあらず。煮て喰ふべし。罔兩は、かげぼう」と讀む。影法師の事なり。但し時によりては音にて「まうりやう」と讀む事もあるべし。なゐふるは地震なり。驚破は、すはや」と讀む。物の急に來る瞬間をいふ。蛬は「こほろぎ」なり。竈馬は「いとど」なり。但し蛬も竈馬も異名同物なり。

○第二十問　五元集中

芭蕉庵を訪ひて
鶯に藥教へん聲のあや
南部にあそぶ門
傘や薪の夜のありとをし

右二句の解釋を乞ふ。

答　前者は鶯に聲の善く出る藥を教へてやらうとの滑稽なり。後者は奈良の薪の能の事にて蟻通といふ能を見たる事なり。雨夜なれば傘さして見たるならん。

○第二十一問　左の句の句意御教示被下度候。

一、元日やされば野川の水の音
二、松かざり伊勢が家買ふ人や誰
三、明星や櫻さだめぬ山かつら
四、あはれやな甲の下のきりぎりす
五、西行も娘持ちてや衣かへ
六、やぶ入や牛合點して大原迄

答　第一は年のあらたまると共に水の音もあらたまりて春めいて來たといふ意、さればは果してなどいふやうな心持なり。これは實際に水音の變りたるにあらず、作者の心持をいへる者にて、歌などにありふれたる趣向なるべし。第二は伊勢といふは古の歌よみなり。此女おちぶれて家を賣りしといふ事をこゝに用ゐし者なり。舊冬來長く賣れざりし家を歳旦に見れば松飾など立てゝ人の住みけるを、伊勢の家に比べていへるならん。「松飾」と「買ふ」とを對照し、めでたき心持を見せたり。「一人や誰」は「人は誰」の誤。第三は吉野の花の曉景を詠みし者にて、山かつら、曉の横雲引き渡していづれ櫻とも見分かぬ上に明星一つきらきらと光る樣なるべし。芭蕉はほめたれど、これも歌にありふれたる趣向にて左程面白からず。明星を取り合せたるは遂に歌に勝りたれど、「定めぬ」といふは惡き言葉なり。第四は加賀の太田神社にて實盛の兜を見し時の作なれば、いくらか悲哀の意を含めたり。兜の下の方できりぎりすの鳴いて居るを哀れと詠みし者なれど、必ずしも實際其處にきりぎりすは居らざりしを詠み込みしとするも差支無し。「あはれやな」は「むざんやな」の誤。第五は西行は妻子ありし人と傳へけるにより、方外の人ながら娘が新衣を縫ふてくれしを著かへたらんかと想像していひしなり。第六は京に奉公せし女やぶ入にて大原へ歸るとて牛に乗りたるなり。其牛は其女が大原に歸るといふ事を心得て、ひとりでに大原向いてさつさと歩む樣なるべし。

○第二十二問　左の二句御解釋被下度候。

阮咸が三味線しばし時鳥　其角
蕣水や王敦を憎む女あり　几董

答　阮咸は竹林七賢の一人にて月琴を翫めし

人なり。月琴の形三味線に似たるを以て三味線を置きかへたる者にて、其置かへたる處、即ち琉球といふいかめしい唐人と三味線といふ日本の俗な物とを配合したる處に滑稽的の面白味を持たせたるなり。「しばし」とは、時鳥が鳴く故しばらく三味線を罷めろといふ命令詞を含めて見る。もつとも其作時代には今の月琴は日本にあらざりしなり。王敦は

王敦字處仲。少有奇人之目。時王愷、石崇以豪侈相尚。愷嘗置酒。敦與導俱在坐。有女伎吹笛、小失聲韻。愷便馭殺之。一座改容。敦神色自若。他日又造愷。愷使美人行酒。以客飲不盡、輒殺之。酒至敦導所。敦故不肯持。美人悲懼失色。而敦傲然不視。導素不能飲。恐行酒得罪。遂勉強盡觴。導還歎曰。處仲若當世。心懷剛忍。

と晋書にありといふ人なり。自分が酒を飲んでやらねばお酌の美人は主人のために殺されるといふ場合にあたりて、王敦はわざと盃を手にも取らなんだといふやうな意地の悪い残忍な人と見えたり。此句はそれを的水に翻案したる者故極めて手輕く、意地悪の人といふ位の事に見るなり。殺されるなどといふ聯想は固より起らず。

附記

一、嘗て、落し文といふ夏季の題ありやと問ひし人ありしに、知らず、と答へ置きしが、先頃京の盲天外氏落し文と名づくる現物に説明を添へて送りこされたり。其文に

前略）此頃此山中（比叡山の事なり）にて即ち「ほとゝぎすの落し文」を拾ひ得て御参考迄に相送り申候。これは栗の木の葉に限りたるものにて、拾ひ得し時は尚青葉にてうつくしきも御地着の時は最早枯葉となり興味少なくと存候

とあり。さて其現物は木の若葉とおぼしきが小く横に捲かれ（長六七分幅三分位）其捲きしまりし葉の端が必ず一端にかぶさりて其形恰も古の封じ文に似たり。故に落し文といふなるべし。叡山にては地に落ちてあるといふ事故、蟲の巣くひたるか、若しくは病葉の類なるべしとそれを開き見るに、蟲も居らず、又病葉とも見えず。人のこしらへたるかと思はるゝ程の者なり。横に捲いてあるは實に不思議なり。ほとゝぎすの落し文といふは夏の初め時鳥の鳴く時にある故にしかいふなるべく、從つて季にも入りしたらん。されどさる俳句見たる事無し。

一、前號隨問隨答第二十二問に二喬の説明をしたる内に誤あり。二喬は孫策と周瑜との君臣に嫁したるなり。

一、嘗て隨問隨答欄に「當歸」の和名ありや知らずといひしに、竹允氏報じて曰く、

當歸　繖形科

異名、乾歸、大芹、文無、女二天、山蘄、白蘄、夜叉、地仙圓、當尾草、馬尾當歸

和名　おほぜりといふ。漢方にて根を藥用に供す。藥草なり。

清國産を最良とし我國にては兵庫縣、福島縣より出づ。天然生の根は小にして香氣強く、培養したる者は根太く、氣味を異にす。

（九月）

（七）

（第一問　子規君の俳諧大要の中、第十俳句と四季として記述せられたる中に、秋の霜は俳句季寄の書には設けあれども作例は殆ど見る無しと。然るに古人の句に、

薄赤き霜のかしらや秋の霜　東明

秋の霜鶯々志賀の山路かな　以泥

馬士の手に火をつかみけり秋の霜　行草
膝抱いて飯焚きなし秋の霜　蘆洲
長き日の明けて夜のあり秋の霜　長楽
手に聡て念佛申すや秋の霜　乙良
朝影や葉廣な草に秋の霜　秋香

等數て少なきにあらず、如何。

答　俳諧大要は多く旅中に在りて書きし者にて、座右に参考の書も無ければ記憶によりて書き加減に綴りし處少からず。秋の霜の如きも記憶に存したる句なかりしに因りて、殆ど見るなし、など杜選に斷定したる今更慚愧の至りなり。秋の霜の句は只今吾が分類中に記する者のみにても三十七句あり、近世の句を加へなば五六十句もあるべし。前に掲けし句の外二三を擧ぐれば、

秋霜や竹を放るゝ瓜の蔓　風荷
踏草の廻も直らず秋の霜　吟江
岡崎の橋の長さや秋の霜　燈外
藪伐れば家はさし出て秋の霜　成美

芭蕉の閑の迹
秋霜の虚や今さらにはつかなる　樗良

因にいふ、聞者の擧げたる句の中、作者行草とあるは故人五百題、新題林句集などに僞かあれども、句兄弟に尺草とあるぞ正しかるべき。

○第二問　太祇の句に、

な°折°り°そ°と折りてくれけり園の梅

とあり。な°折°り°そ°とは、折りてはならぬといふ事にや。

答　然り。萬葉にも勿の字を書いてなとよませたり。

○第三問　「秋の夕」と「秋の暮」とは同じ事なりや。

答　同じ事なり。

○第四問　蕪村の句に

紅葉見や用意かしこき傘二本
しぐるゝや用意かしこき傘二本

の二句あり。右は別句なりや。

答　句集には紅葉見の句ばかりあり。句は紅葉見の方宜し。或は初め「しぐるゝや」とありしを後に「紅葉見や」に改めしやも分らず。

○第五問

よく見れば薺花咲く垣根かな　芭蕉
妹が垣根三味線草の花咲きぬ　蕪村

これは蕪村が芭蕉の句を模倣せしものたるべし　如何。

答　此二句は趣向も調子も全く變り居るなり。僅に薺花と垣根との配合だけ似たりとて模倣といふべきにあらず。

○第六問

馬に寝て殘夢月遠し茶の煙　芭蕉

茶の煙とは何事に候や。

答　こゝで茶の煙といふは、朝、茶釜の下を焚きつくる煙の立ち上るをいふなるべし。もつとも茶といふには深き意味あるにあらで朝餉の煙といふも同じ位の事と見ゆ。併し支那の詩に茶煙颺などゝあるは朝餉夕餉の煙にはあらず、單に茶を煎る時の煙ならん。

○第七問　左に記す蕪村の句の内に難解の處た說明ありたし。

一、雨にとまる玉°水°の°宿°の蝸牛
二、家ふりて幟見せたる翠°微°かな
三、雨°や°そ°も°火串に白き花見ゆる
四、木刀も請べき猛°首の團扇かな
五、萩咲て玉°田°横°野°へ分れ行く
六、水°降°もなくて古江の雨時かな
七、窓の灯に佐°田はまだ寝ぬ時雨かな

八、鹽わかる上をからくも行時雨
落照射して曝く近江やはたかな

答　一、玉水とは檐の玉水にて即ち點滴の意なるべし。蝸牛は雨中に居る者なれば玉水の宿としやれて言ひたるなり。二、翠微は山の高き處なり。三、火串の光に白き者見ゆるは花か露かと疑ひたるにて、「そも」とは雨かそもそも花かといふ意なり。四、新五子稿に猛首とあれども猛者(もさ)の誤なるべし。五、玉田橫野は河内の名所なり。六、水降は水際の誤なり。七、佐田は河内の地名か。八、鹽わかるとは潮水と鹽と分離する意にて、鹽分る上を時雨の行くとは鹽田の上を時雨の行く事ならん。九、近江八幡は二人の獵師の名なり。これは曾我物語の趣を寫し出だせり。曾我物語に據るに、祐經が祐親を恨む事ありて、其事を年來の郎從、大見小藤太、八幡三郎に語り祐親を殺さんと謀る。二人の者獵師となり狩に紛れて終に祐親の子祐道を殺すなり。

祐經が二人の郎從これを聞き大きに喜びかやうの處にてこそ隙もあれ、いざやねらはむとて、柿の直垂小袴にし、矢を竹つこにさし我身近くかきつけて白木の眞弓をうち負ひ、獵師の如くいでたちて多勢の中に紛れつゝ伊豆の奥野へ入りにける。七日の牧狩なりけるに、夜も晝もつけ廻りけれども一矢射つべき隙こそなかりけれ。狩も既に過ぎければ大見小藤太申しけるは、一郎殿心を盡し今や〳〵と待ち給ふらんに手を空しくして歸る事こそ口をしけれ、いざや我等思ひきり歸るさをねらはんと申しければ、八幡三郎これを聞き、然るべしとて、二人うちつれ、道をかへ先に立ちて伊豆の奥野口なる赤澤山の麓、八幡山と岩尾山とのすそに兒倉の追立といふせこを尋ねて椎の木三本を小楯に取り、一のまぶしには大見小藤太、二のまぶしは手きゝなれば餘さん所は定の者と八幡三郎ぞ立ちける。(異本曾我物語)

大見を近江と書きかへたり。

第八問　所謂舊派宗匠の作にて「黄昏や又一人行く雪の人」「草の戸や日のさしかゝる雛の膳」等はいやみなき自然を詠じたる句と思へど如何に候や。

答　宗匠派の句としてはいやみ少き方なり。併しこんな句を佳句と思ふてはあてが違ふなり。宗匠等の句に一句でも善き句ありと思ふは畢竟趣味の發達せざる證據なればよく〳〵研究あるべし。「さしかゝる」など最も拙き言葉なり。

○**第九問**　苗代のしきせに遊ぶ蛙かな
とは誰の句にて如何なるわけにや。

答　そんな句は無し。「苗代の色紙に遊ぶ蛙かな」は蕪村の句なり。これは苗代田の四角に靑きを色紙に喩へ、歌よむと貫之のいへりし蛙を配合したるなり。色紙の歌書く者なるは云ふ迄も無し。

○**第十問**　分類中にある左の句は何の意味なりや。又何と讀むや。

下々も下々下々の下國の涼しさよ　烏石

答　俳句分類の中に此句を載せたれども、作者「一茶」と明かに記せり。烏石とは何の事ぞや。下々は「げゝ」と讀み、下國は「げこく」と讀む。下等の下等の最下等の國といふ事なり。下々の語は宗鑑の狂歌に「とまりて行くは下々の下の客」とあるより出づ。遊人の句に「下々の下の客といはれん花の宿」ともあり。

○第十一問　廣告に俳諧三佳書とあるに何々の書なりや。説明ありたし。

答　猿蓑、續明烏、五車反古の三書なり。猿蓑は元祿の粋を抜きたる者、吾人の始めて眼を開きたるは實に此書の賜なり。後二書は天明前後に在りて比類無き好句集にして、吾人が天明なる新俳想を攫取するを得しは全く此二書の媒介に因る。三佳書と名づくる所以なり。

附　記

一、七小町の内三小町を知らずといひけるに紫影、江戸庵諸氏報じて曰く、清水小町、山本小町と。

一、素月氏報じて曰く、零餘子は長薯の蔓になる者故我地方にては長芋小僧とも申候。

（十月）

（八）

○第一問　連句の法則を問ふ。

答　連句の法則は古の俳人がやかましく吟味せしため種々の面倒を生じたれど、併し全く一定したる者にはあらで、各人により手心の緩嚴に甚しき相違あり。芭蕉の關係し居る連句には常に破格の例多し。されば連句の法則なる者は何處ら迄遵守すべきかは只ゞ其人の考へに任すより外に道なけれども、普通と思はるゝだけの法則をこゝろみに左に擧げんか。

歌仙　三十六句に完結するもの

句	季	
第一句	（季）	表　六句
第二句	（季）	
第三句	（×）	
第四句	（雜）	
第五句	（月）	
第六句	（秋）	
第七句	（秋）	裏　十二句
第八句	（雜）	
第九句	（雜）	
第十句	（雜）	
第十一句	（雜）	
第十二句	（雜）	
第十三句	（月）	
第十四句	（秋）	
第十五句	（秋）	
第十六句	（雜）	
第十七句	（花）	
第十八句	（春）	
第十九句	（春）	名殘表　十二句
第二十句	（雜）	
第廿一句	（雜）	
第廿二句	（雜）	
第廿三句	（雜）	
第廿四句	（雜）	
第廿五句	（雜）	
第廿六句	（雜）	
第廿七句	（雜）	
第廿八句	（雜）	
第廿九句	（月）	
第三十句	（秋）	
第卅一句	（秋）	名殘裏　六句
第卅二句	（雜）	
第卅三句	（雜）	
第卅四句	（雜）	
第卅五句	（花）	
第卅六句	（春）	

第一句を發句又は竪句といふ。春又は秋ならば同季三句續き夏又は冬は二句なり。

第二句は脇ともいふ。句尾を名詞にて結ぶ。

第三句の句尾は「て」「に」「らん」「もなし」にて結ぶ。

第五句月の定座なれども發句秋ならば月を初三句の中に繰りあぐべし。

表六句には神祇、釋敎、戀、無常、疾病、地名、人名、述懷等に關する句を許さず。

第十三句の月に夏の月又は冬の月としてもよし。さすれば同季二句續くのみなり。

戀は二處ばかりありても善しといひ又戀の句は二句續くべしなどいふ。それは何處へ入れにても宜し。

神祇釋敎の句も一句は許しといふ人あり。名殘の表は連句の遊び處といひて少し下品なる言葉なども苦しからず。縱橫に變化を逞くする處なりといふ。

名殘の表の雜と記したる中には夏又は冬の句一句位はあるべし。それは一句にても二句續きても宜し。

一卷（歌仙ならば卅六句を一卷といふ）の内に月の定座三あり、花の定座二あり。月の定座は繰りあけたる場合多し。

右大體の法則なれども必ずしも之に從はざるべからずといふにあらず。此外何句去といふ事あり、例へば木と草と二句去といふは木の句ありて後二句の間は草の句を詠まれずといふ事、同季五句去といふは春の季ありて後五句の間は春の季を詠まれずといふ事の類、他は推して知るべし。此等の法則は畢竟變化を貴び重複を嫌ふより起りし事なれば、連句の上に必要なるはいふ迄も無けれど、併し二句去三句去などいふ細則に拘るべきにあらず。法則に一句去とあ

りたりとて三句目に同趣味同種類の者を連ねなば、終に變化の原則に戻りて面白からぬ結果を生ずべし。連句はどこ迄も變化を主として作るを要す。（句と句との附工合は古例を見て知るべく、猶俳諧大要にも少し説明し置きたれば參照あるべし）

○**第二問**　左の句説明を乞ふ。

　一八やしやが父に似てしやがの花　蕪村

答　一八は初夏に咲く草花にて、しやがの花と花自身は異なれど全體の趣は相似たる者なり。上に「しやが父」とあるは下の「しやがの花」に掛け合せたる事勿論なるが、其言葉は萬葉卷九にある

　鶯のかこひの中に、ほとゝぎすひとり生れて、しが父に似ては鳴かず、しが母に似ては鳴かず、云々。

といふ歌に依れる者なり。こゝに「しが父」といふは己の父といふ事なり。蕪村が「し」といはずに「しや」といひしは此讀もある事にや知らず。とにかく此句の主意は一八としやがとが多少相似て多少相似ざる處をいひし者ならん。

○**第三問**　俳句を觀ずるに畫的に觀ずると情的に觀ずると何れか適良なる方法たりや。（但畫的とは、或句を見て先づ如何なる形容を印象するかと考へ、印象せる形容の巧拙によりて其句の價値を定むる事にて、情的とは、先づ如何なる情致を含むかと考へ、感得したる情致の厚薄により其句の價値を定むる事にて、此質問の主意はつまり俳句は敍景を主とすべきか、抒情を主とすべきかの點を明めたきなり）

答　俳句には敍景を主としたるもあるべし、抒情を主としたるもあるべし。敍景を主としたる句は敍景の巧拙に因りて句の價値定まり、抒情を主としたる句は抒情の巧拙に因りて句の價値定まる。併し句の價値は初めよりこれは敍景か抒情かなどと考へて、而して後に分るものと思ふは甚だ誤れり。巧拙美醜は一見端的に知るべし、只ゝ其美醜巧拙の由つて來る所を考へ求むれば、敍景の巧拙にもあるべく、抒情の巧拙にもあるべく、語句の巧拙にもあるべきを知らんのみ。

○**第四問**　詩（俳句なども含む）を學ぶには審美學を修め度先づ如何なる書に依るべきや著者書名御知らせ被下度。

答　審美學を讀んだとて詩が上手に作れる者に非ず。若し詩の趣味が全く解せられざる時に審美學を讀まば、却て執著の弊を生じて宜しからぬ事もあるべく思はる。されど理窟多き性質の者には此の如き考起りがちなる者にて、又此種の人には此種の研究亦必要なるべし。我も十年前は斯様なる妄想に耽りし一人なりしかば、審美學の書物見たしと思ひ丸善などをあさりしに審美の書めきたるは一冊も無し、わざわざ外國にある人のもとに賴みやりて、何か審美學の書物をといひしに、ハルトマンの審美學をおこしくれたり。嬉しさに其本を携へて獨逸語を知る友人の許へ行き、初めより一字一句讀みてもらひしが、さて字義ばかりは分りても、分らぬは全體の意義なり、二三夜通ひて二三枚讀みしが少しも分らぬに呆れはてゝ終に其儘打ち棄て置きたり。然るに其後のしがらみ草紙にハルトマンの審美學の譯を載するの廣告あり。此時もいたく喜びて、急ぎ買ひ讀みしに、再び失望し了りぬ。しがらみ草紙の譯は原書を一字一字譯したる者故、譯の正確なると同時に原書にて分らぬ一章一節の大意は譯文にても一樣に分らぬなり。我はしがらみ草紙を抛ちし以後再び審美書を手にせざりき、又之を見んとの念も以前の如く切ならざりき。蓋し我一度研究せ

んと思ひ立ちし純正哲學の基礎に疑を生ぜし以來、我が美の趣味の捕捉に一步を進めたりと自ら信ぜし以來、此審美學の基礎にも疑無きを得ざるなり。若し審美學者が一個の標準を標準として論じたる者ならば、彼の標準が我標準と撞著したる時我は彼に從はざるべからざるの義務あるに非ず、若し又彼が古美術家の標準を標準として論じたるものならば、我は此種の知識を得んが爲に、審論者の朦朧なる媒介に依らんよりは、寧ろ實物が精確に直覺的に與ふる所の美を感受するの利を思へり。とにかく美術家は審美學者に資する所多くして、審美學者は美術家に資する所甚だ小なるを悟りしより、我は審美學の研究を好奇心の部に入れて、復必要の部には入れざりき。若し我に審美學の必要あらば、他人の審美學を骨折りて讀まんまでもなし、我自ら自己流の審美學を創設するの容易なるに如かずとさへ思ひなりぬ。これは横道の横傍談なれども、右の如き上慢心を起し我は、右の次第にて審美學の研究足らねば著者も書名も知つたものにあらず。獨逸には審美の書多しと聞く。其道の學者に尋ねらるべし。近時一二の小冊子の邦文にて書けるもありと聞けど、讀まねば價の如何は知らず。併し十年前に讀めざりし如く今も猶讀めざるを恐るゝなり。時々。

○第五問　試に「新俳句」に入れる句にして古人の句に類似せる者の二三を擧ぐれば左の如し。これは編者の知りつゝ入れし者にや、但しは知らざりし者にや。併せて句の優劣を問ふ。

小坊主の門に立ちけり秋の暮　闌更
門前に小僧立ちけり秋の暮　把栗
夕立に水吞む鯉のあたまかな　嘉定
夕立に打たるゝ鯉のあたまかな　子規
二三日内にも居らず猫の戀　舍羅
戀猫の戻らぬ二日三日かな　松宇

答　選者の粗漏なるべし。優劣はいろ／＼あるべし。

（十一月）

（九）

○**第一問**　左の句を說明せよ。

五位六位色こきまぜよ青簾　嵐雪

答　昔の大寶令に定めたる服制に據れば、四位は深緋、五位は淺緋、六位は深綠といふ服色なりしが、後に一條天皇頃よりは四位以上皆黑色となり五位が蘇芳と變り六位以下皆縹となりきとなり。嵐雪の句は源氏物語若紫の卷より出づ。同じ卷に、源氏始めて紫の君を尋ねて二條の殿の西の對に移し給ひし時、紫の君端居して庭など眺め給ふ有樣を記して、

立ち出でて庭の木立池のかたなど覗きたまへば霜枯の前栽繪にかけるやうに面白くて見も知らぬ四位五位こきまぜにひま無う出で入りつゝげにをかしき所かなとおぼす

とあり。知らぬ人を四位五位と見定むる事、服色の外に據り處もあるまじければ、黑袍の人と赤袍の人とを見て斯くはいへるならん。こきまぜは、「柳櫻をこきまぜて」などいへる如くうちまぜたる意にて、こゝも黑色と赤色との色の配合なればこきまぜといふ語を用ゐたり。嵐雪は四位五位を五位六位とし、これに青簾を添へ、つまり緋と縹と綠と三色の配合となしたり。

繪は色によつて成る者、色は繪によつて現さるる者にして、俳句などにて色を現すは極めて難き事に屬す。されば古より雪と鴉の配合、鷺と鴉の配合、松杉と紅葉の配合の如き簡單なる配合はあれども、三種の色を配合したる俳句は見當らず。此點に於て此句は珍しき句にして且つ成功したる句なり。但粉本既に源語にある上は其功績の一半は之を紫女に歸せざるべからず。（嵐雪の句の青簾は尊き御殿の青簾にし

て、なみ〳〵の家の青簾に非ることといふ迄も無し）

（第二問　碧梧桐先生の續俳句評釋中

　高土手に鶸の鳴く日や雲ちぎれ　珍碩

右の句中鶸は「ひよ」と讀む、鵯の事にして高土手といへば高い木も想像される、と申され候へども元來鵯と鶸とは相異なる鳥と被存候。鶸（ひわ）は雀よりも小く全體黄色にて少く青を帶び脊翅に黑を交へて尾も亦黑く腹は黄色に喙は灰白、善く囀る鳥に候。又此鳥は高い木の上よりも寧ろ刈田の堅い處又は土手の上などにある事多く候と存候。如何のものにや。

答　鵯と鶸の異なる事論無し。著者が例の杜撰を申しけるよ。

（第三問　單に或概念と概念とを連接したるのみにては詩と申されぬは勿論に候はんが、例へば子規子

　庭の菊天長節の蕾かな

の句は庭の菊と天長節と蕾を連ねしだけにて、それも布置配合の妙あるにあらねば些の美感を興へぬやうに思はれ候。同じ事にても末五「蕾みたる」と動詞にして見たる方如何に候か。

答　美感が起るか起らぬかは固より見る人の感ずる事なれば議論のしやうも無き譯なれども、「蕾みたる」と改めたる手際によつて問者の嗜好は大方に察するを得たれば一言し置くべし。質問中布置配合とあるは何の事か分明ならず。或は布置とは言葉の位置にして「菊の蕾」といふべきを「天長節」にて中斷したるが惡しとの事かと思はる。成程此句は天長節といふ六音の詞を無理に入れたる故、窮屈な句となりし次第なれども、さりとて「蕾みたる」として面白き句となるべきか、それは疑問なり。蕾を名詞にするとも動詞にするとも配合の上に何の變化も起らねば、布置の上にいくらかの妙を加へたりとの問者の考なるべし。此淺薄なる寧ろ誤りたる考は俳句を善く知らざる人には普通の事にて、是は第一に散文的たらしめ第二に主觀的たらしめんとするに外ならず。「蕾かな」にては何やら窮屈に整はぬやうなれば、「庭の菊天長節を蕾みたる」とでも改めなば言葉つゞき自然になりて宜しからんとの考は、即ち俳句をして成るたけ散文的文法に從はしめんとの謬想より起れるなり。韻文が美を現すに必要なる場合には散文的文法に一致せざる結果を生ずるは珍しからぬ事にて、それがためにあながち俳句の價値を落すにもあらず。韻文の妙は往々言葉の窮屈なる處、文法に外れたる處にあるなり。第二に「蕾かな」といふは客觀的にして「蕾みたる」といふは主觀的なり。前者は蕾の形と色とをいひ、後者は菊の未だ開かざる事を意味す。細しくいはゞ前者にも主觀的の聯想裏面に在り、後者にも客觀的の聯想裏面に在るべきも、そは主なる見所にあらず。主觀的即ち「蕾みたる」といふ句を平たくいはゞ「内の菊は天長節にはまだ蕾だよ」といふ事になり、客觀的即ち「蕾かな」の句を平たくいはゞ「天長節に蕾の菊を見て居る」といふ事になる。どちらが善きかは姑く置く、我は主觀的の方の趣向が俳句初心の人に起り易き事を明言するなり、初心の人の句を以てあながちに惡しといふにはあらねど、初心の人は客觀的の觀察精細ならず、從つて客觀的趣味に於て缺くる所あり、例へば菊といへば菊の花盛を最も觀るべきの時とのみ思ひ、蕾又は枯菊も花盛に劣らぬ趣味（或は之に勝る趣味）ある事を解せざるが如し。此客觀的趣味の缺乏あれば從つて刺激の烈しからざる客觀的即ち菊の蕾の如き者に向つて美感を起さゞるは自然の結果なり。我句は餘儀

なき句にて少しも愛づべきにあらねど、此質問の起りしを機として主觀客觀を比較し、一蕾みたるといふ句が乞も原作に勝る者に非る事を信ずる旨を答へ置くなり。

○第四問　冬季に入りて後の紅葉は冬紅葉と詠まざるべからざるか。

答　さる事なし。紅葉は秋晩冬初のものなれば只と紅葉とばかりにて宜し。されど冬紅葉と詠むも勝手なり。

（十二月）

（十）

○第一問　余は俳句を獨學せんとす。如何なる順序を以て獨學せば善きや、又其に伴ふ良書あれば發行所と書名を御教へ被下度候。

答　箇樣なる問は問ふ人は始めての事なるべけれど、答ふる方にてはうるさく感ずる程なり。俳句を學ぶに順序も何もいらぬ事なれど、強ひてそれを聞きたくば俳句入門、俳諧大要でも見るべし。

○第二問　短册の認め方に就き要する心得を問ふ。

答　心得とて別にあるべくもあらず。只と見よきやうに書けば可なり。字の巧拙は別として、其外に注意すべきは、字の位置と、墨の濃淡となり。但し位置は一定したる者にあらねば一行にも二行にも三行にも其外如何やうにも書くべし。墨の濃淡とても、俳句ではどこで墨つぎするなどいふ事歌の如く定まり居らず。善き加減をはからひて墨をつぐべし。

○第三問

十に足らぬ子を寺へやる寒さかな　子規

右の句に就いて三説あり。甲はいふ、寺へ使にやるなりと。乙はいふ、寺小屋へ通はせるなりと。丙はいふ、子を寺にやりて小僧にするなりと。右三説の中いづれか正しき。教を乞ふ。

答　作者は丙説の如き主意にて作りたるなり。

○第四問　「最も多く美を含む俳句は純客觀の句なるや」に承知す。若し然らば自己の作句に主觀を含む時代は尚幼稚なるものにや。

答　「最も多く美を含む俳句は純客觀の句」なりなどいふ事大間違なり。美不美は主觀と客觀とに關係せず。

○第五問　主觀句と客觀句との區別を問ふ。　下手

答　客觀句とは見たまゝ聞いたまゝをいへる句なり。主觀句とは作者の考へ、想像にても感情にてもを述べたる句なり。

清水涸れ柳散り石ところ〲　蕪村

右の句は見たまゝをいへる者なれば純客觀の句なり。

どう見ても雪程黒きものはなし

右の句は理窟をいへる純主觀の句なり。

夏草やつはものどもの夢の跡　芭蕉

右の句にて「夏草や」とあるは見たまゝの景色なれば客觀的なり。「つはものどもの夢の跡」とあるは作者の感慨を述べたる者なれば主觀なり。されば此句は客觀と主觀と備りたる者にて純主觀にも純客觀にもあらねど、主觀の部分多き故に只と主觀句とのみもいひならはせり。

しぐるゝや黒木積む家の窓明り　凡兆

右の句にて「作者家の中にあらば主觀句となり作者家の外にあらば客觀句となるか」との問なれども、此句はいづれの位に從ふも客觀句にして主觀句とはならず。もっとも作者家の中にありて黒木は其時目に見えぬものとすれば、

其處にいくらかの主觀ありといふべけれど、普通にはさる細かき處迄いふ必要なければ、此の如きはおしなべて客觀句といひて差支へなかるべし。

　　葱買ふて枯木の中を戻りけり　　蕪村

右の句に就いても前同樣の問あり。此句を作者自身の事とすればいくらか主觀的になるはいふ迄もなけれど、さりとて之を主觀句といふ程には主觀多からず。葱も枯木も固より客觀なり。「買ふ」と「戻る」とに主觀の部分あれども、こは現在の行爲なれば半ば客觀的にして、「つはものどもの夢の跡」といふが如く全く主觀的の者とは同樣に論ずべからず。要するに純客觀純主觀といふ句は極めて稀にして、總くは主觀客觀まじりたる者なり。其中にて主觀の部分多ければ主觀句と稱し、客觀の部分多ければ客觀句と稱すれど、そは各人の手心なれば多少の異同は免れざるべし。附けていふ、俳句に純客觀といふ句も餘り多からざれど、それよりも主觀句(即ち主觀の部分多き句)といふべき句は猶稀なり。俳句の多くは客觀八九分に主觀一二分を交へたる者なるべし。

○第六問　子規子著芭蕉雜談及び獺祭書屋俳話は何れの出版に候や。其他俳諧叢書の外に著書有之候はゞ御示し被下度候。

答　芭蕉雜談は増補獺祭書屋俳話の中にあり。獺祭書屋俳話は日本新聞社の發行なれども今は品ぎれなり。外に我著書無し。

○第七問　俳句にては凩を初冬に置きたり、されど實際に徴するに凩は冬全體を通じて吹く故に冬の雜として然らんと思ふ、如何。

答　凩は木を枯らす風なれば初冬の風なり。若し冬の風を凩といはんとならば、定義の變更に就いて文學界の承認を要す。

○第八問

　　金襴の袈裟ふかれ行く花野かな　　梅室

といふがあり、初五に少しく曖昧はあれど想に於てはあしからぬ句と思ふ、如何。

答　初五に曖昧なし。寧ろ金襴と花野とは調和すべし。「ふかれ行く」に大なる曖昧あり。袈裟とばかりいひて僧といはざる處にもいくらかの曖昧あらん。

○第九問　鳥雲に入るとは如何なる事にや。

答　北地に歸る鳥の遠く飛び去る樣をいふか。

○第十問　審美的にあらざる俳句は俳句とならざるや否や。

答　不思議なる言葉を聞く事かな。そも「審美的俳句」とは如何なる俳句やらん、聞きたきものなり。字面にて考へても分るべし、審美とは美を審にするとありて美といふ事を研究する事なり。されば「美を審にする俳句」といふ事は何の意味をもなさぬ言葉なり。知つた風な事いふて人に笑はれぬやうすべし。

○第十一問

　　桐の木に鶉鳴くなる塀の内　　芭蕉

右の句說明ありたし。

答　譯の分らぬ句なり。

（三十三年一月）

（十一）

○第一問

　　あか〳〵と日はつれなくも秋の風　　芭蕉

芭蕉、風を山にかへて北枝に示せしに、北枝、風の方善き由答へしかば、芭蕉其俳才に驚けりといふ。如何なれば山より風の方善きか。

答　「あか〳〵と日はつれなくも」といふ句吾は少しも趣味を感ぜず。故に秋の山とするも秋の風とするも面白からず思ふ。

○第二問　草市とは何ぞ。

答　草市（草の市ともいふ）とは盂蘭盆の魂祭の道具を賣る市なり。東京にては大道の傍に露店を出して、燈籠、苧がら、蓮の蕾、鬼灯、鼠尾萩、竹、蒲蓙、草葉の陰、小茶碗、茄子の馬、青黒、千なり集灯等魂祭に必要なる者は總て之を賣る。もつとも露店はいくつも並びてあるなり。晝の市も夜の市もあるべし。

○第三問　新蕎麦とは舊暦七月頃早熟の物を販くをいひて蕎麦切のことにはなきにや。季寄類には見えず。されども五百題八百題やうの書には秋季に蕎麦切とせし句數多見えたり。何れを採りてよかるべきか。又蕎麦刈を秋季とし冬とせし說あり。秋冬何れに據るべきにや。御教示を乞ふ。

答　新蕎麦は其年出來し蕎麦の意なれば喰ふと喰はざるとに拘らざれど、蕎麦の事故多くは喰ふ事に用ゐたり。蕎麦刈は實際蕎麦を刈る時を季とすべし。若し秋晩にも初冬にも刈らば兩季に跨がりし者として宜し。蕎麦刈を冬季として新蕎麦を秋季とするは理に合はずといふ說あり。新蕎麦も實際冬に入りての事ならば冬季に入れて宜し。要するに斯樣の事は法を實際に取るべく、古人の規則に拘るべからず。若し又類題の上に秋と冬とを分つ場合などには、秋にても冬にても各〻の好む通りに定めて可なり。

○第四問

山陰の木槿は白し酒帘　鳳毛

酒帘とは何ぞ。

答　酒帘は「さかばやし」と讀む。酒屋の看板に杉葉を丸くしてつくりたる者、即ち、さかばやし」なり。「ばやし」は「望子」といふ漢語の訛にて「さかばやし」は「酒望子」なりといふ說あり。漢語にて酒帘といふは酒屋の旗なれど、日本にては酒屋に旗立つる事なければこゝも杉葉の事と見るべし。

○第五問

帛を裂く琵琶の流や秋の聲　蕪村

右の句說明を請ふ。

答　これは蕪村が宇治に遊びし時の句なり。こゝに「琵琶の流」とあるは琵琶湖の流といふ事にて、即ち宇治川をさしていふなり。白樂天の琵琶行に四絃一聲如裂帛とあるは琵琶の音の形容なるが、蕪村は其語を借りて樂器の琵琶と琵琶湖とを掛け合せ、川の水音の形容を「帛を裂く」といひしなり。「秋の聲」といふは其水音の淋しき悲しきやうなるを以ていふのみ。

○第六問

人の世に朝顏白う咲きにけり　牛伴

の句意如何。

答　世俗一般に華美なる色を好むなるに、白朝顏の獨り白く咲きたるは世に媚びずして珍しとの意ならん。

○第七問　添水とは何ぞ。

答　添水は「そうづ」と讀む。元は「そほど」（曾富騰）といふ語なり。「山田のそほど」といふは案山子をいふ。それが中世以後に至りて「山田の僧都」と書かれたるは案山子が坊主に似たる故にもあるべし。然るに俳句にては更に一轉して「添水」の字を用ゐるのみならず、其意義も亦變じて最早案山子の事をいはず。田舍に水流を借りて自然に碓舂かす者あり。固より水車の如き大仕掛にはあらで、箱の如き者に水滿つれ

ば其箱低く下りて水をこぼす、水こぼるれば又元の如くはね上る、其時、杵動きて臼をつく、これ俳句に所謂添水なり。併しそれだけの事ならば此語が案山子より轉訛する筈はなけれど、添水は絶えず音を發する者故、夜間は鹿など此音に驚きて近よらず。即ち案山子鳴子等と同一の働きをなすなり。併し此器はもと鹿驚しを主として作りたるものか、或は臼をつく事を主として作りたるものか知らず。知りたる人は教へたまへ。

○**第八問**

われ見ても九人はむなし角力取　蓼太

右の句意は如何。

答　十人の内九人死んだといふ事なり。我見知りたる角力取は大方死にたりとの意。「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代へぬらん」といふ古歌の「われ見ても」といふ語を借り來りたるなり。

○**第九問**　ほとゝぎす第三卷第二號の俳句分類「神」の中神樂の句なきは如何。

答　「かぐら」といふは語原を知らねど、此語の内に「かみ」(神)といふ語は含まれ居らず、神樂と書くは意味の上より來りし事と思ひ、神樂の句を省きしなり。「みこし」も神輿とは書けど此國語の中に「かみ」といふ語含まれ居らぬ故これも同じく省きたり。　(三月)

(明治三十二年四月――三十三年三月)

芭蕉雜談

○年齢

古今の歴史を観、世間の實際を察するに人の名譽は多く其年齢に比例せるが如し。蓋し文學者、技術家に在りては殊に熟練を要する者なれば黄口の少年、青面の書生には成し難き節もあるべく、或は長壽の間には多數の結果、詩文又は美術品を生じ得るが爲に漸次に世の賞讃を受くる事も多きことわりなるべく、はた年若き者は一般に世の輕蔑と嫉妬とによりて其生前には容易に名を成し難き所あるならんとぞ思はる。

我邦古來の文學者美術家を見るに、名を一世に揚げ譽を萬載に垂るゝ者、多くは長壽の人なりけり。歌聖と稱せられたる柿本人麿の如き其年齢を詳かにせずと雖も、[illegible]に[illegible]任せりといへば長壽を保ちたる疑ひなし。其外年齢の詳かなる者に就いて見れば

九十歳以上　土佐光信　俊成　北齋

八十歳以上　信實　鳥羽僧正
季吟　雪舟　肖柏
宗長　宗鑑　元信
[illegible]室　貞德　宗祇
也有　蒼虬　馬琴
定家　[illegible]良　蓼太
光[illegible]

七十歳以上　紹巴　蘆庵
杏坪　宗因　野坡
雅望　秋成　常信
文晁　守武　南畝
光起　千代　景樹
一蝶　[illegible]　鵬齋
探幽　[illegible]林　宣長
千蔭　心敬　其磧

六十歳以上　一九　抱一
通村　支考　蕪村
美成　出雲　春海
一茶　良寛　貫之
契沖　[illegible]浦　許六
種彦

五十歳以上　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
凌岱　京傳　光琳
光[illegible]　[illegible]　大[illegible]
白雄　山陽　西鶴
芭蕉

四十歳以上　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]山
丈[illegible]　[illegible]郎

三十歳以上　[illegible]化　[illegible]

二十歳以上　[illegible]　[illegible]

以上有名なる者のみにて此の如し。外邦にても[illegible]其間の差異あるまじ。[illegible]山の如き[illegible]馬の如き文[illegible]の如きは[illegible]たる者なり。バーンスの如きバイロンの如き[illegible]の如きは更に[illegible]なりしと謂ふべし。是に由て之を觀れば人生五十を超えずんば名を成す事難く、而して六十七十に至れば名を成す事甚だ易きを知る。然れども千古の大名を成す者を見るに、當に當世に在らずして上世にあり。蓋し人[illegible]未[illegible]の世に在て特に一頭地を出だす者は[illegible]人の[illegible]を受け易く、又千歳の古人は時代といふ[illegible]を得て[illegible]を受くる事少きため[illegible]。[illegible]の[illegible]芭蕉に至りては今より

僅々二百餘年以前に生れて其一門は六十餘州に瀰まり弟子數百人の多きに及べり。而して其年齢を問へば則ち五十有一のみ。

古來多數の崇拜者を得たる者は宗教の開祖に如くはなし。釋迦、耶蘇、マホメットは言ふを須ゐず、達磨の如き弘法の如き日蓮の如き其威德の灼々たる實に驚くべきものあり。老子、孔子の所説は宗教に遠しと雖も、一たび死後の信仰を得て後は宗教と同じ愛情を惹起せるを見る。然れども是れ皆上世に起りたる者なり。日蓮の如き紀元後二千年に生れて一宗を開く、其困難察すべし。況んや其後七百年を經て宗教以外の一閑地に立ち、以て多數の崇拜者を得たる芭蕉に於てをや。人皆芭蕉を呼んで翁となし芭蕉を畫くに白髪白鬚六七十の相貌を以てして毫も怪しまず。而して其年齢を問へば則ち五十有一のみ。

○平民的文學

宗教の信仰を得る者は必ず平民的のものならざるべからず。宗教は多く平民的の者にして、[illegible]を[illegible]するも、常に其目的を下等社會に[illegible]きたるを以て、佛教の如きは特に方便品さへ設けて其普及を務めたるなり。芭蕉の俳諧に於ける勢力を見るに、宛然宗教家の宗教に於ける勢力と其趣を同じうせり。其多數の信仰者はあながちに芭蕉の性行を知りてそを慕ふといふにあらず、芭蕉の俳句を誦してそを感ずといふにもあらず、唯〻芭蕉といふ名の自ら尊くもなつかしくも思はれて、かりそめの談話にも芭蕉と呼びすてにする者はこれ無く、或は翁と呼び或は芭蕉翁と呼び、或は芭蕉樣と呼ぶこと、恰も宗教信者の大師樣、お祖師樣などゝ稱ふるに異ならず。甚しきは神とあがめて廟を建て、桃青靈神と稱して堂を立つること、是れ決して一文學者として芭蕉を視るに非ずして一宗の開祖として芭蕉を敬ふ者なり。和歌に於ける人丸を除きては外に例のなき事にて、しかも堂宇の盛なる、芭蕉塚の夥しきは遙かに人丸の上に出でたり。（菅原の道眞の天神として祭らるゝは其の文學の力に非ずして主として其の人の位地と境遇とに出でたるものなれば人丸、芭蕉と同例に論ずべからず）

されば芭蕉の大名を得たる所以の者は主として俳諧の著作其物に非ずして俳諧の性質が平民的なるによれり。平民的とは第一、俗語を嫌はざる事、第二、句の[illegible]なる事をいふなり。近時これに附するに平民文學の稱を以てするも亦偶然に非ず。然れども元祿時代（芭蕉時代）の俳諧は決して天保以後の俳諧の如く平民的ならざりしは、多少の俳書を讀みたる者の盡く承認する所なり。元祿に於ける其角、嵐雪、去來等の俳句は或は古事を引き成語を用ゐ、或は文字を[illegible]ならしめ格調を古雅ならしむる等、普通の學者と雖も解すべからざる所あり、況んや眼に一丁字なき俗人輩に於てをや。天保に於ける蒼虬、梅室、[illegible]に至りては一語の[illegible]せざる無く、一句の[illegible]を要するなく、兒童走卒と雖も好んで之を誦し車夫馬丁と雖も爭ふて之を摸す。正に是れ俳諧が最も平民的に流れたるの時にして、卽ち最も廣く天下に行はれたるの時なり。此間に在て芭蕉は其威德を失はざるのみならず、第一名譽の高きこと前代よりも一層と歩を進め來り、其作る所の俳諧は完全無缺にして一[illegible]も犯すべからざる者となりしと同時に、芭蕉の俳諧は殆ど之を解する者なきに至れり。[illegible]其意義を解する者あるも之を批評するは[illegible]を[illegible]たり。其樣恰も宗教の信者が經文の意義を解せず、理不理を窮めず、單に有難し勿體なしと思へるが如し。

○智識學行

平民的の事業必ずしも貴重ならず、多數の信仰必ずしも賞賛の價値を表する者に非ずと雖も、苟も萬人の崇拜を受け百歳の名譽を殘す所以の者を尋ぬれば、凡俗に異なり尋常に超ゆるの技能無くんばあらざるなり。況んや多數の信仰はあながちに匹夫匹婦愚蒙[illegible]昧の[illegible]業に非ずして其間幾何の大人君子を包含するをや。顏子の德、子貢の智、子路の勇、皆他人の企て及ばざる所なり。然れども三人を一門下に集めて能く之を薰陶し之を啓發し之を叱咤し綽々として餘裕ある者は孔仲尼其人ならずや。蕉門に英俊の弟子多き、恰も十哲七十二子の孔門に於けるが如し。其角、嵐雪の豪放、杉風、去來の老樸、許六、支考の剛愎、野坡、丈草の敏才、能く此等の異臭味を包含して元祿俳諧の牛耳を執りたる者は、芭蕉が智德兼備の一大偉人たるを證するに餘あり。

此人々固より無學無識の凡俗にあらねば、芭蕉の簀を易ふると同時に各々旗幟を樹て門戶を張て互に相下らざるの勢を成せり。其角は江戶座を創め、嵐雪は雪中庵を起し、支考は美濃派を開き、各々之に應じて起る者亦少からず。其の他門流多からずと雖も、暗に一地方に俳權を握る者江戶に杉風、桃隣あり、伊勢に涼菟、乙由あり、上國に去來、丈草ありて相頡頏せり。後世に及びては門派の軋轢愈々甚しく、甲派は乙派を罵り丙流は丁流を排し、各自家の開祖を稱揚し他家の開祖を擯し、以て自ら高うせんとのみ勉めたり。然れども其芭蕉を推して唯一の本尊と爲すに至りては衆口一聲に出づるが如く、淨土と法華と互に仇敵視するに拘らず、猶ほ本尊釋迦牟尼佛の神聖は毫も之を汚損せざるに異ならず。是れ其德の博きこと天日の無偏無私なるが如く、其量の大なること大海の能容能涵なるが如きによらずんばあらざるなり。

許六の剛愎不遜なる、同門の弟子を見ること猶三尺の兒童の如し。然れども蕉風の神髓は我之を得たりと誇言して猶芭蕉に尊敬を表したり。支考の巧才衒智なる、書を著し說を述べ以て能く堅白同異の辯を爲し以て能く博覽強記の能を示すに足る。然れども其說く所一言一句と雖も之を芭蕉の遺教に歸せざるはなし。甚しきは芭蕉の教なりと稱して幾多の文章を僞作し、讒を後世に取る事甚だ謭陋の所爲たるを免れずと雖も、翻つて其の裏面を見れば盡く是れ芭蕉の學才と性行とに對する名譽の表章ならずんばあらず。

○惡　句

芭蕉の一大偉人なることは已に述べたるが如き事實より推し溯りても推し溯り得べきものなれども、そは俳諧宗の開祖としての芭蕉にして文學者としての芭蕉に非ず。文學者としての芭蕉を知らんと欲せば、其著作せる俳諧を取て之を吟味せざるべからず。然るに俳諧宗の信者は句々神聖にして妄りに思議すべからずとなすを以て、終始一言一句の惡口非難を發したる者あらざるなり。寺を建て廟を興し石碑を樹て宴會を催し連俳を廻らし運座を興行すること、固より信者としては其宗旨に對して盡すべき相當の義務なるべし。されど文學者としての義務は毫も之を盡さゞるなり。余輩固より芭蕉宗の信者にあらねば其二百年忌に逢ふたりとて嬉しくもあらず、悲しくもあらず、頭を痛ましむる事も無き代りには懷を煖める手段もつかず、只々爲す事もなく机に向ひ樂書などしゐる徒然のいたづらについ思ひつきたる芭蕉の評論、知る人ぞ知らん、怒る人は怒るべし。

余は劈頭に一斷案を下さんとす。曰く、芭蕉の俳句は過半惡句駄句を以て埋められ、上乘

と稱すべき者は其何十分の一たる少數に過ぎず。否、僅かに可なる者を求むるも寥々晨星の如しと。

芭蕉作る所の俳句一千餘首にして僅かに可なる者二百餘首に過ぎずとせば、比例率は僅かに五分の一に當れり。寥々晨星の如しといふ亦宜ならずや。然れども單に其句の數のみ檢すれば、一人にして二百の多きに及ぶ者古來稀なる所にして、芭蕉亦一大文學者たるを失はず。其比例率の殊に少き所以の者は他に原因の在て存するなり。

芭蕉の文學は古を模倣せしにあらずして自ら發明せしなり。貞門、檀林の俳諧を改良せりと謂はんよりは寧ろ蕉風の俳諧を創開せりと謂ふの妥當なるを覺ゆるなり。而して其自流を開きたるは僅かに歿時を去る十年の前にして、時想意の神に入りたる者は三四年の前なるべし。此創業の人に向って僅々十年間に二百以上の好句を作出せよと望む。亦無理ならずや。

普通の文學者の著作が後世に傳はる者は其著作の骨髄を活動せる所あればなるべし。然るに芭蕉は其著作を信ぜらるゝよりは寧ろ其性行を欣慕せられしを以て、其著作といへば惡句駄句の差別なく盡く收拾して句集の紙數を增加する事となれり。甚しきはあらぬ者迄芭蕉の作として諸種の家集に採錄したる者多し。此瓦石混淆の集中より選びし好句の數五分の一に過ぎざるも亦無理ならぬ譯なり。

芭蕉の俳句盡く金科玉條なりと目せらるゝ中にも一際秀でたるが如く世に喧稱せらるゝものは大略左の如し。

古池や蛙とび込む水の音

道のべの木槿は馬にくはれけり

物いへば脣寒し秋の風

あかあかと日はつれなくも秋の風

辛崎の松は花よりおぼろにて

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

年々や猿に著せたる猿の面

風流のはじめや奥の田植歌

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

枯枝に烏のとまりけり秋のくれ

梅の木に猶やどり木や梅の花

此外にも多少人に稱せられたる者なきにあらねど、俗受けのする句のみを擧げたるなり。以上の句は其句の巧妙なるが爲に世に知られたるよりは多く「曰く付き」なるを以て人口に膾炙せられたるなりとおぼし。彼れ自ら見識も無き批評眼も無き俗宗匠輩は自己の標準なきを以て單に古人の所說にすがり、彼句は蕉翁自ら賞めたる句なり、此句は門弟某、宗匠某の推奬したる所なりといへば只ゝ其の句が自ら有難味を生じ來る者にて、扨こそ「曰く付き」の句流行するに至りたるなれ。「曰く付き」の曰くとは即ち

古池の句はいふまでもなく蕉風の本尊とあがめられたる者にして、芭蕉悟入の句とも稱せられたり。後世にかくいふのみならず、芭蕉自ら已に明言せるなり。

木槿の句も稍ゝ古池同樣に竝稱せられ鳥の雨戮、車の雨輪に象れり。

脣寒しの句は座右の銘と題して端書に

人の短をいふ事なかれ　己が長を說く事なかれ

と記せり。世の諷誡に關するを以て名高し。

あかあかの句は芭蕉北國にての吟なり。始め結句を「秋の山」として北枝に談ぜしに北枝「秋の風」と改めたきよしいへり。而して恰も芭蕉の意にかなへるなりと。此「曰く」最も力あり。

辛崎の句は「にて留り」に就きて諸門弟の議論ありしが爲なり。

春もやゝの句は別段曰く無きか。

年々の句芭蕉自ら仕てこなへりといふ。

如これ其後に名高くなりしか。

其後の句は芭蕉行脚の時、白河關にて咏ぜし者なり。風流行脚の序幕をつ句なれば人に知られしならん

白河の句は之より少し前に園女亭にて園女を賞めたる句にして

大井川浪に塵なし夏の月

といへる句作と同じ意味あれば大井川の句をや取り消されたり。[illegible]事あり。

其後の句は古池、大井川などと共にもてはやされて俳道の指針、闇夜の燈と稱せられたり。

はじめは

枯枝に鳥のとまりたりけり秋のくれ

とせしを後に改めしとかや。

梅の木の句は人の子息に逢ひてそをほめたるなり。

以上目に付きし句は、目につくこそあれ余の意見は以上の人と甚だ異なれり。次に之を説かん。

○各句批評

古池や蛙飛びこむ水の音

此句は芭蕉深川の草庵に住みし時の吟なりとかや、蛙合の巻首に出でたり。[illegible]中にも見つられたり。天下の人皆も俳諧の何たるを知らざる者さへ猶古池の一句を誦せぬはなく、俳句といへば立ちどころに古池を思ひ出すに至る、實に此一句程人口に膾炙せられたる詩歌は他にあらざるべし。而して其句の意味を問へば俳人も亦種々あり、口に言ひ難しと、俗人に至りては、到底解すべからずと。而して近時西洋流の學者に到りては、古池寂寞たる中に一蛙躍りて水に入るの音を聞く、句面に閑寂の字を著はさずして閑寂の意言外に溢る、[illegible]として東洋の紛擾、人間世の喧囂に[illegible]を忘るべし、是れ美術家に所謂筆を省きて感情を強くするの法に叶へりと。果して神韻あるか、我之を知らず。果して信ずべからざるか、我之を信ぜず。夫の西洋學者の言ふ所稍〻に近からんか、然れども未だ此句を解さゞるなり。

芭蕉翁は深川の草庵に在り、一方に世上流行の俳諧を思ふ、連歌は既に腐敗して貞門俳諧を興し、貞門亦俗に陥いりて檀林更に新意匠を振ふ。されど檀林も亦一時の流行にして終に萬世不易の者に非ず。是に於てか俳道亦一變して新句法を用ゐ雅語を捨へ、漸くにして貞門、檀林の口調[illegible]を脱せり。我[illegible]に之を唱道し我亦時に此法の句を作りたる[illegible]も、奇に過ぎたる者は[illegible]弊を生ずるの[illegible]く[illegible]しさに至り[illegible]るべくもあらねば、[illegible]世の謬を防ぐべくも覺えず、何か[illegible]めて我心を安うせんと思ひしに、[illegible]厚なる語を[illegible]して[illegible]くやさしき[illegible]よくぞきたり、而して[illegible]少し後に、[illegible]十七字中に[illegible]末に、[illegible]を省略せざるべからず、さて如何様にして作り得る句は如何なるべきかなどつくづく思ひらしる程に、[illegible]中漾々たる[illegible]の如き心地に芭蕉は只ゞ惘然として坐したるまゝ居るにもあらずさむるにもあらず。[illegible]として[illegible]想に[illegible]ゆる其瞬間、窓外の古池に[illegible]の音あり。自らつぶやくともなく人の[illegible]るともなく「蛙飛びこむ水の音」といふ一句は芭蕉の[illegible]に[illegible]きたり。芭蕉は[illegible]めて夢の[illegible]めたるが如く、暫く考へに傾けし首をもたげ上る時[illegible]えず微笑を漏らしぬ。

以上は我臆測する所なるを以て、實際は此の如くならざりしやも計り難けれども、芭蕉の

思想が變遷せる順序は此外に出でずと思はる。其蕉風（俗に、正風といふ）を起せしは實に此時に在りしなり。或は云ふ、此句は芭蕉が禪學の上に工夫を開き大悟徹底せし時の作なりと。其事甚だ疑ふべしと雖も、此說を爲す所以の者亦偶然に非ず。蓋し其俳諧の上に於て始めて眼を開きたるは、禪學の上に眼を開きたると共に相似たり。參禪は諸緣を放捨し萬事を休息し、善惡を思はず是非に管する莫く、心意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れとあり。蕉風の俳諧も亦此意に外ならず、妄想を絶ち名利を斥け、可否に關せず巧拙を顧みず、心を虛にし懷を平にし、佳句を得んと執著すること無くして始めて佳句を得べし。古池の一句は此の如くして得たる第一句にして、恰も參禪日あり一朝頓悟せし者と其間髮を容れざるなり。而して彼の雀はちう／＼鴉はかあかあ柳は綠花は紅といふもの禪家の眞理にして却て蕉風の骨髓なり。古池の句は實に其ありの儘を詠ぜり、否ありのまゝが句となりたるならん。

目に由りて來る者は常に複雜に、耳に由りて聞き得る者は多く簡單なり。古池の句は單に聽官より感じ來れる知覺神經の報告に過ぎずして、其間毫も自家の主觀的思想、形容的連想を雜へざるのみならず、而も此知覺の作用に一瞬時一刹那に止まりしを以て、此句は殆ど空間の延長をも時間の經續をも有せざるなり、是れ此句の最も簡單なる所以にして却て模倣し難き所以なり。或は云ふ、芭蕉已に「蛙飛び込む水の音」の句を得たれど文字を得ず、之を其角に示す。其角曰く山吹やと置くべしといふ。芭蕉許さず、終に古池やと置けりと。何ぞや。芭蕉の意は下二句に已に盡せり、而して更に山吹を以て之に加ふるは、巧を求め實を枉げ蛇足を畫き息脚を長くすると一般、終に自然に非ず。其「古池や」といへる者は特に下二句の爲に場所を指定せる者のみ。

此句の來歷は兎も角も此句の價値に就きては世人の常に明言を難んずる所なり。俳諧宗の信者は一般に神聖なりとし、其他は解すべからずとするを以て其價値に及ぶ者なし。余は斷じて曰く、此句善惡の外に獨立し是非の間を離れたるを以て善惡の標準にあてはめ難き者なり。世に此句を以て無類最上の句となす人あるも余固より之を咎めず、はた此句を以て平々淡々香も無き臭も無き尋常の一句となす人あるも亦之に怪まざるなり。此兩說反對せるが如くにして其實反對せるに非ず、善にも非ず惡にも非ざる者に對する二樣の見に出でざるなり。要するに此句は俳諧の歷史上最も必要なる者に相違なけれども、文學上にはそれ程の必要を見ざるなり。見よ、芭蕉集中此の如く善惡巧拙を離れたる句他にこれありや、余は一句もこれ無きを信ずるなり。蓋し芭蕉は禪學に深入したる此句なれども、文學より見れば常に其の趣を平淡なる者のみを許さずして多少の工夫と施設とを要するなり、されば後世此を賞するに至らず趣なきに過ぎず。

補　古池ノ句ニ善惡ノ感情ナシ（自註）

一　道のべの木槿は馬にくはれけり

一說にいふ、槿花一朝の榮といふ古語にすがりて其はかなき花の終りさへ待ちあへで馬にくはれたるはかなさを言ひ出でたるなりと。（昔は槿花を以て木槿と思へりしなり）

又一說あり、此句は出る杭は打たるゝといふ俗諺の意にて、木槿の花も路の邊に枝つき出して突けば馬にも喰はるゝ事よと人を誡めたるなりと。

又一說に、此句他の寓意あるにあらず、只ゞ其語路の善き爲に傳稱せらるゝものなりと。

ある書に、門人どもも槿の語は動く恐れあり

と一種々に評議し、裸麥などゝ改め見たれどもいづれも善からず、終にもとの木槿に治定したり」云々。

寂栞には古池と此句とを並べて「此二句は蕉門の奥儀なり、つとめて知るべし」といへり。

何丸の著せる蕉翁句解大成にいふ「馬の草を喰ふとはもとよりにして是や諷歌の一體なるべきを木槿をくふとは獨り祖翁の姿にて見聞されたる俳諧のをかしみなれば誠に間然すまじき眼前體なり」云々。

以上諸說あれどもいづれも皆此句を稱揚するに至りては毫も其異あるを見ず。余も今日より芭蕉が如何なる意にて作りしかを推測する能はざれば、只ゝ其句の表面より之を評せんに

句訓善しといふ說は薄弱なり。寂栞は明言せざれば評するに由なし。木槿の語動かずと云ふ說と句解大成の說と亦薄弱なり。木槿を裸麥に改めたりとて何の不都合かあらん。蓋し此句は何か文學外の意味ある者にて、第一說第二說の中いづれかなるべし。若し之を普通の句なりとせんには

道のへに馬の喰ひ折る木槿かな

道のへや木槿喰ひ折る小荷駄馬

等の句法を用ゐざるべからず。然るにさはなくて故らに「木槿は」といひ「喰はれ」と受動詞を用ゐたる處は、重きを木槿に置きて多少の理窟を示したる者と見るべし。されば第二說の人を諷誡せりとの意或は當らんか。而して此意を現すに路傍の木槿を以てする者は拙の又拙なる者なり。此勃窣的の句が何故に人口に膾炙せしかは殆ど解すべからずといへども、我考へにては敎訓の詩歌は文學者以外の俗人間に傳播して過分の稱讃を受くる事間々これ有る習ひなれば、此句も其種類なるべしと思はる。且つ譬喩の俳句を以て敎訓に應用したるは恐らく此句が嚆矢なるべければ一層傳誦せられし者ならん。要するに此句は文學上最下等に位する者なり。

物いへば脣寒し秋の風

此句の人に知らるゝは敎訓的のものなればなり。敎訓的のものなれば道德上の名句には相違なけれども、文學上にては左様の名句とも思はれず。併しながら俳句に敎訓の意を含めてこれ程に安らけくいひおほせたるは遉に芭蕉の腕前なり。木槿の句と同日の談に非ず。

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

句解大成に云ふ、「暮秋の風姿言外にありて祖翁生涯二三章の秀逸と袖日記にも見えたり云々」

又同書に云ふ「つふね云、古歌に

須磨は暮れ明石の方はあか〳〵と日はつれなくも秋風ぞ吹く

是等の俤にもあるべし」云々。

已に此歌あれば芭蕉は之を剽竊したるに過ぎずして、此句は一文の價値をも有せざること勿論なり。然れども假りに此歌無きものと見做し、此句は全く芭蕉の創意に出でたりとするも、猶平々凡々の一句たるに過ぎず。即ち「つれなくも」の一語は無用にして此句のたるみなり。むしろ

あか〳〵と日の入る山の秋の風

とする方或は可ならんか。兎に角に此句を稱して芭蕉集中二三章の秀逸となす事、返す〳〵も不埒なる言ひ分なりけらし。

辛崎の松は花より朧にて

にて留り珍らしければ諸書に此句を引用したり。去來抄に此句を論じて曰く「或人にて留りの難あらんやと云、其角答曰にては哉に通ふ故哉留の發句にて留の第三を嫌ふ哉といへば句切迫ればにてとは侍るとなり（略）先師重て曰其角去來が辯皆理窟なり、我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと」

芭蕉は法度の外に出でゝ自在に變化するを好みしかば、此句も「朧にて」と口に浮びしまゝ改ざりしものにして深意あるに非ず。何故に「にて」と浮びしやといふに、句解大成に「後鳥羽院の御製に

　から崎の松のみどりも朧にて花よりつゞく春のあけぼの

此歌の躰によれるにや」云々とあり。此歌の句調は芭蕉の口に馴れて、覺えず斯くは言ひ出だせしものならん。さすれば此句は此歌を翻案せしものなれども、翻案の拙なるは却て剽竊より甚しき者あり。況して古歌なしとするも此句の拙は奈何ともし難きをや。是等の句は芭蕉の爲に抹殺し去るを可とす。

　春もやゝけしきとゝのふ月と梅

聞えたる迄にて何の譯も無き事ながら、中七字はいかにも蛇足の感あり。

　三日月は梅にをかしきひつみかな　不角
　きさらぎや二十四日の月の梅　荷兮
　梅咲て十日に足らぬ月夜かな　曉臺

など何時誰にも言ひ得べきを、「けしきとゝのふ」ことは實に難きわざなり。されどかうやうの句は、當時に在りては珍らかにをかしかりぬべきを、後世陳腐となんいふ宗匠にとかう言ひ古されて、今は聞くもいまはしき程になりぬるもよしなしや。

　年々や猿に著せたる猿の面

句解大成に曰く「古注に云此句表に季とする處見えずと門人の問ひければ年々の詞年のはじめにはあらずやと云々」

一書に云「此句仕損じの句なりと、許六問師の上にも仕損じありや、翁答て云、毎句有、仕損じたらむに何くるしみかあらむ、下手は仕損じを得せずと云々。

一偉人の言ひたる理窟は平凡なるものさへ傳稱せらるゝこと例多し。此句も亦其類ならんかし。文學として何等の趣味も無きものを。

　風流のはじめや奥の田植歌

別に難すべき句にもあらねど、さりとて面白き節も見えず。風流の初とは裝露に過ぎたらんか。

　白菊の目に立てゝ見る塵もなし

句解大成に曰く、愚考西上人

　曇りなき鏡の上にゐる塵の目に立て見る世と思はじや

此歌の反轉なるべきにや」

出所あるはむしろよけれど白菊の只々白しとは言はで消極的に「塵もなし」と言ひたるは理窟に落ちていとつたなし。芭蕉は總て理窟的に作爲する癖ありて、爲に殺風景の句を見る事屢々なり。

　梅の木に猶やどり木や梅の花

白菊の句と同じく理窟に落ちて趣味少し。

　枯枝に烏のとまりけり秋のくれ

此句を以て幽玄の極意、蕉風の神髓と爲す事心得ぬ事なり。蕭秋淒涼の光景寫し得て眞ならずといふに非ず。一句の言ひ廻しあながちに惡しとにもあらねど、「枯木寒鴉」の四字は漢學者流の熟語にて耳に口に馴れたるを、其まゝ譯して枯枝に烏とまるとは芭蕉ならでも能く言ひ得べく、今更に珍しからぬ心地すなり。但し芭蕉の時に在て此熟語、此光景は詩文に畫圖に未だ普通ならざりしものとすれば、更に此句は價値を增して數等の上級に上らん。

以上は廣く世に聞えたる句の中にて卑見を附したるなり。さまでに名高からぬ句を取て之を評せんには、芭蕉家集は殆ど駄句の掃溜にやと思はるゝ程ならんかし。たとへば

　二日にもぬかりはせじな花の春
　無慮に二荷ふ春の庭竈
　人も見ぬ春や鏡の裏の梅
　一とせに一度つまるゝ薺かな

景清も花見の座には七兵衛
暫くは瀧にこもるや夏の始
おのが火を木々の螢や花の宿
世の人の見つけぬ花や軒の栗
五月雨にかくれぬものや瀬田の橋
五月雨の降り殘してや光堂
目にかゝる時やことさら五月富士
文月や六日も常の夜には似ず
朝顔に我はめし食ふ男かな

の如き類ひ枚擧に遑あらず。拙とやいはん、無風流とやいはん。芭蕉にして此等の句を作りしかと思ふだに受け取り難き程なり。

○佳句

さらば芭蕉は俳諧歴史上の豪傑にして俳諧文學上には何等の價値も無き人なるかといふに決して然らず。余は千歳の名譽を荷はしむべき一點の實に芭蕉集中に存するを認む。而して其句は僅々數首に過ぎざるなり。知らず何等の種類ぞ。

美術文學中最高尚なる種類に屬して、しかも日本文學中最之を缺く者は雄渾豪壯といふ一要素なりとす。和歌にては萬葉以前多少の雄壯なる者なきにあらねど、古今集以後實朝一人を除きては一首も之を見る事を得ず。[illegible]出で、[illegible]芭蕉集に[illegible]と雖も、近世に降るに從つて纖巧[illegible]なるかたにのみ流れ、豪宕雄壯なる者に至りては夢だに之を思はざるが如し。和漢[illegible]既に然り。更に無學なる俗者流の爲す所思ふべきのみ。而して松尾芭蕉は獨り此間に在て豪壯の[illegible]の[illegible]ひ、天地の大觀を寫し山水の勝景を敍し、以て一世を驚かしたり。

芭蕉以前の十七字詩(連歌、貞門、檀林)は俳諧に屬し卑俗に墮ち洒落に失して文學と稱すべき價値なく、芭蕉以前の漢詩は文句の間和習の厭ふべきあるのみならず、其觀念も亦實に幼稚にして見るに堪へず。芭蕉以前の和歌は萬葉を尊び古格を重んじて陳腐と陋俗との極に達し、而して貞德の古調は未だ萌芽をも見はすに及ばざりしなり。然らば即ち芭蕉の勃興して貞享、元祿の間に一旗幟を樹てたるは、獨り俳諧の面目を一新したるに止まらずして實に萬葉以後日本文學の面目を一新したるなり。況んや[illegible]放大の處に至りては芭蕉以前絶えて之れ無きのみならず、芭蕉以後にも亦絶えて之れ無きをや。

([illegible]諸書ニキズ、故ニ卷尾ニ稍ミ力ニ之ヲ記ス。(自註))

○雄壯なる句

[illegible]雄壯なる句を擧ぐれば
夏草やつはものどもの夢の跡

これは奧州高館にて[illegible]の作なり。[illegible]に用ひたる一句十七字の中に千古の興亡を[illegible]人間の榮枯を[illegible]に堪へざる者あり、其大其[illegible]を以て[illegible]と等しかん。其[illegible]と見るも[illegible]此句の大なる所にして人工をはなれ自然に近き所以なるのみ。

五月雨を集めて早し最上川

句[illegible]大成に[illegible]思ふ余[illegible]法師
最上川はやくぞまさる雨雲ののぼれば下る五月雨の頃
の意を取り給ふなりといふ。此歌より[illegible]して集めて早しと言ひこなしたる、巧を弄して却て雅致に落ちず、只々雨後の大河滔々として岩をも碎き山をも動かんずる勢を成すを見るのみ。兼好の作亦此一句に及ばず[illegible]俗の作家者流、[illegible]にて[illegible]るを得さんや。

あら海や佐渡に横たふ天の川

[illegible]出雲崎より佐渡を見渡したる景色なり。此句を見て一通り[illegible]大水[illegible]なく、唯々一孤島の其間を點綴せる光景眼前に彷

彿たるを見る。這般の大觀銀河を以にこれに配するに非るよりは焉んぞ能く實際を寫し得んや。天門中斷楚江開の詩は此句の纒にして、黄河直下三千尺の詩は此句の縡なり。思ふてこゝに到れば誰か芭蕉の大手腕に驚かざるものぞ。

ある人曰く、「横たふ」とは語格叶はず、如何。對へて曰く、語格の違ひたるは好むべからず。然れども韻文は散文に比して稍々寛假すべし（第一）語格相違の爲に意義の不明瞭を來さゞる者は寛假すべし（第二）芭蕉の句中此の外にも

一聲の江に横たふや時鳥

とよぶ者あるを見れば、當時或は此語格を許せしかも知れず、よしさなくとも後世これに模倣する者さへあるに、芭蕉は我より古人を成せしものとしてもよかるべし（第三）更に角此一語を以てあたら此全句を棄つるは余の忍びざる所なり。一字を以て千載の價を棄つと何ぞ擇ばん。

五月雨の雲吹き落せ大井川

連日の雨にさすがの大井川も水嵩増して兩岸を浸したるさま、たう〳〵と物凄き瀬の音耳にひゞくやうなり。

郭公大竹原を漏る月夜

千竿の脩竹微風遠く度りて一痕の新月靜かに青光を碎く。獨り瀟逈の凉影を踏んで吟歩する時、杜宇一聲二聲何處の山上よりか啼き過ぎて雲外聲を留めず。初夏清凉の意肌を襲ひ骨に徹するを覺ゆ。山を著けず、水を著けず、一箇の竹叢を假り來つて以て天地の寥廓なるを見る、妙手々々。

かけ橋や命をからむ蔦かつら

岐蘇峰中の棧橋絶壁に沿ひ深谿に臨んで委蛇屈曲す。足を欹てゝ棧橋を度り、立て後を回れば危巖突兀として橋柱落ちんと欲す。但見る幾條の薜蘿彼と此とを彌縫して紅葉血を灑ぐが如し。此句雄壯の裏に悽楚を含み、悽楚の裏に幽艶を含む、亦是れ一種の傑筆。俗人時に中七字の句法を指して全體の姿致を見ず、即ち全體を棄して傑點を見ざるの類なり。而して其實、中七字の巧を弄したるは此句の缺點なり。

一笑を弔ふ

塚も動け我泣聲は秋の風

如何に古人草といふ古句より奪胎したるにや。「我泣聲は秋の風」と一氣呵成に言ひ下したる處、其の思ふ所に隱ず。人丸の詠に「妹が門見む靡け此山」と詠みしと同一筆法なり。

秋風や藪も畑も不破の關

新古今集攝政太政大臣の歌に

人すまぬ不破の關屋の板庇あれにしのちはただ秋の風

これらより思ひよりたりとは見ゆるものから、藪も畠も不破の關と名所の古を忍び今を敍べたる筆力、十七字の小天地綽々として餘裕あるを見る。又館の句は豪壯を以て勝り此句は悲慘を以て勝る。好一對。

猪も共に吹かるゝ野分かな

暴風山を撼かして野猪吹きまくらるゝさま、悲壯荒寒筆紙に絶えたり。

吹き飛ばす石は淺間の野分かな

淺間山の野分吹き荒れて燒石空に翻へるすさまじさ、意匠最妙なりと雖も「石は淺間の」とつゞく處多少の窮策を取る、白璧の微瑕なり。

滑稽と諧謔とを以て生命としたる俳諧の世界に生れて、因襲の俳句に拘束せられず、能く文學上の活眼を開き一家の新機軸を出だし、此等老健雄渾の俳句をものして卓然頭角を現はせし芭蕉は實に文學上の俊人と言ふべし。然れども是れ徒に一の俳諧者たるに止まるな

り。後世に至て猶之を模倣する者出でざるに至りては實に不思議なる事實にして、芭蕉をして二百年間只ゞ一人の名を負はしむる所以ならずや。蕉門の弟子にしてしかも其力量に於ては決して芭蕉に劣らざるのみならず、往々其師を壓倒する者亦多し、幾百の人材中學識に於て才藻に於て唯一と稱せられたる晋子其角は如何、古事古語を驅て之を掌上に丸め、難題を難とせず俗境を俗ならしめず、縱横に奔放し自在に驅馳して傍ら人無きが如き其人も、造化の祕蔵せる此等の大觀に對しては終に片言隻語のこゝに及ぶ者なし。十大弟子中誠實第一なる向井去來は神韻に於て聲調に於て遙かに芭蕉に勝りたり。而して彼は如何。さすがに去來は一二の豪壯なる句無きに非るも、亦是れ芭蕉に匹敵すべき者に非るなり。其他嵐雪は如何。丈草は如何。許六、支考は如何。凡兆、尚白は如何。正秀、乙州、李由は如何。此等の人或は一二句の豪壯なる者あらん、終に數句を有せざるべきなり。況んや其他の小弟子をや。

元祿以後俳家の輩出して俳運の隆盛を極めたるは明和、天明の間なりとす。白雄は寂栞を著して盛んに蕉風を唱道せりと雖も、其神韻を以て幽玄の二字に歸し、終に豪壯雄健なる者を說かず。其作る所を見るも句々纖巧を弄し婉曲を主とするのみにして、芭蕉の堂に上る事を得ず。蓼太は敏才と猾智とを以て一時天下の耳目を聳動せりと雖も、固より其眼孔は針尖の如く小なりき。蕪村、曉臺、闌更の三豪傑は古來の蕉風外に出入して各一派を成せり。此三人の獨得なる處は芭蕉及び其門弟等が當時夢想にも知り得ざりし所にして、俳諧史上特筆大書すべき價値を有す。されば其俳句中には雄健の筆を以て豪壯の景を寫したる者に匱しからず。然れども彼等の壯は芭蕉の壯に及ばず、彼等の大は芭蕉の大に及ばざりき。文政以後蒼虬、梅室、鳳朗の如き井蛙は自ら好んで三尺の井中に棲息したる者、固より與に大海を談ずべからず。是に於てか芭蕉は揚々として俳諧壇上を濶歩せり。嗚呼芭蕉以前已に芭蕉無く芭蕉以後復芭蕉無きなり。

○各種の佳句

以上擧ぐる所の數句をして芭蕉一生の全集たらしむるも、猶俳諧文學上第一流の作家として永く芳名を後世に傳ふるに足る。然れども芭蕉の技倆は決してこゝに止まらずして種々の變態を爲し變調を學び、ありとあらゆる變化は盡く之を自家々集中に收めんとせり。今こゝに各種の句を示さんに

極めて自然なる者は古池の句の外に

明月や池をめぐりて夜もすがら

の如きあり。幽玄なる者には

衰へや齒にくひあてし海苔の砂
ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音
うき我を淋しがらせよ閑古鳥
清瀧や波にちりこむ青松葉
菊の香や奈良には古き佛だち
冬籠り又よりそはん此柱
人々をしぐれよ宿は寒くとも

纖巧なる者には

落ちざまに水こぼしけり花椿
青柳の泥にしたるゝ汐干かな
草の葉を落るより飛ぶ螢かな
粽結ふ片手にはさむ額髪
日の道や葵傾く五月雨
眉掃を俤にして紅の花
白露をこぼさぬ萩のうねりかな
行秋や手をひろげたる栗のいが

華麗なる者には

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ
雪間より薄紫の芽獨活かな

木の下に汁も鱠も櫻かな
四方より花吹き入れて鳰の海
行末は誰が肌ふれん紅の花
ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花
金屏の松の古びや冬籠り

◎奇抜なる者には

鶯や餅に糞する縁の先
陽炎の我肩にたつ紙衣かな
飲みあけて花いけにせん二升樽
鮎の子の白魚送る別れかな
雲雀より上に休らふ峠かな
啄木も庵は破らず夏木立
蛸壺やはかなき夢を夏の月
生ながら一つに氷る海鼠かな

◎滑稽なる者には

猫の妻へついの崩れより通ひけり
麦飯にやつるゝ戀か猫の妻

是橘剃髪に

初午に狐のそりし頭かな

葛城

猶見たし花に明け行く神の顔
菖蒲生り軒の鰯の髑髏

秋之坊を幻住庵にとめて

我宿は蚊の小さきを馳走かな

畫賛うしろ向の像

團扇もてあふがん人の背つき
あら何ともなやきのふは過ぎて河豚汁

當麻寺に詣る途にて

夜著一つ祈り出したして旅寝かな
月花の愚に鍼立てん寒の入り

◎◎藹々なる者には

山里は萬歳遲し梅の花
御子良子の一もとゆかし梅の花
陽炎や柴胡の原の薄曇り
枯芝やまだ陽炎の一二寸
春の夜は櫻にあけてしまひけり
古寺の桃に米ふむ男かな
原中や物にもつかず鳴く雲雀
山吹や宇治の焙爐の匂ふ時
木隠れて茶摘も聞くや郭公
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲
秋近き心のよるや四疊半
病雁の夜寒に落ちて旅寝かな
三井寺の門敲かばや今日の月
旅人と我名よばれん初時雨
しぐるゝや田のあら株の黒む程
雪散るや穂屋の薄の刈り殘し

等の句あり。芭蕉は一生の半を旅中に送りたれば、其俳句亦羇旅の實況を寫して一讀三嘆せしむる者あり。

一つ脱いでうしろに負ひぬ衣がへ
蚤虱馬の尿する枕もと
旅に病んで夢は枯野をかけ廻る
寒けれど二人旅寝ぞたのもしき
すくみ行く馬上に氷る影法師
住みつかぬ旅の心や置巨燵
いかめしき音や霰の檜木笠
年暮れぬ笠著て草鞋はきながら
旅寝して見しや浮世の煤掃ひ

◎◎稍々狂せる者には

不性さやかき起されし春の雨
君火を焼けよき物見せん雪丸け
市人にいでこれ賣らん雪の笠
おもしろし雪にやならん冬の雨

◎格調の變化せる者も多き中に字餘りの句には

曙や白魚白き事一寸
つゝじ活けて其陰に干鱈さく女
行く春に和歌の浦にて追付たり

歸庵

夏衣いまだ虱を取り盡さず
水鶏鳴くと人のいへばや佐谷泊り
芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

西行谷

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其外格調の新奇なる者には

茸摘んで貧なる女樸による

乙州餞別

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

奈良七重七堂伽藍八重櫻

花の雲鐘は上野か淺草か

關守の宿を水鶏にとふものを

晝顏に晝寐せうもの床の山

隱れ家や月と菊とに田三反

送られつ送りつはては木曾の秋

蛤のふた見に分れ行く秋ぞ

さればこそあれたきまゝの霜の宿

かくれけり師走の海のかいつぶり

格調に於て芭蕉の變化せる此の如し。されば後世に至りて蕪村、曉臺、一茶等が少しく新調を詠み出でし外は毫も芭蕉の範圍外に出づる者あらざりき。

豪壯に非ず、華麗に非ず、奇拔なるにも非ず、滑稽なるにも非ず。はた格調の新奇なるにも非ず、只ゝ一瑣事一微物を取り其實景實情をありの儘に言ひ放して猶幾多の趣味を含む者には

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

さゝれ蟹足這ひ上る清水かな

海士が家は小海老にまじるいとゞ哉

ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿

松茸や知らぬ木の葉のへばり付く

橙や伊勢の白子の店ざらし

行く秋の猶頼もしや青蜜柑

鞍壺に小坊主のるや大根引

鹽鯛の齒莖も寒し魚の店

の如きあり。猶此等の外にも

傘に押し分け見たる柳かな

時鳥鳴くや五尺のあやめ草

不卜一周忌

時鳥鳴く音や古き硯箱

宿りせん藜の杖になる日迄

稻妻や闇の方行く五位の聲

蔦植て竹四五本の嵐かな

菊の香や奈良は幾代の男振り

義朝の心に似たり秋の風

馬士は知らじ時雨の大井河

御命講や油のやうな酒五升

振賣の雁あはれなり夷子講

ともかくもならでや雪の枯尾花

から〳〵と折ふし凄し竹の霜

追悼

埋火も消ゆや涙の烹ゆる音

鴫さわぐ鳥羽の田面や寒の雨

石山の石にたばしる霰かな

古里や臍の緒に泣く年の暮

等あり。之を要するに豪壯勁拔なる者は芭蕉の獲得にして他人の蹤躡を容れず。綺麗なる者、新奇なる者、輕快なる者、幽玄なる者、古雅なる者、平調なる者等に至りては門葉又は後生にして芭蕉に凌駕する者無きに非ずと雖も、皆其長ずる所の一方に偏するのみ。例へば其角に奇警なる句有て穩雅なる者無く、去來に穩雅なる句有て奇警なる者無きが如し。而して百種の變化、巧拙なる者をも合して盡く之を該ぬる者は實に芭蕉其人あるのみ。蓋し常人の觀念に於て兩々全く相反し到底並立すべからざるが如き者も、偉人の頭腦中に在ては能く之を包容混和して相戻る無きを得るが爲なり。

○或問

ある人曰く、芭蕉集中好句其五分の一を占めなば以て多しとするに足らずやと。

答へて曰く、本論中好句と言ひしは惡句に對する名稱なるを以て、僅かに可なるより以上

を言ふのみ。あながち金科玉條の謂に非ず。故に此の標準を以て論ずれば元祿の俳家は各三分の一乃至三分の一の好句を有すべし、五分の一といふが如きは決して他に例あらざるなり。

ある人曰く、芭蕉雜談を著はし蕉翁の俳句を評し而して其名譽を抹殺し去り其名譽を毀損し了す。是れ俳諧の罪人にして蕉翁に不忠なる者ならずやと。

答へて曰く、芭蕉を神とし其句を神詠とし、俳諧と芭蕉とは二物一體なる者と說ける彼芭蕉宗信者より言へば、此論或は神威を冒瀆したる者あらん。然れども芭蕉を文學者とし俳句を文學とし、之を評するに文學的眼孔を以てせば則ち此の如きのみ。加之彼等信者は好句と惡句とを混同して之を平等ならしめんと欲する者なれば、其佳句に對する尊敬は却て此論よりも少なき道理なり。これをしも不忠と言はずんば何をか不忠と言はん。況んや佳句を埋沒して惡句を稱揚する者、滔々たる天下皆然り。芭蕉豈彼等の尊敬を得て喜ぶものならんや。

ある人曰く、俳諧の正味は俳諧連歌に在り、發句は則ち其一小部分のみ。故に芭蕉を論ずるは發句に於てせずして連俳に於てせざるべからず。芭蕉も亦自ら發句を以て誇らず、連俳を以て誇りしに非ずやと。

答へて曰く、發句は文學なり、連俳は文學に非ず、故に論ぜざるのみ。連俳固より文學の分子を有せざるに非ずといへども、文學以外の分子をも併有するなり。而して其の文學の分子のみを論ぜんには發句を以て足れりとなす。

ある人又曰く、文學以外の分子とは何ぞ。

答へて曰く、連俳に貴ぶ所は變化なり。變化は則ち文學以外の分子なり。蓋し此變化なる者は終始一貫せる秩序と統一との間に變化する者に非ずして、全く前後相串聯せざる急遽倏忽の變化なればなり。例へば歌仙行は三十六首の俳句を並べたると異ならずして、唯々兩首の間に同一の上半句若しくは下半句を有するのみ。

ある人又曰く、意義一貫せざる三十六首の俳句を並べたるにもせよ、其變化は則ち造化の變化と同じく、茫然漠然たる間に多少の趣味を有するに非ずやと。

答へて曰く、然り。然れども此の如き變化は普通の和歌、又は俳句を三十六首列記せるも同じ。殊に連俳の上に限れるに非ず。即ち上半又は下半を共有するは連俳の特質にして感情よりも知識に屬する者多し。芭蕉は發句よりも連俳に長じたりと言へること、是れ蓋し芭蕉に知識多き事を證するのみ。其門人中發句に芭蕉に勝れて連俳は遠く之に及ばざる者多きも、則ち其文學的感情に於て芭蕉より發達したるも、知識的變化に於て芭蕉に劣りたるが爲なり。

○鷄聲馬蹄

羇旅を以て家とし鷄聲馬蹄の間に一生を消盡せし文學者三人あり。曰く西行(和歌)曰く宗祇(連歌)曰く芭蕉(俳諧)是なり。西行は文治六年(今明治二十七年を距る事七百四年前)二月十六日旅中に歿す、享年七十三。宗祇は文龜二年(今を距る事三百九十二年前)七月三十日旅中箱根の麓に到りて歿す、享年八十二。芭蕉は元祿七年(今を距る事二百年前)十月十二日旅中大坂花屋に於て歿す、享年五十一。西行以後大約三百年にして宗祇出で、宗祇以後大約二百年にして芭蕉出づ。前身か後身か、自ら默契ある者の如し。太奇。

西行は歌人として天下を漂泊したる故に其の間に名所舊蹟を詠ずる者多く、芭蕉は俳人として東西に流浪したる故に其句に勝景旅情を敍するもの多し。獨り宗祇は連歌を以て主としたる故に旅中の發句少し。蓋し連歌は前後相連續

する事をのみ力め、目前の風光を取て材料と爲し難きが爲なり。我宗祇の爲に惜む。

西行はもと北面の武士にして一轉して三衣を著たる漂泊的歌人となり、芭蕉はもと藩士にして一轉して剃髪したる漂泊的俳人となる。其境涯に於て氣質に於て兩者甚だ相似たり。是に於てか芭蕉は西行を崇拜せり。（或は云ふ、其の筆蹟も亦西行を學びたりと）芭蕉集中西行又は西行の歌に據りたる作に

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

西行の庵もあらん花の庭

露とく〳〵試みに浮世すゝがばや

蠣よりは海苔をば老の賣りもせで

西行の草鞋もかゝれ松の露

西行上人像讃

すてはてゝ身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ「花のふる日はうかれこそすれ」

の如き作あり。山家集一部は常に半肩の行李を離れざりし芭蕉の珍寶にして、芭蕉を悼む句にも

あはれさやしぐるゝ頃の山家集　素堂

といへるあり。又其[illegible]中にも「心は子美が老を思ひ寂は西上人の道心を慕ひ」云々といひたるを見れば、以て西行に對する芭蕉の欽信を知るに足るべし。

芭蕉又西行につゞきては宗祇をも慕へり。

世にふるはさらに時雨の宿りかな　宗祇

とは宗祇が信州旅中の述懐なり。芭蕉亦手づから雨の侘び笠を張りて

世にふるは更に宗祇のしぐれかな

と吟じたるが如き、自ら顧みて宗祇の身の上に似たるを思へば、萬感攅まり來りて此句を成したる者なるべし。芭蕉死後曾て漂泊の境涯に安んじたる俳人を見ず。其意思に於て蕪村稍ゝ之に近しと雖も、芭蕉の如く山河を跋渉し天然を樂みたる者に非ざるなり。其句に曰く

笠着て草鞋はきながら

芭蕉去て其後未だ年暮れず　蕪村

○著書

芭蕉は一部の書を著せしことなし。然れども門人が芭蕉を奉じて著述せる者は枚擧に遑あらず。恰も釋迦、孔子、耶蘇等が自ら書を著はさずして弟子の經典を編輯せるに同じ。時の古今地の東西を問はず、大名を成すの人自ら其揆を一にす。

俳諧七部集といふ書あり。最も遍く坊間に行はる。板行の書亦五六種より猶多かるべし。此書は「冬の日」「春の日」「ひさご」「あら野」「猿蓑」「炭俵」「續猿蓑」の七部を合卷となしたる者にて、安永の頃より始まりし事にや。其後寛政、享和の頃續七部集及び七部集拾遺出で、文政十一年に新七部集を出だせり。其外天明以後には其角七部集、蕪村七部集、樗良七部集、曉臺七部集、枇杷園七部集、道彦七部集、乙二七部集、今七部集等續々出でたれば、此等に對して俳諧七部集を芭蕉七部集とも言ふべきか。

專ら芭蕉に關する事のみを記せし書籍亦甚だ多し。泊船集（元祿十一年）芭蕉句選（元文三年）は俳句を蒐めたる者にして、芭蕉翁文集、芭蕉翁俳諧集（安永五年）は文章と連俳とを蒐めたる者なり。翁反古（天明三年大蟻編）は芭蕉自筆の短册によりて世に傳はらざる俳句を記載し、芭蕉翁草紙（文化八年奇淵校）は主として芭蕉の連俳を蒐めたり。俳諧一葉集九册（文政十年）は芭蕉の全集にて、俳句連俳文章は勿論、其消息より一言一行總て芭蕉に關したる記錄を網羅し盡せり。全集とは言へ斯く完全に一個人を盡したる者は他邦にも餘り其の例を聞かざる所なり。然れども考證の疎漏は單に多きを貪りて芭蕉の作ならぬ俳句をも交へ記したるは遺憾と

いふべし。芭蕉翁句解大成(文政九年)は俳句の註釋にして奥の細道菅菰抄(安永七年)は奥の細道を註釋したるなり。然れども註釋は往々牽強附會に失して精確ならず。

芭蕉の傳記に關する書目は時に之を見ると雖も、其書は甚だ稀なり。芭蕉翁繪詞傳(寛政五年蝶夢編)、芭蕉翁正傳(寛政十年竹二編)など稍〻普通なれど最疎雜なり。近者宗周なる人の編める芭蕉傳といふ寫本を見たり。編年體にして詳細を極む。板本の有無之を知らず。此外芭蕉翁行狀記(路通著)等諸書あれども、未だ之を見るを得ず。又芭蕉の筆蹟を刊行したる書あり。

こゝに一奇書あり、題して芭蕉翁反古文と云ふ。(大蟻の編める笈反古とは別物なり)或は芭蕉談花屋實記とも花屋日記とも云ふ。芭蕉終焉の日記なり。(其角の書ける終焉記は此日記などに據りて作る)こは元祿七年九月二十一日に起りて芭蕉歿後の葬式遺物の顛末にまで及べり。惟然、次郎兵衛、支考、去來等病牀に侍し代る〲に記したる者にして、芭蕉の容體言行より門人の吟詠知人の書簡等迄一々に書きつけて漏らす事なし。一讀すれば即ち偉人が最期の有様目に觀るが如し。實に世界の一大奇書なり。而して此書始めて梓に上りたるは文化七年ならんか。芭蕉死後百數十年間人の筐底にありて能く保存せられたるは我等の幸福にして芭蕉の名譽なり。

○元祿時代

近年に至りて元祿文學なる新熟語出來たり。ある人の如くこれを以て單に西鶴の小說を指せる者と爲さずして元祿一般の文學を含む者と爲さば最便利なる言葉なり。德川の天下漸く基礎を固めて四海泰平を謳ひ初めたる元祿時代は、實に德川文學の將に蕾を發かんとするの時期なりき。此の時期に際して文學上の三偉人は天命を受けて突然下界に降り來れり。三偉人は殆ど一樣の年齡を以て世に出で、しかも各相反せる方角に向つて其驥足を伸ばしぬ。三偉人とは誰ぞ。曰く井原西鶴、曰く近松巢林、曰く松尾芭蕉是なり。ある年表は此三偉人を以て同じく共に寛永十九年に生れたりと記せしは謬れり。然れども西鶴と巢林は寛永十九年に生れ、芭蕉は正保元年に生れ、其間僅かに二年を隔てたるも亦奇ならずや。(一說には巢林子を以て承應二年の出生とす)

西鶴は一種の小說を創開せり。御伽草子の簡樸と小理想とに傚はず、赤本、平本の荒唐と乳臭とを學ばず。目視る所耳聞く所のまゝを寫し出だすに奇警なる文辭と簡便なる語法とを以てせり。其記する所卑猥なるは甚だ惜むべしと雖も、しかも源氏物語以來始めて人情を模寫せんと力めたるは西鶴ならずや、八文字舍の爲に法門を開きたるも亦西鶴ならずや。小說界の西鶴に受くる所亦多しと謂ふべし。

巢林子も亦一種の演劇を創開せり。能樂の古雅以て普通一般の好尙に適する能はず、金平本の脚色稚氣多くして長く世人の耳目を樂ましむるに足らず。乃ち彼と此とを折衷し敏贍流暢の文字を以て世間の狀態人生の熱情を寫し之を傀儡に託したり。錯雜なる宇宙の粉本を作りて舞臺の上に活動せしめたる者、實に是れ近松の功なり。

芭蕉も亦一種の韻文と散文とを創開して後生を導けり。其散文は韻文の如く盛ならざりきと雖も、風俗文選、鶉衣の如きは俳文と稱して文、軍書文、淨瑠璃文の外に一派を成したり。平賀源内及び天明以後の狂文も亦間接に俳文の影響を受けたるに非るを得んや。

此の如くして三偉人は殆ど同時に出でゝ三方に馳驅せり。其著作に就て精細に吟味したらば固

より多少の疵瑕あるべけれども、三人は盡く是れ其各派の創業者たる事を忘るべからざるなり。殊に最も注意すべき一點あり、そは三人共に從來の荒唐無稽なる空想と質素冗長なる古文との範圍外に出で、實際の人情を寫し平民的の俗語を用ゐたることなり。三人各〻轍を異にして色を同じうす、末は則ち分れて本は則ち一なり。是に於てか元祿文學作り。

○俳文

三偉人の內近松は世に出づる時稍〻後れたり。西鶴と芭蕉とは殆ど同時に名を揭げ同時に發し、從つて其文章も亦甚だ相似たる所あり。其似たる所は共に古文法を破りて簡短を尙び、成るべく無用の語を省きたるに在り。其異なる所は西鶴は多く俗語を用ゐ芭蕉は多く漢語を用ゐたるに在るなり。

芭蕉の文は長明の文、謠曲の文より出で、更に一機軸を出だしたる者なり。昔より漢文は漢文、邦文は邦文として全く特別の物に屬し、同一の人にして全く二樣の文を作る事あり。長明稍〻此兩者を調和し、謠曲又更に其步を進めたりと雖も、要するに漢語を用ふる事の多きのみにして、其句法の上には古代の邦文と非常の差あるに非ず。然るに芭蕉の文は單に漢語を使用したるのみならず、一句一章の結構に於て亦多く漢文の臭味を雜へたり。（更に適當なる語を用ゐば元祿の臭味を帶びたり）而して其記する所は天然の風光に非ざれば則ち自己の理想、殊に老佛の出世間的觀念を多しとす。其例を擧ぐれば野ざらし紀行（貞享元年）の冒頭に

千里に旅立て路粮をつゝまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて貞享甲子八月江上の破屋を立いづる程風の聲そゞろ寒げなり。

と記せるが如き、一讀して古代の邦文と全く其句法を異にするを見るべし。鹿島紀行（貞享二年）の初めに

（略）伴ふ人二人一人は浪客の士ひとりは水雲の僧。僧は鴉の如くなる墨の衣に三衣の袋を衿に打かけ、出山の尊像を厨子にあがめ入てうしろに背負、拄杖曳ならして無門の關もさはるものなく、あめつちに獨步して出ぬ。今ひとりは僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふりの鳥なき嶋にもわたりぬべく、門より船に乘て行德といふ處にいたる。

若し普通の文章ならば少くとも

伴ふ人二人あり（一人は浪客の士にて）一人は水雲の僧なり

と書かざるべからず、然れども元祿以後は一種に文章の簡單を尙びしかば、芭蕉も亦自ら此句法を用ゐし者なるべし。其他眞面目の語を以て時に諧謔の意を寓する處、是れ所謂俳文の胚胎を見る。笈の小文の首に

百骸九竅の中に物あり、かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れやすからん事をいふにやあらん。かれ狂句を好む事久し、終に生涯の謀となす。或時は倦て放擲せん事を思ひ、ある時は進むで人にかたん事をほこり、是非胸中に戰ふて是が爲に身安からず、しばらく身を立ん事を願へどもこれが爲にさへられ、暫學んで愚を曉ん事を思へども是が爲に破られ、終に無能無藝にして只此一筋に繫がる。

其說く所全く老莊の主旨を出でず、其述ぶる所盡く漢文の結構によらざるはなし。哲學的思想を敍述する、此の如く多く、漢文的句調を混和する、此の如く甚しき者は他に其儔を見ざる所、蓋し芭蕉の創體に屬するなり。それより一年を越えで奧の細道といふ紀行あり。其

中に

月日は百代の過客にして行かふ年もまた旅人也。船の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず。海濱にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひてやゝ年も暮春立る霞の空に白川の關こえんとそゞろ神の物につきて心を狂はせ道祖神の招きにあひて取物手につかず、股引の破をつゞり笠の緒付かへて三里の灸するより松嶋の月先心にかゝりて住る方は人に讓り杉風が別墅に移る（春立より以下數句西鶴の文と似たり）

抑、ことふりにたれど松嶋は扶桑第一の好風にして凡洞庭西湖を恥ぢず、東南より海を入て江の中三里浙江の潮をたゝふ。嶋々の數をつくして欹つものは天を指、臥するものは波に匍匐、あるは二重にかさなり三重にたゝみて左に別れ右に連る、負るあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し。

と書けるが如き前の文章に比して稍々圭角の少きを見る。これ當に文章に於て然るのみならず、俳諧も亦同時に一樣に變遷をなしたるなり。

所謂俳文なる者は此の如く莊重老健のものならずして常に滑稽諧謔を以て勝れるを以て、直ちに此文を以て俳文の開祖と爲すべからずと雖も、和歌の外に俳句を起したるが如く、和文の外に一種の文を起したるは則ち疑ふべからず。門人諸子のものせし俳文はこれ等より脱化せしものに非るを得んや。然り而して彼等が諧謔をのみ主として芭蕉の如く眞面目の文章を爲し得ざりし者は、恰も芭蕉に壯大雄渾の俳句ありて彼等に之れ無きと一般、自ら其才識の高卑を知るに足る。

○補遺

芭蕉に就きて記すべき事多し。然れども余は主として芭蕉に對する評論の宗匠輩に異なる所を指摘せし者にして、爰に芭蕉を詳論するの餘暇を得ざれば一先づ筆を擱かんとす。乃ち言ひ殘せし事項の二三を列擧して其題目を示し、以て本談の結尾とせん。

一、松尾桃青名は宗房、正保元年伊賀國上野に生る。松尾與左衞門の二男なり。十七歲藤堂蟬吟公に仕ふ。寛文三年（二十歲）蟬吟公早世、乃ち家を出でゝ京師に出で北村季吟に學ぶ。二十九歲江戸に來り杉風に寄居す。四十一歲秋東都を發し東海道を經て故鄕伊賀に歸り、翌年二月伊賀を發し木曾路より甲州を經て再び江戸に來る。此歲、月を鹿嶋に見る。四十四歲東海道より伊賀に歸る。翌年伊勢參宮、尋で芳野南都を見て須磨明石に出づ。木曾を經、姨捨の月を賞し三たび東都に來る。四十六歲東都を發し日光、白河、仙臺より松嶋に遊び象潟を通り、道を北越に取りて越前、美濃、伊勢、大和を過ぎ伊賀に歸り、直ちに近江に來る。翌年石山の西幻住庵に入る。四十八歲伊賀に歸り京師に寓し冬の初め四たび東都に來る。五十一歲夏深川の草庵を捨てゝ上洛し京師近江の間を徘徊す。七月伊賀に歸り九月大阪に至る。同月病に罹り十月十二日歿す。遺骸を江州義仲寺義仲の墓側に葬る。

一、芭蕉が杖を曳きしは東國に多くして西國に少し。經過せし國々は山城、大和、攝津、伊賀、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、下總、常陸、近江、美濃、信濃、上野、下野、奧州、出羽、越前、加賀、越中、越後、播磨、紀伊、總て二十八ケ國なり。

一、芭蕉は所謂正風を起したり。然れども

正風の興る間より芭蕉一人の力に在らずして時運の之をして然らしめし者なり。貞室の俳句時として、正風に近き者あり。宗因、其角、才丸、常矩等の俳句亦夙く正風の萌芽を含めり。冬の日、春の日等を編集せし時は正風發起の際なりと雖も、此時正風を作す者芭蕉一人に非ず、門弟子亦皆之を作す。門弟子亦皆之を作すのみならず、他流の人亦之を作す。而して正風發起後と雖も、芭蕉の句往々皆栗集的の格調を存す。此等の事實を綜合し精細に之を見なば、正風の勃興は時運の變遷自ら然らしめし者にして、芭蕉の明敏唯々能く之を發揮せしに過ぎざるを知らん。

一、芭蕉の俳句は單に自己の境涯を吟咏せし者なり。即ち主觀的に自己が感動せし情緒に非ずんば客觀的に自己が見聞せし風光人事に限りたるなり。是れ固より蔑すべきの事と雖も、全く己が理想より得來る目擊以外の風光、經驗以外の人事を拋擲して詩料と爲さざりしは、稍々芭蕉が局量の小なるを見る。（上世の詩人皆然り）然れども芭蕉は好んで山河を跋渉したるを以て實驗上亦夥多の好題目を得たり。後世の俳家常に几邊に安坐して且つ實驗以外の事を吟ぜず、而して自ら芭蕉の遺旨を奉ずと稱す。井蛙の觀る所三尺の天に過ぎず。好詩料空想に得來りて或は斬新、或は流麗、或は雄健の俳句を作し世人を罵倒したる者、二百年獨り蕪村あるのみ。

一、嗚雪曰く芭蕉は大食の人なり、故に胃病に罹りて歿せし者ならん。其證は芭蕉の手簡に

〇一もち米　一升　一黑豆　一升
一あられ見合
右今夕の夜食に成申候間御いらせ
傳吉にもたせ御こし可被下候云々

〇只今田舍より僧達二三人參候俄に
出し可申候貯無之候さふく候
故にうめんいたし可申候そうめんは
澤山有之候酒二升御こし頼入候
云々

とあり。且つ歿時の病は菌を喰ふてより起りしといへば必ず胃弱の人なりしに相違なしと。單に此手紙を以て大食の證となすは理由薄弱なりと雖も、手紙は兎に角に余は嗚雪翁の說當を得たる者ならんと思ふなり。多情の人にして肉慾の情を他に伸ばす能はざる者、往々にして非常の食慾を有す。芭蕉或は其一人に非るを得んや。

一、芭蕉妻を娶らず。其他婦女子に關せる事一切世に傳はらず。芭蕉戒行を怠らざりしか。史傳之を逸したるか、姑く記して疑を存す。

一、後世の俳家芭蕉の手蹟を學ぶ者多し。亦以て其尊崇の至れるを見る。

一、芭蕉の論述する所、支考等諸門人の僞作、又は誤傳に出づる者多し。偶々芭蕉の所說として信憑すべき者も亦幼稚にして論理に外れたる者少なからねど、さりとてあながち今日より責むべきに非ず。

一、芭蕉の弟子を敎ふる孔子の弟子を敎ふるが如し。各人に向つて絕對的の論理を述ぶるに非ず、所謂人を見て法を說く者なり。

一、芭蕉嘗て戯れに許六が鮓の圖を畫く。彼亦頓智を有す。稍々藝能の人に近し。

一、天保年間諸國の芭蕉塚を記したる書あり。嘗て其足跡の到りし所は言ふを須たず、四國九州の邊土亦到る所に之れ無きは無し。余嘗て信州を過ぎ路傍の芭蕉塚を檢するに、多くは是れ天保以後の設立する所に係る。今日六十餘州に存在する芭蕉塚の數に至りては殆ど枚擧に勝へざるべし。

一、寬文中には宗房と言ひ延寶、天和には桃

青、芭蕉と云ふ。いつの頃か自ら

發句あり芭蕉桃青宿の春

と云ふ句を作れり。芭蕉とは深川の草庵に芭蕉ありしを以て、門人などの芭蕉の翁と稱へしより雅號となりしとぞ。普通に「はせを」と假名に書く。音を濁さぬ安らかなるを自慢せりといふ。桃青といふ名は何より得來りしか詳ならず。余臆測するに芭蕉初め李白の磊落なる所を欣慕し、李白といふ字の對句を取りて桃青と名づけしには非ずや。後年には李白と言はずして杜甫を學びしやうに見ゆれども、其年貧賤にして檀林に風靡せし際には勢ひ杜甫よりは李白を尊びしなるべしと思はる。

一、平安朝以後日本の文學（殊に韻文）は緣語、滑稽、理窟の範圍内に陷りて七八百年の間、毫も此範圍外に超脱し完成の文學的觀念を發揮したる者なかりき。足利の末造德川の初世に至りては文學の衰頽其極に達し、和歌も連歌も俳諧も和文も漢詩漢文も愈ゝ出で、愈ゝ拙なる者とはなりけらし。斯く永久の間暗雲に鎖されたる文運は、元祿以後に至りて漸く其光輝を發たんとはせり。俳諧に松尾芭蕉出で、漢詩漢文に荻生徂徠出で、和歌に賀茂眞淵出で、和文に平宣長出で、以て各派の文學を中興し、始めて我國に眞成の文學的觀念あるを見るに至りしなり。（連歌は此時より跡を絶ちぬ）而して此數人の内最初に出で、改善に著手し、第一に其功業を成したるは實に芭蕉となす。即ち日本文學の上に高尚超脱の文學的觀念を始めて注入したる者は芭蕉なり。芭蕉豈一個の俳家を以て目すべきものならんや。

西鶴、檀林の作固より中興と稱するに足る。然れども今日より見れば幼稚にして不完全なるを免れず。芭蕉、徂徠、眞淵等の著作の今より見て猶尊敬を表するに足る者とは同日に論ずべからず。

（明治二十六年十一月――二十七年一月）

古池の句の辯

客あり。我草廬を敲きて俳諧を談ず。問ふて曰く

　古池や蛙飛びこむ水の音　芭蕉

の一句は古今の傑作として人口に膾炙する所、馬丁走卒も猶且つ之を知る。しかも其意義を問へば一人の之を説明する者あるなし。今之が説明を聽くを得んか。

答へて曰く、古池の句の意義は一句の表面に現れたるだけの意義にして、復他に意義なる者無し。然るに俗宗匠輩が此句に深遠なる意義あるが如く言ひ做し、且つ其深遠なる意義は到底普通俗人の解する能はざるが如く言ひ做して、曾て之が説明を與へざる所以の者は、一は自家の本領を奥ゆかしがらせて俗人を瞞着せんとするに外ならざれども、一は彼が此句の歴史的關係を知らざるに因らずんばあらず。古池の句が人口に膾炙するに至りしは、芭蕉自ら此句を以て自家の新調に屬する劈頭第一の作となし、從ふて此句を以て俳句變遷の第一期を劃する境界線となしたるがために、後人相和して亦之を口にしたりと見ゆ。然るに物換り時移るに從ひ、此記念的俳句は其記念の意味を忘られて、却て芭蕉集中第一の佳句と誤解せらるゝに至り、終に臆説百出、奇々怪々の附會を爲して俗人を惑はすの結果を生じたり。されば此句の眞價を知らんと欲せば、此句以前の俳諧史を知るに如かず、意義に於ては古池に蛙の飛び込む音を聞きたりといふ外、一毫も加ふべきものあらず、若し一毫だも之に加へなば、そは古池の句の眞相に非るなり。明々白地、隱さず掩はず、一點の工夫を用ゐず、一字の曲折を成さゞる處、此句の特色なり。豈他あらんや。

客僅に領く、未だ全く解せざるものゝ如し。更に語を轉じて曰く、我今子のために古池の句の歴史的關係を説くべし。子且つ子の胸中より一切記憶に存する所の俳句を取り去り、虚心虚懷以て我言を聽け。古池の句も之を忘るべし。其外の俳句、芭蕉たると蕪村たるとに論無く、古句たると新句たるとを問はず、他人の作と自己の作と併せて盡く之を忘れざるべからず。世人皆俳句の發達せる今日の心を以て古池の句を觀る。故に惑を生ず。子今俳句未だ發達せざる古に身を置きて我言を聽かば、必ずや疑を解くことを得ん。客曰く、唯々。

曰く、俳諧の歴史を説くは今我志す所に非ず。然れども歴史を説かざれば古池の句を解すること能はず。故に古池の句を解するに必要なりと思惟する程度に於て古俳諧史を説かんとす。古俳諧史の無味乾燥にして、蠟を嚼むが如きは徒らに子の欠伸を催すに過ぎざるべきも、其欠伸を催さしむる處、便ち是古池の句を牽き出だす所以ならずんばあらず、子姑く之を默聽せよ。

俳諧史を説かんとするには先づ連歌を説かざるべからず。連歌は十七字句と十四字句とを相互に聯して百韻を以て終るを普通とする者、其間には月花の定座、打越、去嫌等の規定ありて、代々の連歌師皆力をこゝに用ゐたりといへども、我説かんとする所に要なければ言はず、こゝには只ゞ連歌の發句を論ずるを以て足れりとす。連歌の發句と俳諧の發句とは略ゞ同一の者にして、特に異ならざるべからざる理由ありて異なるに非ず。只ゞ其發達上連歌は和歌より出でたるを以て、和歌慣用の言語材料を用ゐ

て自ら束縛し、區域を廣くし材料を富ましむることを爲さゞるのみ。されば連歌の發句は到底陳腐と平凡とを免れず。古人を模倣し古句を蹈襲し、同一の意匠と同一の語句とを竝列して敢て剽竊の恥を知らず、甚しきは自家集中にさへ同一の意匠言語を繰り返して以て自ら得たりとなすが如き、後世よりして之を見れば、彼等は何處に幾何の詩美を感得したるかを疑はざるを得ざるなり。連歌の盛んに行はれたる足利時代は和歌の最も衰微せる時代なり。和歌の最も衰微せる所以は、主として舊を貴び樣に依り、師傳家流に拘泥して毫も新意を出だす能はざりしに在り。新古今以後門派の爭ひ烈しく、形式を論じて實際に疎く、花は斯く詠むもの、月は斯く詠むもの、千鳥の名所は何處々々に限り、某の語は某の處にのみ用ゐらるゝなど規則づくめになりては和歌は今更に發達すべき寸隙だにあらずなりぬ。斯く腐敗し盡せる和歌より出でたる連歌の發句は、和歌と共に腐敗し居るのみならず、詩形の小なるだけ其範圍狹くなりて、腐敗は却て一層度を高めたる者あり。或る一方より見れば、萬詩形を有する發句は和歌の冗漫なるに比して稍ゝ斬新なる者を生じたる事無きにあらねど、そは極めて少數にして、大體は陳腐と平凡との堆積せる言葉の塊のみ。左に例を擧げて一斑を示すべし。

香聞かぬ雨知る花の雫かな　心敬
雨晴れて花に色そふ夕かな　宗祇
雨風も花の春をばさそひけり　宗砌
さればこそ嵐よ雨よ花の時　心敬
俟雨の庭にきのふの花もかな　宗祇
わくやいかに野は淺緑花の雨　宗養
花を見ば人無き雨の夕かな　宗祇
心あれや花の旅寐の春の雨　宗牧
雨に猶忘れぬ花の宿りかな　宗祇
春雨をしをれし花のなごりかな　同
雨にけさ明日咲かん花も盛りかな　宗長
春のみかいくかもあらじ花の雨　宗養
降りくらせあけなは花の春の雨　昌叱
時雨にも見ざりし花の千入かな　心敬
雨に花見ればこもらぬ枝もなし　宗長
染めいでよ花の木の芽の春の雨　宗祇
花や知る雨にはぬれぬ木陰かな　同
雨ならぬ夕も花の木陰かな　紹巴
花の色よるやそぼふる春の雨　同
紅やふり出づる花の春の雨　昌叱
花咲けといはぬばかりぞ雨の聲　失名
花咲けといさむるや聞く雨の聲　紹巴
雨に又花をやどさん陰もなし　失名
山や花色なる雨の薄曇　昌休
雨に咲く花はあわ雪の夕かな　紹巴

以上は花と雨とを配合したる句を列ねたるなり。大體に於て如何に同樣の趣向にして、如何につまらぬ趣向なるかは、一讀して直に感ぜざる者無かるべし。中にも「花咲けと」の二句は全く同趣向なり。心敬の「さればこそ」の句の如きは鳥無き里の蝙蝠とやいはん。花の一題にては未だ盡さゞるを恐る。更に月の句を擧げて如何に其變化せしかを見んとす。

雨ひとり月を思はぬ今宵かな　失名
星の名も一夜は立てし秋の月　専順
雲霧も月にかくるゝ今宵かな　兼載
しぐれては雲も名に立つ月夜かな　宗砌
月今宵塵ばかりだに雲も無し　宗長
月に雲塵も付じの今宵かな　宗碩
誰も見よ名高き月は雲も無し　宗養
月を雲も妬みはてぬ今宵かな　宗因
今宵晴れて雲も名に立て秋の月　宗祇
名やあふせ月も一夜の天の川　肖柏
月やあらぬ今宵を埋む千重の雲　心敬

日待の夜名月に
日影さへ待出る月の光かな　紹巴

草も木も月待つ露の夕かな　宗祇
月に住む人は今宵の曇も無し　心敬
花は櫻月は今宵の空かな　宗養
春は花秋は月にも今宵かな　昌休
月今宵古き都の塵も無し　紹巴
月夜暮しよゝの最中の秋の空　專順
光をも天に滿たる月夜かな　生阿
秋こそと見し夜や今宵空の月　宗祇
月の名を雲居に名のる光かな　同
四方に名は溢れ出づる月の雲居かな　宗碩
今宵やは同し雲居の秋の月　昌休
空やあらぬ今宵光の秋の月　昌叱
名にしあふや今宵の月の都鳥　盛家
いをねぬや水に最中の月の秋　失名
月殘る一夜の松の木の間かな　失名
名をとはゞ桂や二木秋の月　失名
名ぞ高き月や桂を折つらん　宗祇
一枝の桂やこよひ秋の月　肖柏
月は猶木の間にしるき今宵かな　宗牧
名や匂ひ月の花咲く草木かな　肖柏
水草のも中の秋は月清し　玄幸
月今宵玉も拾はん渚かな　宗碩
月や知る今宵は晴れし小倉山　宗祇
月の名にかへて小倉の山もなし　宗牧
月に名をかへぬもすむや小倉山　昌叱

連歌の發句の千篇一律なるはこれにても大方は推し量らるべし。最後に擧けたる三句が同じく「小倉山」と「小晴き」との緣語を趣向とするに至りては、其變化無きに驚かざるを得ず。然れども上に揭げたる句には、月と他の有形物とを配合したる者多きを以て、猶多少の變化あるが如く感ぜらるべし。若し夫れ

名や光今宵ばかりの月もなし　宗砌
月やあらぬ似たる時なき今宵かな　同
一年の月をくもらす今宵かな　(?)
一年の影や今宵による月　宗祇
秋の月今宵は千代の光かな　同
曇るなよたか名は立たじ秋の月　同
名ぞ今宵おぼろげならぬ秋の月　同
秋の月名もことわりの光かな　同
心あらで月見は秋の今宵かな　同
月は秋あらん限りの今宵かな　宗長
月今宵はるかに照す光かな　同
行末も今宵や幾世秋の月　同
月に光名をさきだつる今宵かな　同
月今宵名は殘りけり世々の秋　同
月今宵さても有ける光かな　宗碩
大方の月の名たての今宵かな　宗碩
名を得つとならばかくこそ秋の月　同
今宵さへいくよわか世の秋の月　同
月も今日ねさる夜を待つ光かな　宗牧
心より月よりしるき今宵かな　同
過ぎぬるも及ばぬ月の光かな　同
名高さや猶末々の夜半の月　紹巴
入あとも名やは隱るゝ秋の月　同
惜むなよ今宵明けても秋の月　同
月今宵思ふことなき光かな　同
月今宵思へば變る光かな　同

といふに至りては、殆ど同じ句やら別の句やら一讀して識別しかぬる程に相似相類する者、連歌の發句が全體に變化せざるはいふ迄も無く、各人各自の句が如何に趣向に乏しきかを見るに足らん。

以上の例句は固より百か一にも足らざる者、しかも之を見る者其單調に飽かざるはあらざるべし。若し尨然たる連歌大發句帳を示して、此書冊が盡く此種の發句にて埋められたるを說かば、誰か其馬鹿げたるに驚かざる者ぞ。

連歌師が其力を盡したるは主として霞、雪、月、花、紅葉、時鳥、等のありふれたる題目にして、其他の題目は其句極めて少きを見る。今

古池の句を論ぜんとする際、試に蛙の句を求むるに、連歌二百年の間、僅に

鶯のもろ聲に鳴く蛙かな　紹巴

の一句あるのみ。況んや此句の如きも蛙の趣を言ひたるにはあらで、古今集の序をもじりたる陳腐なる趣向に外ならざるをや。彼等の趣味が如何に幼稚なりしかは以て見るべし。

連歌の單調此の如し。如何に無味なる足利時代の文學者といへども、半人一人の之に不滿なる者無からんや。連歌の最盛時代とも稱すべき文明、明應は僅に昨日と過ぎて、餘勢猶未だ衰へざる永正、天文の間に在りて、早く既に一轉機の動かんとするを見る。

山崎の宗鑑と山田の守武とは共に永正、天文の間に出で、連歌に不滿なる者、而して共に俳諧の上に新方面を開きたり。宗鑑が連歌に對する意見は明に之を聞くを得ざれども、彼が連歌流行の中に在りて獨り俳諧に遊びたるは、俳諧の斬新は如何か連歌の陳腐に勝りたるを感じたるなるべく、將た彼の歌として傳ふる所の

かしがまし此里過ぎよほとゝぎす都のうつけさぞや待つらん

の一首にも、彼が尋常の[illegible]の文人ならざりしことは明かに現れたり。花は兎も角も樂しき様を詠むもの、時鳥は只ゝ無聊に聞きたき様を詠むものと規則的に定めて、少しも自然の趣味を解する能はざりし當時の歌人連歌師を嘲りて「都のうつけ」と呼びし彼は、必ずや連歌の活氣無く變化無きをもどかしく思ひしなるべし。守武は獨吟千句を試みんとして、其連歌に傚ふべきか、俳諧を爲すべきかに惑ひしは、連歌の千句は古例あれど之を作るに憚る所無けれども興味少し、俳諧の千句は極めて興味ある如く思はるれども、古例無きがために自ら創むるに憚る所ありしに因るなり。彼が此二者の選擇を自ら決斷する能はずして神の御籤に依りたるに、御籤は俳諧を爲すべしとありしとかや、便ち俳諧の獨吟千句は成れり。是より先連歌師は時に俳諧の發句を成すことあり。例へば

再び舊古川を渡るとて

まりこ川又渡る瀬やかへり足　道興

の如し此等は固より一句の言ひ捨てにして、それさへ多くは見あたらず。宗鑑に至りては發句に俳諧を用ゐたるのみならず、連句の上にも之を用ゐ、遂に集めて犬筑波の一書を成せり。然れども五十韻百韻とまとまりし者は之を作らざりしが如く、其之有るは守武に始まる。連句はこゝに用無し。今少しく彼等の俳諧の發句なる者を研究せん。

宗鑑、守武の興したる俳諧は連歌以外に一の詩形を造りしにあらず。只ゝ同じ詩形に、今迄用ゐざりし俗語漢語を以て用ゐ、今迄歌はざりし滑稽の趣味を述べしのみ。俳諧は陳腐なる連歌に斬新の元素を加へ、窮屈なる連歌に寛き區域を借し、まじめなる連歌におどけたる趣向を與へたり。然れども俳諧は、模倣的連歌に創造を教ふる能はず、無趣味なる連歌に趣味を加ふる能はざりき。彼等は僅に滑稽の一方面を得たるに過ぎず、否、滑稽中の下等なる一部分を得たるに過ぎず、句の品格に於て趣味に於て、寧ろ連歌よりも遙に低き一體を興したるに過ぎず。文學者と謂はんには彼は餘り無識なり。俳諧師と謂はんには彼は餘り野卑なり。然れども彼が沈滯腐敗せる連歌を蕩搖して他日一新の機を與へたる功は、俳諧史上特に書すべき價値あり、隨つて彼等の俚野なる句も亦一讀せざるべからず。

彼等の俳諧、即ち滑稽を別つては大約三種となる。一は擬人法又は譬喩を用ふる者、一は古語の上の遊戲に屬する者、一は古事、古書、古諺等の應用又は翻案を爲す者、是なり。其擬人法

を用ゐたる者は

手をついて歌申しあぐる蛙かな　宗鑑

いやめなる子供産み置けほとゝぎす　同

花の香を偸みて走る嵐かな　同

青柳の眉かくきしの額かな　守武

[illegible]の指子なら啼けほとゝぎす　同

名のりてやそも／＼とよひ秋の月　同

撫子や夏野のはらの落し種　同

の類なり。其外に譬喩を用ゐたる者は

月に柄をさしたらば善き團扇かな　宗鑑

聲なくば鷺こそ雪の一つくね　同

落花枝にかへると見れば胡蝶かな　守武

年やたゝえ鏡のけさの雪　同

の類なり。言語の遊戯に屬する者は

なべて世に叩くは明日のくひ菜かな　宗鑑

眞丸に出づれど永き春日かな　同

春寒き年

にが／＼しいつまで嵐ふきのたう　同

花よりも鼻にありける匂ひかな　守武

聲はあれど見えぬや森のはゝきゞす　同

の類なり。成語を用ゐたる者は

花をしぞ思ふをり／＼潮つゝじ　宗鑑

花より團子と誰かいはつゝじ　同

の類なり。（各種を同時に用ゐたるものあり）

其淺薄にして野卑なる、固より論評を費さずして知るべし。

彼等二人が始めたる俳諧は、彼等の自ら作りて自ら娯みしに過ぎずして、一人の弟子も無く、且つ彼等の死後惜しは彼の意志を繼ぐべき人も世に出でざりき。足利氏の衰ふると共に衰へ、豐臣氏に至りて紹巴あり、僅に其命脈を保ちしも、太閤薨じ、紹巴歿し、豐臣氏等いで滅び、徳川氏政を江戸に執るに及びて、連歌は僅に其形態を保つに止まり、而して松永貞徳の俳諧一派は漸く世に擴まらんとす。貞徳の俳諧は寛永年間に起れり。恰も是れ徳川氏の基礎漸く固く、戰亂僅に熄んで四民多くは平和を望むの時なりければ、無邪氣なる滑稽、野卑なる俳諧も當時の嗜好に合していたく世の持て囃す所となり、終には門末數十人、京に江戸に其勢力を逞うするに至りぬ。加ふるに印刷業の發達は一般の學問に著き進歩を與へたるが如く、俳諧も亦此によりて都鄙遠境に波及し、忽ち未曾有の盛運に達するを得たり。之を宗鑑、守武等の自ら吟じ自ら聽き獨り作り獨り嗤ぶに比すれば、形勢の變遷、時運の泰否、啻に霄壤のみならず。然れども貞門の俳諧を以て宗鑑守武の俳諧に比するに、一歩半歩の進歩なきは勿論、寧ろ一層野卑にして一層無味なる俳諧を爲したるのみ。貞徳は鑑武を沮滯せんとして其精粹を害めたる者と謂ふべし。

彼が一派の俳諧は、犬子集、鷹筑波、毛吹草を初めとして幾多の書冊に刊行せられ、出なす惡句は幾萬といふ限りも無ければ、之を思ふだに猶嘔吐を催すの感なきにあらねど、斯る惡句が世に流行したる事を示さゞれば、最後に至りて芭蕉の妙趣を感ぜしむること能はざるを以て、うるさくも其惡句を列擧して其一斑を示さん。子亦欠伸をこらへて之を聽かざるべからず。

滑稽の種類は前に說きたると略ゝ同じ。其擬人法に屬する者、

花に來る蝶や還城樂の舞　失名

とき遲き花にや雨の片びいき　永治

落ち行くは臆病風や花軍　失名

大はらは子をもち月か姫小松　失名

月の額踏むは慮外ぞ雲の足　親重

顏見よと月も笠ぬぐ光かな　失名

先ふるは雪女もや北の方　重頼

雪も今いそがしぶりをしはすかな　林市

其譬喩に屬する者、

諸山の松やさながら花のしん　弘嘉
遍照の花のぼうしか花頂山　日能
河の瀬の紋所かや花筏　正信
雲は蛇呑みこむ月のかへるかな　貞徳
月弓にかゝりし雲やにぎり皮　失名
月しろの總がまへとよ天の川　望一
花といふ雪のつぼみか玉霰　正信
天と地の中入綿やふじの雪　正依

其言語の遊戯に屬する者、

今日は花さくじつ迄はつぼみかな　成安
人さそふ山路の花や大天狗　親重
花さんじさんぜぬ人の心かな　弘永
誰も秋の影をや胸にもち月夜　徳元
曇る夜や影言いはん月の友　失名
影たのめ慈悲は上より下り月　重頼
黄にあらであは雪白き朝かな　徳元

其古事成語の應用に屬する者、

春咲くに百草梅ぞ雪の中　日能
花のためや惡事千里の春の風　慶友
花の宴に見そむる朧月夜かな　永次
功成るや名とげて散りし花心　盛長
夜目遠目笠の内よし月の顔　失名
三五夜の中國一ぞ安藝の月　弘永
武藏野は今日はな明けそ秋の月　重供
富士のみか一夜にでくる雪の山　貞徳
雪花も木の根にかへる雫かな　弘永

中には各種を雜へ用ゐたるも少からず。猶此外に多少の例外無きにあらねど、其數極めて少きを以て特にこゝに擧ぐるの要なし。

此等の句が連歌よりも更に趣味少く、鑑武よりも更に活氣に乏しきは一讀して誰も知るべし。予、此等の句を見て余が特に惡句を示したる者と誤解する莫れ。余は初より句を選ばず、唯ゝ手當り次第に拔き出だしたるなり。若し百句を示せとならば百句を示すべし。千句を示せとならば千句を示すべし。然れどもそは徒に煩を増すのみ。千句萬句盡く皆此種の句たることを明言しなば則ち足らん。

足利の眠れる世すら連歌の單調に倦きて俳諧を興しゝ者あり。徳川の天下全く定まり、文運日を逐ふて隆盛に趣く時に方りて、木くづ竹ぎれにも劣りてつまらぬ貞門の俳諧がいつ迄か能く人心を喜ばしむべき。寛文に至りて變ぜんとして未だ變ぜざる俳諧は、延寶に至りて稍ゝ變動し初めたり。西山宗因は起つて談林派を唱へたり。是に於て貞徳時代の幼稚なる俳諧は全く其跡を絶ちぬ。談林の俳諧も滑稽の區域を出づる能はざるは貞派と相似たり。之を貞派に比すれば幾分の趣味を増したる點に於て、一句の結構に活氣を生じたる點に於て、一段の進歩を爲したるを見る。

擬人法は貞派俳諧の慣用手段なれども、談林には殆ど其跡を絶ちたり。たまたま

葉茶壺やありとも知らで行く嵐　宗因
天も醉りげにや伊丹の大灯籠　同
白露や無分別なる置き處　同
蛇柳や心のみだれ飛鳥風　露章

の如きありといへども、其間既に多少の趣味を含むこと、彼貞派の乾燥に比すべくもあらず。

譬喩の句は

松に蔦蛸木にのぼるけしきあり　宗因
もちに消ゆる氷砂糖か不盡の雪　同
錦手や伊萬里の山の薄紅葉　同
鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな　同
蓬萊や麓の新田干鰯　榮政
呉竹や大根おろし軒の雪　心色
是は又水の月とる麩賣なり　未計

の如き、中には奇拔なる者、輕妙なる者もあり。

花といへば必ず之を雲に喩へ、雪といへば必ず之を綿に喩ふる連歌派、貞徳派よりは、たし

かに一歩だけ深く文學に入りたり。
談語の雅俗を主とする者は

江戸を以て鑑とすなり花に蘇る　宗因
いつり行へはやいかのぼり紙鳶　同
かけまくもかしこやこゝの都かな　同
宇治橋の神や茶の花さくや姫　同
花や上野とつはた本の人家並　似春

の如し。古事古語の使用は談林一派の生命ともいふべく、彼等が作句の一半は此部に屬すべき者なり。其例、

からし酢にふるは涙か櫻鯛　宗因
世の中よてふ〳〵とまれかくもあれ　同
古歌に曰く千とせぞ見ゆる鏡餅　同
有明の油ぞ残るほとゝぎす　同
涼風や猶ながらへば小石川　同
前にありと見れば蛍のしりへかな　同
天にあらばひよこの羽根も星の妻　同
鴫啼いて湯屋のあるじのわたり候か　同
今こんといひしは鱧の料理かな　同
冬構へ一にたはらや炭俵　同
思ひつゝぬればや蟲も草の色　同
やどれとは御身いかなる人と時雨　同
富士の山耳に消えけりほとゝぎす　如萍
もみぢ葉や花なき里の二三月　安昌
郭公来べき宵なり頭痛持　在色
革足袋の昔は紅葉踏み分けたり　一鐵

貞徳の好んで俚諺、俗語を用ゐしに變りて、此は好んで和歌、謠曲を用ゐたり。是れ談林が品格に於て既に貞徳に勝りたる所以なり。

守武死後凡八十年にして貞徳起り、貞徳起りし後凡三十年にして談林起る　時勢の進歩僅に速度を加へて、今の十年は昔の百年に當り、三日見ざれば刮目して待つ此時、趣味に於て品格に於て句法に於て各〻一歩を進めたる談林が、更に一歩を進むるがために難き三十年の日子を俟つべきや。談林勃興後十年ならずして、談林は既に衰へ、人々新を競ひ奇を爭ふの極、日進月歩、文運復興の機運は漸く熟せり。延寶の末年、其角。杉風。が作りし句。合の如き、猶滑稽を離るゝ能はざりしも、言語の遊戲に屬する滑稽は早く跡を斂めて、趣味の上の滑稽を主とするを見る。此滑稽中の高等なる者なり。

青柳に蝙蝠つたふ夕榮や　其角
紺逆火に夕顔白しだい〳〵は　同
夢となりし骸骨躍る荻の聲　同
木がらしとなりぬ蝸牛のうつせ貝　同
しほらしき物ついしちよろぎ掻餅茶　杉風
夕かな雨杜鵑坐禪豆　同
だい〳〵を蜜柑と金柑の笑ひて曰　同
曙や霜にかぶなのあはれなる　同

右の中には滑稽を離れたる者すらあれども、必ずしも全體に然るに非ず。こは比較的佳句を抜きたるなり。越えて三年、天和三年に虚栗集（其角編）世に出でたる時は、一般の俳句全く滑稽を離れて、僅に雅致を認めたるが如し。俳諧漸く正路に向へり。然れども意匠の猶未複雑にして統一せざる、語句の佶屈聱牙にして調和を缺きたる、未だ達せざる者第一歩なり。

俳句

藝者敲レ門背後嘯く花明かなり　幻呼
傘にねくらかさうやぬれ燕　其角
山彦と啼ク子規夢ヲ切ル斧　素堂
青ざしや草餅の穗に出でつらん　芭蕉
月に親しく天帝の帯になりたしな　才丸
栗柿は塵壺を秋の行くへかな　仙風
きり〴〵す鼠の巣にて鳴き終りぬ　嵐雪
松原は飛脚ちひさし雪の昏　一品

此等の中には略〻完全せる句もあり。又語句佶屈に失すれども其趣向は殆ど俳諧の骨髓を

得たる者もあり。此時の俳句界は曙光纔に上りて萬物始めて辨ずべきが如し。然れども此等の俳人が俳句を作るは作らんとして作るにあらず、否、作らんとして出來ざりたる者には非るか。若し吾人が今日より評する所の俳句なる者が當時にも俳句と目せられしならば、此種の句こそ多かるべきに、實際は之に反して佶屈聱牙なる句の多きを見れば、其佶屈聱牙なる者が一般に賞讃せられしや疑を容れず。正風の萌芽發せんとして未だ發せざるなり。たまたまに俳句あるは半ば偶然のみ。

貞享元年冬の日の撰集あり。芭蕉の野ざらし紀行あり。野ざらし紀行の句を見るは此際最も必要なり。

野ざらしを心に風のしむ身かな　芭蕉
秋十とせ却て江戸をさす故郷　同
霧しぐれ不盡を見ぬ日ぞ面白き　同
猿を聞く人捨子に秋の風いかに　同
道の邊の木槿は馬に喰はれけり　同
馬に寢て殘夢月遠し茶の烟　同
三十日月無し千とせの杉を抱く嵐　同
芋洗ふ女西行ならば歌よまん　同
蔦植ゑて竹四五本の嵐かな　同
秋風や藪も畠も不破の關　同

此等の句は虚栗に比して更に一歩を進めたり。虚栗の如く粗笨ならず、虚栗の如く佶屈ならず。然れども句々猶工夫の痕跡ありて、未だ自然簡淡の域に達せず。芭蕉は此時未だ自然といふ事に氣づかざりき。自然といふ事に氣づかざりしために一句の細工を免れざりしなり。蔦の句の如き稍々自然なれども、「植ゑて」の語は猶自然ならざる處あり。不破の句は句として完全なれども、此種懷古の作は和歌にも猶あり得べき趣向なり。芭蕉は未だ俳諧特有の妙處の存し得べきことを知らざりき。手の届かざること僅に一寸。

翌々貞享三年、芭蕉は未曾有の一句を得たり。

古池や蛙飛び込む水の音

是なり。此際芭蕉は自ら俳諧の上に大悟せりと感じたるが如し。今迄はいかめしき事をいひ、珍しき事を工夫して後に始めて俳句を得べしと思ひたる者も、今は日常平凡の事が直に句となることを發明せり。憂き旅寢のはては野ざらしとなるべきかといふ極端の感懷、秋風に捨子が泣きて居るといふ極端の悲哀、斯の如き極端の事を、いはでは面白からじと思ひしは昨日の誤謬にて、今日は、蛙が池に飛びこみしといふありふれたる事の一句にまとまりしに自ら驚きたるなり。馬と殘夢と月と茶の烟とを無理に一句に疊み込み、三十日の闇と千年の杉とそれを吹く夜嵐とを合せて十七字の鑄型にこぼるゝ程入れて、斯くして始めて面白しと思ひし者が、翻然として悟りし今より見れば、此等の工夫したる句は却て「蛙飛びこむ水の音」の簡單にして趣味あるに如かざるを知りたるなり。芭蕉は終に自然の妙を悟りて工夫の卑しきを斥けたるなり。彼が無分別といふ者、亦自然に外ならず。試みに前に擧げたる連歌俳諧發句の多くの句を繰り返し、此古池の句の如く自然なる者他にあるかを見よ。一句の之に似よりたる者だにあらざるべし。似よりたる者だに無しとすれば、兎に角に芭蕉は、今迄人の知らざりし處をつかまへたるは明なり。自然といふ一事がある程度迄文學美術の基礎を爲すは論を俟たず。自然の基礎に置かれざる文學が文學とするに足らざるは、連歌と貞徳宗因の俳諧との無味なるにても知るべし。蓋し自然といふ事が唯一の方針にあらずとするも、芭蕉が古池の句に悟りて感じたる處は此自然に在り。彼が其後の方針は皆自然に向ひて進みたり。

且つ此句の題目が多く世人に忘られたる「蛙」

にある事に注意せざるべからず。蛙は和歌に詠めども極めて少し。（萬葉にいふ「かはづ」は今の鰍に非るべし）連歌にも少きこと前に言へり。貞德の句には多少之れあるも、蛙の趣を詠みたるにあらねば蛙の句とするに足らず。其蛙の句は古池を初といふて可なるべし。今連歌以來古池の句に至る迄の蛙の句を列ねて、蛙に對する觀念の變遷を知らしむるに便せん。

手をついて歌申しあぐる蛙かな　宗鑑
鶯のもろ聲に鳴く蛙かな　紹巴
詠みかねて鳴くや蛙の歌袋　失名
立わかり鳴くや蛙の歌あはせ　失名
苗しろをせむる蛙のいくさかな　未滿
和歌に師匠なき鶯と蛙かな　貞德
鶯と蛙の聲や歌あはせ　親重
やり水のつゝいたかいたく鳴く蛙　宗俊
おほて出て田瀬あらすないもがへる　盛親
河中で蛙が讀むやせんどうか　重頼
降れば鳴く蛙の歌や雨中吟　寛記
くちなはも歌にやはらげ鳴く蛙　弘永
水口に蛇や見ゆらん鳴く蛙　光重
ふけ田なる蛙の歌やぬめりぶし　定時
いくさ場のときの聲かや鳴く蛙　信相
長く鳴く蛙の歌や文字條り　永治
歌いくさ文武二道の蛙かな　正章
呪ひの歌か蛇見て鳴くかへる　氏利
許せ蛇けふの日ばかり鳴くかへる　可慶
呑まれなよ軒の蛇腹に蛙また　一和
歌よむは短册の井のかへるかな　一雪
釋教の歌か寺井に鳴くかへる　閑節
音に鳴くは伊勢が淵の蛙かな　利直
玉の井の蛙の聲もうたひかな　秀辰
歌よまであるはたくら田の蛙かな　將和
つらね歌の點料かおのが蛙錢　資仲
蛙いくさ井手行の備へかな　破扇
地獄谷の蛙は修羅のいくさかな　之也
生死は閻浮にかへるいいさかな　直安
打ち出でよ蛙いくさに鐵炮津　一雪
河原いくさ四條によるは蛙かな　同
赤蛙いくさにたのめ平家蟹　同
立田川紅葉や朽ちて赤蛙　才麿
歌さへぞしなびたりける干蛙　爾木
から歌を加賀にやはらぐ蛙かな　楓興
古池や蛙飛びこむ水の音　芭蕉

右は略ゝ時代の順序に從ふて記したる者、且つ大かたの句は悉く擧げたるなり。惡句又惡句、駄洒落又駄洒落、讀んで古池の句に至りて全く其種類を異にするの感あらん。芭蕉の自ら感じたるもこゝなり。少くとも芭蕉は蛙なる一動物の上に活眼を開きたり。然れども芭蕉が、蛙を以て特に雅致ありて愛すべき者と思ひたり、と誤解する莫れ。蛙は鶯の如く愛すべき者に非ず、時鳥の如くなつかしき者に非ず、雁の如くあはれなる者に非ず、秋鳴く蟲の如く淋しき者に非ず、故に古來の歌人も蛙を詠むこと鶯、時鳥、雁、蟲の如く多からざりしなり。ひとり芭蕉に限りて百鳥百蟲に勝りて之を愛すといはんや。却て餘り美しくも可愛くも無き其蛙すら猶多少の趣致を備へて、俳句の材料たるを得ることを感じたるなるべし。蛙既に趣致ありとせば、鶯、鵑、雁、蟲は言ふに及ばず、あらゆる事物悉く趣致を備へざらんや。芭蕉が蛙の上に活眼を開きたるは、即ち自然の上に活眼を開きたるなり。其自然の上に活眼を開きたる時の第一句が蛙の句なりしは偶然の事に屬す。俗宗匠輩が此句を說くに、特に蛙に重きを置くは固より取るに足らざる謬見のみ。

古池の句が俳諧の歷史上に珍しき句なることは、前に擧げたる例句によりて知るを得べし。されば芭蕉の俳諧は此一句を限界として一變せ

り。從つて當時の俳諧界も亦此一句を中軸として一轉せり。假令事實は然らずとするも、芭蕉は爾か感ぜり。故に芭蕉の將に死せんとして門人其辭世の句を問ふや、芭蕉答へて曰く、

昨日の發句は今日の辭世、けふの發句は明日の辭世、吾生涯いひ捨てし句は一句として辭世ならざるは無し。若我辭世いかにと問ふ人あらば此年頃いひ捨て置きし句いづれなりとも辭世なりと申し給はれかし。諸法從來常示寂滅相、これは釋尊の辭世にして一代の佛教此二句より外はなし。古池や蛙飛びこむ水の音、此句に我一風を興せしよりはじめて辭世なり。其後百千の句を吐くに此意ならざるはなし。こゝを以て句に辭世ならざるはなしと申し侍るなり。

といへり。「其後百千の句を吐くに此意ならざるはなし」とは、古池の句と共に感得せし自然的趣味によりて一生俳句を作りたりとの意なり。芭蕉が古池の句を蕉風の開闢と爲しゝは自ら明言する所なれども、芭蕉は此句を以て自家集中第一等の句なりとは言はず、芭蕉の爾か言はざるのみならず、門弟も亦爾か言はず、去來は最も深く芭蕉に敎へられし者なれども、古池の句に就きて何をも言はず。支考の如く芭蕉を本尊にして自説を誇張する者すら、(十論の引)傳に出だしたる外、古池の句を批評したることなし。然るにいつの頃よりか此句を無上の佳句なるが如く言ひなし、はては不可思議なる説をなす者ありて、其廣く世間に知らるゝと共に一般に誤解せらるゝに至りたり。芭蕉は自ら、古池以後いづれの句も皆我句として人に傳ふべしとさへ許されるに、後人が特に古池の一句を揚ぐるを聞かば、芭蕉は必ず不滿なるべし。余等も亦古池を以て芭蕉の佳句と思はず、否、古池以外に多くの佳句あるを信ずるなり。客、領して去る。

(明治三十一年十月——十一月)

俳人蕪村

緒言

芭蕉新に俳句界を開きしよりこゝに二百年、其間出づる所の俳人少からず。或は芭蕉を祖述し、或は檀林を主張し、或は別に門戸を開く。然れども其芭蕉を尊祟するに至りては衆口一齊に出づるが如く、檀林等流派を異にする者も猶芭蕉を排斥せず、却て芭蕉の句を取りて自家俳句集中に加ふるを見る。是に於てか芭蕉は無比無類の俳人として認められ、復一人の之に匹敵する者あるを見ざるの有様なりき。芭蕉は實に敵手なきか。曰く、否。

芭蕉が創造の功は俳諧史上特筆すべき者たること論を竢たず。此點に於て何人か能く之に凌駕せん。芭蕉の俳句は變化多き處に於て、雄渾なる處に於て、高雅なる處に於て、俳句界中第一流の人たるを得。此俳句は其創業の功より得たる名譽を加へて無上の賞讃を博したれども、余より見れば其賞讃は俳句の價値に對して過分の賞讃たるを認めざるを得ず。誦するにも堪へぬ芭蕉の俳句を註釋して勿體つける俳人あれば、縁もゆかりも無き句を刻して芭蕉塚と稱へ、之を尊ぶ俗人もありて、芭蕉といふ名は徹頭徹尾尊敬の意味を表したる中に、咳唾珠を成し句々吟誦するに堪へながら、世人は之を知らず、宗匠は之を尊ばず、百年間空しく瓦礫と共に埋められて光彩を放つを得ざりし者を蕪村とす。蕪村の俳句は芭蕉に匹敵すべく、或は之に凌駕する處ありて、却て名譽を得ざりしものは主として其句の平民的ならざりしと、蕪村以後の俳人の盡く無學無識なるとに因れり。著作の價値に對する相當の報酬なきは蕪村のために悲しむべきに似たりといへども、無學無識の徒に知られざりしは寧ろ蕪村の喜びし所なるべきか。其放縱不羈世俗の外に卓立せしところを見るに、蕪村亦性行に於て尊尚すべきものあり。而して世は之を容れざるなり。

蕪村の名は一般に知られざりしに非ず、されど一般に知られたるは俳人としての蕪村に非ずして、畫家としての蕪村なり。蕪村歿後に出版せられたる書を見るに、蕪村畫名の生前に於て世に傳はらざりしは俳名の高かりしがために壓せられたるならんと言へり。これによれば彼が生存せし間は俳名の畫名を壓したらんかとも思はるれど、其歿後今日に至る迄は畫名却て俳名を壓したること疑ふべからざる事實なり。余等の俳句を學ぶや類題集中蕪村の句の散在せるを見て稍〻其非凡なるを認め之を尊敬すること深し。ある時小集の席上にて鳴雪氏いふ、蕪村集を得來りし者には賞を與へんと。是れ固と一場の戯言なりとはいへども、此戯言は之を欲するの念切なるより出でし者にして、其裏面には強ちに戯言ならざる者ありき。果して此戯言は同氏をして蕪村句集を得せしめ、余等亦之を借り覽て大に發明する所ありたり。死馬の骨を五百金に買ひたる喩も思ひ出されてをかしかりき。是れ實に數年前明治二十六年かの事なり。而して此談一たび世に傳はるや、俳人としての蕪村は多少の名譽を以て迎へられ、余等亦蕪村派と目せらるゝに至れり。今は俳名再び畫名を壓せんとす。

斯くして百年以後に始めて名を得たる蕪村は其俳句に於て全く誤認せられたり。多くの人は蕪村が漢語を用ふるを以て其唯一の特色とな

し、しかも其唯一の特色が何故に尊ぶべきかを知らず、況んや漢語以外に幾多の特色あることを知る者殆ど之れ無きに至りては、彼等が蕪村を尊ぶ所以を解するに苦むなり。余はこゝに於て卑見を述べ、蕪村が芭蕉に匹敵する所の果して何處にあるかを辨ぜんと欲す。

積極的美

美に積極的と消極的とあり。積極的美とは其意匠の壯大、雄渾、勁健、艶麗、活潑、奇警なる者をいひ、消極的美とは其意匠の古雅、幽玄、悲慘、沈靜、平易なるものをいふ。概して言へば東洋の美術文學は消極的美に傾き、西洋の美術文學は積極的美に傾く。若し時代を以て言へば國の東西を問はず、上世には消極的美多く後世には積極的美多し。（但し壯大雄渾なる者に至りては却て上世に多きを見る）されば唐時代の文學より悟入したる芭蕉は俳句の上に消極の意匠を用ふること多く、從つて後世芭蕉派と稱する者亦多く之に倣ふ。其寂といひ、雅といひ、幽玄といひ、細みといひ、以て美の極となす者、盡く消極的ならざるはなし。（但し壯大雄渾の句は芭蕉之れ有れども後世に至りては絶えて無し）故に俳句を學ぶ者消極的美を唯一の美として之を尚び、艶麗なる者、活潑なる者、奇警なる者を見れば則ち以て邪道となし卑俗となす。恰も東洋の美術に心醉する者が西洋の美術を以て盡く野卑なりとして貶するが如し。艶麗、活潑、奇警なる者の野卑に陷り易きは固より然り。然れども野卑に陷り易きを以て野卑ならざる者をも棄つるは其辨別の明無きが故なり。而して古雅幽玄なる消極的美の弊害は一種の厭味を生じ、今日の俗宗匠の俳句の俗にして嘔吐を催さしむるに至るを見るに、彼の艶麗ならんとして卑俗に陷りたる者に比して毫も優る所あらざるなり。

積極的美と消極的美とを比較して優劣を判せんことは到底出來得べきにあらず。されども兩者共に美の要素なることは論を竢たず。其分量よりして言はゞ消極的美は美の半面にして積極的美は美の他の半面なるべし。消極的美を以て美の全體と思惟せるは寧ろ見聞の狹きより生ずる誤謬ならんのみ。日本の文學は源平以後地に墜ちて復振はず、殆ど消滅し盡せる際に當つて芭蕉が俳句に於て美を發揮し、消極的の半面を開きたるは彼が非凡の才識あるを證するに足る。しかも其非凡の才識も積極的美の半面は之を開くに及ばずして逝きぬ。蓋し天は俳諧の名譽を芭蕉の專有に歸せしめずして更に他の偉人を待ちしにやあらん。去來、丈草も其人にあらざりき。其角、嵐雪も其人にあらざりき。五色墨の徒固より之を知らず。新虚栗の時何者をか攫まんとして得る所あらず。芭蕉死後百年に垂んとして始めて蕪村は現れたり。彼は天命を負ふて俳諧壇上に立てり。されども世は彼が第二の芭蕉たることを知らず。彼亦名利に走らず、聞達を求めず、積極的美に於て自得したりと雖も、唯〻其徒と之を樂しむに止まれり。

一年四季の中春夏は積極にして秋冬は消極なり。蕪村最も夏を好み、夏の句最も多し。其佳句も亦春夏の二季に多し。是れ既に人に異なるを見る。今試みに蕪村の句を以て芭蕉の句と對照して以て蕪村が如何に積極的なるかを見ん。

四季の内夏季は最も積極なり。故に夏季の題目には積極的なる者多し。牡丹は花の最も艶麗なる者なり。芭蕉集中牡丹を詠ずる者一二句に過ぎず。其句亦

　　尾張より東武に下る時

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名殘かな　芭蕉

　　桃隣新宅自畫自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜　同

等の如き、前者は唯季の景物として牡丹を用ゐ、後者は牡丹を詠じて極めて拙き者なり。蕪村の牡丹を詠ずるは強ち力を用ゐるにあらず、しかも手に随って佳句を成す。句数も二十首の多きに及ぶ。其内数首を挙ぐれば

牡丹散って打重なりぬ二三片

牡丹剪って気の衰へし夕かな

地車のとゞろとひゞく牡丹かな

日光の土にも彫れる牡丹かな

不動画く琢磨が庭の牡丹かな

方百里雨雲よせぬ牡丹かな

金屏のかくやくとして牡丹かな

蟻垤

蟻王宮朱門を開く牡丹かな

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐かんとす

其句奕奕将に牡丹と艶麗を争はんとす。若葉も亦積極的の題目なり。芭蕉の之を詠ずる者一二句にして

招提寺

若葉して御目の雫ぬぐはゞや　芭蕉

日光

あらたふと青葉若葉の日の光　同

の如き、皆季の景物として応用したるに過ぎず。

蕪村には直に若葉を詠じたる者十余句あり。皆若葉の趣味を発揮せり。例、

山にそふて小舟漕ぎ行く若葉かな

蚊帳を出て奈良を立ち行く若葉かな

不尽一つ埋み残して若葉かな

窓の灯の梢に上る若葉かな

絶頂の城たのもしき若葉かな

蛇を截って渡る谷間の若葉かな

をちこちに滝の音聞く若葉かな

雲の峰の句を比較せんに

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峰　芭蕉

雲の峰いくつ崩れて月の山　同

游刀亭

湖や暑さを惜む雲の峰　同

月山の句稍ゝ力強けれど、猶蕪村のに比すべくもあらず。蕪村の句多からずといへども、

揚州の津も見えそめて雲の峰

雲の峰四沢の水の涸れてより

旅意

二十日路の背中に立つや雲の峰

の如き皆十分の力あるを覚ゆ。五月雨は芭蕉にも

五月雨の雲吹き落せ大井川　芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川　同

の如き雄壮なるものあり。蕪村の句亦之に劣らず。

五月雨の大井越えたるかしこさよ

五月雨や大河を前に家二軒

五月雨の堀たのもしき砦かな

夕立の句は芭蕉に無し。蕪村にも二三句あるのみなれども、雄壮当るべからざるの勢あり。

夕立や草葉をつかむむら雀

夕立や門脇殿の人だまり

双林寺独吟千句

夕立や筆も乾かず一千言

時鳥の句は芭蕉に多かれど、雄壮なるは

時鳥声横ふや水の上　芭蕉

の一句あるのみ。蕪村の句の中には

時鳥柩をつかむ雲間より

時鳥平安城をすぢかひに

蹴ばしる友切丸や時鳥

など極端にものしたるものあり。

桜の句は蕪村よりも芭蕉に多し。しかも桜のうつくしき趣を詠み出でたるは

四方より花吹き入れて鳰の海　芭蕉

木のもとに汁も鱠も桜かな　同

しばらくは花の上なる月夜かな　同

奈良七重七堂伽藍八重桜　同

の如きに過ぎず。蕪村に至りては

阿古久曾のさしぬき振ふ落花かな
花に舞はで歸るさ憎し白拍子
花の幕兼好を覗く女あり

の如き妖艶を極めたる者あり。其の外春月、春水、暮春などいへる春の題を艶なる方に詠み出でたるは蕪村なり。例へば

伽羅くさき人の假寐や朧月
女倶して内裏拝まん朧月
藥盗む女やはある朧月
河内路や東風吹き送る巫女が袖
片町にさらさ染るや春の風
春水や四條五條の橋の下
梅散るや螺鈿こぼるゝ卓の上
玉人の座右に開く椿かな
梨の花月に書讀む女あり
閉帳の錦垂れたり春の夕
折釘に烏帽子掛けたり春の宿

ある人に句を乞はれて

返歌なき青女房よ春の暮

琴心挑美人

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

いづれの題目といへども芭蕉又は芭蕉派の俳句に比して蕪村の積極的なることは蕪村集を繙く者誰か之を知らざらん。一々こゝに贅せず。

客觀的美

積極的美と消極的美と相對するが如く、客觀的美と主觀的美とも亦相對して美の要素を爲す。之を文學史の上に照すに、上世には主觀的美を發揮したる文學多く、後世に下るに從ひ一時代は一時代より客觀的美に入ること深きを見る。古人が客觀に動かされたる自己の感情を直敍するは、自己を慰むる爲に、將た當時の文學に幼稚なる世人をして知らしむる爲に必要なりしならん。是れ主觀的美の行はれたる所以なり。且つ其客觀を寫す處極めて疎鹵にして精細ならず。例へば繪畫の輪郭ばかりを描きて全部は觀る者の想像に任すが如し。全體を現さんとして一部を描くは作者の主觀に出づ。一部を描いて全體を想像せしむるは觀る者の主觀に訴ふるなり。後世の文學も客觀に動かされたる自己の感情を寫す處に於て毫も上世に異ならずと雖も、結果たる感情を直敍せずして原因たる客觀の事物をのみ描寫し、觀る者をして之によりて感情を動かさしむること、恰も實際の客觀が人を動かすが如くならしむ。是れ後世の文學が面目を新にしたる所以なり。要するに主觀的美は客觀を描き盡さずして觀る者の想像に任すにあり。

客觀的、主觀的兩者孰れが美なるかは到底判し得べきに非ず。積極的、消極的兩美の並立すべきが如く、是れも亦並立して各自の長所を現すを要す。主觀を敍して可なるものあり、敍して不可なるものあり。客觀を寫して可なるものあり、寫して不可なるものあり。可なる者は之を現し不可なるものは之を現さず。而して後に兩者各々見るべし。

芭蕉の俳句は古來の和歌に比して客觀的美を現すこと多し。しかも蕪村の客觀的なるには及ばず。極度の客觀的美は繪畫と同じ。蕪村の句は直ちに以て繪畫となし得べき者少からず。芭蕉集中全く客觀的なる者を擧ぐれば四五十句に過ぎざるべく、中に就きて繪畫となし得べき者を擇みなば

鶯や柳のうしろ藪の前　　芭蕉
梅が香にのつと日の出る山路かな　　同
古寺の桃に米踏む男かな　　同
時鳥大竹藪を漏る月夜　　同
さゝれ蟹足はひ上る清水かな　　同
荒海や佐渡に横ふ天の川　　同

猪も共に吹かるゝ野分かな　芭蕉
鞍壺に小坊主乘るや大根引　同
鹽鯛の齒莖も寒し魚の店　同

等二十句を出でざらん。宇陀の法師に芭蕉の說なりとて掲げたるを見るに

春風や麥の中行く水の音　木導

師說云、景氣の句世間容易にする以の他の事也。大事の物也。連歌に景曲と云いにしへの宗匠深くつゝしみ一代一兩句には過ぎず。景氣の句初心まねよき故深くいましめり。俳諧は連歌程はいはず。總別景氣の句は皆ふるし。一句の曲なくては成がたき故つよくいましめ置たる也。木導が春風景曲第一の句也。後代手本たるべしとて褒美に「かけろふいさむ花の絲口」と云脇して送られたり。平句同前也。歌に景曲は見樣體に屬すと定家卿も給ふ也。寂蓮の急雨定頼卿の宇治の網代木是見樣體の歌也。

とあり。景氣といひ景曲といひ見樣體といふ、皆我謂ふ所の客觀的なり。以て芭蕉が客觀的敍述を難しとしたる事見るべし。木導の句惡句にはあらねど此の一句を第一とする芭蕉の見識は極めて低く極めて幼し。芭蕉の門弟は芭蕉よりも客觀的の句を作る者多しと雖も、皆客觀を寫すこと不完全なれば直ちに之を畫とせんには猶足らざる者あり。

蕪村の句の繪畫的なる者は枚擧すべきにあらねど、十餘句を擧ぐれば

木瓜の陰に顏たくひすむ雉かな
釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな
やぶ入や鐵漿もらひ來る傘の下
小原女の五人揃ふて袷かな
照射してさゝやく近江八幡かな
葉うら〳〵火串に白き花見ゆる
卓上の鮓に眼寒し觀魚亭
夕風や水青鷺の脛を打つ
四五人に月落ちかゝる踊かな
日は斜關屋の槍に蜻蛉かな
柳散り淸水涸れ石ところ〴〵
かひがねや穗蓼の上を鹽車
鍋提げて淀の小橋を雪の人
てら〳〵と石に日の照る枯野かな
むさゝびの小鳥喰み居る枯野かな
水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

の如し。一事一物を畫き添へざるも繪となるべき點に於て、蕪村の句は蕪村以前の句よりも更に客觀的なり。

人事的美

天然は簡單なり。人事は複雜なり。天然は沈默し人事は活動す。簡單なる者に就きて美を求むるは易く、複雜なる者は難し。沈默せる者を寫すは易く、活動せる者は難し。人間の思想、感情の單一なる古代にありて比較的に善く天然を寫し得たるは易きより入りたる者なるべし。俳句の初より天然美を發揮したるも偶然にあらず。然れども複雜なる者も活動せる者も少しく之を研究せんか、之を描くこと強ち難きにあらず。只ゝ俳句十七字の小天地に今迄は辛うじて一山一水一草一木を寫し出だしゝものを、同じ區劃の内に變化極りなく活動止まざる人世の一部分なりとも縮寫せんとするは難中の難に屬す。俳句に人事的美を詠じたる者少き所以なり。芭蕉、去來は寧ろ天然に重きを置き、其角、嵐雪は人事を寫さんとして端無く佶屈聱牙に陷り、或は人をして之を解するに苦しましむるに至る。此の如く人は皆之を難しとする所に向つて、獨り蕪村は何の苦もなく進み思ふまゝに濶歩横行せり。今人は之を見て却て其容易なるを認めしならん。しかも蕪村以後に於てすら之を學びし者を見ず。

芭蕉の句は人事を詠みたる者多かれど、皆自己の境涯を寫したるに止まり

　鞍壺に小坊主のるや大根引

の如く自己以外に在りて半ば人事美を加へたるすら極めて少し。

蕪村の句は

　行く春や選者を恨む歌の主
　命婦より牡丹餅たはす彼岸かな
　短夜や同心衆の川手水
　少年の矢數問ひよる念者ぶり
　水の粉やあるじかしこき後家の君
　蟲干や甥の僧訪ふ東大寺
　祇園會や僧の訪ひよる梶がもと
　味噌汁をくはぬ娘の夏書かな
　鮓つけてやがて去にたる魚屋かな
　褌に團扇さしたる亭主かな
　青梅に眉あつめたる美人かな
　[illegible]がもとの鏡立て
　身にしむや亡妻の櫛を閨に踏む
　門前の老婆子薪貪る野分かな
　栗そなふ惠心の作の彌陀佛
　書記典主故園に遊ぶ冬至かな
　沙彌律師ころり〳〵と衾かな
　さゝめごと頭巾にかつく羽折かな

　孝行な子供等に蒲團一つづゝ

の如き數へ盡さず。此等の作必ずしも力を用ゐし者に非ずと雖も、皆善く蕪村の特色を現して一句だに他人の作とまがふべくもあらず。天眞とは言ひながら老熟の致す所ならん。

天然美に空間的の者多きは殊に俳句に於て然り。蓋し俳句は短くして時間を容るゝ能はざるなり。故に人事を詠ぜんとする場合にも、猶人事の特色とすべき時間を寫さずして空間を寫すは俳句の性質の然らしむるに因る。たま〳〵時間を寫す者ありとも、そは現在と一樣なる事情の過去又は未來に繼續するに過ぎず。こゝに例外とすべき蕪村の句二首あり。

　御手討の夫婦なりしを更衣
　打ちはたす梵論つれだちて夏野かな

前者は過去のある人事を敍し、後者は未來のある人事を敍す。一句の主眼が一は過去の人事に在り、一は未來の人事に在るは二句同一なり、其主眼なる人事が人事中の複雜なる者なる事も二句同一なり。此の如き者は古往今來他に其例を見ず。

理想的美

俳句の美或は分つて實驗的、理想的の二種となすべし。實驗的と理想的との區別は俳句の性質に於て既に然るものあり。此種の理想は人間の到底經驗すべからざること、或は實際有り得べからざることを詠みたるもの是れなり。又實驗的と理想的との區別俳句の性質にあらずして作者の境遇に在る者あり。此種の理想は今人にして古代の事物を詠み、未だ行かざる地の景色風俗を寫し、曾て見ざる或る社會の情狀を描き出す者是なり。こゝに理想的といふは實驗的に對していふものにして兩者を包含す。

文學の實驗に依らざるべからざるは猶繪畫の寫生に依らざるべからざるが如し。然れども繪畫の寫生にのみ依るべからざるが如く、文學も亦實驗にのみ依るべからず。寫生にのみ依らんか、繪畫は終に微妙の趣味を現す能はざらんか、實驗にのみ依らんか、尋常一樣の經歷ある作者の文學は到底陳套を脱する能はざるべし。文學は傳記にあらず、記實にあらず。文學者の頭腦は四疊半の古机にもたれながら其理想は天地八荒の中に逍遙して無碍自在に美趣を求む。羽なくして空に翔るべし、鰭なくして海に潜むべし。音なくして音を聽くべく、色なくして色を觀るべし。此の如くして得來る者、必ず斬新奇警人を驚かすに足る者あり。俳句界に於て蕪

人を求むるに蕪村一人あり。翻つて芭蕉は如何と見れば其俳句平易高雅、奇を衒せず、新を求めず、一に自己が境遇の實驗ならざるはなし。二人は實に兩極端に行きて毫も相似たる者あらず、是れ亦蕪村の特色として見るべけんや。

芭蕉も時には

菖蒲生り軒の鰯の髑髏

の如き理想的の句無きにあらざりしも、一たび古池の句に自家の立脚地を定めし後は、徹頭徹尾記實の一法に依りて俳句を作れり。しかも其記實たる自己の見聞せる總ての事物より句を探り出だすに非ず、記實の中にても只ゝ自己を離れたる純客觀の事物は全く之を抛擲し、只ゝ自己を本として之に關係する事實の實際を詠ずるに止まれり、今日より見れば其見識の卑きこと實に笑ふに堪へたり。蓋し芭蕉は感情的に全く理想美を解せざりしには非ずして、理窟に考へて理想は美に非ずと斷定せしや必せり。一世に知られずして始終逆境に立ちながら、堅固なる意思に驅せられて謹嚴に身を修めたる彼が境遇に、苟にも譃をつかじとて文學にも理想を排したるなるべく、將た彼が愛讀したりといふ杜詩に記實的の作多きを見ては、俳句も斯くすべきものなりと自ら感化せられたるにもあらん。芭蕉の門人多しといへども、芭蕉の如く記實的なるは一人も無く、又芭蕉は記實的ならずとてそを惡く言ひたる例も聞かず。芭蕉は連句に於て宇宙を網羅し古今を翻弄せんとしたるにも似ず、俳句には極めて卑怯なりしなり。

蕪村の理想を尚ぶは其句を見て知るべしといへども、彼が曾て召波に教へたりといふ彼の自記は善く蕪村を寫し出だせるを見る。曰く

（略）其角を尋ね嵐雪を訪ひ素堂を倡ひ鬼貫に伴ふ、日々此四老に會してわづかに市城名利の域を離れ林園に遊び山水にうたげし酒を酌て談笑し句を得ることは專ら不用意を貴ぶ、かくの如くすること日々或日又四老に會す、幽賞雅懷はじめの如し、眼を閉て苦吟し句を得て眼を開く、忽ち四老の所在を失す、しらずいづれの所に仙化して去るや、恍として一人自佇む時に花香風に和し月光水に浮ぶ、是子が俳諧の郷なり（略）

蕪村は如何にして理想美を探り出だすべきかを召波に示したるなり。筆にも口にも説き盡すべからざる理想の妙趣は、斲輪の木を斷るが如く終に他に教ふべからずといへども、一棒の下に頓悟せしむるの工夫なきにしもあらず。蕪村は此理想的の事を非理想的に説明せり。且つ其説明的なると文學的なるとを問はず、斯の如き理想を述べたる文字に至りては上下二千載我に見ざる所なり。奇文なるかな。

蕪村の句の理想と思しき者を擧ぐれば

河童の戀する宿や夏の月

湖へ富士を戻すや五月雨

名月や兎のわたる諏訪の湖

指南車を胡地に引き去る霞かな

瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨

白梅や墨芳ばしき鴻臚館

宗鑑に葛水たまふ大臣かな

實方の長櫃通る夏野かな

朝比奈が曾我を訪ふ日や初鰹

雪信が蠅打ち拂ふ硯かな

孑孑の水や長沙の裏長屋

追剝を弟子に剃りけり秋の旅

鬼貫や新酒の中の貧に處す

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

新右衞門蛇足をさそふ冬至かな

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

高野

隱れ住んで花に眞田が謠かな

歴史を語りて古人を十七字中に現し得たる者、以て彼が技倆を見るに足らん。

複雜的美

思想簡單なる時代には美術文學に對する嗜好も簡單を尙ぶは自然の趨勢なり。我邦千餘年間の和歌の如何に簡單なるかを見ば、人の思想の長く發達せざりし有様も見え透く心地す。此間に立ちて形式の簡單なる俳句は却て和歌よりも複雜なる意匠を現さんとして漢語を借り來り佶屈なる直譯的句法をさへ用ゐたりしも、そは一時の現象たるにとゞまり、古池の句は終に俳句の本尊として崇拜せらるゝに至れり。古池の句は足引の山鳥の尾のといふ歌の簡單なるに比すべくもあらざれど、猶俳句中の最簡單なる者に屬す。芭蕉は之を以て自ら得たりとし、終身複雜なる句を作らず。門人は必ずしも芭蕉の簡單を學ばざりしも、複雜の極點に達するには遠かりき。

芭蕉は發句は頭よりすら／＼と言ひ下し來るを上品とす、と言ひ、門人洒堂に敎へては發句は汝が如く物二つ三つ取集る物にあらず、こがねを打のべたる如くあるべし、と言へり。洒堂の句の物二つ三つ取集るといふは

鳩吹くや澁柹原の蕎麥畑

刈株や水田の上の秋の雲

の類なるべく、洒堂亦常に好んで此句法を用ゐたりとおぼし。然れども洒堂の此等の句は元祿の俳句中に一種の異彩を放つのみならず、其品格よりいふも鳩吹、刈株の句の如きは決して芭蕉の下にあらず。芭蕉が此特異の處を賞揚せずして、却て之を排斥せんとしたるを見れば、彼は其複雜的美を解せざりし者に似たり。

芭蕉は一定の眞理を言はずして時に隨ひ人により思ひ／＼の教訓をなすを常とす。其洒堂を誨へたるも此等の佳作を斥けたるにはあらで、寧ろ其濫用を誡めたるにやあらん。許六が「發句は取合せものなり」といふに對して芭蕉が「これ程仕よき事あるを人は知らずや」といへるを見ても、強ち取合を排斥するには非るべし。されどこゝに言へる取合とは二種の取合をいふ者にして、洒堂の如く三種の取合をいふに非るは、芭蕉の句、許六の句を見て明なり。芭蕉亦凡兆に對して「俳諧もさすがに和歌の一體なり、一句にしをりあるやうに作すべし」といへるも此の間の消息を解すべき者あり。凡兆の句複雜といふ程にはあらねど、亦洒堂等と一般、句々材料充實して、彼の虛字を以て斡旋する芭蕉流とはいたく異なり。芭蕉之に對して今少し和歌の臭味を加へよといふ、蓋し芭蕉は俳句は簡單ならざるべからずと斷定して自ら美の區域を狹く劃りたる者なり。芭蕉既に此の如し。芭蕉以後言ふに足らざるなり。

蕪村は立てり。和歌のやさしみ言ひ古し聞き古して紛々たる臭氣は其腐敗の極に達せり。和歌に代りて起りたる俳句幾分の和歌臭味を加へて元祿時代に勃興したるも、支麥以後漸く腐敗して亦拯ふに道なからんとす。是に於て蕪村は複雜的美を捉へ來りて俳句に新生命を與へたり。彼は和歌の簡單を斥けて唐詩の複雜を借り來れり。國語の柔軟なる、冗長なるに飽きはてて簡勁なる、豪壯なる漢語もて我不足を補ひたり。先に其角一派が苦辛して失敗に終りし事業は蕪村によつて容易に成就せられたり。衆人の攻擊も慮る所にあらず、美は簡單なりといふ古來の標準も棄てゝ顧ず、卓然として複雜的美を成したる蕪村の功は沒すべからず。

芭蕉の句は多く簡單なり。試みに其複雜なる者を求めんか、

鶯や柳のうしろ藪の前

つゝじいけて其陰に干鱈さく女

隱れ家や月と菊とに田三反

等の數句に過ぎざるべし。蕪村の句の複雜なるは其全體を通じて然り。中に就きて數句を舉ぐれば

草霞み水に聲なき日暮かな
燕啼いて夜蛇を打つ小家かな
梨の花月に書讀む女あり
雨後の月誰ぞや夜ぶりの脛白き
鮓をおす我れ酒かもす隣あり
五月雨や水に錢蹈む渡し舟
草いきれ人死をると札の立つ
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
鹿ながら山影門に入る日かな
鴫遠く鍬すゝぐ水のうねりかな
柳散り清水涸れ石ところ〲
水かれ〲蓼かあらぬか蕎麥か否か
我をいとふ鄰家寒夜に鍋を鳴らす

一句を五字又は七字の中に猶「草霞み」「雨後の月」「夜蛇を打つ」「水に錢蹈む」と曲折せしめたる妙は到底頭よりすら〱と言ひ下し來る者の解し得ざる所、しかも酒堂、凡兆等も亦夢寐にだも見ざりし所なり。客觀的の句は複雜なり易し。主觀的の句の複雜なる

うき我に砧打て今は又やみね

の如きに至りては蕪村集中亦他にあらざるもの、若し芭蕉をして之を見せしめば惘然自失言ふ所を知らざるべし。

精細的美

外に曠き者之を複雜と謂ひ、内に詳なる者之を精細と謂ふ。精細の妙は印象を明瞭ならしむるに在り。芭蕉の叙事形容に粗にして風韻に勝ちたるは、芭蕉の好んで爲したる所なりといへども、一は精細的美を知らざりしに因る。芭蕉集中精細なる者を求むるに

粽結ふ片手にはさむ額髮
五月雨や色紙へぎたる壁の跡

の如き比較的に備か思はるゝあるのみ。蕪村集中に其例を求むれば

鶯の鳴くや小さき口あけて
あぢきなや椿落ち埋む庭たづみ
痩脛の毛に微風あり衣がへ
月に對す君に投網の水煙
夏川をこす嬉しさよ手に草履
鮎くれてよらで過ぎ行く夜半の門
夕風や水青鷺の脛を打つ
點滴に打たれてこもる蝸牛
蚊の聲す忍冬の花散るたびに
青梅に眉あつめたる美人かな
牡丹散て打ち重りぬ二三片
[illegible]草に牡丹あでたき薄闇かな
引きかふて耳をあはれむ頭巾かな
緑子の頭巾眉深きいとほしみ
眞結びの足袋はしたなき給仕かな
[illegible]あれは人に[illegible]の[illegible]を問ひかな
茶の花や石をめぐりて道を取る

等いと多かり。

「庭たづみに椿の落ちたるは誰も考へつくべし。埋むとは言ひ得ぬなり。若し埋むに力入れたらんには俗句と成り了らん。落ち埋むと字餘りにして埋むを輕く用ゐたるは蕪村の力量なり。善き句にはあらねど、埋むと迄形容して俗ならしめざる處、精細的美を解したるに因る。精細なる句の俗了し易きは蕪村の夙に感ぜし所にやあらん、後世の俳家徒に精細ならんとして益々俗に墮つる者、蓋し精細的美を解せざるが爲なり。妙人の妙は其平凡なる處、拙き處に於て見るべし。唐詩選を見て一詩を評し、展覽會を見て畫家を評するは殆し。蕪村の俳句ばかりを見る者は蕪村を見る者に非るなり。

「手に草履」といふことも若し拙く言ひのばしなば殺風景となりなん。短くも言ひ得べきを「嬉しさよ」と長く言ひて、長くも言ひ得べきを

「手に草履」と短く言ひし者、良工苦心の處ならんか。
「鮎くれて」の句、此の如き意匠は古來無き所、縱しありたりとも「よらで過ぎ行く」とは言ひ得ざりしなり。常人をして言はしめば「鮎くれし」を主にして言ふべし。そは平凡なり。よらで過ぎ行く處、景を寫し情を寫し時を寫し多少の滑稽を添ふ。
顰しかめたりとも額に皺よせたりとも斯く印象を明瞭ならしめじ、事は同じけれど一眉あつめたるの一語、美人髣髴として前に在り。
蒲團引きあふて夜伽の寒さを凌ぎたる句などこそ古人もいへれ、蒲團其物を一句に形容したる、蕪村より始まる。
「頭巾眉深き」只と七字、あやせば笑ふ聲聞ゆ、
足袋の黄結び、これをも俳句の材料にせんとは誰か思はん、蕪村此句を見ること熟せり、しかも如何にして此事を捉へ得たるかは今に怪しまざるを得ず、
「歯あらはに」の一語にしみ入るつめたさ想ひやるべし。

用語

蕪村の俳句に於ける意匠の美は既に之を言へり。意匠の美は文學の根本にして人を感動せしむるの力亦多くこゝに在り。然れども用語、句法の美之に伴はざらんには、可惜意匠の美を活動せしめざるのみならず、却て其意匠に一種いふべき俗氣を帶びたるが如く感ぜしむることあり。蕪村の用語と句法とは其意匠を現すに最も適せる者にして、しかも自己の創體に屬する者多し。其用語の概略を言はんに

（一）漢語　は蕪村の喜んで用ゐたる者にして、或は漢語多きを以て蕪村の唯一の特色と誤認せらるゝに至る。此一事が如何に人の注意を惹きしかを知るべし。蕪村が漢語を用ゐたるは種々の便利ありしに因るべけれど、第一に漢語が國語より簡短なりしに因らずんばあらず、複雜なる意匠を十七八字の中に含めんには簡短なる漢語の必要あり。又簡短なる語を用ふれば敍事形容を精細に爲し得べき利あり。

　指南車を胡地に引き去るかすみかな
　閣に坐して遠き蛙を聞く夜かな
　戟や鋋や髭に落花を捻りけり
　鮓桶をこれへと樹下の床几かな
　三井寺や日は午に逼る若楓
　柚の花や善き酒藏す塀の内
　耳目肺腸こゝに玉巻く芭蕉庵
　採蓴をうたふ彦根の傖夫かな
　鬼貫や新酒の中の貧に處す
　月天心貧しき町を通りけり
　秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
　鴨鳴くや舟に魚焼く琵琶湖上

の如き此體なり。されども漢語の必要ありとのみにて濫りに漢語を用ゐ、爲に一句の調和を缺かば俳句とは言はれじ。「胡地」の語の如き餘り耳遠く普通に用ゐるべきには非るを、「指南車」の語上に在り、「引去る」といふ漢文直譯風の語下にあるために一句の調和を得たるなり。「落花」の語は「戟や鋋や」に對して響き善く、「芭蕉庵」といふ語なくんば「耳目肺腸」とは置く能はず。「採蓴」は漢語に非れば言ふ可からず、さりとて此語ばかりにては國語と調和せず。故にことさらに「傖夫」とは受けたり。
第二は國語にて言ひ得ざるにはあらねど、漢語を用ゐる方善く其意匠を現すべき場合なり。漢語を用ゐて勢を強くしたる句、

　五月雨や大河を前に家二軒
　夕立や筆も乾かず一千言
　時鳥平安城をすぢかひに
　絶頂の城たのもしき若葉かな
　方百里雨雲よせぬ牡丹かな

「おほかは」と言へば水勢ぬるく「たいか」と言へば水勢急に感ぜられ、「いたゞき」と言へば山嶮しからず、「ぜつちやう」と言へば山嶮しく感ぜらる。

漢語を用ゐていかめしくしたる句

　蚊遣してまゐらす僧の座右かな

　[illegible]下先生木の下闇の訪はれ顔

「座右」の語は何に用ゐても多少の威儀を表し、「[illegible]下先生」と言へば「[illegible]」と言ひしよりも[illegible]らしく聞えて一句は之が為に[illegible]けり。

　寂として客の絶間の牡丹かな

　蕭条として石に日の入る枯野かな

の如きは「しんとして」「淋しくして」と[illegible]しては[illegible]たると大差無けれど、漢語の方勝れたるべし。

第三は支那の成語を用ふる者にして、これは成語を用ゐたるが爲に趣ある者、又は成語を其儘ならでは用ゐるべからざる者あり。支那の人名地名を用ゐ、支那の古事風景等を詠ずる場合は勿論、我國の事をいふ引合に出されたるも少からず。其句、

　行き〳〵てこゝに行き行く夏野かな

　柳絮や砧打つ音丁々たり

　帛を裂く琵琶の流れや秋の聲

　釣り上げし鱸の巨口玉や吐く

　三径の十歩に盡きて蓼の花

　冬籠り燈下に書すと書かれたり

　侘禪師から鮭に白頭の吟を彫る

　秋風の呉人は知らじふぐと汁

右三種類の外に

　春水や四条五条の橋の下

の句は「春の水」ともあるべきを「橋の下」と同調になりて耳ざはりなれば「春水」とは置きたるならん。但し四条五条といふ漢音の語なくば、「春水」とは言はざりけん。

　かや釣りて翠微つくらん家の内

特に翠微といふ翠の字を蚊帳の色にかけたるしゃれなり。

　薫風やともしたてかねつ厳島

「風薫る」とは俳句の普通に用ゐる所なれども、かく言ひては「薫る」の意強くなりて句を成し難し。只ゝ夏の風といふ位の意に用ゐる者なれば「薫風」とつゞけて一種の風の名と爲すに如かず。蓋し蕪村の烱眼は早く此に注意したる者なるべし。

（二）古語 も亦蕪村の好んで用ゐたる者なり。漢語は延寳、天和の間其角一派が濫用して終に其調和を得ず、其角すら是より後、復用ゐざりしもの、蕪村に至りて始て成功を得たり。古語は元祿時代に在りて芭蕉一派が常語との調和を試み十分に成功したる者、今は蕪村に因りて更に一歩を進められぬ。

　およぐ時よるべなきさまの蛙かな

　命婦より牡丹餅たばす彼岸かな

　更衣母なん藤原氏なりけり

　眞しらけのよね一升や鮓のめし

　おろしおく笈になゐふる夏野かな

　夕風や黄に吹いたるもあるべかり

　夜を寒み小冠者臥したり北枕

　高燈籠消えなんとするあまたゝび

　渡り鳥雲のはたての錦かな

　大高に君しろしめせ今年米

蕪村の用ゐたる古語には藤原時代のもあらん、北條足利時代のもあらん、或は漢書の譯讀に用ゐられたる即ち漢語化せられたる古語も多からん。いづれにもせよ、今迄俳句界に入らざりし古語を手に從つて拈出したるは蕪村の力なり。只ゞ漢語を用ゐ、いたづらに佶屈の句を作り、以て蕪村の眞髄を得たりと爲す者、未だ他の半面を解せざるべし。

（三）俗語 の最俗なる者を用ゐ初めたるも亦蕪村なり。元祿時代に雅語、俗語相半せし俳句も、享保以後無學無識の徒に翫弄せらるゝに

至て雅語漸く消滅し俗語益〻用ゐられ、意匠の野卑と相待て純然たる俗俳句となり了れり、されど其俗語も必ずしも好んで俗語を用ゐしにあらで、雅語を解せざるが為知らず〳〵卑近に流れたる者、故に彼等が用ゐる俗語は俗語中の成るべく古に近きを擇みたりとおぼしく、俗中の俗なる日常の話語に至りては固より用ゐざりしのみならず、彼等猶之を俗として排斥したり。檀林派の作者といへども其意匠句法の滑稽突梯なるに拘らず、亦此俗語中の俗語を用ゐたるものを見ず。蕉門も檀林も其嵐派も支麥派も用ゐるに難じたる極端の俗語を取て平氣に俳句中に插入したる蕪村の技倆は實に測るべからざる者あり。しかも其俗語の俗ならずして却て活動する、腐草螢と化し淤泥蓮を生ずるの趣あるを見ては誰か其奇術に驚かざらん。

出る杭を打たうとしたりや柳かな
酒を煮る家の女房ちよとほれた
絵團扇のそれも清十郎にお夏かな
蚊帳の内に螢放してアヽ樂や
杜若べたりと鳶のたれてける
藥喰隣の亭主箸持參
化さうな傘かす寺の時雨かな

後世一茶の俗語を用ゐたる、或は此等の句より胚胎し來れるには非るか。蕪村集中の最俗なる者、一讀に堪へずといへども、一茶は殊に此邊より悟入したるかの感なきに非ず。蓋し一茶の作時に名句無きにはあらざるも、全體を通じて言へば句法に於て蕪村の「酒を煮る」「絵團扇」の如きしまり無く、意匠に於て「杜若」「時雨」の如き趣味を缺きたり。蕪村は漢語をも古語をも極端に用ゐたり。佶屈なり易き漢語も佶屈ならしめざりき。冗漫なり易き古語も冗漫ならしめざりき。野卑なり易き俗語も野卑ならしめざりき。俗語を用ゐたる一茶の外は漢語にも古語にも彼は匹敵者を有せざりき。用語の一點に於ても蕪村は俳句界獨歩の人なり。

句法

句法は言語の接續をいふ。俳句の句法は貞享、元祿に定まりて享保、寶曆を經て少しも動かず。寧ろ元祿に變化したるだけの變化さへ失ひ、「何や」「何かな」一天張の極めて單調なる者となり了りて、唯〻時に檀林一派及び鬼貫等の奇を弄するあるのみ。此際に當りて蕪村は句法の上に種々の工夫を試み、或は漢詩的に、或は古文的に、古人の未だ曾て作らざりし者を數多造り出せり。

春雨やいざよふ月の海半
春風や堤長うして家遠し
雉打て歸る家路の日は高し
玉川に高野の花や流れ去る
祇や鑑や髭に落花を捻りけり
櫻狩美人の腹や減却す
出べくとして出ずなりぬ梅の宿
菜の花や月は東に日は西に
裏門の寺に逢著す蓬かな
山彦の南はいづち春の暮
月に對す君に投網の水煙
掛香や唖の娘の人となり
鮓を壓す石上に詩を題すべく
夏山や京盡し飛ぶ鷺一つ
淺川の西し東す若葉かな
蓬なる我蕭艾存す野分かな
蘭夕狐のくれし奇楠を炷ん
漁家寒し酒に頭の雪を焼く
頭巾二つ一つは人に參らせん
我も死して碑にほとりせん枯尾花　（芭蕉翁碑）

の如きは漢文より來りし句法なり。蕪村最も多く此種の句法を爲す。

しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し
鮓桶を洗へば淺き遊魚かな
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

魚淺し、音暗しなどいへる警語を用ゐたるは漢詩より得たるものならん。從來の國文いまだ此種の工夫無し。

陽炎や名も知らぬ蟲の白き飛ぶ
橋なくて日暮れんとする春の水
罌粟の花まがきすべくもあらぬかな

の如きは古文より來る者、

春の水背戸に田つくらんとぞ思ふ
白蓮を剪らんとぞ思ふ僧のさま

此「とぞ思ふ」といふは和歌より取り來りし者なり。其外

衣がへ野路の人はつかに白し
蚊の聲す忍冬の花散るたびに
水かれ〴〵蓼かあらぬか蕎麥か否か

の如きあり。

元祿以來形容語は極めて必要なる者の外俳句には用ゐられざりき。いたづらに場所塞ぎを爲すのみにて、有りても無くても意義に大差なしとの意なりしならん。然れども形容語は句を活動せしめ印象を明瞭ならしむるには之を用ゐて效多し、蕪村は巧に之を用ゐる、殊に中七音の中に簡單なる形容詞を用ふることに長じたり。

水の粉やあるじかしこき後家の君
尼寺や善き蚊帳垂るゝ宵月夜
柚の花や能酒藏す塀の内
手燭して善き蒲團出す夜寒かな
嬰子の頭巾眉深きいとほしみ
眞結びの足袋はしたなき給仕かな
宿かへて火燵嬉しき在處

後の形容詞を用ゐる者、多くは句勢にたるみを生じて却て一句の病と爲る。蕪村の簡勁と適切とに及ばざる遠し。

蕪村の句は堅くしまりて搖かぬが其特色なり。故に無形の語少く有形の語多し。簡勁の語多く冗漫の語少し。然るに彼に一つの癖ありて或る形容詞に限り長きを厭はず、屢〻之を句尾に置く。

つゝじ咲て石うつしたる嬉しさよ
更衣八瀬の里人ゆかしさよ
顏白き子のうれしさよ枕蚊帳
五月雨大井越えたるかしこさよ
夏川を越す嬉しさよ手に草履
小鳥來る音嬉しさよ板庇
鋸の音貧しさよ夜半の冬

の如き是れなり。普通に嬉しと思ふ時嬉しと云はゞ俳句に無味になり了らん、況して嬉しさよといはと長く言はんは猶更の事なり。嬉しさよといはねば感情を現す能はざる時にのみ用ゐたる蕪村の句は、固より此語を無造作に置きたるにあらず。更に驚くべきは蕪村が一句の結尾に「に」といふ手爾葉を用ゐたる事なり。例へば

歸る雁田毎の月の曇る夜に
菜の花や月は東に日は西に
春の夜や宵曙の其中に
畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に
時鳥平安城をすぢかひに
蚊の聲す忍冬の花散るたびに
廣庭の牡丹や天の一方に
庵の月あるじを問へば芋掘りに
狐火や髑髏に雨のたまる夜に

常人をして此句法に倣はしめば必ずや失敗に終らん、手爾葉の結尾を以て一句を操る者、蕪村の蕪村たる所以なり。

蕪村は下五文字に何ぶり、何がち、何顏、何心の如き語を据うることを好めり。

三椀の雜煮かふるや長者ぶり
少年の矢數問ひよる念者ぶり
鶯のあちこちとするや小家がち
小豆賣る小家の梅の莟がち

耕すや五石の粟のあるじ顔
燕や水田の風に吹かれ顔
川狩や樓上の人の見知り顔
實ト先生木の下闇の訪はれ顔
行く春やおもたき琵琶の抱き心
夕顔の花噛む猫やよそ心
寂寞と晝間を鮓の馴れ加減

又此類の語の中七字に用ゐられたるもあり。後世の俗俳家何心、何ぶりなど〻詠ずる者多くは卑俗厭ふべし。

なれすぎた鮓をあるじの遺恨かな
牡丹ある寺行き過ぎし恨かな
蕣を得て清水に遠き恨かな

「恨かな」といふも漢詩より來りし者ならん。

句調

蕪村以前の俳句は五七五の句切にて意味も切れたるが多し。たま〳〵變例と見るべき者も猶

行く春や鳥啼き魚の目は涙　芭蕉
松風の落葉か水の音涼し　同
松杉をほめてや風の薫る音　同

の如き者にして多くは「や」「かな」等の切字を含み、然らざるも七音の句必ず四三又は三四と切れたるを見る、蕪村の句には

夕風や水青鷺の脛を打つ
鮓を壓す我れ酒釀す鄰あり
宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ

の如く二五と切れたるあり、

若葉して水白く麥黄ばみたり
柳散り清水涸れ石ところ〳〵
春雨や人住みて煙壁を漏る

の如く五二又は五三と切れたるもあり。是れ恐らくは蕪村の創めたる者、曉臺、闌更によりて盛に用ゐられたるにやあらん。

句調は五七五調の外に時に長句を爲し、時に異調を爲す、六七五調は五七五調に次ぎて多く用ゐられたり。

花を蹈みし草履も見えて朝寐かな
妹が垣根三味線草の花咲きぬ
卯月八日死んで生るゝ子は佛
閑古鳥かいさゝか白き鳥飛びぬ
蟲のためにそこなはれ落つ柿の花
戀さま〳〵願の絲も白きより
月天心貧しき町を通りけり
羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

七七五調、八七五調、九七五調の句

獨鈷鎌首水かけ論の蛙かな
實ト先生木の下闇の訪はれ顔
花散り月落ちて文こゝにあら有難や
立ち去る事一里眉毛に秋の峰寒し
門前の老婆子薪貪る野分かな
夜桃林を出でゝ曉嵯峨の櫻人

五八五調、五九五調、五十五調の句

おもかげもかはらけ〳〵年の市
およぐ時よるべなきさまの蛙かな
秋雨や水底の草を蹈み渉る
茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ
侘禪師乾鮭に白頭の吟を彫る

五七六調、五八六調、六七六調、六八六調等にて終六言を

夕立や筆も乾かず一千言
ほうたんやしろかねの猫こかねの蝶
心太さかしまに銀河三千尺
炭團法師火桶の穴より覗ひけり

の如く置きたるは古來例に乏しからず。終六言を三三調に用ゐたるは蕪村の創意にやあらん。其例、

嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮れし
一行の雁や端山に月を印す
朝顔や手拭の端の藍をかこつ
水かれ〳〵蓼かあらぬか蕎麥か否か
柳散り清水涸れ石ところ〳〵

我をいとふ隣家寒夜に鍋をならす
霜百里舟中に我月を領す

其外調子のいたく異なりたる者あり。

梅遠近南すべく北すべく
閑古鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ
山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり
更衣母なん藤原氏なりけり

最も奇なるは

をちこちをちこちと打つ砧かな

の句の字は十六にして調子は五七五調に吟じ得べきが如き。

文法

漢語、俗語、雅語の事は前にも言へり。其の他動詞、助動詞、形容詞にも蕪村ならでは用ゐざる語あり。

鮓を壓す石上に詩を題すべく
緑子の頭巾眉深きいとほしみ
大矢數弓師親子も参りたる
時鳥歌よむ遊女聞ゆなる
麻刈れと夕日此頃斜なる

「たり」「なり」と言はずして「たる」「なる」と言ふが如き、「べし」と言はずして「べく」と言ふが如き、「いとほし」と言はずして「いとほしみ」と言ふが如き、蕪村の故意に用ゐたる者とおぼし。前人の句亦此語を用ゐたる者無きにあらねど、そは終止言として用ゐたるが多きやうに見ゆ。蕪村のはことさらに終止言ならぬ語を用ゐて餘意を永くしたるなるべし。

をさな子の寺なつかしむ銀杏かな

「なつかしむ」といふ動詞を用ゐたる例ありや否や知らず。或は思ふ、「なつかし」といふ形容詞を轉じて蕪村の創造したる動詞にはあらざるか。果して然りとすれば蕪村は傍若無人の振舞を爲したる者と謂ふべし。然れども百年後の今日に至り此の語を襲用するもの續々として出でんか、蕪村の造語は終に字彙中の一隅を占むるの時あらんも測り難し。英雄の事業時に斯の如き者あり。

蕪村は古文法など知らざりけん、縦し知りたりともそれに拘らざりけん、文法に違ひたる句

更衣母なん藤原氏なりけり

の如きあり。

我宿にいかに引くべき清水かな

の如く「いかに」「何」等の係りを「かな」と結びたるは蕪村以外にも多し。

大文字近江の空もたゞならね

の「ね」の如き例も他に無きにあらず、蕪村は終止言として之を用ゐたるか、或は前に擧げたる「たる」「なる」の如く特に言ひ殘したる語なるか。縦令後者なりとも文法學者をして言はしめば文法に違ひたりとせん、果して文法に違へりや、將た韻文の文法も散文の如くならざるべからざるか、そは大に研究を要すべき問題なり。余は文法論に就きて猶幾多の疑を存する者なれども、此等の俳句を盡く文法に違へりとて排斥する説には反對する者なり。況して普通の場合に「ならめ」等の結語を用ゐる例は萬葉にもあるをや。

二本の梅に遅速を愛すかな
菴なる我蕎麥存す野分かな

の「愛すかな」「存す野分」の連續の如き

夏山や京盡し飛ぶ鷺一つ

の「京盡し飛ぶ」の連續の如き

蘭夕狐のくれし奇楠を炷ん

の「蘭夕」の連續の如き漢文より來りし者は從來の國語に無き句法を用ゐたり。此等は固より故意に此新句法を造りし者、而して明治の俳句界に一生面を開きし者亦多く此邊より出づ。

材料

蕪村は狐狸怪を爲すことを信じたるか、縦

令信ぜざるも此種の談を聞くことを好みしか、彼の自筆の草稿新花摘は怪談を載すること多く、且つ彼の句にも狐狸を詠じたる者少からず。

公達に狐ばけたり宵の春
飯盗む狐追ふ聲や麥の秋
狐火やいづこ河内の麥畠
麥秋や狐ののかぬ小百姓
秋の暮佛に化る狸かな
戸を叩く狸と秋を惜みけり
石を打狐守る夜の砧かな
蘭夕狐のくれし奇楠を炷ん
小狐の何にむせけん小萩原
小狐の隱れ顏なる野菊かな
狐火の燃えつくばかり枯尾花
草枯れて狐の飛脚通りけり
水仙に狐遊ぶや宵月夜

怪異を詠みたる者、

化さうな傘かす寺の時雨かな

西の京にばけもの栖て久しくあれ果たる家ありけり今は其さたなくて

春雨や人住みて煙壁を洩る

狐狸にはあらで幾何か怪異の聯想を起すべき動物を詠みたる者、

獺の住む水も田に引く早苗かな
獺を打し翁も誘ふ田植かな
河童の戀する宿や夏の月
蝮の鼾も合歡の葉陰かな
麥秋や鼬啼くなる長がもと
黄昏や萩に鼬の高臺寺
むさゝびの小鳥喰み居る枯野かな

此外犬鼠などの句多し。そは怪異といふにはあらねど此の如き動物を好んで材料に用ゐたるも其特色の一なり。

州名國名など廣き地名を多く用ゐたり。此細なる事なれど蕪村以前には此例少かりしにや。

河内路や東風吹き送る巫女が袖
雉鳴くや草の武藏の八平氏
三河なる八橋も近き田植かな
楊州の津も見えそめて雲の峰
夏山や通ひなれたる若狹人
狐火やいづこ河内の麥畠
しのゝめや露を近江の麻畠
初汐や朝日の中に伊豆相模
大文字や近江の空もたゞならね
稻妻の一網打つや伊勢の海
紀路にも下りず夜を行く雁一つ
蟲鳴くや河内通ひの小提灯

糞、尿、屁など多く用ゐたるは其角なり。其角の句は稍〻奇を求めて故らにものせしが如く思はる。蕪村は之を巧に用ゐ、此等不淨の物をして殺風景ならしめざるのみならず、幾多の荒寒淒涼なる趣味を含ましむるを得たり。

大とこの糞ひりおはす枯野かな
いばりせし蒲團干したり須磨の里
糞一つ鼠のこぼす衾かな
杜若べたりと鳶のたれてける

蕪村は此等糞尿の如き材料を取ると同時に亦上流社會のやさしく美しき様をも巧に詠み出でたり。

春の夜に尊き御所を守身かな
春惜む座主の連歌に召されけり
命婦より牡丹餅たばす彼岸かな
瀧口に灯を呼ぶ聲や春の雨
よき人を宿す小家や朧月
小冠者出て花見る人を咎めけり
短夜や暇賜はる白拍子
葛水や入江の御所に詣づれば
稻葉殿の御茶たぶ夜なり時鳥
時鳥琥珀の玉を鳴らし行く
狩衣の袖の裏這ふ螢かな

袖笠に毛蟲をしのぶ古御達

名月や秋月どのゝ艤

蕪村の句新奇ならざる者なければ新奇を以て論ずれば蕪村句集全部を見るの完全なるに如かず。且つ初より諸種の例に引きたる句多く新奇なるを以て特にこゝに擧ぐるの要無しと雖も、前に擧げざりし句の中に新奇なる材料を用ゐし句を少し記し置くべし。

野袴の法師が旅や春の風

陽炎や簣に土をめつる人

奈良道や當歸畠の花一木

畑打や法三章の札のもと

巫女町によき衣すます卯月かな

更衣印籠買ひに所化二人

床涼み笠著連歌の戻りかな

秋立つや白湯香しき施藥院

秋立つや何に驚く陰陽師

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋

いでさらば投壺參らせん菊の花

易水に根深流るゝ寒さかな

飛驒山の質屋鎖しぬ夜半の冬

乾鮭や帶刀殿の臺所

此等の材料は蕪村以前の句に少きのみならず、蕪村以後も亦用ゐる能はざりき。

緣語及譬喩

蕪村が緣語其他文字上の遊戯を主としたる俳句をつくりしは怪むべきやうなれど、其句の巧妙にして斧鑿の痕を留めず、且つ和歌若しくは檀林、支麥の如き沒趣味の作を爲さゞる處、亦以て其技倆を窺ふに足る。緣語を用ゐたる句、

春雨や身にふる頭巾著たりけり

つかみ取て心の闇の螢哉

半日の閑を榎や蟬の聲

出代や春さめ〴〵と古葛籠

近道へ出てうれし野のつゝじかな

愚痴無智のあま酒つくる松が岡

蝸牛や其角文字のにじり書

橘のかはたれ時や古館

橘のかごとがましき袷かな

一八やしやが父に似てしやがの花

夏山や神の名はいさしらにぎて

藻の花やかたわれからの月もすむ

忘るなよ程は雲助時鳥

角文字のいざ月もよし牛祭

又譃を月夜に釜の時雨哉

葛の葉のうらみ顔なる細雨かな

頭巾著て聲こもり〴〵の初瀨法師

　晉子三十三回忌辰

擂盆のみそみめぐりや寺の霜

又は

　題白川

黑谷の鄰は白し蕎麥の花

の如き固有名詞をもぢりたるもあり。又は

短夜や八聲の鳥は八ツに啼く

茯苓は伏しかくれ松露は露れぬ

　思古人移竹

去來去り移竹移りぬ幾秋ぞ

の如く文字を重ねかけたるもあり。

俳句に譬喩を用ゐる者、俗人の好む所にして其句多く理窟に墮ち趣味を沒す。蕪村の句時に譬喩を用ゐる者ありといへども、譬喩奇拔にして多少の雅致を具ふ。亦支麥輩の夢寐にも知らざる所なり。

獨鈷鎌首水かけ論の蛙かな

苗代の色紙に遊ぶ蛙かな

心太さかしまに銀河三千尺

夕顔のそれは髑髏か鉢叩

蝸牛の住はてし宿やうつせ貝

　金扇に卯花畫

白かねの卯花もさくや井出の里

鴛鴦や國師の沓も錦革

あたまから蒲團かぶれば海鼠かな

水仙や鵙の草莖花咲きぬ

ある隱士のもとにて

古庭に茶筌花咲く椿かな

隱者久しく音づれせざりければ

有と見えて扇の裏繪覺束な

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐かんとす

蟻垤

蟻王宮朱門を開く牡丹かな

浪花の舊國主として諸國の俳士を集めて園山に會莚しける時

萍を吹き集めてや花莚

傚素堂

乾鮭や琴に斧うつ響あり

時代

蕪村は享保元年に生れて天明三年に歿す。六十八の星霜を保ちしかば其間種々の經歷もありしなるべけれど、大體の上より觀れば文學美術の衰へんとする時代に生れて其盛ならんとする時代に歿せしなり。俳句は享保に至りて芭蕉門の英俊多くは死し、支考、乙由等が殘喘を保ちて益々俗に墮つるあるのみ。明和以後枯楊孽を生じて漸く春風に吹かれたる俳句は天明に至りて其盛を極む。俳句界二百年間元祿と天明とを最盛の時期とす。元祿の盛運は芭蕉を中心として成りし者、蕪村の天明に於けるは芭蕉の元祿に於けるが如くならざりしと雖も、天明の隆盛を來せし者其力最も多きに居る。天明の餘勢は寛政、文化に及んで漸次に衰へ、文政以後復痕迹を留めず。

和歌は萬葉以來、新古今以來、一時代を經る毎に一段の墮落を爲したる者、眞淵出で僅に之を挽回したり。眞淵歿せしは蕪村五十四歲の時、略々其時を同じうしたれば、和歌にして取るべくは蕪村は之を取るに躊躇せざりしならん。されど蕪村の句其影響を受けしとも見えざるは、音調に泥みて清新なる趣味を缺ける和歌の到底俳句を利するに足らざりしや必せり。

當時の和文なる者は多く擬古文の類にして見るべきなかりしも、擬古といふことは或は蕪村をして古語を用ゐ古代の有樣を詠ぜしめたる原因となりしかも知らず。而して蕪村は此材料を古物語等より取りしと覺ゆ。

蕪村が最も多く時代の影響を受けしは漢學殊に漢詩なりき。且つ漢學は蕪村が少年の時に寧ろ隆盛を極め、徂徠一派は勃興したるなり。蕪村は十分に徂徠の學を利用し、以て腐敗せる俳句に新生命を與へたるを見る。蕪村は徂徠等修辭派の主張する、文は漢以上、詩は唐以上と言へるが如き僻說には同意する者にあらざるべけれど、唐以上の詩を以て粹の粹と爲したること疑あらじ。蕪村が書ける春泥集の序の中に曰く、

（略）彼も知らず、我も知らず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや、こたへて曰、詩を語るべし、子もとより詩を能す、他に求むべからず、波疑敢問、夫詩と俳諧といさゝか其致を異にす、さるを俳諧を捨て詩を語れと云迂遠なるにあらずや、答て曰（略）畫の俗を去だにも筆を投じて書を讀しむ、況詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや（略）

（略）詩に李杜を貴ぶに論なし、猶元白を捨ざるがごとくせよ（略）

之を讀まば蕪村が漢詩の趣味を俳句に遷しゝ事も、李杜を貴び元白を賤みし事も明瞭ならん。漢書は蕪村の愛讀せし所、其詩を解すること深く、芭蕉が極めておぼろに杜甫の詩想を認めしとは異なりしなるべし。

繪畫の上よりいふも蕪村は衰運の極に生れて盛ならんとして歿せしなり。蕪村は自ら畫を造りしこと多く、南宗の畫家として大雅と並稱せらる。天明以後繪畫僅かに勃興して美術史に一紀元を與へたる事に就きて、蕪村も亦多少の原因を爲さゞりしには非るも、其影響は極めて微弱にして、彼が俳句界に於ける關係と同日に論ずべきに非ず。

天明は狂歌盛んに行はれ、黄表紙漸く勢を得たる時なり。されど俳句とは直接に關係する所無し。只ゞ此時代が文學美術全般の勃興を成したるは文運の隆盛を促すべき大勢に驅られたる者にして、其大勢なる者は却て各種の文學美術が相互に影響したる結果も多かりけん。

蕪村の交りし俳人は太祇、蓼太、曉臺等にして其中曉臺は蕪村に擬したりとおぼしく、蓼太は時々ひそかに蕪村調を學びし事もあるべしといへども、太祇に至りては蕪村を導きしか、蕪村に導かれしか、今之を判ずるを得ず。とにかくに蕪村が幾分か太祇に導かれし部分もあり得べきを信ずるなり。然れども彼が師巴人に受くる所多からざりしは、成功の晩年にありしを見て知るべし。

履歴性行等

蕪村は攝津浪花に近き毛馬塘の片ほとりに幼時を送りしこと其春風馬堤曲に見ゆ。彼は某に與ふる書中に此曲の事を記して

　馬堤は毛馬塘なり、則余が故園なり

といへり。稍ゝ長じて東都に遊び、巴人の門に入りて俳諧を學ぶ。夜半亭は師の名を繼げるなり。寶暦の頃なりけん、京に歸りて俳諧漸く神に入る。蕪村もと名利を厭ひ閑適を求めず、然れども俳人として彼が名譽は次第に四方雅客の間に傳稱せらるゝに至りたり。天明三年十二月二十四日夜歿し、亡骸は洛東金福寺に葬る。享年六十八。

・蕪村は總常野毛奥羽など遊歷せしかども紀行なるものを作らず。又其地に關する俳句も多からず。西歸の後丹後に居ること三年、因て谷口氏を改めて與謝とす。彼は讃州に遊びしこともありけん、句集に見えたり。又嚴嶋の句あるを見るに此地の風情窮し得て最も妙なり、空想の及ぶべきにあらず、蕪村或はこゝにも遊べるか。蕪村は讀書を好み和漢の書何くれとなくあさりしも字句の間には限もとめず、只ゞ大體の趣味を玩味して滿足したりしが如し。俳句に古語古事を用ゐること、蕪村集の如く多きは他に其例を見ず。

彼が字句に拘らざりしは古文法を守らず、假名遣に注意せざりし事にもしるけれど、猶其他に爾か思はるゝ所多し。一例を擧ぐれば彼が自筆の新花摘に

　射干して呟く近江やわたかな

とあり。射干は「ひあふぎ」「からすあふぎ」などいへる花草にして、こゝは「照射して」の誤なるべし。蕪村が照射と射干との區別を知らざる筈はなけれど、斯る事に無頓著の性とて氣のつかざりしものならん　近江も大身と書くべきにや。秀吉が奥州を「大しゆ」と書きしことさへ思ひ出されてなつかし、蕪村の磊落にして法度に拘泥せざりし事此類なり。彼は俳人が家集を出版することをさへ厭へり。彼の心性高潔にして些の俗氣なき事以て見るべし。然れども余は磊落高潔なる蕪村を尊敬すると同時に、小心ならざりし、餘り名譽心を抑へ過ぎたる蕪村を惜まずんばあらず。蕪村をして名を文學に揚げ譽を百代に殘さんとの些の野心あらしめば、彼の事業は此に止まらざりしや必せり。彼は恐らくは一俳人に滿足せざりしならん。春風馬堤曲に溢れたる詩思の富贍にして情緒の纏綿せる

を見るに、十七字中に屈すべき文學者にはあらざりしなり。彼は其餘勢を以て繪事を試みしかども大成するに至らざりき。若し彼をして力を繪畫に伸ばさしめば日本畫の上に一生面を開き得たるべく、應擧輩をして名を擅にせしめざりしものを、彼はそれをも得爲さゞりき。余は日本の美術文學のために惜む。

春風馬堤曲とは俳句やら漢詩やら何やら交ぜこぜにものしたる蕪村の長篇にして、蕪村を見るにはことなく便となる者なり。俳句以外に蕪村の文學として見るべき者もこれのみ。蕪村の熱情を現したる者もこれのみ。春風馬堤曲とは支那の曲名を眞似たる者にて、其斯く名けし所以は蕪村の書簡に詳なり。書簡に曰く

一春風馬堤曲　馬堤は毛馬塘なり則ち余が故園なり

余幼童之時春色清和の日には必友どちと此堤上にのぼりて遊び候。水には上下の船あり堤には往來の客あり其中には田舍娘の浪花に奉公してかしこく浪花の時勢粧に倣ひ髮かたちも妓家の風情をまなび傳しげ太夫の心中のうき名をうらやみ故郷の兄弟を恥いやしむ者有之されども流石故園の情に不堪偶〻親里に歸省するあだ者成べし浪花を出てより親里迄の道行にて引道具の狂言座元夜半亭と御笑ひ可被下候。實は愚老懷舊のやるかたなきよりうめき出たる實情にて候

代女述意と稱する春風馬堤曲十八首に曰く

やぶ入や浪花を出て長柄川
春風や堤長うして家遠し
堤下摘芳草　荊與蕀塞路
荊蕀何無情　裂裙且傷股
溪流石點々　蹈石撮香芹
多謝水上石　教儂不沾裙
一軒の茶店の柳老にけり
茶店の老婆子儂を見て慇懃に無恙を賀し且儂が春衣を美む
店中有二客　能解江南語
酒錢擲三緡　迎我讓榻去
古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らず
呼雛籬外鷄　籬外草滿地
雛飛欲越籬　籬高墮三四
春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ
たんぽゝ花咲り三々五々五々は黄に三三は白し記得す去年此路よりす
憐みとる蒲公莖短して乳を泡
むかし〳〵しきりにおもふ慈母の恩慈母の懷袍別に春あり
春あり成長して浪花にあり
梅は白し浪花橋邊財主の家
春情まなび得たり浪花風流
郷を辭し弟に負て身三春
本をわすれ末を取接木の梅
故郷春深し行々て又行々
楊柳長堤道漸くくだれり
矯首はじめて見る故園の家黃昏戶に
倚る白髮の人弟を抱き我を待春又春
君不見古人太祇が句
藪入の寢るやひとりの親の側

總此外に澱河歌三首あり。此等は紀行的韻文とも見るべく、諸體混淆せる敍情詩とも見るべし。惜いかな、蕪村は之を一篇の長歌となし一大敍情詩の源を開く能はざりき。俳人として第一流に位する蕪村の事業も、之を廣く文學界の産物として見れば遂に規模の小なるに驚かずんばあらず。

蕪村は鬼貫句選の跋にて其角、嵐雪、素堂、去來、鬼貫を五子と稱し、春泥集の序にて其角、嵐雪、素堂、鬼貫を四老と稱す。中にも蕪

村は其角を推したらんと覺ゆ、「其角は俳中の李青蓮と呼れたるもの也」といひ「讀むたびにあかず覺ゆ、是角がまされる所也」ともいへり。しかも其缺點を擧げて「其集も閲するに大かた解しがたき句のみにてよきと思ふ句はまれ／＼なり」といひ「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ」と評せり。自己が唯一の俳人と崇めたる其角の句を評して佳什二十首に上らずといふ、見るべし蕪村の眼中に古人なきを。其五子と稱し四老と稱す、固より比較的の讃辭にして、芭蕉の俳句といへども其一笑を博するに過ぎざりしならん。蕪村の眼高きこと此の如く、手腕亦之に副ふ。而して後に俳壇の革命は成れり。

ある人咸陽宮の釘かくしなりとて持てるを蕪村は誹りて「中々に咸陽宮の釘隱しと云はずばめでたきものなるを無念の事におぼゆ」といへり。蕪村の俗人ならぬこと知るべし。蕪村嘗て大高源吾より傳はる高麗の茶碗といふをもらひたるを、それも咸陽宮の釘隱しの類なりとて人にやりし事あり。又ある時松嶋にて重さ十斤ばかりの埋木の板をもらひて、辛うじて白石の驛に持出でしが、長途の勞れ堪ふべくもあらずと、旅舍に置きて歸りたりとぞ。此等の話を取りあつめて考ふれば、蕪村の人物は自ら描き出されて目の前に見る心地す。

蕪村とは天王寺蕪の村といふ事ならん、和臭を帶びたる號なれども、字面はさすがに雅致ありて漢語としても見られぬにはあらず。俳諧には蕪村又は夜半亭の雅名を用ふれど、畫には寅、春星、長庚、三菓、宰鳥、碧雲洞、紫狐庵等種々の異名ありきとぞ。彼の謝蕪村、謝寅、謝長庚、謝春星など言へる、門弟にも高几董、阮道立などある、此一事にても彼等が徂徠派の影響を受けしこと明なり。二字の苗字を一字に縮めたるは言ふ迄も無く、其字面より見るも修辭派の臭味を帶びたり。

蕪村の繪畫は余曾て見ず、故に之を品評すること難しと雖も、其意匠に就きては多少之を聞くを得たり。（筆力等の技術は其書及び俳畫を見て想像するに足る）蕪村は南宗より入りて南宗を脱せんと工夫せしが如し。南宗を學びしは其雅致多きを愛せしならん。南宗を脱せんとせしは南宗の粗鬆なる筆法、狹隘なる規模が能く自己の美想を現すを得ざりしが爲ならん。彼は俳句に得たると同じ趣味を繪畫に現したり。固より古人の粉本を摸し意匠を剽竊することを爲さゞりき。或は田舍の風光、山村の景色等自己の實見せし者（且つ古人の畫題に入らざりし者）を捉へ來りて、支那的空想に耽りたる繪畫界に一生面を開かんと企てたり。或は時間を寫さんとし、或は一種の色彩を施さんとして苦心したり。（色彩に關する例を擧ぐれば春の木の芽の色を樹によつて染分けたるが如き、夜間燈火の映じたる樹を寫したるが如き）繪畫に於ける彼の眼光は極めて高く、到底應擧、呉春等の及ぶ所に非ず。然れども蕪村は成功する能はずして歿し、却て豎子をして名を成さしめたり。

蕪村の畫を稱する者多く俳畫をいふ。俳畫は蕪村の書きはじめし者にして一種摸すべからざるの雅致を存す。然れども俳畫は字の如き者のみ、終に畫に非ず、畫を知らざる者之を以て畫となす、取らざるなり。蕪村の字支那の書風より出でゝ稍ゝ和習あり。縱橫自在にして法度に拘らず、しかも俗氣無きこと俳畫に同じ。

蕪村の文章流暢にして姿致あり。水の低きに就くが如く停滯する所無し。恨むらくは彼は一篇の文章だも純粹の美文として見るべき者を作らざりき。

蕪村の俳句は今に殘りし者一千四百餘首あり、千首の俳句を殘したる俳人は四五人を出で

ざるべし。蕪村は比較的多作の方なり。然れども一生に十七字千句は文學者として珍とするに足らず。放翁は古體今體を混じて千以上の詩篇を作りしに非ずや。只ゞ驚くべきは蕪村の作が千句盡く佳句なることなり。想ふに蕪村は誤字違法などは顧ざりしも、俳句を練る上に於ては小心翼々として一字苟もせざりしが如し、古來文學者の爲す所を見るに、多くは玉石混淆せり、爲す所多ければ巧拙雨ながらいよいよ多きを見る。杜工部集の如き是なり。蕪村の規模は杜甫の如く大ならざりしも、兎に角千首の俳句盡く巧なるに至りては他に例を見ざる所なり。蕪村の天材は咳唾盡く珠を成したるか、蕪村は一種の潔癖ありて苟くも心に滿たざる句は之を口にせざりしか、抑も惡句は埋沒して佳句のみ殘りたるか。余は三者皆原因の一部を分有したりと思ふ。俳句に於ける蕪村の技倆は俳句界を横絶せり、終に芭蕉、其角の及ぶ所に非ず。連句も亦蕪村は蕪村流を應用して面目を新にせり。然れども蕪村は芭蕉が連句に力を用ゐしだけ熱心には力を爰に伸さゞりき。

蕪村の俳諧を學びし者月居、月溪、召波、几圭、維駒等皆師の調を學びしかども、獨り其堂に上りし者を几董とす、几董は師號を繼ぎ三世夜半亭を稱ふ。惜むべし、彼れ蕪村歿後數年ならずして亦歿し、蕪村派の俳諧茲に全く絶ゆ。

明治廿九年草稿
明治卅二年訂正

（明治三十年四月十三日―十一月二十九日）

水滸傳と八犬傳

序

今更斯樣な題を出したら人は氣が違ふたかと疑ふであらう。小說といふ上に於ては非常に進步したる明治の今日に當つて、極めて幼稚なる此二小說書を取り出して比較するといふは何故かといふに、第一、此二小說書は今日より見ては幼稚であるけれど其書の出た當時には何れも非常の傑作であつて外の書に比して數等を超えて居た、卽ち小說の歷史よりいふ時は是非とも此二書は其時代の代表者として現れ出なければならぬ者であるといふ事である。此點に於て此二書は今日のへろへろ小說とは選を異にして居る。今日の小說は時代の上で進步して居るけれども此二書の如く其時代の代表者と見做すべき者が一向に出て來ない。それ故に今の小說の評などはやつた事のないのに拘らず、わざわざ此幼稚な二書を引き出した次第である。第二、余が幼い時、まだ明治の小說といふやうな特色は芽もふかなかつた時に余を慰めた者は飜譯の水滸傳、西遊記、演義三國志・漢楚軍談、武王軍談の類と馬琴の小說とであつた。殊に水滸傳と八犬傳とは名高くあつただけに幼稚な腦髓に深く染み込んで其時起つた一種の感じはいつ迄も忘れぬ。それであるから此二書は巧拙の外にいくらか尊敬すべき處があつて今更批評して見ようといふ氣にもなるのである。第三、昨年五月病氣に惱まされて後、元氣僅に恢復した時に、まだ筆を執る事も出來ず、かたくるしい本を見るもいやだし、何をして日を暮さうかと考へたが、普通の人なら新小說とか文藝俱樂部とかを讀む處であらうけれどそれは手に取るのもいやなので、終に水滸傳を見ようと思ひついた。子供の時に貸本屋で、五冊づゝが一晝夜五厘といふ水滸傳を借りて讀んだ時は固より大體の趣向を見るばかりで、其上飜譯本の事だから文章などは見ようも見られなんだ、それを今度始めて原書を見ると思ひの外に面白かつた。文句の分らぬ處も澤山あるけれど一度譯書を見てうろ覺えに覺えて居るからまんざら分らぬ程でもない。病後の事で休み休み讀むのであるが一冊讀み二冊讀み終に十日程の後に二十冊七十回（金聖歎本）を晦ゝ讀みつくした。金聖歎の評といふものも今度始めて見た。水滸傳はさうであるが八犬傳の方は子供の時に夢の如く讀んだばかりでなく其後又讀み返した。特に面白いと思ふた處は書き拔きもし諳誦までして居た。八犬傳は二十二三歲の頃迄も余の愛讀書の一であつたかと思ふ。それ程愛讀する位だから固より名文だと思ふたので迚も水滸傳などの比ではないときめて居たのである。もつとも其後は八犬傳が非常に嫌ひになつて手に取るもいやになつたのは前の反動でもあらう。然るに好きであつた八犬傳がいやになつたと同時に、今迄輕蔑して居た水滸傳が反對に面白くなつて來たので、そこで二書の比較といふやうなものを書いて見たく思ふのである。併し斯樣な議論は二書を善く讀んで居る人には陳腐な論で、又二書を讀まぬ人には何の興味も無いであらう。只こんな議論を書くのが最も無造作に出來て病後の頭腦を痛めぬといふだけの事に過ぎない。

水滸傳の來歷

斯るむづかしい問題は我々の知る所ではない

のであるが幸ひに目さまし草、巻之二十に水滸傳の事が詳しく出て居るから其中より槐南氏の說を拝借して大略を左に擧げて置く。

一、水滸傳には種々の異本があるが、李卓吾が評を加へた百二十回本は明の萬暦年間即ち神宗の代、豐太閤征韓の頃に出來た。金聖歎が評を加へた七十回本はこれより後のもので中に明末崇禎の年號が記してはあれど實は清初に出來た者である。

一、水滸傳の作者は羅貫中ともいひ施耐庵ともいひいづれとも分らぬ。羅貫中は明初の洪武の時まで生きて居た人で、多分元の人であらう。施耐庵も元の人である。

一、金聖歎が水滸傳を七十回で切つたのは無意當を得ない。これでは盧俊義や燕青がどんな人間だか少しも分らぬ事になる。

一、宋末に出來たといふ宣和遺事の中に宋江等卅六人の謀反の事が出て居る。水滸傳はこれから出たもので七十二人を加へて百八人としたのである。

一、水滸傳の俗語は土地によつて區別してある。宋江、呉用、三阮等は山東訛、魯智深、楊志等は關西訛である。

一、元人百種曲中にても水滸傳に關した戯曲、殊に黒旋風の事を作りたる者が多い。これでも水滸傳が當時に流行した事が分る。

此外萬外氏其他の細かい說明があるがこゝには略して擧げぬ。

八犬傳の來歴も定めし面白い事が澤山あるであらうが左樣な方には少しも心得の無き余なればこゝに掲載する事が出來ぬ。只兩書とも非常に世にもてはやされた事は同樣で、八犬傳も初の方が出た時にもう芝居にしたといふ事である。それかあらぬか馬琴は荒芽山に道節、莊助の會合を書く時に芝居的のせりふを眞似て居るのは實に氣障だ。

二書の類似

水滸傳は支那にはやつたばかりでなく我邦でも持てはやされた本である。馬琴の八犬傳が水滸傳を眞似て居るといふ事は世人が普通にいふのみか、馬琴自身が既にさう言ふて居る。誰も知つて居る事であるが其類似點を大略いふて見よう。

先づ大體の趣向が兩書全く同じである、水滸傳は百八人の豪傑の離合集散を叙し、終に百八人が梁山泊に會して後、朝廷の招安を受け、それから方々の戰に花を咲かすといふ事になつて居る。八犬傳も八人の豪傑の離合集散を叙し、終に八人が會合して里見家に仕へ、それから上杉定正と花々しく戰ふてそれでめでたく了るといふ趣向である。

水滸傳は宋代の事實を本にして、それを敷演して作つたのぢやさうな。しかも其事實といふのは徽宗の時、宋江等三十六人の徒が謀反して一時は勢が強かつたが、終に張叔夜のために滅されたといふ位の事である。八犬傳も多少事實に據つたので、足利の代、安房の里見に八犬士があつて、其名は犬山道節(乳名道松)犬塚信乃(乳名志之)犬坂上毛(乳名毛野)云々といふた、といふだけをあんな長い者にこしらへあげた。それ故此兩書は歴史的の者でありながら演義三國志のやうなのとは違つて居る。此點は二つが非常に善く似て居る。

兩書とも主人公が多く事件が多くて主人公の一代記の集まつたやうなもので隨つて全篇が非常に長くなつて居る。これは無論馬琴が水滸傳をまねたのである。特にまねようとは思はなかつたらうが、小說といふものはかういふ風に書くものぢやと思ひ込んでしまふて、今日の如く一人の主人公の一生中の極些細な一事件を全

篇の趣向にするといふことには無論思ひ及ばなかつたのである。

兩書とも一般に始めの方が趣向に趣味が多くて終りに近づくほど趣味が減じて居る。これは主人公が多くて且つ其主人公は始めは一人々々の列傳の樣になつて居るけれど、終りには總ての主人公が一所に會するといふ趣向であるから、つまり始めが比較的簡單で終りが複雜に過ぎて居るためである。卽ち簡單な趣向の中には趣味のある場合が多いのである。

水滸傳では百八人を出すために洪信が伏魔殿を發くといふ序幕で、

只見穴內、刮刺々一聲響亮。那響非同小可。響亮過處。只見一道黑氣。從穴裏滾將起來。掀塌了半個殿ﾉ。那道黑氣直沖到半天裏空中。散作百十道金光。望四面八方去了。

駭人之筆○他日有稱我者。有稱俺者。有稱小可者。有稱洒家者。有稱我老爺者。皆是此句化開。(金聖歎の評なり。以下細字皆同じ)

とある。それが八犬傳の方では伏姫が切腹するといふ事になつて居て

護神刀を引拔いて、腹へぐざと突き立て丶、眞一文字に搔き切り給へば、怪むべし瘡口より、一朶の白氣閃き出で、襟にかけさせ給ひたる、彼水晶の珠數をつゝみて、中空に昇ると見えし、珠數は忽ち弗とちぎれて、その一百は連ねしまゝに、地上へからりと落ちとゞまり、空に殘れる八の珠は、粲然として光を放ち、飛び遝り入り紊れて、赫奕たる有樣は、流るゝ星に異ならず。

と書いてある。水滸傳の黑氣は惡漢が出さうで、八犬傳の白氣は善人が出さうな處などは面白い、が馬琴の眞似方の下手なのには驚く。水滸傳の方はとにかく多少の筆勢があるが、八犬傳の方はだら〳〵と優長に出來て居て間の拔けた事は夥しい。併しこれは邦文と支那文との特質の差違として假に恕した處で、全體の感じの善い惡いが丸で比較にならぬ。伏魔殿を發いて分らぬ字の書いてある石碣を押し倒して、石の龜を掘り起して、妖星を走らした、といふ趣向は荒唐無稽としても感じが善い。然るに伏姫が富山に籠つて、犬の子を八匹孕んで、鐵砲玉に中つて、親や夫の前で腹を切つた、などといふは何としてもいやな感じがする。殊に水滸傳の如きは荒唐無稽でないとも解せらるゝやうにうまく出來て居るが、八犬傳の方は荒唐無稽とも牽强附會とも言やうの無い厭な趣向だ。

役の行者が張天師の面影で、牛に騎つた童はそつくり其儘だ。

只聽得松樹背後。隱隱地笛聲吹響。漸漸近來。

かゝる處に乾なる、八重山の根方に當りて、笛の音幽かに聞えけり。

と出て來て

道童笑了一聲。也不回應。又吹著鐵笛。轉過山坡去了。

はやまからん、といひかけて、牛の鼻づら牽き返し、山川へさと逐ひ入れて、涉すと見れば玉かつら、影は狹霧に立ち籠められて、往くへも知らずなりにけり。

と引つ込む。此引込の處の八犬傳の文は謠曲風であるだけに外の文の樣にたるんで居らぬ。其上此一段は甚だ感じの善い處で、八犬傳中でこれ程感じの善い場所は殆ど外に無い。錫童の因果談なぞは面白くもないけれど兎に角全體の感じが善いために畫にしても外の插畫のやうに俗ではない、常磐津で聞いても存外上品に出來て居る。馬琴にしては大出來である。

大體と序幕の趣向は兩書が非常に善く似て居るが、八犬士の傳になつては趣向がそれ程に似て居らぬ。其中一二の類似を擧ぐれば、

水滸傳では公孫勝とか高廉とかいふ魔法つかひが出て居るので馬琴も是非之を出さうと思ふたと見えて道節と素藤とを出して居る。其中道節の圓塚山火定の場は善く出來て居る。水滸傳の魔法は大袈裟であるだけにこの妙は無い。(尤も李逵が羅眞人を斬る處は別種の妙味がある)火定はよかつたが左母二郎の一件は餘りくだくだしくていやになる。それから道節が魔法の本を焼いてしまふたといふのは、當を得て居る。水滸傳でも魔法は調和しにくいやうに思ふといふものは、公孫勝といふ魔法使ひがあれば、いつの戰にでもこの魔法を利用すればどんな敵にでも直様勝ちさうなものゝやうに思はれるのに、實際この法を利用した場合が非常に少いのは不審に堪へない感じがする。併し水滸傳はそれでもよいが、水滸傳よりは時代の新しい八犬傳では甚だ調和がむづかしいために馬琴も中途で之を焼いてしまふたのであらう。

水滸傳には虎が度々出て來る。序幕に洪太尉をおどかした虎は影のやうな虎であるが、其の外に武松の殺した虎と李逵の殺した虎と二様にある。馬琴も虎を出して見たかつたのであるが、我國では何分にも虎の出しやうが無いので、繪の虎が抜け出るといふ趣向を思ひついたのであらう。けれども、もとが無理にこしらへたのであるから、虎が少しも活動しないばかりでなく凡ての趣向が悉く無理に出來あがつて居つて少しも面白くない。其外に虎ではないが、武松打虎の面影を寫したのは、小文吾が猪を殺す所であるが、其寫しかたには雲泥の差がある。武松打虎の一段は水滸傳中でも出色の文字であるが、猪を打つところは無造作で無趣味で何の曲折もなくて、とても水滸傳と並べていふべきものでない。武松が虎を打つた爲に武松の面目を現はした程に、小文吾は猪を打つて其面目を現はすことが出來なかつた。馬琴もそれに氣がついて、どうかして小文吾の面目を現はしたいといふので、再び鬪牛の一段を持出したのである。併しそれも不成功に終つた。小文吾の腕力は理窟的に説明されたけれども、牸牛の光景は甚だ下手に寫されてしまつた。

對牛樓に於ける毛野の讎打が水滸傳の血濺鴛鴦樓に似て居ることは人のいふところである。けれども其光景を寫す處は固より水滸傳程に趣味深くは出來て居らぬ。殺人者打虎武松也の如き奇語は到底馬琴の考へ得ざるのみならず恐らくは馬琴は其語の趣味をも解し得ないであらう。水滸傳の作者がこの一段に於て燈影を寫し月光を寫した處は、この殺風景の景色をそれ程殺風景ならしめざる妙手段であるが、併し一つは支那文の特色がかやうな處によく現はれるのでもあらう。

水滸傳では水軍の統領といふのがあつて時時そいつが出て來て一種異様の花を咲かして居る。馬琴も何かそんなことをやりたかつたのであらうが、其機會を作り出すことが出來なかつたらしい。八犬傳の最後の大戰は三國志や水滸傳を取合せて海戰をやつて居るが、それは却て面白くない。水滸傳でも水軍の面白いのは大軍の場合でなくて他の場合である。李逵が水中で張順と鬪ふ處から、蟇六が神宮川に飛込むといふ趣向を考へ出したかも知らぬが、蟇六の方は感じがわるくて比較にならぬ。それから三阮兄弟が一葉の小舟をあやつりながら歌をうたふ處は水滸傳特得の趣味があるが、馬琴がそれを眞似したのは實にまづく出來て居る。一例を擧げると盧俊義がだまされて梁山泊の小舟に乘つて居ると、

約 行三五里水面。只聽得前面蘆葦叢中櫓聲響、一隻小船飛也似來。船上有兩箇人。前面一箇赤條條地拏著一條木篙。後面那箇搖著櫓。前面的人

横定篙。口裏唱著山歌道。

　英雄不會讀詩書。只合梁山泊裏居。
　准備窩弓収猛虎。安排香餌釣鼇魚。

盧俊義聽得。喫了一驚。不敢做聲。又聽得左邊蘆葦叢中。也是兩個人搖著一隻小船出來。後面的搖著櫓。有咿啞之聲。前面横定篙。口裏也唱山歌道。

　雖然我是潑皮身。殺賊原來不殺人。
　手拍胸前青豹子。眼睃船裏玉麒麟。

といふことになつて居る。八犬傳では信乃現八小文吾等が莊助を救ふて戸田川迄遁げて來た時渡し船がないのにこまつて居ると

　近づく敵をまつ折から、誰とはしらず水際なる、繁高蘆をおしわきて
　　漕ぎよする一葉の船のなかりせば秋の川波誰かとはまし
　かく歌ひつゝこなたの岸へ、はやくも纜をよするものあり。四犬士これを見かへりて、彼も敵か、と訝れば蓑笠著たる一人の船人、遽しくさし招きて、殿はら早く乗り給ずや。

　この八犬傳の間の抜けさ加減には驚く。水滸傳の方は趣向と文と歌と大概調子が合ふて居る。七言絶句も俗な處はあるが、其俗な處がよくこの場合に適合して居る。英雄不會讀詩書と堂々と出しかけたのも面白い。殺賊原來不殺人と警句を插んだのも面白い。馬琴のは舟の出方も間が抜けて居るが歌の理窟ぽくて節の優長なのも間が抜けて居る。こんな所の趣味はとても馬琴にわかる筈は無いが、これで水滸傳を眞似得た積りであるならば愈々以て驚く。次に只二、力八の水中より現はれ出でゝ戰ふ處は三阮等のまねであらうがこれも一向冴えない。

　奈四郎と夏引と姦して木工作を殺したる一段は西門慶の武太が妻に姦する面影であつて、二人が寺で密會した處は潘巧雲が賊禿に密會する爲に寺へ行た處を翻案したのであらう。併し八犬傳の方が趣向が拙く出來て居る。

　斯樣な類似は此外に幾らもあるであらう。

　其外文字、文句も水滸傳を眞似た處が多い。一回毎の始に對句の表題を置いたのも其一例である。

　　梁山泊好漢劫法場
　　白龍廟英雄小聚義

と水滸傳に在る。八犬傳にも

　　[illegible][illegible]小豪傑[illegible]法場
　　[illegible]義士[illegible]投河水

と同じやうに書てある。併し八犬傳の方はまづい。啻に支那文としてまづいばかりでなく日本文としてもまづい。馬琴には支那の味といふものは少しもわからなかつたのである。

　話分兩頭を一こゝにまた、と譯し、不在話下を、はなしこのしもになし、と譯し、說時遲那時快を、說時遲く此時早く、と譯し、一回の終りに、

　　畢竟兩個裏[illegible]殺[illegible]了一個的是誰。且聽
　　下回分解。

とあるやうな處を

　　畢竟今[illegible]原より、猛に呼かけたるは誰ぞ。
　其は次に解分るを看て知らん。

としたるが如き類は澤山ある。

　以上擧げた位な類似は長い八犬傳の中にあつたとてそれが爲に八犬傳を傷つける程ではない。併し乍ら創作と模倣とを比較すれば創作の手柄の多いことはいふまでもない。極めて些細なつまらぬ事でも創作するとなると思の外に骨の折れるものである。馬琴がこれだけ水滸傳を眞似したのは水滸傳の作者がそれだけ馬琴を支配して居つたので、此點に於て馬琴は到底一歩を水滸傳に讓らなければならぬ。

二書の差異

二書の類似は前言ふた通りであるが、二書の差異はどの邊に在るか、この問題を解すれば則ち二書の價値がわかることになる。

水滸傳を讀んだのと、八犬傳を讀んだのと、極大體の感じに於て非常の差異がある。それを一口にいへば、水滸傳は無邪氣で、八犬傳は理窟ぽいといふことである。是は誰が讀んでも必ず一樣に感ずることであらう。出て來る人間の上に就て見ても水滸傳は無邪氣な人間が多いが、八犬傳は悉く理窟ぽい人間である。趣向の上に就て見ても水滸傳は無邪氣で八犬傳は理窟ぽい。文句の上に就て見ても矢張同樣である。此點に於て八犬傳は著く水滸傳に劣つて居る。小說としての八犬傳の價値は此理窟ぽいといふ事のために相當に落ちて居るのである。一例を擧げていふと水滸傳の序齣は伏魔殿を發いて妖星を走らしたといふだけのことで、其妖星が後の百八人であるかないかは理窟的に說明はしてない。つまり妖星と百八人との關係は極めて漠然たるもので、若し理窟家があつて百八人は妖星の生れ變りでも何でもないと主張すれば主張せられるやうに出來て居る。こゝが水滸傳の面白い處である。然るに八犬傳の方では八犬士と伏姫との關係が極めて密接に理窟づくめに少しも疑を挿む餘地のないやうに出來て居る。此理窟ぽい處が馬琴の第一の缺點である。馬琴には八犬士を作り出す爲に先づ犬といふ事をこじつけて伏姫と犬との關係を拵へた。それから其關係が非常に無理であるから其無理を打消す爲に槃瓠氏の古事を引いたり、或は匈童に咄嗟の理由や尺足らずのわけや色々な事を說明させたりして本文や序文で頻りに理窟をこじつけてゐる。併しそれ位な理窟ではまだ其關係を十分にする事が出來ないと思ふたと見えて八珠數の珠から仁義禮智の八の玉を拵へたり、八房の毛色から牡丹の痣を考へ出したりといふやうに二重三重の理窟がらみにして、これならば八犬士に何の疑もなく伏姫の子であると云ひ得るやうにしてしまふた。實に拙とも醜ともいひやうのない程厭な趣向である。馬琴は水滸傳のやうな漠然とした處に小說の妙味があるといふ事を知らないで、却て自分の拵へたやうに理窟がらみになつて居るのを非常に用意周到の仕事と思ふて喜んでゐたらしい。馬琴は到底理窟を離れる事の出來ない人間であつた。

八犬傳は始めから終りまで大きな趣向も小さい趣向も悉く理窟であるから一々其例を擧げる迄もないが、試に一二をいふて見れば、義實が土を握つたから國を握る徴だとか、義實は龍の頭を見て家來には龍の尾を見たとか、吳四郎の縁から八房の毛が生えたとか、伏姫の伏の字は人に犬が从ふたとか、只二力八が八房の二字を縦横してあるのだとか、沼藺が「いぬ」の逆さであるとか、房八が八房の逆さであるとか、或は仁の玉を出すのに苦んで殺身成仁といふ古語から思ひついたこじつけの趣向を拵へるとか、前の濱路が死んだから後から同名の濱路姫を出すとか、或は玉梓の怨靈が里見家に祟つて金碗八郎も死ぬれば伏姫も犬に嫁いだのであるとか、或は椿木の朴平が那古の七郎を殺したから朴平の子の房八は七郎の姪の小文吾に殺されたとか、奈四郎は惡人であるから其家來に殺されてそれでもまだ息が絶えずにゐて信乃が之を殺して自ら復讐の出來たのには天の分配寔に妙なりとか、八犬士が八人の姫を娶るのにそれを鬮引にしたらば其配合が一々理窟にあつて居るとして其理窟を說明するとか、要するにどの部分をひつかまへても全く理窟を離れて居るといふ處はない。名詮自稱といひ、因果應報といひ天つ[illegible]といひ、是等理窟的の成語

は馬琴の慣用語となつて、趣向も是から割り出し、其上自ら其趣向を讃するに必ず此語を用ゐてゐる。

　人間を作るのにも水滸傳の方は理窟なしの無邪氣な人間を作つて居る。宋江、吳用等二三人を除くの外は皆愚直な朴訥な腕力の強い、いたづら盛りの腕白小僧の樣な人間が集つて居る。之に反して八犬傳には理窟ぽい角のある窮屈な鹿爪らしい人間ばかりが出て居る。八犬士などはいふ迄も無く仁義禮智八行の文字を擬人にしたといふべき程のものであるから、信乃はどこまでも孝で、莊助はどこまでも義で、道節はどこまでも忠で、といふやうな風に人間も其行ひも理窟から割出してある。それであるから人間が皆窮屈で磊落な處や無邪氣な處がない。人間が理窟ぽい上に趣向が理窟づめであるから、水滸傳の如く案を打つて快哉と呼ぶやうな場所は出て來ない。併し一方からいふと、かやうな手段で八犬士の性行を一々變化させたのは作者としては狡猾の手段をとつたもので、寧ろ其働きを譽めてやつてもよいのであるが、たゞ仁義八行を表面に現して隨つて終始これに拘泥したのは餘り譽めるべきことではない。●

　其外、既に世人もいつて居る通り、學識に誇るといふ事は馬琴の厭味の一つである。龍の論を長々しく出すとか、何の學問もない小文吾が支那の古書から鬪牛の故事を引出すとか、其上越後の鬪牛は何某の報知に據つた事實談であるとて小說以外の事を說明して見たり、斯樣な事は處々にあつて見る度に厭はしく感ずる。是は必ずしも馬琴が博學を誇るといふわけでもあるまいが、兎に角學識がある上に頭が理窟で固まつて居るから其故事に出逢ふた時には性分として默つて見遁すわけにいかないのであらう。

　殊にをかしいのは額藏が陣代を殺した條の終に「作者此段を創し終りて獨りそゞろに贊して云善惡應報果せるかな」云々と自畫讃をやつた處である。若し馬琴が小說の趣味でも文章の趣味でも本當に解してゐたならば、自分の作が幾ら善いと思ふても自讃などの出來るものではない。けれども馬琴には趣味などはわからん。馬琴は理窟が最もよく合ふて居るのが最よき小說と信じて居るから自分の小說を遠慮なく賞めるのであらう。若し因果應報の理が綿密に現れて居るのが小說の妙處ならば馬琴の小說は慥かに自讃の値打がある。理窟ぽい小說がよくないといふ事は明治の人に向て今更に說く迄もあるまい。尤も水滸傳には金聖歎の評があつて本文に光彩を添へて居るのを見て馬琴も試に自分が金聖歎を兼て評してみたのであらう。併し金聖歎の評はこんな無趣味なものではない。

　前にもいふた通り、馬琴の趣向は總て因果應報とか勸善懲惡とかいふ理窟から出て居るのであるから、いつも事件の結果が同じ事に終つて何の變化もない。即ち善人は榮え惡人は亡ぶといふ結果は讀まぬ前からわかつて居る。其中間に多少の波瀾はあるけれども、其波瀾も無理に起して無理に收めるといふやうな痕跡が見えて興味の索然とする處が多い。水滸傳には一度出た人物が引込んでしまふてそれが二度出さうであつて終に出て來ないといふやうなのがある。王進の如きが是である。是が水滸傳の面白い處であるけれど、馬琴の理窟ぽい頭では其出さうで出ぬのが氣になると見えて馬琴は之を攻擊して居る。それであるから馬琴の小說には一度出た人間は必ず其つゞまりがついて居る。即ち其人の最期まで書てあるか、さうでなければ其人の話は此後に無いとことわつてある。是等が誠にいらぬ心配であつて此が爲に却て冗長の弊に陷つて居る。

　水滸傳の方は百八人が集まるものゝ何もそれに玉とか痣とかいふ證據があるでもなし、皆が

犬といふ姓をつけて居るでもなし、仁義禮智を名前につけて居るでもなし、唯偶然集まつたのであるから若し此百八人が悉く星の後身であるかどうかは覺束ない位である。況して其他の事は毫も理窟なしに無邪氣に作つてある。世の中の事は因果應報によつて支配せられぬでもないが、併し馬琴の小說のやうに覿面に來るものではない。寧ろ水滸傳のやうな無邪氣な方が事實に近いのである。馬琴は此點に於て水滸傳より更に一步を進めた積りであつたらうが、其實數步を退いて居る。

ついでに二書の荒唐無稽の程度に就て更に詳しく陳べう。趣向の性質からいふと、どうしても水滸傳の方に荒唐無稽なことが多くて八犬傳の方には少くなくつてはならぬわけである。けれども實際は反對の結果をあらはして居る。水滸傳では妖術といふ一事を許しさへすれば其他の事は悉く眞實として即ち人間社會に有り得べき事として解釋することが出來る。百八の妖星と百八の豪傑との關係は前にもいふた如く漠然たるものである。石碑が天から落ちて來たといふ事は公孫勝の妖術とすれば解釋が出來る。九天玄女に卷物を授かつたといふ事は宋江の詭謀とすれば解釋が出來る。其他には戴宗の足の早い位の事であるが是は早足の人を誇張的に書いたものと見てもよからう。其他總て水滸傳の豪傑が人を殺したり虎を殺したり水を潜つたりする處は稍實際に遠いやうであるが、併し是等は皆腕力膽力を極端に誇張したものであるから決して荒唐無稽といふべき性質のものではない。其上妖術といふことも荒唐無稽には違ひないが、さりとて世人が皆荒唐無稽と認めて居るやうな事を殊更に引出して來たのではない。妖術といふ事は昔の支那人に信ぜられて居つたのみならず、今の支那人にですら信ぜられて居る。現に此頃騷いで居る義和團は妖術を使ふと支那人一般に信じて居るではないか。其多數の人に信ぜられて居る妖術といふものを試に客觀的に現はして見たらばそれが水滸傳のやうな妖術にもなるのである。さういふわけであるから水滸傳の作者は殊更に荒唐無稽を喜んで妖術を書いたのではない。寧ろ水滸傳に妖術のあるのは其時代の人間の考への反照といつてもよいのである。然るに八犬傳の方は荒唐無稽な事が多い。前にいふた八犬士の因緣や玉の出來を始めとして、其玉の奇特や、伏姫死後の神業や、山猫の化身や、狸の怪や、狐の靈や、些細な事をいへば八房の梅に仁義禮智の字が現れたとか、或は村雨の名刀を振廻したら火事が消えたとか、斯樣な下らぬ事は數へるに遑がない程である。此內には水滸傳の妖術の如く其時代の人間には幾らか事實として承認せられ得べき事もないではなからうが、併し無智無識の童子の外は悉く之れを信ずる者は無かつたらう。八犬傳は此點に於て水滸傳よりも却て野蠻臭く出來て居る。其上水滸傳的の誇張は八犬傳も襲用して居る。

次に複雜の程度に就て言はう。水滸傳の主人公は百八人で、八犬傳のはたゞの八人であるけれど、二書の趣向の複雜の程度を比較すると、水滸傳の方は簡單で八犬傳の方は複雜である。水滸傳には非常に多くの場合が現はされて居るけれど、それは皆時間的にすら〳〵と經過して行くので一件終つて他の一件起り一人退いて他の一人進むといふやうに少しも事件に滯りがないから複雜には感じない。一つの事件の最も長く關はつて居る場合でも、一打祝家莊、二打祝家莊、三打祝家莊位なものである。それが八犬傳の方では一事件といふやつが非常に複雜して居つて始めから終りまでは隨分長いが上に、甲の事件は乙の事件を產み出し、乙の事件は丙の事件を產み出し、枝には枝が出、葛藤には葛

葛藤が重なつていつ終るかわからぬやうな趣がある。最も極端な處は信乃濱路契別の處から芳流閣上の闘ひ、小文吾房八の爭ひ、神宮川の戰ひ、道節定正の戰ひ、遂に荒芽山の五犬士の會合に至るまで僅々數日の間の事件が二十五六回を占めて居るといふに至つては其複雜なのに驚かざるを得ない。其外一事件毎に必ず因を說き果を說くので一小事件と雖も容易に敍し去ることではない。かういふ工合であるから水滸傳では百八人の外には一度出て一度引つ込んだ人間は再び出て來ることは無いが、八犬傳では必ずしもさうではない。一高僧の如きは別物である 籠山逸東太といふ奴が甲の場所で引つ込んだと思ふと、少し間をおいて乙の場所に突然と現はれる。船蟲の如きは一度現はれて一度隱れ、二度現はれて二度隱れ、三度現はれて三度隱れ、殺さんとして殺されず、危急の場合に一命を助かつて何處迄も惡黨を働いて居る。これは水滸傳の惡漢が無造作に身首處を異にするのとは違ふて、餘程複雜に出來て居り、且つ惡黨の性質を最も善く現はして居る。此點に於て八犬傳は水滸傳よりも小說といふ伎倆の上に一步を進めて居る。即ち人生の出來事には非常に複雜になつて居る部分があつて、然も其部分は世人の喜んで聞く所であるといふことを馬琴は看破したのである。更に他の言葉を以て言へば小說の材料として最も面白き部分を馬琴が捉へて讀者の好奇心を滿足させたのである。これは一つには馬琴の働きであるが、二つには水滸傳よりも四五百年後に出來て後世の複雜したる趣味に適合し得たわけでもあらう。併しながら八犬傳の複雜さ加減を言へば實は一般に複雜に過ぎて居るのである。人間には複雜な事件も多いけれど、それは多く內容の方に複雜なのであつて八犬傳の如く外包の贅くして複雜なるのは實際にはない。理窟的に小說を見るものは事實に遠いと近いとを問はず無暗に複雜して居るのを喜ぶ傾きがあるけれど、感情的に趣味的に小說を見るものは決して外包の贅く複雜して居るのを喜びはしない。

次に寫實の程度に就て言はう。趣向の上では八犬傳には荒唐無稽の事が多く或は餘り複雜に過ぎて實際の世間に遠いことが多いが、極こまかい部分の敍述のしかたに於ては八犬傳は非常に綿密に敍してある處がある。甲の人が乙の人を訪ふた場合にでも一々寒暄を敍して用事の由來を述べて暇乞の挨拶まで述べて歸るといふやうな風に書いてある。此點に於ても小說の發達の上から見て八犬傳は水滸傳よりも發達して居るといはねばならぬ。併しながら其考へは發達して居るに拘らず實際事物に現はれた結果を見ると、八犬傳は其寫實的にこまかくかいたが爲に冗長になつて居る事が多い。甚だしきは同じ一事件を二處にも三處にも繰返して人を倦かしめるやうなことがある。馬琴は矢張失敗して居る。水滸傳の方は普通の處では極めて省略してあるにも拘らず、ある一つの面白き場合、後に擧げたる武松の一段の如きには比較的に、こまかく敍述がしてあつて、それが爲に其場が活動して居るといふやうなことがある。水滸傳に小說として幼稚なのにも拘らず、かやうな處は意外に簡潔其要を得て居る。

次に變化といふことに就て言はう。水滸傳の方が人間も事件も多いが存外變化には乏しい。人間でも同じやうな人間が澤山出て來る。技術の上に於て槍の名人だとか弓の名人だとか大砲方だとか石投げの上手だとか斧を持つて居るとか青龍刀を持つて居るとかさういふ點に於て一々違ふては居るが、其性格を見ると略ぼ一樣なものである。又事件の上に於ても罪を得て流されて後にまた逃げて遂には梁山泊に集るといふやうな仕組か、又は梁山泊の軍に破られて遂

に降参したといふやうな仕組か、大概はきまりきつた仕組である。此點に於ては八犬傳の方は小說として一歩を進めて居る。八人の人間は性格に多少の差があつて事件にも餘り似たことは出て來ない。信乃と毛野と二人とも女に扮して居るが其趣は丸で變つて居る。莊助も毛野も道節も皆親や主の讐を打つのであるが其打ちやうは少しも似て居ない。此點に於て八犬傳は割合によく出來て居る。併し多少の變化あるに拘らず讀んで行く中に時々だれ氣味になるのは長篇に伴ふ弊害であるから、しかたがない。

大體の比較はこれ位として一部分に就て一二をいはう。

水滸傳には男が馬鹿に多くて女が極めて少ない。たまに女が出て來ても餘り働かずに引込んでしまふといふ處が多い。八犬傳でも男の割合には女は少ない方であるが水滸傳に比すれば女が可なりに働いて居る。それであるから八犬傳の方は水滸傳のやうに武張つた感じばかりではない。

水滸傳は破落戸的豪傑が梁山泊に集つて泥坊をするといふ趣向であるから、百八人の離合集散の工合が自然に出來て居るが、八犬傳は里見家に仕へるときまつて居る八人が一所に集らなければ里見家には仕へぬ、安房の土地も踏まぬといふ無理な趣向になつて居るのだから、其離合集散の工合が甚だ不自然である。

水滸傳には大酒飲が多いから酒屋は屢々引合ひに出されるが、八犬傳は謹直な人が多いので酒屋などはとんと出て來ない。

八犬傳で子供といふと親兵衛だけ位だが水滸傳には仙童の外殆ど子供は出て來ない。

兩書の人物の違ふことは前にもいふたが、其中で水滸傳を代表して居る人物は李逵、武松、石秀などであるといふことは已に人の論じて居るところである。八犬傳では誰が代表して居るといふ様な風ではなく八人皆異なつては居るが、信乃が一番始めに出て子供の中の成立ちから順々に書いてあるので讀者は最も信乃に馴染が深くなつて居る。八犬士の中で最も出しやうのまづいのが親兵衛で、最も巧みなのが毛野であらう。毛野が田樂の女に扮して親の敵を打つ處より始まりて其後或は隱れ或は現はれ出沒常ならぬ處は非常によく出來て居る。此種の味ひは水滸傳などには見られない所である。湯島の社頭に一本齒の足駄を穿つて居合拔きをする處などは、吳用の賣卜先生に比して更に巧みに更に面白く讀者を飜弄する工合は實にうまいものである。毛野の爲に八犬傳に活動して居るといふてもよい。

それから文章のことをいふと、これは八犬傳が非常に劣つて居る。第一に七五調を多く用ゐたといふことが小說を活動せしめざるのみならず甚だ厭味をつけて居る。信乃濱路訣別の場の如きは淨瑠璃のさはりと共に人口に膾炙しては居るが、今日から見れば甚だ幼稚なものでとても情の寫るといふやうなものではない。雛衣の寃を訴へる處でも同じことである。凡て情を寫す處は文章に長短緩急がなければならぬのであるのに馬琴は如何なる場合にも優長なる一樣の調子を用ゐた爲に、腹を立てた處も腹を立てたやうに聞えず、荒れ牛を投ち伏せた處も澤庵石を轉がした位の感じにしかならぬ。これは八犬傳の大缺點である。其外景色を敍する處でもうまいといふやうな文章は殆ど見當らぬ。一口に言へば文章の上に於て全篇がだれて居るのである。馬琴といふ翁は詩歌的趣味とか文章の妙味とかいふことは毫末も解しなかつたものと見える。

之に反して水滸傳は俗文を用ゐた事が小說に適合して居るのみならず文章の上に非常にうまい處がある。一語一句の妙より一節一回の妙に

至るまで悉く衆れ傳はつて居る。金聖歎はよく之を評して居るが馬琴は上の空に見て居つたらしい。この事は更に項を變へて論ぜう。

要するに今日の小說眼から見れば水滸傳も八犬傳も同じく幼稚であることはいふまでもない、けれどもそんなわかりきつた事は爰に說く必要は無い。たゞ兩書の幼稚さ加減を比較して見ると水滸傳は十二三位の腕白小僧で八犬傳は十五六位の生意氣な少年といふ程の差はある。知識の點に於て八犬傳の方が進步して居るのには違ひないが、本當に進步しない知識を振廻はすのであるからどうしても生意氣に見えて人にいやがられる處が多い。水滸傳はたゞわけもなくいたづらをするやうな有樣であるから大人氣ないといふて捨ればそれ迄であるが無邪氣であるだけに感じのよい處が多い。歷史から言へば八犬傳は水滸傳の後に出て來るべき性質のものであるが、今日吾々が讀んで見ては餘計に幼稚なる水滸傳の方が却て面白く思はれる。

水滸傳の文章

水滸傳の文章を論ずる前に先づ「感じの善い」といふ事に就て一言して置かなければならぬ。「感じの善い」といふ語は西洋派の畫師に教へられたので、元は畫師が畫又は天然の景色に就ていふ語である。單に面白いといふのとそんなに變りは無いやうであるが、面白いといふ事は極めて廣い意味で、感じの善いといふ事は其一部分になつて居る。畫を見て面白いといふのは澤山あるが、感じの善いといふのは幾らも無い。畫又は景色を見た時に何となく俄に嬉しくて心持が善いといふやうなのがある。それを感じが善いといふのである。それであるから假令どんなに善い畫でも景色でも餘り莊重であるとか、餘り奇警であるとか、餘り雄壯であるとか、餘り悲壯であるとか、餘り怪譎であるとか、餘り古雅であるとか、いふのは、感じの善いといふ部分には這入らぬ。感じの善いといふのは平和で、(多少の動搖はあつても平和を破らぬ程の動搖ならば善い)愉快で、一見して直に感ずるといふやうな者でなくてはならぬ。それは小說の上に就ていふても同じ事であるが、唯ゞ畫や景色と違ふ所は小說では必ず人間が這入つて居る。併し人間ばかりで感じの善いといふ場合は殆どない。感じの善いといへば其人間を助くる所の周圍の景色が必ず添ふて居る。其上に其人物の所作即ち時間的の變化も幾らか含まれて居る。其人物の性格の連想せらるゝ場合も多い。更にいひ直せば小說中の感じの善いといふ場合は畫の如く一見して直に感に打たれるといふやうな客觀的の光景である事を要すると共に、其光景が其中の人物の所作によりて幾分かづゝ時間的に變化して行くといふ事を許すのである。(但し其時間は餘り長きを許さぬ)八犬傳には感じの善いといふやうな場合が極めて少いが、其內で一二をいへば、伏姬と鍋童との問答、及び毛野の居合拔ぐらゐなものであらう。靑空に聳えたる芳流閣の上で信乃と現八との取組は感じの善いといはねばならぬのであるが、稍ゝ芝居がゝりである爲に多少の厭味が添ふて居る。水滸傳の方には感じの善いといふ部分が非常に多くて且つ此部分の文章が最も面白く出來て居る。中には偶然に面白くなつた所もあらうが多くは名匠苦心の痕が明に見えて居る。馬琴が文章には全く注意しないで徒に書き流したのとは同日の論でない。水滸傳は小說として幼稚なのにも拘らず、一句一節又は一回の文章として其伎倆を論ずる時には今日の作者と雖も容易に及ぶべきものでない。余が特に爰に水滸傳の文章を拔萃する所以である。

水滸傳で感じの善い部分を次に擧げて見よう。

魯智深が五臺山に隱れて居る一段は全體に面白いが、其内

魯智深在五臺山寺中。不覺攪了四五箇月。時遇初冬天氣。智深久靜思動。當日晴明得好。智深穿了皀布直裰。繫了鴉青縧。換了僧鞋。大踏步走出山門來。信步行到半山亭子上。坐在鵝頸懶凳上。尋思道「干鳥麼。俺往常好酒好肉。毎日不離口。如今敎酒家做了和尚。餓得乾癟了。趙員外這幾日。又不使人送些東西來與酒家喫。口中淡出鳥來。這早晩怎地得些酒來吃也好。」正想酒哩。只見遠遠地。一箇漢子。挑著一付擔桶。唱上山來。上面蓋著桶蓋。那漢子手裏拿著一箇鏇子。唱著上來。唱道。

九里山前作戰場。牧童拾得舊刀鎗。順風吹動烏江水。好似虞姫別霸王。

不唱酒字妙絕。明又偏唱戰場二字。[illegible]遠妙不可言。第一句寫出景色。第二句[illegible]。閒之二言。[illegible]第三句[illegible]。第四句[illegible]。不道之極[illegible]妙於切才。(圏)

とあるが如きは最も感じの善き場合である。感じの善きといふ事は、前にもいふ如く、直ちに感ずるのであるから別に説明して悉しく説くにも及ばぬが、試に此場合を解剖して見ると、コントラスト(二つの者が互に反對してゐる意)の配合で面白く出來て居る。爰に在る材料は五臺山、魯智深、酒賣り、酒賣りの歌、これだけの者であつて、五臺山と、殺人的魯智深とはコントラストである。魯智深が坊主になつて居るといふ事は一人の内にコントラストがある。五臺山と飲酒戒を破つて居る酒賣りとはコントラストである。酒賣りが古戰場の歌を歌ふのは一人の内にコントラストがある。此コントラストの中で魯智深と酒と古戰場の歌とがコントラストでなく密接なる關係を持つて居る。而も歌の中に虞姫の事が出て居るのは、金聖歎の評に在る如く、魯智深とコントラストになつて居る、斯ういふ配合の趣味は馬琴などが解し得ないのみならず、他の本にも餘り見ない所である。

此話の續きに魯智深が再び酒に醉ふて五臺山へ歸つて來る途中で山腹の亭子を毀してしまふ處がある。其處に、

只聽得刮刮剌剌一聲響亮。把亭子柱打折了。攧了亭子半邊。門子聽得半山裏響。高處看時。只見魯智深一步一攧。搶上山來。

とあるのは普通の書きやうの樣であるが、非常に景色が活動して居る。どういふわけかといふと攧了亭子半邊までは作者の目から魯智深を見た寫し方であつたのが、次の句に至つて俄に一轉して門番の目から魯智深を見る事になつて居る。それが爲に一歩一攧搶上山來の句で魯智深がよろ〳〵と山を登つて來る光景が忽に眼前に現れるやうな心持がする。それから門番が山門を締てしまつたので魯智深は拳を堅めて門を叩いたが門番は開ける事ではない。乃ち、

智深敲了一回。扭過身來。看了左邊的金剛。喝一聲道「儞這箇鳥大漢。不替俺敲門。却拿著拳頭嚇酒家。俺須不怕儞」跳上臺基。把柵剌子只一拔。却似撧葱般拔開了。拿起一根折木頭。去那金剛腿上便打。簌簌地泥和顏色都脱下來。

それでもまだ門を開けぬので、

智深等了一會。調轉身來。看著右邊金剛。喝一聲道。儞這廝張開大口。也來笑酒家。便跳過右邊臺基上。把那金剛脚上打了兩下。只聽得一聲震天價響。那尊金剛從臺基上倒撞下來。智深提著折木頭大笑。

何等の壯快ぞ、花和尚と仁王と二個の同趣味の材料を持て來て、終に生きた仁王が木の仁王を敲き倒すといふに至つては其妙いふ可からざる者がある。震天の響きが止むと同時に木頭を提げた儘でからノヽと大笑した魯智深の聲が響いて滿山が皆笑ふたやうな心持がする。それから門を開けねば寺を燒いてしまふぞと魯智深がどなつたので、門は終に開かれて魯智深は寺の中へ這入つて行つた。

智深搶得禪床邊、喉嚨裏略略地響、看著地下便吐。衆僧都聞不得那臭。箇箇道。善哉。齊掩了口鼻。智深吐了一回、扒上禪床、解下縧。把直裰帶子、都咇咇剝剝扯斷了、脫下那脚狗腿來。智深道。好好

衣を引き割いて狗の腿を取出した所は實に能く智深の面目を現して居る。

感じの善い場合は幾らもあるが其内で極些細な部分の面白き處を二つ三つ擧げて見れば、林冲林小屋に這入つた一段は前後照應して面白く書いてあるが、其内で酒を買ひに行く處などは畫のやうな感じがする。

便去包裏取些碎銀子。把花鎗挑了酒葫蘆。將火炭蓋了。取氈笠子戴上。拿了鑰匙出來。把草廳門拽上。出到大門首。把兩扇草場門反拽上。鎖了。帶了鑰匙。信步投東。雪地裏踏著碎瓊亂玉。迤邐背著北風而行。

鎗の柄に大瓠をぶら下げて笠を被つて林冲といふ豪傑が雪の中を酒買ひに行く處なんどは配合が善く出來て居る。

朱貴の酒店の處なども、

此時天尙未明。朱貴把水亭上窻子開了。取出一張鵲畫弓。搭上那一枝響箭。覷著對港敗蘆折葦裏面射將去（略）只見對過蘆葦泊裏、三五箇小嘍囉。搖著一隻快船過來。徑到水亭下。

何でもない處であるが、感じ善く作つてある。酒店の窻から梁山泊の景色が見えるやうな心持がする。

呼延灼關勝を賺して宋江の陣へ導く處は月夜の夜道をひそ〳〵と行く有樣を如して、

是夜月光如晝。黃昏時候。披掛已了。馬摘鸞鈴。人披軟戰。軍卒銜枚疾走。一齊乘馬。呼延灼當先引路。衆人跟著。轉過山徑。約行了半箇更次。前面撞見三五十箇小軍。低聲問道。來的不是呼將軍麼。呼延灼喝道。休言語。隨在我馬後走。

先づ一段だけ引入れた。更に、

呼延灼縱馬先行。關勝乘馬在後。又轉過一層山嘴。只見呼延灼把鎗尖一指。遠遠地一碗紅灯。

此處迄來て山の鼻を曲ると一つの赤い灯が遠くに見える。呼延灼は馬をかけらしながら手に持つて居る鎗の尖で、あれ、あの灯をと關勝に敎へたのである。どんな處へ行くのかよくわからずに覺束なくも夜道を辿つて居る際に、一點の紅灯を認めた感じのよさ、關勝も軍卒も讀者も一齊に目をこの一點に注いで兎に角闇の中に目的を得たやうな心持がするのは作者の手段の巧みなる處である。牧童遙指杏花村といふのは杜牧の有名な句であるけれど、遙指の二字は巧に過ぎて多少の厭味がある。呼延灼がこの場合に鎗の尖で灯を指し示した處は全く自然であつて少しの無理もない。呼延灼は灯を見た時に鎗の穗をつき出すともなしに前に突出して指し示した迄のことである。小說でかく自然にかく感じよく作ればうまいものである。

前に擧げた樣に文章の面白い處はいくらもあるが、ある一つのまとまつた一節を非常に骨を折つて抑揚頓挫をつけ照應波瀾をこしらへて書いた處は水滸傳中に餘り多くはない。其中でも殊に文章に骨を折つてある鴛鴦樓の仇討も景陽岡の虎殺しも共に武松に關係して居るのは、作者が特に武松を贔屓目で見たのであるか又は不用意でからなつて居るのか、兎に角武松は得をして居るやうな譯である。こゝには作者の力を見せる爲に特に景陽岡の一段をあげて置から。

武松が故郷に歸るといふので柴進の家を辭し宋江に別れて景陽岡の手前迄來た處である。

（此より以下水滸傳の文は終り迄連續して居る。水滸傳の讀みやうは、支那音を知らぬ人でも頭から善い加減に棒讀みに讀み下すが善い。日本讀みに飜譯してはまづい）

當日晌午時分。走得肚中饑渴。望見前面。有一箇酒店。挑著一面招旗在門前。上頭寫著五箇字道。三碗不過岡。文眼

虎を打つ前に先づ酒屋を出して來た處が最も妙だ。此一段が無ければ虎が餘りに突然に現はれやうがないのである。馬琴が野道に突然と猪を出した所なんぞは拙極まつて居る。殊に三碗不過岡といふ看板の字は最も妙である。先づ此字面の中から虎が出さうに思はれる。ついでに看板に就て一言したいが、西洋の詩や小說などには面白い看板が屢〻書き現はしてある。例へば拙ない鵞鳥の看板だとか、負傷兵を負ふて居る下手な畫看板のある料理屋だとか、いふやうな田舍趣味を現はしたものなどが出て來る。日本でもかういふ種類のものは必ずあるに違ひない。酒屋の看板に木の煤ぼけた笹が旗を振つて居るといふやうなのは外にもあるであらう。けれども小說などには餘り出て來ない。馬琴にかかせると行德で古那屋といふ看板のある旅籠屋といふ位の殺風景な材料に止つて居る。水滸傳の三碗不過岡などは實によく働かしてある。

武松入到裏面坐下。把哨棒倚了 哨棒六 叫道「主人家。快把酒來喫」

この評に哨棒六とあるは前文から哨棒といふ字の現はるゝ度に其數が數へて來たのである。これはこの哨棒で後段に虎を打つといふ大切の哨棒であるから殊更に數へて置く必要があるのだ。

只見店主人把三隻碗。一雙筯。一碟熱菜。放在武松面前。滿滿篩一碗酒來。碗一

この酒が亦虎を打つのに最も深い關係を持つて居るのであるから第一碗と數へたのである。

武松拿起碗。一飮而盡。叫道「這酒好生有氣力。主人家。有飽肚的買些喫酒」酒家道「只有熟牛肉」武松道「好的。切二三斤來喫」酒店家去裏面。切出二斤熟牛肉。做一大盤子將來。放在武松面前。隨即再篩一碗酒。碗二 武松喫了道「好酒」又篩下一碗。碗三 恰好喫了三碗酒。再也不來篩。武松敲著卓子叫道「主人家。怎的不來篩酒」酒家道「客官要肉便添來」

武松が三碗の酒を飲み盡して更に酒を持て來いといふと、肉が御入用なら差上げますと、亭主が答へたのである。このトンチンカンな答へは武松をじらす手始めである。

武松道「我也要酒。也再切些肉來」酒家道「肉便切來添與客官喫。酒卻不添了」武松道。「卻又作怪」便問主人家道「爾如何不肯賣酒與我喫」酒家道「客官。爾須見我門前招旗上面。明明寫道。三碗不過岡」武松道「怎地喚做三碗不過岡」酒家道「俺家的酒。

雖是村酒。卻比老酒的滋味。但凡客人來我店中喫了三碗的、便醉了。過不得前面的山岡去。因此喚做三碗不過岡。若是過往客人到此。只喫三碗。更不再問。武松笑道、原來恁地。我卻喫了三碗。如何不醉。酒家道、我這酒叫做透瓶香。又喚做出門倒。初入口時。醇醲好喫。少刻時便倒。武松道、休要胡說。沒地不還儞錢。再篩三碗來我喫。酒家見武松全然不動。又篩三碗。第四碗第五碗第六碗

作者は筆を省いて三碗とかいてしまふと評者は態と評を入れて第四碗第五碗と註する。是は普通の批評とは違つて評の力で本文に勢をつけるといふ手段なのである。

武松喫道、端的好酒。主人家。我喫一碗。還儞一碗錢。只顧篩來。酒家道、客官休只管要飲。這酒端的要醉倒人。沒藥醫。武松道、休得胡鳥說。便是儞使蒙汗藥在裏面。我也有鼻子。店家被他發話不過。一連又篩了三碗。第七碗第八碗第九碗

武松が頻りに酒を命ずるけれど、酒屋の主人が酒を持て來ずに置いて、そんなに飲んだら醉ひ倒れるから客に飲ませないのぢや、と強情張るので、武松はいよ／＼じれて、そんな馬鹿をいふのを見るとお前は此酒にしびれ藥を入れて居るのに違ひない、と逆ねぢにねぢたので、酒屋の主人は腹立てゝ酒を持つて來るといふ次第になるのである。元來こゝは武松に虎を打たせねばならぬ處であるのに、それに無暗に酒を飲ませてグデン／＼にしてしまふては肝腎な役者が虎を打つ事が出來なくなる譯である。が、併し全くのしらふで打たせては面白くないので、作者は寧ろ武松をグデン〳〵にして置いて讀者をして、これで虎が打てるであらうかと、十分にあやぶませて、さうして突然と虎を出さうといふので、畢竟讀者の肝を潰させる手段である。それだからこゝで酒を飲ませなくてはならぬので酒屋を持つて來て十分に酒を飲ませるやうに力を入れて書いて居る。併し、こゝなのだ、こゝが作者苦辛の處だ。若し凡手をして書かせたなら、酒はうまいし、酒屋の主人は十分に取り持つて、いやといふ迄に飲むことを勸めるやうに書くであらう。それでは小說にも何にもならぬ。武松に酒を十分飲ませなくてはならぬといふ趣向を立てゝ置いて、卻て反對に酒屋の主人をして武松に酒を與へさせぬといふ趣向をこしらへて平地に波瀾を起したのである。それから三碗不過岡といふ看板なども思ひついたのも面白い。そこで主人は飲ませぬといふ、武松は飲みたいといふ一條の葛藤が始まつて終に何とか彼とかいふてとう／＼飲みおほせるといふ事になる。酒屋が武松をじらせ、武松が酒屋をじらせたりして、酒の一段を骨折つて書くのはつまり虎の場を面白くするために過ぎない。かういふ波瀾の製造法は小說家の心得置くべき事であらう。

武松道、肉便再把二斤來喫。酒家又切了二斤熟牛肉。再篩了三碗酒。第十碗・十一碗第十二碗

今度は主人もおとなしく酒を持つて來たと見える。併し武松はまだ飲みたいのだ。

武松喫得口滑。只顧要喫。去身邊取出些碎銀子。叫道、主人家。儞且來看我銀子。還儞酒肉錢數麼。酒家看了道、有餘。還有些貼錢與儞。武松道、不要儞貼錢。只將酒來篩。

武松はつり錢で又酒を飲むといふ手段を考へ出したのだ。

酒家道、客官。儞要喫酒時。還有五六碗酒哩。只怕儞喫不得了。武松道

「就有五六碗多時。儞盡數篩將來」酒家道「儞這條長漢。倘或醉倒了時。怎扶得儞住」

お前のやうな大男が醉ひ倒れたら起す事も出來やしない。と酒屋の主人はいふ。主人の口から武松の大男である事を現したのはうまい。

武松焦躁道「我又不白喫儞的。休要引老爺性發通教儞屋裏粉碎。把儞這鳥店子倒翻轉來」

魯智深が、山門を燒いてしまふぞ、といふと同一威嚇手段。(鳥店子の鳥は惡の意)

酒家道「這厮醉了。休惹他」再篩了六碗酒。與武松喫了。（第十三碗第十四碗第十五碗第十六碗第十七碗第十八碗）前後共喫了十八碗（結一句）

とう〳〵十八碗を飲み盡した。

綽了哨棒。立起身來。（[illegible]）道「我卻又不曾醉」走出門前來。笑道「卻不說三碗不過岡」手提哨棒便走（哨棒八・手提哨棒[illegible]）

やう〳〵酒屋を出て來た。段々虎が近づくに從ふて棒が注意すべき者になつて來る。併しこゝではまだ手に提げて居る。

酒家趕出來叫道「客官那裏去」武松立住了問道「叫我做甚麼。我又不少儞酒錢、喚我怎地」酒家叫道「我是好意。儞且回來我家。看抄白官司榜文」武松道「甚麼榜文」酒家道「如今前面景陽岡上。有隻吊睛白額大蟲。晚了出來傷人。壞了三二十條大漢性命。官司如今杖限獵戶擒捉。發落岡子路口。都有榜文。可教往來客人。結夥成隊。於巳午未三箇時辰過岡。其餘寅卯申酉戌亥六箇時辰。不許過岡。更兼單身客人。務要等伴結夥而過。這早晚正是未末申初時分。我見儞走都不問人。枉送了自家性命。不如就我此間歇了。等明日慢慢湊得三二十人。一齊好過岡子」

酒屋の主人は今歩行き出した武松を呼び留めて、此先の景陽岡では虎が出て人を喰ふから夜は通るなと官から御布令が出て居る。お前も今夜は此內へ泊つて明日ゆつくりと通つたら善からう、と忠告したのである。始めて虎といふ字が出て來た。併しまだ虎の影だ。此一段は作者が苦心して虎を寫すのである事はいふ迄もないが、併し虎といふ奴は非常な敏捷な奴であるから、いざ現れたといふ瞬間には、武松が殺されるか虎が殺されるか、直に勝負が、ついてしまふのである。それだから其瞬間の活動を成るべく面白く讀者に讀ませるためには、讀者をして、虎はもう出るか、もう出るか、と十分に待ち焦れさせて置く必要がある。そこで本物の虎を出す前に虎の虚影を澤山に出して見せるのだらう。始めてこゝに虎といふ字を出すに只大蟲とばかりでは虎が强さうに見えぬから吊睛白額大蟲と形容すると虎がえらさうに見える。金毛九尾の狐といふと狐に位がついて、內閣總理大臣從一位大勳位公爵といふと人間に勿體がつくのと同じ事だ。

武松聽了笑道「我是淸河縣人氏。這條景陽岡上。少也走過了一二十遭。幾時見說有大蟲。儞休說這般鳥話來嚇我。便有大蟲。我也不怕」酒家道「我是好意救儞。儞不信時。進來看官司榜文」武松道「儞鳥子聲。便眞個有虎。老爺也不怕。儞留我在家裏歇。莫不半夜三更。要謀我財。害我性命。卻把鳥大蟲唬嚇我」

武松は酒屋の主人を信じない。虎の話をこしらへて旅人を嚇し自分の內に旅人を泊めて其命と金とを取るのであらう、と疑ふて居る。是に於て僅に現れた虎の影は又消えてしまふ

た。

酒家道、俪看麼、我是一片好心、反做悪意。倒落得俪恁地。俪不信我時、請尊便自行。一面説、一面搖着頭自進店裏去了。這武松提了哨棒、大着歩自過景陽岡來。（以下三百四十字程略す）

酒家は歸る。武松は景陽岡にかゝる。哨棒はまだ手に輕く提げて居る。武松は景陽岡の下に來た處で樹の皮を剝つた前と同じやうな官司の榜文を見たがまだこれにも信を置かぬ。これも酒家が人を嚇かすための謀であらうと嘲りながら見て過ぎた。だん〳〵岡に上つて來ると、もう彼是申の刻で日は山に落ちかけた。急いで少し行くと路端に毀れかゝつた山神の廟があつて、其門の上に復前のやうな虎の榜文がある。武松は始めてこゝで虎の話は譃でない事を知つて、急におぢ氣がついて前の酒屋迄引つ返さうかと思ふたが、いや待て、あれ程爭ふて置いて今更どの面さげて還られうぞ、もうかうなれば仕方が無い進むばかりだ。

武松正走。看看酒湧上來。便把氈笠兒掀在脊梁上。將哨棒綰在肋下。一歩歩上那岡子來（以下六十字程略す）

次第に酒の醉が出て來るので、笠を背中に負ふて哨棒を小脇にかいこんだ。今迄手に提げて來た棒を始めて小脇にかいこんだ。虎はいよいよ出さうになつて來た。岡を上る內に日はずつぷりと暮れた。ひた走りに走るので、醉はいよいよ出る、體は熱くなつて來る。

一隻手提着哨棒一隻手把胸膛前袒開。踉踉蹌蹌直奔過亂樹林來（以下二十字程略す）

折角小脇にかいこんだ棒を又片手に提げて、片手に胸をあけながら木立の中に這入つて來た。しかもそこに大石の横たはつて居るのを見て、忽ち棒をはふり出して、其石の上に寐んとしたのである。金聖歎は驚死讀者と評して居る。

只見發起一陣狂風。那一陣風過了。只聽得亂樹背後。撲地一聲響。跳出一隻吊睛白額大蟲來。

サア出た。

武松見了叫聲呵呀。從青石上翻將下來。便拿那條哨棒在手裏。閃在青石邊。

今は哨棒をしつかと握つて石から飛び下りた。

那大蟲又餓又渴。把兩隻爪在地下略按一按。和身望上一撲。從半空裏攛將下來。武松被那一驚。酒都做冷汗出了。

只一つかみと虎は飛びかゝつて來た。

說時遲那時快。武松見大蟲撲來。只一閃閃在大蟲背後

武松はひらりと身をかはした。

那大蟲背後看人最難。便把前爪搭在地下。把腰胯一掀掀將起來武松只一閃閃在一邊

再び飛びかゝつて來る。再びひらりとかはす。

大蟲見掀他不著。吼一聲。却似半天裏起個霹靂。振得那山岡也動。把這鐵棒也似虎尾。倒豎起來。只一翦武松却又閃在一邊（以下八十字程略す）

三たびめに虎は一吼え吼えて鐵棒のやうな尾をふり立てゝ來たが又もや武松に身をかはされた。虎は十分に武松にじらされて、今度はと四度目に飛びかゝつて來る處を待ち構へて哨棒を眞額にかざして只一打と打下した。ところ

が、

只聽得一聲響簌簌地。將那樹連枝帶葉劈臉打將下來。定睛看時。一棒劈不著大蟲（以下略）。

虎は打てないで樹の枝を打つたのであるから驚かざるを得ない。おまけに大切の哨棒は半分に折れてしまふたのである。金聖歎は、こゝの處で哨棒十六と數へて、半日勤寫哨棒。只道仗他打虎。到此忽然開除。令人瞠目噤口。不復敢讀下去と評して居る。虎が又飛びかゝつて來たので武松は飛びしざつて手に殘つて居る棒の折れを投げ棄てゝしまふた。どうするのであらうと讀者は驚く。そこで作者は虎を手打ちにするといふ極端の手段に出でゝ讀者に落を取るのが此一段の結末である。武松は足で蹴るやら拳骨でなぐるやら折れた棒で叩くやらして虎を殺してしまふ處は最早こゝに擧げずとも善からう。武松はグッショリと勞れて青石の上に休んで居たが、今又一匹の虎が出て來たらば迚も助からんと考へたので闇の中を急いで下りかけた。すると、

只見枯草中。又鑽出兩隻大蟲來。

果して二つの虎が出て來た。

武松道。阿呀我今番罷了」

もうおしまひだ、と武松は弱つてしまふた。

只見那兩隻大蟲。在黑影裏直立起來。

再び驚いた。二匹の虎はつゝ立つて歩行いて來た。これは虎の皮を被た獵師であつたのだ。此一段の文章はこゝで切りあげたが適當であらう。

畢竟此一段は作者が虎を出すために苦辛したので、一歩々々虎に近づいて行く其道が一々波瀾をなして居る。しかも其波瀾は次第に大きく急になつて終に文章の極處卽ち山に達するやうになる。併し虎を手打にしたといふだけで突然と落ちてしまふては何だか物足らぬので最後に又二匹の虎を出して來て全くの結局とする、これが所謂餘波である。自然を主とする者は別であるが、若し文章をこしらへて面白くするといふならば恐らくは此打虎の一段よりうまく書くのは餘程難い事であらうと思ふ。

武松が三度虎をすかす處は事實にあり得べき事ではないが、しかし若し人と虎との鬪を芝居に見せるならば、卽ち客觀的に寫すとならば到底斯く書くより外は無い。三度すかした處などはなかなかうまくこしらへてあるといふて善い。とにかく水滸傳の文章は侮るべからざる者がある。

金聖歎の評

終りに臨んで金聖歎の評に就て一言して置かう。金聖歎が水滸傳を評したのは今の批評家が小説を評するやうに其缺點を探し出すのではない。評とはいふものゝほめてばかり居る評なので、ほめる方は無暗矢鱈にほめる、若し原書に缺點があつても、それを缺點として誹らざるのみならず寧ろそれを辯護する側に立つて居る。其評あるがために、つまらぬ處も面白くなり、面白き處は猶面白くなるといふやうにするのが目的であるのだ。

金聖歎の評は全篇の評と一回々々の評と一節一句の評と三種ある。此全篇の評にはいろいろ議論のある事で、水滸傳を七十回で切りあげたり、宋江を無暗に惡くいふなどは固より作者の意にも違ひ、且つ穩當ならぬ處がある。併し金聖歎は自分の說を作者の本意だなどゝ吹聽するけれど、其實作者の名をかつぐばかりで、矢張自分の伎倆を見せるつもりだから、無理に異を立てるやうな事をする、見る者も其事を十分に呑み込んで置いて其上で聖歎の評を見ると聖歎の評は面白い事が多い。七十回以下は戰爭ばかりで文章が面白くないといふので七

十回以下のある本を謊としたのは一見識あつて善い。併し李獅々の一段がないのは惜い。李逵を上々の人物とし宋江を奸詐として兩々照して見せた處などはこじつけでも何でも、とにかく働いて居る。これは畢竟水滸傳の作者が宋江をうまく寫し得なかつた爲に宋江の人物をあらはすやうな處が一つも無い、金聖歎も宋江をほめるべき處が無いのに窮して、いつそ惡者にしたら評が振ふだらう、といふ位の事であつたらう。

一回々々の評はつまらぬ事も多い。それよりも一節一句の評は面白い。此評は文章を解剖したものであるから少しでも文章の面白い處には評語が非常に澤山ある。それには長いのも短いのもあるが、前にも少し擧げた通り短い評には「虎」「人」「奇文」「第一碗」「哨棒十六」抔の如き一字二字三字四字位のもある。此評には非常に氣の利いて居るのがある。これは丁度義太夫語りの三味線彈きが掛聲をかけるやうなもので、これがために本文に勢がついて來る。若し頭から、うるさいといふてのけるならそれ迄であるが、其掛聲が善く調子を外さぬやうに行く處はなか〳〵うまいものである。若しかういふ詳しい評の仕方は金聖歎から始まつたとすれば猶更金聖歎は一種の伎倆を備へて居た批評家と目する事が出來る。

（明治三十三年九月）

注意（本篇の用字一定せざるは初めは居士が自記に係り中途より門下の人々に筆記せしめたるが爲なり。）

和歌篇

明治三十年

愚庵和尚より其庭になりたる柿なりとて十五ばかりおくられけるに　六首

御佛にそなへし柿ののこれるを我にぞたびし十まりいつゝ

籠にもりて柿おくりきぬ故里の高尾の楓色づきにけん

柿の實のあまきもありぬ柿の實の澁きもありぬ澁きぞうまき

世の人はさかしらをすと酒のみぬあれは柿くひて猿にかも似る

おろかちふ庵のあるじのあれにたびし柿のうまさの忘らえなくに

あまりうまさに文書くことぞわすれつる心あるごとな思ひ吾師

明治三十一年

×

古庭の萩も芒も芽をふきぬ病癒ゆべき時は來にけり

金州城外所見　一首

ものゝふの屍をさむる人も無し菫花咲く春の山陰

病中　一首

苔の根の永き春日を端居して花無き庭をながめくらしつ

×

寐靜まる里のともし火皆消えて天の川白し竹藪の上に

金州戰後　一首

人住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花は咲きて散りけり

×

人も來ず春行く庭の水の上にこぼれてたまる山吹の花

×

伊豫の國の石鎚の山のあら鷲も君が御鳥屋に老いにけるかな

金塊和歌集を讀む　一首

こゝろみに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ

×

小鮒取るわらはべ去りて門川の河骨の花に日高群れつゝ

病中　一首

我庭の小草も萌えぬ限り無き天地今や綠するらし

×

百年の命にかふるねぎごとをあはれきこしめせ八百萬の神

×

日にうとき庭の垣根の霜柱水仙に添ひて炭俵敷く

×

はら／＼ともろこし黍を剝く音にしばしばさむる山里の夢

金州陷後　一首

山陰に家はあれども人住まぬ孤村の柳綠しにけり

×

朝日さす小池の氷半ば解けて尾をふる鯉のうれしくもあるか

×

麥種うる小鶴を近みたま／＼に雲雀鳴くなり梶橋の上に

病める身を車に載せられて野道をたどり行くに見るものめづらかならぬは無し思へば梅の花見しよりもはや三年にはなりぬ

二首

太刀佩きていくさに行くと梅の花見てし年より病みし我かも

車して戸田の川邊をたどりきと古里人にことつげやらむ

×

故郷の梅の青葉の下陰に衣洗ふ妹のおもかげに立つ

×

遠近に菜の花咲きて朝日さす椋の木がくれ人畑を打つ

×

野路の桃の花散る春雨にからかささして旅人の行く

×

もろ／＼の男餓鬼女餓鬼を目に入れて搗かんとや鬼の杵ふりあぐる

×

いくさ過ぎて人無き村を来て見れば鵲すくふ道の邊の木に

病中　一首

夜毎々々初夜打つ頃をひんだりの足痛みいでて時鳥鳴く

わが庭　十首

わが庭の垣根に生ふる薔薇の芽の萌ふくれて夏は来にけり

日をうけて覆盆子花咲く杉垣根そのかたはらよ物ほしどころ

風わたる一むら薄芽はのびて菊苗畑に垂れんとすらん

古萩の若葉のかげに雀子の下りて親呼ぶ晝中の庭

鉢二つ紫濃きにをだまきか赤きは花
の名を忘れけり

げん／＼の花猶殘る庭の隅に枇杷のこ
苗のいかつ若葉出す

撫子は茂り桔梗はやゝのびぬ猶二葉な
る朝顏の苗

夕顏の苗賣りに來し雨上り植ゑんとぞ
思ふ夕顏の苗

緑立つ庭の小松のうれ低み上野の杉に
蔦の居る見ゆ

立ち並ぶ橡もけやきも若葉して日の照
る間は四十雀鳴く

ベースボールの歌　九首

久方のアメリカ人のはじめにしベース
ボールは見れど飽かぬかも

國人ととつ國人と打ちきそふベースボ
ールを見ればゆゝしも

若人のすなる遊びはさはにあれどベー
スボールに如く者もあらじ

九つの人九つの場を占めてベースボー
ルの始まらんとす

九つの人九つのあらそひにベースボー
ルの今日も暮れけり

打ち揚ぐるボールは高く雲に入りて又
落ち來る人の手の中に

なか／＼に打ち揚げたるはあやふかり
草行く球のとゞまらなくに

打ちはづす球キャッチャーの手に在り
てベースを人の行きがてにする

今やかの三つのベースに人滿ちてそゞ
ろに胸の打ち騷ぐかな

×

ほとゝぎす鳴く山の端に月落ちて塔ほ
の見ゆる明方の森

大神宮火あり　三首

さくゝしろ五十鈴の宮の神杉を燒きぬ
と聞くもかしこきものを

神風や伊勢の內外の宮柱燒くる御代
にも遭はんと思へや

夏祭の梢に雫ふり度會の五十鈴の宮に
火は飛びまよふ

×

若葉さす市の植木の下陰に金魚あきな
ふ夏は來にけり

病牀の夢　八首

陸を行き雲居をかける夜半の夢のさむ
ればもとの足なへにして

おそはれし宵寐の夢の驚けば藥まゐ
れとみとり女のいふ

うれしくも登りし富士のいたゞきに足
わなゝきて夢さめんとす

昔見し須磨の松原思へども夢にも見
えず須磨の松原

亡き友とありし昔をかたらひて泣かん
とすれば夢さめにけり

おそろしきものは小道のきはまりてあ
とより牛の追ひせまる夢

われ昔學びのわざのにぶくして叱ら
れしことぞ夢に見えつる

うたゝ寝のうたゝ苦しき夢さめて汗ふ
き居れば薔薇の花散る

×

仰むけに竹の簀の子にうち臥して背ひ
やひやと雲の行くを見る

×

釣垂れて魚餌につかず蜻蛉のとまりて
は飛ぶ河骨の花

×

岡ぞひの窪田溢れて人も馬も水踏みわ
たる五月雨の頃

×

立ち掩ふ雲のひまより青空のわづかに
見えて梅雨明けんとす

×

四千歳の昔を今日の御佛に我も産湯を
あみせたてまつる

×

天上天下たゞ我ひとり尊しといひし
其子に産湯あむさむ

日頃のつれ〳〵を慰めんとある
夕車に載せられて兩國向嶋
などうちめぐるに見る者皆珍ら
かなる心地しければ　六首

兩國の橋の橋板をふるみ節あらは
れて車こけんとす

風起る隅田の川の上げ汐に夕波かづき
泳ぐ子等はも

淺草の林もわかず暮れそめて三日月低
し駒形の上に

我昔住みにし跡を尋ぬれば櫻茂りて
人老いにけり

月細き隅田の川の夕間暮待乳を見れば
むかし偲ばゆ

瓜茄子青物店をめづらしみ車ゆるめて
小路より行く

×

百照すともし火百の影そひて伊都伎嶋
宮潮滿ちにけり

×

鳴神の鳴らす八鼓こと〳〵く敲きやぶ
りて雨霽れにけり

故郷を憶ふ　三首

故郷の御墓荒れけん夏草のゐぬのこ草の穗に出づるまでに

伊佐庭の湯月をとめの手枕に夢や見るらんますらをの友

足なへの病いゆとふ伊豫の湯に飛びても行かな賞にあらませば

桃太郎　八首

昔々をぢうば住めり子もがもと思へば老いぬ子はあらずして

をぢは山へうばはとき衣そゝぎすと川邊に立てば桃流れ來つ

桃の實の二つにわれてあれ出でし名におへりけむ桃太郎かも

もろ〳〵の鳥けだものをあともひて鬼が嶋なる鬼打ちに行く

日の本にたぐひあらじの黍團子君がいくさを祝ひてぞをす

きゞし女は鉾ふりかざし猿彦はますらをさびて弓杖つくも

鬼こもる嶋の大城戸打ち破りをたけびしたるぶち犬のとも

船八船車八車ことごとに積みし寶の數も知らえず

獵官熱高くして　炎熱日に加はる歳これに蒼蠅の歌をつくる　七首

つかさあさる人をたとへば厨なるくらひ殘りの飯の上の蠅

日の照す晝こそあらめ烏羽玉の夜を飛ぶ蠅のにくゝもあるか

馬の尾につきて走りし蠅もあらむとり殘されし牛の尾の蠅

屎蟲の臭きを笑ふ笑ふものは同じ厠の屎の上の蠅

憎きものうなじねを刺す蚊はあれど睡らむとする顔の上の蠅

山も見えず島もかけらず五百日行く八重の汐路の船の中の蠅

世の中は馬屋のうしろの畑に生ふる唐撫子の花の上の蠅

こゝも猶うき世なりけり草鞋編む田舍のをぢの背の上の蠅

世の中の憎さもこゝに終りけり炮烙の尻の黐の上の蠅

足立たば　八首

足立たば大和山城うちめぐり須磨の浦わに書寫せましを

足立たば箱根の七湯七夜寝て水海の月に舟浮けましを

足立たば二荒の奥の水海にひとり隠れて月を見ましを

足立たば不盡の高嶺のいたゞきをいかづちなして踏み鳴らさましを

足立たば蝦夷の栗原くぬ木原アイノが友と熊殺さましを

足立たば新高山の山もとにいほり結びてバナナ植ゑましを

足立たば黄河の水をかち渉り華山の蓮の花剪らましを

足立たば北インヂアのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

×

海原に立つ雲の峰風をなみ群るゝ白帆の上をはなれず

×

夏菊の枯るゝそばより葉雞頭のくれなゐ深く伸び立ちにけり

×

もとあらの萩の葉がくれ咲きそめし百日草の散らんともせず

われは　八首

世の人は四國猿とぞ笑ふなる四國の猿の子猿ぞわれは

ひんがしの京の丑寅杉茂る上野の陰に晝寐すわれは

いにしへの故里人のゐがきにし墨繪の竹に向ひ坐すわれは

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵に籠りて蝿殺すわれは

富士を踏みて歸りし人の物語聞きつつ細き足さするわれは

吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは

昔せし童遊びをなつかしみこより花火に餘念無しわれは

菓物の核を小庭に蒔き置きて花咲き實のる年を待つわれは

讀杜詩　石壕吏　七首

石壕の村に日暮れて宿借れば夜深けて門を敲く聲誰そ

墻踰えてをぢは走りぬうば一人司の前にかしこまり泣く

三郎は城へ召されぬいくさより太郎文こす二郎死にきと

生ける者命を惜み死にすればまたかへり來ず孫一人あり

おうなわれ手力無くと裾かゝげいくさに行かむ米炊ぐべく

うつたふる宿のおうなの聲絶えて咽び泣く音を聞くかとぞ思ふ

曉のゆくてを急ぎひとり居る翁と別れ宿立ちいでつ

讀杜詩 新婚別 八首

麻にまとひ蓬にからむ蔦の手の短かれとは我思はなくに

もの丶ふにとつぐ娘を許さむは路のほとりに捨つるまされり

一夜たゞ君と契りてあかつきのあらあわたゞし遠き別れは

君行かば我たゞ一人如何にしてしうとと呼ばむしうとめといはむ

我せこの君はもの丶ふもの丶ふのその妻われも共に行くべく

さりながら君ひとり行け女あらばいくさ弱しと人もこそ言へ

紅粉もつけじまたうすもの丶衣も著じ再び君に逢はむ日までは

空かける鳥さへ雌雄はあるものを我一人君をこひつ丶居らむ

×

晝顔の花咲く濱の眞砂路に跡もとゞめず夕立の雨

天長節 二首

槍の穂に御旗なびけて赤坂の青山の野に君いでますも

草の戸に御姿掛けて菊活けて わが祝ふらくは千代いませとぞ

×

いたゞきに怪しき神を祭りけり蕈狩りすさみ山深く來ぬ

清人に代りて志を述ぶ 二首

空かける鳥言とはゞやつこわれ猶世に在りと君に告げこそ

さしなみのやまとの國は狭けれど民ゆたかなりのりにとるべく

×

野らの木に百舌鳴く聞けば雨晴れぬ田刈れ綿とれ妹よ背よと鳴く

×

辿り行く道窮りて鳥の鳴く木のくれしげみ白き花散る

明治三十二年

繪あまたひろげ見てつくれる歌の中に 十首

なむあみだ佛つくりがつくりたる佛見あげて驚くところ

もんごるのつは者三人二人立ちて一人坐りて楯つくところ

岡の上に黑き人立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

あるじ馬にしもべ四五人行き過ぎて傘持ひとり追ひ行くところ

木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ

うま人のすそごのよそひ駒立てゝ遠くに人の琴ひくところ

かきつばた濃きむらさきの水満ちて水鳥一つはね搔くところ

いかめしき古き建物荒れはてゝ月夜に獅子の壇登るところ

屋根の無き屋かたの内にをとこ君姫君あまた群れ居るところ

看板にあべかは餅と書きてありたび人ふたり餅くふところ

×

菅原や伊久米伊理毘古伊理毘古の陵こめて立つ霞かも

×

あら土の鑄形くづせばあなたふと佛の姿あらはれにけり

×

しもつけやしめぢが原に春暮れて菜廣さわらび人も訪ひ來ず

病牀喜晴　六首

臥しながら雨戸あけさせ朝日照る上野の森の晴をよろこぶ

朝牀に手あらひ居れば窓近くうぐひす鳴きて今日も晴なり

目を醒し見れば二日の雨霽れてしめりし庭に日の照るうれし

晴るゝ日を病の牀にすわり居て文讀み居れば文おもしろき

麗かにぬくき日和ぞ野に出でゝ桃咲くを見ん車やとひ來

カナリヤのさへづり高し鳥彼れも人わが如く晴をよろこぶ

秀眞に贈る　一首

へな土のへなの鑄物のへな／＼に置物つくるその置物を

谷中墓守に居る鬼州の病めるに

二首

君が病癒にあらねば墓守の佛の力それもすべなく

病みて臥す御足の下の鑄物師を憐み給へ藥王菩薩

病　四首

夕されば熱高まりぬ梨もがもかてほしからず牛の乳もいや

人とはぬ病の牀のつれ／＼を文にも飽きぬ蜜柑剝かまく

十年臥す病の牀に我死なば文の道守る神となりて來ん

かりそめの病の牀に就きしより四年に
なりぬ足なへにして

×

つはもの丶眞先にたてる旗の上にいく
さの神のよりたゝすらし（軍旗）

×

むかばらの瀬の朝臣に物申す藥といふ
ぞかたつむり喰へ

把栗新婚　二首

よき妻を君は娶りぬ妻はあれど殊にか
なへぬ君が妻君に

誰も娶りかも娶り君も娶りけりひとり
娶らぬ吾をあはれむ

金槐和歌集を讀む　八首

人丸ののちの歌よみは誰かあらん征夷
大將軍みなもとの實朝

大山のあふりの神を叱りけん將軍の
歌を讀めばかしこし

路に泣くみなし子を見て君は詠めり親
も無き子の母を尋ぬると

はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君
を思へば愧ぢ死ぬわれは

世の中に妙なる君が歌をおきてあだし
歌人善き歌はあらず

幾百とせ君の名誉にうづもれぬそれを
思へばいたましきかな嗚呼

君が歌の清き姿はまんまんとみどり湛
ふる海の底の玉

鎌倉のいくさの君も惜しけれど金槐
集の歌のぬしあはれ

夏の月　二首

海照す月をすゞしみ灯の見ゆる向ひの
嶋へ渡らんと思ふ

庭の内をそゞろありけば月影にほのか
に見ゆるひあふぎの花

病の枕邊に己が寫眞の古き新
しき取り出だして見るにさすが
昔の忍ばれて　八首

吾ながら同じ人とは思はれず髷結ひし
あり笠きたるあり

球及び球を打つ木を手握りてシャツ著
し見れば其時おもほゆ

からを討ついくさと共にわれ行くと刀
を持ちて寫しゝ寫眞

肩なめて寫しゝ友は今は無し病みさら
ぼひて世に殘る吾よ

いたく痩せし人の姿よ今さらになんち
をあはれむ足なへをとこ

四年前寫しゝ吾にくらぶれば今の寫眞
は年老いにけり

夜山越え朝川渉り國見せし昔思へば
おとろへたるかな

かりそめに寫し置きしがわがのちのかたみと思へば悲しかりけり

百合花 二首

人も來ぬ奥山路の百合の花誰や宿らん折らんと思へど

天ざかる鄙の小庭につくろはず松に並びて百合の花あり

蟬 二首

夢さめて戸いまだ明けぬ閨のうちに蟬鳴く聞ゆ日和なるらし

椎の木の木末に蟬の聲老いてはづかに赤き鷄頭の花

浴泉雜記を讀みて虛子に贈る 十首

おのが身しいたはしければ病みこやす君が床邊を訪ひがてぬかも

友の來て君の病を告げけらくけふも熱あり日いたく落ちぬと

君が行く伊豆のいで湯は我も知る水清くして善き栖みどころ

岩ばしる水のながれのたゞ中に湯玉わきたつ いで湯くすしも

此里の悲しきもの、二つありけり範頼の墓と頼家の墓と

鎌を持つ賤見しときは心よわみ殺さるるかと思ひぞわがせし

あぢさゐの花咲く山の山の奥に惡魔こめたる岩屋ありけり

世の中のはげ嶺はげ山のちのために杉の林を植ゑんとぞ思ふ

天ざかる鄙にし居れば大仁のうものはたけに芝居見るかも

田舍路の馬車に日暮れて御者折々馬を勵ます聲の淋しも

種竹山人を送る 二首

詩に名ある種竹山人支那に行くと歌もて送る竹の里人

わが魂は鳥にもがもや君が行くからの山々見て歸るもの

一首

始めて杖によりて立ちあがりて

四年寐て一たびたてば木も草も皆眼の下に花咲きにけり

道灌山 四首

我昔よく見て知りし金杉のいも屋の庭の秋海棠の花

萩の花既に散らくも彼岸過ぎて猶咲き殘るさるすべりかも

川に臨む生垣ありて水の上にこぼれんとする山茶花の花

岸の邊の花の露草花垂れてきたなき水によごれてぞ咲く

×

柿を守る斧き法師が庭に出でゝほうほうといひて鳥追ひけり

×

鳥も鳴かず人にも逢はぬ山の奥に谺聞えて石切るらしも

×

武藏野に秋風吹けば故郷の新居の郡の芋をしぞ思ふ

×

火にも燒けず雨にも朽ちぬ鎌倉のはだか佛は常佛かも

×

見なれにし莵こぼてば大佛は空の眞中にあらはれにけり

寄漱石　一首

あづま菊いけて置きけり火の國に住みける君の歸りくるかね

×

久堅の天とこしへにあらがねの土うるほひて菊開く國（天長節）

本郷まで　四首

あたらしき庭なつかしみ足なへのわれ人の背に負はれつゝ來ぬ

君と我二人かたらふ窓の外の紅葉の木末横日さすなり

早稲酒のうま酒に醉ふ公時の大盃といふかへでかも

新室に歌詠み居れば棟近く雁がね啼きて茶は冷えにけり

秀眞を訪ひし後秀眞におくる

二首

牛を割き葱を煮あつきもてなしを喜び居ると妻の君にいへ

我口を觸れし器は湯をかけて灰すりつけてみがきたぶべし

×

折りてかざす紅葉の枝に雫して時雨のあめは猶はれずけり

寧齋へかへし　二首

起きて泣かば心やる方もありぬべし伏して泣く身をあはれと思へ

珠にあらず魚の眼にあらずいづれをか玉とさだめん魚の眼といはん

秀眞を訪ふ　一首

敷物をあつみうれしみ家のごと股さしのべて物うち語る

×

幾年の長き病のなぐさめに蜜柑もらひて年くれんとす

明治三十三年

笠　三首

旅行くと都路さかり市川の笠賣る家に笠もとめ著つ

菅笠の小笠かぶりて下總の市路を行けど知る人もなし

武藏野のこがらししぬぎ旅行きし昔の笠を部屋に掛けたり

茶 三首

テーブルの足高机うち圍み綠の陰に茶をすゝる夏

夜をこめて物書くわざのくたびれに火を吹きおこし茶を飲みにけり

秋の夜を書よみ居れば離れ屋に茶をひく音のかすかに聞ゆ

雪 二首

鉢に植ゑしことぶき草のさち草の花を埋めて雪ふりにけり

ビードロののりものつくり雪つもるしろがねの野を行かんとぞ思ふ

森 四首

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つもる見ゆ

檜の實を拾ひに行けば檜林むしろ圍ひてかたゐ住みけり

いにしへの黄金の殿の殘りたる二荒山の杉老いにけり

ちはやぶる神の木立に月漏りて木の影動くきざはしの上に

わが病室の障子にガラスを張りてガラス障子の歌よみける中に 十三首

いたつきの閨のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ

病みこやる閨のガラスの窓の內に冬の日さしてさち草咲きぬ

朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも

冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ

ビードロのガラス戸すかし向ひ家の棟の薺の花咲ける見ゆ

雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えずけり

病みこもるガラスの窓の窓の外の物干竿に鴉鳴く見ゆ

物干に來居る鴉はガラス戸の內に文書く我見て鳴くか

にひ年の朝日さしけるガラス窓のガラス透影紙鳶上る見ゆ

ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ

曉の外雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ

常臥に臥せる足なへわがためにガラス
戸張りし人よさちあれ

窓の外の蟲さへ見ゆるビードロのガラ
スの板は神業なるらし

陶器　二首

するものゝ釜を開けば百あまり並びて
立てる女人形

するものゝ竈をつきて我好む女人形
つくりて世を經ん

×

いたつきの床邊の瓶に梅いけて疊に散
りし花も掃はず

×

閉したる園の外面の薄月夜梅の林を見
て過ぎにけり

×

棄さてし紫縮の竹の茂り葉の垂れ葉の
下に梅いけにけり

×

瓶にさす梅は散れゝど庭にある梅の木
咲かず風寒みかも

羯南氏男子を失へるに　一首

淵にすむ龍のあぎとの白玉を手に取る
と見し夢はさめけり

愚庵和尚のもとへ　三首

歌をそしり人をのゝしる文を見ば猶な
がらへて世にありと思へ

から歌につくりてめでし君が庵の梅の
林は今咲くらんか

折にふれて思ひぞいづる君が庵の竹安
けきか釜恙なきか

×

もろこしの女神がつけし白玉のかざし
に似たる水仙の花

×

野の中の竹むら陰の葱畑に寒さ殘りて
梅散りにけり

×

古鉢に栽ゑし青菜の花咲きて病の牀に
起きてすわりぬ

牛　二首

古國の伊豫の二名に馬はあれど牛がし
ろかく堅土にして

スパニアのますらたけりをけだものゝ
牛と鬪ふますらたけり男

春雨　四首

葛飾の小梅の里の小田ぞひに春雨小傘
行くは誰が妹

江の嶋へ通ふ海原路絶えてみちくる春
の汐の上の雨

ともし火の光に照す窓の外の牡丹にそ
そぐ春の夜の雨

霜おほひのわら取りすつる芍薬の芽
の紅に春の雨ふる

×

青鳥の孔雀の鳥が笠の如くうちひろげ
たるしだり尾の玉

我室　七首

草枕旅路さぶしくふる雨に菫咲く野
を行きし時の蓑

赤紙にいはひ言書き壁に貼りておぎた
てまつるさちはひの神

日の本の陸奥の寺より法の王パッパポ
ウロに贈る玉づさ

もろこしの蘇うぢが書ける石文の石摺
の下の水仙の鉢

花の絢を我に殘しゝ山の井の淺井の君
はスヱス行くらん

まだ淺き春をこもりしガラス戸に寒き
嵐の松を吹く見ゆ

アムールの川の川原のさゞれ石をひろ
ひて寄せし君を思ほゆ

我家の長物　二首

朝な夕な字書きふみ讀むかたはらに萌
黄の鳥の木にとまり居り

から酒に醉ひてありし淺色の低き小瓶
に梅をいけたり

×

菅の根の長き春日を言問はぬ小鳥と我
れと只向ひ居り

×

夕日かげ照りかへしたる山陰の桃の林
に煙たちけり

×

鎌倉の松葉ケ谷の道の邊に法を說きた
る日蓮大菩薩

×

鎌倉に吾が來て見れば宮も寺も隣の藁
屋も梅咲きにけり

獄中の鼠骨を憶ふ　十首

ある日君わが草の戸をおとづれて人屋
に行くと告げて去りけり

御あがたの大きつかさをあなどりて罪
なはれぬと聞けばかしこし

天地に愧ぢせぬ罪を犯したる君麻繩に
つながれにけり

大御代のまがねの人屋廣ければ君を容
れけりぬすと人と共に

君が居るまがねの窓は狹けれど天地の
ごとゆたけく思ほゆ

くろがねの人屋の飯の黑飯もわが大君
のめぐみとおもへ

豆の事をグンバ（軍馬）といふと人に聞きし人屋の豆のグンバ喰ふらん

人屋なる君を思へば眞晝餉の肴の上に涙落ちけり

三とせ臥す我にたぐへてくろがねの人屋にこもる君をあはれむ

ぬば玉のやみの人屋に繋がれし君を思へば鐘鳴りわたる

病床十日の内

四月四日（春暖かに温度高し）

籠鳥の小鳥の餌にと植ゑおきし庭の小松菜花咲きにけり

四月六日（[illegible]の畫帖を見る）

から國の花を活けたるかたはらに玉の小皿を取りあはせし圖

四月八日（[illegible]）

何つくりに今日來し人は[illegible]の花の茶時に開くひ[illegible]らん

四月十日（終日雨）

ガラス戸の外面さびしく降る雨に鄰の櫻ぬれはえて見ゆ

四月十二日（左千夫來、夜一時頃去る）

歌かたり夜はふけにけり竪川の君が庵に牛の乳取る頃

病床消閑記事

四月十四日（鼠骨の出獄を祝す）

くろがねの人屋を出でし君のために筍鮓をつけてうたげす

四月十三日（萬葉集輪講會）

山吹の花咲く宿に萬葉の歌の講義の會を開きぬ

四月十六日（庭中のた土を取出でゝ）

常臥の病のひまのつれづれに土をつくねて人を造りぬ

四月十七日（壽を彫り[illegible]る）

土かたの人造り居るかたはらに盆に載せたるさ[illegible]十莖

四月十八日（黄花蕾を造る）

ともし火のもとに臥し居て土くれに六ひらの花をあまた彫りたり

四月十九日（湯さまし瓶の蓋を造る）

蓮がたのうつはのへりに附けそへし蜻蛉の尻を曲げて手となす

四月二十日（庭前に大鳥籠を据ゑこ）

かな網の大鳥かごをつくろひて小鳥を入れん明日の朝またる

自作土像　二首

我顏を見てかたどりし土かたは我顏に似ずあらぬ人に似る

渾沌が二つに分れ天となり土となるその土がたわれは

秀眞へかへし　三首

ほら／＼にほらに造りてほらあたまのうつろあたまとなすべきものを

みちたれるおもたきあたま穴をなみ燒くとも燒けじか燒かずともよし

その花は六ひらの花、その葉は牡丹の葉、花と葉と思ひあはず、葉のあひに花ぞ咲きける、へな土をこれてつくりし、花なれば名をだに知らず、造り花あはれ

臺灣に行く人を送る

フォルモサの高砂嶋に君行かば嶋人さびてバナナくふらん

麓へ

茶店には茶の木を植ゑ、團子屋にヒヨンの木を植ゑ、茶の木には白紙をつけ、ヒヨンの木に赤紙をゆひ、白紙に上の句を書き、赤紙に下の句しるし、その紙をより合せて、其こよりかひなに卷き、妹が手を右に握り、妹が棲左に取り、晝行かば人言しげみ、夜行かば月をやさしみ、晝も夜も家にこもりて、さゞめ言戸を洩れ來れば、茶の木もゑまひことほぎ、ひよんの木もさちはひよろこび、歌よめと我に迫れば、二つ木のまけのまに〳〵、歌よみてよごとをまをす、あゝ君が代やあゝ

歌よみて送れと君が言ひしゆゑに歌よみて送る歌よみてかへせ

櫻花　十三首

さす竹のみ子のみことの大み女をめすらん年と花さきさかゆ

八ちまたのちまたの櫻花咲きて都の空は夕曇りせり

黃金塗り丹塗り靑塗る御靈屋の鳥居うづめて花咲きにけり

御靈屋の杉の林の陰に咲く老い朽ち櫻花の乏しき

雨にして上野の山を我がこせば幌のすき間よ花のちる見ゆ

小夜ふけて櫻が岡をわが行けば櫻曇りの薄月の暈

櫻さく上野の岡ゆ見おろせば根岸の里に枝垂れたり

ひがし風にはかに吹けば古杉の林の前を花飛びわたる

家へだつをちの木末に咲く花をい吹きまどはし我庭に散る

年長く病みしわたれば花をこひ上野に行けば花なかりけり

たま〳〵に病のひまに花見んと端居する日の晴れて曇りぬ

久方の空曇る日の櫻花まさきしみ咲きいまだ散らなく

花散りて葉いまだ萌えぬ小櫻の赤きうてなにふる雨やまず

一日一詠

四月二十一日（庭上に大鳥籠を据ゑて）

かな網の鳥籠廣みうれしげに飛ぶ鳥見れば我もたぬしむ

四月二十三日（塑像石膏像三個）

ともし火の光さしたる壁の上に土人がたの影うつりけり

四月二十五日（長塚節より桜の芽を贈り來る）

年の夜のいわしのかしらさすといふたらの木の芽をゆでゝ喰ひけり

四月二十七日（事無し）

鳥籠のかたへに置ける鉢に咲く薄紫のをだまきの花

四月二十九日（龜井戸に遊ぶ）

廣前の御池に垂るゝ藤の花かつらくべくはいまだみじかし

庭前即景　十首

山吹は南垣根に菜の花は東堺に咲きわかれけり

かな網の大鳥籠に木を植ゑてほづ枝下枝に雛飛びわたる

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る

汽車の音の走りすぎたる垣の外の萌ゆる木末に煙うづまく

杉垣をあさり青菜の花をふみ松へ飛びたる四十雀二羽

一うねの青菜の花の咲き滿る小庭の空に鳶舞ふ春日

くれなゐの若葉ひろがる鉢植の牡丹のつぼみいまだなかりけり

春雨をふくめる空の薄曇山吹の花の枝もうごかず

家主の植ゑて置きたる我庭の背低若松若みどり立つ

も丶草の萌えいづる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ

×

妹が著る水色衣の衣裏の薄色見えて夏は來にけり

×

かな網のとぐらの下を行く猫に木を飛びまどひ諸鳥騷ぐ

×

高瓶にさせる牡丹のこき花の一ひら散りて二ひら散りぬ

芝居

花道の橋かけ道ゆ出できたるわざをぎ人の名をよびかはす

龜戸まで　二首

我庭の萩の上葉に秋風の吹くらん時を待てばくるしも

くろがねの橋の上つ瀬下つ瀬にむしろ帆群れて川さかのぼる

體温日記　十首

五月一日（體温三十九度六分）

山吹は散り菜の花は實になりて五月一日我れ厄に入る

五月二日（體温三十九度一分、從弟來る）

みすゞ刈る信濃の奥の白坂に雪は降れれど蕨萌ゆとふ

五月三日（體温三十八度九分）

病みふせる床にさゝんとおぎのりし菖蒲匂ひ葉根はなかりけり

五月四日（體温三十九度六分、俳句會）

「藤の花長うして雨ふらんとす」とつくりし我句人は取らざりき

五月五日（體温三十八度二分）

たて川のさちをがりより贈り來し牡丹の花に文結びあり

五月六日（體温三十九度四分）

鉢植に二つ咲きたる牡丹の花くれなゐ深く夏立ちにけり

五月七日（體温三十八度五分）

はしきやし少女に似たるくれなゐの牡丹の陰にうつ〳〵眠る

五月八日（福井大火喘覺翁遺稿燒失せるよし）

かぐつちのあらぶる神のあらぶると玉も瓦もともに燒きけり

五月十日（東宮御慶事）

敷島の國つ御民の祝ふ日を祝ふやわれもあけのこはいひ

五月十二日（虚子の子來る）

高濱の濱の眞砂の名にしおふみどり子まさ子我になじまず

東宮御婚儀を祝する歌

おのころや天の柱を、御國の中つ柱と、左ゆ左めぐり、みぎりゆみぎりめぐり、言あけの御言よろしみ、生みませる嶋の八嶋を、すめみまの御子つぎつぎの、をす國としらせ給ひし、いひしらず古き神代ゆ、天地の絶ゆることなく、日と月と照りあふがごと、いならびてをさめ給へば、をの道はたけくあきらけく、女の道はなびかひ從ひ、玉くしげ二つの道を、今もかも日つぎの御子の、みめ侍すと定めのらせ、日はあれど今日の足り日を、みあひます日のよき日と、八百萬千萬神の、神はかり告げのまに〳〵、大宮のかしこどころの、大前に眞榊そなへ、うたのかみ笛吹きならし、のりとづかさのりとを申し、神契り契り給へば、宮人はうなねつきぬき、司等は膝折りふせ、言のきはみほぎ言ほぎ、品をつくし品たてまつる、とつ國のおほやけ使、彼皆も廣ぬかづきて、言さやぐよごとまをせば、賤しけど御民我等も、旗かゝげ門に灯もし、千世ませとあがいはへば、天地も答へて呼びぬ、八千世ませとあがことほげば、草も木も共にとよみぬ、君が代のさかゆるさがと、紫

の色なつかしみ、藤波の花かづらきて、をし鳥の袖うちかはし、歌ひ舞ひ賤もたぬしむ、文字もなき賤にしあれど、めをの道はやも

すめろぎの御子のみことと大み女と玉串さゝげ神ちぎります

さす竹の宮人祝ふ今日の日に藤をかざして民もよろこぶ

くれなゐと眞白と並び咲く花の牡丹も君をことほぐが如し

藤　花　三首

百花の千花を緒につらぬける藤の花房長く垂れたり

廣庭の松の木末にさく藤の花もゐむけて夕風ふくも

池の邊のさじきに垂るゝ藤の花見れば長けく折れば短し

曇　五首

吾庵の檐端にかけし鳥籠の鳥さへづらず春の日曇る

天地のそくへのきはみ晴れわたり舟群るゝ江の低にくもる

久方の曇拂ひて朝日子のうらゝに照す山吹の花

古里の御寺見めぐる永き日の菜の花曇り雨となりけり

八汐路の海をへだてゝつらなれる紀伊の國山曇りてくれぬ

風骨人獄談　八首

同じ朝繩ゆるされしぬす人と人屋の門を出でゝわかれぬ

くろがねの人屋の門を出でくれば桃紅ゐに麥緑なり

かげろひのはかなき命ながらへて人屋を出し君痩せにけり

人屋にて君がみがきしたばはさみたはにはさまん少女子いづら

都べの花のさかりを十日まり五十人屋の内に泣きけり

はなたれて人屋の門をいでくれば茶屋の女の小手招きすも

ぬば玉のヤミのひじきは北蝦夷のダルマの豆にいたくし劣れり

春鳥の巣鴨の人屋堀を高み青き麥生の畑も見えなくに

五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る　十首

松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く

緑立つ小松の枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ

松の葉の葉先を細み置く露のたまりもあへず白玉散るも

青松の横はふ枝にふる雨に露の白玉ぬかぬ葉もなし

もろ繁る松葉の針のとがり葉のとがりし處白玉結ぶ

玉松の松の葉毎に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる

庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず

若松の立枝はひ枝の枝毎の葉毎に置ける露のしげけく

松の葉の葉なみにぬける白露はあこが腕輪の玉にかも似る

煙

都べの愛宕の山に、のぼり立ち國原見れば、大家に煙ふとしり、小家には細くなびかひ、千よろづの竈のこと〴〵、燃ゆる火の消ゆる事なく、いや日けにさかゆく御代に、あひし我かも

旋頭歌 二首

おしてるや難波入江に風南吹き空に立つ千筋の煙片なびきすも

天水のよりあひのきはみ煙立つ見ゆ吾妹子を載せたる船の今か來らしも

ほとゝぎす 四首

ガラス戸の外面に夜の森見えて清けき月に鳴くほとゝぎす

みづらなる湯津爪櫛の一つ火の消えなんとして鳴くほとゝぎす

みやびをのつどへる宵のむら雨に鳴け時鳥歌幸を得ん

五月雨の雨ふりそゝぐ紫の花あやめ田に鳴くほとゝぎす

六月七日夜病床即事 十首

ほとゝぎす鳴くに首あけガラス戸の外面を見ればよき月夜なり

ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠のブリキの屋根に月うつる見ゆ

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

ガラス戸の外の月夜をながむれどラムプの影のうつりて見えず

紙をもてラムプおほへばガラス戸の外の月夜のあきらけく見ゆ

淺き夜の月影清み森をなす杉の木末の高き低き見ゆ

夜の床に寐ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月更けわたる

小庇にかくれて月の見えざるを一日を見んとゐざれど見えず

照る月の位置かはりけん鳥籠の屋根にうつりし影なくなりぬ

月照す上野の森を見つゝあれば家ゆるがして汽車往き返る

讀平家物語

宇治川　六首

ぬば玉の黒毛の駒の太腹に雪解の波のさかまき來る

飛ぶ鳥の先を爭ふもののふの鎧の袖に波ほとばしる

宇治川の早瀬よこぎるいけじきの馬の立髪波越えにけり

橘の小嶋が崎のかなたよりいかけ引きかけ武者二騎來る

ものゝふのかためきびしき宇治川の水嵩まさりて橋なかりけり

先がけのいさを立てずば生きてあらじと誓へる心いけじき知るも

嚴島行幸　十一首

九重の雲井を出でゝ藤さけるしきなが濱に御船はてけり

藤さけるしきなが濱に風ふけば御船によする紫の波

夏に入る旅なれ衣ぬぎもかへず礒の藤波折てたてまつる

松ながら折りてさゝげし藤波の花はむしろを引きずりにけり

君がみゆきありともしらで吉備の國の荒礒べたに藤咲きにけん

よろづ代をいはひて折りし松が枝に二房垂るゝ藤波の花

松が枝を折りてさゝぐる御やつこの其手震へか藤波ゆらぐ

龍がたの御船にまけし玉しきの御座の下に藤たてまつる

みつかさの折りてさゝぐる松が枝に長きみじかき藤浪の花

藤の花さゝげもちたるみやつこをのせて漕ぎ來る棚なし小舟

大君の御前にしぼむ紫の藤浪の花すてまくをしも

漱石へ　二首

年を經て君し歸らば山陰のわがおくつきに草むしをらん

風もらぬ釘つけ箱に入れて來し夏だいだいはくさりてありけり

×

線狩の鰐のみことが鰐つどひ黄泉の饗をきこしをす見ゆ

×

嬬われ白絲手繰り機織りていくさの君に布たてまつる

星　二首

眞砂なす數なき星の其中に吾に向ひて光る星あり

たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光我を照せり

富士に登らずして故郷に歸る格堂に贈る

駿河なる富士の高嶺に、のぼりたち峯の八尾踏み、岩陰に殘れる雪を、神わざとくゑはらゝかし、其雪の吹雪となりて、ひんがしの都をおほひ、暑き日にやみてなやめる、我庵にふりも來るかと、今日も待ち明日も待たんを、其山に登りても見ず、たらちねの母の國へと、ひた走るかも

富士のねに咲ける菊を吉備にある親に見せんと君思はずや

道後温泉

南の伊豫のいでゆは遠つ神六代の帝のいでましどころ

格堂が平賀元義の歌送り來しける返りごとに

上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人

血をはきし病の床のつれ／＼に元義の歌よめばたのしも

秋水が佛足石の石摺贈りこしける返り事に戯れに我手の形を紙におして送る

御佛の足のあとかた石に彫り歌も彫りたり後の世の爲め

我手形紙におしつけ見てあれど雲も起らずたゞ人にして

「日本」新聞四千號祝に寄硯祝といふ題を得て　八首

日刊の新聞書く硯の石の中窪に眞窪になりて四千號に滿つ

黒金の眞金の硯窪むとも日ぶみ「日本」は盡くる時あらじ

くろ金を硯につくり椽なす筆の太筆染めてし書かん

大き硯小さ硯をうちならべ日ぶみ書く人疾書き徐書く

百千文日にけに書くと汲みかふる硯の海に塵も浮かなくに

百足らず八十の硯の海原に常波立ちて日ぶみは絶えず

墨の舟筆の眞揖をしゞぬきて硯の海の干るまで漕ぐも

百八十の硯の海に水たゝへ世の風潮に舟漕ぎ出づも

明治三十三年十一月二十日の[illegible]に遇ひてよめる歌

かけまくもあやにかしこき、わご大君今のみかどの、あれましの其日を今日と、青山のならしの庭に、いくさ君いくさとゝのへ、角の音をい吹きならせば、抜き佩つ八千のつるぎは、稻妻の草に靡るごと、いさみ立つ駒の足搔は、久方の雲居をか行く、千萬の國のもゝふ、かりがねの陣も亂れず、[illegible]いつの御前に、かち人は鏡さゝげ持ち、騎人はいづみ立てなめ、旌を引くつゝ人共に、かしこみてよごと申せば、天の下の靑人草も、よろづ代と三たび呼ばひ、から國の草木なびかひ、高麗の海のいろくづ來より、食國の國の貢と、とことはにつかへまつらん、君が代のいくさ見の式、見ればゆゝしも

大君は神にしませばからの山高麗の海びもろしきいませ

菊　十首

朝ながめ夕ながめして我庭の菊の花咲く待てば久しも

年々にながめことなる我庭の今年の秋は菊多かりき

ガラス戸の外に咲きたる菊の花雨に風にも我見つるかも

我庭の松の木陰に菊咲けば昔の人し思ほゆるかも

我庭にさける黄菊の一枝を折らまくもへど足なへ我れは

我心いぶせき時はさ庭べの黄菊白菊我をなぐさむ

我うさをなごめて咲ける菊の花繪にし寫して壁にかけてん

冬寒き風松が枝を吹くなべに木陰の菊は色あせにけり

我庭にさかりにさける菊の花折りてかざさん人もあらなくに

秀眞へ　二首

たらちねの母にわかれて夜泣く子をもるとし聞けば我さへ泣かゆ

振ひ立つ時今來たり妻をなみ君ふるひたつ時今來たり

雪（[illegible]）　十首

足なやみて室にこもれど寒き此窗北にある毛の國山に雪ふるらしも

若松の木末の雪も見[illegible]す山吹の枝につめるおもしろ

ガラス戸の外白妙にかゞやける雪小夜
更けて上野の森のあきらかに見ゆ

いましめの司等門の雪はけといふ雪は
けど女力の掃きがてぬかも

常無きは干潟の岩にふる雪のごと汐満
つと波の来よらば消えざらめやも

大君のみことかしこみ雪の中の竹百敷
の大宮人は歌によむらしも

新玉の年の端白く大雪ふれり八束穂の
瑞穂の垂穂田に満つらんか

すめろぎの日知の国は堅に長きかもと
ことはに雪ふらぬ嶋雪消えぬ山

山の木にこほれる雪を風吹き落す伊達
の厳は鹿の皮著て獵に行くらん

霜枯の垣根に赤き木の實は何ぞ雪降ら
ば雪の兎のまなこにはめな

明治三十四年

新年 五首

うつせみの我足いたみつごもりをうま
いは寐ずて年明にけり

枕べの寒さはかりに新玉の年ほぎ繩を
かけてほぐかも

新玉の年の始と豊酒の屠蘇に酔ひにき
病いゆがに

いたづきの長き病は癒えねども年の始
と咲ける梅かも

あら玉の年のはじめの七草を籠に植ゑ
て来し病めるわがため

夕餉したゝめ了りて仰向けに寐
ながら左の方を見れば机の上
に藤を活けたるいとよく水をあ
げて花は今を盛りの有様なり。
艶にもうつくしきかなとひとり
ごちつゝそゞろに物語の昔な
どしぬばるゝにつけてあやしく
も歌心なん催されける。斯道
には日頃うとくなりまさりたれ
ば、おぼつかなくも筆を取りて

十首

瓶にさす藤の花房短かければたゝみの
上にとゞかざりけり

瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし
書の上に垂れたり

藤なみの花をし見れば奈良のみかど京
のみかどの昔こひしも

藤なみの花をし見れば紫の絵の具取
り出で寫さんと思ふ

藤なみの花のむらさき絵にかゝばこき
紫にかくべかりけり

瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に
春暮れんとす

去年の春御戸に藤を見しことを今藤を見て思ひ出でつも

くれなゐの牡丹の花にさきだちて藤の紫咲きいでにけり

この藤は早く咲きたり車井戸の藤咲かまくは十日まり後

八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

おだやかならぬふしもありがちながら病のひまの筆のすさみは日頃病なる心やりなりけり。をかしき春の一夜や。（四月廿八日）

新室のガラス障子より見ゆる庭に裏口の木戸あり。木戸の傍、竹垣の内に一むらの山吹あり。此山吹もとは親なる女の龍の四五年前に一寸許りの苗を持て來て戯れに植ゑ置きしものなるが今ははや叢もてつがぬる程になりぬ。今年も咲き／＼て

既になかば散りたるけしきをながめてうたゝ歌心起りたれば

原稿紙を手に持ちて

裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花

小縄もてたばねあげられ諸枝の垂れがてにする山吹の花

水汲みに往來の袖の打ち觸れて散りはじめたる山吹の花

まをとめの猶わらはにて植ゑしより いく年經たる山吹の花

歌の會開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花

我庵をめぐらす垣根隈もおちず咲かせ見まく／＼の山吹の花

あき人も文くばり人も往きちがふ裏戸のわきの山吹の花

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寢ながら見ゆる山吹の花

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

粗笨鹵莽、出たらめ、むちゃくちゃ、いかなる評も謹んで受けん。吾は只歌のやす／＼と口に乗りくるがうれしくて。（四月三十日）

しひて筆を取りて

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

別れ行く春のかたみと藤浪の花の長ふさ絵にかけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

くれなゐの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

心弱くとこそ人の見るらめ。（五月四日）

岩手の孝子何がし母を車に載せ自ら引きて二百里の道を東京迄上り東京見物を母にさせけるとなん。事新聞に出でて今の美談となす。

たらちねの母の車をとりひかひ千里も行かん岩手の子あはれ

草まくら旅行くきはみさへの神のいそひ守らさん孝子の車

みちのくの岩手の孝子名もなけど名のある人に豈劣らめや

下り行く末の世にしてみちのくに孝の子ありと聞けばともしも

世の中のきたなき道はみちのくの岩手の関を越えずありきや

春雨はいたくなふりそみちのくの孝子の車引きがてぬかも

みちのくの岩手の孝子文に書き歌にもよみてよろづ代迄に

世の中は悔いてかへらずたらちねのいのちの内に花も見るべく

うちひさす都の花をたらちねと二人し見ればたぬしきろかも

われひとり見てもたぬしき都べの櫻の花を親と二人見つ

五月五日にはかしは餅とて槲の葉に餅を包みて祝ふ事いづこも同じさまなるべし。昔は膳夫をかしはでと言ひ歌にも「旅にしあれば椎の葉に盛る」ともあれば食物を木の葉に盛りし事もありけんを、今の世に至りて猶五日のかしは餅ばかり其名殘をとゞめたるぞゆかしき。かしは餅の歌をつくる

椎の葉にもりにし昔おもほえてかしはのもちひ見ればなつかし

白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも

いにしへゆ今につたへてあやめふく今日のもちひをかしは葉に卷く

うま人もけふのもちひを白がねのうつ
はに盛らずかしは葉に卷く

ことほぎて舂る五日のかしはもち食ふ
もくはずも君がまに／＼

かしは葉の若葉の色をなつかしみこゝ
だくひけり腹ふくるゝに

九重の大宮人もかしはもち今日はをす
かも賤の男さびて

常にくふかぐのたちばなそれもあれど
かしはのもちひ今日はゆかしも

みどり子のおいする祝ふかしは餅われ
もくひけり精進ながに

色深き葉廣がしはの葉を廣みもちひぞ
つゝむいにしへゆ今に

今になりて思ひ得たる事あり、これ迄余が病臥せるに拘らず割合に多くの食物を消化し得たるは咀嚼の力與つて多きに居りし事を、嚙みたるが上に嚙み、和らげたるが上にも和らげ、粥の米さへ嚙み得らるゝだけは嚙みしが如き、あながち偶然の結果にはあらざりき。斯く嚙み〳〵たるためにや咀嚼に最も必要なる第一の臼齒左右共にやう〳〵傷はれて此頃は痛み強く少しにても上下の齒をあはす事出來難くなりぬ。かくなりては極めて柔かなるものも嚙まずに呑み込まざるべからず、嚙まずに呑み込めば美味を感ぜざるのみならず、腸胃直に痛みて痙攣を起す。是に於いて衛生上の營養と快心的の娛樂と一時に奪ひ去られ、衰弱頓に加はり晝夜悶々、忽ち例の問題は起る、「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」

さへづるやから臼なす、奥の齒は蟲ば
みけらし、はたつ物魚をもくはえず、
木の實をば嚙みても痛む、武藏野の甘
菜辛菜を、粥汁にまぜても煮ねば、い
や日けに我つく息の、ほそり行くかも

下總の結城の里ゆ送り來し春の鶉をく
はん齒もがも

菅の根の永き一日を飯もくはず知る人
も來ずくらしかねつも

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀にうち臥してこのかた、年年春の暮より夏にかけてほとゝぎすといふ者の聲しば〳〵聞きたり。然るに今年はいかにしけん夏も立ちけるにまだおとづれず。剝製のほとゝぎすに向ひて我思ふところを述ぶ。此剝製の鳥といふは何がしの君が鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ために斯く製して贈られたる者ぞ

薩閩に家居る人はほとゝぎす聞きつと
いふに我は聞かずに

ほとゝぎす今年は聞かずけだしくも窓のガラスの隔てつるかも

逆剝に剝ぎてつくれるほとゝぎす生けるが如し一聲もがも

うつ抜きに抜きてつくれるほとゝぎす見ればいつくし聲は鳴かねど

ほとゝぎすつくれる鳥は目に飽けどまことの聲は耳に飽かぬかも

置物とつくれる鳥は此里に昔鳴きけんほとゝぎすかも

ほとゝぎす聲も聞かぬは來馴れたる上野の松につかずなりけん

我病みていの寢らえぬにほとゝぎす鳴きて過ぎぬか聲遠くとも

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほとゝぎす

ほとゝぎす鳴くべき月はいたづきのまさるともへば苦しかりけり

歌は得るに從ひて書く 順序なし。

我庭の松

我庭の三本松、伐りなば家主怒らん、伐らずば緑はびこり、上つ枝は日影さへぎり、下つ枝は露しづく垂れ、うつくしき花もそだたず、はしきやしうま木も枯れぬ、我庭の三もと松、上つ枝も下つ枝も伐れ、家主怒るとも

さ庭べにはびこる松の枝伐らば家主怒らんさもあらばあれ

下蔭の草花惜しみ日を蔽ふ松が枝伐らん家主怒るとも

我庭の三もと松伐りあはれ深き千草の花に日の照るを見ん

明治卅五年

紅梅の下に土筆など植ゑたる盆栽一つ左千夫の贈り來しをながめて朝な夕なに作れりし歌の中に

くれなゐの梅散るなべに故郷につくしつみにし春しおもほゆ

つくし子はうま人なれやくれなゐに染めたる梅を絹傘にせる

家の内に風は吹かねどことわりに爭ひかねて梅の散るかも

鉢植の梅はいやしもしかれども病の床に見らくあかなく

春されば梅の花咲く日にうときわが枕べの梅も花咲く

まくらべに友なき時は鉢植の梅に向ひてひとり伏し居り

梅の花見るにし飽かず病めりとも手震はずば書にかかましを

土筆ほど食ふてうまきはなく土筆とり程して面白きはなし、碧梧桐赤羽根村に遊びて土筆を得て歸る、再び行かんといふに思ひやり興じてよめる

赤羽根の堤に生ふるつくづくしのびにけらしも摘む人なしに

赤羽根に摘み殘したるつくづくし再び往かん老い朽ちぬまに

赤羽根のつゝみにみつるつくづくし我妹と二人摘めど盡きなくに

つくづくししじに生ひける赤羽根にいざ往きて摘め道しるべせな

赤羽根の汽車行く路のつくづくし又來む年も往きて摘まなむ

つくづくし摘みて歸りぬ煮てや食はむひしほと酢とにひでてや食はむ

つくづくし長き短きそれもかも老いし老いざる何もかもうまき

つくづくし故郷の野に摘みし事を思ひ出でけり異國にして

女らの割籠たづさへつくづくし摘みにと出づる春したのしも

煮兎憶諸友

下總のたかしがもとゆ、贈り來し柔毛兎を、厨刀音かつ／＼と、牛かひの左千夫がほふり、ふた股の太けき煮て、桐の舍もあきみつもをす、あなうまそびらの肉の、炙れるをむさぼるは吾ぞ、殘れるをほづまも來も、家遠み呼ばむすべなみ、もみぢ葉の赤木も岡も、あはれ幸なし

おくられものくさ／＼

史料大觀（台記、槐記、狹衣名寄傳）

このふみを、あましゝ人、このふみを、よめとたばりぬ、そをよむと、ふみあけみれば、もじのへに、なみだしながる、なさけしぬびて

やまべ（川魚）やまと芋は信より

しもふさの、ゆふきごほりの、きぬ川の、やまべのいをは、はしきやし、見てもよきいを、やきてにて、うまらにをせと、あたらしも、かれの心を、おくりくる、みちにあざれぬ、そをやきて、うまらにくひぬ、うじははへども

そらみつやまとのいもは鳥のねのところにすなるつくいもなるらし

なまゐ（川魚三尾は田舟の一五坊より）

なまよみの、かひのやまめは、ぬばたまの、夜ぶりのあみに、三つ入りぬ、その三つみなを、わにおくりこし

硯石二つ某より

わざをぎの、にぬりのおもて、ひよところ、まがぐちおもて、世の中の、おもなき人に、かさんこのおもて

草花の盆栽一つはふもとより

秋くさの、七くさ八くさ、一はちに、あつめてうゑぬ、きちかうは、まづさきいでつ、をみなへしいまだ

松島のつとくさ〴〵は左千夫兄よりまつしまの、をしまのうらに、うちよする、波のしらたま、そのたまを、ふくろにいれて、かへりこし、うたのきみふたり

暑き苦しき氣のふさぎたる一日もやうやく暮れて、鄰の普請にかしましき大工左官の聲もいつしかに聞えず、茄子の漬物に舌を打ち鳴らしたる夕餉の膳おしやりあえぬ程に、向島より一鉢の草花持ち來ぬ。綠の廣葉うち並びし間より七八寸もあるべき眞白の花ふとらかに咲き出でて物いはまほしうゆらめきたる涼しさいはんかたなし。蔓に紙ぎれを結びて夜會草と書いつけしは口をしき花の名なめりと見るに其傍に細き字して一名夕顏とぞしるしける。彼方の床の間の鴨居には天津の功骨が萬年傘に代へてところの紳董どもより贈られたりといふ柿色の旗二流おくり來しを掛け垂したる、其のもとにくだりの鉢植置き直してながむれば又異なる花の趣なり。此帛に此花ぬひたらばと思はる、

くれなゐの、旗うごかして、夕風の、吹き入るなべに、白きもの、ゆらゆらゆらぐ、立つは誰、ゆらぐは何ぞ、かぐはしみ、人か花かも、花の夕顏

旱の歌　二首

天なるや旱雲湧き、あらがねの土裂け木枯る、青人草拔打ち〳〵、空ながめ虹もが立つと、待つ久に雨こそ降らめ、しかれども待てるひじりは、世に出でぬかも

旱して木はしをるれ、待つ久に雨こそ降れ、我が思ふおほき聖、世に出てゝわをし救はず、雨は降れども

俳句篇

明治十八年

秋

朝霧の中に九段のともし哉

明治二十年

春

散る梅は牛王櫻はほとけ哉

明治廿一年

秋

青々と障子にうつる芭蕉哉

明治廿二年

冬

[illegible]の中に宗匠の[illegible]一つ

明治廿三年

秋

朝顔に吾れ恙なきあした哉

明治廿四年

春

鶯や山をいづれば誕生寺

秋

三津のはまにて

初汐や帆柱並ぶ垣の外

明治廿五年

新年

蓑一枚笠一個、蓑は房州の雨にそほち笠は[illegible]の風にされたるを床の間にうやうやしく飾りて

蓑笠を蓬萊にして草の庵

春

道後

陽炎や苔にもならぬ玉の石

鶯や雑木つゝきの小篠原

石手川出合渡

若鮎の二手になりて上りけり

五器の飯ほとびる雛の思ひかな

伊豫太山寺

菎蒻につゝじの名あれ太山寺

夏

大川へ田舟押出すすゝみかな

京東山

どこ見ても涼し神の灯佛の灯

[illegible]枕頭の上に夜はあけぬ

蚊遣たく煙の中や垣生今津

鱗ちる雑魚場のあとや夏の月

旅人の名をつけて行清水哉

郭公太閤様をちらしけり

秋

生身魂共又親も達者なり

乞食の錢よむ音の夜寒哉

長命寺

皂莢の風にからめく月夜哉

明月のうしろに高し箱根山

秋風の一日何をつる人ぞ

杉の木のたわみ見てゐる野分哉

籠の蟲皆鳴き立つる小雨哉

町へ來て紅葉ふるふや奈良の鹿

鶺鴒の糞して行くや石佛

[illegible]の墓に笠をさゝげて

鶺鴒よ此笠叩くことなかれ

竹緣を團栗はしる嵐かな

唐秬のからてたく湯や山の宿

冬

冬枯や蛸ぶら下る煮賣茶屋

御格子に切髪かくる寒さ哉

冬籠日記に夢をかきつける

訪黒庵

淨林の釜に昔をしくれけり

角池の四隅に殘る氷かな

麥蒔やたばね上けたる桑の枝

明治廿六年

新年

橙や裏白かくれなつかしき

藪入や思は同し姉妹

春

あたゝかに白壁並ぶ入江かな

鎌倉

大佛のうつら〳〵と春日哉

下町は雨になりけり春の雪

鶯の淡路へわたる日和哉

鳥交る明屋の屋根の小草哉

雉なくや背丈にそろふ小松原

名所に住んでつたなき蛙かな

すさましや庫裡のうしろの若荷竹

山吹や人形乾く一むしろ

菜の花や野中の寺の緣の下

夏

馬蠅のかさを離れぬ暑さ哉

松嶋五大堂
涼しさや嶋から嶋へ橋つたひ

涼しさや裸て越ゆる箱根山

日燒田に覺束なくも田植かな

雨雲をさそふ嵐の幟かな

夏痩は野に伏し山にぬる身哉

富山より松嶋を望む
海は扇松嶋はその繪なりけり

いたつきに名のつきそむる五月雨

五月雨の隅田見に出る戸口かな

夕立にうたるゝ鯉のかしら哉

新らしき垣根つゝきや風かをる

蚊をたゝくいそかはしさよ寫し物

夏書に紙魚くふ程になりにけり

傘たゝむ玄關ふかき若葉かな

茨さくや根岸の里の貸本屋

河骨の水を出かぬる蕾かな

夏草や嵯峨に美人の墓多し

牛小屋の圍ひと見ゆれさゝけ垣

秋

西ふくと水主のいふなりけさの秋

朝寒や青菜ちらはる市の跡

病中
妹に軍書讀まする夜長かな

果てもなき秋の行方や外ケ濱

上野東照宮
秋淋し毛蟲はひ行く石疊

風吹いて山本遠き鳴子かな

湯田温泉　二句
秋風や人あらはなる山の宿

山の温泉や裸の上の天の川

象潟や山低うして三日の月

行暮れて大根畑の月夜かな

出羽
夕陽に馬洗ひけり秋の海

月の出や皆首立てゝ小田の雁

鵙鳴くや雜木の中の古社

木槿さく土手の人馬や酒田道

紅葉折て夕日寒がる女かな

五文づゝに分けて淋しや草の花

寺見えて小道の曲る野菊哉

縁日へ押出す菊の車かな

菊賣るや十二街頭の塵の中

菊荒れて鷄ねらふ鼬かな

隣からともしのうつる芭蕉かな

茸狩や鳥啼て女淋しがる

冬

宮様の門静かなり大三十日

王事蹇々簑著て年の暮にけり

草庵

薪をわるいもうと一人冬籠

番小屋に晝は人なき火鉢哉

律僧の紺足袋穿つ掃除哉

佛立つ大磐石の氷柱かな

朝霜や雫したゝる塔の屋根

病中

醫者が來て發句よむなり初しぐれ

背戸あけて家鴨呼こむ時雨哉

湖青し雪の山々鳥かへる

旅人の蜜柑くひ行枯野かな

一つ家に日の落ちかゝる枯野哉

門はかり殘る冬野の伽藍かな

竹藪の裏は鴨鳴く入江かな

縁に干す蒲團の上の落葉かな

根岸草庵

三尺の庭に上野の落葉かな

吉原の裏道さむし卵塔場

冬枯や巡査に吠ゆる里の犬

明治廿七年

新年

春立つや晝の灯暗き山やしろ

萬歳や四條を戻る夕日影

春日野の子の日に出たり六歌仙

春

夕くれの風になりたる餘寒哉

栴檀のほろ〳〵落つる二月かな

雨晴れて鳥鳴く塔の春日かな

百人の人夫土掃る日永かな

春の夜の石だん上るともしかな

僧や俗や春の山寺を圍む

春風や森のはづれの天王寺

馬引てわたる女や春の水

鶯やしんかんとして南禪寺

燕やくねりて長き千住道

土手一里依々戀々と柳哉

鹿家村の入口見ゆる柳哉

紫の夕山つゝじ家もなし

若草や野の外れの馬頭尊

梅を見て野を見てゆきぬ草加まで

夏

短夜のともし火のこる港かな

子を負うて小川飛越す田植哉

夏山や雲湧いて石横はる

[illegible]雲に[illegible]日のもるゝ青田哉

山[illegible]や[illegible]るれの[illegible]時鳥

[illegible]や水[illegible]んで[illegible]の魚深し

[illegible]へ[illegible]そろへて水馬

三井寺は三千坊の若葉哉

舟よせて鳥居を仰ぐわか葉哉

竹居

藪跡や筍生える薔薇の側

水草の泥に花さく旱かな

玄關に晝顔さくや村役場

道三叉草茂りけり石地藏

秋

見えすくや秋の夕日のくぬ木原

行秋の烏なくなり羅生門

秋風や雲吹わたる出羽の海

掃溜に烏なくなり秋の雨

[illegible]田や痩せて慈姑の花一つ

人去つて鹿鳴く山の湯壺かな

兀山に沿うて夕日のとんぼ哉

低く飛ぶ畦の蝗や日の弱り

我袖に來てはね返る蝗かな

根岸音無川

柳ちり菜屑流るゝ小川かな

きら〳〵と紅葉まばゆし藪の中

鳥鳴いて笠にこぼるゝ何の實ぞ

朝貌の石に這ひつく山家かな

蕎麥植ゑて人住みけるよ藪の中

稲の穂や南に凌雲閣ひくし

問へと答へすひとり稲こく女かな

冬

朝日さす材木河岸の寒さ哉

野の中に一本杉の寒さかな

大寺の靜まりかへる師走かな

しくれしか裏の竹山朝日さす

夕日照る時雨の森の銀杏哉

幾時雨石山の石に苔もなし

鹽濱の霜かきならす朝日哉

有明の雪の清水灯のこれり

古沼の水田つゝきに氷かな

はし鷹の拳はなれぬ嵐かな

三河島

菜畑や小村をめくる冬木立

明治廿八年

新年

元日や枯菊のこる庭のさき

春

穴にのぞく餘寒の蟹の爪赤し

鳥飛んで砂に影ある春日かな

石手寺へまはれは春の日くれたり

金州城にて

行春の酒をたまはる陣屋かな

大連灣

大國の山皆低き霞かな

一桶の藍流しけり春の川

下駄はいて行くや焼野の薄月夜

夜越して麓に近き蛙かな

城門を出て遠近の柳かな

夏

朝嵐隣の幟立てにけり

夏羽織我をはなれて飛んとす

鹽屋

夏館異人住むかや赤い花

片谷へ雲吹落す青嵐

雲の峯白帆南にむらかれり

夏川や小橋たわゝに水を打つ

松山東野

閑古鳥竹の御茶屋の人もなし

孑孑や須磨の宿屋の手水鉢

汽車過ぎて煙うづまく若葉哉

葉柳や病の窓の夕眺め

通夜堂や緑の中の百日紅

木母寺や實櫻落ちて兒もなし

蕗の葉や蚯蚓をつゝむ土ながら

瓜好の僧正山を下りけり

須磨
入口に麥干す家や古簾

秋

箱庭の橋落ちこみぬ今朝の秋

正宗寺一宿を訪ふ
朝寒やたのもと響く内玄關

藪寺に磬打つ音や秋のくれ

感あり
行秋の我に神なし佛なし

行秋や奈良の小店の古佛

漱石に別る
行く我にとゞまる汝に秋二つ

城山の北にとゞろく花火かな

新田や汐にさしあふ落し水

露けしや朝日の昇る小松原

秋風や侍町は塀はかり

右京左京中は畑なり秋の風

すこ〱と月さし上る野分哉

のほりつめし山平かに花野哉

山陰や日あしもさゝす秋の水

蜩や夕日の窓に桎の影

道はたに蔓草まとふ木槿かな

かせを干す紺屋の柳散りにけり

澁柿や荒壁つゞく奈良の町

法隆寺の茶店に憩ひて
柿くへは鐘が鳴るなり法隆寺

團栗の落ちて沈むや山の池

須磨にて病を養ふところ
ものうさや手すりに倚れは萩の花

箱根路の石落ちかゝる芒かな

裾山や小松の中の女郎花

蘆の穂に汐さし上る小川かな

漱石寓居の一間をかりて
桔梗活けてしばらく假の書齋哉

藁葺の法華の寺や鷄頭花

奈良にて
人形をきさむ小店や菊の花

武家町の畑になりぬ秋茄子

南無大師石手の寺よ稻の花

うぶすなに幟立たり稻の花

病起郊外に出つ
杖によりて町を出つれは稻の花

家高低稻段々に山の裾

砂土手や西日をうけて蕎麥の花

冬

山底に世と絶つ村も小春哉

見上げたる高石がけの寒さかな

冬されや水なき川の橋長し

奈良

千歳の埃も拂はず佛達

音もせず猫子一人の冬こもり

鯨汁一休去つて僧もなし

雞の子の草原あさる時雨哉

病中

庭の雪見るや厠の行きもどり

冬の日の落ちてあかるし城の松

刈株に水をはなるゝ氷かな

土ともに崩るゝ崖の霜柱

根岸郊外　二句

竹立てゝ冬菜をかこふ畠かな

水引くや冬菜を洗ふ一ト構

明治廿九年

新年

元日の人通りとはなりにけり

春

家君の二十五回忌にあひて

手向くるや餘寒の豆腐初櫻

病起

のどかさや杖ついて庭を徘徊す

永き日のくれんとすなり二月堂

灯もすや春の夕の古館

行春やほう／＼として蓬原

三味線をかけたる春の野茶屋哉

やぶ入の歸りに犬をもらひけり

畑打の王莽か錢掘出しぬ

春風にこぼれて赤し齒磨粉

上市は灯をともしけり夕霞

傘さして傾城なふる春の雨

春雨や金箔はげし粟田御所

病中

春雨の我まぼろしに近き身ぞ

樫の木に春の日光る家居哉

塔に上れば南住吉春の海

草庵

鶯の今朝も啼くなり楢の枝

梅白く散るや熊笹古禿倉

菅公に題す

此上に落花つもれと思ふ哉

古宮の櫻さきけり杉の奥

桃さいて牛ゆく背戸の小山哉

夏

野の森や苗代時の薄曇

竹垣や雨の山吹土に伏す

水無月の蟻おひたゝし石の陰

涼しさや椎のうら葉を吹かへし

汐引いて渚に日の照る暑さ哉

草庵

夏に入つてけん／＼来た寝へす

衣更て愚庵を訪はん東山

病中

人は皆衣なと更へて来りけり

利根川の南は遅き田植哉

植て十水田に僧の影深し

早乙女の吹颪ふきつくる摩耶颪

うしろより月になり行く鵜舟かな

おこし絵に灯をともしけり夕涼

孔明賛

羽団扇に又流蠖を見る日かな

夏帽や吹き飛はされて濠に落つ

吹出しの水葛餅を流れけり

鮓店や白衣の道者八九人

其中に楠高し青嵐

五月雨や榛の木立る水の中

五月雨や丘長々と王子迄

蓮池の浮葉水こす五月雨

夕立に桐の木多き小寺かな

家もなし桃の畠の雲の峯

夏山のふもとに見ゆる牧場かな

苔清水馬の口籠をはつしけり

虹の根に白壁光る青田哉

須磨寺のともし火うつる青田哉

時鳥なくや上野の森の上

月の出の草に風ふく時鳥

蚊も居らす出水のあとのさひしさよ

椎の影蝉なく縁の柱かな

ひら／＼と蛾のとふ藪の小道哉

孑孑や松葉の沈む手水鉢

灯ちら／＼絶えす若葉に風わたる

山門に雲をふきこむわか葉哉

百日紅さくや眞晝の閻魔堂

畫中の雲影うつる牡丹哉

宰相の詩會催す牡丹哉

赤ばらや萌黄の蜘蛛の這うて居る

夕風や白ばらの花皆動く

藻の花や水ゆるやかに手長鰕

晝貌や安達太郎雨を催さず

御門主の女倶したる蓮見かな

夕貌に都なまりの女かな

青芒三尺にして亂れけり

僧寄し本堂側の茄子畑

麻刈りて鳥海山に雲もなし

秋

八月の太白ひくし海の上

勤行のすんで灯をけす夜寒哉

草花や露あたゝかに温泉の流れ

銀杏の青葉吹散る野分かな

元光院

厓上に月見る影や五六人

七浦の夕雲赤し鰯引

木犀や母が教ふる二絃琴

佛へと梨十はかりもらひけり

榎の實ちる此頃うとし隣の子

書に倦みて燈下に柿をむく半夜

門前に舟つなぎけり蓼の花

冬

庭前

萩芒中に水くむ小道かな

冬されや狐もくはぬ小豆飯

行年を母健かに我病めり

狼の糞見て寒し白根越

内庭に割木積みたり冬構

草庵

冬こもりあるし寐乍ら人に逢ふ

古庭や月に湯婆の湯をこぼす

風呂吹や小窓を壓す雪ぐもり

石門を斜に冬の日影かな

鶏頭を切るにものうし初時雨

赤き實の一つこぼれぬ霜の庭

ふりやむや雪の灯ともる峯の寺
いくたひも雪の深さを尋ねけり
上汐の氷にのほる夜あけ哉
氷る田や八郎稲荷本願寺
無為にして海鼠一萬八千歳
茶の花に鰈乾したり門徒寺
落葉してやとり木青き梢かな

墓前

蘆も菊も芒もかれて松三本

明治三十年

新年

やむ人の雑煮くひけり枕口
蓬萊に初松つゝむや昔ぶり

春

春の夜や灯をともしたる村芝居
出て見れは南の山を焼きにけり
縁へ出てたま〳〵蝶を見る日哉
庭ふんて木芽草の芽なんと見る
山吹に張物乾く日は高し

夏

餘命いくはくかある夜短し
熱くるしく亂心や雷をきく
舟に見る膳所の城下の幟かな

送秋山眞之米國行

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く
行水や背中に戰ぐ楢の影

寄鳴雪翁

雲山や書宗の新雲起る

石橋や水平かに若楓

病中

障子あけて病閑あり薔薇を見る

秋

肌寒や白根見に出る町外れ
犬が来て水のむ音の夜寒哉
病人のうまいしてゐる夜長哉
柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

冬

草庵

冬されぬ藏澤の竹明月の書
王孫を市にあはれむ師走かな
森の上に江戸の火事見ゆ夜の曇り
岡そひの蕎麥未た刈らぬ落葉かな
野と際つ垣破れたり葱畑

明治卅一年

春

初午に鶯春亭の行燈かな

陽炎や砂畫のあとの赤き砂

藍壺に泥落したる燕かな

活けんとして柳置きたる疊かな

我病んで櫻に思ふこと多し

山吹の溝に垂れたる垣根哉

夏

第三の石門涼し雲の上

つゝじ多き田舎の寺や花御堂

單物飄然として郷を出つ

夏山や五十二番は岩屋寺

一竿の鮎目を過ぎぬ水の色

草庵

團栗の花吹よせる戸口かな

葉櫻や昔の人と立咄

病間あり

椅子を置くや薔薇に膝の觸るゝ處

穂の黑き砂地の麥や汐曇

凌霄や温泉の宿の裏二階

晝貌の花に乾くや通り雨

秋

長き夜や障子の外をともし行く

元光院

御佛と襖隔つる夜寒かな

草廬

藏澤の竹も久しや庵の秋

鳩吹や寺領の畑の柿林

元光院觀月

月代もなくて月出る野末かな

元光院

三十六坊一坊のこる秋の風

蜩や旅籠もすなる一軒家

蜩や神鳴晴れて又夕日

竹垣の外は上野や蟲の聲

元光院

月出たり芙蓉の花の傍に

四國路の小さき馬や稻の花

すてゝある西瓜の皮や堂の前

水車場を圍む小藪や烏瓜

藥草の花紫に霜早し

西行に絲瓜の歌はなかりけり

冬

霜よけの笹に風ふく畑かな

菜葉の蝶になるまで冬籠

薄闇や故人を會すふき膾

即事

冬籠る部屋や盥の浮寐鳥

鷄頭の黑きにそゝく時雨哉

口こはき馬に乘つたる霰かな

道哲の寺を過くれは冬田かな

透き通る氷の中の紅葉かな

御社や庭火に遠き浮寐鳥

山茶花の垣に銀杏の落葉哉

明治卅二年

新年

蓬萊に吾生きてゐる今年哉

歌かるた女はかりの夜は更けぬ

春

草庵

雪の繪を春もかけたる埃かな

庭に出てゝ物種まくや病上り

春雨や傘さして見る繪草紙屋

初雷の二つはかりでやみにけり

手に滿つる蜆うれしや友を呼ぶ

灯くらく蛙きく夜や寫し物

夏

夏川の淺きにひたす紙そかな

城跡や麥の畑の桐の花

鴨の子を盥に飼ふや錢葵

夏引その亂れや二十八天下

干瓜の鱗の乾きや日照草

三日にして牡丹ちりたる句錄哉

葭簀して圍ふ流れや冷し瓜

秋

新坂上

見下せは灯のたき町の夜寒哉

町を出てゝ稻妻ひろし森の上

ところ〳〵菜畑青き刈田かな

秋雨や水さひのたまる庭の池

新米の二十駄はかり城下口

くれといへはしたゝかくれし小菊かな

冬

からびたる蠍の鑄型の寒さかな

釋迦に問ふて見たきことあり冬籠

寒月や枯木の上の一つ星

鷹狩や豫陽の太守武を好む

山茶花や鳥居小さき胞衣の神

寒菊やいも屋の裏の吹通し

明治卅三年

新年

長病の今年もまゐる雜煮哉

病室の暖爐のそはや福壽草

初曾我や團十菊五左團小團

春

病床の匂ひ袋や淺き春

山陰の木の間の畑やひとり打つ

春雨や追込籠に黄なる鳥

氷解けて櫻さくなり榛名山

萱草やこゝに芽をふく忘れ草

夏

ひるかへる鯉吹拔や遲櫻

和歌にやせ俳句にやせぬ夏男

夏痩の僧都の像や鉈作

夕立や蛙の面らに三粒程

折すてし萩の毛蟲をふみつけぬ

木犀の落葉掃きけり白丁花

藺の花にかはらぬ水の水さひかな

梅雨に入る椎の木陰の葵かな

藻の花や白壁落し角櫓

承久

院宣や夏草夏木振ひ立ち

秋

白き花赤き花秋立ちにけり

冬近く今年は髯を貯へし

追込の小鳥靜まる秋の雨

秋の山北を固めの砦かな

椋の木に囮かけたり家の北

武藏野を見下す寺の芙蓉哉

桐落て棕櫚緑なる小庭哉

冬

凍筆をホヤにかざして焦しけり

芭蕉忌や我俳諧の奈良茶飯

十年の苦學毛のなき毛布かな

冬川の砂取る土手の普請かな

葱洗ふや野川の町に入る處

明治卅四年

新年

自題小照

大三十日愚なり元日猶愚なり

前文略

年玉を並へて置くや枕元

春

我行けは畑打ちやめて我を見る

湯の山も田上も燒くや雨近み

焚かねは邪魔になる暖爐取除けさせたる次の朝の寒さ

暖爐取りて六疊の間の廣さ哉

門に出て行軍を見る雪解哉

東人苔を封し來ることは奈良春日神社石燈籠の苔なりと

苔をつゝむ紙のしめりや春の雨

前文略

鯉の背に春水そゝぐ盥かな

胡地に入つて氷流るゝ江を見たり

蛙なく水や上野の臺の下

蛙なくや村居の心落ちつかず

蛇穴を出て三分の天下かな

木芽ふく十坪の庭を散歩哉

夏

高臺に家構へたるつゝじ哉

把栗鼠骨か一昨年我病を慰めたる牡丹去年は咲かずて

三年目に蕾たのもし牡丹の芽

鮒鮓や考槃亭をかりの宿

滿園の露日に乾く五月晴

一群の托鉢僧や五月晴

蝙蝠や暮るゝを眺め坂の上

門を入りて車走らす若葉哉

吾も亦愛す吾廬や棕梠の花

若竹や髮刈らしむる庭の椅子

傘立てゝ雨横しふく牡丹哉

秋

秋一室拂子の髯の動きけり

病人に八十五度の殘暑哉

即事

母と二人いもうとを待つ夜寒哉

蚊帳つらて畫美人見ゆる夜寒哉

寐所をかへたる蚊帳の別れかな

題拂子

馬の尾に佛性ありや秋の風

夜涼如水天の川邊の星一つ

即事

九月蟬椎伐らはやと思ふかな

家をめぐりてつく〳〵法師樫林

欲睡

秋の蠅叩き殺せと命じけり

夕顔も絲瓜も同し棚子同志

病床所見

伏して見る秋海棠の木末かな

病閒に絲瓜の花の落つる晝

驚くや夕顔落ちし夜半の音

冬

蘭學の書生なりけり藥喰

懷爐冷えて上野の闇をもどりけり

鍋焼や火事場に遠き阪の上

寒垢離や信心堅き弟子大工

煖爐焚くや玻璃窓外の風の松

木枯の茶堂人なき埃かな

冬の日のあたらすなりし乾飯かな

明治卅五年

春

釣上げし魚の光りや暖き

律院の苔の光や春の雨

髯剃るや上野の鐘の霞む日に

紅梅の落花たつまむ疊かな

母の花見に行き給へるに

たらちねの花見の留守や時計見る

夏

カナリヤの玉子くさりぬ五月晴

蟬初テ鳴ク鯰釣る頃の水繪空

椎の木の茂りて見えぬ上野かな

驟雨欲來五尺の百合を吹く嵐

六尺の百合三尺の土塀かな

秋

臥病十年

首あげて折々見るや庭の萩

絶筆三句

絲瓜咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗絲瓜の水も間に合はす

をとゝひの絲瓜の水も取らさりき

病床やおもちや並へて冬籠

冬

室外(病床口吟)

枯れ盡す絲瓜の棚のつらゝ哉

落葉掻き小枝ひろひて親子哉

年譜

慶應三年
九月十七日、伊豫松山市新玉町に生る、父は隼太、母は大原氏。

明治六年
松山市法龍寺の寺小屋に通學、又外祖父大原觀山翁に就き漢學を、伯父佐伯氏に習字を學ぶ。後觀山翁に介せられ土屋久明に就き學ぶ。

明治七年
松山市智環學校、後勝山小學校に通學。

明治十一年
初めて漢詩を學ぶ。又軍談を好み、稗史小說を讀む、

明治十二年
勝山小學校卒業、松山中學校に入學。

明治十三年
春、同親會を組織し友人と作詩し河東靜溪に補正を受く、

明治十四年
遊伊豫久萬山岩屋。

明治十五年
遊湧淵。又至大洲。

明治十六年
松山中學校退校。
東京に遊學し赤阪區丹後町須田漢學塾に入り、幾もなく神田共立學校に入學。麻布竹見氏、久松家長屋、神田舊野氏等に轉寓數次。
遊興居島。

明治十七年
共立學舍にて初めて莊子の講義を聽き哲學者たらんと思ふ。
「書友人詩稿後」「夢中詩」『仙人的思想』等隨筆を試む。

明治十八年
一ツ橋大學豫備門に入る。
夏初めて歸省。歸省中に井手眞棹に就き和歌を問ふ。
『八犬傳をよむ』其他隨筆を認む。
春、哲學に志す。

明治十九年
遊小金井。遊巖島。遊京都。
大學豫備門に在り、第一高等中學と改稱せらる。
遊日光山。

明治二十年
一高寄宿舍に在舍。
夏、歸省。大原其戎に俳句を問ふ。

明治二十一年
夏季休暇中、向島長命寺境內月香樓に寓し『七草集』『隨筆』『馬琴論』等を著す。
夏、東京より汽船浦賀に至り、横須賀より金澤を經て鎌倉に遊ぶ、鎌倉宮にて痰中一塊紅を認む。江ノ島に至り大雨風にあふ。

明治二十二年
四月三日發、水戶に遊び七日歸京す。此行那珂川舟中、雨に逢ふ。中旬腹痛戰慄、五月九日喀血。夜初めて子規と號す。
秋、不忍辨天境內の某亭に養痾。
『啼血始末』『水戶紀行』『大磯紀行』『詩歌の起原及變遷』等を著す。
十二月二十四日東京發、大磯松林館泊。二十五日濱松泊、二十六日名古屋泊、二十七

日京都一見、神戸より乘船、二十八日松山に歸着。

明治二十三年

六月、第一高等中學校卒業。

七月一日東京出發、江尻、大垣に下車一見、三日大阪に入り、八日大阪發、九日郷里松山に歸る。

九月、文科大學へ入學、國文科を修む。

八月遊伊豫久万山海岸寺。

八月二十六日松山發、二十八日大津に入り湖畔中村屋に投、淹留旬餘湖光を賞す。

『しやくられの記』上、中、下。『つゞれの錦』『をし鳥物語』『月下聞蟲』（新體詩）『朝顏』（同）等を著す。

明治二十四年

大學在學。

三月二十五日東京發、船橋、佐倉より小湊、天津、平磯、館山、保田、鋸山等を經て四月三日歸京、一蓑一笠房總行脚を試む。

七月、大學第一年級の修業試驗半を終へたるのみにて木曾を經て歸省。

九月上京。大宮公園に寓。試驗の殘りを受けて進級。

冬、駒込追分町に寓居。

小說『月の都』の稿を起し初む。又『かけはしの記』を作る。

明治二十五年

大學第二年級の進級試驗に落第す。

六月より『日本新聞』に投稿す。

九月、大學退學。

十一月、日本新聞社に入社。

『旅の旅の旅』『大磯の月見』『日光の紅葉』『舊都秋光』『歲晚閑話』『高尾紀行』等の著をなす。

春、駒込より下谷上根岸八十八番地に移る。

夏、歸省。

十月、大磯に月を賞す。箱根より修善寺を廻りて歸京　又高尾山に遊ぶ。十一月日光に遊ぶ。

歲暮家族を迎ふ、途次京都に紅葉を賞す。

明治二十六年

三月、『日本新聞』に俳句を載す。

雜誌『俳諧』を發行。

『歲旦閑話』『俳人の奇行』『文界八ツ當り』『鎌倉一見記』『はて知らずの記』『春光秋色』『菊の園生』『芭蕉雜談』『貧居八詠』を著す。

二月、鎌倉に羯南の病を訪ふ。

夏、瘧を病む。

七月十九日東京發、奥羽行脚に赴く。八月二十日歸京。

明治二十七年

二月、『日本』を出で新聞『小日本』の編輯主任となる。『小日本』に俳句を募集す。

七月『小日本』廢刊、再び『日本』に還る。

『俳諧一口話』『一日物語』『文界漫言』『上野紀行』『そゞろあるき』『地圖的觀念と繪畫的觀念』『字餘り和歌俳句』『王子紀行』『閑遊半日』『總武鐵道』を著す。

二月、上根岸八十二番地に轉寓。

八月、王子に遊ぶ。

明治二十八年

三月三日從軍記者として廣島に向ふ。郷里松山に歸省。四月十日第二軍に從ひ宇品出帆。金州に上陸、旅順に遊ぶ。

五月中旬大連灣より歸る。舟中喀血、神戸病院に入る。

七月、須磨保養院に病を養ふ。

八月、松山へ歸省。

十月下旬松山出發、奈良を經て歸京、腰部疼痛起る。

『俳諧と武事』『羽林一枝』『陣中日記』『養痾雜記』『俳諧大要』『棒三昧』等を著す。

子規派の俳風漸く認めらる。

明治二十九年

歩行自由を缺き、多くは病床に在り。

十一月、胃痙を病む。

俳句運座會を催すこと此年夏より毎月の例とす。

新體詩を創作す。

『從軍記事』『三十棒』『戯曲と四季』『俳句問答』『松蘿玉液』等を著す。

十月、目黒に遊ぶ。又中山寺に詣で、船橋に一宿。

明治三十年

二月、腰痛漸く激しく、四月、手術を受く。

五月、衰弱加はり重篤に陷り、六月、小康を得。

十一月、小説會を始め、諸友に創作を朗讀せしめて批評す。

十二月、初めて蕪村忌を修す。

『新體詩押韻の事』『明治二十九年の俳句界』『俳諧反古籠』『俳句と漢詩』『花枕』『試問及其答』『俳句分類』等を著す。

俳句雜誌「ほとゝぎす」生る。

明治三十一年

一月、蕪村輪講を催す。

二月、和歌革新に着手す。

三月、新聞「日本」に歌を載せ始む。

『試問及其答』『明治三十年の俳句界』『閑人閑話』『歌よみに與ふるの書』『百中十首』『人に答ふ』『或問』等を著す。

俳諧雜誌「ほとゝぎす」東京に移り、之を主宰す。

明治三十二年

病床に在り。

新聞「日本」及「ほとゝぎす」に筆を執る。

毎月歌會を子規庵に催す。

又多く寫生小品文を作り文章革新に志す。

『曙覽の歌』『歌話』『俳人太祇』『隨問隨答』『俳句新派の傾向』『飯待つ間』『根岸草廬記事』『熊手と提灯』『吾病』等を著す。

和歌に熱中す。

明治三十三年

寫生文熱高まる。

文章會山會を開始す。

病次第に重し。

『新年雜記』『ランプの影』『車上の春光』『水滸傳と八犬傳』『萬葉集を讀む』『竹里歌話』『短歌愚考』『鶴物語』『松の露』『明治三十二年俳句界』『病床問答』等を著す。

明治三十四年

病益々重し。

水彩繪具を用ゐ花果の寫生をなし僅かに娛む。

『墨汁一滴』『初夢』『死後』『くだもの』『病床俳話』の著あり。

病重きを以て門下の左千夫、碧梧桐、秀眞、虛子、鼠骨、義郎の六人をして輪番當直看護せしむ。居を興津に移さんとして果さず。

明治三十五年

病益々重り殆んど危篤狀態に在り。原稿は門下をして筆記せしむ。

九月十九日未明午前一時寂。東京市外田端大龍寺に葬る。

『病牀六尺』『病牀苦語』『天王寺畔の蝸牛廬』『九月十四日の朝』『病臥漫錄』等の著あり。

附記　明治二十四年頃より俳句分類全集の編輯に從事し三十四年に入り病重く稿をつぐ能はずして已む。

（鼠骨編）

編輯後記

子規居士の事業は範圍が廣汎なだけに篇を八つに分つのやむを得なかつたのである。

隨筆篇に於ける「松蘿玉液」は明治二十九年（居士三十歳）に日本新聞に發表せられたもの。「墨汁一滴」は明治三十四年一月より七月まで、『病牀六尺』は明治三十五年五月から九月十七日卽ち居士歿前二日まで、何れも新聞「日本」に連載されたものである。「仰臥漫錄」は居士の晩年明治三十三、四年から、枕頭に置いた土佐半紙綴の帳に、自由に認められたもので、生前熟懇な友にも示さず、勿論、新聞雜誌へ發表せられなかつたものである。原本は二冊に分れて居る。「一、二」とある方の最初の二頁は第一冊の冒頭であるが、綴ぢ過つたまゝ保存せられてゐるので此にも其儘にして置いた。

小說篇の「曼珠沙華」は明治三十年頃の執筆に係るものだが、發表されず、草稿の儘、子規庵に殘つてゐたのである。『花枕』は明治三十年新小說社の需に應じ執筆され、同年三月の「新小說」に載せられたもの。『月の都』は大學に在學せる明治二十五年に執筆し、明治二十七年多少の改訂を加へて新聞「小日本」に連載されたのである。

小品篇は主として明治三十一年居士が寫生趣味の文章を唱道して以後の作に係るものゝみを輯錄して置いた。「九月十四日の朝」は明治三十五年九月十四日卽居士が歿前五日の作である。

歌論歌話篇に收むる所は明治三十一年、居士がいよ〳〵和歌の革新を企てゝ發表せられた歌論中の主なものを收めたのである。居士の和歌に對する主張はこれだけで略ぼ了知することが出來ると思ふ。

俳論俳話篇に收めたのは、居士の數多き俳論俳話中から、最も重要なものと認めるもの七篇を拔き取つて茲に秩序なく排列したのである。『俳諧大要』は明治二十八年、「俳句問答」は二十九年、『獺祭書屋俳話』は二十五年、「芭蕉雜談」は二十六年、「古池の句の辯」は三十一年、『俳人蕪村』は三十年の發表に係り、主として新聞「日本」に連載され、其後纏めて單行本とし出版されたものが多い。

評論篇の「水滸傳と八犬傳」は明治三十三年の記述で、病牀消閑の手すさびである。

居士の和歌は明治十五年の少年時代から三十五年の歿年に至るまで、錄せられたもの二千首以上に及んで居る。今茲には僅かに其一部を選採したのみである。

俳句は二萬三千を數へる中から、是亦九牛の一毛を選採したのである。子規居士を傳へる爲には和歌と俳句とを收めぬわけに行かず、全部を收めたら、それのみで一卷となるから已むを得ず斯樣に選錄したのである。

尙ほ編輯の順序は各篇とも創作發表の年代に從ふ可きであつたが、初め三百頁として輯めたもの、後に百頁を加へよと需められ、一部組版校正の終つて後に更らに六百頁とせよと要求されたので、其度びに、つぎ〳〵に繼足した爲め年代の序を逐ふことが出來なくなつたのである。又眠起（五二頁下段第一行）、喉咽（六二頁下段第七行）、淪（三三八頁中段第一三行）、天使（三三九頁下段第一一行）、隱士（三三九頁下段第一五行）、今滋（三四五頁中段第二四行）、獨語（三九〇頁下段第二〇行）、藤句（三九三頁中段第一〇行）、一三（四〇四頁中段第一一行、下段第一一行）、少く（四三五頁上段第一四行）、小正（四四〇頁上段第二三行）、等讀方に異議あるもの、及び本文中に讀方の說明あるものは、わざとルビを附けずに置いたことを諒とせられたい。

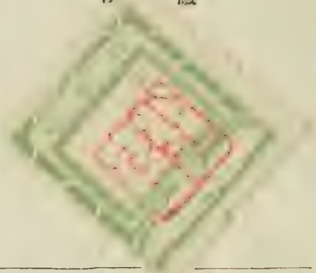
此集以外に居士の創作は極めて多い、それは全集十五卷に餘るのである。併し居士の面影は本集で先づ可なり鮮明に認め得ると信ずる。

昭和三年春　　鼠骨記

昭和三年四月二十五日印刷
昭和三年五月一日發行

現代日本文學全集　第十一篇

版　所



著者　正岡子規

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二三
電話芝(局)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷

改造社